

日本醫學史

富士川 游著

電子書籍版

凡例

1. このデジタルテキストの底本は、富士川游『日本醫學史・決定版』日新書院・東京（昭和19年5月30日三版）である。印刷不明瞭な文字については、裳華房版『日本医学史』あるいは形成社版『日本医学史・決定版』を用いて校補した。ただし序文および跋文のデジタルテキストの公開範囲は裳華房版『日本医学史』に準じた。
2. デジタルテキスト翻刻では、著作時における社会状況や著者の認識の実態を反映して、今日の視点からすれば差別的であると思われる語句や内容を含んだものが存在している。もとより差別は許されるべきではないが、底本の歴史的な意義や記載される事項を客観的に把握するための資料としての重要性にかんがみ、底本のまま引用・掲載している。
3. 底本にみられる写真・図版及びキャプション、柱、ノンブルは翻刻していない。
4. 底本にみられる段落最初の一字下げや引用文などにおける字下げなどのインデントは底本のまま翻刻した。罫字・擡頭・平出はそのまま翻刻した。底本にみられる欧文単語のハイフネーションは、底本での改行が翻刻時には不用となったところでは削除した。
5. 底本の本文は漢字片仮名交じり文により歴史的仮名遣いで記載されている。これらを底本どおりに翻刻した。また底本にみられる異体字・合字・変体仮名・踊り字（々、一の字点、二の字点、くの字点）は Unicode 13.0.0 でコードされる文字はなるべく底本どおりに翻刻した。ただし異体字については、異なる文字としてコードされるものは底本に従って翻刻したが異体字セレクタのみでコードされる字形の違いについては翻刻しなかった。例えば、「青」を含む漢字では、清・精などではそれぞれ底本どおり「青」を含む字形で翻刻している（清 [U+6DF8]・精 [U+FA1D]）一方、請・情などは底本では「青」を含む字形であるが異体字セレクタのみでの字形の区別であるため請・情で翻刻している、などである。また既・即・郷を含む多くの漢字の字形が底本ではそれぞれ左側・中央の部分が「皂」である。翻刻では既（既 [U+FA42]・既 [U+65E3]）'概（概 [U+69EA]・概 [U+2F8EA]）'厩（厩 [U+53A9]・厩 [U+5ED0]）では底本通り「皂」を含むそれぞれ後者の字形を採用して、漑（U+6F11）は底本通りこの字形を採用した。即（即 [U+5373]、即 [U+537D]）はそれぞれ底本では両者の字形がみられており定本通りに翻刻した。節は竹冠に即あるいは節（U+FA56）の両者の字形が底本にみられるが、節に統一して翻刻した。郷を含む漢字および槩（U+69E9）'概（U+FA3E）では底本では「皂」を含む字形であるが、郷（U+9115）の中央の部分を有する字形で翻刻した。
6. 梵字は■に置換した。
7. 圏点・傍線・太字・振り仮名を底本どおりに翻刻した。ただし圏点では黒丸・白丸・二重丸は全て黒丸として翻刻して、ゴマと黒丸は区別した。

8. 底本にみられる参照文献について、オンラインで入手可能なサイトを追記した。『日本医学史』を編纂するために収められた富士川文庫（京都大学図書館機構および慶應義塾大学メディアセンター）を優先して記載したほか、国立国会図書館デジタルコレクション提供資料など Digital Object Identifier (DOI) が付与されたファイルを優先した。

9. 『日本医学史』はブリックドメインに置かれる作品であり、このデジタルテキストは特別な手続きを経ることなく無償で出版物・ウェブサイト・放送番組などへの掲載収録を行うことができる。ただし日本医史学会ホームページが提供するデータであることを、著作権法に定める引用の方法に準じて明示することとする。またウェブサイトなどに掲載する場合は掲載ページ内に当ウェブサイトへのリンクを含めることとする。

10. このデジタルテキストは名古屋大学医学部附属病院小児科・川島希と医療法人清風会安井医院・安井廣迪の共同研究による成果である。一次および二次校正は川島希が行った。公開にあたり、富士川游の孫である東京大学名誉教授・富士川義之氏に本事業の意義に賛同いただき、多大なる協力をいただいた。ここに謝意を表す。

令和4年6月16日 川島希

日本醫學史序

古今有爲士。誰不求名。然求其聲名籍籍、永昭青史者、何其寥寥也。夫醫、不惟治病、非有學有德、能施仁術者、不足以爲良醫。是故以揆天之才、讀古今之書。學問治術、完然圓備、然後始得聞於後世矣。而莫爲之後者、雖盛亦不傳。是史筆鉛槧之所以不可不重也。富士川游君、天資溫厚、好學善醫。平素竊歎、我邦未曾有醫史之書。於是博閱群籍。稽之言行事迹。取之稗官口碑。探之碑銘墓碣。考證穿鑿、十有餘年、遂著此篇、名曰日本醫學史。自尙古以至于今日、名醫良工、苟名於世者。及和藥之盛衰、漢方之源流、西醫之東漸。網羅畢陳、論評不遺。其言博而要、其文簡而明。醫家架上、最不可缺。劄劂告竣。乞余序。余公事鞅掌、不遑寧處。安能執筆。然君子成人之美。何敢辭焉。古云。上醫醫國。其次醫人。不爲良相、爲良醫。以兵譬醫。借醫喻政。任不亦重乎。世醫不察、徒賣藥爲活。鬻術貪財。偶應當家之招。謂此奇貨可居矣。問其名則醫也。校其實則雞鳴狗盜之類耳。可不歎乎。必也。如君而始可與言醫已矣。昔人曰。醫意也。意匠慘澹、以起沈痾痼疾。今也不然。醫衣也。美其衣裝、以取容於人。或曰。醫威也。高大門戶、以張虛勢。蓋有其實者、名亦隨之。不必須修飾華美也。學者注心於此篇。則於本邦醫人事功、思過半矣。余不慣文字。安知不訾其昌陽引年、以進豨苓也哉。

明治三十七年八月

况翁 石黑 忠惠 并書

日本醫學史序

編年ト云ヒ列傳ト云フ縦ヒ材ヲ取ルコト博ク事ヲ叙スルコト詳ナランモ輓近ノ史眼ヨリシテ觀レバ單ニ史家ノ前業タルニ過ギズ我國既出ノ醫史ノ概皆今人ノ要求ヲ満足セシムルニ足ラザルモ亦宜ナリ富士川游氏ノ才學一時ニ卓越セルハ世ノ知ル所ナリ其ノ新ニ歐洲ヨリ歸ルヤ蘊畜愈大ニ識見愈長

ゼリ頃日累年蒐集セシ所ノ材料ヲ鎔冶シ我國醫學ノ發生開展ノ跡ヲ歷叙ス其機關的構造ノ精巧ナル
譬ヘバ次ヲ逐ヒテ草木ノ芽ヲ抽キ枝葉ヲ茂生シ花ヲ開キ子ヲ結ブヲ觀ルガ如シ獨逸ニ史ヲ行
(Geschichte)ト名ヅク行ハ事物ノ生ヨリ異、異ヨリ滅ニ之クヲ謂フ史ノ物タル讀者ヲシテ事物ノ發生
變異衰滅ノ循環ヲ明ラメシムルガ故ナリ學者若シ此書ヲ繙キテ富士川氏ノ眞ノ良史タル所以ヲ知ラ
バ又奚ゾ其ノ醫界ニ貢獻シタルコトノ大ナルヲ疑ハン是ヲ序ト爲ス

明治三十七年三月十四日

於征露第二軍司令部

森 林太郎 識

日本醫學史叙

吾友子長富士川游君。夙嗜史學。嘗見我醫籍漸歸散逸。深以爲憂。項目著日本醫學史。將以上梓。來
請序於余。受而閱之。則上起太古下至方今。蒐集古記。涉獵舊文。斷以其所見。可謂簡而確矣。我醫
道源委。瞭若觀火。其裨益後進。蓋不鮮少也。顧者本邦有醫藥。開源於大己貴少彥名二尊。民受其賚。
雖然神代邈矣。其詳不可得而稽。中世以降。民風漸開。疾疫加多。至 允恭之朝。始求醫於新羅。
雄略欽明二朝繼之。又徵于百濟及高麗。於是方書齎入。輯其精粹。以補我之所不足。自此而後。歷世
相承。益索之漢土。其學術大闡。而太古及三韓醫方。殆乎止熄。是命也。延及德川時代。名流輩出。
醫學蔚興。其著書足壓漢土者。往々而出焉。降自幕末至于方今。時勢一變。汎求西洋醫方。以救斯民
夭折。而皇漢醫術並廢。是亦命也。孔子曰。道之將行也與命也。道之將廢也與命也。其是之謂乎。余
亦慨乎我醫日就淪胥也久矣。曩著日本醫道沿革考。略誌其概。以俟後之學者。今接君之高著。窃喜有
著之先鞭也。乃書辨於簡端云。

明治三十七年四月上浣

日本醫學史叙

刻下討露ノ皇師ハ海ニ陸ニ奮闘勇進百戰百勝ノ功ヲ奏ス是畢竟將卒ノ忠君愛國心ニ富メルニ依ラス
ンハアラス惟フニ明治維新ノ大業成リシ以來前後數度ノ外征アリテ毎回全捷ヲ博スルノ遠因ハ往年
大日本史及日本外史等ノ國史編撰セラレ我國體ノ他邦ニ卓越スルコトヲ汎ネク國民ニ鼓吹シ以テ勤
王殉國ノ志操ヲ振起涵養セシニ淵源セリ醫史ノ醫學ニ及ホス感作モ亦之ニ讓ラス抑醫史ハ醫學者ノ
志氣ヲ獎勵スル衝動劑ニシテ之ニ依リ學理ヲ考究スル意思ヲ挑發興奮セシメ博聞ヲ好ミ千古ノ學說
ヲ涉獵シテ以テ識見ヲ補益シ旁ヲ固陋偏見ニ陷ルヲ矯制スルコト恰モ保固強壯ノ藥品ト其効ヲ等フ
ス又各邦固有ノ疾病ニ關スル特異觀念アリ而シテ之カ起原ヲ索ネ變遷ノ理ヲ究ムルニハ必ス自國ノ
醫史ニ據ラサルヘカラス然ルニ從來ノ醫史ニハ文化ノ進歩ト醫事ノ沿革トヲ聯結併論セシモノナク
醫史上尙ホ一大缺陷ヲ遺存セシニ今ヤ本書ノ公行アリテ醫史ノ醫學ニ及ホス効果始メテ完全スルニ
至リタルハ秀カ最モ欣喜ニ堪ヘサル處ナリ依テ聊鄙言ヲ其首ニ題シテ以テ本編發刊ノ祝辭ニ代ヘ且
畏友富士川鐸德ノ偉大ナル勤勞ヲ讚賞スルコト爾リ

明治三十七年四月

三宅 秀 誌

日本醫學史序

往年余ノ大學生タリシ時嘗テ吳芳溪ト居ヲ同ウス芳溪好ミテ醫史ヲ講ジ余モ亦我國醫史ノ缺ゲテ備
ハラザルヲ歎ジ遂ニ二人胥謀リ起テ之ヲ修メントス一日客アリ來リテ芳溪ヲ訪フ舉止端正風采素樸
頗ル古君子ノ風アリ芳溪ト與ニ和漢醫學ノ事ヲ談ズ其言鑿鑿トシテ証據アリ余私カニ其尋常ノ人物

ニアラザルヲ信ズ既ニシテ芳溪顧ミテ客ヲ余ニ介ス余是ニ於テ始メテ富士川子長ト相識ルヲ得タリ
因テ鼎坐俱ニ志ヲ語り更ノ移ルヲ覺エズ私カニ修史ノ緒ニ就キタルヲ悦ブ爾來締交今ニ至ルマデ十
又五年子長ガ博覽強記勵精衆ニ超ユルニ服シテ最モ其志ノ堅忍ナルヲ喜ブ子長夙ニ我國醫史學ノ講
ゼザルベカラザルコトヲ論ジソノ前業トシテカヲ古醫書ノ搜索ニ致シ或ハ名門ノ子孫ヲ窮巷ニ訪ヒ
或ハ古人ノ殘碑ヲ僻陬ニ探リ斷簡零楮ト雖モ苟モ考證ニ資スベキモノアレバ多貲ヲ惜マズ千里モ尙
ホ遠シトセズ之ヲ獲ルコトヲカメ假令同一ノ文書ト雖モ異本數種アルモノハ悉ク之ヲ網羅ス是ノ如
キモノ十年一日ノ如ク藏スル所今ヤ既ニ二萬卷ノ多キニ至レリ子長參互校訂據リテ以テ我ガ醫史學
ヲ興サントシ孜孜其業ヲ勉メ稿本已ニ成ル然レドモ猶ホ自ラ安ンゼズ去テ獨逸國ニ遊ビ其邦醫史家
ノ業ヲ觀察シ居ルコト二星霜大ニ得ル所アリテ歸リ刀圭ノ暇アル毎ニ舊稿ヲ補修シ遂ニ日本醫學史
ヲ著シ醫學ノ知識及ビ技術ノ發展ヲ科學ニ照シテ攻究シ以テ我國醫史學ノ端ヲ啓ケリ實ニコレ前人
未ダ成サザル所之ヲ曠古ノ偉業ト稱スルモ豈不可ナランヤ蓋シ我ノ醫史ヲ修ムル素ヨリ容易ノ業ニ
非ズ史料ヲ蒐集スルコトノ難キ一ナリ史料ノ眞僞ヲ甄別スルコトノ難キ二ナリ今ノ時ニ方リテ古ノ
書ヲ見ルヤ文字鬱翳シテ其義亦頗ル解シ易カラズソノ難キ三ナリ政治及ビ文化等ノ歴史ニ涉ラザレ
バ完シト謂フ可ラズソノ難キ四ナリ史料ヲ獲ルト雖モ之ヲ次第シテ編述スルコトノ難キ五ナリ又過
去ノ事實ヲ詳カニスルトモ現在ノ學術ニ通ゼザルベカラズコレ困難ノ最モ甚シキモノニシテ而カモ
醫史學者ノ資格ニ於テ缺クベカラザルモノナリ且夫レ我國醫史學ヲ興スコトハ實ニ我ヨリ古ヲ作シ
以テ範ヲ後世ニ遺スモノ識見卓絶志操堅忍ナル者ニアラズンバ焉ゾ能ク其事ヲ大成スルヲ得ンヤ今
ヤ子長其人アリテ此大任ニ膺リ以テ本朝醫學ノ缺陷ヲ補フ余ハ即チ我學問社會ノ爲ニ子長ノ功績ヲ
頌セザルヲ得ズ況ンヤ余ガ多年意ヲ注ギタル業ノ子長ノ力ニヨリテ成ルヲ見ルニ於テオヤ子長ハ安
藝ノ人累世刀圭ヲ業トシ子長亦醫ヲ以テ名アリ往年ソノ郷ニ吉益爲則東洞ト號スル者アリ宏才卓識
一世ノ耳目ヲ聳動セリ子長幼時父ノ家ニ在リ曝書ニ際シテ東洞ノ遺著醫事或問ヲ觀テ醫學ノ發達ニ

由來淵源アルコトヲ知り後ニ黒川道祐ノ本朝醫考吉田憲徳ノ國史醫言鈔ヲ讀ム共ニ同郷ノ人ナルヲ以テ遂ニ先輩ノ業緒ヲ繼グノ志アリ其學校ノ業ヲ卒ヘテ東都ニ來ルヤ心ヲ醫史ノ研究ニ潛メ我國醫史ニ就テ前人未發ノ見ヲ出セルモノ尠カラズ芳溪モ亦子長ト郷國ヲ同ウシ東洞ニ私淑シ學識宏博亦一代ノ俊才ナリ余深ク二人ノ性質ヲ詳ニシ人物ノ出ヅル寔ニ偶然ニアラズシテ子長ノ偉業ヲナス其由來スル所アルヲ知レリ夫レ歐洲ハモト學術ノ淵叢ト稱ス百般ノ學藝皆其蘊奧ヲ窮メザルハナシ而カモ學者ノ研究未ダ深ク東洋ノ事跡ニ及バザルハ一ハ交通往來ノ日尙淺キニ職由スト雖モ文字言語ノ相隔絶スルコト其主要ノ原因タリ抑モ我國遠東ニ屹立シテ夙ニ範ヲ泰西ニ採リ文化日ニ新ニ國威月ニ揚リ今ヤ隱然東洋ノ盟主タリ乃チ歐洲學術ノ粹ヲ拔キ精ヲ鍾メ之ヲ東洋諸邦ニ施スト共ニ自ラ東洋ノ學術ヲ研究シ進ンデ之ヲ彼ニ教ヘ以テ宇宙ノ學術ノ大成ヲ圖ルハ實ニ吾人ノ重大ナル天職ナルヲ信ズ惟フニ吾人生キテ明治ノ 聖代ニ遇ヒ今ヤ征露ノ皇師ハ連戰連捷以テ我帝國ノ武威ヲ發揚スルヲ見ル吾人籍ヲ學界ニ置ク者宜シク其天職ニ盡瘁シ以テ國家ノ進運ニ伴ハザルベカラズ子長ノ斯業ノ如キハ善ク其職責ヲ盡シタルモノト謂フベキナリ書成ル余嗟嘆措ク能ハズ思フ所ヲ叙シテ以テ序トナス

明治三十七年五月 九連城陷落ノ捷報臻ルノ日

鶚軒 土肥 慶藏

日本醫學史の序

富士川子長君は余の同郷の人で同業で心掛けも同じであるから事ある度に語り合ひ謀り示すことも少なくない君は廣島縣下安佐郡安村の生れで幼き頃は其郷里で家庭に小學校に教を受け其後廣島市に出でて廣島醫學校に入り専門學は固よりのこと文筆で仲間中に立ち優れて居たが卒業後出京して中外醫事新報の編輯に携はり文才と學力と品性とで段々に世間の信用を博し來つて剩さへ洋行もし

て二年餘も獨逸國エナ府にあつて内科一般と理學的療法とを専攻せられ神經病は特に自分ながら許して居らるのである君は若い時から醫史の研究にも心を寄せられ且物の本を讀むことを好み地理歴史から隨筆小説類まで何と云ふ限りなく涉獵して其間にも醫者や病氣に關係あることには特に心を用ひられた余も代々醫者たる家に生れ母の一家にも醫者が多くあつたから余自身も今では醫者となり濟ましたが幼き頃は文學が好きで歴史地理の事は外祖父紫川先生の好かれたることにあり殊更に興味を覺えて讀もし作りもしたことがある大學に入りて解剖より組織生理より病理と説かず述べざる形質の上にそが妙用眞趣を窺ひ得るまでには文學哲學など云ふものに鞍替しその理論や歴史の研究に纏を執り見んと思つたことが一度や二度ではなかつた今でも其時の事などを想ひ出して文學上哲學上の研究の世間一般に進歩しないには羽痒く覺え東洋の道德學問文藝には遺珠傳璧が多いのに自分に着手の時間と準備のないのを遺憾とすることがもはや臆氣ではあるがまだ時として心頭に浮んで來ないこともないその位だから二十餘年前余が富士川君と初めて交を締んだ頃は余が醫學を修めることに心を定めてより暫時の後であつたから此の如き趣味を抱いて居ることがまだ濃く殷んであつた故森川に釘店に君が余の下宿を訪ひ來つた頃に嗜好が似て歸趣が同じで心意氣が相ひ投合したのも當然である二人ともに古からの醫者の傳記や醫學の系統やなどを取調べるのを餘暇の樂みとし慰みとして居たが是れは恐らく余等が醫史編修の志を起した最初であつただろうと思ふ此時分余は君に曳かされて専ら醫史の材料の取集めにかかつて随分に心も盡し力も盡した和漢洋の古き醫書を四方に搜し求めたり草を分け寺を尋ねて碑文や墓誌の苔を掃つたり色々な手蔓にたよつて名家の子孫を音づれて書き殘しの筆の跡まで搜し集め自からも倦み人にも厭はれつつも著しき時勢の變遷に我邦の昔和氣丹波以來前賢の事業功績の烟雲と消へ失せんことの慮らるるからに些少の時だにも思ひ止むことはなかつた然し恥かしながら余は前に文學の研究を思ひ止まつたと同じく其後又今も専門とする精神病學にて學問上の興味を加へたるに従つて次第に醫史的研究の方には遠ざかつ

て來たが余の如く才識の狹隘でない余とは違つて定見あつて動かない君は二十年前より今日まで同じ熱心同じ興味同じ意見でもつて醫史的研究のことに心をも身をも捧げて居らるる君が其材料として集められた醫書が今は萬卷に達したと云ふこと丈で余の此言の誇張でないのは分る君は此及び其他の豊かな材料により其物の眞と偽りとを鑒定し其説の當ると當らぬとを差別し細大を明かにし本末を考へ源流を酌み余等が二十年來の志ざす所で余が中途に思ひ切つた所の我邦の太古よりの醫史をば此頃に至つて逐に編集し終られた是は實に前代未聞の仕事と云はなければならぬ今まで醫史のない所へ初めて醫史を作らうと云ふのが容易き事業でないことは明らかであるが經驗のない人には其困苦の有様を想像することは出来ない余は嗚呼ながら我邦神代より帝室初代の頃の醫史を書き初めんとしたことがある色々なものを参考して種々に推敲して一行出來ると消し二行出來ると消しやつとのことで十枚許も出來たと思つたとき又皆反古にしなければならぬ様になつた我邦にも昔から醫史を編修しやうとした人はあるが大抵は列傳の様なものか左なくば編年體のもので面白い説や考證はあつても亦それは短い隨筆めいたものであつて中々西洋あたりの醫史などとは違つたものであるから現代の意味の歴史として醫史を作ることには我より脛をなすの恐れがある又他に類がない初めてのものであつて見れば議論にせよ意見にせよ事實の臚列にせよ一々出處を明かにせなければならぬ左すれば冗漫になり繁瑣になりて貫聯あり系統をなす著作とはなり難いのである日本醫學史の著述は實に容易でない困難なるが中にも困難なる企業の一つである今富士川君の著作を見ると平易で筋途が能く立つて居つて我邦醫學の變遷及び疾病の歴史が能く分かる丸で物を手の平に置いて指で勘定する様である是れ全く君が博學で強記で見識があつて誠實で熱心で綿密で注意深くて材料が十分に取捨が行届いて其上に文才があり筆豆で十年一日の如く物に倦まない結果である余も醫史編修の志望がありながらそれを遂げ得なかつたが其遺憾も我邦の醫史が君の如き適才を得て此書の如き好著になつた以上朝日の前に置く霜と消え春風の中に積む氷と解けて些細だにも残なくなつて

余の望は君の著作によつて全く達せられて居る日本醫學史の表題に余の名が兼ての此類の君が著述の多數に於ける如くに列ね署せられなくとも列ねてあると同じである日本醫學史の活版に付せらるるとき君は余を尋ねて序文をと請求せられた君と余との關係上然るべき好文字大議論を捧げて之に報ひなければならぬのだがさて君の人となりに就きては名望高き石黒氏溫厚好學善醫と稱へられ此の著作に就きては文豪として一代に鳴る森氏醫界に貢獻したること大なりと批評せられ余が親友なる土肥氏は醫史を修むるの困難より中外の形勢に論じ及ぼされたし三宅氏河内氏の序文など皆黄金の如く紫玉の如く此書の爲めに譽を延べ重をなすべきものであれば余の言葉を其上に添えんは花を色取つたり錦に畫がいたりする様で折角立派なものを汚なくする様なものと思はるるも君の望みだし難く唯私の繰言を繰返して責の塞ぎとする許なり

明治三十七年八月二十六日 本郷西片町なる積餘堂にて

吳 秀三 識す

日本醫學史序論

(一)

コノ書題シテ醫學史トイフハ普通ノ稱呼ヲ襲用セルナリ。著者ノ意ハ醫學ノ歴史ヲ科學的方法ニ依リテ研究セントスルニ在リ、單ニ醫事ノ歴史ヲ叙述セントスルニアラザルガ故、寧口之ヲ醫史學ト名ツクベシ、或ハフオツセル等ニ從ヒ、別ニ歷史醫學 (Die historische Medizin) ノ名目ヲ撰ビ用フルモ可ナリ^①。

西洋ニアリテ、醫者ガ醫學ノ歴史ニ就キテノ研究ヲ始メシハ、西曆十八世紀ノ頃ニシテ、ダニール・ルクレーガ醫學歷史^②ヲ以テ、ソノ嚆矢トス。コノ書ハルクレーガ自序ニモ言ヘルガ如ク、『コノ歴史ハ各時代及ビ各學者ノ精神ニ立チ入り、各個ノ思想ヲ誠實ニ寫出シテ、讀ムモノヲシテ之ヲ取捨セシメンコトヲ欲ス』ト言フノ主義ニテ、單一ニ事實ヲ編纂セルニ過ギズ。所謂經驗的ノ歴史 (Die empirische Geschichte) ^③ナリ。ルクレーノ醫學歷史ニ次ギテ世ニ現ハレタルモノヲフレインドノ歴史トナス。コノ書ハルクレーノ醫學歷史ガ、ガーレンニ終ハレルヲ以テ、ソノ業緒ヲ嗣ギ、ガーレン以後、第十六世紀ノ始メニ至ルマデノ醫學ノ歴史ヲ叙述セルモノナリ。

コノ如キ主義ノ歴史ニ次ギテ興リシモノハ、所謂實用的ノ歴史 (Die pragmatische Geschichte) ナリ。蓋シ歷史上ノ資料ノ許多繁雜ト成ルニ從ヒ、不隨意的ニ自己ノ意見ヲ用ヒテ、ソノ材料ヲ取捨セント試ムルニ至ルハ自然ノ勢ニシテ、乃チ各時代ニ於ケル學術ノ狀態ヲ認ムルニ必要ナル事實ヲ史料中ヨリ鈔出スルヲ以テ、コノ派ノ歴史家ノ主義トス。シユルチエ、ブルーメンバッハ、アツケルマン、メツツガー等諸家ノ醫學歷史ハ、コノ種ニ屬ス。中ニモスプレングルノ大著^④ハ所謂實用的醫學史ノ稱首タルモノニシテ、ソノ著者タルスプレングルハ之ガ爲ニ、輓近醫史家ノ父ト仰ガルルナリ。スプレングルノ説ニ依レバ『醫學ノ歴史ハ、斯學ガ經歷シタル變遷及ビ因業ヲ叙述スルモノナリ。故ニ、醫學ノ歴史ハ、單ニ著名ナル醫家ノ傳記ヨリ成ルモノニアラズ、又ソノ著述ノ斯道ノ隆替ニ關與スルモノヲ列舉シ、之ヲ批評スルノミニシテ足レリトスベカラズ。』ト言ヒ、人類ノ疾病ノ認識及ビ治療ノ歴史ヲ講ジ、又コレニ關シテ、醫學的理論及ビ實際ガ經歷シタル變遷ヲ叙スルヲ以テ、醫學ノ歴史ノ本領トナセリ。モンファルコン、キウンホルツ、ガステ、モイル、ハミルトン等諸家ノ醫史、次ギテ世ニ現ハレタリト雖モ、或ハ醫術ノ革命ヲ錄セルニ止マリ、或ハ冗長ナル年代記タルニ過ギズ。或ハソノ名ハ醫史ニシテ、ソノ實ハ醫家ノ傳記ニ止マレルモノモアリキ。

次デ、醫學ノ歴史ニ關スル研究ハ、更ニ一段ノ變化ヲナシ、自家獨得ノ經驗ニ依リテ、之ヲ查驗シ、判斷シ、以テ之ヲ組織スルコトヲ企テ、所謂批判的ノ歴史 (Die kritische Geschichte) ノ體ヲ成セリ。而シテ醫學ノ系統及ビ論說ノ頻回變動スルニ依リテ、コノ批判的醫學史ハソノ勢力ヲ加ヘ、アー・エフ・ヘツケル、イー・チェ・エフ・ヘツケル等諸家ノ著述アリ。コノ種ノ歴史ニアリテハ、實ニ歴史的事實ノ主觀的再現ヲ主旨トセルニテ、概シテ論ズレバ歴史ノ哲學ニ外ナラズ。而シテコノ歴史ノ哲學ハ一轉シテ、哲學的ニ考察セル醫學ノ歴史トナリ、ウインヂツシユマン、キーゼル、ロイポルト、クイツツマン^⑥等諸家ノ著述出デタリ。

ヘツケル^⑤ガ始メテ歴史病理學 (Die historische Pathologie) ノ目ヲ立テテ、國民病ノ歴史ヲ講ズルニ及ビ、醫學ノ歴史ハ新ニ一方面ヲ開キタリ、蓋シコレヨリ前、シデンハムガ國民病ニ關スル觀察ニ就キテ新紀元ヲ劃シ、次デウエプスター、オツエナム、フオデレ、シュニルレル等諸家ノ國民病ノ歴史ニ關スル著述アリ。コレ等ハ國民病ヲ歴史的及ビ地理的ニ詮索セルモノニシテ、歴史ノ體ヨリイヘバ、全ク客觀的ノモノナリ。近時ニ及ビテヘーゼル、ヒルシユ兩氏ノ大著^⑦アリテ、コノ種ノ醫學歷史ハ大ニ備ハレリ。

パースノ醫學歷史^⑧ハ醫家地位ノ發達ヲ叙述シ、ブツシユマンノ著書^⑨ハ醫學教育ノ變遷ヲ叙シタリ。共ニコレ醫學歷史ノ領域ヲ恢弘セルモノニシテ、近時パーゲル^⑩及ビノイブルゲル、パーゲル共編ノ醫學歷史^⑪ノ行ハルルニ至リテ、醫學歷史ハ實ニ左ノ内容ヨリ成レルヲ見ル。

第一。醫學的知識ノ歴史、廣キ意義ニテ言フトコロノ、病理學及ビ治療法ノ歴史

第二。醫家ノ地位ノ歴史

第三。疾病ノ歴史、殊ニ國民病ノ歴史

以上述ブルトコロハ醫學ノ歴史ノ發達ノ概要ヲ示セルノミ、然レドモ醫學歴史ハソノ初メハ單一經驗的タリシトコロノモノガ、今日ニ及ビテ遂ニ科學的タルニ至リシコトハ、以上ノ記事ニ依リテ明カニ之ヲ認識スルコトヲ得ベシ。

- ① (1) V. Fossel, Die Geschichte der Medicin und ihr Studium. 1898.
- ② (2) Daniel Leclerc, Histoire de la médecine. Genève, 1696. — Amsterdam, 1702.
- ③ (3) Quitzmann, Die Geschichte der Medicin in ihrem gegenwärtigen Zustande. 1834.
- ④ (4) Sprengel, Versuch einer pragmatischen Geschichte der Arzneikunde. 1792.
- ⑤ (5) A. F. Hecker, Die Heilkunst auf ihren Wegen zur Gewissheit. 1805.
J. C. F. Hecker, Geschichte der Heilkunde. 1822.
- ⑥ (6) Quitzmann, Vorstudien zu einer philosophischen Geschichte der Medicin. 1843.
- ⑦ (7) Haeser, Geschichte der epidemischen Krankheiten. 1845.
Hirsch, Handbuch der historisch-geographischen Pathologie. 1859-62.
- ⑧ (8) Baas, Grundriss der Geschichte der Medicin und des heilenden Standes. 1876.
Baas, Die geschichtliche Entwicklung des ärztlichen Standes und der medicinischen Wissenschaften. 1896.
- ⑨ (9) Puschmann, Geschichte des medicinischen Unterrichts etc. 1889.
- ⑩ (10) Pagel, Einführung in die Geschichte der Medicin. 1898.
- ⑪ (11) Neuburger und Pagel, Handbuch der Geschichte der Medicin. 1901.

(11)

醫學ノ内容中、最モ重要ナルモノヲ醫學的知識ノ歴史トス。スナハチ古來學者ガ健康及ビ病的ノ人體ノ機能ニ就キテ認識セル事實ト、ソノ經驗及ビ觀察ニ依リテ立テタル醫術上ノ原則トヲ科學的ニ研究スルヲ趣旨トス。而シテ醫學ハ骨董ノ趣味ヲ有スベキモノニアラズ、又徒ラニ古來ノ醫家ガ繼承セル荒唐不稽ノ論說ヲ蒐集スベキニアラズ。醫學ハ人類ノ精神ノ發達史ニ外ナラザルガ故ニ、有用ナル原由的關係ヲ存セザル、各個ノ事實及ビ發見ヲ拾集シ、年代ヲ追フテ之ヲ編次セルノミニテハ、之ヲ醫學ト稱スルコトヲ得ズ。或ハ之ヲ古來普通ニ唱フルトコロノ歴史、或ハ年代記ト言フハ可ナリト雖モ、吾人ガ今日ノ知識ノ程度ニテ、科學的方法ニ基ヅキテ研究スルトコロノ醫學ノ歴史、即チ醫學史、又ハ歴史醫學ト稱スベキモノニアラズ。

醫學ノ要トスルトコロハ、歷史上ニ於ケル各個ノ事實ヲ當時ノ社會ノ心像ニ照シ、醫學的知識ノ發達ニ影響ヲ及ボセルトコロノ研究ノ精神ト方法トヲ闡明スルニアリ。國民ノ文化ト醫學的知識ノ歴史トハ、カクノ如クニシテ相離ルベカラザル關係ヲ有シ、從テ醫學ノ歴史ハ文化史ノ一部分ニ屬スルモノトス。故ニ醫學ヲ攻究セントスルニ方リテハ、先ヅ文化史ヲ修メザルベカラズ。

醫學的知識ノ發達ヲ講究スルニ併セテ、醫家ノ地位ノ歴史ヲ研究スルコトモ、亦醫學ノ主要ナル目的ナリ。スナハチ醫學教育ノ歴史、病者看護及ビ醫院ノ歴史、醫家ノ運命及ビソノ公共生活ニ於ケル意義等ハ、先ヅ研究スベキ問題ニシテ、コノ場合ニ際シテハ、醫學ノ歴史ハ文化ノ歴史ト相關聯スルコト、益々甚シトス。

醫學ノ領域ニテ、尙ホ主要トスベキモノハ疾病、殊ニ國民病ノ歴史ナリ。然レドモコノ種ノ研究ハ、ソノ成績ノ甚ダ不確實ナルコトヲ覺悟セザルベカラズ、殊ニ國民病ノ歴史ニ就キテハ、獨リ醫學的ノ知識ノミヲ以テ之ヲ判斷スベカラズシテ、却テ宗教上ノ觀察ニ待タザルベカラザルモノ多ケレバナリ。

之ヲ要スルニ、醫學ト稱スベキモノハ、實ニ上記ノ内容ヨリ成リ、科學ノ方法ニ依リテ、コレ等諸項ノ發達ヲ研究スルトコロハ一學科ニ外ナラズ。

我が邦ニアリテハ黒川道祐ノ本朝醫考ヲ始メトシテ、醫家ノ傳記ニ關スル著述アリ^⑫ 醫學上ノ文籍ヲ列舉セルノ書物アリ^⑬、又一二ノ事項ニ就キテ醫史學上ノ攻究ヲナシタル記録アリ^⑭、而カモ未ダ醫學ノ歴史ヲ叙述セルモノハアラズ。近年ニ及ビテ河内・郭兩氏ノ著述^⑮ノ出ヅルアリ。我が朝三千年間ノ醫道ノ變遷ヲ詳ニシ、醫學ノ歴史タルノ體裁ヲ備フト雖モ、之ヲ現時吾人ノ知識ノ程度ニテ、醫學ノ歴史ト稱スルモノニ比スルニ、ソノ範圍甚ダ狹小ニシテ、著者ガ所謂醫史學、若クハ歷史醫學トハソノ内容ヲ異ニスルモノアリ。

別ニ奈須恒徳・佐藤方定等ノ著述^⑯アリテ、醫史學上ノ價值尠カラズト雖モ、皆ナコレ所謂隨筆ノ類ニ屬シ、系統アル記載ヲナセルモノニアラズ。

西洋諸家ニシテ、我が邦ノ醫史ヲ叙述セルモノシーボルトヲ始メトシテ、ソノ人ニ乏シカラズ^⑰、而カモソノ書ノ趣旨、我が邦醫史ノ攻究ニ資スルニアラズ、タダ日本醫學ノ既往及ビ現在ノ狀況ヲ西洋ニ紹介スルニテ足レリトスルモノナルガ故ニ、ソノ記事ノ粗鹵ナルハ當ニ然ルベキトニシテ、ソノ學問上ノ價值ノ如キハ、固ヨリ深ク論ズルコトヲ須キザルナリ。

⑫ 本朝醫考	黒川道祐著	三卷
皇朝醫史	賀島近信著	三卷
皇國醫林傳	畑惟龍著	一卷
歷世尙藥略傳	安藝道恕著	一卷
醫業家譜	——	——
寬政醫家系圖	——	——
洋方醫傳	今村亮著	一卷
海内醫林傳	——	——
本朝醫蹟	山科元幹著	一卷
豹斑錄	奈須恒徳著	一卷
日本醫譜	宇津木昆臺著	七十卷
醫家藩翰譜	——	——
寬永醫家系圖	——	——
皇國名醫傳	淺田粟園著	八卷
近世名醫傳	松尾耕三著	六卷
⑬ 本邦醫家古籍考	中川故著	三卷
醫書目錄	——	——
本朝醫書目錄	——	——
⑭ 日本醫道沿革考	河内全節著	一卷
日本醫術沿革考	村松紀靖著	學藝志林所載
皇國醫事沿革小史	郭嘉四郎著	二卷
古醫道沿革考	權田直助著	學藝志林所載
⑮ 本朝醫談	奈須恒徳著	二卷
武官醫編	奈須恒徳著	五卷
瘳餘隨筆	奈須恒徳著	一卷
國史醫言鈔	吉田憲徳著	四卷
皇國醫系	萬年純著	一卷
奇魂	佐藤方定著	一卷
八藥新論	佐藤方定著	三卷
醫方正傳	花野井有年著	二卷
志都乃石室	平田篤胤著	二卷

⑰ (16) Siebold, Geschichtliche Uebersicht der Einführung und Entwicklung der Arzneiwissenschaften in Japan. Verhandl. d. naturh. Ver. d. preuss. Rheinl. u. Westph. Bonn. 1855.

Hoffmann, Ueber die japanische Heilkunde. Mith. d. Gesell. f. Natur. u. Völkerkunde Ostasiens, 1873-76.
Wernich, Zur Geschichte der Medicin in Japan. Arch. f. Geschichte der Medicin u. Geographie. 1878.
Wernich, Ueber die Fortschritte der modernen Medicin in Japan. Berl. klin. Wochenschrift. XII. No. 32. 34 43.
Whiney, Notes on the history of medical progress in Japan. 1883.
Gierke, Die Medicin in Japan in alten und neuen Zeiten. Breslauer ärztlich. Zeitschr. 1882.
Ardouin, Aperçu sur l'histoire de la médecine au Japon. Paris. 1883.
Helmuth, A glance at Japanese medicine ancient and moderne New York. 1892.
Alsberg, Die Heilkunde in Japan. Ausland. 1891.
Hirschberg, Deutschland in Japan. Deut. med. Wochenschrift. 1893.
Scheube, Die Geschichte der Medicin bei den ostasiatischen Völkern. Handbuch der Geschichte der Medicin. 1902.
其他 Sprengel, Baas, Puschmann, Pagel, 等諸家ノ醫史中「日本」ノ部

(四)

著者ハコノ如クニ醫學ノ歴史ヲ解釋シ、而シテ我が日本帝國ニ於ケル醫史學ノ緒端ヲ發カント欲シ、自カラ揣ラズ、コノ一小著述ヲ世ニ公ニスルニイタレリ。

西洋諸家ノ著述ニアリテモ、近世刊行ノ二三種ヲ除キテハ、醫史學上ノ價值甚ダ多カラズ。ソノ東洋ニ關スル記述ノ粗鹵蕪雜ナルコトハ既ニ上ニモ、言ヘル如クナレバ、參攷ニ資スベキモノアラズ。我が邦ニアリテハ固ヨリ未ダコノ種ノ著述ヲ見ズ。醫史學ト相離ルベカラザル關係ヲ存スルトコロノ文化史モ、今日世ニ行ハルモノハ、田口卯吉・物集高見・ルブオン・大町芳衛數氏ノ著書アルニ過ギズ。コレニ依リテ攻究ノ便益ヲ得タルコト多シトハ言フベカラズ。コノ學ノ先輩ニ就テ疑ヲ質サントスルモ、憾ムラクハ先輩ノ何處ニ在ルヤヲ知ラズ、既ニ師ヲ求メテ之ヲ得ズ、據ルベキノ書ヲ索メテ亦之ヲ得ズ、加フルニ菲才淺學ノ躬ヲ以テシ、漫ニコノ書ヲ成ス。著者ノ期スルトコロハタダ後人ノタメニ、草萊ヲ闢キ、柞棘ヲ剔ルニ在ルノミ、ソノ砥平ト髮直トヲ圖ルガ如キハ、偏ニ之ヲ後ノ識者ニ待ツ。

(五)

醫史學ノ前業トシテ、特ニ殫思鞠力スベキハ史料ノ蒐集及ビ撰擇ナリ。而シテ史料ハ固ヨリ文書ニ限ルニアラズト雖モ、スベテ學術ノ歴史ニアリテハ、學者ノ記錄ヲ以テ主要ノ材料トス、且ソノ記錄ニ籍リテ、過去ノ事實ヲ現在ニ表現セシメテ、之ヲ研究スルコトヲ要ス、從テソノ人ノ固有ノ言語トシテ之ヲ聽取スルノ要アルガ故ニ、ソノ研究ハ常ニ必ズ所謂根本史料ニ依ラザルベカラズ。即チ各期時代ニ於ケル醫家ノ著述ヲ精讀シ、以テ當時ノ學界ニ於ケル思想ヲ詳ニセザルベカラズ。コレ實ニ莫大ノ時間ト勞力トヲ要スルモノナレドモ、醫史學ノ研究ニハ、必ズコノ方法ヲ用ヒザルベカラズ。

故ニ醫史學ノ前業トシテ、圖書學(醫籍目錄學)ノ攻究ヲ必要トスレドモ、而カモ我が邦未ダ完全ナル醫籍目錄アラズ、イヅレノ時代ニ、イヅレノ著述アリシカスラモ、尙ホ之ヲ知ルニ苦シム、コレ我が邦醫史學攻究ニ際シテ大難事トスベキトコロナリ。故ニ著者ハ各期時代ノ醫史ヲ叙スルノ末ニ、醫書目錄ヲ附シ、以テ醫史學ヲ攻究セントスル人ノ便宜ヲ圖ラントス。但シ醫史學ノ著述ノ體裁上、嘉ミスベキコトニアラザルハ固ヨリ論ナキナリ。

(六)

醫史學ノ目的物トスルトコロハ疾病ナリ、醫學的知識ナリ、治病ノ技術ナリ、悉クコレ自然ノ現象ニ外ナラズ。故ニ之ヲ自然科學ニ列スベキハ勿論ナレドモ、而カモノノ現象ノ頗ブル複雑ニシテ、獨リ形而下ニ限局セザルガ故ニ、之ヲ攻究スルノ方法ハ少シク修正セラレザルベカラズ。コノ般ノ關係ハ夫ノ精神現象ヲ研究スルトコロノ心理學ガ、自然科學ニ屬シナガラ、ソノ攻究ノ方法ニ於テ、少シク自然科學上研究方法ノ規範ヲ脫セルト同様ナリトス。

然レドモ醫史學ハ自然科學ニ列スベキモノナリ。故ニソノ攻究方法ハ客觀的ノ觀察ヲ主トシ、實驗(Experiment)ニ代ユルニ内省的ノ批評ヲ以テスベク、而シテ決シテ獨斷的ナルベカラズ。若シコノ常規外ニ脫出センカ、ソノ著述ハ輒チ科學上ノ價值ヲ失フナリ。

醫學ノ歴史ヲ叙述スルニ方リテ、一定ノ時代ヲ劃スルコトハ、便宜上諸家ノ之ヲ企テシトコロニシテ、我が邦ノ歴史ニアリテモ、日本醫道沿革考ハ二千年間、醫道ノ變遷興廢スルトコロニ隨ヒテ、十有六沿革ヲ別チ

- 一。醫ヲ海外ニ召シ、又其法術ヲ採用ス
- 二。三韓醫方益盛ニ行ハレ、皇國固有ノ醫術廢絶スルニイタル
- 三。醫僧混淆辨ズベカラズ
- 四。唐朝ノ醫術盛ニ行ハル
- 五。皇國固有ノ醫方再ビ世ニ用ヒラル
- 六。漢方醫術盛ニ行ハル
- 七。病源候論ノ説大ニ世ニ行ハル
- 八。宋ノ醫方大ニ世ニ行ハル
- 九。金・元ノ醫學盛ニ行ハル
- 十。運氣五行ノ説、經絡配當ノ論起ル
- 十一。仲景ノ醫説行ハル
- 十二。萬病一毒ノ説行ハレテ海内ノ醫風一變ス
- 十三。折衷學派起ル
- 十四。和蘭醫學起ル
- 十五。洋醫採用セラレテ漢醫ト拮抗スルニイタル
- 十六。歐洲諸國ノ醫術海内ニ行ハル

皇國醫事沿革小史ハ之ヲ六期ニ分チ

- 第一期。即チ本邦固有醫法ノ行ハレタル世
- 第二期。即チ皇韓醫法折衷ノ世
- 第三期。即チ海外醫學開進ノ世
- 第四期。即チ醫學衰頹ノ世
- 第五期。即チ醫學再興ノ世
- 第六期。即チ西洋醫學傳來ヨリ醫學勃興ノ期ニイタル

右ノ如ク、次第シタリ。コノ如キ、區分法ハ西洋ノ醫史家モ之ヲ用ヒ、通例ガールレンマデヲ上古トシ、ガールレン以後ヲ中古トシ、ハーヴェーノ血液循環發明以來ヲ近世トシ、人々ノ意見ニ依リテ、更ニ多少ノ細別ヲナスヲ常トセリ。若シ醫學ノ歴史ヲ以テ、全然文化史ヨリ離隔シ得ベシトスレバ、吾人ハコノ如キ時代ノ區劃ヲナスコトヲ得ム。醫學ヲ以テ人類ノ社會ト相關聯セザルモノトシテ、ソノ沿革ヲ叙セントスルニ方リテハ、コノ如キ區劃法ハ或ハソノ當ヲ得タリトスベシ。而カモ醫學ソノ物ハ既ニ文化ノ一部分タリ、醫史學ハ文化史ノ領域ニ屬シテ、兩者ハ互ニ相離ルベカラザルモノナレバ、醫史學ニ於ケル時代ノ區別モ、亦之ヲ文化ノ變遷ニ隨從セシメザルベカラズ。著者ハ今普通史家ガ區劃スルトコロニ從ヒ

- 一。太古ノ醫學 (イ) 有史以前ノ醫學 (ロ) 太古時代)
- 二。奈良朝以前ノ醫學
- 三。奈良朝時代ノ醫學
- 四。平安朝時代ノ醫學
- 五。鎌倉時代ノ醫學
- 六。室町時代ノ醫學
- 七。安土・桃山時代ノ醫學
- 八。江戸時代ノ醫學
- 九。明治時代ノ醫學

コノ如クニ大別シ、ソノ間更ニ多少ノ細別ヲナシタリ、吾人既ニ科學的ニ醫學ノ歴史ヲ研究セントス、ソノ時代ヲ區劃スルコトモ亦科學的ナラザルベカラズ、依リテココノ辯ヲナスナリ。

-
- ① <https://permalink.obvsg.at/AC13049516>
 - ② <https://permalink.obvsg.at/AC10057758>
 - ③ <https://hdl.handle.net/2027/uc1.b3103811>
 - ④ <https://stabikat.de/DB=1/LNG=DJ/CLK?IKT=12&TRM=136832016>
 - ⑤ <https://permalink.obvsg.at/AC06787361>
 - ⑥ https://catalog.nlm.nih.gov/permalink/01NLM_INST/1o1pbn/alma993847023406676
 - ⑦ DOI: 10.1055/s-0029-1209310
 - ⑧ <http://data.onb.ac.at/rec/AC09674570>
 - ⑨ <https://d-nb.info/1179059611>
 - ⑩ <https://wellcomecollection.org/works/vgtg8nv6>
 - ⑪ <http://data.onb.ac.at/rec/AC09932399>
 - ⑫ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb000000370>
 - ⑬ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb000005180>
 - ⑭ DOI: 10.11501/833366
 - ⑮ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb000000738>
 - ⑯ <https://digital.zbmed.de/wunschdigi/periodical/structure/6696570>

日本醫學史

目次

第一章 太古ノ醫學

有史以前ノ醫學

原始人類ト疾病○我邦有史以前ノ住民及其疾病○治療の本能

醫學上ノ太古時代

國初ノ文化ノ程度○醫方ノ起原

醫藥ノ鼻祖

大穴牟遲神○少名毘古那神

太古時代ノ醫學

醫學ノ發端

太古時代ノ病理學

幽事（神事）○神氣（物氣）○荒ブル神○穢氣惡毒○不祥ノ行爲○物ニ傷ブラル

太古時代ノ醫術

祈禱○禁厭○藥物内用○外科○産科○兒科○眼科○耳科○藥物○水治○溫泉○灸法及按摩

參考書籍

第二章 奈良朝以前ノ醫學

奈良朝以前ノ時代

韓醫方ノ輸入

韓土トノ交通○漢籍ノ輸入○韓醫ノ來朝○韓醫方興ル

佛教ノ渡來

佛教ノ渡來○佛法ノ弘通○佛教ノ影響○僧醫ノ濫觴○佛典ノ醫方

唐醫方ノ輸入

隨唐トノ往來、遣唐留學生○唐醫方興ル

此期ノ醫學

支那ノ醫說○印度ノ醫說

醫及ビ藥物

醫ノ文字○「クスシ」ノ語原○藥物ノ文字○「クスリ」ノ語原

疫病

疫病ノ字義○疫病ノ解釋○欽明天皇十三年ノ疫病○敏達天皇十四年ノ疫病○疫病流行年紀○奎扶斯○麻拉里

亞○赤痢○癩病

醫綱本紀

醫事制度

大化革新○大寶令○醫官○醫學教育

參考書籍

第三章 奈良朝ノ醫學

奈良朝時代

僧醫

佛法ノ弘通○僧尼ノ醫術○僧醫○鹽眞大和上

施藥院

此期ノ病理學

疫病

痘瘡流行○支那痘瘡ノ起原○西洋痘瘡ノ起原○痘瘡治方ノ勘文○疫病流行年紀

醫事制度

女醫博士○醫師○醫生教習

參考書籍

第四章 平安朝ノ醫學

平安朝時代

大同類聚方

出雲廣貞○大同類聚方流布本○其種類

金蘭方

菅原岑嗣○金蘭方ノ流布本

醫心方

丹波康賴○醫心方ノ刊本○醫心方ニ引用セル唐醫書

解剖學

支那傳來ノ内景況○内景圖

生理學

病理學

支那醫書ノ說○佛典ノ說

内科

體療○著名ノ醫家及ビ著述○寛平年間ノ現在書目○基礎學ト臨床科○延喜式○丹波雅忠○治療學○佛教ト治療法○讀經祈禱

外科

創腫○治瘡記○醫心方中ノ創腫

婦人科

體療科中ノ婦人門○助産○女醫○醫心方中ノ産科○妊娠○娩産○産圖

兒科

哺育○少小科○醫心方中ノ兒科

耳科

耳科○醫心方中ノ耳科

鍼灸科

鍼術ノ輸入○鍼科専門○鍼博士○鍼術ノ方法○孔穴○灸法

眼科

眼科○醫心方中ノ眼科

口齒科

口齒科○丹波兼康

按摩科

按摩法○導引○腹取○足力

藥物科

藥獵○藥園師○藥園生○本草○藥經太素○和氣廣世○深根輔仁○本草和名○新撰字鏡和名鈔延喜式ノ本草○

醫心方中ノ本草○康賴本草○藥物ノ應用○合藥法○藥舛ノ量

養生科

鎮魂○攝養要訣○物部廣泉○醫心方ノ養生科○房内○食禁○養生ノ方○長生療養方○服石

咒禁科

和名鈔中ノ病名

和名類聚鈔中ノ病名

醫心方中ノ病名

疫病

痘瘡○麻疹○咳逆○福來病○羊病○錢病○赤痢○疫疾

醫書目錄

參考書籍

第五章 鎌倉時代ノ醫學

鎌倉時代

宋醫學ノ輸入

僧侶及ビ醫學

僧侶ト醫學○僧醫

頓醫抄及ビ萬安方

梶原性全

解剖學及ビ生理學

臟腑ノ位置○臟腑ノ官能

病理學

疾病ノ原因○五運六氣ノ說○療法ノ主義○佛教ノ影響

内科

局方ノ學○佛教ノ影響○五臟和合○遣除鬼魅○灸治○湯治○冷水灌漑○禁好物

外科

外科ノ稱呼○外科ノ治術

眼・口・耳・科

小兒科

婦人科
療病院

療病院○桑谷療病所○釋忍性

疫病

痘瘡○麻疹○三日病○內竹房○咳病○夷病○入海病○二禁○へナモ○堅根○押領使○疫疾○癩病

疾病ノ名目

醫事制度

醫書目錄

參考書籍

第六章 室町時代ノ醫學

室町時代

明醫方ノ輸入

竹田昌慶○坂淨運○月湖○吉田宗桂○金持重弘○和氣明親

此期ノ醫學

病理學○治療法○局方ノ學○此期醫學ノ特徴○坂士佛○李・朱醫學ノ勃興○田代三喜

福田方

五體身分集

外科

金創醫○永井流金創治術

婦人科

安藝守定○阿佐井宗瑞

眼科

目醫○馬島清眼僧都○支那眼科ノ梗概○五輪八廓○五行配當○五行生尅○支那眼科ノ治方○馬島眼科

兒科

疫病

痘瘡○麻疹○咳病○百日咳○三日病○口痺○疫疾○黴毒

醫事制度

醫書目錄

參考書籍

第七章 安土・桃山時代ノ醫學

安土・桃山時代

金・元醫學ノ輸入

金・元醫學○劉守眞○張子和○李東垣○朱丹溪○李・朱醫學ノ勃興○曲直瀨道三

此期ノ醫學

病理學○外感○內傷○相火○鬱○濕熱○佛教ノ影響○儒教ノ影響○性理ノ說

本道（内科）

外科 啓迪集○道三流○曲直瀨道三ノ著述○仲景ノ醫方○永田德本○德本ノ醫說○德本ノ治方○德本ノ著述

傷科○金創醫○鷹取流ノ外科○外療新明集○外療細準○外科ノ疾病○人神○瘡腫ノ治方○藥治○針灸○水治○
祭治○金創ノ治方

金創醫

眼科

山口流眼科○橘本流眼科○穗積流眼科○酣韶流眼科○南變流眼科

婦人科

啓迪集中ノ婦人方○宗鑑婦人方○南條宗艦○半井氏婦人方○半井驢庵○助産ノ方○中條流産科○中條帶刀○
吉益半笑齋○板坂大膳亮

兒科

岡家重○近藤桂安○遐齡小兒方○小兒護養○小兒病ノ診法○小兒ノ疾病

老人科

老人ノ生理○老人ノ疾病

鍼灸科

鍼科専門醫○入江頼明○吉田意休○意齋流打鍼○御菌意齋○夢分齋

口中科

兼康氏○親康氏○兼康口中科○親康口中科

耳鼻科

藥物科

氣味○七情○七方○十二劑○藥品修製○調劑

西洋醫學ノ輸入

南蠻來朝○耶蘇教ノ傳來○最初ノ西洋醫家○南蠻寺○南變流醫方○液體病理學

南蠻流外科

慶友○澤野忠庵○半田順庵○西吉兵衛○杉本忠惠○吉田安齋○栗崎道喜○瘡瘍○創傷

施藥院

施藥院全宗○施藥院宗伯

疫病

麻疹○痘瘡○疫病

醫書目錄

參考書籍

第八章 江戸時代ノ醫學

江戸時代

前期（徳川氏初世）紀

本道（内科）

李・朱醫方（後世家）

道三ノ後繼者○曲直瀨玄朔○玄朔ノ醫說○玄朔ノ著書○秦宗巴○岡本玄治○野間玄琢○山脇玄心○井關玄說
○井上玄徹○道三學派中ノ一派○長澤道壽○中山三柳○古林見貞

劉醫方（後世家別派）

陰陽五行論○運氣論○臟腑經絡配當論○饗庭東庵○林市之進○味岡三伯○井原道闕○淺井周伯○小川朔庵○
岡本一抱○堀元厚○天人合一論

易醫論

古醫方

名古屋玄醫○玄醫ノ醫說○喩嘉言

外科

和蘭流外科

和蘭人來朝○和蘭醫方○和蘭流外科○檜林流外科○檜林鎮山○吉田流外科○吉田自庵○西流外科○西玄甫○
栗崎流外科○栗崎正羽○村山流外科○村山自伯○桂川流外科○桂川甫筑○嵐山甫安○カスパー流外科○瘡傷
ノ治法○創傷ノ治方

眼科

眼目明鑑○眼病ノ種類○眼目精要○醫方問餘・眼科

兒科

吉田機庵○人見玄德○山田正方○太田宗勝○村上等詮○山科長安○山添宗積

婦人科

口中科

鍼灸科

杉山和一○經絡孔穴○補瀉迎隨○鍼ノ手法○撚鍼○打鍼○管鍼○灸法

本草科

貝原益軒○稻生若水

藥物科

藥性氣味陰陽○六陳八新○引經報使○相惡相反○湯散丸○修治ノ法

醫史學

黒川道祐○本朝醫考

醫師

朝廷醫官○幕府醫員○民間醫師○醫者剃髮

中期（徳川氏中世）紀

古醫方

後藤良山

一氣留滯論

後藤流醫方

儒醫一本論

儒醫○香川修庵

萬病一毒論

吉益東洞○吉益流又一毒家○村井琴山○岑少翁○中西深齋

一毒論ノ反對者

後藤慕庵○望月三英○畑黃山

氣血水論

吉益南涯

後世家

香月牛山

折衷派（考證學派）

考證學○望月三英○山田圖南○福井楓亭

和方家

森共之○三宅意安

產科

賀川子玄○產論○賀川子啓○同玄吾○產論翼

婦人科

小兒科

口中科

咽喉科

耳科

鼻科

眼科

馬島流眼科○其他ノ眼科専門家○銀海試要

法醫學科

無冤錄○洗冤錄○無冤錄述

藥物科

一本堂藥選○非藥選○藥徵○氣血水藥徵

本草科

松岡恕庵○阿部友之進○丹羽正伯○野呂元丈

鍼科

御菌中渠○鍼科復古

診科

望診

問診

聞診及ビ嗅診

切診（脉學）

腹診

瀨丘長珪○診極圖說

視背及ビ手足看法

西洋醫學ノ輸入

蘭學創始

新井白石○青木昆陽○前野蘭化

小塚原腑分

解體新書

杉田玄白○中川淳庵○桂川甫周

解剖學

山脇東洋○藏志○解屍新書○解體編

和蘭流外科

吉雄流外科○吉雄耕牛○西流外科○西玄哲○桂川流外科○桂川甫三

治療法

吐法

奧村南山○永富獨嘯庵○吐方考○吐法篇○惠美三白

刺絡

山脇東門○垣本鍼源○荻野元凱○刺絡編

灸法

溫泉

溫泉○人工溫泉

醫學教育

躋壽館○醫學院○畑黃山

養生所

小川笙船

後期（德川氏季世）紀

此期ノ醫學

古醫方

中神琴溪○攻補不異○宇津木昆臺○古訓醫傳

折衷派（考證學派）

多紀元孝○多紀元德○多紀桂山○多紀元胤○多紀元堅○和田東郭

漢・蘭折衷派

山脇東洋○永富獨嘯庵○柚木太淳○華岡青洲○本間玄調

外科

華岡青洲○華岡流外科○麻醉法○本間棗軒○瘍科秘錄

眼科

柚木太淳○衣關順庵○山田大圓○眼目明辨○跟科錦囊○地理的病理學○本庄普一○上田公鼎

產科

賀川流產科

片倉鶴陵○奧劣齋○賀川蘭齋○賀川蘭臺○賀川蘭阜○賀川南龍○水原三折○產育全書○鉗子○立野龍貞○包頭器○探頷器○纏頭絹○整橫紐○無鉤術

蛭田流產科

蛭田玄仙○田子產則全書○孕家遵生

兒科

片倉鶴陵○高野高全○羽佐間宗玄○岡了允

痘科

戴曼公○池田錦橋○池田京水○池田霧溪

種痘法

李仁山○種痘心法○緒方春朔○種痘必順辨

精神病科

土田獻○喜多村鼎

黴毒科

按摩科

導引○按摩○推挈法

鍼科

石坂宗哲○橫刺法

診科

舌診

舌胎圖說○腹舌圖解

切診（脉學）

腹診

腹證奇覽○診病奇佶

藥物科

藥治通義

本草科

小野蘭山○本草綱目啓蒙

養生科

易醫論

和方家（古醫道）

太田見龍○森川宗圓○松川鶴麿○武藤直記○佐藤方定○花野井有年○權田直助

西洋醫學ノ發達

宇田川玄隨○大槻玄澤○宇田川玄眞○山村才助○橋本宗吉○佐々木仲澤○小石元俊○小石元瑞○海上隨鷗○

小森桃塙○藤林普山○シーボルト○臨床實驗○坪井誠軒○箕作阮甫○杉山成卿○蘭醫方禁制○關醫方採用

物理學

青地林宗○氣海觀瀾○川本幸民○廣瀨元恭

化學

宇田田川榕菴○舍密開宗

解剖學

解體瑣言○重訂解體新書○醫範提綱○星野ノ木骨○星野良悅○各務ノ木骨○解體則○解體發蒙○導窾私錄○

內景備覽○解剖社

生理學

醫原樞要○高野長英○人身窮理○生理發蒙

病理學

病學通論

診斷學

診候大概○察病龜鑑○聽胸器○西醫脈鑑

內科

內科選要○蘭方內科○吉田長淑○病因精義○醫療正始○扶氏經驗遺訓○シーボルト來朝○伊東玄朴○竹內玄

同

外科

瘍醫新書○瘍科新選○戶塚靜海○佐藤泰然

眼科

眼科新書○實驗的眼科○土生玄碩○高良齋○ボードイン

產科

詞倫產科書○婦人病論○足立長雋

婦人科

婦人病論○婦嬰新說

小兒科

小兒諸病鑿法治法全書○幼幼精義○堀内素堂○小兒全書

整骨科

吉原元棟○正骨要訣○二宮獻○正骨範○各務文獻○整骨新書

藥物科

和蘭藥鏡○遠西醫方名物考○竄篤兒藥性論○林洞海○濟生三方○七新藥

植物學

ケムフェル○トウムベリー○シーボルト○伊藤圭介○宇田川榕菴○植學啓源○飯沼慾齋○皇朝草木圖說

軍陣醫學

砦草○原南陽○軍陣備要救急摘要○銃創瑣言○三兵養生論

衛生科

治療法

刺絡

角法

蜚鍼

發泡打膿法

吐法

吐方撮要○吐方論

灌腸

坐藥

導尿

皮下注射法

灌水法

浴法

藥浴○坐浴○蒸氣浴○熱砂浴

溫泉

溫泉小言○溫泉論○溫泉辨

電氣療法

看護法

種痘法

種痘奇法○疫苗輸入○檜林宗建○中川五郎治

醫學教育

醫學館○諸藩學校○順正書院○新宮涼庭○西洋醫學所○緒方洪庵○精得館○ボムベ○松本良順

醫史學

疫病

虎列刺○麻疹○痘瘡○百斯杜○鍋冠○三日麻疹○風邪○脚氣○腸窒扶斯○小兒暴瀉○痢疾○流行黃疸

醫人道義學

竹中通庵○醫病兩鑑○醫病問答

醫書目錄

參考書籍

第九章 明治時代ノ醫學

明治時代

西洋醫學ノ輸入

醫學校兼病院○ウイリス○醫道改正御用掛○大學東校○長崎醫學校○大阪病院○皇・漢醫道御用掛○東京醫學校○東京大學醫學部○帝國大學醫科大學

解剖學

生理學

藥物學

病理學

內科

外科

眼科

婦人科及產科

小兒科

耳鼻咽喉科

皮膚病科及黴毒科

衛生學

黴菌學

精神病科

法醫學

軍陣醫學（軍隊衛生・軍陣外科）

齒科

參考書籍

第十章 疾病史

傳染病

腸室扶斯

發疹室扶斯

虎列刺

赤痢

實布埤里亞

回歸熱

百斯杜

痘瘡
假痘
麻疹
風疹
猩紅熱
心臟病
心臟瓣膜病
胸絞症
呼吸器病
百日咳
喘息
肺結核
肋膜炎
胸水
消化器病
食道狹窄
道食痙攣
胃加答兒
鼓脹及 γ 腹水
胃擴張
腸加答兒
霍亂(特發性虎列刺)
腹膜炎
十二指腸蟲病
腸內寄生蟲
泌尿器病
腎臟病
膀胱病
神經系病
腦出血
癩癩
瘵病(強直)
歇私的里
昆剝昆埕里
精神病
新陳代謝病
糖尿病
花柳病
梅毒
膿淋(淋疾)
皮膚病
疥癬

汗證
爾他疾病
恙蟲病
狂犬傷
鼠毒
鎌鼬
疾病ノ類別
參考書籍

附錄

日本醫事年表

太古時代
奈良朝以前時代
奈良朝時代
平安朝時代
鎌倉時代
室町時代
安土・桃山時代
江戸時代
明治時代

索引

日本醫學史 目次 終

日本醫學史

第一章 太古ノ醫學

有史以前ノ醫學

我が日本國ノ有史以前ノ時代ノ事ニ關シテハ、近時殊ニ人類學者ノ研究ニヨリテ知り得タルトコロ少ナカラズ。當時ノ住民ノ遺跡・遺物等ニ關スル研究モ漸次精緻ノ域ニ達シ^①^②、貝塚人種ニ齟齬ノ存セルコトガ發見セラレ、或ハソノ下腿骨ニ梅毒性變化ノ存在セルコトヲ認メタリトノ報告アリ^③^④。西洋諸家ノ所說ニ依ルモ、有史以前ノ時代ノ人骨ニツキテ、同ジク、骨折・關節炎、及ビ骨質ノ病理的變化等ヲ認メ得タリト言フ^⑤。爾他ノ病症ニツキテハ固ヨリ、形跡ノ徵スベキモノ無シト雖モ、人類ガ外圍ノ自然界ニ接觸スルニヨリテ當然、招致スベキ外科的損傷ヲ以テ第一ノ疾患トシ、次グニ娩産ノ障礙ヲ以テシ、又嗣グニ身體内臟ノ加答兒・炎症等ヲ以テセルコトハ、疑ヲ容ルベカラザルコトナリ。而シテ當時ノ人類ガ有セルトコロノ治療の本能ハ、例之熱アレバ冷水ニ浸シ、皮膚ノ創傷ハハイルインスチンクト唾ニテ嘗メ、痲麻質斯性ノ苦痛アルトキハソノ體ヲ日光ニ暴露シ、胃不和アレバ草ヲ嚙ミテ嘔吐ヲ起ス等、コレヲ動物ノ治療の本能ニ比シテ一步モ優サルトコロナカリシナラン。コノ時ニ方リテ、醫師ハスナハチ同時ニ藥品ニシテ病者自己ハ實ニ醫師ト藥品トヲ兼ネタルモノナリシナリ。

醫學上ノ太古時代

史ヲ案ズルニ、太古神世七代ノ頃、コノ土ニハ既ニ久シク土人ノ住居セルモノアリ、新ニ外邦ヨリ來レル人民モ處々ニ居住シテ、各々ソノ地ヲ耕シ、既ニ稻穀ヲ種ウルコトヲ知レル外、既ニ木造ノ宮殿アリ、布帛又ハ絹繩ノ衣服アリ、銅・鐵若クハ石屬ヲ用ヒテ造レル刀劍アリ、弓矢アリ、紡織ノ技アリ、漁獲ノ法モ行ハレ、舟車ノ具モ略ボ備ハリ、飲食ノ具アリ、烹炙ノ法アリ、食料トシテ鳥獸魚介ノ肉ヨリ穀菜ニ至ルマデヲ用ヒ、國民ハ既ニ生活ノ道ヲ圖リ、歌謠アリテ後世文藝ノ始ヲナセリ。スナハチソノ文化ノ程度ハ所謂石器時代ヲ過ギテ既ニ金屬時代ニ入り、而シテソノ黃銅時代ヲ越テ鐵時代ニ移リシ後ニシテ、人類ノ原始ヲ距ルコト既ニ甚ダ遠カリキ^⑥^⑦。蓋シ原始ノ人類ニアリテハ創傷及ビ疾病アルモ、之ヲ治療スルハ一ニソノ本能ニ依リ、叡智ニ基ヅキテ之ヲ工夫スルコトヲ知ラズ、人智更ニ進ミテ、事物ノ經過ヲ觀察シ、ソノ原因ヲ尋究スルニ至リテハ、疾病ノ發生ニモ一定ノ因由ヲ附シ、コレヲ治療スルニモ方則ヲ設クルヲ見ル。コレ原始醫學ノ歷史上、各國ソノ轍ヲ同ジクスルトコロナリ。我が神世七代ノ頃ハ、文化ノ程度、既ニコノ期ニ達セルコトハ上ニモ言ヘルガ如クニシテ、ソノ治病ノ術ガ動物的治療本能以上ニ進ミ居リシコトハ之ヲ推知スルコトヲ得ベシ。伊邪那美神ガ火神軻遇突智ヲ生マントシタマヒシ時ニ悶

熱懊惱、因リテ吐ヲ爲シ、遂ニ焦カレテ死ス』トアリエラー「ブクマークが定義されていません。コレ實ニ疾病ノ史籍ニ見エタル始ナリ。而シテ大穴牟遲神ノ火傷シタマヒシトキ、神皇產靈神コレニ治療ヲ施シタマヒ、伊邪那岐神ガ桃ニ詔シテ『蘆原中國ノアラユル顯見青人草ノ苦瀨ニオチテ苦シムトキ助ケテヨ』トノタマヒシト傳フルガ如キ零碎瑣談ト雖モ、亦以テ神世七代ノ頃ニ既ニ一定ノ醫方アリ、藥品アリ、又醫師アリテ治病ヲ司ドリシコトヲ證スルニ足ルベシ。然レドモ國史上ニソノ事跡ノ明記セラレタルハ稍々後ノ代ニアリテ大穴牟遲神・少名毘古那神ノ二柱ノ神ニ始マルナリ。

醫藥ノ鼻祖

天照大神ノ弟君ニ素盞鳴尊トイフガマシマス。コノ素盞鳴尊六世ノ御孫ヲ大穴牟遲神トマフス、最モ武略アリ、高皇產靈神ノ御子、少名毘古那神トカヲ戮セテ天下ヲ經營シタマヒ、又蒼生ノタメニ病ヲ療スルノ方ヲ定メ、鳥獸昆蟲ノ災異ヲ攘ハンガ爲ニ禁厭ノ法ヲ定メタマヒシト傳ヘラル^⑦^⑧。故ニ歴史家或ハコノ兩神ヲ以テ我が邦醫藥ノ鼻祖ナリトセリ。

大穴牟遲神、一名ヲ大國主神、大國魂神、大物主神トイフ、天下ヲ伏セテ多ク疆土ヲ拓クノ義ナリ、又顯國玉神、國作大神ト言フハソノ國土ヲ經營セシ功績ヲ稱スルナリ、一ニ葦原色許男神トイフハソノ勇猛ヲ歎美シ、八千矛神トイフハソノ武威ヲ稱揚スルナリ。大穴牟遲ハ一ニ大巳貴（日本書紀・古語拾遺）、大汝（万葉集）、大穴道（万葉集）、於保奈牟知（万葉集）、大奈牟智神（姓氏錄）、大名持（三代實錄・延喜式）ト書ス。「オホナムヂ」ト讀ムベシ^⑨、一説ニ言フ、素盞鳴尊、櫛名田比賣ニ婚シテ大穴牟遲命ヲ生ミタマフト。本居宣長曰ク『書紀本書に須佐之男命、櫛名田比賣に御合坐^{ミアヒ}て生ミ兒大巳貴命』とあり、此は凡て上代には遠祖までをかけて、みな意夜と云ひ、子孫末々までをかけてみな古と云へれば、此も須佐之男命の御子孫と云ふ意にて御子と申傳へつるより混^{マシ}傳なるべし』ト。日本書紀ニモ一書ニハ『鳥篠五世孫、即大國主神』『素盞鳴尊所生兒之六世孫、是日大巳貴命』トアリ、左レバ大穴牟遲神ヲ以テ素盞鳴尊六世ノ孫トスルヲ正シトスベシ。

大穴牟遲神國ヲ平ゲテ出雲國御大之御前ニ到リ且飲食セントシタマフ、コノ時海上忽チ人ノ聲アリ、乃チ驚テ之ヨ求ムルニ見ユル所ナシ、頃刻ニシテ一箇ノ小男アリ、白斂ノ皮ヲ以テ舟ヲ作り鶴鷄羽ヲ以テ衣トナシ、潮水ニ隨ヒテ浮ビ到ル、大穴牟遲神即チ取テ掌中ニ置テ之ヲ翫ビタマヒシニ、則チ跳リテソノ頬ヲ齧ム、乃チソノ物色ヲ怪シミ之レヲ天神ニ白フス、高皇產靈神（一説ニ神皇產靈神）之ヲ聞テ曰ク『吾ガ産メル兒スベテ一千五百座アリ、其中ニ一兒最惡ニシテ教養ニ從ハズ、指間ヨリ漏レ落チタリ、必ズ彼ナラン、宜シク愛養スベシ』ト、コレ即チ少名毘古那神ナリ。コレヨリ大穴牟遲神・少名毘古那神ト相併ビテ國土ヲ經營セシガ、後ニ至リテ少名毘古那神ハ常世國ニ渡リタマヒシト言フ、常世トハ海外遼遠ノ義ナリ。少名毘古那神、一ニ少彦名ト書ス、形體ノ短小ナルヲ指セル稱呼ナリ、毘ノ字濁音ナリ、「スクナビコナ」ト讀ムベシ。^⑩平田篤胤ノ説^⑪ニ依レバ、世ニ大黒・惠美須ノ像ト言フモノアリテ戸々ニ祭レルヲ見ル、コノ二柱ノ神ハ大穴牟遲・少名毘古那神ニ外ナラザルベシ。大穴牟遲ノ一名ヲ大國主神ト言フニヨリ、大國主ノ大國ヲ字音ニテ「ダイコク」ト讀ミシモノコレヲ大黒ト書クハ佛書ニ摩訶伽羅ト言ヘル語ヲ翻譯シタルニテ、摩訶伽羅天神ハ勇烈ナル軍神ナリト言フニヨリテ之ヲ大穴牟遲神ニ附會セルナラン。惠比須ト言フハ蛭子神、事代主神、ナリトノ説アレドモ、コノ内ニハ少名毘古那神ヲモ混ゼルナラン、「エビス」ト言フハ何ニ依ラズ事物ノ常ニ違ヘルコトヲ指スモノニテ、少名毘古那神ガ身體ノ殊ニ矮小ナリシニヨリ、之ヲ惠美須ト唱ヘシモノカ。

然レドモ大穴牟遲神・少名毘古那神兩神ノ醫方ニ關シテノ事跡ハ日本書紀ニ『夫大已貴命與少彥名命一戮レ力一
レ心、經ニ營天下一、復爲ニ顯見蒼生及畜產一、則定ニ其療病方一、又爲レ攘ニ鳥獸昆蟲之災異一、則定ニ其禁厭之法一、是
以百姓至レ今咸蒙ニ恩賴一』トアルノ他、僅カニ古事記ニ大穴牟遲神ガ稻羽ノ白菟ノ負傷セルヲ療治シクマヒシコト
(後ニ出ヅ)ヲ傳フルノミ。故ニ大穴牟遲・少名毘古那ノ兩神ガ定メタマヒタル醫方ノ如何ナルヤハ固ヨリ之ヲ詳
ニスルニ由ナシ、思フニコノ兩神ハ當時既ニ久シク世ニ行ハレタル療病ノ方ヲ集メテ以テ醫方ノ則ヲ立テタマヒタ
ルモノナラン。

太古時代ノ醫學

今日吾人ガ醫學ト名ヅクルモノハ上古及ビ中古ノ時代ニ用ヒラレタル同一ノ文字トハソノ意義ヲ異ニシ、輒近ノ
醫學ハ人類ノ成立・構造・成分・動作、及ビソノ動物界ニ於ケル地位等ニツキテ精査研究シ、又進ミテソノ諸般ノ
障碍(疾病)ノ本態・原因、并ニソノ轉歸ヲ討求シ、ソノ極アラユル介補品ヲ用ヒテ之ヲ治療スルトコロノ方則ヲ
立ツルトコロノ學科ナリ。サレバ假ニ醫學ヲ以テ、コレヲ一個ノ家屋ニ比スレバ、治療法ハソノ屋蓋ニ匹當スルモ
ノニシテ治療ヲ講ズルニハ病理ヲ究メザルベカラズ、病理ヲ究ムルニハ先ヅ解剖學及ビ生理學ノ知識ヲ要スルコト
固ヨリ論ヲ俟タズ。然レドモ醫學ノ歴史ハ、全然反對ノ現象ヲ吾人ニ示シ、今日吾人ガ醫學ノ終節ナリトスルトコ
ロノ治療法ハ却テ率先シテ我ガ醫學ノ發端ヲナシタリ。蓋シ人類文化ノ歴史ヲ案ズルニ、アラユル學問ハソノ初ヨ
リ知識ヲ渴望シテ人ノ之ヲ興セシモノニアラズ、全ク自然ノ必需ニ應ジテ始メテソノ基本ヲ作りシモノニシテ、有
史以前ノ時代ニシテ人ノ尙ホ疾病ノ何物タルヤヲ知ラズ、又藥物ノ何レニ存スルヤヲ曉ラザルノ前ニ方リテモ、既
ニ早ク病苦ヲ輕快スベキ焦眉ノ要求アリ、醫學ノ發端タル治療法ハコノ自然ノ要求ニ應ジテ起レルナリ。太古時代
ニアリテハ、人智既ニ進ミテ、ソノ治療法ハ既ニ動物的治療本能ノ範圍ヲ脱シ、既ニ醫方アリ、醫士アリシコト前
段ニ述ベタル如クナレバ、タトヒ原始的ノ治療法ト雖モ、尙ホ且ツ疾病ノ知識ヲ要シ、依リテ病理學ノ萌芽ハ、コ
コニ顯ハレタリ。解剖學及ビ生理學ニツキテハ、僅カニ身體ノ外形ニ一定ノ名目ヲ附シ、靈魂アリテ肉體ヲ支配ス
ルコトヲ信ゼルニ過ギズ。實ニ大部ハ治療法ニシテ、コレニ病理學ノ初步ヲ加へ、更ニ解剖學及ビ生理學ノ萌芽ヲ
交へタルモノ、コレ我ガ太古時代ニ於ケル醫學ノ全體ナリ。

太古時代ノ病理學

太古渾沌ノ時代ニアリテ、人々ハ社會萬般ノ現象ハ悉クコレ神靈ノ所爲ニ出ヅルモノナリト信ジ、從テ疾病ノ如
キモ之ヲ神靈ノ所爲ニ歸セシコトハ世界中何レノ人種ノ歴史ニアリテモ皆同ジク然リトス。我ガ太古時代ニアリテ
モ『人ハサラナリ、天モ地モ、ミナ神ノ靈ニヨリテ成レルモノナレバ、天地ノ間ナル吉事モ凶事モ、スベテ神ノ意
ナリ現人ノ顯ニ行フ事(顯露之事)ノ外ニ幽事(神事)アリ、顯ハニハ目ニモ見エズ、誰爲ストモナク、神ノ爲シ
給フ業ナリ』エラー一ブックマークが定義されていません。ト信ゼルガ故ニ疾病モ神ノ心ニ由リテ起ルモノナリトセ
ルナリ。古事記ニ天照大神ガ素盞鳴尊ノ無狀ヲ怒リテ天石屋戸ニ隠レタマヒシ時ノ事ヲ記スルノ條ニ曰ク『於是、

天照大神見畏、閉天石屋戸而刺許母理坐也、爾高天原皆暗、葦原中國悉闇、因此而常夜往、於是萬神之聲者狹蠅那須皆滿、萬妖悉發、同書水垣宮ノ段ニ曰ク『此天皇之御世、役病多起、人民死、爲盡、爾天皇愁歎而、坐三神牀^一之夜、大物主大神、顯^二於御夢^一曰、是者我之御心、故以^三意富多多泥古^二而、令^レ祭^二我御前^一者、神氣不^レ起、國安平』、又玉垣宮ノ段ニ曰ク『布斗摩邇邇占相而求^三何神之心^一、爾崇出雲太神之御心也』日本書紀卷九、氣長足姬尊ノ條ニ曰ク『時皇后傷^下天皇不^レ從^三神教^二而早崩上、以爲、知^三所崇之神^一、欲^レ求^三財寶國^一、云々』、『既而神有誨曰、和魂服^二玉身^一而守^三壽命^一、荒魂爲^二矢鋒^一而導^二師船^一、云々』、コレ皆疾病ガ神ノ意ニヨリテ起ルコトヲ言フナリ。

疾病ハ神ノ意ニ因ル、何神ニテモ此方ヨリ犯スコトアレバ崇リテ病マスルナリ、故ニ神氣ノ稱アリ、神ノ崇リト言フノ意義ナリ、即チコノ場合ニアリテハ『疾病ハ神ノ罰ナリ』ト信ゼルナリ、後ノ世ニ物氣ノ稱アルハ、死人ニマレ、又生人ニマレ、人ノ崇リヲ爲スヲ言フモノナレドモ、コレモ崇リヲナスハ神ナレバ、神氣ト同ジ意義ニテ古言ナリトイフ説アリ^⑩。サレバ當時ノ人ハ生キタル神(又ハ人)ノ靈ノミナラズ、死シタル人ノ靈モ亦崇リヲナシテ病ヲ起サシムルモノナリト思ヘルナリ。

神ヲ犯シテ病ヲ得ルノ他ニ、煩神、八十禍津日神、大禍津日神等ノ特殊ナル神(「荒ブル神」)アリテソノ神ノ暴戾ヨリ病ヲ生ズルコトアリトセラレタリ。コノ場合ニアリテハ『疾病ハ災害ナリ』トノ意義ヲ有セリ。日本書紀神代上卷ニ『次生^三素盞鳴尊^一、此神有^三勇悍以安忍^一、且常以^三哭泣^二爲^レ行、故令^三國內人民^一多以夭折』、『一書曰、次生^三素盞鳴尊^一、此神性惡、常好^三哭患^一、國民多夭、青山爲^レ枯』又同書卷三神日本磐余彥天皇ノ條ニ『天皇獨與^二皇子手研耳命^一、帥^レ軍而進、至^三熊野荒坂津^一、時神吐^三毒氣^一人物咸瘁』トアルニテ之ヲ證スベシ。

コノ如ク、疾病ノ發生ヲ以テ之ヲ神ノ所爲ニ歸スルハ、希臘ノ太古醫學史ニ、疾ハ魔(Dämonen)ノ所爲ニシテ、魔ハ元トコレ神ニ出ヅ、コレニ善ト惡トアリテ、一ハ病ヲ起シ、一ハ病ヲ治スト言フニ類シ。支那ノ古書ニ、疫神・厲鬼・邪鬼・瘧鬼等ノ説(老子ニ曰ク、以^レ道蒞^二天下^一、其鬼不^レ神、非^三其鬼不^レ神、其神不^レ傷^レ人ト)アルニ似タリ。

太古醫學ノ研究ニハ、歷史上ノ事實ニ依ルノ外、猶ホコレヲ野蠻人種ノ間ニ行ハルル醫術ニ對照シ、比較研究ヲナスコトヲ裨益アリトス。試ミニ現在ノ野蠻人種ガ疾病及ビソノ發生ノ因由ヲ如何ニ解釋スルヤヲ見ルニ、病ノ多クハ惡魔ナリトシ、又之ヲ死シタル人ノ靈又ハ動物ノ靈ナリトシ、神ノ罰、神ノ意、又ハ神ノ贈物ナリト言ヒ、又ハ一個ノ動物・異物・毒物・身體一部ノ消失トナス、而シテ之ヲ發スルハ諸種ノ惡魔・動物・異物・惡風・妖術等ノ所爲ニ因ルモノトナス。コレ疾病ノ多般ニシテ、ソノ因由ノ一様ナラザルヨリ、單ニ神ノ意、若クハ罰ヲ以テ、悉ク之ヲ説明スベカラザルヲ以テナリ^⑪。(現時北海道ノ一部ニ存スルトコロノ「アイノ」人種ハ太古時代ニ我ガ本土ニ住居セル蠻民ニシテ、文字ヲ有セズ、故ニコノ人種ガ口碑ニ傳フルトコロノ疾病ニ關スル説話ハ、依リテ以テ我ガ太古ノ醫學ヲ攻究スルノ資料ニ供スベシ^⑫。

我ガ太古時代ニ於ケル病理學モ亦コノ如クニシテ、疾病ノ因由ハ神ノ靈以外ニ、尙ホ他ノ原因ニ出ヅルモノアルヲ知レリ。即チ疾病ハコノ如ク、神ノ崇リ・人ノ崇リニ因リテ起ルノ他、人ノ身ニ穢氣惡毒アルニヨリテモ病ノコレニ乘ジテ起ルコトアリ、伊邪那岐神ガ黃泉國ニテ汚穢ニ觸レテ煩神・禍津日神・素盞鳴神等ノ惡神ヲ産ミタマヒシガ如キ、コレナリ。人ノ身ニ不祥ノ行爲アリテモ病ノ起ルコトアリトセラレタリ。伊邪那岐神・伊邪那美神ガ天柱ヲ廻グリタマヒシトキ、陰神先ヅ唱ヘシコト、陰陽ノ理ニ違ヘリトテ、生レタル神(蛭兒神)ガ三歳ニ至ルモ脚

尙ホ立タザリシト言フガ如キコレナリ。コレ等ハ人ノ身ニ穢氣・惡毒アリ、若クハソノ行爲ニ正シカラザルコトアレバ、獨リソノ身ノ病ニ惱メルノミナラズシテ、ソノ毒ヲ子孫ニ傳フルモノナルコトヲ説ク。コレ後ノ世ニ所謂胎毒ニシテ、疾病ノ先天性原因ヲ認メタルナリ。

支那ノ後漢書東夷列傳ニ我が邦ノ事ヲ記スルノ條ニ『行來度レ海、令下一人不ニ櫛沐ニ不レ食レ肉、不_レ近_レ婦人一、名曰_二持衰_一、云々、如病疾遭_レ害、以爲_二持衰不_レ謹、便共殺_レ之_一』トアリ。魏志倭人傳・杜佑通典東夷上等ノ諸書ニモ同様ノ記事アリ、持衰トハ肉ヲ食ハズ、婦人ヲ近ヅケズ、喪人ノ如クナルヲ言フモノニシテ、ソノ行ヲ修ムルコトノ謹嚴ナラザルヨリ疾病ヲ起スコトヲ説クナリ。コレモ亦我が太古時代ニ行ハレタル見解ナルベシ。

神ヲ犯セルニモアラズ、「荒ブル神」ノ所爲ニモアラズ、又ソノ身ニ穢氣惡毒アルニモアラズ、偶然ノ事故ノタメニ、自然ニ疾病ヲ生ズルコトアリ、伊邪那美神ガ火神ヲ産ミタマヒシトキ、悶熱懊惱シテ嘔吐シタマヒシエラー_一ブツクマークが定義されていません。ト言フガ如キコレナリ。

物ニ傷ブラレテ疾病ヲ生ズルコトアリトセラレタリ。素盞鳴尊ガ宮殿ノ下ニ陰カニ糞ヲ入レ置ケルニ天照大神コレヲ知ラズシテ糞上ニ坐シタマヒ、ヨリテ舉體不平ナリシトイフガ如キコレナリエラー_一ブツクマークが定義されていません。コノ場合ニアリテハ毒物ニ中タリテ疾病ノ起ルコトアルノ事實ガ認メラレタルナリ。

太古時代ノ醫術

疾病ヲ以テ神ノ意ナリトシ、又ハ之ヲ邪神ノ所爲ニ歸シ、若クハソノ身ニ穢氣・惡毒アルニ因ルトスルモ、疾病_一ソノ物ハ、一個ノ物體トシテ、コノ異物ガ外界ヨリ身體内ニ入ルモノナリト信ゼルナリ。故ニ之ヲ療スルノ方法モ第一ニ

祈禱ニシテ、病アレバ乃チ占合シテ（鹿ノ肩骨ニ刻シ、樺皮ヲ以テ之ヲ燒キ、ソノ粉末ノ狀ヲ見テ之ヲ判ズルナリ）神教ヲ仰グ旨トシ、歌舞シテ祈禱シ、以テ神靈ヲ調和スルヲ常トシタリ。

禁厭 疾病ハ又一ノ災害ナリト信ジテ、禁厭ノ法モ行ハレタリ。

古事記神代上卷ニ曰ク『伊邪那岐命、云々、爾_レ拔_下所_二御佩_一之_レ十拳劔_上而、於_二後手_一布_レ伎都都、逃來、猶追、到

ニ_レ黃泉比良坂之坂本_一時、取_二其坂本桃子三個_一、待擊者、悉_レ逃返也、爾_レ伊邪那岐命、告_二桃子_一、汝_レ如_レ助_レ吾、

於_二葦原中國_一所有_レ宇都志伎青人草之、落_二苦瀨_一而、患惚時、可_レ助告、賜_二名號意富加牟豆美命_一』コレ桃ヲ用

ヒテ鬼ヲ避クルノ緣ナリ。⑫

延喜式鎮火祭祀祝詞ニ曰ク『神伊佐奈伎、伊佐奈美乃命、妹背_二柱嫁繼給氏_一、云々、麻奈弟_レ子爾、火結_二神生給氏_一、

美保止_レ被燒氏、石隱氏、云々、與_レ美津枚坂爾、至坐氏、所思_レ食久、吾_レ名_レ妖命能、所知_レ食、上津國爾、心惡_レ子乎、

生置氏、來奴止、宣氏、返坐氏、更生_レ子、水神、匏、川菜、埴山姬、四種_レ物乎、生給氏、此能、心惡_レ子乃、心

荒比曾波、水神、匏、埴山姬、川菜乎持氏、鎮奉禮止、事教_レ悟給支』コレ水・匏・川菜・埴ヲ用ヒテ、火神ノ荒

グルヲ防グベシトノ意ニテ、火傷又ハ疫熱ヲ治ムルニコノ藥方ヲ用ヒシナルベシ。エラー一ブックマークが定義されています。

職員令集解ニ曰ク、『古記云、饒速日命、降レ自レ天時、天神授ニ瑞寶十種、息津鏡一、部津鏡一、八握劍一、生玉一、足玉一、死反玉一、道反玉一、蛇比禮一、蜂比禮一、品之物比禮一、教導、若有二痛處一者、合ニ茲十寶一、謂ニ一二三四五六七八九十二云而布瑠部、由良由良布瑠部、如レ此爲レ之者、死人反生矣』、コレ後ノ世ニ

鎮魂祭トテ行ハルル事ノ本ナリ。鎮魂トハ身體ノ惱ノ出來、マタ魂ノ徳用弱クナルトキ、ソノ離遊セルヲ招キ復ヘシテ中府ニ鎮ムルノ方ナリ。⑬

鎮火・鎮魂ノ祭ノ他、新嘗・月次等ノ祭ハ主トシテ壽ノ長カランコトヲ祈リ、鎮花ノ祭ハ専ラ病ヲアラセザル祭ニシテ、病アルトキハ大祓・道饗祭ヲ行フヲ例トセリ。コレ固ヨリ祭ナレドモ、病ヲ治ムル方ニトリテハ尙ホ禁厭ナリ。

藥物内用 祈禱・禁厭、一步ヲ進メテ藥物ヲ内服スルニ至リシモ、禁厭ノ創マリシ時代ヲ距ルコト遠カラザルベシ、平田篤胤^⑭ガ太古ノ藥物ハ貼傳セシノミ、コレヲ飲ムコトハ唐土ヨリ傳ハレリト言フハ正シカラズ。但シ疾病ハ神ノ意ナリトセシ時代ナレバ、藥物ノ内用ニモセヨ、ソノ病ヲ療スルコトハ、直シキ神ノ御靈ニヨルモノトセシナリ。コノ意味ニ於テ藥物ノ内服モソノ本ハ禁厭ノ意ニ出デシコトハ明カニシテ、固ヨリ始ヨリソノ藥力的作用ヲ求メシニハアラズトイフベシ。

藥物ノ内用ハ酒ヲ以テソノ始トスベシ。素盞鳴尊ノ時既ニ酒アリ、又少名毘古那神ハ造酒ノ神ナリト傳ヘラレ、大國主神ノ酒ヲ釀シタマヒシコトモ諸書ニ見エタレバ、酒ノ古クヨリ用ヒラレタルヲ知ルベシ。コレ支那ニアリテ酒ヲ以テ藥物ノ始トナスニ相似セリ。

外科 山ニ入りテ猛獸ニ傷ケラレタルヲ療シ、或ハ誤マリテ手足ヲ傷ブリ、竹木ヲ刺セルヲ治シ、或ハ戰ヒテ創ヲ蒙ムレルヲ療スル等、外科的ノ處置ハ人類ノ創始ト共ニ必要アルモノニテ、我が太古時代ニアリテモ既ニ此等ノ方法アリ。而カモノノ處置ハ大抵藥物ヲ塗抹外敷スルニ止マリシナリ。

古事記神代上卷ニ曰ク『其八十神各有下欲レ婚ニ稻羽之八上比賣一之心上、共行ニ稻羽一時、於ニ大穴牟遲神一負レ帛爲ニ從者一、率往、於レ是到ニ氣多之前一時、裸菟伏也、爾八十神謂ニ其菟ニ云、汝將爲者浴ニ此海鹽ニ當ニ風吹ニ而伏ニ高山尾上一、故其菟從ニ八十神之教ニ而伏、爾、其鹽隨レ乾、其身皮悉風見ニ吹析一故痛苦泣伏者、最後之來大

穴牟遲神、見ニ其菟一、云々、大穴牟遲神教ニ告其菟一、今急往ニ此水門一、以レ水洗ニ汝身一、即取ニ其水門之蒲黃一、敷散而、輾ニ轉其上二者、汝身如ニ本膚一必差、故爲レ如レ教、其身如レ本也、』コレ外傷ニ蒲黃ヲ用ヒタルナリ。

又同書ニ『故爾八十神怒欲レ殺ニ大穴牟遲神一共議而、至ニ伯伎國之手間山本ニ云、赤猪在ニ此山一、故和禮共

追下者、汝待取、若不^二待取^一者、必將^レ殺^レ汝、云而、以^二火燒似^レ猪大石^一而、轉落、爾追下、取時、即於^二其石

一所^二燒箸^一而死、爾其御祖命哭患而、參^二上于天^一請^二神產巢日之命^一、時、乃遣^二蛭貝比賣與^二蛤貝比賣^一令^二作活

一、爾蛭貝比賣、岐佐宜焦而、蛤貝比賣持^レ水而、塗^二母乳汁^一者、成^二麗壯夫^一而、出遊行、』コレ火傷ヲ治スル

ニ蚶貝ヲ黑燒トナシテ塗敷スルノ法ヲ用ヒシナリ。

然レドモ稍々後ノ代ニ至リテハ塗抹外敷ノ他ニ、刺鍼ノ術モ亦行ハレシモノカ、支那ノ古醫書素問ノ異法方宜論ニ『黃帝問曰、醫之治^レ病也、一病而治各不^レ同皆愈、何也、岐伯對曰、地勢使^レ然也、故東方之域、天地之所^二始生^一也、魚鹽之地、海濱傍^レ水、其民食^レ魚嗜^レ鹹、皆安^二其處^一美^二其食^一、魚者使^二人熱^一中、鹽者勝^レ血云々、其病皆爲^二癰瘍^一、其治宜^二砭石^一、故砭石者、亦從^二東方^一來』トアリ。ソノ東方ノ域、天地ノ始メテ生ズル所ト言フハ我が邦ヲ指シタルナラム。素問ノ書ハ古人ノ名ニ假托セル僞書ナリト言フト雖モ、ソノ今ニ存スルモノハ少クトモ彼ノ邦秦・漢ノ世ノ作ナリ。秦・漢ノ代ハ我が朝ノ紀元五百年前後（西曆紀元前百五十年前後）ニ當レバ、砭石ノ術ノ既ニ我が神代ヨリ専ラ行ハレシガ、遠ク支那ニマデ傳ハリシナラムカトモ思ハルルナリ。

砭石ヲ用ヒシサマハ、傳亡ビタレバ、詳ナラズ。然レドモ扁鵲傳ニ『上古之時、醫有^二俞跗^一、治^レ病不^レ以^二湯液醴酒^一、鑿石橋引、云々』『扁鵲乃使^二弟子陽厲^一鍼砥^レ石、以取^二外三陽五會^一』『疾居^二腠理^一也、湯熨之所^レ及也、在^二血脈^一鍼石之所^レ及也』トアリ。又山海經ニ『高氏之山、有^レ石如^レ玉、可^二以爲^レ鍼^一即砭石也』トアリ。本草綱目ニモ『古者以^レ石爲^レ鍼、季世以^レ鍼代^レ石、今人又以^二瓷鍼^一刺^レ病、亦砭之遺意也』ト言ヘルヲ見レバ、石ヲ鍼トシテ用ヒ血ヲ取りシモノカ、我が太古時代ニハ既ニ鍼モアリシト言ヘバ膚肉ニ針シテ血ヲ取りシコトモアリシナラン。日本書紀、允恭天皇紀ニ『卽選^二吉日^一、跪上^二天皇之璽^一、雄朝津間稚子宿禰皇子謝

曰、我之不天、久離^二篤疾^一、不^レ能^二步行^一、且我既欲^レ除^レ病、獨非^二奏言^一、而密破^レ身治^レ病云々』トアルハ、思フニ鍼ニテ血ヲ取りシモノカ。刺鍼ノ術ヲ以テ後世朝鮮又ハ唐土ヨリ傳ハレリト言フ^⑥ハ、尙ホ檢索ヲ要スルコトナリ。

産科 何レノ邦ニアリテモ、ソノ太古ノ醫術ニテ、外科ニ次デ起リシハ産科ナリ、渾沌ノ世ニアリテ既ニ産婆ノ存セシコトニテ之ヲ證スベシ。我が太古時代ニアリテモ伊邪那那美神ノ時、既ニ産室ノ備アリ、産スル時ニハ必ズ新家ヲ建テ、コレヲ産屋ト曰フ、産畢レバ火ヲ以テ室ヲ焚キタリ。（古事記、木花開耶姬ノ條下ニ見エタリ）、助産ニ關スル技術ノ既ニ此ノ間ニ存セシコトヲ想フベシ。

兒科 木花開耶姬ノ産ニ方リ、竹刀ヲ以テソノ兒ノ臍帶ヲ截リシコトアリ、又乳母ヲ以テソノ兒ヲ養ヒシコトアリ、コレヲ兒科ノ濫觴トスベシ。

眼科・耳科 等ノ治療法ニツキテハ史籍上ニハ何等ノ記述ヲモ發見セズ。

衛生科 鎮魂ノ法アリ、魂ヲ鎮メ和ラグルコト神ニ仕フルガ如クニシテ穢サズ、傷メザルコトヲ專ラトシ、且ツ五穀ヲ多ク食シ、酒ト菜トヲ少シク取り、肉ヲ稀ニ食フテ性命ヲ養フベシトセルモノニシテ、衛生科ノ意、先ヅココニアラハレタリ。

藥物 太古ノ醫術ニアリテ、藥物トシテ應用セラレシモノハ主ニ草木ノ皮・根・果實及ビ葉ト、一二動物ノ臟器トナリシコトハ之ヲ推察スルニ難カラズ。試ミニ古事記神代卷ニ載セラレタル植物及ビ動物ノ稱呼ヲ檢スルニソノ數甚ダ多ク、植物ニテハ葛・葦・薄・比々羅木・樺・桃・赤酸醬・蘿・檜・楮・真賢木・茜・葡萄・蒲黃・海布・竹・海蓴等アリ、動物ニテハ鵝・雉・鷄・千鳥・鴨・翠鳥・鵝・鼠・蜂・蠅・白兔・猪・鷺・蛾・蟾蜍等アリ、ソ

ノ中ニテ蒲黃・桃ノ如キハ現ニ之ヲ治病ノ用ニ供セラレタルコト既ニ史ニ見エタリ(第九頁一一頁参照)、思フニソノ他ノモノモ、或ハ之ヲ藥物トシテ應用セラレタルコトアラン。

支那ノ漢ノ代、王充ガ論衡卷第八ニ『周時天下太平、越裳獻_ニ白雉_一、倭人貢_ニ翳鬯草_一』又ソノ卷十九ニ『成王之時、倭人貢_ニ暢草_一』トアリ、鬯ハ古ノ暢字ニシテ、香草ナリ、祭祀ニ酒ニ和シテ地ニ灌ゲバソノ氣ヲ高遠ニ達シテ以テ神ヲ降スノ効アリ、後ニ返魂ト名ヅクルモノナラント言フ。按ズルニ周ノ成王ノ時ハ我が邦ノ神代ノ末ニ當ル、當時コノ香草ハ我が邦ニモ行ハレタルモノカ。

佐藤方定^⑤ハ仁古太(人參)・於宇(附子)・保寶加志波(厚朴)・阿滿紀(甘草)・依毘須加良美(胡椒)・爾須那(丹砂)・伊奴方面(巴豆)・飢寶師(大黃)ノ八藥ヲ舉ゲ、コノ八藥ハ我が邦神代ヨリ既ニ存セシモノナルコトヲ詳述セリ。ソノ説ノ基ヅクトコロハ、延喜式ニ此等ノ藥物ヲ毎年貢物ニ添ヘテ奉レリ、當時コレヲ添物ト稱シテ人皇初代ヨリ仕來リノ恒例ナレバナリト言フニアリ。コノ説ハ猶ホ深ク攷フベキコトナリ。

水治法 沐浴・灌水等、單純ノ水治法ハ既ニ神世七代ノ末ノ頃ヨリ行ハレタリ、コレ身體ノ汚穢ハ疾病ノ因ヲナスモノナレバ祓除シテソノ病ヲ治セントスルノ意ニ出デタリ。出雲國風土記ニ『大神大穴持命御子、阿遲須積高日子命、御髻八握干生、晝夜哭坐之、辭不_レ通、云々、爾時其津水吸出、而御身沐浴坐、云々』トアリ。支那ノ書、兩朝平壤錄(卷四)・潛確居類書(卷十三)等ニ我が邦太古ノ風俗ヲ記スルノ條ニ『其俗信_レ巫、疾無_ニ醫藥_一、病者裸而就_ニ水濱_一、杓_レ水淋_ニ沐_一之、面_ニ四方_一、呼_ニ其神_一、誠禱即愈』ト述ベタルヲ見レバ、當時我が邦ノ俗ハ醫藥ヲ内用スルヨリモ(醫藥ナシト言フハ誤聞ナリ)、寧_レ口水治法等自然ノ治療力ヲ採リ用ヒシコトノ盛_ニナリシヲ知ルベシ。

溫泉ニ浴シテ病ヲ醫スルコトモ、大穴牟遲神・少名毘古那神ノ頃ニ始マレリ。伊豫國風土記ニ曰ク『湯郡、大穴持命、見_ニ悔耻_一、而宿奈毘古那命欲_レ活、而大分速見湯自_ニ下樋_一持度來、以_ニ宿奈毘古那命_一、浴漬者、鬻間、有活起居、然詠曰、眞鬻寐哉、踐健跡處、今在_ニ湯中石上_一、凡湯之貴奇、不_ニ神世時_一耳、於_ニ今世_一、染_ニ疹痂_一万生、爲_下除_レ病存_レ身要藥_上也』〔續日本紀ニ引クトコロニ依ル〕

灸法及ビ按摩 後世我が邦ニ行ハレタル灸法及ビ按摩等ノ治術ハ古代ノ記述ニ見エズ、或ハ唐醫方ノ輸入以後ニ之ヲ彼ヨリ我ニ傳ヘタルモノカ。

參考書籍

- ① (1) 日本石器時代の住民 醫學博士小金井良精述 東洋學藝雜誌 第二五九及二六〇號
日本石器時代人民論 理學博士坪井正五郎述 東洋學藝雜誌 第二六一・二六三及二六五號
- ② (2) 日本考古學 八木奘三郎著 明治三十六年刊行
- ③ (3) 日本石器時代ノ梅毒ニ就テ 醫學士足立文太郎述 東京醫學會雜誌 第九卷第十四及十六號
- ④ (4) Adachi, Syphilis in der Steinzeit in Japan. Archiv f. Dermatol.u. Syphilis. 1903.
- ⑤ (5) Neuburger u. Pagel, Handbuch d. Geschichte d. Medicin. Bd. I. S. 4. 1902.
- ⑥ (6) 古事記三卷 太安麿奉勅撰 和銅五年成
- ⑦ (7) 日本書紀三十卷 舍人親王及太安麿奉勅撰 養老四年成
- ⑧ (8) 古語拾遺一卷 齋部廣成撰 大同二年成
- ⑨ (9) 古事記傳 本居宣長著 天保十五年刊 卷九 第五十九葉

- ⑩ 同上 卷十二 第六葉
- ⑪ 同上 卷二十三 第二十七葉
- ⑫ 奇魂一名尙古醫典二卷 佐藤方定著 天保二年刊
- ⑬ 信友隨筆一卷 伴信友著 百万塔本
- ⑭ 志都乃石室二卷 平田篤胤著
- ⑮ 備急八藥新論三卷 後藤方定著 安政四年刊
- ⑯ 醫方正傳二卷 花野井有年著 嘉永五年刊
- ⑰ 古醫道沿革考 權田直助述 學藝志林 第八〇及八一號
- ⑱ 國史綜覽稿 文學博士重野安繹 總修
- ⑲ Max Bartels, *Die Medicin der Naturvölker*. 1893.
- ⑳ あらぬ醫事談一卷 醫學士關場不二彦著 明治二十九年刊行
- ㉑ Chamberlain, Kojiki. *Transactions of the Asiatic society of Japan*. Vol. X. Supplement. 1883.
- ㉒ Florenz, Nihongi. *Mittheil. d. deut. Gesellsch. f. Natur-u. Völkerkunde Ostasiens*. Supplement Hefte.
- ㉓ W. G. Aston, *Nihoeigi, Transactions & proceedings of the Japan society*. London. 1896.

-
- ① DOI: 10.11501/3559217 DOI: 10.11501/3559218
- ② DOI: 10.11501/936458
- ③ <https://iss.ndl.go.jp/books/R100000002-1000000016126-00>
- ④ DOI: 10.1007/BF01950317
- ⑤ <http://data.onb.ac.at/rec/AC09932399>
- ⑥ <http://kojiki.kokugakuin.ac.jp/kojiki/>
- ⑦ http://www.seisaku.bz/shoki_index.html
- ⑧ <https://miko.org/~uraki/kuon/furu/text/kogosyuu/syuu01.htm>
- ⑨ DOI: 10.11501/2556369
- ⑩ DOI: 10.11501/2556372
- ⑪ DOI: 10.11501/2556383
- ⑫ <https://ndlonline.ndl.go.jp/#/detail/R300000001-1025732840-00>
- ⑬ DOI: 10.11501/899103
- ⑭ <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100079086>
- ⑮ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00004795>
- ⑯ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00001149>
- ⑰ DOI: 10.11501/1558723 DOI: 10.11501/1558724
- ⑱ DOI: 10.11501/769360
- ⑲ <https://wellcomecollection.org/works/ev265pa3>
- ⑳ DOI: 10.11501/832947

²¹ https://religion-in-japan.univie.ac.at/k/images/2/2c/Kojiki_Chamberlain.pdf

²² https://archive.org/stream/bub_gb_RTBOAAAAAYAAJ/bub_gb_RTBOAAAAAYAAJ_djvu.txt

²³ <https://catalog.hathitrust.org/api/volumes/oclc/48959953.html>

第二章 奈良朝以前ノ醫學

崇神天皇ノ代、始メテ神ト人ト別アリテヨリ、大和ノ盛世ヲ經テ、文武天皇ノ朝ニ至ルマデノ間ヲ二分シテ、前半ヲ韓土服屬ノ世トス、文學技藝彼ノ邦ヨリ次第第二傳ハリテ、韓方ノ醫術コノ期ニ起レリ。後半ヲ佛教渡來及ビ隋・唐往來ノ世トス、韓國ノ學風ヲ改メ隋・唐ノ文藝ニ依倣シ、唐醫方始メテ起ル。又佛教ノ渡來ニヨリテ間接ニ印度ノ醫術ヲモ傳ヘタリ。左ニ先ヅソノ歴史ノ梗概ヲ擧グベシ。

韓醫方ノ輸入

我が邦人ノ高麗半島ニ往復セルコトハ既ニ神世ノ歷史上ニ散見スルトコロニシテ支那ト交通セシハ彼邦周ノ世ノ頃ニ始マルト言フ^①。左レバ我が邦ノ外國ト交通セルハ、既ニソノ端ヲ太古時代ニ發シ、爾來我が邦人ノ交通ニ關スル記事ハ支那ノ書ニ散見セリ、而カモ、コレ我が西陲一部人民ノ彼土ニ往復セシニ止マレリ。崇神天皇ノ代、任那ニ通ズルニ至リテ、外國ノ風漸ク我が邦ニ入り神功皇后新羅ヲ征服シタマヒテヨリ以來、文藝智巧ノ海外ヨリ傳輸セラレ、我が邦文北ノコレガタメニ影響ヲ受ケシコト明カナレドモ、コハ主ニ物質上、殊ニ工藝ノ術ニ止マリ、精神上ノ文化ヲ受ケシコトハ左ホド著明ナラザリキ^②。次デ應神天皇ノ時ニ及ビテ百濟ヨリ論語・千字文等ノ漢籍ヲ貢シ、少ナクトモ我が邦ノ朝廷ニ初メテ文字アリ、支那ノ學問コレニ依リテ傳ハリ、儒教モ亦コレニ伴ナフテ輸入セラレタリ。

是ヨリ先キ、孝靈天皇ノ朝、秦ノ徐福、仙藥ヲ求メテ我が邦ニ來タリ斯土ニ留マル、ソノ帶ブルトコロノモノニ百工技藝アリ、醫人モ亦ソノ中ニアリシト傳フ^③。然レドモ公ニ外國醫方ノ採用セラレタルハ允恭天皇ノ朝ニ始マル。允恭天皇ノ三年秋八月、新羅王、金波鎮漢紀武（金ハ姓、波鎮ハ官、漢紀ハ號、武ハ名ナリ）ヲ調貢大使トナシ、御調八十一艘ヲ貢進ス、コノ人深く醫方ヲ知り、天皇ノ疾ヲ治シテ効アリ、天皇之ヲ歡ビ厚ク賞シテ國ニ歸ヘシタマフ。雄略天皇ノ三年詔シテ良醫ヲ百濟ニ徵シタマフ、百濟貢スルニ高麗ノ醫德來ヲ以テス。德來徵ニ應ジテ至リ難波ニ居ル。子孫世々醫ヲ以テ業トナシ難波藥師ト稱ス。欽明天皇ノ十四年夏六月、詔シテ使ヲ百濟ニ遣ハシ、醫博士・歷博士・易博士等ヲシテ遞番ニ來朝セシメ且ツ種々ノ藥物ヲ附送セシメタマフ。翌年春正月百濟國詔ヲ奉ジテ醫博士王有陵陀・採藥師潘量豐、丁有陀ヲ貢ス。允恭天皇ノ朝、良醫ヲ彼ノ邦ニ徵シタマヒテヨリ二百年、コノ時ニ至リテ藥方ノミナラズ、醫博士・採藥師等ヲ彼ノ邦ニ求メテソノ術ヲ擴張セルニヨリテ、韓醫方益々熾ナルニイタレリ。

佛教ノ渡來

佛教ノ我が邦ニ入リシハ欽明天皇ノ代ナリ、欽明天皇ノ十三年壬申十月、百濟ノ聖明王、使ヲ遣シテ佛像・佛具・經論ヲ獻ズ。天皇群臣ニ禮拜ノ可否ヲ諮リタマフ。物部尾輿、中臣鎌子奏シテ曰ク、『國家恒ニ天神地祇ヲ祭祀ス、今蕃神ヲ禮セバ恐クハ國神ノ怒ヲ致サン』ト、天皇即チ之ヲ大臣蘇我稻目ニ附シテ試ミニ禮拜セシメタマフ。稻目悅ビテ之ヲ小墾田家ニ安置シ、又向原家ヲ淨メテ寺トナス、既ニシテ疫病行ハレ民天死スルモノ多シ、時ノ人之ヲ

稻目ガ佛ヲ奉ズルニ因ルモノトナス。乃チ有司ニ命ジテ佛像ヲ難波ノ堀江ニ棄テ、火ヲ縱チテヲ燒カシム。コレヨリ後三十四年、蘇我馬子佛教ヲ信仰シ、佛殿ヲ造リ、佛教コレヨリ滋蔓ス、馬子ハ稻目ガ子ナリ、敏達天皇ノ十四年馬子病ム。ト者曰ク、『稻目ガ祭ルトコロノ佛、崇リヲナスナリ』ト、天皇詔シテソノ佛ヲ拜シコレヲ祭ラシメタマフ、會々疫癘流行シテ民夭死スルモノ多シ。物部守屋、中臣勝海奏シテ曰ク、『先朝ヨリ以テ陛下ニ逮ブマデ、疫疾流行シ、生民將ニ絶エントス、コレ蘇我ガ佛法ヲ首唱スル故ナラン、宜シクコレヲ禁絶スベシ』ト、天皇之ニ從ヒタマフ。然レドモ佛法ハ之ヨリシテ漸次ニ興隆シ、推古天皇ノ二十二年ニハ馬子ノ疾病ノタメニ一千人ヲ度シテ僧尼トナシ、三十一年ニハ寺四十六所、僧八百十六人、尼五百六十九人ノ多キニ達シ、皇太子豐聰耳（聖德太子ト稱ス）モ亦佛法ヲ尊信タマヒ^⑦、憲法ヲ制定シテ、ソノ第二條ニ『篤信三寶^⑧、三寶者佛法僧也、則四生之終歸、万化之極宗、何世何國、不^レ嚮^⑨是法^⑩、人鮮^⑪尤惡^⑫、能教乃仕、不^レ歸^⑬三寶^⑭、何以直^レ枉』ト言フニ至リテ三寶（佛法・僧ノ三寶ヲイフ）ヲ敬フコトハ愈々ソノ勢ヲ激進シ、萬乘ノ尊キ身ヲ以テ自カラ三寶ノ奴ト稱シ給フニ至リテ、人民ハ之ヲ見テ佛陀コソ至尊ヨリモ遙ニ貴キモノナレト思ヒ、初メハ韓土神（繼體ノ朝ニ韓ヨリ佛像ヲ奉ズ、之ヲ韓土神トシテ斥ゾク）ト稱シテ崇信セザリシモココニ至リテ、神ト天皇トノ外ニ、猶ホ敬ヒ畏レザルベカラザルトコロノ佛陀ノアルコトヲ知り、敏達天皇ノ守屋ト共ニ疫疾ニ罹リタマヒシヲ見テ佛陀ノ罰ナリトシ、疫癘ニ罹レル患者ガ『焚クガ如ク、撻タルルガ如シ』ト言フニヨリテ、コレ寺像ヲ焚キ、淨尼ヲ打チタル報ナリトセリ。^⑮

儒教ハ勸善懲惡ノ點ニ於テハ佛法ト異ナルコトナキモ、過去未來ヲ説カズ、鬼神ヲ敬ヒ、祖先ヲ祭ツルコトヲ旨トセルガ故ニ、ソノ渡來セル後モ、本邦從來ノ報本ノ教ニ撞着スルトコロナク、却テ之ヲ牢固ニスルノミナリシガ佛法ハ之ニ異ナリテ、因果應報・地獄極樂ノ説ヲ主トシテ、純然タル一個ノ宗教ナリシカバ、ソノ漸次勃興セルニヨリテ、人情風俗ニ影響スルトコロモ亦至大ニシテ、飲食ニモ變化ヲ致シ、疾病ノ因由ヲ説明スルコトニモ亦一段ノ變動ヲ與ヘタリ。

敏達天皇ノ十四年六月、蘇我馬子奏シテ曰ク、『臣カ疾久シク癒エズ、三寶ノ力ニ藉ラザレバ救治シ難シ』ト、詔シテ獨リ之ヲ行ハシメ、三尼ヲ馬子ニ附シタマフ。用明天皇二年四月天皇不豫、厩戸皇子晝夜側ニ侍シ、三寶ヲ祈禱シ口ニ響ヲ絶セザリシト言フ。我ガ邦從來病アレバ神ヲ祀リテ之ヲ治スルノ風ナリシニ、ココニ至リテ佛陀ニ祈禱シテ病ヲ治スルコト行ハレ、僧侶ノ醫ヲ兼スルコト既ニ端ヲココニ發セリ。推古天皇十年冬十月百濟ノ僧勸勒來朝シ、曆書・天文・遁甲・方術等ノ書ヲ獻ズ。コノ時書生三、四人ヲ選ビテ就テ學バシム。山背臣日并立方術ヲ受ク。勸勒ハ僧侶ニシテ醫方ニ通ズルモノカ、思フニ當時コノ類ノ人多カリシナラン。

當時、佛教宗旨ノ弘マリシハ三論宗ヲ以テソノ始トシ、法相宗・成實宗・俱舍宗等相嗣テ行ハレタリ^⑯。三論宗ハ龍樹ノ中論・十二門論・提婆ノ百論ニ依リ、法相宗ハ解深密經・瑜珈論・唯識論等ニ依リ、成實宗ハ成實論ニ依リ、俱舍宗ハ俱舍論ニ依リテ立テタル宗旨ニシテ、ソノ佛典中ニ散見スルトコロノ醫說ト醫方トハ、當時ノ治術ニ採リ用ヒラレタルコト疑ナシ。是ニ於テカ、佛教ノ渡來ハ又間接ニ印度ノ醫方ヲ我ガ邦ニ傳フルノ媒介ヲナセリ。

唐醫方ノ輸入

佛教渡來ヨリ後七十餘年ニシテ、唐醫方ノ更ニ我ガ邦ニ入レルアリ。我ガ醫術ハタメニ一大影響ヲ蒙ムリタリ。推古天皇ノ十六年九月藥師惠日、倭漢直福因等ヲ唐ニ遣シテ醫ヲ學バシム。後十五年ニシテ歸朝シ、奏シテ曰ク、『唐國ハ法式備ハリテ珍シキ國ナリ、交通スベシ』ト、是ヨリ先キ欽明天皇ノ朝、吳人知聰ノ藥書、明堂圖等ノ醫書ヲ携ヘテ來朝セシコトアレドモ、唐醫方ノ興リシハ惠日・福因等ガ彼ノ邦ニ留學シテ直チニソノ術ヲ傳習シテ歸朝セシトキニ始マル。當時隋ハ既ニ亡ビテ唐之ニ代ハリ、醫書ニハ病源候論（隋）・千金方（唐）ノ如キ大著述アリ、

コノ二書ヲ中心トシテ發達セル隋・唐ノ醫學ガ、韓醫方ニ代ハリテ、當時ノ醫學ニ著明ノ影響ヲ及ボセシコトハ唐醫方興リテヨリ七十餘年ノ後ニ制定セラレタル大寶令ヲ見テ、ソノ一斑ヲ推察スベシ。

此期ノ醫學

太古時代ヨリ既ニ行ハレタル醫學ノ方術ガ支那ノ醫方（初メニハ韓土ノ媒介ニヨリ後ニハ直接ニ）ト、印度ノ醫方トノ感作ヲ受ケテ、ソノ面目ヲ一新スルニ至リシコトハ、既ニ前段ニソノ梗槩ヲ舉ゲタリ。一概ニ之ヲ論ズレバ、太古時代ノ迷信的醫學・魔術的醫方ガ、コノ期ニ及ビテ、支那人及ビ印度人ノ自然哲學的醫學ニ壓倒セラレントスルニイタレルナリ。

當時支那ノ醫家ノ說ニ依レバ『人ニ肝、心、脾、肺、腎ノ五藏アリ、ソノ肝ヨリハ謀慮出デ、心ヨリハ神明出デ、脾ヨリ五味出デ、肺ヨリハ治節出デ、腎ヨリハ技巧出ヅ、コノ五藏ハ皆陰ニシテ、五氣ニ化シテ以テ喜・怒・悲・憂・恐ヲ生ズ、五藏六府アリ、六府十二原アリ、六府ハ皆陽タリ、若シ五藏ヲ傷ブレバ、六府通ゼズ、榮衛行カズ、其人死ス』^④。又ソノ疾病ヲ説クヤ、曰ク『夫邪之生也、或生ニ於陰^一、或生ニ於陽^二、其生ニ於陽^一者、得ニ之風雨寒暑^一、其生ニ於陰^二者、得ニ之飲食、居處、陰陽、喜怒^二』^⑤ト。蓋シ人ノ疾病ヲ生ズルニハ身體内ノ原因ト、身體外ノ原因トアリ、ソノ内因ヲナスモノハ身神ノ疲勞・喜怒・悲歡・陰陽ニ氣ノ不調・榮衛ノ不通等ニシテ、外因ヲナスモノハ風・寒・暑・濕、等ナリトナセルナリ。乃チ邪氣・惡風ノ身體ヲ侵シテ病ヲ成スト言フノ説ハ、既ニ太古時代ヨリ専ラ行ハレタルコロナリシガ、ココニ至リテ支那ノ哲學的醫學ノ輸入ニ依リテ更ニ飲食・居處・喜怒及ビ外界ノ氣象的關係ノ疾病ヲ起スコトヲ認ムルニイタレルナリ。

印度ノ醫學ハ埃及ノ醫學ト同ジク、所謂僧侶醫學ニテ、由來甚ダ古シトス。ソノ疾病ノ因由ヲ説クヤ、『衆生ノ病苦ハ四大ノ不調ニ由ルモノトナス。四大トハ、地・水・火・風ヲ云フ、一年ニ春・夏・秋・冬ノ別アリ、コノ時ノ中ニ隨ヒ、飲食ニ調息シテ、腹ニ入り、消散セシムレバ衆病生ゼズ、節氣若シ變改スレバ、四大モ推移アリ、此時藥資ナケレバ必ズ病苦ヲ生ズ。病ニ四種ノ別アリ、風・熱・痰癥、及ビ總集ノ病コレナリ』^⑥トナシ、所説希臘ノ醫學ト相似タルトコロアリ。印度・希臘兩醫學ノ先後ハ未ダ遠ニ之ヲ斷ズベキニアラズト雖モ、希臘醫學ト印度醫學トノ間ニ相交通スルコトアリシハ明カナリ。左レバ佛教ノ渡來ニヨリテ、我が邦ノ建築・彫刻等ニ希臘式ヲ傳ヘタルニ均シク、コレニ依リテ不知不識ノ間ニ希臘醫方ノ我が邦ニ傳リシコトアリト想定スルモ、亦理ナキニアラズ。

醫及ビ藥物

允恭天皇紀三年ニ『秋八月、醫至自新羅^一』トアリ。醫ノ字始メテココニ現ハル。コレ新羅醫人ノ來朝ト共ニ、支那ノ稱呼ノ傳ハレルニテ、和名鈔^⑦ニ『醫、和名久須之^{クスシ}、治レ病工也』トアリ、「クスシ」ノ語ハ古クヨリ行ハレタリト見ユ。新井白石曰ク『醫の字讀でクスシ

と云ふは、奇なり、延喜式の祝詞に、奇の字讀でクスシと云ふと註せし即チ是なり、古語にクシといひ、クスシといふが如きは轉語なり、其術の奇效あるをいひしなり』^⑦

平田篤胤曰ク『クスシト云ハ、クスリシト云ウ詞ノ、リノ字ヲ略シテ、クスシト云フモノデゴザル、サテクスリシトナゼ云ナレバ、醫藥ノ業ヲ爲ル者ユエ、クスリシト云フ、丁度弓ヲ爲スル者ヲ弓師、矢ヲ爲スル者ヲ矢師ト云ト一ツコトデゴザル』^⑧ 佐藤方定曰ク『クスシと云ハ、クスリシのりの省れるにて、(佛足石歌に久須理師とあり)シハ土師、筏師杯のシに同じくて爲の意なり』^⑨ 諸家ノ説、互ニ相一致セザルトコロアリト雖モ、要スルニ「クスシ」トハ藥ル若クハ藥ス(藥ヲ働カスノ意)ノ名詞法ニ外ナラザルベシ。

藥物ノ漢字ハ欽明天皇紀十四年ニ初メテ現ハル。谷川士清曰ク『藥訓ニ久須利^{クスリ}、蓋以ニ奇驗^ニ得^レ名也、大殿祭祀詞奇護言。古語云、久須志伊波比許登、一説、草作之義、以ニ草類多^ニ得^レ名、猶二本草之稱^ニ也』^⑩。伴信友曰ク『マジナヒトテ、物ヲ構ヘテ、疾苦ヲ禁直ス、其マジナヒニ用フルモノヲ、マジモノト云フ、サテ病ヲ療ス藥食モ、イヒモテユケバ、病ヲ禁厭除^{ノゾク}コラシムル術ナガラ、其術ヲ行フヲ、クスルトイヒ、其術ニヨリテ食フ藥ヲクスリト云ヘルナリ』^⑪。平田篤胤曰ク『クスリト云詞ハ、一體貼ルコトノ古言ト見エルデゴザル、又クスリト云物ハ、貼傳ガ本デ有タルユエニ、クスリト云名ヲ令負^{オハセ}タ物デゴザル、扱ソレヲ、古ハクスリ亦、クスネトモ通ハシテ云ヒ、スベテ物ノヒツタリト、俗ニ云フクツツクト云ヤウナコトヲ云タ詞ト見エルデゴザル』^⑧。佐藤方定曰ク『病を愈す動植をクスリと云ふ原義ハ、令和の意なり、其は神を和し、人を和め、風の和、波の和などの和にて、體言になればナグシなり、病を令和るをば、動植にまれ、法術にまれ、何にても泛く、ナグシといへり』^⑨。花野井有年曰ク『クスリといへるも、和の詞の左行に轉て、ナグサン、ナグシ、ナグス、ナグセと活くなり、このナグスに、リルレの詞そはりて、ナグスリといふが本詞にて、そのナを省きて、クスリといふ詞となれるなり、ナを省く例は、なやむをやむといふが如し。』^⑩

疫病

崇神天皇ノ御世ニ、國內ニ疫病多ク起リ、死亡スルモノ大半ナラントス、ト古事記ニ見エタリ。日本書紀ニハ疫病ヲ擧ゲテ一ニ疫疾・疫疫・疫氣ト書シ、コレヲ延夜美又ハ延能夜麻比ト訓ゼリ。和名鈔^⑫ニハ『疫衣夜美、一云

度岐乃介、説文云、民皆病也』トアリ。人毎ニ病ムコト、彼ノ役ニ差サレテ立ツニ似タルヲ以テ斯ク言フ〔支那ノ書ノ釋名ニ『疫役也、言有レ鬼行レ役也』ト言フトソノ意同一ナリ〕モノニシテ、國民病ノ義ナリ。ソノ病症ノ如何ハ固ヨリ之ヲ詳ニ知ルコト能ハズト雖モ、和名鈔²⁰⁾ニ『瘡、俗云衣夜美、一云、和良波夜美』トアレバ、古代ニ疫病ト稱スルモノノ中ニハ現時ノ麻刺里亞ヲモ含ミシナラン。又龍膽ニ衣夜美久佐ノ古訓アリ、龍膽ハ疫病ヲ治スルノ藥ナリトノ義ナルニ、龍膽ハ古昔ヨリ熱痢ニ用ヒシ藥ナレバ、古代疫病ノ内ニハ現時ノ赤痢ヲモ存セシモノカ。疫病ノ流行性ニ發生スルコトヲ認識スルニ至リシハ、固ヨリ醫學的知識ノ稍々發達セルコトヲ徵スルモノナリ。而カモノノ發生ノ因由ヲ尋ヌルニ方リテハ、之ヲ神ノ氣ニ歸シ、『天皇愁歎シテ神牀ニ坐セルノ夜、大物主神、御夢ニ顯ハレテ曰ク、コハ我が心ゾ、意富多多泥古ヲモテ我ヲ祭ラシメバ神氣起ラズ國平ナラント、天皇乃チ意富多多泥古命ヲモツテ神主トナシ、御諸山ニ大物主神ヲ祭ラシム、又別ニ八十萬ノ群神ヲ祭ラシメ、天神地祇ノ社ヲ定ム、コレニヨリテ疫氣悉ク息ミ、國家安平ナリ』(古事記・日本書紀)ト言ヒ、祭祀ニヨリテ流行病ヲ治スベシトセリ。コレヨリ稍々後ノ世ニ至リテハ疫神ヲ祭ルノ説アリ、又諸國疫アルニヨリテ大祓セシメラレタル例アリ、道饗ノ祭祀ヲナサレシコトアリ。コレ等ミナ疫病アルニ方リテ神ニ問ヒ、殊ニ神ヲ祭リテ以テ疫氣ヲ去ルノ意ニ出デタルナリ。

欽明天皇ノ十三年、疫氣起リ、民夭死ス、疫ノ何症タルヤハ之ヲ詳ニスルコトヲ得ズ、コノ時、佛教初メテ渡來シ、蘇我稻目寺ヲ立テテ之ヲ禮拜ス、時ノ人疫ノ起ルハ稻目ガ蕃神ヲ奉ズルニ因リテ國神ノ怒ヲ致セシモノナリトナセリ。日本紀略ノ一條天皇長德四年七月ノ條ニ『天下衆庶煩^⑬瘡^⑭、世號^⑮之稻目瘡^⑯、又號^⑰赤瘡^⑱、無^⑲下免^⑳此病^㉑之者^㉒云々』トアリ、池田晋ハコレヲ引テ稻目瘡ハ痘瘡ナラントセリ。^㉓赤瘡瘡ハ、一ニ赤斑瘡ト稱ス、本居宜長ノ説ニ『稻目瘡ト名ヅケタルハ蘇我稻目大臣ノ事ヲ思ヒテナルベシ、書紀ノ欽明ノ御卷十三年疫氣ノオコリシコト考フベシ、赤瘡瘡ハ今ノ世ニハシカトイフ瘡』ナリトイヒ、^㉔屋代弘賢モ亦コノ時ノ疫氣ハ麻疹ナリシナラントシ、『アカモガサハハシカノ古名ナリ、痘瘡ヲモガサトイヘル故ニ痘瘡ニ似テ赤キトイフ義ナリ、稻目瘡トハ疫氣ニフレシ瘡トイヘル意ニヤアラン』ト説キタリ。^㉕兎モ角モ、コノ時ノ疫病ハ後ニアカモガサト言ハレシモノナリト記サレタルニ依リテ、麻疹ナルベシト推定シ、且ツソノ病毒ハ百濟ヨリ傳ハリシモノナラムト説クモノアリ。^㉖

敏達天皇ノ十四年、春三月ニ『屬^㉗此之時^㉘、天皇與^㉙大連^㉚、卒患^㉛於瘡^㉜、』、『又發^㉝瘡死者充^㉞盈於國^㉟、其患^㊱瘡者言、身如^㊲被^㊳燒^㊴被^㊵打^㊶摧^㊷、啼泣而死、老少竊相謂曰、是燒^㊸佛像^㊹之罪矣』(日本書紀、卷二十)トアリテ、コノ時ノ疫病ハ身體ニ瘡ヲ發シ、且ツ熱ヲ伴ナヘルモノナルコトヲ記セリ、故ニ或ハ之ヲ麻疹ナリトシ、或ハ痘瘡ナラント言フ。(日本書紀通證、卷二十五九葉ニ曰ク『松岡翁曰、此應^㊺痘瘡流行^㊻、此時世人未^㊼知^㊽痘瘡之名^㊾、故驚以爲^㊿異也、今按此本^㊿醫療本紀説^㊿、載在^㊿舊事大成經^㊿、夫痘者西戎之疾、瘡瘍之疫、故其名不^㊿古見^㊿、其症不^㊿常在^㊿、痘家諸書言、自^㊿馬援征^㊿交趾^㊿始、此屬^㊿後漢之初^㊿、與^㊿佛法東漸^㊿相因而我邦之患^㊿此瘡^㊿亦自^㊿下事^㊿西蕃

一來佛像上始、蓋是人所レ中ニ其氣一、以傳ニ染之ニ也、詎知是致レ佛之殃而非ニ燒レ佛之罪ニ也吁、而シテ當時世人ハ
コノ疫瘡ノ發生ヲ以テ佛像ヲ燒クノ罪ニ歸シ、敏達天皇ト守屋トガ、コノ瘡ニ罹ラレタルハ佛陀ノ罰ナリトシ、佛
教ノ因果應報ノ說ヲ以テ疾病ノ發生ヲ説明スルニイタレリ。

コノ如ク疫病流行ノ事ガ崇神天皇紀ニ始メテ見エ、次デ欽明天皇ノ十三年ニ疫病流行ノ記事アリテヨリ、文武天
皇ノ代ニ至ルマデ百五十餘年、ソノ間ニ疫病ノ行ハルコト凡ソ十回ナリ。左ニ疫病流行ノ年紀ヲ示ス。

崇神天皇五年、國內多ニ疾疫一、民有ニ死亡者一、且大半矣

欽明天皇十三年、國行ニ疫氣一、民致ニ天殘一

敏達天皇十四年二月國行ニ疫氣一、民死者衆

文武天皇二年三月越後國疫四月近江、紀伊二國疫〇四年十二月大和國疫

大寶二年六月上野國疫

大寶三年三月信濃、上野二國疫五月相模國疫

慶雲元年三月信濃國疫夏伊賀、伊豆二國疫

慶雲二年諸國飢疫

慶雲三年閏正月京畿、紀伊、因幡、參河、駿河諸國疫四月河内、出雲、備前、安藝、淡路、讚岐、伊豫諸國、飢

疫己卯天下諸國疫疾、百姓多死、始作ニ土牛一大儼

慶雲四年正月因ニ諸國疫一遣レ大赦

大寶令（醫疾令）ニ『典藥寮、毎歲、量合ニ傷寒、時氣、瘧、利、傷中、金創、諸雜藥一、以擬ニ療治一』ノ文アリ、
令義解^レニ之ヲ解シテ『傷寒者、冬傷ニ於寒一、即病者也、時氣者、時行之病、春時應レ暖而反寒、夏時應レ熱而反冷、
秋時應レ涼而反熱、冬時應レ寒而反溫、非ニ其時一、有ニ其氣一、是以一歲之中、病先ニ長少一、率相似者、此則時行之
氣、一名ニ疫癘一、言陰陽之氣不レ和、致ニ其病一、譬如レ役レ人、故曰ニ疫癘一也、瘧者、夏日傷レ日者、秋必病レ瘧也、
利者、下利之病也、傷中者、府藏有レ病者也』云々ト言ヘリ。是ニ由リテ之ヲ觀ルニ、コノ時ノ前後ニ疫病ト稱セシ
モノハ、時行之病ニシテ、四時ノ氣ヲ觸冒スルニヨリテ起ルトコロノ傷寒トハ區別セラレタリ、コレ病原候論ニ依
レルナラム。然レドモ醫心方ニ引ケル葛氏方ノ說ニテハ、『傷寒、時行、瘟疫、雖レ有ニ三名一、同一種耳、而原本小
異、其冬月傷ニ於暴寒一、或疾行力作、汗出、得ニ風冷一、至ニ春夏一發、名爲ニ傷寒一、其冬月不ニ甚寒一、多ニ暖氣一、
及西南風、使ニ人骨節緩墮一、受レ邪、至レ春發、爲ニ時行一、其年歲月申、有ニ瘧氣一、兼扶ニ鬼毒一、相注、名爲ニ瘟疫
一』ト曰ヒ、傷寒・時行・瘟疫ヲ混同セリ。案ズルニ傷寒ハ熱性病ノ概稱（病原候論ニ曰ク『夫熱病者皆傷寒之類也』）
ニシテ、瘟疫トハ熱性傳染病（主ニ腸窒扶斯ナルベキカ）ヲ指シ、時行トハ流行性疾病ヲ總稱セシモノナラン。故
ニ當時所謂疫病ノ中ニハ、前段ニ擧ゲタル痘瘡・麻疹ノ他ニ、今日ノ腸窒扶斯ヲモ存セシコトヲ想フベシ。之ヲ西
洋ノ事實ニ徵スルニ、窒扶斯病中ニテソノ歴史ノ古キモノハ發疹窒扶斯ニシテ、西曆十六世紀ノ初期ニ方リテ初メ
テ全歐洲ニ蔓延シ、次デ十八世紀ニ及ビテ、發疹窒扶斯ノ漸次稀有トナルニ從ヒテ腸窒扶斯ココニ始メテ現ハレタ
リト言フ〔Hirsch, Handbuch der historisch-geographischen Pathologie, 1860, I. Bd. S. 149-165; Haeser, Geschichte
der epidemischen Krankheiten 1865, S. 326-338.〕コレヨリ以テ往ニ遡ボルコト能ハズ。シカルニ支那ノ醫書及ビ當時
我が邦ノ書籍ニ、瘟疫又ハ溫病（病原候論、卷十）ト稱スルモノハ熱性病ニシテ傍人ニ傳染シ、ソノ證狀今日ノ腸
窒扶斯ニ似タルモノアリ。疫癘ノ病ト稱スルモノハ、固ヨリ直接ニ瘟疫ヲ指スモノニアラズト雖モ、『其病與ニ時氣
溫熱等病一、相類』（病原候論・葛氏方）ト言フニ依リテ考フルニ、ソノ内ニ瘟疫ヲ含ミシヤ明カナリ。果シテ然ラ
バ、少ナクトモ熱性ノ急性傳染病ガ、當時ニ存セシコトハ疑ナカルベシ。

大寶令ニ擧ゲタル瘧ハ今日ノ麻拉里亞熱ナリ。和名鈔^②ニ『説文云、瘧^{ワラハヤミ、エヤミ} 音虐俗云衣夜美一云和良波夜美 寒

熱併作二日一發之病也』トアリ。丹波康賴ノ醫心方ニモ瘧ヲ擧ゲ、コレニ「ワラハヤミ」ノ和名ヲ附シタリ。和良波夜美

トハ童病ノ義ニシテ、衣夜美トハ疫病ノ義ナリ、ソノ流行性ニ童兒ヲ侵セル病ナルコトヲ言フヤ明カナリ。而シテ麻拉里亞流行地方ニアリテハ麻拉里亞ガ殆ド小兒ニ固有ナルガ如キ觀ヲ呈スルハ實際ノ事實ナレバ、當時少ナクトモ、我が邦ノ一部地方ニハ麻拉里亞ノ流行アリシモノナラン^⑤。夫ノ令義解ニ『夏傷レ日者、秋必病レ瘧也』ト言フハ病源候論ノ説ニ依リシモノニシテ、病源候論ニハ瘧ニ數種ヲ別チ、或ハ發作性ニ發呈スルトコロノ證候ヲ概括セルヤノ感アレドモ、ソノ山瘧瘧ト稱スルハ『此病生ニ於嶺南、帶ニ山瘧之氣、其狀發ニ寒熱、休作有レ時、皆由レ挾ニ溪源嶺瘴濕毒氣』故也』ニシテ今日ノ麻拉里亞熱ヲ斥セルコトヲ知ル。故ニ瘧ト稱スルモノノ中ニ麻拉里亞ヲ存シ、而シテコロノ麻拉里亞ガ所謂疫病ノ一部ヲ成セシコトハ疑ナカルベシ。

大寶令ニ擧ゲタル利ハ痢病ノ義ニシテ、傳染性ニ發スルモノノミヲ言フニハアラズ。然レドモ、醫心方ニ病源候論ヲ引テ『凡利有ニ四種論、冷、熱、甘、虫、冷則白(利)、熱則赤(利)、甘則赤白而雜、虫則純利ニ疹瘀血』ト説キ、葛氏方ヲ引テ『挾レ熱者、多下ニ赤膿或雜血』ト言ヒ、下利ニシテ熱ヲ伴ナヒ、便中ニ膿血ヲ混ズルモノアルコトヲ記スルニ依リテ、之ヲ見レバ赤痢ヲコノ内ニ混ゼルナラン。(尙ホ上段述ブルトコロヲ参照スベシ)

大寶令ノ戸令ニ、殘疾・癘疾・篤疾ヲ別チテ各病名ヲ記セル條ニ『惡疾』ノ名目アリ、令義解ニ之ヲ解釋シテ、『惡疾、謂ニ白癩也、此病、有レ蟲食ニ人五藏、或眉睫墮落、或鼻柱崩壞、或語聲嘶變、或支節解落也、亦能注ニ染於傍人、故不レ可ニ與レ人同レ床也、癩或作レ癘也』ト曰フ、ソノ症候ヲ論ズルトコロハ全ク病源候論ニ據リタルモノナルガ、ソノ病源候論ニ記述スルトコロハ稍々精緻ニシテ、ソノ癩病ノ證タルヤ、殆ド疑惑ヲ容ルルトコロナシトス。而シテソノ病源ヲ論ズルヤ、惡風及ビ忌害ヲ犯觸シテ得ルトコロナリトシ、酒ニ酔フテ露臥シ及ビ鰓ナキ魚ヲ食スルニヨリテコロノ病ヲ得ルトアルヲ言ヒ、敢テ傍人ニ傳染スルトコロヲ曰ハズ、故ニ令義解ニ『能注ニ染於傍人』ト説ケルハ、之ヲ病源候論ソノ他ノ唐醫書ノ説ニ採リタルニアラズ、當時ノ實際ガ、人ヲシテ該病ノ甲人ヨリ乙人ニ傳染スルノ事實ヲ認識セシメタルニ由ルモノナラン^⑥。左レバ『癩病流行ノ初期ニハ結節癩多ク、從テ傳染ノ跡ハ著明ナルモソノ病毒漸ク微弱トナルニ從ヒテ神經癩多ク、直接ニ人ヨリ人ニ傳染スルノ條件ハ少ナクナリテ、主トシテ素因ヲ遺傳スルモノニノミ多ク感染スルニ至ル』トノ臆説^⑦ハ事實ニ近キモノナラン、尙ホ當時癩病ノ證候ヲ精細ニ記述スルモノアリテ、結節癩ノ果シテ多カリシコトヲ證明スルヲ得バ、ロノ臆説ノ正鵠ヲ得タルコトヲ確認スベシ。

醫綱本紀

醫綱本紀二卷、聖德太子ノ撰述ニ係レリトシテ世ニ傳ハルモノアリ。若シ眞ニ然リトスレバ我が邦醫典中ノ最古ノモノナルベシ。宇津木昆臺ハ之ヲソノ著日本醫譜ニ引用シタリ。然レドモ、該書ハ舊事大成經ヲ鈔出セルモノニシテ舊事大成經ノ偽書ナルコト既ニ瞭然タル以上ハ、世ニ傳ハレル醫綱本紀ノ信用スベキモノニアラザルコトモ、復タ辯ヲ須ヒザルトコロナリ。

醫事制度

孝德天皇ノ即位元年始メテ年號ヲ立テテ大化ト曰ヒ、又隋・唐ノ制ニ倣ヒテ法ヲ立テラレシガ、未ダ律令ヲ定メラルルニ及バズ。天智天皇ノ時ニ至リ令十二卷ヲ撰定シ、天武天皇ノ朝之ヲ修正シ、文武天皇ノ大寶元年ニ至リ、天智天皇以來ノ制ニ據リテ律六卷・令十一卷ノ撰定アリ、之ヲ大寶令ト曰フ。ココニ至リテ我が邦始メテ醫事制度アリ。而カモノノ醫疾令ハ散佚シテ世ニ傳ハラズ、類聚三代格・政事要略・令集解・續日本紀等諸書ニ引用セルトコロノ逸文ヲ集メテ僅カニソノ梗槩ヲ見ルベキノミ。

醫官 大寶令ニ依レバ中務省ニ内藥司アリ、内藥司ニ正一人・佑一人・令史一人・侍醫四人・藥生十人・使部十人・直丁一人アリテ御藥ヲ掌ドル（コノ官、寬平八年ニ典藥寮ニ併セラル）。宮内省ニ典藥寮アリ、頭一人・助一人・允一人・大屬一人・少屬一人・醫師十人・醫博士一人・醫生四十人・針師五人・針博士一人・針生二十人・按摩師二人・按摩博士一人・按摩生十人・咒禁師二人・咒禁博士一人・咒禁生六人・藥園師二人・藥園生六人・使部二十人・直丁二人。藥戸・乳戸アリテ總テ醫事ヲ掌ドル。コレヨリ先キ、天武天皇紀（日本書紀）ニ『四年正月、丙午朔、大學寮諸學生、陰陽寮、外藥寮、云々、捧藥及珍異等物進』ノ文アリ。外藥寮ノ名ハ大寶令ニ見エズ、典藥寮ト言フモノ即コレ天武紀ニ記スルトコロノ外藥寮カ。

内藥司、典藥寮ノ外、衛門府ニ醫師一人、左右衛士府ニ醫師各二人、左右兵衛府ニ醫師各一人、太宰府ニ醫師一人、諸國ニ醫師一人アリ。

ソノ醫師ニ任ゼラルルモノハ典藥寮及ビ國學ノ教習ヲ卒へ、一定ノ考試ヲ經タルモノニシテ、博士ハ醫人ノ内ノ法術優長ナルモノヲ取テ之ニ任ズ、ソノ國ノ博士及ビ醫師ハ部内ニ取り用ヒ、若シ部内ニ無キトキハ傍國ヨリ之ヲ撰ビ、補任ノ後ハ故ナクシテ之ヲ解職スルコトヲ得ザル制ナリ。

醫學教育 大寶ノ令ヲ案ズルニ、學校ニハ大學ト國學トアリ、大學ハ五位以上ノ子弟及ビ史部ノ子ヲ教フルトコロニシテ、之ヲ京師ニ置キ、大學寮ニテ之ヲ管セリ。國學ハ國毎ニアレ郡司ノ子弟ヲ教フルトコロニシテ國司之ヲ掌ドレリ、醫學ノ教育モ全ク之ニ準ジ、ソノ學校ニ大學ト國學トアリ、大學ハ典藥寮ノ學校ニシテ、ソノ學生ニ藥師ヲ以テ姓トスルモノ（蜂田藥師、奈良藥師ノ如シ）及ビ三世醫術ヲ習ヒ相承ケテ名家タルモノヲ取り、次ニ庶人ノ聽令ナルモノヲ取ル規トス、共ニ年齢十三歳以上十六歳以下ノモノニシテ、四十人ヲ限リトセリ。

國學ハ國毎ニアリ、醫方ヲ教授スルコト、及ビ生徒ノ課業ノ年限ハ並ニ典藥寮ノ教習ノ法ニ准ズ、ソノ醫生ハ大國二十人、上國二十八人、中國二十六人、下國二十四人ヲ限ル。生徒ヲ別チテ醫生・針生・按摩生・咒禁生・女醫・藥園生トナス、ソノ講習スベキ科目ハ左ノ如シ。

醫生ハ甲乙經・脉經・新修本草ヲ講讀シ兼テ小品方・集驗方等ノ方ヲ習フ、既ニ諸經ヲ讀メバ、業ヲ分チテ教習セシム、乃チ醫生四十人ヲ分チテ二十四人ハ體療ヲ學バシメ、六人ハ創腫ヲ學バシメ、六人ハ少小ヲ學バシメ、四人ハ耳目口齒ヲ學バシメ、以テソノ業ヲ專ニセシム。

針生ハ素問・黃帝針經・明堂・脉訣等ノ書ヲ講讀シ、兼テ流注經・偃側圖・赤烏神針經等ノ書ヲ講ゼシム。

按摩生ハ按摩・傷折ノ方及ビ判縛ノ法ヲ學ブ。

咒禁生ハ咒禁シテ解忤・持禁スルノ法ヲ學ブ。

女醫ハ宮戸ノ婢、年十五以上、二十五以下、性識慧了ノモノ三十人ヲ取テ、教フルニ安胎・產難・及ビ創腫・傷

折・針灸ノ法ヲ以テス。

藥園生ハ本草ヲ講讀シ、諸藥ノ形性及ビ之ヲ採リ種ユルノ法ヲ辨識ス。

習學ノ年限ハ醫生ノ體療ヲ學ブモノハ七年、少小及ビ創腫ハ各五年、耳目口齒ハ四年ヲ以テ學ヲ成シ、針生ハ七年。按摩生ハ三年。咒禁生ハ三年。女醫ハ七年ニシテソノ業ヲ成サシム。

考試ノ方法ハ大學生ノ例ニ準ジ、醫生・針生・按摩生・咒禁生ハ博士一月ニ一たび之ヲ試ミ、典藥ノ頭助一年ニ一たび之ヲ試ミ、宮内ノ卿輔年ノ終ニ惣ベ試ミ、若シ業術灼然トシテソノ任ノ官ニ過グルモノアラバ、ソノ業成年限ニ及バズト雖モ舊人ヲ退ケテ、以テ新生ヲ補スルコトヲ得ベシ、若シ在學九年ニシテ成ルコト無キモノハ退學セシム。

醫・針生等、業成ルノ日ハ、ソノ行狀及ビ學術ノ成績ヲ具シテ之ヲ太政官ニ申送セシメ、式部更ニ之ヲ試ミ、及第セ ルモノハ之ヲ醫師ニ補ス、而シテソノ選叙ハ進士ト同格ニシテ明法（法律ヲ學ブモノ）ヨリ過ギタリ。

私カニ自カラ學習シテ醫療ヲ解スルモノアリ、名ヲ典藥寮ニ投ジテ試ヲ請フモノアレバ、醫針生ノ例ニ準ジテ考試ヲ受クルコトヲ得セシム。

國ノ醫生ハ、醫師月毎ニ之ヲ試ミ、年ノ終ニ國司之ヲ試ミ、以テ優劣ヲ定メ、考試通ゼザルモノアレバ狀ニ隨テ罪ヲ科シ、課業充タズ、終ニ長ク進ムコトナキモノハ退學ヲ命ズ。

是ニ由テ之ヲ觀ルニ、醫生ノ講讀スベキ課程ヲ定メ、考試ノ法則ヲ制シ、修學ノ年月ヲ限リ、私ニ學習セルモノヲ試験シテ採用スル等、諸般ノ制度、略ボコノ時ニ備ハレリ。又體療（内科）・創腫（外科）・少小（兒科）・耳・目・口・齒等専門ノ科目ヲ別ツコトモ、既ニコノ時ニ始マレリ。

大化ノ改革ヨリココニ至ルマデ、凡ソ六十年、隋・唐ノ制度ヲ模倣スルコトヲ、コレ事トシ、遂ニ大寶ノ律令ノ制定セラルルニ及ベリ。而カモソノ多クハ空文ニ止マリ、コレヲ以テ遽ニ當時醫學ノ真相ヲ見ルノ資料トハナスベカラザルナリ。

參考書籍

- ① 論衡 漢會稽王充著
- ② 國史案 木村正辭著 文部省刊行 卷一
- ③ 劉氏鴻書 明宣城劉仲達著 卷八
- ④ 素問 本藏篇 形志篇
- ⑤ 靈樞 四時刺逆從論
- ⑥ 金光明最勝王經 除病品 唐義淨譯
- ⑦ 東雅 薪井白石著 卷一
- ⑧ 志都乃石室 平田篤胤著
- ⑨ 奇魂一名尙古醫典 佐藤方定著
- ⑩ 日本書紀通證 谷川士清著
- ⑪ 方術原論 伴信友著
- ⑫ 醫方正傳 花野井有年著
- ⑬ 玉かつま 本居宣長著 卷四
- ⑭ 麻疹考 屋代弘賢著

- ⑮ (15) 大寶令と醫學 醫學士六戸俊治述 中外醫事新報 明治三十六年刊行
- ⑯ (16) 日本ノ癩病ニ就テ 醫學博士土肥慶藏述 皮膚病學及泌尿器病學雜誌 第一卷第一及二號所載
癩病ノ歷史的病理學 ドクトル富士川游演述 中外醫事新報 第五五二號(明治三十六年刊行) 所載
- ⑰ (17) 聖德皇太子傳曆 同補註
- ⑱ (18) 元享釋書 釋師鍊著
- ⑲ (19) 三國佛法傳通緣起 釋疑然著
- ⑳ (20) 和名類聚鈔 源順著 卷三及卷六
- ㉑ (21) 令義解 清原夏野等撰 天長十年成
- ㉒ (22) 治痘要訣 池田晋著 嘉永四年刊

-
- ① <https://ctext.org/lunheng/zh>
- ② DOI: 10.11501/769265
- ③ <https://repository.lib.cuhk.edu.hk/en/item/cuhk-166955>
- ④ <https://ctext.org/huangdi-neijing/suwen/zh>
- ⑤ <https://ctext.org/huangdi-neijing/ling-shu-jing/zh>
- ⑥ <https://cbetaonline.dila.edu.tw/zh/T0665>
- ⑦ DOI: 10.11501/993108
- ⑧ <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100079086>
- ⑨ <https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/detail/R300000001-1025732840-00>
- ⑩ DOI: 10.11501/1917885
- ⑪ DOI: 10.11501/991316
- ⑫ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00001149>
- ⑬ <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200018528>
- ⑭ <https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11F0/WJJS07U/2321315100/2321315100100010/mp00813700>
- ⑮ DOI: 10.11501/1739963
- ⑯ DOI: 10.14924/dermatol.1.95
- ⑰ <https://miko.org/~uraki/kuon/furu/text/seitoku/denreki.htm>
- ⑱ <https://miko.org/~uraki/kuon/furu/text/mokuroku/genkou/genkou.htm>
- ⑲ <https://cbetaonline.dila.edu.tw/zh/B0186>
- ⑳ <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100261200>
- ㉑ https://www.isc.meiji.ac.jp/~meikodai/obj_ryoshuge.html
- ㉒ <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100242832/viewer>

第三章 奈良朝ノ醫學

元明天皇ノ和銅三年ヨリ、桓武天皇ノ延暦三年ニ帝都ガ山城ニ遷サレタルトキマデ前後八代、七十餘年、帝都ヲ奈良ニ奠メ給ヒシ間ヲ奈良ノ朝ト稱ス。前期推古天皇ノ頃ヨリ隨・唐ノ醫風漸ク行ハレ、唐トノ交通益々繁ク、文武天皇ノ代ニ律令ノ撰定アリシニ次ギテ、コノ期ハ支那ノ制度文物ノ輸入ニ力ヲ盡シタル時代ナリ。又コノ時ニ方リテ、朝廷佛教ヲ崇信シ之ヲ勸奨セラレシガ故ニ我ガ醫術ノコレガ爲メニ影響ヲ受ケシコトモ亦尠カラザリキ。

僧醫

奈良朝ノ時代、佛法ノ弘通ニヨリテ我ガ醫術ノ影響ヲ受ケタルコト尠カラザル中ニ、特ニ擧ゲテ言フベキハ僧尼ノ醫術ヲ行ヒタルコトト、佛教主義ニ基ヅキタル慈惠醫院ノ設立セラレタルコトトコレナリ。

佛法渡來ノ當初、既ニ僧尼ニ依賴シテ佛陀ニ祈禱シ、以テ疾病ノ治癒ヲ圖リシコトアリ。爾來百餘年、佛法ノ行ハルルコト漸ク盛ナルニ從ヒ、僧尼ノ咒符祈禱ヲ以テ災厄ヲ祓除スルニ兼テ治病ノ事ニ干與スルコト益々ソノ度ヲ加フルニ至リ、大寶令ニ『凡僧尼、トニ相吉凶一、及小道巫術、療レ病者、皆還俗、其依ニ佛法一、持レ咒救レ疾、不レ在ニ禁限一』(僧尼令第二條)ノ制ヲ定メ、僧尼ニシテ小道(小道トハ厭符ノ類ヲ謂フ)ニヨリテ病ヲ療スルコトハ、之ヲ禁止セラレタレドモ、ソノ佛法ニ依リ、經ノ咒ヲ持シテ病苦ヲ救フコトハ公ニ許可セラレタリ、次デ元正天皇養老元年四月壬辰ノ詔ニ『僧尼依ニ佛道一、持ニ神咒一、救ニ病徒一、施ニ湯藥一、而療ニ痼疾一、於レ令聽レ之、方今僧尼輒向ニ病人之家一、詐禱ニ幻恠之情一、戻執ニ巫術一、逆占ニ吉凶一、恐ニ脅耄一、稍致レ有レ求、道俗無レ別、終生ニ奸亂一』(續日本紀卷七^①)トアリ、コレニヨリテ當時ノ僧尼ガ、既ニ巫職ヲ兼ネ、又治病ノ事ニマデ及ビタルコトヲ推知スベシ。コノ如ク、佛道ニヨリ咒ヲ持シテ病ヲ救ヒ、從テ湯藥ヲ施シテ痼疾ヲ療スルコトハ令ニ於テ之ヲ聽許シタレバ、僧ニシテ醫ヲ兼ネシモノコノ期ニ多シ。聖武天皇ノ病ニ給フヤ看病ノ禪師二百二十六人多キニ及ベリト言フニテ、ソノ盛ナルコトヲ推スベシ。中ニ就テ特ニソノ名アルモノヲ擧グレバ天武天皇ノ時ニ法藏アリ、元正天皇ノ代ニ法蓮アリ、孝謙天皇ノ頃ニ法榮アリ、鑿眞アリ。

僧法藏 百濟ノ人、醫ヲ善クス、天武天皇弗豫、法藏益田金鍾ト與ニ勅ヲ奉ジテ白朮煎ヲ進メ驗アリ、純綿布ヲ賞賜セラ
ル。(日本書紀)

僧法蓮、醫術ニ精シ、大寶三年詔シテ之ヲ賞シ、豊前國野四十町ヲ賜フ、養老五年又詔アリ、曰ク『沙門法蓮、心住ニ禪枝一
行居ニ法梁一、尤精ニ鑿醫術一。濟ニ治民苦一。善哉若人。何不ニ褒賞一。』ソノ三等以上ノ親ニ字佐君ノ姓ヲ賜フ。(續日本紀)

僧法榮 續日本紀卷十九、孝謙天皇天平勝寶八年ノ條ニ曰ク『五月丙子、勅、禪師法榮、立性潔、持レ戒第一、甚能看病、
由レ此請於邊地一、令レ侍醫藥一、太上天皇得レ驗多數、信重過レ人、不レ用ニ他醫一。爾其闕水難レ留、鸞晏駕、禪師即誓、永
絶ニ人間一、侍ニ於山陵一、轉讀大乘一、奉レ資冥路一、朕依レ所請、敬思ニ報德一、厭レ俗歸レ眞、財物何富、出家慕レ道、冠輿蓋
何榮、莫レ若ト名流ニ万代一、以爲ニ後世准一。宜レ復ニ禪師所レ生一郡一。遠年勿レ役、』

僧鑿眞 唐ノ楊州江陽縣ノ人俗姓淳于齋人髡ノ後ナリ、年十四ノ時、父ニ從ヒテ佛像ヲ見、依テ出塵ノ志アリ、父ソノ止ム
ベカラザルヲ見、之ヲ大雲寺ノ僧智滿禪師ニ附シ、出家セシム、後龍興寺ニ移リ、又東遊シテ長安ニ入り、實際寺ニ戒ヲ受

ク、鑿眞材識兼該博ク經論ニ涉リ、最モ戒律ニ精シ、天寶元年楊州ノ大明寺ニ在リ衆徒ノタメニ律ヲ講ズ、是ヨリ先キ(天平五年)

我が邦ノ沙門榮叡、普照等遣唐大使 丹墀真人廣成ニ從ヒテ唐ニ留學ス。是ニ至リテ二人並ビニ鑿眞ニ從遊ス、因テ之ニ勵メテ東遊セシム、十五年十二月鑿眞遂ニ舟ヲ買テ楊州ヲ發ス、二弟祚彥、道興及ビ叡照等八十四人之ニ從フ、颯ニ遇ヒ僅ニ身ヲ以テ免カル、後五年再ビ東發ス、漂流シテ日南國ニ至ル、會マ榮叡物化ス、鑿眞悲傷禁マズ、哭泣明ヲ失フニ至ル、後又船ヲ出スコト三次、並ニ志ヲ得ズ、而シテソノ東遊ノ志益々堅クシテ拔クベカラザルナリ、天平勝寶五年十月鑿眞、延光寺ニ在リ國使藤原清河、大伴胡麻呂等、唐ニ使ヒス、隨行ノ僧業行和尚勸ムルニ大使ノ船ニ托シテ東遊スル事ヲ以テス、遂ニ復ビ舟ニ上ル、弟子法進等八人之ニ從フ。六年正月廿六日太宰府ニ入り、二月一日難波ニ到ル、四日正四位下安宿王勅ヲ奉ジ之ヲ羅成門外ニ迎ヘ、東大寺ヲ館トス。八年五月勅シテ和上ニ拜シ、學業優富、戒律清淨、堪ニ聖代之鎮護、爲ニ玄徒之領袖ノ詞ヲ賜フ。是ヨリ和上鑿眞禪師ト稱ス。六月大政官ヨリ上皇供御ノ米鹽ヲ賜ヒ、永ク之ヲ供養セシム。寶字二年八月鑿眞年老テ志行益潔キヲ賞シ、改メテ大和上ノ號ヲ賜ヒ、僧綱ノ任ヲ停メ、新ニ又新田部親王ノ舊宅ヲ施シテ戒院トナシ、諸寺ノ僧尼ノ戒律ヲ學バントスルモノヲシテ就テ教ヲ請ハシム。戒院ハ則チ後ノ唐招提寺ナリ。七年五月六日戊申鑿眞豫メ死期ヲ知り結跏趺坐西面シテ物化ス、時二年七十七。鑿眞學問該博志行高潔ニシテ一時ノ師表タリ、聖武帝以下從ヒテ戒ヲ受ルモノ甚多シ。嘗テ勅旨ヲ奉ジテ一切ノ經論ヲ校正ス、鑿眞兩目明ヲ失スレドモ強記人ニ絶ス、ソノ背誦スルトコロヲ以テ雌黃ヲ下ス、天下ソノ書ニ信賴スト言フ。鑿眞又醫藥ノ事ニ通ジ、殊ニ本草ニ精シ、本朝ノ諸藥物ソノ眞僞ヲ知ラザルモノ多シ、鑿眞ニ勅シテ眞僞精粗ヲ辨定セシム。鑿眞鼻ヲ以テ之ヲ別チ一モ錯誤スルトコロナシ。韓廣足就テ學ビ藥物ノ眞價ヲ分辨スルノ術ニ通ズ。後皇太后弗豫、眞、藥ヲ獻ジテ大ニ効驗アリ、因リテ大僧正ヲ授ケラレ、備前水田一百町ヲ賜フ。當時我が邦既ニ本草ノ學アリ、而シテ未ダ西土ノ藥品ヲ精フスルコト能ハズ、鑿眞爲ニ之ヲ辨定スルニ及ビテ、邦人之ニ學ビ斯道益々闢ケタリ。世ニ鑿上人秘方ヲ傳ヘ、又ソノ像ヲ祀ル(續日本紀・宋高僧傳・元亨釋書・東征傳・唐國史補)。我が邦名醫多シト雖モ像祀セララルハ鑿眞ト田代三喜トノミ。(本朝醫談)

施藥院

聖武天皇ノ天平二年、始メテ施藥院ノ設アリ、コレヲ公ニ開カレタル醫院ノ始トス。續日本紀卷十二『天平二年辛未、始置ニ皇后職施藥院、令下諸國以ニ職封并大臣家封戶庸物價、買ニ取草藥、毎年進上レ之』トアリ、コレ皇后藤原氏(不比等ノ女、光明皇后ト稱ス)ノ意ヨリ出デ、天下飢病ノモノヲ療養スル所タリ。續日本紀卷二十二『天平寶字四年六月乙丑、天平應眞仁正皇太后崩、姓藤原氏、云々、太后仁慈、志在レ救レ物、創ニ建東大寺及天下國分寺一者本太后之所レ勸也、又設ニ悲田施藥兩院、以療ニ養天下飢病之徒一也』トアルニテ、ソノ慈惠醫院タリシコトヲ證スベシ。

是ヨリ先キ、天武天皇白鳳八年冬十月、詔シテ曰ク『凡諸僧尼者、常往ニ寺内、以護ニ三寶、然或及老、或

患病、其永臥ニ狹房、久苦ニ老病一者、進止不便、淨地亦穢、是以自今以後、各就ニ親族及篤信者、而立ニ一舍屋于間處、老者養レ身、病者服レ藥』(日本書紀、卷二十九)。コレ僧侶ノ老ヒタルモノ、或ハ病メルモノヲ隔離スル舍屋ヲ立テシモノニシテ、醫師ヲ置キテ治病ヲ掌ラシメシニハアラザルベシ。然レドモ病者ヲ收容スルノ目的ニテ一定ノ舍屋ヲ立ツルコトハ後ノ世ノ醫院ノ胚胎トモ見ルベシ。或ハ曰フ、是ヨリ先キ、養老七年、興福寺内ニ施藥・悲田ノ二舍アリ(濫觴抄・本朝年代記)。又是ヨリ先キ聖德太子ノ四天王寺ヲ建テタマヒシト

キ、既ニ敬田院・悲田院・療病院・施藥院アリ、爾來諸處ニコノ四院アリテ貧窮及ビ重病ノモノヲ養ヒ、又ハ貧窮者ニ業ヲ授ケ、生ヲ遂ゲシム、而シテソノ敬田院ノミハ僧侶ノ舍、殘三院ハ多クハ惡疾、穢多ノ聚ル所ナリト。(鹽尻、卷七)

此期ノ病理學

太古時代以來ヨリノ病理說ハ、コノ期ニモ尙ホ行ハレタレドモ、漢醫書ノ輸入ニヨリテ漢人ノ所說ヲ知りタルト、佛經說クトコロノ病理ヲ明カニセルトニヨリ、疾病ノ因由ヲ論ズルニ方リテ更ニ多少ノ新說ヲ加フルニイタレリ。當時漢ノ醫書ニシテ我が邦ニ行ハレタルハ素問・甲乙經ノ類ナリシコト、大寶ノ醫疾令ニ見エシガ、ソノ中ニテ殊ニ病理ヲ說キタルハ素問ナリ、而シテ今ノ世ニ傳フルトコロノ素問ノ書ハ後人ノ攙入多クシテ、間々疑ハシキコトアリト雖モ、王氷ガ撰次セル素問ハ唐ノ寶應元年(我が邦ノ孝謙天皇天平寶字六年、即チ奈良ノ朝ノ時代ニ當ル)ノ著作ナレバ、コノ書ニ依リテ略ボ當時ノ醫說ヲ窺フコトヲ得ベシ。コノ書記スルトコロニ依レバ、疾病ヲ生ズルニハ身體内ノ原因ト身體外ノ原因トアリ、内因ヲナスモノハ身神ノ疲勞・喜怒・悲歡・陰陽二氣ノ不調等ニシテ、外因ヲナスモノハ風・寒・暑・濕等ナリトシ、說ヲナシテ『夫邪之生也、或生ニ於陰、或生ニ於陽、其生ニ於陽者、得ニ之風雨寒暑、其生ニ於陰者、得ニ之飲食居處陰陽喜怒』トイヘルナリ、乃チ邪氣・惡風ノ身體ヲ侵シテ病ヲ成スト言フノ說ハ從來專ヲ行ハレタルトコロナリシガ、ココニ至リテ飲食・居處・喜怒、及ビ外界ノ氣象的關係ノ疾病ヲ發起スルコトヲ說クニ至レリ。萬葉集ニ山上憶良ガ天平五年ニ作レル「沈痾自哀文」ヲ載スルヲ見ル。②ソノ文ニ曰ク『我從ニ胎生ニ迄ニ于今日、自有ニ修善之志、曾無ニ作惡之心、所以禮ニ拜三寶、無ニ日不レ勤、敬ニ重百神一、鮮ニ夜有ニ闕、嗟呼媿哉、我犯ニ何罪一、遭ニ此重疾一、初沉痾已來、年月稍多、是時年七十有四、鬢髮斑白、筋力尪羸、不ニ但年老一、復加ニ斯病一、諺曰痛瘡灌レ鹽、短材截レ端、此之謂也、四支不動、百節皆疼、身體太重、猶レ負ニ鈞石一、懸レ布欲レ立、如ニ折レ翼之鳥一、倚レ杖且歩、比ニ跛足之驢一、吾以レ身已穿レ俗、心亦累塵、欲レ知ニ禍之所レ伏崇之所レ隱、龜ト之門。巫祝之室、無レ不ニ往問一、若實若妄、隨ニ其所レ教、奉ニ幣帛一、無レ不ニ祈禮一、然而彌有レ増レ苦、曾無ニ減差一、吾聞前代多有ニ良醫一、救ニ療蒼生病患一、至レ若ニ榆樹 扁鵲 華陀 秦 和緩 葛稚川 陶隱居 張仲景等一、皆是在世良醫、無レ不ニ除愈一也、追ニ望件醫一、非ニ敢所レ及、若逢ニ聖醫神藥者一、仰願割ニ刳五藏一、抄ニ探百病一、尋達ニ膏肓之隩處一、欲レ顯ニ三豎之逃匿一、命根已盡、終ニ其天年一、尙爲レ哀、何況生錄未レ半、爲ニ鬼枉殺一、顔色壯年、爲ニ病橫困一者乎、在レ世大患、孰甚ニ于此一、任徵君曰、病從レ口入、故君子節ニ其飲食一、由レ斯言レ之人遇ニ疾病一、不ニ必妖鬼一、夫醫方諸家之廣說、飲食禁忌之厚訓、知易行難之鈍情、三者盈レ目滿レ耳、由來久矣、云々(病從レ口入ノ說ハ千金方ニモ出ヅ。千金方卷二十霍亂ノ條ニ曰ク『霍亂之爲レ病也、皆因ニ飲食一、非レ關ニ鬼神一』、『諺曰、百病從レ口生、蓋不レ虛也』)スベテマジナヒ祈禱シテ本復スルヲ以テ妖鬼ノ病トシ、ソノ外ハ飲食ヨリ起レル病トナス、コレ實ニコノ期ニ行ハレタル病因說ニシテ、百般疾病ノ中ニハ人自カラ之ヲ作スモノアルヲ信ズルニイタリシナリ。

疫病

續日本紀聖武天皇紀ニ曰ク『天平七年、八月丙午、太宰府言、管内諸國、疫瘡大發、百姓悉臥。十二月壬寅、是歲、年頗不レ稔、自レ夏至レ冬、天下患ニ豌豆瘡^{ワンス}(俗曰ニ裳瘡^{モカサ})、夭死者多』『天平九年、夏四月癸亥太宰管内諸國、

疫瘡時行、百姓多死。十二月、是歲春、疫瘡大發、初自筑紫來、經夏涉秋、公卿以下、天下百姓、相繼歿死、不可勝計、近代以來未之有也』、コレ實ニ痘瘡流行ノ史ニ見エタル始ナリ、ソノ流行ノ狀ヲ案ズルニ、コノ疫ハ始メ西方筑紫ニ發シ、東方ニ波及シテ遂ニ天下ニ蔓延シ、一兒患ニ罹レバ一村ニ流行スルコト裳ノ地ヲ曳クガ如キヲ以テ裳瘡ノ名アリ、ソノ何ニヨリテ起リシカハ大同類聚方ニ據レバ『痘瘡初發、起自聖武天皇御宇、釣者遇蕃人繼此病』(古林見桃著、醫療歌配劑ニ引クトコロニ據ル)ト言ヒ、本朝世紀ニ據レバ『從蕃船、庖痘到天下、自是患其艱者多』ト言ヒ、共ニ、外邦ノ人ヨリ之ヲ我が邦ニ傳ヘタリトスレドモ、ソノ何國ヨリ傳ハリシカヲ言ハズ。續古事談ニハ『炮ト云フ病、新羅國ヨリ起リタリ、筑紫ノ人鷓鴣ヲ飼ケル船離レテ、彼國ニ着テ、其人ウツリヤミ來リケルトゾ』ト言ヒ、壻囊抄ニハ『此病新羅國ヨリ來レリ、其始ヲ云ハ筑紫ノ人魚賣ケル船、難風ニ合テ、彼國ニ着キケリ、ソノ人ウツリ病ミテ來レリ』ト言ヒ、共ニ新羅ヨリ、筑紫ニ染毒セリトナセリ。當時朝鮮トノ交通最モ多カリシヨリ推セバ、續古事談ノ說、或ハ事實ニ近カラン、要スルニ、我が邦ノ痘瘡ハ初メ朝鮮又ハ支那ヨリ我が西陲筑紫ニ之ヲ傳ヘシモノナルコトハ疑フベキニアラズ。^③

支那ニアリテハ、漢以前ノ方書ニ痘瘡ヲ載セズ、ソノ痘瘡ヲ記スルハ肘後方ニ始マル。同書ニ曰ク『建武中、於南陽、擊虜所レ得、仍呼爲虜瘡』(外臺秘要方ニ引クトコロニ據ル)ト、コレ痘瘡ヲ以テ東晉ノ元帝ノ時、建武中(西曆紀元三百十七年)ニ兵役トシテ、南陽ヨリ初メテ支那ニ入りタルモノトセルナリ。然レドモ肘後方ノ書ハ梁ノ代陶弘景ノ補修セルトコロ多ク、ソノ建武ト言フモ、東晉ノ建武カ、東漢ノ建武カ、詳ナラズ。(前漢ニモ建武ノ年號アリ、西曆四百九十四年ヨリ四百九十七年ニ至ル)一說ニ依レバ『前漢ノ時、武帝ノ建元中(西曆紀元四百八十一年)ニ張蹇ト云ヘルモノ西域、月支國ニ使セシトキ、始メテ痘瘡ヲ傳染シ來レリ』ト。^④或ハ曰ク『馬伏波、交趾ヲ定メテ歸リタルトキヨリ此病アリ』ト。^⑤所說區々ナリト雖ドモ、コノ病ガ支那ノ上古ニ存セズシテ、兵役又ハ交通ニヨリテ中古隣邦ヨリ傳ハリシコトヲ知ル。我が聖武天皇ノ天平年間ハ彼ノ邦ノ唐ノ玄宗ノ開元中ニ當ル、即チ支那ニアリテ東晉ノ建武(我が仁德天皇五年ニ當ル)ニ始メテ痘瘡ヲ傳ヘシトスレバ、ソレヨリ四百餘年、建元年間ヲ以テ、痘瘡ノ第一次流行トスベシ。ソレヨリ二百五十年ヲ經テ、始メテ我が邦ニ痘瘡ノ傳ハリシト言フハ事實ニ遠シ、思フニ痘瘡ノ第一次流行ハ天平ノ以前ニアリ、天平以前ノ史上ニ疫病トアルハ、或ハ痘瘡ノ流行ナリシナラン。

之ヲ西洋ノ醫史ニ徵スルニ、太古ノ事ハ詳ナラズ、痘瘡ノ第一次流行ハ亞刺比亞ニアリテ、西曆五百七十一年、所謂象戰爭ニ際シテメツカニ傳ハリシ時ナリトシ、佛蘭西及ビ伊太利ニアリテハ紀元五百七十年ニ始メテ痘瘡ノ流行セルヲ認メタリト言フ^⑥、西曆五百七十年ハ我が邦ノ欽明天皇三十一年ニ當ル、欽明天皇十三年ノ疫疾ヲ痘瘡ナリトスレバ(第二十四頁參照)相距ルコト遠カラズ、又支那ノ痘瘡ノ始ヲ建元年間(西曆紀元四百八十一年)トスレバ、我が欽明天皇十三年ノ疫疾ハ之ニ後ルルコト七十年、佛蘭西及ビ伊太利ニ於ケル痘瘡ノ流行ハコレニ後ルルコト八十餘年ナリ。

歴史家或ハ天平九年ノ疫病ヲ以テ痘瘡ニアラズシテ麻疹亨ナリトナス^⑦、然レドモソノ官符ニ載スルトコロノ症狀ヲ考フルニ麻疹ニアラズ、當時典藥寮ガ勘ヘタル治方ニハ現ニ庖瘡又ハ豌豆瘡トアリ、又拾芥抄ニハ療治庖瘡方ト題シテ、天平九年六月二十六日ノ太政官符ヲ載セ、丹波康賴ノ醫心方卷十四ニハ病源候論・千金方等ヲ引テ豌豆瘡ノ治方ヲ論ズルノ條下ニ天平九年ノ官符ヲ擧ゲ、赤斑瘡ノ痘瘡ナルコトヲ說キタリ。奈須柳村モ頓醫抄ヲ引テ『五藏ニツカサドル所アリ、肝ノ熱ニヨリテ出ヅルハ水泡トテ脹テ水ヲ孕メリ(卽是水痘)、肺ノ熱ニ依テ出ヅルハ膿泡トテ白色ニウミテウミカサノ如シ是尋常ノモカサナリ(是卽豌豆瘡庖瘡)、心臓ノ熱ニ依テ出ヅルハ發斑トテ遍身マダラ赤ク白ク出ヅルナリ(是卽赤斑瘡)、脾ノ藏ノ熱ニヨリテ出ヅルハ細疹トテコマノトシテ粟ノ散ジタルガ如シ、コレハ膚瘡ト名ヅク』トアレバ疹モ麻モ痘モソノ實一體ナリ、天平ノ赤斑瘡ハ豆麻ヲ混ジテ言フニ似タリト論ジタリ。^⑧

當時朝廷ハ典藥寮ニ命ジテ疱瘡ノ治方ヲ勘ヘシメ、之ヲ官符トシテ諸國ニ下セシコトハ類聚國史・朝野群載・拾芥抄・類聚符宣抄、等ノ諸書ニ見エタリ。

典藥寮勘申疱瘡治方一事

傷寒後禁食、勿レ飲レ水、損ニ心胞ニ掌灸不レ能レ臥、大飲食、病後致レ死、又勿レ食ニ肥魚膩魚鱸、生魚類、鯉、鮪、蝦、蛆、鱒、年魚、鱸、令ニ泄痢、不ニ復救、又五辛食レ之、目精失不レ明、又諸生菜菓骨上爲ニ熱蠕、又生魚食レ之勿ニ酒飲、泄痢難レ治、又油脂物、難レ治、又蒜與レ鱸合食、令ニ人損、菘與レ鱸合食、病後發、又飲酒陰陽復病、必死、食ニ生藥ニ陰陽復病、死、病愈後大忌、大食飲酒、醉飲レ水

傷寒豌豆病治方、初發覺欲レ作、則煮ニ大黃五兩ニ服レ之、又青木香二兩、水三升、煮取ニ一升、頓服、又取ニ好蜜、通身麻子瘡上、又黃連三兩、以ニ水二升、煮取ニ八合、服レ之、又小豆粉、和ニ鷄子白、付レ之、又取ニ月汁、水和浴レ之、又婦人月布拭ニ小兒

豌豆瘡滅癩、以ニ黃土末ニ塗レ上、又鷹矢粉土于和ニ猪脂、塗レ上、又胡粉塗レ上、又白蠟末付レ之、又蜜付レ之

右依ニ宣旨、勘申、天平九年六月日、頭、(朝野群載、卷二十一)

太政官符。東海、東山、北陸、山陰、山陽、南海等諸國司

令ニ臥レ疫之日治身及禁ニ食物等、事七條

凡是疫病名ニ赤斑瘡、初發之時、既似ニ瘧病、未レ出前、臥床之苦、或三四日、或五六日、瘡出之間亦經三三四日、支體府藏大熱如レ燒、當ニ是之時、欲レ飲ニ冷水、固忍莫レ飲、瘡入(拾芥抄又ニ作ル)欲レ愈、熱氣漸息。痢患更發、早不ニ療治、遂成ニ血痢、痢發之間、或前或後、無レ有ニ定處、其共發之病、亦有ニ四種、一、或咳嗽、或嘔逆、或吐血、或鼻血、此等之中、痢是最急、宜下知ニ此意ニ能勤ニ救治上、以ニ肱中並綿、能勒ニ腹腰、必令ニ溫和、勿レ使ニ冷寒、鋪設既薄、死レ臥ニ地上、唯於ニ床上、敷ニ簣席得ニ臥息、粥饘並煎飯粟等汁、溫涼任レ意可レ用好レ之、但莫レ食ニ鮮魚肉及雜生菜菓、又不レ得ニ飲レ水喫レ氷、固可ニ戒慎、其及ニ痢之時、能煮ニ薤葱、可ニ多食、若成ニ赤白痢者、糯粉和ニ八九、沸令レ煎、溫飲再三、又糯糲糯、以ニ湯饘ニ漉レ之、若有不レ止者、用五六度無レ有ニ怠緩、其糯春碎勿レ令レ全、凡此病者、定惡ニ飯食、必宜ニ強喫、始從ニ患發、炙レ火海松並擣鹽屢含ニ口中、若口舌雖レ爛可レ用良之、病愈之後、雖レ經三二十日、不レ得レ輒喫ニ鮮魚生菜菓、飲水及浴洗、房室強行步當ニ風雨上、若有ニ過犯、霍亂必發、更亦下利、所謂勞發、更動之病、名曰ニ勞發、兪附、扁鵲豈得ニ禁斷、二十日已後、若欲レ喫ニ魚菜、先能煎炙、然後可レ食、但乾鰾堅魚等之類、煎否皆良、乾脯亦好、但鯖及阿遲等魚、雖レ有ニ乾腊、慎不レ可レ食、年魚者煎亦不レ可レ食、其蘇蜜并□等不レ在ニ禁例、凡欲レ治ニ疫病、不レ可レ用ニ丸散等藥、若有ニ胸熱者僅得ニ人參湯、以前四月以來、京及畿内、悉臥ニ疫病、多有ニ死亡、明知諸國百姓、亦遭ニ此患、仍條ニ件狀、國傳ニ送之、至宜寫取、即差ニ郡司主帳已上一人、宛レ使早達ニ前所、無レ有ニ留滯、其國司巡ニ行部内、告ニ示百姓、若無ニ粥饘等料者、國量宜レ賑ニ救官物、具レ狀申送、今便以ニ官印ニ印レ之、府到奉行、正四位下右大辨紀朝臣、從六位下守右大史勳十一等壬生使主、天平九年六月二十六日、拾芥抄ニ載スルトコロノ文、亦略ボコレニ同ジ、寫誤アリテ讀ミ難キトコロアリ、醫心方所載ニヨリテ訂正ス、コレニテソノ大意ハ通ズベシ。

天平九年六月二十六日下ニ諸國、官符 (醫心方、卷十四)

療治疱瘡方、凡是疫病、名ニ赤斑瘡、初發之時、既似ニ瘧疾、瘡出之間、經三三四日、支體府藏、大熱如レ

灼、當_二是之時_一、欲_レ飲_二冷水_一、固忌莫_レ飲、以_レ綿能勒_二腹腰_一、必令_二溫和_一、勿_レ使_二冷寒_一、又鋪設既薄、無_レ臥_二地上_一、唯於_二床上_一、敷_二簣席_一、得_二臥息_一、又粥饘并煎餅粟等汁、溫冷任意可_レ用、又糲粳糯以_レ湯饘食_レ之又病愈之後、雖_レ經_二二十日_一、不_レ得_下輒喫_二鮮魚穴粟菓菜_一、并飲_レ水、及洗浴、房室強行步當_中風雨上、(又鯖及阿遲等魚、并)年魚不_レ可_レ食、但乾鰻堅魚等煎否皆良

コノ頃ハ支那ニテハ唐ノ代ニ當リ、痘瘡ノ方論ハ未ダ具ハラザリシ時ナレバ、從テ我ガ邦ニテモノノ病症ニツキテ確論ナク、痘瘡ハ鬼神ノ病ナリトシテ藥ヲ用ヒズ、清淨ヲ專トシ、幣ヲ諸社ニ奉リテ以テ祈禱ヲ事トセリ。又初メ痘瘡ノ何物タルヲ知ラズ、單ニ異物トシテ之ヲ恐レ、或ハ假屋ヲ造テ別居セシメ、或ハ山奥ニ携ヘ行キ、人家ヲ隔テ人路ヲ絶チタリ。本朝世紀ニ曰ク『聖武皇帝朝、從_二蕃帆_一、痘到_二天下_一、自_レ是患_二此艱_一者多焉、時人稱_二異病_一、造_二別居_一、使_二病者山居_一、猶_二有_レ喪者_一他、故曰_二喪瘡_一』ト。コノ如キ隔離ノ方法ハ支那、韃靼ニモ用ヒラレ、西洋ニアリテモ近時ニ至リテ猶ホ隔離ヲ主張セル人アリキ。

奈良ノ朝、七十餘年ノ間ニ、疫病ノ流行スルコト二十餘回、ソノ中天平七年及ビ九年ノ疫病ハ、痘瘡ナリシコト既ニ前段ニ詳述シタリ。ソノ餘ノ疫病ハ果シテ何ノ病ナリシヤ、記錄詳ナラズシテ之ヲ確證スルニ由ナシ。左ニ疫病流行年紀ヲ示ス。

慶雲四年十二月伊豫國疫○和銅元年二月讚岐國疫三月山背、備前二國疫七月但馬、伯耆二國疫○和銅二年正月下總國疫六月上總、越中、紀伊三國疫○和銅三年二月信濃國疫○和銅四年五月尾張國疫○和銅五年五月駿河國疫○和銅六年二月志摩國疫四月大隅、大和二國疫

神龜三年六月諸國疫疾○天平七年八月太宰府管内諸國疫瘡大發自夏至冬天下患_二豌豆瘡_一、夭死者多○天平九年四月太宰府管内諸國疫瘡時行、百姓多死經夏涉秋公卿以下、天下百姓、相繼歿死○天平十九年四月紀伊國疫○天平勝寶元年二月石見國疫○天平勝寶八年四月遣_二醫師禪師官人各一人於左右京、四畿內_一、救_二療疾疫之徒_一天平寶字四年三月伊勢、美濃、若狹、伯耆、石見、攝津、備中、備後、備前、周防、安藝、紀伊、讚岐、伊豫等國、疫疾

寶龜元年六月京師飢疫甲寅祭_二疫神於京師四隅畿內十界_一○寶龜二年三月令_二天下諸國祭_二疫神_一○寶龜三年六月讚岐疫○寶龜四年五月伊賀國疫七月祭_二疫神於天下諸國_一○寶龜五年二月讀_二經於天下諸國_一、禳_二疫病_一也○寶龜六年六月祭_二疫神於畿內諸國_一○寶龜八年二月祭_二疫神於五畿內_一○寶龜九年三月於_二畿內諸界_一祭_二疫神_一○寶龜十一年三月駿河國疫五月伊豆國飢疫

醫事制度

コノ期ニ於ケル醫事制度ハ一ニ大寶ノ令ニ依リ、一二ノ修正ヲコレニ加ヘタルノミ、今續日本紀、類聚國史ニ載スルトコロニヨリ、醫事制度ニ關スル詔勅法令ヲ左ニ鈔録スベシ。

養老五年正月甲戌詔シテ曰ク、『文人武士、國家所_レ重、醫卜方術、古今斯崇、宜_再擢_下於_二百僚之內_一、優_二遊學業_一、堪_レ爲_二師範_一者_上特加_二賞賜_一、勸_レ勵後生』ト、ヨリテ吉宜、吳肅胡明、秦朝元、太羊甲許母ニ各絶十疋・絲十絢・布二十端・楸二十口ヲ賜ヘリ。

吉宜、初メ僧タリ、惠後ト稱ス。文武天皇四年勅ヲ奉ジテ還俗シ、吉姓ヲ賜ヒ、和銅中進ミテ從五位上ニ叙セラレ、神龜元年五月吉田連ノ姓ヲ賜フ、天平二年三月陰陽醫道天文曆數諸博士ヲシテ弟子ヲ教授セシム、宜ソノ首タリ、同五年圖書頭ト

ナリ、同十年典藥頭トナル、宜醫方ニ精シク、又詞藻ヲ善クス、ソノ詩歌載セテ万葉和歌集・懷風藻ニ在リ、年七十二ニシテ卒ス。

吳肅胡明、養老五年從五位上ニ進ミ、神龜元年五月御立連ノ姓ヲ賜フ。

秦朝元、父辨正、幼ニシテ出家シ、大寶中唐ニ赴ムキ、圍棋ヲ善クスルヲ以テ唐主ニ厚遇セラル、二子アリ、朝慶、朝元、辨正ト朝慶トハ彼ノ邦ニ死シ、朝元獨リ歸ル、ソノ醫方ニ通ズルヲ以テ從六位下ニ叙セラル、天平九年圖書頭トナリ、同十八年主計頭トナル、ソノ唐語ヲ善クスルヲ以テ天平二年勅ヲ奉ジテ譯官ヲ兼ヌ、後再ビ唐ニ赴ムキ歸朝シテ尋テ卒ス。太羊甲許母、(懷風藻ニ許率母ニ作り、續日本紀ニ胼巨茂ニ作ル、皆同人ナラン) 醫方ニ精シキヲ以テ從六位下ニ叙セラル、後正六位下ニ進ミ、神龜元年城上連ノ姓ヲ賜フ。

養老六年十一月甲戌、始メテ女醫博士ヲ置カル、大寶ノ令ニハコノ官ナシ、故ニ之ヲ令外ノ官トス。(榊原芳野曰ク、『醫疾令に「女醫、取ニ官戸婢年十五以上、二十五以下、性識慧了者三十人」、別所安置、教以ニ安胎、産難、及創腫、傷折、針灸之法」、皆案レ文口授、毎月醫博士試、年終内藥司試、限ニ七年一成」とあるは、即女醫博士にして、男子ならざるものなり、其後女子にしては、其誤失あるべきを以て、別に男子の博士を置かれしなるべし』ト^①、コノ説何ニ據リシカ明カナラズ。余思フニ、女醫ヲ教フルモノ始メテ醫博士ノ分擔スルトコロナリシヲ、ココニ至リテ始メテ専門教授ノ職ヲ置カレシナラン、後章ヲ参照スベシ。)

神龜五年八月、諸國ノ史生・博士・醫師ノ員、並ニ考選ノ叙限ヲ改定ス。史生ハ大國ニ四人、上國ニ三人、中下國ニ二人、六考ヲ以テ成選シ、滿チテ即與ニ替ル、博士醫師ハ八考ヲ以テ成選ス、但シ博士ヲ補スルコトハ三四國ヲ惣テ一人ナリ。醫師ハ國毎ニ補ス、選滿チテ與ニ替ルコト史生ニ同ジ。

天平二年三月、陰陽醫術及ビ七曜頒曆等ノ類ハ、國家ノ要道ニシテ、廢闕スルコトヲ得ズ、諸博士ヲ見ルニ、年齒衰老ス、若シ教授セズンバ恐ラク絶業ヲ致サン、ヨリテ吉田連宜等七人ニ、各弟子ヲ取テ、將テ業ヲ習ハシメ、ソノ時服・食料モ亦大學生ニ準ゼリ。

天平寶字元年十一月癸卯、勅シテ曰ク『頃年諸國博士醫師、多非ニ其才ニ、詫請得レ選、非ニ唯損レ政、亦無レ益レ民、自今已後、不レ得ニ更然ニ、其須レ講、醫生者、太素、甲乙、脉經、本草、針生者、素問、針經、明堂、脉訣』天平神護二年五月、神龜五年八月ノ格ニ、醫師ハ國毎ニ一人ヲ補スルトアルヲ改メ、醫師兼任ノ新例ヲ設ク。

寶龜十年、諸國史生博士醫師ノ員數ヲ増シ、史生ハ大國五人、上國ニ四人、中國ニ三人、下國ニ二人、四歳ヲ以テ限トナス、ソノ博士醫師國ヲ兼ヌルモノハ學生ハ齋粮ニ勞シ、病人ハ救療スルニ困シムニヨリテ、國毎ニ各一人ヲ置キ、六考ヲ以テ遷替ス、以後恒武トナセリ。

參考書籍

- ① 續日本紀 四十卷 菅原眞道等奉勅撰 延曆十三年成
- ② 萬葉集 卷五
- ③ 痘志 吳秀三、富士川游共著 明治二十九年刊
斷毒論 橋本伯壽著 文化七年刊
國字斷毒論 橋本伯壽著 文化八年刊
叢桂偶記 原南陽著
國家痘疹戒草 池田獨美著 文化三年刊

- ④ 痘疹發疹 河洛英著
痘疹叢書 哀仁著
誠書痘疹 談金章著
- ⑤ 張氏醫通
- ⑥ Victor Fossel, Geschichte der epidemischen Krankheiten. 1902.
- ⑦ 麻疹考 屋代弘賢著
國史眼 帝國大學印行
- ⑧ 斷毒論 橋本伯壽著
本朝醫談 奈須柳村著
- ⑨ 文藝類纂 榭原芳野著
- ⑩ 類聚符宣抄 卷三 疱瘡事
- ⑪ 拾芥抄

① <http://www.umoregi.com/koten/syokunihongi/index.html>

②

<https://ja.wikisource.org/wiki/%E4%B8%87%E8%91%89%E9%9B%86/%E7%AC%AC%E4%BA%94%E5%B7%>

BB

③

④ DOI: 10.11501/2567898

⑤ <https://cext.org/wiki.pl?if=gb&res=122917>

⑥ https://books.google.com/books/about/Handbuch_der_Geschichte_der_Medizin.html?id=ZrYRAAAAYAAJ

⑦ <https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11F0/WJJS07U/2321315100/2321315100100010/mp00813700>

⑧ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00002481>

⑨ DOI: 10.11501/991271

⑩ DOI: 10.11501/1215371

⑪ DOI: 10.11501/2543897

第四章 平安朝ノ醫學

桓武天皇ノ延暦三年ニ、帝都ヲ平安ニ遷シタマヒシヨリ、文治二年、源賴朝ガ幕府ヲ鎌倉ニ開キシトキマデ、凡ソ四百年ノ間ヲ平安朝ト曰フ。曩ニ隋・唐ト交通シテヨリ、古代祭政一致ノ治ハ漸次ニ變化シ、コノ期ニ至リテハ敬神崇佛ヲ以テ國政ノ大綱トナシ、嵯峨天皇以來ハ朝野共ニ佛教ノ歸依殊ニ深ク、國民ノ思想ハ一ニ佛教ノ左右スルトコロトナリ、疾疫起レバ僧徒ヲシテ加持祈禱セシメテ、醫藥ヲ後ニシ、穢惡ヲ忌ムノ極、病人ヲ厭ヒテ之ヲ路上ニ棄ツルノ弊習スラアルニ至レリ^①、而シテ佛教ニ竝ビテ隋・唐ノ陰陽五行ノ說ナドモ傳ハリ、陰陽寮、陰陽博士アリテ朝儀ニ拘忌多ク^②、風俗ハ唐風ヲ模シテ益々浮華トナリ、人民ノ意氣ハ佛教ヲ尊崇スルト共ニ消沈セリ。我ガ醫學ハ斯ノ如キ、社會ノ風潮ニ乗ジ、奈良朝ノ醫學ガ將ニ執ラントセシ方向ニ進歩シ、力ヲ窮メテ唐ノ醫學ニ依倣シ、殊ニ遣唐留學生ノ歸朝シテ盛ニ唐醫方ヲ唱道セルニ依リ、名醫哲匠モコノ間ニ世ニ現ハレ、斯學上ノ著述モ、コノ期ニ成レルモノ尠カラズ。少ナクトモ、京師ノ醫學ガ、コノ期ニ至リテ、蔚然トシテ勃興セシコトハ、事實ナレドモ、而カモコレハ例之バ形骸ハ支那ニ模擬シナガラ、ソノ精神ハ印度ノ思想ヲ移サントスルニテ、敢テ兩者ヲ融和セルニアラズ、又固ヨリ之ヲ同化シタルニモアラズ、當時ノ社會ガ神ト佛トヲ混淆シ、遂ニ神ニシテ菩薩ノ稱アルニ至リシト同様ノ奇觀トスベシ。以下コノ期ニ於ケル醫學ノ各科ニツキテ、論述セントスルニ先ダチ、コノ期ニ於ケル醫學ヲ代表スベキ著述ニツキテ一言セントス。

大同類聚方

大寶醫疾令ノ制ニ據レバ、當時醫生ノ讀習スベキハ、甲乙經・脈經・本草・素問・黃帝針經・明堂・小品方・集驗方等船載ノ醫書ナリシガ、コレニ次ギテ病源候論ヲ始トシテ隋・唐ノ醫書行ハレタリ。シカルニ平城天皇古傳ノ失スルヲ憂ヒタマヒ、命ヲ國造・縣主・稻置・別・首、又ハ諸國大小神社、又ハ民間ノ名族・舊家等ニ下シテ、ソノ傳來スルトコロノ藥方ヲ徵集シ、出雲廣貞・安倍眞直等ヲシテ之ヲ選出類聚セシメ、大同類聚方百卷ヲ撰バシメタマフ。是ニ於テ古ノ遺方復々世ニ現ハレタリ。

出雲廣貞ハ攝津ノ人、侍醫トナリ、中外記、典藥助、美作權掾ヲ兼ヌ、延暦二十四年、天皇弗豫、廣貞御藥ヲ奉ジテ功アリ、爵一等ヲ進メラル、大同三年勅ヲ奉ジテ、安倍眞直ト與ニ大同類聚方一百卷ヲ撰ヌ、又別ニ命ヲ蒙ムリ、唐制ニ依リテ藥舛大小ノ量ヲ定ム。廣貞後ニ内藥正ニ舉ゲラレ、宿禰ノ姓ヲ賜フ、難經開委ノ著アリ、貞觀十二年歿ス。(日本後紀・類聚國史・本朝醫書目錄)

安倍眞直ハ左京ノ人、弘仁二年進ミテ主殿頭兼豐後守トナリ、次デ左少辨ニ任ゼラル。

日本後紀大同三年ニ『先是、詔ニ衛門佐從五位下兼左大舍人助相模介安倍朝臣眞直、外從五位下侍醫兼典藥助但馬權掾出雲廣貞等一、撰ニ大同類聚方一、其功既畢、乃於ニ朝堂一、拜レ表曰、臣聞長桑妙術、必須ニ湯艾之治一、太一秘結、猶資ニ鍼石之療一、莫レ不ニ藥力迥助一、拯ニ殘魂於阨厄一、醫方所レ鍾□□遺命於斷□□雖下一ニ貫典墳一澄中心願上、猶復降ニ懷醫家一、汎觀ニ攝生一、乃詔ニ右大臣一、宜レ令下侍醫出雲廣貞等、依ニ所レ出藥一撰中集其方上、臣等奉宣修□□在ニ尋詳一、愚情所レ及、靡ニ敢漏一、□成ニ一百卷一、名曰ニ大同類聚方一、宜校始訖、謹以奉進、

但凡厥經業、不_二詳習_一、年代懸遠、注紀絲錯、臣等才謝_二稽古_一、學拙_二知新_一、輒呈_二管窺_一、當_レ夥_二紕謬_一、不_レ足_下對_三揚天旨_一酬_中答聖恩_上、悚慙之_レ墜_三氷谷_一、謹拜表以聞、帝善_レ之_レトアリ。ソノ『依_三所_レ出藥_二云々_一』ト言ヒ、又『注紀絲ノ如ク錯ル云々』ト言フニ依リテ、當時サル家家ニハ各々古書ヲ傳ヘタルコトヲ知ルベシ。惜イカナ、大同類聚方ハ佚シテ今ニ傳ハラズ、ソノ今日ニ存スルモノハ皆後人ノ僞撰セルモノニ係ル。佐藤方定世ニ傳ハレル大同類聚方ノ僞本ナルコトヲ辯ジテ曰ク、『其文體大かた詔辭_ノ體なれど、大同三年に此書を奉りし表も、漢文にて、其頃は何書にまれ、皆然りき、其同時にたりし古語拾遺も然なり』。『後紀に安倍眞直と云人見えたれど眞貞と云人見えず、はた眞直、當時典藥頭にあらざ、廣貞は外從五位下にて、其頃の姓は連にて、宿禰の姓を賜はりしは弘仁三年六月の事にこそあれ、如此名實年數の誤あるは、彼の正しからざるを示す也』。『古林見宜の醫療歌配劑に大同類聚方曰、痘瘡、初起_レ自_下聖武天皇御宇、釣者遇_三蕃人_一、繼_中此病_上、稱_二裳瘡_一、一兒患_レ之、則一村流行也、猶_三裳之曳下_一、故名焉、初生兒、食_三金箔_一、不_レ患_レ之、といへり、此文わづかなれども、今世の文ならず、後紀の表と併せ考るに、此文を正と、すへし、彼書此文に協はず』。『彼書、用藥部の知母と云物の條に、加賀國より出づといへれど、史には越前國加賀郡とありて、別に一國と成りしは弘仁十四年、割_三越前國_一、置_三加賀國_一とありて、大同三年より十五年後の事なるをや』。『其小便の色を云へる條に、茶の如しとあり、茶は嵯峨天皇の頃より、史に見えたれば、其頃有るべからず、在れども未だ近く譬に取るばかりにはあるべからず』。『當世の風病と云ひしは、後世の風の病とは異なるを、今俗に風といふ物の如く記し、は、古を知らぬものゝしはぎなり』。『我師今の鈴屋大人云、此書の辭體を按ふに、北條氏執權の頃の人の物せしにやといはれき、是に依て又考ふるに、當世より其書ありて、別に何とか、名ありけむを近世に癡人の大同類聚方などいふ、よき名附けたるか、又其頃の人、即ち僞作のたるにもあらむ。』^③

今ノ世ニ傳ハレル大同類聚方ニハ天明年間大阪ト江戸トニテ梓行セル拔萃本アリ、コハ文治元年丹波良康ガ抄録セルモノナリトノ跋文アレドモ、何レモ纒カニ十三方バカリヲ擧ゲタルノミ、奈須柳村ガ之ヲ評シテ『古方ニ近キモノアリト雖モ、亦全ク信ズベカラズ、文治ノ奥書アルベキモノトハ見ヘズ』ト言ヒシハ至當ナリ^④。全書トシテ傳ハレルモノニハ眞田本（京都西陣人眞田平之進藏本）・出雲本（出雲宿禰貞俊藏本）・畑本（京都畑柳啓藏本）・北畠本（北畠家ヨリ出タル本）・豐後本（武藤直記上刻本）ヲ始メトシ、因幡本・衣川本・松岡本・駿河本・延長本等アレドモ^⑤、大同小異ニシテ、概スルトコロ、出雲本・眞田本ニ書ノ體裁ヲ出デズ、ソノ一ハ一卷ヨリ百卷マデアリテ、初メニ用藥ヲ記シ、ソノ一ハ一卷ヨリ二十四卷マデヲ缺ギ、二十五卷ヨリ百卷マデヲ存シ、終ニ用藥ヲ記シタリ。ソノ加差也万比、乃無止加世、加差甫呂之、比衣也万比、奈川介、波支古支、比布利也末比、安波波支、須波不支、阿反支也万比ノ十卷ハ、ソノ他ノ諸卷ト體裁稍同ジカラズ、畑本・篠崎本ニハコノ十卷ヲ二十五卷ヨリ三十四卷ニ收メタリ、ソノ他ノ卷ト同一人ノ手ニ成ルモノニアラズ。用藥ハ一卷ヨリ十三卷マデニ收メタルト、九十六卷ヨリ百卷マデニ收メタルトノ二様アリ。ソノ記述ノ體裁ハ、コノ頃ノ撰述ニ成レル藥經太素（コノ書ハ大同類聚方ノ撰述ニ先ダツコト十餘年、延暦年間ニ和氣廣世ノ撰述スルトコロナリ）及ビ當時專ラ世ニ行ハレタル神農本草經・新修本草（殘缺ノ儘マ今ニ傳ハル）等ト同ジカラズ。奈須柳村曰ク『用藥部ノ諸卷、其作殊ニ拙シ、本文ニアル藥物ヲ載セザルモノアリ、又此ニアゲタル品、本文ニナキモアリ、近代ノ俗醫僞作シテ、卷數ヲ充テシ物ナリ、且山草部（用藥ノ始ニ載ス）ト云フ辭ハ李時珍ノ本草綱目ニ依リテ下セシ名目ナルベシ』^⑥。河内全節曰ク『今世ニ流布スル大同類聚方數種アリ、然レド殘缺誤脫ノミニアラズ、後人ノ僞託ナラン、其故ハ流布本ノ方法ハ傷寒論及ビ千金方ノ法ト略ボ同一ナルヲ以テナリ』^⑦。ソノ他諸家ノ大同類聚方流布本ノ眞僞ニツキテ說ヲナスモノアレドモ^⑧、之ヲ要スルニ、今日流布スルトコロノ大同類聚方ハ後人ノ假託ニ出ヅル僞本タルコト疑ヲ容レザルトコロナリ。

金蘭方

清和天皇ノ貞觀年間、菅原岑嗣勅ヲ奉ジテ物部廣泉・當麻鴨繼・大神庸主等諸名醫ト共ニ金蘭方ヲ撰定セシコト、三代實錄ニ見エタリ。本朝醫書目錄仁和寺御室書目ノ中ニモ『金蘭方 出雲廣貞男、菅原岑嗣奉レ勅撰五十卷』トアリ。惜カナ、コノ書亂世ニ佚シテ今ニ傳ハラザルナリ。

菅原岑嗣ハ左京ノ人、父出雲朝臣廣貞、醫術ニ長ジ、官正五位下信濃權守トナル、淳和天皇潛龍ノ日、岑嗣ヲシテ春宮ノ藩邸ニ侍セシム、岑嗣自カラ申請シテ、家業ヲ繼ガント欲ス、仍テ醫得業生ニ補セラレ、弘仁十三年、左兵衛醫師ニ叙セラレ、十四年醫博士ニ遷ル、天長四年内藥佐ヲ兼ヌ、七年侍醫ヲ兼ネ、八年攝津大目ヲ兼ヌ、是年醫博士ヲ物部廣泉ニ譲リ、十年春宮坊主膳正トナル。内藥佐侍醫攝津大目并ニ故ノ如シ、承和二年從五位下ヲ授ケラル、累遷シテ典藥頭トナル。貞觀五年自カラ老ヲ謝シ、出デテ攝津權守トナリ、豊島郡山莊ニ退居シ、藥ニ灌キ、性ヲ養ヒ、流俗ニ交ラズ、十年出雲姓ヲ改メテ菅原トナス、土師出雲ト同祖ナルヲ以テナリ、貞觀十一年卒ス、時二年七十八。岑嗣家名ヲ墜サズ、處治必ズ効アリ、嘗テ勅ヲ奉ジテ、諸名醫ト共ニ金蘭方ヲ撰定ス、又針艾ノ加フルトコロ、方注ノ外多ク、後進ノ備今ニ至ルマデ妙ト稱ス。(三代實錄、卷十七) 物部廣泉、ソノ傳ハ後ノ養生科トコロニ出ヅ。

當麻鴨皿繼、齋衡三年典藥殘頭トナリ、後主殿頭ニ轉ジ侍醫ヲ兼ヌ、貞觀十五年三月卒ス。

大神庸主ハ右京ノ人、本姓神直、後大神朝臣ノ姓ヲ賜フ、承和二年左近衛醫師トナリ、侍醫ニ遷リ、貞觀二年内藥正ニ任ズ、同年卒ス、年六十三。

金蘭方ノ今ノ世ニ存スルモノハ、北畠家傳來本ト稱スルモノニシテ、貞觀十年ニ從五位下東宮坊主膳正兼攝津大目菅原岑嗣、從五位下醫博士兼侍醫物部朝臣廣泉、從五位下典藥頭當麻真人鴨繼、從五位下典藥頭大神朝臣庸主等勅ヲ奉ジテ撰セルヨシ、岑嗣ノ自序ニ見エタリ。文政年間大江廣彥ガ校正シテ刊行セルハコノ書ニシテ、ソノ内容ヲ檢スルニ、調進藥方ノ如キハ、延喜式ヲ抄セシモノノ如ク、醫方ハ主ニ千金方ニ依倣セルモノニ似タリ、ソノ後人ノ僞撰ニ係ルコトハ多辯ヲ要セザルトコロナリ。^③

醫心方

醫心方ハ丹波康賴ノ撰述スルトコロニシテ、全部三十卷、主ニ隋ノ巢元方ノ病源候論ニ依リテ、說ヲ立テ、參ユルニ隋・唐方書百餘家ノ論ヲ以テシ、主療諸方ヨリ本草・藥性・明堂・孔穴・養生・服石・房內・食餌等ニ至ルマデ科ヲ分チテ抄録シタリ。一代要記ニ據レバ康賴ガコノ書ヲ撰ビシハ天元五年ニシテ、圓融天皇ノ永觀二年十一月二十八日、書成リテ之ヲ奏進セリト言フ(丹波氏系圖)。是ヨリ以前ノ撰述ニ係レル大同類聚方・金蘭方ノ二書ハ佚シテ傳ハラザルガ故ニ、醫心方ヲ以テ、現ニ今日ニ存スル本邦古醫書中ノ最モ古キモノトナスベシ。

丹波康賴ハ丹波、矢田郡ノ人、ソノ先ハ後漢ノ靈帝ニ出ヅ、靈帝五世ノ孫ヲ阿留王ト曰フ、應神天皇ノ時歸化ス、天皇之ヲ大和國檜隈郡ニ封ジ、以テ使主トナス、ソノ子都賀ニ子山木、志努アリ、志努別ニ家ヲ成シ、出デテ丹波國ニ居ル、ソノ子駒子、子弓束、子首名、子孝子、子大國、康賴ハ大國ノ子ナリ、特ニ醫術ニ精シ、丹波宿禰ノ姓ヲ賜ヒ、累遷シテ鍼博士、左衛門佐、兼丹波介ニ至ル、天元五年醫心方三十卷ヲ撰ス、ソノ書隋・唐方書ヲ摺摭シ、稱シテ本邦方書ノ府庫トナ

ス、永觀二年書成リテ奏進ス、又以テ諸生ヲ課試ス、長徳元年四月十九日歳八十四ニシテ歿ス。(丹波氏系圖・一代要記・左經記・延慶本醫心方) ⑨

醫心方三十卷、秘府ニ藏セラレ、人間得テ窺フコトナカリキ、加之保元・平治以後、兵燹相踵ギ、是書若存若亡ノ間ニ在ルコト數百年、正親町天皇ノ時ニ至リ、出ダシテ之ヲ典藥頭半井氏ニ賜フ。寛政ノ初年、徳川幕府、仁和寺文庫所藏ノ醫心方ヲ謄寫シ、コレヲ醫學館ニ藏セシム、而カモソノ書殘脫半バニ居ルヲ以テ、安政年間更ニ旨ヲ半井氏ニ傳ヘ、ソノ醫心方全帙ヲ醫學館ニ出ダサシメ、多紀元堅・喜多村直寛・多紀元琰・多紀元侖等諸學士ヲシテ校勘セシメ、梓ニ上ボシテ之ヲ世ニ公ニス、今日現ニ傳ハルトコロノ刊本醫心方即チコレナリ。⑩(徳川幕府醫學館ニテ校刻シタル醫心方全部三十卷ノ木版ハ明治維新ノ際、コレヲ東京大學ニ引キ繼ガレタルガ故ニ、明治年間數回印刷製本セラレシガ、惜シイコトニハコノ木版ハ大正十二年關東大震災ノトキニ全部焼失シタリ。)

醫心方三十卷ハ實ニ今ヨリ九百餘年以前ノ撰述トシテ、又我が邦ニ現存スル醫書ノ最古ノモノトシテ、之ヲ稀世ノ珍トスベキノミナラズ、ソノ中ニ支那ニハ既ニ佚亡セルトコロノ逸書遺典ノ文ヲ收メタルモノアリ、之ニ依リテ當時隋・唐醫學ノ真相ヲモ窺フコトヲ得ベキ絶世ノ鴻寶ナリ。左ニ醫心方ニ引用セル隋・唐方書ノ名目ヲ掲グ。

病源論。素問經。千金方。太素經。針灸經。明堂經。蝦蟇經。脉決經。醫門方。葛民方。小品方。劉涓子鬼遺方。廣濟方。効驗方。錄驗方。僧深方。范汪方。令季方。集驗方。經心方。養生方。徐伯方。單驗方。龍門方。隨時方。百濟新集方。傳言方。樣要方。芳氣方。耆婆方。張伸景方。廣利方。承祖方。玉霜方。新錄方。靈奇方。枕中方。如意方。龍樹方。聖惠方。玄感方。應驗方。博濟安衆方。華陀方。孟詵方。乍來方。撰集要方。玄感傳屍方。急樂方。刪繁方。雜酒方。療眼方。煎藥方。陶潜方。本草經。新修本草。陶弘景本草註。本草稽疑。本草拾遺。養生要集。金匱錄。大清經。延壽赤書。玉房秘訣。玉房指要。玄女經。產經。子母秘錄。岷康養生論。眼論。朱思簡食經。神農食經。孟詵食經。馬琬食經。新撰食經。崔禹錫食經。七卷食經。本草食禁。養生志。膳夫經。招魂丹方。

醫心方ハコノ如ク、隋・唐方書百餘家ヲ摺摭シ、以テ當時ノ醫方ノ全體ニ就テ記述セルモノニシテ、殊ニソノ眞本ノ今ニ傳フルモノアルガ故ニ、吾人ハコノ書ニ依リテ、コノ期ニ於ケル我が邦醫學ノ狀勢ヲ窺フコトヲ得ベシ。

解剖學

支那ノ古醫書靈樞ニ『其死可ニ解剖而視レ之』ノ語アリ、漢書王莽ガ傳ニ翟義ノ黨王孫慶ヲ誅シ、大醫尙方ト巧屠トヲシテ共ニ之ヲ剝割セシメ五藏ヲ量度セルコトヲ記シ、又文献通考ニ楊介ノ存眞圖一卷ノ名ヲ掲載セリ。ソノ他、歐希範ノ解剖圖・華陀ノ内照圖ト稱スルモノアリ。コレニ據リテ見ルニ、支那ノ古代ニアリテ、人ノ屍ヲ解キ視タルコトナキニアラザリシモ、ソノ觀察ハ固ヨリ甚ダ粗鹵ニシテ、僅カニ臟腑ノ名目ヲ舉グルニ過ギザルナリ。骨・ニツキテハ完骨・枕骨・曲領骨・缺盆骨・叉骨・巨骨・肩骨・肘外大骨・肘内大骨・輔骨・踝骨・兌骨・椎節・腰臑骨等ノ名目ヲ舉グト雖モ、コレ經絡ノ循行ヲ示スノ標點トセルニ止マリ、固ヨリ各骨ニツキテ精細ノ記述ヲナセシニアラズ。脊椎ハ二十一節ヨリ成レリト説ケリ。

筋肉及ビ關節ニツキテハ記述スルトコロナシ。

内臟トシテハ、五臟六腑ヲ舉ゲタリ、五臟トハ肝・心・脾・腎ヲ言ヒ、肝ハ木ノ精ナリ、心ハ火ノ精ナリ、脾ハ土ノ精ナリ、肺ハ金ノ精ナリ、腎ハ水ノ精ナリト説キテ、コレヲ五行(木・火・土・金・水)ニ配當シ、四季、色及ビ味モ、ソレニ相應ジテ各個ニ配當セラレタリ。

〔五行〕〔四季〕〔色〕

〔味〕

心臟	火	夏	赤	苦
肺臟	金	秋	白	辛
腎臟	水	冬	黑	鹹
肝臟	木	春	青	酸
脾臟	土	各季節ノ最後ノ十八日	黃	甘

六腑ハ胃・大腸・小腸・膽・膀胱・三焦ニシテ、主要内臓ノ補助タルモノトス。スナハチ大腸ハ傳送ノ府、小腸ハ受盛ノ府、膽ハ中精ノ府、胃ハ五穀ノ府、三焦ハ孤立ニシテ中瀆ノ府、膀胱ハ腹中ノ水府ナリトセルナリ。臟腑ハ脈ニヨリテ連絡セラレ、ソノ脈ハ并ビニ手足ニ出デテ、腹背ニ循環シ、全身至ラザルトコロナシ。而シテソノ脈ハ手ニ三陰・三陽アリ、足ニ三陰・三陽アリ、共ニ之ヲ十二經トス、別ニ任脈・督脈ト稱スルモノヲ擧ゲテ、スベテ十四經トス。而シテソノ經絡ノ出ヅル所、流ルル所、注グ所、過グル所・行ク所・入ル所ノ諸點ヲ孔穴ト名ヅク、ソノ數スベテ、六百六十アリ。(後段鍼科ノ條下ヲ參照スベシ。)

生理學

當時ノ生理學ハ自然哲學的ノ思想ノ上ニ立テルモノニシテ、ソノ根本トスルトコロハ陰陽ノ原理ナリキ。而シテ陰ト陽トノ二個ノ原理ニヨリテ臟腑ノ機能ヲ説明シテ曰ク『藏ヲ陰トナシ、府ヲ陽トナス、臟ハ藏ナリ、神ハ心ニ藏ル、魂ハ肝ニ藏ル、精ハ腎ニ藏ル、魄ハ肺ニ藏ル、志ハ脾ニ藏ル』ト。又曰ク『胃ハ倉廩ノ官、水穀ノ海、六府ノ大源ナリ、大腸ハ傳導ノ官、小腸ハ受盛ノ官ナリ、膽ハ清淨ノ府、中正ノ官ニシテ決斷出ヅ、腎ハ作強ノ官ニシテ技巧出ヅ』ト。頭蓋内ニ腦アルコトヲ知ルモ、之ヲ髓トシテ貴要ナル藏府ノ中ニ算セズ、神經ニツキテハ殆ド全ク無智ニシテ、身體ノ官能ハ、スベテ胸腹内藏器ノ主宰セルモノナリト做セリ。

病理學

醫心方ニ説クトコロノ病理ハ、太素經・素問經・千金方・病源候論・小品方等ノ隋・唐醫書ニ依據セルモノニシテ、コレ等ノ書籍ハ、前期以來我が醫家ノ金科玉條トセシトコロナレバ、ソノ記述セルトコロヲ以テ、當時ノ醫家が信用セルトコロノ病理説トスルモ妨ナカルベシ。而シテ醫心方ハ隋・唐醫書ノ所説ヲ採リ用ヒタルト同時ニ、金光明最勝王經・南海傳等ノ佛書ニ説クトコロノ論ヲモ引用シ、以テ支那醫説ト印度醫説トヲ混淆錯雜シタリ。

疾病ハ外邪ノ侵ストコロトナリテ起ルト、内ヨリ生ズルトノ別アリ。外邪ハ即チ風ニシテ、四時五行ノ氣ナリ、コノ氣ハ八方ニ分佈シ、天地ノ間ニアリテ五行トナリ、人ニアリテ五藏ノ氣トナル。ソノ皮膚ノ間ニ藏ルルヤ、内通ズルコトヲ得ズ、外泄ルコトヲ得ズシテ病ヲ成ス、ソノ經脈ニ入りテ五藏六府ニ行クヤ、各々ソノ藏府ニ從テ病ヲ生ズ。風ハ百病ノ長ナリ。コノ如ク外邪ハ五藏六府ノ盈虛、血脈・榮衛(榮ハ絡脈ノ氣通、衛ハ經脈ノ氣通ナリ)ノ通塞ヲ致シテ、諸般ノ疾病ヲ成スト雖モ、而カモ外邪ヲシテ之ニ乗ジテ能ク病ヲ成サシムルモノハ、寒・熱・風・濕及ビ飲食ナリ。又人ノ虛實・男女・老少・地理・風俗ニヨリテモ疾病ノ成生ニ差異アルナリ、外邪ニ中ラズト雖モ内ヨリシテ病ヲ生ズルハ喜・怒・憂・思ノ神ヲ傷ブリ、貧賤ノ爲メニ形神ノ苦シムニヨリテ疾病ヲ醸スノ類ナリ。

以上記述スルトコロハ唐ノ醫書ニ説クトコロノ病理ノ梗概ナリ。佛書ニ論ズルトコロノ病理ハ夫ノ四大不調ノ説

ニシテ、ソノ梗槩ハ之ヲ奈良朝以前ノ時代ノ醫學ヲ論ズルノ條下ニ記述セシガ、醫心方ニハ更ニ南海寄歸傳ヲ引キテ『四大不_レ調者、一寢嚙、二蠻跛、三畢哆、四婆多、初則地大增、令_二身沈重_一、二則水大積、涕唾乖_レ常、三則火大盛、頭胸壯熱、四則風大動、氣息擊衝』ト説キタリ。

之ヲ要スルニ、既ニ奈良朝以前ノ時代ニ輸入セラレタル支那醫説ト印度醫説トハ爾後四百餘年ノ星霜ヲ經テ、共ニ益々ソノ論ノ精シキヲ致セルノミナラズ、コノ時ニ方リテハ崇佛ノ風最モ盛ニシテ、一意ニ唐ノ制度ニ依倣シ、唐醫書ヲ講習スルニ餘念ナカリシ我ガ醫學モ、勢ヒ又佛説ヲモ採用セザルヲ得ズ、加フルニコノ頃千金方ノ如キ^⑩佛説ニ依リテ論ヲ立テタル唐醫書ノ我邦ニ入レルアリ、益々支那醫説ト印度醫説トヲ混雜シテ、以テ病理ヲ説ク等ノ奇觀ヲ呈スルニイタリシナリ。

内科

大寶令（醫疾令）ニ始メテ醫學ノ専門ヲ別チシトキ、體療ノ科目アリ、令義解ニ註シテ『謂ニ創腫耳目等各別有_一レ生、即除_レ此外、身體諸病、皆悉主治、故惣云_二體療_一也』トアリテ、創腫（外科）・少小（兒科）・耳・目・口・齒、以外ノ身體諸病ヲ主治スルガ故ニ之ヲ體療ト名ツク、體療ノ名ハ唐ノ制ニ倣ヒシモノニシテ、支那ニテハ周ノ代ニ疾醫ト唱へ、宋以後ハ方脈若クハ大方脈ト名ツケ、我ガ朝ニテハ室町幕府時代ニ至リテ之ヲ本道ト名ツケタリ^⑪、後ニ内科ト稱スルモノコレナリ。當時醫生ノ講習スベキハ、甲乙脈經・本草・素問・小品方・集驗方等船載ノ書ニシテ、全然唐醫方ナリシガ、平城天皇古傳ノ失スルヲ憂ヒ、出雲廣貞等ニ命ジテ大同類聚方ヲ選バシメタマヒシヨリ、古ノ遺方復々世ニ顯ハレタリ、而カモ大同類聚方ハ今日ニ傳ハラザルガ故ニ、ソノ内科ガ如何ノ程度ニアリシヤハ、コレヲ詳ニスルコトヲ得ザルナリ。

嵯峨天皇以後、淳和・仁明・文德諸天皇ノ如キ、心ヲ醫術ノ事ニ留メタマヒ、勉メテ醫道ヲ振興セラレシヨリ名醫哲匠ノ輩出セルアリ、羽栗翼・和氣廣世・菅原清・小野藏根・出雲廣貞・物部廣泉・菅原梶成・菅原岑嗣・大神庸主・大村直福吉等ハソノ選ナリ。斯學上ノ著述ノ現ハレタルモノモ尠カラズ。和氣廣世ノ藥經太素、小野藏根ノ太素經集註、物部廣泉ノ攝養要訣、深根輔仁ノ掌中要方、本草和名、出雲廣貞ノ難經開委等ヲ以テソノ主ナルモノトス。

羽栗翼。山背國乙訓郡ノ人、父古麻呂、學生ヲ以テ阿部仲麻呂ニ從テ唐ニ入り、女ヲ娶リテ翼ヲ生ム、翼年十六ニシテ天平六年父ト共ニ歸ル、初メ僧タリシモ後、還俗シテ醫方ヲ學ビ、名醫ノ聞エアリ、延暦五年内藥正トナリ侍醫ヲ兼ヌ、延暦十七年歿ス。

小野藏根。明醫ヲ以テ世ニ聞ユ、集註太素經三十餘卷ヲ撰ブ。

菅原梶成。右京ノ人、醫術ニ精シ、承和元年遣唐使ニ從テ唐ニ入り六年夏歸朝ノ途次暴風ニ遇ヒ辛フジテ大隅ニ漂着ス、十年鍼博士トナル、次デ侍醫ニ任ゼラル、仁壽三年歿ス。

出雲廣貞。傳ハ前ニ出ヅ。

安倍眞直。傳ハ前ニ出ヅ。

物部廣泉。傳ハ別ニ出ヅ。

當麻鴨繼。傳ハ前ニ出ヅ。

大神庸主。傳ハ前ニ出ヅ。

而シテ宇多天皇ノ寛平年間ニ藤原佐世ガ勅ヲ奉ジテ撰述セル日本國見在書目録ヲ見ルニ、醫方家ノ書ハ、百六十餘部、一千三百九卷ノ多キニ及ベリ。ソノ書目ヲ左ニ掲グ。

黃帝素問、十六、全元起注。、素問音訓并昔義 五。素問改錯 二。素女問 十。黃帝甲乙經 十二、玄晏生先撰。甲乙注 四。甲乙義宗 十。甲乙經私記 二。黃帝八十一難經 九、揚玄操撰。八十一難昔義 一、同撰。大清經十二、玄超撰。大清經 二、上下。大清諸草木方集要 一。大清神舟經 上篇一。大清神舟經 一。大清全腋丹經 一。藥園 三、甄立玄撰。藥辨決 一。藥方草本 八十卷。藥石 一。仙藥方 一。仙藥合方 一。神仙服藥倉方經 一。五岳仙藥方 一。五岳芝藥方 一。神藥方 一。雜藥方 一。神仙新藥方 一。神仙入山服藥方 一。桐君藥錄 二。平昌丸方面口雜藥方 一。雜藥方 一、中尉王榮撰。雜藥方 一、徐文伯撰。雜藥方 一、姚大夫撰。雜單藥方 一。採藥圖 二。雜藥論 一。雜藥方 十八卷。雜藥圖 二。新撰方 一。神仙服藥經 一。老子神仙服藥經 一。雜藥 四。法印 一。方集 二十九、尺僧深撰。雜要酒方 八。作酒方 一。五茄酒方 一。要方 十二。集驗方 十二、姚僧垣撰。集驗方方決 一。開允廣濟方 五卷、御製。葛氏肘後方 十。葛氏肘後方 三、陶弘景撰。葛氏百方 九。葛氏方 九。胡洽方 三。張仲景方 九。通玄方 十。通玄 十。新錄單要方 五、魏孝澄撰。鹽上人秘方 一。徐太山隨手方 一。張家方 一。樣要方 十。新修諸要太清秘方十二。惟方 四。孝子孔子枕中雜方 一。大清治方 八。千金方 三十一、孫思邈撰。千金方抄 一。治癰疽方七。五全作方 一。調氣導引方 一。導引法圖 一。新修太清秘經方 十二。石流丹方 一。活婦人方 三。諸香方 一。雜丸方 一。朱沙丸方 一。腎氣丸方 一。雜療 一。神仙法方 一。太一神丹精治方 一。龍樹并和香方 一。經心錄方 六。延年祕錄方 四。練石方 一。養性方 一、許先生撰。生髮膏方 一。枸杞乾煎方 一。治消渴方 一。治馬病方 一。治馬法 六。治馬病書 六。小品 十二。耆婆伏苓散方 一。癰疽論 一。黃帝服經決 十二、王舛和新撰。耆婆脉法 十二、糧羅什注。脉經音 一、揚玄操撰。信修本草二十卷、孔玄拘撰。神農本草 七、陶隱居撰。神農音 七、李君撰。雜注農音 十、蔣孝琬加注。本草圖 二十七。新修本草音義 一、仁捐撰。本草音義 三、甄立言撰。本草音義 一、獻子嚴撰。本草夾注音 一、陶隱居撰。本草注音一、揚玄撰。注本草表序 一、陶隱居撰。食療本草 三、孟記撰。老子教人服藥循常住仙經 一。神仙芝草圖一卷。仙草圖 五。芝草圖 二、上下。黃齋鍼經 九。黃帝書 一、楊玄操撰。類聚方經 百二十。黃帝內經明堂一、揚上善撰。明堂音義 二、揚玄操撰。食經 三、馬琬撰。食經 一、同撰。食經 四、崔禹錫撰。新撰食經 七。食禁 一。食班 一、御注。集驗 十二、錫大夫撰。古今集驗 五十、甄立言撰。古今錄驗 五十。龍樹菩薩眼經 一。脚氣論 一、周禮撰集。產經 十二、德貞常撰。產經圖 三。黃帝針灸經 一。黃帝三部灸經音義 一、季議忠撰。玉遺針經 一、甄立言撰。刪繁論 十、謝云泰撰。劉涓子 十一、龍慶宣撰。內經大素 三十、揚上善撰。如意方 十。攝養要決 二十二。練皮煎 一。醫家雜書 十九。丹決 一。杏丹方 一。徐文伯一。染蘇方法 一。赤松子試 一。八史術 一。八素 八、董暹注。老子道精經 一。五藏論 一。病源論 五十、巢元方撰。素女經 一。禁法 九。靈音奧祕術 一、陶隱居撰。龍樹菩薩印法 一。龍樹菩薩印馬鳴菩薩祕法 一、沙門菩提造。軒轅皇帝錄集 十二。思名 一。三五禁法 八。三五神禁治病圖 一。八史神圖 一。

コレ等ノ書籍ハ、大抵世々入唐セル學士及ビ歸化人ノ齎ラシ來タルモノニシテ、以テ當時唐醫方ノ盛ナリシ一斑ヲ推知スベシ。(案ズルニ、是ヨリ先キ、清和天皇ノ貞觀十七年、冷泉院災アリ、圖書蕩盡スト言フ、現在書目中ニ載セラレタル我が朝醫書ハ鑑上人秘方・攝養要訣ノ二書ノミニシテ、大同類聚方・金蘭方等ノ名ノ見エザルハ畢竟之ガタメナラン。)

仁明天皇ノ承和元年僧空海ガ上奏セル文ニ曰ク『如來說法、有三二種趣一、一淺略趣、一秘密趣、淺略趣者、如二

太素・本草等經^一、論^二說病源^一、分^二別藥性^一、秘密趣者、如^二依^レ方合^レ藥、服食除^レ病、若對^二病人^一、披^二談方經^一、無^レ由^レ療^レ病、必須^四當^レ病合^レ藥、依^レ方服^レ藥、乃得^三消^下除疾患^上、保^二持性命^一、云々^ト。コレ固ヨリ醫家ノ語ニアラズト雖モ、而カモ、コレニ依リテ當時ノ醫家ガ、基礎學科ト臨床學科トヲ別チ、太素・本草等ヲ讀習シテ、病源ヲ説キ、藥性ヲ知ルコトヲ以テ斯學ノ基本トシ、而シテ千金方・小品方・集驗方等ノ諸書ニ依リ、病ニ當リテ藥ヲ合スコトヲ知ルヲ以テ醫術ノ本旨トナセシコトヲ推知シ得ベシ。

醍醐天皇ノ御宇ニ延喜式成リテ、醫生ハ太素經・新修本草・小品方・明堂・八十一難經等ヲ講讀スベキコトガ制定セラレシヨリ、唐醫方ハ愈々隆盛トナリ、圓融天皇ノ朝ニ丹波康賴ガ隋・唐ノ方書百餘家ヲ摺撫シテ醫心方三十卷ヲ撰ビ、次デ康賴ノ曾孫丹波雅忠ガ同ジク唐醫書ニ依リテ醫略抄ヲ著ハスニ及ビテ、我ガ邦ニ於ケル唐醫學ハ殆ド隆昌ノ頂點ニ達シタリ。

丹波雅忠ハ忠明ノ子、長元七年典藥頭ニ試シ、右衛門佐ニ補ス、永承中丹波介トナル、任滿チテ還ル、時ニ後冷泉天皇不豫、雅忠ニ命ジテ藥ヲ上ラシム、効アリ、丹波權守ニ遷ル、又關白藤原某ノ病ヲ治シテ効アリ、某爲ニ奏シテ施藥院使ニ補ス、施藥院專ラ當道ニ任ズルコトハ雅忠ヨリ始マルト言フ。承曆四年高麗王妃病ム、王書ヲ太宰府ニ送リテ、厚幣ヲ以テ良醫ヲ求ム、時人雅忠ヲ以テ選ニ擬シタレドモ、朝廷ソノ書辭ノ禮ヲ失フヲ咎メテ之ヲ却ケ、太宰府ヲシテ報牒セシム、内ニ『雙魚難^レ達^二鳳池之月^一、扁鵲何入^二鷄林之雲^一』ノ語アリ、コレヨリ世ニ雅忠ヲ日本扁鵲ト稱ス。永保元年雅忠、晋・唐方書ニ就テ救急方ヲ摘錄シ、醫略抄ヲ著ハス。寛治二年二月、年六十八ニシテ歿ス。(丹波氏系圖・續古事談・都記・左經記・水左記・朝野群載・十訓抄)^④

而シテ、病理學ノコトハ既ニ前段ニ於テ之ヲ記述セルヲ以テ、ココニ治療ノコトニ就テノミ論述センニ、醫心方ニハ千金方ヲ引テ『爲^レ醫者、當^レ須^下洞^三視病源^一知^中其所^上犯、以^レ食治^レ之、食療不^レ愈、然後命^レ藥、藥性剛烈、猶^レ爲^レ御^レ兵』ト曰ヒ、太素經ヲ引テ、『病先起^二于陰^一者、先治^二其陰^一、而後治^二其陽^一、先起^二于陽^一者、先治^二其陽^一、而後治^二其陰^一、皆療^二基本^一也』ト曰フ。共ニ所謂原因療法ヲ主トスベキヲ唱道スルナリ。治療ノ方式トシテハ『形樂志苦、病生^二於脈^一、治^レ之以^二灸刺^一、形苦志樂、病生^二於節^一、治^レ之以^二熨引^一、形樂志樂、病生^二於肉^一、治^レ之以^二鍼石^一、形苦志苦、病生^二咽喝^一、治^レ之以^レ藥、形數驚恐、筋脉不^レ通、病生^二於不仁^一、治^レ之以^二接摩醪藥^一』(太素經)ト説クト雖モ、之ヲ要スルニ『病ハ湯藥ヲ以テ其内ヲ救ヒ、針灸ヲ以テ其外月ヲ營ム』(內經)ト言フニ在リ、ソノ針灸ハ別ニ針灸ノ一科ヲ立テテ盛ニ研究セラレ、湯藥モ本草ノ講究ニカヲ竭シテ、獨リ藥性ノ吟味ハ甚ダ嚴ナリキ。

欺ノ如ク、唐醫方ノ隆盛ヲ究ムルト同時ニ、前段ニモ言ヒシ如ク、佛法ノ弘通ノタメニ、我ガ醫術ハ著甚ノ影響ヲ被ムリ、或ハ絶粒(醫心方ニ南海傳ヲ引テ曰ク、『若^レ覺^二、四候乖舛^一、即以^二絶粒^一爲^レ先、縱令大渴、勿^レ進^二漿水^一、斯其極禁、或一日二日、或四朝五朝、以^レ差爲^レ期、義無^レ膠^レ柱^一)ノ法ヲ稱揚シ、或ハ服藥ノ咒(醫心方ニ新羅法師ノ方ヲ引テ曰ク、『凡服藥咒曰、南無東方藥師瑠璃光佛、藥王藥上菩薩、耆婆醫王、雪山童子、惠施阿竭、以療^二病者^一、邪氣消除、善神扶助、五藏平和、六府調順、七十万脈、自然通張、四體強健、壽命延長、行住坐臥、諸天衛護莎詞向東誦一遍乃服藥』ヲ施用シ、療病ノ符咒ヲ尊重スル(醫心方中處々ニ療病ノ符咒ヲ擧グ)等、佛教ノ説ガ我ガ醫術ヲ左右スルニ至リシハ現著ナル事實ナリ。

醫家ノ説ニシテ既ニ然リ、當時ノ俗人社會ニアリテハ、佛陀ノカヲ信ズルコト更ニ甚シク、朝廷ヲ始トシテ、諸人ノ疾病ヲ療スルニ、讀經祈禱ヲ主トセシコトハ、續日本紀・日本後紀・續日本後紀・文德實錄・三代實錄等ノ國史ヲ始メトシ、類聚符宣抄・源氏物語・榮花物語等ノ諸書ニ散見スルトコロニ微シテ明カナリ。

長元三年五月二十三日、太政官符ニ曰ク『五畿内七道諸國司、應^レ圖^三寫供^二養丈六觀世音菩薩像一體請觀世音經

百卷一事、右去春以來、疾疫滋蔓、病死儻多、仍寄託内外、雖致三祈禱、空經三旬月、未二期三休除、夫觀世音菩薩者衆生依怙、能施無畏、患三病厄二者、心拔三苦源一、遭三急難二者、乍得三解脫一、就中十一面觀世音、有下頂上佛面除三疫病二之願上、請觀世音經、有下毗舍離國救三苦厄一之教上、旁仰三弘誓一、豈無三冥感一乎、云々、即一七日間、轉三讀佛經一、云々、轉讀之間殊致三潔齋一、斷三絕葷腥一、禁三止屠割一、云々』(類聚符宣鈔卷三)、蓋シ疾病ヲ療スルノ目的ニテ、佛經ヲ轉讀スルコトハ、齊明天皇ノ朝ニ維摩會ノ興リシヲ以テ始トシ(齊明天皇二年、丙辰、内大臣、中臣鎌子連、寢レ疾、天皇憂レ之、百濟禪尼法明誦三維摩偈句一、未レ終疾即痊、中臣連感伏、更令三轉讀一、同三年丁巳内大臣中臣連於三山階陶原家一、始立三精舍一、及設三齋會一、是則維摩會始也^④)。持統天皇ノ朝ニ仁王會アリテ仁王最勝王經ヲ講ジ、次デ聖武天皇ノ朝ニ大般若會アリ、淳和天皇ノ朝ニ最勝會アリ、疾疫災厄アレバ、スナハチ僧侶ニ命ジテコレ等ノ諸經ヲ轉讀セシメラレタルナリ。

外科^⑤

醫疾令ヲ案ズルニ、醫生ノ業ヲ分チテ教習スベキ科目ノ中ニ創腫アリ、コレ後ニ所謂外科ニシテ、當時既ニ少小(兒科)・耳・目・口・齒ノ諸科ト共ニ體療(内科)ヨリ分レテ、醫科ノ一部門ヲナセルナリ。而シテ別ニ鍼科アリテ諸瘡病ヲ療スルノ鍼術ヲ專門トシ、按摩科アリテ骨折(骨折・脱臼)ヲ療スルコトヲ專門トナシタレバ、當時ノ外科ハ、コノ兩科以外ニアリテ、藥物内用及ビ膏藥貼傳等ニヨリテ、瘡瘍ト創傷トヲ治療スルコトヲ主トセシナラム。

當時、創腫ノ教課書トシテ掲ゲラレタルハ鬼遺方・小品方・集驗方。千金方・廣濟方等數書ナレバ、ソノ術ノ程度ハ今ヨリ之ヲ推想スルニ難カラズ。(尙ホ後段ニ述ブルトコロヲ參照スベシ)。仁明天皇ノ承和年間、大村直福吉勅旨ヲ奉ジテ、治瘡記ヲ撰ビタリト言フモ、惜イカナ、ソノ書ハ佚シテ傳ハラズ。我ガ邦第一ノ外科書ガ如何ナル内容ヲ有セシカハ固ヨリ之ヲ詳ニスルコトヲ得ザルヲ憾トス。

丹波康賴ノ醫心方中ニハ、ソノ第十五卷ヨリ第十八卷ニ至ルマデ、創腫科ヲ記述シ、主ニ病源候論・千金方・鬼遺方・醫門方・集驗方・小品方・廣濟方等ノ書籍ヲ引用シタレバ、コノ期ニ於ケル外科方術ノ程度ハ、コレニヨリテソノ梗槩ヲ知ルコトヲ得ベシ、今ソノ要領ヲ擧グレバ左ノ如シ。

該書ニ記述セルトコロノ外科部門ハ、創傷ト瘡瘍ト中毒トヲ論ゼルモノニシテ、ソノ瘡瘍ヲ治スルニハ、主ニ膏藥ヲ用ヒ、化膿ノ傾向アルモノハ局部ニ溫罨法ヲ施シ、或ハ灸ヲ施シ、既ニ膿瘍ヲ成スニ至レバ鉗針ヲ用ヒテ之ヲ破ブリ、膿汁ヲ排泄セシメ、猪蹄湯(猪蹄一具・黃連五兩・芎藭三兩・當歸三兩・甘草三兩・夕藥三兩・薔薇一斤、右七物以三水二斗煮レ蹄、取二斗一、内三諸藥一、復煮、取三四升一、洗レ之。鬼遺方)ノ類ヲ以テ之ヲ洗ヒ、次ニ食肉膏(松脂・雄黃・雌黃・治葛皮・蘆茹・巴豆・猪膏ヲ調勻ス。鬼遺方)ヲ傳ケ、惡肉既ニ散ジ盡クルニ及ビテ、生肉膏(甘草・當歸・白芷・烏啄・蜀椒・細辛・薤白・干地黄・猪肪ヲ調勻ス。鬼遺方)ヲ貼スルヲ法トス。若シ鉗針ヲ用ヒテ之ヲ破ルコトヲ懼ルル場合ニハ、鹿角細末ヲ醋ニテ練リタルモノヲ局部ニ貼シ、又ハ空腹ニ葵子ヲ服セシムル等ノ法ヲ用フ。又消炎鎮痛ノ目的ニハ、水蛭ヲ貼シ、冷石又ハ冷鐵ヲ以テ腫上ヲ熨シ、又ハ糝粉ヲ熬テ黒クシ、鷄子白ヲ以テ練リテ之ヲ腫上ニ傳クル等ノ法ヲ行フ。内服藥トシテハ膿瘍ヲ消散スルノ目的ニテ内消散(赤小豆・人參・甘草・白薇・當歸・瞿麥・猪苓・防風・黃芩・黃耆・薏苡仁・舛麻ヲ調勻ス。千金方・廣濟方)ノ類ヲ用ヒ、止痛化膿ノ目的ニテ、犀角丸(犀角・舛麻・大黃・黃芩・防風・雨當歸・黃耆・支子仁・乾薑・黃蓮・人

參・甘草・巴豆ヲ調勻ス。廣濟方)ヲ用ヒ、常ニ微痢セシム。延喜式、元日御藥、藹月御藥ノ部ニ犀角丸・千瘡万病膏等ヲ載セ、源順ノ和名類聚鈔ニモ犀角膏・烏犀膏・大黃膏・犀角丸・排膿散等ヲ擧ゲタルヲ見テ、當時治瘡ノ術ガ上述ノ範圍ニ止マリシコトヲ知ルベシ。

創傷ニ對シテハ、止血ノ目的ニ石灰・紫檀屑・白灰・牡蠣末・石膏末等ヲ撒布シ、或ハ葛葉・生青蒿・艾葉等ヲ揉ミテ之ヲ貼シ、故キ布帛ニテ繃帶シテ、尙ホ止血セザルトキハ、食鹽内服(葛氏方)ヲ命ジ、或ハ蒲黃粉ヲ撒布シ、青布ヲ燒テ灰ト作シテ之ヲ付ケ、金創ノ大ニシテ創口ノ哆開スルモノ、例之金創ニヨリテ腸ノ出ヅル場合ノ如キハ、桑皮ヲ取り、縊テ腹皮ヲ縫ヒ、ソノ上ニ蒲黃粉ヲ付ク(刪繁方)。而シテ金創病者ハ絕對的ニ安靜ナラシメ、瞋怒・大言・大笑・酩酊ノモノヲ食シ、若ハ酒ヲ飲ミ、熱羹ヲ啜ルコトヲ禁ズ。湯火傷ニ對シテハ、冷灰ヲ水ニ和シテ、之ニ潰シ、又ハ鷄子白ヲコレニ塗リ、若クハ、豆醬・石膏ノ類ヲ塗ル。ソノ既ニ創ヲ成スモノハ、白蜜・大豆煎・猪膏・羊脂ノ類ヲ取りテ之ヲ塗ル。獠犬ノ人ヲ嚙ミタルトキハ、ソノ惡血ヲ嗽ギ去リ、其處ニ灸シ、(小品方)又ハ人尿ヲ以テコレニ塗リ(經心方)、燈殘油ヲ取テ創中ニ灌グ(千金方)。外科治術ノ方法ハ概ネコノ類ナリ。

婦人科²¹

支那ノ醫學ニアリテ、婦人科ノ専門ヲ立テシハ、元ノ世ニシテ、コレヨリ先キ、帶下醫・乳醫・蓐醫等ノ目アリシモ、周ノ代ニハ婦人科ヲ疾醫ノ内ニ置キ、唐ニハ體療科(内科)ニ婦人科ヲ含マシメタリ。故ニ唐ノ制度ヲ模倣セル大寶令ニハ婦人科ノ専門ヲ立ツルコトナシ。大寶ノ醫疾令ニ女醫ノ目アリ、後宮職員令(宮人謂婦人仕官者之總號也職員)ニ尙藥、典藥ノ目アレドモ、共ニ婦人科ニアラズ。

醫疾令ニ曰ク『女醫、取^三官戶婢、年十五以上、二十五以下、性識慧了者三十人^一、別所安置、教以^三安胎產難、及創腫傷折、針灸之法^一、皆案^レ文口授、每月醫博士試、年終内藥司試、限^三七年^一成』(政事要略、卷九十五ニ引クトコロニ據ル)

後宮職員令ニ曰ク『藥司、尙藥一人掌供奉醫藥之事典藥二人掌同尙藥』(令義解、卷一)

然ルニ、令ニ毎月醫博士試トアルハ『即チ女醫博士ニシテ、男子ナラザルモノナリ、ソノ後女子ニシテハソノ誤失アルベキヲ以テ、別ニ男子ノ博士ヲ置カレシナルベシ』トノ説ヲナスモノアリ^⑥。唐令ヲ案ズルニ、『博士之ヲ教ユ』ト記シテ、我が大寶令ニハ、コレヲ文ニ明言セズト雖モ、當該博士各々之ヲ教授セシヤ明カナリ、故ニ女醫ハ醫博士・鍼博士・按摩博士ノ各別ニ教導スルコトヲ要シ、ソノ事繁雜ニ涉ルヲ以テ、後二十年ヲ經テ、養老六年十月ニ至リテ、初メテ女醫博士ノ官ヲ置キ、似テ女醫教授ノ專任者ヲ設ケタルナラン。女醫ト言フモノ既ニ醫ニアラズ、唯安胎產難ノ法ト、創腫傷折(按摩生ノ任トスルトコロナリ)針灸ノ法トヲ教習シ、又ハ供御ノ白粉ヲ作ルノ任ニ當リシト言フ^⑦ヲ以テ見レバ、今日ノ產婆及ビ看護婦ニ近キモノナリシナラン。從テ女醫博士ノ婦人科専門ノ醫官ナラザリシコトモ明カナリ。故ニ女醫博士ノ稱呼ノミヲ認メテ之ヲ婦人科ノ嚆矢トナスコトヲ得ザルナリ。

然レドモ、體療科中ニアリテ婦人門ヲ分チシハ、支那ニアリテハ病源候論ニ始マリ、千金方ニ至リテ、更ニ一段ノ精緻ヲ加ヘタリ。故ニ隋・唐醫學ニ依倣セル我が醫學、少ナクトモ平安朝時代ノ中期ニ於ケル醫家ガ、婦人ノ疾病ニ注意セシコトハ、之ヲ推測スベシ。丹波康賴ノ醫心方ニハ千金方ヲ引テ『論曰、夫婦人、所^三以有^二別方^一者、以^三其血氣不調、胎任產生崩傷之異^一故也、所以、婦人之病、比^三之男子^一、十倍難^レ療、若四時節氣、爲^三病虛實^一、冷熱爲^レ患者、與^三丈夫^一同也、唯懷胎任、挾^レ病者、避^三其毒藥^一耳』ト曰ヒ、血氣不調ト妊娠娩產トニヨリテ起ルトコロノ疾病ヲ以テ婦人ニ特有ノモノナリトセリ。而シテソノ血氣不調ニ因スルモノトセルハ僅カニ婦人面上ノ黑疔・黑子・妬乳・乳癰(乳房炎)・乳創等ニシテ、妊娠娩產時ニ於ケル疾病・娩產ノ異常・産後ノ疾病、及ビ生殖器ノ疾

病・月水ノ異常等ハ、ソノ小部分ヲ除クノ他ハ、之ヲ産科ニ屬スベキモノナレバ、コレニ依テ當時ノ婦人科ノ範圍ノ狹隘ナリシコトヲモ知ルベシ。

助産ノコトハ、人類ノ生殖機能ニ隨伴シ、太古混沌ノ世ニアリテ既ニ必要ヲ感じ、太古時代ノ歴史ニモ産屋ニ關スル記事アリ、神功皇后ガ石ヲ取り、腰ニ挿ミテ、娩産ノ遲延ヲ祈リタマヒシ傳話アリ（釋日本紀、卷十一ニ筑紫風土記ヲ引テ曰ク『逸都縣子饗原、有石兩顆、一者片長一尺二寸、周一尺八寸、一者長一尺一寸、周一尺八寸、色白而便圓如磨成、俗傳云、息長足比賣命欲伐新羅國、閱軍之際、懷娠漸動、時取兩石、挿着裾腰、遂襲新羅、凱旋之日、至芋湄野、太子誕生、有此因緣輔、曰芋湄野、謂產爲芋湄者風俗言詞耳俗間、婦人忽然娠動、裾腰挿石、厭令延時、蓋由此乎』、而カモソノ事ハ娩産ニ際シテ一種ノ禁厭法ヲ行ヒシニ過ギズトイフベシ。

大寶令ニハ女醫ノ制アリ、官戸ノ婢ノ性識慧了ナルモノヲ選ビテ、安胎産難ノ法ヲ教習セシムルノ規定アリテ、助産ノコト、ココニ始メテソノ緒ニ就キタリ。蓋シコレヲ以テ産科ノ濫觴トナスベシ。嚴格ニ言ヘバ産婆ト稱スベキモノノ發端ナリ。養老六年ニ始メテ置レタル女醫博士ハ女醫（助産婦）ヲ教導スル職ニシテ、爾後女醫博士ノ任命アリシ間ハ、典藥寮ニ於テ産婆ノ養成ヲ事トセシモ、コノ事ハ後遂ニ罷ミタルナラン。

丹波康賴ノ醫心方ニハ、産經・千金方・小品方・病源候論・醫門方・子母祕錄・葛氏方・集驗方・龍門方・耆婆方・僧深方・廣濟方・錄驗方等諸書ニ依リテ安胎産難ノ法ヲ論述セシガ、醫疾令ニ於テ教課書目ニ載スルトコロモ小品方・集驗方・廣濟方等ノ諸書ニシテ、病源候論・千金方等モ次デ行ハレタルコト明カナレバ、醫心方ノ所說ヲ以テ當時我が醫家カ有セシトコロノ婦人科及ビ産科上ノ知識ノ程度ヲトスルノ標準トナスモ妨ナカルベシ。

ソノ妊娠ヲ論ズルヤ、先ヅ胎兒ノ發育ヲ叙述シテ『懷身一月、名ヅケテ始形ト曰フ。懷身二月、名ヅケテ始膏ト曰フ、兒精成ル。懷身三月、名ヅケテ始胎ト曰フ、此時ニ當リテ、未ダ定儀アラズ、物ヲ見テ化ス、故ニ儂者、侏儒、醜惡ノモノヲ見ルトキハ、外像ハ内ニ及ビ、其兒ハ醜惡ノモノタルベシ。懷身四月、始メテ水精ヲ受ケテ以テ血脈ヲ盛ル。懷身五月、始メテ火精ヲ受ケテ以テ血氣ヲ盛ル。懷身六月、始メテ金精ヲ受ケテ以テ筋骨ヲ成ス。懷身七月、始メテ木精ヲ受ケテ以テ骨髓ヲ成ス。懷身八月、始メテ土精ヲ受ケテ、以テ膚革ヲ成ス。懷身九月、始メテ石精ヲ受テ以テ皮毛ヲ成シ、六府百節、畢ク修ハラザルハナシ。懷身十月已ニ子ヲ成ス』ト曰ヒ、コレニ相應シテ修身、禁食ノ法則ヲ設ケタリ。

ソノ娩産ヲ論ズルヤ、先ヅ産婦ノ用意ヲ説キ、産侍ニハ死喪穢家ノ人ヲシテ來リ視セシムベカラズ、蓋シ産婦ソノモノヲ以テ既ニ穢惡ト認ム（延喜式、神祇三ニ曰ク『凡觸穢惡事、應忌者、人死限三十三日、産七日、云々』『凡改葬及四月已上傷胎、并忌三十三日、其三月以下傷胎、忌二十七日、云々』）小品方ニ曰ク『凡婦人産、闇穢血露未淨、不_レ可_レ出_三戸牖_二至井竈所_上也、不_レ朝_三神祇及祠祀_二也』ト雖モ、而カモ死喪穢家ノ人ヲシテ産ニ臨マシムルトキハ産ムコト難ク、既ニ産スレバ兒ヲ傷ブルトナシ、之ヲ忌ムコト甚シ。次デ産廬ヲ作ルノ則テ説キ、禁厭以テ産ミ易カラシムルノ方ヲ擧グ。ソノ産難ヲ治スルノ法ヲ説クヤ、陀羅尼經ノ咒文ヲ唱へ、或ハ『上天蒼々、下地鬱々、爲_三帝王臣_二、何故不_レ出、速出々々、天帝在_レ戶、爲_レ汝着_レ名、速出々々』ト祝シ、或ハ産難時、門戶窓牖瓶釜等スベテ蓋アルモノヲ開ケバ效アリトナス。横産手足先ヅ見ハルルモノニアリテハ、兒ノ足ノ底ニ鹽ヲ塗リ、急ニ之ヲ搔クカ、ソノ父ノ名ヲ足ニ書クカ、又ハ符文ヲ朱書シテ之ヲ吞マシメ、若シクハ梁上ノ塵ニ指撮ヲ取テ之ヲ服セシム。（ココニ掲グルトコロノ妊娠圖ハ醫心方ニ産經ヲ引テ載スルトコロニ依ル）

兒科 22

日本書紀神代下卷ニ『彥火火出見尊、取^ニ婦人^一、爲^ニ乳母^一、湯母及飯嚼^{イヒガミ}、湯坐^{ユエビト}、凡諸部備行、以奉^ニ養焉^一、于時權^{トキニカリニ}用^ニ他姬婦^一、以^レ乳^ニ養^ニ皇子^一焉、此世取^ニ乳母^一、養^レ兒之縁也』トアリ、乳母トハ乳ヲ飲マシムルモノ、湯母トハ湯ヲ飲マシムルモノ、飯嚼トハ飯ヲ嚼ミ和ラゲテ食ハシムルモノ、湯坐トハ、坐或ハ人ニ作ル、湯ヲ調フルノ人ナリ[®]。サレバ育兒ノ法ノコノ時ニアリシコトハ疑ヲ容レザレドモ、小兒ノ疾病ノ事ニツキテハ、何等ノ記述ナシ。大寶令ニハ少小（兒科）ヲ專門トシテ體療（内科）・創腫（外科）ニ併ビ、醫生ヲシテ之ヲ習學セシメタレドモ、兒科専門ノ教課書籍ナキヲ以テ素問・小品方・集驗方・本草・甲乙經等諸書中ノ少小二適スル條項ヲ抄出シテ、之ヲ講習セシモノナラン。源順ノ和名類聚鈔ニ藥品ヲ擧ゲタル條ニ、『甘草膏治小兒惡瘡支子丸治小兒下利』アリ、小兒ニノミ獨リ用ヒラレタル藥品ノ延長以前ヨリ存セシコト明カナリ。

丹波康賴ノ醫心方ハソノ第二十五卷ニ小兒病ノ部門ヲ立テタリ。ソノ說ヲ案ズルニ、初生ヲ嬰トナス、ソノ長一尺六寸ナルベク重十七斤ナルベシ（産經）。年六歳以上ヲ小トナシ、十八歳以上ヲ少トナシ、二十以上ヲ壯トナス（小品方）。初生ノ兒ニ對シテハ先ヅ口中舌上ノ銜血ヲ去リ瘡病ヲ成スヲ防ギ、甘草湯ヲ與ヘテ胸中ノ惡汁ヲ去リ（千金方）、朱蜜ヲ與ヘテ神魂魄ヲ鎮メ、「牛黃ヲ與ヘテ肝膽ヲ増シ、熱ヲ除キ、驚ヲ定メ、惡氣ヲ辟ケシム（産經・千金方）。初生兒洗浴中ニハ牛脂又ハ虎頭骨ヲ入ル、數々浴スレバ兒背ヲ冷シテ癩ヲ發セシメ、久シク浴セザレバ毛髮ヲ脱落セシムルガ故ニ、一二日毎ニ浴セシム。浴セシムルニ良日ト忌日トアリ（産經）。次デ小兒ノ名字ヲ作り、初メテ衣ヲ着ケ、又調養、禁食ヲ命ズルニ、各々ソノ法アリ。（産經・禮記・養生要集・千金方・病源候論・食經）

耳科

大寶ノ令ニ醫生既ニ諸經ヲ讀ミタル後、業ヲ分チテ教習スベキコトヲ定メタル條ニ『二人學^ニ耳目口齒^一、云々、學^ニ耳目口齒^一者、四年成』トアリ。コレニヨリテ、當時耳科ハ既ニ専門ニ之ヲ講習スルコトトナリタレドモ、而カモ尙ホ目・口・齒科ト混同セラレタルコトヲ知ルベシ。故ニ丹波康賴ノ醫心方ニモソノ第五卷ニ耳・鼻・目・口・齒諸病ヲ列擧シタリ。

醫心方ニハ病源候論ノ說ヲ引テ、論ジテ曰ク、『腎ニ精氣アリ、其氣ハ耳ニ通ズ、若シ精氣調和スレバ、則チ腎臟強ク、耳五音ヲ聞ク、若シ血氣ヲ勞傷シ、兼テ風邪ヲ受クレバ、腎氣ヲ損シテ精脫シ、精脫スレバ則チ耳聾ス』、又葛氏方ヲ引テ、聾ヲ別チテ五種トシ、風聾（掣痛）・勞聾（黃汁出）乾聾（聵聾生）・虛聾（蕭々作聲）・亭聾（膿汁出）ノ目ヲ擧グ。之ヲ治スルノ方ハ綿ニ蛇膏ヲ裏ミテ耳ヲ塞ギ、又ハ鯉魚・鼠・雀・伏翼等^{カハホリ}ノ腦ヲ取り、綿ニ裏ミテ之ヲ耳中ニ入ル等ナリ。耳鳴ヲ發スルハ、耳ハ宗脈ノ聚マルトコロナルニ、宗脈虚シケレバ則チ風邪虚ニ乗ジテ、脈ニ隨テ耳ニ入り、氣ト相擊ツガ故ナリ（病源候論）。耳中痛ムハ風ノ腎經ニ入ルナリ。耳内膿ヲ生ズルハ血氣耳ニ至リテ熱氣聚マルニ依ル。耳中ヨリ膿血出デテ、治スレドモ癒エザルハコレ蟲アルナリ（小品方）。耳聵聾ハ、耳裏津液結聚シテ成ルトコロニシテ、人耳皆之アレドモ、輕キハ害ヲナサズ、若シ風熱ヲ以テ、之ニ乗ズレバ、丸核ヲ結成シ耳ヲ塞グコトアリ（病源候論）。百蟲ノ耳ニ入ルヲ治スルニハ、蘆ノ管ヲ以テ耳ヲ吹カシメ、又ハ生薑汁・菲汁等ヲ耳内ニ灌ギ、又ハ銅器ヲ耳邊ニ近ヅケ、打チテ聲ヲ作セバ即チ出ヅ。（葛氏方・千金方）

允恭天皇紀ニ『破レ身治レ病、云々』ノ紀事アリ、或ハ瀉血ノ一術ナリシナラン。故ニ刺鍼ノ術、全ク我が邦上古ノ代ニ缺如セリト言フコト能ハザレドモ、後世ニ所謂鍼術ハ灸法ト共ニ支那ヨリシテソノ術ヲ傳ヘシモノナリ。欽明天皇二十三年秋八月吳人知聰、藥書・明堂圖等ヲ持シテ來朝ス、コレ實ニ外國醫書、殊ニ鍼科典籍ノ我が邦ニ入ルノ始ナリ。皇極天皇四年『夏四月戊戌朔、高麗學問僧等言、同學鞍作得志、以レ虎爲レ友、學ニ取其術一、或使下枯山變爲中青山上、或使下黃地變爲中白水上、種種奇術不レ可ニ殫究一、又虎授ニ其針一曰、慎矣、慎矣、勿レ令三人知一、以レ之治ニ之病一、無レ不レ愈、果如レ所レ言、治無レ不レ差、云々』トアルハ高麗ノ事ヲ傳フルモノナレドモ、コノ類ノ術が古ヨリ既ニ行ハレタルコト見ルベシ。鍼家ノ傳ニ據レバ、紀河邊幾男磨新羅ニ入りテ鍼術ヲ學ビ、皇極天皇元年歸朝シテ鍼博士ニ擧ゲラルト言フ。信ジ難キ說ナリ。

大寶令ニハ宮内省典藥寮ニ醫師・醫博士・醫生ニ對シテ針師・針博士・針生アリ。針師ハ諸瘡病ヲ療スルコト、及ビ補瀉(虛者補レ之、實者瀉レ之)ヲ掌ドリ、針博士ハ針生等ヲ教フルコトヲ掌ドリ、針生ハ針ヲ學ブコトヲ掌ル、鍼科ノ專門ココニ始メテ興ル。醫疾令ニ曰ク『醫針生各分レ經受レ業、云々、針生習ニ素問・黃帝針經・明堂・脈訣一、兼習ニ流注・偃側等圖、赤烏神針等經一』『醫針生初入レ學者、先讀ニ本草・脈訣・明堂一、讀ニ本草一者、即令レ識ニ藥形藥性一、讀ニ明堂一者、即令レ驗レ圖識中其孔穴上、讀ニ脈訣一者、令ニ遞相診候一、使レ知ニ四時浮沈澁滑之狀一、次讀ニ素問・黃帝針經・甲乙・脈經一、皆使ニ精熟一、其兼習之業、各令ニ通利一』『醫針生、各從レ所レ習、鈔ニ古方一誦レ之、其上手醫、有ニ療疾一之處、令下其隨從習中知合ニ針灸一之法』『針生、七年成』、亦以テ當時鍼科ガ體療・創腫・少小等ノ諸科ト相併ビテ盛ニ行ハレシコトヲ想フベシ。

奈良朝ヲ經テ平安朝ノ初ニ至ル間ハ、鍼科ニ名アルモノモ出デザリシガ、嵯峨天皇弘仁十一年十二月詔シテ針生五人ヲ置キ、新修本草・明堂經・劉涓子鬼遺方等ヲ讀マシメ、盛ニ唐醫方ヲ採用セシヨリ、鍼科モ、菅原梶成・下道門繼・丹波忠明等ノ如キ鍼博士ヲ出スニイタレリ。

醫心方ノ著者タル丹波康賴モ亦鍼博士ニシテ、醫心方第一卷ニ醫學ノ大體ヲ論述セルニ次ギテ、ソノ第二卷ニ鍼灸諸法ヲ擧ゲタリ。コノ書ノ記述ニ依レバ、用フルトコロノ鍼ニ九種ノ別アリ。

- (1) 鑱鍼。取ニ法布鍼一、去ニ末半寸一、卒兌ニ之長一寸六分一、主下熱在中頭身上也、
- (2) 員鍼。取ニ法於絮鍼一、筒ニ其身一而、□其鋒、長一寸六分、主治三分間氣一
- (3) 錐鍼。取ニ法於黍粟之兌一、長三寸半、主下按レ脈取レ氣令中邪出上
- (4) 鋒鍼。取ニ法於絮鍼一、筒ニ其身一、鋒ニ其末一、長一寸六分、主三壅熱出血一
- (5) 銛鍼。取ニ法於鈞鋒一、廣二分半、長四寸、主三癰膿兩熱爭一也、
- (6) 員利鍼。取ニ法於厘微一、大ニ其末一及小ニ其本一、令レ可ニ深内一也、長一寸六分、主レ取ニ癰暴痺者一
- (7) 豪鍼。取ニ法於毫毛一、長一寸六分一、主下寒痛痺在レ絡上也、
- (8) 長鍼。取ニ法於綦鍼一、長七寸、主取ニ深邪遠痺者一
- (9) 大鍼。取ニ法於鋒鍼一、其鋒微員、長四寸、主レ取下大氣不レ出ニ關節一者上

右ノ九鍼ハ小大長短ニヨリテコレヲ別チシモノニシテ、針ヲ用フルニハ白鍼法ト燔鍼法トアリ。燔鍼法ニアリテハ、之ヲ燒クニ、直チニ炭火ヲ用フベカラズ、油火ヲ以テ鋒鍼ヲ燒キテ之ヲ用ヒ、或ハ蠟・烏麻子脂・蔓菁荏子脂中ニテ之ヲ燒キ、過熱紫色ヲ呈スルニ至ルヲ佳トス。

病源ノ起ルトコロハ臟腑ニ本ヅキ、臟腑ノ脈ハ并ビニ手足ニ出デ、腹背ニ循環シ、全身至ラザルトコロナシ、ソノ經脈ノ出ヅル所・流ルル所・注グ所・過グル所・行ク所・入ル所ノ諸點ヲ孔穴トシ、鍼ハスベテコノ部ニ施ス。

故ニ孔穴ノ部位ヲ知り、孔穴ノ主治ヲ詳ニスルハ鍼科ノ主務トスルトコロナリ。醫心方ニハ頭部諸穴六十八、面部諸穴三十九、頸部左右諸穴二十、肩部左右諸穴二十六、手部左右諸穴百二十、背部諸穴七十九、胸部諸穴四十三、腹部諸穴七十四、側脇部左右二十、足部左右諸穴百六十九、合計六百六十穴ヲ擧ゲ、千金方ニ六百五十孔穴ヲ擧ゲタルニ同ジカラズ、蓋シコレ明堂經穴六百四十九ヲ採リ、更ニ諸家方ヨリ六十一穴ヲ選ビタルナリ。(孔穴ノコトハ後章徳川氏時代ノ鍼科ノ部ニ於テ、更ニ之ヲ詳述スベシ。)

鍼術ノ要トスルトコロハ補瀉ニアリ、氣ヲ漏ラスニアリ、コレ鍼醫方ノ主ニ用ヒタルトコロナレドモ、大寶令ニハ鍼科ハ諸瘡病ヲ療スルコトヲ掌ドルコトヲ載ス、コレ醫心方ニ『燔ニ大癥積ニ、用ニ三隅針ニ、破ニ癰腫ニ、皆用ニ錐鍼ニ、云々』ト記シテ膿腫ニ鍼スルト、コレニ灸シテ治療スル等ノ諸法ヲ指スモノナラン。

灸法ハ鍼術ト共ニ、支那ニアリテハ、古代ヨリ既ニ行ハレタルモノニシテ、内經ニモ『湯藥攻ニ其内ニ、針灸攻ニ其外ニ、則病無レ所レ逃矣』ノ語アリ。千金方ニハ『其有ニ須レ針者ニ、即鍼刺、以補ニ瀉之ニ、不レ宜レ針者、直爾灸レ之、云々、若針而不レ灸、灸而不レ針、皆非ニ良醫ニ也、針灸而藥、藥不ニ針灸ニ、尤非ニ良醫ニ也』ト記シ、灸法ト鍼術トハ、相併ビテ、治病ノ要術タルコトヲ説キ、我方大寶令ニモ針灸之法ト併ビ稱シテ、之ヲ鍼科ノ中ニ入レタリ。ソノ孔穴主治等ハ鍼術ニ於ケルト全然同一ニシテ、タダ場合ニ應ジテ禁忌ヲ異ニスルノ差アルノミ。

眼科 24

唐醫方未ダ眼科ノ目ヲ擧ゲズ、故ニ大寶令ニハ耳・目・口・齒ヲ併セテ、コレヲ一個ノ専門科トナシ、別ニ眼科ヲ獨立セシメズ、僅カニ一二方書中ノ眼科部門ヲ鈔出シテ之ヲ講習セシモノナラン。大寶年間ヨリ、凡ソ三百年ヲ經テ、圓融天皇ノ天元五年ニ丹波康賴ガ撰述セル醫心方ニモ、眼病ハコレヲ、耳・口・鼻・齒ノ諸病ト併セテ之ヲ説キ、病源候論・小品方・葛氏方・錄驗方・集驗方・醫門方・千金方等ノ所論ヲ引ケリ。五藏六府・陰陽精氣・皆上ボリテ目ニ注グ、若シ風邪ノ侵ストコロトナレバ、目ヲシテ不明ナラシム、眼ニ異狀ナク、瞳孔ノ黑白分明ナレドモ、物ヲ見ザルモノアリ(清盲)、コレ虛熱ト風トヨリ起ルトコロナリ、コレ宜シク金鍼ヲ以テ之ヲ決スベシ、一タビ針セバ便チ豁然トシテ、雲開キテ日ヲ見ルガゴトクナルベシ。晝ハ精明ニシテ暮ニ至レバ則チ物ヲ見ザルモノアリ(雀盲)、生雀ノ頭ノ血、又ハ鼠ノ膽ヲ取テ目ニ傳ケ、又ハ猪ノ肝ヲ空腹ニ食セシメテ效アリ。陰陽ノ氣皆目ニ注グガ故ニ、若シ藏府ノ氣、虛實調ハザルコトアレバ、氣目ニ衝キテ久フシテ散ゼズ、變ジテ膚翳トナル。既ニ翳ヲ生ズルモノアレバ、之ニ鎌シ、ソノ中ニ血脈ノ處アレバ鉤ヲ以テ割斷スベシ。目ノ赤痛スルハ肝氣ニ熱アリ、熱ノ目ヲ衝キテ赤カラシムルナリ。目ノ淚ヲ出ダスハ、風邪肝ヲ傷ブリテ肝氣足ラザルニヨリ、肝ノ外候タルトコロノ目ニ淚ヲ出サシムルナリ。ソノ他眼病ノ治方ヲ擧グルモノ、灸法・藥汁ノ點眼・膏藥ノ貼傳等ニ過ギズ。ソノ咒法ノ如キハ徒ニ噴飯ノ料タルノミ。(千金方治ニ雀目ニ術ニ曰ク、至ニ黃昏時ニ、看ニ雀宿處ニ、打ニ驚之ニ、雀起飛、乃咒曰、柴公、我還ニ汝盲ニ、汝還ニ我明ニ、如レ此三日、瞑ニ三過、爲レ之、明レ眼也)

口齒科

大寶令ニ耳・目・口・齒ヲ併セテ専門ノ一科ヲ成シ、修學期限ヲ四年トナスノ定アレドモ、ソノ詳ナルコトハ攷フベカラズ。丹波康賴ノ醫心方ニハ病源候論ヲ引テ、『手少陰、心之經也、心氣通ニ於舌ニ、足太陰、脾之經也、脾氣通ニ於口ニ、府藏熱盛、熱乘ニ心氣ニ、氣衝ニ於口與ニ舌、故令ニ口舌生ニ瘡』『心脾虛、爲ニ風熱所ニ乘、隨レ脈至レ

舌、熱氣留止、血氣壅滯、故舌腫』『心脾有熱、熱氣隨脈衝於舌本、血脈脹起變生如舌之狀、在三舌之下一謂之重舌』『五臟六腑、有三伏熱、上衝咽喉、熱氣乘於懸壅、或長、或腫、』ト説キ、口腔、舌、唇、咽喉、喉頭ノ疾病ヲ擧ゲ、療法トシテハ藥物ノ内服、貼傳ノ外ニ鍼針ヲ以テ之ヲ刺シ、小鐵片ヲ以テ之ヲ灼ク等ノ方法ヲ記述セリ。

齒科ニ關シテハ病源候論ニ依リ、『手陽明之支、入於齒、齒是骨之所終、髓之所養、若風冷客於經絡、傷於骨髓、冷氣入齒根、則齒痛』『手陽明之脈、入於齒、足太陽脈、有入於頰、遍於齒者、其經虛、風氣客之、結搏齒間、與血氣、相承、則齲腫、熱氣加之、膿汁出而臭、侵蝕齒斷、謂之齲齒』ト説キ、治療ノ方法ハ藥物ノ他ニ、灸法、烙鐵、及ビ符呪等ヲ擧ゲタリ。

コレニ依リテ見レバ、コノ頃既ニ口齒科ノ専門アリテ、ソノ學ヲ講ゼシコトハ明カナレドモ、コノ科ニ名アルモノハ聞エズ。六條天皇ノ仁安年間ニ丹波兼康アリ。丹波康賴ノ十七世ノ孫ニシテ、醫術ニ秀デ、殊ニ口舌ヲ療スルニ精シキヲ以テ聞ユ。(丹波氏系圖、小森本)ソノ數世ノ孫、玄泰ニ至リ兼康氏ヲ稱シ(後金保ト改ム)、口齒科ヲ以テ徳川幕府ニ仕ヘタリ。今ノ世ニ傳フルトコロノ兼康家口中療治一卷ハ、室町幕府時代ノ撰述ニ係ルト雖モ、恐クハ兼康以來ノ治療ヲ記載セルモノナラン、而シテ之ヲ醫心方ニ記述スルトコロニ比較スルニ、大體之ヲ模倣セルノミニテ、ココニ特ニ擧ゲテ言フベキモノアルコトナシ。

按摩科 25

支那ニアリテハ、按摩法ハ治療ノ一術トシテ太古ノ代ヨリ既ニ行ハレ、素問ニ『脾風發痺、可レ按』『按レ之則熱氣至、熱氣至、則痛止』『經絡不流通、病生於不仁、治レ之以按摩醪藥』『痿厥寒熱、其治宜導引按蹻』等ノ文アリ。然レドモソノ按摩・按蹻・導引ト稱スルモノハ如何ノ術ナルヤハ、得テ詳ニスベカラズ。我ガ邦ニハ大寶令ニ按摩師・按摩博士ノ官ヲ置カレシトキ、始メテ按摩ノ名アリ。職員令、宮内省典藥寮ノ條ニ曰ク『按摩師二人、掌療諸傷折、按摩博士一人、掌教按摩生等、按摩生十人、掌學按摩療傷折』醫疾令ニ曰ク『按摩生、學按摩傷折方及判縛之法』。令義解ノ註釋ニ依レバ、『謂按摩者、令他人牽舉揚批、或摩使筋骨調暢、邪氣散洩也、傷折者、折跌也、判縛者、以鍼判決折傷之瘀血、是爲判也、腕傷之重、善繫縛按摩導引、令其氣復、是爲縛也』(政事要略、卷九十二引クトコロニ依ル)トアリテ、按摩療法中ニハ瀉血・繃帶ノ術ヲモ合メルヲ知ル。唐書、百官志、尙葯局ノ條ニモ『按摩博士、掌教導引之法、以除疾、損傷折跌者、正之』トアリテ、ソノ按摩法ハ後ニ所謂按摩ト整骨トヲ兼ネタルモノナリ。

然レドモ、按摩師・按摩博士ノ官ヲ設ケシハ唐ノ制度ヲ模擬セシマデナレバ、何時トナク、コノ科ハ廢セラレ、傷折ヲ療スルハ外科ニ併セラレタルモノカ(支那ニアリテモ、按摩科ハ宋ノ世ニ至リテ、之ヲ廢セリ)。

丹波康賴ノ醫心方ニハソノ卷二十七、養生ノ部ニ導引ヲ論ジ、導引經・養生要集ノ説ヲ引テ、導引ハ人ノ肢體骨節中ノ諸惡氣ヲ去リ、正氣ヲ存セシムルモノナリトシ、又千金方ニ依リテ婆羅門按摩法ヲ擧ゲタリ。而カモノノ術ハ遂ニ當時醫家ノ廣ク用フルトコロトナラザリシニ似タリ。殊ニ按摩師及ビ按摩博士ノ官ノ廢セラレシヨリ後ハ醫家ノ治療トシテ之ヲ用ヒシコトノ稀ナルハ今ヨリ之ヲ推スニ難カラズ。按摩ハ斯ノ如クニシテ、醫家ヨリハ疎ンゼラレタレドモ、俗人ノ間ニハコノ術廣ク傳ハリタリト見エテ、平安朝時代ノ物語ノ中ニハ腹取(榮花物語)及ビ足力(福富草紙)ナドノ事ヲ記セルモノアリ、コレ按摩ノ一法ナリ。

藥物科

欽明天皇十五年、採藥師施德潘量豐・固德・丁有陀、百濟ヨリ來タル、コレヲ藥物ヲ識ルモノノ始トス。同二十三年八月吳人知聰來タリテ、内外典・藥書・明堂圖等ヲ獻ズ、ココニ於テ始メテ藥物ニ關スル書籍アリ。推古天皇ノ十九年夏五月五日、天皇群臣ヲ帥キテ大和菟田野ニ藥獵シタマヒシヨリ、以來歷代ノ朝ニテ、シバく、コノ事アリ（藥獵トハ藥草ヲ採リ、兼テ田獵ヲナスヲ言フ、五月五日ヲ期シテ之ヲナス。太平御覽ニ曰ク、『夏小正、曰三五月一、此月蓄_レ藥、蠲_二除毒氣_一也』、ソノ支那ノ習俗ニ基ヅクコト明ナリ）。藥物ノ形狀ヲ識リ、性質ヲ究ムル學ノ既ニコノ時ニ存セルコトヲ知ル。天智天皇十年『春正月、以_二大山下_一、授_二中略怵日比子贊波羅金須解藥鬼室集信解藥以_二上小山上_一、授_二達率德頂上解藥吉大尙解藥』、ソノ『解藥』トアルハ藥物ノ學ニ通ゼルヲ言フモノニシテ、クスリヲシレリ

コレ等ノ韓人ハソノ學術ニヨリテ爵セラレタルナリ。次デ孝德天皇ノ時、知聰ノ子善那使主ガ方書一百三十卷・藥白一等ヲ獻ジ、又牛乳ヲ獻ゼルニヨリテ和藥使主ノ姓ヲ賜ハリシコトアリ。然レドモ當時藥物ノ學ガ如何ノ程度ニアリシヤ、之ヲ知ルニ由ナシ。

大寶令ニハ典藥寮ニ藥園師、藥園生ノ官アリ、『藥園師二人、掌_二知_二藥性色目_一種_二採藥園諸草_一及_二教_中藥園生_上、藥園生六人、掌_レ學_二識諸藥_一』。『凡藥園、令_二師檢校_一、仍取_二園生_一、教_二讀本草_一、辨_二識諸藥併採種之法_一、隨近山澤有_二藥草_一之處、採握種_レ之、所_レ須人功並役_二藥戶_一』、『諸國輸_レ藥之處、置_二採藥師_一、令_二以_レ時取_一』（令集解ニ引クトコロニ據ル）。藥園師ノ教フル所、藥園生ノ學ブ所、コレ所謂本草ニシテ、藥物ノ性トイフハ寒溫ナリ、色トイフハ形狀ナリ、目トイフハ名稱ナリ、ソノ教課書トシテ採用セラレタルハ何ノ書タルヤハ詳ナラズト雖モ、續日本紀『延曆六年五月、戊戌典藥寮言、蘇敬註新修本草與_二陶隱居集註本草_一、相檢、增_二一百餘條_一、亦今採_二用草藥_一、既_二合_二敬說_一、請行_二用之_一、聽焉』トアルニ依リテ見レバ、コノ時以前ハ專ラ陶弘景ノ神農本草ヲ學ビタルモノカ。コノ時詔アリテ新修本草ヲ以テ教課書トセラレシヨリ、一ニコノ書ヲ用ヒシコトハ、弘仁十一年十二月針生五人ヲ置カレシトキ、詔シテ新修本草・明堂經等ヲ讀マシメラレタルコトアリ。又延喜式式部上ニ『凡醫生皆讀_二蘇敬新修本草_一』。ソノ典藥寮ノ部ニ『凡應_レ讀_二醫經_一者、太素經限_二四百六十日_一、新修本草三百十日、小品三百十日、明堂二百八十一日、難經六十日』『凡太素經准_二大經_一、新修本草准_二中經_一、小品・明堂・八十一難經並准_二小經_一』ノ文アルニテ、知ラルベシ。

コノ如ク本草ノ學ノ我が邦ニ行ハルルヤ既ニ久シ、而カモ未ダ西土ノ藥品ヲ精フスルコト能ハザリシガ、孝謙天皇ノ時、僧鑑眞ノ來朝スルアリ、本草ノ學ニ精シキヲ以テ、命ヲ奉ジテ藥物ノ眞贋ヲ鑑別シ、又ソノ學ヲ我が醫家ニ傳ヘタリ。コレヲ本草學ニ名アルモノノ始トナス。（ソノ傳ハ上章ニ出ヅ。）桓武天皇ノ時、和氣廣世、藥經太素ニ卷ヲ著ハシ、諸儒ヲ大學ニ會シテ之ヲ講ゼリ、コレヲ我が邦藥物書ノ始トナス。

和氣廣世ハ備前藤木ノ人、ソノ先ハ垂仁天皇ニ出ヅ、父清麻呂、民部卿ニシテ造宮大夫、美作、備前國造ヲ兼ヌ、廣世學ヲ好ミ文章生ニ補セラレ、延曆四年事ニ坐シテ禁錮セラレ、幾クモナク、特旨少判事ニ除セラレ、次デ式部少輔ヨリ典藥頭ニ轉ジ、大學頭ヲ兼ヌ、廣世又大學寮南ニ弘文院ヲ造リ、内外經書數千卷ヲ置ク、歿年詳ナラズ。（和氣氏系圖・日本後紀）

藥經太素二卷、草木・果菜・蟲獸・玉石、二百五十四種ノ藥品ヲ擧ゲ、ソノ氣味及ビ主治ヲ論ゼリ。今ノ世ニ傳ハレル本（埤氏ガ續群書類從中ニ收メタルモノ）ニハ恐ラクハ殘脱アリテ、援引スルトコロノ書目ヲ擧ゲザレドモ、ソノ藥物ヲ分類スルコト、一ニ唐ノ新修本草ニ據リタルニ似タリ。（新修本草ハ支那ニハ傳ハラズ、我が邦ニ僅カニ

ソノ零本ヲ傳フルノミ、然レドモソノ卷目次第ハ證類本草ノ序例ニ見エタリ。

和氣廣世ノ藥經太素成リテヨリ後、凡ソ百年醍醐天皇ノ延喜年間ニ深根輔仁アリテ本草和名ニ卷ヲ著ハセリ。

深根輔仁、本姓ハ蜂田藥師、和藥使主トソノ先ヲ同クス、世々醫ヲ以テ朝ニ仕フ、文主ニ至リテ深根宿禰ノ姓ヲ賜フ、時ニ承和元年ナリ、ソノ子孫ニ宗繼トイフモノアリ、貞觀九年醫博士ニ任ゼラレ、内藥正、針博士ヲ歴テ、仁和三年加賀介ヲ兼ね、醫ヲ以テ名アリ、輔仁ハ即チソノ孫ニシテ、右衛門醫師ニ舉ゲラレ侍醫、權醫博士ニ累遷ス、延喜十八年、勅ヲ奉ジテ掌中要方ヲ撰ブ、本草和名モ亦勅ヲ奉ジテ、コノ時ニ撰進セルトコロナリト傳フ。深根、一ニ深江ニ作り、又滋根ト書ケルモノアリ、深根ヲ以テ正トスベシト言フ。(日本紀略・三代實錄・類聚符宣鈔卷九・和名類聚鈔序)

本草和名ニ收ムルトコロノ藥物、合セテ一千二十五種、ソノ内、本草内藥八百五十種、諸家食經一百五種、本草外藥七十種ナリ。更ニ之ヲ細別スレバ玉石八十一種、草二百五十七種、木百十種、獸禽六十九種、蟲魚類百十三種、菓四十五種、菜六十二種、米穀三十五種、有名無用百九十三種ニシテ、卷目次第一ニ新修本草ニ據リ、引用スルトコロノ本草方書三十餘部モ悉ク是レ唐以前ノ書ナリ、而カモコノ書ハ本草ノ和名ヲ舉グルノミニテ主治ニ及バズ、故ニ藥物ノ對譯辭書タルニ過ギズ。

寬平四年ノ撰述(昌泰年間修補)ニ係ルトコロノ新撰字鏡、源順(永觀元年歿ス)ノ著ハストコロノ和名類聚鈔、醍醐天皇ノ延長五年ニ成ルトコロノ延喜式、典藥寮ノ部ニ載スル諸國貢藥等ヲ對照スルニ、ソノ品種ハ大抵本草和名ニ載スルトコロト、大同小異ニシテ、藥物ノ大部ハ皆我ガ邦ニ産シ、之ヲ外國(唐・渤海・新羅)ニ仰ギタルハ、僅々少數ニ止マリシコトヲ知ル。

丹波康賴ノ醫心方、卷一ノ終末ニ載スルトコロノ諸藥和名ハ本草内藥八百五十種、本草外藥七十種ヲ舉グルコト、本草和名ノ記載ト符合ス。別ニ丹波康賴ノ著ニ本草類篇述日本勅號記、一名本草和名傳抄、一名康賴本草ト題スルモノアリ(續群書類從中ニコレヲ收ム)、コノ書中ニハ專ラ神農本草經ヲ引テ草・木・果・米穀・菜・玉・石・人・禽・蟲・魚ヲ順次列舉シ、ソノ性味・和名・及ビ採藥時節ヲ明示シタリ。

右ハコノ期ニ於ケル本草學ノ由來ヲ略述セシモノナルガ、藥物ノ性味ヲ辨識スル他、藥品ヲ調合シ、コレヲ病者ニ應用スルト等ニ就テモ、當時醫家ノ研究ハ稍々ソノ歩武ヲ進メタルモノアリ。醫心方ニ藥物ノ應用ヲ論ズルヤ則チ曰ク『千金方云、扁鵲曰、人之所レ依者形也、亂ニ於和氣ニ者病也、理ニ於煩毒ニ者藥也、濟レ命扶レ厄者醫也、安レ身之本、必資ニ於食ニ、救レ疾之要、必憑ニ於藥ニ、不レ知ニ食宜ニ者、不レ足ニ以存レ生也、不レ明ニ藥忌ニ者、不レ能ニ以除レ病也』『御藥、先レ草次レ木、次レ石、將レ藥之大較也』『本草經云、治レ寒以ニ熱藥ニ、治レ熱以ニ寒藥ニ、飲食不レ消以ニ吐下藥ニ、鬼注蠱毒以ニ毒藥ニ、癰腫瘡瘍以ニ瘡藥ニ、風濕以ニ風濕藥ニ、各隨ニ其所レ宜』。而シテ藥ヲ服スルノ時期(食前、食後)ヲ定メ、ソノ分兩ノ單省ナルモノト、複雜ナルモノトヲ應用スルノ場合ヲ詳ニシ、又藥ヲ服スルニ方リテ食物ノ禁ズベキモノヲ舉グル等、注意甚ダイタレリ。

合藥ノ法ヲ説クヤ、『千金方云、凡搗レ藥法、燒レ香、洒掃潔淨勿レ得ニ雜語ニ、當下使ニ童子搗レ之、務令中細熟上、杵數可下至ニ千萬過多ニ爲レ佳』ト言ヒ、合藥時ハ潔淨ヲ旨トシ、觸穢ノモノヲ避ケ、以テ藥物ノ神聖ヲ保ツベシトセリ。

藥物ヲ用フルノ方法ニツキテ言ヘバ、丸トスベキモノアリ、散トスベキモノアリ、水煮スベキモノアリ、酒漬スベキモノアリ、膏煮スベキモノアリ、藥性ニ從ツテ之ヲ撰擇セザルベカラズトナセリ。

藥舂大小ノ量ハ出雲廣貞勅命ヲ奉ジテ之ヲ制定セリト傳フレドモ、今ハ之ヲ詳ニスルニ由ナシ。醫心方ニハ本草經ヲ引テ、十黍ヲ以テ一銖トナシ、六銖ヲ一分、四分ヲ一兩、十六兩ヲ一斤トナシ、散藥ヲ量ルニ刀圭ト言フハ方寸ヒヲ十分セルニテ、方寸ヒハ匕正法一寸ヲ作ル、四刀圭ヲ一撮トナシ、十撮ヲ一タトナシ、十タヲ一合トナス。

丸藥ヲ量ルニ細麻ノ如シト言フハ即チ胡麻ナリ、大麻ノ如シト言フハ即チ大麻子ナリ、胡豆ノ如シト言フハ青斑豆ナリ、子ノ如シト言フハ大豆ヲ以テ之ニ准ズ、云々、ト説キタリ。

養生科

我が邦上古ヨリ鎮魂祭アリテ壽ヲ祈ルノ風アリ、養生ノ意ハ先ヅココニ現ハル。然レドモ醫家ガコノ事ヲ講究スルニ至リシハ奈良朝以後ニシテ、物部廣泉ガ攝養要訣二十卷ヲ著ハシタルヲ以テ、斯科專書ノ嚆矢トス。

物部廣泉ハ左京ノ人、本ト伊豫國風早郡、姓ハ物部首、後京兆ニ隸シテ朝臣ノ姓ヲ賜フ、廣泉少フシテ、醫術ヲ學ビ、多ク方書ヲ見ル、天長四年醫博士兼典藥允トナリ、遷テ侍醫トナル。後累リニ伊豫讀岐椽ニ遷ル、侍醫故ノ如シ。六年春、外從五位下ヲ授ケラレ、内藥正トナル。十四年從五位下兼伊豫椽ヲ授ケラル。仁壽四年從五位上ヲ授ケラレ、肥前介トナル、内藥正、侍醫故ノ如シ。天安二年參河權介ヲ兼ヌ。貞觀元年ノ冬、正五位下ヲ授ケラレ、參河權守ニ轉ズ、内藥正、侍醫故ノ如シ。廣泉藥石ノ道、當時獨歩ノ稱アリ。齡老境ニ至リ、鬚眉皎白、皮膚悅澤、體氣猶ホ強シ、卒スル時、年七十六。(三代實錄)

惜イカナ、攝養要訣ハ佚シテ今ニ傳ハラズ。後百五十年ヲ經テ、丹波康賴ノ醫心方アリ、ソノ第二十七卷ヨリ二十九卷ニ至ルマデハ養生科ニシテ、主ニ千金方・養生要集・抱朴子等ノ諸書ニ據リ、行止・坐起・飲食・言語・衣服・居處等ノ養壽ニ關涉スルコトヲ説キ、別ニ房內(房事ノ衛生)・食禁ニツキテ詳論シタリ。

房內ノ一科ハ男女交接ノ衛生ヲ論述セルモノニシテ、當時養生科ト相對シテ一科ヲナセシコトハ、醫心方ノ記述ニ依リテ之ヲ推知スルコトヲ得ベシ、即チ醫心方、卷二十八ハ所謂房內ニ關スル記述ニシテ、玉房秘訣・玉房指要・素女經等ノ諸書ヲ引テ、交接ノ方法種類、交接ヲ忌ムベキ日、飲食ヲ慎シムベキコト、及ビ交接スベキ度数等ヲ精細ニ論述シ、且ツ陰萎ノ原因ヲ説キ、ソノ療法ヲ講ズルコトハ、實ニコノ科ノ本領ナリ。

食禁ハ春・夏・秋・冬ノ四時ニ食ノ禁ズベキモノアリ、月々ニヨリ食ノ禁ズベキモノアリ、合食ノ禁ズベキモノアリ、鳥・獸・魚・果・菜・水ノ禁ズベキモノアルコトヲ主トシテ説キ、次デ食物ノ毒ニ中ルモノヲ療スルノ方法ヲモ擧ゲタリ。

然レドモソノ説ノ歸スルトコロハ『人生レテ命ニ長短アルハ自然ニアラズ、皆將身慎マズ、飲食過差、淫佚度ナク、陰陽ニ忤逆シ、魂魄神散、精竭命衰、百病萌生、故ニ其壽ヲ終ラザルナリ』ト言フニ在リ。故ニ養生ノ方法トシテハ養神(神トハ五藏ノ神ヲ謂フナリ、五藏傷ブルトキハ即チ五神去ル)・養形(春夏ハ陽ヲ養ヒ、秋冬ハ陰ヲ養ヒ以テ萬物ト共ニ生長ノ門ニ浮沈ス)・用氣(行氣閉氣、コレ治身ノ要ナリ)・導引(導引ハ人ノ支體骨節中ノ諸惡氣ヲ去ラシムル所以ナリ)等ノ諸方法ヲ主トシテ施シ用フベキコトヲ唱道セリ。

安徳天皇ノ壽永三年、釋蓮基、長生療養方二卷ヲ選ビ、ソノ一卷ニ於テ養生ノ方法ヲ論述セリ、而カモソノ項目ハ長生養性・調氣導引・齋神誦文・聽明益智・延齡服藥・却老沐浴・去三尸・避八風・薰衣香・服用・居處・飲食(菓菜・米穀・禽獸・蟲魚・水氷霜雪ノ功能)・食禁・雜禁・斷穀・避水火・避兵刃・避邪魅・避蛇蟲方等ニ過ギズ。別ニソノ説ニ於テ新シキヲ加ヘタルニアラズ。思フニ當時養生ノ道ニ於テ最モ重ンゼラレタルモノハ延齡服藥ノ方ニシテ、ソノ最モ稱揚セラレタルハ枸杞一味ナリシナラン。長生療養方ニ枸杞ノ處方ヲ擧ゲ、且ツ曰ク『我が朝ニハ文徳天皇ノ御宇ニ竹田千繼ト云フモノ、飲食浴湯ヒトヘニ枸杞ヲ用フ、壽百二十年、尤モ服スベキノ良藥ナリ』ト。

服石モ亦性理ヲ調和シ、命ヲ養フヲ以テ趣旨トスルモノニシテ、同ジク養生ノ一方トシテコレヲ見ルコトヲ得ベシ。蓋シ服石トハ五石散・鐘乳諸石・丹藥等ヲ服スルヲ言フモノニシテ、支那ニアリテ魏・晋六朝ヨリ唐マデ流行シ、我が朝ニアリテモ平安朝時代ニ行ハレシコトハ仁明天皇ガ自カラ五石ヲ練リ^㉔、金液丹ヲ服シタマヒシコト^㉕、アルノ一例ニテソノ大概ヲ推察スベシ。

咒禁科

大寶令ノ制ニ、宮内省典藥寮ニ^{ジュゴン}咒禁師二人（掌^ニ咒禁）咒禁博士一人（掌^レ教^ニ咒禁生^ニ）咒禁生六人（掌^レ學^ニ咒禁^ニ）アリ。ソノ醫疾令ニハ『咒禁生、學^ニ咒禁解忤持禁之法^ニ、限^ニ三年^ニ成^レ』トアリ。持禁トハ杖刀ヲ持シテ咒文ヲ讀ミ、法ヲ作シ、氣ヲ禁ジ、猛獸・虎狼・毒蟲・精魅・賊盜・五兵ノ爲メニ侵害セラレズ、又咒禁ヲ以テ身體ヲ固メ、湯火刀刃ノタメニ傷ブルトコロトナラザルヤウニスルヲ言ヒ、解忤トハ咒禁法ヲ以テ衆邪ノ驚動ヲ解クヲ言フ（政事要略九十二引クトコロニ依ル）モノニシテ、ソノ法ハ陰陽家及ビ佛氏ノ説ニ類似シタルトコロアリ、固ヨリ、唐令ヲ模倣シテ之ヲ設ケシマデナレバ、後ニハ別ニ典藥寮ニ之ヲ置カズ、^{ヘンバイ}反閑^{ミカタメ}・身固ノ如キハ、モト咒禁ノ一法ナリシモ、コレモ後ニハ陰陽師ノ掌ドルトコロトナルニイタレリ。

和名鈔中ノ病名

既ニ上章ニモ論述セル如ク醫心方以前ノ醫書ハ今日ニ傳ハラザルニヨリ、當時ノ醫家ガ認識セル疾病ノ如何ハ之ヲ詳ニ知ルコト能ハズ。大寶令、延喜式ノ文中ニ疾病ノ名目ヲ散見スレドモ、固ヨリ當時ノ疾病ヲ悉ク網羅セルモノニアラズ、加フルニ唐令ヲ轉寫セルニ過ギズシテ、人ヲシテ果シテソノ病ノ當時我が邦ニ存セシカ否カヲ推定スルニ苦シマシムルモノアリ。寛平四年ノ撰述ニ係ルトコロノ新撰字鏡中、病名ヲ掲グルモノアリト雖モ完カラズ。源順ノ和名類聚鈔ハ庶物ノ和名ヲ擧ゲ、對譯スルニ漢名ヲ以テセル書ニシテ、ソノ第三卷ニ於テ疾病ノ種類ヲ擧ゲタリ、該書ハ醫家ノ手ニ成レルモノニアラズ、又醫方ノ書ニアラズト雖モ、而カモ、我が邦現在ノ古書中ニテ疾病ノ種類・名目ヲ擧ゲタルハ、コノ書ヲ以テ始トスルガ故ニ、ココニコノ書ニ依リテ當時（源順ハ永觀二年西曆九百八十三年ニ歿ス、故ニコノ書ハ西曆十世紀ノ中頃ニ成レルモノナリ）疾病ノ種類ヲ左ニ示スベシ（註釋ノ漢文ヲ以テセルモノハ原書ノ儘ヲ鈔録セルナリ。）

頭風 魏志云、大祖苦^ニ頭風^ニ。』頭痛ナリ、頭風ト頭痛トハソノ痛ノ淺深ニヨリテ之ヲ別ツナリ。（醫方撰要）

聾 ^{ハシレ} 四聲字苑云、聾、耳不^レ聞^レ聲也

聾耳 ^{ミ、タリ} 病源論云、聾耳風熱耳生^ニ膿汁^ニ也。』耳漏ノ義ナリ

盲 ^{メシレ} 唐韻云、盲、目無^ニ眸子^ニ也

アキシヒ 清盲 七卷食經云、几鹿并ニ梅季ニ食レ之、任身、使ニ子清盲ニ、俗云阿岐之比』病源候論ニ曰ク、清盲トハ眼本

異ナルコトナク、瞳子黑白分明ナリ、直物ヲ見ザルノミ、蓋シ白内障ナラン

チカメ 近目 食療經云、婦人任身、勿レ食ニ驢馬肉ニ、令ニ子近目ニ俗云知賀米』病源候論ニ目不能遠視ト稱スルモノ、コレナリ

カスメ 眇 周易云、眇能視、蹇能行』病源候論ニ言フ、偏物ヲ見ザルモノ、コレヲ眇目ト言フ

タハラメ 曠 文選風賦云、得レ目爲レ曠』病源候論ニ曰ク、腑臟ニ熱氣アレバ、肝ヲ薰シ、目皆瞼ニ衝發シテ、液道ヲシテ熱シ、澁滯シテ眇曠ヲ結成セシム

ヒ 目翳 病源論云、目翳、目膚眼精之上、有レ物如ニ蠅翅ニ、是也』蓋シ角膜翳ヲ指スナリ

トリメ 雀目 病源論云、人至レ暮、不レ見レ物、世謂ニ之雀盲ニ俗云度利女謂ニ如下鳥雀上瞼則無レ所レ見也』夜盲

Hemeralopie ノ義ナリ

メクルメクヤマヒ 眩 釋名云、眩、懸也、目之所レ視、動亂如レ懸レ物、搖搖然不レ定也

ハナヒセ 鼻塞 釋名云、鼻塞曰レ鼯、洩久不レ通、遂至ニ窒塞ニ也』。病源候論ニ曰ク、肺ノ氣ハ鼻ニ通ズ、若シ肺藏調和

スルトキハ則チ鼻氣通利シテ香臭ヲ知ル、若シ風冷藏府ヲ傷ブリ、邪氣鼻ニ蘊積スルモノハ則チ津液壅塞シ、鼻氣宣調ナラズ、故ニ香臭ヲ知ラズシテ鼯トナル。失顛ノ義ナリ

ヲフシ 瘡癩 說文云、瘡癩、不レ能レ言也

コトモリ 吃 聲類云、吃、重言也、說文云、言語難也

イクチ 兔缺 續晋陽秋云、魏泳之生而兔缺俗云以久智。辨色立成云、缺脣也』病源候論ニ曰フ、人生レテ唇缺ケテ兔唇ニ似タルモノアリ、故ニ之ヲ兔缺ト言フ

クチユガム 喎僻 說文云、喎、口戾也、病源論云、喎僻則言語不レ正也』主ニ顔面神經麻痺ヲ指シテ言フニ似タリ

ヒココエ コロク 失聲及嘶咽 食療經云、食ニ熱膩物ニ、勿レ飲ニ酢漿ニ、失聲嘶咽

ムス 哽咽 唐韻云、哽咽、食塞也』膈證（嚥下困難）ノ義ナリ

サクリ 噦噎 唐韻云、噦噎逆氣也

喘息アヘキ 唐韻云、喘、口氣引貌也』呼吸困難ノ義ナリ

效嗽シハブキ 病源論云、效嗽、肺寒則成也

歐吐ヘトツク 病源論云、胃氣逆則歐吐歐又作嘔

唾血タマヒテハク 極要方云、唾血、一緣二內傷、一緣二積熱、有二此病二』咳嗽甚シクシテ血ヲ吐クナリ

津頤ヨタリ 病源論云、津頤、小兒多涎唾、流二出於頤下一也

哕吐ツタミ 病源論云、哕吐、小兒由二哺乳冷熱不レ調所レ致也

喉痺コヒ 病源論云、喉痺、喉裏腫塞、痺痛、水漿不レ得レ入、是也』按ズルニ、コノ症ハ扁桃腺炎ナリ

齶脣アヒクテ 說文云、齶、口張齒見也

重舌 病源論云、舌本血脈脹然變生如二舌之狀一、謂二之重舌一也』コレ蝦蟆腫ニ外ナラズ

齶齒ヲソハ 蒼頡篇云、齶齒重生也

歷齒ハワカレ 文選好色賦云、歷齒ハワカレタリ

齶齒ムシカメハ 釋名云、齶、蟲齧之齒缺朽也ノラフノ

齶齒ハカミ 錄驗方云、齶齒、睡眠而相切、有レ聲也

瘧ネコト 孫愐云、瘧、寐言也ネコト

齶ハキル 說文云、齶、齒傷ム酢ニ也

齶齶キンカイ 孫愐云、齶齶、切レ齒怒也

胡臭ワキクン 病源論云、胡臭、人腋下臭如二葱鼓之氣一、又謂二之狐臭一、如二狐狸之氣一也

脚氣アシノケ 醫家書、有二脚氣論一 脚氣一云脚病俗云阿之乃介

痿痺ヒルムヤマヒ 蒼頡篇云、痿痺、不レ能レ行也』素問二所謂痿厥痿躄ニシテ、截癱 (Paraplegia) ヲ指スナリ

轉筋コムラカヘクカラスナヘリ 脚氣論云、轉筋、由二脚弱一所レ生也』局處筋肉痙攣ヲ發スルヲ指シテ言フナリ

燻コヒ 毛詩註云、腫足曰燻、又云、卑濕之地、其人多燻

蹇アシナヘナヘク 說文云、蹇、行不正也

駢拇ムツヲヨビ 莊子云、駢拇枝指

癥瘕カメハラ 蒼頡篇云、癥瘕腹中病也』病源候論ニ曰ク、食飲消せず、聚結内ニ在リ、漸次生長シ、塊段盤牢シテ移動

セザルモノヲ癥トナシ、結瘕アリテ推移スベキモノヲ瘕ト名ヅク、

瘡エカハラ 錄驗方云、瘡、小兒腹病也、唐韻云、腹内結病也

疝アタハラヘラタミ 釋名云、疝、腹急痛也

蚘蟲カヒ、アクト 寸白蟲 唐韻云、蚘、人腹中長蟲也

病源論云、蚘蟲今案一名寸白俗云加以又云阿久太飲白酒、食生粟等所成也

瘰ハラフクル 字書云瘰亦作脹腹滿也』主ニ腹水ヲ指ス

痔ヂノヤマヒ 說交云、痔、後病也

脫シリイツルヤマヒ 疰 病源論云脫疰亦作肛肛門脫出也

痢クソヒリノヤマヒ 釋名云、痢、言ニ出漏之利一也

癰チクソ 釋名云、痢赤曰癰、赤痢知久會白痢奈女言ニ滯而難一レ出也

淋病シハユハリ 聲類云、淋亦作痲小便數也

臨瀝シタチユハリ 病源論云、臨瀝、小便滴瀝也

長血 小品方云、婦人長血、又有二白血一

產後腹シリハラ 新撰要方云、婦人產後腹痛

陰類ソヒ 鼠蹊歇兒尼亞若クハ陰囊歇兒尼亞ヲ指シテ曰フ

疫エヤミトキノケ 說文云・疫民皆病也』希臘語ノ Epidemie ト全クソノ意義ヲ同ジクスルハ奇トスベシ

癘アシキヤマヒ 說文云、癘音例惡疾也

癩狂 モノケルヒ 令義解云、癩發時、臥_レ地吐_ニ涎沫_一、無_レ所_レ覺、狂惑自欲_レ走、域自高稱_ニ聖賢_一也

失意 ココロマトヒ 日本紀私記云、失意

酗酒 サカカリ 唐韻云、酗_一云酒狂醉怒也

瘡瘍 カチノヤマヒ 病源論云、瘡瘍、渴而不_ニ小便_一也

黃疸 キハムヤマヒ 病源論云、黃疸_一云黃病身體面目爪甲及小便盡黃之病也

霍亂 シリヨリクチヨリコクヤマヒ 漢書云、南越多_ニ霍亂之病_一矣

瘧病 エヤミワラハヤミ 說文云、瘧、寒熱并作、二日_一發之病也』今日謂フトコロノ間歇熱コレナリ

苦船 フネヤモヒ 辨色立成云、苦船

瘰癧 ウエフセリ 日本紀私記云、瘰癧

擇食 ツハハリ 辨食立成云、擇食

丁瘡 チャウソウ 千金方云、丁或作_レ疔

丹毒瘡 掌中要方云、丹或作_レ疔丹_一要毒之氣、其色無_レ常

疽 ソ 說文云、疽俗云發背久癰也

癰 ヨウ 釋名云、癰、氣壅結而不_レ潰也

瘰癧 ヘウソ 集驗方云、瘰癧、血氣否澁而所_レ生也

乳癰 チフ 四聲字苑云、疔與妬同婦人乳腫也、釋名云、乳癰曰_レ妬、妬貯也、言_ニ氣貯積不_レ通也

瘰 ニキミ 唐韻云、瘰 小瘰也

癰 カタネ 病源論云、癰癰、血結聚所_レ生也

浸淫瘡 シンミサウ 病源論云、浸淫瘡、風熱發_ニ於肌膚_一也』病源候論ニ曰ク、初生ハ甚ダ小ク、先ツ痒クシテ後痛ミ、瘡

トナル、汁出_レデテ浸漬シ、肌肉浸淫シテ漸ク潤シ、ソノ漸々ニ增長スルニ因リテ浸淫ト名ヅク。膿疱疹ナラン

皰瘡 モカサ 唐韻云、皰面瘡也、類聚國史云、仁壽二年、皰瘡流行、人民疫死皰瘡此間云裳瘡

癭 エヒロフ 瘰癧 說文云、癭腫也

瘤 シヒネ 病源論云、瘤、皮肉急腫起、初如_二梅李_一、漸長大不_レ癢、不_レ痛、又不_二堅強_一者也

瘰癧 アマシシノコクミ 說文云、瘰癧奇肉也

附贅 フスヘ 莊子云、附贅懸疣

懸疣 サカリアスヘ 釋名云、疣、丘也、出_二皮上_一、高如_二地之有_一丘也

疣目 イヒホイヲメ 病源論云、疣目今案疣卽疣字也手足邊忽生、如_二豆籬_一、強_二於肉_一也』後_二鷄眼、魚目、石胞等_一稱アリ「イヲメ」

ハ今「ウヲノメ」ト通稱ス、ソノ形ノ似タルヲ以テ言フナリ

疥癩 ハダケ 內典云、疥癩

癬 セニカサ 說文云、癬、乾瘍也

瘍 カシラカサ 說文云、瘍、頭瘡也、周禮註云、禿頭瘡也、野王案無_レ髮也

鬼舐頭 病源論云鬼舐頭師說爲天狗下食所舐是人頭、或如_二錢大_一、或如_二指大_一、髮不_レ生也』コレ圓形禿髮症 Alopecia areata ナリ

奸 クロクサ 玉篇云、奸、面黑氣也

「里龜」 ヲモハハクソ 唐韻云、「里龜」、面黑子也

漆瘡 ウルシカブレ 病源論云、漆瘡、人見_レ漆、中_二其毒_一而腫、是也

熱沸瘡 アセモ 四聲字苑云、沸熱時細瘡也。新錄方云、治_二夏月熱沸瘡_一

飼面 カスモ 病源論云、飼面、面皮上、有_レ滓是也

皴鼻 ニキミ、ハナ 野王案、皴、鼻上皰也

胗 クチヒヒ 唐韻云、胗、脣瘡也

白癩 シラハタ 病源論云、白癩、人面及頸皮肉色變、白亦不痛癢者也』白斑 Vitiligo カ

歷易 ナマツハタ 病源論云、歷易、人頸及胸前腋下自然斑點相連、不痛不癢』癩風 Pityriasis versicolor カ

疵 アサ 晋書云、趙孟面、有二疵一

黑子 ハハクソ 漢書云、黑子、今中國呼アレン三黧子一、吳楚俗、謂之誌一者、訛也

代指 ツマハラメ 集驗方云、代指、無三毒由三筋骨中一、熱盛所レ生也』醫學入門ニ曰ク、代指ハ指頭腫脹シテ愀熱掣痛シ、

漸ク爪甲ノ周邊ニ醗膿シ、甚シキハ爪甲脱落ス、爪根炎 Onychia カ

瘰 シモクチ 漢書音義云、瘰手足中レ寒作レ瘡也』「シモクチ」ハ霜析ノ義ナリ、今ハ霜燒シモヤケト通稱ス

輝 アカカリ 漢書註、輝、手足坼裂也

肉刺 ノイスマ 病源論云、肉刺脚指間、生レ肉如レ刺、由三著靴少相楷ヌルヒ一而所レ生也』案ズルニ「ノイスマ」ハ芒墨ノギズミノ音

便、今ハ肉刺マメト通稱ス

癩疹 チ、ホムチハク 四聲字苑云、癩疹、皮外小起也』皮膚發疹ヲ汎稱スルカ

風癩疹 カサホロシ 病源論云、人皮膚虛、爲三風寒一、所レ折、則起也』

皴 フクル 聲類云、皴、肉憤起也

腫 ハル 山海經云、疔腫也、野王案、腫身體皴起、虛滿也

膿 ウミシル 四聲字苑云、膿瘡汁也、說文云、膿腫血也

痕 ウルム 漢書音義云、痕以レ杖擊レ人、其膚起ニ青黑一也

痛 イタシ 釋名云、痛通也、通在三膚脉中一也

癢 カユシ 釋名云、癢、揚也、其氣在三皮中一、欲ニ發揚一、使三人搔發而揚出一也

右ノ疾病名目中ニハ、ソノ實一個ノ獨立ノ疾病ニアラズシテ、タゞ某病ノ一徵候ニ過ギザルモノアリ、然レドモ
コノ如ク、見證ニヨリテ名ヲ命ズルハ隋・唐醫學ノ常トスルトコロニシテ、コレニ依倣セシ我が邦ノ醫學ガ獨立ノ
疾病ト疾病ノ證候トヲ混同シテ、以テ疾病ノ種類ヲ區別セシハ固ヨリ深ク怪シムニ足ラズ。而シテ余ガココニ煩ヲ

厭ハズシテ和名類聚鈔ノ記載ヲ鈔出スル所以ノモノハ、コノ書、和名ヲ擧ゲテ漢名ニ對譯スルヲ主トシ、ソノ書中ニ掲ゲタル疾病ハスナハチ當時我が邦人ノ認識セシモノナルコトヲ證スルニ足レバナリ。

醫心方中ノ病名

當時ノ醫書醫心方ニツキテ記スルトコロノ疾病ノ種類及ビ名目ヲ擧ゲテ少シク説明スレバ次ノ如シ。

風病

風氣ノ人ニ中タルニ因リテ生ズ、風ハ是レ四時ノ氣ナリ。ソノ病ヲ爲スヤ、皮膚ノ間ニ藏レ、内通ズルコトヲ得ズ、外泄ルルコトヲ得ズ、ソノ經脈ニ入り五藏ニ行クトキハ各々藏府ニ從ヒテ、心中風、肝中風、脾中風、腎中風、肺中風ヲ生ズ。而シテ中風ノ證ニ多様アリテ、殊ニ主要ナルハ半身不隨、口噤不開、背強而直、頭眩、目痛、口喎、耳聾、頭痛、舌強、不語、失音、驚悸、心中煩悶、骨節疼痛、脚弱、身體不仁、身體如蟲行^一、等ナリ。ソノ症候ノ記述ニヨリテ案ズルニ、中樞神經系統ノ疾患タルヤ、論ナカルベシ。

續日本紀、光仁天皇天應元年夏四月、詔シテ曰ク『朕枕席不^レ安、稍移^三晦朔^一、雖^レ加^三醫療^一、未^レ有^三效驗^一、云々』又詔シテ曰ク『加以、元來風病爾苦都身體不^レ安、云々』日本後紀、平城天皇大同四年『天皇自^ニ從去春

一、寢膳不^レ安、云々、詔曰、云々、朕躬劣弱弓洪業爾不^レ耐、云々、加以、朕元來風病爾苦都身體不^レ安、云々』榮華物語ニ「なほこの殿は、ちいさくより、風おもおはしますとて、かぜの療治どもをせさせ給ふ』

『長徳元年、關白殿御心地猶惡しく思さるれば、御風^一にやなど思して、ほを^二なごまゐらすれど、更に怠らせ給はず』コノ頃ノ物語類ニ風ノ心地トアルハコノ類ニテソノ風ト言ヘルハ、ココニ所謂風病ナリ、奈須柳村ハ説ヲナシテ曰ク『むかしの物語を讀むに風の心地といへる詞あり、是は諸病の因は風寒なりと、くすしがいいたるが世人にうつりて、凡病は風より起るものと心得たるやうに見ゆれども、斯邦に一種かぜといふ症あるより、唐土のいふ風とは異なり、其異なる事は治療の異なるにて知るべし、云々、是ほ^一の皮を用て、癒る病ありて、是を風といふなり、本草厚朴^{ほを}にいひ傳へたる主治に拘らず、これを用て斯邦の風はなほるなり』トイヘリ。コノ頃ノ風ニ厚朴ヲ用ヒシコトハ上段ニ引用セル榮華物語ニモ出デ、ソノ他ノ諸書ニモ見エタルガ、壽永三年ニ釋蓮基ガ撰述セル長生療養方ニ『厚朴、味苦、大濕、無毒、主^ニ中風傷寒頭痛^一、療^ニ霍亂腹痛^一』トアルヲ見レバ厚朴ノ主治ニ中風ヲ擧ゲタルニテ、ソノ風ト言フハココニ擧ゲタル風病ニ外ナラザルコトヲ知ル。佐藤方定ハ曰ク『状態も定らず、常あつしくて、年普く痼疾と成れるを云にて、今俗にいふ癩と見えたり、今世にいふ、風病には非る類なり』^③ト、後ノ世ニ癩(神經病)ト稱スルモノヲ風病ノ中ニ存セシコトハ固ヨリノコトナルベシ

癩病

『其發、則仆^レ地、吐^ニ涎沫^一、無^レ所^レ覺』スナハチ癩癩ナリ(癩癩ノ稱呼ハ既ニ千金方ニモ見エタリ)

狂病

『發則欲^レ走、或自高賢、稱^ニ神聖^一』『狂發、少^レ臥不^レ飢』『鬼語妄言、狂罵詈謔^ニ打人^一』精神障礙ヲ論ジ、ソノ徵候ヲ記スルヤ稍詳ナルモノアリ³⁸

癩病

白癩 烏癩 木癩 火癩 土癩 金癩 水癩 病源候論云、凡癩病、皆是惡風、及犯^ニ觸忌害^一得^レ之(癩病ノコ

トハ別ニ之ヲ論ゼリ)

頭部病

白髮 鬢髮黃 鬢髮禿落 頭白禿(病源候論云、凡人有二九蟲^ニ、在三腹内^一、云々、白禿者、皆此蟲所レ作、頭上生レ瘡、有二白痴^一、甚癢、其上髮并禿落、故謂^ニ之白禿^一也) 頭赤禿 鬼舐頭(病源候論云、髮禿落、或如^ニ錢大一、或如^ニ指大一、髮不^レ生、亦不^レ癢、故謂^ニ之鬼舐頭^一也) 眉脫 毛髮妄生 頭面瘡 面皴瘡(和名

爾支美^{ニキミ}) 面疝^ニ「里颯」(和名於^{オモカス}毛加須) 鼻鼓又鼓鼻(病源候論云、此由^ニ飲酒^一、熱勢衝^レ面而遇^ニ風冷之氣^一相搏

所^レ生也、和名安加波奈^{アカハナ}) 飼面(和名以^{イロココオモテ}呂古於^{オモテ}毛天) 癰瘍(和名奈末都波太^{ナマツハタ}) 白癩(和名之良波太^{シラハタ}) 赤

疵(病源候論云、面及身體皮肉變赤、與^ニ肉色^一不^レ同、或如^ニ手大一、或如^ニ錢大一、亦不^ニ癢痛^一) 黑子又黑志 疣目 創癩 胡臭(腋下臭)

耳病

耳聾 耳鳴 耳卒痛 聾耳(病源候論云、耳中膿血出、作^ニ聾耳^一、治^レ之不^レ愈、是有^レ蟲也) 耳聾 耳聾 耳聾 耳聾 入^レ耳 水入^レ耳

目病

目不明 清盲(眼論云、忽然幕々不^レ痛、不^レ痒、漸々不^レ明、經歷年歲、遂到^ニ失明^一、今觀^ニ容狀^一、眼形不^レ異、唯正當^ニ眼中央^一、小瞳子裏、乃有^ニ鄣々曖々^一、作^ニ青白色^一、雖^レ不^レ別^ニ人物^一、要猶見^ニ三光^一、知^レ晝知^レ夜、如^レ此者、名曰^ニ清盲^一、此宜^レ用^ニ金錒^一決^レ之、一針便豁然、若^ニ雲開見^レ日也、白内障(ataract ナラン) 雀盲 目膚翳(病源候論云、膚翳者、明眼睛上、有^レ物如^ニ蠅翅^一者是也。主^ニ角膜翳^一ヲ指シテ言フニ似タリ) 目息肉 目珠管(病源候論云、津液變生、結聚狀如^ニ珠管^一也) 目珠子脫出 眼腫痛 目赤痛 目痒痛 目赤爛皆 目淚出(眼論云、若眼赤痒淚出、名爲^ニ風眼^一也) 目胎赤(病源候論云、胎赤者、初生不^レ洗^ニ淨目^一、穢汁浸^ニ漬皆^一、眼瞼赤爛難^レ癒) 目爲^ニ物所^一中 竹木刺^レ目 芒草沙石入^レ目

鼻病

鼻塞涕出 鼽鼻不^レ聞^ニ香臭^一) 鼻中瘖肉 鼻中生瘡 鼻痛 鼻中燥 鼻衄 鼻中物入

口唇病

緊唇生瘡 唇生核 唇黑腫 兔缺 唇面瘡 口舌生瘡 口舌出血 歐血 吐血 唾血 口中爛痛 口吻瘡 口舌乾焦 口臭 張口不合 舌腫 重舌 懸雍卒長

齒病

風齒痛 齶齒痛 齒碎壞 齒動欲^レ脫 齒黃黑 齒敗臭 齒齶腫(養生方云、水銀不^レ得^レ近^ニ牙齒^一發^ニ齶腫^一喜落^レ齒) 齒齶間血出 牙齒痛 牙齒後涌出 齒齧 齧齒

咽喉病

喉痺(病源候論云、喉痺者、喉裏腫塞、痺痛、水漿不^レ得^レ入也。扁桃腺炎ヲ指シテ言フナラン) 馬痺(病源候論云、馬喉痺者、謂^ニ熱毒之氣結^ニ於喉間^一腫連^レ頰而微壯熱、煩滿而數吐^レ氣、呼^レ之、爲^ニ馬喉痺^一馬喉痺ハ後ニ馬脾風ト稱スルモノニシテ、實布の里亞、格魯布等ノ症ヲ指シテ言フモノナリ) 喉咽腫痛 尸咽(病源候論云、尸咽者、謂^ニ腹内尸蟲上食^ニ入喉咽^一生^レ瘡)

胸腹痛

胸痛(胸痺) 脇痛 心痛 腹痛 心腹痛 心腹脹滿 卒腰痛 槩腰(病源候論云、槩腰者、謂^ニ卒然損^ニ傷於腰^一而致^レ病也) 腎著腰痛(僮深方云、腎著之爲^レ病、從^レ腰以下、冷痛、而重如^ニ五千錢^一、腹腫)

肝病 心病 脾病 肺病 腎病 大腸病 小腸病 膽病 胃病 膀胱病 三焦病 (千金方云、三焦病者脹氣滿、小腹尤堅、不_レ得_二小便_一、窘急、溢則爲_レ水、留則爲_二腹脹_一)

氣病

氣損 氣不足

脉病

脉虛驚跳不定 脉實洪滿

筋病

轉筋 (局處性筋肉攣急ヲ指シテ言フ) 胞轉筋 (膀胱攣縮) 腹腸轉筋

骨病

骨節疼痛

髓病

皮病

穴病

陰部病

陰瘡又陰惡瘡 (集驗方云、陰頭生_レ瘡、如_レ安_三石榴花_一、大者如_レ捲。千金方云、妬精瘡者、男子在_二陰頭節下_一、婦人在_二玉門內_一、並似_二甘瘡_一、大痛、用_二銀又_一、綿纏、臘月豬脂、薰_二火上_一暖、以_レ又烙_二瘡上_一。范汪方云、男子陰頭生_レ瘡、精食齧欲_レ盡。葛氏方云、陰蝕瘡欲_レ盡。コノ陰瘡中ニハ軟下疳、癌腫、及ビソノ他ノ潰瘍性疾患ヲ含ムモノニ似タリ) 陰癢 陰莖腫痛 陰囊腫痛 陰丸入_レ腹 急痛 (陰疝) 陰囊濕痒 陰頰 (脫腸ヲ指シテ言フ)

肛門病

脫肛 穀道痒痛 穀道赤痛 穀道生瘡 濕憲 (病源候論云、濕憲病、由_二脾胃虛弱爲_二水濕所_レ乘、腹內蟲動、侵食成_レ憲也) 疳濕 (病源候論云、人有嗜_二甘味_一多、而動_二腸胃間諸蟲_一致_レ令_レ侵_二食府藏_一、此猶_二是憲_一也) 諸痔 (牡痔、牝痔、脈痔、腸痔、血痔、氣痔)

九蟲

蛔蟲 (長一尺、亦有_二長五六寸_一) 蟯蟲 (形甚小、如_二蝸蟲狀_一) 赤蟲 (狀如_二生肉_一) 伏蟲 (長四分) 白蟲 (長一寸) 肉蟲 (狀如_二爛李_一) 肺蟲 (狀如_レ蠶) 胃蟲 (狀如_二蝦蟇_一) 弱蟲 (狀如_二瓜瓣_一) (此諸蟲、依_二腸胃之間若府藏_一、氣實則不_レ爲_レ害、若虛則能侵食、隨_二其蟲之動_一、而變成_二諸病_一 (病源候論)。白蟲ハ寸白ナリ、病源候論云、寸白者、長一寸、色白形小扁、或云、飲_二白酒_一、以_二桑樹皮_一貫_二牛肉_一炙食、并生粟所_レ成。又云、食_二生魚_一後、即飲_二乳酪_一亦令_レ生_レ之。又云、此蟲、長一尺、則令_二人死_一トアリ。今昔物語卷ニ十四ニ『今昔、典藥頭ニテ□□ト云止事无キ醫師アリ、云々、中ニ美ト思フ醫師ヲ呼テ彼_レ見ヨト云ヘバ、其醫師寄テ此ヲ見テ云ク、定メテ寸白ニ候フメリト云フ、其ヲバ何ガ可_レ治ト、醫師ノ云ク抜クニ隨テ白キ麥ノ様ナルモノ差出タリ、其ヲ取り引ケバ綿々ト延レバ長ク出來ヌ、出ルニ隨テ廳ノ柱ニ卷ク、云々、柱ニ七尋八尋許卷ク程ニ出來畢リテ残り出來ズナリヌ、云々、其後女ノ云ク、然テ次ニハ何ガ可_レ治、醫師只薏苡湯ヲ以テ可_レ茹也、今ハ其ヨリ外ノ治アルベカラズト云フ返シ遣テケリ』、寸白ト言フハ蝨蟲ナルコトヲ推知スベシ

手足病

脚氣 (蘇敬ガ説ヲ引テ云ク、晋宋以前、名爲_二緩風_一、古來無_二脚氣名_一、後人以_二病從_レ脚起、初因腫滿_一、故名_二脚氣_一耳。) 脚腫 (病者自_レ膝已下、至_二踝及指_一、俱腫) 尸脚 (葛氏方云、脚無_二冬夏_一、恒圻裂者名_二尸脚_一) 肉刺 (脚指間生_レ肉、由_レ着_レ靴、忽小指相揩而生) 手足凍腫 手足輝裂 胼胝 逆臚 (手足爪甲際皮剝

起、謂_二逆臚_一（病源候論） 代指（爪根炎ヲ言フ）

呼吸病

肺咳 心咳 肝咳 腎咳 脾咳 胃咳 膽咳 大腸咳 小腸咳 膀胱咳 三焦咳 喘息 短氣 少氣 氣噎 賁
純

食飲病

淡飲（留飲又ハ停飲ト稱スルモノ） 癖食（疝癖腹堅如レ石） 胃反吐食 宿食不消 寒冷不食 穀勞惡心 噫
酢（吞酸） 嘔吐 干嘔 噦

積聚

積者陰氣、五藏所_レ生、始發不_レ離_二其部_一、故上下有_レ窮也、聚者陽氣、六府所_レ成、故無_二根本_一、上下無_レ所_二
留止_一、其痛無_レ有_二常處_一（病源候論）

疝

風冷入_二腹内_一而成_レ疝、疝者痛也（腸痛）

水腫

大腹水腫 通身水腫 風水腫（令_三人身浮腫如_二裏水之狀_一、按_二腫上_一凹而不_レ起、骨節疼痛而惡風） 身面卒腫

黃疸

黃汗

霍亂

歐而吐利、此爲_二霍亂_一（集驗方）

下痢

白痢 赤痢 赤白痢 膿血痢 雜痢 水穀利 重下（赤白帶下） 疝利（痢病ノコトハ別ニ之ヲ論ズベシ）

小便病

消渴（小品方云、消渴之疾、渴不_レ利也、又作_二渴利_一、渴利之病、隨_レ飲小便也。錄驗方義、消渴、日飲_二六七
斗_一。尿崩又ハ糖尿ヲ此内ニ存スルヤ明ナリ） 內消（病源候論云、內消者、不_レ渴而小便多、是也） 淋（小
便出少、起數） 石淋（淋而出_レ石也、腎主_レ水、水結則化爲_レ石、故腎容_二沙石_一。病源候論） 氣淋 勞淋
膏淋 血淋 熱淋 寒淋（淋トハ腎臟、膀胱等ノ疾病ニシテ尿利澁苦ノ症ヲ呈スルモノヲ言フ、今日ノ醫家ガ所
謂淋病トハソノ義ヲ異ニス） 小便不通 小便難 小便數 小便不禁 小便血（尿血） 遺尿 尿床

大便病

大便不通 大便難 大便失禁 大便下血

虛勞

虛勞者、五勞、六極、七傷、是也（病源候論）

傳屍病

肺痿、骨蒸、勞極等ハソノ主要ノ徵候ニ從テ名ヅクルモノニシテ、瘦病、轉注等ハソノ別名ナリ、後ニ所謂勞瘵
（肺結核）ナリ

瘡

嶂瘡 間日瘡 連年瘡 發作無時瘡

傷寒

病源候論云、夫熱病者、傷寒之類也。葛氏方云、傷寒、時行、溫疫、雖_レ有_二三名_一、同一種耳。葛氏方云、傷寒
有_二數種_一、庸人不_レ能_レ別。コレニ依リテ考フルニ傷寒ハ熱病、時行。溫疫ハ時行ノ病ニシテ、溫疫ハ相傳染ス

ルモノ、傷寒ト概稱スルモノノ内ニハ此等ノ諸症ヲ含ミシニ似タリ。疫病ト稱セルモノモ多クハ皆コレナリシコト別ニ説アリ 豌豆瘡（時行炮瘡）。一ニ赤斑瘡ノ名アリ、傷寒ニ因スルモノトセラレ

瘡瘍

癰疽 附骨疽（附レ骨成レ疽。骨壞疽ヲ指シテ言フナリ） 瘰癧 癰疽 久疽（經久積年致ニ膿汁ニ不レ盡、則瘡内生レ蟲而變成レ瘰） 緩疽 甲疽 腸癰（腸炎ヲ指シテ言フ） 肺癰（肺膿瘍ヲ指シテ言フニ似タリ） 丁瘡 風毒腫 風腫 熱腫 氣腫 惡核腫 惡肉 惡脈病 編病 瘰癧（病源候論云、或如ニ梅毒等核ニ、大小兩三相連、在ニ皮間ニ而時發ニ寒熱ニ是也、久則變膿潰成レ瘰也） 癭（養生方云、諸山水黑土中出ニ泉流ニ者、不レ可ニ久居ニ、常食成ニ癭病ニ、動氣增惡、病源候論云、癭者、由ニ憂恚氣結ニ所レ生、亦由レ飲ニ沙水ニ、沙隨レ氣入ニ於脈一、搏ニ於頸下ニ而成レ之。ソノ甲狀腺腫タルコトヲ知ルベシ） 瘤 血瘤 癭病 丹毒瘡（丹毒 Erysipelas ヲ指シテ言フニ似タリ） 癬瘡（寄生性匍行疹ナリ） 疥瘡（病源候論云、常有レ汗出、並皆有レ蟲、人往々以ニ針頭ニ挑得ニ狀如ニ水内癩蟲ニ。和名波多介^{ハタケ}） 惡瘡 沸瀾瘡（世呼爲ニ沸子^{アセモ}ニ、汗疹ナリ） 浸淫瘡 反花瘡（癩カ） 玉爛瘡 惡露瘡 漆瘡

創傷

湯火燒灼 灸創 金創 毒箭所傷 竹木刺 醫針不出 打傷 腕折 獅犬嚙人（病源候論云、凡獅、犬嚙レ人、七日輒一發、過ニ三七日ニ不レ發則無レ苦也、要過ニ百日ニ、乃爲ニ大免ニ耳） 馬嚙レ人 猪嚙レ人 狐尿毒 鼠咬レ人 衆虵螫レ人

婦人病

妬乳 乳癰 陰癢 陰腫 陰瘡（病源候論云、婦人陰瘡者、由ニ三蟲九蟲動作ニ侵食所レ爲也、諸蟲在ニ人腹内ニ、腸胃虚損則動作、侵ニ食於陰ニ、輕者或癢、或痛、重者生レ創也） 陰中瘰肉 陰冷 陰臭 陰下挺出（陰脫） 月水不調 月水不通 月水不斷 月水腹痛 崩中漏下 妊婦惡阻（惡阻病） 妊婦數落胎 產難 逆産 横産 子死ニ腹中ニ

小兒病

解顛（頭縫開解） 搖頭 小兒頭面身體瘡 小兒面目屑 小兒燕口 小兒口瘡 小兒喉痺 小兒津頤 小兒難乳 小兒吐乳 臍瘡 小兒陰類 癩病（病源候論云、癩小兒病也、十歳以上爲レ癩、十歳以下爲レ癩、ソノ腦膜炎等ノ症ヲ指シヤ明カナリ） 小兒夜啼

中毒

飲食中毒 食諸菜中毒 食諸魚中毒 食諸穴中毒

右ニ鈔録セル所ハ固ヨリ主要ト認ムルトコロノモノヲ擧ゲタルニ過ギザレドモ、之ヲ前段ニ記述シタル和名類聚鈔ノ病名ニ對照シテ、當時ノ醫家ガ認識シタル疾病ノ種類ヲ概略推知スルコトヲ得ベク、又コレニ依リテ當時ノ病證學ノ大體ヲ窺フコトヲ得ベシ。ソノ各病ノ歴史ノ如キハ、後章ニ於テ、更ニ記述スベキヲ以テ、ココニハ敢テコレニ論及セズ。

疫病

痘瘡 續日本紀、延暦九年、是歲秋冬、京畿男女三十歳以下者、悉發ニ豌豆瘡^{モガサ}（俗謂ニ裳瘡）、臥レ病者衆、甚者

死、天下諸國徃往而在。文德實錄、弘仁五年有^二此瘡^一。仁壽三年二月京師及畿外、多^二此瘡^一、死者甚多。類聚符宣鈔、元慶三年疱瘡流行。扶桑略記、延喜十五年、八月二十五日讀^二仁王經於諸社諸寺^一、三日、禳^二此瘡疫痢^一、十月十一日、天皇患^二此瘡^一。日本紀略、天曆元年六月、今月以後、疱瘡多發、人庶多殤。扶桑略記、天延二年、八九月間有^二此瘡疫^一、天下貴賤、天亡者多矣。日本紀略、正曆四年、七八月間、有^二此瘡之患^一（扶桑略記、秋比、天下有^二此瘡疫^一）。日本紀略、寬仁四年、今年自^レ春、患^二此瘡^一、四月殊甚。榮華物語、長元九年、もがさ夏よりいで、人々わづらひける。扶桑略記、延久四年、去六月以後、疱瘡流行、貴賤不^レ免^二此厄^一（百練鈔、九月之比、疱瘡流行）。百練鈔、承曆元年、敦賢敦文兩親王依^二此瘡^一薨。歷代皇紀、承保四年、今年疱瘡、逝去者多。應德二年十一月八日皇太弟薨、十五、疱瘡、此秋、此瘡不^レ免^二貴賤^一。中右記、寬治七年、痘瘡盛行、踰^レ年不^レ已。嘉保元年、自^レ秋至^レ冬、諸國痘瘡流行。歷代皇紀、永久元年、二月比、大疱瘡（百練鈔ニハ赤斑瘡トナス）。台記、康治二年、五月、依^二此瘡^一、並公家御愼、有^二非常赦^一。百練鈔、安元元年、三月五日、主上御疱瘡、近日流^二行天下^一、被^レ行^二御祈禱^一。治承元年、二月、近日疱瘡流行。

以上記述スルトコロニヨリテ之ヲ見ルニ、延曆ヨリ養和ニ至ル、凡ソ四百年ノ間ニ、十九回ノ痘瘡流行ヲイタセルナリ。（前章ノ疫病ノ條下ヲ参照スベシ）

麻疹　日本紀略、長徳四年、今年、天下自^レ夏至^レ冬、疫瘡遍發、六七月間京師男女死者甚多、下人不^レ死、四位已下人妻最甚、謂^二之赤斑瘡^一、始^レ自^二主上^一、至^二于庶人^一、上下老少、無^レ免^二此厄^一。榮花物語、長徳四年、浦々のわかれの巻、今年、例のものがさにはあらで、いと赤き瘡の、こまかなる出で来て、老いたるわかき、上下わかず、これをやみの^レしりて、やがていたづらになるたぐひもあるべし。既ニ上章ニ擧ゲタル如ク、天平九年痘瘡流行ノ時ノ官符ニハ『是疫病、名^二赤斑瘡^一』トアリテ、赤斑瘡ハ主^二痘瘡ヲ指セシモノナレドモ、ココニ所謂赤斑瘡ハ痘瘡ニアラズシテ麻疹ナリ。小右記、萬壽二年、八月十一日、天皇患^二赤斑瘡^一、九月自^レ夏赤斑瘡流行、至^二是月^一不^レ止（日本紀略ニハ痘瘡ノ流行トナス）。百練鈔、承曆元年、今年、上自^二皇后大臣^一、下至^二庶人^一、皆煩^二赤斑瘡^一、親王公卿已下逝去者多。榮花物語、四五月ばかりより、あかもがさといふこと出で来て、世の人、病むなど聞ゆるに、六七月になりては、いみじう病みまさりて、のこるなくきこゆ、五十三年に出できたれば、老いたる、若きとなく、親子もわかず、一度にやみければ、起きたる人、少くありける。五十三年ハ萬壽二年ノ大流行ヨリ今年マデノ年數ナリ。百練鈔、永久元年、正月近日赤斑瘡流行（歷代皇紀ニハ痘瘡ノ流行トナス）、中右記、大治二年、夏、赤斑瘡流行。

咳逆　三代實錄、貞觀四年一月自^二去冬末^一京城及畿内外多患^二咳逆^一、死者甚衆。貞觀五年、一月二十一日、停^二内宴^一、以^二天下患^二咳逆病^一也。二十七日、賑^二給京師飢病尤甚者^一、自^二去冬末^一、至^二于是月^一、京師及畿内畿外多患^二咳逆^一、死者甚衆矣。三月四日勅班^二幣七道諸國名神^一、今春咳嗽流行、人多疫死、仍禱^二名社神明^一、有^レ感、因以賽^レ之。貞觀七年、去年天下患^二咳逆病^一。貞觀十四年、一月二十日、是日、京邑咳逆病發、死亡者衆、人間言渤海客來、異土毒氣之令^レ然焉、是日、大^二被於建禮門^一、以厭^レ之。咳嗽病ハ醫心方卷九ニモ之ヲ掲ゲタリ、ソノ記述ニ依リテ考フルニ、咳嗽ヲ以テ主徴トスルトコロノ病症ヲ指スモノニシテ、ソノ肺炎ナルカ、流行性感胃ナルカ、將タ肋膜炎ナルカハ、今ヨリ之ヲ詳ニスルコト能ハズ。然カモ當時ノ人ガ、渤海ノ人ガ、彼ノ邦ヨリコノ病ヲ齎ラセシモノナルコトヲ信ゼシヲ見レバ、ソノ流行ガ頓ニコノ頃ニ起リ、且ツ感染ノ著シカリシコトヲ推察スベシ。日本紀略、延長元年、正月、京中咳病往々有^レ聞、二十七日、臨時讚經、爲^レ攘^二咳病^一也。扶桑略記、延長元年、天下咳疫、多以夭亡矣。日本紀略、正曆四年、六月、今月、人民悉咳疫、五六月間、有^二咳逆疫^一。

福來病　日本紀略、天徳三年、今年、人民頸腫、世號^二福來病^一。長元二年、十月、自^二去月^一、至^二今月^一、京中人、

病ニ頸腫一、世謂ニ之福來病一。福來病ハフクレ病ト訓ズルカ、蓋シ流行性ノ頸腫ナリ、恐ラクハ耳下腺炎ナリシナラシ。

羊病 百練鈔、承安元年十月、近日稱羊病一、貴賤上下、煩ニ病患一、羊三頭在ニ仙洞一、人傳、承曆之比、有ニ此事一、件羊返ニ却之一。羊病ノ何病タルヤハ、今ヨリ之ヲ詳ニスルヲ得ズ。

錢病 百練鈔、治承三年、六月、近日、天下上下病惱、號ニ之錢病一。錢病ノ何病タルカハ固ヨリ之ヲ知ルコトヲ得ザルナリ。

赤痢 三代實錄、貞觀三年、八月、是月、京邑徃徃、梨李華或實、又患ニ赤痢一者衆、十歲以下男女兒、染ニ苦此病一、死者衆矣。日本紀略、延喜十五年、九月一日、近者、万木華發、諸人煩ニ赤痢一。醫心方ニ病源候論ヲ引テ『赤痢、由ニ脾胃虛弱一、爲ニ風邪所ニ傷、則挾レ熱、熱乘ニ於血一、則流滲入レ腸、與レ痢相雜下、故爲ニ赤痢一』ト言フ、ソノ赤痢ト稱スルモノハ、痢ニ血ヲ交ヘ、且ツ熱ヲ發スルモノニシテ、又疫痢ノ名アリ、感染ノ性ヲ有シテ流行セシモノナルコト明カナリ。今日赤痢ト稱スルモノ同一ノ症ナリシナラン。

以上記載スルトコロノ他ニ單ニ疫疾トシテ、續日本紀・日本後紀・日本後紀・續日本後紀・文德實錄・三代實錄・扶桑略記・歷代皇紀・中右記等ノ諸書ニ、ソノ流行ヲ記録セルモノ尠カラズ、左ニソノ年紀ヲ叙スベシ。

延曆四年、疫行、天殍不レ少〇四年五月周防飢疫〇十三年、安房國疫疾行

大同二年、京都疫疾行〇三年自春至夏京都及諸國疫疾流行〇四年、疫疾流行

弘仁三年六月至七月疫疾行〇十三年、甲斐疫疾流行〇十四年自春至秋諸國疫疾流行、人多死

天長元年、美濃飢饉、疫厲流行〇三年、京師飢病〇六年、諸國疫癘流行、人多死〇七年、太宰府管内及陸奥、出

羽疫癘流行〇九年、諸國早疫〇十年、京師及諸國疫癘行、夭死者多

承和元年、加賀及諸國疫癘行〇二年、佐渡、能登疫疾行〇三年七月太宰府奏、早疫相仍〇四年、疫疾間發〇七年、諸國飢疫〇十年、疫癘間發

嘉祥二年、京都疫癘、人徃々死亡

貞觀二年、長門疫癘大行、死者尤多〇六年、加賀、出雲疫疾大行〇八年、美作、備前、備中、伊勢、志摩、隱

岐、疫疾大行〇九年、五月京邑疫苦〇十二年、伯耆飢疫〇十八年、丹波、美作飢疫

昌泰元年、諸國疫疾大行

延喜三年、甲斐疫〇九年春夏之交疫疾盛行〇十五年、京都及諸國早疫疾行〇二十二年、京都疫癘行

延長六年、疫疾流行〇七年、京畿諸國、疫疾流行〇八年、京都疫癘

承平二年春夏之交京都疫癘行

天慶六年、疫癘行

天德元年、疫疾〇二年、饑疫〇四年、疫疾行

應和元年、諸國疫疾

康保三年、諸國疫疾行

正曆元年、疫癘流行〇五年、京都及諸國、疫疾流行、夏秋殊甚

長徳元年、諸國疫疾大行

長保二年、疫疾起レ自ニ鎮西一、流及ニ京師一〇三年、天下大疫、死者盈ニ道路一

寛仁元年、天下疫疾行

治安元年、疫疾流行、死亡相繼〇三年、諸國疫疾流行

寬德元年、天下疾疫流行
永承六年、疾疫流行○七年、疾疫流行
寬治四年、天下疾疫行
康和元年、天下疾疫行
嘉承元年、疾疫流行
長承元年、天下疫疾行○三年、疾疫
保延元年、疾疫行
養和元年、諸國疫癘流行

醫書目錄

平安朝時代ノ撰述ニ係ル醫書目錄ハ左ノ如シ

藥經太素 和氣廣世撰 二卷 (續群書類從ニ之ヲ收ム)
大同類聚方 出雲廣貞等撰 百卷 (未見) (流布本ハ僞撰ナリ)
難經開委 出雲廣貞撰 一卷 (未見)
本草和名 深根輔仁撰 十卷 (寬政年間、多紀氏刊行)
掌中方 深根輔仁撰 一卷 (未見)
養生抄 深根輔仁撰 七卷 (未見)
集註太素 小野藏根撰 三十卷 (未見)
養生秘鈔 ———— 一卷 (仁和寺御室書目) (未見)
攝養要訣 物部廣泉撰 二十卷 (未見)
治瘡記 大村直福吉撰 ———— (未見)
金蘭方 菅原岑嗣等撰 五十卷 (未見) (流布本ハ僞撰ナリ)
醫心方 丹波康賴撰 三十卷 (安政年間幕府醫學館刊行)
醫心方拾遺 丹波雅忠撰 二十卷 (本朝書籍目錄) (未見)
康賴本草 丹波康賴撰 二卷 (續群書類從ニ之ヲ收ム)
神遺衆古秘方錄 丹波康賴撰 三卷 (本朝書籍目錄) (未見)
醫略抄 丹波雅忠撰 一卷 (寬政年間、多紀氏刊行)
神遺方 丹波雅忠撰 三卷 (未見) (流布本ハ僞撰ナリ)
清法略治 丹波雅忠撰 十二卷 (增補本朝書籍記) (未見)
醫大同白知要論 ———— 百卷 (同前) (未見)
勘細記 丹波義濟撰 十二卷 (同前) (未見)
延壽明經 和氣紀業撰 百卷 (同前) (未見)
家藏方類 和氣常成撰 百卷 (仁和寺書目別本) (未見)
長生療養方 釋蓮基撰 二卷 (續群書類從ニ之ヲ收ム)
和藥方 和氣定盛撰 ———— (未見)
病源抄 丹波憲基撰 ———— (未見)

- 藥種功能抄 丹波賴基撰 —— (未見)
 灸穴抄 丹波知康撰 —— (未見)
 療治方 和氣定長撰 —— (未見)
 弘決外典鈔 具平親王撰 四卷 (寶永年間刊行)

參考書籍

- ① 類聚三代格 卷十九 禁制事
- ② 延喜式 卷十六
- ③ 奇魂一名尙古醫典(前二出ヅ)
- ④ 大同類聚方校本 奈須柳村自筆 文政六年五月
- ⑤ 本邦醫家古籍考 中川故著
- ⑥ 大日本醫道沿革考 溫知醫談第二十八號所載
- ⑦ 大同類聚方偽本辯 松浦彥體著 天保二年八月
 大同類聚方考說 著者不詳 或曰伴信友撰、或曰川崎重恭撰
 大同類聚方再考 權田直助著
- ⑧ 醫心方 安政官版序
- ⑨ 丹波康賴傳 淺田宗伯著 中外醫事新報所載(明治二十六年一月十五日刊行)
 丹波康賴佚事 富士川游述 中外醫事新報所載(明治二十六年一月十五日刊行)
- ⑩ 醫心方 卷一及ビ卷二
- ⑪ 佛祖統記
- ⑫ 太平記 卷二十五
- ⑬ 續日本後紀 卷三
- ⑭ 丹波雅忠傳 中外醫事新報第三百十五號所載
- ⑮ 濫觴抄
- ⑯ 文藝類纂 榊原芳野著 卷六
- ⑰ 延喜式 卷三十七
- ⑱ 釋日本紀 卷八
- ⑲ Gakutarō Osawa, Zur Geschichte der Anatomie in Japan. Anatomischer Anzeiger. 1896.
- ⑳ 日本外科史 ドクトル富士川游著 明治二十八年刊行
- ㉑ 日本婦人醫史料 河内全節著 中外醫事新報(明治三十年刊行) 所載
 日本産科史 ドクトル佐伯理一郎著 明治三十三年刊
- Ogata, Die Geschichte der Geburtshilfe in Japan. 1897
- ㉒ 日本兒科史 河内全節著 明治三十年刊行
- ㉓ 日本鍼醫史料 河内全節著 中外醫事新報(明治二十八年刊行) 所載
 本邦鍼術沿革略考 岡正吉著 繼興醫報第四號以下所載
- ㉔ 日本眼科史略 ドクトル富士川游著 明治三十二年刊行

日本眼科史稿 醫學士小川劍三郎著 岡山醫學會雜誌 明治三十六年十一月刊行以下

25 (25) 日本按摩史料 河内全節著 中外醫事新報 (明治二十八年刊行) 所載

Fujikawa, Die Massage in Japan. Centralb. f. d. Grenzrg. d. Med. u. Chirurgie. 1900.

26 (26) 三代實錄

27 (27) 本朝醫談 奈須柳村著 二十四頁

28 (28) Shuzo Kure, Geschichte der Psychiatrie in Japan. Jahrbuch f. d. Psych. u. Neurolog. 1903.

-
- ① <http://codh.rois.ac.jp/pmjt/book/200018252/>
 - ② <https://miko.org/~uraki/kuon/furu/text/rituryou/engi/engi.htm>
 - ③ <https://ndonline.ndl.go.jp/#1/detail/R300000001-1025732840-00>
 - ④ N/A
 - ⑤ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00005180>
 - ⑥ DOI: 10.11501/833143
 - ⑦ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00003999>
 - ⑧ <https://webarchives.tnm.jp/dlib/detail/5140;jsessionid=1E60D3BE708CD9AC348FC49AEC2EF7E4>
 - ⑨ DOI: 10.11501/1739869
 - ⑩ <https://webarchives.tnm.jp/dlib/detail/5140;jsessionid=1E60D3BE708CD9AC348FC49AEC2EF7E4>
 - ⑪ http://tripitaka.cbeta.org/T49n2035_001
 - ⑫ <http://www.kikuchi2.com/sheet/tk25.html>
 - ⑬ <http://www.kikuchi2.com/chuko/shokukouki.html>
 - ⑭ DOI: 10.11501/1739877
 - ⑮ <https://www.digital.archives.go.jp/das/meta/M10000000000060891.html>
 - ⑯ DOI: 10.11501/991276
 - ⑰ <https://miko.org/~uraki/kuon/furu/text/rituryou/engi/engi.htm>
 - ⑱ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00005881>
 - ⑲ https://archive.org/stream/anatomischeranze15anat/anatomischeranze15anat_djvu.txt
 - ⑳ DOI: 10.11501/835875
 - ㉑ DOI: 10.11501/1739674
 - ㉒ DOI: 10.11501/835491
 - ㉓ DOI: 10.11501/1739247
 - ㉔ DOI: 10.11501/836397
 - ㉕ DOI: 10.11501/1739242
 - ㉖ <http://www.kikuchi2.com/chuko/sandai.html>
 - ㉗ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00000738>
 - ㉘ <https://archive.org/details/JahrbcherFrPsychiatrieUndNeurolo190323NachrKrafftEbingGeschPsyInJapan>

第五章 鎌倉時代ノ醫學

後鳥羽天皇文治二年、源賴朝ガ幕府ヲ、鎌倉ニ開キタルヨリ、北條氏滅亡ニ至ルマデ、凡ソ百五十年ノ間ヲ鎌倉時代ト言フ。源氏ハ僅ニ三代ニシテソノ血統絶エタレドモ、北條氏コレニ嗣ギテ丘馬ノ實權ヲ握リ、ソノ後承久ノ丘亂ヲ經テ、鎌倉幕府ハ遂ニソノ樹立ヲ完成スルニ至レリ。コノ如キ政治上ノ變動ハ、ソノ動搖ヲ社會百般ノ事物ニ及ボシ、平安朝時代ニアリテ、單ニ貴族ノミヲ以テ標準トシタル文物ハ、武人政治ノ下ニ比較的多數ノ國民ガ社會ノ表面ニ現ハレ來リタル鎌倉時代ニ相應セズ。是ニ於テカ、宗教ハ社會革新ノ先驅ヲナシ、眞宗・時宗・法華宗等、平民的宗教ノ興隆ヲ致シ、奈良朝ノ模倣ヨリ、平安朝ノ折衷ニ進ミタル我が邦ノ佛教ハ、コノ期ニ至リテ、コノ如ク始メテ新機軸ヲ出ダスニイタレリ。

又是ヨリ先キ醍醐天皇ノ朝ニ、遣唐使ヲ廢セラレテヨリ、唐土ニ留學スルモノ甚ダ少ナク、漢學ハ衰運ニ向ヒ、京都ノ大學、地方ノ國學モ漸次ニ廢タレタレドモ、佛教殊ニ禪宗ノ興隆ト共ニ、僧侶ノ支那ニ行クモノ絶エズ、又支那ヨリ高僧ノ來タレルモノモ尠カラズ。從テコノ時代ノ邦人ノ學問ハ僧徒ヨリ之ヲ受ケ、國文・歌道・美術・工藝等ノ之ガ爲メニ影響ヲ受ケシコト尠ナラズ。之ヲ要スルニ鎌倉時代ノ文化ノ外形ハ、之ヲ王朝時代ノ文化ノ繁爛タルニ比スベクモアラズト雖モ、王朝時代ノ文物ノ赫々タルハ徒ラニ隋・唐ノ文物ニ依倣シテ人目ヲ眩惑セシニ過ギズ、鎌倉時代ニ及ビテハ前ニモ言ヘル如ク、政治上ノ一大變動ニ伴ナヒテ、國民本來ノ特性ノ發揮セラレタルモノアリ、實ニ我が邦固有ノ文化ハココニソノ淵源ヲ有スト言フモ可ナリ^①。我が醫學モ亦コノ政治上及ビ宗教上ノ革新ニヨリテ生ゼル動搖ノ影響ヲ避クルコト能ハズ。既ニ前章ニ述ベタルガ如ク、平安朝ノ醫學ガ粲然タリシハソノ外觀ノミニシテ、奈良朝ノ後ヲ承ケテ隋・唐醫學ノ模倣ヲコレ事トシ、ソノ後期ニ及ビテ、僅ニ折衷ヲ企テシマデナリ。鎌倉時代ニ在リテモ、醫學ハ支那ヲ宗トシ、宋醫方ニ依倣シタルハ事實ナレドモ、コノ時代ノ醫書ハ平安朝ニ於ケルモノノ如ク、單純ニ宋醫書ヲ鈔録セルノミニアラズシテ、ソノ間我が邦ノ經驗ヲ加ヘタルモノ甚ダ多ク、少ナクトモ、コノ期ノ醫書ハソノ内容ニ於テ進歩ノ跡著明ナルヲ示セリ。コレコノ期ニ於ケル醫學ヲ代表スベキ頓醫抄・萬安方ノ二書ニヨリテ能ク證明セラルベキコトナリ。

宋醫學ノ輸入

我が平安朝ノ中葉以後ハ支那ニアリテハ宋ノ代ニ當リ、ソノ太宗ノ朝ニハ太平聖惠方百卷ノ撰述アリ、徽宗ノ朝ニハ和劑局方五卷ノ撰述アリ、コレ等ノ書、ソノ病門ヲ分ツコトハ病源候論ニ據リタレドモ、治病ノ方法ハ、當時各家性理ヲ主張シ、門戶ノ見盛ニシテ、唐醫方ト相同ジカラザルモノアリ。コノ頃我が邦ニハ遣唐留學生ノ制廢セラレ、醫人ノ唐ニ赴キテ、直接ニソノ醫方ヲ傳ヘシモノ殆ド之アルヲ聞カズト雖モ、而カモ鎌倉幕府ガ力ヲ佛教、殊ニ禪宗ノ弘通ニ致セシヨリ僧侶ノ支那ニ往來スルモノ絶エズ、支那ノ醫方ハコレ等ノ僧徒ニヨリテ他ノ學藝ト共ニ、支那ヨリ傳ヘラレタリ。

僧侶及び醫學

僧侶ノ醫ヲ兼ヌルコトハ既ニソノ端ヲ奈良朝時代ニ發シ平安朝時代ニアリテモ、治病ノ術ハ醫藥封リモ祈禱ヲ先ニシタルコト、既ニ述ベタルガ如クナレバ、僧侶ニシテ醫ヲ兼ネシモノアリシハ勿論ナリ。然レドモ、コノ時代ニアリテハ、京都ニ大學アリ、地方ニ國學アリ、醫學ノ權ハ醫鍼博士・典藥頭等ノ掌握スルトコロニシテ、和氣・丹波ノ兩氏、累世名家ヲ以テ醫道ノ要職ニアリ、ソノ門閥以外ニアリテ、殊ニ僧侶ノ名醫ヲ以テ聞エタルハ甚ダ稀ナリキ。然ルニ平安朝ノ末造ニ及ビテハ、唐トノ交通モ絶エ、大學及び國學モ漸次ニ廢タレ、保元平治ノ戰亂ヲ經テ、鎌倉時代ニ及ビテハ、漢學ハ漸ク衰運ニ向ヒタルニ反シ、佛教殊ニ禪宗ハ、日ニ益々興隆シ、名僧ノ支那ニ往來セラルモノ尠カラズ、從テ學問ノ權ハ漸ク僧侶ノ手ニ移ルニ至リ、我が醫學モ亦僧侶ノ手ニヨリテ、ソノ新知識ヲ宋ヨリ直接ニ得ルコトトナリ、從テ僧侶ニシテ名醫ノ聞エアルモノモ亦尠カラズ。蓮基・榮西・佛嚴・賢禪房・大善房・築紫醫師法師・重源・智玄・心寂房・行蓮・金蓮・興心・空體・梶原性全、等ハソノ選ナリ。

蓮基。丹波氏ノ族、壽永三年長生療養方ヲ撰ス。(平安朝時代ニ於ケル養生科ノ條ヲ參照スベシ)

榮西。備中ノ人賀陽氏、永治元年四月ヲ以テ生マル、年十九叡山ニ入り、台教ヲ學ブ、仁安三年商船ニ乘リテ、宋ニ赴キ、數閱月ニシテ歸朝ス。文治三年再ビ宋ニ赴キ、居ルコト四年、建久二年歸朝シテ京都ニ入り、始メテ禪宗ヲ唱フ。源賴家乃チ榮西ノタメニ一大禪寺ヲ洛東ニ創立シ之ヲ建仁寺ト號ス。建保元年僧正ニ擢デラル。建保三年榮西鎌倉ニ在リ、偶々源實朝病アリ、榮西ソノ宿醒ニシテ病ニアラザルヲ察シ、清茶一盞ヲ進メ、且爲ニ喫茶養生記ヲ撰ビテ獻ズ。喫茶養生記ハ固ヨリ喫茶ノ養生ニ益アルコトヲ説キシモノナレドモ、ソノ病源ヲ説キ治方ヲ論ズルコト、コレヲ醫書トシテ見ルヲ得ベシ。榮西鎌倉ニアリテ壽福寺ヲ營ム、コノ歲七月病ミテ歿ス。(元亨釋書・吾妻鏡)

佛嚴・賢禪房・大善房・築紫醫師法師ノ名ハ藤原兼實ノ玉海、安元・治承年間ノ條下ニ出デ、心寂房・興心房・金蓮房・如來尼ノ名ハ藤原定家ノ明月記ニ出ヅ、ソノ傳ハ未ダ詳ナラズ。

智玄ハ下野國、安蘇郡、糟尾郷ニ居ル。嘗テ宋ニ赴キ、醫方ヲ學ビテ歸朝ス。後鳥羽天皇弗豫、藥ヲ獻ジテ効アリ、法眼ニ叙セラル、世ニ錄事法眼ト稱ス。

行玄。嘉祿年中、幕府ノ醫事ヲ司ドル。

行蓮。嘉祿中鎌倉幕府ノ醫事ヲ掌ドル。

性全。姓ハ梶原、頓醫抄・萬安方ノ著述アリ、ソノ傳ニツキテハ次項ヲ參照スベシ。

頓醫抄及び萬安方。

コノ期ニ於ケル醫學ヲ代表スベキモノハ頓醫抄・萬安方ノ二書ニシテ、頓醫抄ハ後二條天皇ノ嘉元元年ニ梶原性全ガ撰述セルトコロ、萬安方ハ花園天皇ノ正和四年ニ、同ジク梶原性全ノ撰述セルトコロナリ。ソノ甲ハ邦文ヲ用ヒ、乙ハ漢文ヲ用ヒタルノ差ノミニテ、兩書ノ内容ハ略ボ同ジク、共ニ病源候論ノ目ニ依リテ病門ヲ分チ、千金方・千金翼方・聖惠方・三因方・百一方・事證方・濟生方・選奇方・易簡方・和劑局方等、唐・宋ノ醫方ヲ折衷シ、單方ヲ鈔録シ、加フルニ自家經驗ノ說ヲ以テセルモノナリ。

梶原性全ハ何人ナルヤヲ詳ニセズ。傳ヘ言フ、和氣氏ノ族、淨觀ト號ス、名醫ノ稱アリ。性全博覽強記、自カラ言フ、見ル

トコロノ方書、凡ソ二百有餘部、二千有餘卷、是皆漢・魏・唐・宋、經驗ノ方ニシテ、コレニ加フルニ試効スルトコロヲ以テシテ萬安方・頓醫抄ノ二書ヲ成スト言フ。(獻萬安方序・萬安方奥書)

頓醫抄・萬安方ノ二書ハ平安朝ニ於ケル醫心方ト同ジク、ソノ眞本全部ノ幸ニ今日ニ傳ハレルモノアルヲ以テ、コレニ依リテ、當該時代ノ醫學ノ程度ヲ推究スルコトヲ得ベシ。故ニ以下主ニコノ兩書ニ據リテ、醫學各科ノ狀況ヲ記述スベシ。

解剖學及ビ生理學

平安朝時代ニアリテハ醫心方中、彼此ノ箇處ニ、解剖學及ビ生理學ニ關スル記事ヲ散見スルノミニ過ギザリシガ、コノ期ニ及ビテ梶原性全ノ頓醫抄ニハ、別ニ一部門ヲ置キテ、五臟六腑圖及ビ十二經脈圖ヲ掲ゲ、大概ナガラモ、身體ノ構造及ビ機能ヲ説明シタリ。ソノ說ニ曰ク

『肺ノ臟ハ蓮ノ葉ノ如クニシテ、八葉ニテ、上ニヲホヘリ。肺ノ下ニ心、肝、脾ナラベリ。肺ノ下ニ膽アリ、脾ノ下ニ胃ノ府アリ、胃ノ下ニ小腸アリ、小腸ノ下ハ膀胱ニ通ズ。小腸ノナカハスキトホリテモノナシ、大腸ノ中ニハ滓穢アリ。又大腸ノ傍ニ膀胱アリ、又左ニ腎アリ、右ニ命門アリ、心ハ紅ニシテサガレリ、腎ハ一ハ肝ノ右ニスコシ下リテアリ、一ハ脾ノ左ニスコシアガリテアリ、脾ハ心ノ左ニアリ』凡ソ五臟ハ陰ニ屬ス、六府ハ陽トシ、表トス、藏ト云フハクラナリ、クラト云フモノハモノヲオサム、故ニ諸神ヲヲサメテ、精神流通ス』『肚腸ト云フハ、大腸ノツタヒ出ヅル所ナリ、又魄門ト名ヅク、此ミチ上ハ心ニツラヌキ、下ハ腎ニ通ゼリ、水火相感シテ、精氣ハ五臟ヲヤシナイ、糟粕ハコレヨリ下リテ糞穢トナルナリ。五臟ミナ心ノ臟ヨリミチヲ通ジ、心又五臟ニ通ズ、而シテ心ヨリ血氣ヲイダシテ、骨髓ニ注グ、然ルガ故ニ五臟ニ病アルトキ、先ヅ心ヲ侵ス』『氣海ト云フハ膻中ヲ云フナリ、兩乳ノ間ニアリテ、氣ノ海タリ、氣ハ陰陽ニ通ズ、氣和スレバ志達ス、志達スルトキハ喜樂コレニヨリテ生ズルナリ』『腎ハニアリテ兩傍ノコシニアリ、左ヲ腎ト云ヒ、右ヲ命門ト云フ、命門ニハ男子ハ則チ精神ヲ藏メ、女子ハ則チ胞胎ヲカクルナリ、胞胎ト云フハ精ヲ受納孕スル所ナリ。又男子ノ命門ハ火ニカタドリ天ニ當ル、陽トス、女子ノ命門ハ水ニカタドリ地ニアタリ、陰トス、コノ腎ト命門トバカリ男女根替ハレリ、餘ノ臟ハ男女替ハル所ナシ』五臟ヲ以テ五行ニ充テ、五方ニ充ツルノ說モ、亦當時ニ行ハレタリ。

肝。東也、春也、木也、青也、魂也、眼也』肺。西也、秋也、金也、白也、魄他、鼻也』心。南也、夏也、赤也、神也、舌也』腎。中也、四季末也、土也、黃也、志也、口也』腎。北也、冬也、水也、黑也、想也、體也、耳也』(喫茶養生記)

而シテ五臟ノ味ヲ受ルコト同ジカラズ、辛入レ肺、苦入レ心、酸入レ肝、甘入レ脾、鹹入レ腎。又五味ノ口ニ入ルヤ各定ルトコロアリ、各病ムトコロアリ。『辛足レ氣、肉胝、苦走レ骨、筋急、酸走レ筋、皮毛槁、甘走レ肉、骨痛髮落、鹹走レ血、脈凝』(萬安方ニ引クトコロニ據ル)ト說キタリ。

病理學

平安朝ノ醫學ガ、支那醫說ト印度醫說トヲ混淆シテ、病理ヲ說キタルト同ジク、コノ期ノ醫書ニ於テモ、病理ヲ說クニ方リテハ宋醫ノ所說ト佛典ノ醫說トヲ混淆錯雜シタリ。

宋ノ醫書ニ據レバ疾病ノ原因ヲ分チテ三トス、内因・外因・不内外因、コレナリ。(三因方ノ説、本ト金匱要略ニ出ヅ。)ソノ内因トハ、七情ノタメニ臟府ヨリ發シテ、肢體ニ形ハルルモノ、外因トハ六淫ノタメニ經絡ニ起リ、臟府ニ舍ドルモノ、不内外因トハ、飲食・飢飽・叫呼・傷氣、及ビ虎狼・毒蟲・金瘡・壓溺ノ類ノタメニ起ルヲ言フ。之ヲ平安朝以前ニ行ハレタル隋・唐ノ病因論ニ比スレバ、所説一層明亮判然タルニイタレルヲ認ムベシ。

當時支那ニハ性理ノ説盛ニ行ハレ、醫學ニアリテモ、五運・六氣ヲ以テ病理及ビ治法ヲ論ゼントシ、我が邦ニモ、五運六氣ノ説ハコノ頃始メテ行ハレタリ。萬安方ニ三因方ヲ引テ言フ。『夫五運六氣、乃天地、陰陽、運行舛降之常道也、五運流行有三太過不及之異、六氣舛降、則有三逆從勝復之差。』ソノ五運ト言フハ、木・火・土・金・水、五行運轉ノ氣ニシテ、六氣ト言フハ、初・二・三・四・五・終、六節、次序ノ氣ナリ。(甲巳土運乙庚金運丙辛水運丁壬木運戊癸火運ヲ以テ五運トナシ、少陰君火少陽桐火太陰濕土陽明燥金太陽寒水厥陰風木ヲ以テ六氣トス)。蓋シ人ノ生ルルヤ、五行一身ニ備ハリ、生氣(陰陽)内ニ根スト雖モ、赤天地ノ氣ノ卷舒スルニ從ヒ、五運六氣、亦皆之ニ應ジテ、ソノ脈ニ見ハル。夫レ人ノ肢體ハソノ寒暑ノ化ヲ蒙ムリ、外身形ヲ保チ、天地ノ氣ヲ呼吸シテ、内府臟ヲ養ナフ、若シ天地ノ氣和シ、節令時ニ、氣運調フテ、寒熱順ナルトキハ、則チ疾苦ナシ、之レニ反シテ、天地ノ氣ニ、若シ太過不及アリテ、運太過ナルトキハ、則チ勝タザルモノ邪ヲ受ケ、運不及ナルトキハ則チ勝ツトコロノモノ來尅ス、ココニ於テカ、風・熱・燥・濕・寒アリテ各一氣ヲ司ドリ、生・長・化・收・藏アリテ各一時ヲ司ドリ、順ヲ以テ相承ケ、逆ヲ以テ相勝チ、勝復循環ノ道、ココニ行ハルルナリ。②

疾病ノ發生ノ、五運六氣ニ關係スルヤ、コノ如ク切ナルモノアリ、故ニ之ヲ治スルニ方リテハ、ソノ歲令(五運六氣)ヲ詳ニシ、ソノ形證(疾病)ヲ察シ、ソノ脈息ヲ明カニシ、ソノ陰陽ヲ別チ、針藥ヲ施シ用フルニ及ビテハ、則チ氣ニ虛實アリ、病ニ盛衰アリ、治ニ緩急アリ、方ニ大小アリ、正治(以レ寒治レ熱、以レ熱治レ寒)ノ法アリ、反治(以レ寒治レ寒、以レ熱治レ熱)ノ法アリト雖モ、ソノ要ハ五運六氣ノ補瀉ヲ求ムルニ在リト論ゼリ。

佛教ノコノ期ノ醫學ニ感化ヲ及ボセルトハ平安朝ニ於ケルト異ナルコトナシ。ソノ説ニ曰ク『凡病有三六種、第一四大不調、第二飲食不調、第三座禪不調、第四業病、第五魔鬼、第六鬼病、右六種ノ中魔鬼ノ二病ハ神咒ヲ以テ之ヲ治ス、法威ノ力ニアラザレバ之ヲ治スルコト能ハズ、座禪一病ハ座禪ニ由テ之ヲ治ス、業病ハ罪障懺悔ノ力ヲ以テ之ヲ治ス、四大不調、飲食不調ハ醫師ノ治スルトコロナリ。四大ハ、地・水・火・風ナリ、四大ニ各百一病アリ、合セテ四百四病ヲ成ス』ト。

梶原性全ノ頓醫抄・萬安方ニハコノ如ク、宋醫學ノ所説ニ雜ユルニ、佛典ノ説ヲ以テシ、惟宗具俊ノ醫談抄(弘安・正應年間ノ撰述)ニモ『前世ノ餘福アラバ、イカナル重病ナリトモ、醫術ノ驗アルベシ、前世ノ餘殃アラバ、聊カノ少病ナリトモ、反テ兇禍アルベシ、サレバ病者ハカマヘテ冥加幸運ノ醫ニアフベキナリ、前世ノ惡人大乗ヲ誹謗スルノ人、醫道ニ生ジタランニハ愈ユベキ病モ反テ増スベシト、佛説モ侍ルトカヤ』ト説キテ、以テ吾人ヲシテ、佛教(特ニ禪宗)ノ所説ガ、當時ノ醫學ニ影響ヲ及ボセシコトノ大ナルヲ想ハシム。

内科

平安朝時代ノ内科ガ主ニ千金方・病源候論等、隋・唐ノ方書ニ依倣セシニ對シテ、コノ期ノ内科ハ主ニ和劑局方・聖惠方等、宋ノ醫方ニ依據セルナリ。蓋シ和劑局方ハ當時ノ名方ヲ拾集セルモノニシテ、病源ヲ載セズ、各方下ニ證候ヲ條列シ、ソノ證候ニ隨ツテ治方ヲ立テタリ^③。コレ千金方等ノ病源ヲ論ズルヲ前ニシ、コレニ依リテ治方ヲ立テタルトハ、ソノ趣ヲ異ニセリ、而シテ局方ノ學ハ支那ニアリテ、宋ノ代ニ盛ニ行ハレ、我が邦ニモコノ學ガ鎌倉

時代及び室町時代ニ盛ニ行ハレタルコトハ、當時ノ方書ニ記載スルトコロヲ見テ、之ヲ知ルベシ。

佛教ノ醫術ニ關スル論說ハ、榮西ノ喫茶養生記ニ於テ最モ備ハレルヲ見ル。ソノ說ニ曰ク『今世之醫術、則含_レ藥而損_三心地_一、病與_レ藥乖_ヅ故也、帶_レ灸而夭_三身命_一、脈與_レ灸戰_ヅ故也、不_レ如_レ訪_三大國之風_一、示_三近代治方_一乎、仍立

三二門_一、示_三末世病相_一』ト、ソノ二門ト曰フハ、五臟和合ト、遣除鬼魅トニシテ、五臟和合トハ五臟、味ヲ受クルコト同ジカラズ、(肝臟好_三酸味_一、肺臟好_三辛味_一、心臟好_三苦味_一、脾臟好_三甘味_一、腎臟好_三鹹味_一)好味多ク入レバ、則チソノ臟強ク、傍ノ臟ニ尅テ、互ニ病ヲ生ズ、ソノ辛酸甘鹹ノ四味ハ、恒ニ有ツテ之ヲ食フト雖モ、苦味ハ恒ニ無キガ故ニ之ヲ食ハズ、故ニ四臟ハ恒ニ強クシテ、心臟ハ恒ニ弱シ、故ニ心ヲ調ヘテ、以テ萬病ヲ除愈スルコトヲ期セザルベカラズ、若シ眼ニ病アラバ肝臟ノ損ト知ルベク、酸性ノ藥ヲ以テ之ヲ治スベシ、耳ニ病アラバ腎臟ノ損ト知ルベク、鹹性ノ藥ヲ以テ之ヲ治スベシ、鼻ニ病アラバ肺臟ノ損ト知ルベク、辛性ノ藥ヲ以テ之ヲ治スベシ、舌ニ病アラバ、心臟ノ損ト知ルベク、苦性ノ藥ヲ以テ之ヲ治スベシ、口ニ病アラバ脾臟ノ損ト知ルベク、甘性ノ藥ヲ以テ治スベシ、身弱ク意消セバ、又心臟ノ損ト知ルベク、コレヲ五味ノ養生ト曰フ、外ノ治方ナリ。内ノ治方ハ秘密眞言ヲ以テ五部ノ加持ヲナス、内外相資テ身命ヲ保ツナリ。遣除鬼魅トハ鬼魅魍魎ノ種々ノ病ヲ致スヲ除却スルコトニシテ、鬼魅ニ着カルモノヲ治スルニハ桑ヲ用フ、コレ桑樹ハ諸佛菩薩ノ樹ニシテ、コノ木ヲ携フレバ、天魔尙ホ來タリ襲ハズ、況ンヤソノ餘ノ鬼魅ハ附近スルコトヲ得ザルナリト言フナリ。

右ニ擧グルトコロハ、當時ノ醫家ノ所說ノ要旨ヲ示スニ過ギズ。而シテコノ期ニアリテ、實際ニ盛ニ行ハレタル治術ノ、灸治ト湯治トナリシコトハ玉海・明月記・台記・山槐記等ノ諸書ニ散見スルトコロニ依リテ、之ヲ證スルニ足ルベシ。而シテ、コレ等ノ治方ハ平安朝時代ヨリ行ハレ來リタルモノニシテ、當時濫施ノ弊ノ甚ダ著シキモノアリシニヤ、榮西ノ喫茶養生記、梶原性全ノ頓醫抄・萬安方等諸書ニハ、灸治・湯治ノ却テ疾病ヲ増惡スルノ場合アルヲ説キ、ソノ適用ヲ諷ルベカラザルコトヲ言ヘリ。

瘡腫ニ水ヲ灌ギテ冷治ヲナシ(次項『外科』ノ條下ヲ參照スベシ)、又ハ風病ヲ治スルニ、水ヲ浴スル等ノ方法ハ、前期ヨリコノ期ニ至ルマデ盛ニ行ハレタルモノニシテ、コノ期ノ醫家ノ所見ハ之ヲ否認スルノ傾アリ。惟宗具俊ノ醫談抄ニ曰ク、『近代ハ上下、風呂ヲ好ンデ、浴湯ヲ用ヒズ、遊戲沈醉ノ人ノ所爲ナリ、湊理ヲムシアケテ、冷水ヲカケ洗ハバ、久シク雜談シテ風ヲ引クナルベシ、能治ニアラズ、惡治トゾ覺ユル。風病ヲ治スルニハ、穴ヲ燒テ、水ヲカケテ入レテ、ムサルベシト申ス本文ハ侍ベリ、水ヲ浴スベシトハ見エズ、千金方ニ云、新ニ汗解テ、勿_ニ冷水洗浴_一、損_三心包_一、云々、コレニ過ギタル風呂ノ禁文ヤ侍ルベキ、汗ノ出シトキハ、時々用フベシ、ソレモ水ヲカクルコトハ如何アルベキ』ト。

諸病ニ就テ、禁好物ヲイフコトハ、コノ期ノ治術ニ於テ、主要トスルトコロニシテ、頓醫抄、卷四十二灸治間禁食。宜食。湯治間禁食、宜食。頭風。目病。鼻病。耳病。齒。喉腫病。胸腹痛。腰痛。痔病。脚氣。咳嗽。黃疸、霍亂。腹脹。腹痛。飲水。消渴。淋病。痢病。傳屍病。不食。吐血。髮落。寸白。天行時氣。瘧。金瘡。癩病。長血。中風。傷寒。赤斑瘡。腹水。癰疽。丁瘡。疱瘡等諸病ノ禁食(禁物)宜食(好物)ヲ載セテ甚ダ詳ナリ。コレ各個ノ疾病ニ就テ、食シテ宜シキ物ト、禁ズベキ物トヲ、定メタルニテ、食餌ガ疾病ノ經過及び治癒上ニ關涉スルコトアルヲ、經驗上ヨリ唱道セルナリ。

外科^④

瘡腫ノ一科ハコノ期ニアリテハ、新ニ外科ノ稱呼ヲ得タリ、コレ外科精要・外科精義等ノ書ガ、コノ時始メテ我が邦ニ入りタルニ由ル。梶原性全ノ萬安方ニハ『夫瘡腫之患、莫大ニ於癰疽、明乎此二者、則腫毒丹疹、可ニ以類推』ト曰ヒ、重キヲ癰疽ト置キ、病源候論・外科精要・外科精義・聖濟總錄等ノ方書ヲ引用シ、『湯液疏ニ其内、灸疏ニ其外、五臟内虚、則平補、内實、則快利』ノ主旨ニ依リテ、ソノ治術ヲ施スコトハ大要醫心方ノ所説ニ異ナルトコロナシ。只一事ノ特ニ擧ゲテ言フベキハ梶原性全ガ萬安方ニ於テ、冷治ノ弊ヲ説キタルコトナリ。ソノ説ニ曰ク『私云、諸瘡不問ニ冷熱、唯有ニ溫療方、全無ニ冷治術、今日本醫者、不レ看ニ方書、只率胸臆、以ニ水石極寒、恣施ニ冷治、因レ茲、多即成ニ中寒、中風、大疾、而致ニ暴亡卒死、病家亦不レ知ニ治方、誤レ人而謂、病患天命也、熱毒瘡腫尙無ニ冷治之説、何況於ニ冷癰寒疽乎、尤可ニ慎思也』又曰ク『私云、瘡腫發熱之時、今古日本醫者、以ニ寒水及冷石大黃等、作ニ冷治、未レ愈之前、多爲ニ中風、作ニ寒戟、而死者多』

外科ノ治術ガ、内科ノ治術ニ比シテ、殆ト選ブトコロナカリシハ、平安朝ノ時代ニ於ケルト異ナルトコロナシ。但シ土佐光長ノ奇疾草子^⑤ニ載スルトコロヲ見ルニ、針ヲ烙キテ背ノ腫物ヲ療スルノ圖アリ。惟宗具俊ノ醫談抄ニ、『腫物ノ火針ハ、御室腫物ノトキ、賴基朝臣始メテ申行タルト申ニヤ、本説不見トコソ、人モ申侍レドモ、聖惠方ニ載セタリ、癰則皮薄シ、宜レ針、疽ハ皮厚シ宜レ烙、古法ニ烙ナシ、唯針アリ、烙ハ即チ火針ナリ、亦謂ニ之燔針、今用レ烙法、多差、云々』トアリ。惟宗具俊ハ後宇多天皇前後ノ人ニシテ丹波賴基ハ保元四年、女醫博士ニ任ゼラレ、壽永年間聲名ヲ擅ニシタル人ナレバ、相距ルコト正ニ二百年ナリ、サレバ燔針ノ説ハ既ニ醫心方ニ見エタレドモ、コレヲ實際ニ用ヒタルハ、醫談抄ニ從ヒテ丹波賴基ヲ以テ始トスベク、烙ヲ用フルコトガ、平安朝ノ末期ヨリ鎌倉時代ノ外科ニ於テ、行ハレタルコトヲ知ルベシ。コレ外科治術進歩ノ一階段ナリ。

眼・口・耳科

眼・耳・鼻・口・唇・咽喉、等ノ諸病ハ、頓醫抄・萬安方ノ兩書、共ニ一部門ヲ別チテ擧ゲタレドモ、之ヲ醫心方ノ所説ニ比シテ、別ニ證候學及ビ治術ノ精緻ヲ加ヘタルモノアルヲ認メズ。

小兒科

小兒方ハ醫心方ニアリテモ、既ニ一部門ヲナセシガ、梶原性全ノ頓醫抄ニアリテハ、ソノ第三十五卷乃至三十九卷ニ於テ、小兒ノ疾病ヲ論ジ、萬安方ニアリテハ、幼幼新書・嬰童寶鑑・顛顛經・嬰孺方・病源候論・千金方・千金翼方・聖惠方等ノ諸書ヲ引用シ、ソノ第三十九卷乃至四十九卷ニ於テ、小兒ノ將護及ビソノ疾病ヲ論ゼリ。之ヲ醫心方ノ僅々一卷中ニ小兒ノ疾病ヲ論ズルモノニ比スルニ、精粗ノ差ハ言ハズシテ明カナリ。

萬安方ハ幼幼新書ニ依リテ、部門ヲ別チ、治方ヲ擧ゲ、雜フルニ自家ノ經驗ヲ以テセリ。試ミニ、二三ノ要項ヲ摘録スレバ

ソノ斷臍方ヲ論ズルヤ、曰ク『私言、以ニ竹刀、而切レ之、長六寸尤良、浴法亦三日以後説、爲レ良矣、初生先レ浴、後ニ斷臍ノ説、聊可レ慎レ之、恐依ニ洗浴、傷ニ動兒血氣、又有ニ裏臍法、能得ニ其理、可レ裏ニ護之』

ソノ各種疾患ヲ論ズル中ニ曰ク

『私言、日本、有二重舌秘方咒術^一、其咒法、柳作^レ札、書^ニ鬼字^一、當^ニ踝上^一、灸^ニ札上^一、火氣達而癒也』

『私言、初生兒不^レ喫^レ乳、氣喘、則皆撮口病也、大略不^レ可^レ救、只與^ニ甘草^一以後、可^レ與^ニ蘇合香圓^一、又幼幼新書第五卷、雖^レ有^ニ多治方^一、藥種難^レ得、故不^レ引^ニ載于此^一』

『私言、赤斑瘡與^ニ發斑^一、小同大異也、猶如下傷寒與^ニ發黃^一大異小同上、病源論則合^ニ在赤斑瘡於傷寒時候篇中^一、自餘諸方、三因方・聖惠方・千金方・幼幼新書等、皆發斑在^ニ傷寒篇^一而赤斑瘡、豌豆瘡等、在^ニ別一篇^一、治方雖^ニ相兼^一、病證根源全殊、審^レ之、思^レ之』

『私言、曩者昔義也、連滯而經^ニ夏秋^一、久積故也、秋之痢病、泄瀉、皆可^レ謂^ニ之曩痢^一也、因^ニ涼氣入^レ腹所^レ爲也、大人小兒皆同、夏末可^レ慎^ニ涼氣^一矣』

『私言、了奚、哺露、鼓槌風、鶴膝風、謂^ニ小兒多染^ニ此病^一、醫不^レ辨^ニ病源^一、不^レ知^ニ藥方^一、直至^ニ于死^一、無^レ加^ニ正療^一、故今抄^ニ於數方^一、請審^ニ思之^一』

右ハ僅カニ一二ノ例ヲ掲グルノミ。而カモ、コレニ依リテ、萬安方ノ小兒病門ガ、單ニ唐・宋方書ヲ抄録セルモノニアラザルコトヲ推知スベク、我が邦ノ小兒科ハ、萬安方ニ於テ、始メテ完全ノ小兒方書ヲ得タリト言フベシ。

婦人科

萬安方ノ婦人科ハ、圭ニ婦人大全良方ニ依リ產科論・三因方・千金方・聖濟總錄・易簡方・本事方・可用方等ノ諸書ノ所説ヲ引用シ、婦人總療・月經異常・婦人血疾・血分・水分・脫血・血枯・疝癖・積聚・婦人淋病・妊娠惡阻・妊娠諸病・安胎・催生・產難・產後諸病ヲ論述シタリ。ソノ所説ハ之ヲ醫心方ニ舉グルトコロニ比シテ、甚シキ徑庭アルコトナシ、但シ妊娠ニ藥物ヲ用フルコトヲ忌マズ、滑胎ノ方トシテ、丹參膏（丹參ヲ主トス）ニ代ユルニ、救生散（人參・呵子皮・麥蘖・白朮・橘皮等）ヲ以テシ、又紙帛布巾ヲ醋ニ浸シ、コレヲ廣ゲテ產婦ノ顛頂ニ置キ、乾ケバ則チ常ニ易ユルコト、産後三五十日、以テ血量ヲ防グ、又我が邦從來ノ俗、産後七日七夜臥眠スルコト能ハズトスルヲ駁シ、コレヲ不可トスルコト、等ノ説ハコノ期、萬安方ニ於テ始メテ見ルトコロナリ。

助産ノ方術ハ、平安朝時代ニ於ケルト異ナルコトアラズ。女ヲ轉ジテ男トナスノ法、體玄子借地法、催生靈符等ハ既ニ、醫心方ニ之ヲ掲ゲタレドモ、コレ等ノ諸法ハ、平安朝ノ末造ヨリ鎌倉時代ニアリテ、殊ニ盛行ハレタルニ似タリ。

體玄子借地法 東借十歩 西借十歩 南借十歩 北借十歩 上借十歩 下借十歩

壁方之中、四拾餘歩、安産借地、或有穢汚、或有東海神王、或有西海神王、或有南海神王、或有北海神王、或有日遊將軍、白虎夫人、遠去十丈、軒轅招搖、舉高十丈、天府地軸、入地十丈、令^ニ此地空閑^一、產婦某氏安居無^レ所^ニ妨碍^一、無^レ所^ニ畏忌^一、諸神擁護、百邪速去、急急如律令^レ以^レ朱書^レ之以^ニ前借地法^一、於^ニ八月一日^一、即寫一本、讀誦三遍、貼^ニ在于產婦所^レ居正北壁上^一。」「コノ如ク產所ニ借地文ヲ押スハ、安産ノ咒ヲナスモノニシテ、山槐記ニ『治承二年、十二月一日、辛卯、天晴、中宮御産、御祈云々、典藥頭和氣定成朝臣、參入、押^ニ借地文於御産所母屋^一。』玉海ニ『仁安二年十一月一日、今日、施藥院使、丹波憲基朝臣、來臨、押^ニ借地之法^一。』トアリ、ソノ他當時ノ記錄ニ同様ノ記事アリテ、醫家專ラ之ヲナセシコトヲ知ル。

ソノ他、産婦行年ヲ推スノ法、日遊神ヲ推スノ法、妊娠ノ着帶ニ仙沼子ヲ入ルルコト、御産ノ御座ヲ敷クトキ典藥頭ノ咒文ヲ讀ムコト、御産ノ時、法華經涌出品ヲ產所ニ置クコト、臨産ノ時散米ヲナシテ血量ヲ止ムル禁厭トナシ、又胞衣ノ下ラザルトキニハ、屋棟ヨリ甌ヲ落シテ之ヲ厭フ等ノ諸法アリテ、盛行ハレタルコトハ、山槐記・

玉海等、當時ノ記録ニ散見セリ、而シテ醫家多クハコレ等ノ事ニ干與シ、助産手術ノ如キハ一モ之ヲ施サザリキ。

療病院

聖德太子、施藥・療病・悲田・敬田ノ四院ヲ創立シタマヒシヨリ、奈良朝ノ頃ニ施藥院ノ設アリ。下リテ、仁明天皇ノ御宇ニ武藏國多磨、入間兩郡界ニ悲田所ヲ置キ、太宰府ニ續命院ヲ建テ、相模國ニ救急院、出羽國最上郡ニ濟苦院ヲ設ケテ、以テ飢病者ヲ救護セルコトアリ。(續日本後紀)。鎌倉時代ニアリテハ釋忍性ト言フモノアリテ、處處ニ療病院・悲田院ヲ構ヘ、貧窶病者ヲ收容シテ、救護甚ダ力メシガ、ソノ鎌倉、桑谷療病所ノ如キハ、二十歳間ニ癒ユルモノ四萬六千八百人、死者一萬四百五十人、既ニシテ活クルモノ五分ノ四ニ踰ユト言フ。^⑦

釋忍性、姓ハ伴氏、和州磯城島人、歳十一ニシテ信貴山ニ投ジ十七ノトキ、東大寺戒壇ニ登リ、覺盛、叡尊ニ就キテ學ブ、建長四年、常州ニ赴ムキ、清涼院ニ居リテ律學ヲ闢キ、弘長ノ始、相陽ニ入り、清涼寺ニ止マル。武州刺史平長時、忍性ノ律行ヲ欽仰シ、極樂寺ニ延ク、忍性乃チ移リテココニ居ル、寛元ノ初、忍性奈良ニアリ、王畿癩人萬餘ヲ集メテ食ヲ施ス、奈良坂北山十八間戸ハ實ニ忍性ガ創立シタル癩人院ノ遺跡ナリト言フ。忍性嘗テ四天王寺ニ詣デ、豐聰太子四院ノ事ヲ聞キ、欽慕ノ念切ニシテ、コレヨリ處處ニ療病・悲田ノ二院ヲ構フ、桑谷療病所ハ、平時宗ニ勸メテ之ヲ興サシメ、忍性輔ケテ之ヲ成セシモノニシテ後、悲田院・敬田院ヲ増加シテ、益々ソノ業ヲ大ニス。嘉元元年七月忍性病ミテ歿ス、年八十七。

疫病

痘瘡 吾妻鏡、建久三年、十二月二十三日、若公萬壽、此一兩日御不例、今日疱瘡出現給、此事都鄙殊盛、尊卑遍煩云々。百練鈔、建永元年、四月二十七日。改元依ニ赤斑瘡也、正月二十二日。被レ發ニ遣十二社奉幣使一、依ニ疱瘡御祈一也。承元元年、九月七日被レ發ニ遣臨時二十二社奉幣使一、依ニ疱瘡御祈一也。元仁元年、四月、近日天下小兒赤斑瘡多。有ニ其聞一、寛元元年五月、近日疱瘡滋蔓、小兒等有ニ此事云々。康元元年、八月、近日赤斑瘡流布、上下病惱、九月五日、天皇令レ煩ニ赤斑瘡一、十七日、赤斑瘡御祈等繁多、二十五日、雅尊親王薨、依ニ赤斑瘡一也、十月五日、改元、依ニ赤斑瘡一也。園大略、建治三年、應長元年、疱瘡流行。百練鈔ニ赤斑瘡ト稱スルハ疱瘡ナルコト、前後ノ文意ニ依リテ推知セラルベク、又頓醫抄ニ『疱瘡赤斑瘡』ト記載セルニテ、コレヲ證明スベシ、而カモソノ中ニ麻疹ヲモ混同セルニ似タリ、記録缺ケテ備ハラザルガ故ニ、深ク之ヲ考證スルコトヲ得ザルノミ。

三日病 吾妻鏡、寛元二年、五月十八日、前大納言家、併將軍、有ニ御不例一、凡近日毎レ人惱亂、世號ニ之三日病一。百練鈔、寛元二年、五月六日、主上御不豫、近日、天下貴賤、兩三日病惱、一人不レ漏レ之、世以號ニ内竹房一。ソノ病症ノ何タルヤハ固ヨリ之ヲ詳カニスルコト能ハズ、或ハ三日麻疹(風疹)ナリシカ。

咳病 四條天皇、天福元年二月、京師ニ咳嗽流行ス、世人之ヲ夷病ト稱ス。(明月記)ソノ他、玉海ニ入海病(元曆二年五月)、二禁(承安二年九月)、ヘナモ(治承四年八月)、堅根(嘉應二年七月)等ノ流行病ヲ載セ、吾妻鏡、嘉禎二年、正月ノ條ニ押領使ト稱スル病アリ。咳病モ頻次出デタリ。而カモソノ病ノ本態ハ詳ナラズ。

一代要記・明月記・歷代皇紀等ノ諸書ニ據ルニ、建久八年・天仁元年・嘉祿二年・寛喜三年・寛天二年・正嘉元

年・正嘉二年・正元元年・正和四年、京師及び諸國ニ疫疾ノ流行セルコトヲ記ス。ソノ疫疾ノ何症ナリシカハ不明ナリ。

癩病 令義解ニハ癩病ヲ以テ人ヨリ人ニ直接ニ傳染スルモノナリトセシガ、癩病傳染ノ説ハソノ後何時トナク消滅シ、鎌倉時代ニ及ビテハ、コレヲ以テ先生ノ罪業ニ因スル病ナリト言フニ至レリ。頓醫抄、卷三十四ニ曰ク『夫癩病ノ由來、五癩八風、或ハ一百三十種品アリ、或ハ又先生ノ罪業ニヨリテ、佛神ノ冥罰アリ、或ハ食物ニヨリ、或ハ四大不調ニ依ル、所詮善根ヲ修シ、懺悔ヲナシテ、善ヲ修スベシ。』コノ如クニシテ、癩病ハ不治ノ業病ナリト做サレ、萬安方ニハ三因方ヲ引イテ、『病證之惡、無レ越ニ於斯一、負ニ此病一者、百無ニ一生一、云々、凡遇ニ此病一、切須レ斷ニ鹽及一切口味一、公私世務、悉宜ニ屏置一、能不レ交ニ俗事一、絶ニ慶吊一、幽ニ隱林下一、依レ法治療、非ニ但愈一レ疾、亦能因レ是、而至ニ神仙一、所謂因レ禍而得レ福也』ト説キ、醫談抄ニハ蘇沉良方ヲ引イテ、『錢子飛ト云フ醫アリ、大風ノ病（癩）ヲ治スルニ驗アリケリ、夢ニミルヤウ、天ノヤマシムル病ナリ、天怒ニタガイテ、此ノ藥ヲ施サバ、汝病ヲ得ベシト、其後無益ナリト思フテ不絶、云々』ト曰ヒ、癩病ヲ以テ死病トシ、又業病トシ、醫方ヲ以テハ到底コレヲ治スベカラザルガ故ニ、佛説ニ從ヒ、懺悔シテ善根ヲ修スベシト説キタリ。又萬安方ニハ三因方ヲ引イテ『然亦有ニ傳染者一、又非ニ自致一レ此、則不謹之故、氣血相傳、豈宿業緣會之所爲也、原ニ其所因一、皆不内外涉ニ外所因一、而成也』ト曰ヒ、癩病ノ遺傳、スベキコトヲ説キタリ。（ココニ『傳染』ト言フハ、氣血相傳シテ、病ノ親ヨリ子ニ移ルヲ曰フ、人ヨリ人ニ直接ニ感染スルノ義ニハアラズ。）

疾病ノ名目

前章平安朝時代ノ醫學ヲ論ズルノ條下ニ於テ、醫心方等ニ見エタル疾病ノ名目ヲ擧ゲ、以テ當時ノ醫家ガ認識セル疾病ノ種類ヲ示セシガ、爾來三百餘年、鎌倉時代ノ後期ニ撰述セラレタル頓醫抄・萬安方ノ兩書ニハ醫學上ノ知識ノ進歩ニ伴ナヒテ、更ニ幾多斬新ノ疾病ノ名目ヲ載セタリ。今コノ兩書中ニ載スルコロノ疾病ノ名目ニシテ、醫心方等平安朝時代ノ載籍ニ見エザルモノノ中ニ就キテ、ソノ著シキモノヲ左ニ列擧ス。讀者宜シク之ヲ前條ニ擧ゲタル『疾病ノ名目』、及び後章室町時代ノ條下ニ於ケル五體身分集中『疾病ノ名目』ト對照スベシ。

風病

風病ト言フハ、天地山川ノ氣ニヨリテ生ズル病ニシテ、主ニ腦神經ノ疾病ヲ指スモノナルコトハ平安朝時代ノ風病ト異ナラズ。土佐光長、奇疾草子ニ風病ノ圖アリ。（挿圖ヲ参照スベシ）而カモ、ソノ中風ノ一證ハ隋ノ病源候論ニハ五十九篇ヲ擧ゲタルニ、宋ノ代、聖惠方ニハ七十九篇ヲ擧ゲ、聖濟總錄二百卷中、中風篇ハ二十卷ノ大部ヲ占ムル等、ソノ證ヲ擧グルコトノ増加著シキモノアリ。

歷節風 身體骨節疼痛不レ可ニ屈伸一、痛甚則使ニ人短氣汗出一（關節痲質斯ヲ指ス）

破傷風 破傷風者、傷損處卒暴風邪襲レ之、傳ニ播經絡一、致ニ寒熱更作、身體反強、口噤不開一

角弓反張 弓ノソルガ如クナル故ニ俗ニハ是ヲ『ソリノ病』ト言フ也。（頓醫抄、卷二）

卒中風 卒中風之人、由ニ陰陽不調府臟久虛氣血衰弱一、風毒乘レ間、仆倒不レ識ニ人事一者、此其證也

白虎風 唐、醫書ニ白虎病アリ、宋ニ白虎風ト曰フ。白虎風之狀、或在ニ骨節一、或在ニ四肢一、其肉色不變、晝靜而夜發。發則痛徹ニ骨髓一、云々、痛如ニ虎噬一、故以レ虎名焉。案ズルニコノ症ハ主ニ骨膜炎・關節炎等ヲ指スモノナラン。

中暑

中暑一名中喝、俗號^{アツケ}中暑氣^一、醫心方ニ熱喝ト稱スルモノ、コレナリ。

霍亂

乾霍亂 乾霍亂之狀、不^レ吐不^レ利、氣喘悶絕、而心腹脹痛是也、今人不^レ知^レ之、而稱爲^二內癰^一、作^レ治、誤^二人性命^一、可^レ悲哉（萬安方、卷十一）

婦人病

婦人淋病 日本呼^レ淋、曰^二消渴^一、即世俗之誤也、消渴則內消飲水之名也、滑數咽乾、曰^二消渴^一、淋閉澀痛曰^二淋病^一也、（萬安方、卷三十一）

血分 血分ト言フ病ハ、婦人ノ月水留マリ絶ヘテ手足浮腫シテ小便滯テ心ヨカラザルナリ、是ハ血ノ滯リ留マリ變シテ水ト成テ筋ノ中ニ亂レ入テ腫ルル故ニ血分ト言フナリ。（頓醫抄、卷二十七）

水分 水分ト言フハ、月水留マラス小便滯テ通ゼズ、故ニ顔面浮腫然シテ後月水滯ルナリ。（頓醫抄卷二十七）

小兒病

龜胸 和名鳩胸^{ハトムネ}（萬安方・卷四十）

龜背 龜字カガマルト讀也、「カガムヤマヒ」俗ニ「エビ」ト言フ、一名^二佝僂病^一。（萬安方、卷四十）

急慢驚風 身體壯熱、忽然之間、四肢抽掣、痞壅、口噤、謂^二之急驚^一、身體壯熱、心神不安、嘔吐、痰逆、睡中多驚、乍發乍靜、荏苒經^レ日、謂^二之慢驚^一、蓋シコレ古醫經ニ所謂、陰陽癘ニシテ、主ニ腦膜炎ヲ指スマヤ明カナリ。

疳 若乳母、寒溫失^レ理、動止乖違、飲食無常、甘肥過^レ度喜怒氣亂、醉飽勞傷、便即乳兒、致^二成疳^一也、又小兒百日已後、五歲以前、乳食漸多、不^レ擇^二生冷^一、好餐^二肥膩^一、恣食^二甘酸^一、藏府不^レ和、並生^二疳氣^一（聖惠方）

肝疳（風疳）・心疳（驚疳）・脾疳（食疳）・肺疳（氣疳）・腎疳（急疳）ヲ名ツケテ五疳ト曰フ、ソノ他鼻疳・眼疳等、十二疳アリ。

陰部病

玉莖疫病

玉門疫病 開疫病トハ先ヅ玉門ニ水瘡ノ様ニ瘡出テカユク發動シテカケバ腫フサガリテタダレテ痛シ。（頓醫抄卷四十五）

醫事制度

醫事ノ制度ハ、大寶令ニ定メラレテヨリ、奈良朝・平安朝ノ間ニ多少ノ變遷アリ、嵯峨天皇ノ弘仁五年ニハ醫生・針生ニ得業生ヲ置キ、課試ヲ經テ、コレニ任ゼラレタリ。朝野群載、卷十五『太政官符、式部省、應^レ補^二醫得業生^一事、醫生正六位上行田朝臣文信、左京人得業生、大中臣致忠奉試及第替從五位下權醫博士兼丹波介清原真人爲晴弟子 讀書 新修本草經 一部 黃帝明堂經 一部 小品方 一部 右得^二宮內省去年月日解^一備、云々者、某宜、依^レ請者、宜^二承知^一、依^レ宜行^レ之、符到奉行』原文寫誤アリテ讀ミ難シト雖モ、大意ハ師傳ヲウケテ學ビ得タル書籍

ヲ試ミテ後、得業生ニ補セラレタルヲ言フナリ^⑧。然ルニ王政漸ク衰ヘテヨリ、中古ノ諸官ハ上古ノ世襲ノ風ニ復シ、平安朝時代ノ中葉以後ニアリテハ、和氣・丹波ノ兩氏、典藥頭ノ官職ヲ世襲スルニ至リ、課試ノ制ハ自カラ廢セララルニ至リ、鎌倉幕府ノ世ニアリテハ、大寶令以來ノ繁文褥禮ヲ避ケ、簡潔質素ヲ旨トシテ、律令ヲ制定シタレドモ、遂ニ醫事ノ制度ニ及バズ。和氣・丹波兩氏ノ世襲官トシテ典藥頭ニ任ゼラルコト、猶ホ前期ニ於ケルニ異ナラズ。從テ和氣・丹波兩氏以外ニハ醫人ノ名アルモノ尠ナシ。然ルニ禪宗ノ我が邦ニ入ルニ及ビテ、學識アル僧侶ノ支那ニ往來セルモノ多ク、醫學モ亦コレ等僧侶ノ手ヲ籍リテ、直接ニ新知識ヲ宋ニ求ムルニ方リ、僧侶ニシテ醫方ニ名アルモノヲ輩出スルニイタレリ。

東北院職人歌合（建保二年）、七十一番職人盡歌合（土佐光信畫）ニ載スルトコロ、醫師ノ圖ヲ見ルニ、ソノ衣冠ヲ着クルノ狀、陰陽師・文者ト相似タリ。思フニ當時醫師ノ地位ハ、陰陽師等同様ナリシナラン。七十一番職人盡歌合、くすしノ詞書ニ『殿下より續命湯獨活散をめされ候間只今あはせ出候』トアリ、病人ヨリ、藥劑ヲサシ示サレテ、醫師ノ之ヲ調劑セシコト、コノ頃ノ習俗ナリシコトヲ想フベシ。

醫書目錄^⑨

鎌倉時代ノ撰述ニ成レル醫書ハ、左ノ如シ。

- 喫茶養生記 僧榮西撰 二卷（元祿年間刊本、群書類從、收レ之）
- 本草色葉抄 惟宗具俊撰 八卷
- 醫談抄 惟宗具俊撰 二卷
- 四花灸法 丹波長基撰 一卷（未見）
- 衛生秘要鈔 丹波行長撰 一卷（續群書類從、收レ之）
- 醫家千字文 惟宗時俊撰 一卷（天保年間刊本）
- 頓醫抄 梶原性全撰 五十卷
- 覆載萬安方 梶原性全撰 六十二卷
- 臟腑拾類抄 丹波行長撰 二卷（未見）
- 鬼法 富小路範實撰 一卷
- 節用本草 惟宗具俊撰 八卷（未見）
- 名醫傳 惟宗時俊撰 二卷（未見）
- 續添要穴 和氣種成撰 二卷（未見）
- 大醫習業 和氣種成撰 一卷（未見）
- 傳屍勞二十五灸法 僧我實撰 一卷（續群書類從、收レ之）
- 藥方書 僧榮佛撰（？） 一卷
- 產生類聚鈔 僧××撰 一卷（金澤文庫藏）

參考書籍

① (一) 文化史上ノ鎌倉時代 文學博士原勝郎著 史學雜誌第十四編第一號

- ② 運氣論奥疏鈔 十卷 松下見林著 元祿年間刊行
 - ③ 醫籍考 多紀元胤著 著者稿本
 - ④ 日本外科史 ドクトル富士川游著
 - ⑤ 奇疾草子 土佐光長畫異本數種アリ、詞書アルト、無キトアリ、ソノ詞書ハト部兼好ノ書ナリト言ヒ傳フ。
 - ⑥ 日本婦人醫史料 河内全節著 中外醫事新報
 - ⑦ 元亨釋書
鎌倉志 忍性行狀記
本朝高僧傳
 - ⑧ 本朝醫談 奈須柳村著
 - ⑨ 聿修堂醫書目
本邦醫家古籍考
本朝醫書目錄
-

- ① <https://hdl.handle.net/2027/uiug.30112029465892?urlappend=%3Bseq=43%Bowmerid=13510798903560518-1766>
- ② DOI: 10.11501/2555381
- ③ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00000482>
- ④ DOI: 10.11501/835875
- ⑤ <https://www.kohjinkai.or.jp/kurakata/txt/03.html>
- ⑥ DOI: 10.11501/1739674
- ⑦ <https://miko.org/~uraki/kuon/furu/text/mokuroku/genkou/genkou.htm>
- ⑧ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00000738>
- ⑨ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00001094>

第六章 室町時代ノ醫學

後醍醐天皇ノ時、鎌倉幕府滅亡シ、御親政ニ復シタレドモ、幾モナクシテ延元ノ亂トナリ、朝廷ハ吉野へ遷ラレタマヒ、足利尊氏ハ恣ニ光明院ヲ擁スルニ至レリ。尊氏ノ孫、足利義滿ノ將軍タリシトキ、後龜山天皇京都ニ御還幸シタマヒシヨリ八代將軍足利義政ニ至ルマデ七十餘年ノ間、京都ニハサマデ大ナル戰亂ナク、天下小康ヲ得シカバ柔弱風流ナル室町將軍ヲ始トシ、諸國ノ大名ハ驕奢ニ耽リ、榮華ヲ窮メ、一時ハ平安朝ノ再ビ現ハレシガ如ク、抹茶・插花・連歌・謠曲等ノ宴會遊技盛ニ行ハレ、義政將軍ノ頃ニハ風流數奇ノ事、ソノ全盛ノ點ニ達シタル觀アリ、從テ建築・繪畫・彫刻等、工藝・技術ノコノ間ニ進歩セシコト甚ダ著明ナルモノアリ。

應仁ノ戰亂ハ十又一年ノ久シキニ涉リテ、京都ハ修羅ノ區トナリ、内裏ヲ始メ公卿ノ第宅・府庫・名刹・大社、悉ク兵燹ニカカリ、累代ノ寶物文書モ多クハ烏有二歸シ、公卿百官ハ四方ニ流離シ、足利幕府ハ有レドモ無キガ如ク、諸國ノ守護地頭ハ一時ニ瓦解シテ、天下ハ亂麻ノ姿トナリ、朝廷ノ衰替・京師ノ荒廢、コノ時ヨリ甚シキハナシ。應仁ノ亂鎮マリシ後モ、群雄四方ニ割據シテ、爭亂毎ニ絶エズ、所謂戰國ノ状態ヲ呈スルニイタレリ。

社會ノ状態コノ如クナリシカバ、京師ニハ公家ノ中ニ、紀傳・明經・明法等、諸博士ノ家學ヲ傳ヘタルモノアレドモ、諸生ニハ教習スルコトナク、諸國ノ國學ハ全ク亡ビタリ。武家ニ至リテハ文事ヲ非職ノ才藝ト稱シテ、コレヲ度外視シタレバ、學問ノ社界ハ暗黒トナレリ。然ルニコノ間ニアリテ、京都ニハ二三ノ學者アリテ、文事ニ執心シ、地方ニハ、金澤文庫・足利學校ノ再興アリ、諸侯ノ中ニモ學問ヲ獎勵セシモノアリテ、幸ニモ學問ハ地ヲ拂フテ全ク盡クルニ至ラズ、殊ニ僧徒ニハ學問ニ精シキ人常ニ絶エズ、足利義滿ノ時、明ト交通シテヨリ以來彼ノ邦トノ往復絶ユルコトナク、僧徒ノ明ニ渡リテ、儒書ヲモ兼ネ修メ、碩學ノ聞エアルモノモ尠カラザリシカバ、學問ノ權ハ遂ニ僧徒ノ握ルトコロトナレリ。コノ事ハ鎌倉時代ニアリテモ、既ニソノ端ヲ發シタレドモ、コノ期ニ至リテ益々盛ナルヲイタシタリ。

明醫方ノ輸入

我が邦吉野朝ノ頃ハ、支那ニテハ元亡ビテ明興リシ時ニシテ、足利義滿ノ頃ヨリハ我が邦トノ往來絶ユルトコロナク、彼ノ邦ノ文物ハ直チニ之レヲ我が邦ニ傳ヘラレタリ。而シテ元ニハ李杲（東垣先生ト號ス、脾胃論・蘭室秘藏・内外傷辨惑論、等ノ著アリ）、羅天益（衛生寶鑑ヲ著ハス）、王好古（此事難知・醫壘元戎、等ヲ著ハス）、危亦林（世醫得効方ヲ著ハス）、滑壽（十四經發揮・難經本義等ヲ著ハス）、朱震亨（丹溪先生ト號ス、格致餘論・局方發揮等ヲ著ハス）等ノ名家アリ。明ノ洪武ヨリ嘉靖ニ至ル間（我が室町時代ニ當ル）ニハ王履（澠涸集ヲ著ハス）、戴元禮（證治要訣ヲ著ハス）、劉純（玉機微義ヲ著ハス）、熊均（婦人良方・醫書大全等ヲ著ハス）、汪機（脉訣刊誤ヲ著ハス）、虞搏（醫學正傳ヲ著ハス）等ノ名家アリ^①。醫說一新セリト雖モ而カモ明朝ノ醫學ハ依然トシテ和劑局方ヲ主トシタリ。當時我が邦ハ所謂戰國ノ世ノ状態ナルニモ拘ラズ、學問ニ精シキモノ殊ニ僧侶ノ中ニアリテ、明ニ渡リテソノ學ヲ講究シ、又醫術ヲ善クスルモノ尠カラズ。コノ如クニシテ宋醫方ノ繼續者タル明ノ醫方ハ主ニコレ等ノ僧侶ノ手ニヨリテ傳ヘラレタリ。コノ如ク、支那ノ醫方ガ僧侶ノ力ニヨリテ我が邦ニ傳ヘラレタルハ、鎌倉時代以來、殊ニソノ盛ナルヲ致セシガ、コノ時期ニアリテハ、僧侶ノ外ニ醫家ノ彼ノ邦ニ入りテ、直接ニ彼ノ邦ノ醫方ヲ傳ヘタルモノモ尠カラザリキ。

竹田昌慶姓ハ藤原、太政大臣公經ノ子、天性武勇ニシテ、眼ニ重瞳アリ、後光嚴院ノ時、兄公定故アリテ關東ニ配セラレ、采邑竹田ニ屏居ス、昌慶從フ、因リテ氏トナス、後、赦サレテ京師ニ歸リ、山城守ニ叙セラル、數々出デテ軍ニ從フ、既ニシテ儒ヲ學ビ、遂ニ醫方ヲ修メ、剃髮シテ自カラ實乘僧都ト號ス、慶安二年、年三十二歳ニシテ明ニ赴キ、金翁道士ニ親炙シテ、醫家ノ群書及ビ牛黃圖等ノ秘方妙訣ヲ受ケ、名ヲ明室ト改ム、道士深クソノオヲ愛シ、妻スニソノ女ヲ以テシ、遂ニ二子ヲ産ム、明ノ洪武年間、太祖ノ后難産死ニ瀕ス、昌慶ヲ延テ之レヲ治セシム、藥一劑ニシテ皇子降臨ス、太祖大ニ喜ビ封ジテ安國公トナス、永和四年、醫家秘書及ビ銅人形等ヲ得テ歸朝ス、後圓融院弗豫、昌慶診ヲ奉ジテ功アリ、左衛門督ニ任ズ、康曆二年法印ニ叙セラル、三子アリ、直慶ト曰ヒ、善慶ト曰ヒ、昭慶ト曰フ、善慶ハ應永十九年後小松天皇ノ病ヲ治シテ効アリ、法眼ニ叙セラル、同二十八年法印ニ進ミ、治部卿ニ任ゼラル、昭慶ハ自ラ快翁ト稱ス、長祿二年法眼ニ叙セラル、應仁二年、將軍足利義政ノ病ヲ治メテ効アリ、法印ニ陞叙セラル、昭慶博學多聞、諸藝ニ通ズ、世ニ稱シテ十能ノ士トナス、ソノ著作ニ延壽類要アリ。(寛永系圖傳・竹田系譜)

坂淨運、博學ニシテ醫術ニ精シ、後柏原天皇ノ病ヲ治シメ効アリ、法印ニ叙セラル、明應中明ニ赴キ、張仲景ノ方術ヲ傳ヘ、本朝ニ歸リ、ソノ名益々顯ハル、因幡守山名某醫術ヲ嗜ミ、淨運ニ就キテ方書ヲ求ム、淨運ソノ曾祖父淨秀ガ著ハストコロノ鴻寶秘要抄ヲ増補シテ、續添鴻寶秘要鈔ト題シテ以テ之ニ與フ。(寛永系圖傳・坂氏系譜)

月湖ハ明監寺ト稱シ、又潤德齋ト號ス、何レノ人ナルヤヲ知ラズ、法ヲ求メテ明ニ入り、錢塘ニ寓シ、醫ヲ以テ行ハル、明ノ景泰三年(我が朝、後花園天皇ノ享徳元年ニ當ル)全九集ヲ著ハシ、同六年又、濟陰方ヲ著ハス、傳ニ言フ、僧三喜明ニ入りテ、月湖ヲ師トシ、李・朱ノ醫方ヲ學ビ、居ルコト十二年ニシテ、醫家方書ヲ携ヘ歸ルト、所謂方書ハ即チ、全九集ナリ。(本朝醫考・新校全九集序)

田代三喜、長享元年、年二十三歳ニシテ明ニ入り、居ルコト十二年、李・朱ノ術ヲ學ブ、明應七年、年三十四ニシテ、醫家ノ方書ヲ携ヘテ本朝ニ歸ル、ソノ傳ハ別ニ出ヅ。

吉田宗桂、意安ト通稱ス、陳日華、宋ノ開寶中、諸家ノ本草ヲ撰ビ、能ク寒溫ヲ分チ、性味ヲ辨ズ、宗桂モ亦能ク和藥ヲ辨知ス、故ニ世人日華子ヲ以テ之ヲ稱ス、遂ニ自ラ以テ別號トナス、天文八年入明ノ使僧策彦ニ伴ナヒテ明ニ赴ク、明人宗桂ガ診沿神察アルヲ以テ、呼ンデ意安トナス、蓋シ醫ハ意ナリトノ義ニ取レルナリ、梅崖稱意ノ二大字ヲシテ贈ル、同十六年使僧策彦ト共ニ再ビ明ニ赴キ、明主ノ病ヲ治シ、醫名ヲ異域ニ現ハス、幾モナクシテ方書ヲ携ヘテ歸朝シ、令名愈々彰ハル、弟子益々進ミテ自カラ一家ヲ成ス、故ニ子孫世々意安ヲ以テ號トス、元龜三年十月歿ス。(寛永系圖傳)

金持重弘學ヲ好ミ、醫ニ精シク、最モ鍼灸術ニ妙ナリ、天文中大内義弘ノ命ヲ承ケテ明ニ赴ムキ、嘉賓館ニ寓スルコト年アリ、醫院諸工ソノ技ニ服ス、歸ルニ臨ミテ尙藥、愈躰文ヲ作りテ之ヲ贈ルト言フ。(醫賸)

和氣明親、後名ヲ眞長ト改メ、剃髮シテ證玄ト曰ヒ、蘭軒ト號ス、後勅シテ春蘭軒ノ號ヲ賜ハル、永正中海ニ航シテ明ニ赴キ、熊宗玄ニ從テ醫ヲ學ブ。(寛永系圖傳)

此期ノ醫學

福田方・五體身分集・管蠡備急方・棒心方等、コノ期ノ著述ニ成レル諸書ヲ見ルニ、コノ期ノ醫學ガ、前期、萬安方・頓醫抄等ノ記述ニ同ジク、殊ニ宋以後ノ支那ノ醫書ニ依リテ、ソノ說ヲ立テシコトハ明カニシテ、ソノ間大ニ佛教ノ影響ヲ蒙リシコトモ、亦前期ノ醫學ニ異ナラズ。

一條兼良ハ應仁ノ亂前後ノ關白ニシテ、當時才學絶倫ト言ハレシ人ナリ。コノ人ノ著述ニ、尺素往來ト題スルモノアリ、消息文ニ托シテ當時ノ學問・技藝ソノ他ノ事項ヲ記述セルモノナリ、ソノ中ノ一則ニ曰ク

『和。丹。兩流之醫師等。雖レ爲ニ末代ニ其術新播ニ効驗ニ候哉。仍隨分泌藏之藥共所ニ現在ニ者。人參、龍腦、麒麟竭、南木香、胡椒、縮砂、良姜、桂心、甘草、川芎、當歸、巴豆、大黃、雄黃、虎膽、辰砂、并煉蜜等、少分進レ之候。

皆新渡之濟物候。山藥、牛膝、牽牛子、香附子、紫蘇、荊芥、乾姜、厚朴、苦辛、茯苓、橘皮、白朮、地黃、鹿茸、

ロクシヤツ

石灰、硫黃、并甘葛等之和藥者。御所持之間、不レ及レ獻レ之。藥盤、藥剪、藥研、藥臼、藥銚、藥篩、沙鉢、

サハチ スリキ

等、定御用意候哉。潤體圖者奇特良藥、神妙驗德、爲ニ最上ニ之由、承候間、和劑方・簡易方・千金方・百一方・直指方・撰奇方・聖濟總錄・醫方大成等、各伺考候之處、藥種大略同篇候。仍雖ニ和合之志候、牛黃并白花蛇、依レ難

レ得レ之、未レ遂ニ本望ニ候。蘇合圓、至寶丹、腦麝圓、沈麝圓、牛黃圓、麝香丸、兔絲子圓、阿伽陀藥并臘藥等者、

當世人々、燧袋之底、面々小藥器之中、必齋ニ持之、以レ不レ得レ貯爲ニ恥辱ニ候。又瀉藥者、感應圓、金露圓。膏藥

ヒウチ

ツ、ミ

者、太一膏、雲母膏、尤爲ニ重寶ニ、云々。妙香圓者、除ニ霍亂ニ之妙藥、鬼哭散者、退ニ瘡疾ニ之靈方也。又腫物平愈

者、五香連翹湯之故候。尤療病養生之術、非レ一者歟。身上按摩。口中飲食并藥湯。針。灸。雖ニ其品多ニ。雜熱、小

瘡、對治之樣、不レ如ニ於蛭飼ニ。中風、脚氣、療養之法、莫レ勝ニ於溫泉ニ矣。』

小島法師（應安七年歿ス）ノ著述^②ト聞ユル太平記、二十五卷ニ曰ク

「足利左兵衛督（直義）の北方、相勞る事ありて、和氣、丹波の兩流の博士、本道、外科一代の名醫、數十人、招請せられて、脈を取らせらるるに。或は御勞り風より起りて候へば、風を治する藥は、牛黃、金虎丹、天麻圓を合せて御療治候ふべしと申す。或は諸病は氣より起ることにて候へば、氣を收むる藥には、兪山人が降氣湯、神仙沈麝圓を合せてまゐり候べしと申す。或は此御勞は腹の御病にて候へば、腹病を治する藥には、金銷正元丹、祕傳王銷國を合せて御療治候べしとぞ申しける。斯る處に施藥院使嗣成少し遅參して、脈を取り進らせけるが、如何なる病とも辨へず、病多しと雖も束ねて、四種を出でず、云々」

尺素往來・太平記、共ニ醫書ニアラズ、又醫家ノ著述ニアラズト雖モ、之ニ依リテ當時ノ醫家ガイカニ疾病發生ノ因由ヲ論ゼシカ、又ソノ治方ヲ如何ニ施セシカヲ、對照的ニ檢索シ得ルノ便アリ。スナハチ兩書記述スルトコロニ依レバ、ソノ病理ヲ説クハ三因方等ノ所説ニ依リ、ソノ治療ニ用ヒシ藥方ハ和劑局方ニ出ヅルモノヲ用ヒタリ。概シテ言ヘバ、局方ノ學、盛ニ行ハレタルナリ。ソノ他按摩・針灸・蛭飼・溫泉、等ノ諸法ハ千金方等、諸書ニ出デタルモノニシテ、コノ期ニ於ケル病理學及ビ治療ガ前期ニ於ケルモノト異ナラザルコトハ之ニヨリテ知ラルベキナリ。

平安朝ノ時代ニアリテ、朝廷ノ切りニ漢學ト佛教トヲ獎勵セシニヨリ、漢文ヲ讀ミ、漢文ヲ善クスルモノ甚ダ多ク、從テ醫學ノ如キモ、隋・唐ノ方書ヲ採摭シテ、外觀粲然タルモノアリシガ、鎌倉時代ニアリテハ漢學ハ大ニ衰へ、純粹ナル漢文ヲ綴リ得ルモノハ稀ニシテ、學者ト雖モ、尙ホ吾妻鏡風ノ一種異樣ノ文章ヲ作ルニ至リ、更ニコノ期室町時代ニ及ビテハ、漢學ノ衰頽更ニ甚シク、支那醫書ノ渡來スルモノアルモ、之ヲ讀ミ得ルモノハ甚ダ尠ナシ。福田方ノ序ニ『近代行レ醫者ハ唐、柳、漢、馬ノ如クナレドモ、四部ノ學久シク絶エテ、讀書ノモノ既ニ稀ナリ、經籍徒ニ蠹シテ、目手ヲ全フスルコトナシ』ト曰ヘルハ、當時ノ事情ヲ盡クセルモノニシテ、福田方以下ノ醫書ハ、皆漢語ヲ和字ニ訓ジ、野居ノモノモ理會シテ方意ヲ明カニシ、草澤ノ醫モ歴然トシテ治療ニ達スルコトヲ期シタルナリ。コノ如クニシテ、我が醫學ハ鎌倉時代ノ醫學ガ將サニ執ラントセシ方針ニ從ヒ、實際ノ方面ニ向フテ開展シ、

ソノ外觀ハ平安朝時代ニ於ケルガ如ク粲然タルモノ無シト雖モ、漢學ノ衰頹ニヨリテ漢字ヲ讀ムヲ得ザリシコトハ、却テ訓詁是レ事トシ、摸倣ニ専ラナルノ弊ヲ避ケ、親・試・實・驗・ニ・ヨリテ以テ治・術・ヲ・究・メ・ン・ト・スルノ狀勢ヲ呈スルニ至レリ。コレコノ期ニ於ケル醫學ノ特徴トスルコトニシテ、コノ期ニ至リテ眼科ノ勃興ヲ示シ、金創醫ノ一派ヲ生ジ婦人科ノ専門醫ヲ出ダシ、從來ノ漢名ヲ用ヒタル疾病ノ稱呼ニ和名ヲ用ヒタルコト多キコト（後章五體身分集中ノ病名ノ條下ヲ参照スベシ）等ハ、以テ我が醫學ガ實際ノ方面ニ開展シタルノ狀ヲ示スニ足ル。世人動モスレバ『戰國ノ時文事工藝地ニ墜チテ醫道亦衰頹ノ極ニ達セリ』ト曰フモノハ、コレ徒ラニソノ外觀ニヨリテ之ヲ評スルニ過ギザルノミ。

コノ期ニアリテ漢學ノ衰頹セルコトハ既ニ屢々之ヲ言ヘリ、而カモ僧侶ニハ學ニ精シキモノ尙ホ絶エズ、殊ニ醫術ヲ善クスルモノモアリテ、醫方ノ事ハ多ク僧侶ノ手ヲ藉リテ用ヲ辨ゼシガ、コノ期ニハ僧侶以外ニモ醫學ニ精シキモノ尠カラズ。和・丹諸家衰ヘタリト雖モ、尙ホ多少ノ名家アリ、和・丹兩家以外ニモ、坂士佛・坂淨秀・坂淨孝・坂淨運・吉田徳春・吉田宗桂・竹田昌慶・竹田昭慶・安藝守定・板坂宗徳・片岡正親・阿佐井宗瑞・祐乘坊義空・松井正濟・高橋英全等ノ諸家アリ。コノ期ノ醫學ガコレ等諸家ノ力ニヨリテ、開發セラレタルコト尠カラズトス。

坂士佛、名ハ慧勇、健叟ト號ス。祖九佛、京都ニ居リテ醫ヲ業トス。父十佛業ヲ傳ヘテ、民部卿法印ニ叙セラル、慧勇醫術父祖ニ超卓セルヲ以テ、勅シテ上池院ノ號ヲ賜フ、之ヲ盧扁ニ比シタルナリ。將軍足利義詮眷顧極メテ渥シ、嘗テコレニ謂テ曰ク、『士ノ字タル十二從ヒ、一二從フ、子ガ術父祖ニ超越ス、今ヨリ士佛ト稱スベシ』ト、是ニ於テ名ヲ士佛ト改ム。

（坂氏系譜・寛永醫家系圖）

坂淨秀、士佛ノ孫、宮内卿法印ニ叙セラル、後花園天皇ノ病ヲ治シテ効アリ、盛方院ノ號ヲ賜フ、子孫コレヲ襲稱ス、著ストコロ、鴻實秘要鈔アリ。（寛永系圖傳・坂氏系譜）

坂淨孝、淨秀ノ子、三位、法印ニ叙セラル、醫業益々盛ナリ、揖仙方ヲ著ハス。（寛永系圖傳・坂氏系譜）

吉田徳春、仁庵ト號ス。本姓佐々木、醫ヲ以テ室町幕府ニ仕ヘ、法印ニ叙セラル、晚年致仕シテ嵯峨、角倉ニ居ル、應仁二年八月歿ス、ソノ曾孫宗桂醫ヲ以テ著ハル。（寛永系圖傳）

吉田宗桂、竹田昌慶、安藝守定、阿佐井宗瑞等ノ傳ハ別ニ出ヅ。

板坂宗徳、三位ト稱ス、又湖隱軒ト號ス、人トナリ豪縱ニシテ、疾ヲ視ルコト神ニ入ル。寛正三年大内教弘、伊豫ニアリテ疾ム、將軍之ヲ患ヒ、廣ク良醫ヲ撰ブ、宗徳選ニ當テ往ク、時人之ヲ榮トスト言フ。（皇朝醫史）

片岡正親、天文中、大和守ニ任ジ、醫ヲ以テ室町幕府ニ仕フ。（穴太記）

祐乘坊義空、初メ佛ヲ學ビ、後醫ヲナス、貞治三年御脈ヲ診シテ効アリ、民部卿三位法印ニ叙セラレ、將軍足利義詮、最モ之ヲ親信シ、毎ニ治ヲ屬ス。（皇朝醫史）

松井正濟、寛正・文正ノ間醫ヲ以テ室町幕府ニ仕フ、今ノ世ニ傳フル、松氏集要方ト題スル方書ハ、蓋シコノ家ニ傳フル方ヲ集メシモノナラン。（皇朝醫史）

高橋英全、文明中法眼ニ叙セラル。（皇朝醫史）

室町幕府ノ後期ニ至リテハ、坂淨運、續添鴻實秘要鈔ヲ著ハシ、漢ノ張仲景ガ著ハセル傷寒論中ノ藥方ヲ採用セルアリ、治方稍一變セントスルニ際シ、田代三喜ノ明ヨリ歸リテ、李・朱醫學ヲ唱道スルアリ。我が邦人ニシテ支那ニ滞在シタル月湖ノ著書、全九集・濟陰方ニ書ノ我が國ニ傳ハレルアリ。三喜ノ門人曲直瀬道三、京師ニアリテ益々之ヲ鼓吹スルニ至リテ、前期以來、世ニ行ハレタル宋醫方ハ廢タレテ、李・朱醫學之ニ代ハルニイタレリ。

田代三喜、名ハ導道、字ハ祖範、範翁・廻翁・支山人・意足軒・江春庵・日玄・善道等ノ號アリ。初メ壽永・文治ノ頃、伊豆ノ人ニ田代信綱ナルモノアリ、八島ノ役ニ源氏ノ軍ニ從ヒテ功アリ、ソノ後子孫相聞襲ギテ醫ヲ業トシ、關東ノ武士病アルモノヲ治ス、ソノ八世ノ孫ヲ兼綱ト曰フ、武藏ノ川越（又ハ越生トモ言フ）ニ移リ居ル。三喜ハソノ子ナリ、後土御門天皇、寛正六年四月八日ヲ以テソノ地ニ生マル、年十五ニシテ方伎ニ志アリ、當時ノ醫タリシモノ皆緇徒タリシヲ以テ妙心寺派ニ入り、浮屠トナル、長享元年商舶ニ乗テ明ニ入り、留マルコト十二年、李東垣・朱丹溪ノ術ヲ學ビ、又曾テ月湖ノ門ニ遊ブ。明應七年三喜年三十四歳、醫家ノ方書ヲ携ヘテ本朝ニ歸リ、初メ鎌倉ノ江春庵ニ居リ（故ニ一ニ江春庵ト號ス）、後下野ノ足利ニ移ル。是時ニ方リ、足利成氏、關東ノ管領ヲ以テ下總ノ古河ニ在リ、古河公方ト稱ス。三喜ノ名高キヲ聞キ、之ヲ招請ス、因リテ遂ニ古河ニ移ル、時ニ永正六年ナリ。コレヨリシテ三喜ノ名聲ハ益々四方ニ宣揚シ、時ノ人古河ノ三喜ト呼ブニ至ル、ソノ業ノ盛シニ、ソノ術ノ精シカリシコト想フベシ。三喜、古河ニ移リテ幾モアラズ、髮ヲ蓄ヘ、某氏ノ女ヲ娶レリ。居ルコト數年ニシテ武藏ニ歸リ、後、總・毛・武ノ間ニ往來シテ、醫治ヲ施シ、濟生ノ功極メテ多シ、天文六年二月十九日、病ヲ以テ歿ス、年七十三、或ハ言フ、年七十九、遺像長谷村一向寺ニアリ、我ガ邦名醫多シト雖モ、像祀セララルハ古來タダ鹽眞ト三喜トアルノミト言ハレシモ後、火災ニ遇フテ消失セルハ惜シムベシ。

三喜、室町幕府ノ末造、局方ノ學ノミ行ハルル世ニ出デ、獨リ李・朱醫學ヲ唱ヘソノ學ト術トヲ以テ、東國ヲ風靡シ、實ニ我ガ邦ニ於ケル李・朱醫學派ノ開祖タリシモ、不幸僻陬ノ地ニ居テ、ソノ學說ハ廣ク天下ニ及ブニ至ラズ、曲直瀨道三ノ京都ヨリ來タリテ、三喜ノ門ニ入ルニ遇ヒ、三喜コレニ授クルニ李・朱醫學ノ蘊奧ヲ以テシ、遂ニ道三ヲシテ李・朱醫學ヲ京都ニ唱道セシメ、コレニヨリテ天下ノ醫風ヲ一變セシムルニ至ル、三喜ノ功德亦不偉ナラズヤ。（醫學源委・今大路家譜・涙墨紙・換杏新話・醫海蠡測・東路のつと・玄治家譜・豹斑錄・本朝醫談・三喜直指篇題言・三喜備考）

福田方

福田方、十二卷ハ後村上天皇時代（西曆一千三百六十二年乃至一千三百六十七年）僧有隣ノ著ハストコロニシテ、室町時代前半期ノ醫學ヲ代表スベキモノナリ。コノ書奥書（跋文）ニ依レバ、『凡ソ醫書ハ上古ノ方、四千八百九十卷、中古以來ノ方ハ諸家ノ作、ソノ數極ムベカラズ、病ノ數ハ一千八百餘件ナレドモ、猶ホ奇病ヲ盡スコトヲ得ズ』トテ、醫學ノ困難ヲ説キ、コノ書中ニハ病源候論・難經・脉經・素問・太素・明堂經・醫生經・鍼灸經・太平御覽・事林廣記・博聞錄・最勝王經・止觀等、都テ一百餘部ノ和漢名書ヨリ、必要ノ論說及ビ治方ヲ鈔録シ、參ユルニ自家經驗ノ說ヲ以テセルコトヲ曰ヘリ。

コノ書記述ノ體裁、コレヲ從前、我ガ邦ニ行ハレタル醫書ニ比スルニ大ニ同ジカラズ。卷首ニ先ヅ諸藥炮灸論ヲ擧ゲ、藥ノ眞僞ヲ辨ジ・炮灸ノ法ヲ詳ニスベキコトヲ説キ、次デ各病ノ方論ニ移リ、疾病ヲ大體ニ類別シテ

(一) 諸氣脾胃 七氣、五膈、五噎、脾胃不和、咳逆、嘔吐、反胃、霍亂

(二) 腹中諸病 積聚、氣分、胸痞、腹中脹滿、水腫腹滿、婦人血分腫滿、婦人水分腫滿、婦人虛浮、妊娠腫滿、心腹痛、脇肋痛、腎氣腹痛、疝氣腹痛、小腸氣腹痛、卒腹痛、蟲心腹痛

(三) 虛勞羸瘦 五勞、六極、七傷、傳屍、客熱、積熱、痼冷、驚悸、腰痛、消渴、嗜眠、不眠

(四) 風寒暑濕 中風、中寒、中暑、中濕、四氣兼中

(五) 脚氣雜風 脚氣、雜風、癩癧、五痺、自汗、頭風、癩癧、婦人搔擗、癩疹

(六) 傷寒瘧疾 傷寒、瘧疾、似瘧病

(七) 咳喘吐血 咳嗽、痰飲、喘息、肺萎、肺癰、吐血（血線）

(八) 婦人諸疾 妊娠、惡阻、漏胞、橫產、難產、胞衣、胎死、產後、產後雜病

(九) 小兒諸病 變蒸、驚風、斑瘡、疱瘡、臍風、好啼、魛病、不行、不語、疳病、客忤カウコ

(十) 七孔瘡腫 頭面病、毛髮病、眼病、耳病、鼻病、口病、瘡腫、雜腫、雜瘡

(十一) 手足脇腋病 尸脚、肉刺、凍瘡等、狐臭、漏液

(十二) 卒病 金創、傷折、尸厥、五絕、畜獸、蟲蛇、所傷、食毒

右ノ十二門トナシ、更ニ之ヲ細別スレドモ、ソノ疾病ハ實驗ニ照シテ、必要ト認ムルモノヲ採リタルガ如ク、從前ノ醫書ニ於ルガ如ク、支那ノ醫書ヨリ鈔出シテ取捨スルコト無キトハ大ニソノ趣ヲ異ニセリ。更ニ特ニ擧ゲテ言フベキコトハ、コノ書ニアリテハ、各病ヲ論ズルニ、先ヅ論(原因)ヲ擧ゲ、外證(症候)ヲ説キ、次デ脈及ビ按檢(診斷)ヲ論ジ、相類病(類症鑑別)ヲ擧ゲ、死候(豫後)ヲ示シ、終ニ治方(療法)ニ及ブ。又重要ノ疾病ニアリテハ、特ニ既往症ノ詢究ヲ怠ルベカラザルコトヲ説ク。スベテ記述ノ次序、體裁ノ今日吾人が手ニスルトコロノ書籍ニ於ケルト、ソノ様式ヲ同ジクセルヲ認ムルコトナリ。蓋シ、我が邦ノ醫學ハ平安朝ノ醫心方ニ於テ、唐風模倣ニ餘念ナカリシ時代精神ヲ吾人ニ示シ、鎌倉時代ノ頓醫抄・萬安方ニ於テ、支那ノ文化ヲ、幾分カ日本化セル當時ノ趨勢ヲ吾人ニ示セシガ、コノ期ニ至リテ我が醫學ガ實際ノ方面ニ開展シテ、單ニ支那醫方ノ模倣ノミヲ事トセザリシハ福田方ノ一書、コレヲ證シテ餘アリト言フベシ。

五體身分集

五體身分集三卷、釋生西ノ撰述スルトコロナリ、卷首ニ『耆婆、扁鵲、忠明、雅忠等傳、日本筑前國香椎宮學頭生西校之』ト題スレドモ、生西ノ傳ハ未ダ詳ナラズ。而カモソノ辭氣ニ就テ論ズレバ、斯書ノ作ハ恐クハ南北朝ノ頃、若クハソノ以前ニ在ルベシ。(鎌倉時代ノ著述、喫茶養生記卷下ニ『近年以來、五體身分病、皆冷氣也』トアリ、五體身分ノ語ハコノ頃ヨリ行ハレシナルベシ)。斯書、耆婆・扁鵲・忠明・雅忠等ノ傳ヲ輯メタリト稱スレドモ、ソノ病名ヲ學グルコト頗ブル爾他ノ當時ノ書籍ニ異ナルモノアリ。往々解釋シ難キモノアリト雖モ、中ニ本朝ノ病名ト見ルベキモノアルガ故ニ、左ニ之ヲ抄出ス。

頭病

頂血 烏帽子ノ手ユイノ處ノ上ウツキ痛テ鼻ヨリ膿出ヅルナリ

破草 頭ニ出デテ愈ガタキ瘡ナリ

白草 頭ニ鳥ノ尻ノ様ニ出ヅル瘡ナリ

白雲瘡 (白禿疹)

熱草 頭ニ所々癩ノ様ニ多ク出テ腫ウツクナリ

頭草 頭口齒ノ根耳ノ上マデ腫ルル病ナリ

冷氣風 片頭ヲ分テ身體痛ム瘡ナリ

蚯蚓瘡
ミ、ズカサ

白カブレ瘡

蓮根瘡 瘡ニ穴開クナリ

鼠ハス

毛髮病

熱風病 俄ニ髮ミダレ落ちテ跡ハ白毛生ズルナリ

面病

僂白 面ニ白ク黄ニチイノ出ヅルヲ言フ是レ熱氣ナリ

僂黒 面ニ黒ク物出ヅルナリ

横風 面赤ク成テ死入ルナリ

重竹 貌ハケテ白鯰ノ如クニ出ヅルナリ

水破草風 面腫レテ目白ク成ル病ナリ

細面草 貌額サマニ物ノハウ如クニシテカユキナリ

嘔破
ホウハ

風熱草 眉痒クシテ毛落ルナリ癩病ニアラズ、風ト熱ト多キ人ニ付ク病ナリ

目病

目草 目屎常ニ有テ目朽ツル病ナリ

爛目
タマレメ

目綿

痛目

白膜
シロマケ 目ノ内ニ白キモノカカルナリ

赤膜
アカマケ 目ノ前ヨリ筋イデテ瞳ノ上ニ差カカルナリ、目ジリヨリ出ヅルコトモアリ

底翳
ソコヒ 常ノ目ノ如クニシテ見エザル病ナリ

疾目 瞳ト白眼トノ間ニ穴アリ、ソレヨリ膿出テ頻ニウヅキ痛ムナリ

目飯飼（飯モライ） 目ノ中ニ癖ノ如クニ出デテ膿腫ルルナリ

目客居 黒眼ノ上ニ白キ物居テ月ノ様ニ見ユルナリ

鳥目
ヤトリメ 例ノ眼ノ様ニシテ申西ノ時分ニナレバ見エザルナリ

目茸（目クサ） 目フチ痒クネバリ爛テ日見エザル病ナリ

篠突目
シノツキメ 黒眼ニカスミカカリ、或ハ玉ノ様ナル物居ルナリ

耳病

耳垂 耳ヨリ常ニ汁出デテ癒エザルナリ

カリハ 耳ノ底ウヅキ痛ミテ膿ノ出ヅル病ナリ、コレハ定業ノ病ナリ

耳上風 耳ノ中ウヅキテ口開カザルナリ、コノ病ハ中風ノ相ナリ

鼻病

蟲負血風 目ノ下鼻ノ角ウヅケテ鼻ヨリ水出デテ臭キ病ナリ

舌病

舌粉 舌ノ上白クシテ粉ノ如シ
舌針 舌ノ角ニイリくト物出デテ痛ムナリ

頤頸病

肝草 頤ノ下耳ノ側ニ廻テ圓キ物出デ何時トモナク爛レテ汁ノ垂ルル病ナリ、小兒ノ時、コノ疾アルベシ
入草 頸脇ナンドニ疼ノ根ノ如ク出デテ潰テモ更ニ痛マザルナリ。男兒七才ニシテコノ瘡出デテ歳ヲ過グレバ平癒ス

波草 頸ニ膿テ出ヅル瘡ナリ

理水草 頸ニネマリテ膿返りくシテ直ホリヤラヌ瘡ナリ

肩臂脇肘病

集皮風 手足ノ冷ユル病ナリ、

白溫風 手足フキキリタル様ニナリ、洗ヘバ白水ノ如クナル物出ヅ、是ハ業病ニアラズ、只風ノ所爲ナリ

本熱 手足ニ物出デ木皮ノ如クニ成テ少々ナル瘡出ヅ、三年ヲ過グレバアカガリノ如クニ切ルルナリ

小熱 手足ニ細々タル瘡出デテ痒キナリ

細熱風 毎年夏ニ至レバ手足熱スルナリ

蛇瘡 手足又ハ鼻前ニ、ニキミノ如ク出デテ痒シ、イカニ灸トモ熱カラズ、遂ニ癩病トナルナリ

胸臆病

臆水風 心前ニ筋ノ如ク張り、食スレバ脹滿テ胸中左右折骨ノ下痛ミ、木ヲ折入レタル様ニ痛ムナリ、コノ病究ムレバ食セズシテ死スルナリ

臆持 心腹煩滿ハ心前稍シコハリテ痛ク氣息苦、後ニハ腹悉ク脹滿シ、食セズシテ死ス。急ナルハ九月或十三月乃至三年ニテ死ス、定業ナリ

思臆持 戰場或ハ人中力高人ノ前ニテ臆シテ不言機ヲ失フ者アリ、餘ニ下機ナル者ハ如此時ハ血ヲ吐クト言ヘリ

水持 乳ノ下折骨ノ内ヲ痛ムナリ

細皮 胸ヨリ咽サマニ物ハヒ登ルナリ、是レ寸白ノ所爲ナリ

胸持熱風 恒時ニ胸ヲ痛ミ節々腹脹ルナリ、如此煩故ニ身皺テ色青ク黄ニシテ一月ノ中ニ一度發リ或ハ五、六度起ルナリ

臆熱風 胸コガレテ飲食スレドモ不快、時々首痛ク目動テ明ニ見エズ、三月五月有テ左右ノ眼白シテ魄空心來テ物狂ノ如ク成ルナリ

辰水 魚ヲ食フテ胸ヲ疾ムナリ

生ヒ物 大椎ヨリ物生ヒ出デテ左右ノ脇ノ下胸サマニ生ヒ上ルナリ、咳嗽シ氣短キハコノ故ナリ

腹病

血寸白

生ヒ物寸白

簑笠寸白

蛇寸白

腹氣 腹ヲ探テ見レバ左右ノ片脇ニ平キ物有テ振ヒ寒ムル病ナリ

草腹 腹ニ物ナクシテ振フ病ナリ

茸氣 人ノ腹中ニ茸生ルナリ、ソノ根ハ第五椎ヨリ出デテ左ノ脇ノ下へ指シテ臍ノ上ヲトヨリテ心前ニヒロゴリ

登ルナリ

固尿 腹固クシテ結バルナリ

乳病

茸草 卒カニ振ヘテ乳腫ルル病ナリ

乳腫クサル病

身體病

水海 腹脹レテ上キタメキタルナリ、是レ定業ノ病ナリ

寒腫風 卒カニ身腫テ小瘡出デ痒ク寒氣立チ身内ハ冷テ不快ナリ

靈咀風 卒カニタフレ伏シ本心ヲ失フテ死ニ入ルナリ

少機風 人身ノ皮ハ三重アリ、ソノ第二ノ皮内ニ水有リテ流アリクナリ

焚熱 一身熱シテ不平ナリ、熱氣吹出デ身ニ散ジ焚クトモ熱セズ、摘ムトモ痛マズ、此カラ湯ヨリ發ルナリ

寒被 身ニ白鯨出來テ痒クシテ風ホロシノ様ナリ

飲水ノ病 或ハ酒ヲ嗜ミ濃味ヲ好ミ或ハ房實ニ過ギ放逸ノ人ニアリトミヘタリ、然レドモ、コノ來^{ココ}ヲ見ルニ寒ヲ

凌テ風ヲ引キ出仕シケクシテ身苦シキ人コノ病アリ

弱地 水風極テ腹脹滿シ腰痛ク足煩強ナリ

尻尾病

尻茸 穴ノククリノ間ニ生ジタルモノナリ

披開瘡 尻ノククリ間ニカタネノ様ニ出デ穴アキ久シク平癒セズ、汁出ヅル病ナリ

閉闌病

閉疫病 痒クシテ腫レ腐ルナリ

痲病 小便茂ク陰莖萎ホリ入テ小腹痛ムナリ、俗ニハ消渴ト言フ

白草 開白クナリテ勢小クナルナリ、是ハ寸白ノ類ナリ

狐嫁

開陰病

長血 玉水風ト言フ病ナリ、コレ九種ノ下腹ノ内ナリ

白血 時ナラズシテ月水下リ、血ニアラズシテ下ルヲ言フナリ（白血ノ稱ハ既ニ醫心方ニ出ヅ）

開疫病 陰ノ内痒ク發動シテ腫レ塞テ死スルナリ

開茸 陰ノ内ニ上下ヨリ物生ヒ出ヅルナリ

從股至足病

大腫草 股ノ内ニ口モナク腫ルル物ナリ療セザレバ三月病ムト

破ケイ草 口モナク尻タムラ腰下股膝ヨリ下ナドニ出ヅ

膝ワラ 膝ノフシ腫テ歩ムコト能ハザルナリ

窄血草 脚腫ルル病ナリ

脚繼熱風 脛ノ内疼ミ脛曲テ心地アシク後ニハ食停ツテ立居ナシ、三月乃至五月ニシテ所ヲ取りテ腫レ先痛ムナリ

腦皮風 股ノ内腰クタリ膝頭ヲウツキ足モ寄ラズ、差延セラレズ、腫ル様ニシテ腫レズ、皮引ハリテ立居叶ハズ
肉判熱風 脚肘ナドノ内ニ肉出デテ魚ノ如ク出ヅルナリ

鴨瘡 鏡刀皮ニシテ脛ヲ摺リ破リタルトコロ瘡ト成テアセモノ如クミサミサトシテ汁出デテ痒ク、イカニ搔ケドモ痒止マラザルナリ

水草 足ニ口モ無クシテ腫テ次第ニヒロガル病ナリ

咲草 踝ノ上ニ出ヅルナリ

屍骸 夜何トモ知ラズ骨ナド蹈タルニツク病ナリ

産前産後病

尻腹ノ病 産後ニ腹フクレ痛ミ、身腫ルルナリ

産子風 産ノ後身内不調風ニアタリ身寒ルガ故ニ腹中古血堅テ臍ノ下ニ盃ヲ伏セタル如クシテ腹ツリ痛ムナリ

五體身分集ニ於テ、注目スベキコトハ、本邦ノ病名ヲ擧グルコト多キノミナラズ、ソノ疾病ヲ列序スルニ、身體ノ部位ヲ以テセルコトナリ、コレ實ニ従前ノ醫書ニ於テソノ例ヲ見ザルトコロナリ。

外科

福田方中ノ外科ハ、之ヲ瘡腫（癰疽・疔瘡・附骨疽・瘰癧・癭瘤・腸癰・乳癰）、雜腫（風腫・毒腫・風毒腫・熱腫・陰腫・便毒）、雜瘡（疥癬・痂子・湯火・灸瘡・漆瘡・滅瘢・疣目・疵痣・癩瘍・癰瘍・丹毒）、卒急諸病（金瘡・傷打・卒死）、畜獸虫蛇所傷ノ五部門ニ別チ、病源候論・三因方・千金方・千金翼方・鬼遺方・易簡方・濟生方・遺濟方等ノ諸書ヲ引キ、所説前期ノ外科ニ於ケルト異ナルトコロナシ。

永正五年著述、續添鴻寶秘要鈔ニハ、ソノ外科部門ニ救急・折傷・諸風・疥癬・癰疽瘡癤・破傷風等ヲ掲ゲ、天文三年著述、管蠡備急方ニハ癰疽瘡癤・折傷・急救諸方等ヲ學グルノミニテ、ソノ説クトコロモ甚ダ詳ナラズ。

大寶令ニ體療・創腫ノ兩科ヲ別チテヨリ、凡ソ六百年、室町時代ニアリテハ、既ニ本道外科ノ稱呼アリ^③。外科ノ治術ヲ以テ専門トスルトコロノ醫家アリシコト明カナリト雖モ、コノ時ニ至ルマデ治瘡記以外ニハ外科ノ專書ナク、明德二年富小路範實所撰、鬼法一卷アリト雖モ、ソノ治術ハ金創ヲ主トシ且ツ一二針熨ノ手術ヲ除クノ外ハ、敢テ内科ノ治術ト選ブトコロナシ。鎌倉時代ニ於テ僅ニ進歩ノ傾向ヲ示セシ外科ハ、コノ期ニ至リテ更ニソノ面目ヲ新メザリシナリ。

然ルニコノ期、應仁以後、干戈相踵ギ、擾亂熄ムトキナク、戰フ毎ニ創ヲ蒙ルモノ甚多カリシカバ、瘍醫ノ金創ヲ兼テ治スルニ併セテ、士林ノ人ニシテ、專ラ金創ノ術ヲ攻ムルモノアリ。ソノ人益々多ク、ソノ術益々進ミテコノ期ノ末ニハ遂ニ金創醫ト稱スル一派ヲ生ズルニ至レリ。而シテ金創醫ト稱スルモノハ、固ヨリ金創ノ治療ヲ主トセルモノナレドモ、婦人ノ産後モ腹ノ疵ニ同ジト説キテ^④、兼テ助産ノ方術ヲモ施セリ。

金創醫ニモ幾多ノ流派アリテ、所説相異アリト雖モ、ソノ治術ハ略ボ購様ナルガ故ニ、左ニ永井流金瘡治術^⑤ノ一斑ヲ擧グ、之ニヨリテ以テ當時金創醫ノ治術ヲ類推スベシ。

金創ヲ負ヒタルモノニハ、先ヅ黄蘗湯（血縛）ヲ與フ。ソノ方ハ『人參・白芷・黄蘗・松綠・紫河車・甘草・麒麟血・合歡若綠、各二分、以上八味』コレ當座ノ氣付藥ナリ、『ソノ三服ヲ與へ、一服モタモタズバ定業必死タルベシ』既ニ血縛ヲ與へタル後ハ内藥（秘術湯）ヲ與へ（ソノ方ハ川芎・人參・芍藥・地黄・大黃・干姜・荆芥・丁子・半夏・白茯苓、ソノ證ニヨリテ取捨加減スベシ）、尙ホ氣付藥トシテハ『麒麟血・松綠・麻ノ霜・ホコリ茸、各等分、右何レモ細末トシテ疵ノ口ヘヒネリカケヨ』ヲ賞用シ、疵洗藥トシテハ、『荷葉、大バコ、ド

クダミ、黃柏、藤コブ、以上五種、右トリ合セ、鹽少シ入レ、煎ジ出シテヌル／＼トサマシ、洗フベシ、冬ハ一日ニ一度、夏ハ度々洗フベシ。』

矢尻又ハ金ノ類ノ折レ止マリタルヲ抜クニハ拔藥ヲ用フ。ソノ方『古鯉ノ粉、赤子ノ糞、梅干』『磁石一分、サメノウラ皮、生栗、松茸、各等分、右細末シテ口ニ餘ホド入レテ上ニ青木葉ヲ付ケヨ』

腸ノ出タルニハ『先ヅ洗藥ニテヨク／＼アタタメ、ソロ／＼ト押入テ包口ニハ赤子ノ糞ヲソノ儘マ又ハ干シテ付ク』『大麥ノ一二寸許ニ生タルヲ陰干ニシテ細末シテ腸ニヒネリカケヨ、又大麥ヲ粥ニテ煮タル湯ニテ洗フモヨシ』腦ノ出タルニハ『赤子ノ糞ヲカラスノ羽ニテ腦ノ出タル口ニヌレ、腦モトマリ頭ノ皮トナル』

疵癒藥トシテハ『蛇骨一分、蛤貝茶五服バカリヤクベシ鹿角茶一服バカリヤクベシ烏賊甲燒三服ホド蛇皮一疋分腹ノ方ヲ去ル阿仙藥少加右細末シテ麻油ヲ以テ付ク、但シカシラノ疵ニハ油ヲ忌ム』

膏藥ヲモ用フ、ソノ方『松脂四十目、スス一文目、朱一文目、白粉一文目右何レモ細末ニシテ常ノ如ク油ニテ煉ル』

金創醫ノコトニツキテハ、尙ホ次章ニ於テ、論述スルトコロアルベシ。

婦人科

福田方ノ婦人科ニハ、千金方・直指方・產育保慶集等ヲ引キテ、獨リ婦人ニアリテ男子ニ無キトコロノ三十六疾(十二癆下・九痛・七害・五傷・三癩)ハ皆血ノ病ナリト説キ、ソノ治方ハ主ニ和劑局方ニ依リ、四物湯(當歸・芍藥・熟地黄・川芎、右四味粗末ニシテ每服四錢水一盃半入レテ半分ニ煎ジテコレヲ溫服ス)ハ婦人ノ寶ナリト云ヘリ。

ソノ助産ノコトヲ論ズルヤ、法苑珠林・毘婆娑論・瑜珈論等ノ佛書ヲ引キテ、受胎ノ理ヲ説キ、産後二十一證ハ、黑神散(當歸・芍藥・熟地黄・蒲黃・甘草・乾薑・桂心、各三分、黑豆六分、各粉末シテ每服一錢)ヲ以テ之ヲ治スベシト云フ。ソノ他、催生・安胎・産難ノ方ハ前期ノ婦人科ニ於ケルト毫モ異ナルトコロアラズ。

故ニ婦人科ノ方術ハ平安朝ヨリ鎌倉時代ヲ經テ、コノ期ニ至ルマデ、些モ變革セルトコロアルヲ見ズト云フモ可ナリ。蓋シ婦人科ハ、大寶令ニ醫學ノ專門ヲ分チシトキ、之ヲ專門科トセザリシヨリ、コノ期ニ至ルマデ體療(内科)ノ中ニ合セラレ、内科ノ治術ノ、始メ千金方ヲ師トシ次デ和劑局方ヲ師トセルニ從ヒ、コノ科モ亦多少ノ變化ヲ示セリト雖モ、未ダ全クソノ面目ヲ改ムルニ至ラズ。シカルニ、コノ期ニ及ビテ婦人科ハ他ノ諸科ト共ニ、實際ノ方面ニ向フテ開展シ、ココニ婦人科専門ノ醫家ヲ生ズルニイタレリ。

安藝守定、ソノ先ハ安藝平氏ニ出ヅ、因テ氏トス。延文三年將軍足利義詮ノ室紀良子妊娠セルニ方リ、之ヲ療シテ男ヲ擧グ、コレヲ將軍義滿トナス、室町幕府ソノ功ヲ賞シ、ソノ邑ヲ割テ之ヲ封ジ、又奏シテ尙藥トナス。嘉慶中從四位上ニ叙シ、大膳亮ニ任ズ、子孫業ヲ繼ギ、宮中産ヲ治スル皆安藝氏ニ屬ス。初メ守定、二條家ノ家司タリ、一夜一少女來リテ治ヲ求ムルアリ。守定スナハチソノ脈ヲ診シ、鍼ヲ刺シ、藥ヲ授ク、ソノ病忽チ癒ユ。少女大ニ喜ビ、謝シテ曰ク『妾靈方アリ、之ヲ贈リテ、以テ君ノ厚惠ニ報ヒン』ト一卷ノ書ヲ遺シテ去ル。守定之ヲ奇トシ、人ヲシテソノ歸ルトコロニ從ハシメシニ、邸側池水ノ邊ニ於テ、ソノ往クトコロヲ失ス。明早之ヲ見レバ、龍鱗三片ヲソノ席ニ留ム、一卷ノ書ハ治産ノ方ナリ。守定益々之ヲ奇トシ、ソノ方ヲ試ムルニ驗アラザルハナシ、遂ニ女科ノ名ヲ得ト傳フ、之ヲ婦人科専門家ト始トス。守定ノ子、貞守、貞守ノ子守家、刑部少輔ニ任ゼラレ、亦女科ヲ以テ名アリ。(歷世尙藥略傳・雍州府志・皇朝醫史・御産所

日記)

阿佐井宗瑞、和泉ノ人、女科ニ精シキヲ以テ名アリ、世ニ阿佐井婦人醫ト稱ス。大永五年、明版ノ醫書大全ヲ得、刊行シテ世ニ公ニス、我が邦醫書ヲ板ニ刻スルハ之ヲ以テ嚆矢トスト言フ。(幻雲藁・醫書大全跋文・本朝醫考)

女科専門ノ醫家アリテヨリ久シカラズ、コノ期ノ末ニ所謂金創醫ト稱スルモノ興リ、金創ノ治ニ兼ネテ、婦人産育ノ治療ヲ施スニ至レリ。コレ創腫科ニ血類七氣ノ目アリ、産モ亦血ニ屬シ、創傷ト同一ナリト做シテ、併セ治セシナラン。(金創醫ノ事ハ次期ノ醫學ヲ論ズルノ條下ニ詳述スベシ)

眼科^⑥

支那ニ在リテハ、元ノ世ニ及ビテ、醫方ニ大方脈科・小方脈科・風科・産科兼婦人雜病科・眼科・口齒咽喉科・正骨兼金鏃科・瘡腫科ノ九科目アリ。眼科専門ノ稱呼、ココニ顯ハレシガ、我が邦ニテモ眼科ノ鼻・口・齒科ヨリ別レテ、獨立ノ一科トナリ、眼科専門ノ醫家ヲ出スニ至リシハ南北朝ノ頃ナリ。黒川道祐ノ本朝醫考ニ『本朝目醫、其家傳者多、特推ニ馬島、良峰ニ以爲レ勝、馬島者、尾州、馬島藏南坊僧、遇ニ異人ニ傳ニ奇方ニ、四方患レ眼者、悉到ニ彼寺ニ、求ニ療養ニ、今直呼稱ニ馬島ニ、城州、良峯成就坊僧、亦如レ此、其外佐々木、青木、須磨、穗積、等作ニ一家ニ者、不レ爲レ不レ多矣』トアリ。ソノ目醫ト言フハ眼科醫家ノ義ニシテ、藏南坊ノ僧異人ニ遇フテ寄方ヲ傳ヘタリトアルハ、馬島藏南坊中興ノ開山、清眼僧都ナリ。清眼僧都ハ馬島眼科ノ初代ニシテ吉野朝正平十二年ニ藏南坊ヲ再興シ、天授五年ニ歿シタレバ、ソノ所謂馬島流眼科ヲ興セシハ吉野朝時代ノ中葉ナリ。コレヲ我が邦眼科専門醫家ノ嚆矢トス。是ヨリ先キ鎌倉時代土佐光長ガ書キタル奇疾草子ニ、鍼ヲ用ヒテ眼ヲ療スルノ圖アリ。ソノ詞書(卜部兼好之ヲ筆セリト言ヒ傳フ)ニ『あれは、なにもものぞといへば我は目の病をつくらふくすしなりといふ、云々』トアリ、『目の病をつくらふくすし』トハ眼病ヲ療スル醫師ノ義ニシテ、眼科醫家タルベシ。故ニ南北朝以前、眼科専門ノ醫家ナシトハ言フベカラザルモ、尠ナクトモ眼科専門ヲ以テ名アリシモノハ、馬島清眼僧都以前ニハ一人モ無カリキ。

清眼大僧都ハ尾張國海東郡馬島藏南坊ノ僧ナリ。初メ桓武天皇ノ延暦二十一年、聖圓上人靈場ヲ同地ニ草創シ、之ヲ醫王山藥師寺ト稱ス。ソノ中興ノ開山ニ清眼大僧都ト言フモノアリ、夢ニ一異人ニ遇フテ一奇書ヲ獲タリ。披キ見レバ眼科ノ方書ナリ、之ヲ試ムルニ應驗神ノ如シ。眼ヲ病ムモノ四方ヨリ來リ集マリテ馬島眼科ノ名、遂ニ海内ニ普ネシ。藥師寺二十八坊アリ、藏南坊ハソノ首座ナリ、清眼大僧都ハコレニ住シ、天授五年三月十九日病ヲ以テ歿ス、藏南坊後チ明眼院ト改ム。(馬島明眼院略傳^⑦・馬島明眼院來歴^⑦・日本醫譜)

馬島ノ眼科ハ固ヨリ支那眼科ヲ標準トセルモノナレドモ、ソノ術ハ秘傳トシ、人ヨリ人ニ遞傳セルノミニシテ、別ニ專書ノ著述アラズ。ソノ秘傳書ト稱スルモノモ、記載甚ダ蕪雜ニシテ、之ヲ當時ノ著述、福田方・續添鴻寶秘要鈔・五體身分集等、諸書ノ眼病門ニ比較スルニ、精粗同日ノ談ニアラズ。シカレドモ平安朝ノ醫心方ヨリ鎌倉時代ノ頓醫抄・萬安方ヲ經テ、コノ期ノ福田方等ノ諸書ガ、唐・宋眼科ノ方書ヲ直譯セシニ異ナリテ、馬島ノ眼科ガ自家ノ實驗ニ基ヅキテ多少取捨セルトコアルハ、斯學ノ進歩ヲ示スモノト言ハザルベカラズ。

平安朝及ビ鎌倉時代ニ於ケル醫學ヲ論ズルノ條下ニ於テ、既ニ支那眼科ノ事ヲ略述シタルコトアレドモ、ココニコノ期以後ノ眼科ノ進歩ヲ叙セントスルニ方リテ、更ニ稍々詳カニ支那眼科ノ大體ヲ説明スルノ要アリ。

支那眼科ノ神髓タルモノハ五輪八廓ノ説ナリ、ソノ説ニ曰ク『目ハ五臟ノ精華ヲ聚ムルモノニシテ、一身ノ要係タリ、外五輪ヲ別チテ内五臟ニ應ズ、八廓ハ名アリテ位ナシ、八卦ニ象リテ五輪ニ配スルノミ。實ニコレ眼ノ根本タリ。又血ニ藉テ之ガ胞絡ヲナス、五臟和セザルコトアレバ、眼目上ボリ攻メ、ソノ屬スルコロニ從ヒテ症ヲ見ハス、故ニ眼ヲ治センニハ先ヅ五臟ノ虛實ヲ察シ、次ニ諸病ノ根源ヲ辨へ、輪廓ノ受病ヲ驗シテ、而シテ緩ニ藥ヲ用フベキナリ。』

(五輪) 肝ハ木ニ屬シテ、風輪ト言ヒ、眼ニアリテハ烏睛(角膜)タリ。心ハ火ニ屬シ、血輪ト言ヒ、眼ニアリテハ二眇タリ、脾ハ土ニ屬シ、肉輪ト言ヒ、眼ニアリテハ上下胞瞼タリ。肺ハ金ニ屬シテ、氣輪ト言ヒ、眼ニアリテハ白仁(鞏膜)タリ。腎ハ水ニ屬シテ、水輪ト言ヒ、眼ニアリテハ瞳人タリ。

(八廓) 太陽ノ府ヲ天廓ト名ヅク、乾ナリ、脾胃ノ府ヲ地廓ト名ヅク、坤ナリ。命門ノ府ヲ火廓ト名ヅク、離ナリ。腎ノ府ヲ水廓ト名ヅク、坎ナリ。肝ノ府ヲ風廓ト名ヅク、巽ナリ。小腸ノ府ヲ雷廓ト名ヅク、震ナリ。膽ノ府ヲ山廓ト名ヅク、艮ナリ。膀胱ノ府ヲ澤廓ト名ヅク兌ナリ。

コノ如ク、五行ヲ以テ五臟ニ當テ、五輪ニ配シ。五臟ト眼トノ包絡干係ヲ定メ、五臟不和アレバ相當ノ眼ノ區部ニソノ證候ヲ露呈スト言フナリ。例之血輪ノ病(即チ内外皆ノ病)ハ心臟ノ不和ニ因リ、風輪ノ病(即チ角膜ノ病)ハ脾臟ノ不和ニ因リ、水輪ノ病(即チ瞳孔部ノ病)ハ腎臟ノ不和ニ因ルト言フガ如シ。又眼病生成ノ理ヲ論ズルニハ、五行生尅(五行生尅トハ金生水、水生木、木生火、火生土。金尅木、木尅土、土尅水、水尅火、火尅金ヲ言フ)ノ説ヲ用ヒタリ。例之腎ハ水ニ屬ス、水尅火ノ理ニヨリテ、腎旺ナルトキハ則チ心(火ニ屬ス)衰フ、心衰フルトキハ眼ノ内外皆ニソノ證候ヲ呈ス、金生水ノ理ニヨリ、腎旺ナルトキハ肺(金ニ屬ス)虛ス、肺虛スルトキハ、則チ眼ノ鞏膜(白仁)ニソノ證候ヲ呈スト説クガ如シ。

支那眼科ハコノ如ク、眼病生成ノ理由ヲ説キ、眼病ハコレヲ内外七十二證ニ別チ、中ニ内障二十四、外障四十八ヲ數ヘタリ。

支那眼科ノ治方ハ藥用・點眼・蒸洗・敷貼ト手術ナリ。

藥用ハ支那醫方ノ主トスルコロニシテ、ソノ藥品枚擧スルニ暇アラズ、獨リ眼病ニ對シテ効力アリト信ジテ用ヒラレタル藥品ヲ擧グレバ、即チ淚ヲ止ムルノ藥トシテハ、龍胆草・木賊・蒼朮・香附・枯礬・白附子・食鹽ノ類。翳ヲ去ルノ藥トシテハ木賊・蒺藜・石決明・熟地黃・夜明砂ノ類。膜ヲ去ルノ藥トシテハ白蒺藜・烏賊骨ノ類。眼痛ヲ止ムルノ藥トシテハ乳香・沒藥ノ類ヲ用ヒタリ。

外用(點眼・蒸洗・敷貼)ニ供セラレタル藥品ノ主ナルモノハ、左ノ如トシ。

珍珠、琥珀、瑪瑙、珊瑚、石燕、石蟹、膽礬、黃丹、銅綠、熊胆、牛黃、白丁香、冰片、雄黃(去翳)、硼砂、薄荷、龍腦(退火)、乳香、沒藥、白蜜(鎮痛)、明礬、枯礬、輕粉、冰片(除風止淚)

手術トシテ擧グベキハ、烙法・夾法・金針法ナリ。

馬島ノ眼科ハ、前ニモ言ヒシ如ク、支那眼科ヲ標準トセシモノナレバ、五輪八廓ノ説ハ實ニソノ大本タリ、而カモソノ眼證ヲ論ズルヤ、『眼症ヲ別チテ七十二證トスルノ説ハ必ズシモ拘泥スベカラズ、十二證ノ區別ヲナセバ足ル、膜目・血目・肉目・外障・内障・星目・打目・腫物・痘疹・倒睫・風眼ノ證之ナリ』ト言ヒ、自家ノ實驗ニ基ヅキテ支那ノ醫說ヲ修正セルモノアルヲ認ム。是レ當時漢學ノ衰頽セルニ際シ、幸ニモ、廣ク支那ノ載籍ヲ探リテ、訓詁コレ事トスル弊ニ陥ラズ、親試自得ニヨリテソノ術ヲ恢弘セントスルニ務メタルニ因ルナラン。

馬島眼科ニハ成書ナク僅カニ秘傳口授ノ小冊子ニシテ、永祿・天正年間ノ跋文アルモノアリテ、今日ニ傳ハレリト雖モ、ソノ記述ハ互ニ相固ジカラズ。故ニコノ斷篇零冊ニ依リテ、馬島眼科ノ真相ヲ判斷スルコトヲ得ズト雖モ、ソノ大要ハコレニヨリテ推知セラルベシ。即チ馬島眼科ニアリテ、最モ重ク見シハ内障ニシテ、コレヲ別チテ血内障・石内障・黃内障・白内障・青内障・赤内障・黒内障ノ七種トナシタリ、而シテソノ黒ト言ヒ、青ト言ヒ、黃ト言ヒ、赤ト言ヒ、白ト言フハ、皆瞳子ノ色ヲ見テ之ヲ名ヅケタルニ似タリ。ソノ所謂内障ノ内ニハ今日所謂白内障カタラクトノ他ニ硝子體・網膜等ノ病ヲモ含ミ、膜目ニハ繩翳膜ハイマケ・菊膜キクマケ・ササ膜フヂ・藤膜等ノ種類アリ。コレ結膜及ビ角膜上ニ於ケル充血・新生血管等ノ状態ニ依リ、形容スルニ簾・繩翳等ヲ以テシテ、之ヲ區別セシナリ。血内障ハ瞳孔内出血ニシテ、石内障ハ眼球ノ緊張増加シ石ノ如クナルニヨリテ名ヅケシモノナラン(綠内障カ)。星目ハ「フリクテン」ヲ言フカ。血目ハ主ニ結膜炎ヲ指シ、打目・ツキ目ハ眼ノ外傷ヲ言フ。肉目ハ努肉、即チ翼狀贅片ヲ指スモノニシテ、倒睫ハ睫毛亂生、痘疹ハ麻疹・瘡痘ニ因スル眼病、腫物ハ新生物ヲ言フ。風眼ハ病源候論ニモソノ名出デタリ。膿漏目ト稱スルモノモ同一種ニテ、主ニ膿漏性結膜炎ヲ指スニ以タリ。又別ニ鳥目(夜盲)・月輪(前房蓄膿カ)ノ二症ヲ擧ゲタルモノナリ。凡ソコレ等ノ諸症中ニテソノ内障ニ屬スルモノヲ除ケバ、ソノ他ハ悉ク外障ナリ。馬島眼科ガ用ヒタル藥方ハ大要左ノ如シ。

眞珠散 (龍腦、眞珠、辰砂、牡蠣、石膏、焰硝、青腦、明礬〔礪砂〕麝香、甘水石、爐甘石 右十二味)

撥雲酸 (當歸、芍藥、柴胡、茯苓、川芎、甘草〔我朮、木香、丁子〕 右七味)

四物湯 (當歸、川芎、地黃、芍藥 右四味)

洗藥 辰砂、白礬 右水ニ溶キテ之ヲ以テ眼ヲ洗フナリ

爐甘石、黃連、石膏、白礬、丹礬 右布片ニ包ミ水ニ入レ振出シテ燂法トス

芹、丁子 煎ジテ洗藥トス

掛藥 牡蠣霜 右一味

爐甘石、滑石、貝子 右三味

蒸藥 黃連、黃芩、大黃、菊花、防風、各等分 樞葉十二枚 右煎ジテ鍋ニ入レ穴ヲニツアケテ、一二管ヲ入レ目ニアテ穴ヨリ吹クナリ

指藥 黃連 水ニ入レテ能ク煎ジ(水五升ホドヲ香箱一ツ程ニ煎ジ詰メテ) 龍腦ヲ加ヘテ指藥トス

コノ如ク、藥物ノ内服(充血性ノ眼病ニハ下劑ヲ處セリ)、藥汁ヲ以テ洗滌スルコト(蒸湯)、軟膏ヲ敷貼シ、粉末ヲ散布スルコト等ハ馬島眼科ノ治則トスルココロニシテ、ソノ方ハ集驗方・和劑局方等ニ出ヅレドモ、應用ノ方法ニ於テ多少ノ修正ヲ加ヘタルトコロアリ。

馬島眼科ハ藥方ノ他ニ、一、二ノ手術ヲ施用シタリ。(1) アツ金ヲアツルコト (2) 針ヲタツルコト (3) ヒキ刀ヲスルコト (4) ヌル金ヲアツルコト、コレナリ。ソノアツ金(溫金・熱金)ヲアツルトハ烙法ヲ施スヲ言フ。針ヲタツルトハ針ヲ角膜ニ刺スノ謂ニシテコノ術ハソコヒ(白内障)ニ用ヒラレタリ(主ニ撥下法ヲ行ヒタルガ如シ)。ヒキ刀ヲスルトハ亂刺ヲ施スノ謂ニシテ、ヌル金ヲアツルトハ微溫ノ烙法ナリ。⑤

白内障ニ針ヲ立ツルコトハ、馬島眼科ノ手術ニ於テ主要トスルココロニシテ、ソノ法ハ銀海精微(唐、孫思邈撰)ト傳フレドモ、今日行ハルルモノハ宋以後ノ書タルヤ疑ナシ)原機啓微(明、洪武三年撰)等、明時代ノ醫書ニ出ヅ。而カモコノ如キ手術法ノ我ガ邦ニ傳ハリシハコレヨリ三四百年前ニアリ、平安朝ノ中頃ニ著ハサレタル醫

心方ニ眼論ヲ引イテ清盲ニ金鍼ヲ用ヒテ之ヲ決スベキコトヲ言ヘリ。ソノ説ニ曰ク『眼論云、夫人苦レ眼、無レ所ニ因起^一、忽然幕々不レ痛、不レ痒、漸々不レ明、經^二歷年歲^一、遂致^三失明^一、今觀^二容狀眼形^一、不レ異、唯正當^二眼中央小瞳子裏^一、乃有^三鄣々曖々^一、作^二青白色^一、雖^レ不^レ別^二人物要^一、猶見^三三光^一、知^レ晝知^レ夜、如^レ此者、名曰^二清盲^一、此宜^下用^二金錐^一決^上之、一針便豁然、若^二雲開見^一日也、針竟便服^二大黃丸^一、不^レ宜^二大泄^一、此疾皆從^二虛熱兼風^一所作也』又曰ク『眼論云、若^二已生^一醫者、當^レ鍼^レ之、其中有^二赤脈處^一、當^下以^レ鈎鈎^二甘刀^一割斷^上也、日々針鎌、傳^レ散、若^レ鈎割、必當^レ就^二白中^一、勿^レ就^二黑中^一』案ズルニ、斯書ニ眼論ト言フハ龍樹眼論ナラン。龍樹菩薩撰^レブトコロノ大智度論中ニ五種ノ眼ヲ辨ズルノ説アリ、世人依リテ龍樹菩薩ノ能ク眼疾ヲ療スルコトヲ傳フ。故ニ後人假托シテ、ソノ書ヲ神ニスルモノカ^⑨。鍼鎌ノ術ノ果シテ龍樹ニ出ヅルヤ否ヤハ更ニ精細ノ研究ヲナスニアラザレバ、之ヲ斷言スルコトヲ得ズト雖モ、ソノ術ノ支那、隋・唐ノ醫書ニ見エザルヲ以テ考フレバ、ソノ印度ヨリ支那ニ傳ハリタルコトヲ臆測スルモ大誤謬ニハアラザルベシ。

兒科^⑩

有隣ノ福田方ニハ、小兒病名ヲ擧ゲテ、回氣（小兒初メテ生レテ、忽チ氣絶チ、啼クコト能ハズ）、臍風（小兒初生一七日忽チ臍風撮口ヲ患フレバ百ニ一モ治スルコトナシ）、夜啼、重舌、變蒸（小兒生レテ三十二日毎ニ一變ス、再變ヲ一蒸トス。變蒸トハソノ血脈ヲ榮ヤカシ、ソノ五臟ヲ改ムルナリ。變トハ上氣。蒸トハ體熱ナリ。輕キモノハ體熱ニシテ微驚シ、重キハ不食腸胃不和吐乳ス）、客忤、積熱、驚風、解顛、魅病（一名繼病）、疳病、不行ノ十^{オヒナヤム}二症トナシ、コノ諸症ハ皆小兒ノ病ニシテ、大人ニ無シト説キ、千金方・聖惠方・和劑局方等ノ諸書ヲ引キテ、ソノ治方ヲ説キタレドモ、コレヲ頓醫抄・萬安方等、諸書ニ擧グルトコロニ比スルニ、別ニ斬新ノ方ヲ加ヘタルモノナシ。

中川子公ノ捧心方、月湖ノ全九集ニモ小兒病門アレドモ、別ニ新方ヲ見ズ。坂淨運ノ續添鴻寶秘要鈔ニハ小兒噤風・腫滿・變蒸・解顛・行遲・龜胸・龜背・手拳不展・足拳不展・髮不生・諸瘡・脫肛・痢疾・吐瀉・吐乳・瘡毒・卒暴・疱瘡・癩疹・驚風・諸疳・夜啼・蟲積聚・傷寒・諸熱・傷風・腹痛・痰嗽等ノ病門ヲ別チ、ソノ論説ニ於テハ新シキコトナシト雖モ、ソノ藥方ヲ張仲景ノ傷寒論ニ取リシハ、特ニ之ヲ擧グルノ價値アリ。

疫病

室町幕府ノ事跡ハ湮晦シテ傳ハラザルコト多ク、疫病ノ記録ノ如キ殊ニ不備ヲ免レズ。續史愚抄^⑪・後鑑^⑫等アリト雖モ、後世ノ追輯ニ係リテ、遺漏甚ダ尠カラズ、故ニ疫病ニ就キテ、ココニ記載スルコトハ、唯ダ大略ニ止マルノミ。

痘瘡 皇年代私記、北朝康安元年（南朝正平十六年）辛丑三月二十九日改元、依^二疾疫、疱瘡、天災、兵革等^一也。文中三年、自^二正月^一至^二三月^一、疱瘡流行（正月十八日、新院御惱爲^二御疱瘡^一由、醫師和氣廣成朝臣、定申。二十六日、新院御惱増氣、施藥院使篤長朝臣、以^二柚針^一、奉^レ破^レ痘間、内攻云、後愚昧記）。花營三代記應永三十一年、一月十七日、御弓始延引、依^二御痘瘡^一也（コノ年大疫病アリシコトハ年代記殘篇ニ見ユ）。立川寺年代記、享徳元年、壬申、コノ年京洛小兒イモヤミシテ、多死、同北陸道、癸酉翌年マデ小兒イモヤミシテ多死。皇年代私記、享

德三年、天下疱瘡流行。妙法寺記、大永二年、癸未、コノ歳少童痘^モヲヤム。天文六年、コノ歳童子痘ヲ致シ候事限ナシ。天文十九年、是歳少童トモ疱ヲヤミ候而皆々死コト不^レ及^レ言、吉田斗ニテ五十人許死申候、餘リノコトニ書付申候トアリ。疱瘡ヲモガサト名ヅケシハ昔時ヨリノコトナレドモ、コノ期ニ至リテハイモヤミ又ハ單ニモト名ヅケタリ。(奈良朝ノ醫學ノ章第三九頁以下『疫病』ノ項ヲ参照スベシ)

麻疹 年代記殘篇、嘉吉元年、天下麻疹流行、筒井家記、文明三年二月ヨリ赤疹多クハヤリ人多ク死ス。(親長記ニ文明三年七月、天皇患^レ痘トアリ、コノ年ノ疫ハ或ハ痘瘡ナリシカ、又ハ痘瘡ト麻疹トヲ混ゼシカ)本朝年鑑、永正三年麻疹流行、妙法寺記、永正十年癸酉コノ年麻疹、世間ニ流行ス、大半ニ過ギタリ。大永二年、コノ年少童痘ヲヤム、又イナスリヲヤム、大概ハツル也ト見ユ。コレヨリ以前ノ文書ニハ麻子瘡・赤斑瘡・赤疱瘡・赤モガサ・稻目瘡ノ稱呼ヲ用ヒシガ、コノ時始メテ麻疹ト書ス、又イナスリノ稱アリ。イナスリハ稻摩^{イナスリ}ノ義ナラン、麻疹ニ罹ルトキハ喉中稻芒ニテ摩ラルルガ如キ感アルニヨリテ名ヅケシモノカ。^①寶石類書、天文四年、ハシカヲ勞ヒ御藥進上、ト見ユ。ハシカノ稱ハ既ニ頓醫抄ニ出デタリ。蓋シハシカハ芒ナリ、喉ニ芒^{ハシカ}ノ立タルガ如キ感アルニヨリテ言フ。^②イナスリトソノ義ヲ同ジクスルモノカ。

咳病 『武家年代記、正平二十年、天下大咳病、南方紀傳、應永十三年、秋八月大風、咳病・妙法寺記・天文四年、難義ナル咳病ハヤリテ皆死申候、雍州府志、弘治二年、九月九日禳^ニ疫疾^一、先^レ是、輦下小兒患^ニ喉逆^一、死亡者多』咳病ノコトハ前記平安朝ノ醫學ノ章、第一〇八頁以下『疫病』ノ項ニ論述センガ、ココニ所謂小兒咳逆ハ恐クハ百日咳ヲ指スモノニシテ、大人咳嗽ト相同ジカラズ^①。

三日病 『年代記殘篇、應永十五年六月、諸國一同三日病、薩戒記、應永三十五年、四月十八日、頃天下疾疫、世俗稱三日病^一、凡無^ニ遺漏^一、古來未曾有云、薩涼軒日錄、寛正四年七月、三日病流行。』鎌倉時代ヨリ以来三日病ノ流行、頻回アリ、ソノ病性ハ詳ナラスト雖モ、三日麻疹^{ハシカ}、即チ風疹ヲ指シテ言フモノカ。^{ルベブラ}

口痺 妙法寺記、永正八年、コノ年正月、浮世ニ口痺流行、人民死コト無^レ限、然間皮口痺ノ鳥ヲ作り、送ル、一日病デ頓死ス、ト見ユ。口痺ハ喉痺(和名古比^{コヒ})ナラン、即チ扁桃腺炎ヲ指シテ言フナリ。

左ニ園太曆・皇年代記・南方紀傳・親長記・妙法寺記・年代記殘篇等ノ諸書ニ依リ、疫疾ノ流行年紀ヲ掲グ。
正平六年、疫疾流行○十五年、旱飢疫疾流行○二十年疫疾流行○二十一年六月京都飢疫、死者盈^レ街
天授五年、疾疫

弘和三年五月洛中疫病流行

元中四年、疫疾流行○五年疫疾○八年、諸國疫厲、人多死

應永十七年、天下大疫疾○二十八年、大飢饉、大疫疾、人種多死亡、洛中屍體踏行、以^レ車死體運、數千萬不^レ知

○三十一年、大疫病大飢饉、人多死亡、失^レ家失^レ村

永享六年、疫癘響流行、死亡多○十年、飢饉疫癘大行

文安五年、疫疾、飢饉

寶徳元年、京都疫癘流行、人多死○二年、大疫癘、京都一日千人死○三年、疫疾流行
寛正二年、天下疫癘、萬民死、満道路^一

文明七年、疫疾流行○十三年、疫病流行、病死人多○十四年、疫病大流行○十五年、疫病大流行○十八年、疫症
流行、千死一生

長享元年、疫病流行○三年、京都及諸國疫疾流行、人多死

延徳元年、山陰、山陽諸國、甲斐國疫

明應元年、京都及諸國疫○八年、諸國疫癘流行○九年、天下疫癘

享祿三年、疫疾流行

天文三年、諸國疫癘、死亡無^レ算○六年、疫疾流行○九年、京都及諸國、疫疾大行

永祿二年、疫疾流行、人多ク死ス、酉ノ年（永祿四年）マデ三年間、疫病流行、村郷アキルコト限リナシ

・^⑩ 黴毒ノ我が邦ニ現ハレタルハ、コノ期ノ後期ニ在リ。月海録ニ曰ク『永正九年、壬申、人民多有^レ瘡、似^二浸淫瘡^一、是膿疱、鰓花瘡之類、稀所^レ見也、治^レ之以^二浸淫瘡之藥^一、云々、謂^二之唐瘡、琉球瘡^一』永正九年ハ明ノ武宗帝、正徳七年ニシテ西曆一千五百十二年ニ當ル、歐羅巴ニ黴毒ノ初メテ顯ハレシヨリ十五六年、支那ニ該病ノ發セシヨリ數年ノ後ナリ。妙法寺記ニ曰ク『永正十年、此年天下ニタウモト云フ大ナル瘡出^レテ平愈スルコト良久、ソノ形譬ヘバ、癩人ノ如シ、食ハ達者ナル人ノ様ニス、ムナリ。』案ズルニコノ書中、他ノ條ニ於テ痘ニモノ訓ヲ附セルヨリ察スレバ、モハ瘡瘡ヲ指スモノニテ、タウハ唐ナラン、即チコノ書ニ言フトコロノタウモハ唐瘡瘡ニシテ月海録ニ言フトコロノ唐瘡ノ義ナラン、ソノ症狀ヨリ推セバ、黴毒性ノ發疹ト認メラルベキモノアリ。而シテ月海録ハ竹田秀慶ノ著ストコロニシテ（秀慶ハ享祿元年、年七十九歳ニシテ死シタレバ、永正九年ハソノ齡六十三歳ノ時ナリ）妙法寺記ト同ジク、當時ノ人ノ手ニ成リタル記録ナレバ、所謂唐瘡ガ始メテコノ頃ニ起リシコトハ、加々信ゼラルベシ、コレ實ニ我が邦ニ黴毒ノ現ハレシ始ナリ。思フニ當時支那人若クハ琉球人ノコノ新病ヲ我が邦人ニ傳ヘシニヨリ之ヲ唐瘡、若クハ琉球瘡ト稱セシモノニシテ、歐羅巴ニアリテ始メテコノ病ノ現ハレシ時、コレニソノ本場ト認ムベキ國名ヲ冠セシト、ソノ事情相似タルモノアリ。

西曆十五世紀ノ末ニ、歐羅巴ノ西南部ニ一種ノ花柳病アリテ現ハレタリ。當時ノ醫俗共ニ之ヲ前代未聞ノモノトナシ、初メハソノ本場ト認ムベキ國名ヲ冠シテ *Morbis gallicus*（ガリア病ガリアハ今ノ佛國及ビ白耳義地方ナリ）*Morbis neapolitanus*（ネアペル病）ナドト唱ヘシガ、後ニハソノ發病ノ原因ニヨリ黴毒（*Lues venerea* 或ハ *Syphilis*）ト稱スルニ至レリ。サテコノ病ノ初メテ歐羅巴ノ一局部ニ現ハルルヤ、破竹ノ勢ヲ以テ四方ニ蔓延

シ、瞬ク間ニ歐洲全土ヲ席卷セシカバ、世人ノ驚愕タ^ニナラズ。或ハ以爲ラク、コレ突如トシテコノ時ニ現出セ^ル斬新ノ疾病ナリ。或ハ言フ、黴毒ハ十五世紀ノ末ニ歐洲ニ現ハレシガ、ソハ他ノ疾患ヨリ特殊ノ變態ヲナシテ發生セルモノナリト。或ハ言フ、黴毒ハ十五世紀ノ末マデハ歐洲人ノ知ラザリシモノナルガ、コノ頃ニ地球ノ他部ヨリ歐洲ニ輸入セルナリト。コノ説ヲナスモノノ中ニハ亞米利加ヲ以テ黴毒ノ本場トナスモノアリ。或ハ阿弗利加ノ西海岸地方ヲ以テ黴毒ノ發生地ト認ムルモノアリ。或ハ言フ、黴毒ハ古ヨリ歐洲ニ存セリ、タ^ニ外界ノ事情ニヨリテ十五世紀ノ頃ニソノ症候ノ増劇シテ特殊ノ病型ヲナセシニヨリ、醫家ノ之ヲ認メテ特殊ノ病トナセシマデナリト。黴毒ノ起原ニ就テハ歐洲醫家ノ間ニモ議論未ダ一決セズ、西曆十五世紀以前ニ黴毒ノ證ト認ムベキモノアルヤ否ヤハ、醫史學上興味アル問題トシテ、今日モ尙ホ盛ニ諸家ノ研究スルコトコトナリ。^⑪

支那ノ醫籍ノ中ニ、黴毒ノ起原ヲ記スルモノヲ見ルニ

續醫說（兪辨著）卷十、蕈癬ノ條ニ曰ク『弘治末年、民間患_二惡瘡_一、自_二廣東人_一始、吳人不_レ識、呼爲_二廣瘡_一、又以_二其形似_一、謂_二之楊梅瘡_一、若病人血虛者、服_二輕粉重劑_一、致_二生結毒鼻爛足穿_一、遂成_二痼疾_一、云々。』本草綱目（李時珍著）土茯苓ノ條ニ曰ク『近時弘治正德間、因_二楊梅瘡盛行_一、亟用_二輕粉藥_一、取_レ效、云々』同書又曰ク『近時起_二于嶺表_一、傳_二及四方_一、蓋嶺表、風土卑濕。嵐瘴薰蒸、飲_二啖辛熱_一、男女淫猥、濕熱之邪、積蓄既深、發爲_二毒瘡_一、遂致_二互相傳染_一、自南而北、遍_二及海宇_一、云々。』石山醫按ニ曰ク『近有_二好淫人_一、多病_二楊梅瘡_一、藥_二用輕粉_一、愈而復發、云々』（按ズルニ、コノ書ハ汪機ノ醫按ヲ録セシモノニシテ、汪機ハ明ノ代ノ季ノ人ナリ）。黴瘡秘錄（陳司成著）ニ曰ク『究_二其病原_一、始_二于午會之末_一、起_レ自_二嶺南_一、至_レ蔓_二延通國_一云々』

コノ如ク、黴毒ハ支那ニテハ弘治ノ末カ、正徳ノ初ニ、ソノ南部ニ始メテ現ハレタル新病ナリ。弘治ハ明ノ孝宗ノ代（西曆一四八八年乃至一五〇五年）、正徳ハ武宗ノ代（西曆一五〇六年乃至一五二一年）ニテ、之ヲ歐羅巴ニ於ケル黴毒ノ發現ニ比スルニ、時代ノ相距ルコト甚ダ遠カラザルハ頗ブル奇トスベシ。蓋シ歐洲ニテ佛蘭西ニ黴毒ノ始メテ發現セシハ、千四百九十五年、若クハ、千四百九十六年ニシテ、同ジ年ノ内ニ隣接各邦ニ波及シ、當時交通ノ比較的不便ナリシトコロノ露西亞モ一千四百九十九年ニハ、既ニ黴毒ノ侵襲ヲ蒙リタリ。一千四百九十六年ハ明ノ孝宗帝ノ弘治九年弘治ハ十八年ニ終ルニシテ、葡萄牙人が始メテ印度ニ航シ、臥亞_{ゴア}ニ通商セシナリ。コレニ依リテ海路ニ於ケル歐羅巴人ノ交通始マリテ間モナク、而カモ通商港地方ヨリ黴毒ノ始メテ現ハレテ漸次北進セルノ事實ヲ認ムベシ。

コノ時ヨリ以前ノ支那ノ醫書、素問・病源候論・葛氏方・集驗方・范汪方・千金方等、隋・唐以前ノ方書中ニ『陰瘡』『陰蝕瘡』『妬精瘡』等ノ名稱アリ、男女ノ陰部ニ破潰性潰瘍ノ發スルコトハ既ニ古代ニモ注目セラレタルコトヲ知ル、然レドモ是皆自發（交接等ニ由ラザルヲ言フ）ノ病ニシテ、今日ノ意義ニ於ケル黴毒ト同一ノモノニハアラザルナリ。香川修徳ハ『此瘡稀ニ於古時_一、而盛ニ於後世_一、稽_二考古稱_一、唯有_二陰瘡一名可_レ據、然_レ不可_レ的_一下知其瘡與_二今所_レ患黴瘡_一全同否乎。』^⑤ト曰ヒテ、古時ノ所謂陰瘡ト今世ノ黴毒ト同一ノモノニアラザルヲ説キ。又『下疳者、謂_二下部陰莖生_レ瘡疳蝕_一也、云云、古稱_二陰瘡_一者、大爲_レ近焉、而古今人異、風氣亦隨而不_レ同、故所_レ患較致_二不一_一耶、云云、但古所謂陰瘡、多屬_二婦女_一、在_二今日_一、則男患至多、而女病甚稀、何古之婦人、染者多、而今之女子、患者少耶、尤可_レ怪也、此所_レ以古所謂陰瘡與_二今所_レ有疳瘡_一、同異多少、難_二決爲_レ一非_レ上無_レ可疑也』^⑥ト曰ヒテ、古ノ陰瘡ト、今ノ下疳ト相似テ非ナルモノアルヲ説ケリ。コノ説ソノ當ヲ得タリト言フベシ。

永正年間、黴毒ノ始メテ我が邦ニ顯ハレシトキ醫家ハ楊梅瘡ノ漢名ヲ以テ之ヲ呼ビタルコトハ永正九年ヨリ二十年ノ後、享祿三年ニ著ハサレタル周監方ニ『楊梅瘡』ノ目ヲ掲ゲ、藥方ヲ擧ゲタルニテ之ヲ證スベシ。然レドモ俗人ノ間ニハ唐瘡ノ稱呼專バラ行ハレ、醫書ノ中ニモ之ヲ採用セルモノアリ。天正二年刊、啓迪集『楊梅瘡、或名_二綿花_一、近年以來、極多、至_レ今未_レ息、世俗多用_二厲風之藥_一、治_レ之、但庸醫務_二速效_一、輕粉丹麝等、毒劑、云云、』天正元年著、濟民記、卷下『楊梅瘡、又天庖瘡ト云。又綿花瘡トモイフ、庸醫虛實ヲモ辨ゼズ、ミダリニ輕粉雄黃ノ類ヲ用ユ、云々。』天正九年著、外療新明集『楊梅瘡ト名付タル物ハ、世俗ニ唐瘡ト云フ物ナリ、又天庖瘡ト名付

タル物アリ、或ハ綿花瘡ト名付タル物アリ』慶長七年抄寫、翠竹翁答問書『源介入道、去年二月の頃より唐瘡殊の

外出でて、山歸來も十四五斤も含み申候云々。』慶長十八年刊、速效方『楊梅瘡、唐瘡、色々ノ藥ニテ效ナク、骨痛ミ、筋攣リナヘスクミ云々。』ト見ユ、以テ之ヲ證スルニ餘アルベシ。

嘗テ一二ノ學者(シヨイベ^⑩、足立^⑪)ニヨリテ大同類聚方が引用セラレ、我が邦ニハ上古ヨリ既ニ黴毒ノ存在セルコトガ唱道セラレシコトアリシモ、今日世間ニ傳ハレル大同類聚方ノ僞本ナルコトハ、既ニ諸家ノ定論アリ。コレニ依リテ、ソノ説ヲ立ツルノ誤謬ハ言フマデモナキコトナリ。我が邦古醫書ノ眞本ノ今ニ傳ハレルモノ醫心方アリ、醫略抄アリ、萬安方アリ、頓醫抄アリ。ソノ他數部ノ醫書アレドモソノ中ニハ『陰瘡』『妬精瘡』ノ名目ヲ擧グルノミニシテ、黴毒ノ證ヲ擧グルコトナシ。鎌倉時代、梶原性全ノ頓醫抄ニ『玉莖疫病』『玉門疫病』ノ目アリ、コレ交接ニ因リテ傳染スル陰部ノ潰瘍ヲ言フナルベシ。(奈須柳村曰ク『下疳は昔シマラ疫病と云ふ、疫病は傳染の俗稱なるべし。』^⑫)降テコノ期貞治年間ノ著述、福田方、卷十二『妬精瘡ヲ治スル方。此ノ病ハ男子ハ陰頭節ノ下ニ出デ・婦人ハ玉門ノ中ニアリ・併ビニ疳瘡ニ似テ白穴ヲ作シ食入り大ニ痛ム。』『妬精瘡ハ邏欲ノ人ノ病也、邏欲トハ他人ノ交接シタル女人ヲ犯スニ依リテ媾精相合シテ起ル病也』トアリ。妬精瘡ニ『マラクビヤウ』ノ訓ヲ施シ、且ツソノ不潔ノ交接(他人ノ交接シタル女ヲ犯ス)ニヨリテ、陰部ニ瘡ヲ生ズル事ヲ説キタルヲ知ル。同時代ノ著述、五體身分集ニモ『閨疫病ト云フハ痒クシテ腫レ腐ルナリ。開疫病ト云フハ陰ノ内痒ク發動シテ腫レ塞テ死スルナリ』トアリテ、陰莖疫病及ビ陰門疫病ノ證候ヲ擧グレドモ、ソノ今日所謂硬下疳ナルコトヲ認ムベキ證ハ之アルコトナシ。上記論述スルトコロヲ總括スルニ、醫心方以下今日存スルトコロノ古醫書ニ『陰瘡』ノ目ハ之アレドモ、之ヲ今日ノ黴毒ニ比スベキニアラズ。『玉莖疫病』『玉門疫病』ノ名目、鎌倉時代ノ後期ヨリコノ期ノ間ニ現ハレ、ソノ不潔ノ交接ニヨリテ傳染スル陰部ノ潰瘍タルコトヲ説クニ至リタレドモ、ソノ硬下疳ナルコトヲ認ムベキ證候ハ之アルコトナシ。

醫事制度

鎌倉幕府、室町幕府共ニ職制ヲ定メタレドモ、ソノ醫事ニ關スルモノハ詳ナラズ。當時朝廷ニハ大寶ノ遺制、猶ホ行ハレテ、典藥寮ノ諸官名ハ依然タリシモ、ソノ實ハ時勢ノ一變遷ニ伴ヒテ多少ノ變化ヲイタセリ。

北畠親房が著ハストコロノ職原抄(興國元年成ル)ヲ見ルニ

典藥寮 頭一人、無^ニ權官^一、相當從五位下、醫道極官也、他人不^レ任之○助一人、權助、相當正六位下、同道五位六位共任^レ之也○允(大。少) 同輩門徒可^レ任^レ之歟、他人強不^レ任^レ之也○屬(大。少) ○醫博士、相當正七位下○女醫博士相當正七位下○針博士、相當從七位上、同^レ上○侍醫、相當正六位下、當道重^レ之歟、侍醫、其職此云^ニ半昇殿^一、常候^ニ禁中^一、故稱^ニ侍醫^一也、主上出^ニ御殿上^一之時、侍醫參^ニ小板敷^一、奉^レ見^ニ龍顏^一、故云^ニ半昇殿^一、云云、近代四位五位、任^レ之○權侍醫、同道五位六位、任^レ之歟○醫師根當從七位下

施藥院使 醫道四位以下任^レ之、爲^ニ彼道重職^一也

大寶ノ令ニ見エタル醫生・針生・針師・按摩博士・按摩師・按摩生・咒禁博士・咒禁師・咒禁生・藥園師・藥園生等ノ職名ヲ缺ク。スベテコレ等ノ官制ガ、コノ時以前既ニ廢セラレタリシコトヲ知ルベシ。又施藥院使ノ官ハ大寶令ニハ載セズ、令外ノ官トシ、モト諸大夫コレニ任ゼラレシガ、丹波雅忠コレニ任ゼラレテヨリ以後、當道ノ職トナリ、コノ時ニアリテハ之ヲ以テ醫道ノ重職トシ、名譽ノ醫師ヲ之ニ補スルコトトナレリ。奈須柳村ガ『醫道極

官、他人不レ任レ之とは和・丹の人のみ任ずるをいふ、これ南朝の制なり、和・丹の人、醫局を世々にするは、朱雀・圓融の朝より後の事にて、むかしは家を限るの制なし。』ト言ヘルハ如何アルベキ。醫道極官、他人不レ任レ之ト言フハ醫師ナラザル人ノコレニ任ゼラレザルヲ言フ。醫師ハ敢テ和氣・丹波ノ兩氏ニ限ルニアラス。然レドモ平安朝ノ中頃ヨリ以降、和氣・丹波ノ兩氏ハ累世名家ヲ輩出シ、和氣・丹波兩氏以外ニハ名譽ノ醫師甚ダ尠ナカリシヨリ、コノ醫道ノ極官ハ和氣・丹波ノ兩氏交々コレニ補セラレシナリ。

女醫博士ノ官ハ元明天皇ノ養老六年ニ始メテ置カレ、冷泉天皇ノ康平年中ニ和氣相秀コレニ補セラレシコト和氣氏系圖ニ始メテ見エシヨリ、和氣・丹波ノ兩氏ノコノ官ニ任ゼラレタルコト、系譜及ビ記録ニ見エシガ、女醫博士ハ鎌倉時代ノ末、永仁年間ニ和氣光成・丹波遠長、權女醫博士ハコノ期ノ初、北朝ノ嘉慶年間和氣常成ガ、コレニ補セラレタルヲ以テ最終トシ、爾後ノ記録ニハコノ官名復タ見エズ。而シテ當時關白良基（嘉慶二年歿ス）ガ著ハセル百寮訓要抄ニ『女醫博士、是當道の輩なるべし、女の療養を奉行する職なり』トアルヲ見レバ、南北朝時代ニアリテハ、女醫博士ノ官名アリト雖モ、ソノ實ハ既ニ久シク廢タレタリシコトヲ推知スベシ、女醫博士ガ婦人ノ療養ヲ司ドリシモノニアラザルコトハ、既ニ平安朝ノ醫學ノ章下ニ於テ、コレヲ論述セシガ、鎌倉時代ヨリコノ期ノ初二至ル間、諸家ノ記録ニ、中宮着帶及ビ御産ノ事ヲ記セルモノニ、醫家ノ干與セルハ、典藥頭、若クハ施藥院使ニシテ、女醫博士ニアラザリシコトニテモ、之ヲ證スベシ。

醫書日録^⑩

室町時代撰述ノ醫書ノ目録ヲ左ニ示ス。書目中、余ガ未ダ見ザルトコロノ本及ビ佚存共ニ詳ナラザルモノニハ*符ヲ附シタリ。

(書名)	(撰者)	(撰述年代)	(卷數)	
福田方	僧有隣	貞治年間	一二	
悲田方	僧有隣	貞治年間	一	
五藏次第圖	僧澤庵	應永八年	一	(聿修堂書目)
*瑠璃壺	僧允能	永享三年	一	
捧心方	中川某	寶徳三年	二	
全九集	僧月湖	享徳元年	四	
大徳濟陰方	僧月湖	庚正元年	一	
五躰身分集	僧生西	——	三	
*靈蘭集	細川勝元	——	一〇〇	
靈蘭集治療記	細川勝元	——	一	(流布本ハ眞偽甚ダ疑ハシ)
延壽類要	竹田昭慶	庚正二年	一	(寛政年間刊行)
金創秘傳	——	永正元年	一	
*秘方二十八劑	坂淨快	——	——	(坂氏系譜所レ載)
鴻寶秘要鈔	坂淨秀	——	——	(同前)
*揖仙方	坂淨孝	——	——	(同前)
*直濟方	坂淨喜	——	——	(同前)
*新椅方	坂淨運	——	三一	(同前)

*遇仙方	坂淨運	—————	八	(同前)
續添鴻寶秘要鈔	坂淨運	—————	六	六
增損附益鈔	坂淨見	—————	六	六
*家秘小雙紙	坂淨忠	—————	—	(坂氏系譜所レ載)
*達源方	坂淨秀	—————	—	(同前)
*經驗奇效方	坂淨元	—————	—	(同前)
*亨金方	坂淨友	—————	—	(同前)
*秘傳秘藥諸病治方	宗現	大永四年	—	(聿修堂書目)
傷寒初心抄	竹田定祐	大永五年	—	—
修合三種	竹田定祐	永正十二年	—	—
*醫學講	一栢子	大永五年	—	(聿修堂書目)
*捷術大成印可集	田代三喜	大永五年	—	(同前)
諸藥勢揃	田代三喜	—————	—	—
當流和極集	田代三喜	文龜三年	—	—
直指篇	田代三喜	—————	三	(刊本世ニ傳ハルモ眞偽判ズベカラズ)
*夜談義	田代三喜	—————	—	(聿修堂書目)
藥種穩名	田代三喜	—————	—	—
*醫案口訣	田代三喜	—————	—	(聿修堂書目)
三喜十卷書	田代三喜	弘治二年	八	(同前)
周監方	半井某	享祿三年	—	—
口中秘傳	丹波親康	享祿四年	—	—
*典藥拔書	僧一立	享祿五年	—	(聿修堂書目)
*藥雅	竹田定珪	—————	—	(竹田氏系譜、所レ載)
*慈濟軒方書	僧澄一	—————	六	(聿修堂書目)
藥方聞書	今川左馬介	—————	—	—
新增補遺捧心方	僧潤甫	永祿七年	一三	(寛政年間刊行)
醫學廸蒙	田代道喜	天文元年	三	—
管蠡備急方	度會常光	天文三年	三	—
管蠡草灸診抄	度會常光	天文三年	—	—
天文醫案	三歸廻翁	—————	—	(田代三喜ノ著カ否カ明ナラズ)
補心方	中川子公	天文七年	一〇	—
*精選秘用方	僧源貞	天文十八年	—	(聿修堂書目)
醫學色葉	石心辰	天文廿三年	—	—
永祿投劑錄	曲直瀬道三(?)	—————	—	—
三位法眼家傳秘方	—————	—————	—	—
*鑑効秘要方	僧景贊	永祿三年	四	(同前)
家傳退譽聚驗方	久志本常顯	永祿六年	—	—
雲陣夜話	曲直瀬道三	永祿九年	—	—

松家集要方

金創秘傳 宮木某

*撮要集 南條宗鑑

————— (聿修堂書目)

參考書籍

- ① 歴代名醫傳略 吉田宗恂著 卷下
明醫小史 望月三英著
醫術名流列傳 自卷六至卷十三
- ② 日本文學史 文學博士三上參次、文學士高津鋏三郎共著 卷下
- ③ 太平記 卷二十五
- ④ 金創秘傳 永正元年著
- ⑤ 金創秘傳 宮木某著
- ⑥ 日本眼科史 醫學士小川劍三郎著 (前ニ出ツ)
日本眼科略史 ドクトル富士川游著 (前ニ出ツ)
日本眼科ノ由來 醫學博士河本重次郎著 醫談第五十六號所載
- ⑦ 馬島明眼院略傳 醫學士小川劍三郎著 醫談第五十六號所載
馬島明眼院ノ來歴 馬島順吉述 醫談第五十六號所載
- ⑧ 眼療秘錄 天正十六年抄寫 東月跋
- ⑨ 眼科龍木論
- ⑩ 日本兒科史 河内全節著 (前ニ出ツ)
- ⑪ 斷毒論 橋本伯壽著 (前ニ出ツ)
- ⑫ 疫瘡新論 中島廣足著 文政七年刊行
- ⑬ 梅毒ノ起原考 隆軒學人著 東京醫事雜誌 第八百九十一號所載
Okamura, Zur Geschichte der Syphilis in China und Japan. Monatshefte f. prakt. Dermatologie. 1899.
Suzuki, Die Geschichte der Syphilis in China und Japan. 1903
東亞黴毒ノ起源ニ就テ ドクトル富士川游著 皮膚科及泌尿器科雜誌第二卷所載
- ⑭ Praksch, Geschichte der venerischen Krankheiten. 1895. Iwan Bloch, Der Ursprung der Syphilis. 1901.
- ⑮ 一本堂行餘醫言 香川修德著
- ⑯ B. Scheube, Zur Geschichte der Syphilis. Virchows Archiv. 1883. XCI.
- ⑰ Adachi, Syphilis in der Steinzeit in Japan. Archiv f. Dermatologie. 1903.
石器時代ノ黴毒ニ就テ 醫學士足立文太郎著 東京醫學會雜誌第九卷第一四及一六號
- ⑱ 本朝醫談 奈須柳村著 (前ニ出ツ)
- ⑲ 本朝醫書目錄 (前ニ出ツ)
本朝醫考 卷下
本邦醫家古籍考 中川故著
聿修堂藏書目錄 卷下

竹田氏系譜

- ⑳ (20) 續史愚抄 柳原紀光著
㉑ (21) 後鑑 成島司直著

-
- ① DOI: 10.11501/25444494
② DOI: 10.11501/871964
③ <http://www.kikuchi2.com/sheet/thkm.html>
④ N/A
⑤ N/A
⑥ DOI: 10.11501/836391
⑦ DOI: 10.11501/1498851
⑧ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00001804>
⑨ <https://ctext.org/wiki.pl?if=gb&res=876301>
⑩ DOI: 10.11501/835491
⑪ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00002481>
⑫ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb2000001290>
⑬ N/A
⑭

- [http://google.cat/books?id=bD8JAAAAIAAJ&q=Tripper&dq=editions:OXFORD600005035&lr=&as_brr=0&outp
ut=html_text&source=gbs_word_cloud_r&cad=5](http://google.cat/books?id=bD8JAAAAIAAJ&q=Tripper&dq=editions:OXFORD600005035&lr=&as_brr=0&outp
ut=html_text&source=gbs_word_cloud_r&cad=5)
⑮ <https://dcollections.lib.keio.ac.jp/ja/koisho/f-i-87-1>
⑯ DOI: 10.1007/BF01925824
⑰ https://archive.org/stream/archivfrdermato21gesegoog/archivfrdermato21gesegoog_djvu.txt
⑱ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00000738>
⑲ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00005182>
⑳ DOI: 10.11501/991108
㉑ DOI: 10.11501/772471

第七章 安土・桃山時代ノ醫學

戰國ノ末ニ方リ、織田・豊臣ノ兩氏、相嗣デ興リ、遂ニ天下ヲ統一スルニ至リシ間ヲ安土桃山時代ト稱ス。織田信長ガ足利義昭ヲ奉ジテ京都ニ入り、近畿ヲ征服シ、幕府ヲ開キシハ永祿十一年ニシテ、豊臣秀吉、織田氏ニ代リテ天下ノ權ヲ握リ、征韓ノ役ヲ起セシモ、中途ニ病死シ、ソノ業復タ振ハズ、秀頼ノ代大阪落城シテ豊臣氏遂ニ亡ビシハ元和元年ナリ。永祿十一年ヨリ元和元年ニ至ル、ソノ間僅カニ五十年ニ過ギザレドモ、コノ期ハ我が邦ガ戰國時代ヨリ統一時代ニ移リシ時ニシテ、應仁亂後廢頽セル京都ハ再ビ興隆セラレ、學問モ亦漸ク盛ナラントス。殊ニコノ頃火器ノ始メテ我が邦ニ入り、次デ耶蘇教始メテ我が邦ニ入レルアリ。我が國民ハココニ始メテ西洋ノ文物ニ接セシヨリ、我が邦ノ文化ニモ革新ヲ至シ、從テ我が醫學ノコレガ爲ニ影響ヲ蒙ムリシコトモ亦甚大ナリトス。

金・元醫學ノ輸入

支那ニアリテハ宋ノ神宗ノ時、元豊年間、天下ノ名醫ニ詔シ、各々得効秘方ヲ以テ進メシメ之ヲ太醫局ニ下シテ驗試シ、方ニ依リテ藥ヲ製セシム、後二十餘年徽宗ノ時、大觀年間ニ至リ、陳師文等ニ勅シテ局方書ヲ校訂シテ和劑局方五卷ヲ作ラシム。コノ書一タビ出デテ、天下ノ醫家之ヲ奉ジテ金科玉條トシ、ソノ說ハ宗・元ノ間ニ盛行ハレタリ。我が邦ニアリテモ、鎌倉時代ヨリ室町時代ニ至ルノ間、宋醫學ヲ輸入セル時代ニハ和劑局方ノ說專ラ行ハレタルコトハ、既ニ之ヲ前章ニ述ベタリ。次デ金ノ代ニ至リテ劉元素(字、守眞)アリ、素問玄機原病式ヲ著シ、素問、至眞要論ニ依リテ天地運氣、造化自然ノ理ヲ論ジ、疾病ハ五運六氣ノ化ニ歸スルコトヲ唱道シ、治病ノ要ハ陰陽虛實ヲ別ツニ在リトナシ、宜明論ヲ著シ、運氣ノ理ヲ推シテ以テ傷寒雜病ノ脈證方論ヲ集メ、對病處方ノ法定メ、ソノ證ハ內經諸篇ニ依リ、主治ハ一二仲景ヲ宗トシ、大旨瀉火ヲ主トシ多ク涼劑ヲ用ヒタリ。劉元素ノ後ニ張從正(字、子和)アリ、素問・難經ノ學ヲ修メ、ソノ法ハ劉元素ヲ宗トシ、風・寒・暑・濕・燥・火六門ヲ以テ醫方ノ關鍵トナシ、汗・吐・下ノ三法ヲ立テテ以テ病邪ヲ攻ムルノ法ヲ主張シタリ。^①

局方ノ流行ハ宋ノ代ヨリ元ノ代ニ及ビ翕然トシテ俗ヲ成シ、成法ニ拘泥シテ虛實ヲ察セズ劉・張諸家ニ至リ素問・難經ヲ祖述シテ、濕熱相火(火ニ君火・相火ノ二種アリ、君火ハ人火ニテ、相火ハ天火ナリ、天ハ物ヲ生ズルコトヲ主ドル、故ニ動ヲ恒トス、人ノコノ生ヲ有スルモ動ヲ恒トス、ソノ動ヲ恒トスル所以ハ皆相火ノ所爲ナリ)^②ノ病ヲナスコト多キヲ唱道シテヨリ、攻伐ヲ以テ生氣ヲ戕フモノ尠カラズ、偏門ノ弊實ニ言フニ堪ヘザルモノアリ。金ノ末、元ノ始ノ代ニ至リテ李杲(東垣ト號ス)^③出デテ疾病ハ內外二傷ニ因リテ起ルコトヲ說キ、以テ世人用藥ノ誤ヲ辯ゼリ、ソノ說ニ曰ク『百病ノ源ハ、皆喜怒過度、飲食失節、寒溫不適及ビ勞役ノタメニ傷ブラルルニ由ル、而シテ天ノ邪氣(風・寒・客邪)感ズルトキハ則チ人ノ五臟ヲ害ス、コレ外傷ナリ。水穀ノ寒熱感ズルトキハ、則チ人ノ六腑ヲ害ス。蓋シ飲食胃ニ入りテ穀氣上行ス、穀氣ハ胃氣ニシテ則チ天氣、若クハ陽氣ト曰フモノナリ。既ニ脾胃傷ブラルル事アレバ則チ元氣生セズ、五臟ヲ滋養スルコトナシ、病乃チココニ起ル、コレ内傷ナリ。故ニ外、寒邪ニ傷ブラルルノ症ト、飲食失節・勞役ノ病ト、内飲食ニ傷ブラルルノ症トヲ區別セザルベカラズ。然ルニ世醫、内傷・飲食失節・勞役不足ノ病ヲ得テ、外傷寒邪表實有餘ノ證ト作シ、補瀉其法ヲ誤マルハ歎ズベキコトナリ』^④又ソノ病理ヲ說クヤ、宋儒性理ノ說ニ依據シ『脾ハ陰土ナリ、至陰ノ氣ハ靜ヲ主トシテ動ゼズ、胃ハ陽土ナリ、動ヲ主トシテ息マズ、陽氣地下ニアリテ乃チ能ク萬物ヲ生化ス。故ニ五運上ニアリ、六氣下ニアリ、脾ハ胃ノ稟ヲ受ケ

テ乃チ能ク五穀ヲ薰蒸シ腐熟スルモノナリ。胃ハ十二經ノ源ニシテ水穀ノ海ナリ。平ナルトキハ則チ萬化安ク、病ムトキハ即チ萬化危シ、五藏ノ氣ハ上、九竅ニ通ジ、五藏ノ稟ハ氣ヲ六腑ニ受ケ、六腑ハ氣ヲ胃ニ受ク、故ニ胃既ニ病ヲ受クレバ六腑ノ氣絶チ、六腑ノ氣絶ユレバ皮膚・血脈筋骨ヲ滋養スルコト能ハズ。故ニ胃虚スレバ則チ全身俱ニ病ムナリ』^⑤ト曰ヒ、脾胃ヲ滋補シ、元氣ヲ昇上セシムルヲ以テ治病ノ要訣トシ、漫リニ寒涼峻利ノ劑ヲ用フルノ害ヲ説キ、以テ劉・張二氏末流攻伐ノ弊ヲ論ズルコト極メテ切ナリ。

李杲ノ學ヲ傳フルモノニ羅知悌アリ。羅知悌ノ門人ニ朱震亨アリ(丹溪ト號ス)。劉・張・李諸家ノ學ヲ得テ自ら發明スルトコロアリ、素難ヲ宗トシ、劉・張・李諸家ヲ折衷シ又朱氏性理ノ說ニ參酌シテ、陽有餘、陰不足ノ論ヲ唱ヘ^⑥『陽常有餘、陰常不足、氣常有餘、血常不足』『陽易レ動、除易レ虧、獨重ニ滋陰降火』ト説キ、和平ノ劑ヲ用ヒテ補益スルヲ主トナシ、燥熱ノ劑ヲ用フルヲ非トシ『集前人既効之方、應今人無限之病、何異ニ刻レ舟求レ劍、按レ圖索レ驥』ト言ヒ、張仲景ガ說ノ外傷ニ詳ナルト、李東垣ガ說ノ内傷ニ詳ナルトヲ併セテ治方ノ要訣ヲ示シ、局方發揮ヲ著シテ痛ク局方ノ學ヲ排斥セシヨリ、醫學ハ遂ニ一變スルニイタレリ。

コノ如ク支那ニアリテハ、局方ノ學ハ元ノ代(我ガ鎌倉時代)ニ於テ既ニ頽廢セルニモ拘ラズ、我ガ邦ニアリテハ室町時代ニアリテモ尙ホソノ學風世ニ行ハレ、ソノ問醫家ノ明ニ航シ方書ヲ齎シタルモノモ尠カラザリシニ未ダ李・朱醫學ノ取ルベキヲ知ラザリシハ頗ル奇トスベシ。李・朱ノ學起リテヨリ後一百餘年、室町時代ノ末期ニ及ビテ田代三喜始メテコレヲ唱道シタレドモ三喜、關東ノ僻地ニ居リシガ爲ニ、遂ニソノ學ヲ天下ニ弘ムルニ至ラズ。戰國時代ヨリ統一時代ニ移ルノ時ニ際シ、學問ノ一新ヲ要スルハ自然ノ勢ナリ。コノ時、曲直瀨道三、三喜ノ學ヲ傳ヘテ京師ニ歸リ、輦轂ノ下ニアリテ生徒ヲ集メ、著述ヲ公ニシ、且ツ大ニ治ヲ施シ之ニヨリテ李・朱醫學ハ創メテ我ガ邦ニ興起スルニ至レリ。(或ハ曰ク、丹波成忠ノ子利長、和氣明重ニ就テ學ブ、明重ソノ才器ヲ愛シ養フテソノ家ヲ嗣ガシメ、實子明英ニ丹家ノ學ヲ傳ヘ、剃髮セシメ、名ヲ壽琳ト改メシム。利長明ニ赴ムキ、四大家ノ學ヲ傳フ。是ニ於テ利長剃髮シテ道三ト號シ、武家ノ醫トナル。川越ノ導道三喜ハコノ人ノ門ニ出ヅ、故ニ、金・元四大家ノ說ヲ本邦ニ傳ヘタルハ、半井道三(和氣氏、後姓ヲ半井ト改ム)ヲ以テ始祖トス、ト^⑦。世ニ半井道三治療書、一卷ヲ傳フト雖モ、斷篇ニシテ之ニ依リソノ學說ヲ窺フニ足ラズ。又、和氣氏系圖・半井氏系圖等ニ利長渡明ノ事ノ記録ナシ、姑ク記シテ疑ヲ存ス)

曲直瀨道三、名ハ正盛(或ハ傳フ正慶)、字ハ一溪、雖知苦齋、又盍靜翁ト號ス。ソノ先ハ宇多源姓佐々木氏ヨリ出デ堀部ヲ氏トスルコト數世、父ヲ堀部左門親眞ト言ヒ、母ハ日賀多氏ノ女ナリ。永正四年九月十八日ヲ以テ京都ノ柳原ニ生ル。翌日ソノ父ヲ失ヒ、マタ母ヲ失フ、伯母及姉ニ養ハル。幼ニシテ穎悟、十歳ノ時江州ノ天光寺ニ入り、十三歳ノ時相國寺ニ移リ、藏集軒ニ寓シテ喝食トナリ、名ヲ等皓ト稱ス。能ク三體詩・東坡・山谷等詩集ヲ讀ミテ之ヲ暗ソズ。二十二歳ニシテ遠遊學ヲ修ムルノ志アリ。肥後人西友鷗ト共ニ東行シ、下野ノ足利ニ至リ、ソノ學校ニ入り、正文伯ニ師事シテ經史諸子ノ書ヲ涉獵ス。時ニ田代三喜、導道練師ト稱シ、初メテ李・朱ノ醫法ヲ關東ニ唱ヘ、武・毛ノ間ニ往來シテ治ヲ施シ時ニ名アリ。來テコノ地ニ在リ、享祿四年十一月道三初メテ之ニ柳津ニ會シ、ソノ說ヲ興聞シ、講究十餘年、ソノ秘訣ヲ窺ヒ、ソノ蓋奧ヲ明カニシ、遂ニ辭シテ西ノ方京都ニ歸レリ。時ニ天文十四年ナリシガ、明年ニ至リ遂ニ淨屠ヲ辭シテ、俗ニ還リ、醫治ヲ專ラニセリ、是歳、時ノ將軍足利義輝ニ謁シ、大ニソノ寵遇ヲ受ケ、嘗テソノ疾ヲ療シテ効アリ、碾壺茶碗等ノ名器ヲ賜フ。細川勝元、三好修理、松永彈正、等亦厚ク之ヲ遇ス。皆ソノ醫療効驗アリ、全治ノ功多キヲ以テナリ。道三又學舎(啓廸院)ヲ洛下ニ立テ徒ヲ集メテ經ヲ講シ、後進ヲ誘掖スルヲ以テ己ガ任トナス。ソノ名益々顯ハレ一時知ラザルモノナシ。道三、洛下ニ在リテ醫治ヲ以テ門ヲ張ルコト二十餘年、嘗テ吾朝從來簽證辭治ノ全書尠キヲ憂ヒ、ソノ親驗實施スル所ニ基キ、古來ノ醫書ヲ涉獵シテ、ソノ精粹ヲ拔キ、拾集シテ編ヲナシ、天正二年ニ至リ始メテ脱稿シ、凡テ八卷ヲナシ啓廸集ト云フ。ソノ十一月十七日、道三ソノ書ヲ奉ジテ觀覽ニ供ス。天皇大ニ嘉稱シタマヒ翠竹院ノ稱號ヲ下賜シ、又僧策彦ニ

勅シテソノ書ニ序セシメタマフ、時人之ヲ榮トス。道三晩年號ヲ享徳院ト改メ、豊臣・徳川二氏ニ重ゼラル。然レドモソノ微ニ遇フコト屢々ナルモ深ク自ラ醫ニ隠レ出テ仕フルヲ肯ゼズ、文祿三年正月四日、年八十八ニシテ病ニ歿ス。墓ハ京都十念寺ニ在リ、碑面唯一「贈法印曲直瀨一溪道三」ノ十字ヲ刻スルノミ、後陽成天皇ノ時、慶長十三年四月、正二位法印ヲ贈ラレシヲ以テナリ。道三、庭田氏ノ女ヲ娶リ一子ヲ生ム、名ハ守貞、先ヅ卒ス。妹ノ子大力之助ヲ養ヒ嗣トナシ、守貞ノ女ヲ以テ妻ハス。東井玄朔、是ナリ。亦、道三ヲ襲稱ス、ソノ後累世皆ナ道三ト稱ス。道三別ニ一孫女アリ、弟子正琳ニ妻ハシテ曲直瀨氏ヲ冒サシメ、享徳院ノ號ハ之ヲ正純ニ譲リ、翠竹院ノ稱ハ之ヲ嫡孫守伯ニ授ク。(今大路系譜・寛政醫家系圖・曲直瀨家譜・本朝醫考・啓迪集序)

此期ノ醫學

李・朱ノ醫學ヲ宗トセルトコロノ、コノ期ノ病理學ハ、先ヅ外感ト内傷トノ別ヲ立テタリ。ソノ説ノ梗槩ハ上段李・朱醫學ヲ諭ズルノ條下ニ於テ、既ニ之ヲ記述セリト雖モ、更ニ茲ニ、コノ期ノ著書ニ記載スルトコロニ依リテ、ソノ要旨ヲ摘録スレバ、曲直瀨道三ノ啓迪集ニ醫學正傳^③ヲ引キテ『外感ハ風寒有餘之證ニシテ賊風虛邪(風・寒・暑・濕)ヲ犯スニ由リ、陽之ヲ受ケテ六腑ニ入ル。内傷ハ飲食勞役不足ノ證ニシテ、食飲不節・起居不時ニ由リ、陰之ヲ受ケテ五臟ニ入ル』ト曰ヒ、又玉機微義^④ヲ引イテ『内脾胃ヲ傷ブレバ乃チソノ氣ヲ傷ブル、外風ニ感ズレバ、乃チソノ形ヲ傷ブル』『内傷ノ中ニモ有餘アリ、不足アリ、勞倦傷ト飲食傷トハ俱ニ内傷タリト雖モ、混ジテ一トナスベカラズ、勞倦傷ハ誠ニ不足ナリト云フト雖モ、飲食傷ハ不足ノ中ニモ有餘ト不足トヲ別ツベシ、夫レ飢テ飲食セザルモノハ胃氣虛ス、故ニ不足トス、之ニ反シテ飲食自倍シテ停滯スルモノハ胃氣傷ヲ受ク、コノ不足ノ中ニハ有餘ヲ兼ヌルナリ』ト説キタリ。

案ズルニ、外感ノ説ハ後漢張仲景ガ傷寒論ニ主張セルトコロニシテ、風・寒・暑・濕ノ外感中、特ニ風寒ヲ主トシ、萬病風寒ヨリ起ルト信ゼシハ唐以前ニ行ハレタル説ナリ。内傷ノ説ハ元ノ李杲ノ内外傷辨惑論ニ詳カニシテ、脾胃ノ傷ブラルルニヨリテ萬病ノ生ズルコトヲ説キシハコノ時ニ始マル。朱震亨ニ至リテハ更ニ加フルニ相火ノ論ト鬱病ノ説トヲ以テセリ。啓迪集ニハ醫學正傳ヲ引イテ『大極ハ水・火・木・金・土ヲ生ジ、各其性ヲ一ニスレドモ、惟リ火ニハニアリ、其形質相生ジテ五行ニ配スルモノヲ君火ト云ヒ、虛ニ生シテ守位ナク、命ヲ稟ケ、動ニヨリテ見ハル、モノヲ相火ト云フ』玉機微義ヲ引イテ『君相二火ノ外ニ、又五藏ノ火アリ、五志ノ内ニ根ス、六慾七情之ヲ激スレバ其火隨テ起ル、則チ大怒スレバ火ハ肝ニ起リ、醉飽スレバ火ハ胃ニ起リ、房勞スレバ火ハ腎ニ起リ、悲哀スレバ火ハ肺ニ起ル、心ハ君主ナルガ故ニ自ラ焚ケバ則チ死ス』ト説ク。又ソノ鬱病ヲ論ズルヤ丹溪纂要^⑤ノ説ヲ引イテ『氣ノ昇ルベクシテ昇ルコトヲ得ズ、降ルベクシテ降ルコトヲ得ズ、變化スベクシテ、變化スルコトヲ得ザルガ爲ニ、傳化常ヲ失シ、鬱證コ、ニ生ズ』トナス。而シテ鬱ニ氣鬱・血鬱・濕鬱・熱鬱・痰鬱・食鬱ノ六證アレドモ、鬱ハ氣ニ屬シテ、事遂ゲザレバ則チ悶々然トシテ氣伸ビズシテ鬱ス、故ニ感遇スルトコロニ隨テ病ミテ六證ヲ生ズレドモ、皆氣鬱ニ由リテイタストコロナリ、トハ啓迪集ニ説クトコロナリ。

之ヲ要スルニ、病理學ハ時勢ノ推移スルニ從ヒ、單ニ外感ヲ以テ唯一ノ病因トナスコトヲセズ、又敢テ外感ヲ主要ノモノトセズ、醫學的ノ知識ニ依リテソノ原因ヲ身體内ニ探ラントスルノ傾向ヲ生ジ、ココニ内傷ノ説アリ、又外感ノ中ニテモ古人ノ風寒ヲ主トセルニ反シテ濕熱ヲ主トシテ擧グルニイタレリ。

ココニ一例トシテ中風ノ一證ヲ擧ゲンニ『中風トハ風氣ノ人ニ中ルナリ、風ハ是レ四時ノ氣ノ八方ニ分佈シテ萬

物ヲ長養スルコトヲ主ドル、其病ヲナスヤ、皮膚ノ間ニ藏シ内通スルコトヲ得ズ、外泄ル、コトヲ得ズ、其經脈ニ入り五臟ニ行キ各藏腑ニ隨テ病ヲ生ズ」ト言フノ説ハ、内經ニ出デ病源候論以下隋・唐醫書ハ皆コノ説ヲ襲用シ、宋ニ至リテハ病理ノ説一步ヲ進メ、七情ノ中風ヲ起スコトアルコトヲ説クニ至リシモ、金・元ニ至リテ更ニソノ病理説ノ一變セルヲ認ム。劉守眞曰ク『中風ハ肝木ノ風、實甚ニテ卒ニ之ニ中ルガ爲ニアラズ、又外風ニ中ルニアラズシテ將息宜ヲ失フニ由ル、又喜、怒、思、悲、恐、五志ノ過極スル所アルニ因リテ卒中スルモノアリ、夫レ五志過極スレバ皆熱ノ甚シキヲ致ス、俗ニ風ト云フハ末ヲ言フテ其本ヲ忘ル、ナリ。』^⑮李杲曰ク『中風ハ外來ノ風邪ニアラズ、乃チ氣二本イテ自ラ病ムナリ、凡ソ人年四旬ヲ踰テ、氣衰フルノ際、或ハ憂思忿怒ニヨリテ其氣ヲ傷ブルモノニ多ク此ノ證アリ』^⑯朱震亨曰ク『氣虛アリ、血虛アリ、痰盛アリ。西北ノ二方ハ、眞ニ風ノ中タル所トナルモノ之アリ、東南ノ人ハ皆是レ濕土、痰ヲ生シ、痰熱ヲ生シ、熱風ヲ生ズルナリ』^⑰共ニコレ中風ヲ以テ虚象トナシ、内正義ヲ傷ブリテ病ヲナスコトヲ謂ヒ、上古ノ中風ヲ論ジテ一ニ外、風邪ニ感ズルニ由ルトナスモノトハ、大ニソノ趣ヲ異ニセルヲ見ル。而シテ劉・李・朱ノ三家ハ、ソノ説ニ基ツキテ眞風ト類風トヲ區別セシガ、虞搏^⑱ニ至リテ、更ニ説ヲ立テテ曰ク『中風ノ證ハ蓋シ先ヅ内ニ傷ブリ、而シテ後ニ外ニ感ズルニ因ル。百病皆因アリ、證アリ、因ハ則チ本タリ、證ハ即チ標タリ、古人ノ中風ヲ論ズルハ其證ヲ曰フナリ、三子ノ中風ヲ説クハ其因ヲ言フナリ、其所謂眞ニ風邪ニ中タルモノモ、必ズ氣體虛弱、榮衛不調ニ由リ、然シテ後外邪ニ感ズルニ由ラズンバアラズ、其所謂火ニ因リ、氣ニ因リ、濕ニ由ルモノモ亦必ズ外邪ノ侵スコトナクンバ作ラザルナリ』ト論ジテ諸家ヲ折衷セリ。啓迪集ハ先ヅ上記劉・李・朱三子ノ説ヲ引キ、次デ虞氏ノ説ヲ擧ゲ、以テ内傷ト外感トニヨリテ中風ノ起ルコトヲ説ク。蓋シ中風ノ病理説ニ於ケル一大變動ナリ。中風ハ古來百病ノ長ナリトセシモノナルニ、ソノ病理説ニ於テ既ニコノ如キ變動ヲイタセリ、隨テ爾他ノ疾病ノ病理ニ關スル學說ノソノ面目ヲ改メタルモノ尠カラザルハ固ヨリ言フヲ待タズ。而シテ特ニソノ著明ナルモノヲ擧ゲテ言ヘバ、疾病ヲ別チテ内病ト外病トナシ『内病ハ五藏ノ鬱ヨリシテ發シ、外病ハ經絡ヨリ感ジテ入ル』ト説キ^⑲、又疾病ヲ別チテ氣・血・痰・鬱ノ四症トナシ『其氣・血・痰ノ三證ハ病ヲナスノ源ニシテ氣・血・痰、三病久シクシテ鬱ヲ兼ネ、或ハ痰久シクシテ氣・血・痰、病ヲ生ズ』ト論ズ^⑳ルガ如キ、皆ナコノ期ニ始メテ現ハレタル論説ナリ。

疾病ノ病理ヲ説クニ方リテ、佛典所載ノ説ヲ交エシコトハ奈良朝以後室町時代ニ至ルマデ、代々ノ醫家ノ間ニ行ハレシトコロニシテ、醫心方・萬安方・頓醫抄・福田方等ノ諸書皆自然ラザルハナカリシモ、コノ期ニ至リテハ佛典ノ所説ハ殆ドソノ跡ヲ絶チ、尠ナクトモ啓迪集等著明ノ醫書中ニハ佛典ノ説を引用セルトコロナシ、是レ亦、コノ期ニ至リテ病理學界ニ現ハレタル一大變動ナリ。蓋シ佛教ガ我が邦文化ノ中心タリシコトハ、奈良朝以來一千餘年ノ久シキニ及ビ、ソノ間我が社會ニ及ボセル感化ハ甚ダ著シキモノアリシガ、コノ期ニ至リテ、始メテ西洋ト交通シ、耶蘇教ノ傳來スルニ及ビテ、佛教モ漸次ソノ勢力ヲ失ヒタリ。固ヨリ佛教信仰ノ人心ハ尙ホ變ゼズト雖モ、ソノ感化ハ復タ昔日ノゴトク學問社會ニマデ及ブコト能ハズ。我が醫方ニアリテ、コノ期ニ於テ、猶ホ佛氏ノ説ニ依據セシハ外科・眼科等ノ治術ニシテ而カモ、學問ヲ離レタルモノニ止マリシナリ。

佛教ニ續キテ、我が邦文化ノ中心トナレルモノハ儒教ニシテ、宋儒性理ノ説ハ既ニ室町時代ヨリ、我が邦ニ入り、コノ期ニ及ビテハ漸次ニソノ勢力ヲ擴張シ、殊ニ我が醫學ニアリテハ宋儒性理ノ説ニ基ツキテ立論セルトコロノ李・朱醫方ノ輸入ニヨリ、儒教ノ影響ヲ蒙リシコトハ頗ブル顯著ナリトス。

宋儒性理ノ説ハ、太極ヲ以テ主トス。『太極動キテ陽ヲ生ジ、靜ニシテ陰ヲ生ズ、其ノ本然ノ體ハ、スナハチ太極ナリ、然レドモ、太極ハ陰陽ヲ離レテ存スルニアラズ、陰陽ニ即テ、其本體ヲ指シテ太極ト曰フナリ。而シテ太極ノ動クモノハ其用ノ行ハルル所以ニシテ、靜ナルハ其體ノ立ツ所以ナリ。陽變ジ陰合フテ、水・火・木・

金・土ノ五行ヲ生ジ、五行ノ氣ハ順布シテ四時行ハル（木ハ春ヲ主ドリ、火ハ夏ヲ主ドリ、金ハ秋ヲ主ドリ、水ハ冬ヲ主ドリ、土ハ則チ四時ニ寄旺ス、四時ヲ以テ行ハルナリ）。故ハ五行ノ運ハ一陰陽ノ理ニ出デ、陰陽ノ運ハ一太極ノ理ニ出ヅ。太極ハ理ナリ、二氣ト正行トハ氣ナリ、理ト氣ト合フテ能ク形ヲ成ス。此ノ如クニシテ天道流行シ萬物ヲ發育ス、其ノ造化タル所以ノモノハ陰陽五行ノミ』ト立論シ、此ノ立論ニ基ヅキテ『天地ノ間、陰陽五行アルノミ、人ヲ以テ之ヲ分ツトキハ則チ男女ナリ、事ヲ以テ之ヲ言フトキハ則チ善惡ナリ、剛柔ナリ、五常ノ性ナリ、仁義禮智信ハ則チ、水・火・金・木・土ノ理ナリ』ト説キタリ¹⁶⁾。

本道（内科）

本道ハ古ヘ體療ト名ヅク、後ノ所謂内科ナリ。コノ期ニアリテ醫家ニハ既ニ外科（金創醫）・女科（産科）・眼科（目醫）・口齒科（口中科）、等ノ専門アリ、而シテ本道ハコレ等諸科ノ外ニ立チ醫學ノ主要部分ヲ占メ、當時單ニ醫師ト言フハ、スナハチ本道（内科）ヲ指スホドナリ。室町幕府ノ末造名醫トシテ聞エタルハ坂・竹田・半井・吉田・祐乗坊ノ諸家ナリシモソノ宗トスルトコロハ概ネ宋ノ醫方、殊ニ和劑局方ニシテ別ニ發明ノ説ナキコトハ既ニ之ヲ述ベタリ。曲直瀨道三一タビ出デテ、李・朱ノ醫學ヲ唱道シ、又啓廸院ヲ洛下ニ建テテ、大ニ後進ヲ勸奨セシヨリ、ソノ門ニ俊彦ヲ出スコト甚ダ多ク、ソノ子正紹、乃父ノ業緒ヲ嗣ギ、好シデ生徒ヲ教導シ、ソノ孫親純ニ至リテ、ソノ業益々大ニシテ今大路ノ姓ヲ賜フルニ至ル。是ニ於テ李・朱ノ醫學ハ遍ネク天下ニ行ハレ、一時皆ナソノ説ニ屈從シ、遂ニ道三流ノ一學派ヲ成スニイタレリ。

曲直瀨道三ノ著述、尠カラズト雖モ、察證辨治ノ全書ニシテ、依テ以テ道三學ノ真相ヲ知ルベキモノハ啓廸集ナリ。コノ書ハ元龜二年ニ曲直瀨道三ガ撰述セルトコロノモノナリ、天正二年十一月、道三コノ書ヲ奉ジテ叡覽ニ供セシニ、天皇大ニ嘉稱シタマヒ、僧策彦ニ勅シテコノ書ニ序セシメ、又詔シテ廣ク天下ニ頒チ、永久ニ傳ヘシメタマフ¹⁸⁾、誠ニ我方邦李・朱醫學ノ金科玉條ナリ。

啓廸集八卷、第一卷ニハ中風・傷寒、ノ二門ヲ擧ゲ、第二卷ヨリ第五卷マデニ中寒・中暑・中濕・瘧疾・痢病・泄瀉・咳嗽・痰飲・喘急・水腫・脹滿・積聚霍亂・嘔吐・飢胃・頭痛・心痛・腹痛・腰痛・脇痛・脚氣・痿證・淋病・疝氣・血證・衄血・吐血・咳血・痰血・下血・尿血・諸氣・諸虛・内證・勞瘵・汗・怔忡動悸・健忘・眩暈・秘結・燥・火熱・尿濁・遺精遺尿失禁・陰類・鬱・心下痞滿・吃逆・諸蟲・吐酸・中惡・狂癲（癩症）・瘧症・厥症・痔漏・脫肛・癩疹・損傷・眼目・耳病・鼻病・唇舌・咽喉・牙齒・鬚髮ノ六十五門ヲ擧ゲ、第六卷ニハ瘡瘍・破傷風・癩風・救急、等外科ノ疾病ニ關スルモノヲ收メ、又老人科ノ一門ヲ擧ゲ、第七卷ニハ婦人門、第八卷ニハ小兒門ヲ擧ゲ、スベテ七十四門ヲ別チ、ソノ間更ニ幾多ノ細別ヲナシタリ。而シテ記述ノ體裁ハ類似ノ病症ヲ一括シ、ソノ各病ヲ論ズルノ條下ニハ名證（名義）・由來（定義）・辨因（原因）・證（症候）・脈法（診斷）・類證（類症鑑別）・豫知（豫後）・治法（療法）等ノ諸目ヲ擧ゲテ詳ニ論述シタリ。

コノ書引用スルトコロノ書籍ハ凡ソ六十四部ニシテ、格致餘論・此事難知・脾胃論・蘭室秘藏・丹溪心法・丹溪纂要・醫學正傳・玉機微義・傷寒百問・醫林集要・明醫雜著・袖珍方・惠濟方・醫方選要・全九集、等ヲ以テ、ソノ主ナルモノトス。而シテ著者ノ自序ニ『吾儕稟三生緣於洛瀝、而學醫術於利陽、勵志於救恤、布業千字内一、上始三千軒岐内經、下及於百家醫書、日夜翫味之、漸究厥旨趣、閱朱氏發揮、檢劉氏微義、而知醫法有三聖俗、察三彥修纂要、審三天民正傳、而識三藥方有三精粗一矣、予久出入華夷、而多療三沉痾、獲三救活一者、難三以具載一、竊顧、吾朝未レ著三察證辨治之全書一也、予不レ慮三淺深一、私拾三聖賢之隱括一、普集三諸家之樞

機^一、而竭^レ力極^レ意、徐數十年、而綴以爲^二三卷^一、初自^二中風傷寒^一、終暨^二婦人小兒^一、而辨證必宗^二素問神規^一、配劑每祖^二本草聖矩^一矣』トアルニ依リ、大抵^二コノ書ノ所說ニ基ツクトコロヲ知ルニ難カラザルベシ。

是ヨリ先キ、月湖ノ全九集アリ^〇、濟陰方アリ、田代三喜ガ明ヨリ歸リシトキ、ソノ師月湖ノ著述ヲ携ヘ來リシコト、書ニ見エタレバ全九集・濟陰方ハ既ニコノ頃我ガ邦ニ入りテ李・朱醫方ヲ傳ヘタルナラン、而カモ啓迪集ノ刊行アルニ及ブマデハ、少クトモ李・朱醫方ハ僅カニ關東少數醫家ノ知ルトコロトナリシニ過ギザリシナリ。故ニ啓迪集ハ平安朝ノ醫心方・鎌倉時代ノ萬安方・頓醫抄・室町時代ノ福田方・續添鴻寶秘要鈔等ノ諸書ト同ジク當該時代ノ醫學ヲ代表スベキ著述トスベシ。

道三流ノ醫術ハ軒岐以來百家ノ書、珠ニ局方發揮・玉機微義・丹溪纂要・醫學正傳等ノ所說ニ依リ、岐・黃ノ問答(素問ノ書ヲ指シテ言フ)ヲ以テ醫ノ法トシ、臨機應變ヲ以テ醫ノ意トシ、醫意ヲ以テ聖法ヲ用フルヲ主張スルモノニシテ『醫工、宜^二慎持^一法』トシテ五十七則ヲ設ケタリ、コノ流派ノ宗旨トスルトコロナリ。

五十七箇條

醫工宜慎持之法

一、慈仁

一、察^二脈證^一、可^レ定^二病名^一(ソノ意ハ病人ヲ治スルニハ必ず先ツソノ脈證ヲ明カニシテ而シテコレ何病ナリト言フベキコトヲ說ク、病ヲ治スルニハ診斷ヲ先ニスベキコトヲ言ヘルナリ)

一、必先可^レ察^三患者肯信與^二情猜^一也、(肯信トハ醫ヲ信ズルヲ言ヒ、情猜トハ醫ノ言ニ從ハズ、又ハ醫ヲ疑フヲ言フナリ。倉公ノ言ニ病不^レ肯服^レ藥、一死也、信^レ巫不^レ信^レ醫^二死也、輕^レ身薄^レ命、不^レ能^二將謹^一、三死也トアルト同意ナリ)

一、百病可^レ察^二初受、盛甚、困危^一、(疾病ノ經過ヲ別ツベキコトヲ言フ)

一、不^レ執^二一識^一矣(學問ニモ治療ニモ一識ヲ執ラズ、偏^二執一家^一、則^レ學偏ヲ戒ムルナリ)

一、不^レ可^レ拘^二古方^一、而通^二舊法^一、則佳也

一、可^レ彈^二四知之術^一(四知トハ神・聖・功・巧ナリ、望^レ色知^レ病、謂^二之神^一、聞^レ聲知^レ病、謂^二之聖^一、問^レ證知^レ病、謂^二之功^一、切^レ脈知^レ病、謂^二之巧^一、今日吾人ガ謂フトコロノ視診・聽診・問診・觸診ナリ)

一、暴新病、久痼疾、可^レ別治^一也

一、可^レ問^二素常肥瘦^一矣

一、可^レ辨^二察病因^一也

一、隨^二方土^一、而異^レ治則佳矣

一、治^二未病^一、不^レ治^二已病^一(醫ノ要ハ病ガ來タラントスルヲ治スベシト試ムルニアリ)

一、四時正氣與^二不正氣^一、預可^レ勘^二知之^一(正氣ハ春溫・夏熱・秋冷・冬寒也、不正氣ハ春宜^レ溫反寒、夏宜^レ熱反冷ノ類ナリ、運氣ヲ以テ豫メ之ヲ勘治スベシト言フナリ)

一、信^レ巫不^レ信^レ醫^二之患者治^レ之而無^レ効

一、少年、壯盛、老衰、可^レ異治^一

一、諸證先必、可^レ定^二血氣之衰旺^一(人ハ氣血ヲ肝要トス、氣血ノ虛實ヲ知ルヲ第一トスベシ)

一、男婦有^二尺寸之別診、氣血之異治^一也(男ハ陽ナリ、女ハ陰ナリ、男ノ主脈ハ關上寸ニアリ、女ノ主脈ハ關下尺ニアリ、故ニソノ診ヲ別ニス、ソノ治法男ハ氣ヲ主トシ、女ハ血ヲ主トスルヲ以テ、治ヲ異ニスルヲ言フ)

一、諸治有^二三問^一矣、是療^レ疾之規矩也

一、上焦順痞、飲食多少、膈痰通否

二、中焦強弱、剋化遲速、膨脹緩急

三、下焦通塞、二便滑秘、元精強羸

一、治_二腎虛_一、則診_二兩尺_一、而可_レ辨_二水火別補_一也（右尺虛ハ右腎火虛ナリ、火ヲ救フ、左尺虛ハ左腎水虛ナリ、水ヲ滋ス、コレ當流ノ要旨ナリ）

一、診_二女脈_一則必先可_レ決_二胎妊有無_一矣

一、諸病、先明_二八要_一、（八要トハ虛・實・冷・熱・邪・正・内・外ヲ言フ）

一、諸疾皆因_二陰陽偏勝_一、其治不_レ過_レ守_レ中、是當流之奧儀也

一、兵者凶器也、藥者攻_レ邪物也、雖_二無毒平味之藥_一、無_二可_レ攻之病_一、則必不_レ可_レ用_レ之、況於_二有毒偏氣之藥_一乎

一、諸熱、即可_レ辨_二燥濕_一

一、諸疾平愈、而後再發之時、或依_二初治_一、或依_二他療_一

一、庸醫悉重_二貴藥_一、輕_二賤味_一、當流不_レ然、以_レ中_レ病貴_レ之、以_レ不_レ中_レ病、賤_レ之、

一、陰陽虛實、必可_二分別_一（陽盛ナルトキハ則外熱シ、陽虛スルトキハ則外冷ス、陰盛ナルトキハ則内冷シ、陰虛ナルトキハ則内熱ス）

一、胃水穀之海、藥亦入_レ胃、若胃氣弱則藥劑雖_レ入_レ胃、不_レ能_レ運_二化病處_一、故諸治助_二胃氣_一之藥劑、不_レ可_レ闕_レ之、猶又可_レ隨_二胃之虛實_一耳

一、緣_二衛氣榮血虛實_一穀肉水液調養分別（コレ内傷ヲ論スルモノニシテ、穀・食・氣ヲ補ヒ、飲・水・血ヲ補フ事ヲ説ク）

一、灸穴之樞要可_二記憶_一

一、諸病不治之證、不順之脈

一、誤_二施診治_一、則莫_レ憚_レ改_レ之

一、小兒諸疾、不_レ可_レ定_二得效之可否_一也

一、久病沉痾癖積癥瘕之類、頓不_レ可_レ求_レ效（ソノ本ヲ治スルヲ謂フナリ）

一、卒病暴患之丸散、預蓄_二藥劑_一、兼可_二調和_一

一、湯、散、丸之分別

一、藥劑七情之分別（單行・相須・相使・相畏・相惡・相反・相殺、コレヲ藥ノ七情トス）

一、藥劑氣味之辨察（氣トハ寒・熱・溫・冷ノ四性ヲ謂ヒ、味トハ酸・苦・甘・辛・鹹ノ五味ヲ言フ）

一、生熟炮製不_レ越_二法則_一

一、銅鐵之禁忌、不_レ可_レ侮_レ之

一、妊娠禁忌之藥味並飲食之忌戒

一、三停之病、食前食後之用藥（三停トハ三焦ニ滯ルナリ、上焦ニ停ルニハ先食シテ後藥ヲ服ス、下焦ニ停ルニハ先服シテ後食スベシ）

一、岐加峻減、是下工也

一、服藥之頃、要_レ用_二同性同氣之飲食_一

一、單行奇方不_レ能_レ治_二大病痼疾_一、

一、治_二諸蟲_一之湯丸、自_レ朔至_レ五之頃而用_レ之

一、湯丸之題銘、以_二藥名_一、不_レ可_レ記_レ之、以_二治德_一、可_レ記

一、宜禁楮磅、藥禁之飲食、可_レ記_レ之、並月禁不可_レ闕_レ之

一、七方之分別（七方トハ大・小・緩・急・奇・偶・複ヲ言フ）
一、十二劑之異治（十二劑トハ宣・通・補・泄・輕・重・澁・滑・燥・濕・寒・熱ヲ言フ）
一、貴賤苦樂、同病異治

一、諸疾平癒、即戒ニ沐浴酒色ニ矣

一、當年司天、在泉、運氣之虛實、六氣之主客、粗可ニ記憶ニ（司天ハ主上半年、在泉ハ主下半年、陰年ヲ虛トナシ陽年ヲ實トナス）

一、泰定養生曰、岐・黃問答、醫之法也、臨機應變醫之意也、以ニ醫意ニ用ニ聖法ニ、非ニ妄意ニ也

一、醫家大法曰、治レ上、必妨レ下、治レ下必妨レ上

一、病脈相反聖規

病熱 靜

經日 泄而 脈大 此皆難レ治

脫血 實

汗後 躁

一、秤量之分別 廣秤與半秤 大分小分之異 舛合之分別 尺寸之定

以上、五十七事者、指ニ南醫工ニ之規矩、療ニ養患者ニ之隱括也、不レ爲ニ當流之門弟ニ、者雖ニ一事ニ、不レ可レ許レ之、誠活人之階梯也、非ニ師弟相對授レレ之、不レ得ニ其妙旨ニ矣

元龜第二辛未年九月十三日 洛下雖知苦齋、盍靜翁、道三、六十歲書レ焉

（括弧内ノ註釋ハ切紙聞書ニヨリテ著者ガ加ヘタルモノナリ）

茲ニ掲グルトコロノ五十七箇條ハ道三切紙（折紙ヲ半ニ切リタルヲ切紙ト名ヅク、當時各流派ノ秘訣ヲ切紙ニ認メテ、ソノ門弟ニ授興セルヲ以テコノ名アリ）ノ要部ヲ占ムルモノニシテ、コレニ依リテ、道三流ノ醫術ガ、診斷ヲ精シクシ、病因ヲ察シ、疾病ノ經過ヲ詳ニシ、ソノ急性ノモノト慢性ノモノトヲ別チ、方土・男女・老若。貴賤等ニヨリテ疾病ノ發象ニ差異アリ、從テ之ヲ治スルノ方ヲ異ニスベキコトヲ說キ、又藥物ノ宜禁ヲ論ジ、鍼灸ノ法則ヲ詳ニスベキコトヲ論ズルコト等ニ勉メタルヲ窺フニ足ルベシ。

曲直瀨道三ノ著書ニシテ、今ノ世ニ傳ハレルモノ十餘部アリ、之ニ依リテ道三流學派ノ如何ヲ詳ニスベキヲ以テ、左ニ之ヲ列記ス。

啓迪集、八卷。察病辨治ノ全書ナリ、卷首ニ辨引ノ一篇ヲ載ス、コレニヨリテ道三ノ所見如何ヲ一目ノ下ニ窺知スルコトヲ得ベシ。（コノコトニ就キテハ既ニ前段ニ詳述シタリ）

雲陣夜話、一卷。コレ永祿九年、道三、雲州島根毛利氏ノ陣營ニアリテ從遊ノ徒ニ醫學ノ大要ヲ示サントテ編述セルモノナリ。別ニ雲陣夜話補遺秘傳、一卷アリ、奈須氏之ヲ校刊ス。

切紙、二卷。コレ門人ガ道三ノ筆記ヲ蒐錄セルモノニシテ、道三ノ識見ハ具ニ卷中ニ備ハレリ。

老師雜誌記、一卷。道三ガソノ師、導遺（田代三喜）ノ話ヲ承ケテ之ヲ記シ、或ハソノ訓ニ隨ツテ之ヲ抄セルモノニシテ、察病辨治ノ要旨ヲ舉ゲタリ。

辨證配劑醫燈、三卷。コノ書ハ殊ニ醫學正傳・惠濟方・醫林集要ノ數書ニ依リ察病辨治ノ要則ヲ舉ゲ、參ユルニ自家ノ親試ヲ以テセリ。

辭俗功聖方、三卷。各病門ヲ立テテ治方ヲ說ク。

授蒙聖功方、二卷。各病門ヲ立テテ治方ヲ說クコト辭俗功聖方ニ同ジク、ソノ記事モ大同小異ナリ、或ハ同一ノ書カ。

廣觀摘英集、二卷。診治ノ要則ヲ列舉セルモノナリ。

捷徑辨治集、一卷。簡略ニ辨治ノ大體ヲ説キタルモノナリ。

翠竹翁答問書、一卷。コノ書ハ道三ガ門弟ノ問ニ應ジテ醫事ヲ談ゼルモノヲ輯録セルモノニシテ切紙ト同ジク、之ニ依リテ道三ノ識見ヲ窺フニ足ル。別ニ盍靜答話、一卷アリ。

宜禁本草、二卷。五穀・五菜・五菓・草藥・木藥・五石・金土水・獸・禽・蟲・魚ノ性・味・及ビ宜禁ヲ説キタル書ナリ。

藥性能毒、一卷。日用藥味七十一種ト不時ニ用フルトコロノ藥品五十五種トヲ擧ゲテ、ソノ能毒ヲ示シタルモノナリ。

合藥直傳方、一卷。蘇參湯方、一卷。

鍼灸要集、一卷。指南鍼灸集、一卷。共ニ鍼灸ノ要則ヲ説キタリ。

診脈口傳集、一卷。刊本ノ世ニ傳ハルモノアリ、コノ書ハ恐クハ後人ノ撰述ニ係ルモノナラン。

可有錄、一卷。三元延壽參贊書・泰定養生、等ニヨリテ、養生ノ主旨ヲ説キタルモノナリ。

遐齡小兒方、一卷。小兒ノ將護及治方ヲ論ゼルモノナリ。

全九集、七卷。曲直瀨道三ノ撰述ナリト傳フ、月湖ノ全九集トハ内容全然相異セリ、思フニ、コノ書ハ道三ガ月湖ノ全九集ヲ和解セルモノカ。

正心集・要語集・自諫袖鏡・要試驗神術・出燈配劑、等ノ書ハソノ名ヲ傳フルノミニテ著者ハ未ダ之ヲ見ズ。

曲直瀨道三ト時ヲ同ジフシテ、關東ニ永田徳本アリ、初メ李・朱ノ醫方ヲ學ビタレドモ、後チ大ニ獨詣スルトコロアリ、李・朱醫學大ニ行ハレテ天下ノ醫家皆ナ道三流ノ方則ヲ奉ズルノ時ニ方リ、隱然一家ヲ樹テ、張仲景ヲ師宗トシ、汗・吐・下・和ノ治法ヲ唱道シ、專ラ峻劇ノ劑ヲ用ヒテ、疾病ヲ攻撃スルヲ主旨トシタリ。

是ヨリ先キ、室町時代ノ末葉、坂淨運ノ明ヨリ歸リテ張仲景ノ方ヲ我が邦ニ傳ヘ、績添鴻寶秘要鈔ノ著述アリト雖モ、ソノ論説ハ廣ク世ニ行ハルルニ至ラズ、永田徳本ニ至リテ獨詣スルトコロノ十九方ヲ以テ、機ニ投ジ變ニ應ジ、他人ノ學ブコト能ハザルトコロヲナシ、張仲景ノ學説ヲ實踐シテ時論ニ拘ラズ傷寒論ノ方則ハ、ココニ始メテ我が邦ニ行ハルルニイタリ、遂ニ徳本流ト名ヅクル一流派ヲナシタリ。

永田徳本、知足齋ト號ス、古ニ所謂隱醫ニシテソノ出ヅルトコロヲ詳ニセズ、或ハ參河ノ人ナリト言ヒ、或ハ信濃ノ人ナリト言ヒ、或ハ美濃ノ人ナリト言ヒ、或ハ甲斐ノ人ナリト傳フ。蓋シ徳本ハ逐鹿ノ時ニ當リテ世紛ヲ厭棄シ、諸州ニ周遊シテ一處ニ滞留セズ、而シテ中間甲斐ニ居ルノ日多シ、故ニ世ニ傳ヘテ甲斐ノ徳本ト曰フ。出羽ノ人僧殘夢ヲ師トシ、又方ヲ月湖ノ徒玉鼎ニ受ケ、後一家ヲ成シ醫ヲ以テ四方ニ周遊シ、大永享祿ノ間甲斐ニアリ、武田氏ニ客タリシガ天文中去リテ信州ニ赴ムキ、諏訪郡東堀村ニ居ル、天正ノ末武田氏亡ブニ際シ復タ甲斐ニ歸リ自カラ草廬ヲ構ヘテ茅庵ト曰フ、出ヅレバ即チ頸ニ藥囊ヲ掛ケ、横ニ牛背ニ跨ガリ、逍遙自適、富貴ヲ藐視シ、貧賤ヲ憫恤シ、或ハ自カラ藥籠ヲ負ヒ甲斐ノ徳本、一服十八錢ト呼ビ賣リアルキタリト言フ、蓋シ世醫ノ務メテ勢利ニ赴ムクモノヲ矯メント欲スルナリ、寛永ノ初 徳川秀忠病アリ、醫ヲ累ヌルモ効ナシ、官醫某薦ムルニ徳本ヲ以テス、徳本召ニ應ジテ至ル、囊ヲ頸ニ掛ケ牛ニ跨ガリ瓢然トシテ來リ一診シ、乃チ峻劑ヲ處ス、衆醫爭ヒ駁スレドモ徳本抗辯屈セズ、竟ニソノ藥ヲ進ム。數日ニシテ頓ニ痊ユ、秀忠大ニ喜ビ、厚ク賞賜スレドモ受ケズ、有司ニ白シテ一服十八錢ヲ算シテ去ル、徳本既ニ甲斐ニ還リ幾クモナク、復タ信州ノ故居ニ歸ル、寛永七年春二月十四日ヲ以テ歿ス、享年百十有八歳、男アリ孫兵衛ト曰フ、門人數十人、ソノ禁方書ヲ受クルモノハ馬場徳寛、今井徳山ノ二人ノミ。(換杏新話・甲斐國志・宕陰存稿・夢見錄・遠碧軒隨筆・蕉園漫筆)

徳本ノ病理ヲ説クヤ、曰ク『萬病利ツカヘテ煩ラフト思フベシ、人ノ身ハ上下ヌキ通シナリ、上焦ヨリ飲食ヲ入レバ中焦ニテコシラヘテ下焦ヘヤル、水汁ヲバ小便ニ送り糠糟ヲバ大便ニ送下シテ、サハリモナク、腹中ニテ尅化

シ下ストキハ何ノ病モナク、快ク身モ熱セズ、天氣ノ雲モナク晴レテ、日月ノ光暗カラヌ様ナリ、若又腹中ニテ食物化シカネ、利ツカヘ、水穀ノ毒ヲ貯フルトキハ、身ニ寒熱コモリ、色々ノ病トナリ、煩ラフナリ、何レノ病ヲモソトクタセハ濁リタル血ハスミテ熱氣サメ、筋ヤハラギ、氣ハ能クナリ、頭ノ痛モノキ、蟲積ハキレ、足アタタマリ、食モス、ミテ色々ノ煩ハノキテナオルナリ』コレ疾病ハ鬱滯ニ因ルトナスモノニシテ、後ノ古方家ノ説トソノ轍ヲ同ジクス、又ソノ疾病ノ因由ヲ論ズルヤ『脈浮ナルハ表證ナリ、皆風寒ヨリ起ルト心得ベシ、發汗シテヨシ、脈沉數ナルハ裏症ナリ、コレハ臟ノ内ヘ病入テ骨ヨリ起リ、腹中ヨリモツテ出タル煩ナリ、半バハ表證、半バハ裏症ナレバ必ズ寒熱往來スルナリ』コレ疾病ノ外感ト内傷トヲ論ズルモノニシテ、ソノ外感ハ主ニ風寒ニ因ルトナスコレ張仲景ガ傷寒論ニ主張スルトコロニシテ、支那ニアリテ唐以上ニ行ハレタル説ナリ、而シテ後世後藤・山脇・吉益ノ諸家ガ唱道セル復古醫方ハ既ニ德本ニヨリテ之ヲ唱道セラレタルナリ。

德本ノ病理ヲ説キ、病因ヲ論ズルヤコノ如シ、故ニソノ治方モ『汗・吐・下・和ヨリ外ノ秘術ナキゾ』ト言ヒ、又「藥ハ毒有テ烈シキ好シ、今古ノ醫書多クハ反古ナリ、法ハ越人長沙ニ求メヨ」ト説キ、遂ニ「溫藥人ヲ殺ス、冷藥人ヲ殺サズ、病者腹中ノ候ヲ詳ニスベシ、古人溫藥ヲ用フル、必瀉下ノ劑ヲ兼ヌル』、『脾胃ノ調治ハ古今皆非ナリ、如何トナレバ霍亂泄瀉ナドハ脾胃ノ虚トモ云フベシ、反胃・不食・吐逆・水腫・脹滿・積聚ノ類ハ皆實ナリ、コレヲ脾胃ノ虚ト云ヒ、補藥ヲ用フルハ不審ナリ。寶丹・玉丹ナドニテ熱ヲ除キタラバ、十二二三ハ治スルコトモアルベシ、人參・白朮ナドニテ脾胃ヲ補ヒタラバ百一二ニモ治スルコトアルベカラズ』ト、痛論スルニイタレリ。

コノ如ク、德本ハ先ヅ表證ト裡證トヲ別チ、表證ハ發熱惡風・上衝自汗・項強頭痛・寒熱往來・喘急無汗・惡寒身疼・咳嗽咽痛・乾嘔拘急ヲ呈シ、裏證ハ、秘閉潮熱・黑胎譫語・發熱無寒・胸腹滿痛・下痢臭穢・大渴煩躁・自汗惡熱ヲ呈スルモノトスルモ敢テ病名ヲ擧ゲズ。ソノ他假リニ病門ヲ分ツモ、(1)痰證、(2)心痛・胸痺・結胸・腹痛、(3)食毒・宿食・吞酸・酒毒、(4)嘔吐・反胃・噦噎、(5)痢病・泄瀉、(6)痔疾・脫肛、(7)淋病、(8)瘧病、(9)霍亂・吐瀉・消渴・小便不利・厥逆、(10)虛煩・煩燥、(11)上衝・眩暈、(12)眼耳口舌病、(13)黃病・五疸、(14)疝氣、(15)腫滿・水腫・鼓脹(16)積聚、(17)中風・風痺・風濕・痛風、(18)血證・產前後・經閉・血塊・半產・漏下・吐血・衄血、(19)小兒五癩・驚風(20)瘡、(21)發狂、(22)癩瘡・麻疹、(23)癩癩トナス等、ソノ名ト因トニ拘ラズ、證ノ類似セルモノヲ集メテ、コレニ同一ノ療法ヲ施セリ、ソノ藥方タルヤ、僅カニ二十九方ニ過ギズ。而シテ之ヲ以テ萬症ニ應ジ、皆ナ治スベカラザルモノナシト稱ス、德本又機智ニ饒ミ、治ヲ施スニ尤モソノ人ノ性情ヲ察シ、閉塞ヲ啓キ、氣關ヲ通ジ、而シテ後劑ヲ投ズルコトヲ務ム。《傳ニ曰ク『熱ヲ患フルモノアリ、ソノ好惡スルトコロヲ問ヘバ曰ク、憎ムトコロノモノハ衣服屏障ニシテ欲スルトコロノモノハ瓜菓ナリト、德本侍者ニ論シテ其言ノ如クシ、且之ニ水ヲ飲マシムルニ、ソノ人快ト呼ビ明且病勢半バニ減ズ。室女アリ、痢ヲ病ム、褥上淨器ヲ設ケ、圍ムニ屏風ヲ以テシ、侍御環坐ス、德本之ヲ見テ曰ク、コレ乃チ病ヲ滋ス所以ナリ、命ジテ圍ニ外ニ就カシメ、一婢ヲシテ盥ヲ執ラシム、病乃チ愈ユ』ト。ヨリテ之ヲ自然良能ノ治ト言フ、然レドモ、コレハ德本ガ當時世醫ガ宜禁ノ説ニ拘泥シテ治方ヲ誤マル弊ヲ矯メンガ爲ニ施セシニテ、カノヒポクラテスガ疾病ノ自然治癒ヲ説キタルトハ、ソノ趣ヲ異ニスルナリ》

德本ガ好ミテ用ヒシ藥方ハ、寶丹(水銀・黑鉛・辰砂・鷄冠石、各一兩、黃連二匁、右糊丸)、玉丹(辰砂・巴豆・雄黃・明礬・附子・藜蘆、各二匁、水黑六匁、右七味糊ニテ丸ス)、瀉心丹(柴胡・黃芩・山梔子・巴豆・枳實。黃連・牽牛子・芒硝・黃柏・大黃・芍藥、右十一味糊ニテ丸ス)等ニシテ、峻劇ノ劑トシテ宋以下ノ醫家が嫌忌セシトコロノモノナリ。而シテ李・朱醫學ハ務メテコノ如キ攻撃ノ方ヲ用フルコトヲ避ケ、脾胃ヲ補フコトヲ主旨トセルニ反シテ「脾胃ノ調治ハ古今皆非ナリ」ト絶叫シ、『諸病ニ加減ト云フコトハアルベカラズ、ソノ故ハ熱シタル煩

ニハ熱ヲサヘサマセバ、諸症自カラ癒ル、冷タル者ヲバ補暖シテ標證自然ニゾク者ナリ』ト唱道シ、方證相對シテ藥ヲ用フベキコトヲ主張セリ。又徳本ノ方ニ薰藥十方アリ、コレヲ諸病ノ難症ニ用ヒタリト言フ。小嶋蕉園曰ク『古代ヨリ瘡氣ノ病ニノミ薰藥アリ、諸病ニ用フルコトヲ知ラズ、食道ヨリ回ハリカヌル所必ズ氣道ヨリ能ク回ルナリ、翁ノ作方ナリヤ、傳所アリヤ、知ラズ、若シ作方ナラバ天下未曾有ノ名醫ト稱シテ耻ナカルベシ』^①蓋シ薰藥ノ方ハ支那ニアリテハ古代ヨリ行ハレ、千金方ニモ薰咳嗽之法アリ、後世、醫學綱目・南陽活人書ニモ薰藥ノ方アリ、我が邦ニアリテモ鎌倉時代ノ萬安方ニモ翰良方ヲ引テ火角法ヲ載セタリ、コレ即チ薰法ナリ、故ニ薰藥ノ方ハ徳本ニ出デタルニハアラザレドモ、古人ノ既ニ唱道セル薰藥ヲ活用セシハ徳本ノ功ナリト言フコトヲ得ベシ。徳本ノ著述ニシテ世ニ傳ハルモノハ甚ダ稀ナリ、且ツソノ信偽相半バス。故ニ左ニソノ書目ヲ掲載スベシ。醫之辯、一卷。平野革谿ガ徳本眞蹟ヲ摹刻セシモノ。乙酉歲（天正十三年？）ノ跋アリ。知足齋醫鈔、一卷。コノ書ハ安永五年甲斐ノ人磯野汝行ガ早川某ノ家ニ傳ハレルトコロノ徳本禁方ヲ得テ梓行セルモノニ係ル。（後段、徳本翁十九方ノ條下ヲ参考スベシ）

徳本遺方、一卷。小嶋蕉園ガ早川氏ノ秘書ヲ鈔寫セリト稱スルモノニシテ、前記ノモノトソノ内容略ボ同一ナリ。

藥方書、殘缺一卷。鈔本世ニ傳ハル。徳本翁遺方、二卷。コレハ伊豆ノ人中村靜齋ガ甲斐ノ醫、市川南屏ヨリ得タルモノナリト稱ス。コノ書中所載ノ方ハ大抵、知足齋醫鈔ニ載スルトコロニ符合ス。

梅花無盡藏、三卷。明和年中荻野子元ガ校刊セシモノ、廣ク世ニ傳ハル。卷尾ニ慶長十六年辛亥二月二十六日知足齋徳本コノ書ヲ政貞ニ授與セシ趣ノ跋文アリ。別ニ異本二三種アリ。多紀氏ノ舊藏本ニ、梅花無盡藏纂紛、一卷アリ。ソノ方ヲ案ズルニ後世ノ方ニシテ徳本ガ主張セル古方ニアラズ。之ヲ醫之辯・知足齋醫鈔ニ比スルニ全く別人ノ撰述ニ係ルコト明カナリ。思フニ、コレ徳本ガ初メ李・朱醫學ヲ修メシトキニソノ師家ヨリ傳ヘタルモノヲ、徳本ノ著述ト誤マリ傳ヘシモノナラン。

徳本翁十九方、二卷。遠江ノ人和久田叔虎ガ刊行セルモノニシテ、ソノ原本ハ稻葉文禮ガ富士山下ニ異人ニ遇フテ傳ヘタルモノナリト稱ス。然レドモ、コノ書中所載ノ方ハ知足齋醫鈔等ト相同ジカラズ。小嶋蕉園ノ蕉園漫筆ニコノ書ノ僞本ナルヨシヲ辨ジテ曰ク『甲斐ノ山梨郡ニ小原村ト言フアリ、ソノカミ我レソノ縣令タリシトキ、配下ノ村ナリ、ソノ村ニ早川五兵衛ト言フ郷士アリ、ソノ先祖ノ肥後守ノ子ナリヤ、徳本ト無二ノ友ニシテ、甲斐ニアルトキハ、イツモコノ内ニ止宿スト言フ、今ニ至ルマデ徳本ノ書キヲキタルモノ數通アリテ、實ニ自書ト見ユ、右ノ徳本ノ方書ハトゞメオキテ、家人モ見ヌコト世々申シ傳フ、夫ヲツノツテ見レバ目ツブルナド、云フコトナリシガ、某配下ノモノナレバ、命ニ從テ持來リ殘ラズ寫シ置キヌ、予ガ醫友ニ甲斐ノ人磯野弘道ト言フアリ、ソノ父ヲ原泉トイフ、岑少翁ノ門人ナリ、小原村ノ五兵衛（早川）大病ノ折衆醫ミナ辭去セシトキ、江戸ヨリ古醫方ヲ學ビ得テ歸リタリ、因テ診ヲ乞シト言フ、コノ原泉、五兵衛ガ家ニ徳本ノ醫方アルコトヲ知り、治サバ謝禮ニ一見ヲ得セシメヨト、約シテ療ス、若シ申傳ノ如ク開キ見テ眼潰ブルルコトアラバ、我等ガ眼潰ブルベシト言ヒ置キシニ、終ニ五兵衛ガ大病治シタリ、因テ原泉一人コノ書ヲ見テ之ヲ寫セシト言フ、世ノ十九方ト言フ書ハ甲斐ノ異人ニ遇フテ傳來スト言フ序文モアレドモ、コレハ方名同ジクシテ藥味異ナリ、コレハ近世京師ノ稻葉維伸ト言フモノ、實ニ此ノコトヲ聞及ビテ甲斐ニ赴ムキシニ、果シテ原泉ニ逢フテ乞ヒシナリ、コノ原泉ハ忤弘道トチガヒテ、方法ヲ惜ムコト千金ノ如シ、殊ニ骨折テ漸ク得タル珍方ナレバ、容易ニ許シ難ク、維仲ガ懇望モ亦空シクシ難ク方名バカリ同ジク藥味異ナレル僞書ヲ作りテ、其内ニ方バカリ正明ノ方ヲ書テ與ヘント言フ、其僞書ノ下書ハ忤ノ弘道予ニ戲ニ見セタリ、原泉ハ維伸獨リヲ欺キ、其僞書刊行シテ天下ノ人ヲ欺ク、嘆ズ

ベシ」ト記セリ。依リテ徳本翁十九方ノ僞作ノ由來分明ニシテ磯野ガ刊行セル知足齋醫鈔、小嶋蕉園ガ刊行セル徳本遺方等ガ眞ニ徳本ノ遺方ヲ傳フルモノナルコトモ明瞭ナルベシ。

知足齋徳本祕方、一卷。藥物論、一卷。脉論、一卷。徳本流灸治法、一卷。針穴祕傳、一卷。等ハ恐クハ徳本ノ所傳ヲ誤マリテ遺著ト傳ヘシカ、或ハ後人ノ假托ニ出デシモノナルベク、コレニ依リテ徳本ノ醫方ヲ窺フコト能ハザルナリ。

外科

室町時代ノ末葉ニ金創醫ノ一派ヲ生ジテヨリ、外科ハ瘡家又瘍科ト金創醫トノ二派ニ分離セリ。瘡家又瘍科ハ專ラ癰疽・疔癤・瘰癧等ノ諸瘡ヲ治シ、古ヘニ創腫科ト名ヅケシモノニシテ、コノ期ニハ鷹取流ノ外科ト南蠻流ノ外科トアリテ對峙セリ。而シテコレ等ノ外科ニアリテ固ヨリ瘡ヲ兼ネ治スト雖モ、戰國ノ世、武ヲ尙ビ、戰フ毎ニ創ヲ蒙ルモノ多キニヨリ、士林ニアリテ、專ラ瘡ノ治術ヲ攻究スルモノ尠カラズ。ソノ術漸ク弘マリテ、所謂金創醫ノ一派ヲ生ズルニ至リシコトハ、既ニ前期醫學ヲ論ズルノ條下ニ於テ之ヲ述ベシガ、コノ期ニハ金創醫ニ吉益・中條等ノ名家ヲ出ダスニイタレリ^⑧。

金創醫ハ外科ノ一派ニ屬スト雖モ、産術ヲ兼ネ施シ、尋常ノ外科トハ區別シテ擧グベキモノナリ。南蠻流外科ハ西洋醫學ノ傳來ニヨリテ起レルモノニシテ、ソノ條下ニ詳説スベキヲ以テ、今ハ單ニ鷹取流ノ外科ニ就テ記述スベシ。

天正、慶長ノ交、播磨ノ人、鷹取秀次（通稱甚右衛門尉）古法ヲ傳ヘ外療新明集・外療細壘ヲ著ハシ、外科ヲ以テソノ名ヲ顯ハス、之ヲ鷹取流ト曰フ、黒川道祐ノ本朝醫考^⑨ニ『本朝瘍科、凡有三兩家一稱三高取一、是本朝所傳也』トアルハ、即チコレナリ。秀次ノ子理齋亦外科ヲ以テ名アリト言フ。惜イカナ鷹取ノ傳ハ、佚シテ今ニ傳ラズ。

外療新明集ハ天正九年鷹取秀次ガ撰述スルトコロニシテ、全部三卷、ソノ上卷ニハ外科ノ疾病ヲ論ジ、中卷ニハ各病ニ對シテ用フベキ藥方ヲ擧ゲ、下卷ニハ藥物ノ性味ヲ記述シタリ。外療細壘ハ慶長十一年乃至十五年、鷹取秀次ガ撰述スルトコロニシテ、全部三卷、上卷ニハ外科ノ疾病ヲ論ジ中卷及ビ下卷ニハ診斷、藥方、及ビ膏藥等ヲ叙述シタリ。

外療新明集・外療細壘、二書ニ記載セル疾病ノ稱呼ハ、大凡左ノ如シ。

瘡瘍

癰疽（ヨウソ）癰ニ大癰・連癰・脊癰・肩癰・粟癰・蟲癰・立癰・束癰・亢癰等アリ、疽ニ石疽・束疽・丘疽・馬疽・腦疽・猪疽・結疽・喘疽等アリ
疔（チャウ）半疔・腦疔・色疔・句疔・黒疔・紅疔等ヲ始メトシテ數々ノ種類アリ
瘡（カサ）冷瘡ト熱瘡トヲ區別ス

丹毒（クサ）草トモ書ス、色ト形ニヨリテ數種ニ區別ス

風腫・風毒・風毒腫 風腫・風毒ハ肉ノ厚キ所ニ出ヅル腫物ニシテ（寒膿腫ノ類カ）風毒腫ハ骨ノツキメニ出ヅルモノナリ（關節炎）

熱腫 急ニ腫レテ色赤クウヅク物ナリ（膿腫）

難腫（ナンシユ）初メハ少シ腫レ、後ニハ潰ヘ久シウシテ癒ユ

兵疽（ヒヤウソ）

附骨疽(スネクサ) 膿ミテ骨碎ケテ出ヅルモノナリ
風陰(カサボロシ)

發眼(ホツカ) 繁ク出テ廻リカタクシテ蠶ノ形ノ如クナル物ナリ
瘰癧(ルイレキ) 瘰ノ類ナリ

馬頭瘡(バズサウ)

裏蟲(リチウ) 又ハ(ザクロムシ) 柘榴瘡ノコトヲ言フ、手足ノ裏ヲ蟲クラフナリ

癭瘤(コブ) 五癭六瘤アリ

疣目(イボ)

熱沸瘡(アセボ) 又ハ(ネツホツサウ) 暑氣甚シキトキ出ヅ、又ハ風熱ナリ

癩瘍(ナマズ) 鯰ノコトナリ、黒ナマヅ白ナマヅアリ

濕瘡(シツサウ) 細ナル瘡身中ニ出テ疥キモノナリ、殊ニ春秋オコルモノニシテ濕ヨリ出ヅルナリ

風癬(タムシ) 風癬・痒癬・錢瘡ト名ヅクル物ハ皆田蟲ノコトナリ

紫癬(シセン) 黒風トテ細ナル瘡ナリ、殊ノ外カユシ

楊梅瘡(ヤウハイサウ) 世俗唐瘡ト言フ物ナリ、又天疱瘡ト名付ケタルモノアリ、或ハ綿花瘡ト名付ケタルモノ

アリ、又氣腫トモイフ

疱奇(ハウキ) 疱瘡ノ後、毒熱ノコリテ何クトモナク腫ルモノナリ

寢痒(シンヨウ) ネガキナリ、瘡ニ成テ疼ムナリ

童子頭瘡 童子ノ頭ノ髪ノ中ニ出ヅル瘡ハ專ラ蟲ワキ食フ故ニ瘡トナルナリ

脛中瘡(ケイチウサウ) 小兒足瘡ナリ

蓮根(ハスネ) 小兒ノ頭ニ出ヅルモノナリ

面皰(ニキビ)

皴裂(アカガリ)、

逆臚(ギヤクロ) 又ハ(サカムゲ)

漏腋(ワキガ) 脇腋トモ言フ、又脇香トモ書ク

禿瘡(シラクボ) 赤禿・白禿ト言フ瘡ナリ、或ハカブロ瘡トモ曰フ

石疱(ウオノメ) 世俗魚ノ目トイフモノナリ

肉判(ニクハン) 指ノ胯ニ定マツテ出ヅルモノナリ

疵痣(アザ)

夏疱(カワウ) 又ハ(カシラハゲ) 小兒ノ額ニ出ヅル、カシラハゲト言フモノナリ

尻瘡(シリカサ) 居敷ニ出デテ汁氣モナキモノナリ

腰蟲(ヨウチュウ) ヌレハダ帶ナドシテ必ず出ヅルモノナリ

雜熱(ザウネツ) 何トモ知レズ腫ルルモノナリ

顏瘡(カオガサ) 何ニテモ顔ニ出ヅル瘡ナリ、白屑・疱瘡「ヲモクサ」又ハ「ウロコタツ」ナドトイフモノナリ

滅盤（メツハン）何瘡ニテモ惡シク癒エタル迹ヲ言フ。

雪燒（ユキヤケ）又ハ（シモヤケ）寒キ時指コゴヘテ膿潰テ腫ルルモノナリ

毛髮

鬼舐（キシ）キシトイフ足長キ蟲、ネプリテハグルコトアリ

髮毛（ハツモウ）カミノ毛ノ疾ナリ、髮毛ノ折ルルコトアリ、又髮毛俄ニ白クナルコトアリ

目病

目疔（イモライ）目ノフチニイボノ如クニ出テ煩ラウナリ

ヤミ目

ツキ目

爛目（タタレメ）

星（ホシ）

鼻病

鼻鼈（ビイヨウ）或ハ（ハナノヤマヒ）萬ノ鼻ノ病ヲイフ、或ハ鼻鼈ト言フハ鼻ノ内ニ肉イデ香ヲキカズ、甚シキトキハ膿血出ヅルモノナリ

酒瘡（シユサ）鼻ノサキ赤シ、又酒瘡鼻トモ言フ

口中病

喉痺（コウヒ）

喉風（コウフウ）

喉腫（コウシュ）

喉熱（コウネツ）

喉蛭（コウシツ）

喉物立（カウモツリウ）喉ニ物立ツナリ、珠ニ魚ノ骨ノ立ツコト多シ

舌病

重舌（テウセツ）

木舌（モクセツ）

金舌（キンセツ）

鵝口瘡（ガコウサウ）小兒ノ舌ノ上ニ米ノ粉ヲ塗タル如クニ出テ廣クナリ、唇マデ白クナル、俗ニ舌朶シタセントキトイ

フ

舌強（セツキヤウ）

齒病

齒痛（ハイタム）

斷腫

齒根スヒテ動ク

蟲クヒ齒

齒草（ハクサ）

唇病

緊唇（キンシン）
瀋唇（シンシン） 俗ニアタチト言フ
生核唇（シヤウガイシン）
唇瘡（シンサウ）
黑唇（コクシン）
缺唇（イグチ） 胎内ニ居ルトキ、エナガ傾ムキ口ニカカリテコノ疵アリト言ヘリ

耳病

耳鳴
耳瘡（ミミノカサ）
耳ダレ
耳腫

乳病

乳腫（チハレ）
乳癰（ニウヨウ）
乳風（チカセ）
乳草（チクサ）
乳癭（ニウロウ）

陰部病

便毒（ベンドク） 世俗ニ横根トイフモノアリ
妬精瘡（トセイサウ） 男女陰ノ腫ルル病ナリ
痔瘻（ジロウ） 痔トハ穴ノハタ又ハ穴ノ内ニ大豆粒ホドハレフクレ潰テ膿血出ヅルナリ、瘻トハ四五寸モ穴ノワ
キニ出テ潰テ膿汁出ヅルモノナリ
内痔（ナイジ）
ヲエ痔 囊ノ貌ホド、穴ノハタニ出デテ、甚ダ痛ムナリ
裸病（ラビヤウ） 男ノ陰腫レ破ブレ煩フナリ
大陰（ヲホヘノコ） 又大陰核トモイフ
大囊（ヲホフクロ）
陰腫 玉門ノ腫ルルナリ
陰痺
陰脫（インダツ）
玉門痛
開茸（カイシユウ）
開入蛇（カイニウシヤ） 玉門ヘクチナワ入りタルコトナリ

創傷、刺傷、中毒

毒蟲

毒蛇

折傷（セツシヤウ）又ハ（オリヤブル）

金創

腸出（ハラワタイヅ）

灸瘡（キウサウ） ヤヒトノ迹瘡ニナリタルヲ言フ

湯燒（トウシヤウ）

火燒（クワシヤウ） ヤケドノ痛タムヲ言フナリ

馬殞（ハソン） 馬ニカマレタルヲ言フナリ

狗殞（クソン） 狗ニカマレタルナリ

鼠殞（ソゾン） 鼠ニカマレタルナリ

自溢（ジイツ） 頸ククリ死スルモノヲイフ

溺水（デキスイ） 水中ヘハマリ水ヲ吞ミ死シタモノヲ言フ

寒死（コゴヘシニ） 雪中ヲ歩ミ、ココエ死スルモノヲ言フ

食違（シヨクイ） 魚ノ毒、又ハ茸ナドニ酔ヒタルコトヲ言フ

雜病

脚氣（カツケ） 足膝痛ムモノナリ、世俗ニモ常ニカツケト言フナリ

癩病（カツタイ） 又ハ（ライビヨウ）

難痢（ナンリ）

齧齒（カイシ） 又ハ（ハカミ） 夜寢ネテハギシメスルナリ

心痛（シンツウ） 胸蟲^{ムネムシ}ナリ、

俄腹（アタハラ） 俄腹痛ナリ

小兒疳氣（カンケ） 又疳司^{カンシ}ト言フ

チリゲ 痰飲ノコトカ

狂病（キヤウビヤウ）

癩癩（テンカン）

我が邦古代ノ外科ガ瘡瘍ノ治方ヲ主トセシコトハ創腫科ノ名稱ノ存セルニテ知ラルベク、又コノ期ニ癰疽ノ治方ヲ擧ゲタル專書^ヒノ存スルニテモ知ラルベシ、鷹取流ノ外科モ亦古方ヲ傳ヘテ、ソノ治方ハ癰疽及ビ疔ヲ主トシタリ。

癰疽

癰ハ浮ビテ腫レ淺シ、疽ハ堅ク、深く痛ミ強シ、癰ハ腑ヨリ根ヲナシ、腫ルルナリ、疽ハ臟ヨリ根ヲサシテ起ルナリ。

大癰 頸ノ廻リニ出ヅ、サノミ高カラズ、幅廣ク成テ、ソノ色紫色ニテ、頭ニキビノ如クナルモノアリテ、底シタタルク、痒キモノナリ

連癰 内股或ハ莖ナドニ出ヅ、何ヅレモ陰部ニ起ルモノナリ

背癰 背ニ出ヅルモノナリ

肩癰 肩先ニ出ヅルモノナリ。

粟癰 脇ノ下、或ハ股ノ附ギワニ出ヅルモノナリ

蟲癰 手足ニ出ヅルモノナリ

立癰 臍ノ廻リニ出ヅルモノナリ

束癰 膝ノホトリ、或ハ外股ニ出ヅルモノナリ

亢癰 頭ニ出ヅルモノナリ

コノ外ノ癰ハ何レモ輕キモノナリ、總ジテ癰ノ皮ハ薄キモノナリ、疽ノ皮ハ厚クシテ深キモノト心得ヨ

石疽 外股或ハ尻コブタノ廻リニ出ヅルモノナリ

束疽 腰ノ廻ハリ、或ハ章門ノホトリニ出ヅルモノナリ

癰疽 大略背ニ出ヅルモノナリ

丘疽 手ニ出ヅルモノナリ

馬疽 居敷ニ出ヅルモノナリ

腦疽 頭或ハ項ニ出ヅルモノナリ

束疽 陰ニ出ヅルモノナリ

猪疽 脇ノ下或ハカイナニ出ヅルモノナリ

浮骨疽 脚ニ出ヅルモノナリ

結疽 耳ノホトリニ出ヅルモノナリ

喘疽 クビノ廻リニ出ヅルモノナリ、或ハ骨ニツイテ出ヅルモアリ

何ヅレモ疽ト名ヅケタルモノハ易カラズ、痛ミ氣分殊ノ外アシキモノナリ

疔

黒疔 頂ノホトリ皆ナ黒ク赤クシテ粟粒ノ如クナル、赤キモノアリ、石ヲ忌ベシ

牛疔 カシラ高シテ赤ク、ソノマワリ少シ黒フシテ痛ム、牛ヲ見ルコトヲ忌ベシ

句疔 色赤シ、カシラニ梁粒ノ如クナルモノアリ

腦疔 色赤シ、カシラ四角ニシテ錢ノ穴ノ如シ、色赤シト言ヘドモ少シ白キヤウニモアリ

紅疔 色ノ赤キコト、ベニヲサシタル如シ、カシラ三角ノ形アリ、酒ヲ忌ベシ

色壬疔 シキレン カシラ尖テ、輪マワリ、カシラノ廻リ、ウス黒ク、其外ウス赤シ

雌疔 チ 色黄赤ク成テ、カシラ、錢ノ穴ノ如クニ、フクレ出テ腫ルモノナリ

雀疔 色赤シ殊ニカシラ赤シ

雄疔 色赤クカシラ錢ノ穴ノ如クナリ

赤疔 色アカウシテ頭ラ三角ナリ

早疔 色赤シ、カシラ黒キナリ

離疔 色アカシ、殊ニカシラ赤キナリ

内疔 色赤シ、ウス黒キ輪ニツ三ツアリ

麻疔 色赤シ、カシラニ黒キ輪アリ、其外ニ又赤キ輪アリ

火疔 色黒シ、カシラ、殊ニクロシ

赤疔 色黒シ、廻ノ輪少シアカシ

煙餘疔 エンヨ 色黒シ、カシラアカシ

喉疔 色ウス紫ナリ、カシラ少シ黒シ

分丸疔 ブンゲワン 色ウス紫ナリ、カシラ少シ赤シ

薄疔 色ウス紫ナリ、カシラ尖リテ粟粒ノ如クナルモノアリ

水疔 色ウス紫ナリ、カシラ黒ク赤クシテ、粟粒ノ如クナルモノ端ニ出ルゾ

衰疔 色ウス紫ナリ、カシラ少シ尖リテ黒シ

節疔 色ウス紫ナリ、カシラ少シ尖リテ赤シ

附疔 色ウス紫ナリ、カシラ少シ黒シ

陸常疔 リクシヤウ 色ウス紫ナリ、カシラ少シ白シ

堯光疔 ゲウクワウ 色ウス紫ナリ、カシラニ、輪アリテ赤シ

蛇眼疔 色ウス紫ナリ、鐵ヲ忌ベシ

疱將疔 ハウシヤク 色ウス紫ナリ、カシラニ、黒キ輪アリ、外ニモ又赤キ輪アルゾ

浮息疔 色ウス紫ナリ、カシラ、三角ナリ、三角ノ中ハ赤シ、外ニ粟粒アルコトアリ

石疔 色ウス白ク、ウス赤ク、カシラ、黒ク、肉ニ連リ、出ルモノナリ

間伴疔 ケンバン 色ウス白ク、ウス赤ク、カシラ、錢ノ穴ノ如ナリ、ワキニ、粟粒アリ

蘭疔 色ウス白ク、ウス赤ク、腫ノ中、ウミケダチ、水ケダツ、火ヲ忌ベキナリ

浮颯疔 フソウ 色ウス白ク、ウス赤ク、フジコブ立テ、フクレ、腫ルナリ、カシラ、三角ナリ

三十六疔 色ウス白ク、ウス赤ク、コマカナリ、黒キ、粟粒ノ如キモノアリ、火ヲ忌ゾ

鹽疔 色ウス白ク、ウス赤ク、殊ニカラシテ、赤クシテ、小豆ノ如シ、何ニテモ、シワハユキモノヲ忌ム

蓮癰疔 レンヨウ 色ウス白ク、ウス赤クシテ、カシラ柘榴ノ實ノ如シ

コノ如ク、癰疔トノソノ深淺ニヨリテ區別シ、又ソノ形狀・色澤・部位等ニヨリテ癰疽及疔ニ許多ノ名稱ヲ附シ、脈狀ヲ詳ニシテ之ヲ診斷スベキコトヲ説ク等ハ、隋・唐以下ノ方書ニ載スルトコロニ異ナラズ。但シ鷹取ノ外科ガ、人神ノ説ニヨリ、癰疽及疔等ガ、ソノ瘡瘍ノ性狀ニヨリテ豫後ニ良悪アルノミナラズ、發生ノ部位ノ如何ニヨリテ、良性ノモノモ豫後險惡トナリ、悪性ノモノモ豫後佳良トナルコトヲ説キシハ、特ニココニ之ヲ擧グルノ要アリトス。蓋シ人神ノ説ハ我が邦ニアリテハ平安朝時代ニアリテ盛ニ行ハレ、續古事談ニ『富家殿灸治シ給ヒケルニ重康申サク、日神股ニアリ、ヤキ給フベカラズ、兄忠康申サク、内股外股憚ルベシ』朝野群載ニ和氣相秀ガ蛭食ノ勘文ヲ載セタルヲ見ルニ『勘ニ申御蛭喰吉日』 今月二十六日己卯人神在胸中。來月十二日甲午神在左乳

一。右御蛭喰吉日勘申如レ件。康平四年四月二十四日。權醫博士和氣相秀』トアリ。人神ノ所在ヲ詳ニスルコトハ重ク視ラレシトコロナルガ、鎌倉時代ヲ經テ室町時代ニ至リテハ人神ノ説ハ漸クソノ勢力ヲ失ヒ、福田方・續添鴻寶秘要鈔等諸書ニモ深クコレニ注意セズ。而シテ鷹取流ノ外科ハ秘密ノ法トシテ、人神ノ所在ヲ詳ニスベキコトヲ説キ、以テ古代ノ説ヲ復興シタリ。ソノ説ニ曰ク『疵ヲ蒙ムル人、ソノ時ニヨツテ身ノ人神ノアル所ヲ詳ニスベシ、次ニ掲グル所ハ各年齢ニアリテ人神ノ在ル所ノ部位ヲ示スモノナリ。ソノ歳ニ當リテ癰疔、或ハ何ニヨラズ、ソノ人神ノ在ル所ヲ破リ血ヲ出セバ煩フナリ。

額 三、二十、二十五、三十一、六十、九十一

兩耳下 十九、二十三、二十五、三十九、五十一、五十五、六十一、八十七

兩肩 二十四、四十、五十六、六十三、六十六、六十七

兩脇 十六、二十六、三十二、五十六、六十四、八十

背 十九、二十三、四十九、五十七、六十五、六十七、七十二、七十三、八十一

尻 十一、十五、二十一、二十二、二十三、三十三、四十六、五十九、六十三、七十五、九十一、九十二

十二

兩足 十三、二十五、二十九、六十一、七十三、九十三

又或ハ一歳ハ背。二歳ハ脚。三歳ハ頭。四歳ハ肩。十一歳ハ閏胸ヘノコ。十二歳ハ脇股。十三歳ハ胸。十九歳ハ耳背

間。二十八歳ハ頭。二十一歳ハ足。二十二歳ハ脚。二十八歳ハ喉肩。二十九歳ハ背足。三十一歳ハ額腹尻。三十三歳ハ肩。三十七歳ハ胸。三十九歳ハ尻。四十歳ハ脚。五十五歳ハ背耳腹。五十六歳ハ腰額。五十七歳ハ背股。五十八歳ハ肩腹胸。六十四歳ハ眉小腹。六十六歳ハ腰。七十八歳ハ目肩、右ノ所ニソノ年、疵ヲ蒙ムルカ、或ハ腫物出ヅレバ惡症ナリ』^⑩

コノ如ク人神ノ所在ニ從ヒ、險惡ノ部位ニ惡瘡ノ發生セル場合ニ方リテハ、ソノ豫後ヲ危險ナラシムルノミナラズ、コレニ針スルコトヲモ得ザルニヨリ、遺藥ヤリクスリ（一二喚藥ヨレクスリ）ヲ用ヒテ難處ニ出デタル瘡ヲ別ノ處ニ遣ルノ方ヲ立ツルニイタレリ。

瘡腫ノ治方ニツキテハ藥治・水治・灸治・針治・祭治ヲ別チ・藥治ニハ内藥・洗藥・膏藥フスキクワ・薰藥フスキクワアリ、針治ニハ

鍼アリ、火針アリ、搔針（瀉血）アリ、針ヲ立ツルニモ部位ニヨリテソノ方法ヲ異ニシ、伐針・破針・指針・曳針・

縫針・救針ノ別アリ。伐針キリバシトハ縦ナル所ニ横ニ立ツルヲ言ヒ、破針ヤフリバシトハ横ナル所ニ縦ニ立ツルヲ言ヒ、指針サシハリトハ直

ニ立テ、曳針ヒキハリトハ横ニ引キ、縫針ヌイハリトハ針先ヲ上ゲテ手元ヲ下ゲ縦ニ立ツ、救針スクヒハリト言フモ同様ナリ、又鐵針ヲ用フル

コトアリ。

癰疽ヲ治スルニハ、先ヅソノ頭カウラニ灸スベシ、或ハ針ヲ立テ（若クハ針スルコトナク）拔藥ハキスリヲ入レ、ソノ周圍ニ結

藥ハキスリヲツケ、破潰ノ後ハ洗藥ハキスリニテ能ク洗ヒ、愈藥ユイヤク（四白散）ヲ入レ、又地藥チヤクヲ入ルベシ。

拔藥ハキスリ 破通ニ朱篤豆一朱右何ヅレモ、細末ニシテ、サト芋ヲ能クヤキ、是ニテ兩味ヲネリマゼ、丸トナシ、朱ヲ

衣ニシテツケヨ、或ハ紙ニテ蓋ヲセヨ。

結藥 シメクスリ 青木葉ヲ粉ニシ、榆皮ヲ三分一加へ、梅ノ酢ニテ延ベテ付ケ・上ニ紙ヲ細カニシテツケヨ。

洗藥 アラヒクスリ 洗藥ノ方多シト雖モ、先ヅ用フベキハ荷葉・藤胞・忍冬・車前・蘩・石菖・桑・杉葉・木瓜・槐・井柳・蕎麥藁ノ洗汁ナリ。

愈藥 イヤシクスリ 愈藥ニハ四白散・強白散・三白散・住吉藥等アリ、白藥ト言フハ鹿角・古米・田中螺・芋根・胡粉・石灰・明礬・黑蛤・輕粉・石膏・牡蠣等三十五種ニシテ、主ニ用フルハ四白散ナリ、ソノ方鹿角白燒・葛粉・天南星・古米穀 各等分 右髮ノ油ニテ付クルナリ。

地藥 ヂクスリ 忍冬葉ヲ用フルヲ良トス。

内藥トシテハ十全内補散ヲ用フ、ソノ方當歸・人參・黃耆 各一兩・川芎・白芷・桂心・防風・桔梗・厚朴各一匁 甘草 半匁 右何ヅレモキザミ煮法常ノ如シ。コレヲ癰疽ノ初發ニ用フレバ速カニ散ジ、未ダ膿マザルモノハ之ヲ潰スノ效アリ。

針灸ノ術ハ、之ヲ施スニ注意ヲ要シ、腫物 ハレモノ (癭瘤) ニハ漫ニ針灸スベカラズ。風毒腫ノ初期ニ針灸シ、頭及ビ項ノ瘡瘍ニ灸シ、便毒ニ漫ニ針シ、又ハ足及ビ腕ニ鐵針ヲ立ツルコトハ之ヲ禁ズベシ。癰ニ火針 ヒバリ (烙針) ヲアツルコトハ、大ニ惡シキコトナリ、喉ニ針スルコトモ喉腫ニハコレヲ嚴禁スベシ、又吹藥ヲ用フルモノアリト雖モ、コハ破爛ヲ促スノ弊アリ用フベカラズ。丹毒ニ搔針 (瀉血) ヲ施スモノアレドモ、甚ダ不可ナリ。

疔ニツキテハ、冷ト熱トヲ診別シ、熱疔 (火疔・煙疔・蘭疔・赤疔・麻疔・浮疔) ニ灸スルコトヲ避クベシ。但シ秘灸ハ寒熱ニ拘ラズ早く施スコトヲ要ス (即チ腰ヨリ上ニ出デタラバ手ニ灸スルコト三壯ナルベシ)。スベテ惡瘡ニ灸ヲ施スハ熱ヲ散ゼンガタメニシテ、灸シテ熱散ゼザレバ死スルナリ。秘灸ハ惡瘡ノ部位ニ惡血ノ集マルヲ防ガシガタメニシテ、寒熱ニ拘ラズ早く施スベシ。

水治ハ熱ヲ散ズルノ目的ニ用フベシ。『熱疔ヲバ冷スベシ、冷シ様ハ、桶ノナキ輪ノモトニ穴ヲ明ケ、桶ヲアケテ腫レタル所ニハ藍染ノ物ヲアテ、ソノ上ヘ水ヲカクベシ、フルウホドニ冷スベシ。又癰疽ノ熱スルトキ、潮紅シテ疼痛甚シキトキハ蛭ヲ飼フベシ。』 (コレヲ名ツケテコシンハウヲ用フト言フ。) ²⁰⁾

祭治ト名ツクルハ咒ヒスルナリ。蓋シ病ヲ療スルニ符咒ヲ以テスルコトハ、平安朝、醫心方等ノ諸書ニ採用セラレ、鎌倉・室町兩時代ニアリテモ、尙ホ醫家ノ採用スルコトコロタリシガ、コノ期ニ及ビテハ、符咒ハ邪儀ナリトシテ之ヲ排斥スルノ説出デ、本道ノ醫書ニハ、コノ方法ヲ採用スルモノナキニ至リシガ、外科・産科・眼科等ニアリテハ、コノ方ハ猶ホソノ勢力ヲ保チ、殊ニ鷹取流ノ外科ニハ、之ヲ五治ノ内ニ算シ、祭治トシテ之ヲ稱揚シタリ。

試ミニ、茲ソノ一二ノ例ヲ擧グレバ、湯燒・火燒ノ咒ニ、『茶碗ニ清水ヲ入レテ、脂 ヤニ ニテ水ノ上ニ、中ニ車、兩ノ脇ニ石ト書テ、青篠ノ葉ニテ水ヲソソギ、火燒ノ上ニ振りカケ唱ヘル、文ニ曰ク、ヤケハダヲ、マジナヘバ、ウヅキ

ハ・シ・ラ・ズ、ア・ト・モ・ナ・シ、タ・ク・サ・ワ・ノ、ツ・ユ・ツ・ユ、ト三返唱へテ、フツト吹クベシ」ト言ヒ、蜈蚣ノ刺シタルヲ治スル咒ニ『イニシヘハ、タヌキメシミノ、今ハウクロモチノツチハナ艾ノ國ノカクリキカ袖ゾ、ト三返唱へテ、フツト吹クベシ』ト言フ無稽妄誕概ネコノ類ナリ。

金創ノ治方ニツキテハ、先ヅ初メテ手負テオイ(負傷者)ヲ見ルトキニ『日ノ玉ノ太郎ノ御子ニ我シアラハタマコナンチクコナンホロンソワカ』ノ咒文ヲ唱へ、次デソノ脈ヲ診ス『血ノ出ヅルコト甚ダ多クシテ脈虛細ナルハ生キ、實大ナルハ死ス、又急ニシテ大數ナルモ死ス』。出血ハソノ座ニテ留メ。次デ洗ヒテ藥ヲ附クルヲ法トス。重症ナレバ先ヅ問藥ヲ與ヘテ豫後ヲトスベキモ、重症ナラザルモノナレバ氣付ヲ與へ、血縛ヲ與へ、大事ナルモノヲ座敷ヲコシラヘテ置クベシ。切り下ゲタル疵ハ先ヅ之ヲ縫合スベシ。腸ノ出デタルニハ麥飯ノ溫暖ナルヲ布ニ包ミテ腸ヲ能ク暖メテ、負傷者ノ呼吸ニ從ヒ、靜カニ之ヲ還納スベシ。筋骨ノ切レタルヲ續グニハ先ヅ藥ヲツケテキウキウツウカウランナウラリソホソワカノ咒文ヲ唱へ、皮ノカカリテ存スルトキハ井柳ノ心ヲ入レテ離レタル骨ヲ繼グベシ。内藥ハ出血アル間ハ芎歸湯ヲ與へ、出血止ミテ後ハ内補散ヲ與フベシ。

止血藥 麒麟血・百霜・夜發・梔實・茄臺・蘇木・松陸・山橘・微茸・艾白・毛草

洗藥 蕎麥藁ヲ最良トス、ソノ他瘡腫ノ洗藥ヲ用フ。

問藥 見性散 骨髓三匁右一味、冬ノ土用ニホリテ陰干ニシテ、末シテ湯ニテ服用ス、コレヲ手負ニ吞マセテ見ヨ、生死知レルゾ、生キルモノハ切口へ出ヅルナリ

氣付キツケ 神蘇散 蒲黃・神草トツクツツ一匁・葛粉半匁・胡椒七粒・甘草一朱右何ヅレモ末シテ、一度ニ二朱ヅツ水、又ハ湯ニテ服スベシ、手負一切ノ諸病ニ氣ヲ失フニ用ユ

血縛チシバリ 人參・甘草・白芷・麒麟血・松綠・黃柏・紫河砂・合歡綠、右等分

芎歸湯 川芎・當歸、各等分、手負ノ内藥ニ專ラ用ユ

内補散 前ニ出ヅ

金創座敷 金瘡ノ座敷ヲ・コシラヘテ置クニ、五三ノシメヲ芒葉カサノハニテナへ、丑ノ歳ノ男子ニ、ナワセヨ、淫房ヲ知ツタモノニハ、ナワスルコト勿レ、サテ手負ノ居ル座敷ヲ、張り廻ハシテ、置クベキナリ、又東エ、サシタル桃木ノ枝ヲ一尺二寸ニ切テ、札ニケヅリ、コレニ■■■■以何因縁有淨有穢我心清淨身不能犯ノ文ヲ書テ上ヲバ紙ニテ張り・上書ヲ☆ノ如ク書キテ・守マモリニカケサセヨ、又シメニ挾テ置クベシ。

縫合法 布ヲ廣クタチテカキメヲ能クマツイテ強キ膏藥ヲアツク引テ、サガリタル皮目ニ付テ又其トヲリノウヘノ上ニ付テ、疵ニハ常ノ如クニ藥ヲ付テ蓋ヲ能クシテ、サテ太キ糸ニテ兩方ノ布ノ耳ヲカケヌイニ縫ヨセテ直スベキナリ。

以上記述スルトコロニ依リテ、之ヲ見ルニ鷹取流ノ外科ハ、隋・唐ノ醫方ニ依リテ、治方ヲ立テタルモノナレドモ、之ヲ同ジク隋・唐醫方ヲ宗トセル醫心方ノ外科ニ比スルニ、精詳ノ點ニ於テハ彼ニ及バズ。而カモコレハ親試經驗ニ徴シタル説ニシテ彼ノ醫心方ノ外科ノ單ニ支那ノ方書ヲ鈔出セルモノノ比ニアラズ。蓋シ鎌倉時代ヨリ室町時代ニ移リテ、我が醫學ガ實際ノ方面ニ向ヒ發展シ來リシガタメニ、遂ニコノ鷹取流外科ヲ生ズルニ至リシモノニシテ、固トヨリ偶然ニ茲ニ現ハレタルニハアラズ。而シテ黒川道祐^⑧ガ之ヲ本邦所傳トスルハ、當時新ニ興リタル南

蠻流外科ニ對シテ曰フモノニシテ、正シク言ヘバ、隋・唐ノ外科ニ參酌シテ、茲ニ外科ノ一派ヲ成スニ至リシニ過ギザルナリ。

金創醫

戰國ノ世ニ方リ、干戈日ニ相嗣ギ、創痍ヲ蒙ムルモノ甚ダ多カリシヲ以テ、士林ニ金創ヲ治スルノ専門家ヲ出ダシ、遂ニ金創醫ノ一派ヲ成スニ至リシコトハ、既ニ前期ノ章下ニコレヲ述ベシガ、コノ術ハ秘傳ヲ主トシ、僅ニ一藥方ノ差、一手術ノ別ヲ以テ流派ヲ分チ、吉益・中條・赤井・板倉・神保・板坂・曾我・永井・大野・轡田・藏貫・伴等ノ諸金創醫アリ。而カモ、ソノ治術ハ諸家大抵同様ニシテ、金創ノ重キモノハ先ヅ血縛ヲ與フ。コレ當座ノ氣付（興奮劑）ナリ、次デ出血ヲ止メ（血止藥）、疵ヲ洗ヒ（疵洗藥）、腸又ハ腦ノ出デタルハ之ヲ還納シ、疵ノ大ナルハ之ヲ縫合シ、筋及ビ骨ノ切レタルハ之ヲ續ギ、矢ナドノ立チ又ハ鐵砲ノ玉ノ入りタルハ之ヲ拔キ（拔藥）、次デ癒藥ヲ用ヒ、又内藥ヲ處スルナリ。

ソノ血縛トシテ用フルハ黃蘗湯（永井流）・定榮湯（吉益流）ノ類ニシテ、ソノ藥品ハ人參・白芷・黃蘗・甘草・麒麟血・合歡若綠・松綠等ナリ。コレ所謂當座ノ氣付ニシテ、一時ノ興奮劑タリ。氣付藥トシテハ人參散（吉益流）・蒲黃散（吉益流）・黑猫霜（板倉流）・清夏散（神保流）・青地ノ茶碗ノ粉（藏貫流）・續命丹（圓都寺流）ノ類ヲ用ヒ、血止藥トシテハ、麒麟血・石灰ノ類ヲ創傷ニ撒布シ、或ハ止血藥ヲ内服セシム。又血ノ道ハ父ト母トノタメナレバ、血ノ道止メヨ、脈ノ神ノ咒文ヲ三返唱ヘ、小刀ニテ三度ナデ、小刀ヲ裏カヘストキハ、血ハ止ムベシト説ク^ニ。疵洗藥トシテ用フルハ荷葉・黃柏・大バコ・ドクダミ・藤胞ノ類ニシテ、拔藥ハ磁石・生粟・干鮭等ノ處方（永井流）ヲ用フ。

愈藥ハ金創醫ノ重要視シタルトコロニシテ、各家流派ノ差別モ、主ニコノ方ノ相異ニ基ヅクト言フモ可ナリ。左ニ各派ノ愈藥ヲ掲グ。

吉益流 栗木皮・鹿角各一匁・古瀨麥一分 右爲^ニ黑燒^一、和^ニ青油^一、附^レ之^〇一方、括樓根・黃蘗等分爲^レ末附^レ之

永井流 蛇骨 一分・蛤貝 茶五服斗燒クベシ・鹿角・茶一服斗燒・烏賊甲 燒三服ホド・舵皮 一疋分・阿仙藥 少加 右細末シテ麻油ヲ以テ附ク

板倉流 鹿角・葛粉・天南星・古米穀、各等分、右髮ノ油ニテ附ケル（白藥）

轡田流 紫檀・川芎・白芷・檳榔・黃柏・蘇木・竹葉各等分甘草少麝香少加ヘテ煎ジ洗フ、内用スルトキハ竹葉ヲ去ル（流藥）

藏貫流 石灰三・蛇骨二・桑木灰一・阿仙藥一 右油ニテ附ケル（三國一）

神保流 天花粉・白鳥齒灰・蒲骨根、天花ノ如クニシテ各等分、右藥ノ汁ニテ附ル、又ハ油ニテモ付ル（琥珀散）

板坂流 黑蛤灰三・葛粉二、右能ク摺合セテ藥ノ汁ニテ附ル（二聖酸）

大野流 鳥貝灰・狼頭灰・寶膏生、各等分、右細末シテ捻カケヨ（安平散）

曾我流 青鳩灰・鹿腹コメ灰・蠣貝灰、右末合シテ青木葉ノ汁ニテ附ケル（九色散）

圓都寺流 天花粉春・葛粉夏・石灰各、合様口傳アハセヨウ（弘白散）

筋ヲ續グニハ蟹甲黄ナルモノヲ採リ・土器ニ入レテ陰乾トナシ、末ニシテ、筋間ニ之ヲ擦ル、若シ血脈ノ斷絶セルトキハ土龍黑燒ヲコレニ加フベシ（吉益流）。骨ヲ接スルニハ、白楊梅皮・土龍・右等分、末トナシ、梅醋ヲ以テ調勻、之ヲ貼シテ肉上ヲ覆ヒ、之ヲ淋洗ス。又切離セル骨間ニ燈心ヲ入レテ合スベシ（吉益流）。

内藥トシテ用フベキ藥方ハ諸流派ニ於テ、相同ジカラズト雖モ大都瘀血ヲ去ルノ目的ニ大黃・當歸・牡丹・紅花ノ類ヲ用ヒ、經絡ヲ通ズルノ目的ニ、防己・羌活ノ類ヲ用ヒ、和血ノ目的ニ地黃・紅花ノ類ヲ用ヒ、止痛ノ目的ニ黃柏・木通・薏苡仁ノ類ヲ用ヒ、調氣ノ目的ニ黃芪・人參・合歡。養血ノ目的ニ白芷・當歸・地黃。補胃ノ目的ニ白朮・舛麻・茯苓。益脾ノ目的ニ芍藥・茅根ノ類ヲ用フ。

金創醫ノ治方ヲ記載セルモノ吉益半笑齋ノ換骨秘錄（天正十三年）、宮木某ノ永井流金瘡秘傳、撰者不詳ノ伴越前流金創秘傳（兩書共ニ慶長以前ノ書）、鷹取秀次ノ外療細壘卷下、疵創之療治代々明方之事（慶長十一年）等アリ。コレ等ノ諸書ニ依リテ見ルニ、所謂金創醫ノ治方ハ大抵上記ノ諸項ニ過ギズ（前章『外科』ノ條下ヲモ參照スベシ）。之ヲ鷹取流外科ノ金創ノ治方ニ比較スルニ、一事ノ特殊ト認ムベキモノナク、却テソノ治方ノ多樣ナル點ニ於テ彼ニ及バザルトコロアルヲ見ルナリ。

眼科 26

前期馬島眼科興リテヨリ、穗積・良峯・山口・佐々木・橋本・酣韶・青木、等諸流ノ眼科相踵デ興リ、秘方ヲ以テ各々一派ヲ成シタリ。ソノ支那ノ眼科ニ依リテ、五輪八廓ノ說ヲ基本トシ、且ツ内障ヲ以テ主要トスルコト、馬島眼科ト選ブトコロアルナシ。

山口道本ハ天長・慶長ノ頃、内障眼ノ治術ヲ以テ馬島流眼科以外ニ一流派ヲ立テタルモノナリ。ソノ内障眼ノ治術ニ云ク、『針立ツル様ノ事 膿ニ二色アリ、膿内障ト曰フハイカニモ膿ネバルモノナリ、コレハ針數二十度ニ立ツルナリ、何モ七日寢セズ、三日横寢シテ又立ツルナリ。水ソコヒト云フハ膿ネバラズ、コレハ針一二本ノウチニテアクナリ』、『内障ノ針アテトノ事 ヒトミ（瞳仁）ト白眼ノ間、カミスチ三筋ノ間ヲオイテ立ツル、深サ三分ナリ、ヨク立マワスコト五六度又マワシ戻スコト三度ニテ抜クナリ』。ソノ七日ネセズト言フハ馬島流眼科ニテハ針ヲ立ツル後、七日ホドハ横寢ヲサセズシテ産後ノ如ク倚リカカラシムルニ反シ、三日横寢セシムルコトナクシテ足レリト言フナリ。又ソノ針ヲ立ツルハ、馬島流ニテハ墜下法・截開法・破壞法ノ三種ヲ用ヒタレドモ、山口流ハ上記ノ如ク、刺シタル針尖ヲ回轉シテ圈狀ヲ劃キ以テ水晶體核ヲ破壞スルノ法ヲ主ニ用ヒシナリ。

山口流眼科ハ又内障眼ノ手術ニテ治スベキモノト治スベカラザルモノトヲ區別シ、次ノ如ク説キタリ。

『不叶内障見様ノ事（不治ノ内障眼ヲ診スルノ法ト言フノ義ナリ）

黒内障トテ、瞳大ニナル、惡キ目ナリ、養生一圓無益ナリ、針ヲ刺シテモ叶ハズ

黄内障トテ、猫鷄ノ目ノ如クナリ瞳大ニシテ、針ヲ刺シテモ驗ナシ

白内障トテ、自然針ヲ刺シテ膿ナド出デテ能クナルコトアリ、ヨク／＼見分クベシ

血内障トテ、カカリタル血少クナルヤウナラバ針ヲ刺シテ見ルベシ

石内障トテ、瞳小クシテ見ガタシ、コレモ捨針ヲ刺シテ見ルベシ

青内障トテ、枇杷ノ色ニテ少シク色付クナリ、針ヲ刺シテ見ルベシ、一度刺セバ知レルモノナリ』

マケヒル（翼狀贅片）ニ『鉤ニテ、ハシヨリ、ソロリトカケテ、切トリ、ソノ跡ニ熱金（烙鐵）ヲ少シツツ當ル』ノ手術ヲ施シ。血目（結膜充血？）ニ『鼻柱ニテ血ヲ取りテヨシ、三度四度モ取ルベキナリ』トテ、瀉血（誘導法）ヲ施ス等ハコノ流ノ眼科中、注目スベキコトナリトス。

山口道本ノ傳ハ佚シテ傳ハラズ。山口道本内障一流養生の傳鏡ノ一書、僅ニソノ術ヲ傳フルノミ。

橋本流眼科ハ朝鮮人張膏ニ出ヅ。初メ文祿、朝鮮ノ役ニ張膏（字ハ甘子、提山ト號ス）ト言フモノアリ、我が兵ノタメニ俘トセラレ、來タリテ我が邦ニアリ、眼科ノ治療ヲ善クス。讃岐ノ人渡邊氏、ソノ術ヲ傳ヘテ橋本流ト稱ス。²⁵

渡邊氏、名ハ則之、立軒ト傳ス。眼科専門ヲ以テ、松平讃岐守ニ仕フ、ソノ子則智（如庵ト號ス、立軒ノ稱ヲ襲フ）ニ至リ江戸ニ出ヅ、徳川幕府ニ仕ヘテ眼科醫官タリ。（寛政系圖）

穗積流眼科ハ笠原重次ニ出ヅ。永祿元年ノ著述ニ穗積流秘傳ト題スルモノアリ、コレニ依リテ該流派ノ治方ヲ窺フコトヲ得ベシ。

笠原重次、養泉ト稱シ、宗室ト號ス、堺ノ人、眼科ヲ以テ名アリ、晩年擢テラレテ幕府醫官トナル、ソノ子宗印、宗印ノ子武重共ニソノ術ニ精シキヲ以テ名アリ、稱シテ穗積流眼科ト曰フ。（皇朝醫史・寛政系圖）

酣韶流眼科ハ慶庵（失姓）ニ出ヅ。天正十七年ノ跋文アル慶庵治眼方ヲ見ルニ、コノ流派ニアリテハ内藥・指藥（煉藥ヲ用フ）及ビ洗藥ヲ主トシ、ヌル金・アツ金・引キ刀・灸法等ヲ用ヒタリ。

ソノ他、佐々木・青木等ノ諸流派アリト雖モ、ソノ治術ハ大抵同様ナルヲ以テ、煩ヲ厭ヒテ茲ニ、ソノ治方ヲ復叙述スルコトヲ敢テセザルベシ。然レドモ、室町時代ノ末世ニ葡萄牙人（所謂南蠻人）ノ我が朝ニ來レルアリ、コノ期ニ及ビテ、遂ニ所謂南蠻流外科ノ起リシトキ、眼科モソノ影響ヲ受ケテ、所謂南蠻流眼科ノ一派ヲ加ヘタルコトハ、特ニ擧ゲテ言ハザルベカラズ。

南蠻流目醫集ト題スル書三卷アリ、何人ノ撰著ニ係ルト言フコトヲ知ラズ、ソノ書風・文章、及ビ用紙ニ依リテ鑿查スルニ、蓋シ慶長年間ノ書ナリ、コノ書中唐瘡（黴毒）ノ眼病ヲ起スコトアルヲ説クノ他ハ馬島流及ビソノ他ノ眼科ノ所説ニ一モ新シキヲ加フルコトナシ。ソノ治方ハ筒蒸（鍋ノ蓋ニ竹ノ筒ヲ立テソノ息ニテヨク眼ヲ蒸スナリ）ノ一法ヲ除クノ他ハ、内藥・洗藥・掛藥等他ノ流派ニ用フルモノニ異ナラズ、却テ内障眼ノ手術ニツキテ記述スルトコロナキハ頗ブル奇トスベシ。別ニ南蠻楚呂玉傳眼目秘術ト題スル一書アリ、南蠻國楚呂玉ノ眼科ヲ尾張人前島主膳正秀政ニ傳ヘタルモノナリト言フ。楚呂玉ト言フモノノ本姓詳ナラズ、ソノ治方ヲ見ルニ亦藥方ノミニシテ手術ハ一モ之ヲ擧グルコトナシ。思フニ南蠻流外科ガ當時ノ外科ニ影響ヲ及ボセシコトノ微々タリシト同ジク、所謂南蠻流眼科モ亦當時ノ眼科ニ著甚ノ影響ヲ及ボスコトナカシナリ。（尙ホ後條『南蠻流外科』ノ項下ヲモ參照スベシ）

婦人科 ²⁴

女科ハ室町時代ニアリテ、大方脈科（本道）ヨリ分離シテ斯道専門ノ醫家ヲ出ダスニ至リシガ、戰國ノ世ニ金創

醫ト名ヅクルモノアリテ、金創ヲ治スルノ傍ラ、産前産後ノ諸症ヲ治スルノ方ヲ講ジ、ソノ術盛ニ行ハレテヨリ、更ニ産科専門ノ醫家ヲ生ズルニイタレリ。

曲直瀨道三ノ啓迪集卷七、婦人科ニハ婦人良方・醫學正傳・醫林集要・玉機微義・明醫雜著・丹溪心法・惠濟方・丹溪纂要、等ノ諸書ヲ引テ、月經和違・帶下・崩漏・婦人雜證（師尼寡婦・血瘕・筋痿・婦人腰痛・婦人中風・角弓反張・血分・夢與鬼交・熱入血室・白淫濁液・陰腦陰痒・陰瘡）・求嗣・胎前・産後整容ノ諸項ヲ論述シタリ。而シテ、ソノ方論ハ李・朱ノ説ニ基ツキ、『男子ハ陽ニ屬シ、氣散シ易キヲ得、女子ハ陰ニ屬シ、氣多クハ鬱スルニ遇フ、故ニ男子ノ氣病ハ常ニ少ナク、女子ノ氣病ハ常ニ多シ』ト論ジ『男子ハ精ヲ以テ主トナシ、女子ハ血ヲ以テ生トナス』『血ハ氣ノ配ニシテ、上月ニ應ジ、血ハ氣ニ因リテ行ク』ト説キ、血氣ノ虚實ヲ以テ、婦人疾病ノ因由ヲ解釋シ、從テ、ソノ治方モ氣血ヲ補フノ藥ヲ用ヒテ脾胃ヲ養フヲ主トシ、又濕ヲ除キ、熱ヲ去リ、風ヲ抑フルコトヲ務メタリ。

南條宗鑑ガ撰述セル撰聚婦人方、三卷ハ、天文十五年ノ自序アリ、前期ノ末ニ世ニ現ハレ、コノ期ニ涉リテ行ハレタルモノニシテ、コノ書ハ婦人良方ヲ主トシ、傍ラ玉機微義・三因方・丹溪纂要・易簡方・和劑局方・聖惠方等ノ諸書ヲ引用シ、唐・宋諸家ヨリ李・朱兩家ニ至ルマデノ治方ヲ網羅シタリ。ソノ疾病ヲ舉グルコトハ、之ヲ啓迪集等ノ婦人科ニ比スルトキハ、多般ナリト雖モ、而カモコノ書ハ治方ヲ主トシテ理論ニ涉ラズ、治方ニツキテモ別ニ他書ノ記述ニ異ナレリト認ムルノ點アルコトナシ。只腰氣ノ一症ヲ學ゲ、別ニ一門ヲ建テタルハ、從來諸家ノ未ダ爲サザリシトコロナリ。ソノ説ニ曰ク、

『今世婦人、有ニ腰氣病一、按ニ其病因一、是生ニ於月水不利一者也、云々、今者、世之腰氣病、其脈不二途一、但有ニ孔竅生瘡之證一、則必以爲ニ腰氣病一也、此病起ニ於血氣之勞傷、體虚之風冷一、云々』

竹田秀慶ノ月海録ニモ『婦人腰氣、近時勢・尾人、始唱之、今則遍ニ諸州一、帶脈之病也』トアリ、秀慶ハ實徳二年ニ生マレ、享祿元年ニ歿シタル人ナレバ腰氣ト言ヘル症ハ、永正ノ頃、始メテ我が邦ニ現ハレシモノカ。中條流産書・半井家産前産後秘書等ニモ腰氣ノ證ヲ舉ゲタリ、而カモソノ證ハ帶下ノ一種ナリト言フマデニ詳ナルコトハ得テ知ルベカラズ。

南條宗鑑ハ一鷗軒ト稱ス、伯耆ノ人ナリ、壯年ニシテ京師ニ遊ビ、醫術ヲ學ビ、遍ネク諸家ニ遊歴シテ遂ニ治療精妙ノ名ヲ得タリ、著ハストコロ撮要集・撰集婦人方、短要方等アリ、皇國名醫傳等ノ諸書ニ宗鑑ガ如意庵・一栢等ニ從ヒテ醫ヲ修メタリト言フハ、ソノ孫宗伯ノコトヲ誤マリ傳ヘタルナリ。宗鑑ノ子宗虎、亦一鷗ト稱ス、醫ヲ以テ名アリ。（多聞院日記・施藥院三雲家系譜・本朝醫考）

曲直瀨氏興リテヨリ、室町時代以來ノ典藥、坂・竹田・半井・吉田等諸家ノ勢力ハ大ニ衰ヘタリト雖モ、獨リ半井氏ハ本朝醫道ノ世家タル和氣氏ヨリ出デ、明英・瑞策・瑞桂等ノ醫ニ名アルモノ踵デ興リ、コノ期ニアリテハ曲直瀨氏ト相併ビテ醫道ノ霸權ヲ握レリ。今ノ世ニ傳フルトコロノ半井家産前産後秘書、三卷ハ半井家ノ門人ガ師家ノ方論ヲ筆記セルモノニシテ、異本數種アリ、互ニ異同ナキニアラズト雖モ、ソノ婦人良方・和劑局方等ノ諸書ニ依リテ、論ヲ立テタルコトハ明瞭ナリ。而シテ啓迪集・撰聚婦人方ノ兩書ニ比較スルニ、ソノ察證辨治ヲ論ズルニ於テ毫モ、特殊ノ點ヲ認ムルコトナシ。

半井明英、和氣氏、明親ガ子ナリ、世々典藥頭タリ。明英家ヲ承ケ、正三位ニ叙シ、宮内少輔ニ任ジ、修理大夫ヲ兼ネ、昇

殿ヲ允サル、剃髮シテ壽林ト號シ、自カラ閑嘯軒ト號ス。ソノ家ニ大井アリ、ソノ中間ヲ隔テ、半バハ之ヲ製藥ノ料ニ用ヒ、半バハ之ヲ雜用ニ充ツ、依リテ氏ヲ半井ト改ム。ソノ弟瑞策、驢庵ト稱シ、通仙軒ト號ス。後、正親町天皇勅シテ院ノ字ヲ賜ヒ、通仙院ト稱ス、醫術ニ精シキヲ以テ家業ヲ嗣ギ、僧綱ヲ經ズシテ素絹ヲ着クルコトヲ許サレ、官庫ノ秘本醫心方ヲ賜ハル。織田信長、瑞策ヲ愛重シ、豊臣秀吉モ亦之ヲ信任ス。ソノ子瑞桂亦醫名アリ、累世驢庵ヲ通稱トシ、典藥頭ニ任ゼラル。(寛家系圖傳・寛政系圖・雍州府志・本朝醫考)

助産ノ方ハ啓勉集ニ胎前ト産後トノ二篇ヲ別チ、ソノ胎前篇ニハ有胎諸察諸經養育。胎産三禁。妊婦攝養。妊婦雜病因治。惡阻證治。墮胎因治。斷産。胎死因治。妊娠禁忌。臨産須知。催生藥辨。産難源論。産難六由。易産方法。礙産證治。盤腸産證治。産難胎死方法。産難惡症。新産診切。胞衣未下論治ノ諸項ヲ擧ゲ、産後篇ニハ母子呼吸同異。新産三證。産後血量。惡露不盡。兒枕心腹刺痛。餘血奔心煩悶。産後内煩。乍寒乍熱。蓐勞。虚羸。四肢浮腫。産後乳汁。乳癰。中風口噤角弓反張。咳嗽。喘急。衄血。吃逆。産後雜證ノ證治ヲ擧ゲタリ。ソノ産難ヲ論ズルヤ、逆産・横産・坐産ノ外ニ礙産・盤腸産ノ二類ヲ擧ゲ、又醫學正傳ヲ引テ『逆産ノモノハ則チ先ヅ其足ヲ露ハシ、横生ノモノハ先ヅ其手ヲ露ハシ、坐産ノモノハ先ヅ其臂ヲ露ハス、此レ皆力ヲ用フルコト太ダ早キノ過ナリ』ト説キ、又婦人良方ノ説ニ『凡婦人以レ血爲レ主、氣順則血順、胎理安、生理和』トアルヲ引用シ、氣血ヲ順ナラシムルコトヲ以テ、産科治方ノ唯一ノ主義トシ、横産・逆産ヲ治スルニモ、尙ホ一二ノ藥方ヲ以テシ『百草霜、白芷、右等分、末研、二錢匕、童便醋、和粘、沸湯調下。治三横倒及瘦胎』、『灸三右脚小指尖頭二三壯、治三横倒諸治不レ效』、『臨産時、紅莫馬齒覓同煑食、易レ産』等ノ方ヲ擧ゲ、手術トシテ示ストコロハ『手足先ヅ露ハル、モノニハ、細鍼ヲ用ヒテ兒ノ手足ノ心ヲ刺スコト、一二分ノ深サニシテ、鹽ヲ以テ其上ニ塗テ輕々ニ送入セヨ。兒痛ヲ得テ驚轉一縮シテ順生ス。或ハ兒ノ脚先ヅ下ルモノハ急ニ鹽ヲ以テ兒ノ脚底ニ塗り、又ハ急ニ之ヲ搔キ、併ニ鹽ヲ以テ母ノ腹上ヲ摩ヅレバ順生ス』、『灸法。治三難産及胞衣不レ下。可レ灸三至陰二穴一、又灸三太衝二穴一』、『兒身順門戸俱ニ正、兒已ニ頂ヲ露ハシテ、生ズルコト能ハザルハ、兒身回轉シ、肚帶兒肩ヲ擧住スルニ由リ下ルコト能ハザルナリ、治方ハ急ニ産母ヲシテ仰臥セシメ、輕々ニ兒ヲ推シテ上ニ向ヒ、徐々ニ手ヲ引テ中指ヲ以テ兒肩ヲ按シ、其臍帶ヲ下ゲ、兒身ノ正順ヲ候ベシ、産母力ヲ用ヒテ一送スレバ兒即チ下生ス』ト言フノ類ニ過ギズ。

撰聚婦人方・半井家産前産後秘書ニ説クトコロモ、大要之ニ異ナルトコロナシ。而シテ、コレ等ノ諸書ガ主ニ婦人良方(宋ノ陳自明ガ撰述スルトコロ)ニ依據シタルニ拘ラズ、安産藏衣方位・推婦人行年・借地法・禁草咒・禁水咒・催生靈符等ヲ採用セズ(平安朝・鎌倉時代ヨリ室町時代ニハ專ラ行ハレタリ)却テ之ヲ駁シテ『凡不レ可レ服ニ催生符水一、況血得レ寒即凝、血一凝、則胎、滯而反致ニ難産一、夫催生符法、是野道士、求レ食媒レ利之説、有ニ何益一哉』ト言フニ至レリ。蓋シコレ當時宋儒性理ノ説行ハレ、我ガ醫學ノコレガ影響ヲ蒙ムレルト、學問界ニ於ケル佛教ノ勢力、漸ク微弱トナレルトニ由ルモノナラン。(上條ヲ参照スベシ)

金創醫ハ外科ノ一派ニ屬シ、金創ノ治方ヲ專ラトスルモノナレドモ、血類七氣ノ稱アリ、『婦人ハ血ヲ以テ主トス』、『産ハ腹ノ疵ニ同ジ』ト言フノ主張ヨリシテ、助産ノ治方ヲ併セ施シ、依リテ、中條・吉益・板坂・瀨之尾・乗附・伴・永井等、諸家ノ金創醫ニシテ産科ヲ兼ヌルモノアリ。

中條流ノ産科ハ、既ニ前ニ述ベタル、コノ期ノ産科ト大體ニ於テ異ナルコトナク、順血順氣ノ藥品(人參・沉香・川芎・芍藥・當歸等)ヲ内服セシメ、産ニ臨ミテ催生藥ヲ與へ、逆産・横産ヲモ内藥、若クハ塗藥ニテ治シ、『子、片足ヲ出ストキハ母ヲ横ニ寝サセ、イケミヲ止メテ、子ノ足ウラニ握藥ヲツケ、松葉ニテシカクサセバ足ヲ引クナリ』、『逆子、腰ヨリ下出ル時ハ、向ニ繩ヲ付、前へ踏ハラセ、中腰ヲ折ツケ、前ニトリアゲ婆ノ功者ナルヲ居へ、療治スベシ、ソレニテ生マザル時ハ二三度モハワセテヨシ、其時ハ子ヲ緒ニ包ミ、母ノ兩手ヲ向フヨリ取テ頭ヲ上

ゲサセ這スルナリ、サレドモ生マザルトキハ腐藥ヲ用ヒテ療治スベシ』、『子、兩手ヲ出ストキハ母ヲ仰ケニ寝サセ、左ノ足ヲ上へ上ゲ何ニテモツカエヲ置、付藥右ノ如クシテ、出タル手ヲ絹ニ包ミ、ユルヤカニシテ一時モ置キ、母ヲ起シ、仰ノキスギル程ニシテ、熱湯ニテ横切ヨリ洗ヒ、腹ヲビヲカケ生マスルナリ、若シ生レザルトキハ又仰ケニシテ絹ヲトキ胸ヘサスリ上ルヤウニシテ吐藥ヲ用フレバ胸ヘセリ上ルナリ、其時横切ニ帶ヲ堅クシテ、又水落ニモ帶ヲ堅クシテ催生藥ヲ用ヒ、汗ノ出ヅル程シキリアル時取立、下ノ帶ヲトキ、常ノ如ク生マスルナリ』ト言ヒ、産後ノ子宮脱ニ對シテ『獨活ノ皮ヲ和カニシテ叩キ、ヒシギ蒸シテ溫メ、絹ニ包ミ、子宮ニアテ、母ノ尻ニ物ヲカヒ上ゲテ、仰ケニ寝セテ、足ニテソヒく踏入ル』ノ法ヲ施ス。コレ實ニ中條流産科ノ手術トシテ擧グベキモノナリ。當時ノ外科ニシテ既ニ針熨以外ニ手術スベキコトヲ知ラズ、金創ニ對シテ猶ホ内藥ヲ主トセシ狀勢ニ際シ、産科ノ治術ガコノ如ク、内藥ヲ主トセシハ怪シムニ足ラザルナリ。タダココニ一言スベキハ中條流ノ産科ニアリテ、内藥ノ他ニサシ藥ヲ用ヒタルコトナリ、サシ藥ハ『柀椰子五分、粉ニシテ薄荷ノ煎汁ニテ丸ジテ水銀少右ノ丸藥ノサキニサシ、大サ四分ホドノ丸ニシテ産門ニ押し入レテ一時バカリ置ク、一トサシニテ子腐リズンズンニ成リ下ル』、『早生藥ニハ、香白芷一匁百草霜五分右海草湯ニテタデテ天目程用フ、驗ナクバ一分ホドノ大サニ丸ジ子宮ヘサスベシ』ニテ、坐藥ノ方ナリ。又産門交骨開カザルトキ『甘松・石灰・蕎麥花黑燒右等分ソバノワラノアクニテ溶キ、管ニテ肛門ニ吹キ入ルベシ』ト言フ、コレ灌腸ノ方ナリ。

吉益・板坂・瀨之尾・乘附・糟尾等諸家ノ産科モ、大體ニ於テ、右ニ述ベタル中條流ノ産科ニ異ナルコトナシ。

中條氏、帶刀ト稱シ、金創及ビ女科ノ治術ヲ以テ名アリ、延壽和方彙函ニ『豊臣秀吉公聚落城ニ在ル時一士中條帶刀ナルモノアリ、兵ヲ用フルノ暇、醫術ヲ好ミ、婦人科最奇ナリ』トアル、コレナリ、ソノ傳詳ナラズ（日本醫譜）

吉益氏、半笑齋ト稱シ金創ノ治療ニ名アリ、換骨秘録ヲ著ハシテ外科ノ治方ヲ説キ、ソノ名一世ニ喧シ（換骨秘録序文）

板坂氏ト稱スルモノ宗頓アリ、宗徳アリ、宗高（通稱ト齋）アリ、宗慶アリ、鈎閑アリ、余ガ所藏ノ天和古寫本ノ板坂流産前産後秘傳集ニハ板坂大膳亮ト署名ス、ソノ何人ノ系ナルベキカ詳ナラズ（皇朝醫史・日本醫譜）

乘附氏、本ト丹波氏ヨリ出ヅ、始祖ヲ上野介トイヒ、足利氏ノ侍醫タリ、永祿年間壽徳院高由ニ至リテソノ職ヲ辭シ、諸國ヲ漫遊シ、上州、松山ニト居シ、醫ヲ業トス、元龜三年出デテ武田信玄ニ仕ヘ、祿二百石ヲ受ク、慶長十八年歿ス、二子アリ、伯ヲ源五郎ト言ヒ、叔ヲ左馬丞トイフ、左馬丞ハ爲春齋ト號シ法眼、糟尾久牧ノ門ニ入りテ醫ヲ學ビ、女科ヲ主トシ、寛永十四年病ニテ歿ス。（乘附家系譜）

兒科

コノ期ニ在リテハ板坂・岡・近藤等小兒科ヲ以テ専門トスルノ醫家アリ。家珍方・家傳小兒方・遐齡小兒方等、小兒科ニ關スル專書アリ。

板坂宗慶、家珍方ヲ著ハス。

板坂鈎閑、家傳小兒方ヲ著ハス。

岡家重、一ニ元春、彌傳次（一ニ彌平次）ト稱ス、浮田秀家ニ仕ヘ、祿千三百石ヲ食ム、慶長三年故アリテ浮田氏ヲ辭シ、剃髮シテ道和ト號シ、醫ヲ業トシ、小兒科ヲ以テ京都ニ行ハル、ソノ子元勝、智庵ト號ス、醫方ヲ修メ別ニ家ヲ成ス、弟家成ノ子壽元（甫庵ト稱ス）ヲ養フテ嗣トナス、壽元父ノ業ヲ承ケ、小兒科ヲ以テ名アリ。後徳川幕府醫官トナル。（岡氏世系・醫業家譜・寛政系圖）

近藤桂安、丹波ノ人、小兒科ノ治方ニ精シキヲ以テ名アリ、出デテ京師ニ居リ、ソノ業大ニ行ハル、世ニ之ヲ丹波兒醫ト稱ス。後光明天皇ノ時、特ニ法印ニ叙シ、壽伯院ノ號ヲ賜フ。(日本醫譜)

啓迪集以下、所謂本道ノ書中ニモ、小兒方ノ部門ヲ設ケ、小兒ノ護養及ビソノ難病ノ治方擧グルコト從前ノ成書ノ例ニ異ナラズ。

コノ期ノ醫學ハ李・朱ノ説ニ依リテ、病理ヲ説キ治方ヲ立テタルコト、既ニ上條ニ述ベシ如クナレバ、從テ兒科ニアリテモ、ソノ病理及ビ治方ハ李・朱醫學ノ論説ニ依據シタルコト勿論ナリ。

曲直瀨道三ノ遐齡小兒方ニ『夫レ孺子襁褓ノ内ニアリ、内ニ六欲七情ノ起ルコトナク、外ニ大寒大風ノ犯スコトナシ、其證ヲ考フルニ、大半ハ胎毒、小半ハ傷食ニシテ外感ニ風寒ニノ病ハ十二一ノミ、變蒸・痘疹・斑爛・驚悸・風癩・發搐・痰壅・赤瘤・白禿・解顛・重舌・木舌、皆孕母ノ不謹、胎毒ノ致ス所ニアラズヤ』ト曰ヒ、小兒ノ疾病ノ大半ハ胎毒(遺傳性、又ハ先天性)ニ依ルモノトナシ、甚シキハ痘瘡ヲ以テ遺傳ノ毒ニ基ツクモノトナス、是レ醫學正傳ニ出ヅルトコロノ説ナリ(尙ホ後段ニ詳述スベシ)、又曰ク『臟腑脆キ故ニ虚シ易ク、實シ易クシテ變易スルコト、掌ヲ反スルガ如シ、然ル間療治スルコト、毫髮ノ誤アレバ、千里ノ隔ヲ致ス、峻寒猛熱ノ藥輕々シク用ユベカラズ』ト。

ソノ護養ノ法ヲ説クヤ惠濟方・婦人良方等ヲ引テ『天氣和暖ナラバ、抱キ出デ、風日ニアタルベシ、氣強ク、血盛ニシテ、ヨク風害ニ堪フルナリ、衣ヲ重ネ、綿ヲ厚クスレバ皮膚血脈弱ク、風引キ易ク、小瘡ヲ出ダシ、汗シ易シ、天甚寒クハ父母ノキナラシタル古キ物ヲ着セテヨシ、乳母ノ寢入タル息ニテ兒ノ顛門ヲ吹クベカラズ、必ズ鼻塞アルナリ、裯衣ナド、火ニ煖メテ、兒ヲツツムベカラズ、丹毒出デ來ルモノナリ、惡相異物ヲ見セテ愛スベカラズ後ニ驚病トナル』ト説キ、生下拭口(生後綿ニテ指ヲ裏ミ、兒ノ口中ニアル穢ヲ去ル)、除痰去癖(黃連・甘草ニ味ノ煎汁ヲ吞マスコト三日、一世病ナシ)産難氣悶(産難小兒窒息セバ先ヅ綿ヲ以テ兒ヲ裏ミ大紙撚ニ油ヲ蘸シ、臍帶ヲ燒キ、氣回ヘルヲ待チテ臍帶ヲ斷ツ)、小兒浴湯(臍帶未ダ落ちザル間ハ頻浴ヲ慎シムベシ)、乳母宜撰(精神爽健ニシテ疾ナキヲ撰ブ)乳時諸慎(怒、醉、飽滿、孕感レ患房勞未レ定ニ兒ヲ乳スルヲ慎ム)ニツキテ細論セリ。小兒ノ疾病ノ診斷ニツキテハ『小兒、是レヲ啞科ト曰フ、疾痛シテ物イフコト能ハズ、故ニ當サニ脈ヲ審ニシ、形ヲ觀、色ヲ察シ、聲ヲ聽キ、手紋ヲ視、外證ヲ詳ニスベシ』ト曰ヒテ、客觀的ノ診査法ヲ主要トセリ。

(1) 審脈 凡ソ小兒ヲ診スルニハ大指ヲ以テ三部ヲ按ズルヲ法トス、一息六七至ヲ平和トス、十一歳以上ハ一息五六至ヲ常脈トス。脈ノ遲・數・浮・沈・虚・緊・軟・實・細・大等ノ諸性狀ヲ檢シテ、ソノ病變ヲ知ル。

(2) 觀形(3) 察色 顔面ノ形ト色トヲ見ル、例之兩眼トモニ精光ナク、黑眼運轉セズ、魚眼・猫眼ノ如クナルハ不治ノ徵ナリ、顔面ノ白色ハ失血トシ、口ノ廻リ黑青キハ驚風ノ死候トスルガ如シ。

(4) 聽聲 聲悲シミ呼ハラバ肝病、聲雄々シク笑フハ心病、聲慢々トシテ歌フハ脾病、聲促々トシテ哭スルハ肺病、聲沉々トシテ呻ハ腎病ナリ。又聾ノ清キハ膽病、短キハ小腸病、速キハ胃病、長キハ大腸病、微ナルハ膀胱病ナリ。

(5) 視手紋 一歳ヨリ六歳ニ至ルマデヲ嬰孩ト曰フ、男ハ左手、女ハ右手ノ次ノ指ノ三關ノ脈ヲ視テ病ノ輕重死生ヲ知ル(第一節ヲ風關ト名ヅク、脈ナケレバ病ナシ、脈アレバ病輕シ。第二節ヲ氣關ト名ヅク、脈アレバ

病重シ。第三節ヲ命關ト名ヅク、脈アレバ病劇シ、九死一生ノ惡候ナリ。

(6) 番外證 五歳ノ虛實ニヨリ發證相同ジカラズ、例之バ牙ヲ咬コト甚シキハ驚ヲ發ス、口涎沫ヲ吐キテ叫ブモノハ蟲痛ナリ、頭ヲ搖カシ目ヲ揉ルハ肝ノ熱風ナリ、注意シテ外證ヲ觀察スベシ。

小兒ノ疾病ニテハ『驚風・慢驚風・驚搐・五癇・天癆・吐瀉・腹痛・腹脹・小兒夜啼・小兒脫肛・兒痰・吃泥・欬嗽・逆・口瘡・白屑・牙疳・重舌・木舌・弄舌・齒不生・語遲・行遲・脚拳不展・手拳不展・鶴節・滯頤・冷熱・項軟・筋軟・脫囊・龜背・龜胸・尾骨痛・中惡・客忤・瘧疾・痢病・霍亂・癍積・浮腫・小便不利・丹毒・耳邊月蝕・瘡・癩頭・白禿』ノ諸症ヲ雜病トシテ舉ゲ、變蒸・解顛ハ之ヲ外證ヲ論ズルノ條下ニ説キ、疳證・痘疹ノ兩症ハ各別ノ篇ヲ設ケテ之ヲ論ジタリ(病名ノ傍ニ圈點ヲ附セルハ啓迪集ニ依リテ之ヲ補ヒタルモノニシテ、道三ガ重要ナラズトシテ、之ヲ遐齡小兒方中ニ載スルコトヲ省略セシモノナラン) コレニヨリテ疳證ト痘疹トノ二症ガ、當時ノ兒科ニ於テ、最モ重要ノモノトセラレシコトヲ知ルベシ。(板坂ノ家珍方ハ單ニ五疳ヲ治スルノ方ノミヲ舉ゲタリ)

疳證ニ五種アリ。肺疳ハ欬嗽シ、急喘シ、鼻ヲヒネリ、爪甲ヲ咬ミ、寒熱往來ス。脾疳ハ身黃ニ壯大ニシテ、泥土ヲ食シ、氣廉ク、利下スル物酸臭アリ。肝疳ハ頭ヲ搖リ、目ヲ揉ミ白膜睛ヲ遮ギリ、腦熱シ、汗出テ、筋青ク、髮立チ、肉色青黃ニ瘦セ合面臥ス。腎疳ハ體瘦セ、身ニ瘡疥出テ、寒熱時ニ起リ、頭熱シ、足冷ユ。心疳ハ面黃、臉赤ク、煩滿壯熱シ、心煩、口瘡ヲ生ジ、虛シテ驚キ易シ。蓋シソノ症ハ肥甘(數々肥ヲ食セバ人ヲシテ内熱セシメ、數々甘ヲ食セバ人ヲシテ中滿セシム)ニ因リテ起ルガ故ニ之ヲ疳ト稱ス。『丹溪云、人兒嬌嫩、飽則易傷、飲食不調、甘肥無節、或乳兒缺乳、粥飲太早、耗傷形氣、延及三歲月、五疳病成』。是ニ由リテ觀ルニ、ココニ疳證ト言フハ胃腸ノ障碍ニ因スル諸症ヲ指スモノニシテ、ソノ發症ノ異ナレルニ由リテ種々ノ名ヲ附セシモノト思ハル。學者或ハ脾疳ヲ以テ腸及ビ腸間膜腺ノ結核ナリトスルモノアレドモ、必ズシモ結核症ヲ指シテ言フニアラザルコトハソノ症候ノ記載ニ徴シテ明カナリ。

痘疹ハ小兒ノ疾病中ニテ最モ酷疾トスルトコロニシテ『胎毒命門ニ藏シ、歲火太過、熱毒流行ノ年ニ遇フテ、則チ痘毒之ニ從フテ發作ス』又『瘡疹ハ皆子ノ母腹ニアリテ浸漬シテ、母ノ血穢ヲ食ヒ、毒ト成ルニ由ル、皆大陰濕土ノ雍滯、君相二火ノ作ス所ナリ、或ハ天寒ニ因リ、表ヲ傷ブリ、裏ヲ傷ブリ、班コレニ由リテ生ズ』ト説キ、痘疹ハ先天ノ穢毒(胎毒)ニ因由スルモノナレドモ、ソノ之ヲ發スルハ歲運ニ本ヅキ又痘疹ハ時氣ノ一端ニシテ、コレニ傳染シテ發スルコトアリトナセリ。

老人科

我が邦古ヨリ小兒科アリテ、之ヲ大方脈科ヨリ區別シタレドモ、老人門ヲ設ケテ、大方脈科及ビ、小方脈(兒科)科ヨリ分割シ、老人ノ護養及ビソノ疾病ノ療方ヲ講究セルハ、コノ期、曲直瀨道三ノ啓迪集ニ始マル。

啓迪集、老人門ニハ醫林集要ヲ引テ『夫老人、內虛、脾弱、陰虧、性急、內虛、胃熱則易飢、而思食、脾弱難レ化、則食已、而再飢、陰虧難レ降。則氣鬱而成レ痰、至於視聽言動、皆成廢懶、』ト言ヒ、又惠濟方ヲ引テ『高年之人、眞氣耗竭、五臟衰弱、全仰ニ飲食、以資ニ氣血』ト説キ、以テ老人ノ生理ノ少壯ノモノニ異ナル所以ヲ示

シ、人生六七十二至ルノ後ハ、精血俱ニ耗シ、平居無事ニシテ既ニ熱症アリ、故ニ補陰ノ方ヲ貴ミ、燥劑ヲ用フルコトヲ忌ム、又飲食烹炮ニモ宜シク節アルベシト論ジタリ。

老人ノ疾病ハ、少壯ノモノニ於ケルト、ソノ證ヲ異ニシ從テソノ治ヲ同クセザルモノアリトナス。ソノ大要ヲ擧グレバ左ノ如シ。

老人中風ハ氣虛シ、血澁ルニ因リテ尤モ療シ難シ、ソノ因ハ痰氣又ハ食ニ在リ、證ニ隨テ之ヲ治ス

痿症ハ内臟精血虛耗ニ依リテ皮肉筋骨ヲシテ痿弱シテ力ナク能ク運動スルコトナク、痿躄ヲ致サシムルナリ

虚煩發熱ハ老人ニ多シ

老人大便閉ニハ大黃・巴豆ヲ用フベカラズ、蓋シ津液枯竭スレバナリ

久泄トハ老人ノ久シク泄瀉ヲ患フルナリ、コレニハ脾土ヲ實シ陰ヲ養ヒ胃氣ヲ升ボスコトヲ主トナスベシ

老人咳嗽多日ナルハ必ズ肺氣不足ニ因ル、滋陰、補氣、降痰ヲ主トナスベシ

痢 老人ハ脾氣弱シ、補ヲ主トスベシ

老人小便頻數ハ滋陰腎氣ヲ補フヲ主トナスベシ

老人積聚ニシテ原氣・胃氣ノ虚ナルモノニハ攻補兼施スベシ

中年以上眼目昏暗ハ大抵原氣・陰氣ノ不足ナリ。能ク遠視シテ近ク視ルコト能ハザルモノハ氣虛シテ血盛ナリ、

老人桑榆ノ象ナリ、能ク近視シテ遠ク視ルコト能ハザルモノハ血虚シテ氣盛ナリ、皆火有餘原氣不足ナリ。老人

目暗、耳聾ハ腎水衰ヘテ心火盛ナルニ因ルナリ

老人頭眩ハ氣虛・血虚、又痰涎・風火・食邪ニ因リ、或ハ外感ニ因リテ之ヲ得

癰疽ノ病ハ高年ノ人ニハ最モ之ヲ慎ムベシ

鍼灸科 28

鍼灸科ハ平安朝ニアリテハ、醫道ノ要部ヲ占メ、鍼博士ハ醫博士ト相併ビテ、ソノ術ニ秀デタル人コレニ任ゼラレシガ、鎌倉時代ヨリ室町時代ニ至リテ、醫官制度ノ廢頽ト共ニ鍼博士及ビ鍼師ハ名實トモニ廢セラレシモノカ、室町時代、文安元年撰述ノ下學集ニハ典藥頭ノ官各ヲ擧グルノミニテ鍼博士ノコトハ見エズ。中原康富記ニモ『本道醫中ニ當時無ニ針之名譽』。可レ云ニ道之零落一歎トアリ。當時鍼科ノ廢頽セルコトハ推知セラルベシ、而カモ鍼灸ノ術ガ當時治方ノ一部トシテ尙ホ實際ニ行ハレシコトハ諸家ノ方書ニ一モコノ法ヲ載セザルモノナク、又天文年間金持重弘ガ明ニ入り、鍼術ヲ以テソノ名ヲ彼ノ邦ニ擅ニセシト傳フルニテモ知ラルベク、一千六百八十九年佛國ノジャン・クラセガ撰述セル日本西教史ニ我ガ邦天正年間前後ノ人情・風俗ヲ記セル條下ニ、醫道ノ狀況ヲ叙シテ『醫師ハ病者ニ問フコトナク唯半時許、診脈シテ脈動ト病ノ經過ニ因リテ病源ヲ判ズ、云々、又熱病ニ小サキ銳利ナル金針ヲ病者ノ皮膚ニ六ヶ所モ刺入シ之ヲ療治スルアリ、此法支那ニモアリ、又大病ニハ病者ノ皮膚二十個所以上モ灸スルコトアリ、小ニシテ燃ヘ易キ乾艾ヲ丸メ、之ニ火ヲ點ズ、燃ヘ了リテ灰トナリ、之ヲ除クトキハ其燒キシ所、黒痕ノ生スルヲ見ルナリ』ト言フヲ見テモ、針灸ノ學ハ廢タレナガラモ、ソノ術ハ、尙ホ當時ニ行ハレシコトヲ知ルベシ。

曲直瀨道三ノコノ期ニ起リテ、醫學ヲ中興スルニ際シ、別ニ鍼灸要集ノ一書ヲ著シテ、鍼灸ノ治方モ亦忽諸ニ附

スベカラザルコトヲ唱道セリ。コノ書中ニ、鍼灸資生經ヲ引テ『世所レ謂醫者、則但知レ有レ藥而已、針灸則未ニ嘗過而問ニ焉、人或詰レ之、則曰、是外科也、業貴レ精而不レ貴レ雜也、否則曰、富貴之家、未ニ必肯ニ針灸ニ也』ト曰フハ固ヨリ支那ノ狀況ヲ叙スルモノナレドモ、我が邦ニアリテモ前期以來針灸ハ本道ニ於テ重セラレズ、外科ニアリテ僅ニ之ヲ瘡瘍ノ治ニ用フルニ止マリシナラン。平安朝ノ醫心方以來、鍼科ハ本道ノ主要ナル一部門ヲ占メシガ、コノ期ニ至リテハ鍼科ガ本道書中ニ一門ヲ立テテ記載セラルルヲ見ズ。コレニ依リテ鍼灸科ガ治療學上ノ勢力ノ大ニ衰ヘタルコトハ想像セラルベシ。

鍼ニ九針ノ法アリ(平安朝ノ醫學ノ章下第七十八頁ヲ参照スベシ)用フルトコロノ針ノ長短大小相同ジカラズ、從テソノ之ヲ應用スルノ目的ニモ差異アリト雖モ、コノ期ニ主ニ用ヒラレシハ鉞針ト毫針トニシテ、鉞針ハ長四寸廣二分半、末端ハ劔鋒ノ如ク、刺シテ膿ヲ取ル、毫針ハ長三寸六分、尖端蚊虻ノ喙ノ如ク徐々ニ刺シテ痛痺ヲ取ルナリ、而シテ、ソノ鉞針ハ外科ニ屬シ、鍼科トシテハ主ニ毫鍼ヲ用ヒシモノナラン。尙ホ鍼術ノコトハ江戸時代ノ『鍼科』ノ條下ニ細論スベキヲ以テ、茲ニハ深ク論及セズ。タダコノ期ノ醫家ガ用ヒタル鍼灸術ハ針灸聚英・針灸資生經・醫林集要等ノ所説ニ依リタルモノナルコトヲ一言スルニ止マルノミ。

コノ如ク、コノ期ニアリテハ、鍼灸ノ治方ノ復興セラレタルニ從ヒ、遂ニ鍼科専門ノ名家ヲ出ダスニイタレリ、即チ當時鍼術ヲ以テ世ニ名アリシモノニ入江・吉田ノ諸氏アリ、共ニ明人ノ術ヲ傳ヘ、各々一派ヲ成セリ。

入江頼明 京師ノ人、豐太閤ノ醫官園田道保ニ就テ、鍼術ヲ受ケ、朝鮮ノ役、明人吳林達ノ傳ヲ承ケ鍼術ニ精シキヲ以テ名アリ、ソノ子良明父ノ術ヲ傳ヘ、之ヲ山瀬琢一ニ傳フ、琢一江戸ニアリテ益々ソノ術ヲ恢弘ス、之ヲ入江流ノ鍼術ト曰フ。

(日本醫譜)

吉田意休、出雲大社ノ祝ナリ、永祿ノ初年、明ニ赴ムキ、刺鍼ノ術ヲ杏塚周二學ビ留マルコト七年ニシテソノ法ヲ盡シテ歸朝シ、ソノ術世ニ行ハル、著ハストコロ刺鍼家鑑アリ、ソノ子意安父ノ業ヲ傳ヘテ亦名アリ、之ヲ吉田流ノ鍼術ト曰フ。(日本醫譜)

或ハ曰フ、慶長年間明人琢周我が長崎ニ來タリ鍼術ヲ施シ、ソノ名世ニ喧傳ス、出雲ノ人、匹地喜庵ソノ術ヲ傳ヘ出雲ニアリテソノ術大ニ行ハルト。(大明琢周鍼法軸序跋)

入江・吉田ノ兩家ニ嗣ギテ、御菌意齋京師ニ起リ鍼術ヲ以テ名アリ、金銀ノ性溫柔ニシテ、人體ニ適スルコトヲ知り、始メテ之ヲ以テ鍼ヲ製シ、又小鎚ノ形圓ニシテ匾ナルモノヲ作り、之ヲ以テ鍼頭ヲ打チ、徐々ニ膚肉ノ腠理ヨリ打入スルノ法ヲ施ス、世ニ之ヲ意齋流打鍼ト稱ス、按ズルニ、傳ニ言フ、コレヨリ先キ、多田二郎爲貞ト言フモノアリ、大膳亮爲綱ノ子ナリ、父ノ食邑ヲ受ケテ攝津國三分一ヲ領シ、上杉ニ住シ、鍼術ヲ以テ聞ユ、偶々花園天皇愛翫ノ牡丹花病ムトコロアリテ將ニ枯死セントス、天皇大ニ之ヲ憂ヒ、爲貞ヲ宮中ニ召シ、鍼術ヲ施サシム、爲貞謹デ命ヲ奉ジ、御園ニ入りテ牡丹ヲ診シ、之ニ鍼シテ蠹ヲ刺シ、日ナラズシテ枯株再ビ春ニ回リ勢前日ニ培セリ、天皇大ニ之ヲ賞シテ御園ノ姓ト牡丹ニ獅子ノ紋章ヲ賜フ、是レ實ニ本邦打鍼ノ祖ナリ、意齋ハソノ後孫ニシテ、ソノ術ヲ父無分ニ受ケ、更ニソノ術ヲ發揮シテ所謂打鍼術ヲ中興スルニイタレルナリト。

御菌意齋、名ハ常心、通稱源吾、六孫王經基ノ三男武藏守滿季ノ後裔ナリ、父無分ノ術ヲ傳ヘテ、鍼科ヲ以テ名アリ、正親町・後陽成ノ兩朝ニ仕ヘテ官鍼博士ニ至ル。門人中最モ著ハルルモノハ藤木元成・中塚東齋・朝山更齋・森吉成・奥田九郎右衛門等ナリ。藤木元成ハ賀茂ノ祝ニシテ所謂騎河流鍼術ノ祖、朝山更齋ハ所謂朝山流鍼術ノ祖ニシテ共ニソノ術精妙ヲ以テ聞ユ。禪僧澤庵・江月及ビ細川三齋等モ亦意齋ノ門ニ入りテ鍼術ヲ學ビタリト言フ。慶長ノ頃徳川家康、駿府ニ在リシトキ病アリ、意齋ノ打鍼術妙効アルヲ聞キ、召シテソノ術ヲ受ケントス。偶々病ニ臥シテ召ニ應ズルコト能ハズ、後チ徳川秀

忠病アリテ意齋ヲ江戸ニ召ス。乃チ往キテ秘術ヲ施シ病忽ニシテ癒ユ。秀忠大ニ之ヲ賞シテ銀若干錠ヲ賜フト言フ。著ストコロノ書、醫家珍寶、二卷・鍼灸秘穴、一卷・鍼灸全論、一卷・神華秘傳、六卷、アリ。元和二年十二月、意齋病ヲ以テソノ家ニ歿ス、墓ハ叡岳ノ南大杉ニアリ。(御蘭家歴傳略記)

日本醫譜ニ曰ク『御蘭常心。性源。初稱源吾。後號意齋、常心其名也。六孫王經基三男從四位上武藏守滿季後裔也。花山上皇賜攝州三田華園於滿季。因以爲レ氏。細川三齋管在丹後常心每訪レ之。時夢分齋亦來謁避三近於常心三人友善、夢分齋遂授三法印流鍼術於常心。精三究其術。遂爲三本朝打鍼重興之祖也』ト、ソノ御蘭ノ姓ノ由來スルトコロ及ビ鍼術ヲ受ケタルノ師傳ヲ記スルトコロ御蘭家歴傳略記ト相同ジカラズ。畑惟龍撰、皇國醫林傳ニモ日本醫譜ト同様ノ記事アリ、ソノ何レカ是ナルヤヲ知ラズ。

同時夢分齋ト言フモノアリ、亦打鍼(又擊鍼ト稱ス)ノ術ヲ以テ顯ハレ、夢分流鍼術ノ祖タリ。御蘭意齋モ亦ソノ術ヲ夢分齋ニ受ケタリト言フ。(御蘭家歴傳略記ニ依レバ、意齋ハソノ術ヲ父無分ニ受ケタリト言フ、無分ト夢分齋ト稱呼太ダ善ク似タリ、別人ナルカ否カ未ダ攷フルコトヲ得ズ)

夢分齋ハ江州ノ僧ナリ、或ハ言フ奥州・二本松ノ人、初メ禪僧タリシトキ、ソノ母久シク腹痛ヲ患テ百方治セズ、夢分齋之ヲ憂ヒ、神佛ニ祈ルモ驗ヲ得ズ。後チ多賀法印ニ從フテ鍼術ヲ學ビ、京都・紫野大徳寺閑松院ニアリ、遂ニソノ術ヲ以テ母ノ沈痾ヲ全治ス。後チ、瓢然西方ニ遊ビ、鍼術ヲ以テ活ストコロ數萬人、終ニソノ術ヲ御蘭常心ニ傳フ。門人奥田意伯ソノ傳ヲ得、洛陽ニ住シテ術ヲ弘ム。ソノ子九郎佐衛門尊直、父ノ業ヲ承ケ、鍼術精妙ノ聞アリ、夢分流鍼術益々盛ナリト言フ(鍼道秘訣集、序文)

意齋流及ビ夢分流ノ打鍼ハ、太キ鍼ヲ槌ニテ打チ入ルルモノニシテ、打テ榮衛(一身ハ榮衛ヲ以テ主トス靈樞ニ浮氣ノ經ニ隋ヒ運グルモノヲ衛氣ト曰ヒ、ソノ精氣ノ經ニ隋テ運グルモノヲ榮トイフ、氣ハ陽衛ナリ、血ハ陰榮ナリ)ヲ動搖シ、推シテ肉ノ内ニ徹シ、而シテ擦テ補瀉ヲ行フヲ目的トス、而シテコノ術ヲ施スニ數種ノ方法アリ。

30

火曳之針 臍下三寸、兩腎ノ眞中ニ針シテ上ル氣ヲ拽キ下スナリ、産後ノ血量等ニ用フベシ。

勝纍之針 用フル所定マラズ、邪氣ヲ打拂ヒ、針ヲ曳ク、是レ瀉針ナリ、傷寒ノ大熱、傷食ノ時ニ用フベシ。

負曳之針 所定マラズ、病症ニ依リテ那氣ノ隱レ居ルトキ、針シテソノ邪氣ヲオビキ出シテ療治スルナリ。

相引之針 所定マラズ、邪氣ヲ曳ト針ヲ引クト相曳ニ引ク針ナリ、補針トモ云フベシ。

止針 立ツ所ハ兩腎ナリ、命門ノ相火ノ亢上スルヲ止ムルノ針ナリ。

胃快之針 針先ヲ上ヘ成シ、深ク針シテ荒々ト捏ル、大食傷ニコノ針ヲ施ス、食ヲ吐キ胃ノ府クツロギ快クナルガ故ニ胃快之針ト稱ス。

散針 所定マラズ、滯ナクサラノト立ツル、滯ル氣血ヲ解ク針ナリ。

經絡ノ說ハ、鍼科ノ重要視スルトコロナレドモ、意齋流及ビ夢分流鍼科ニアリテハ經絡ニヨラズ、ソノ根本タル

五臟六腑ノ虚實ヲ察シ、ソノ邪氣ノ存スルトコロヲ探リテ、茲ニ針スベシト説ク、コレ他ノ鍼科ト大ニソノ趣ヲ異ニスルトコロナリ。

口中科（咽喉科）

大寶令ニ口齒ハ耳目ト併セラレテ、専門ノ一科ヲ成シ、次デ、平安朝ノ末造ニ丹波兼康出デテ口齒科ヲ以テ名アリ、室町時代ニハ既ニ口齒科ノ專書アリシコトハ、上章ニ之ヲ記述セシガ、コノ期ニ至リテハ兼康・親康ノ兩氏アリ、口齒科ヲ専門トシ、之ヲ口中科ト稱セリ。

兼康氏ハ丹波氏ニ出ヅ、先祖鍼博士丹波康頼十四世ノ孫多康典藥頭ニ任ゼラレ、口齒科ニ長ズ。花園天皇齟齬ヲ病ム。冬康之ヲ去ランコトヲ請フ、衆醫可カズ、痛益々甚シ、天皇遂ニソノ言ニ從フ、齒痛再ビセズ、ソノ孫兼康、晩ニ剃髮シテ善恭ト曰フ、典藥頭ニ任ジ、内昇殿ヲ聽サレ、又左京大夫ニ任ゼラル、始メテ兼康ヲ氏トナス。亦口科ヲ以テ名アリ。ソノ子頼定、頼定ノ子頼豐、共ニ施藥院使典藥頭タリ、ソノ子頼慶、頼慶ノ孫頼元共ニ典藥頭タリ。頼元ソノ族加茂氏ノ子玄泰（安齋ト號ス）ヲ養フテ兼康氏ヲ嗣ガシム。玄泰幼ニシテ穎悟群ヲ拔ク。長ズルニ及ビテ醫ヲ學ビ、殊ニ口中科ニ長ズ。徳川家康ノ諱名ヲ憚リ、改メテ金保氏ト稱ス、慶長十八年出デテ徳川氏ノ醫官トナル。徳川幕府醫官多紀氏ハソノ後ナリ。（多紀氏系譜・日本醫譜）

武徳編年集成ニ『慶長十四年七月十四日、齒醫兼康備中守云々』ノ記事アリ、又丹波秀康ノ明智光秀ニ黨シ、ソノ軍敗レテ後江州・鹽津村ニ隠レ、名ヲ兼康道甫ト改ムルアリ、兼康ノ族口科ヲ以テ顯ハルルモノ多シ（日本醫譚、初編卷九）

親康氏モ亦丹波氏ニ出ヅ、康頼十六世ノ孫親康、醫術ヲ善クシ、最モ口齒科ニ長ジ、從三位ニ叙シ、宮内卿・典藥權頭ニ任ゼラル、永正十七年官ヲ辭シテ野ニ下リ、口齒科ヲ以テ世ニ行ハル、ソノ子宗康・光康共ニ家業ヲ承ケテ口科ヲ専門トシ、宗康ハ遂ニ宮内少輔典藥頭トナリ、光康ニ至リテ始メテ親康氏ヲ稱ス。（親康氏系譜・日本醫譜）

兼康口中科ノ治方ヲ記スルモノニ兼康氏秘傳法（室町時代）・兼康家口中秘傳之書（天和七年跋文アルモノ今ノ世ニ傳ハル）・兼康齒書（文祿元年）・兼康口中療治秘要（慶長五年）ノ數書アリ。ソノ書ニ依リテ考フルニ、兼康口中科ガ病證ヲ論ズルハ一ニ李・朱醫學ニ依レルコトハ明カナリ。

李・朱醫學ノ説クトコロニ依レバ『心氣通レ舌、脾氣通レ口、腑臟熱盛、乘ニ心脾、氣衝ニ於口與レ舌故令ニ口舌生レ瘡』、『脾臟應レ唇、足陽明、胃之經、其末挾レ口環レ唇、故脾胃受レ邪、則唇爲レ之病』ト言ヒ、又『五臟之氣偏勝、由レ是諸疾生胃熱則口臭、肺熱則口喉醒臭、脾熱則口甜、膽熱則口苦脾氣凝滯、則口生レ瘡』、『因ニ七情煩擾、五味過傷、而唇口舌生病』ト言ヒテ、口舌ノ病ノ由ルトコロヲ詳ニシ、咽喉ノ病ハ喉痺ヲ以テ主トシ『一陰一陽結、謂ニ之喉痺、一陰一陽者、手少陰、手少陽、二火之脈、並絡ニ於喉、氣熱則內結、結甚則腫脹、腫脹甚則痺』ト論ジ、痰熱ヲ以テソノ因トナセリ。牙齒ノ本源ヲ説クヤ『牙齒、是骨之所レ終、髓之所レ養、手陽明之支脈入ニ於齒也、髓氣不足、陽明脈虛、不レ能レ榮ニ於牙齒』ト言ヒ、脾胃風邪アリ、腎氣虛シ胃熱火盛ナルトキハ能ク齒牙ノ病ヲ起スコトアリ、ト説キタリ。^{⑫⑬}

コノ期ノ兼康口中科ハ、コノ如キ、李・朱醫學ノ説ニ依據シ、ソノ方論ヲ立テシガ、ソノ書中ニ列舉セル病名ハ口病、口熱（熱ニテ口ノ内ニ血滯リ、或ハ齒グキ腫レ、或ハ齒浮キ、痛ミ煩フナリ、小兒ニハ後ニ齒草トモナル、コレ口内炎ヲ指シテ言フナリ）○口痛○口臭○口舌生瘡○唇腫裂○頰腫○鵝口（俗ニシタシトキト言フ）

舌病 長舌○大舌○小舌(舌ノ先ニ舌ノ如ク出ヅルナリ)○重舌○牛舌(舌ノ黒クナルヲ言フ)○舌腫○舌瘡
○舌衄

齒病 齒草(齒齦ニ血寄り膿ムナリ。コレ齒齦腫力)○宜露(齒長クナルヲ言フ)○齦瘡○小兒齒不生○齒
痛○蟲食齒○オソイ齒(牙齒ノワキ或ハ奥齒ノ齦ニ生ズ)

咽喉病 喉痺○喉風○纏喉風○喉腫(揚梅瘡黴毒ノ毒、咽喉ニ發シテ嚙下スル能ハザルコトアリ)○喉疔○懸
癰○魚骨鯁

治方トシテハ一二内藥ノ他ニ、吹藥

吹喉散 昆布・荷葉・藜・南天葉右黑燒各二兩 細辛一匁 白丸燒一匁五分 右細末シテ吹ク、咽喉一切ノ諸病ニ管ヲ以

テ吹キ入ル

含藥又ウガイ藥(含嗽劑)

昆布三・南天葉三・梅干五各霜 右梅干ノ肉ヲ以テ丸メ絹ノ袋ニ入レテ、コレヲ含ム、齒草・口内諸痛・喉痺ニ

良

塗藥(又擦藥)

黃連・黃柏・犀角・滑石等分 右細末シテ指ヲ以テ之ヲ塗ル、鵝口ニ用ユ

荷葉霜細辛略各三兩 干姜二兩 右細末シテ牙齦ノ内外ヘ塗ル

ヲ用ヒ、手術トシテハ主ニ次ノ如キ刺針ノ法アリ

刺針ノ法

口中針ノ大事

一、血ノ滯ル所ヲ見知ルコト、血ノ滯ル所ニ針ヲ立ツベシ

一、血多ク出ダスハ惡シ、血ノ色口傳アリ

一、上齒ヲ落ス針之事、上下ニ手ノ内口傳コレアリ

一、重舌針之事板ニノセ立ワリ鹽ヲツケ亦鹽湯ニテ漱シ藥ヲ附也、但常ノ舌ニハ針ヲイムベシ

一、齒草ノ事、齒グキニ血ヨリ膿ナリ則針ヲ立テ吉ツヨクサク色クロク成トキハ針ヲイム藥ハカリ付也、口傳コ

レアリ

一、齒ノ根ノ肉ヲノクルニハ上ヨリ齒ノキワエ針ヲ立ル也、亦肉ヲヨスルニハ齒ノキハヨリ上エ切ル、口傳コレ
アリ

一、上齒グキニ針立ルニハ針先ヲスグニ持ハカタヲ上エナシ立、口傳アリ

一、下齒グキニ針立ルニハ針ノハヲ下エナス也、口傳アリ

一、重齒落様之事、古齒ヲヌク也、但シユルグハ藥付二三日モ有テヌクベシ、又肉カカリウゴカザル齒ハ其ノ上
ヲ少立切、藥ヲ付、二三日程後ニ齒ノ根ヲ少ツ、切マワシ、藥ヲ付、クツロゲヌク也、又キヤウ手ノ内、口傳コ
レアリ

一、アゴニモ、ホウニモ一切ハリハ不立也

一、熊腎腫ルニ針之事マツサキハキウ所也、中程ニ可立、心持口傳コレアリ

一、喉痺ニハ針ヲ立藥ヲ可吹左右ニ口傳コレアリ

唯ノ奥腫針不立ニスム、針之事口傳アリ

一、蟲齒之事痛ム齒グキ左右ニ針ヲ立少血ヲ出シ藥ヲツケル也

一、喉風針之事、喉痺ト同然也、合様口傳コレアリ

一、纏風喉針之事、立所ニヨリ其儘ツマリ生キガタキ事アリ、先早ク針ヲ立血ヲ出シ藥ヲ吹クナリ口傳コレアリ

一、喉腫ノ事、藥マテニテ養生スベシ、但シ様子ニヨリ針立ルコトアリ、見合口傳
一、木舌之事、是ハ藥バカリニテ養生スル也、針ヲイムベシ、口傳コレアリ

一、宜露ト云煩ハ是ハ齒長ク成ルナリ、或ハ折リ、或ハヌク口傳

一、喉ノ奥腫針不立ニ吞針ノ大事

一、口熱ノ事、熱ニテ口ノ内ニ血滯リ、或ハ齒グキ腫、或ハ齒ウキ痛ワツラフ也、小兒ニハ後ニハ齒草ト成、是モ様子ニヨリテ針ヲ立藥ヲ付ル也

一、齒草之事、ウミケ有之カ、或ハイロ黒ハ針ヲ立藥ヲ付ル也

一、長舌ノ事、ハリハイム也、藥バカリニテ養生スベシ、口傳コレアリ

親康口科ノ治方ヲ記スルモノニ、典藥丹三位親康秘傳(天正五年ノ跋文アルモノ今ノ世ニ傳ハル)・口科治療方(丹波宗康傳)ノ二書アリ、之ヲ兼康口科ニ比スルニソノ治方大同小異ニシテ、口内病名ニ龍齒・齒疳・尸蟲(痺ニ似タリ、喉痺ノ付藥ニテ治セザレバ尸蟲ト心得ベシ)・喉啞・喉血・喉血瘡・喉咽氣魯・喉穴空・喉天穴・奥喉痺ヲ追加セル他、ソノ病症ヲ論ズルコトモ、治術ヲ説クコトモ、スベテ兼康口科ニ異ナルコトナシ。

口科専門ノ他、本道ノ書中ニモ唇口舌・咽喉・牙齒ノ疾病ハ各々一部門ヲ立テテ論述セラレ、曲直瀬道三ノ啓迪集ニ於テ最モソノ精詳ナルヲ見ル。啓迪集ハ固ヨリ李・朱醫學ヲ祖述セルモノニシテ、口中疾病ノ因由ヲ論ジ治方ヲ説クコト、一二玉機微義・醫學正傳・醫林集要等ノ書ニ依リ、唇緊(一名藩唇)・赤白口瘡・口糜・口舌瘡・舌衄・重舌・舌腫・喉痺・懸癰・咽門燥腫・牙痛・牙動・風牙・寒牙・熱牙・蛙牙等ノ病名ヲ掲ゲ、治法トシテハ主ニ藥方ヲ擧ゲ灸法ヲ説キ、而シテ針刺ヲ論ズルコトハ甚ダ粗略ナリ。

外科専門ノ書、外療新明集・外療細壘ニモ口中(細壘ニハ喉トス)・舌・齒・唇、ノ四部門ヲ別チ、口中ノ病ニハ喉痺・喉風・喉腫・喉熱・喉蛭(喉蛭トハ咽ノヒコ、紅ヲ付タル如ク、赤クナリ痛ム、次第ニ大ニ長クナリ、喉ノ内ニ入タリシテ腫ル)ヲ擧ゲ、舌ノ病ニハ重舌(大舌)・木舌・金舌・鵞口瘡(俗ニ舌桑ト曰フ)・舌強(舌コワハリスクミ、物言フコトナラヌナリ)。齒ノ病ニハ齒痛・齲腫・口臭・齒根スヒテ動ク・齒草・唇ノ病ニハ緊唇・藩唇・生核唇・黑唇・唇瘡ヲ擧ゲ、ソノ治方トシテハ、吹藥・含藥・塗藥ヲ用ヒ、又刺針ノ法ヲ施スコトヲ説クコト、大抵啓迪集ニ同ジ。

以上記スルトコロニヨリテ之ヲ觀ルニ、當時ノ口中科ハ、ソノ疾病ヲ論ズルコトハ固ヨリ本道ノ書ニ依リテ、李・朱醫學ヲ宗師トシタレドモ、ソノ治術ハ外科ノ一部トシテ、口内ノ治ヲ司ドリ、刺針法ヲ主トシテ用ヒタルコト、カノ金創醫ガ外科ノ一部トシテ主ニ金創ノ治方ヲ司ドリタルト、ソノ關係相同ジトスベシ。

耳鼻科

耳科ハ大寶ノ醫疾令ニ於テ専門ノ科目トセラレタレドモ、平安朝ヨリ鎌倉・室町兩時代ヲ經テ、コノ期ニ至ルマデ、耳科専門ノ醫家ナク、本道及ビ外科ノ書中ニ、耳病ノ部門アリ、ソノ治方ヲ記述セルニ過ギズ。

啓迪集ニハ醫學正傳・丹溪心法等ヲ引テ、内經ニ「耳爲ニ腎之外候」、腎通ニ竅於耳トアルニ據リ、説ヲ立テ、耳痺及ビ耳鳴ハ、嗜欲無節・勞役過度・中年之後・大病之餘ニ腎水枯涸シ、陰火上炎スルガ故ニ起ルトナシ、耳聾ハ風熱・腎虛・血虛・痰火ニヨリテ起リ、厥聾・風聾・勞聾・虛聾ノ別アリ、熱氣虛ニ乗ジ、脈ニ隨テ耳ニ入り、聚熱散セズ、膿汁出ツ、之ヲ膿耳ト曰ヒ、耳間津液アリ、若シ風熱之ヲ搏テバ津液結テ核トナリ、耳ヲ塞ギ、暴ニ

聾トナル、之ヲ^ナ耳ト曰フト説ク。ソノ論説ハ之ヲ六百年前ノ醫心方ノ所説ニ比シテ些モ新シキヲ加フルトコロアラズ。(平安朝ノ醫學ノ章下、第七十六頁ヲ参照スベシ)

外療新明集・外科細壘ノ二書ニ記述スルトコロハ更ニ粗略ニシテ、特ニ擧ゲテ言フベキコトナシ。『耳ノ内へ、何デモ入りテ、出ザルニハ、弓弦^{ユミツル}ヲ切りテ、切口ヲヒロゲ、柔ニシテ、新膠^{ニカワ}ヲツケテ、サシ入レ、且クシテ引き出スベシ』ナド言ヘル、瑣細ノ新案アレドモ、大體ニ於テ、ソノ治方ニ進歩ノ跡ヲ認ムルコト能ハズ。

鼻病ハ古ヘヨリ耳・目・口・齒ノ病ト併セ擧ゲラレ、而シテ耳・目・口・齒ハ既ニ平安朝以前ニアリテ、専門ノ科目トセラレタルニ似ズ、獨リ鼻病ハコノ期ニ至ルモ尙ホ僅ニ本道及ビ外科ノ書ノ一部ヲ占ムルニ過ギズ。平安朝時代ノ醫心方ニハ鼻ノ疾病トシテ、鼻塞涕出(鼻鼈・鼻中瘰肉・鼻中生瘡・鼻痛・鼻中燥・鼻衄・鼻中物入ヲ擧ゲ病源候論ヲ引テ『肺氣通^ニ於鼻^一、肺臟爲^ニ風冷所^一レ乘、則鼻不^レ和、津液壅塞而爲^ニ鼻鼈^一、冷搏^ニ於血氣^一、停^ニ結鼻内^一、故變生^ニ瘰肉^一』『肺臟有^ニ熱氣^一、衝^ニ於鼻^一、故生^レ瘡』ト説キ、コレ等ノ諸症ニ對シテ藥ヲ用フルヤ、之ヲ綿^ニ浸シテ鼻内ニ入ルルノ法アリ、藥品ヲ以テ直チニ局所ニ貼傳スルノ法アリ、衄血ニ對シテハ冷水ヲ頂上ニ注ギ、頭頂ニ灸シ、酒ヲ漬セル綿ニテ鼻孔ヲ塞グノ法ナドモアリ。鎌倉時代ヲ經テ室町時代ニ至リ福田方ニハ鼻ノ疾病トシテ衄血・鼻痛・膿臭(鼻ヨリ膿出^デテ久シク臭キモノ)・涕出(鼻塞カリ涕出^ツ)・鼈鼻(息肉アリテ香臭ヲ聞カズ。鼻中ノ息肉ヲバ俗ニ鼻痔ト名ヅク)・酒鼈(俗ニ酒瘡鼻ト名ヅク)ヲ擧ゲ、同ジク『鼻中ノ病ハ皆是肺臟ノ不調ノ候ナリ』ト説キタリ。而シテコノ期ノ書、啓迪集ニハ醫學正傳等ノ説ニ基ツキテ『鼻ハ肺ノ外候タリ、肺ノ臟タル其位高く其體脆シ、性寒ヲ惡ミ、又熱ヲ惡クム、故ニ好^ニ熱酒ヲ飲ムモノハ、始ハ肺ヲ傷ブリテ鬱熱シ、久シケレバ則チ外ニ見ハレテ鼻鼈^赤ヲナス。或ハ風寒ニ觸冒シ、始メハ則チ皮毛ヲ傷ツケテ鼻塞^{不通}ノ候ヲナス。或ハ濁涕ヲナシ、清汁ヲ流ガシ、久シテ已マズ、名ヅケテ、鼻淵ト曰フ。肺風寒ニ傷ブラレ、津液結滯シテ鼻氣宣ビズ、香臭聞カズ、漸クニシテ鼻鼈シ、冷氣停聚シ、血脈陰凝シ、歲月延淹トシテ息肉ヲ生ズ』ト説キ、ソノ治方トシテハ『鼈鼻息肉ハ乃チ肺氣ノ盛ナリ、枯礬末ヲ綿咽脂ニ裹ミテ鼻ヲ塞ギ、又ハ干姜末ヲ蜜ニ和シ丸トシテ鼻ヲ塞グバ數日ニシテ自消ス。辛頰鼻淵ハ外寒ノ内熱ヲ束ルノ證ニシテ又膽ノ熱ヲ腦ニ移スニ由ル、防風通聖ヲ用フベシ、酒瘡ハ皆壅熱ノ致ストコロニシテ、又肺風斂マルコト能ハズシテ自カラ生ズルモノアリ、盡ク酒ニ因ルニアラズ、赤鼻久シク癒エザルモノハ大黃・朴硝、右等分末シテ水ニテ調ヘ患處ニ付ク、鼻尖微赤、鼻中生瘡ニハ杏仁ヲ研末シ、乳汁ニテ之ヲ付ク』ト説キタリ。³¹

按ズルニ、鎌倉時代ノ書、頓醫抄ニハ鼻痔ヲ治スルニ『一方了意傳先^ヅ生出タル鼻タケヲ銅ノ火針ニテ可灸、火針ノサキヲ出スベキ程ヲハカラヒテ、細キ竹ヲ切テ口ヲヨクコシラヘテ、火針ノ莖ニマチノモトマデ入レテ、一二分ばかり火針ノサキヲ出シテ、生出ルサキヲミナ失ルマテ灸スルナリ、皆燒テ後アトニ陶沙ヲ灰ニ燒テ、細ニシテ付クベシ』ト説キタリ。當時ノ外科ニ燔針(烙針)ノ盛ニ行ハレシコトハ、ソノ條下ニ説キシ如クナルガ、コノ如ク鼻痔ヲ烙クコトハ既ニ鎌倉時代ニ行ハレタルニ拘ラズ室町時代ヨリコノ期ニ及ビテハ烙針ノ法ハ復タ古ノ如ク盛ナラズ、隨テ鼻病ノ治方ニ用ヒラレタルコトナカリシナラン。

藥物科

藥物ノ學ニ就キテハ、平安朝ノ醫學ノ章下（第八十三頁乃至八十七頁）ニ於テ、既ニソノ大要ヲ擧ゲシガ、藥物ノ性・色、及ビ名實ヲ講ズルコト（本草學）ハ醫術ノ進歩ト共ニ、益々重要視セラレ、コノ期、道三學派ニアリテハ、藥劑ノ氣味ヲ辨ジ、ソノ能毒及ビ宜禁ヲ詳ニシテ、七情ヲ別チ、七方十二劑ヲ明カニシ、又生熟炮製ノ法則ヲ知ルヲ以テ醫家ノ要務トナシタリ。^⑩

藥劑ノ氣トハ寒・熱・溫・冷ノ四性ヲ言フ。陽ナリ。味トハ酸・苦・甘・辛。鹹ノ五味ヲ言フ。陰ナリ。曲直瀨道三八、ソノ著、啓迪集・宜禁本草ニ於テ、湯液本草・衍義本草・本草集要、等ノ諸書ニ依リテ、藥物ノ氣味ヲ論ジ、ソノ甘・苦・鹹・辛・酸ト寒・涼・溫・熱・平トヲ區別シ、又『藥性各有能毒一、中レ病者籍其能一、以獲レ安、不レ中レ病者、徒惹其毒一、增レ病』ノ義ニ本ヅキテ藥性能毒ヲ著シ、以テ藥物ノ、醫治効用ヲ詳ニシタリ。

藥劑ノ七情トハ單行・相須・相使・相畏・相惡・相反・相殺ヲ言フ。本ト藥性ノ義ニ係ル。單行ノモノハ諸藥ト劑ヲ共ニスベカラズ。相須ノモノハ二藥相宜シ、宜シク之ヲ兼用スベシ。相使ノモノハ能ク使卒トナリ、諸經ニ引達ス。相惡ノモノハ彼レ毒アリテ、我之ヲ惡ムニテ。相畏ノモノハ我能アリテ彼之ヲ畏ルナリ。コノ二者ハ併セ用フルモ深く害ヲナサズ、相反ノモノハ兩者相反抗ス、和合セシムベカラズ。相殺ノモノハ彼藥毒ニ中タル時ニ、コレヲ用ヒテ能ク殺除スルモノナリ。

七方トハ大・小・緩・急・奇・偶・複ヲ言フ。品數多キモノヲ大方ト曰ヒ、品數少ナキモノヲ小方ト曰フ。緩方ハ毒ナクシテ病ヲ治スルモノニシテ、急方ハ急病急攻ノ方ナリ、奇方ハ古ノ單方ニシテ、偶方ハ複法ナリ。而シテ別ニ複法アルハ二方四方相合スルノ方ナリ。

十二劑トハ宣・通・補・泄・輕・重・澁・滑・燥・溫・寒・熱ヲ言フモノニシテ、宣ハ壅ヲ去ル、生姜・橘皮ノ類ナリ。通ハ滯ヲ去ル、通草・防已ノ類ナリ。補ハ弱ヲ去ル、人參ノ類ナリ。泄ハ閉ヲ去ル、大黃ノ類ナリ。輕ハ實ヲ去ル、麻黃・葛根ノ類ナリ。重ハ怯ヲ去ル、磁石・鐵粉ノ類ナリ。澁ハ脫ヲ去ル、牡蠣ノ類ナリ。滑ハ着ヲ去ル、冬葵・榆皮ノ類ナリ。燥ハ濕ヲ去ル、桑白皮・赤小豆ノ類ナリ。濕ハ枯ヲ去ル、紫石英・白石英ノ類ナリ。寒ハ熱ヲ去ル、大黃・朴硝ノ類ナリ。熱ハ寒ヲ去ル、附子・肉桂ノ類ナリ。

本草學ノ研究ト共ニ、藥品修製ノコトニモ注意シタリ。ソノ說ニ依レバ、藥物ニ陳フルキヲ用フベキト、新シキヲ用フベキトアリ。生ニテ用フベキト、火ヲ加ヘテ用フベキトアリ。藥品ニ火ヲ加フルニハ八火トテ、炮（ツツミヤキ）・炙（アブリモノ）・煨（ウヅキカキ）・焙（ホイロアブリ）・炒（カライリ）・熬（シルイリ）・煨（キタイヤキ）・爛（ケヤキ）ノ別アリ。藥品ノ異ナルニヨリテ修治ニ差別アリトス。

調劑ニハ丹藥・煎藥・丸藥・散葉・膏藥ノ諸法アリ、而シテ當時多ク用ヒシハ湯煎ニシテ、膏藥ハ專ラ之ヲ瘡瘍ニ用ヒタリ。^⑧

西洋醫學ノ輸入

建國以來二千年、外邦ト交通セルハ朝鮮・支那等近隣ノ諸國ニ止マリシニ、コノ期ニ至リテ所謂南蠻人ノ始メテ、我が邦ニ來タレルアリ、鐵砲・火藥ヲ輸入シ、木綿・煙草ヲ移植シ、又新ニ耶蘇教ヲ傳フルアリテ、我が邦ハココニ西洋ノ文化ニ接シ、殊ニ我が醫學ハ之ガタメニ著甚ノ影響ヲ蒙リタリ。

所謂南蠻トハ葡萄牙人ヲ指シテ言フ。葡萄牙人ノ始メテ我が邦ニ來タレルハ天文年間ニシテ、彼ノ邦十六世紀ノ始メニ當ル。當時歐洲ハ所謂文運復活時代ニアリテ、學問振ヒ興リ、航海ノ術開ケ、殖民ノ策行ハレ、一千四百九十六年ニハコロムブスノ亞米利加ヲ發見スルアリ、越テ二年、一千四百九十八年ニハヴァスコ・ド・ガマ (Vasco de Gama) ガ喜望峯ヲ一週シテ印度ニ到ルアリ、葡萄牙人ハゴアヲ占領シ、次デ澳門ニ商館ヲ建テ、東印度地方ニ於テソノ海權ヲ掌握シタリ。是レヨリ先キ日本 (Yipangu) ノ名ハ十三世紀ノ頃、伊太利人マルコ・ポーロ (Marco Polo) ノ旅行記ニヨリテ歐洲ニ知ラレシガ、徒ニ奇靈ノ地ナリト稱フルノミニテ、彼ノ邦ノ人未ダ我が邦ニ蹤ヲ致セシコトアラズ。ガマガ東洋航路ノ先鞭ヲ着ケシヨリ凡ソ四十年、西曆一千五百四十三年 (我が天文十二年) ニ至リテ葡萄牙ノ商船ガ我が九州ノ地ニ漂着シタルハ實ニ西洋人ガ、我が邦ニ來リタル第一次ナリ。南浦文集ニ依レバ『隅州之南有二島、名三種子、天文癸卯秋八月二十五日、西村小浦、有二大船、不知自何國一來上、船客百餘人、其形不類、其語不通、見者以爲奇怪一矣、中有大明大儒生一人名五峯一者上、西村主宰織部丞者對五峰一以杖畫於沙上云、船中之客、不知何國人也、何其形之異也。五峯即書云、此是西南蠻種之賈胡也、云々、賈胡長有二人一、一日牟良叔舍一、一日喜利志多陀孟太一、手携一物一、長二三尺、其爲體也、中通外直、而以重爲質其中雖常通一、其底要三密塞一、其傍有二穴一、通火之路也、形象無物之可比倫也、云々』トアリテ、ソノ大要ハ天文十二年秋八月二十五日ニ一大船ノ種子島ニ着スルアリ、中ニ明人五峯ト名ヅクルモノアリテ、ソノ南蠻ノ商船ナルコトヲ曰フ。ソノ賈胡ノ長ハ牟良叔舍・喜利志多陀孟太ノ二人アリ、ソノ手ニ一物ヲ携フルト言フハ鐵砲ニシテ、コノ時鐵砲ハ始メテ我が邦ニ傳ハレリト説クナリ。コレヲ西洋ノ記錄ニ照スニガルヴァノノ世界發見錄 (一千五百五十五年撰)・ピントーノ旅行記等ニ見ユル、アントニオ・ダ・モタ (Antonio da Mota)・フランシスコ・ゼイモト (Francisco Zeimoto) ハ、コノ時種子島ニ來タリテ、鐵砲ヲ我ニ傳ヘシ人ナラン。葡萄牙人ノ始メテ我が邦ニ來リシ年代ニツキテハ、異説アリ、或ハ天文十年ナリト言ヒ、或ハ天文九年ナリト言ヒ、或ハ天文四年ナリト言フ、蓋シ天文十二年ノ説ヲ以テ正シストスベシ。³²

所謂南蠻人ハ、コノ如クニシテ、我が邦ニ入り、通商通航ノ途、僅カニソノ緒ニ就クヤ、早クモ既ニ宗教ノ弘布ニ力ヲ盡シ、天文十八年 (西曆一千五百四十九年) ニハ「エスイト」ノ名僧フランソア・サビール (Francis Xavier)、ポール・ド・サンタ・フェ (Paul de Santa Fe) ヲ伴ヒ、我が鹿兒島ニ來タリ、先ヅ島津氏ノ許諾ヲ得テ、布教ニ從事シ、遂ニ九州内地ニ入り、豊後・平戸ヨリ山口ニ赴ムキ、大内義隆ノ信重スルトコロトナリ、滯留一年間ニ三千餘人ニ洗禮ヲ行フニイタレリ。

フランソア・サビールハ一千五百六年四月七日、バンプロナ城ニ生マレ、後巴里ニ遊ビ、イグナチアス・リオラノ「エスイト」宗派ヲ創ムルニ遇ヒ、コレニ親炙シテ宗教ノ革新ニ從事シ、ソノ革新セル宗教ヲ東洋ニ傳ヘンガタメニ、一千五百四十四年印度ニ來タリ、一千五百四十九年我が邦ニ來リ、一千五百五十五年廣東ニ於テ病歿セリ。

ポール・ド・サンタ・フェハ初ノ名ヲアングルト曰フ、本名安治郎 (一ニ半治郎、又本四郎、ソノ姓ヲ失ス) 薩摩・鹿兒島ノ人、人ト爭鬪シ、竟ニ之ヲ殺セシカバ、父母ヨリ追跡セラレ、逃ルルニ道ナク、葡萄牙船ニ身ヲ投ジ臥亞ニ赴ムキ、サビールニ遇フテ「エスイト」教ニ歸依シ、洗禮ヲ受ケテ、ポール・ド・サンタ・フェノ名ヲ得、サビールノ信任スルトコロト

ナル。依リテサビールニ勸メテ日本ニ布教セシメントシ、天文十八年遂ニ相伴ナフテ鹿兒島ニ歸リ、後サビールト共ニ山口ニ移リ、布教ニ力ヲ致スコト多カリシガ、弘治三年豊後ニアリテ病歿ス。(日本西教史) 或ハ曰ク『アングエル、本名ヲ了西ト言フ、大和ノ人、出奔シテ臥亞ニ至ル』ト。(對治邪執論)

「エスイト」ノ宣教師ハ、宗教ノ敷説ニ力ヲ致スニ方リ、恩徳ヲ被ヒ、利慾ニ誘ヒ、以テソノ宗教ノ内ニ網羅セントシ、殊ニ施療救恤ノコトニ心ヲ覃セリ。日本西教史ニ『弘治二年、ヌゲー師、日本ヲ發スル前ニ同伴ノ學生二人、及ビ豪富ノ葡萄牙人ニルイ・アルメイダ (Louis Almeida) ト言フ人ノ入社ヲ許セリ。アルメイダ時二年三十、此人ハ其志極メテ善良ニシテ、學淺ケレドモ、才多ク、外科治療ニ妙ナルヲ以テ大ニ日本人民ヲ歸化スル補助ヲナセリ、將ニ社ニ入ラントスルニ方リ、日本ノ產物ヲ買ハント、印度ヨリ持チ來タリシ五千金ヲ以テ、救濟院ヲ二箇所設ケ、一ハ世人ノタメニ見放ナサレ、尤モ憫ムベキ癩病ノ者ヲ養ナヒ、一ハ前ニモ云ヘル如ク、日本ニテハ父母ノ子ヲ捨テ子ヲ殺スノ權アルヲ以テ、養ヲ得ザル薄命ノ幼兒ヲ育ス』ト記シ、又同年、豊後ノ國主大友宗麟ガ耶穌教ヲ信奉シ、教師ノ勸告ニ應ジテ救濟院ヲ設ケシコトヲ記スルノ條ニ『サレバ、歲月ヲ經ズシテ府内ヘ救濟院ヲ設ケラレシコト三箇所ニ及ベリ、一ハ幼兒ノタメ、一ハ癩病ノタメ、一ハ窮民病者ノタメナリ、日本人ハ畜類ニ對シテノ情愛深ク、人間ニ對シテ苛酷ナル風俗ナルニ由リ、病者ノタメニ救濟院ヲ設ケシコト、大ニ全國ヲ驚カセリ、尤モ教法ノ光榮ヲ發揚セシハ他醫ノ治シ難キト云フ難病、又ハ重創ノタメニ入院セシ者ヘ神水ヲ灌キ、聖髑ヲ附スルニ由リ、不日ニ平癒シ、身體壯健ニ復シテ退院スルモノ數多アル靈驗ニ依ルナリ』ト記シタリ。コレ實ニ西洋人が我が邦ニ來タリテ醫術ヲ施シタル嚆矢ニシテ、コノ時我が邦人ノ之ニ從テ方伎ノ術ヲ學ビシモノ必ズ之アリシナラン。(ポールガ山口ニアリテ病人ヲ治セシコト、日本西教史ニ見ユ) 3234

織田信長ノ足利氏ニ代リテ天下ノ政權ヲ把ルヤ、天台・一向ノ宗徒ガ舊來ノ勢威ヲ恃ミ不遜ニシテ從順ナラザルヲ惡ミ、大ニ攻撃シタレドモ、コレニ反シテ耶穌教ハ布教ノ念切ニシテ諂諛コレ事トシタレバ、ソノ懇請スル儘マニ布教ヲ許シ、永祿十二年、京都・四條坊門ニ方四町ノ地ヲ與ヘ、一寺ヲ創建セシメ、之ヲ南蠻寺ト稱シ、別ニ五百石ノ地ヲ寄附シタリ。コノ時來朝ノ僧徒二人、名ヲケリコリ、ヤリイスト曰フ、兩人共ニ醫術ニ精シキヲ以テ南蠻寺中ニ病者ヲ留メ、醫藥ヲ給シ、恩惠ヲ施シテ以テ布教ノ方便トナセルコト、南蠻寺興廢記ニ見エタリ。又藥種ヲ植エ、濟生ノ備ヲナサンコトヲ乞ヒ、江州・伊吹山ニ方五十町ノ地ヲ賜ハリ、之ヲ藥園トナシ、本國ヨリ三千種ノ藥草ヲ移植シタリト言フ。按ズルニケリコリ、ヤリイストイヘルハ原名グレゴリオ (Gregorio des Cepedes) 及ビルイス (Luis Froes) ノ二人ニシテ、當時ノ人ガソノ發音ヲ聞キ誤マリタルナリ。

南蠻寺興廢記ニ曰ク『洛中、洛外ヘ人ヲ出シ、或ハ山野ノ辻堂橋ノ下等ニ至ルマデ尋搜、非人・乞食等ノ大病難病等ノ者、召連レ來ラシメ、風呂ニ入レテ五體ヲ清メ衣服ヲ與ヘテ、コレヲ暖メ、療養シケル程ニ、昨日ノ乞食、今日ハ唐織ノ衣服ヲ身ニ纏ヒ、病モ自ラ心ヨク快復セル類多シ。就中癩瘡等ノ難病南蠻流ノ外療ヲ受ケ、數月ヲ歷ズシテ全快シ、誠ノ佛菩薩今世ニ出現シテ救世濟度シ玉フナリト、近國他國風說區々ナリ、故ニ諸國ノ大病難病ニ侵サレ、貧賤ニテ我力ニ叶ハザル者、或ハ諸醫ノ療養ニ治スルコト能ハザル者、貴賤共ニ南蠻寺ニ群集スルコト斜ナラズ』

天正十三年、豊臣秀吉、織田氏ニ代リテ政權ヲ執ルニ及ビ、南蠻寺僧徒ノ奸詐、人民ヲ狂惑スルヲ惡ミ、急ニ兵ヲ遣シテソノ寺ヲ圍ミ、教僧ヲ捕ヘテ、長崎ニ送り本國ニ返シテ來タルコト勿ラシム、而カモソノ醫術ハ一二徒弟ノタメニ傳ヘラレテ大阪・堺地方ニ遺存セリ、所謂南蠻流ノ醫術ハ、コノ如クニシテコノ頃ニ興レリ。

僧惠春 (一ニ慧俊ニ作ル) 加賀ノ人、禪僧ナリ。癩瘡ヲ病ミ身體破レ、膿血溢腫、人ト交ハルコト能ハザリシガ、貧賤ニシテ療養スルコト能ハズ乃チ乞巧トナリ、京都ニ赴ムキ、眞葛ヶ原ニ起臥シ憐ヲ行人ニ乞ヒ居タルヲ南蠻寺ニテ引き取り、ヤ

リイス、ケリコリノ兩人、コレヲ施療シテ恢復シタリ、惠春深ク之ヲ恩トシ、ソノ宗旨ニ歸依シ、名ヲバヒアン（梅庵）ト改メ、剃髮僧形ノママニテ布教ニ從事シ、且醫術ヲ學ビ、コレヲ實地ニ施シタリ、天正十三年豊臣秀吉ノ南蠻寺ヲ毀タシムルニ方リ、西國ニ逃ガレ、之ク所ヲ知ラズ。（南蠻寺興廢記）

吳服屋安右衛門、泉州・堺ノ人、初メ富豪ノ商賈ナリシガ家道零落シ剩サヘ瘡毒ヲ患ヒ、遂ニ出奔シテ京都ニ來タリ、東寺廻廊ノ下ニ潜ミ出デテ食ヲ乞エリ。時ニ南蠻寺ノ收容スルトコロトナリテソノ療養ヲ受ケ、累月ニシテ治スルヲ得タリ。是ニ於テ宗門ニ歸シ、名ヲコスモ（告須蒙）ト改メ、説教ニ從事ス。（日本西教史ニ依レバ、安右衛門ハ堺ノ豪農某ノ子、私カニ京都ニ來リ、カブラルニ就テ耶蘇教ノ洗禮ヲ受ク、ソノ父聞テ大ニ怒リ之ヲ放逐ス、依リテ千辛萬苦ヲ經過シ、遂ニ南蠻寺ニ入レリト言フ）天正十三年ノ變逃レテ江州ニ走り知人ノ家ニ寓ス、居ルコト三年、泉州・堺ニ來リ、蝦子街・中ノ濱ニ居リ、名ヲ市橋庄助ト改メ、專ラ外科ノ治療ニ從事セリ。十六年九月人アリ、秀吉ニ告グルニ市橋庄助・島田清庵ノ兩人ガ奇妙ノ術ヲナスコトヲ以テス。乃チ兩人ヲ召シ見テソノ南蠻寺ノ殘黨ナルベキヲ察シ、捕ヘテ之ヲ粟田口ニ磔セシム、時ニ天正十六年九月十九日ナリ。（南蠻寺興廢記）

百姓善五郎、泉州・墨村ノ人、生レテ缺唇ナリ、長ジテ産ヲ破リ食ヲ近隣ニ乞フ、安右衛門ト共ニ京都東寺ノ廻廊ニ潜ミタルガ、南蠻寺ニ收容セラレ衣食ヲ給シ治療ヲ加ヘラレテ、ソノ病愈チ全癒セシヨリ、終ニ宗門ニ歸シ、名ヲジユモン（壽門）ト稱シ梅庵、告須蒙ト共ニ布教ニ從事セリ。天正十三年ノ變逃レテ越前ニ走り、四年ノ後、堺ニ來リ、東湊ニ於テ醫業ヲ開キ名ヲ島田清庵ト改メ、本道醫師トナレリ、十六年九月市橋庄助ト共ニ捕ハレ、十六日磔セラル。（南蠻寺興廢記）

南蠻流醫方ノ事ニ就キテハ、南蠻流外科秘傳書ニ依レバ『夫レ人間ノ五體ニウモルト云フ血ノ名四ツアリ、一ニハサンギ、二ニハコレラ、三ニハヘレマ、四ニハマレンコンヤコレナリ、サンギ (Sanguis) ト云フハ能血ノコトナリ、性ハ熱ニシテ濕ナリ、コレラ (Cholera) ト云フハ血ノ上澄、薄血ナリ、性ハ熱ニシテ燥ナリ、ヘレマ (Phlegma 粘液) ト云フハ血ノ内ニアル水ナリ、性ハ寒ニシテ濕ナリ、濕痰ノ腫物ハコレヨリ發ル、マレンコンヤ (Melanchoria) ト云フハ血ノオリナリ、性ハ寒ニシテ燥ナリ、シカルニ右ノ血、何レモ五體ニ過不及ナク、相應スル時ハ無病ナリ、右四色ノ血ヲ損サスモノハ、風寒・暑濕・飲食、或ハ房事ヲ過スカ、或ハ金瘡打身、或ハ遠ク行クカナドシテ、血氣滯ル故ニ、瘡腫物モ出來、諸病モ發ルナリ』ト言フ（元祿九年刊ノ阿蘭陀外科指南ニ載スルトコロモコレト同文ナリ）ソノウモルト言フハ羅甸語ノ Humor (液體) ニシテ、サンギ (Sanguis 血液) ・コレラ (Cholera 黄胆汁) ・ヘレマ (Phlegma 粘液) ・マレンコンヤ (Melanchoria 黑胆汁) ノ四液ヲ以テ、疾病ノ發生ヲ説ク、所謂液體病理學ニシテ、ソノ説ハ遠クヒポクラテスニ出デ、ガーレン (西曆百三十一年ニ生レ、二百一年ニ歿ス) ニヨリテ大成セラレタルモノナリ。ガーレンノ病理學ニ依レバ、黄胆汁ハ肝ヨリ生ズルモノニシテ火ニ當リ、黑胆汁ハ脾ヨリ出ヅルモノニシテ土ニ當リ、粘液ハ腦ヨリ出ヅルモノニシテ水ニ當リ、血液ハ肝ヨリ發スルモノニシテ、火木土ヲ併セ配スベシト言ヒ、又ソノ性質ヲ見ルニ粘液ハ冷・濕。黄胆汁ハ温・燥。黑胆汁ハ冷・燥。血液ハ温・濕ナリト説キ。コノ四原液ノ混合・礙滯ナキハ自然正常ノ状態ニテ、然ラザルモノヲ疾病トスト説ク。我が織・豊二氏ノ世ハ彼ノ邦十六世紀ノ後期ニ當ル。彼ノ邦十六世紀ハ所謂文運復活時代ニシテ、醫家ノヒポクラテスヲ研究スルモノ多ク、ヒポクラテスノ古説ハ、コノ時復タビ世ニ行ハレシガ、ソノ四原液ノ説ハ葡萄牙人ノ傳譯ニ依テコノ如ク我が邦ニモ入りタリ。

葡萄牙人ノ始メテ我が邦ニ來タリシヨリ五十年、ソノ初メハ彼ノ國ノ商估及ビ僧徒ノ來朝スルモノ頻ニシテ、交商宣教ヲ謀リ、未ダ十餘年ナラズシテ信徒十五萬人、寺院二百ノ多キニ至リ、大友・大村等ノ諸侯ハ使者ヲ羅馬ニ遣ハシ、彼我ノ交通益々盛ナラントシテ、耶穌教ハ豊臣秀吉ノ嚴禁スルトコロトナリ、南蠻寺ハ破毀セラレ、ソノ徒ハ殺戮セラレタリ。ソノ後征韓ノ役アリテ、國內騷擾ヲ極メシヨリ、ソノ禁大ニ弛ミシニ乗ジ、文祿ノ末ニハ西班牙人ノ來朝シテ、嘗テ葡萄牙人ガ宣教セシ「エスイト」派ニ對抗シテ布教セント企テタルコトアリ。而カモ慶長十七年、耶穌教嚴禁ノ令行ハレテヨリ、所謂南蠻人ノ我が國ニ來往スルコトハソノ跡ヲ絶ツニ至レリ。然レドモ南蠻人ガ布教ノ方便トシテ施セル醫術ハ、耶穌教嚴禁ノ後ト雖モ、大阪・堺・長崎、ソノ他ノ地方ニ行ハレ、所謂南蠻流ノ醫方ハ喪亡ノ間ニアリ。黒川道祐ノ本朝醫考ニ『本朝瘍科、凡有^三兩家^一、一稱^三高取^一、一稱^三南蠻流^一、出^レ自^三西洋耶穌之徒^一』ト言ヒ、杉田玄白ノ蘭學事始ニ『天正・慶長の頃、西洋の人漸々我西鄙に船を渡せしは、陽には交通、陰には欲する所有てなるべし、故に其災起りしを、國初以來嚴禁なし給へりと見へたり、其邪教の事は知らざる所の他事なれば論なし、但し其頃の船に乘來りし醫者の傳來を受けたる外科の流法は世に残るもあり、これ世に南蠻流とは云ふなり』トアルハ即チ是ナリ。

慶友、本名ハハフテイ、葡萄牙ノ人、天正年間來リテ肥前・高來ニ居ル、醫ヲ善クシ、最モ外治ニ長ズ、後大阪ニイタリ、名ヲ慶友ト改メ醫ヲ業トス。(耶穌元誅記)

澤野忠庵、葡萄牙ノ人、本名ヲクリストファン・フェレーラ (Christophan Ferreira) ト言フ。我が邦ニ歸化シ、宗門ヲ改メ、南蠻忠庵ト稱ス、我が邦ノ言語ニ通ジ、又醫方ヲ善クス、ソノ所説ヲ傳フルモノニ南蠻外科秘傳書、三卷アリ。

半田順庵、長崎ノ人、幼ヨリ瘡科ニ志シ、業ヲ澤野忠庵ニ受ク、慶長・元和ノ間、遠ク阿媽港(今ノ澳門)ニ赴キ、更ニソノ技ヲ修メ、業成リ歸朝シテ名聲大ニ振フ。(先民傳・日本醫譜)

西吉兵衛、南蠻語ニ通ズ、元和二年南蠻大通詞ニ擧ゲラル、ソノ子玄庸又吉兵衛ト稱ス、父ノ業ヲ受ケテ葡萄牙通詞トナリ、又葡萄牙人澤野忠庵ニ從ヒ、外科ヲ修メ、遂ニ西流ノ一派ヲナス。(長崎通詞由緒書)

杉本忠恵、長崎ノ人、蕃人ニ就テ、妙方ヲ傳ヘ、治療効多ク、ソノ名世ニ高シ。(先民傳)

吉田安齋、字ハ鉅豊、自休ト號ス、半田順庵ニ從テ醫方ヲ修ム。(先民傳)

栗崎道喜、幼名歌之助、南肥・栗崎ノ人、ソノ乳母某ト共ニ仇ヲ避ケテ長崎ニ來ル、天正二年僅ニ九歳ニシテ、蕃船ニ乘シ、呂宋ニ入ル、十四歳ノ時始メテ外科ノ術ニ志シ、名師ニ就テ學ブコト八年、尤モ金創ノ術ニ精シ、年三十餘歳ニシテ歸朝ス。長崎奉行宅地ヲ長崎・萬屋町ニ賜ヒ、コレニ居ラシメ、奉行所員及ビ外國人ノ治療ヲ司ドラシム、慶長四年十二月病歿ス、年八十四。(栗崎系譜)

南蠻流外科ニ關スル文書ノ今ニ傳ハルモノ數種アリト雖モ、多クハ口授筆記ノ類ニシテ傳寫ノ誤謬カラズ。忠庵ノ所傳ヲ記録セリト稱スルトコロノ南蠻流外科書、三卷・道喜ノ秘方、金創仕掛、二卷・元和五年刊、山本玄仙撰、萬外集要、三卷等ニ依リテ、所謂南蠻流外科ノ内容ヲ窺フニ、ソノ治方ハ瘡瘍ト金瘡トヲ主トシタルコト、コノ期世ニ行ハレタル鷹取流外科ト異ナルトコロナシ。

瘡瘍ニアリテハ癰及ビ疔ヲ以テ主要ノモノトシ、ソノ原因ハ四原液(上條ヲ見ヨ)ノ不調ニ在リトシ、ソノ不調四原液ノ如何ニ因テ數種ニ別チ『(1)血ノ性ハ溫ニシテ濕ナリ、血腐サルトキハ又ハ血薄キトキハ癰疽、又ハ疔ナドノ腫物ヲ生ズ。(2)血ノ上澄(黃胆汁)ヨリ出デタル腫物ハ溫ニシテ燥ナリ、餘リ腫レ上ガラズ、強熱アリテ細

キ物ニテ突クガ如ク痛ムナリ。(3) 濕痰(粘液) ヨリ出タル腫物ハ寒濕ナリ、白色ニ腐レテ見ユ、其性和ニシテホメカズ。(4) 血ノヲリ(黒胆汁) ヨリ出ヅルモノハ紫色ノ腫物ナリ、押シテモ痛マズ、手ニテサグリ見ルニ冷シトナシ、腫瘍ノ發生ヲ四期ニ別チ、第一期ハ腫物發生、第二期ハ腫脹、第三期ハ大ニモナラズ、小ニモナラズ、潮ノタダユルガ如ク、第四期ハ腫物散リ、又ハ膿ムトキナリトセリ。

治方ハ腫物ノ發生ノ時期ニ從ビ、ソノ處置ヲ異ニスベシト雖モ、大要ハ腫物ヲ散ラスカ、或ハ膿マスルカノ二法ナリ。腫物發生ノ初期ニハ押藥ヲ付ケ、腫物増大スルトキハ押藥三分ニ散藥三分一合セテ用ヒ、腫物發生ノ極期ニハ押藥・散藥、等分ノモノヲ用ヒ、既ニ第四期ニ及ビ、腫物ヲ散ラスニハ散藥、膿マスニハ膿藥ヲ付クベシ、而シテソノ既ニ化膿セルニ及ベバ口開藥ヲ用ヒ又ハ平針・燒針ヲ用ヒテ、之ヲ開キ、膿ヲ去ルベシ。

押藥 車前草・川芎・駒引草・蓮葉・草人木・柘榴皮 右粉ニシテ水ニテ和シテ付ケヨ、強ク押ス藥ナリ○又方 玉子白味・花ノ油・葵根 コレハ和ニ成押藥ナリ。

散藥 テレメンテイナ・乳香・沒藥・ヨモキ・イノント(葵根)

膿藥 小麥粉・水・豚肉油・鬱金 右ネバノト合セツクルナリ○又方 葵根・小麥粉・鬱金・卵黃味・豚肉油 右合セ付ケヨ。

口開藥(コレヲロツフトウリウント言フ) 石灰・サボン 右二色○一方 琉璃ノ粉・サボン 右二色 鉛ヲ燒キ粉ニシテ何レノ藥ニモ少シ加ヘ付ケヨ。

創傷ニハ切疵(金創)・突疵(鑢疵・矢疵)・鐵砲疵・打身(打撲傷)等ノ別アリ。金創ノ治方ハ疵ノ深淺ニ拘ラズ、燒酒ヲ煖メ、木綿ニ浸シ、コレニテ創面ヲ洗ヒ凝血ヲ去リテ後、椰子ノ油ヲ疵ニ塗リ、針ニテ創口ヲ縫ヒ(縫合ノ方法ニハ數種アリ)再ビ創面ヲ燒酒ニテ洗ヒ、玉子ノ白味ニ椰子油、少許ヲ加ヘタルモノニ浸セル木綿ヲ取りテ創面ヲ覆ヒ、ソノ上ヲ木綿ニテ能ク卷クナリ。

鑢疵・矢疵等ノ突疵ハ深ケレバ縫ハズ、淺ケレバ一針縫ヒ、創内ニ木綿ノコヨリニ油藥ヲ塗リタルモノヲ入レ置ク。鐵砲疵ハ玉ノアル所ヲ探リ、玉拔ニテ之ヲ抜ク、若シ玉拔ニテ抜クコト能ハザレバ吸膏藥ヲツケ、膿汁ト共ニ

玉ノ出ヅルヲ待チテ之ヲ去ル。打身(打撲)ニハ局處ニ膏藥ヲ塗り、内用ニハ木乃伊ミイラ酢ニテ用フルナリ。

止血ノ法トシテハ内藥、若クハ散敷藥ヲ用ヒ、縫合ヲ施シ、又ハ壓迫繃帶(木綿ニ酢ト水トヲ合セタルモノヲ浸シテ創面ニアテ、ソノ上ニ木綿ヲ厚ク重ネ、ソノ上ヲ卷ク)ヲ用フ。

コノ如ク南蠻流外科ノ治方ハ、病理ヲ説クニハ四原液ノ不調ニ依リ、藥品ハ斬新舶載ノモノヲ採リ、殊ニソノ手術ニ於テ、之ヲ鷹取流外科ニ比スレバソノ面目ヲ新ニスルモノアリト雖モ、萬外集要ニ外科醫ガ持ツベキ道具トシテ擧ゲタルモノヲ見ルニ『針五本、燒金二本、鋏一本、鐵ノヘラ二本、毛引鋏一本、角ノヘラ一本、長刀針一本、鎌(口中切)一本、小刀一本、サジ一本』ニ止マル。コレニ依リテ、ソノ手術ノ程度モ大概推シテ知ラルベシ。

金創及ビ癰疔以外ニ南蠻流外科書中ニ擧ゲタルハ、癰疽・血腫・蓮瘡・水腫・風毒腫・癩癰・骨疽・丹毒・下疳瘡・便毒・楊梅瘡、等ノ諸症ニシテ、ソノ治方トシテハ主ニ油藥・膏藥ノ塗敷ヲ用ヒタリ。

施藥院

天平二年、始メテ皇后職ニ施藥院ヲ置キ、窮民ノ疾ニ苦シムモノヲ救ヒ、施藥院使ノ官アリテ丹波・和氣ノ兩氏交々ソノ職ニ居リシガ、室町時代ニ及ビテハ、施藥院使ノ官アルノミニシテ、施藥院ノ實ハ久シク廢シ、先聖仁恩ノ意下民ニ及バズ。豐臣秀吉天下ヲ統一スルニ及ビ、施藥院ノ舊制ヲ復興シ、天正年間、施藥院ヲ禁闕ノ南門ニ建テ、丹波全宗ヲ擧ゲテ施藥院使ニ任ジ、四方民衆ノ疾病ニ苦シムモノヲ招集シ、治ヲ施シ、藥ヲ給スルコト頻回、全治ヲ得シモノ甚ダ多シ。全宗ノ子宗伯、父ノ官ヲ襲テ施藥院使トナリ、子孫遂ニ施藥院ヲ以テ姓トスルニイタル。

施藥院全宗、德運軒ト號シ、又藥樹院法印ト稱ス、ソノ先ハ丹波氏ヨリ出ヅ、雅忠十七世ノ孫ナリ、中ゴロ家衰ヘテ移テ江州ニ居ル、祖宗清、父宗忠、僧トナリ、權大僧都法印タリ宗忠死セシトキ全宗尙ホ幼ナリ、ソノ母之ヲ叡山ニ致シテ佛徒タラシメントス、時ニ永祿元年八月某日ナリ、全宗幼ニシテ秀悟穎達、ソノ性甚ダ仁慈ナリ、叡山ニアリ、横川檢校ニ從テ得度シ、藥樹院ニ住持タリ、元龜中織田信長兵ヲ以テ叡山ヲ陷キレ、堂宇盡ク燹ス、豐臣秀吉亦織田氏ニ尋ギ之ヲ滅スノ志アリト稱ス。僧徒屏息皆生ヲ聊セズ、全宗深ク之ヲ憂ヒ、一日ソノ徒ニ謂テ曰ク、余今還俗シテ此山ヲ全フセント、ソノ祖ノ名家ナルヲ以テ、去テ曲直瀨道三ノ門ニ入り、孜々研究、頗ルソノ蘊奧ヲ窮メ、ソノ門ノ高足タリ、事ヲ以テ豐臣秀吉ニ交リ、大ニソノ信重スルトコロトナリ、常ニ營中ニ延キテ之ト相議ス、言フトコロ必ズ聽カレ、望ムトコロ皆ナ行ハル、而シテ叡山一刹之ガ爲ニソノ敗滅セザルヲ致セリ、山徒皆ナ全宗ノ恩頼ヲ重トシ、之ヲ中興ノ宗祖ニ比シ、尋テ藥樹院開山トナシ、且ツ勸ムルニ再ビ緇徒タラン事ヲ以テス、全宗肯ゼズ。豐臣秀吉ノ天下ノ志ヲ獲ルニ及ビ奏請シテ屢々ソノ醫治ヲ告ス。勅ヲ以テ藥ヲ奉ゼシコトアリ、遂ニ擧ゲテ大醫院トナシ、法印ニ叙シ、施藥院使ニ任ズ。施藥院歷代ソノ名アリト雖モソノ事久シク廢シ、先聖仁恩ノ意下民ニ及バズ、全宗既ニソノ職ニ居ル、京師會疫アルニ遇フ、乃チ秀吉ニ謀リ請テ施藥ノ所ヲ禁闕ノ南門ニ建テ、大ニ藥局ヲ開キ、普ク四方ノ民人疾病ニ苦シムモノヲ招集シ、貴賤ヲ論ゼズ、施治給藥ヲナスコト前後二回各一百日、癘疾篤疾ノモノ全治ヲ得シモノ甚ダ多ク四方ソノ仁澤ヲ戴カザルモノナシ、全宗官從五位下侍從ヨリ正四位ニ進ミ後又昇殿ヲ許サル、慶長四年十二月十日病デ歿ス、年七十四、或ハ曰ク六十九、墓ハ西京十念寺ニアリ。全宗一男一女アリ。男秀隆才俊和歌ヲ善クス、從五位下侍從ヨリ從四位下少將ニ至リ、藤原姓及豐臣秀吉ノ偏諱ヲ賜ヒ、桐ノ徽號ヲ許サル、聚落ノ宴ニ騎シテ陪從セリ、ソノ寵遇想フベシ、父ニ先テ歿ス、女子亦夭折ス、近江ノ人三雲資隆ノ子宗伯ヲ養ヒ嗣トナス、子孫世々施藥院使タリ、子孫遂ニ施藥院ヲ姓トスルニ至ル、官ヲ以テ氏ニ稱セシモノナリ、而シテ宗伯、三雲氏ノ子ナルヲ以テ又三雲家ト稱ス。(三雲家傳歷・施藥院全宗行狀銘并序・寬永系圖傳・日本醫譜)

施藥院宗伯、近江ノ人、本姓三雲氏資隆ノ子ナリ、幼ニシテ父ヲ喪ヒ、一鷗宗虎ノタメニ鞠養セララル、宗虎頗ブル醫名アリ。豐臣秀吉ノ愛重スル所トナル、丹波全宗男秀隆ヲ喪ヒ、嗣ナシ、乞フテ宗伯ヲ養フテソノ家ヲ繼ガシム、豐臣秀吉召シテ侍醫トナシ、奏シテ法眼ニ叙ス、慶長四年法印ニ叙シ施藥院使ニ任ゼラル。徳川家康辟シテ侍醫トナス。コノ歳ソノ幼子萬君痘ニ罹ル宗伯命ヲ奉ジ、之ヲ護治シテ効アリ、五年關ヶ原ノ軍ニ陪從シ・九月家康病ニカカル、藥ヲ獻ジテソノ病癒ユ、眷顧尤モ渥ク、屢々ソノ方藥ヲ服ス、特ニ采地ヲ近畿ニ賜フ、十九年大阪ノ役徳川秀忠ニ從ヒ、効アリ、徳川家光ノ時ニ至リテ致仕シ、長生院ノ號ヲ賜ハル、寬文三年七月歿ス、年八十九歳、長子、宗雅家ヲ繼ギ、法印ニ叙セラレ、醫ヲ以テ一家ヲ成セリ。(三雲家傳歷・寬政系圖・本朝醫考)宗伯著ストコロ増補撮要集、若干卷アリ。

疫病

麻疹 本朝年鑑、天正十五年麻疹流行ノコト見ユ。醫學天正記ニモ麻疹患者ノ記録アリ。シカモ、ソノ詳ナルコトハ未ダ知ルベカラズ。

痘瘡 祐範記、慶長十五年二月、儲皇親王有ニ御腦一、疱瘡○九日丙辰、自ニ今日一、七箇日、被レ行ニ儲皇親王疱瘡御禱於春日社ニ云々ノ記事アリ。醫學天正記ニ『若宮様和仁親王御歳十二才 患ニ痘瘡一、既出而未レ能ニ快發一、竹田定加法印、御藥進上、而尙未ニ快發一、于レ時御腹痛甚、故ニ召レ予、云々』ト見ユ。コノ年ゴロ民間ニ痘瘡ノ流行アリシナラン。

疫病 皇年代略記・時慶記、等ノ諸書ニ依ルニ天正八年（自レ春至レ夏）・同十三年・永祿三年・慶長六年・同十九年、疫病流行セリト言フ。ソノ詳ナルコトハ攷フベカラズ。

醫書目録

コノ期ニ撰述セラレタル醫書ノ目録ヲ科目ニ從ヒ、類別シテ左ニ掲グ。但シ書名ニ*符ヲ附スルモノハ存否未詳ノ書籍トス。

一、本道

(書名)	(撰者)	(卷數)	(年代)
治法指南篇	曲直瀨道三	一五	元龜元年
合藥直傳集	曲直瀨道三	一	元龜元年
*懷中秘用	曲直瀨道三	一	元龜元年
啓廸集	曲直瀨道三	八	元龜二年
辨證配劑醫燈	曲直瀨道三	三	元龜二年
醫家要語集	曲直瀨道三	一	元龜三年
家傳心牛 耆婆國任		一	元龜三年
濟民記	曲直瀨玄朔	三	天正二年
短要方	南條宗鑑	一	天正三年
撮要集	南條宗鑑	—	—
診脉口傳集	曲直瀨道三	一	天正五年
捷徑辨治集	曲直瀨道三	一	天正五年
老師雜話記	曲直瀨道三	一	天正五年
正心集	曲直瀨道三	一	—
切紙	曲直瀨道三	一	天正九年
辭俗功聖方	曲直瀨道三	二	—
盍靜翁答話	曲直瀨道三	一	—
翠竹翁答問書	曲直瀨道三	一	—
授蒙聖功方	曲直瀨道三	二	—

廣觀摘英集 曲直瀨道三 二 一
 出證配劑 曲直瀨道三 二 一
 三位法眼家秘方 糟尾久牧 一 天正十一年
 運氣抄 一 一 天正十一年
 西忍記 西忍 一 一
 西忍流正傳 西忍 一 一
 西忍傳藪明集 西忍 一〇 一
 切紙聞書 中村光政 一 天正十三年
 和漢醫傳袖懷集 賀藤舟與 四 天正十三年
 梅花無盡藏 永田德本 三 一
 醫之辨 永田德本 一 一
 諸病禁好食集 一 一 慶長六年
 知要一言 壽德庵玄由 一 慶長八年
 醫學天正記 曲直瀨玄朔 三 慶長十二年
 醫學小鑑集 一 一
 脉書 一 一 慶長十九年
 舌谷刀呈方 一 一

二、外科

外科傳語 曾谷壽仙 一 一
 金創治事 一 一 天正七年
 外療新明集 鷹取秀次 三 天正九年
 外科捷徑方 慶祐法眼 一 天正十年
 換骨秘錄 吉益半笑齋 二 天正十三年
 換骨抄 吉益半笑齋 二 天正十三年
 金創一部事 休安齋 一 文祿三年
 金瘡秘 一 一 文祿四年
 中條流金創 中條帶刀(?) 一 一
 外科細壘 鷹取秀次 三 慶長十一年
 南蠻流外科書 澤野忠庵 二 一
 金創仕掛 栗崎道喜 一 一
 南蠻流瘍醫書 一 一
 吉田流外科眞傳 一 一

三、眼科

金羸錄 麻島清眼 一 天正十三年
 眼療秘錄 僧東月 一 天正十六年
 慶庵治眼方 慶庵 一 天正十七年
 穗積沈治眼秘方 一 一
 眼秘傳書 馬島眞近 一 文祿三年

問島流眼科 問島大智坊 一 文祿五年
 灌頂小鏡 馬島凌雲 一 慶長四年
 內障一流養生的傳鏡 山口道本 一 慶長十九年
 南蠻流目醫集 一 三 一
 眼目見樣 一 一 一

四、婦人科

撰集婦人方 南條宗鑑 三 天文十五年
 中條流摘授全鑑 一 一
 糟尾家續女傳秘方 一 三 一
 乘附家傳良方錄 一 一 天正九年
 道三流婦人療治方 一 一 一
 女傳集 一 一 一
 半東集 一 一 慶長年間(?)

五、兒科

家珍方 板阪宗慶 一 天正五年
 家珍 板阪宗慶 一 一
 家傳小兒方 板阪鈎閑 一 一
 小兒諸病方 板阪鈎閑 一 一
 板阪流小兒方 一 一 一
 精選家珍方 甲州、板阪傳 一 一
 遐齡小兒方 曲直瀨道三 一 一
 道三流小兒秘傳 一 一 一
 小兒療治集 一 一 一
 播州北在家小兒方 本江好白(?) 一 一
 中條流小兒方 一 一 一
 *梅花無盡藏小兒科 一 一 一

六、藥物科

略用修製集 久志本常任 一 元龜二年
 度會藥製錄 一 一 一
 合藥直傳集 曲直瀨道三 一 一
 宜禁本章 曲直瀨道三 二 一
 能毒 曲直瀨道三 一 一
 蘇參湯方 曲直瀨道三 一 一
 竹田家修合三種辯 久志本常辰 一 天正元年
 註能毒 曲直瀨道三 一 天正八年
 藥性能毒 曲直瀨玄朔 二 慶長十三年

七、針灸科

鍼灸集要 曲直瀨道三 一 一

*秘灸一卷 曲直瀨道三 一 |
指南鍼灸集 曲直瀨道三 一 |

八、口中科

典藥丹三位親康秘傳 | 一 天正五年
兼康相傳方 岡田某 一 |
金安齒書 恩田某 一 文祿元年
兼康口中療治之秘要 | 一 慶長五年

九、養生科

可有錄 曲直瀨道三 一 天正八年
養生秘旨 曲直瀨道三 一 |
*壽福七珍 曲直瀨道三 二 |
*通仙延壽心法 | 三 |
延壽撮要 曲直瀨玄朔 一 慶長四年

參考書籍

- ① 儒門事親
- ② 格致餘論 相火論
- ③ 醫術名流列傳
- ④ 內外傷辯惑論
- ⑤ 脾胃論
- ⑥ 格致餘論 陽有餘陰不足論
- ⑦ 梅の花
- ⑧ 啓廸集 曲直瀨道三著
- ⑨ 全九集 月湖著
- ⑩ 雲陣夜話 曲直瀨道三著
- ⑪ 切紙 曲直瀨道三著
- ⑫ 醫學正傳
- ⑬ 玉機微義
- ⑭ 丹溪纂要
- ⑮ 原病式
- ⑯ 性理大全
- ⑰ 蕉園漫筆 小島蕉園著
- ⑱ 本朝醫考 卷下
- ⑲ 外療新明集 鷹取秀次著
- ⑳ 外科細漸 卷中 一五葉裏
- ㉑(21) 家傳退譽聚驗方 久志本常顯著 永祿六年

- 22(22) 金創秘傳
- 23(23) 撰聚婦人方跋文(奈須柳村撰)
- 24(24) 日本婦人科史 ドクトル佐伯理一郎著(前二出ツ)
- 25(25) 醫贖 卷中 三十六葉
眼目明辨序文
- 26(26) 日本眼科史 醫學士小川劍三郎著(前二出ツ)
日本眼科略史 ドクトル富士川游著(前二出ツ)
- 27(27) 日本兒科史 河内全節著(前二出ツ)
- 28(28) 日本鍼醫史料 河内全節著(前二出ツ)
本邦鍼術沿革略考 岡正吉著(前二出ツ)
- 29(29) 御蘭家歷傳略記
- 30(30) 針道秘訣集
- 31(31) 鼻病ノ歴史追加 ドクトル富士川游著 大日本耳鼻咽喉科會報第九卷五號及六號
- 32(32) 史學研究法 文學博士坪井九馬三著 第四三二乃至四五七頁
日歐交通起源史 農學士菅菊太郎著 明治三十五年再刊
洋學年表 大槻修二著 明治十八年刊
日本洋學沿革考 大槻修二著 學藝志林第五十六册所載
- Oskar Nachod, Die Beziehungen der niederländischen ostasiatischen Kompagnie zu Japan im 17. Jahrhundert.
1887. S. 30-40. 西洋ノ書籍ノ我が日本ニ關スルモノ七十餘種ヲ蒐集セリ
- 33(33) 我が邦ニ於ケル西洋醫學ノ起源 ドクトル富士川游著 藝備醫事第七十一號及七十二號
- 34(34) 日本西教史 太政官本局翻譯係譯 明治二十七年再版
- 35(35) 我が邦ニ於ケル西洋外科發達史稿 醫學士關場不二彦著 北海醫報第二卷第三號以下

-
- ① <https://ctext.org/wiki.pl?if=gb&res=172484>
- ② <https://ctext.org/wiki.pl?if=gb&chapter=760881>
- ③ https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/nu08/nu08_00016/index.html
- ④ <https://ctext.org/wiki.pl?if=gb&res=675331>
- ⑤ <https://ctext.org/wiki.pl?if=gb&chapter=193010>
- ⑥ <https://ctext.org/wiki.pl?if=gb&chapter=760881>
- ⑦ <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100170576> ♪
- ⑧ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb000000559>
- ⑨ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb000003831>
- ⑩ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb000000730>
- ⑪ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb000000406>
- ⑫ <https://ctext.org/wiki.pl?if=gb&res=353314>

-
- ^⑬ <https://ctext.org/wiki.pl?if=gb&res=393243>
- ^⑭ <https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/cgi-bin/icombo/thumbview.cgi?lang=j&wayo=w&num=100&img=1>
- ^⑮ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00003934>
- ^⑯ <https://ctext.org/wiki.pl?if=gb&res=180959>
- ^⑰ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00003073>
- ^⑱ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00000370>
- ^⑲ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00001539>
- ^㉑ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00000407>
- ²¹ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00001640>
- ²² N/A
- ²³ N/A
- ²⁴ DOI: 10.11501/836142
- ²⁵ <https://dcollections.lib.keio.ac.jp/ia/koisho/f-i-64-2>
- ²⁶ DOI: 10.11501/836391
- ²⁷ DOI: 10.11501/835491
- ²⁸ DOI: 10.11501/1739248
- ²⁹ DOI: 10.11501/1498772
- ³⁰ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb000003559>
- ³¹ DOI: 10.3950/jibinkokai1897.9.5-6_325
- ³² DOI: 10.11501/1020183
- ³³ N/A
- ³⁴ DOI: 10.11501/824975
- ³⁵ N/A

第八章 江戸時代ノ醫學

元和元年豊臣氏亡ビ、徳川氏コレニ代リテ天下ノ政柄ヲ握リシヨリ二百五十年、慶應年間江戸幕府瓦解ノ時ニ至ルマデヲ江戸時代ト曰フ。更ニコレヲ別チテ、前・中・後ノ三期トス。元和・偃武ヨリ凡ソ八十年ヲ經テ、延寶・天和・元祿・寶永ノ頃ニ至ルマデヲ江戸時代ノ前期トス、天下既ニ泰平ヲ謳歌シ、學問伎藝モ大ニ進歩シタリ。

享保ノ初年徳川吉宗將軍ノ職ニ任ゼラレシヨリ寶曆・明和ヲ經テ、天明ノ末年ニ至ルマデ、凡ソ七十年ノ間ヲ江戸時代ノ中期トス。漢學極盛ノ點ニ達シ、同時ニ蘭學興リテ西洋ノ學問始メテ緒ニ就キタリ。寛政以降凡ソ八十年米國ノ軍艦我が浦賀ニ來タリ、政治社會ニ開國攘夷ノ論盛ニ行ハレ、慶應三年遂ニ江戸幕府ノ瓦解ヲ見ルニ至ルマデヲ江戸時代ノ後期トス。

前期（徳川氏初世）紀

織田・豊臣ノ兩氏相繼ギテ、天下平定ノ功業ヲナシタレドモ、尙ホ未ダ學問伎藝ヲ獎勵スルニ至ラザリシガ、元和・偃武以後、全國盡ク徳川氏ノ政ニ服シテヨリ、殊ニ三代將軍家光・五代將軍綱吉等ノ文事ヲ獎勵スルアリ、是ニ於テ學問伎藝ハ長足ノ進歩ヲナシ、元祿・寶永ノ頃ニ至リテハ、文化ハソノ豊熟ノ時期ニ達シタリ。

當時我が文化ノ中心ヲナセシハ儒學ニシテ、コノ期ノ初ニハ藤原惺窩・林羅山等ノ碩儒アリ、宋儒性理ノ學ヲ奉ジテ、專ラ朱子學ヲ唱ヘタリ。次デ中江藤樹出デテ王陽明ノ學ヲ唱ヘタレドモ、伊藤仁齋出デテ古學ヲ唱道セルノ時マデハ、尙ホ朱子學ハ天下ヲ風靡シ、鎌倉・室町時代以來盛ニ行ハレタル禪學ハ衰ヘテ、緇徒ノ學問ハ遂ニ士林ニ歸スルニイタレリ。

當時思想社會ノ趨勢既ニコノ如クナリシカバ、前期ニ行ハレタル李・朱醫學ハ、コノ期ニ至リテ更ニ大ニ發達シ、別ニ劉・張學派ト名ヅクベキ一流派ヲ生ジタリ。然レドモ、コノ宋儒性理ノ學ヲ宗トセルトコロノ李・朱醫學ハ、コノ期ノ末ニ伊藤仁齋ガ起テ古學ヲ唱道セル頃ニ及ビテハ、ソノ勢力ヲ減ジ、所請古方醫學ト稱スルモノ新ニ興リテ、遂ニ之ニ代ハリ李・朱醫學ハ之ニ對シテ後世家ノ稱呼ヲ得ルニイタレリ。

本道（内科）

一、李・朱醫方（後世家）

江戸時代ノ初世ニ專ラ行ハレタルハ、李・朱醫學ナリ、而シテ我が邦李・朱醫學ノ開祖ト稱スベキハ田代三喜ナレドモ、ソノ術ヲ傳ヘテ大ニ之ヲ恢弘シ、遂ニ李・朱醫學ヲシテ天下ニ遍ネク行ハルルニ至ラシメタルハ曲直瀨道三ノ力ニ賴ル。所請道三流ノ學派ハ古道三ヲ祖トシテ前期ニ興リ、コノ期ニ移リテ、ソノ後繼者ノタメニ更ニ大ニ敷衍擴張セラレタルナリ。

曲直瀨道三ノ後繼者トシテ第一ニ擧グベキハ、ソノ子曲直瀨玄朔ニシテ、父ノ名ヲ襲フテ道三ヲ稱シ、學舎ヲ開キ、四方ノ士ヲ集メ之ヲ涵養教導シ、且ツソノ技術ト著述トヲ以テ一世ヲ風靡シ、竟ニ曲直瀨氏ヲシテ醫門ノ霸宗タラシメタリ。

曲直瀨玄朔、名ハ正紹、通稱道三、幼名大力之助、東井ト號ス。天文十八年、城州・上京ニ生ル、曲直瀨正盛（翠竹院、道三）ノ妹ノ子ナリ。幼ニシテ父母ニ離ル、故ニ正盛養フテ己ガ子トナス、遇マ正盛ノ嗣、守眞死シテ子ナシ、ソノ女ヲ養フテ玄朔ニ配シ、以テ家ヲ嗣ガシム。天正九年昇殿ヲ聽サレ、龍顏ヲ拜シ、御脈ヲ診ス。翌十年正月法眼ニ叙セラル、同十一年正月正親町院不豫諸藥効ナシ、玄朔之ヲ治メ効アリ、ソノ十一月十一日中山左中將慶親勅旨ヲ奉ジ、正盛ヲシテ道三ノ稱ヲ玄朔ニ讓ラシム、因テ即日道三ト改ム。同十四年十二月法印ニ叙セラレ、且ツ延命院ノ號ヲ賜フ、後チ（慶長二年五月）旨ヲ奉ジテ延壽院ト改ム。同十七年四月式部卿親王病アリ、玄朔ノ藥ニヨリテ平癒ス。關白秀次大ニ之ヲ賞シ、賜賚甚ダ厚シ、後チ關白秀次ニ仕フ、秀次自殺スルニ方リテ常陸國ニ配流セラレ、佐竹義宣ノ許ニアリ、常山方、十二卷ヲ著ス、慶長三年後陽成院不豫諸醫治スルコト能ハズ、因テ恩免ヲ蒙リ上洛シ藥ヲ獻ジテ立ニ癒ユ、叡感淺カラズ、手カラ黃金花瓶及ビ白銀千枚ヲ賜フ。同四年十二月始メテ屠蘇白散ヲ幕府ニ獻ジ吳服三領ヲ賜フ、以後毎年以テ、佳例トナス。同七年七月采地五百石ヲ山城國ニ賜フ、同十三年徳川秀忠病アリ、藥ヲ進メテ殊効アリ。寛永八年十二月十日病テ歿ス。年八十三、法名延壽院。東井。玄朔、江戸・麻布ノ祥雲寺ニ葬ムル、祥雲寺ハ玄朔ガ自ラ建立セシナリト言フ、嫡子親清、名ハ玄鑑、業ヲ嗣テ從五位下典藥助ニ任ゼラレ、橘姓、今大路氏ヲ賜ヒ朝廷幕府ノ寵遇益厚シ、玄朔著ハストコロ常山方ノ外十餘種アリ。（今大路系譜・道三家系圖・曲直瀨家譜・寛政系圖・醫業家譜）

道三流學派ハ李・朱醫學ヲ宗師トシタレドモ、而カモ一家ニ偏執スルコトハ之ヲ誡メタリ。玄朔ハ殊ニ之ヲ主張シ、一家ニ偏執スルモノハ、ソノ學大全スルコト能ハズト言ヒテ、醫學ノ次序ヲ定メ、『(1) 廣ク内經ヲ閱シ、普ネク本草ヲ窺フ。(2) 診切ハ王氏、脉經ヲ主トス。(3) 處方ハ張仲景ヲ宗トス。(4) 用藥ハ東垣(李杲)ヲ專トシ尙ホ潔古(張元素)ニ從フ。(5) 諸症ヲ辨治スルニハ丹溪(朱震亨)ヲ師トス、尙ホ天民(虞搏)ニ從フ。(6) 外感ハ仲景ニ則トリ。(7) 内傷ハ東垣ニ法トリ。(8) 熱病ハ河間(劉完素)ニ法トリ。(9) 雜病ハ丹溪ニ法ル』ト説キ、玉機微義ノ説ヲ引テ、若シ仲景ガ説ノミヲ奉ズルモノハ傷寒ヲ以テ主トナシ、恐クハ内傷ヲ以テ外感トナサン。東垣ガ書ノミヲ先トスルモノハ胃氣ヲ以テ主トナシ、恐クハ外感ヲ以テ内傷トナサン。河間ガ説ヲ以テ宗トスルモノハ熱ヲ以テ主トナシ、恐クハ寒ヲ以テ熱トナサン。故ニ必ズ内經ヲ以テ主トシ、シカモ一派ニ偏スベカラズト言ヒ、明醫雜著ノ説ニ依リテ、醫ノ内經アルハ猶ホ儒道ノ六經ノゴトク、備ハラザルトコロナシ、張・李・劉・朱、四子ノ説ハ則チ猶ホ學・庸・語・孟ノ六經ノ階梯タルガゴトク、ソノ一ヲモ缺クベカラズト述ベ、醫家ノ要ハ機變ヲ識リテ以テ諸家ノ法則ヲ適用スルニ在リト論ゼリ。故ニ李・朱醫學ヲ奉ズルモ決シテ、ソノ奴隸タルコト、後世末流ノ如クナラズ、自カラ一家ノ識見ヲ備ヘタリ。ソノ著、養生物語（養生物語ヲ翠竹院道三正盛ノ著トスルハ誤マレリ、コノ書ハ延壽院道三玄朔ノ著ストコロナリ）ニ『世界四方ノ國々島々ノ水土ノ氣ヲ合點セズ、年々時々ノ運氣ノ氣候ヲ考ヘズ、虛分ナル病ヲ見テハ、ヤレ人參、補劑ヨトテ、コネマハス、又何モカモ、一ツト心得、麥食ニ鶴ノ汁ヲシタリ、蕎麥切ニトロロ汁ヲカケテ出スガ如シ、又鹽梅ト云フコト、料理ノ大事ナリ、我が匙加減ト同ジコト、偕又氣轉ノ入ルコトナリ』ト言フニテ、ソノ見ルトコロヲ察スベシ。

曲直瀨玄朔ノ著書ニシテ、今ニ傳ハレルモノ十餘部アリ、玄朔ガ獨創ノ論說トシテ擧グベキモノヲ見ズト雖モ、ソノ力ヲ道三流學派ノ恢弘ニ致シ、コレニ依リテ、李・朱醫學ヲ天下ニ普及シタルノ功ハ争フベカラズ、左ニ之ヲ列記スベシ。

醫方明鑑、四卷。常山方、十二卷。惠德方、三卷。濟民記、三卷。共ニ察證辨治ヲ論述セルモノニシテ、病門ヲ別チ診治ヲ論ズル等一ニ啓迪集ニ依據シ、主ニ醫學正傳・醫林集要等ノ所説ヲ引用シタリ。

延壽院切紙、一卷。道三切紙ヲ祖述セルモノニシテ、コレヲ當流ノ秘傳トシテ門下ニ示セルナリ。

醫學指南篇、三卷。醫學・醫法・診切・立方・用藥・辨治・治方・療養・攝養等、諸項ニツキテ該學派ノ主義ヲ

示ス。

醫學天正記、二卷。天正・慶長年間、玄朔ガ診治處方セルモノヲ蒐録セルモノニシテ、寛文三年梓行ノ本アリ、後二題名ヲ延壽配劑ト改メテ梓行セルモノアリ、内容ハ全然同一ナリ。

師語録、二卷、曲直瀨玄朔ノ著書ナリト傳フ。治方ノ要方ノ要旨ヲ擧ゲ、主要ノ製劑ヲ示セルモノナリ。註能毒、一卷。初代ノ道三ノ著、藥性能毒ヲ増補セルモノナリ。

日用食性、一名、食性能毒、一卷。日用食品ノ能毒ヲ辨シタルモノナリ。

日用諸疾宜禁集、一卷。妊娠及ビ諸般ノ疾病ニシテ、食シテ宜シキ物ト、禁ズベモノトヲ區別シ、一々ソノ品目ヲ示セルモノナリ。

日用灸法、一卷。灸ヲ用フルノ方法及ビ各病ニ對スル適應等ヲ擧ゲタルモノナリ。

延壽撮要、一卷。言行・房事・飲食ノ三篇ニ別チテ、養生ノ大意ヲ示セルナリ。

養生物語、一卷。人ノ問ニ應ジテ、養生ノ大旨ヲ記述セルモノナリ。

曲直瀨玄朔ト時ヲ同フシテ秦宗巴・施藥院全宗・曲直瀨正琳・曲直瀨正純等ノ諸家アリ、共ニ古道三曲直瀨正盛ノ門ニ出デタリ。

秦宗巴、字ハ徳岩、立安ト號ス、丹波・牛樹ノ人、本姓、秦氏、父ヲ善秀ト曰フ、ソノ先ハ秦人徐福ノ遠裔タリ。天正三年歲二十六ニシテ吉田宗桂ノ門ニ入り醫ヲ學ブ、宗桂ソノ才ヲ奇トシ、勸メテ曲直瀨正盛ニ從學セシム。宗巴始メ豊臣秀次ニ仕フ、秀次爲ニ秦シテ法印ニ叙シ、壽命院ノ號ヲ賜フ、慶長五年、徳川家康、宗巴ヲ召シテ侍醫トナス。宗巴始メテ馬註素問ヲ講ズ、聽クモノ數百人、ソノ才學ヲ稱ス、慶長十二年十二月病ミテ歿ス、年五十八。著ハストコロ素問註抄、十卷・醫學的要万、十五卷・本草序例抄、八卷・參伍の方、一卷・炮灸詳鑑、一卷等アリ。(寛政系圖・歷世尙藥略傳)

施藥院全宗、及ビソノ子宗伯(傳ハ別ニ出ヅ、前期施藥院ノ條下ヲ見ヨ)

曲直瀨正琳、字ハ養庵、玉翁ト號ス、初ハ一柳氏、父ヲ一柳恕心ト言フ、伊豫ノ越智姓河野刑部大輔通宣ノ後胤、又右衛門直高ノ末孫ナリ、正琳幼名ヲ又五郎ト曰フ、若冠ニシテ贊ヲ翠竹院曲直瀨正盛(道三)ニ執リ、醫ヲ學ブ、正盛ソノ異資ヲ察シ妻スニ女孫ヲ以テス。由テ一柳ヲ改メテ曲直瀨ノ姓ヲ胃ス。天正二十年出デテ豊臣秀次ニ仕ヘ、二百五十石ノ扶助料ヲ受ク。文祿六年正親町天皇不豫、正琳召サレテ藥ヲ獻ズ。同年十二月二十八日功ヲ以テ法印ニ叙セラル、同四年中納言浮田秀家ノ室奇疾ヲ得、衆醫皆治ニ苦シム、正琳之ヲ治シテ効アリ、秀家大ニ之ヲ喜ビ朝鮮ノ役ニ獲ルトコロノ書、數百卷ヲ擧ゲテ之ヲ賜ルト言フ。慶長五年後陽成天皇不豫正琳召サレテ藥ヲ上ツリ殊効アリ、養安院ノ號ヲ賞賜セラル。同十年徳川家康ノ召ニ應ジテ侍醫トナル、慶長十六年八月病テ歿ス、年四十七。(寛政系圖・歷世尙藥略傳。日本醫譜)

曲直瀨正純、本姓岡野井、父ヲ徳安ト曰フ、醫ヲ曲直瀨道三正盛ニ學ビ、後ソノ女婿タリ、依テ曲直瀨氏ヲ胃ス、正親町天皇ノ慶長十三年ニ法印ニ叙セラレ、亨徳院ノ號ヲ賜フ、年四十七ニシテ歿ス、歿年詳ナラズ。(寛政系圖)

曲直瀨玄朔ノ門下ニモ岡本玄治・野間玄琢・山脇玄心・井上玄徹・井關玄悅・長澤道壽等ノ名家アリ。併ビ二代ノ師表トシテ、術ヲ施シ、學ヲ傳ヘ、遂ニ道三學派ヲシテ天下ニ普ネカラシムルニイタレリ。

岡本玄治初ノ名ハ宗什、後チ諸品ト改ム、玄治ハソノ通稱ナリ。洛陽ノ人。父名ヲ左門、重信ト曰フ、橘諸兄ノ裔ナリ。幼ニシテ穎敏、年十六、延壽院曲直瀨玄朔ノ門ニ入り、方術ヲ學ブ、玄朔大ニ之ヲ器トシ、盡クソノ蘊奧ヲ授ク、篤學十年、門下第一ノ稱アリ。玄朔亦ソノ卓越ヲ愛シテ學寮ノ裁トナシ生徒ヲ導カシメ、且妻スニソノ女ヲ以テス、是ヨリシテ名一時ニ振ヒ、都鄙皆ソノ仁術ヲ賞セザルハナシ。慶長中、伏見ニ赴キテ徳川家康ニ謁シ、元和四年法眼ニ叙セラル。九年徳川秀忠辟シテ醫官トナシ、隔年東下セシム。寛永二年秀忠咽痛、之ヲ治メ効アリ、五年法印ニ進ミ、勅ニヨリテ啓迪院ト號ス、

啓廸院ハ古道三學寮ノ號ニシテ、嘗テ私ニ玄治ニ授ケシモノ（天正十一年）ココニ至リテ、勅ニヨリテ之ヲ稱ス。十年七月徳川家光病アリ、玄治藥ヲ獻ジテ忽チ癒ユ、恩賚太厚シ。十三年、朝鮮國使ニ接シテ診脈病論藥方等ヲ談論シ、大ニ美譽アリ。十四年家光復タ病ム、玄治ノ藥ニヨリテ治ス、ヨリテ采地千石ヲ賜フ。ソノ京都ニアルヤ至尊ノ脈ヲ拜診シ、藥ヲ上ル、ソノ當時ニ重ゼラレタルコト想フベシ。正保二年四月二十日、病デ歿ス。年五十九、江戸・澁谷祥雲寺ニ葬ル、子玄琳ソノ業ヲ嗣ギ法眼ニ任ゼラル、門人ノ籍ニアルモノ凡ソ一千餘人、名醫ノ聞アルモノ亦尠カラズ。玄治人トナリ博識強記、博ク醫籍ヲ收メ、藏五車ニ過グ。著ストコロ燈下集・玄治配劑口解・玄治方考・家傳預藥集・増補濟民記・通俗醫海腰舟・傷寒衆方規矩、等アリ。（寛政系圖・内安録・閑筆記・歷世尙藥略傳）

野間玄琢、名ハ成岑、白雲ト號ス。山城ノ人、父ヲ宗印ト曰フ。曲直瀨玄朔ト友トシ善シ、仍テ玄琢ヲシテ玄朔ニ從學セシム。慶長十五年法橋ニ叙シ、元和三年法眼ニ叙セラル、六年壽昌院ノ號ヲ賜ハル、尋テ累進シテ法印トナル。寛永三年徳川秀忠召シテ侍醫トナス、乃チ從フテ江戸ニ至ル。後、東福門院ノ病ニ際シ京都ニ招カレ、正保二年四月遂ニ京師ニ歿ス、年五十六。著ストコロ群方類稿、若干卷アリ。ソノ子、成大、三竹ト稱ス、寛永十三年法橋ニ叙セラレ、寛文八年法印ニ進ム、醫名アリ。著ストコロ群方類稿刪補、六十三卷・修養編、一卷。學醫通論、一卷・醫學類篇、一卷・望海錄、九卷・沈靜録、十卷等アリ。（寛政系圖・歷世尙養藥略傳）

山脇玄心、道作ト稱ス。本ト近江ノ人。父ヲ山脇松雪ト曰フ、ソノ先ハ楠正成ノ庶流ニ出ツト言フ。松雪ノ時ニ至リ、岐阜ニ赴ムキ、織田信忠ニ仕フ、後チ京都ニ來タリ、玄心ヲシテ曲直瀨玄朔ノ門ニ入り、學バシム。元和六年、中和門院不豫、召ニ應ジテ禁闕ニ入り、尋テ侍醫トナル。寛永十四年法眼ニ叙シ、二十年法印ニ進ミ、養壽院ノ號ヲ賜ハル。玄心五朝ニ歷仕シ、最モ後水尾天皇、東福門院ノ眷寵ヲ得。嘗テ後水尾天皇ノ勅ヲ奉ジテ勅撰養壽録ヲ著ハス、別ニ原病式集解・醫方捷徑ノ著述アリ、延寶六年十月、年八十二ニシテ歿ス。（寛政系圖・山脇系譜・歷世尙藥略傳）

井關玄說、名ハ常甫、養眞庵ト號ス。近江ノ人。父ヲ甫重ト曰フ、母ハ京都ノ醫、林市之進ノ女ナリ。醫ヲ曲直瀨玄朔ニ學ビ、博覽多識ヲ以テ名聲頗ル顯ハレ、寛文中井上玄徹トソノ聲稱ヲ均フス。延寶七年徳川家綱ノ召ニ應ジテ侍醫トナリ、法眼ニ叙セラル。元祿十二年五月、江戸ニ歿ス。年八十二歳。（井關家系圖・寛政系圖・醫業家譜）

井上玄徹、靈叟ト號ス。ソノ先ハ大内族裔多々良氏。父ヲ明永ト曰フ、一向宗延立寺ノ僧ナリ、母ハ某氏、慶長七年壬寅夏六月四日玄徹ヲ周防國山口ニ生ム。玄徹年十三出デテ廣島ノ人井上豊後ノ家ヲ嗣グ、ヨリテ井上氏ヲ冒ス。壯ニ及デ京ニ詣リテ業ヲ曲直瀨玄朔ニ受ク。正保四年丁亥十一月初メテ徳川家光ニ京師ニ謁シ、尋テ侍醫トナリ、俸三百苞ヲ賜フ。後チ甲府ニ附庸シ、別俸ヲ賜フ。慶安四年辛卯家光病アリ、玄徹命ヲ奉ジテ營内ニ宿直シ、數原清庵ト相議シテ藥ヲ獻ズ。寛文四年甲辰十一月會津中將保科侯咯血ヲ患フ、諸醫術ヲ盡スモ驗アラズ、徳川家綱命ジテ之ヲ診セシム。玄徹、方ヲ處シ、侯ノ病忽チ痊ユ。翌年復タ發ス、精治功ヲ得、家綱召シ見テ渥ク之ヲ賞ス。五年乙巳十二月二十九日法眼ニ叙セラル。萬治三年男玄快ヲシテ職ヲ嗣ガシメ、老ヲ告テ退ク、延寶五年東福門院不豫、玄徹命ヲ奉ジテ京ニ入り藥ヲ獻ジテ効アリ、帝深クソノ勞ヲ賞シタマヒ、詔シテ在廷ノ諸臣ニ國歌ヲ書カセシメ、一卷トナシテ之ヲ玄徹ニ贈ラシメタマフ。延寶六年法印ニ叙シ、交泰院ノ號ヲ賜フ。玄徹京ニ在ルコト數月。ソノ名都下ニ喧傳シ、後水尾上皇・後西院上皇屢徵シ入テ診セシメタマフ。八年庚申家綱不豫、玄徹又藥ヲ獻ズ。玄徹壯ヨリ業ヲ修メテ怠ラズ、老ニ及ブモ矍鑠、勤業寒暑ヲ避ケズ。コレヲ以テ貴戚侯伯疾アレバ則チ引テ治ヲ求ム、皆ナ十全ノ効アリ、古ヨリ一診ノ報銀三千挺アルモノタダ玄徹ト井關常甫トノミナリト言フ。玄徹又喜ビテ子弟ヲ教導シ、門弟子千ヲ以テ數フ、聲稱日ニ隆ニシテ世以テ神醫トナス、貞享三年丙寅夏四月十九日病テソノ家ニ歿ス、年八十五。（寛政系圖・歷世尙藥略傳・日本醫譜・醫業家譜）

道三學派ノ醫治ニ名アル人、コノ如ク多キ中ニ、別ニ一家ヲ成セルモノヲ長澤道壽（土佐道壽ノ稱アリ）及ビ古林見宜トス。長澤道壽ハ曲直瀨玄朔ニ從フテ醫ヲ修メ、又教ヲ吉田宗恂ニ受ケ、素問・難經ノ說ヲ祖述シ、李東垣・朱丹溪ノ方ヲ折衷シ、古林見宜トソノ名ヲ齊フス。嘗テ朱子。小學・大學ノ意ニ倣ヒ醫學進修ノ次序ヲ定メ、七科

ヲ設ケテ以テ小學トナシ、八科ヲ設ケテ以テ大學トナシタリ。②

七科ハ一日、辨_二藥陰陽氣味功能_一、凡三百餘種。二日、辨_二古方本旨及其製法_一、凡三百餘方。三日、識_二治療大法_一、凡五十門。四日、參_二古醫案_一、以_レ意處_レ方、凡五百餘條。五日、辨_レ脈。六日、針灸辨_二俞穴之所_一在、凡百餘所。七日、講_下習醫書可_レ羽_二翼經方_一者上、十餘部ナリ。

八科ハ一日、審_二經絡俞穴所_一終始_一、識_二二病之所_一在。二日、審_二榮衛循行度數_一、識_二三病之所_一在。三日、審_二筋骨皮部血絡分肉九竅分尺_一、識_二三病所_一在。四日、審_二藏府形象統屬_一。五日、審_二氣運常變_一、察_二三病機_一。六日、審_二四診法_一。七日、決_二死生_一。八日、審_二八風虛邪所_一乘、勞倦飲食色慾諸傷_一以_レ定_二針灸藥治方_一ナリ。

古林見宜ハ曲直瀨正純ノ門ヨリ出デ、朱丹溪ノ學ヲ爲シ、又和氣・丹波ノ兩流ニ遡ボリテ、我が朝扁鵲ノ風ヲ聞キ、遂ニ張仲景・劉守眞・李明之ノ三家ヲ參考シ、最モ意ヲ李梴ノ醫學入門ニ用ヒ、常ニ讀ミ、常ニ講シテ諸生ヲ導ク、醫學入門ノ我が邦ニ行ハルルコト見宜ヨリ始マル。③而シテソノ治ヲ施スニ、藥ヲ與ヘ、灸炳ヲ用ヒ。亦時ニ毫鍼ヲ以テ榮兪ヲ刺シ、又水漬・水浴及ビ水ヲ頂ニ灌グノ法ヲ用フ。常ニ曰フ、醫ヲ習フニ規格ナカルベカラズト、乃チ李梴著ストコロノ習醫規格ヲ取テ、之ヲ梓行シ、又同門ノ堀正意(杏庵ト號ス)ト相謀リテ學舎ヲ嵯峨ニ立テ、以テ孜々トシテ諸生ヲ誘掖ス、門下三千人、ソノ醫方マタ大二世ニ行ハレタリ。

長澤道壽、柳菴又丹陽坊、賣藥山人ト號ス。土佐ノ人、業ヲ曲直瀨玄朔及ビ吉田宗恂ニ受ケ李・朱醫學ノ秘蘊ヲ傳フ、少フシテ、土佐ノ太守ニ仕ヘ、醫名アリ、人之ヲ土佐ノ道壽ト呼ブ、當時名流、田代三喜ヲ古河・三喜ト稱シ、永田徳本ヲ甲斐・徳本ト呼ブガ如キ、皆ナソノ國ヲ以テ稱ス、道壽亦與カル、ソノ盛ナルコト知ルベシ、中歳織田内府ニ仕ヘ、後ソノ官ヲ辭シテ仁和寺ノ傍村ニ隱レ、醫ヲ業トナス。著ストコロ醫方口訣集・藪醫問答・治例問答等アリ。門人中山三柳、名ハ通義、花陽軒ト號ス。大和ノ人、長澤道壽ヲ師トシ、方術至精、兼テ文藝ニ通ジ、一時碩工ト稱セラル。著ストコロ増補醫方口訣集・病家要覽・遂生雜記・切要方義・保兒三方・醍醐隨筆・飛鳥川等アリ。(醫方口訣集・日本醫譜・醍醐隨筆・見宜醫案)

古林見宜、名ハ正溫、初メ道芥ト稱ス、桂菴、壽仙坊ハ別號ナリ、播磨ノ人、赤松氏則ノ裔、祖祐村醫方ヲ好ミ、往テ明國ニ學ブ、居ルコト數年ニシテ歸朝シ、醫道盛ニ行ハル。祐村ノ子梴庵亦醫ヲ業トシ、時ニ名アリ、見宜ハソノ子ナリ、夙ニ家方ヲ受ケ、マタ曲直瀨正純ニ京師ニ從ヒ、丹溪ノ術ヲ收メ、兼テ張仲景・劉守眞・李明之、三家ノ說ヲ攻メテ、ソノ微旨ヲ窮メ道三學派中ニ在リテ別ニ一家ヲ成シ、ソノ名大二世ニ顯ハル。板倉勝重、朝ニ奏シテ法印ニ叙セントス、見宜辭シテ應ゼズ、著ストコロ、日記中棟方・假名雲林神穀・正入回世・綱目撮要方・拔萃正溫方・速效方・外科單方・假名詠書・製劑記・回春辨藥集・醫統粹、等アリ。明曆三年九月、年七十九ニシテ歿ス、門人古林見桃・松下見林、亦醫名アリ。(見宜翁傳)

劉醫方(後世家別派)

コノ如クニシテ李・朱醫學ハ遍ネク天下ニ行ハレ、一時ノ醫人皆ナソノ說ニ屈從シテ、局方發揮・醫學正傳・醫學入門ノ他ニ、醫書アルコトヲ知ラザルホドナリシガ、明曆・寛文ノ間、饗庭東庵・林市之進アリ、二人共ニ京都ニアリテ素問・靈樞・難經等ヲ講究シ、殊ニ金ノ劉完素ノ說ヲ奉ジテ、五運六氣ノ說、藏府經絡配當ノ論ヲ唱道シタリ。固ヨリコノ種ノ論說ハ獨リココニ始マルニ非ズ。鎌倉時代ノ著書、萬安方ニモ既ニ三因方ヲ引テ、五運六氣ノ說ヲ擧ゲシガ、室町時代ノ末、田代三喜・曲直瀨道三ガ李・朱醫學ヲ唱道スルニ及ビテ、運氣ノ論ハ更ニ重視セラレ、コノ時饗庭東庵等ガ、劉完素ノ醫風ヲ開クニ方リテ、ソノ論遂ニ行ハレ、病ヲ論ズルニ、陰陽五行・五運六氣・臟府經絡配當ノ理ヲ以テスルニ至レルナリ。ソノ陰陽五行ノ說ニ『人身ハスベテ、天地ニ法トリ、陰陽ニ象ドル、故ニ天地ニ陰陽アレバ身ニモ亦陰陽アリ、天ニ五行アレバ人身ニモ亦五臟アリ、ソノ肝ハ木ニ屬シ、心ハ火ニ屬シ、脾ハ土ニ屬シ、肺ハ金ニ屬シ、腎ハ水ニ屬ス、而シテ五行ヲ以テ見ルニ、金、木、水、火ノ四行ハ土ヨリ養

フガ故ニ、先天ヨリ云フトキハ水ハ萬物ノ母トナリ、後天ヨリ云フトキハ土ハ萬物ノ母トナル、故ニ五臟ニテモ脾土ハ四臟ヲ養ナフナリ』ト言ヒ、又『天地ノ萬物ヲ生ズルハ共ニ水火ノ二ヲ以テス、人身モ精神ノ二ニヨリテ生ジ、肺ヨリ出ヅル氣アリテ神ヲ養ヒ、肝ヨリ出ヅル血アリテ、精ヲ養フ、而シテコノ精・神・氣・血ノ四ノモノヲ養ナフハ後天ノ天氣ニシテ、之ヲ榮ト云フ』。之ヲ陰陽ニヨリテ別ツトキ『精ハ陰、神ハ陽、血ハ陽、氣ハ陰、榮ハ陰トシ。氣血ヲ以テ陰陽ヲ別ツトキハ氣ヲ陽トシ、血ヲ陰トス』。『肺ハ氣ヲ藏シ、肝ハ血ヲ藏シ、腎ハ精ヲ藏シ、心ハ神ヲ藏シ、脾ハ榮ヲ藏ス、コレ五行ノ道理ヲ以テ五志ヲ臟府ニ配合シタルナリ』ト言ヘリ。

五運六氣ノ説ハ、既ニ上章ニ述ベタルガ如ク、『主氣ノ六氣ハ、地ニ行ハルル氣ユヘ、五行相生ノ如ク立チ、毎年差ハズ。一年ヲ六ツニ分ケテ、一氣ノ司ドリハ六十日、八十七刻半、六氣合セテ三百六十五日二十五刻ヲ一年ノ日數トス、客氣ノ六氣ハ天ニ行ハルル形ナキ氣ユエ、地ノ主氣ノ形アル五行相生ニカマワズシテ、毎年ノ行令違フ、其違ヒヤウハ、一陰、二陰、三陰、一陽、二陽、三陽ト次第シテ立ツルナリ』ト言ヒ、毎年ノ五運六氣ニ太過不及アレバ、依テ以テ病ヲ生ズトナス。ソノ五運ニ客運ヲ立テ天日月ノ行度ヲ論ズルコト等、内經ニ説クトコロニ同ジカラズト雖モ、ソノ歲令ニヨリテ病ヲ論ズルニ至リテハ全然同一ナリ^④。ソノ臟腑經絡配當ノ論ニハ『衛ハ氣ナリ、榮ハ血ナリ、氣ハ陽トシテ外ヲ司ドリ、血ハ陰トシテ内ヲ主ドル、故ニ榮ハ脉中ヲ流レテ晝夜ニ陰陽ノ經ヲ分タズ、臟腑ノ表裏ヲ以テ十二經ヲ貫周ス、十二經トハ肺、胃、脾、肝、心、心包、大腸、小腸、膀胱、腎、三焦、膽ノ十二臟腑ヲ貫キ行グルニヨリテ、各其臟腑ノ名ヲ附セルマデニテ、其本源ハ一ナリ、而シテコレニ六氣ノ陰陽(三陽、三陰)ヲ配合シテ經脉ノ陰陽ヲ別チ、六臟(心包ヲ加ヘ六臟トス)ノ經ハ陰經トシ、六腑ノ經ハ陽經トスルナリ』ト曰フ。之ヲ要スルニ劉氏ノ醫説ハ『天地ニ五運六氣アリ、以テ萬物ヲ造化ス、人ニ五臟六腑アリテ生氣ヲ化育ス。萬物ノ消長ハ氣運ニ從ヒ、人ノ疾病ハ臟腑ニ始マル』ト主張スルナリ^⑤。

東庵ノ門人ニ味岡三伯アリ、師説ヲ敷衍シテソノ學愈盛ニ行ハル、三伯ノ門ニ井原道閑・淺井周伯・小川朔庵・岡本一抱、等諸家アリ。朔庵ノ門人ニ堀元厚アリ、ソノ中最モ名アリシハ、岡本一抱ニシテ難經・運氣論・原病式・十四經・薛氏醫案・源洞集・醫學正傳或問・醫方大成論・局方發揮、等諸書ノ諺解ヲ作り、普ネク世ノ蒙ヲ啓カントシ、ソノ書大ニ世ニ行ハレテ、遂ニ所謂後世家(李・朱醫學)ハ大成スルニイタレリ。

饗庭東庵、京都ノ人、元和元年ニ生マレ、延寶元年ニ歿ス。嘗テ醫ヲ曲直瀨玄朔ニ學ビタリト傳フ。又、東庵ハ道ヲ傳ヘテ方ヲ傳ヘザルノ人ナリト言フ、ソノ傳ヲ佚ス。(淺井家譜大成・日本醫譜)
林布之進、名ハ敬經、尾張ノ人、京都ニ來リテ醫ヲ業トシ、饗庭東庵トソノ名ヲ等フス、ソノ子玄伯、正徳四年侍醫ニ擧ゲラレ、享保元年歿ス。(林家系圖・寛政系圖)

味岡三伯、傳ヲ佚ス、ソノ術ヲ傳フルノ書ニ味岡三伯切紙・味岡流藥性修治、等アリ。
井原道閑、名ハ主信、筑前ノ人、醫術ヲ修メ、最モ素問・難經ニ精シ、後京都ニ來タリテ醫ヲ業トシ、治療ノ暇、兼テ醫書ヲ講ジ、藥ヲ受クルモノ甚ダ夥シ、享保五年十月歿ス、年七十二。私ニ諡シテ順英先生ト曰フ(墓誌)

淺井周伯(一二周璞)名ハ正純、策庵ト稱ス、ソノ先ハ藤原鎌足ニ出ヅ。鎌足二十七世ノ孫、氏政嘉吉二年勅勘ヲ蒙ムリ、左遷セラレ、近江・淺井郡ニ居ル、由テ淺井氏ト稱ス。ソノ數世ノ孫ニ盛政ト言フモノアリ、初メ豊臣氏ニ仕ヘシガ、後チコレヲ辭シ、醫ヲ以テ業トナシ京都ニ住ス。盛政ノ子、將成尤モ書ニ精シ、周伯ハソノ子ナリ、醫ヲ味岡三伯ニ學ビ同門、井原道閑・小川朔庵・岡本一抱ト併ビテ名聲アリ、世ニ之ヲ味岡家ノ四傑ト稱ス、實永二年十月、年六十三歳ニシテ歿ス。著ハストコロ淺井周伯切紙之辨アリ。(淺井家譜大成)

小川朔庵、尾張ノ人、京都ニ在テ内經ヲ講ズ、後大阪ニ移ル。(日本醫譜)

岡本一抱、通稱爲竹、一得齋ト號ス。本姓杉森氏、祖杏園醫ヲ以テ豊臣秀吉ニ仕ヘ、法印ニ叙セラル、父受慶、福井侯ニ仕ヘ、法眼ニ叙セラル。一抱ニ至リ移リテ京都ニ居ル、初メ味岡三伯ニ從ヒテ、素問・難經ヲ講ジ、ソノ高足ノ弟子タリ、一抱廣ク諸書ノ諺解ヲ作り、専ラ世ノ蒙ヲ啓クヲ以テ己ガ任トナシ、ソノ書大ニ行ハル、ソノ兄近松門左衛門、之ヲ誡メテ曰

ク『子攷』トシテ諺解ニ從事ス、吾レ後世末學ノ淺キニ因リ近キニ就キ、復タ本書ヲ研究セズ、鹵莽術ヲ施シテ氏命ヲ誤ルニ至ランコトヲ恐ル』ト、一抱大ニ悟ルトコロアリ、コレヨリ遂ニ諺解ヲ作ラズ、ト言フ。(日本醫譜・皇國名醫傳・鹿門隨筆)

堀元厚、名ハ貞忠、北渚ト號ス、貞享三年、山城ノ山科郷ニ生マル、醫ヲ小川朔庵ニ學ビ、時ニ名アリ、寶曆四年京都ニに歿ス、年六十九。著ストコロ醫學須知・醫案啓蒙・醫門丘垤集アリ。(墓誌・日本醫譜)

運氣ノ論ノ盛ニ行ハルルコト既ニ久シクシテ、一派ノ醫家ニシテ、孫真人・劉完素等ノ說ヲ引テ天人合一ノ理ヲ唱へ、之ヲ以テソノ說ヲ立ツルモノアルニ至レリ。即チ『陰陽ハ天地ノ道ニシテ萬物ノ綱紀變化ノ父母ナリ、天地ニアリテハ陰陽ヲ分チテ、五運六氣ノ化起リ、五運順行シ六氣齊化シテ萬物生茂ス、人ニアリテハ血氣ノ陰陽ヲ別チテ、五臟六腑ノ象具ハル、誠ニ天地ハ是レ一大人ニシテ、人身ハ即チ小天地ニ外ナラズ、故ニ天ト人ト其理全ク相同ジ』ト論ジテ、遂ニ易醫ノ說ヲ成シ、易ト醫ト相通ジテソノ理ヲ同ジクストナシ、易ノ說ヲ以テ病ヲ論ゼント企テ、又『醫タラントスルモノハ上、天文ヲ知り、下、地理ヲ知り、中、人事ヲ知ルベシ、コノ三ノモノ俱ニ明ニシテ然シテ後、以テ人ノ疾病ヲ語ルベシ』ト説キテ、醫ノ理ヲ究メ、醫ノ術ヲ精フセント欲スルモノハ博ク學ビテ三才ノ事理ニ通ゼザルベカラザルコトヲ主張スルモノアリ。草刈三悅ノ醫教正意、寺島良安ノ和漢三才圖會、等ノ著述ハ當時ノ醫界ニ於ケル這般ノ趨勢ヲ示スモノナリ。

易醫論

所謂易ハ易ナリ、交易アリ、變易アリ、以テ陰陽動靜ノ妙ヲ具フルモノニシテ、太極ヲ以テソノ根本トス。太極ハ兩義ヲ生ジ、兩儀ハ四象ヲ生ジ、四象ハ八卦ヲ生ズ。八卦吉凶ヲ定メ、始ヲ原ネ、終ニ反テ、而シテ死生ノ說ヲ知ル。蓋シ太極ハ即チ渾然タル一理ニシテ、動靜ノ本體ナリ、兩儀ハ即チ動靜相分カレ、天地既ニ開ケテ、太極ノ用ノ行ハルル所以ナリ。四象ハ即チ動本靜・靜復動ノ象ニシテ、一動一靜、互ニソノ根ヲナス、五氣順布シテ四時行ハルルハ之ニヨリテナリ。八卦ハ動復動・靜復靜、動靜分列シテ方偶定マリ、萬物生ズル所以ニシテ、天地人三才ノ立ツハ之ニ依リテナリ。コレ天地ノ易ニシテ、即チ大易ナリ。試ミニソノ象ヲ圖示スレバ左ノ如シ。

大易

醫ヲ以テ之ヲ言ヘバ、父母未生以前本來ノ一氣、生不息ノ機ヲ續テ未ダ形アラザルノ始メ、常ニ身ニ先ズルモノ、コレ所謂人身ノ一太極ナリ、之ヲ稱シテ先天ノ元氣ト曰フ、這箇ノ氣動テ以テ神ヲ生ジ、靜ニシテ精トナリ、精神生成シテ上下陰陽、心腎既ニ位ス、コレ即チ人身ノ兩儀ナリ、既ニシテ後ニ、氣ハ陽、血ハ陰ニシテ、以テ肺ハ氣ヲ藏シ肝ハ血ヲ收メテ心肺上ニ位シテ、太陽小陰タリ、肝腎ハ下ニ居シテ太陰小陽タリ、之ヲ人身ノ四象ト言フ。五臟具ハリ身形成テ頭ノ圓ナルハ天ニ象ドリ、足ノ方ナルハ地ニ象ドリ、乾ハ首、坤ハ腹、震ハ足、巽ハ股、坎ハ耳、離ハ目、艮ハ手、兌ハ口タリ、乾金ハ肺ニ應ジテ皮毛ヲ主ドリ、離火ハ心ヲ照シテ血脉ニ應ジ、坤土ハ脾ニ充テテ肌肉ヲ養ナヒ、巽木ハ肝ニ通ジテ筋膜ヲ生ジ、坎水腎ニ通シテ骨髓ヲ潤ホス、六經ヲ川トナシ、腸胃ヲ海トナシテ、而シテ天地位ヲ定メテ水火相射ズ、八卦交錯シテ人身ココニ全シ。之ヲ小易トス、人身ノ易ナリ。試ミニソノ象ヲ圖示スレバ左ノ如シ。

小易

コノ如ク、天ト人トニアリテ、陰陽ノ理ヲ一ニシ、ソノ變化ヲ同ジクスルガ故ニ、易ト醫トハソノ原ヲ共ニシ、二者相通ジテ互ニ差異アルコトナシ。コレヲ以テ、醫ヲ修ムルモノハ、先ヅ易學ヲ修メテ以テ陰陽ノ理ヲ知ラザル

ベカラザルナリ、^⑥ト説ク。コレ、易醫學ノ梗槩ナリ。蓋シ陰陽及ビ運氣ノ論ノ、宋儒性理ノ學ニ依リテ、我が邦ニ傳ハリシハ鎌倉時代ニシテ、當時ノ醫書ニ既ニコレヲ論述スルモノアリシガ、我が醫方ノ專ラ、コレニ依リテソノ説ヲ立ツルニイタリシハ安土・桃山時代、曲直瀨道三ガ李・朱醫方ヲ唱道セシ以來ナリ。爾後、陰陽及ビ運氣ノ論ハ、程・朱ヲ宗トセル儒學ノ勃興ト共ニ、益々皇張敷衍セラレ、ココニ至リテ、遂ニ易醫ノ説ヲナスモノアルニイタレリ。

古醫方

支那ニアリテハ、明ノ中世ヨリ、程・朱學ノ偏狹ナルヲ排撃シ、清ノ初（我が寛文・延寶・天和ノ交）ニハ既ニ考證・學興リシガ、コノ時我が邦ニハ猶ホ、程・朱ノ學盛ニ行ハレ、藤原惺窩・林羅山ガ徳川家康ニ用ヒラレテ、程・朱性理ノ學ヲ主張セシヨリ、寛永ノ頃、中江藤樹、王陽明ノ説ヲ奉ジ、所謂陽明學ヲ立テタレドモ、亦程・朱ノ範圍ヲ脱セズ。寛文ノ初二至リ、伊藤仁齋出デテ始メテ宋儒性理ノ説ヲ論斥シ、一家ヲ立テテ古學ト稱シ、經典ノ古義ヲ明カニスルヲ務メ、痛ク後世末流ノ論説ヲ駁撃シタリ。コノ時ニ方リテ我が醫學界ニ名古屋玄醫アリ、明ノ喻嘉言ノ傷寒尙論・醫門法律等ニ依リテ、直チニ張仲景・巢元方ヲ以テ師トシ、世ノ醫家ガ皆ナ劉・張・李・朱等後世ノ醫家ノ説ニ取リテ、ソノ張仲景ニ本ヅクヲ知ラザルヲ慨シ『古者、楊、墨塞レ路、孟子辭而闢レ之、廓如也南陽之岐、張仲景南陽人後之塞レ路者、劉、朱之徒、言ニ陰靈之説一者是也、我窃比ニ於孟子』^⑦ト言ヒ、自己ヲ以テ彼ノ楊・墨ヲ除キテ、古聖人ノ道ヲ闢キタル孟子ソノ人ニ比シタリ。而シテ名古屋玄醫ガ古醫方ヲ唱道セシハ、伊藤仁齋ガ古學ヲ唱道セシ時ヨリ、少ナクモ十餘年前ニアリ。思フニ復古ノ事ハ時運ノ趨勢ニシテ、ソノ説先ヅ醫人社會ニ顯ハレシハ、彼ノ宋儒性理ノ説ガ未ダ我が儒家ノ採ルトコロトナラザリシニ先ダチテ我が醫學ハ進取ニ向ヒ、早クモ李・朱醫學ヲ我が邦ニ入レテ性理ノ説ヲ起シタルト同様ノコトナルベシ。

名古屋玄醫、字ハ、閔甫、一字富潤・丹水子（又宜春庵・桐溪）ト号ス。平安ノ人。經書ヲ羽州宗純ニ受ケ、周易占法ニ精シ、壯ナルニ及ビテ喻氏ノ傷寒尙論ヲ得テ、之ヲ讀ミ、發憤古ニ沂リ、直チニ張仲景ヲ以テ師トナシ、務メテ李・朱ノ説ヲ排撃シ、專ラ時弊ヲ救フヲ以テ、己レノ任トナス。玄醫少ヨリ多病、四十餘歲、腰脚癱瘓、兩手不隨居常褥ニ在リテ、而カモ氣力少シモ衰ヘズ。廣ク病客ニ接シ傍ヲ纂述ヲ事トス。數々微命アレドモ固辭シテ就カズ。元祿九年、年六十九ニシテ歿ス。著ハストコロ醫方問餘・纂言方考・用方規矩・丹水子・醫方規矩・醫學愚得・脉要訓蒙・脉學源委・怪病一得・醫方摘要・續方考・難經註疏・金匱註解・金物本草、等アリ。（日本醫譜・皇國醫林傳・皇國名醫傳・丹水子）

李・朱醫學我が邦ニ行ハレテヨリ既ニ二百年、補血益氣ノ説、獨リ盛ニ行ハレテ、ソノ弊言フニ忍ビザルモノアリ。

名古屋玄醫コノ際ニ起リテ、醫方復古ノ論ヲナシ、『夫溯醫之源流一、軒岐以來、其流派多端也、漢、張仲景創制レ方、其言至矣、非大賢一則不レ易ニ窺測一也、其後隋巢元方以爲、萬病皆生ニ於眞陽衰寒邪傷レ之當ニ杜レ寒助レ衛故隨三元方一者專用ニ溫熱三元、劉守眞以爲、水缺火亢、萬變發、當下濟ニ腎水一制中心火上、故依三河澗一者一行ニ涼解一、本ニ李明之一者、立補ニ脾説一、貴ニ平和一、是ニ朱彥脩一者、以レ治レ痰主レ順レ氣、故用ニ涼解一者、非三元方一、用ニ溫熱一者非三河澗一、用ニ順氣一者非三東垣一、用ニ平和一者非三丹溪一、是以近代方書盡取三四氏一、而以爲、我能集大成一而時中者也、雖然、四氏各自以爲眞黃帝也矣、固可レ有ニ一眞黃帝一、則其餘皆僞矣、集其僞一、而療レ病、則不レ殺人者鮮矣、不レ可レ無疑也、夫病之本、猶如三天地一元之氣一也、未萬彙也、病態萬彙也、四子亦萬彙也、蓋仲景本也、四子末也、故醫當レ了ニ悟其本一焉、且仲景之法也不レ可謂兼レ四氏一矣、又不レ可謂非レ兼レ四氏一矣、但別有ニ一段見識一、而四氏法亦在ニ其中一矣』ト切言シ、又『今之醫者、祖ニ述李明之、朱彥修一、其處方不レ出ニ參朮之類一、所レ謂醫之王道信之本者矣、然病出ニ於變一、非ニ參朮輩所ニ能效一者、則藥亦不レ得レ不レ變、可レ變而不レ知レ變、

則座以^レ亡、變而失^ニ之毫釐^一、則反促^ニ其死^一、均之爲^ニ不可^一也』ト論ジテ、世醫ガ時運ノ變ヲ知ラズシテ、李・朱ノ醫方ヲ墨守スルヲ罵言シ。更ニ『世人モ亦從テ溫補ヲ好ミ、苟安ヲ求メテ功ノ立タザルヲ異マズ、醫ハ之ヲ察シテ世俗ヲ眩惑セシメ、世俗ハ其治ヲ好ミテ死シテモ悔ヒズ、其弊ヤ言フニ忍ビサルモノアリ』ト論ジテ、溫補濫用ノ民命ヲ戕害スル所以ヲ説キ、卓乎トシテ時流ノ外ニ出デ、務メテ李・朱ノ醫方ヲ排シ、直チニ張仲景ヲ師トスベキコトヲ言ヒ、衆醫喧然相詆レドモ、泰然トシテ動カズ。是ニ於テカ、我が邦醫家ニ古方家、後世家ノ名目アリ。玄醫ハ實ニ古方家ノ鼻祖タルモノナリ。

名古屋玄醫ガ學說ノ宗師トスルトコロハ喻嘉言ノ書ニシテ、喻嘉言(名ハ晶)ハ明ノ末、順治五年(我が慶安元年)ニ傷寒尙論ヲ著シ、『冬傷^ニ於寒^一、春傷^ニ於溫^一、夏秋傷^ニ於暑^一』ヲ主トナシ、又『冬月傷寒』ヲ以テ病ノ大綱トナシ、傷寒六經ノ中、太陽ヲ以テ大綱トナシ、太陽經中ニテ『風傷^レ衛、寒傷^レ營、風寒兩傷^ニ營衛^一』ヲ以テ大綱トナシ、以テ從來諸家ガ註スルトコロノ例ヲ一變シ、順治十五年(我が萬治元年)ニ醫門法律ヲ著ハシテ、風・寒・暑・濕・燥・火、六氣及諸雜證ヲ論述シ、務メテ證ヲ審ニシ藥ヲ用フル所以ヲ闡明シ、傷寒家中ノ巨擘ヲ以テ稱セラレタリ。名古屋玄醫ハコノ人ノ說ニ基ヅキ『百病ハ皆風・寒・濕ヨリ生セザルハナシ、之ヲ細カニ分テバ則チ風・寒・濕ノ三氣ナレドモ總言スレバ即チ只一箇ノ寒氣ノミ、故ニ百病ハ皆寒ニ傷ブラルルニ由リテ生ズト云フベシ』ト論ジ、ソノ寒氣ノ人ヲ傷ブルハ衛氣ノ衰フルニ由ルモノニシテ『衛氣衰フルトキハ、則チ百病生ズ、故ニ藥ハ必ズ衛氣ヲ助クルヲ以テ主トナス、然ルニ人但^タ、脾腎虛シ、元氣弱キトキハ則チ病ムコトヲ知ツテ、衛氣ノ百病ノ母タルコトヲ知ラズ』ト言フ。

乃チ玄醫ハ病ヲ療スルニ溫熱ノ劑ヲ本トシ、衛氣ヲ助クルヲ主トシ、『劉河間ハ火ヲ抑ヘ、水ヲ濟フヲ主トシ、專パラ寒涼ノ劑ヲ用フ、張子和ハ攻撃ヲ貴ビ、吐・汗・下ノ法ヲ用フ、李東垣ハ脾胃ヲ主トシテ溫補ノ劑ヲ用フ、ソノ術各異ナルト雖モ、コレ時運ノ變ニ因リ稟賦ノ弱處アルコトヲ揣リテ、各々言ヲ立テ方ヲ制スルモノニシテ、偏ナルニ似テ而シテ時ニ宜シキモノナリ、故ニ能クソノ異ナルトコロヲ知ルトキハ則チソノ同ジキトコロヲ知ルベシ』ト論ジ、好ンデ桂枝・附子ノ類ヲ用ヒタリ。名ヅケテ熱補ト曰フ、而シテソノ藥ヲ用フルヤ病因ノ陰陽、虛實ヲ問ハズ、唯見證ニ就テ治ヲ施ス。コレ後世諸家ノ臆說ヲ斥ケ、臨床上ノ親試ヲ貴ビ實際ニ依リテソノ論ヲ立ツベキコトヲ主張スルモノニシテ、古方家ノ神髓ハ實ニコレニアリテ存スルナリ。

外科

コノ期ニアリテモ、外科ハ瘡瘍ノ治ヲ主トシ、別ニ金創醫アリテ産後ノ治ヲ兼ネシコト、前期ニ於ケルト異ナルコトナシ。而シテ外科ノ治ハ刀剪・針烙ヲ主トスルガ故ニ、ソノコトヲ賤惡汚穢ナリトシ、醫家スラ之ヲ賤シムコト、コノ頃ニ至リテハ益々甚シク、從テ外科ヲ専門トスルモノハ多クハ無學文盲ノ徒ニシテ、膏藥敷貼ノ方ノ一二ヲ知ルニ止マリ、僅カニ外科ヲ以テ鳴ルモノアリト雖モ、藥方ヲ秘シテ門人ニダモ傳ヘズ、之ヲ講究スルノ道ヲ缺クヲ以テ、ソノ方ハ益々迂遠ニ、ソノ術ハ益々拙劣トナリ、斯科ニ關スル著述ノ世ニ行ハルルモノハ僅々數部ニ過ギズ。本道ニシテ、内外相因ノ義ヲ唱ヘ、内治ヲ精フセントセバ、外科ヲ忽ニスベカラズト説キ、^⑨又ソノ事ノ汚穢賤惡ナルノ故ヲ以テ、之ヲ爲サズシテ座シテ、斃ルルヲ見ルベキニアラズ、故ニ君子モ亦之ヲ爲サザルベカラズト言ヒテ、醫家ノ外科ヲ修ムベキコトヲ主張スルモノナキニアラズ。^⑩而カモコノ期ニ於ケル本道書ノ巨擘ナル醫方明鑑・醫方聚要等、諸書中ニハ外科ノ治方ヲ擧グルコト、誠ニ粗略ニシテ、大要啓迪集ニ載スルトコロニ異ナラ

ズ。

古林見宜ノ外科單方、五卷ハ、コノ期ノ初ニ成レルモノニシテ眼目・耳・面・鼻・唇・口舌・咽喉・音聲・牙齒・鬚髮・胡臭・丹毒・風瘙疹痂・癩瘍癩風・癰瘤疣痣・瘰癧結核・九漏・蟲獸傷・癰疽・疔瘡・諸瘡惡瘡・楊梅瘡・風癘・疥癬・熱瘡・癩瘡・手瘡・足瘡・疔瘡・頭瘡・軟癬・禿瘡・煉眉・月蝕・疔瘡・疔瘡・陰疔・陰瘡・傷瘡・折傷・金瘡・破傷風ノ四十門ヲ別チ、千金方・三因方・聖惠方・外臺秘要方・肘後方・集驗方・聖濟總錄・瑞竹堂經驗方・御藥院方・儒門事親・醫學正宗、等ノ諸書ヲ引テ、所謂外科單方ヲ掲載シタリ。古林見宜ハ張伸景・劉守眞・李明之ノ三家ヲ宗師トシ、最モ心ヲ醫學入門ニ用ヒテ、李・朱學派中ニテ、別ニ一家ヲ立テタル人ニシテ、ソノ外科ノ治術ヲ見ルコトモ、他ノ諸家ニ異ナリ『夫醫者、不_レ可_レ不_レ察_ニ於陰陽五行之理_一、故以_ニ外科_一、可_レ忽哉、内外相因之義也、未_レ有_ニ神氣虛而癬疥無_レ虞者_一、未_レ有_ニ癬疥得_レ身而神氣不_レ至_レ斷者_一、此不判之理也』ト言ヒテ、外治ト内治トハ相併行シテ互ニ偏スルコトナキヲ要スト論ジタリ。

名古屋玄醫ノ醫方問餘外科ニ至リテハ、ソノ醫方復古ノ主張ニ基ツキテ、論ヲ立テ、方ヲ制シ、劉河間ガ諸痛痒瘡瘍ハ皆ナ心火ニ屬スト論ゼシヲ駁シ、靈樞ヲ引テ癰疽ハ寒氣ノ衛氣ヲ閉ヅルニヨリテ生ズトナシ、爾他主ニ外科正宗・證治準繩・外科啓玄・外科百効全書、等ノ諸書ヲ引テ、病症・病因及ビ治方ヲ論ジ、且ツ圖書ヲ附シテ、瘡瘍ノ象ヲ示セリ。

然レドモ、コレ等ハ皆ナ外科ヲ以テ専門トセルモノニアラズ、外科専門家ノ手ニ成リシモノニハ、外科捷徑俗書（寛文十年、大村壽庵撰）・外科秘要（貞享元年、大村安成撰）・外科衆方規矩（貞享二年、神保玄洲撰）・外科俗詮（年代未詳、林道伯撰）等ノ數書アリ、中ニ就キテ外科捷徑俗書ハ記述最モ精細ニシテ、コレニ依リテ當時ノ外科方術ノ如何ヲ窺ヒ知ルコトヲ得ベシ。

外科捷徑俗書、ハ六卷ヨリ成リ、第一卷ニハ先ツ五行相生相尅・臟腑主屬ヲ論ジ、主ニ劉河間ノ原病式ニ依リ『諸腫痛痒、瘡瘍ハ心火ニ屬シ、惡血凝滯シテ腫ヲナシ、人火氣ニ近キモノハ微熱スル時ハ痒ク、熱甚シキ時ハ則チ痛ム』ト言フノ說ヲナシ、第三卷以下ニ瘡瘍・金創・雜症等ヲ舉ゲタレドモ、ソノ方論ハ固ヨリ李・朱醫學ノ範圍ヲ脱スルコトナシ。外科的ノ治法トシテハ灸・烙・湯漬・鍼ノ數種ヲ舉ゲ『夫疽則宜_レ烙、不_レ宜_レ灸、癰則宜_レ灸、不_レ宜_レ烙、丹瘤腫毒、宜_レ湯漬_一、腫皮光軟則鍼開_レ之、以洩_ニ其毒_一、治_レ瘡之手法、迨不_レ過_レ此』ト論ゼリ。而シテソノ灸法ニ數様アリ。瘡ノ痒キ時ハ上餅灸法ヲ用フ、ソノ法椒薑葱ヲ相和シ搗爛シテ捏テ餅子トナシ、之ヲ瘡頭ニ當テ、ソノ上ニ灸スベシ。瘡若シ久シキヲ經テ瘡ヘズ、變ジテ癭トナルモノハ硫黃灸法ヲ用フルニ宜シ。又隔蒜灸法アリ、先ツ溫紙ヲ以テ瘡上ヲ覆ヒ、大蒜ヲ切テ片トナシタルモノヲソノ上ニ置き、コレニ灸スルナリ。瘡腫ヲ湯漬スルノ法ハ、腠理ヲ疎導シ、血脉ヲ通調シテ、凝滯ナカラシムルヲ期スルモノニシテ、瘡腫四肢ニアラバ湯水ヲ用ヒテ、之ヲ搗漬シ、腰・腹・背ニアレバ、之ヲ淋射シ、ソノ下部委曲ニアルモノハ之ヲ浴漬ス、スベテ淨帛又ハ新綿ヲ以テ藥水ヲ蘸シ、稍熱シテソノ患處ヲ蒸スルヲ法トス。針烙ノ法ヲ施スニハ證ノ淺深ヲ審ニシ、既ニ内潰シテ膿トナレバ火針ヲ用ヒ、又ハ鍼ニテ之ヲ開クベシ。別ニ貼敷ノ法アリ、コレ瘡腫ノ外ニ生ズルハ熱毒ノ氣ノ内ニ蘊結スルニ由ルガ故ニ、或ハ溫熱ノ藥ヲ貼敷シテ、ソノ熱毒ヲ引出シ、或ハ生寒ノ藥ヲ敷貼シテソノ熱勢ヲ折伏シ、ソノ邪氣ヲ驅逐スルコトヲ期スルナリ。

コノ頃ニアリテモ、創傷ノ治ハ猶ホ金創醫ノ主トシテ施ストコナリシヲ以テ、外科ノ書ニ金創ノコトヲ記セルハ甚ダ粗略ナリ。捷徑外科俗書、六卷ノ中、金創ノコトヲ記スルハ僅カニ五葉ニシテ、且ツ主ニ吉益半笑齋ノ換骨秘錄ヲ鈔録セルニ止マルヲ見テ、ソノ大概ヲ推スベシ。

和蘭流外科^①

葡萄牙人及ビ西班牙人ガ我が邦ニ來タルコトヲ禁ゼラレシ後、コレニ代リテ、我が邦ニ西洋ノ文物ヲ輸入セシハ和蘭人ニシテ、之ヲ紅毛ト曰フ。和蘭人ハ天正ノ末頃始メテ我が邦ニ來タリタレドモ、西曆一千六百二年（我が慶長七年）ソノ東印度商社ノ設立セラレシマデハ、我が邦トノ交通未ダ頻繁ナラズ。慶長十三年ニ至リテ、獨リ和蘭人ノミ毎歲平戸ニ來タリテ交易スルコトヲ許サレ、寛永十八年ニ至リテ平戸ヨリ移リテ長崎ニ居留スルコトヲ許サレ、出島ニ商館ヲ定メ、通商ハ漸ク隆盛トナルニ至レリ。而シテ和蘭・東印度商社ノ職員中ニハ醫士一人必ズ相交替シテ在留シ、醫術ヲ確シテ、銷國ノ制ヲ破ランコトヲ勉ムルアリ。耶蘇教ハ固ヨリ嚴禁ニテコレガタメニ横文ノ書籍ヲ齎ラスコトヲ得ザルノ禁令アリシニモ拘ラズ、醫術ヲ傳フルコトハ、之ヲ允許セラレタルヲ以テ、通詞ハ常ニ蘭醫ニ親炙シテ、ソノ醫術ヲ傳受シ、所謂和蘭醫方ハコノ時ニ興レリ。

和蘭醫方ニアリテ、先ヅ舉グベキハ、解剖學及ビ生理學ニシテ、ソノ説ニ依レバ骨ハ全數二百二十二ヲ算シ、頭骨七・口中骨十一・胴骨二十四・大骨五・首骨七・肋骨二十四・胸骨三・カリガネ雁金骨三・回平骨二・腕骨十六・掌骨八・指骨三十・腰骨二・股骨二・脚骨四・踵骨二・踝骨四・足首骨十・足指骨二十八、ヲ有ストナシ。總身ノ皮ハ三種ノ筋ニテ合セタルモノニシテ、ソノ一ハ肝臟ヨリ血ヲ總身ニ送ル筋、ソノ二ハ心臟ヨリ血ヲ總身ニ送ル筋、ソノ三ハ丸クシテ、内ニスモナク、血モナキ筋ナリ、コレヲ髓筋（ネルボ）（Nervus カ）ト曰フ。コノ筋ニテ總身ノ動くヲ覺ユルナリ。ソノ一ト二トハ血ヲ送ルノ筋ニシテ、血ハ心經ト肝經トヨリ出ヅ、心經ヨリ出ヅルハソノ色鮮紅ニシテ薄ク、出ヅルニ走り飛ブ。肝經ヨリ出ヅル血ハ色濃クシテ出ヅルニ靜カニ流ルルナリ。

『心ノ臟ハ胸ノ中ニ在リ、耳ノ様ナル物ニツアリ、是ハ心ノ藏ヲ清シメル風ヲ受取ル役ナリ、心ノ臟ノ袋ニツ。此袋ハ肝ノ臟ヨリ心ノ臟へ渡ス血ヲ受取り、善キ血ニナシテ、サテ左ノ方ノ袋ヨリ筋アリテ、血ヲ總身ニ渡スナリ。肺ノ臟ハ鼻口ヨリ入ル風ヲ受取り、常ニ心ノ臟ヲ扇キ涼シムルナリ、肺ヨリ心ノ臟ノ左ノ袋へ入ル筋アリ、此筋ヨリ風ヲ渡スナリ。食物ハ胃ノ腑ニテコナシ、其ヨリ小腸へ渡シ、血ニナシ、肝ノ臟へ渡ス、糟ヲ大便トナシ下ス。肝ノ臟ヨリ大キナル筋出デ、此大筋ヨリ又二筋出デ、腸ヲ卷テアリ、善キ血ニナル、食物ノ汁ヲ、此筋ニ吸取テ、其ヨリ大筋ニ渡シ大筋ヨリ肝ノ臟ニ入り、肝ノ臟ニテ善キ血ニナシ、肝ノ臟ノ外ノ方ノ大筋ヨリ血ヲ總身ニ渡ス、又心ノ臟へモ筋一ツ渡リテ、心ノ臟ニテ上々ノ清血ニナシ、心ノ臟ノ左ノ袋ニ入り、コレヨリ總身ニクバル源ナリ。脾ノ臟ハ血ノヲリノ入ル袋ナリ。腎ノ臟ハ血ノ水ヲ受取、小便ニナス所ナリ。頭ノ髓ハ色白クシテ柔カニ形丸ク、腑ノ如クニ常ニ動く髓ヨリ筋二十出ヅ、ソノ二筋ハ目ニ通ジ、二筋ハ目蓋ト鬚サキニ運ジ、常ニ動くナリ、二筋ハ齒ノ根ニ通ジ、二筋ハ舌ト下アギトニ通ジ、二筋ハ胸腹ニ通ジ、是ヨリ又上下左右ニ分ルルナリ』^②

コレ、當時和蘭醫學ガ唱説セル解剖學及ビ生理學ノ梗概ナリ。案ズルニ、歐洲ニアリテハ、十六世紀ノ頃アンドレアス・ウェザリウス（西曆一五二四年ニ生レ、一五六四年ニ歿ス）興リテ、解剖ノ學ヲ講ジ、千餘年來世人ノ信仰ヲ得タルガレノスノ説ヲ駁シ、依リテ解剖學ノ革命ヲ企テタルアリ。次デウイリアム・ハーヴェイ（西曆一五七八年ニ生レ、一六五八年ニ歿ス）出デテ血液循環ヲ發明セル（西曆一六一一年我が元和二年ニ當ル）アリ。所謂文運復活ノ勢ニ乗ジテ勃興セル學問ハ、和蘭人ノ傳譯ニヨリテ將ニ我が邦ニ入ラントシ、コノ如ク、解剖生理ノ説ニ於テ、舊來ノ面目ヲ新ニセントスルノ企圖アリシガ、所謂禁書ノ制アリテ、西洋ノ書ヲ讀ムコトヲ嚴禁シタルニ依

リ、僅カニ和蘭人ニ接シテ、耳聞面晤ニヨリテ得タル方術ノミヲ以テ、之ヲ和蘭醫方トスルニ至リ、和蘭醫方ハ和蘭流外科ノ外ニハ一物モナカリシナリ。

和蘭流外科ト南蠻流外科トハ、ソノ術ヲ傳ヘタル西洋人ノ異ナレルニ依リテ、ソノ名ヲ異ニセルノミニシテ、西洋ノ醫方ヲ唱道セルコトハ兩者相同ジク、ソノ術モ別ニ差異アルニアラズ。而シテ當時世人ハソノ術ノ新奇ナルヲ喜ビ、千里笈ヲ負テ長崎ニ至リ、和蘭通詞ニ就テ、和蘭醫方ヲ傳習スルモノ甚ダ多く、遂ニ檜林・西・吉田・栗崎等ノ通詞ハ、各々一門戸ヲ張り、所謂和蘭流外科ヲ標榜シテ各個流派ヲ別ツニイタレリ。

檜林流外科

檜林鎮山、名ハ時敏、通稱新吾兵衛、鎮山ハソノ號ナリ。慶安元年十二月十四日長崎・江戸町ニ生ル、幼ニシテ穎敏、和蘭人ニ就テソノ文字ヲ學ビ、善ク蕃語ニ通ズ、年甫メテ十八、學ゲラレテ小通詞トナル。初メ慶元ノ際西洋商船交々西肥諸港ニ入ル、官乃チ通詞ヲ置キ、國令ヲ傳ヘ、ソノ商賈ヲシテ互ニ生理ヲ辨ゼシム。寛永十八年新令ヲ下シ、外國通商ハタダ崎港ニ限り、別港相接ルヲ許サズ、是ニ由テ西洋商船、崎ニ入ルモノ日ニ益々多シ。通詞ノ業月ニ益々熾ナリ、而シテ翻譯ノコト未ダ十分ナラズ。鎮山命ヲ奉ジテ出島ニ赴キ蘭人ニ親炙シテ、ソノ文字言語ヲ修メ、寛文五年擢デラレテ小通詞トナリ、貞享二年六月大通詞ニ學ゲラル。鎮山爲人温順多能、常ニ醫ニ志アリ、嘗テ一書ヲ蘭人ニ得、題シテ外科諸技術書ト言フ。佛國ノ外科醫アムプロア・パレーガ著述ドルデレフトノ醫カカレムバツテムガ蘭語ニ翻譯セルモノニシテ、實二千六百四十九年ノ刊行ニ係ル。鎮山大ニ之ヲ珍重シ、講讀數年既ニ得ルトコロアリ、元祿元年蘭醫ホツフマン(リートベロフトモ傳フ、思フニソノ氏ト名トヲ混同セルモノナラン)ノ來朝スルニ遇ヒ、就テ疑義ヲ質シ、術大ニ熟ス、同五年八月年五十一、通詞ノ業ヲ嫡子榮理ニ譲リ、剃髮シテ名ヲ榮休ト改メ、外科ヲ以テ業トナス、諸國ノ七千里笈ヲ負テ來リ學ブモノ數百人、鎮出ノ業日二月ニ盛ナリ。檜林流ノ外科ココニ興ル。

寛永五年四月將軍綱吉、鎮山ヲ擢デテ醫官トナサントス、辭シテ就カズ。筑前侯重聘ヲ以テ招クモ亦應ゼズ、濟世ヲ以テ樂トナシ、治ヲ求ムルモノハ必ズ往キ、貧賤ヲ別タズ、故ニソノ名當時ニ重シ。寶永八年三月二十九日、鎮山病デソノ家ニ歿ス。享年六十九。嫡子榮理家ヲ嗣ギ、二男榮久別ニ家ヲ成ス、榮久、名ハ豊重、端山ト號ス。居ヲ大村町ニトシテ外科ヲ以テ業トナシ、和蘭外科術ノ書ヲ著シテ家ニ傳ヘ子孫相承テ今ニイタルト言フ。(檜林家系譜・長崎通詞由緒書)

吉田流外科

吉田自庵、名ハ昌全、自庵ハソノ號ナリ、筑前・太宰府ノ人、本姓坂田、幼ニシテ醫ニ志シ、長崎ニ赴ムキ吉田自休ニ就テ、南蠻流外科ヲ學ブコト多年、覃精研思、以テソノ蘊奧ヲ盡ス、自休遂ニ請フテ己レガ子トナシ、ソノ業ヲ嗣ガシム、依テ吉田氏ヲ冒ス、元祿四年夏六月、召ニ應ジテ江戸ニ出デ、栗崎正羽・村山自伯ト共ニ、幕府醫官ニ學ゲラル、時二年四十八、同六年十二月法眼ニ叙セラル、奧外科トナル、寶永七年七月仕ヲ致シ、正徳三年四月病デ歿ス、著ハストコロ三國流外科傳書、三十卷・外科眞傳、一卷アリ。(寛政醫家系圖・醫業家譜・先民傳)

西流外科

西玄甫、初ノ名ハ吉兵衛、南蠻語ヲ能クス、承應二年父吉兵衛(西氏初代)ノ後ヲ承ケテ、大通詞ニ學ゲラレ、寛文九年ソノ職ヲ辭シ、延寶元年江戸ニ來リ、學ゲラレテ幕府醫官トナリ、法眼ニ叙セラレ、又和蘭通詞ノ職ヲ兼ヌ、貞享元年九月歿ス、玄甫嘗テ葡萄牙文字ノ天文書ヲ譯解シ向井靈蘭ヲシテ筆録セシメ、題シテ乾坤辨說ト言フ、コレヲ我が邦ニ於ケル西洋書翻譯ノ嚆矢トス。著ハストコロ、別ニ諸國土産書アリ。(長崎通詞由緒書・先民傳・蘭學事始)

栗崎流外科

栗崎正羽、通稱道有、初メ道仙ト稱ス、祖父道喜、南蠻流外科ヲ以テ名アリ、父道有ソノ術ヲ傳ヘテ長崎役醫タリシガ、正羽ニ至リテ幕府醫官ニ擧ゲラレ、元祿四年御番外科トナリ、同十四年吉良上野介ガ殿中ニテ傷ツキタルヲ治シ、翌年宿舍トナリ、享保十一年四月老ヲ以テソノ官ヲ辭シ、ソノ年十月病ヲ以テ歿ス、年六十七、ソノ子正堅亦外科ヲ以テ名アリ、御番

外科トナル、元文二年、年僅カ三十二ニシテ歿ス。(寛政系圖・栗崎家系譜・先民傳)

村山流外科

村山自伯、名ハ天徳、唐津ノ人、父ハ信庸ト曰フ、大久保加賀守ノ部下ニ屬ス、自伯幼ヨリ醫ニ志シ、長崎ニ赴ムキテ外科ヲ修メ、業既ニ成リテ時ニ名アリ、元祿四年栗崎正羽・吉田自庵ト共ニ徳川幕府ノ醫官ニ擧ゲラレ、寶永三年三月、年六十ニシテ病歿ス。(寛政系圖・醫業家譜・日本醫譜) ソノ術ヲ傳フルノ書ニ、村山流外科全書アリ。

桂川流外科

桂川甫筑、名ハ邦教、本姓森島氏、大和・蟹幡ノ人、甫筑、松浦侯ノ醫官嵐山甫安ニ從テ醫ヲ學ビ、出藍ノ譽アリ、甫安ソノ才ヲ愛シ、勸メテ氏ヲ桂川ト改メシム、蓋シ桂川ハ源ヲ嵐山ニ發シ、波流漸ク大ナルヲ以テナリ。嵐山甫安、本性判田、名ハ春育、李庵ト稱ス、筑前ノ人、父某平戸侯ニ仕ヘテ和蘭譯司タリ、甫安ニ至リテ外科ヲ修メ、京師ニアリテ大ニ行ハル、次デ姓ヲ、嵐山ト改ム、著ハストコロ紅夷外科宗傳、六卷アリ。

甫筑既ニ嵐山氏ニ從テ和蘭流外科ヲ修メ、後チ蘭醫タルネル・アルマンスニ親炙シテ外科ノ術ヲ學ビ、大ニ得ルトコロアリ、元祿九年召サレテ幕府醫官トナリ、寛永五年奧醫師トナリ、享保十九年法眼ニ叙セラレ、延享四年、年八十七ニシテ歿ス。(桂川家系譜・寛政系圖・嵐山家系譜・蘭學事始)

カスパル流外科

杉田玄白ノ蘭學事始ニ『古來カスパル流といふ外科あり、これは寛永二十年、南部・山田浦へ漂流ありし阿蘭船の人数の内江戸へ召呼ばれたる中カスパル某といふ外科あり、三四年留め置かれ、其療法學はせられし者もありしが、追々長崎へ御送りのおよし江戸並に長崎にても、正保の頃、此カスパルより傳來の療方ありしを、詳なる事を知らずとも、後にカスパル流と唱ふる事と申すにや、又は別にカスパル姓の外科渡來の事もありしか』ト記シ、カスパルノ事跡甚ダ詳ナラズ、或ハ言フ、コノ時南部・山田浦ニ漂着セル和蘭船中ニアリシ外科醫ハソノ名ヲカスフルヤンス・メワケルテト言ヒタリト(カスフルヤンス・メワケルテハ一人ノ名ナルヤ、二人ナルヤ、之ヲ詳ニスルコトヲ得ズ) ②或ハ傳フ、慶安元年蘭人カスパル江戸ニ至ル、カスパル流外科ヲ善クス。江戸滞在中、ソノ術ヲ傳フルモノアリテ、カスパル流外科ココニ興ルト。然ルニ、ナホツドガ撰述スルトコロノ「第十七世紀ニ於ケル和蘭東印度商社ト日本ノ關係」ニワレンチンノ出島日誌ヲ引テ記スルトコロヲ見ルニ『法律博士ペーテル・フロクホーウコースノ一行、一千六百四十九年(我が慶安二年) 日本ニ航セントシ、七月二十八日バタヴィアヲ發シ九月十九日長崎ニ着シ、十一月二十五日長崎ヲ發シテ江戸ニ向フ、コノ一行ニ一人ノ醫官アリ、毎年ノ聘使ニ醫官ノ加ハルハ、コレヲ以テ嚆矢トス、醫官名ヲカスパル、姓ヲシヤムベルゲント稱シ(Caspar Schambegen) 參府旅行前、兩三週間、四人ノ日本少年ニ日々外科治療法ヲ教授シ、江戸ニ至リシ後モ、一千六百五十年(即チ慶安三年) ノ秋マデ、滞留シ、外科治療ヲ教授シタリ』ト曰フ。③案ズルニソノカスパルト言フハカスパル・シヤムベルゲンナルベク、ソノ人ガ我が邦ニ來タリテ外科治療ヲ傳ヘタルハ慶安年間ナルベシ。而シテ世ニカスパル流ノ外科ト稱スルモノハコノ術ヲ傳ヘタルモノナラン。

コノ如ク和蘭流外科ニ諸流派ヲ別ツト雖モ、敢テソノ術ニ殊別アルニアラズ。概シテ論ズルニ和蘭流外科ハ之ヲ南蠻流外科ノ後ヲ承ケテ、西洋ノ醫方ヲ傳フルモノニシテ、病因ヲ論ズルニハ、同じク四原液(血液・胆汁・粘液・黒胆汁)ノ混合不調ノ説ヲ以テシ、ソノ四原液ノ不調ヲ致スモノハ風・寒・暑・濕・飲食、或ハ房事過度ニシテ、或ハ金瘡・打身(打撲)、或ハ遠ク行ク等ニ依リテ原液滯ホリ、爲ニ諸病ヲ發シ、瘡瘍ヲ生ズルニ至ルト説クコト、南蠻流外科ニ於ケルト異ナルコトナシ。但シ南蠻流外科ニ在リテハ、ソノ多クハ尙ホ支那ノ外科方書ノ説ヲ用ヒ、内藥モ亦當時ノ鷹取流外科及ビ金創醫ノ所傳ト殆ド選ブトコロナク、僅カニ油藥ノ一方ニ於テ西洋ノ藥品ヲ採用セルニ過ギザリシガ、和蘭流外科ニアリテハ、之ニ反シテ主トシテ、西洋ノ説ヲ取り、コレヲ從來ノ外科ニ比スレバソノ面目ヲ一新セルトコロアリ、而カモ是レ全體耳聞面晤ニテ得タル手術ノミナレバ、縱令コレヲ外科ト稱スルモ、

尙ホ瘡瘍・金創等ノ單一ナル治方ノ範圍ヲ出ヅルコトナキハ固ヨリ論ナシ。

阿蘭陀外科良方(寛文九年刊行)及ビ阿蘭陀外科指南(元祿九年刊)ニ依リテ之ヲ見ルニ、當時ノ和蘭流外科ハ瘡瘍トシテ、左ノ諸種ヲ擧ゲ

ヘイビリ(熱腫)	ヒリウ(寒腫)	ヘンテ(風腫)	
ヘレマ(濕腫)	アツフステイミ(癰瘡)	ガランゲイシヨ(疽瘡)	
アプセス(疔瘡)	ガンゲレナ(癢瘰)	パナリシヨ(癩疽)	
アネウリヅマ(心經腫)	アカブソ(水腫物)	アルニヤ(陰囊ニ出來ル腫物)	
マレンコンヤ(濁血ヨリ生スル腫物)	コレラ(薄血ヨリ生ズル腫物)	カンダラス(腐血ヨリ生ズル腫物)	
カルブンコ(疔)	デツキ(癭瘤)	カンコロウト(濁血焦ルル腫物)	
ブルウトベシ(雜腫)	ヘストロ(二陰ノ間ニ生ズル腫物)	スコロウト(小瘡)	
セイルメス(下疳瘡)	マアグブルウトベン(乳腫)		

治方トシテハ、概シテ先ヅ、初發ハ、散藥ヲ付ケ、瘡瘍ノ散ルカ膿ムカヲ見テ、若シ膿マントスルノ狀況アラバ、

早ク膿藥ヲ付ケ、既ニ膿ミタルトキハ針ヲ刺シテ膿汁ヲ出ダシ、針目ニメイチヤ(綿撒絲)ヲ入レ、後ニ愈膏藥ヲ付クベシトナス。而シテコレニ應用スル藥劑ハインクエント(軟膏)・エンプラスト(硬膏)・ヲリヨ(油藥)ノ三種ニシテ、ソノ一例トシテ癰ノ治方ヲ擧グレバ『療治ハマハリニエンプラスト・デヘンシイブン(白茨油六十目・梘實由六十三目・葵根六十目・フラアキスネス根一撮・エイエス葉一撮・梘葉一撮・コンソウダマヨル根六匁・黃蠟二十四匁・白鳥ノ内油六十二匁・羊ノ内油六十二匁・テレメンテイナ十六匁・檜木脂一匁八分・沒藥四匁八分・乾香四匁八分・金ノロカス二十三匁・銀ノロカス二十三匁・ホウルス、アルメニア十六匁・テイラシケラタ十六匁・丹五匁・麒麟血五匁・生松脂二百目、右一切ノ愈膏藥ナリ、惡血ヲ押散シテヨセズ)又ハエンプラスト・アトストン(白茨油三十匁・蠟五十匁・田土五匁・乳香一匁・樟腦一匁・銀ノロカス七匁)ニテモ付マハシテ、惡血ノヨラザルヤウニセキテ、瘡ノ上ニハ、イングエント・バシリコン(ヘツキ八十目・蠟八十目・松脂二斤・ホルトガル脂同小ヒカヘテ吉シ右一ツ入レテ煎ジ、沫立チ止ムトキ、布ニテ濾シ使フ、腫物ヲ引上ゲ、膿マスルナリ)ヲ塗リ付ケ、ソノ上ニエンプラスト・ムスラギニブス(ムスラギニブス油四十八匁・鼠梓木脂四匁・石榴脂四匁・コメヲホハナアラチス四匁・コメサルヘイネ四匁・鬱金二匁・テレメンテイナ十六匁・蠟一斤)ヲ木綿ニ伸ベテ打ツナリ、赤味ノツキタルトコロニチボくト粟米ノ如ク吹き出ツルナリ、若シ吹き出ツルトキハ、上ヲ平針ニテ十文字ニタチワリ、血ヲ取ル。若シ惡肉出デタラバ、アミアツウストン(明礬燒キ返ヘシ)ヲ付ケル。崩レテ行カバ燒金ヲアツル^{ヤケガネ}。』

ソノ他瘡瘍ノ治方ハ概ネコノ類ニシテ、コレヲ南蠻流外科ニ比シテ、著シキ差異アルコトナシ。
前段ニ擧ゲタル瘡瘍ノ種類中アネウリヅマ(心經腫)ハ希臘語ノ Aneurysma 即チ動脈瘤ナリ、ソノ説ニ曰ク、『心ノ臟ヨリ血ヲ總身ニクバル、其血筋ニ生スル腫物ヲアネウリヅマト云フ、コレニ内發、外發アリ、内發ト云フハ力ナドヲ強く出シ、血筋痛ムコトアリテ其筋ニ血滯テアネウリヅマトナル、コレヲ内發ト云フ、外發ト云フハ切ルカ、突クカ、打ツカ、ナドシタルヲ、上ハナヲレドモ、其筋ナヲラザルニヨリテ、血モ其處へ滯ホリ積リテ出來ルヲ外

發ト云フ、何レモ心經（アルテリア動脈）ナルガ故ニ、針ナドヲ立ツレバ血止マラズシテ死スルモノナリ、云云、若シ破レテ血出ヅル時ハ心ノ臟ノ血筋ノ水上ヲ、絲ニ蠟ヲ引キ針ニサシ、血筋ノ下ヲ通シ、上ニハ木綿ヲ疊ミ置キテ、結び締メテ、血筋ノ血ヲ止メテ、猶ホ強キ藥ニテシメサセテ、血ノ通ヒナキヤウニシテ、彼ノ心經腫ノ處ヲタチワリテ、タマリタル血ヲ悉ク出ダスベシ」^⑭ト言フ。コノ如ク、動脈瘤ノ上方ニテ動脈管ヲ結紮シテ、之ヲ治スルノ方ハ十八世紀ノ頃、フンテル（西曆一七一七年ニ生マレ一七八三年ニ歿ス）ガ之ヲ創メタリト稱スレドモ、ソノ實ハ十六世紀ノ末ニギルレメウ（西曆一五五〇年ニ生マレ、一六一三年歿ス）モ亦既ニ之ヲ唱道セシコトアリ。我ガ元祿九年（西曆一六九六年）ノ阿蘭陀外科書ニ、コノ法ヲ記述セルヲ見レバ、ソノ方法ノフンテル以前、既ニ彼ノ邦ニ行ハレ、我ガ邦ニアリテモ、フンテル以前ニアリテ、少ナクトモ醫家が動脈瘤ヲ治スルニ、コノ結紮法ノ有ルコトヲ知りタルコト明カナリ。

刺絡ノ法ハ十六世紀ノ頃、歐洲ニアリテハ盛ニ行ハレタルモノニシテ、和蘭流外科ハ從テ、之ヲ我ガ邦ニ輸入シタリ。然レドモ、當時ソノ法ノ廣ク行ハレザリシコトハ阿蘭陀外科良法ニ『南蠻・阿蘭陀ニハ灸ヲセズ、惣ジテ、南蠻・阿蘭陀人ハ生得、熱性ナリ、故ニ常ニ尺澤ヨリ血ヲ取ル、然レドモ、日本人ニハ必ず灸治スルコトヨシ』トアルニテ推知セラルベシ。烙鐵ハ當時歐洲ノ醫家ノ盛ニ用フルトコトナリシガ、コノ法ハ我ガ邦ニアリテモ古ク平安朝時代ヨリ知ラレ、コノ頃和蘭流外科ガ輸入セシトコロノモノモ、ソノ方法大抵同様ニシテ、別ニ新シキヲ加フルコトナシ。

創傷ノ治方ハ南蠻流外科ニ於ケルト異ナルトコトナシ。ソノ血ヲ止ムルノ法ハ局處ノ縫合。古キ木綿ヲホツリテ玉子白味ニ交ゼテ付ケル。心經（動脈）ノ壓迫及ビ結紮。烙法（心經ノ口ヲ燒キ、ソノ上ニ丹礬燒キテ粉ニシテ捻掛ル、木綿ホツリ直ル^{ナラ}マデ置クナリ）粉藥（寒ニシテシムル性ノ藥）撒布。スイフクベ（乾角）或ハ足ヲ強ク結紮シ、若クハ強ク摩擦シ、若クハ強ク冷却ス等ニシテ、之ヲ鷹取流外科及ビ南蠻流外科ニ比スレバ、著明ノ進歩ヲ致セルモノト言ハザルベカラズ。

之ヲ要スルニ、和蘭流外科ノ内容ノ如何ハ、上條ニ記述スルトコロニ依リテ、略ボ之ヲ推知スルコトヲ得ベシ。蓋シコノ時代ヲ西洋ニ較ブレバ、恰モ彼ノ十七世紀ニ當リ、外科ノ地位ハ甚ダ低ク、所謂創傷醫ノ大半ハ無學文盲ナル剃鬚奴ナリシヲ以テ、世人之ヲ輕蔑シ、醫家ノ外科ヲ修ムルヲ耻ヅルノ有様ナリキ。コノ如クニシテ、當時ノ外科ハ、前世紀ノ大外科醫アンブロア・パレーヲ宗師トシ和蘭人ガ我ガ邦ニ傳ヘタルモノモ、亦アンブロア・パレーノ外科ナリシガ如シ。現ニ檜林流外科ノ祖タル檜林鎮山ガ、元祿年間ニ和蘭人ヨリ得タルモノハ西曆一千六百四十九年（我ガ慶安二年）和蘭譯ノパレー外科書ニシテ、又西流外科ノ方術ヲ傳フル金瘡跌撲療治ノ挿圖ヲ見ルニ、パレー外科書ノ和蘭譯ニ於ケルモノニ異ナラズ。ソノ他和蘭流外科ノ書、尠カラズト雖モ大都ソノ軌ヲ同フスルヲ見レバ、我ガ和蘭流外科ハ主ニアンブロア・パレーノ所說ヲ範トセルモノナリト言フモ、太誤謬ニハアラザルベシ。

眼科^⑮

前期以來行ハレタル馬島・穂積・山口・酎韶・橋本、諸流眼科ノ外ニ、コノ期ニハ家里・井花・馬淵・笠原・田原・竹内、等諸流派アリ、然レドモソノ治術ハ秘方ヲ主トシテ、單ニ家習ヲ奉ジ、一流一派ヲ立テテ互ニ門地ノ高低ヲ競フマデニテ、別ニ發明ノ方法アルニアラズ、且ツソノ治術ハ所謂秘傳書ニ於テ僅カニ之ヲ知ルコトヲ得ルノミナリシガ、コノ期元祿年間ニ及ビテ眼目明鑑ノ刊行セラルルアリ、眼科ハ始メテ一ノ刊本專書ヲ得タリ。

眼目明鑑・五卷、元祿二年刊、何人ノ撰ナルヤヲ詳ニセズ（杏林庵ト自署ス、ソノ本姓ヲ知ラズ）ソノ眼科ノ病證ヲ論ズルヤ、固ヨリ全然支那ノ醫書ニ據レリト雖モ、而カモ一症毎ニ古傳ヲ擧ゲテ本朝諸方ノ經驗說ヲ附シ、證候・診法・藥方・手術等ノ要ヲ示シ、本邦眼科専門書ノ體裁ヲ備ヘタルノ嚆矢トスベシ。故ニココニ先ヅコノ眼目明鑑ニ擧ゲタル眼病ノ種類ヲ擧ゲテ當時ノ眼科ガ認識セル疾病ノ如何ヲ示スベシ。

風眼（フウガン） 眼風毒ニ中レバ、腫テ薄キ膜多ク出デ、赤努肉ヲ生ジ、頭痛甚シク、眼ヲ開クコトヲ得ズ、背脊コハリ、七ノ椎ノホトリ、申酉ノ刻ヨリ身ノ毛ヨダツヤウニ覺エ、或ハ曉毎ニ眼甚ダ疼痛スルコトアリ。

病目（ヤミメ） 天行時氣ニ依テ一邦一郷ニ流布シテ、之ヲ患フルコト凡七日ノ間ナリ、白眼ニ血脈アリテ惣地ノ色、紅梅ノ絹ヲ以テ玉ヲツツメルガ如シ。

外障（ウハヒ） 黒眼クロクマユノ四方ヨリ白雲ノ如ク翳ノカカルモノナリ。

草膜（クサマケ） 春秋二季ニ發スモノナリ、草ノ始テ生ズル時ト枯ル時トニ發スル故ニ草膜ト名ヅク、眼白翳ヲ生ジテ物ヲ見ルコト明カナラズ、又四季ニ發スルトモ言ヘリ。

爛膜（タダレマケ） 筋多ク出デテ大皆小皆タダルモノナリ、淚多ク出デテ瞼眼ノ内ニ入りテ痛ムモノナリ。

蟲膜（ムシマケ） 上下ノ瞼、並ニ大皆小皆タダレ癢クシテ忍ブベカラザルモノナリ。

蠅膜（ハイマケ） 白眼ニ千鳥ノ尾ノ羽先、又ハ蠅ノ羽ノ如クナルモノ出デテ漸々黒眼ニ入ルモノナリ。

分膜（ワカレマケ） 膜ノ本ヨリ筋多ク分レ出ヅルモノナリ、或ハ大皆小皆ヨリ膜出デテ上下へ膜筋分レ末ニテ一ツニ遇フテ霞ムモノナリ。

輪月（リンゲツ） 眼ニ始メ少シ物イデテソノ形三月ノ如クニシテ、漸々滿月ノ如クニナリテ烏睛クロクマユヲメグルモノナリ、甚ダ治シ難キ症ナリ。

星目（ホシメ） 本ト白眼ヨリ紫色ノ筋イデテ黒眼ニ入ルモノナリ。人皆ナ星ノ根元ヲ知ラズシテ目瘡メカサト見誤マルコト多シ。目瘡ハ白眼ト黒眼トノ間ヨリ出ヅルモノナリ。星ハ瞳子ト黒眼トノ間ヨリ出デテ疼痛ス。コレヲ能ク見分クベシ。

篠推（ササオシ） 烏睛ノ村雲ノ如クナル物出デテ高下ナク黒眼ト平ニ出ヅルモノナリ。

疔目（テウメ） 白眼ニ紫色ノ血筋出デテ黒眼ニ入ル、疔目ハ白眼イヅルモノナリ、又七ノ椎ノ邊、午後ヨリ蒸熱シテ身ノ毛ヨダツモノナリ。

上氣膜（シヤウキマケ） 病目ノ如ク、眼中鷄冠ノ血ノ如ク筋大ニ出ヅルモノナリ。血道目ト云フモ大概上氣ト同ジク、上下ノ瞼ニ血有リテ動モスレバ霞ヲ生ジ、或ハ爛ルモノナリ。

內障（ソコヒ） 青・黃・赤・白・黒ノ五色ナリ。內障ノコト、ソノ症多シト雖モ、大概白黒ノ花散亂シ、或ハ針ヲ以テ刺スガ如ク、霞、濁ヲ生ズルモノ皆ナ內障ノ漸ナリ。

中障（チウヒ） 瞳子濃ツキテ白ク、眼塵ノ如ク黃色ニシテ白物タナビキテ瞳子ニ集マルモノナリ、或ハ少シ赤色ニシテ後ニ白クナルモノアリ。

虛眼（キヨガン） 上ハナルホド清光アルモ、瞳子ノ色清光ナクシテ見エカナルモノナリ。

藤膜（フヂマケ） 發初ノ時膜筋多ク出デ、或ハ小筋出デ眼玉ヲ擲ムルモノナリ。譬へバ藤ノ蔓ノ多クテ地ヲ縛ハリ擲メタルガ如シ。故ニ名ヅク。

縛膜（シバリマケ） ソノ初メ膜筋多ク出デ、ソノ筋十文字ニ通ジテ絲ヲ以テ縛リタルガ如シ。

弱目（ヨハリメ）虚弱ノ人眼精弱キモノニ發ス。

峯雲膜（ホウウンマケ）及ビ浮雲膜（フウンマケ）共ニ外瘡ノ下地タリ、黒眼ニ白物カカル、ソノ形様ニヨリテ名ヅク。

簾膜（スダレマケ）眼、上ヨリ下ニ簾ヲ垂タルガ如クニ下テ、外腫ルルナリ。

痒膜（カユマケ）何レノ目ニテモアリ、血筋、又ハ膜多ク痒キコト堪ガタシ。

杉膜（スギマケ）白眼ニ血有テ、白物黒眼ニ係リ、遠山ニ杉ノ茂レルガ如シ、黒眼甚ダ白シ。

古血膜（フルチマケ）大眦小眦ヨリ一文字ニ膜筋通ルモノナリ。

血翳膜（ケツエイマケ）下瞼ノ邊ヨリ血筋努肉多ク出デソノ色ミナ黒色ナリ。

打目（ウチメ）内障ノ證ハ打目ヨリ生ズルコト甚ダ多シ、打タル當坐ノ養生ヲ專一トス。

刺目（ツキメ）刺目ハ症ニ依テ内障トナリ、外瘡トナリ又ハ篠推目トナルコトアリ。

禾目（ノギメ）誤テ禾ノ眼ニ入ルコトアリ、コレニハ古ク傷タル筆ノ先ニ新シキ綿ヲ卷テ眼中ノ禾ヲナヅベシ、禾必ズソノ綿ニ從テ抜クベシ。

薄係膜（ウスカカリマケ）瞳子ノ上ニ青色ナルモノ係リ、強スルニ從テ瞳子ノ内マデ藍ノ色ノ如クナルモノナリ。藥ヲサセドモ効アラズシテソノ色濃クナルナリ。

目蛭（メヒル）大眦小眦ヨリ蛭ノ水上ニ浮行スルガ如クナル物、白眼ニアリテ漸ク黒眼ニ入ル。

目菌（メクサヒラ）烏睛ノ廻ヨリ肉出デテ烏睛ヲツツムモノナリ。

光散膜（クワウサンマケ）白膜ノココカシコニ黒點アリテソノ瞳子ノメグリハ日輪ノ光輪ノ如シ、黑白ノ花散スルモノナリ。

絲膜（イトマケ）血筋出デテ黒眼ニ通り、或ハ瞳子ヲ貫クコトモアリ。

毛膜（ケマケ）大眦小眦ヨリ血筋出デテ肉ヲ狭ムモノアリ、或ハ黒眼ニ血筋アルコトモアリ。

肉膜（ニクマケ）大眦小眦ヨリ肉出デテ惡血瞳子ニ入り、瞳子開キ散スルナリ。

閉膜（トヂマケ）筋多ク出デテ、眼中閉ヅルガ如ク覺フ。

血眼膜（ケツガンマケ）黒眼ノ上血腸多ク出デ、ソノ色黒ク或ハ疼痛ス。

釣膜（ツリマケ）大眦小眦ヨリ筋出デテ、烏睛瞳子ノ上ニ通ホルモノナリ。

水膜（ミヅマケ）ソノ形蛙ノ歌袋ノ如クツヅク齧出テ浮腫ルモノナリ、白眼ニアレバ水膜ト名ヅケ、黒眼ニアレ

バ、コレヲアキヒ顯瘡ト名ヅク。

蟹眼膜（カイガンマケ）古キ筆ノ先ヲ見ルガ如ク瞳子へ吹出デシモノナリ、或ハ蟹目出タルガ如ク黒眼瞳子破レ、ソノ瞳子ノ端ヨリ人ヲ見ルモノナリ。

切膜（キレマケ）ココカシコニ膜アリテソノ膜斷々トシテ眼ノ下際ヨリ出ヅ、一晝一夜ノ間ニ發スルモノアリ、疼痛スルコト忍ビ難シ。

紅伽膜（コウカマケ）大眦ヨリ血筋肉多ク出デテ腫ルルモノナリ。

白膜（シロマケ）タダ痒クシテ痛マズ、薄白キ筋眼中ニカカルモノナリ。

赤膜（アカマケ）血筋赤々ト出デ、眼ヲ患フルモノナリ。

青膜（アオマケ）青クシテ少シ赤シ、強ク障ヲ成サズ、少シ見ヘガタキノミナリ。

努肉（ドニク）諸眼ニ多クコノ症アリ。

客靈膜（カクレウマケ）大眦小眦ニ血肉アツテ黒眼ニ瞳子ノ邊マデ浮雲ノ如ク白翳カカルキノナリ。

昂星(バウセイ)天ニ昂星ノ出タルガ如シ瞳子ヲ遶リ圍テ出ヅルモノナリ。

膜目(マケメ)イヅレノ目ニ限ラズ、四十八膜二分レ生ズルモノナリ。

目瘡(メカサ)白眼ト烏睛トノ界ニ白色ト薄紅ナルモノアリ疼痛スルコト限ナシ。

多淚眼(タルイガン)何レノ目ニモアリ。

眼腸(ガントウ)忽然トシテ大ナル烏ノ肝ノ如キモノ卒ニ出デ黑睛ヲ包ミ、或ハ烏睛ニ入りテ厄ヲナスモノナリ。

目疣(メイボ)黒眼ノメグリノ内ニ小ナル物膿氣ヅキテ出ヅ、ソノ色紅白ナリ。

疱瘡目(ハウサウメ)疱瘡眼ハ百日ノ内ノ療治ナリ、ソノ外ハ治セズ。

疳眼(カンガン)眼中ニ翳膜ナクシテ、申西ノ刻ヨリ眼ノ光明ヲ失ス、之ヲ雀目トモ言ヒ、ソノ形羸瘦シテ湯水ヲ好ミ、土壁ヲ食ヒ、或ハ吐瀉シ、或ハ土ノ上ニ伏シ、或ハ一身面色共ニ黃ニ、眼色脈モ亦黃色ニシテ明ヲ惡ミ、闇ヲ好ムモノアリ。

右ニ擧グルトコロニ依リテ之ヲ見ルニ、當時ノ眼科ハ内障・結膜炎・角膜炎ノ他ニ、眼瞼緣炎(爛膜)・前房蓄膿(輪月)・フリクテン(草膜)・虹彩脫出(蟹眼膜)等ノ諸症ヲ認識セルコトヲ知ルベシ。

眼目明鑑、擧グルトコロノ眼病ノ種類ト、ソノ證ノ大略トハ、コノ如クナルガ、ソノ病ハ一個眼病ノ證候ニ過ギザルモノアリ、又一病ニシテ發證ノ小異ニヨリテ、ソノ名目ヲ異ニセルモノアリ。而シテ之ヲ支那ノ眼科書ニ比スルニ、内障ヲ論ズルコトハ全ク彼レノ模型ヲ採レリ。外障ヲ論ズルニ至リテハ、甚ダ淺薄ニシテ、支那眼科ノ半バニモ及バズ。例之、支那眼科ハ風牽喎斜(ソノ說ニ言ク『或醉飽坐臥、左右忽受ニ風牽喎斜、瞳人不ニ開大一、視物濛濛、甚至ニ半身不遂一、云々』コレ當ニ腦出血等ニヨリテ眼證ヲ發セルモノヲ言フ)・輓轡轉關(直視、又ハ眼球震戰ノ症ナリ)・瞳仁乾缺(瞳仁圓カラズ、上下東西シ、鋸齒ノ如ク、匾缺參差スルモノヲ言フ。則チ虹彩ノ異常ナリ)・兩瞼粘睛(眼瞼ト眼球ト相癒着スルモノ)・能遠視不能近視(遠視)・能近視不能遠視(近視)・視一物作兩物(複視)等ヲ擧ゲタリ、而シテ眼目明鑑ハ之ヲ記述セズ、若シ精細ニ點檢セバ此般ノ例證猶ホ多ク、コノ眼科書ノ記述ノ支那眼科書ニ及バザルコト遠キヲ知ルベシ。

治方ニツキテ眼目明鑑ニ記スルトコロハ左ノ如シ。

(一) 雜治内療 眼病ハ全身病ノ一證候ニ過ギザルニヨリテ、ソノ原病ヲ療スルナリ、但シ藥方ハ概ネ前期馬島眼科ノ條ニ記述セルモノニ同ジ。

(二) 雜治外療

(イ) 洗藥 藥ヲ水ニテ煎シ眼上瞼ヲ洗フ。

(ロ) 塗藥 藥ヲ乳ニテ練リ、瞼ニ塗ル。

(ハ) 吸截(秘鍼) 角石ノ無髓角ヲ竹の皮ニテ卷キ、火ニクベ燒キ、黃柏ノ煎ジ湯ニヒタシ、ソノ後取出

シ、又再ビ燒紙ニテ包ミ、ソノ切口ヲ顯シテ惡血ノ所ニアテ、暫クシテ取リテ見レバ惡血ソノ角ノ切口ニツイテ出ルモノナリ、熱金・引刀ナドヲ嫌フ人ニ之ヲ用ユ。

(ニ) 蒸藥 藥ヲ溫メ、ソノ鍋ノ蓋ノ正中ニ穴ヲアケ、ソノ穴ニ竹ノ筒ヲサシ入レ、ソノ竹ノ筒ノ穴ヨリ息ヲ出シテ眼上瞼ニアテテ蒸スベシ。

(ホ) 澄藥 練藥ニテ、眼ニ點シテ翳ヲ澄マスナリ。

手術トシテハ

(へ) 瀉血 引刀ト名ヅク、刀ニテ瞼ノ内面ヲ截ルナリ。
(ト) 切膜 上下ノ瞼及ビ白眼ニ膜覆フコトアラバ、引刀ニテ截ルベシ。

(チ) 溫金 烙鐵ノ極メテ軽度ノモノナリ。

(リ) 熱金 烙鐵ナリ。

(ヌ) 内障針 針ニテ内障ヲ刺スナリ。

眼目明鑑ト同時代ニ、藤井見隆ノ眼目精要・眼科醫療手引草(兩書内容同一ナリ)アリ。ソノ眼病ヲ記述スルコ

ト、大都、眼目明鑑ト同様ナリ。タダ上血ウハチ・下血シタチ・酒膜サカマケ(酒ニ酔タル時、血多ク生ズルヲ言フ)・指扇サシアフキ(白眼ヨリ黒

眼へ白キ物サシ入ルヲ言フ)・黒肉(黒眼ノ肉底ヨリ柱ヲ立テタル如クニシテ蟹ノ眼ニ似タル物一ツモ二ツモ出ヅ

ル)・篠衝シノツキ(黒睛膿ノ如クナル)・氣輪(老人ノ黒睛ト白睛トノ間ニ一筋輪ノ如ク見ユルモノ)等ノ諸説ヲ擧グルハ、

眼目明鑑ニ見ザルトコロニシテ、虹彩脫及ビ老人環等ヲ認メタルナリ。ソノ手術ノ式ヲ記スコトハ眼目明鑑ニ優サ
リ、風眼(角膜潰瘍)ニ穿刺(角膜穿孔術)ヲ施シ、又白内障ニ手術ヲ施スベキ適應ヲ判別シ、ソノ施術ニ就キテ
注意スルニ

- 一、天氣曇リ雨降ル日、針立ツベカラザルコト。
- 二、烈シク風吹ク日、針立ツベカラザルコト。
- 三、人神ヲヨクく辨フベキコト。
- 四、八ツ時ニサガリテ、針立ツベカラザルコト。
- 五、眼ノ底ノ様子ヨクく見ルベキコト。
- 六、針ヲ立テテ後、高聲發スベガラザルコト、堅キモノヲ食フベカラザルコト、枕ヲ下グベカラザルコト、身ヲ
寒クスベカラザルコト、三時ホド横ニ寝ネズ、産後ノ養生ノ如クスベキコト。(倚ニ依ルヲ言フ)
- 七、禁物堅ク守ルベキコト。

ノ諸件ヲ以テセリ。而カモソノ手術ニ關スル記載ハ甚ダ不完全ニシテ、ソノ詳細ハ口授秘傳ニ依ルコト、當時眼
科ノ例規ヲ脱セズ。技術ノ程度モ推シテ知ルベシ。

コノ如ク眼科専門家ノ單ニ家習ヲ奉ジ、一流一派ヲ別チテ、互ニ門地ノ高低ヲ競ヒシ時ニ方リテ、本道ニハ醫方
復古ノ說興リ、ソノ眼病ノ治方ニモ亦新主義ヲ應用セントスルニ至レリ。名古屋玄醫ノ醫方問餘・眼科ノ部ニ『古
來目病ヲ論ズルモノハ、咸ナ火ヲ以テ之ヲ治ス、河澗・東垣等皆然リトス。夫レ烏睛ハ肝ニ屬シ、白睛ハ肺ニ屬シ、
瞳人ハ腎ニ屬ス、藏ハ皆陰ナリ、火盛ナルトキハ即チ陰ノ虧グルハ其理ナリ、然レドモ火ノ望ナルハ惟リ陰虛ノミ
ニアラズ、風寒之ヲ閉ヂテ鬱シテ發セズシテ、火タメニ盛ナリ。今之ヲ治スルニ苦寒ノ劑ヲ以テスレバ彌々其火ヲ
鬱セシムルナリ』ト說キ、溫熱ノ劑ヲ用ヒテ衛氣ヲ助クルコトヲ主トスベシト論ジ、又證治準繩ヲ引テ、眼證ノ内
病ニ因スルモノ多キヲ說キ、眼證ヲ治スルニハ内外併セ攻ムベキコトヲ痛論セルガ如キ、古醫方ノ勃興ガ眼科ノ治
方ニ及ボセル影響ノ甚小ナラザルヲ示スモノナリ。

醫方問餘ニハ銀海精微・原機啓微・眼科全書・證治準繩、等ノ諸書ヲ引キ、治方ニ内外ヲ別チ、手術ニハ鉤・割・
針・烙ノ四法ヲ擧ゲ、病門ヲ別ツコト凡ソ百八十三、記述ノ整然タルコト、固ヨリ之ヲ眼目明鑑等ヲ比スベクモア
ラズ。而カモ眼科専門ノ醫家ガ、コレニ依リテソノ論說ノ面目ヲ一新スルニ及バザリシハ、適々以テ、當時ノ眼科
ニ人物ナカリシコトヲ證スルニ足ル。

兒科^⑩

前期安土・桃山時代ニアリテ、兒科ニハ既ニ板阪・岡・近藤等ノ専門家アリシガ、コノ期寛永年間以後ハ兒科ヲ以テ専門トスル醫家甚ダ多く、就中吉田宗活・人見元徳・安倍順貞・岡壽元・太田宗勝・武田道安・吉田策庵・塙宗安・山科長安・村上等詮・山添宗積、等ハ兒科ヲ以テソノ名ヲ當時ニ顯ハセリ。

吉田宗活、機庵ト稱ス、施藥院全宗・泰宗巴ニ從ヒテ醫術ヲ學ビ、又洛ノ妙心寺ノ僧庸山禪師ニ從ヒ、小兒醫方ヲ修ム、元和三年越後守光長三歳ニシテ疳痢ヲ患フ、依ツテ京洛ノ兒醫ヲ召ス、宗活ソノ選ニ當リ、藥ヲ進メテ効アリ、寛永三年明正院不豫、藥ヲ献ジテ効アリ、法橋ニ叙セラル、爾來朝廷及ビ幕府ノ治療ヲナシ、同十八年武州・忍領ノ内ニテ采地五百石ヲ賜フ、コノ年十月病ミテ歿ス、年五十一、ソノ子策庵、名ハ宗以、小兒科ヲ以テ名アリ、寛文六年法眼ニ叙セラレ、元祿七年歿ス。(寛永系圖傳・寛政系圖)

人見元徳(一二元徳)名ハ賢知、初ノ名ハ又七郎、初メ朝廷ニ仕ヘシガ、寛永十四年千代姫君ノ不例ノトキ、召サレテ江戸ニ來リ、同十八年大藏卿法印ニ叙セラレ、瑞祥院ト稱ス、天和四年正月歿ス、年八十一。(寛永系圖傳・寛政系圖・歴世尙藥略傳)

安部順貞、祖父良長、荒木攝津守ニ仕ヘ、後尾州侯ニ仕フ、ソノ子良重、良重ノ子順貞、幼ヨリ醫術ヲ慕ヒ、黒谷養南ニ師事シ、小兒科ヲ以テ名アリ、寛永中醫官ニ列セラレ、同十九年法印ニ叙セラレ長徳院ト稱ス、延寶四年歿ス。(寛政系圖・歴世尙藥略傳)

岡壽元、甫庵ト稱ス、岡家重ノ孫、小兒科ヲ以テ名アリ(傳ハ別ニ出ヅ、第二三九頁參照)

山田正方、宗圓ト稱ス、貞享年中江戸ニ出デ、寛永六年幕府醫官ニ列セラレ、元文六年病テ歿ス、年八十一、著ストコロ幼科全書、一卷アリ。(寛政系圖)

山田正信、剃髮シテ如成ト號ス、小兒科ヲ以テ家ヲ興シ、江戸ニ住スルコト十餘年、寛永十八年、竹千代君誕生ノ時、召サレテ、醫官トナル、同十九年法橋ニ叙セラル。(寛永系圖傳)

塙安友、初メ喜三郎ト稱シ後チ八右衛門ト改ム。織田・豊臣兩氏ニ仕ヘ、秀次滅亡ノ後、浪人トナリ、後チ剃髮シテ道閑ト號シ、小兒ノ醫トナル、寛永六年正月、年七十四ニシテ歿ス、ソノ子宗安、名ハ泰春、父ノ業ヲ嗣テ小兒ノ醫トナリ、寛永三年法橋ニ叙シ、同十八年竹千代君ニ仕フ。(寛永系圖傳)

太田宗勝、濃州ノ人、曾祖父宗隆ニ至リテ尾張ニ赴ムキ、祖父宗安、父宗久共ニ丹羽長秀ニ仕フ、宗勝ニ至リテ浪人トナリ、小兒ノ醫ヲ以テ門戸ヲ江戸ニ張ル。寛永十四年千代姫君不豫、諸醫技窮マルヲ以テ、江戸中ノ小兒醫ヲ召サル、宗勝ソノ選ニ當タリ、藥ヲ進メテ功アリ、同十八年竹千代君ノ誕生ニ際シ、屢々幕府ニ召サレ、ソノ年九月功ヲ以テ武州・忍領ノ内、小見村ニ領地ヲ賜フ。(寛永系圖傳)

村上等詮、京師ノ人、家世々醫ヲ業トス、等詮職ヲ承ケテソノ名益々顯ハル、東山天皇ノ皇子、不豫、等詮コレヲ治シテ功ヲ奏シ、依テ法眼ニ叙セラレ、春臺院ノ號ヲ賜フ、ソノ子正信、養純ト稱ス、寶永七年召サレテ幕府醫官トナリ、正徳四年法眼ニ叙セラル、小兒科ヲ以テ當時ニ名アリ、元文二年十一月歿ス、ソノ子信之、良元ト稱ス、父ノ後ヲ承ケテ、幕府醫官トナリ、寛保二年法眼ニ叙セラル。著ストコロ慈幼密旨二卷アリ。(寛政系圖・近世叢語)

山科長安、名ハ元信、字ハ申孚、自カラ求仁齋又菊溪子ト號ス、世々啞科ヲ業トシ、當時ニ名アリ、法眼ニ叙セラル、貞享五年、年四十七ニシテ歿ス。ソノ子廣安、名ハ元憲、本姓進藤、年十二ニシテ山科長安ニ從ヒ、小兒ノ醫方ヲ修メ、後ソノ家ヲ嗣ギ、元祿五年法眼ニ叙セラレ、後チ法印ニ進ミ仙壽院ノ號ヲ賜フ。(墓誌)

山添宗積、名ハ直方、近江ノ人、京都ニ赴キテ山科氏ノ門ニ入り、小兒科ヲ以テ名アリ。江戸ニ來タリ、京橋・南紺屋町ニ

住ム、後チ召サレテ幕府ノ醫官トナリ、貞享四年、年六十五ニシテ歿ス。(寛政系圖)

コノ如ク、コノ頃ニハ兒科専門ヲ以テ名アルモノ多ク、幕府醫官ニモコノ頃ヨリ小兒方ノ専門アリ(貞享三年ノ幕府役人武鑑・醫師ノ部ニ『小兒方 二百俵望月榮庵、百俵望月中庵、百俵望月安節、五百俵河野松庵』ト記載セリ)。兒科ニ關スル專書ニモ武田法印秘傳小兒方(寛文五年)・保嬰三方(元祿七年)・小兒必用養育草(元祿十六年)・古今幼科摘要(寶永六年)等アリ。コレ等ノ書中ニ引用セルハ千金方・醫林集要・集驗方・衛生寶鑑・醫學正傳・醫學入門・全幼心鑑・小兒直訣・嬰童百問・保幼大全・保赤全書・活幼心法・曾氏小兒方・全嬰方・保嬰論、等ニシテ、前期ニ於ケル兒科ト略ボソノ内容ヲ同ジクス。コノ期ニ在リテ、本道ノ書ニテ、専ラ行ハレタルハ曲直瀨玄朔ノ醫方明鑑・奈須玄竹ノ醫方聚要(延寶六年刊行)ニシテ、殊ニ醫方聚要ハ全部十二卷ノ中ニテ、第十一卷及ビ第十二卷ニ小兒雜病ヲ擧ゲ、記述稍々詳細ナルヲ覺ユ。然レドモ、コレ等本道書中ノ小兒病門モ、當時行ハレタル兒科ノ專書ト同ジク、主ニ李・朱ノ醫說ニ依リ、ソノ治方モ亦溫補ノ範圍ヲ脫スルコト能ハザリシナリ。

名古屋玄醫出デテ醫方復古ノ說ヲ唱へ、李・朱醫方ヲ排シテ、直チニ張仲景ヲ師トスベキコトヲ言ヒ、延寶七年、醫方問餘十卷ヲ著シテ所謂古醫方ヲ唱道セシガ、ソノ幼科門ハ五・六ノ二卷ニ涉リ、嬰童百問・保生碎事・醫書大全・古今醫統・醫學綱目・保赤全書等・當時流行ノ支那醫書ヲ引用シタレドモ、又病源候論・千金方及ビ內經ノ所說ニ據リ、所謂後世家ノ論說ヲ駁撃セルコト尠カラズ。少ナクトモ幼科ノ治方ハ名古屋玄醫以來、李・朱ノ溫補ノ範圍ヲ脫セントスルニイタレリ。

婦人科

婦人科ハ前期ニ於ケルト大體同一ノ程度ニ在リ。斯科専門ヲ以テ世ニ行ハルモノハ多クハ一派ノ流派ヲ株守シ、祕傳ノ治方ヲ奉ジテ自カラ得タリトスルノミ。元祿年間ニ至リテ稻生正治、蝨斯草ヲ著ハセリト雖モ、コノ書ハ主ニ養胎ノ法ヲ説キタルニ過ギズ。香月牛山ノ婦人壽草(元祿五年)ハ素問・病源候論・千金方・婦人良方・醫學正傳・古今醫統・便產須知・產寶論・明醫雜著、等ノ諸書ヲ引キテ、求嗣・胎教・妊婦食忌及ビ藥忌・產前諸病・妊娠產圖・產前治法・難產・臨產・產後諸病、等ノ諸項ヲ論ズルコト甚ダ精細ニシテ、交ユルニ自家ノ經驗說ヲ以テシ、妊娠及ビ娩産ノ調護ノ方則ヲ示スコト到レリト言フベシ。而カモ斯書ハ治方ヲ擧グルヲ以テ主トセザルガ故ニ、不妊ノ症ヲ治スルニ溫泉ニ浴スルノ法ヲ可トシ、惡阻ニ縮砂仁ヲ用フルコトヲ稱揚スル等ニ、三治方ヲ除キテハ別ニ斬新ノモノアルヲ認メズ。

本道ノ書中ニテ醫方聚要ニハ、ソノ第十卷、婦人門ニ、月經・經閉附血塊・崩漏・帶下・虛勞・婦人雜病・胎前(惡阻・子煩・子懸・胎腫・子淋・轉胞・胎動・胎漏・子嗽・子疝・子瘕・子哭・腰痛・痢疾・霍亂・傷寒・束胎・死胎・小産)・產育等ノ部門ヲ別チタレドモ、ソノ論述セルトコロハ純然タル李・朱醫方ナリ。

名古屋玄醫ノ醫方問餘ニ至リテハ、從來ノ醫家ガ、『婦人ハ當サニ氣ヲ耗シ、血ヲ調フベシ』ト言フヲ駁シテ、『血ヲ調フルハ甚ダ佳ナリ、何ゾ氣ヲ耗スコトヲスベケンヤ』ト言ヒ、香附・厚朴等ノ藥ヲ用ヒテ、鬱氣ヲ行ルハ、惟トリ氣ヲ耗スノミニアラズトナシ、『婦人病ハ專ラ氣ヲ調フルヲ以テ主トナス』トマデ言ヘリ。コレ名古屋玄醫ガ李・朱溫補ノ說ヲ排シ、直チニ張仲景ヲ師トスベキコトヲ唱道シ、所謂古醫方ノ說ヲ立テシヨリ、ソノ主張ヲ婦人ノ治方ニ及ボセルナリ。

口中科

兼康・親康ノ兩家（前期ニ出ヅ）ノ他ニ、本康宗壽・本賀順昌・安藤安貞等ノ幕府ノ齒醫師ニ擧ゲラレタルアリ。口中科ノ専門ヲ以テ世ニ行ハルル者ノソノ數ヲ増加セシコトヲ知ルベシ。而カモノノ治方ニ於テ別ニ新シキヲ加ヘタルヲ認メズ。

名古屋玄醫ノ醫方問餘ニハ口中科ノ一門ヲ立テ、口・牙齒・咽喉・唇ノ諸病ヲ擧ゲ、病圖ヲ挿ミ、外科正宗・外科百効全書等ノ書ヲ引テ、ソノ治方ヲ詳論シタリ。然レドモ、落下顎（下顎脫臼）、ソノ他一二ノ症ヲ除クノ他ハ、從前口中科ノ書ニ掲グルトコロニ異ナルコトナシ。

鍼灸科^⑩

安土・桃山ノ世、御菌・吉田諸家出デテ、中古戰亂ノ餘ニ癡類セル鍼科ヲ興セシガ、コノ期ニ至リ、天和元年徳川綱吉ノ將軍ノ職ニ就クヤ、直チニ令シテ鍼術ノ振興ヲ圖ラシム、杉山和一乃チ命ヲ奉ジテ起テソノ事ニ任ジ、鍼治講習ノ所ヲ設ケ、以テ諸生ヲ教授シ、門人三島安一二至リテ更ニソノ業ヲ擴張シ、講堂ヲ千住・板橋・新宿・品川、ソノ他諸州四十五箇所ニ増設シ、鍼術ヲ業トスルモノ皆ナ殆ドソノ門ニ出ヅ。所謂杉山流鍼科是ナリ。

杉山和一、伊勢ノ人（某書大和ノ人トナシ、某書濱松ノ人トナス、共ニソノ實ヲ失フ）、父名ハ重政。通稱權右衛門、藤堂氏ニ仕フ、和一ハソノ嫡子ナリ、慶長十五年某月生ル、目盲スルノ故ヲ以テ義弟重之ニ譲リ、江戸ニ出デテ鍼術ヲ檢校山瀬琢一二學ブ、和一性鈍ニシテ伎進ムコト能ハズ、遂ニソノ師ノタメニ逐ハル、由テ憤然トシテ曰ク、既ニ已ニ癡人トナリ、天下ニ用ナシ、然レドモ苟モ生テコノ世ニ在リ、一事ノ成スコトナキハ豈遺憾ナラズヤト、乃チ相州・江ノ島天女ノ祠ニ詣デ、巖洞ニ端坐シテ、斷食禱ルコト三七日、日將ニ周カラントス、ソノ夜夢ニ神アリ、一物ヲ授ク、熟視スレバ管ト鍼トナリ、和一大ニ喜ビ、創メテ管鍼ヲ造リ以テソノ術ヲ試ム。補瀉・迎隨、漸ク手ニ應ズルヲ覺ユ、ソノ性亦一變シテ前日ノ魯鈍ニ似ズ、乃チ日ニ諸生ヲシテ内經・難經等ノ書ヲ讀マシメ、一々暗誦、一字ヲ誤ラズ、後京師ニ赴テ術ヲ入江豊明ニ受ケ、入江氏ハ京都ノ人、祖父頼明、豊臣氏ノ醫官園田道保及ビ明人、吳林達ニ就テ鍼術ヲ受ケ、之ヲ子良明ニ傳フ、豊明ハ良明ノ子ニシテ入江氏世々鍼家ノ宗匠タリ、山瀬琢一モ亦良明ノ門人ナリ、和一既ニ琢一二從ヒ後子豊明ヲ師トシ斯術ノ蘊奧ヲ窮メソノ名大ニ顯ハレ、治ヲ乞フモノソノ門ニ膺集ス、偶々將軍常憲公病アリ、和一ヲ召シテ鍼ヲ進メシム、効アリ、白銀五十枚ヲ賜フ時ニ貞享二年正月八日ナリ、次デ俸二十口ヲ賜ヒ、遂ニ進テ八百苞ヲ賜フ、元祿五年五月九日擧ゲラレテ關東總錄檢校トナリ、同七年五月十八日病ヲ以テソノ家ニ歿ス、享年八十五、本所彌勒寺ニ葬ル。杉山和一ガ著述スルトコロノ書ニ三部アリ、一ヲ療治大概集ト言フ、鍼刺ノ術式・病論及ビ各病ニ於ケル鍼術ノ適用ヲ説ク、二ヲ選鍼三要集ト言フ、補瀉・迎隨・十四經ノ理及ビ針灸要穴ヲ説ク、三ヲ節要集ト言フ、先天・後天・脉論ヲ説ク、コレヲ杉山流三部書ト言ヒ、ソノ徒ノ最モ秘スルトコロタリ。（杉山家系譜・日本醫譜・皇國名醫傳・杉山流三部書序・崎人傳）

經絡孔穴

鍼家ノ所説ニ依レバ『凡ソ諸病ノ起ルハ皆氣血ノ壅滯シテ宣通スルコト能ハザルニ由ル、故ニ鍼シテ以テ之ヲ開道スル』モノナルガ故ニ、之ヲ施シテソノ効ヲ得ンニハ『其臟腑ト經絡トヲ詳ニシテ、以テ邪氣ノ伏スル所ヲ洞見シ、兪穴ヲ取リテ其肯綮ニ中タルコトヲ要ス』ト説ク。經絡兪穴ノ説ハ實ニ多岐ナリト雖モ、之ヲ要スルニ、病原ノ起ルトコロハ臟腑ニ本ヅキ、臟腑ノ脉ハ并ビニ手足ニ出デ、腹背ニ循環シ、全身到ラザルトコロナシ、ソノ經脉

ノ出ヅル所・流ルル所・注グ所・過グル所・行ク所・入ル所ノ諸點ヲ名ヅケテ孔穴（俞穴）ト曰ヒ、鍼ハスベテコ
ノ部ヲ選ビテ施ス、故ニ俞穴ノ部位ヲ知り、孔穴ノ主治ヲ詳ニスルコトハ鍼科ノ主要トスルトコロナリ。

更ニ稍々詳カニ經絡ノ說ヲ示サンニ、人身ニハ心・肝・肺・脾・腎ノ五臟アリ、（之ニ膻中ヲ加ヘテ六臟トス）小
腸・胆・膀胱・大腸・胃・三焦ノ六腑アリ、ソノ臟ト腑トハ十二經ニ連ナル、十二經ハ氣血ノ貫周スルトコロノ道
ナリ、氣ハ陽ニシテ脉外ニアリ、晝ハ諸陽ノ脉ニ行キ、夜ハ諸陰ノ脉ニ行ク、血ハ陰ニシテ脉中ヲ流レ、晝夜ニ陰
陽ノ經ヲ別タズ、臟腑ノ表裏ヲ以テ十二經ヲ貫周ス、十二經トハ手太陰（肺經）・手陽明（大腸經）・足陽明（胃經）・
足太陰（脾經）・手少陰（心經）・手太陽（小腸經）・足太陽（膀胱經）・足少陰（腎經）・手厥陰（心包經）・手少陽
（三焦經）・足少陽（膽經）・足厥陰（肝經）ニシテ、循環ノ次序ハ手太陰肺經ニ始マリ、上記ノ順序ヲ經テ遂ニ足
厥陰肝經ニ注ギ、一周スルトキハ則チ又故ノ肢經ニ傳注シテ環ノ端ナキガ如シ（別ニ任脉・督脉ノ二奇脉ヲ加ヘテ
十四經トス）。而シテ經絡ノ行クトコロ必ズ孔穴ト繫ル、今各經ニ繫ルトコロノ孔穴ヲ擧グルトキハ左ノ如シ。

手太陰肺經左右二十二穴

中府 雲門 天府 俠白 尺澤 孔最 列缺 經渠 太淵 魚際 少商

手陽明大腸經左右四十六穴

商陽 二間 三間 合谷 陽谿 偏歷 溫溜 下廉 上廉 三里 曲池 肘髎 五里 臂臑 肩髃 巨骨 天
鼎 扶突 禾髎 迎香

足太陰脾經左右四十二穴

隱白 大都 太白 公孫 商丘 三陰交 漏谷 地機 陰陵泉 血海 箕門 衝門 府舍 腹結 大橫 腹哀
食竇 天雞 胃鄉 周榮 大包

足陽明胃經左右九十六穴

承泣 四白 巨髎 地倉 大迎 頰車 下關 頭維 人迎 水突 氣舍 缺盆 氣戶 庫房 屋翳 膺窓 乳
中 乳根 不容 承滿 梁門 關門 太乙 滑肉門 天樞 外陵 大巨 水道 歸來 氣衝 髀關 伏兔 陰
市 梁丘 犢鼻 三里 上巨虛 條口 下巨虛 豐隆 解谿 衝陽 陷谷 內庭 厲兌

手少陰心經左右十八穴

極泉 青靈 少海 靈道 通里 陰郄 神門 少府 少衝
手太陽小腸經左右三十八穴

少澤 前谷 後谿 腕骨 陽谷 養老 支正 小海 肩貞 臑俞 天宗 秉風 曲垣 肩外 肩中 天窻 天
容 觀膠 聽宮

手厥陰心包絡經左右十八穴

天池 天泉 曲澤 郄門 間使 內關 大陵 勞宮 中衝
手少陽三焦經左右四十六穴

關衝 液門 中渚 陽池 外關 支溝 會宗 三陽絡 四瀆 天井 清冷淵 消灤 臑會 肩髎 天膠 天牖
翳風 瘰脉 顛息 角孫 耳門 和髎 絲竹空

足厥陰肝經左右二十八穴

大敦 行間 太衝 中封 蠡溝 中都 膝關 曲泉 陰包 五里 陰廉 急脉 章門 期門
足少陽膽經左右八十六穴

瞳子膠 聽會 客主人 頤厭 懸顛 懸釐 曲鬢 率谷 天衝 浮白 竅陰 完骨 本神 陽白 臨泣 目窻
正營 承靈 腦空 風池 肩井 淵腋 輒筋 日月 京門 帶脈 五樞 維道 居髎 環跳 中瀆 陽關 陽

陵泉 陽交 外丘 光明 陽輔 懸鍾 丘墟 臨泣 地五會 俠谿 竅陰

足少陰腎經左右五十四穴

涌泉 然谷 照海 太谿 水泉 大鍾 復溜 交信 築賓 陰谷 橫骨 大赫 氣穴 四滿 中注 盲俞 商
曲 石關 陰都 通谷 幽門 步廊 神封 靈墟 神藏 或中 俞府

足太陽膀胱經左右百二十六穴

睛明 攢竹 曲差 五處 承光 通天 絡却 玉枕 天柱 大杼 風門 肺俞 厥陰 心俞 膈俞 肝俞 膽
俞 脾俞 胃俞 三焦 腎俞 大腸 小腸 膀胱 中膞 白環 上膠 次膠 中膠 下膠 會陽 附分 魄戶
膏肓 神堂 譙謔 膈關 魂門 陽綱 意舍 胃倉 盲門 志室 胞肓 秩邊 承扶 殷門 浮郄 委陽 委
中 合陽 承筋 承山 飛陽 附陽 崑崙 僕參 申脉 金門 京骨 束骨 通谷 至陰

督脈二十八穴

長強 腰俞 陽關 命門 懸樞 脊中 中樞 筋縮 至陽 靈臺 神道 身柱 陶道 大椎 瘕門 風府 腦
戶 強間 後頂 百會 前頂 顙會 上星 神庭 素膠 水溝 兌端 斷交

任脉四十四穴

會陰 曲骨 中極 關元 石門 氣海 陰交 神闕 水分 下脘 建里 中脘 上脘 巨闕 鳩尾 中庭 臈
中 玉堂 紫宮 華蓋 璇璣 天突 廉泉 承漿

コノ如ク、人身ノ十二經ニ、各經ニ五穴アリ、之ヲ井・榮・俞・經・合ト言フ、ソノ井ハ出ヅル所・榮ハ溜マル
所・俞ハ注グ所・經ハ行グル所・合ハ入ル所ナリ。人身ノ孔穴三百六十五ノ中ニテ、コノ六十六穴ヲ以テ鍼ノ要穴ト
ナス。腑ノ病ニハ各經ニ依リテソノ經ノ俞ヲ刺シ、臟ノ病ニハ各經ニ依テソノ經ノ合ヲ刺ス、俞十二・合十二、合
セテ二十四穴ヲ、六十六穴ニ併ビテ要穴トス。

禁・鍼ノ穴ハ、腦戶・顙會・神庭・神道・靈臺・承靈・絡却・玉枕・顙顙・角孫・承泣・臈中・鳩尾・水分・神闕・
會陰・橫骨・氣衝・箕門・承筋・三陽絡・五里・青靈・雲門・缺盆・肩井ノ二十六穴、及ビ妊婦ニハ合谷・三陰交・
石門ノ三穴ニシテ、コノ二十九穴ニハ鍼ヲ刺スコトヲ禁ゼリ。

補瀉迎隨

鍼科ニ補瀉迎隨ノ論アリ。補トハ氣ノ不足ヲ補ヒ、瀉トハ氣ノ有餘ヲ瀉スヲ言フ。氣不足ナレバ瘠ヲナシ、不仁
ヲナス、不足ヲ刺シテ病ヲ除クトキハ元氣道ヲ得テ順グルナリ。氣有餘ナレバ腫ヲナシ、痛ヲナス、有餘ヲ刺シテ
實邪ヲ瀉スレバ腫痛治ス。又氣ノ盛ナラントストキハ、迎テ刺シテ氣ノ實ヲ抜ク、即チ瀉ナリ。宣ビザル氣ヲ行
ラシ、未ダ復ラザル脈ヲ移シテ、コレヲ濟フハ虛氣ヲ扶助スルニテ、即チ補ナリ。之ヲ迎隨ト曰フ。例之、足ノ三
陽經、頭ヨリ足ニ至ルマデ病メルモノノ指ヲ以テ、經脈ヲ摩リ上ボセテ鍼鉞ヲ上ニ向ケテ、經脈ノ進ムニ逆フテコ
レヲ刺シテソノ實ヲ抜ク、コレ迎ヘテ奪フノ義ナリ、又病者ノ指ヲ以テ經脈ヲ摩リ下シテ鍼鉞ヲ下ヘ向ケテ經脈ノ
退クニ隨テコレヲ刺シテソノ虛氣ヲ濟フ、コレ隨テ濟フノ義ナリ。之ヲ要スルニ鍼ハ實ヲ奪ヒ、虛ヲ補ヒテ、以テ
經脈ヲ調フルコトヲ目的トスルナリ。^⑱

鍼ノ手法

古昔ハ九鍼ノ法アリタレドモ（第七八頁參照）、コノ期ニ專ラ行ハレタルハ、（1）撚鍼・（2）打鍼・（3）管鍼

ヒネリハリ

ウチハリ

クダハリ

ノ三法ナリ。

撚鍼ハ、毫針ヲ用フ。鍼スベキ穴ヲ左拇指ニテ捫ミ、中指大指ヲ合せて穴上ニ置キ、鍼ヲ以テ穴ニ當テ、左中指ニテ鍼口ヲ押サヘ、食指大指ヲ上ニシテ、鍼ノ中ヲ持チ、右ノ食指大指ヲ以テ輕ク鍼ヲ撚リ下ス。鍼ヲ抜クニハ、先ツ少シク出ダシ、持チ直ホシテ引き出シ、中指ニテ鍼ノ口ヲ推シ揉ム。肥エタル人ニハ刺スコト深く、瘦セタル人ニハ刺スコト淺クス。大人ニハ鍼ノ大ナルヲ用ヒ、小人ニハ針ノ小ナルヲ用フ。鍼ニハ銀鐵ノ類ヲ用ヒテ造レルモノアリト雖モ、金鍼ヲ以テ最モ上乘ノモノトス。

打鍼ハ御菌意齋ガ創ムルトコロナリ(第二四六頁以下参照)。先ツ左ノ中指ヲ食指ノ後ニ重ネテ、鍼スベキ部位ニ置キ、鍼ヲ左中指ト食指トノ間ニ插ミ、鍼鋒ノ肌膚ニツカヌホドニシテ、皮ヲ切ルニ痛マザルヤウニ打ツナリ、針入ルコト一分斗ニシテ槌ニ手應^{テウタヘ}アリ、鍼腰ヨリ二三分ニ至ル、深く刺スベカラズ。打テ榮衛ヲ循ラシ、推シテ肉ノ内ニ徹シ、而シテ撚ネリテ補瀉迎隨ヲ行ヒ、鍼ヲ出シテ後ニ鍼口ヲ閉ヅベシ。打鍼ハ主ニ腹部ニノミ用ヒ、又孔^クニ拘ラズシテ病ノ所在ヲ刺ス。

管鍼ハ杉山和一ガ創メテ用ヒタルトコロナリ。左ノ手ニテ管ヲ穴所ノ上ニ當テ、鍼ヲ管ニ入レテ、右ノ食指ヲ中指ノ後ニ重サネテ、食指掌ニテ、鍼ノ軸ノ管ヨリ出タル分ヲ彈キ下ス。而シテ管ノ持チヤウハ、左ノ大指ト、食指トニテ、中ヲ持チ、肉ヲ中指ニテ押サヘ、鍼ヲ彈キ下シテ管ヲ抜キ去リ、右ノ食指大指ニテ撚リ下スヲ法則トス。

コノ如ク、當時專ラ行ハレタルハ撚鍼・打鍼・管鍼ノ三法ナリシガ、ソノ撚鍼ハ内經ニ出デ、支那傳來ノ術ナレドモ、打鍼ノ法ハ前期ニ於テ御菌意齋ガ創始シ管鍼ノ法ハコノ期ニ於テ杉山和一ガ發明セルモノニシテ、共ニ支那ノ術ヲ傳ヘタルニアラズ。サレバ元來支那ヨリ入りタル鍼術ガ、我が邦醫家ノ研究ニヨリテ、著甚ナル進歩ヲ致セリトナスモ不可ナカルベシ。

灸法ノ功能ハ右ニ述ベタル鍼術ニ於ケルト相同ジトス。然レドモ鍼ノ功ハ瀉ニ勝チ、補ニ少ナク、而シテ補益ノ功ハ灸治ヲ以テ鍼ニ優サレリトス。又鍼灸各主ドルトコロノ位アリテ、大抵腹ハ鍼ノ位ニシテ、背ハ灸ノ位トス、コレ腹ハ皮肉厚クシテ且ツ臟腑ニ遠キヲ以テ鍼治ノ主ドリトシ、背ハ皮肉厚カラズシテ且ツ臟腑ニ近キヲ以テ灸治ノ主ドリトスルナリ。

灸治ニハ鍼ニ淺深所宜ノ度アルガ如ク、壯數・大小ノ法度アリ。又禁灸ノ穴アリテ灸ヲ施スベカラザル部位ヲ定ム。

之ヲ要スルニ、『凡ソ諸病ノ起ルハ皆氣血ノ壅滯シテ宣通スルコトヲ得ザルニ因ル、故ニ鍼シテ以テ之ヲ開導シ、灸シテ以テ之ヲ溫暖スベシ』ト説キ、鍼ト灸ト、ソノ功能ニ於テ互ニ勝負アルコトナシト論ゼルナリ。

本草科

本草ノ學ハ元ト藥物ノ名稱ヲ正シ、眞假ヲ辨ジ、ソノ功能ヲ研究シ、良毒ヲ分別シ以テ資用ノ方ヲ察スルヲ主トシ、醫學ノ一部分ナリ。故ニ我が邦古昔、地ニ藥園ノ設アリ、職ニ採藥ノ使アリ、コノ學頗ブル盛ニシテ、醫學ノ要部ヲナセシガ、中世戰亂ノ餘、百度頽廢シテ從テ斯科亦衰ヘタリ。織・豐二氏天下ヲ統一スルニ及ビテ、學問技藝漸ク興リ、本草ノ學モ醫家ノ注意スルトコロトナリシガ、當時ノ本草學ハ猶古昔ノ本草ノ如ク、藥品ノ性味能毒ヲ分別シ、且飲膳食治ヲ論ズルヲ主トシ、今日ノ藥物學ニ比スベキモノナリキ。然ルニ徳川氏興リ、文物開クルニ及ビ、殊ニ慶長十一年林道春ノ長崎ヨリ李時珍ノ本草綱目ヲ携ヘ歸リテ之ヲ幕府ニ獻ズルアリ、寛永十五年幕府ノ

新二江戸ノ南北兩所（品川・牛込）ニ藥園ヲ設クルアリ、本草ノ學ハコレヨリシテ益々盛ナルヲ致シ、而シテソノ範圍ハ漸ク擴張セラレ、藥物ノ外、汎ク動植物ノ名稱・効用・來歴等ヲ講究シ、專ラ物産ヲ辨知スルヲ以テ目的トスルニ至レリ、是ニ於テカ本草學ハ博物學ノ一種ニ屬シ、直チニコレヲ藥物ノ學トスルコト能ハズ、而カモソノ博物學タルガ故ニ、當時醫家ノ先ヅ之ヲ修ムルヲ要セシナリ。

本草學ガ、藥物學ノ範圍ヲ離レテ、博物學ノ列ニ入りシハ、本道ノ醫學ニ於テ運氣論盛ニ行ハレ、ソノ極天人合一ノ說ヲ唱道シタル時代ニシテ、コノ時代ニアリテハ醫タラント欲スルモノハ、上天文ヲ知り、下地理ヲ知り、中人事ヲ知ラザルベカラズ、コノ三ノモノ共ニ明カニシテ、然シテ後、以テ人ノ疾病ヲ語ルベシ、故ニ醫ノ理ヲ窮メ、醫ノ術ヲ精フセント欲セバ博ク學ビテ三才ノ事理ニ通ゼザルベカラズト説クモノアリ、乃チ從來藥品ノ氣味能毒ヲ研究スルニ止マリシトコロノ本草學ハ、ソノ研究ノ範圍ヲ擴メ、寛永八年ニハ林道春ノ多識篇現ハレ、慶安六年ニハ源順ノ和名類聚鈔、板本刻成リ、寛文六年ニハ中村惕齋ノ、訓蒙圖彙ヲ著ハスアリ、新井白石ノ詩經名物圖・東雅、貝原益軒ノ日本釋名、寺島良安ノ和漢三才圖會等ノ諸書次デ現ハレテ、動植物ノ名義ヲ考證セルアリ、向井元升ノ庖厨備要大和本草ヲ著ハシ、平野必大ノ本朝食鑑ヲ撰ミ、館林了菴等ノ食物摘要ヲ著ハスアリテ、飲膳食治ノコトモ亦研究セラレシガ、ソノ說ハ概ネ支那ノ書、殊ニ李時珍ノ本草綱目ニ依リタリ。而シテ彼我ヲ對照シ、親シク物産ヲ研究シテ、我が邦本草ノ基ヲ開キシハ、貝原益軒ノ大和本草（寶永六年）ニ始マル。

貝原篤信、字ハ子誠、通稱久兵衛、益軒ト號ス、又損軒ト號ス、寛永庚午年十一月十四日ヲ以テ筑前・福岡ノ城内ニ生ル、ソノ先ハ備中ノ人、祖父某豐州ニ來リ、黒田侯ニ仕フ、筑前ニ來リシヨリ世々家臣トナル、父利貞、寛齋ト號ス、軒岐家ノ言ニ通ズ、緒方氏ノ女ヲ娶テ益軒兄弟ヲ生ム、益軒幼ヨリ警敏殊質アリ、九歳兄存齋ニ就テ書ヲ讀ミ、多ク暗誦ヲナス、中年ニ及デ京ニ入テ講學ス、是時都下ノ名彦、胥心ヲ傾テ之ニ下ル、遂ニ博見篤學ヲ以テ名海内ニ重シ、太宰春臺儒林ニ於テ最モ許可スルコト鮮シ、ソノ益軒ニ於ケル嘗テ稱説シテ曰ク、博學洽聞海内比ナシト、益軒年十九歳、武州・河崎宿ニテ祝髮シ、柔齋ト號シ、醫トナラントス後、寛文八年、三十九歳束髮シテ久兵衛ト言フ、初メ陸・王二氏ノ說ヲ喜ビシガ、後朱學ニ歸ス、心術後世ニ裨補アランコトヲ欲シ、毫モ名利ニ馳セズ、故ニソノ著ストコロ百有餘種、多クハ書スルニ國字ヲ以テシ、語極テ懇切、田夫隸卒皆ナ之ヲ便トス。ソノ識見人ノ及バザルトコロナリ、元祿庚辰益軒七十一、老ヲ告テ仕ヲ致ス、猶月俸ヲ賜テソノ老ヲ優ス、正徳甲午八月二十七日ヲ以テ病デ家ニ卒ス、享年八十五、荒津金籠寺ニ葬ル、益軒著ハストコロ大和本草ノ他、菜膳・日本釋名・花譜・本草綱目和名目錄、等ノ本草書アリ。（先哲像傳・鹿門隨筆・日本醫譜・先哲叢談）

我が邦本草ノ學ハコノ如クニシテ漸次盛ナルヲ致シ、稻生宜義、加賀ニアリテ庶物類纂一千卷ヲ著ハシ、庶物ヲ舉ゲテ詳カニソノ氣性ヲ論ズルニイタリテ、コノ學ハ遂ニ大成シタリ。

稻生宜義、字ハ彰信、若水ト號ス、父ヲ恒軒ト曰フ、大阪ノ人、本性波々伯部氏、出デテ外祖母ノ家ヲ嗣ギ、稻生氏ヲ冒ス、醫ヲ古林見宜ニ學ビ、時ニ名アリ、宜義父ノ後ヲ承ケテ醫ヲ業トシ、福山徳潤ニ就テ本草ノ學ヲ修ム、徳潤ハ長崎ノ人ソノ學ヲ同邑ノ人、盧草碩ニ受ク、盧草碩名ハ玄琢、世醫ノ本草ニ通ゼザルヲ患ヒ、深ク意ヲ此ニ注ギ藥性集要ヲ著ハス。福山徳潤從フテ之ヲ學ビ、乃チソノ傳ヲ得、大阪ニ移リテ專ラソノ學ヲ唱へ、名當代ニ著ハル、宜義從テ之ニ學ビ、博學強記ニシテ、最モ鑑別ニ長シ、遂ニソノ得ルトコロニヨリテ庶物類纂一千卷ヲ著ハス、引證宏博・精細曲盡、前古比ナシト稱セラル、宜義初メ江戸ニアリ後加州侯ノ聘ニ應ジ祿三百石ヲ賜ハル、正徳五年七月歿ス。著ハストコロ庶物類纂ノ他ニ結髦居別集・炮炙全書・採藥獨斷・食物傳言纂・食物本草・新校正本草綱目・本草圖彙、等アリ。（先民傳・日本醫譜・新校正本草綱目序）

藥物科

コノ期以前ノ本草科ト稱スルモノアリテハ、藥品ノ性味能毒ヲ識別シ、且ツ飲膳食治ヲ研究スルヲ主トセシヲ以テ、本草學ハ即チ藥物學ナリト言フコトヲ得シガ、コノ期ニ至リテ斯學ハ漸クソノ領域ヲ擴大シ進デ博物學ノ列ニ入りシヨリ、醫學ト大關係ナキモノ多ク、藥物科ハ遂ニ本草科ヨリ別タザルベカラザルニイタレリ。

コノ期ノ著書ニシテ藥性及ビ修治ノコトヲ論述セルモノハ曲直瀨玄朔ノ藥性能毒・異名製劑記ヲ始トシ、岡本玄治ノ家傳預藥集、岡本一抱ノ藥性記辨解、田中三朴ノ增補藥性能毒、久米田仙庵ノ煑藥指南、等アリ。今コレ等ノ著述ニ依リテ、當時ノ藥物學ノ梗槩ヲ示セバ

藥性氣味陰陽 藥品ニ溫・涼・寒・熱ノ氣アリ。甘・辛・苦・酸・鹹ノ味アリ。浮沈升降ノ差アリ。陰陽厚薄ノ別アリ。而シテ天ニ四季・八節・五運六氣ノ異アリ、病ニ外感・內傷七情アリ。能ク天地ノ氣運ト病症ノ虛實トヲ察シ、藥能ノ的否ヲ定メ、以テ治療ヲ施スコトヲ要ス。

六陳八新 藥品ニ陳キモノヲ用ヒテ効アルモノ六種アリ、新シキモノニアラザレバ効ナキモノ八種アリ。前者ハ吳茱萸・橘皮・狼毒・半夏・枳實・麻黃ニシテ、之ヲ六陳ト曰ヒ、後者ハ紫蘇・薄荷・菊花・桃花・赤小豆・澤蘭・槐花・欵冬花ニシテ、之ヲ八新ト曰フ。

引經報使 十二經引經報使ノ説アリ、コレ某藥ハ某經ヘ引キ行ク使ノ藥ナリト言フ義ニテ、ソノ藥ハ獨リ某經ニ入ル、例之、黃連ハ獨リ手少陰・心經ニ入ルノ藥ニシテ、柴胡ハ手少陽三焦經ニ入ルノ藥ナリト言フガ如ク、補瀉・溫涼共ニ十二經ニ特有ノ作用アルコトヲ唱道セルナリ。コノ如キ引經報使ノ説ハ李・朱醫方ノ主張セシトコロニシテ曲直瀨道三以來、コノ説ハ我が邦ニテモ專ラ行ハレタリ。

相惡相反 藥ノ性ニ互ニ相惡ムモノト相反スルモノトアリ、相惡ムモノハ或ハ用ヒテ配合スルモ可ナリ、相反スルモノヲ配合スルコトハ害アリ、必ズ大ニ忌ムベシ。

湯散丸 內用スベキ藥劑ニ湯・散・丸ノ別アリ、湯ハ蕩ナリ、久病ヲ去ルニ之ヲ用フ、散ハ散ナリ、急病ヲ去ルニ之ヲ用ユ、丸ハ緩ナリ、緩病ニ之ニ用ユ。ソノ湯藥ハ胸ヨリ上ノ病ヲ治スルニハ酒ヲ加ヘテ製シ、濕ヲ去ルニハ、生姜ヲ加ヘ、元氣ヲ補フニハ大棗ヲ入ル、風寒ヲ發散スルニハ葱白ヲ入レ、膈上ノ病及ビ臟腑ノ病ヲ去ルノミ、ソノ氣味厚キモノハ白湯ニテ調ヘ服シ、氣味薄キモノハ水ニテ用フ。丸藥ハ下部ノ藥ヲ治スルニハソノ丸極メテ大ニ且ソノ形ヲ圓クス、中焦ヲ治スルモノハ之ニ次グ、上焦ヲ治スルモノハ極メテ小ニス、ソノ稠糊ニテ丸スルモノハ遅ク化シテ下焦ニ至ル、稀糊ニテ丸スルモノハ化シ易ク、糊ニ醋、若クハ酒ヲウテバ堅キヲ軟ラゲ、聚マルヲ散ス、蠟ニテ丸スレバ靜カニ藥ヲ旋ラシ、化シ難クシテ藥毒、更ニ脾胃ヲ傷ハズ、煉蜜ニテ丸ズレバ藥ガ遲化シテ經絡ニ行グルナリ。

修治ノ法 藥ヲ製スルニハ、火製ニ四アリ煨・炮・炙・炒、コレナリ、水製ニ三アリ漬・泡・洗、コレナリ、

水火共ニ用フルハ、蒸・煑コレナリ。

醫史學

寛文三年黒川道祐、本朝醫考三卷ヲ著ハシ、本邦醫家ノ出處・術業及ビ叙位・産藥等ノコトヲ記述シタリ。固ヨリ之ヲ現今ノ意義ニテ言フトコロノ醫史ト同視スベキニアラズト雖モ、國史舊記ヲ詮索シ、演史小説ヲ涉獵シ、略ボ醫家ノ出處術業ヲ抄シ、以テ我ガ醫學ノ沿革ヲ示セルコトハ醫史ニ屬スルモノ多トスベシ。西洋ニテ醫史學ノ研究ニ手ヲ着ケシハ十八世紀ノ頃ナルニ、我ガ邦ニアリテハ十七世紀ノ頃（寛文三年ハ西曆千六百六十三年ニ當ル）既ニ心ヲコノ點ニ用ヒタルモノアリシハ特記スベキコトナリ。

黒川道祐、名ハ玄逸、靜庵、梅庵又遠碧軒ト號ス。父名ハ光信、林羅山ニ從テ經學ヲ修メ、堀正意ニ從フテ醫術ヲ學ビ、醫ヲ以テ藝州侯ニ仕ヘ、ソノ業大ニ鳴ル、著ハストコロ本朝醫考ノ他ニ、雍州府志・日並紀事・遠碧軒隨筆・本草辨疑、等數種アリ、元祿四年十一月病デ歿ス。墓ハ京都本隆寺中宿坊本法院ニ在リ。（日本醫人譜・羅山文集・日本醫譜）

醫師 27

醫師ハ古ヨリ方外ノ徒トセラレ、醫陰兩道（醫師・陰陽師）ト併ビ稱セラレタリ。コノ期ニアリテモ元和武家法度乘輿免許ノ條ニ、醫陰兩道ハ乘輿ヲ許スノ文アリ、寛文法令制定ノ議ニ際シ、林春齋ノ發言ニヨリテ之ヲ儒醫兩道ト改メントセシガ、ソノ時保科肥後守ノ言ニ『醫陰と云へば醫者上に在りと雖も陰と并ぶ事を耻づ、若し儒醫と改められなば、儒の下にありても并べ稱せらるゝこと醫も榮なりとして喜ぶべし』トアリシガ、水戸參議ノ說ニ『儒は讀書のものに限るべからず、我輩の如きも儒者なり、何ぞ醫と併べて兩道といふべき、若し儒醫兩道となりては末代の嘲たるべし』トアリシニテ、儒醫兩道ト併ビ稱スルコトハ已ミタリ、然ルニコレヨリ十餘年後ノ天和令條ニハ、儒醫諸出家トアリ、正徳令條ニハ、醫師僧家トアリテ儒ヲ除キタリ、之ニ依リテ醫師ハ當時方外ノ徒トシテ士流ニ列セラレズ、ソノ地位ハ僧侶・陰陽師、或ハ儒者ノ間ニアリテ輕ク視ラレタルコトヲ知ルベシ。

朝廷醫官

朝廷ノ醫官ハ宮内省ニ屬シ、典藥頭・醫博士・針醫博士・侍醫・醫師等アリ、大體大寶ノ令ニ異ナラズ。正徳二年刊行ノ和漢三才圖會ニ『按、侍醫、典藥之中、俗云ニ御匙醫サシイ、而常診ニ天脈、如不豫時献レ藥者也、近代諸醫、大抵剃レ髮以ニ僧官位、大僧都、法印、法眼、法橋等也、賜ニ院號、爲ニ規模』ト見エタリ。

幕府醫員

徳川氏初世ノ頃、幕府ノ醫員ハ裏ト表ト二別レ、奥ニハ奥醫師、奥詰醫師アリ、表ニハ御番醫師・寄合醫師・小普請醫師アリ。奥醫師ハ將軍ノ診候醫藥ヲ掌ドルモノニシテ法眼若シクハ法印ニ叙セラル、世襲ノ家ノミナラズ、伎術ニ精シキヲ以テ藩醫・町醫ヨリ拔擢セラルルモノアリ。御番醫師ハ一人ツツ宿直シ、營中不時ノ治療ニ備フルモノニシテ皆ナ法眼ニ叙セラル。寄合醫師ハ登城日ニノミ出仕ス。又新ニ拔擢セラルルモノハ先ヅ拜謁ヲ許サルルヲ例トシ、之ヲ御目見醫師ト言フ。醫員幼年、又ハ修業中ニシテ家ヲ繼グトキハ寄合醫師トナシ世祿ヲ減ジ、成業ノ上元高ヲ與フ。別ニ兩典藥頭（半井・今大路）アリ、ソノ始京都ヨリ聘セルモノニシテ醫師ノ觸頭ナリ、兩家ヨリ交番ニ正月屠蘇ヲ禁闕ニ献ズルヲ例トス。

幕府醫員ノ科ハ本道ト雜科トニ分レ、雜科ニハ外科・針科・口科・眼科・小兒科ノ差別アリ。

民間醫師

延寶六年、草刈三越ガ撰述セル醫教正意ニ醫術ノ科ヲ分ツコトヲ論ゼル條ニ、大方脈科（大人通治之醫術）・小方脈科（俗稱小兒醫者）・婦人胎產科（俗稱產後醫者）・鍼灸科（俗稱針立）・眼科（俗稱目醫者）・咽喉口齒科（俗稱齒醫師）・瘍瘡科（外科）・正骨科（俗稱骨接）・金鏃科（俗稱金瘡）・養生科（按摩導引之類）ノ諸科ヲ舉ゲタリ、之ヲ元祿年間刊行ノ人倫訓蒙圖會卷ニ、能藝部ニ醫師・針師・目醫師・按摩・小兒醫師・齒醫師・外科・金瘡ノ八科ヲ併ベ舉ゲ（挿圖參照）タルニ比較スルニ、彼ニ骨接ヲ加ヘ此ニ產後醫者ヲ脱シタル他ハ兩書記スルトコロ互ニ相一致スルヲ見ル。然レドモコノ時ニアリテ、眞ニ専門ノ一科目タリシハ、内科・外科・鍼科ノ三科ニ止マリ、他ノ小兒科・眼科・婦人科ノ如キハ或ハ本道ノ之ヲ兼ネ施セシモノ多カリシナラン。和漢三才圖會ニ『按今用三服藥一、内治者、稱ニ之本道一、用ニ貼膏一外治者、稱ニ之外科一、刺レ鍼治者、稱ニ之針立一、三家以別レ業』トアルニテ之ヲ推知スベシ。

醫者剃髮

當時ノ醫師ハ剃髮シテ僧形ヲナシ、十徳ヲ着スルヲ例トセリ。物徂徠ノ南留別志ニ『儒者の頭剃りしは惶窩より始まりて、僅に六七十年の間なり、元祿の頃より皆むかしにかへりたれば、今の人は儒者の頭、剃りしを知らぬ人多し、醫者の頭剃るもかゝるためしなるべし』ト言ヒ、元文元年ニ渡會常芬ガ著ハセル古今醫苦知ニ『今の醫者月額を剃り、十徳を着するは季世の風俗なり、古代を知らぬものは今日の形も古代と同じきことなりと覺ゆるは文盲なる事なり』ト言ヒ、又天和三年貝原好古ガ撰ビタル大和事始ニハ『醫者の髪を剃ること其始を知らず、薩戒記に永享五年九月二十日、法皇御惱危急、醫師員能法眼祇候すとあり。これを以て見れば、此時すでに剃髮して、僧位に進むことありしなり。和氣雅忠剃髮して武家の醫に准すと、和氣系圖にあり。これによりて考見るに、むかしは武家の醫師多くは僧のなせしを、雅忠始て武家の醫に准て剃髮し、僧位にすゝみければ、是醫者の僧位に進む始ならん、雅忠は足利家の末世の人ならん』ト記シタリ。固ヨリ是ヨリ先キ既ニ僧徒ノ醫ヲ兼ネタルモノアリタレバ、足利氏以前ニ剃髮ノ醫師ナシトハ言フベカラズ^⑨。然レドモ醫師ガ皆ナ入道シテ髮ヲ剃リ、僧官ヲ拜スルニイタリシハ、室町時代以後ノコトナルベク、既ニ入道シタル者ノ姓氏ヲ名乗ルコトハ無キコトナレバ、江戸時代初世ノ頃マデハ醫師ノ苗字ヲ除キタルナリ。

中期（徳川氏中世）紀

政治上ニハ八代將軍徳川吉宗ノ如キ英邁ノ人物出デテ大ニ紀綱ヲ張ルアリ。漢學ニハ前期ニ興リタル伊藤仁齋ノ復古學ニ嗣ギテ、荻生徂徠ノ古文辭學マスマス盛大ナルヲ致シ、伊藤東涯・太宰春臺・服部南郭・山縣周南等ノ碩儒輩出シ、斯學ハ極盛ノ點ニ達シタリ。和學ニハ賀茂眞淵アリ。西洋學ニハ青木昆陽アリ。諸般ノ學藝ハ蔚然トシテ勃興シ、我ガ醫學モソノ影響ヲ受ケテ、ソノ面目ヲ一新セルモノアリキ。

古醫方

名古屋玄醫創メテ醫方復古ノ說ヲ唱ヘ、門人芳村恂益・飯田棟隆、諸家嗣デ興リテソノ說ヲ主張シ共ニ世ニ名ア

リト雖モ、尙ホ未ダ全ク金・元醫學ノ陋習ヲ脱スルコト能ハズ、ソノ論說ハ草創ノ際、後人ノタメニソノ地ヲナシタルニ過ギズ、後藤良山崛起シテ宋・明醫流ノ空論ヲ排シ、專ラ内經及ビ傷寒論ヲ師宗トシ、實詣ニヨリテ、自カラ一家ノ言ヲ立テ、ソノ識見理療大ニ先輩ニ超絶スルモノアリシヨリ、四方ノ豪傑皆ナソノ風ヲ聞テ興起シ、遂ニ古醫方ノ說ハ天下ヲ風靡スルニイタレリ。故ニ、名古屋玄醫ハ之ヲ李・朱學派ノ田代三喜ニ比スベク、後藤良山ハ即チ古醫方ノ曲直瀨道三タルベキモノナリ。

後藤良山、名ハ達、字ハ有成、俗稱左一郎、一ニ養庵ト號ス、曾祖名ハ光有、關白豐臣公ニ仕フ、病アリテ丹州・小野中村ニ退居シ、貧困支ルコト能ハズシテ遂ニ京都ニ遷リ、姓ヲ易ヘテ藤中ト稱ス。祖名ハ正次、老テ宗貞ト稱ス、人トナリ簡素仕ヘズシテ身ヲ終フ。父名ハ光長老テ定理又默翁ト號ス、光長少時遷テ江戸ニ居リ、家道頗ル優。妣梅原氏名ハ龜、萬治二年己亥七月二十三日良山ヲ常磐橋邊ノ僑居ニ生ム。良山幼ニシテ聰明、既ニ長ジテ學ヲ好ミ林祭酒ノ門ニ遊ビ、專ラ經義ヲ治ム。又暇アレバ則チ牧村ト壽ニ從ヒ、方書ヲ讀ミ、治法ヲ問フ、始メテソノ古今醫學ノ眞ニアラザルヲ疑フ。性至孝ニシテ父母ニ仕フル必ズ忻歡ヲ盡ス、ソノ爲サント欲スルコロハ奉承欽服、未ダ曾テ意ノ如クセザルハナシ。是ノ時江戸頻年火災アリ、父光長住ム所、十一年間ニ七タビ燬ケ、家財盡盡ス。光長日ク周章疲奔、心暫安ナシ、ソノ家道ヲ興復シ、進テ富貴ヲ取ランヨリハ西京師ニ移リ、貧ニ安シテ以テ身ヲ終ルニ如カズト。良山乃チ父母ヲ奉ジ京師ニ來リ相國寺ノ西、室町ニ僦居シ、ソノ職志ヲ養ヒ、未ダ曾テ匱乏ヲ知ラシメズ、時二年二十七。

良山慨然トシテ歎ジテ曰ク、我レ儒タランカ、伊藤仁齋ニ上タリ難シ、我レ僧タランカ、隱元ニ兄タリ難シ、已ムナクンバ則チ醫乎、豪傑ノ士ノ先鞭ヲ著クルモノアルナシト。乃チ親舊ニ謀リ、錢一貫文ヲ贖トシテ、謁ヲ名古屋玄醫ニ執ル、玄醫ソノ贖ノ薄クシテ家規ニ合ハザルヲ以テ見エズ、良山憤懣膺ニ填ツ、將ニ門ヲ出デントス、罵テ曰ク、玄醫鼠輩人ヲ知ラズト。乃チ自ラ奮テ勤勉シ、醫ヲ以テ業トナシ、名ヲ更メテ養達ト稱ス。藥ヲ施シ、患ヲ拯ヒ、親切懇厚、貧賤ヲ賑卹シ遠勞ヲ憚ラズ、二十年ノ間術盛ニ行ハレ、名聲籍甚海内仰ギ慕フ。凡ソ痼疾異病、衆醫ノ愈ス能ハザルコロノモノ、遠近昇載診ヲ請ヒ治ヲ求ムルモノ常ニソノ門ニ滿ツ。弟子凡二百人、各材ヲ成シ、業ヲ傳フ、稱シテ古醫道ノ泰斗トナス。是レヨリ先キ、醫人概ネ皆ナ髮ヲ剃リ、僧衣ヲ着ケ、僧官ヲ拜ス。良山深ク之ヲ惡ミ、僧官ヲ拜セズ、幡然髮ヲ束ネテ、縫掖ヲ服シ、舊姓ニ復シテ後藤左一郎ト稱ス。而後門人ノ外、世ノ志アルモノ多クハ風儀ヲ慕フテ漸ク正俗ニ向フ、人醫ノ束髮スルモノヲ見テ認メテ後藤流トナスニイタル、良山建議ノ功マタ大ナリト言フベシ。

良山ノ病ヲ治スル、動モスレバ輒チ灸ヲ用ヒ、且ソノ壯數太多シ、世間指シテ灸家トナシ、又ソノ溫泉・熊膽・艾灸ヲ用フルコト多キヲ以テ、呼テ湯熊灸庵ト曰フ。良山乃チ之ヲ辨ジテ曰ク、『夫治レ病之術、其方不レ一、而至ニ沈寒痼冷之證一、則唯灸爲ニ之最ニ顧病之關ニ於腹内ニ十而七八、即所レ謂沈寒痼冷者是已、故余之以レ灸而治也、先按ニ腹部ニ摸ニ索有ニ積氣ニ處ニ反就ニ背面一、大抵自ニ九十俞一至ニ五十六一若脊中、若脊際、若脊肉、若脊外、對ニ察肌肉所凝與腹底所結而取之要以指頭陷沒徹底處ニ爲是則灼之用眞艾陳久者積日累月、漸致年歲其數有下至ニ千萬壯而止上嗚乎腹底久難奈何僅有ニ此方之可レ賴耳』又ソノ熊膽ニ於ケルヤ昔人之ヲ輕視シ、用フル者至テ稀ニシテ人ソノ皮ヲ以テ鞆トナシ席トナスヲ知ルノミ、良山之ヲ取テ諸膽中ノ第一トスルニ及ビテ、天下始テソノ効ヲ知リ以テ左右ニ備フ、良山又自ラ之ヲ以テ丸劑ヲ製シ、世ニ行フ、所謂熊膽丸是ナリ。

ソノ藥ヲ選ブヤ、甚精、日用ノ需ニ切ナルモノ若干種、ソノ美惡眞僞新陳ヲ辨ジ、ソノ和・漢ノ同異、土產ノ宜否ヲ覈ラメ、運氣陰陽引經報使等ノ說ニ拘ラズ、多クハ張機ノ意ヲ追ヒ、權變以テ方劑ヲ立ツ。ソノ藥ヲ抄ルヤ古來ノ量法多クハ遵用シ難キヲ以テ銀鍮ヲ以テ圖ヒ三等ヲ造リ、之ヲ用ヒテ藥ヲ抄ル、輕重多少揭秤ヲ煩サズ、而シテ世醫用フルコロノ木葉狀ナルモノ、因テ以テ閑物ニ屬ス。丹後・峰山侯、嘗テ良山ノ風儀ヲ慕ヒ、ソノ老臣辻親常ヲシテ良山ノ門ニ入ラシム、偶々良山ノ圖ヒヲ見テ之ヲ賞シ、自ラ象牙ヲ磨シテ之ヲ製シ、親常ヲシテ良山ニ贈ラシム、良山大ニ喜ビ、藏メテ永ク家寶トナシ、且ツ象牙匙說ヲ作テ之ヲ謝ス。

良山ノ人ニ對シテ疾病ノ原因、及ビ看護ノ法、調攝ノ則ヲ説クヤ、慙慙曲詳諄々乎、反復數百言、唯人ノソノ意ヲ會得セザルコトヲ是レ恐レ、必ズ厭厭セシメテ止ム。

良山書ヲ著スコトヲ好マズ。唯、熊膽蕃椒灸説ノ數篇アルノミ、而シテソノ術ヲ傳フルモノ京師ニ香川修徳・山脇尙徳アリ、浪華ニ市瀬穆アリ、伊勢ニ山村重高アリ。家著戸述、ソノ人ニ乏シカラズ。良山ノ業益盛ナリ。執政某深ク良山ノ術ヲ信ジ、幕府ニ薦メ、聘スルニ千石ノ祿ヲ以テセントス。良山固辭シテ就カズ、ソノ人ニ答ヘテ曰ク、侯ノ達ノ爲ニスルヤ厚シ、然ドモ達ノ命ニ從フ能ハザルモノニアリ、江戸ハ先人ノ居ルヲ欲セザルトコロ、苟クモ美祿ヲ貪リ、輒ク墳墓ヲ離ル、一不可ナリ、達竊ニ自ラ揆ラズ、醫道ヲ興復シ、諸ヲ天下ニ弘メントス、京師ハ四方ノ衝、學徒來リ聚ルトコロ、コレヲ舍テ他ニ移ルニ不可ナリ、若シ達志願遂ゲズ、溝壑ニ凍餓スルモ固ヨリ甘心スルトコロナリト、執政某奪フベカラザルヲ知りテ止ムト言フ。(良山先生碑銘行狀・近世叢語・叢桂亭醫事小言・日本醫譜)

一 氣留滯論^⑧

名古屋玄醫、醫方復古ノ説ヲ唱ヘタレドモ、當時ノ諸家尙ホ宋・明諸家ニ雷同シ、運氣分配ノ説ヲ信奉シ、溫補ノ説專ラ行ハレタリ。是ノ時ニ方リテ、後藤良山、群疑衆佛ノ中ニ孤立シテ、慨然トシテ説ヲナシ『藥ハ毒物ニシテ、邪ニ傷ラルルトキノ備タルコト知レタリ、眞元虛脫、肌膚血脈枯悴シタルモノ、何ゾ偏味ノ毒草ヲ以テ之ヲ補益スル事アランヤ、然ルニ宋朝以來ノ醫家者流、此理ヲ知ラズシテ虛ヲ補フト云フ、虛乏ノ人ニ服藥ノミヲ用テ、天然自然ノ大補タル肉味餌食ヲ却テツヨキニ過ルナドトテ制禁シ、百無ニ一生ニ、哀ノ甚ニアラズヤ、故ニ今虛乏ノ人ニハ肉ヲ食ハシメテ、其補益ヲトル、世醫却テコレヲ以テ妄トス、何ゾ誤レルヤ、此モ後世ノ醫各々醫ヲ業トスル故ニ、利ヲネゴフノ心、ソコニアリテ空文浮談ヲ以テ其説ヲ修飾シ、只服藥コレットメ、民命ヲ損スルノ罪ヲ知ラズ、本邦今ノ世ノ醫ニ此弊尤甚シキモノアリ』ト曰ヒ、二十年來實詣スルトコロニ依リテ、一家ノ言ヲ立ツ。ソノ説ニ曰ク『凡欲レ學レ醫者、宜丁先察_下痲癢始_于義皇_一、菜穀出_中于神農_上知_丙養_レ精在_ニ穀肉_一、攻_レ疾乃籍_乙藥石_甲然後取_ニ法於素_・靈_・八十一難之正語_一、捨_ニ其空論雜説、及文義難_レ通者_一涉_ニ獵張機_・葛洪_・巢元方_・孫思邈_・王壽等諸書_一、不_レ惑_ニ末後諸家陰陽旺相府臟分配區々之辨_一、而能識_ニ百病生_于一氣之留滯_一、則思過_レ半矣』ト。而シテソノ所謂一氣ト言フハ『人之爲_レ體也、上下前後、左右表裏、莫非_ニ斯氣之充實條暢_一也』『氣乃生_ニ天地萬物_一、長レ之、化レ之、存レ之、滿_ニ吾腔子_一者、是此氣中之一氣、而内外貫通、是爲_ニ一元氣_一』『一身之中四肢百骸莫_レ不_レ憑_ニ於斯氣之運_一矣、分而言之、陰陽、水火、氣血、榮衛、合而言之、則一元氣耳』ニテ、宇宙ノ間ニ一種精妙ノ勢力、即氣ト稱スルモノアリ、ソノ人體内ニ充塞スルモノアリト假定シテ、之ヲ元氣ト名ツクルナリ。元氣ノ説ハ李・朱醫學ニモ之アリト雖モ、ソノ所謂元氣ハ兩腎ノ中間ニ存スルモノニシテ、良山ガ言フトコロノ元氣ト同ジカラズ。良山ガ謂フトコロノ元氣ハ、『身中身外盡是氣、而天地相貫、無_ニ少間隙_一者』ヲ言フ、故ニ『其腎間ニ寓スルモノモ、亦氣中ノ一氣ナルノミ。天ハ斯氣ヲ以テ運行シテ息マズ、動クモノハ陽トナリ、靜ナルモノハ陰トナル、日月星辰、以テ更々明ニ、寒暑風雨、時ヲ以テ來タル。人ハ斯氣ヲ以テ循環シテ、身中ヲシテ寒ナラズ、熱ナラズ、濕ナラズ、燥ナラズ、自カラ温々活潑ノ勢ヲ得セシムルナリ』又曰ク『凡ソ病ノ生ズルヤ、風寒ニヨレバ其氣滯リ、飲食ニヨルモ其氣滯リ、七情ニヨルモ滯リ、皆一氣ノ鬱滯スルヨリナルナリ、故ニ其ササユルモノハ大概如此、チカヘドモ、其相手ニナリテ滯ル所ハ一元氣ナリ、其經絡ニテ滯ルモ、皮膚ニテ鬱スルモ其果_下ハ腹内へ落ち込ムナリ』ト。

コノ如ク後藤良山ハ一氣留滯ノ説ヲ立テテ、疾病發生ノ理ヲ解釋シ、以テ運氣分配ノ説ヲ一掃センコトヲ企テシガ、コノ説ハソノ子後藤椿庵ニ至リテ推廣セラレ、論理益々明瞭トナレリ。即チソノ説ニ依レバ『以_レ人爲_ニ小天地_一、譬血赤、即象_ニ陽色_一、猶_ニ日與_レ火、而其實者、爲_ニ皮肉_一、爲_ニ毛髮_一也、精白、即象_ニ陰色_一、猶_ニ三月與_レ水、

而其實者、爲三筋骨^一、爲三齒牙^一也、所謂兩實相合、而保三護其氣^一者、謂^二之形^一、內外一貫而活三養其形^一者、謂^二之氣^一、形氣二者、不^レ可^二相離^一也』ト説キ、人ノ身體ヲ形ト氣トニ別チ、『人身之病、不^レ問^二外感內傷^一、皆在^二一氣所^一不^レ充、一氣者乃元氣也、若人不^レ節^二穀肉^一、不^レ慎^二起居^一、陰慮暗籌、淫瀆過度、是以一氣纔留滯也、上下左右、表裏前後、彼爲^二有餘^一、此爲^二不足^一、而其見證亦有^二淺深久近輕重緩急之不^レ同耳』ト言フ、外感內傷ハ固ヨリソノ形ニ乗ズト雖モ、ソノ氣ノ充ザルトコロ(吾人ガ今日謂フトコロノ抗抵減少部 Loca minoris resistentiae ノ義ニ類ス)アルニヨリテ始メテ病ヲ喚起スルモノナリトシ。又『先子嘗云、百病生^二於一氣之留滯^一、今分而言之、則虛鬱二言、可^二以蔽^一盡其義^一矣、夫鬱者暢之反對、抑屈也、言^二元氣抑屈而不^レ暢也、虛者實之反對、空罄也、而與^二空字^一不^レ同、言^二元氣空罄而不^レ實也、』ト論ジ、虛鬱ノ二證ヲ以テ病證テ概別シ、更ニ進デ『吾門謂^二諸病皆生^一於一氣留滯^一者、則諸病將^レ發之初路門口也、或有^二自^レ表留滯者^一、或有自^レ裏留滯者^一(耳目鼻口皮肉筋骨咽喉膀胱腸中皆是屬^レ表、其稱^レ裏者、五藏精神所^レ居也)、其病之已成也、不^二必曰^レ表曰^レ裏、則食藥灸鍼、全無^二可^レ下^レ手之地^一也、是以表裏兩感、多入^二死法^一、』ト言ヒ、氣ノ留滯ニ表(耳・目・鼻・口・皮肉・筋骨・咽喉・膀胱・腸中)ヨリスルモノト、裏(五藏精神ノ居ル所)ヨリスルモノトアルコトヲ論ジ。ソノ氣ノ留滯ノ形勢ニヨリテ、ソノ候ニ淺深・緩急・輕重ノ別アルコトヲ説ク。一氣留滯ノ説ハ之ニ依リテ益々明晰トナレリ。

既ニ一氣留滯ノ説ヲ以テ病理ヲ説ク、從テソノ治法ノ綱要トスルトコロハ順氣ニアリ、而シテソノ治方ヲ論ズルニ方リテハ『因同フシテ證異ナルモノアリ、因異ニシテ證同ジキモノアリ、其因ヲ求メテ之ヲ治スルニアラザレバ正鵠ヲ得ルコト難シ』ト言ヒテ、因テ求ムルコトヲ先ニシ。ソノ傷風ヲ論ズルヤ、三證ヲ明辨シテ療體ヲ精察スルヲ要スルコトヲ言フ。ソノ三證ト言フハ

一、日經證。 此乃邪氣初入之門、分而言之、則有^二淺深二證^一也

甲、淺證。 古謂^二之太陽病^一、非也。此邪氣襲^二擊表氣^一而裏氣將^二憤激^一之時、必見^二惡寒無^レ汗、頭痛脊強等候^一、宜^レ用^二峻發之劑^一、即桂枝湯、麻黃湯之類、是也

乙、深證。 古謂^二之少陽病或半表半裏^一、非也。此邪氣滾^二動表氣^一而裏氣已^二鬱蒸^一之時、必見^二寒熱嘔吐耳聾脇痛等之候^一、宜^レ用^二和解之劑^一、即青龍湯、芫胡湯之類、是也

二、日閉證。 古謂^二之陽明病或胃家實^一、非也。此本元氣有餘之證而熱勢躁^二亂表氣^一、逆^二聚裏氣^一、則腸胃中之燥結者、必見^二怕熱、煩渴、譫語、發狂、尿赤、尿鞭等之候^一、宜^下投^二湯藥^一、早以疏^中通^元氣之將^レ閉者上、即白虎湯、承氣湯之類、是也

三、日脫證。 古謂^二之太陰病少陰病厥陰病^一、非也。此本元氣不足之證而熱勢減^二陷表氣^一、攻^二奪裏^一、則腸胃中之疲乏者、必見^二目昏、面煤、舌卷、囊縮、厥冷、自剝等候^一、宜^下投^二湯藥^一、早以充^中張^元氣之將^レ脫者上、即理中湯、四逆湯之類、是也

コノ如ク經(淺・深)・閉・脫ノ三證ヲ別チ、ソノ因ヲ氣ノ留滯ノ部位形勢ノ異ナルニ歸シ、因ニヨリテ治ヲ講ズルコトヲ主要トセリ。

後藤流醫方

後藤艮山一氣留滯ノ説ヲ唱ヘテ、宋・明醫家陰虛ノ論ヲ駁シテヨリ、ソノ子椿庵、孫慕庵嗣^レデ起リテ、ソノ説ヲ推廣シ、門人山村重高・香川修徳・市瀬穆等、ソノ説ヲ主張セシカバ、天下ノ醫風ハ茲ニ一變シタリ、且ツ當時醫家ハ皆ナソノ頭ヲ髡ニシ、ソノ衣ヲ僧ニシ、僧官ヲ拜スルヲ以テソノ身ノ榮トナセシニ、艮山ハ縫掖ヲ服シ、髮ヲ束ネ、以テ中古ノ遺風ヲ存ストナシ、世ノ醫家モソノ説ヲ聞テ、コレヲ學ビ、古ノ俗ニ反リテ髮ヲ束ネ、縫掖ヲ服

シ、以テ他流ノ醫家ト區別ス、ヨリテ世人ハ髮ヲ束ヌルノ醫家ヲ見テ、之ヲ後藤流ト稱スルニイタレリ。

後藤流醫學派ニアリテハ、病因ヲ論ズルニハ、百病ハ一氣ノ留滯ニ生ズルノ説ヲナシ、從テ順氣ヲ以テ治法ノ綱要トナシ。内傷ノ病ニハ餌食ヲ厚フシテ溫養ヲ助ケ、外邪ニハ則チ藥ヲ用フルヲ主トシ、藥ヲ用フルニハ因ヲ詳ニシ、證ノ淺・深・閉・脫ニヨリテ之ヲ選ビ用フベシトナスコト、既ニ前段ニ詳述セルガ如シ。

診法ハ從來醫家ノ用フルトコロハ、望・問・聞・切ノ四診（第一九七頁參照）ナレドモ、後藤流ニアリテハ、コノ四診ニ加フルニ、按腹・候背・手足看法ノ三診法ヲ以テシ、又鼻ヲ以テ病人臭惡ヲ嗅ギ知ルノ法（嗅診法）ヲ加ヘ、以テ邪ノ淺深・久近、證ノ輕重・緩急ヲ詳ニスルヲ期シタリ。

四診ノ法ハ、古昔ヨリ醫家ノ唱道スルトコロナレドモ、後世ノ醫家ハ切脈ノ一診ノミヲ取テ、ソノ三ヲ舍キ、切脈ノ法ニモ、運氣・支干・分配・假託ノ妄誕ヲ附シ、妄リニ脈名ヲ立テ、七表・八裏・九通等ノ目ヲ掲ゲ、徒ニ空理ニ涉リテ實際ノ用ヲナサザルモノ多シ。（脈學ノコトハ後段ニ詳述スベシ）後藤流ニアリテハ、病脈ハ大・小・浮・沈・遲・數ノ六脈ニ過ギズ、ソノ大ナラズ、小ナラズ、浮ナラズ、沈ナラズ、遲ナラズ、數ナラズ、調勻和緩ナルモノヲ平脈トス。而シテソノ脈ヲ切スルハ病ノ輕重生死ヲ驗スルノ一法ニシテ、某病ハ某脈ヲ見ハスノ定規アルコトナシト論ズ。コレ實詣ニ出デタル説ニシテ、古醫方ガ李・朱醫方ニ卓越セルハ、コレ等ノ點ニ於テ從來ノ空談ヲ排撃セルニアリ。按腹ノ一法ハ古人亦間々之ヲ用ヒタリト雖モソノ法ノ闕ゲタルヤ久シ、後藤流ニアリテハ、之ヲ以テ、氣形強弱・癥糞疑似、及ビ婦人血塊妊娠ノ明カニシ難キ者、積聚ノ粘着スルトコロノモノヲ辨治セントシ、之ヲ以テ診法中ノ主要ナルモノトセリ。（腹診ノコトハ後段別ニ之ヲ論ズ）

後藤流ノ治術ニ於テ、殊ニ賞用スルトコロノモノハ艾灸・熊膽・蕃椒・溫泉ニシテ、ソノ説ニ依レバ『艾灸ハ太陽活壯ノ氣ヲシテ、直チニ沉寒涸冷ノ地ニ達セシムルノ能アリ、而シテ病ノ腹内ニ關スルモノハ沉寒涸冷ニ屬スルモノ十ノ七八ニ居ルヲ以テ灸ヲ以テ之ヲ治スベシ。熊膽ハ、一切卒病急患ニ之ヲ用ヒテ元氣ヲ喚起シ、蔽寒ヲ開通スルノ效アリ。蕃椒ハ癥瘕ヲ祛ケ、痼ヲ衝キ、帶ヲ排シ、惡血ヲ除キ、胃ヲ開キ、食ヲ進ムルノ力アリ。溫泉ハ經澁、血瘀、久滯、深痼ニ對シテ、活暢ヲ取ルニ用フベシ』ト言フ²¹⁾。

儒醫一本論²²⁾

伊藤仁齋復古ノ學ヲ唱ヘ、堀川學派漸ク興ルニ方リテ、ソノ門ニ並河天民アリ、才學德望ヲ以テ世ニ推サレシガ、コノ人傍ラ醫方ヲ修メ好シデ醫事ヲ言フ。仁齋儒醫ノ説ヲ作テ、ソノ非ヲ論ズレドモ、敢テ意トナサズ、常ニ曰ク『今日儒流未ダ必ズシモ虞祿アラズ、醫ヲ兼テ自カラ業トスルモ爰ゾ道ニ害セン、且ツ專バラ儒ヲ以テ自カラ居レバ、衣食或ハ支ヘズ、終ニ亦其志ヲ固フスルコト能ハザルナリ』ト、益々醫事ヲ治メ、松原慶輔・清水慶長等ソノ門ニ出デ、師説ヲ奉ジ、共ニ儒ニシテ醫ヲ兼ネタリ。後藤良山モ亦經義ニ於テハ仁齋ノ古學ニ服シ、ソノ醫學ノ門弟香川修徳ヲシテ仁齋ノ門ニ入ラシメタルホドニテ、一方ニ於テ、伊藤仁齋・太宰春臺等碩儒ノ誹毀ニモ拘ラズ、儒醫ノコトハ益々行ハレ、並河天民・後藤良山諸豪傑ノ唱道ニヨリテ、儒ニシテ醫ナルモノ愈々多く、香川修徳ニイタリテ遂ニ儒醫一本ノ説ヲ立テタリ。

香川修徳、字ハ太沖、修庵ト號ス、播磨・姫路ノ人、幼ニシテ穎悟人ニ過グ、年十八ニシテ笈ヲ負ヒテ京師ニ來タリ、後藤良山ニ就テ醫ヲ學ブ、良山之ヲ器トシ、伊藤仁齋ニ從テ經義ヲ修メシム、居ルコト五年業大ニ進ム、而シテ儒ハ父ノ遺志ニアラザルヲ以テ志ヲ決シテ醫トナリ、講究多年、遂ニ素・靈ノ説ヲ排シ、以テ一家ノ言ヲ立テ、『聖道醫術一ニ其本ニ而無ニ致』ト言ヒ、遂ニソノ堂ヲ名ケテ一本ト號シ、藥選・行餘醫言等ノ書ヲ著ハシテ以テ師説ヲ推廣シ、古醫方益々關ケ、儒醫ノ說愈盛ナリ、受業生徒、籍ヲ着クルモノ總テ四百餘人ニ及ブ、寶曆五年病ミテ歿ス、年七十三。（墓誌）

初メ香川修徳ノ後藤良山ノ門ニ入ルヤ良山之ヲ見テ、謂テ曰ク『二千年來、醫說緒ヲ失ヒ、紛紜日ニ甚シ、疑議ヲ闕キ、正ニ就キ、新ニ一家ノ言ヲ成スハ、則チ是レ古今ノ一大結構、歲月ヲ期歴シ、精力ヲ用ヒ盡スニアラザレバ之ヲ成スコト能ハズ、我レ老タリ、コレ子ガ任ナリ』ト、修徳是ニ於テ感激シ、古今ノ醫籍ヲ涉獵シ、素問・靈樞・八十一難經等ノ邪說多クシテ用ヲナサザルコトヲ知り、張仲景ノ傷寒論ハ古今醫書中ノ翹楚タレドモ、ソノ説、素問ニ出デテ陰陽者流ニ混ズルヲ免レズ、宋・元以下益々議論ニ墮チテ取ルニ足ルモノナキヲ慨シ、直ニ實際ニ就キ、謹テ聖訓ヲ奉ジ、之ヲ推衍シテ始メテ一本ノ宗旨ヲ發明シタリ。ソノ言ニ曰ク『日常之養、萬病之治、其他養レ性、養レ心、修レ身、順受、慎修、論・孟中、可ニ以隅反類推レ者、不ニ而足レ、仁者見レ之謂レ之仁、知者見レ之謂レ之知、假使ニ孔・孟爲レレ醫、決不レ可下從ニ素・靈之邪說爲上レ之、則以ニ此數言ニ爲レ本、引而伸レ之、觸レ類而長レ之、則雖レ無ニ素・靈ニ醫事豈不レ能レ爲乎哉、其謂ニ之一本之道ニ乎、一本而後善讀ニ本草、明辨ニ藥物、審識ニ性味功能、撰ニ取親試有レ驗者、又涉ニ獵古今醫籍、唯取下の實正當、足ニ以徵信、有裨ニ于養レ生療レ病之言上、則亦旁觀之資益、修治之廣見耳』ト。思フニ、修徳ノコノ説ヲナスハ、或ハソノ意、當時醫方ノ小道トシテ、巫覡賤工ノ徒ト伍セラルルヲ憤慨シ、コレヲ聖賢ノ道ニ列シテ以テソノ名ヲ表見セントスルニアリシナラン、而カモソノ素問・靈樞・傷寒論以下諸書ノ論說ノ一モ祖述憲章スベキモノナキヨリ、孔・孟ヲ藉リテ、二千年來醫書ノ妄誕ヲ排斥センコトヲ欲セシコトハ『夫以レ病配陰陽臟腑也、以レ予觀レ之、則支離拘泥、特以ニ分配、論レ之、而未レ知ニ一本之宗旨一者也、大凡疾病之在レ人也、係ニ于全體、豈止一陰一陽、一臟一腑之所ニ偏受ニ乎哉、表病裏感、內患外感、臟腑相通、上下相須、一所不レ和周身隨而不レ順、蓋滿腔子一箇元氣、何可ニ相離、唯有ニ淺深久近、輕重緩急之不同、故所レ爲不レ一耳、』ト痛言シ、『若以ニ素・靈・本草、爲下可ニ盡信ニ之書上、則已若爲ニ疑信相半、則何不_下就ニ平易從容正大光明之說一以決上レ之耶、抑亦以爲_下無ニ素・靈・本草、則醫事竟不_上レ可レ爲耶、醫事亦吾修身中之一目焉耳、不_レ可_下遠籍ニ異端之說一以治上レ之矣』ト切論スルヲ見テ之ヲ察スルニ難カラズ、之ヲ要スルニ修徳ガ意ハ一ニ實詣ヲ主トシ、素問・靈樞以下諸書ノ虛誕ヲ排撃スルニアリテ、儒醫一本ノ説ハ唯口ヲ之ニ藉リシマデナ_{ルベシ}。

名古屋玄醫・後藤良山等ガ主張セシトコニ李・朱等後世末流ノ論說ノ虛妄ヲ排斥シ專ラ素問・靈樞・傷寒論等ノ古經ニ依リテ眞理ヲ探ルベシト言フニアリシガ、香川修庵ガ唱道スルトコロハ更ニ一步ヲ進メテ素問・靈樞スラム之ヲ疑ヒ、五運六氣ノ如キハ邪說妄論トシテ口ヲ極メテ之ヲ排斥シ、『生尅配當之說、予常厭聞レ之、幾欲レ發レ嘔也』トマデ痛言スルニイタル。而シテ、ソノ五行運氣ノ說ヲ駁スルヤ、則チ『王政陵夷シ、邪說競ヒ起リ、而シテ後始メテ五行ヲ以テ四時十干ニ分配スルモノアリ、五行ヲ以テ五臟六腑ニ分配スルモノアリ、五行ヲ以テ星緯二名ヅクルモノアリ、五行ヲ以テ造化ヲ論シ、人物ヲ生スルモノアリ、五行ヲ以テ強テ、天一地二ノ數ニ配スルモノアリ、又五行生剋運氣勝復ヲ説クモノアリ、斯レ皆假合附會、迷行妄作、道ヲ害スルコト、コレヨリ甚シキハナシ』ト罵リ、又『陰陽位ヲ易ヘ、上下倒置シ、牽合錯亂セルコト縷擧スベカラズ、若シ之ヲ辨ゼバ日モ亦足ラズ、後世醫流之ヲ奉ジテ以テ成説トナシ、之ヲ易ユルコト能ハズ、齟齬アリト雖モ、之ヲ信ジデ疑ハズ、又從テ之ガ辭ヲナス、歎スルニ勝ユベケンヤ、其五運六氣ノ妄ヲ見テ、以テ五行六經ノ邪說ヲ知ルベシ』ト言ヒ、ソノ空誕據ナキコトヲ指摘シテ復タ、餘蘊ナシト言フベク。ソノ藥物ヲ論ズルヤ『凡ソ藥物ヲ探ルニ、六氣穢物ヲ分チ、或ハ四時五運六淫、藥ヲ用フルノ式アル等ハ並ニ素問陰陽大論ニ本ヅキ、引經報使及ビ五臟六腑補瀉氣味用藥ハ張元素之ガ備ヲナシテ、升降浮沈陰陽ハ李杲ニ始マル、此レ皆近世醫ノ尊信奉事スル所ニシテ、而カモ之ヲ究ムルニ、俱ニ是レ空論ニシテ治事ニ益ナシ』ト斷言シ、實驗ニ依リテ拘泥ノ説ヲ破ルヲ要トシ、藥物ノ氣味ヲ問ハズ、相反・相畏・相惡等ノ説ニ關セズ、毎ニ試ミテソノ効ヲ確認シ、某ノ藥某ノ疾ヲ治スルコトヲ知ルヲ以テ主要トナセリ。

コノ如ク名古屋玄醫ニ依リテ創唱セラレ、後藤良山ニ至リテ大ニ振興セラレタル復古醫說ハ、香川修庵ニ至リテ更ニ推行擴充セラレ、一本堂行餘醫言・一本堂藥選等ノ著述、世ニ行ハレテ世醫漸ク二千年來ノ迷雲ヲ拂ハントセリ、コレ實ニ復古學ガ我が醫學ニ及ボセル影響ノ甚大ナリシニ由ルコト多シ。

萬病一毒論⁸³

名古屋玄醫先ツ興リテ古醫方ヲ唱ヘシヨリ、後藤良山・後藤椿庵・香川修庵ノ諸家相踵デ、ソノ說ヲ擴張シ、山脇東洋・永富獨嘯庵・北山友松等コレニ附隨シテ興リ、ソノ說漸ク行ハレ、後世醫家陰陽運氣ノ說ニ惑ハズシテ、直チニ周・漢醫術ノ舊ヲ取り、最モ自家ノ實驗ヲ重ンズルニ至リシガ、コノ見解ノ最モ盛ニナリシハ古醫方起リテヨリ六七十年、寛保・延享ノ頃ニ至リ吉益東洞豪傑ノ資ヲ以テ崛起シテ、一家ノ言ヲナシ、遂ニ一世ヲ壓倒シタルノ時ニ在リ。吉益東洞ハ後藤・山脇諸家ノ論說ニ和シテ唐・宋以降ノ醫書ヲ斥ケ、大倉公以下皆ナ滔々トシテ陰陽醫ナリト罵リ、五行經絡ノ邪說ヲ排シ、勉メテ自家ノ實驗ニ取り、言フトコロ、爲ストコロ、盡ク自家ノ親試ニ出デザルハナク、苟モ自己ノ經歷シテ功ヲナセシモノハ舉世皆ナ之ヲ非トスルモ更ニ顧ミズ、漢・唐諸家ノ言ト雖モ空理ヲ殘シテソノ精粹ヲ擧ゲ『萬病一毒・衆藥皆毒物、以レ毒攻レ毒、毒去體佳、初無レ益ニ損於元氣一也、何補云乎哉』ト說キテ、道三以來、世醫皆ナ溫補ノ說ヲ奉ジテ、療病ノ道ヲ誤マルヲ救濟セントシ、ソノ奇警、ソノ言矯激ニシテ、天下ノ醫人ヲ驚愕セシメタリ。

吉益東洞、名ハ爲則、字ハ公言、通稱周助、安藝國廣島ノ人、ソノ先畠山政長ヨリ出ヅ、曾祖政慶、紀伊ニ在リ豐臣氏ノ攻ムルトコロトナリ、城ヲ棄テテ河内ニ走リ、金瘡產科醫吉益半笑齋ノ家ニ匿レ、遂ニソノ姓ヲ冒ス、子政光初メテ安藝ニ移リ、廣島ノ山口町ニ居リ、醫ヲ業トシ、姓ヲ畠山ニ復シ、自ラ道庵ト稱ス、ソノ子俊長、重宗、東洞ハ即重宗ノ長子ナリ、母ハ中野氏、伊豫・松山ノ人、元祿十五年五月某日ヲ以テ東洞ヲ生ム、東洞少キ時ソノ名族ニ出ヅルヲ聞キ、大ニ抱負スルトコロアリ、阿川氏ニ從テ兵法ヲ學ビ、馬ヲ馳セ劔ヲ使ヒ、父祖ノ業ヲ修ムルノ心ナシ、年十九世恬熙ニシテ武ヲ用フルナク家ヲ興スコト醫ニアルヲ悟リ、乃チ道庵ノ門人津祐順ニ從ヒ金瘡外科ノ術ヲ受ク、刻苦研精日夜已マズ。素・難以下百氏ノ書ヲ爛讀シテ遂ニ陰陽五行ノ鑿說ナルヲ知ル、又嘗テ人ニ語テ曰ク『天下ノ醫ヲ醫スルニアラザレバ、醫タリト雖モ救疾ノ功少シ、偏僻ノ地ハ志士ノ伏處スベキトコロニアラズ』ト、父母女弟ヲ從ヘテ京都ニ徙リ、萬里小路・春日町南入ニ居リ、ソノ所謂古醫道ヲ唱フ、時ニ元文三年春三月、東洞年三十七ナリ、生キテ時ニ遇ハズ家ヲ興ス能ハズシテ、醫ニ隱ルルヲ汚トシテ、姓ヲ吉益氏ニ改ム。東洞大言自ラ快トシ抱負甚重ケレドモ、時流未ダ信ゼズ、弟子ノ籍ニ入ルモノ少ク業マタ行ハレズ、加之盜ニ遇ヒテ貲財略ボ盡ク、貧困日ニ甚シ、紙泥木ヲ以テ偶人ヲ造リ、市ニ鬻ギテ僅カニ衣食ヲ給ス、ソノ友村尾氏之ヲ憐ミ佐倉侯ニ薦メントス。東洞曰ク『窮達ハ命ナリ、何ゾ憂フルニ足ラン、天斯道ヲ喪ハザラントセバ我ヲシテ餓死セシメジ、貧困窮乏スルモ豈吾志ヲ降シテ祖先汚辱センヤ』年四十三ニ至リ貧益甚ク米櫃屢空シ、而モ東洞ノ志少シモ悛マラズ、一日憤然決スルトコロアリ、齋戒斷食スルコト七日、五條ノ少彦名ノ廟ニ至リ、ソノ神ニ告ゲテ曰ク『爲則不敏、過志ニ古醫道、不レ顧衆懼、推而行レ之、今也貧窮、命在ニ旦夕、我道非而天罰レ之與、雖ニ飢且死、余且不レ更レ轍矣、大神、我邦醫祖、吾道誠非、請速斷ニ我命、推而行レ之、則必害萬人、誅レ一救レ衆、是固吾願也』ト、適其友賈翁其窮ヲ見、金ヲ貽ントス、東洞之ヲ辭ス、賈人勃然トシテ色ヲ作シテ曰ク『先生ノ爲ニ非ズ、天下萬人ノ爲ナリ』ト、東洞感激之ヲ受ケ、家資漸ク給ス、ソノ後ソノ病人ノ家ニ於テ時ノ名醫山脇東洋ニ會シ、共ニ處方ヲ論ジ、大ニソノ推服スルトコロトナリ、東洞ノ名是ヨリ世ニ出ヅ、年四十五。東洞院街ニ移ル、東洞ノ號ハ之ヲ此ニ取リシナリ、東洋ノ稱揚ヨリ東洞ノ業、漸ク顯揚シ弟子モ亦大ニ進ム、寶曆ノ初門人鶴元逸、東洞ノ醫說ヲ集メテ醫斷ヲ著ハシ之ヲ公ニシ、一時之ヲ是非スルモノ海内ニ普ネシ、寛延四年東洞年五十。傷寒・金匱ノ諸方ヲ選ビテ、二百二十方ヲ採リ、類ヲ以テ聚メテ一書ヲナシ、名ケテ類聚方ト言フ、之ニ由リテ世醫始メテ方意ヲ知ル、既ニシテコノ中ヨリ又百七十三方ヲ擇ビ、論證治効ヲ附シテ方極一巻ヲ作り、以テソノ門ノ方鑑トシ張氏ノ方外ニ取ルベキノ方ナキヲ明カニシ、次デ又藥徵三卷ノ出版アリ、功實ヲ推シ藥能

ヲ審ニス。是ニ由リテソノ業愈盛大、來テ業ヲ受クルモノ海内ニ遍ネシ、四方ノ諸侯士大夫、從テ診治ヲ請フモノ亦多ク、明和中安藝ニ歸リシ時ノ如キ、諸州ノ人士病ヲ擁シテ跡ヲ追フモノ綿々絶ヘズ、京都ニ歸ルニ及ビ居ヲ皇城ノ西門外ニ移ス、居ルコト四年、安永二年秋九月病デ歿ス、年七十有二、洛東東福寺ノ莊嚴院ニ葬ル、畠山氏ノ先塋ナリ。妻伊井氏、子男四人、長ヲ璿ト言フ、次ハ猷、次ハ清、次ハ辰、女一人、門人ニ宮某ニ適ク。(行狀・東洞遺稿・近世叢語・遊相醫話・日本醫譜)

吉益東洞萬病一毒ノ説ハ、我が邦ニ於ケル一大發明ノ醫説ニシテ『留滯ハ毒ニシテ、毒ハ水穀ノ濁氣ノ成ル所ナリ、其毒動キテ萬病ハ發スルモノニシテ、外邪モ亦毒ナキトキハ、則チ感ゼズ、故ニ萬人同ジ風ニアタレドモ、傷ブラルルモアリ、傷ブラレザルモアリ、又同物ヲ食シテモ食傷スル人アリ、食傷セザル人アリ、是レ皆ナ傷ブラルルニアラズ、天ノ氣ニ感ジテ腹中ノ毒動ク故ナリ』ト説ク。之ヲ後藤氏ノ『萬病ハ一氣ノ留滯ニ因ル』ノ説ニ比スルニ雄渾斬新ニシテ、二千年來未ダ嘗テ人ノ言ハザルトコロナレバ、ソノ説ハ一世ノ耳目ヲ聳動シ、一時之ヲ是非スルモノ多カリシガ、寶曆ノ初門人鶴元逸、東洞ノ醫説ヲ輯メテ醫斷ヲ著ハスニ至リテ、吉益氏ノ主張益々明カトナリ、天下ノ醫家翕然トシテ之ニ靡キ、附和雷同、到ルトコロトシテコノ旨ヲ奉ゼザルモノナキニ至リ、遂ニ吉益流(又ハ一毒家)ノ一流派ヲ成スニイタレリ。

吉益流又一毒家

吉益東洞ガ主張スルトコロハ要スルニ『古ヲ稽ヘテ極ヲ立テ、今ヲ明ニシテ方ヲ制ス』ト言フニ在リ、古ノ書ト雖モ、實際ニ用ナキノ言ハ全ク之ヲ棄テ、獨リ張仲景ガ『證ニ隨テ毒藥ヲ投ジ、敢テ病因ニ拘ラザル』ノ説ヲ採リ尙書ニ『若藥弗ニ瞑眩、厥疾弗レ瘳』ノ語アルヲ引テ、以テ仲景氏ノ術ハ全ク三代ノ遺法ナルコトヲ證シ、古之方ヲ執テ今之病ニ體シ、先聖ノ規矩ニ背カザルヲ以テ治病ノ綱要トナス。蓋シ當時ノ醫家積年ノ弊習ヲ承ケテ金・元ノ醫方ヲ師宗トシ、病因ヲ論ズルニ歸着ナク、陰陽運氣ニ依リテ死生ヲ論ジ、因循姑息ノ治ヲ施シテ自カラ足レリトスルノ流潮ニ際シ、能クソノ弊風ヲ矯メ、コレヲシテ正道ニ復セシムルモノハ膽略氣概ニ富ミ、能ク言ハント欲スルトコロヲ言ヒ、爲サント欲スルトコロヲ爲シ、以テ一世ヲ偃蹇スルノ豪傑ナラザルベカラズ、吉益東洞ノ如キハ即チソノ人ニシテ、今ヨリ之ヲ見レバソノ言奇矯ニ失スルモノアリト雖モ、當時社會ノ狀勢ニアリテハ、コレ等ノ癩梗武斷ノ言行ハ極メテ適切有要ノモノナリシナリ。

吉益東洞ガ萬病一毒論ニ依レバ「萬病ハ唯一毒ナリ、ソノ毒ノ何ニ依テ生ズルヤヲ知ラズ、又何ニ依テ動クト云フコトヲ知ラズ、唯毒ノ所在ヲ視テ、治療ヲ加ヘ、敢テ病ノ因ヲ論ゼズ、ソノ原因ヲ論ズレバ輒チ實際ヲ離レテ臆見ニ落ツレバナリ、然レドモ已ムコトヲ得ズシテ、之ヲ論ズレバ、病因ニ二アリ、飲食外邪コレナリ。飲食口ニ入り、若シ留滯スルトキハ則チ毒トナル、百病之ニ繋リ、諸證コレヨリ出デ、心下ニアリテハ痞トナリ、腹ニアリテハ脹トナリ、胸ニアリテハ冒ヲナシ頭ニアリテハ痛ヲナシ、目ニアリテハ翳ヲナシ、耳ニ在リテハ聾ヲナシ、背ニアリテハ拘急ヲナシ、腰ニ在リテハ痠癢ヲナシ、脛ニアリテハ強直ヲナシ、足ニアリテハ脚氣ヲナス等、千變萬怪名狀スベカラズ、外邪襲ヒ來タルト雖モ其毒ナキモノハ入ラズ、假之、天行疫氣モ間マ之ヲ病マザルモノアリ。是レ毒ナケレバナリ』ト論ズ。既ニ一毒ナリ、故ニ之ヲ治スルニハ單一毒ヲ去ルヲ要ス、藥モ亦毒ナリ、毒ヲ以テ毒ヲ攻メ、毒去レバ病治スベシ。コレ醫方ノ要則ナリ。死生ハ命ナリ、天ヨリ之ヲ作ス、醫モ之ヲ救フコト能ハズ、唯疾病ニヨリテ死ヲ致スハ命ニアラズ、毒藥ノ能ク治スルトコロナリ、故ニ『死生ハ醫ノ與カラザル所ニシテ、疾病ハ醫ノ當サニ治スベキ所ナリ』ト言ヒテ、醫治ノ目的ハ只疾病ヲ除クニアリト斷ジ、元氣ノ説ハ唐・榮以下大ニ盛ニシテ遂ニ醫ノ恒言トナリタレドモ、ソノ元氣ハ陰陽ノ一元氣ニシテ、天ノ賦スルトコロ、人ノ生ズルトコロ、

所謂先天ノ氣ハ虚衰スベキモノニアラズ、之ヲ補ハント欲スルハ愚ナリ、臟腑經絡ノ説ハ醫家ノ重ズルトコロナレドモ、一モ治ニ用アルコトナシ、針灸ノ法ノ如キ、一モ不可灸ノ穴ナク、一モ不可刺ノ經ナシ。陰陽ハ天地ノ氣ナリ、醫ニ取ルコトナシ、朱丹溪ガ陽有餘、張介賓ガ陰有餘ノ説ノ如キハ、穿鑿甚シク、徒ニ以テ人ヲ惑ハスノミ。五運六氣ヲ以テ天下ノ衆理ヲ綜ベ、人身ノ百病ヲ究メント欲ス。素問・難經以下ノ醫書悉ク然ラザルハナシ、乃チ物毎ニ推シ事毎ニ窮メ、ソノ通ゼザルトコロニ至リテハ鑿シテ以テ之ヲ誣ユ、理ハ本ト惡ムベキニアラザレドモ、ソノ鑿ハ惡ムベシト言ヒ、先賢ノ説ト雖モ、證據ナキモノハ用ヒズ『夫聖人先レ行而後レ言、其所レ言、乃其所ニ嘗行一也、故其言也信、自レ漢而降、儒者各言ニ其所レ欲レ言而已、未ニ嘗履歷一、空言著書、汗牛充棟、聖人之道、所ニ以隱一也、』ト論ジテ、自家ノ實驗ニ出デザルモノハ取ラズ、コレ空論鑿説ヲ以テ、醫方ノ要則トナシタル弊風ヲ打擊スルニハ寧口適切ノ言ニシテ、吉益氏ノ説ガ一世ノ耳目ヲ聳動セシ所以、實ニココニアリ。

殊ニ擧ゲテ言フベキハ、吉益東洞ガ『夫理無ニ定準一、疾有ニ定證一、豈可以下無ニ定準一之理上、臨乙有ニ定證一之疾甲哉、故吾黨論ニ其已然者一、不レ論ニ未レ然者一、又不レ論ニ其所ニ以然一者上、蓋事理、相依不レ離者也、故事爲而得レ之、理默而識レ之』ト言ヒ、歸納論理ヲ以テ、ソノ醫説ヲ立テタルコトニシテ、東洞ノ論説ガ見識アリテ浮華ナラズ、ソノ言フトコロ摯實ニシテ傳會ノ辯尠ナキ所以ナリ。

ソノ診法ヲ論ズルヤ『腹者、有生之本、故百病根ニ於此一焉、是以、診レ病、必候ニ其腹一、外證次レ之』ト言ヒ、脉候ノ據ルニ足ラザルヲ論ジテ『醫謂、人身之有レ脉、猶ニ地之有ニ經水一也、知ニ平生之脉一、病脉稍可レ知也、而知ニ其平生之脉一、者十之二三耳、云々、脉之不レ足ニ以證一也、如レ此、然謂ニ五動或五十動、假ニ五藏之氣一者、妄甚矣、如ニ基浮沈遲數滑濇一、僅可ニ辨知ニ耳、三指擧按之間、焉能辨ニ所謂二十七脉者一哉』ト言フ。コノ説タルヤ、ソノ信ズベカラザルニ懲リテ、ソノ信ズベキモノヲ棄ツルモノニシテ、曲ヲ矯メテ直ニ過グルモノナリトノ評ナキニアラズト雖モ、實驗以外ニ斷乎トシテソノ説ヲ用ヒザリシトコロノ吉益東洞ガ、切脉ニ對シテコノ如キ言ヲナセシハ一理ナキニアラザルナリ。

ソノ藥物ヲ論ズルヤ、本草ハ妄説甚ダ多キヲ以テ徵スルニ足ラズ、引經報使ノ説ノ如キハ牽強傳會ノミ、某ノ藥ハ某ノ經・某ノ臟ニ入ルト言フガ如キハ據ルトコロナシ、相畏相反ノ説モ信ズベカラズ、藥能モ本草ニ説クトコロハ謬多シ、然レドモ藥功ヲ考フルニ至リテハ本草ハ之ヲ廢スベカラズ、宜シクソノ仲景ノ法ニ合フモノヲ擇テ之ヲ用フベシトナシ、『藥ハ草木、偏性ノモノナリ、偏性ノ氣、皆毒アリ、此毒ヲ以テ彼毒ヲ除クノミ、周禮ニ聚ニ毒藥一以供ニ醫事一ノ語アリ、内經ニ毒藥攻レ邪ノ語アリ、古昔藥ヲ以テ毒トナスコトヲ知ルベシ、後世道家ノ説疾醫ニ混ゼシヨリ藥ヲ以テ補氣養生ノ物トナシ、ソノ逐邪驅病ノ設タルコトヲ知ラズ、其本ヲ失セルモノト謂フベシ』ト切論セリ。

コノ如ク、吉益東洞ハ支那ニアリテハ宋以後、我方邦ニアリテハ室町時代、殊ニ曲直瀨道三以後専ラ世ニ行ハレタル浮鑿ノ論説ヲ罵倒シ、治病ノ上ニハ寸毫ノ價值ナシト斷言シ、ソノ病ヲ論ズルニハ見證ヲ以テ治本トナシ、敢テソノ因ヲ擧ゲズ、又脈候ヲ先ニセズ、病ヲ稱スルニ名ト因トヲ以テセズシテ某湯ノ證・某藥ノ證ト日ヒ、病毒ノ在ルトコロヲ認メテ、コレニ藥方ヲ處シ、ソノ瞑眩スルヲ以テ効應アルノ度トス。コレ實ニ我方邦醫界ニ於ケル破天荒ノ説ナルノミナラズ、支那ニアリテモ、未ダコノ如ク雄渾斬新ノ論ヲ立テシモノアラズ。山下玄門ガ醫事叢談ニ『東洞以前ハ千金方・外臺秘要方ヲ始メ、歷代ノ製作ハ方名サヘアレバ、皆同一ノ事ニ心得シ人多カリシニ、東洞ノ著書梓行アリシヨリ、醫門ノ眠頓ニサメタリ、東洞ハ實ニ和・漢古今ノ豪識ニシテ、名古屋氏復古ニ志ヲ立テシヨリ、後藤氏・山脇氏同意セシモ東洞ノ拔群ナルニハ如カジト聞ケリ、中華ノ名家多數ナレドモ、長沙(張仲景)ノ舊ニ復セシハ、吾本邦ノ功績ナリ』ト言ヒ、土生玄碩ガ師談録ニ『後藤・香川・山脇・松原・吉益皆ナ古方ニ名アリテ五大家ノ稱アリ、而ルニ今ノ古方ヲ謂フモノ獨リ、吉益氏ニ據リ復タ四家ヲ言ハザルハ何ゾヤ、蓋シ仲景ノ

方法ヲ取りテ、之ヲ今日ノ病者ニ驗シ、實ニ得テ後ニ之ヲ言ヒ、一ノ浮言ナキハ吉益氏ノ獨リ顯ハルル所ナリ』ト
言フハ、敢テ溢美ノ贊評ニアラザルベシ。

萬病一毒ノ説ガ五運六氣ノ説ヲ排撃シ、一氣留滯ノ論ヲ壓倒シテ、一世ノ醫人ヲシテ緘黙感服シテ、復タ仰ギ見
ルコト能ハザルニ至ラシメシハ、固ヨリ吉益東洞ノ膽略ニ富ミ剛氣ニシテ、一時ヲ叱咤シタルニ由レリ。而カモソ
ノ門下ニ俊傑ノ士甚ダ多く、東西相呼應シテ、師説ヲ紹述シタルニ賴ルコト尠カラズ、而シテソノ最モ著ハルモ
ノハ肥後ノ村井琴山・京都ノ中西深齋・江戸ノ岑少翁ナリ。

村井琴山、名ハ純、字ハ大年、椿壽ト稱ス、ソノ人トナリ、卓犖不羈、早ク父ニ從フテ學ブ、熊本醫學館ヲ興ス、ソノ父見
朴（名ハ能章、醫ヲ以テ名アリ）明ヲ失フテ教授ス、琴山毎ニ扶ケテ講席ニ昇リ、執讀ヲ助ク、父歿ス、助講ノ命ヲ受ク、
固辭シテ就カズ、コノ時ニ方リ吉益東洞、古醫方ヲ京師ニ唱ヘ、名聲嘖嘖タリ、琴山之ヲ聞キテ東遊シ、ソノ門ニ留マルコ
ト數月、方ヲ受ケテ歸リ、居ルコト數年、再ビ往テ業ヲ受ク、東洞益々ソノオヲ偉トシ、歸ルニ及ビ、之ヲ淀口ニ送り、謂
テ曰ク『吾道ノ寄、關ヨリ以西、一ニ以テ子ニ委ス』ト、既ニシテ反リ傷寒論ヲ講説シ、後進ヲ教誘ス、琴山講説ニ長ジ、
又善ク人ヲ罵ル、琴山ノ初メ古方ヲ唱フルヤ、施治攻撃ヲ以テ先トナス、時人灰目之ヲ憚カリ、敢テ延請スルモノナシ、中
年ニ至リ醫名日ニ著ハレ、施テ他邦ニ及ビ、遠近治ヲ乞フモノ益々多シ、年五十有餘ニ及ビ藩始メテ十口糧ヲ賜ヒ、數年ニ
シテ又祿百石ヲ賜ヒ醫員トナス、耄老ニ及ビ、祿ヲ致サンコトヲ乞フ、允サズ、又匙醫ニ列シテ祿五十石ヲ増ス、幾モナク
致仕ス、文化十二年病ミテ歿ス、年八十三、琴山篤ク東洞ノ説ヲ信ジ、益々ソノ道ヲ繼述シ、著ストコロ醫道二千年眼目
篇・類聚方議・續藥徵・方極刪定・藥量考・診餘漫錄・和方一萬方、等アリ。（近世叢語・日本醫譜）

岑少翁、名ハ逸、字ハ斑如、一字歸昌、初メ右膳ト稱ス、後チ少翁ト改メ、貉丘ト號ス、長門ノ人、江戸ニ在リテ吉益氏ノ
學ヲ唱フ、人トナリ豪邁ニシテ膽氣アリ、固ク師説ヲ奉ジソノ方法ニアラザレバ用ヒズ、晚年門戸ノ盛一時比ナシ、弟子顯
ハルルモノ數十人、ソノ徒少翁ト村井琴山トヲ稱シテ、東海翁、西州老ノ目アリ、文政元年病ミテ歿ス。（日本醫譜・皇國名
醫傳・日本醫人譜）

中西深齋、名ハ惟忠、字ハ子文、通稱主馬、モト伊賀十八族ノ一ナリ、曾祖某ニ及ビ、京師ニ來タリ、遂ニ家ス、父宗律、
母ハ高谷氏、深齋幼ニシテ凡ナラズ、聽識卓越、精力人ニ過グ、弱冠ニシテ儒學ニ入り、後吉益東洞ノ古醫道ヲ修ムルヲ聞
キ、志ヲ飜シテ醫トナリ、東洞ヲ師トス、嘗テ謂フ『傷寒論ノ醫今ヲ去ルコト久遠ニシテ、文字古簡ニシテ讀ミ易カラズ、
歷代註家アリト難モ、ソノ旨統ヲ得ルモノ鮮シ、是書ヲ註解シテ以テ師道ヲ開發セン』ト、是ニ於テ門ヲ杜ヂ、客ヲ謝シ、
一意攻讀スルコト、殆ド三十年遂ニ傷寒論辨正・傷寒論名數解ノ二書ヲ著ハシ、務メテ大旨ヲ推甄シテ、以テ治療ノ通規ヲ
立ツ、コノ書一タビ出デテ海内傳誦セザルモノナシ、諸藩ソノ名ヲ聞テ厚禮、之ヲ聘スレドモ並ニ辭シテ就カズ、享和三年
春、病ヲ以テ歿ス、年八十。（墓誌）

一毒論ノ反對者

吉益東洞萬病一毒ノ説ガ、一世ヲ壓倒シ、當時ノ醫人皆ナ爲ニ靡キテ、初メ疑ヒシモノモ遂ニ感服沈黙スルニ至
リシコトハ既ニ之ヲ言ヘリ。然レドモ、亦コノ間ニ起テ之ヲ駁撃批難スルノ有力家ナキニアラズ。後藤慕庵・畑黃
出・望月鹿門・淺井圖南・吉村遍宜・龜井南溟等、諸家ノ如キ、即チコレナリ。

後藤慕庵ハ後藤良山ノ孫ニシテ祖父ノ説ヲ奉ジ、所謂後藤流醫學派ノ代表者トシテ一毒論ヲ排撃シ、良山ノ『百
病生ニ於一氣留滯』ト東洞ノ『萬病唯一毒』トハ同ジキガ如クニシテ、大ニ異ナルコトヲ論ジ、良山ノ言ハ必ズ據
アレドモ東洞ノ説ハ理論ナリト嘲ケリ、一毒家ハ瞑眩ヲ以テ藥ノ効トナシ、人之ガタメニ死セザルモノハ鮮シ、尙
書ニ瞑眩ト曰フハ譬喩ノ言ノミ、而ルニ取テ以テ治病ノ大本トナスハ愚昧ナリト罵ル。又『仲景果シテ因ヲ謂ハザ
ルカ、吾レ未ダ之ヲ聞カズ、因ハ治ノ本ヅク所ニシテ察セザルベカラズ、然ルニ萬病一毒トスルガ爲ニ其因ヲ云ハ
ズ、其名ヲ辨セズ、唯某湯ノ證、某藥ノ説ト曰フ、コレ仲景ノ言ヲ誣フルモノナリ』ト駁セリ¹¹

望月鹿門ノ如キハ、折衷派ヲ以テ一家ノ言ヲ立テタル人ニシテ、ソノ一毒家ヲ駁スルハ主ニソノ治術ノ攻撃ニ偏スルヲ咎ムルニアリテ『近世、平安、有下自稱_二古方醫_一者上、其言曰、壹依_二仲景_一、可_レ謂_二高尚_一矣、熟_二視其治術_一、悉因_二子和_一、實非_二仲景_一、其逕庭可_レ笑矣、猥用_二攻擊_一、專行_二吐下_一、不_レ殺_レ人者殆稀矣』ト論ジ、所謂一毒家ハ傷寒論ノ皮膚ヲ知テ、ソノ骨髓ヲ識ラザルモノナリト嘲罵セリ。⁵³

吉村遍宜・龜井南溟等ハ、初メ吉益東洞ノ門ニ入りテ、所謂古醫方ヲ受ケシガ、ソノ說偏僻ニシテ術ト相齟齬スルモノアルヲ疑ヒ、東洞ノ說ヲ以テ『英雄欺_レ人耳』トナシ、口ヲ窮メテ東洞ノ說ヲ排撃セリ。而カモコレ等ノ諸家ハ竟ニ東洞ノソノ意ノ存スルトコロヲ知ラズ、東洞ノ時ニ方リテ、積年ノ習弊骨ニ染ミタルヲ除カンニハ、大語以テ之ヲ驚カシ、詭言以テ之ヲ諭スノ已ムヲ得ザル事ヲ理解セザリシニ似タリ。

畑黃山ハ以上ノ諸家ニ反シ、御醫ヲ以テ、ソノ名洛下ニ顯ハレ、延享ノ初法眼ニ叙セラレ、後ニハ法印ニ進ミ、醫學院ノ號ヲ賜ハリシ人ナリ。(傳ハ別ニ出ヅ)故ニコノ人ノ反對說ハ當時ノ社會ニ影響セシコト多カリシナルベシ。黃山ハ寶曆十二年斥醫斷ヲ著ハシ、醫斷論ズルトコロヲ一章毎ニ駁撃シ『余讀_二吉益子醫斷_一廢_レ書而歎、可_レ爲_二三大息_一者三、可_レ爲_二流涕_一者二、其他背_レ理傷_レ道者、難_レ偏舉_一矣、』ト言ヒ、ソノ大息スベシトスルハソノ(1)醫經ヲ擯シ、陰陽ヲ棄テ古今不移ノ道ヲ變ジテソノ端ヲ異ニスルコト、(2)方ヲ仲景ニ取ルト稱シテ、而シテ取捨意ニ任ジ、加フルニ妄說ヲ以テスルコト、(3)術ヲ論ズルハ率易、證ヲ分ツハ忽略、標本ヲ求メズ、病因ヲ究メズ、攻アリテ、補ナキコトニシテ、ソノ流涕スベキモノトスルハ、(4)死生ハ醫ノ與カラザルトコロナリト言ヒテ、ソノ弊人ノ死ヲ視テ風花ノ如クナラシムルコト、(5)初誕嬰兒ノ稟賦ノ厚薄ヲ辨ゼズ、一切攻撃之_レ施シ、痘疹ノ治ニ至リテハ慘刻益々酷シキコトナリトシ、以テ東洞ガ醫說ノ理ニ背キ、道ヲ傷ブル所以ヲ辯ゼリ。是ニ於テカ、東洞ノ高弟田中愿仲ハ辨斥醫斷ノ一書ヲ著ハシ、委細ニ斥醫斷ノ說ヲ駁シ『嗚呼扁鵲歿而來、醫流不_レ入_二陰陽_一、則入_二神仙_一、不_レ入_二神仙_一則入_二五行_一、而不_レ得_レ出_二其窟_一、二千有餘年、天下滔々醫流皆是也、宜哉不_レ能_レ更_二其轍_一也、是吾東洞先生之所_三以獨_二步於古今_一也、嗚呼如_レ彼則以_二鴟梟_一而笑_二鳳凰_一、執_二蜒蜓_一而嘲_二龜龍_一者也、不_二亦悲_一乎』ト冷笑シ『方無_二古今_一、以_レ治_レ疾爲_レ方、夫好_二古法_一、而惡_二後世之法_一、法也者何、日病應見_二大表_一云、隨_レ證而治云、毒藥攻_レ邪云、是謂_二之古法_一、補_二元氣_一云、益_レ血云、養_レ氣云、是謂_二之後世之法_一也、故功_二於治_一レ病者、無_二古今_一、取以救_二疾苦_一、是吾所_三以汲_二汲治_レ疾也、豈庸醫之所_レ知乎』ト切言シ、斥醫斷ノ書ハ固ヨリ醫斷ヲ解セズ、古ヲ稽ヘズ、妄ニ己ガ習フ所ヲ逞フシテ、而シテソノ徒ニ誇ルニ過ギザルモノナリト詬罵シタリ。蓋シ斥醫斷ノ世ニ出_レデシハ醫斷ノ發行ニ後ルコト十年許ニシテ、東洞ノ說ハ廣ク世ニ傳播シタレバ、之ガタメニ東洞ノ說ノ影響ヲ受ケシコト甚ダ尠カルベシ、現ニ斥醫斷ノ發行後四年(明和二年)ニ刊行セル吉益東洞ノ類聚方ハ書鋪ニテ一萬部ヲ摺リ、五千部ヲ京都・大阪ニ出ダシ、五千部ハ江戸ニ送リシニ、僅ニ一ヶ月ナラズシテ東西共ニ賣盡シテ一本モ殘サズ。ソレヨリ以後年毎ニ刊行スルコト無數。當時書鋪ノ言ニ新刻饜刻アリシ以來、儒書ニモ醫書ニモ、斯ク賣レタル書物ナシトアリシヲ見テ、畑氏等ノ反對說ハ大勢ヲ變ズルノ力ナク、一毒家ハ天下ニ瀾蔓シテ、所謂古醫方ハ當時ノ醫界ヲ風靡セシコトヲ知ルニ足ルベシ。

氣血水論

吉益東洞ノ萬病一毒ノ說ヲ創唱スルヤ、古來醫家ノ妄說ヲ駁撃シ、積年習弊ノ骨ニ染ミタルヲ排除セントスルニ急ニシテ、或ハ大聲以テ之ヲ驚カシ、或ハ詭言以テ之ヲ諭スノ、已ムヲ得ザルモノアリ、後ヨリ視レバ固ヨリ麤梗武斷ノ弊ナキコト能ハズ。東洞ノ門ニハ俊才頗ル多カリシモ、專ラ師說ヲ敷衍スルニ力ヲ致シ、ソノ醫說ヲ修飾刪正シテ以テ草創ヲ補フコトヲナサズ、ソノ攻撃ノ法ハ人ヲシテ徒ニ畏懼セシメ、反對者ヲシテ『此ノ如キ醫家ノ手ニ死スルヨリハ寧ロ溝瀆ニ轉ジテ死スルニ如カズ』トマデ言ハシムルニ至レリ。コレ實ニ東洞ノ意ニアラザルコトハ、ソノ遺著ヲ讀ミ又能ク當時ノ狀勢ヲ知ル者ノ首肯スルトコロナルベシ。且ツ夫レ東洞ノ一毒說タル、ソノ綱ヲ示スノミ、茫乎トシテ據ルトコロ少ナキヲ以テ、ソノ說ヲ恢弘センニハ更ニ細目ヲ擧ゲテ示サザルベカラザルハ理

ノ當ニ然ルベキトコロナリ。是ニ於テカ、氣・血・水ノ論起ル。氣血水ノ論ハ東洞ノ嗣子南涯ノ創唱スルトコロニシテ實ニ東洞ノ萬病一毒論ヲ修飾シタルモノト言フベシ。

吉益南涯、諱ハ猷、字ハ修夫、謙齋ト號ス、幼名大助、後子周助ト稱ス、東洞ノ長子ナリ、母ハ高木氏、幼ヨリ端嚴、成人ノ若ク、嬰兒ノ態ヲ成サズ、長ズルニ及ビテ學ヲ好ミ、經史ヲ誠齋氏ニ受ケ、成童父ノ業緒ヲ發揮セントスルノ志アリ、疾醫ノ道ヲ父東洞ニ受ケ、日夜研精毫モ懈ラズ、學大ニ進ミ年二十四ノ時、父東洞歿ス、乃チ箕裘ノ業ヲ嗣ギ、二弟ヲ育シ、且ツ疾醫ノ道ヲ生徒ニ授ク、從遊ノ士甚多ク、大ニ門風ヲ發揮シテ家聲ヲ墜サズ、年二十八ニシテ方機ヲ著シ以テ仲景藥方ノ活用ヲ示ス、天明八年京師祝融ノ災ニ遇フテ家屋炎焦ス、乃チ移リテ大阪・船場・伏見街ニ僑居ス、時二年三十ナリ、坂府ノ士民起癩排癩ノ術アルヲ聞キ、來リテ治ヲ乞フモノ日々數百人、業大ニ行ハル、ソノ居ル處ノ地、大阪ハ京師ノ南ニ位シ、水涯ナルノ故ヲ以テ南涯ト號ス、年四十三ノ時、大阪ノ僑居ヲ弟辰ニ譲リ、自ラ京師ニ還リ、三條・東洞院西ニト居ス、是ヨリ前東洞ノ萬病一毒說茫乎トシテ形狀ノ據ルベキナキヲ以テ、更ニ氣・血・水、三物アリ、毒之ニ乗ジテ初メテ證ヲ爲スノ說ヲ唱へ、專ラ傷寒論ヲ解釋シ、症ニ隨フノ法律ヲ示シ傷寒論精義ヲ著シ、天下醫生ノ耳目ヲ一新シ、海内靡然トシテ之ニ嚮ヒ、ソノ名益々揚ガリ、ソノ業愈々行ハレ、業ヲ受クルノ生徒、治ヲ乞フノ病客ソノ門ニ輻輳セリ、後子醫範ヲ著シテ氣血水ノ辯固ヨリ、萬病一毒ノ旨ニ背カザルコトヲ示シ、又ソノ氣血水說ニ據リテ仲景藥方ヲ說キ、氣血水藥微ヲ著ハスニ至リテソノ說大ニ備ハレリ、文化十年六月十三日病ヲ以テソノ家ニ歿ス、享年六十四、惠日山 莊嚴院先塋ノ側ニ葬ル、元配中氏一女ヲ生ム、故アリテ去ル、次配中内氏子ナシ、側室某氏二女ヲ生ム、長ハ加納氏ニ適キ、次ハ上田氏ニ適ク、門人青沼道立ヲ養フテ三女ニ妻シ、家ヲ嗣ガシム、道立、名ハ順、字ハ信夫、北洲ト號ス、父ノ遺說ヲ奉ジテ生徒ヲ教授シ家聲ヲ墜サズ。南涯著ハストコロノ書、傷寒論精義・輯光傷寒論・醫範・氣血水藥微・方機・方庸・方議辨・觀症辨疑等アリ、ソノ他門人賀屋恭安、續醫斷・傷寒論章句ヲ著シ、和田元庵、傷寒論精義外傳ヲ著シ、以テ南涯ノ說ヲ祖述セルモノアリ、ソノ治驗ノ如キハ門人中川修亭著ストコロノ成蹟錄、武貞夫著ストコロノ續建殊錄ニ詳ナリ。ソノ門人ノ籍ニアルモノ凡ソ三千餘人、名ヲ成セルモノ尠カラズ。賀屋恭安（號澹園）・中川修亭（號壺山）・岩田廣彥・和田元庵等、最モ著ナル。（吉益南涯傳・日本醫譜・成蹟錄）

氣血水ノ說ハ、『氣・血・水、三物アリ、毒之ニ乗ジテ初メテ證ヲ成ス』ト言フニアリテ、ソノ說ニ依レバ、『萬物皆一毒、藥亦皆毒也、以レ毒、攻レ毒、是醫之要道、人之身爲ニ陰陽和平如レ春、此爲ニ常體、若レ所ニ偏勝、此其病患、病必害レ性、是以謂ニ之毒、毒無レ形、必乘ニ有形、其症乃見、乘レ氣也、氣變焉、乘レ血也、血變焉、乘レ水也、水變焉、氣血及水、是爲ニ三物、三物之精、循環則爲レ養、停滯則爲レ病、失ニ其常度、則或急或逆、或虛或實、諸患萌起、各異ニ其狀、俾レ病レ之者毒、所レ病者物、證緣レ物而出、物隨レ症而分、症者末也、物者本也、雖レ有ニ見症、不レ分ニ其物、何益之有、譬如ト望ニ雲霓、而不レ知ニ晴雨也、凡論レ病以ニ陰陽、古之法也、是分ニ其大體ニ而巳、藥方未レ可レ處矣、太陽病有ニ桂枝湯、有ニ葛根湯、有ニ麻黃湯、一病而三方所ニ以有ニ氣血水之辨也、』ト言フ、コノ說ハ東洞ノ藥微ニ『附子逐レ水、朮利レ水、蠱蟲水蛭治ニ血證』トアル二本ツキ、萬病一毒論ヲ推衍セルモノニ外ナラズ、而シテ南涯ハ『夫氣與ニ水血、雖下養ニ身體ニ之物上、偏則爲レ害、謂ニ之毒、毒也者、傷ニ害物ニ之謂也、其所レ毒之物三、而至レ毒ニ於我ニ則一也、是以謂ニ之一毒、一毒之謂、示下治レ病ニ於攻、而無中補益也』ト言ヒテ、以テ氣血水ノ理論ガ一毒論ノ旨趣ト相齟齬セザルコトヲ論ジ、病症ヲ論ズルニモ、治方ヲ說クニモ、皆ナコノ氣血水三物ニ據リ、類ヲ聚メ證ヲ分チテ三物ヲ分チ、ソノ主客ヲ辨シ、ソノ所在ヲ詳ニシ、ソノ四態ヲ知ルコトヲ以テ醫方ノ規矩トナス、ソノ主客トハ證ノ主客ニシテ、主ナルモノハ先ニ見ハレ、客ナルモノハ後ニ出ツルニヨリ之ヲ知ルナリ、所在トハ病ノ位ニシテ、表裏内外コレナリ、四態トハ病ノ態ニシテ、急・逆・虛・實、コ

レナリ、循行ニ急逆アリ、精氣ニ虛實アルヲ言フ。之ヲ要スルニ『萬病ノ變窮極マル所ナシト雖モ、三物ノ變ニ出デズ、三物ノ變ハ三極ノ道ナリ、此ヲ以テ證ヲ推セバ何ノ病カ分タザラン、證ハ未ナリ、物ハ本ナリ、其本ヲ知ラザレバ焉ゾ能ク其末ヲ分タシヤ』ト言フニ歸着ス。

故ニ南涯ハ東洞ガ見證ノミヲ根據トシテ治方ヲ論ズルニ反シ、『證異ナリテ病同ジク、病異ナリテ證同ジキモノアルガ故ニ、見證ノミニ依ルベカラズ』ト言ヒ、東洞ノ弟子ヲ教フルヤ藥徵ニ始マリ、方極・類聚方ニ終リ、雜說與カラズ。傷寒論ノ如キハ之ヲ讀ムモ可ナリ、讀マザルモ亦可ナリトセシガ、南涯ハ之ニ反シテ『醫ノ學ハ方ト法トノミ、必ズ其一ヲ闕クベカラズ、方ハ藥ノ方ナリ、法ハ施治ノ法ナリ、方意審ナリト雖モ病症明ナラザレバ病治スベカラズ、病ニ定證ナシ、證ニ定義アリ、法ヲ以テ之ヲ論ジ、其所在ヲ知り、其主客ヲ別チ、然シテ後方處スベキナリ、而シテ其法ノ存スル所ハ傷寒論一書ノミ、之ヲ外ニシテ據ルベキモノナシ』ト言ヒ、傷寒論ヲ以テ萬病ヲ治スルノ規矩トナシ、ソノ子弟ニ授クルニモコノ書ヲ先ニシテ、方極・藥徵等ノ書ヲ後ニセリ。

コノ如ク南涯ノ氣血水論ハ東洞ノ萬病一毒論ニ修飾ヲ加へ、ソノ粗梗武斷ノ弊ヲ去リテ、ソノ說ヲ穩當ナラシメタリ。コレコノ學說ノ發達上、必ズ然カルベキコトニシテ、南涯ノ門下ニ賀屋恭安・中川修亭・岩田廣彦・武貞夫・和田元庵・横田元正・華岡青洲・難波抱節等ノ諸家アリテ、ソノ說ヲ四方ニ唱へシカバ、氣血水ノ論ハ一時大ニ世ニ行ハレタリ。

後世家

古醫方ノ盛ニ行ハルルニ至リシハ寶曆以後ニシテ、コノ期ノ始、享保ヨリ元文・寛保・延享ノ頃ニ至ルマデハ所謂後世醫方尙ホ盛ニ行ハレ、見識アル醫家ノコノ派ノ中ニ存スルモノ少シトセズ、香月牛山ノ如キハソノ第一位ニ居ルベキ大家ニシテ、又コノ派ノ好代表者タルベキ人ナリ。

香月牛山、名ハ則眞、字ハ啓益、筑前ノ人、少フシテ具原益軒ニ學ビ、又鶴原玄益ニ從フテ方伎ノ書ヲ受ケ、遂ニ醫トナル、壯ナルニ及ビテ中津侯ニ仕へ、居ルコト十四年、病ニ托シテ仕ヲ致シ、京師ニ遊ブ、偶マ大覺親王病アリ、諸醫百方効ヲ得ズ、牛山之ヲ診シテ方ヲ處ス、諸醫ソノ毒ヲ憚カリテ議論空集ス、上皇之ヲ聞キ、詔シテ牛山ノ言ニ從ハシム、牛山乃チソノ方法ヲ施シテ、兩月ニシテ癒ユ、コレヨリシテ醫名愈々著ハル、居ヲ二條ニトシ、刀圭ヲ業トス。又書ヲ著ハシ、優遊自適ス、小倉侯ソノ名ヲ聞キ、聘召スレドモ起タズ、侯ソノ嗣則貫ヲ辟ス、ヨリテ則貫ト共ニ來タリ、客ヲ以テ養老ノ俸ヲ受ク、牛山妻妾ヲ畜へズ、子ナシ、甥則貫ヲ養フテ嗣トス、先ヅ歿ス、仍テ門人貞庵（名則道）ヲシテソノ祿ヲ受ケシム、則道乃チ香月氏ヲ冒ス、元文五年牛山年八十五ニシテ歿ス。（近世叢語・日本醫譜・國字醫叢序文）

牛山ハ一氣ノ流行ヲ以テ學說ノ基本トナシ、螢雪餘話五卷ヲ著ハシテ詳カニ之ヲ論ズ。ソノ說ハ固ヨリ宋儒性理ノ說ニ出デシモノニシテ、金・元諸家ノ論說トソノ趣ヲ一ニス、然レドモ牛山ハ『中華ノ醫書トテ誤謬尠カラズ、古人ノ說トテ精確ナルモノノミニアラズ』ト言ヒ、丹溪ノ陽有餘・陰不足ノ說ヲ難ジ、有餘不足ハ皆ナ自然ノ常ニアラズ、人皆ナ嗜慾ヲ恣ニスル故ニ、陰血ヲ耗散シテ陰不足トナルモノナリ、丹溪ガ之ヲ人身ノ常體ト見テ論ヲ立テシハ誤マレリ、張介賓出デテ之ヲ駁スルモ、枉レルヲ矯メテ直キニ過ルヲ免レズ、李挺ガ醫學入門ニ之ヲ陰火論ト改メタルハ、更ニソノ眞ヲ誤マルモノナリト批難シ、他ノ後世家ガ前人ノ論說ヲ株守シテ自カラ辨ゼザルガ如クナラズ、ソノ所說頗ブル識見アリ。

ソノ疾病ヲ論ズルヤ、『四時ノ邪、人ノ元氣ヲ惱マシ、七情ノ過、人ノ元氣ヲ惱ス、又飲食過飽シテ脾胃ニ滯リ、

人ノ元氣ヲ惱マス、是レ外感内傷ノ邪、共二元氣ノ賊ナリ、人ノ元氣ニ氣血、陰陽アリ、故ニ氣虛アリ、陽虛アリ、共二元氣ノ不足ナリ』ト言ヒテ、疾病ハ元氣ノ不足ト、外邪内傷ノタメニ侵サルトノ二様ニヨリテ起ルモノナリト論ジ、而シテ人ノ病ニハ古今時ヲ異ニスルニ依リテ殊別アリ、病ノ形狀モ世ノ變遷ニ從テ相異ナリ、中風ノ如キハ古ト今トソノ證ヲ異ニシ、楊梅瘡ノ如キハ古ニ無クシテ新ニ生ゼルモノニシテ、又病ニヨリテ傳染スル類多シト論ジ、牛山活套・牛山方考・醫學鉤玄・國字醫叢等ノ諸書ヲ著ハシテ治方ノ要旨ヲ擧グ、ソノ言摯實、ソノ說穩健ニシテ取ルベキモノ尠カラズ。

牛山ハ、又婦人壽草ヲ著ハシテ娩産ノ治方ヲ詳說シ、小兒必用記ヲ撰ミテ啞科ノ方則ヲ細論シ、老人養草ヲ著シテ、老人ノ疾病及ビ調護ヲ記述シ、習醫先入ヲ撰ビテ、醫學ヲ修ムルノ順序及ビ醫人ノ道義ニ關スルコトヲ詳叙ス。ソノ引據スルトコロハ、多クハ支那歷代醫家ノ著述ニシテ、自家ノ創見ニ出ヅルモノハ甚ダ尠シト雖モ、諸家ノ萃ヲ拔キ、英ヲ鐘メ、穩健ノ說ヲ立テ、以テ當時ノ後進ヲ誘掖シタルノ功績ハ、決シテ湮沒スベキニアラザルナリ。

折衷派（考證學派）

コノ期ノ醫學ニハ、前段ニ述ベタル如ク、後世家ト古方家トノ二大派アリ、ソノ後世家ハ陰陽運氣ノ說ヲ奉ジテソノ治ハ溫補ヲ主トシ、因循姑息ノ譏ヲ免レズ、古方家ハ、ソノ妄誕ヲ駁シ、古ニ遡リテ仲景ノ方ニ遵フト稱スレドモ、攻撃以外ニ治方アルコトヲ知ラズ、或ハ却テ危害ヲ致スノ弊ナキニアラズ。コレソノ學派ノ創始者ガ時弊ヲ救濟センガ爲ニ立テタル論說ヲ墨守シテ、ソノ眞意ノ存スルコロヲ解セズ、又自我作古ノ說ヲ行ハンガ爲ニ施セル治術ヲ踏襲スルノミニシテ、ソノ條規ニ拘泥シ、一步モソノ範圍ノ外ニ脱スルコト能ハズ。兩派ノ說共ニ甚ダ偏僻ナルヲ免レザルヲ以テ、識見アルモノハソノ偏僻ヲ惡ミ更ニ中庸ノ說ヲ取ランコトヲ欲スルニイタレリ、折衷派又考證學派ト稱スル一派ハ、コノ趨勢ニ乗ジテ興レルモノナリ。

折衷（考證）ノコトハ獨リ我が醫界ニ於テノミナラズ、コノ時儒學ニ於テモ亦ソノ端ヲ發シ、寶曆ノ初メ江戸ノ儒家井上金峨ガ辨徵錄・讀學則ヲ著シテ、徂徠ノ說ヲ駁シ、訓詁ヲ漢・唐ニ取り、義理ヲ宋・明ニ撰ビ、衆說ヲ折衷シテソノ穩當ナルモノヲ採ルベシト唱ヘシヨリ、折衷派又考證派ハ大ニ江戸ニ興リ、出本北山・吉田篁墩・太田錦城・龜田鵬齋等ノ諸塚相踵デ、ソノ說ヲ主張シ、ソノ論說ハ我が醫學ニ著甚ノ影響ヲ及ボスニイタレリ。

コノ時我が醫家ニシテ初メテ折衷ノ說ヲ唱道セルハ望月鹿門ナリ、ソノ說ニ曰ク『唐・宋者、古雅誠醇、要言妙道、是農皇、軒岐、和緩、扁鵲、長沙、華陀所レ傳、而古先之遺也、金・元者、曲說穿鑿、僻論附會、是潔古、河間、知悌、彥修等所ニ主張一、運氣之妄也、明受ニ其弊ニ遺禍至レ今、故無益之書充棟、而紙價徒貴』又曰ク『經者聖哲垂教之則、千載不刊之言也、方者乃不レ然、有二古者一、有二新者一、古者出ニ于先賢試效經驗之餘一、新者全出ニ於後人臆逞無妄之製一ト、乃チ經ハ、秦・漢ニ遡ボリ、方ハ唐・宋ニ迄ビ、經ハ古今通貫ノ義ナレドモ、方ハ千萬變化ナリ、古方信ゼザルベカラズ、新方用ヒザルベカラズトナシ、醫官玄稿ヲ著シテ、古經方ノ當ニ信ズベキモノヲ彙メ、劉・張・羅・朱ノ妄說ヲ排斥シテ餘蘊ナク、而カモソノ古方ハ猶ホ金・元ニモ之ヲ取ルトコロアリ、古今諸家ノ偏取スベカラザル所以ヲ痛論セリ。

望月鹿門、名ハ君彦、三英ト稱ス、享保十一年御番醫師ニ擧ゲラレ、元文二年奥醫トナリ法眼ニ叙セラル、延享二年命ヲ奉ジテ岡本玄治ガ家ニ傳フルトコロノ萬安方ノ序文ヲ認ム、ソノ家書籍ニ富ム、鹿門乃チ百家方書ヲ串穿シ、ソノ考究ノ博、術業ノ精朝野ニ稱セラル、又少壯ヨリ文學ヲ好ミ、服部南郭ノ門ニ遊ビ、貴重セラル、著ストコロ明醫小史・醫官玄稿・又玄餘草アリ。（墓誌・寛政醫家系圖）

望月鹿門二嗣ギテ、折衷ノ説ヲ圭張セシモノ山田圖南アリ、福井楓亭アリ、多紀桂山アリ、而シテ折衷（考證）ノ學ハ多紀氏ノ一家ノ主張ニヨリテ益々盛ナルヲイタセリ。次期ノ醫學ヲ論ズルノ條下ニ於テ之ヲ細論セントス。

山田圖南、名ハ正珍、字ハ宗俊、世々幕府醫官タリ、祖父正朝神童ノ稱アリ、將軍徳川吉宗特ニ命ジテ儒官トナス、父正熙ニ至リテ醫官ニ復ス、圖南幼ニシテ穎敏、儒學ヲ山本北山ニ受ク、明和三年、年十六ニシテ朝鮮使者ニ隨從スルトコロノ醫員ニ接見シ、夙成ヲ賞セラル、好ンデ傷寒論ヲ讀ミ、諸家註釋ヲ聚メ、ソノ正要ヲ摘ミ、章疏シテ之ヲ節解シ、一字ノ義訓モ、參互考訂シテソノ確當ヲ窮ム、著ストコロ傷寒考・傷寒論集成・傷寒檢證・金匱檢證・權量撥亂・敗鼓録・桑韓筆語・天命辨・備用方・骨度辨誤アリ、天朗七年二月歿ス。（寛政醫家系圖・日本醫譜）

福井楓亭、名ハ輓、字ハ大車、京師ノ人、楓亭幼ヨリ大志アリ、祖業ヲ再興セント欲シ、菅隆伯ニ從フテ醫ヲ學ブ、思ヲ典籍ニ潜メ、醫書ノ未ダ印行セザルモノヨリ舶來奇籍ニ至ルマデ百方乞假、涉獵セザルハナシ、是ニ於テ學該博ヲ窮メ、術精巧ヲ致シ、聲譽籍甚、大醫ノ稱アリ、ソノ醫タルヤ、博ク晋・唐・宋ノ良方ヲ取り、集驗良方ヲ著ハシ、博ク古徵ヲ取テ以テ之ヲ治術ニ施サントス、當時行ハルトコロノ古方家ト大ニソノ歸趣ヲ異ニス、天明ノ初召サレテ江戸ニ來リ、醫官トナリ、寛政四年、年六十八ニシテ歿ス。（醫業家譜・墓誌・近世叢語）

* * *

以上論述スルトコロニ依リテ見ルニ、コロ期ノ初ニアリテ専ラ行ハレシハ李・朱醫學ト古方醫學トニシテ、兩派ノ説ハ氷炭相容レザルガ如ク見ユルモ、古方家ノ祖宗タル後藤良山ガ『萬病ハ一氣ノ留滯ニ因ル』ト唱道セシハ、李・朱派ノ祖宗タル曲直瀨道三ガ、治方ニ順氣ヲ主トシテ香蘇散ノ類ヲ用ヒシト全クソノ理ヲ一ニシ、南涯ノ氣血水説ハ曲直瀨道三ノ氣血痰説ノ痰ヲ水ニ代エシマデナリ（第一九二頁參照）。故ニ大體ヨリシテ言ヘバ、所謂古方醫學ト稱スルモノハ、時弊ヲ救ハンガタメニ李・朱醫學ガ秩序上、當然ノ變化ヲナセシニ止マルモノト言フベシ。獨リ吉益東洞ノ萬病一毒説ハ他ノ諸家ノ説トソノ趣ヲ異ニセルモノアリ、實驗ヲ主トシテソノ説ヲ立テ、以テ大ニ從來ノ空論鑿説ヲ打破スルニ力メシモ、コレニ嗣ギテ興リシ考證派ガ、却テ折衷ヲ唱道シテソノ極、遂ニ訓詁箋註ヲコレ事トスルニイタリシガタメニ、醫説ハ却テ平凡トナリ、ソノ弊ハ考證派ガ偏僻ナリト批難シタル、古方醫學ニ於ケルヨリモ尙ホ甚シカリシナリ。（考證派ノコトニ就キテハ、尙ホ次期ノ醫學ヲ論ズルノ條下ニ叙述スベシ。）

和方家

正徳・享保ノ頃、儒學ニ物徂徠・室鳩巢ノ大家アリテ、古文辭ヲ唱道セシ時ニ荷田春滿アリ、國學ノ復古ヲ以テ自ラ任ジ、ソノ門人加茂眞淵、服部南郭・太宰春臺等ト時ヲ同フシテ世ニ出デ、國學ヲシテ當時全盛ノ漢學トソノ隆ヲ比スルニ至ラシメタリ。所謂國學ハ一ニ和學ト稱シ、本邦固有ノ歴史・辭章・法制・有職等ヲ研究スルニアリシヲ以テ、ソノ影響ハ延テ我ガ醫學ニ及ビ、前期ノ末ニ黒川道祐ガ本朝醫考ヲ著ハシテ、大已貴命・少彥名命ニ神ノ功績ヲ擧ゲ、廣ク國史ヲ探リテソノ醫事ニ關スルモノヲ抄録シテ、本邦醫事ノ知ラザルベカラザルコトヲ唱道セルヲ始トシ、コロ期ニ至リテハ森養竹（名ハ共之）アリテ、諸家ニ傳フルトコロノ奇方妙藥ヲ輯メ採用國傳方三卷ヲ著ハシ、三宅意安嗣デ出デテ大ニ和方ヲ研究シ、延壽和方彙函二卷ヲ著ハシ、又俗間ニ傳フルトコロノ灸法ヲ蒐メ、灸炳鹽土傳二卷ヲ撰ビ、以テ和方ノ攻究スベキヲ説ク。茲ニ於テカ和方家ト名ヅクル醫家ノ一派アリテ醫界ノ一隅ヲ占ムルニイタレリ。

二千年來、我が邦醫學ノ師宗タリシ支那醫學ニハ外科的手術ト稱スベキモノアルコトナシ、殊ニ安土・桃山時代ヨリコノ期ニイタルマデハ、世醫皆ナ運氣經絡ノ説ニ惑ヒ、ソノ治ハ溫補ヲ主トシ、方藥スラ猶ホ峻劇ナルモノヲ厭ヒ、外科ニアリテモ一二鍼熨ノ外ニ手術ノ方ヲ用ヒズ、故ニ産科ノ治ニアリテモ、方藥符咒ヲ旨トシ、強テ手術ト言フベキモノヲ求ムレバ鍼刺擦鹽等兒戲ニ類スル者ノミナリシガ、延享・寶曆ノ頃ニ方リ、山脇・吉益ノ諸家崛起シテ醫方復古ノ説ヲ唱道シ、カヲ窮メテ五行運氣ノ妄説ヲ排斥セシ時ニ方リ、賀川玄悦出デテ助産ノ術ヲ講ジ、明和六年産論二卷ヲ著シテ一家言ヲ立ツ、ソノ學師承スルトコロナク、又古人ニ本ヅカズ、皆ナ親歷シテ獨得スルトコロ、ソノ術ハ概ネ古ヨリ無キトコロニシテ、ソノ識發スルトコロモ由來ノ陋習ヲ打破シ、傲然古今ヲ睥睨シ、當時曠古一人トマデ稱セラレ、産科ノ術ハコレニヨリテ一時ニ豹變シタリ。

賀川玄悦、一名光森、字ハ子玄、本姓ハ三浦民、世々彦根侯ニ仕フ、父名ハ長富、槍術ヲ以テ名アリ、玄悦ハソノ庶子ナリ、彦根藩法庶子ノ祿ヲ襲フコトヲ得ザルヲ以テ、七歳ニシテ出デテ母家賀川氏ニ養ハル、依テソノ姓ヲ冒ス、既ニシテ兩親ヲ失ヒ、教ユルニ稼穡ノコトヲ以テセラル、而カモ玄悦才高ク氣大ニシテ、吠畝ノ間ニ老死スルヲ欲セズ、年壯ナルニ及ビ、去テ京師ニ赴ムキ、一貫街ニ住シ、寒襖ニシテ古銅鐵器ヲ買ヒテ生トシ、殆ド窮乏ス、依リテ針治按摩ノ伎ヲ賣リテ自カラ給シ、且ツ古醫方ヲ學ブ、居ルコト數年、適々、ソノ隣居ニ一婦アリ。産ニ臨ミ、兒手膊ヲ露シテ將ニ死セントス、玄悦視テ之ヲ憫ミ、爲ニ之ヲ治スルノ術ヲ構思シ、遂ニ提灯ノ柄ノ鐵鉤ヲ以テ胎ヲ扼ケテ之ヲ娩出シ、隣婦爲ニ免ルルヲ得タリ、玄悦ココニ於テ助産ノコト、藥石ノ及バザルトコロハ手術ニアラザレバ、辨スル能ハザルコトヲ悟リ、淵慮覃精、益々ソノ術ヲ推明シ、遂ニ救護ノ術數法ヲ發明シ、ソノ名四方ニ喧傳シ、明和三年、年六十七ニシテ産論ヲ著ハシ、一家言ヲ立ツ、京洛ノ醫流一時ニ傲視スルモノモ玄悦ノ産術ヲ見テ、之ヲ歎稱セザルモノナシ。明和五年阿波侯ノ聘ニ應ジ、ソノ士籍ニ入り、秩百石ヲ食ム、居ルコト數年、安永六年九月病ヲ以テソノ家ニ歿ス、年七十八、門人相共ニ諡シテ景定先生ト曰フ、二子アリ、伯ヲ玄吾ト曰ヒ、叔ヲ金吾ト曰フ、繼母ト和セザルノ故ヲ以テ出デテ別ニ家ヲ成サシメ、門人岡本玄廻ヲ養ヒテ嗣トナス、玄悦人トナリ魁梧ニシテ膂力人ニ過ギ、手指至テ細長ニシテ之ヲ用ヒルコト亦巧ナリ、嘗テ皇后御産ノ時、難娩ニシテ諸醫治スルコト能ハズ、玄悦召サレテ之ヲ一診シ、手術スベキヲ言フ、奏者乃チ醫案ヲ徵ス、玄悦モト目ニ一丁字ナシ、因テ學問ト技術ト一ニアラザルコトヲ論ジ、且ツ曰ク『子宮口圍凡ソ四寸五分、指ヲ其中ニ入レテ探究ス、之ヲ手術ト曰フ、請フ一竹片太サ四寸五分長一寸許ノモノヲ與ヘヨ』ト、奏者ヲシテ之ヲ執ラシメ、ソノ指ヲ以テ筒中ヲ過ギ、席上皿中ノ饅頭ヲ撮ミ盡ク之ヲ收ム、衆相顧ミテ肅然タリ、仍テ終ニ治ヲ玄悦ニ命ゼラレタリト言フ、ソノ伎ノ精巧想フベシ、玄悦又忠信專愍ニシテ奇ヲ好ミ、任俠ナリ、貧寡孤寡ノ者ノ疾病ニハ必ず匍匐シテコトニ就キ、且ツコレニ施與シ、毫髮ノ心ニ容レザルトコロアレバ貴富輿載ノ招ト雖モ、眉ヲ揚ゲテ肯テ顧ミズ、最モ華言巧飾ノ人ヲ惡ミ、加フルニ詬罵ヲ以テス、故ニ知ラザルモノハ、或ハ以テ狂トナス。ソノ産論ヲ著ハスヤ、皆川淇園之ヲ潤色シ、因テ世ニ出ダスコトヲ得タリ。後、産論大二世ニ行ハル、玄悦淇園ヲ見ル毎ニ泣拜シテ謝スルヲ常トセリト言フ、ソノ眞率概ネコノ類ナリ。(産論附録・賀川家系譜・産論翼序・近世叢語・醫事小言・遊相醫話・日本醫譜・皇國名醫傳・夢見錄)

賀川玄悦ノ産論、四卷。一卷ハ孕有ノ論。治法・治術ヲ論ジ、二卷ハ占房ノ論。治法・治術ヲ論ジ、三卷ハ已娩ノ論。治法・治術ヲ論ジ、四卷ハ産椅及ビ鎮帶ヲ論ズ。ソノ孕育ヲ論ズルヤ、婦人ノ腰形ノ必ず拗曲ニシテ、男子ノ腰形ノ稍直ナルモノト同ジカラザルコトヲ説キ、古來胎孕ノ狀ヲ論ズルモノ、『皆妊娠十月、子頭上ニ向ヒ、將ニ生レントスルニ及ビテ身ヲ轉ジテ下ル』ト言ヘルヲ駁シテ『大抵五月之後、腹中胎、大如レ瓜、必背面而倒首、其頂

當ニ横骨上際ニ而居焉、其胞衣、則蓋ニ于胎之尻上ニ、而當ニ母鳩尾之下ニ、至ニ臨月ニ、按レ之、可レ得下別ニ其體貌ニ、而盡上矣』ト言ヒ、又頭顱柔軟壓匾而出ノ説ヲナシテ『兒在ニ腹中ニ、肌骨極柔軟、蓋分娩之際、雖ニ頭顱ニ、亦壓匾而出。及レ落レ地、則忽然復レ形』ト言フ。共ニ從來ノ醫家が夢想ダモセザリシトコロノ説ナリ。ソノ産位ヲ論ズルヤ、之ヲ正産・逆産・横産・足産・坐産ニ別チ、後ノ三者ヲ以テ理娩ノモノトナシ、救護ノ術トシテ、坐草・杼倒・整横・擧擥・回生ノ五術ヲ擧ゲタリ。

回生術ハ五術中、最モ重要ノモノニシテ、横産ニシテ手ヲ露ハシ、或ハ既ニ臂肘、若クハ膊ニ及ビ母命危キニ瀕スルトキ之ヲ用フ。ソノ法産婦ヲシテ枕ヲ高フシテ蓐上ニ仰臥セシメ、兩足ヲ撇開シ、醫ソノ間ニ居リ、左手食中兩指ヲ陰戸ニ入レ、尋デ右手鉤ヲ執リテ入レ、左手ト兒頭ノ間ニ挿ミ、ソノ善ク拿拄スルヲ窺ヒテ之ヲ挽出シ、引テ肩ニ至リ引キ寄セテハ切取り、或ハ兒頭ヲ碎摧シテ腦髓ヲ抉シ、或ハ鉤ヲ以テ摧裂シ、ソノ切斷ヲナスニハ刀ノ根ニ紙ヲ卷キ、鋒尖纔五六分ヲ露シ、右示指ニ隨ヒテ陰ニ入レ、左手掌ヲ臺ニシテ兒胎ノ體部ニ中ツルナリ、コノ術又之ヲ死胎ノ分娩セザルニ施シ又切碎術ト稱ス。ソノ術固ヨリ粗暴ニ失セザルニアラズト雖モ、産科ノ第一着ノ手術トシテハ實ニ用意周到ノモノト言ハザルベカラズ。

坐草術ハ坐産治法ニシテ、會陰保護ヲ緊要トシ、杼倒術ハ兒ノ左右足ヲ挾捉シ、急ニ引提シテ之ヲ抜クノ法ナリ。整横術ハ横産按回ノ法ニシテ、今ノ所謂回轉術ナリ、擧擥法ハ雙胎娩出法ナリ、コレヲ回生術ニ併セ、占房中ノ、五術ト稱シタリ。

産後ノ治術ニハ六法アリ、(1) 鉤胞(胞衣下り難キモノヲ鉤出スルノ法)、(2) 禁暈(産婦ノ眩暈ヲ發スルモノヲ救護スルノ法)、(3) 遏崩(産後下血ヲ遏止スルノ法)、(4) 納腸(脱腸ヲ環納スルノ法)、(5) 斂宮(子宮脱ヲ復納スルノ法)、(6) 復肛(肛脱ヲ環納スルノ法)、即チコレニシテ、ソノ中最モ重要ノ術トセシハ鉤胞ナリ。

室町時代既ニ産科ノ専門アリ、次デ金創醫アリテ、金創ト産術トヲ併セ施セシト雖モ、ソノ治方ハ婦人良方・産寶等ニ依據シ、手術トシテハ鍼刺・擦鹽等、兒戲ニ類スルモノノミナリシニ、賀川玄悅ノコノ期ニ出デテ、『横逆産ハ藥石ノ治スル所ニアラザルコト』ヲ唱道シ、産前七十五難・産後百二十五難ヲ擧ゲ、之ニ對シテ回生術・鉤胞術等靈活ナル手術ヲ創施シ、以テ因循姑息ノ醫學界ニ一新方面ヲ開キタルハ、實ニ我が産科ノ發達史上ニ特筆スベキコトタリ。

獨リコレノミニ止マラズ、賀川玄悅ハ從來我が邦ノ俗、妊娠五月ニ帶ヲ胸下ニ束ネ、以テ胎氣ヲ鎮メテ上衝セザラシムルト言フノ説ヲ駁シ、却テ之ガタメニ子胎ノ丕側ヲ致スノ害アルコトヲ論ジ、務メテ鎮帶ヲ去ラシメ、又婦人大産ノ後、産椅ヲ用フルノ風習ハ、害アリテ益ナキコトヲ痛論シ、整胎ノ法トシテ、腹部按摩ヲ施シ用フルコトヲ稱揚セリ。

凡ソコレ等ノ論説及ビ手術ハ、古人ニ本ヅカズ又師承スルトコロナシト言フト雖モ、ソノ西洋ノ説ニ取ルトコロアリシハ、産論中ノ記述ニ徴シテ疑フベカラズ、故ニソノ事固ヨリ悉ク玄悅ノ創見ニ出デタリトハスルコト能ハズト雖モ、尠ナクトモ我が邦ニ在リテハ、先賢道ハズ、古籍載スルコトナク、玄悅ガ創唱ニヨリテ、醫家ノ始メテ之ヲ知ルニ至リシモノナリ。而シテ、コノ如ク獨リ産科ニ於テノミナラズ、延テ我が治療學界ニ一新方面ヲ開キタル賀川玄悅ノ産術ハ、ソノ嗣子賀川玄迪ノタメニ更ニ大ニ恢弘セラレタリ。

賀川玄迪、字ハ子啓、後チ藩ノ命ニヨリ父ノ名ヲ襲ヒテ玄悅ト稱ス、本姓岡本氏、出羽國・秋田ノ人、父ヲ玄適ト言フ、ソノ家世々醫ナルヲ以テ、益々ソノ伎ヲ精研セントシ、年二十ノ時、西遊シテ京都ニ赴ムキ、賀川玄悅ノ門ニ入ル、玄悅ニ子

アリ、並ビニ故アリテ別ニ家ヲ成ス、玄悦玄廸ヲ見テ、大ニ喜ビ、世間産家ノ陋弊ヲ蕩滌シテ一家ヲ興スニハコノ人ノ他ニ業ヲ繼グベキモノナシトナシ、遂ニ玄適ニ請ヒテ之ヲ子養シ、女ヲ以テ之ニ配シ、ソノ家ヲ嗣ガシム、玄悦ガ晩年阿波侯ノ徵ニ遇ヒタルトキ、玄廸ヲ薦メテ之ニ代リシカバ、侯コレニ祿百石ヲ給シテソノ藩醫トナセリ、玄悦老テ退隱スルニ及ビ、玄廸ソノ業ヲ繼ギテ、益々之ヲ皇張シ、門人愈々進ミ、治ヲ乞フモノ常ニソノ門ニ盈ツ、玄廸能ク父ノ偉業ヲ繼承シ、別ニ發明補翼スルトコロ多シ、安永四年産論翼二卷ヲ著シ、論及ビ圖ヲ作テ、以テ産論ノ説ヲ詳カニシ、又ソノ言ハザルトコロヲ言ヒ、賀川氏ノ學術、復タ餘蘊ナシ、安永八年十月病ヲ以テソノ家ニ歿ス、年四十一、門人奥劣齋・原南陽・佐々木茂庵等最モ著ハル。(墓誌・賀川家系譜・産論翼序・日本醫譜)

賀川玄廸ノ産論翼ハ玄廸ガソノ父玄悦ノ學術ヲ推衍敷説シタルモノニシテ、産前ノ術ニ按腹(婦人孕三四月際、善用レ此、乃必得ニ其腹内鬱氣大散、脈絡調理ニ、而惡阻之患、亦得ニ速除ニ)・辨治(診ニ婦人妊否ニ)・整胎(理下兒胎居レ偏、或胎將墮、經若水下、或婦人不時顛仆、或致ニ胎動ニ、或右足鬱急、難ニ步行ニ者上)・救癩(救ニ子癩)ノ名稱ヲ設ケ、既ニ玄悦ガ産論ニ唱道セシトコロヲ詳ニ解説シ、或ハ新ニ一ニノ方式ヲ加ヘ、臨産ノ術トシテ探宮(此爲ニ臨産候レ胎之法ニ)・導水(治ニ臨産小便閉ニ法)ノ二法ヲ増シ、占房術中ノ坐草ニ新術三法ヲ加ヘ、産論載スルトコロノ二法ニ併セテ五法トナシ、杼倒ノ三法ニ更ニ三法ヲ増シ、整横・舉擲ノ二法ヲ精シクシ、別ニ拔坐ノ一術ヲ加フ、拔坐トハ坐産ヲ救フノ法ニシテ、玄悦ノ杼倒術ニ修正ヲ加ヘタルモノナリ。産後ノ術ハ産論ノ六法ニ易蓐(難産已救後、産母甚疲、其衣衾穢汚、而難ニ換易ニ者、今爲レ之、設ニ易蓐之法ニ)・洩閉(救下世呼ニ轉胞ニ者上之術)・救瘧(救ニ小産後角弓反張ニ之術)ノ三法ヲ一術トシテ加ヘ、賀川氏ノ二十術、ココニ於テ始メテ備ハレリ。而シテ回生・鉤胞ノ二術ヲ以テ、ソノ最モ重要ニシテ輕シク施スベカラズ、之ヲ施スモノハソノ術ニ習熟セルモノナラザルベカラズトシテ、書中ニ載セザルコトハ産論ニ於ケルニ異ナラズ。

賀川玄廸ハソノ父玄悦ノ術ヲ補修スルコトニ力ヲ致シ、賀川氏助産術ガ之ニヨリテ精緻トナレルコトハ既ニ論述セルガ如クナルガ、ソノ術ハ玄悦ノ實子タル玄吾ノ力ニヨリテモ大ニ恢弘セラレ、賀川氏ノ聲譽ハ之ニヨリテ更ニ大ニ宣揚セラレタリ。

賀川玄吾、名ハ滿卿、字ハ徳夫、有齋ト號ス、惻儻ニシテ任俠、奇節ヲ好ムコト酷ダソノ父ニ肖タリ、繼母ト和セザルノ故ヲ以テ出デテ別ニ家ヲ成シ、産術ヲ以テソノ名當時ニ高シ、著ハストコロ、産道秘訣・産術記・産道口訣、等アリ。(賀川家系譜)

婦人科

賀川氏出デテ産科ハ大ニ興リタレドモ、婦人科ノ發達ハ之ニ反シテ甚ダ著シカラズ、後藤良山ノ病因考ニハ、ソノ婦人門ニ妊娠・産前・産後・經閉・崩漏・帶下・乳岩ヲ舉ゲ、香川修庵ノ一本堂行餘醫言ニハ、ソノ婦人門ニ妊娠惡阻・胎懸・胎煩・半産・産後・鬱冒・帶下・崩漏・乳岩・乳癰ヲ舉グルノミ、吉益東洞以下ノ諸家ハ傷寒ノ講究ヲ專一トシ、雜病ノ治方ニツキテハ精シク記述セズ、コノ期婦人科ノ論説及ビ治方ノ見ルベキモノナキコトハ推シテ知ルベシ。

小兒科^⑩

前期幕府醫官ニ小兒科ノ専門アリ、コノ時民間ニモ小兒科ヲ以テ名アルモノ尠カラズ。寶曆六年、攝津ノ人下津壽泉ガ撰ブトコロノ古今幼科摘要ヲ見ルニ、支那ノ醫書七十四部ヲ引用シ、病門ヲ百十四ニ別チテ、證候及ビ治方ヲ論ジタレドモ、當時ノ小兒醫学家ガ、専ラ師宗トセシモノハ劉方明ノ幼幼新書、寇衡美ノ全幼心鑑、薛良武ノ保嬰全書、王肯堂ノ幼科準繩、萬羅田ノ幼科發揮、錢大田ノ活幼全書、等ノ數書ニシテ、コノ科ノ内容ハ前期ニ於ケルモノト異ナルコトナシ。明和元年豊島清齋、幼科秘録ヲ著ハシ、小兒ノ大患ハ疳眼疳瀉ニアリト言ヒ、主ニ疳疾ヲ詳説シテ、驚風・撮口等ノ症ニ論及セズ、而シテソノ所論別ニ擧ゲテ言フベキモノナシ。柴田元養ノ小兒方（明和七年）ニイタリテ、始メテ法則ヲ千金方ニ取り、古今ノ治方ヲ集メ、一家言ヲ立ツルモノ多シ、蓋シ小兒科モ亦他ノ諸科ニ於ケルト同ジク、コノ頃ニ及ビテ醫方復古説ノ影響ヲ蒙ムリ、爲ニ多少ノ面目ヲ新シムルトコロアリタルナリ。

口中科

薛氏ノ口齒類要ノコノ期ニ、本邦ニ輸入セララルルアリ、又當時江戸ニ津田氏アリ、紀州ニ今井氏アリ、口中科専門ヲ以テ家ヲ成スモノ漸ク加ハレルヲ見ル、而カモソノ論説及ビ治方ニ於テハ敢テ面目ヲ新ニセルモノアルヲ認メズ、齒病ノ如キモ只藥品ヲ用ヒテソノ痛ヲ止ムルノ類ニテ、未ダコレニ手術ヲ施スコトヲ知ラズ、大體ニ於テ安土・桃山時代ノ頃ニ於ケル口中科ト些モ撰ブトコロアルナシ。

咽喉科

張宗良ガ撰ブトコロノ喉科指掌（乾隆四十二年、即チ我が安永六年刊行）ヲノ期ノ末ニ我が邦ニ入りテヨリ、咽喉ノ一科始メテ専門ノ書アリ、ソノ説ニ依レバ『咽以納レ食、喉以納レ氣、納レ食者爲ニ胃脘ニ、而通ニ于脾ニ、從レ土化、納レ氣者、爲ニ肺脘ニ、而通ニ于心ニ、從レ金化、金性燥、其變動爲レ澁、澁則閉塞不仁、故喉病謂ニ之痺ニ、土性濕、其變動爲レ泥、泥壅脹而不通、故咽病謂ニ之腫ニ、』ト言ヒ、而シテ咽腫・喉痺ノ二大類ヲ更ニ數種ニ細別シ、圖ヲ掲ゲテ一タソノ病變ヲ註釋シ、且ツソノ治方ヲ詳述セリ。コノ書直チニ翻刻セラレ、我が邦醫家ノ讀ムトコロトナリタレバ、咽喉ノ病論及ビ治方ガ、之ニ依リテ多少ノ影響ヲ受ケシコトハ尠カラザルベシ。

耳科

文藝類纂、學志ノ條ニ『耳は幕府の醫員添田玄泉、自から耳醫と稱せし有るのみ』ト載セタリ。ソノ年代ヲ詳ニセズト雖モ、耳科ヲ以テ専門トスルモノハコノ頃ニ起リシモノナラン。後藤良山ノ病因考ヲ始メ、當時ノ醫書ニ耳病ノ論ヲ擧グルハ甚ダ粗略ニシテ、聾耳・耳痛・耳聾等ノ數症ニ過ギズ。

鼻科

耳・目・口・齒ハ古ヨリ専門ノ一科ヲ成シ、コノ間ニ至リテ、新ニ咽喉科ノ興レルモノアルニモ拘ラズ、鼻科ハ未ダ獨立スルニ至ラズ。本道ノ諸書中、鼻病ノ一門ヲ設クレドモ、擧グルトコロハ鼻淵・鼻痔・酒齶鼻・鼻不知香臭・鼻涕・鼻閉塞、等ノ數症ニ止マリ、ソノ證候ヲ論ジ、治方ヲ説クコトモ太ダ精詳ナラズ。

眼科 25

眼科ハ前期ニ於ケルト、大體同一ノ程度ニアリ。馬島流眼科ニハ明眼院第二十一世ニ圓海僧正アリ、眼科ノ術ニ秀デタルヲ以テ名アリ。明眼院ノ外ニ大智坊ト稱シテ同ジク馬島眼科ヲ唱道スルモノアリ、ソノ術ヲ傳フルノ書ニ馬島流目藥秘書・眞島大智坊秘書・馬島妙眼院眼藥・眼目圖・麻島灌頂小鏡、等アリ。而カモソノ治方ハ所謂家傳秘授ノ術ヲ蹈襲スルニ過ギズ。

馬島・家里・笠原・井花・竹内・田原・楠原・石川（昌延）・東城（維鱗）、ソノ他眼科専門ヲ以テ標榜スルモノノ外ニ、本道（内科）ノ醫家ニシテ眼病ノ治方ヲ講ズルモノ尠カラズ。コノ時我ガ醫學ニハ復古説盛ニ行ハレシカバ、眼病ヲ論ズルニモ、古方ヲ取り、享保十八年撰ノ玉泉流書傳集（撰者未詳）ニハ素問・靈樞及ビ傷寒論ヲ引用シテ古經方ノ説ヲ採リ、秋山宜修ノ銀海試要（安永五年撰）ニハ龍木眼論以來眼病ニ七十二證ヲ別ツハ多岐望洋ノ憂アリトナシ、又苦寒生氣ヲ害シテ人ヲ誤マルモノ多ク、秘傳専門ノ論ハ陋劣ナリト嘲ケリ、眼病ハ内障外障十八種ニ區別シテ足レリトナシ、内熱・風眼・内傷・青翳・散大・菌毒、漏睛・陽靈（雀目）・陰虛（内障）・抱紅・倒生・瘀翳・破損・疫後・繁小・脫血・疹後・疳眼ノ十八症ヲ擧ゲ、實際ニ依リテソノ説ヲ立テ、原因ニヨリテ發證ヲ別チ、ソノ治方トシテハ内障・菌毒・漏睛、等ニ對シテ針法ヲ施シタリ。コレ空論鑿説ヲ排シ、實驗ニ依リテ古ノ方ヲ取捨セシモノニシテ、明カニ復古説ノ影響ヲ示セルモノナリ。而カモコノ影響ガ眼科専門家ニ及ブコトノ著シカラザリシハ奇トスベシ。

法醫學科

大寶ノ令ニ『廢疾、懷孕、侏儒之類、雖レ犯ニ死罪一、勿散禁』・『凡經ニ癡狂酗酒一、皆不レ得レ任ニ侍衛之官一、』等ノ文アリ、律ニ『其於ニ三ニ等以上尊長、及外祖父母夫人之父母一、犯ニ過失殺傷一、應レ徒、若故毆レ人、至ニ廢疾一、應レ流』・『凡犯罪時雖レ未ニ老疾一、而事發時老疾者、依ニ老疾一論』・『凡合ニ和御藥一、誤不レ如ニ本方一、及封題誤者、醫徒三年』・『凡造ニ畜蠱毒一、及教令者絞』・『凡以ニ毒藥一、毒、人及賣者絞、即賣買而未レ用者近流』等ノ制アリ、²⁶今日吾人ガ所謂法醫學の知識ノコノ際ニ要セラレタルコトハ明カナリ、而カモソノ司獄ニ關スル醫官ノ制ナキヨリ考フレバ、醫學ハコノ際ニ應用セラレズ、從テ法醫學ノ研究セラレザリシコトモ推知セラルベシ。鎌倉・室町兩幕府時代ヲ經テ、江戸幕府ニ至ルマデ、各々刑法ノ制定アリテ、法醫學ノ必要ハ認メラレシモ、我ガ邦ニ始メテ斯科ノ著述アリシハ無冤錄ガ、支那ヨリ輸入セラレタルヨリ以來ノコトナルベシ。無冤錄ハ、元ノ武宗至大元年（我ガ花園天皇延慶元年、西曆一千三百八年ニ當ル）ニ王與ガ、コレヨリ先キ、既ニ世ニ行ハレタル洗冤錄・平冤錄ノ二書ヲ折衷シ、獄事檢驗ノ方則ヲ詳述シタルモノニシテ粗鹵ナガラモ、法醫學書ノ體裁ヲ備ヘタリ。コノ書ノ我ガ邦

ニ入りシハ、イヅレノ時代ナルヤヲ知ラズ。明和五年ニ刊行セラレタル無冤録述ノ跋ニ『斯邦嚮ニ無冤録ト云ヘル書ヲ印行セリ、コレ元ノ王氏編輯スル所ニシテ、朝鮮國ノ諸學士音註ヲ加フル所ナリ、斯邦ニ翻刻セルハ何ノ年、何某刻セルト云フコト審ナラズ、且版モ丙王ノ災ニ値ヒケルニヤ今ハ見ルコト鮮シ』トアリ、ソノ頃既ニ見ルコト鮮シト言ヘル刊本無冤録ニハ正統三年（我が永享十年）ノ序文アリ、依リテ推考スルニ、コノ書ノ我が邦ニ入りシハ室町時代ノ中頃ナリシナラン、然カモコノ書ノ訓點ヲ施シテ、翻刻セラレ、廣ク世ニ行ハルルニイタリシハ、江戸時代ニイタリテノコトナルベシ。

洗冤録ハ宋惠父ノ編述スルトコロ、平冤録ハ趙逸齋ノ校訂セルトコロニシテ著作ノ時代ハ古ク宋時代ニアリト雖モ、ソノ我が邦ニ入りシハ却テ兩書ヲ折衷シテ編述セル無冤録ニ後レタルモノノ如シ、殊ニ無冤録ハ元文元年泉州ノ河合尙久ガ、コレヲ鈔譯シ無冤録述ニ卷トナシテ、梓行セシニヨリ、廣ク世ニ行ハレタリ。

『獄重事也治レ獄固難、斷レ獄尤難、然獄之關ニ於人命ニ者、唯檢屍爲ニ至難ニ、毫釐之差、生死攸繁、苟定檢不レ明、雖下善ニ於治獄斷レ獄者上、亦末ニ如レ之何ニ也』ト、コレ王與ガソノ著無冤録ノ自序中ニ言フトコロニシテ、スベ

テコレ等ノ書ガ獄ヲ司ドルモノノ指南トシテ、檢驗格例ヲ記述スルモノナルコト、之ヲ以テ推知セラルベク、ソノ醫家ノ手ニ成ラズシテ、却テ司獄者ノ撰述ニ出デシハ、今ヨリ見レバ頗ブル奇異ノ事タリ、然レドモ當時ノ醫學ガ、疾病ノ治療ヲ以テ唯一ノ目的トシ、社會ノ事ニハ一切干與セザリシ際ニ方リ、法醫學ガ實際ノ必需ヨリシテ醫人ナラザル人ニヨリテ研究セラレタルハ、寧ロ當然ノコトナルベシ。

無冤録二卷、上卷ニハ（一）屍帳式（檢屍文籍ノ法）・（二）屍帳例・（三）檢帳例等ヲ論ジ、下卷ニハ（一）檢覆総説・（二）驗法ヲ説キ、次テ婦人小兒屍首胞胎・勒死・自縊死・落水投河死・相毆後落水死・棒毆死・刃傷死・刺死・屍首異處・拳手足踢死・辜内病死・自割死・毒藥死・火燒死・湯潑死・病患死・凍死・餓死・杖瘡死・壓死・被人鍼灸當下致死・車碾死・酒食醉飽死・外物壓塞口鼻死・蛇蟲傷死・蟲舉犬咬傷死・壞爛死、等ノ驗法ヲ記述シタリ。

ソノ驗法ヲ説クヤ『從レ頭檢起、解ニ下頭髻一、置ニ髮長多少一、擘ニ開頭髮一、檢ニ頭上頂門一、連ニ額門一有無他故、左右兩大陽穴有無他故、兩眼擘開看ニ雙睛一、鼻孔口齒舌有無他故、兩面臉有無刺號大小字樣行數或已用レ藥取ニ痕跡一、黯懣及成ニ疤痕可下取ニ竹削一篋子ニ於ニ痕處一撻上レ之、即見兩耳連ニ喉下一、有無他故、左右兩大小臂連ニ手指手掌一、黯懣及成ニ疤痕可下取ニ竹削一篋子ニ於ニ痕處一撻上レ之、即見兩耳連ニ喉下一、有無他故、左右兩大小臂連ニ手指手掌一、玉莖有無他故、左右兩大小腿連ニ脚底板十指甲一、有無他故、番ニ轉死人合面一、檢ニ腦後乘枕頂後有無他故一、背看ニ有無杖痕及灸跡腰脊有無他故一、腎看ニ有無新舊官杖痕有無膿血糞門有無他故一』（他故トハ傷損ノ類ヲ謂フ）ト言ヒテ、驗屍ニ一定ノ順序ヲ立テ、而シテ勒死（人ニ絞メ殺サレタルモノ）ト自縊トヲ鑑別シ、水ニ落チテ死シタルモノト、打殺シテ水中ニ投ジタルモノトヲ區別シ、創傷ノ生前ニ生ゼルモノト、死後ニ生ゼルモノトヲ鑑別スル等ヲ始トシ、災死・頓死・中毒死、等ヲ論ジ、之ヲ鑑定スルノ法ヲ擧グルコト、稍々詳ナリ。

洗冤録ハ宋人宋慈（字ハ惠父）ガ撰フトコロニシテ、淳祐七年（我が後深草天皇、寶治元年、西曆一千二百四十七年ニ當ル）ノ自序アリ、蓋シ驗屍ノ法ハ支那ニテ宋代ヨリ始マリ、是ヨリ先キ、内恕錄・結案式等ノ書アリシモ、皆ナ亡佚シテ傳ヲ失ヒ、傳フルモノハ洗冤録・平冤録ノ二書ノミ。而シテソノ洗冤録ハ乾隆年間ニ陳明善ガ校録セルモノアリ、嘉慶年間ニ至リテ洗冤録集證・洗冤録辨正アリテ現ハレ、道光年間ニ至リテ重刊補註洗冤録集證・洗冤録解・洗冤録補遺・洗冤録備攷、等ノ書アリ、洗冤録ノ所説ハコレ等諸家ノ修補ニヨリテ益々精シキヲ致セシガ、別ニ檢驗合參・檢骨圖格・寶鑑編・石香秘錄、等ノ著述アリ、皆ナ洗冤録ヲ祖述セルモノニシテ驗屍ノ法ハ之ニヨリテ、益々詳ナルコトヲ得タリ。而シテコレ等ノ書ハ相踵デ我が邦ニ入り、醫家ノ間ニモ行ハレタリ。

洗冤録 四卷。一卷ニハ檢驗總論・餘傷刃保辜總論・屍格・屍圖・驗屍・洗冤・初檢・覆檢・辨ニ四時屍變一・辨

ニ傷眞偽一・驗ニ婦女屍一・白僵・已爛屍・驗骨（辨ニ生前死後ニ）・論ニ治身骨脈一・滴血・檢地ヲ擧ゲ、二卷ニハ毆死・手足他物傷・木鐵等器磚石傷・踢傷致死・殺傷（辨ニ生前死後ニ）・自殘・自縊・被毆勒假作自縊・溺水（辨ニ生前死後ニ）・溺井・焚死（辨ニ生前死後ニ）・湯潑死、等ヲ論ジ、三卷ニハ疑難雜說・屍傷雜說・論ニ中毒一・服毒死（辨ニ生前死後ニ）・諸毒・意外諸毒ヲ擧ゲ、四卷ニハ急救方等ヲ載セタリ。ソノ檢驗ノ方法ガ外觀的變狀ノ注視ニ止マリシハ、當時ノ學問ノ狀勢ニ於テ已ムヲ得ザルコトナレドモ、ソノ屍ヲ驗スルニ、一定ノ順序ヲ立テ、創傷ノ眞偽ヲ鑑別シ、殺傷・溺水・焚死・服毒死、等ノ屍ニ就キテ、生前死後ヲ辨識スルノ法ヲ講ズル等ハ、條理井然タルモノアリ。

當時我が邦ニ行ハレタル驗屍ノ書ニハ、驗屍楷梯・驗屍辨疑、等數部アリ。而カモ大抵無冤錄述・無冤錄・洗冤錄等ニ據レルモノニシテ、コレニ依リテ當時ノ法醫學ノ程度ヲ推測スルコトヲ得ベシ。

藥物科

古方醫學興リテ、痛快ノ議論ヲ以テ、從來ノ陋習ヲ破レルニ從ヒテ、藥物科モソノ面目ヲ一新セシガ、ソノ先驅ヲナシテコノ科ノ改革ニ力メシモノハ、香川修庵ノ一本堂藥選ナリ。コノ書ハ神農本草・名醫別錄、及ビ唐・宋・元・明諸家ノ本草書ニ錄スルモノヨリ明白的實ニシテ、施シ用ヒテ驗アルモノト、自家ノ毎ニ試ミテ效アルモノト相符スルモノヲ撰ビテ、ソノ試效（主治）・撰修（製法及ビ鑑定）ヲ詳述シ、從來諸家ガ唱道セルトコロノ氣味ノ説ヲ取ラズ、陳新ノ説ヲ用ヒズ、相反・相畏・相惡、等ハ一時偶有ノ事ニシテ、決定ノ説ニアラザルガ故ニ、拘泥スベカラズト言ヒ、引繼報使ノ説、升降浮沈陰陽ノ論ハ俱ニ近世醫家ノ空論ナリトシ、之ヲ實際ニ試ミテソノ效ヲ見ルモノニアラザレバ取ラズ。一本堂藥選正篇三卷中ニ載スルトコロ、藥品一百四十五種ニ過ギズ、之ヲ神農本草ニ三百六十五種ヲ擧ゲ、唐・宋・元・明ノ諸家ノ本草ニ二千餘種ヲ算スルニ比スレバ、ソノ數甚ダ尠ナシ、畢竟コレソノ效驗尤モ著シキモノヲ取りテ、空論臆説ヲ避ケシガ爲ノミ。

元文年間、戸田旭山出デテ、香川修庵ノ藥選ノ説ヲ駁シ、非藥選ヲ著ハス。コレ、香川修庵ガ諸家ノ非ヲ正サントシ、藥選ノ書ヲ撰ミタルハ可ナレドモ、率ネ心ヲ師トシ新奇ヲ立テテ、ソノ説人ヲ誣フルモノアリトシテ、之ヲ駁セルモノナリ。故ニソノ陳新・引繼報使等ノ妄説ヲ排斥スルニイタリテハ、大都ソノ説ヲ同フセリ。

戸田旭山、通稱齋宮、旭山ハソノ號、又無悶子ト號ス。備前ノ人、本姓鈴木氏、出デテ戸田氏ヲ嗣グ、初メ鎗法ヲ學ビ、後チ轉ジテ醫方ヲ修メ、最モ本草學ニ精シ。非藥選ヲ作りテ香川修庵ヲ駁シタレドモ、ソノ才ヲ嘉シ、子ヲシテ就テ學バシム、時論ソノ公平ヲ稱セリ。著ハストコロ、非藥選ノ外、救生堂國史・醫學名數・病名補遺・小成漫錄・文會錄等アリ。（蕉窓雜話・近世叢語・諸家人物志）

香川修庵ノ藥選ガ後世醫家ノ非ヲ辨ジテ、沈湮弊習ヲ排除セント試ミシハ、斯科ノ開展上、特記スベキコトナルガ、吉益東洞ノ藥徵ハ之ヲ藥選ニ比スレバ論說痛切ニシテ、藥品ハ最モ實用ニ適スルモノ五十三種ヲ擧ゲ、第一ニ主治ヲ論ジ、次ニ考徵・互考・辨誤・品考ノ項目ヲ設ケ、考徵ハ藥湯ニヨリテ之ヲ適用スベキ證候ヲ區別シ、互考ハ方ノ徵ナキモノヲ參考シテ考定シ、辨誤ハ古今藥效ヲ誤マレルモノヲ古訓ヲ引テ辨折シ、品考ハソノ藥材ノ眞偽良惡ヲ明カニシタリ、而シテコノ書ニ擧ゲタル藥品ハ、張仲景ノ傷寒論・金匱要略、二書ニ載スルトコロニシテ、ソノ主治・應用ヲ論ズルニモ、一二張仲景ノ説ニ依レリ、而シテ從來ノ藥物科ニテハ藥ノ性能ハ極メテ多般ニシテ、ソノ緒ヲ得難カリシヲ東洞ノ藥徵ニアリテハ、各藥ノ性能ヲ唯一トシ、ソノ多能ナルハ是レ方ノ功ニシテ一物ノ能

ニアラズトナシ、以テソノ萬病一毒ノ説ニ適合セシメ、萬病一毒ノ説ハ藥物一能ノ説ニ依リテ益々ソノ論據ヲ確實ニシタリ。後ニ至リテ東洞ノ門人村井琴山、更ニ藥品一百一種ヲ舉ゲ藥徵續篇ヲ著ハセシガ、ソノ書ノ體裁次序等ハ一ニ藥徵ノ例ニ準ゼリ。

吉益南涯ハソノ父東洞ノ萬病一毒ノ説ヲ修補シ、氣血水ノ説ヲ唱へ、從テ藥物ニモ、氣藥・血藥・水藥ノ三種アリトシ、氣血水藥徵ヲ著ハシテ、ソノ説ヲ詳ニ述ベタリ。ソノ記述ハ之ヲ東洞ノ藥徵ニ比スレバ系統的トナリタレドモ、東洞ガ藥物ノ性能ヲ單一ニ歸セシメントスルノ意ハ、之ガ爲ニ没却セラレタリ。

コノ如クニシテ、藥物科ハ古方醫學ノ振興恢弘セラルルト共ニ傷寒論・金匱要略中ノ藥品ヲ研究スル事トナリ、傷寒論金匱要略藥性辨・古方藥說等ノ書アリ、藥物科ハココニイタリテソノ面目ヲ一新シタリ。

本草科

本草科ハ前期ノ末、稻生若水ノタメニ専門ノ一科トナルニ至リシガ、稻生若水ニ併ビテ、阿部友之進アリ、清國ニ在ルコト十八年、本草學ヲ得テ歸朝シ、精鑿博識ヲ以テ當時ニ名アリ。稻生若水ノ門ニ松岡恕庵アリ、丹羽正伯アリ、野呂元丈アリ、松岡恕庵ハ上條ニ言ヘル如ク千金方藥註・本草一家言・用藥須知・食療正要等ヲ著ハシ丹羽正伯ハ庶物類纂増補ヲ撰ビ、野呂元丈ハ和蘭陀本草和解ヲ著ハシ、共ニ出藍ノ稱アリ。本草ノ學科ハコノ期ニイタリテ大ニ振興シタリ。

鍼科^⑩

コノ期鍼科ニハ江戸ニ杉山ノ一派アリ、専ラ管鍼ノ術ヲ施シ、京都ニ御園中渠アリ、父祖ノ業ヲ承ケテ打鍼ノ術ヲ行フ、コノ二家ノ他ニ駿河・吉田ノ流派アリテ鍼術ヲ以テ著ハレシコト、前期ニ於ケルト異ナラズ。

御園中渠、幼ニシテ聰敏、醫方ヲ淺井東軒ニ受ケ、鍼法ヲ父常倫ニ學ビ、造詣スルトコロアリ、享保十三年齡二十三ニシテ靈元上皇ニ謁シ、鍼師六品ヲ拜シ、明年兼ヌルニ主計權助ヲ以テセラル又上皇ノ殊恩ニヨリ偶髮ヲ許サル、蓋シコレ朝家醫官偶髮ノ始ナリト言フ、同十六年上皇ヲ便殿ニ拜診シ、元文元年勅ヲ奉ジテ后宮ニ拜診シ、同四年五品ニ擢デラル、寛延二年公主ヲ東府ニ護送シ、將軍徳川家重ニ拜謁ス、家重ソノ勞ヲ賞シテ黄金若干ヲ賜ヒ醫官ニ准シテ府内ニ出入セシム、後チ京ニ還テ、主計助ニ轉ジ、寶曆十四年進テ四品ノ爵ヲ受ク、未ダ幾モアラズシテ病ニ罹リ、明和元年八月八日遂ニソノ家ニ歿ス、享年五十九。(御園家系譜)

古醫方ノ勃興スルニ際シテ、ソノ影響ハ鍼科ニモ及ビ、鍼法ノ古ニ復スベキコトヲ説クモノアリ、攝津ノ人菅沼周圭ノ如キ、即チコノ派ノ代表者ニシテ鍼灸則・鍼灸摘要・鍼灸治驗等ノ書ヲ著ハシ、鍼灸ノ復古ヲ唱道セリ。ソノ説ニ依レバ、鍼灸ニ切要ノ經穴ハ僅ニ二十七穴ノミナリトナシ、經絡ヲ言ハズ、太陰太陽ノ經ヲ別タズ、禁鍼穴・禁灸穴ノ類ヲ取ラズ、補瀉迎隨ハ『賊邪ヲ驅リテ癥癖ヲ去ルトキハ則チ瀉ナリ、邪氣ヲ驅去シテ正氣回復スレバ即チ補ナリ』ト言ヒテ、從來諸家ノ説ヲ用ヒズ。人神・行年・血忌ノ類ニハ一切拘泥セズ。ソノ用フルトコロハ毫鍼ニシテ鐵ヲ用ヒテ之ヲ製シ、鍼ヲ用フルニ淺深ヲ豫定セズ、病症ノ輕重虛實ニヨリテ之ヲ取捨シ、ソノ説クトコロ、從來諸家ニ異ナリ。之ヲ要スルニソノ説虛妄ヲ捨テテ、確カニ明驗アルモノヲ取リテ以テ之ヲ施スヲ則トスルナリ。

診科

支那醫學ノ診法ニハ神・聖・工・巧、ノ四知ノ術アリ。ソノ神トハ色ヲ望ミテ病ヲ知ルノ法ニテ、即チ望診ナリ。聖トハ聲ヲ聞キテ病ヲ知ルノ法ニテ、即チ聞診ナリ。工トハ證ヲ問フテ病ヲ知ルノ法ニテ、即チ問診ナリ。巧トハ脈ヲ切シテ病ヲ知ルノ法ニテ、即チ觸診ナリ。コノ四診ノ法ハ素問・靈樞以下ノ諸家、ソノ旨ヲ發明シテ、之ヲ祖述セルモノ尠カラズト雖モ、ソノ說混淆シテ諸篇ニアリ、或ハ論述僅カニ數言ニ出デズ、甚ダ參考スルニ便ナラザリシガ、後世、察病指南・診家樞要・學古診則・診家正眼・診宗三昧等ノ專書アリテ、診法ハ醫學ノ一科トシテ注目セララルニ至レリ。而カモ望・問・聽ノ三診ハ漸ク廢頽シ、切脈ノ一法ノミ獨リ重要視セラレ、後ニハ診法ト言ヘバ、即チ切脈ヲ指スニ至リ脈經・脈訣ノ類ヲ始トシテ、諸家ノ著述甚ダ多シ。我ガ邦ニアリテモ室町時代既ニ診法ヲ精シクスベキコトヲ說キタルモノアリ、曲直瀨道三出デテ醫學ヲ復興セシトキ、醫ノ四知ノ術ヲ詳ニスルヲ要スルコトヲ唱ヘ、ソノ說、察病指南（宋ノ淳祐元年施桂堂著ストコロ）・脈語（明ノ萬曆十四年吳昆著ストコロ）及ビ王叔和脈經等ヲ師宗トシ、別ニ診脈口傳集等ノ著述アリ。古林見宜嗣デ起テ四診ノ術ノ講ズベキコトヲ唱道セシコトアルモ、ソノ後醫方ハ次第ニ紊亂シ、診法トシテハ只脈ヲ切シ舌ヲ望ムノミヲ用フルニ過ギザリキ。コノ期ニ至リ、後藤艮山出デテ、古醫方ヲ創唱スルニ方リ、診法モ亦衆法ヲ參伍適用セザルベカラザルコトヲ說キ、四診ノ外ニ按腹・候背ノ法ヲ加ヘ、ソノ子椿庵ニ至リテ更ニ嗅法ヲ加ヘ、診科ハ精シク攻究セラレタリ。コノ頃診科ヲ講ズルモノニ又石原玄徳アリ、竹田公道アリ。石原玄徳（勝苴保）ハ望問則ヲ著ハシテ望・問・切ノ四診ヲ論ジ。竹田公道ハ古訓診式ヲ著ハシ、古經ヨリ望問切ノ要訣ヲ纂輯シ以テ先聖四診ノ法ヲ明カニシタリ。然レドモ、診科ノ學ハ後藤艮山ノ門人香川修庵ガ、ソノ著、一本堂行餘醫言ノ開卷第一ニ診候ヲ擧ゲ、望形・問證・聞聲・切脈・按腹・視背ノ六法ヲ詳述シ、古人ノ說ノ誤マレルヲ正シタルニ依リテ、始メテ能ク世ニ知ラルルニイタレリ。

(一) 望診

古人ハ專ラ色ヲ望ムヲ以テ望トナシ、鼻・目・口唇・舌・耳ノ色ニヨリテ以テ五臟ヲ候フベシト言ヒ、殊ニ痘疹察色ノ法ノ如キハソノ說甚ダ詳ナルヲ致セリ。然ルニ香川修庵ハ形肉ノ肥瘦ヲ視ルヲ望診ノ第一義トシ、而シテ後ニ氣ノ強弱盛衰ヲ候ヒ、皮膚ノ色澤、毛髮ノ多少、眼・鼻・唇及ビ舌胎ノ狀態ヲ察シ、或ハ口眼喎斜、或ハ鼻扇息肉、或ハ頭上諸患等ヲ見、容止舉動、及ビ顔貌・吐血・痰血・大便・小便、等ヲ望視スベシト說キタリ。シカモ遂ニ化學的検査ニハ及バザシナリ。

(二) 問診

問診トハ證狀ヲ問ヒ、又昔年曾テ病ムトコロヲ質スナリ。香川修庵ガ一本堂行餘醫言ニ曰ク『凡診諸病一、須首問ニ食之多少能否一、次問ニ溺之通閉、尿之硬軟一、此爲ニ最要之先務一、又問ニ心之喜怒哀樂、思慮憂患、氣之聚散鬱暢、或嗜好忌惡一、又當レ問ト昔年所ニ會病一、或嬰兒間所レ患、或宿疾滯患、廢止遠近上、亦宜ニ問尋探索、無レ所ニ遺漏一、』先ツ既往症、及ビ全身ノ狀況ヲ詢究シ、而シテ『宜ニ先問ニ證狀一、亦當ニ委曲詳盡、備及ニ遠末一、』當該疾病ノ證候ヲ尋問シ、ソノ有無應否ヲ查考シ、以テソノ何ノ病タルヤヲ診定スベシト說クナリ。

(三) 聞診及ビ嗅診

古人ノ說ニ聞トハ五音ヲ聞クヲ言フ。ソノ說ニ『五臟ニ五聲五音アリ、聾音相應セバ則チ病ナリ、其香亂レバ則チ必ス病ム』ト言フ。香川修庵ハ之ヲ駁シ、聞トハ病人ノ音聲ノ性狀・呼吸ノ狀態・鼻音・鼾欠・欬嗽・腹鳴、等ヲ聽聞スルモノニシテ、病人ノ臭ヲ嗅グコトモ亦聞診ノ一種ナリ、コレニハ熱臭・膿臭・腋臭・口臭・陰臭・帶下

臭等アリ、五音ヲ聞クノミヲ以テ聞診トスベカラズト説キ、後藤椿庵ノ如キハ殊ニ嗅法ヲ主要ナリトセリ。

(四) 切診(脉學)

切脉ハ古來四診ノ中ニモ最重要視セラレシモノニシテ、古今二千年、醫人ノ多キ、醫書ノ夥シキ、脉ノ事ヲ言ハザルモノハ獨リ明ノ戴思恭ノ證治要訣ノミナリト言フホドナリ。我ガ邦ニアリテ李・朱醫學ノ輸入ニヨリテ、醫學ハ甚ダ浩瀚ノモノトナレリ、今茲ニ脉學ノ大要ヲ示サントスルニ方リテ、先ヅ當時ノ醫家ガ認識セル脉ノ生理ヲ記述スルノ要アリ。

人身二十二經脉アリ、ソノ脉道ヲ流通スルモノハ氣ト血トナリ、ソノ氣ハ衛ニシテ、血ハ榮ナリ、榮衛共ニ皆ナ水穀ノ氣ヨリ分カレテ、清ナル氣ハ榮トナリ、濁レル氣ハ衛トナリ、榮血ハ脉中ヲ行キ、衛氣ハ脉外ヲ行ク、而シテ氣血ノ流通ハ呼吸ニ從ヒ、一呼ニ脉行クコト三寸、一吸ニ脉行クコト三寸、呼吸合セテ一日一夜ニ一萬三千五百息、脉ノ行クコト八百十丈ナリ、又榮衛ノ陽ヲ行クコト二十五度、陰ヲ行クコト二十五度、晝夜合セテ五十度、朝毎ニ手ノ太陰肺經ヨリ流ガレ走リテ、足ノ厥陰肝經ニ終リ、又肺經ニ戻リテ環ノ端ナキガ加シ、故ニ十二經、動脉多シト雖モ肺經ハ脉ノ始ニシテ諸脉ノ會所ナルヲ以テ、寸・關・尺ノ三部ニテ脉ヲ候ヒ、生死ヲ考フベシ。

三部トハ、頭面ヲ上部トシ、手ヲ中部トシ、足ヲ下部トシ、コレニ天人地ヲ配シ、上部ノ病ハ寸口、中部ノ病ハ關上、下部ノ病ハ尺中ニテ脉ヲ診シ(掌後高骨ノ部ヲ關トシ、ソレヨリ指前九分ヲ寸トシ、高骨ヨリ上方一寸ヲ尺トス)ソノ形狀ヲ窺フ、脉ノ形狀ニ七表・八裏・九道ノ別アリ、七表トハ浮・芤・滑・實・弦・緊・洪ニシテ、之ヲ陽脉トシ、八裏トハ微・沉・緩・瀦・遲・伏・濡・弱ニシテ之ヲ陰脉トス、九道トハ長・短・虛・促・結・代・牢・動・細ニシテ之ヲ陰陽兼脉トス。脉ノ形狀ニ兼ネテ脉ノ遲數ヲ檢スベシ、平脉ハ一息ノ間ニ四動、或ハ五動ナルモノニシテ六動七動ハ熱ニシテ三動二動ハ寒ナリ。而シテ脉ノ形狀遲數ハ四季ニヨリテ異ナリ、男女肥瘦ニ依リテ同ジカラズ、六氣七情ニ依リテモ變動アリ、又各病ニハ主脉(病症ニ應ズル脉)及ビ生死ノ脉(豫後ヲトスベキ脉)アリ。

右ニ略述スルトコロハ李・朱醫學ガ唱道セルトコロノ梗槩ニシテ、王叔和ノ脉經、高陽生ノ脉訣ヲ祖述セルモノナルガ、明ノ季時珍ガ瀕湖脉學ヲ著ハシ脉訣ノ誤ヲ正シ、浮・沉・遲・數・滑・瀦・虛・實・長・短・洪・微・緊・緩・芤・弦・革・牢・靜・濡・弱・散・細・伏・動・促・代ノ二十七種脉ヲ別チシヨリ、コノ期ニハ我ガ邦ニモコノ說專ラ行ハレタリ。

後藤良山起リテ古醫方ヲ唱道スルニ及ビ『脉ハ四診ノ末ニシテ、其言贅スルヲ俟タズ、然ルニ漢・唐以來ノ方書專パラ之ヲ唱道シ、本邦醫人之ヲ奉ジテ皆浮辭ニ移ルハ深ク歎スベシ』ト言ヒ。又『一臟、一腑、一陽ノ患ノ脉ニ顯ハルルコトアルベカラズ。運氣、支干、分配、假托ノ言フベキモノアラズ、矧ンヤ脉ヲ切シテ何病何證ヲ辭識スルガ如キハ到底爲シ得ラルベキコトニアラザルニ、妄ニ脉名ヲ立テ、七表八裏九道等ノ說ヲナスハ虛誕モ甚シ』トテ、痛ク之ヲ排斥シ、我ガ學派ニ於テ脉ヲ持スルハ病ノ輕重生死ヲ驗スルノ一法トナスニ過ギズト言ヘリ。香川修庵モ、亦切脉ヲ以テ望・問・按・視ノ諸診ト併セ考ヘテ以テ、可治ト不可治トヲ決シ、生死ノ分ヲ定ムベシトナシ、而シテ脉ヲ持スルニハ密ニ三指ヲ排シ、寸・關・尺ヲ候ヒ、浮沈・遲數・大小・滑澁、等ノ脈形ヲ詳ニシテ、以テ病ノ内外輕重ヲ察スベシト説キタリ。

然レドモ脉ヲ論ズルコト甚ダ詳ナレバ、之ヲ鑿ニ失スルコトヲ免レズ、古醫人ノ病論醫案ヲナスヤ、ソノ脉ヲ言フコト大ニ微細ニ過ギ、無用ノ辨、徒ニソノ煩ニ堪エザルモノアリキ。是ニ於テカ、古益東洞ハ空論ヲ排シ『先レ證而不レ先レ脉、先レ腹而不レ先レ證也』ト言ヒ、又『如ニ留飲家脈、千狀萬形、或無或有、不レ可ニ得而詳ニ矣、夫脉之不レ足ニ以證ニ也、如レ此、然謂ニ五動或五十動、候ニ五藏之氣ニ者、妄甚矣、如ニ其浮沉遲數滑瀦、僅可ニ辨知ニ耳、三

指擧按之間、焉能辨三所謂二十七脉者一哉』ト論ジ、脈論ハ穿鑿ノ説ニシテ實際ニ用ナキモノナリトセリ。

(五) 腹診

腹ヲ按ジテ病ヲ診スルノ法ハ、昔時支那ニ行ハレタレドモ、後ソノ法闕タルコト久シ。我が邦ニテモ天正・慶長ノ頃、竹田定加始メテ按腹ノ法ヲ唱へ、夢分・御園意齋^三・北山道長(診腹法ヲ著ハス)モ亦既ニ腹診ノ説ヲナシ、次デ、寶永ノ頃、竹田定快、診腹精要ヲ著ハシテ、診腹ノ法ヲ論ジ、以テ診法ノ闕ゲタルヲ補ハントセシガ、ソノ法ノ大ニ用ヒラルルニ至リシハ實ニ後藤良山以來ノコトナリ。良山ガ百病ハ一氣ノ留滯ニ生ズルノ説ヲナスヤ、ソノ説ノ本ヅクトコロハ『百年泰平、遊惰之人、腹裏悉結、癥疝内傷諸疾、因^レ是釀成』ト言フニ在リシカバ、腹候ハ最モ重ンズルトコロナリシガ故ニ、從テ腹診ヲ以テ重要ノモノトセシコトハ明カナリ。

後藤良山ニ嗣ギテ、堀井元仙(號對時)アリ、腹診書二卷ヲ著シ、刊行シテ(寛保二年)、之ヲ世ニ行ヒ、大ニ腹診ノ切要ナルコトヲ唱道シ、男女・幼兒・壯老・肥瘦、ニ佐リテ腹象ニ虛實陰陽ノ差異アルヲ察シ、胸腹上下中任脈・天樞、及ビ諸ノ空所(腹ノ四隅骨ノ際ヲ言フ)等ノ部位ヲ定メテ、臟腑ノ虛實、及ビ沈積・動氣ノ淺深ヲ診スベシトナシ、ソノ他淺井圖南(腹診法)高村良務(腹診秘傳)ノ諸家アリテ腹診ノ法ハ稍備ハレリ。

香川修庵ガ、後藤良山ノ門ヨリ出デテ、儒醫一本ノ説ヲ唱フルヤ一本堂行餘醫言ヲ著ハシ、ソノ首ニ診法大種ヲ掲ゲ『吾門以^三按腹^一、爲^三六診之要務^一、何則大概按^三診腹部^一、可^三以辨^三人之強弱^一也、凡按^レ之、腹皮厚、腹部廓大、柔而有^レ力、上低下豐、臍凹入、任脉低、兩旁高、無^三塊物^一、無^三動氣^一、此爲^三無病之人^一、爲^レ強、在^三病人^一亦有三此數項^一、爲^レ易^レ治、凡按^レ之、腹皮薄、腹部隘狹、無^レ力、或堅硬、上高脹、下低鬆、臍淺露、任脉高、兩旁低、多^三塊物^一、有^三動氣^一、筋攣急、靈里動^レ高、此爲^レ弱、爲^三病人之腹^一、在^三病中^一若^レ有^三此數項^一、爲^レ難^レ治、此其大略也』ト説キ、腹診ヲ以テ腹裏ノ癥・疝ノ位置・大小・形狀・硬軟ヲ知り、又、邪熱・肌熱ヲ辨へ、皮膚ノ腫脹・潤澤枯索・肥瘦張弛ヲ察シ、動氣ノ位置・狀態・妊胎・血塊ヲ覺知スルコト等ヲ以テ、コレヲ診法ノ本トナセリ。

吉益東洞ニ至リテハ腹候ヲ重ンズルコト、更ニ甚シク『腹者有生之本、故百病根^ニ於此^一焉、是以、診^レ病必^レ候^レ其腹^一、外證次^レ之、蓋有^下主^三腹狀^一焉者^上、有^下主^三外證^一焉者^上、因^三其所^一レ主、各殊^三治法^一』ト言ヒ、又『先^レ證不^レ先^レ脉、先^レ腹而不^レ先^レ證也』ト言ヒ、疾病ヲ診スルハ主ニ腹候ト外證トニ因ルベシト論ズ。コレ東洞ガ學說ノ理論ヲ捨テテ實驗ニ依レルヨリシテ必ズ當ニ然ルベキトコナリ、東洞既ニ腹候ヲ重ンジ之ヲ主張セシヨリ、門人皆ナ腹診ヲ重ンジ、瀨丘長珪ノ如キハ遂ニ腹診ヲ以テ一家ヲ成スニイタレリ。

瀨丘長珪、名ハ珽、字ハ長珪、江戸ノ人、醫ヲ吉益東洞ニ學ビ、東方ノ一人ト稱セラル、惜哉ソノ術未ダ大ニ行ハルルニイタラズシテ、天明元年病ヲ以テ歿ス、年四十九。(墓誌・皇國名醫傳)

腹診ノ法ハ、竹田定加以來醫家ノ間ニ行ハレシコト既ニ之ヲ述ベシガ、ソノ説ハ臟腑配當、左右分位ニ局シテ、牽強附會ヲ免レズ。後藤・香川・吉益、諸家ニ至リテ按腹ヲ以テ診法ノ重要ナルモノトナセドモ、ソノ説クトコロハ硬軟・弛張、及ビ跳動・拘急・磊塊、等ノ狀ニ就テ、ソノ虛實死生ヲ辨ズルニ過ギズ、ソノ法極メテ簡略ナリ。瀨丘長珪出デテ専ラカ^レ腹診ニ用ヒ、益々ソノ微旨ヲ闡發シ診極圖說ヲ著シテ世ニ公ニスルニ及ビテ腹診ノ法大ニ備ハル。後稻葉文禮、腹證奇覽ヲ著シ、和久田意仲、腹證奇覽翼ヲ著シ、腹診ノ法殆ド餘蘊ナキニ至ル、皆ナ長珪ヲ祖トスト言フ。瀨丘長珪ノ醫ヲ説クヤ三極ヲ立テテ曰ク『方有^レ極、證有^レ極、診有^レ極、極、謂^三之三極^一、諸症千百皆起^レ自^二一根^一、證見^ニ於表^一、根結^ニ於裏^一、診極者此一根結^ニ於裏^一者之謂也』ト、又曰ク『診腹有^レ極』『腹候與^三外證^一、相^ニ爲表裏^一、然外證多而易^レ惑、腹候一而不爽、故腹候爲^レ先』ト、コレニ依リテ診極圖說ヲ著シテ、證候・治驗・病理、等ヲ説キ、且ツ附スルニ彩圖ヲ以テシ、腹診ノ法茲ニ始テ詳ナルヲ得タリ。蓋シ今日ノ打診・聽

診等、所謂理學的診斷法ノ備ラザリシ時代ニアリテハ、按腹ノ法ガ察病ノ上ニ最モ切要ナリシコトハ固ヨリ論ヲ待タズ。而シテ支那ノ醫書、上古黃帝・岐伯、按腹十卷ノ名アレドモ佚シテ傳ハラズ、素問ノ書ソノ端緒ヲ説クノミニシテ腹診ニ及バズ。爾來二千年ソノ法遂ニ支那醫人ノ解スルトコロトナラズ。近年我が邦ノ腹診書ヲ彼ノ邦字ニ翻譯シテ以テ僅ニソノ術ヲ窺フト言フ。我が邦醫學ノ支那ニ基ヅキシモノガ、古醫方ニイタリテ遂ニ之ヲ凌駕シテ、復ニ彼ノ上ニ出ヅルコト亦之ヲ以テ徵スベシ。

(六) 視背及ビ手足看法

香川修庵・後藤椿庵ノ諸家創メテ之ヲ唱フ。視背トハ背肉ノ陷張・脊骨ノ曲折・偏倚・斜歪、等ヲ熟視スルヲ言ヒ、手足看法トハ手足ノ肥瘦・癥痕・痛痺・腫脹、等ヲ視察スルヲ言フ、從來診法ノ一部ニ偏セシモノ、コレニ依リテ全備スルニイタレルナリ。

西洋醫學ノ輸入

西洋醫學ノ始メテ我が邦ニ入りシハ室町幕府ノ末ニシテ、安土・桃山時代ニハ南蠻流外科アリ。江戸時代初世ノ頃ニハ和蘭流外科アリ。和蘭流外科ハ當時我が邦ニアリテ唯一ノ西洋醫方トシテ、専ラ行ハレシモノナレドモ、當時ハ鎖國ノ禁制アリテ、譯司ト雖モ彼ノ邦ノ書ヲ讀ムコトヲ得ザルニヨリ、唯彼ノ邦ヨリ來レル醫人ノ爲ストコロヲ傍觀シ、ソノ話ストコロヲ聽キテ、僅ニ外療ノ術ヲ覺レルノミ。故ニソノ治方ハ傳膏・塗藥、以テ僅ニ金創瘡瘍等ヲ療スルニ過ギザリキ。和蘭陀醫事問答ニ『阿蘭といへども、風寒暑濕、産前産後、婦人小兒の病なきことは有るまじ、悉く膏藥、油藥の類ばかりにては療治ならぬことなり、然れば内科なくてはならぬことなるに、日本にて阿蘭陀流と稱する者は皆膏藥・油藥の類ばかりにて、腫物一通りの療治のみすること不審なり、長崎奉行へついで往く、鎗持の八藏、挾箱の六助も、一ヶ年彼地に居て歸れば、外科になりて八安六齋などと名を付け、阿蘭陀眞傳などと稱するは心得がたきことなり』トアルハ、實ニコレ當時和蘭流外科ト稱セルモノノ實況ヲ穿テルモノナリ、而シテ一二有識ノ士ノコノ間ニ疑ヲ挾ミ、西洋醫方ノ講ゼザルベカラザルコトヲ感ズルモノアリト雖モ、時勢ハ未ダ自由ニ西洋ノ學ヲ講ズルコトヲ許サザリキ。然ルニコノ期ニ至リ、所謂蘭學創始ノ擧アリ、茲ニ始メテ西洋ノ書ヲ讀ミ、西洋ノ學ヲ講ズルコトヲ得テ、西洋ノ醫學ハ始メテ直接ニ我が邦ニ入レリ。蓋シ我が邦醫學ノ歷史上、著甚ノ變革トスベキモノナリ。

蘭學創始

室町時代ノ末、西洋醫術ノ我が邦ニ入りテ、南蠻流外科ココニ始メテ興リ、次デ江戸時代初世ニ和蘭陀外科ノ興リシヨリ二百年、和蘭トノ交通ハソノ間遂ニ絶ユルコトナクシテ、而カモ學問上親密ナル交際ヲ得ザリシハ畢竟嚴刻ナル鎖國政治ノ致ストコロトハ言ヘ、今ヨリ見レバ頗ブル奇異ノ現象ト言ハザルベカラズ。然ルニ寶曆ノ頃、前野良澤トイフモノアリ、吉益東洞流ノ學ヲ奉ジテ古醫方ヲ唱ヘ、醫ヲ以テ中津侯ニ仕ヘシガ一日同藩ノ士某、蘭書ノ殘篇ヲ購ヒ來リテ良澤ニ示シ、コノ文字ヲ讀ミ別ケテソノ意ヲ解クコトヲ得ベキヤト問フ。良澤之ヲ見テ慨然トシテ以爲ラク『國異ニ言殊ナリト雖モ、彼モ眼・口・耳・鼻アルノ人ナリ、我モ亦眼・口・耳・鼻ヲ備フルノ人ナリ同ジク是レ人ナレバ彼ノ述作セシモノ我ノ讀ミ得ザル理アラシヤ』ト、發憤シテソノ讀法ヲ得ントシ、遂ニ幕府儒官青木昆陽ニ就キ、和蘭ノ言語ヲ學ベリ。蓋シ我が邦ニアリテ西洋ノ學術ヲ唱道セシモノハ良澤ヨリ以前、新井白石アリ、白石名ハ君美、字ハ在中、江戸ノ人、贅ヲ木下貞幹ニ執リテ群籍ヲ博覽シ、頗ル才名アリ。元祿六年貞幹ノ薦ヲ以テ甲斐侯ニ仕ヘテ儒臣トナリ、眷遇日ニ渥シ、侯入りテ將軍綱吉ノ儲副タルニ及ビテ、共ニ隨ヒテ、ソノ侍讀タリ、時ニ寶永五年羅馬ノ人漂泊シテ薩摩ニ來リシニ、言語侏儻舌ニシテ、譯官モ通ズルコト能ハズト聞

キ、以爲ラク『語路ノ通セザルハ音轉ノ訛ナルノミ、吾レ能ク之ヲ解クベシ』ト、召シテ江戸ニ致シ、事情ヲ審問シテソノ要領ヲ得タリ、乃チコノ時間クトコロニ依リテ西洋紀聞・采覽異言ノ二書ヲ作りテ上ツリタリト言フ、而カモ白石ソノ人ハ未ダ能ク西語ヲ解セザリシナリ。八代將軍徳川吉宗、和蘭ノ學術ニ精シキヲ知り、且ツソノ書籍ヲ見テ圖畫ノ精密ナルニ感ジ、儒官青木昆陽・醫官野呂元丈ノ兩人ニ命ジテ蘭書ヲ講ゼシム。是ニ於テ昆陽等ハ當時毎年參府シテ都下ニ滯帶スル和蘭甲比丹ニ就テ、蘭語ヲ學ビ、稍々ソノ語ヲ知ルヲ得タリ。後チ又命ヲ奉ジテ長崎ニ赴キ、蘭人及ビ譯官ニ就キ、蘭書ヲ學ビ、五百餘言ヲ傳習シテ江戸ニ歸リ、昆陽ハ和蘭文字略考・和蘭語譯ヲ著シ、元丈ハ和蘭本草和解ヲ著ハセリ。是レ我が醫家ガ西洋ノ學術ヲ講習スルノ濫觴ナリ。昆陽等既ニ蘭書ヲ讀ムノ允可ヲ得タレバ、譯司西・吉雄ノ徒、亦之ヲ切望シ『直ニ和蘭ノ書ヲ讀ムコトヲ得バ從テ翻譯ノ業モ成ルベシ』ト、昆陽ニ依リテ嘆願シ、遂ニ許可ヲ得タリ。是ニ於テ西・吉雄ノ徒日夜コノ學ニ研精シ、茲ニソノ端緒ヲ開ケリ。殊ニ西善三郎トイフハ頌白ノ頃ヨリ和蘭人ピートル・マールンノ辭書ヲ取テ翻譯ニ着手セシニ、ソノ業半ナラズシテ歿セシト言フ。コノ頃長崎ノ儒北島見信ト言ヘルモノ、翻譯天地ニ圖說ヲ著シテ官ニ獻ゼシモ、皆ナ西ノ力ニ因レリト言フ。前野良澤ガ始メテ蘭書ノ譯讀ニ志シ、青木昆陽ニ就テソノ學ノ一端ヲ窺ヒシハ、明和六年ニシテソノ齡四十又七ノ時ナリキ。サレバ昆陽モソノ志ノ厚キニ感ジテソノ蒞ヲ盡シテ傳ヘタリトイフ。然レドモ千古未發ノ業ノ容易ニ成ルベキニアラズ、笈ヲ長崎ニ負テ譯司吉雄・檜林等ニ就キ疑ヲ叩クモ、譯司ハ固ヨリ言談接晤ヲ通ズルノミニシテ讀書譯文ノ暇ナケレバ幾回討論スルモ、更ニ詳審ナルコトヲ得ズ、依リテ彼ノ邦釋辭ノ書、并ニ醫術ノ書數部ヲ購ヒ、江戸ニ齎シ歸リ、日夜手ヲ釋カズ。昆陽并ニ長崎ノ譯司ヨリ傳エタルトコロノ六百餘言ヲ據トシ、蘭人マールンノ辭書ヲ取テ彼是校考シ、既ニ知ルトコロニ依リテ未ダ知ラザルトコロヲ推シ、以テ稍々ソノ端緒ヲ成スコトヲ得タリ。

前野蘭化、名ハ憲、通稱良澤、字ヲ子悅ト言ヒ、樂山ト號セリ。家世々醫ヲ以テ中津侯ニ仕ヘテ二百石ヲ領セリ。幼キ時ニ父母ヲ失ヒ外舅淀侯ノ醫員宮田全澤ニ養ハル、全澤性頗ル寄僻ニシテソノ好惡スルトコロ、常人ノ好惡スルトコロニアラズ、ソノ蘭化ヲ教育スルヤ亦常ニ異ナルトコロアリ、常ニ蘭化ニ誨ヘテ曰ク『世ニ廢タルベシト思フ藝術ヲバ能ク學ビ置キテ後ノ世マデモ絶サザルコトヲ謀ルベシ』・『世ノ人ノ既ニ打棄テテナサヌコトハ之ヲ取出シテ世ノ中ニ存シ置クコトヲツトムベシ』・『世ノ人ノ爲スコトヲノミナサバ一生涯空シク人ノ後ニ居ルモノナリ、苟モ男タルモノハ必ズ一事ハ人ノナサヌコトヲ創メテ、以テ世ノ先導者タランコトヲ心ニ懸クベシ』ト。蘭化幼ニシテソノ薰陶ヲ受ケ常ニ之ヲ以テ心ニ銘ズ。ソノ所行亦常人臆度ノ外ニ出デ、遊藝ニテモ世ニ廢タリシ齣節ヲ學ビテソノ秘曲ヲ窮メ、猿若狂言ノ會ナドニモ臨ミテ之ヲ習ヒタリト言フ。年四十七ニシテ蘭語ニ志シ、幕府ノ儒官青木昆陽ノ和蘭ノ言語ニ通ズト聞キ人ヲ介シテソノ塾ニ就キ、日夜孜々和蘭ノ書ヲ學ブ。昆陽亦志ノ厚キニ感ジテ記憶スルトコロノ五百餘言ヲ誦セシメ、且ツ和蘭文字略考ヲ與ヘテ講讀ノ法ヲモ授ケタリト言フ、蓋シ昆陽ハ延亭ノ頃幕府ノ旨ヲ承ケテ醫官野呂元丈ト共ニ長崎ニ赴キ、西・吉雄等ノ譯司ノ家ニ就テ蘭語ヲ修メタルナリ。

蘭化ガ青木昆陽ニ就テ始メテ和蘭言辭ノ一端ヲ窺ヒシハ、明和六年ニシテソノ齡四十七ノ時ナリ。昆陽亦ソノ志ノ篤キニ感ジテ蘊ヲ盡シテ之ニ傳ヘタレド、モト是レ千古未發ノ業ナレバ容易ニ會得スベクモアラズ、然ルニソノ翌年蘭化藩侯ニ從テ中津ニ赴クコトアリ、因テ侯ニ請フニ百日ノ暇ヲ得テ長崎ニ遊學センコトヲ以テス、藩侯賢明ニシテコノ學ノ有益ナルヲ知り且ツ深く蘭化ヲ信ズルトコロアリ、直ニソノ請ヲ許シ且ツ諭シテ曰ク『汝今和蘭學ニ從事セントス其志甚ダ善シ、然レドモ凡ソ事ハ兩途ニ互ルベカラズ、汝其志ヲ遂ゲント欲セバ醫業ヲ廢シテ心ヲ此ニ專ニスベシ、予必ズ汝ガ志ヲ助クベシ』ト、蘭化感泣シテ退キ、直チニ旅裝ヲ調ヘテ長崎ニ至リ、譯司吉雄・檜林等ニ交リ因テ昆陽ヨリ受ケシ五百餘言ノ外ニ、又二百餘言ヲ記スルヲ得タリ、既ニシテ期逼リ志ヲ得ズシテ江戸ニ歸レリ。

明和八年三月四日小塚原ノ刑場ニテ罪囚ノ觀臟ノ擧アリ、ソノ前夜友人杉田玄白書ヲ寄セテ共ニ往テ觀ンコトヲ勸ム、明朝

蘭化一ノ蘭書ヲ懷ニシテ之ニ赴ク、玄白等亦至ル。蘭化ソノ書ヲ披キ衆ニ示シテ曰ク、是ターヘル・アナトミアト言フ。和蘭解剖ノ書ナリ。余前年長崎ニ往キシトキ之ヲ獲タリト、玄白モ亦近頃一解剖書ヲ得タリ、因テ之ヲ披クニ、同一同版ノ書ナリ、一坐手ヲ拍テソノ奇遇ヲ感ズ、既ニシテ觀臟ノ場ニ臨ム、ソノ圖ヲ以テ之ヲ目撃スルトコロニ比スルニ一々吻合シテ毫厘ノ差アルコトナシ。是ニ於テ益々蘭說ノ信ズベクシテ漢說ノ疎漏ナルコトヲ知り、歸路玄白等トソノ書ヲ翻譯スルコトヲ協議シ、翌日ヨリ直チニ同志ヲ自宅ニ會シ自カラソノ盟主トナリ、杉田玄白・中川淳庵・桂川甫周等ト共ニ翻譯ノ業ニ從事シ歲ヲ閱スルコト四年ニシテ、ソノ業始メテ成ル解體新書コレナリ。

蘭化既ニ千載ノ鴻業ヲ成シ且ツコノ學ノ筌蹄トナルベキ和蘭譯文略・蘭譯筌・助語參考、等ノ著述アリテ、盛名四方ニ弘マリ欽仰ノ人士先ヲ爭テ蘭化ノ門ニ入り、ソノ精說ヲ質問セリ。中川淳庵・桂川甫周・源昌綱・嶺春泰・石川玄常・桐山正哲・大槻玄澤・宇田川玄隨・司馬江漢、等ハソノ選ナリ、コレ等ノ諸子蘭化ノ門下ニアリテ蘭書ヲ講讀シ、月ヲ累ネ年ヲ經テ翻譯ノ書數部ニ及ベリ。

然レドモ蘭化ハコノ學ヲ以テ終身ノ業トナシ、盡ク彼ノ邦ノ言語ニ通ジソノ力ヲ以テ西洋ノ事態ヲ知ラントノ大望アリシユヘ、世間浮華ノ人ト交ラズ、天性多病ナリト稱シテ常ニ戸ヲ閉ヂテ外ヘモ出デズ、心ヲコノ學ニ潛ムルコト終始一日ノ如クナリシトゾ、晩年退隱シテ居宅ヲ根岸・貝塚ニ築キシガ病起ルニ及ビテ、女甥小島春菴ノ家ニ移リ、遂ニ歿セリ、享年八十又一、時維享和三癸亥年十一月十七日トゾ、ソノ墓ハ下谷・池ノ端慶安寺ニアリ、碑面ニハ樂山堂蘭化天風居士ノ九字ヲ記スルノミ。蘭化、柏木氏ヲ娶リ、一男二女アリ。男名ハ達、字ハ子通、良菴ト稱ス、先ヅ歿ス。長女ハ未ダ算セズシテ歿シ、次女ハ小島春菴ニ適ケリ。義子良叔病アリテ家政ヲ修ムルコト能ハズ、後チ藤塚知明ノ子君敬ヲ養フテ義孫トナセリト言フ。(蘭化先生傳・蘭學事始・蘭學楷梯)

小塚原腑分(觀臟)

天ソノ道ヲ開カントシ、人ソノ時ニ遇フ、焉ゾソノ事ノ成ルノ機ナカラシヤ、時ナル哉、明和八年三月四日、千住・骨ヶ原ニ腑分ノ學アリ、杉田玄白ハ前野良澤・中川淳庵、等同人ト共ニ行テ之ヲ觀ル。コノ時良澤ハ一冊ノ蘭書ヲ懷中ヨリ出シ、披キ示シテ曰ク、『是ハターヘル・アナトミアトテ、和蘭解剖ノ書ナリ、先年長崎ニ於テ之ヲ購ヒ求メタリ』ト、玄白モ亦近日手ニ入りタル解剖書アリトテ、披キ見ルニ、同書同版ナリ、コハ誠ニ奇遇ナリトテ、一同手ヲ拍テ感歎セリ。良澤ハ更ニソノ書ヲ披キテ、コレハ「ロング」トテ肺ナリ、コレハ「ハルト」トテ心ナリ、コレハ「マーズ」トテ胃ナリナド、長崎遊學中ニ習得セシトコロヲ以テ指シ教ヘシニ、固ヨリ漢說ノ圖ニハ似ルベクモアラネバ、列坐ノ人々モ心中イカニヤト疑惑シタリ。既ニシテ解剖ノ場處ニ至リ、穢多ノ屍ヲ解キテ心・肝・膽・胃等ヲ指シ示スヲ和蘭解剖圖ニ照スニ復タ小差ナシ、更ニ曬ストコロノ骨骼ヲ拾ヒ、參互照合シテ、益々漢說ノ謬妄ナルヲ悟リ、蘭說ノ信ズベキヲ知レリ。是ニ於テ玄白等ハ大ニ感憤スルトコロアリ、實驗ニ據リ譯書ヲ作り、以テ世人ヲ警醒セントシ、良澤ヲ以テ盟主トシ、ソノ翌日鐵砲洲ナル良澤ノ宅ニ會シ、茲ニ始メテターヘル・アナトミア (Tabulae anatomicae) 翻譯ノ大業ニ着手シタリ。

解體新書

ターヘル・アナトミア 翻譯ノ學ハ良澤ヲ盟主トシテ、杉田玄白・中川淳庵・桂川甫周・嶺春泰・石川玄常・桐山正哲ノ諸子會員トナリ、毎月數回、日ヲ定メテ相會シテ原書ノ文意ヲ考定セシナリ。然レドモコノ時、蘭語ヲ解セシハ良澤一人ノミ、良澤トテモ僅々六七百バカリノ蘭語ヲ諳記セルニ過キズ。ターヘル・アナトミアニ對シテハ、恰モ異邦ニ漂泊シテ東西ヲ辨ゼズ、暗夜ヲ獨行スルガ如クナリキ、而カモ玄白・良澤等同人ハコノ如ク、忖度臆測、一行ノ文義ヲ解クニ數日ノ精神ヲ費シ、猶且ツ解スベカラザルコトアルモ、毫モソノ志ヲ屈セズ、居ルコト歲餘ニシテ、一日十行ヲ譯スルニ至リ、實ニ重淵ヲ探テ龍珠ヲ得ルノ思アリ、玄白ハ乃チ筆ヲ執テ稿ヲ起シ、歲ヲ閱スルコト四、稿ヲ易ユルコト十一回ニシテソノ書始メテ成ル、名ヅケテ解體新書ト曰フ。外科醫方ノ西洋ヨリ傳ハリテ

ヨリ二百年、人ノ之ヲ望ミテ而シテ未ダ企テ及バザリシトコロノモノ、今杉田玄白、前野良澤、等ノコノ偉業ニ依リテ之ヲ得タリ。

杉田玄白、名ハ翼、字ハ子鳳、九幸、又鸚齋ト號ス。家系ハ近江源氏ニ出ヅ、始メ間宮ト稱セシモ、數世ノ祖某、移テ武藏國久良岐郡杉田ノ里ニ居リシヨリ、姓ヲ改メテ杉田ト稱セシト言フ、父甫仙ハ和蘭流外科ニ精シク、若州酒井侯ニ仕ヘテ祿二百五十石ヲ領シ、母ハ蓬田某ノ女、玄白ヲ江戸ノ邸ニ生ム、娩産頗ブル難ク、玄白誕ルルヤ母氏ハ終ニ絶命ス。傍人皆ナ産婦ノ暈倒ヲ救ハントシテ初生兒ノ事ニ及バズ、既ニ死セシモノナラントシテ尊側ニ置ク。後チ之ヲ顧ミルニ、尙ホ命脈ヲ存セシヲ以テ、哺乳育養シテ漸ク生長スルニ至レリ。年甫メテ十七八歳ノ頃、幕府醫官西玄哲ニ就テ外科ヲ學ビ、又宮瀨龍門ニ從テ經史ヲ講ジ、研精刻勵、業大ニ進ム、齡廿五歳ニシテ、俸五口ヲ賜フ、玄白以爲ラク、俸五口ヲ以テ父ノ給ヲ待ツベカラズト、由テ父ノ許ヲ得テ、侯ニ請願シ、居ヲ都下ニトシ、屢々火災ニ遇テソノ居ヲ轉ジ、齡卅七歳ノ時、父甫仙歿セシヨリ居ヲ新大橋ノ中邸ニ移シ、次デ蘭學創始ノ業アリ、是ヨリ先キ玄白年二十二ノ頃、同僚小杉玄適ノ京都ヨリ歸ルニ遇ヒ、山脇・吉益等ノ諸家京師ニアリテ古醫道ヲ唱フル事ヲ聞キ、憤然トシテ我ガ醫學ノ舊染ヲ洗ヒ、面目ヲ改メザルベカラザルコトヲ信ジ、前野良澤ト共ニ蘭館ヲ訪ヒ、蘭醫バブル及ビ譯司西・吉雄等ニ親炙シ、益々和蘭醫方ノ精緻ナルコトヲ知ル、偶々明和八年三月四日、一婦人ノ屍ヲ小塚原ニ解キ視ルニ及ビテ、遂ニ醫學ノ眞理ハ和蘭ニアルコトヲ信ジ、前野良澤等ト相謀リテ、一社ヲ興シ、中川淳庵・桂川甫周・石川玄常・桐山正哲ノ諸家ト共ニ、クルムスノ解剖圖譜ヲ翻譯セントシ、年ヲ經ルコト四年、稿ヲ易ユルコト十一回、安永三年秋八月ニ至リテ解體新書、四卷トシテ、之ヲ刊行シ、世人ヲシテ始メテ和蘭醫學ノ眞相ヲ知ラシメタリ、玄白又家學ヲ全備セシムルノ志アリ、漢土ノ醫書中ヨリ外科ニ係ル確言ヲ鈔出シ、輯メテ瘍家大成ヲ成セリ。玄白著ストコロ、別ニ蘭學事始・形影夜話・狂醫之辯・野叟獨語、等ノ著述アリ。文化十四年四月、年八十五ニシテ歿ス。(蘭學事始・形影夜話・日本醫譜)

中川淳庵、名ハ鱗、若狹侯ノ醫員ナリ、蘭學ヲ好ミ治療ニ通ゼリ。ツンベリーノ日本紀行ヲ見ルニ、ソノ江戸滞在ノ記事中ニ中川淳庵ノ事アリ、ソノ鑛物學・動物學及ビ本草學ニ通ジ、又和蘭ノ言語ヲ能クスルコトヲ説ケリ、天明六年六月歿、年僅カニ四十八歳。(中川淳庵先生実蹟)

石川玄常、名ハ世通、字ハ子深、處士タリ、初メ京師ニ赴キテ、醫ヲ修メシガ蘭學ノ勃興ヲ聞テ急ニ江戸ニ歸リ、同學諸氏ト共ニ蘭學ヲ研鑽セリ、後チ一橋侯ノ侍醫トナル。

桂川甫周、名ハ國瑞、字ハ公鑑、月池ト號ス、曾祖甫筑、名ハ邦教、本氏森島、大和 蟹幡村ノ人、業ヲ松浦藩醫嵐山某(甫安)ニ受ク、松浦侯某ヲシテ長崎ニ赴キ、蘭人ニ親炙シテ外科方ヲ受ケシム、甫筑之ニ學ビ、出藍ノ譽アリ、某ソノ才ヲ愛シ、之ニ謂テ曰ク、吾ガ道ノ流ヲ傳フルモノハソレ汝乎ト、因テ氏ヲ桂川ト命ズ。蓋シ京師桂川、源ヲ嵐山ノ北ニ發シ波流漸ク大ナリ、故ニ某取テ以テ意ヲ寓スト言フ。甫筑寶永元年幕府ノ辟ニ應ジテ侍醫トナリ、尋テ法眼ニ叙セラル。甫筑ノ子、國華、亦甫筑ト稱ス、國華ノ子、國訓、三甫ト稱ス、累世和蘭外科ヲ以テ幕府ニ仕ヘ、甫周二至ルマデ四世、箕裘相承ケ、ソノ術大成ト稱ス、明和九年二月、甫周年甫メテ廿二、臺命ヲ以テ和蘭貢使ト對話ス、安永六年十二月侍醫ニ擢デラレ、天明三年十二月法眼ニ叙セラル。時ニ閣老田沼意次、政ヲ執リ權ヲ專ニシ、ソノ嘗テ己ノ意ニ忤フヲ以テ、之ヲ誣テ曰ク、『甫周容貌甚麗、侍醫ノ列ニ居リテ宮闈ニ出入セシムベカラズ』ト、遂ニ之ヲ黜ケテ外班ニ列ス、寛政四年、魯西亞我が漂民幸太夫・磯吉等ヲ松前ニ送致ス、皆伊勢ノ舵師ナリ、本邦未ダソノ事情ヲ悉サズ、世論頗ブル洶々タリ。甫周乃チ之ヲ蘭書ニ徴シ、魯西亞志、一卷ヲ鈔譯ス。時ニ將軍家齊新ニ立チ、弊政ヲ一洗ス。是ニ於テ、甫周再ビ侍醫ニ舉ゲラル。寛政五年九月二十二日、官、幸太夫等ヲ吹上苑ニ召シ、將軍親ラ彼國ノ風土政體ヲ問フ。幸太夫等曰ク『魯人略ボ皇國ノ事ヲ知り、桂川甫周アルヲ知ル』ト、甫周時ニ侍坐ス、侍臣即チ指シテ曰ク、『桂川甫周ハ即チ是ナリ』ト、將軍大ニ歡賞ス、因リテ甫周ヲシテ二人ニ就キテソノ見聞スルトコロノ風俗制度ノ概ヲ記セシメ、命ジテ北槎聞略ト曰フ。明年、和蘭貢使來ル甫周之ニ就テ魯國事實ノ鈔本ヲ得、又之ヲ譯シ、魯西亞略記ト名ヅク。是ヨリ先キ、幕府醫學館ヲ神田・佐久間町ニ設ケ、醫

官ノ子弟ヲ教育シ、多紀元德（藍溪）及ビソノ子元簡（桂山）相繼テ教諭トナリ、之ヲ統理ス。寛政六年新ニ甫周ヲ擧ゲテソノ教諭トス、外科ニ教諭アルコトココニ始マル。文化五年六月二十一日病ヲ以テ歿ス、享年五十又九。芝・二本榎上行寺ニ葬ル。甫周子ナシ、多紀道訓ノ子甫謙ヲ養テ嗣トナス。（桂川家系譜・蘭學事始）

桐山正哲、ソノ傳ヲ佚ス。

解體新書既ニ成レリ、而モ未ダ之ヲ世ニ公ニスルニ至ラズ、蓋シ是ヨリ先キ後藤梨春、紅毛談ヲ著シテコレヲ上梓セシニ、官命ジテソノ梓ヲ毀タシメシコトアリ、乃チ玄白ハ先ヅコノ書ヲ幕府ニ上リ以テ嫌ヲ避ケントシ、法眼桂川甫三ニ因テ一部ヲ闡奧ニ上リ、別ニ老中ニ呈セリ。又、ソノ從弟吉村辰碩ニ托シテ、コレヲ九條關白・近衛准后・廣橋亞相ニ上ル、各々和歌ヲ賜フテ之ヲ賞セラレタリ。茲ニ於テ遂ニコノ書天下ニ公ニセラルルニ至レリ、時ニ安永三年甲午ノ仲秋ナリ。玄白自カラソノ書ニ序シテ曰ク『凡讀ニ斯書ニ者宜レ改ニ面目ニ也、漢土古今醫家、說ニ藏府骨節ニ者、不レ爲レ不レ多焉、而其古者間有下窺ニ一班ニ者上焉、雖ニ漆桶掃帚ニ亦可レ取也、至ニ乎後世馬玄臺、孫一奎、滑伯仁、張景岳輩ニ所レ論、三焦椎節者、皆相齟齬、唯阿ニ其所ニレ好、臆度傳會、千古遂不レ歸ニ一也、吁鹵莽亦甚矣、夫藏府骨節、其位置有二所ニ差焉、則人以レ何乎立、治因レ何乎施、斯方先輩、欲レ發明之、間有ニ解剖而視者ニ焉、然猶ニ乎舊染ニ之際、見下厥藏府與ニ舊說ニ左者上、則徒狐疑殆類ニ燕人忘ニ燕焉、率不レ能ニ臚分ニ、以歸ニ滅裂ニ也、又或震揭ニ旗鼓ニ、亦皆不レ知ニ解體之法ニ、徒屬ニ孟浪ニ、豈不レ憫乎、世雖レ有ニ豪傑士ニ、汚習惑ニ乎耳目ニ、未レ能下披ニ雲霧ニ而見中晴天上也、故苟非下改ニ面目ニ者上、則不レ能レ入ニ其室ニ也、嗚呼人有レ能、有ニ不能ニ、余之不才、斷々無ニ他技ニ、唯獨於ニ斯業ニ、專精得ニ以明レ之、誠無レ慚ニ乎古之人ニ、而其所ニ權輿ニ、要在レ改ニ面目ニ也』蓋シコノ如キ言說ハ古醫方家ガ李・朱醫學ノ妄ヲ辯ゼシヨリモ劇烈ノ感ヲ時人ニ與ヘシモノニシテ、固ヨリ時人ノ意外トスルトコロナリシナリ。

解體新書ノ一タビ世ニ傳ハルヤ、天下ノ士、始メテ西洋ノ國ニ究理實測ノ學アリテ、ソノ治術ノ妙自カラコノ間二度越スルコトヲ知り、穎悟特達ノ士、雲霞ノ如ク都下ニ集マリ、皆ナ杉田玄白ト前野良澤トノ門下ニ在リテ、益々斯學ノ開發ニ力メタリ。中ニモ、桂川甫周・中川淳庵・源昌綱・嶺春泰・石川玄常・桐山正哲・大槻玄澤・宇田川玄隨・森島甫齋・司馬江漢、等ハソノ選ニシテ、コレ等ノ諸子、互ニ蘭書ヲ講讀シ、月ヲ累ネ年ヲ經テ、翻譯ノ書數部ニ及ベリ。瘍醫新書・和蘭局方・和蘭藥譜・海上備要方・和蘭藥選・八刺精要・五液精要・內科選要・六物新志・蘭學階梯・紅毛雜話、等ヲ始トシ、天文星象及ビ内外治療・技術末藝等ノ諸書數フルニ暇アラズ、遂ニ所謂蘭學ノ一派ヲ成スニイタリ、西洋ノ醫學ハ之ニ依リテ始メテ直接ニ、我方邦醫家ノ學習スルトコロトナレリ。

解剖學 32

初メ長崎通詞ガ耳聞面晤ニ依リテ傳ヘタル西洋醫方ハ理論ノ最モ尠ナキ外科手術ナリシト同ジク、江戸醫家ガ西洋醫書ノ譯註ニ依リテコノ期ニ傳ヘタル西洋醫方ハ解剖學ニシテ、實驗ニ依リテ支那醫說ノ虛妄ヲ打破セントスルニ方リテコノ科ノ如キ實驗記載學ニ依ルコトヲ得タルハ偶然ノ幸福ナリシナリ。

是ヨリ先キ、吉益東洞出デテ、親試實驗ニ依リテ雄渾斬新ノ說ヲ立テ、一世ノ耳目ヲ聳動シタレドモ、ソノ親試實驗ガ臨床治療ノ範圍ニ止マリ、臟腑ノ如キハ治療ニ益ナシトシテ之ヲ顧ミザリシガ爲ニ、晋・唐以來二千年來ノ空論鑿說ヲ排斥スルニ尙ホ奇拔ノ理論ヲ以テセルノ觀ナキニアラズ。然ルニ東洞ト時ヲ同フシテ京都ニ山脇東洋アリ、後藤良山ノ門ニ出デ、香川修庵・吉益東洞ト併セテ古方家ノ泰斗ト稱セラル。ソノ唐後諸家ノ荒誕無稽ヲ覺ト

ルヤ、第一二古來ノ内景說ニ疑ヲ容ルトコロアリ、素問・靈樞・難經等說クトコロノ信ズルニ足ラザルヲ以テ、獺ヲ解テソノ臟腑ヲ實視シ、遂ニ進ンデ、刑屍ヲ剖觀シ、實地ニ就テソノ眞ヲ觀、明カニ舊說ノ妄ヲ辨ズルヲ得テ藏志ヲ著ハシ、以テ千古ノ瞑蒙ヲ發キ、濟生ノ標準ヲ掲ゲタリ。茲ニ於テカ、我が邦始メテ實驗ニ依レル解剖學アリ。

山脇東洋、名ハ尙徳、字ハ玄飛、又子樹、初メ移山ト號シ、後東洋ト改ム。本姓ハ清水氏、出デテ醫官法眼山脇玄修ノ家ヲ嗣グ、因テ山脇氏ヲ稱ス。山脇氏ハ本ト橘姓ニ出ヅ、玄修ノ父玄心、醫ヲ延壽院玄朔ニ學ビ、東福皇后ノ侍醫トナリ、法印ニ叙セラレ、養壽院ノ號ヲ賜ハル、延寶六年歿ス。玄修嗣ギ、世々其祿ヲ襲ヒ、法眼ニ叙セラル、東洋ノ父東軒ハ丹波・龜山ノ人、遷テ京師ニ居リ、醫ヲ山脇玄修ニ學ビ、駒井氏ヲ娶テ二子ヲ産ム、長ハ即チ東洋ナリ。東洋幼ニシテ穎敏、句讀ヲ渡邊葭谷ニ受ク、十三ニシテ能ク文ヲ屬シ、好テ修辭ヲ作シ、又始メテ醫ヲ學ビテ玄修ニ朝夕シ、大ニ奇愛セラル。年十八ノトキ父東軒歿ス、玄修老テ子ナシ。享保丙午ノ歲東洋ヲ養テ嗣トナス。明年丁未七月玄修亦歿ス。翌月ソノ業ヲ嗣グ、時二年二十三。東洋、後藤良山ニ就テ醫方ヲ修メ、香川修庵・吉益東洞ノ諸家ト共ニ張仲景ヲ宗トシ、久シク廢シテ世ニ用ヒラレザリシ傷寒論・金匱要略ヲ爛讀シ、二千年來ノ空論ヲ看破シ、専ラ古醫方ヲ唱道シ、後藤・香川・吉益ト併ビテ古方ノ四大家ト稱セラル。

寶曆甲戌ノ歲閏二月七日刑ヲ西郊ニ行フアリ、若狹侯ノ侍醫某等、屍ヲ官ニ請テ獄中ニ就テ之ヲ解ク、東洋就テソノ眞ヲ觀テ舊說ノ妄ヲ辨ジ、之ガ圖志ヲ作り名ケテ藏志ト曰フ。初メ東洋古來ノ内景說ニ疑ヲ容ルトコロアリ、之ヲ後藤良山ニ質ス。良山曰ク『解テ觀ルニ若クハナシ、而シテ官ノ制スル所得テ犯スヘカラス、已ムナクンハ則チ獺カ』ト、東洋乃チ獺ヲ解キ略ボ人體藏象ヲ想像スルコトヲ得タレドモ、疑團尙氷釋セズ、コノ歲刑屍ノ解剖ヲ觀ルニ及ビテ十數年來疑ヒシモノ渙然トシテ氷釋シ扑躍措クコト能ハズ。遂ニ藏志ヲ著シテ曰ク『素・難人ヲ臂スルコト數千歲、而シテ天上ノ廣キ人才ノ衆キ一人ノ巢穴ヲ破フリ其命ヲ新ニシ陷然、美ヲ後代ニ遺シテ吾堂ノ資トナスモノナキハ、亦何ゾ奇ナルヤ』ト。是ヨリ前、長門藩姦賊ヲ城中ニ獲ルアリ、侍醫請テ之ヲ剮割シ畫工ヲシテ圖セシムト。然レドモソノ圖秘シテ世ニ出サズ、故ニ觀藏ノ圖志ハ實ニ東洋ノ藏志ヲ以テ嚆矢トス。殊ニソノ千古ノ迷障ヲ撥シ濟世ノ標準ヲ掲テ、世人ヲシテ先物實試ノ重ズベキヲ知ラシメタルハ、即チ東洋ノ効績タル不偉ナリト言フベシ、當時世醫翕然トシテ東洋ノ斯學ヲ難ジ、或ハ曰ク醫ハ仁術ナリ刑囚ノ屍ト雖モ屠テ之ヲ觀ルハ慘酷ナラズヤ。或ハ曰ク疾醫ノ道ハ毒ノ所在ニ隨テ之ニ灸スルノミ、何ゾ藏府骨度ノ數ニ據ラン、誠ニ無用ノ事ノミト。而シテ東洋ハ毅然トシテ動カズ、同八年十月再ビ獄中ニ於テ男子ノ刑屍ヲ解剖シ自ラ稱シテ曰ク、コレ千歲ノ絕學一生ノ大業ナリト、ソノ卓識驚クベキモノアリ。

吉益爲則藝州ヨリ平安ニ來リシトキ技、未ダ行ハレズ。貧甚キガタメニ木偶ヲ作テ鬻給ス。偶々一病者ヲ診シテ東洋ト方ヲ論ズ。東洋ソノ人トナリヲ推轂シソノ業ヲ顯揚ス、後子爲則古醫方ヲ以テ一時ヲ風靡シ、ソノ論ズルトコロ東洋ノ說ト大同小異ナリ、常ニ東洋ヲ稱シテ曰ク『我醫方之ヲ今ノ儒流ニ譬フレハ東洋ハ其レ伊藤仁齋カ衆ニ先チ其端ヲ啓ケリ』ト。東洋ノ名、海内ニ滿チ四方ノ士、來リ學ブモノ數百人、東洋教ヘテ倦マズ。門徒益々進ム。乃チ末學ノ訓導ニ背クモノアラシコトヲ恐レ、規則十條ヲ作り養壽院醫則ヲ著シテ之ヲソノ子弟ニ示シ、又嘗テ資ヲ投ジテ王氏ノ外臺秘要方ヲ校刊シ、以テ學者ニ便セリ。

寶曆十二年八月六日東洋鷹司右府ノ病ヲ療センガ爲ニソノ殿ニ宿シ、夜ニ至リテ病俄カニ發シ翌七日輿シテ家ニ歸リ、一日ヲ越テ遂ニ歿ス。享年五十八。深草山・霞谷眞宗院先塋ノ側ニ葬ル、東洋六男一女アリ、元配鶴、侃及ビ女一人ヲ産ミ、次配龜、松ヲ生ミ、妾、格ト周トヲ生ム。鶴・松・周并ニ早ク歿ス。侃字ハ仲陶、東門ト號ス。東洋歿スルノ後子ソノ祿ヲ襲グ。東洋著ストコロ藏志、二卷・養壽院醫則、一卷及ビ文集若干卷アリ。(山脇家系譜・漫遊雜記・藏志・墓誌・日本醫人譜)

藏志一卷、寶曆四年二月七日、山脇東洋ガ若狹侯ノ侍醫小杉玄適等ト共ニ刑屍ヲ剖觀セル時ノ記事ニシテ、寶曆九年ノ刊行ニ係ル。ソノ藏象ノ事ヲ記スルヤ『始剝レ胸、有二一條直骨如レ笏者』、自ニ天突、至ニ膈膜上、左右肋骨各九枚、猶ニ椽湊ニ梁也、乃奏レ刀、橫決ニ肋間白膜、豎截レ肋之湊ニ直骨者上、其導ニ卻窺、猶ニ切レ泥也、左右拆開、遂截ニ去直骨、而膈膜以上、豁然可レ睹、氣道在ニ于前、食道隱ニ于後、肺者、上連ニ氣道、下及ニ膈膜、兩肺挾レ心、猶ニ懸ニ紫錦囊、右肺襲ニ、左肺襲ニ、以レ管吹ニ氣道、則兩肺皆怒張、鮮澤似ニ蟬翼、心者、懸ニ肺之中間、如ニ未開紅蓮、上系ニ氣道、下向ニ膈膜、左右兩管屬ニ兩肺、一管別貫ニ膈膜、通ニ氣於肝、大膜在ニ心下、限ニ隔上下、肝者、位ニ于右、濃紫色、襲ニ一膽者、附ニ肝背、青白色、橢而如レ卵、胃者、橫ニ膜下、上承ニ食道、下踞ニ于腸、脾者、屬ニ胃之左背、狀如ニ馬蹄、有二縐紋、腸者、上戴レ胃、下走ニ肛門、白色帶ニ淡紅、屈盤纏繞其長四丈許、腎者、在ニ在胃下腸背、橢而淺紫色、兩腎各有レ絡、而下通ニ精道兩穴、白脂包レ之、剔除乃見ニ其狀、膀胱者、上連ニ于腸、下隱ニ于橫骨、壓レ之尿迸出、心肺肝脾腎者、肉塊也、胃膽膀胱腸者、膜也、九藏所レ連、皆有ニ白脂黃膩、而縈紆粘著、猶ニ雲霞薄籠ニ林壑也、脊骨者、背面有レ緒如レ魚、其節十有七、上細下巨、如ニ箏之狀、出藏而後、從レ内視レ之、其節歷々乎可レ數矣、手者、白筋無數、直湊ニ于腕、而背面有下通ニ于五指者上、至ニ于肘前、皆爲レ肉、維レ肘者皮耳、無レ復一條筋絡、通ニ於肩背者上、膝脛亦然、』ト言ヒ、附スルニ剝胸腹圖(挿圖甲)・九藏前面圖(挿圖乙)・九藏背面圖(挿圖丙)・脊骨側面圖(挿圖丁)ヲ以テシ、更ニ進ンデ『素・難所レ謂、骨度短長、總三七節、暨手足經絡之說、其妄可レ知矣、如レ謂ニ三部候ニ六藏、則亦益甚焉、且肺六葉兩耳、心有ニ胞絡、肝右四葉、左三葉、腸疊積十六曲之額、亦何肖ニ獺之藏ニ乎、抑以ニ獸之藏、類推歟、將不レ知妄作歟、是可レ異也、嚮者獲ニ蠻人所レ作、骨節剛剝之書、當時憤々不レ辨、今視レ之、胸脊諸藏、皆如ニ其所レ圖、履レ實者、萬里同符、敢不ニ嘆服、』ト言ヒ、理或ハ轉倒スベキモ、物ハ誣フベキニアラズト論ジ、ソノ說ハ甚ダ簡略ナレドモ、識見卓絶ニシテコノ書ハ實ニ我が邦自著ノ解剖書ノ嚆矢ヲナシ、古方家ノ泰斗ハ之ニ依リテ一躍シテ、實驗學派ノ祖先トナレリ。

按ズルニ既ニ上章ニモ記述セルガ如ク、支那ノ古醫書ニ解剖學ノコトヲ叙述セルモノアリ。ソノ我が邦ニ傳ハリシモノニモ華陀内照圖アリ、景岳内照圖アリ、室町時代梶原性全ノ頓醫抄・萬安方ニモ、既ニ内景圖說ヲ掲ゲタリ、而カモ觀ルコト疎鹵、說クコト牽強ニシテ、彼ノ五行分配ノ鑿說ヲ蹈襲シテ、因循以テ定則トナシ、一步モソノ範圍ヲ脱スルコト能ハズ。江戸時代初世、和蘭人來タリテ西洋ノ解剖學ヲ傳ヘタレドモ、ソノ說ハ遂ニ廣ク世ニ行ハルルニ至ラズシテ止ミタリ。享保年間服部玄黃、内景圖說ヲ著ハシテ、華陀及ビ景岳等ノ内景圖ニ誤謬アリトシ、自カラ内景新圖ヲ作り一家ノ書ヲ成セルガ、ソノ說ニ依レバ『手術上ノ實驗及ビ鳥獸ノ剖視ニ徴スルニ咽ト喉トノ位置ハ舊說ニ反シ、咽ハ前ニ居リ、喉ハ後ニ居ル』ト言ヒ、從テ『胃ノ位置ヲ轉ゼザルベカラズ』トナシ、又『脾ヲ胃ノ上ニ移シ』舊内景圖ニ『心臟偏傾、而出ニ於四系』トアルハ誤謬ニシテ、心臟ノ位置ハ正直ナリ、『肝有ニ獨葉者』、有ニ三葉者』ノ說ヲ駁シ『肝ハ左三葉、右四葉、凡テ七葉ナリ』ト論ゼリ、而カモソノ說ハ、揣摩ニ出デ、所謂屋上架屋ノ歎ヲ免レザリシナリ。然ルニ山脇東洋ノ刑屍ヲ剖見セシハ、ソノ目的胸腹ヲ剝剝シテ、以テ之ヲ古經九藏ノ目ニ徴セント欲スルニアリシヲ以テ、解剖說トシテハ粗鹵單簡ノモノナレドモ、コレニヨリテ從來ノ頑迷ガ排擊セラレ、當時ノ醫學ヲシテ實驗ノ方面ニ向ハシメタルノ功ハ爭フベカラザルナリ。支那醫學ノ解剖學ハ上章平安朝時代ノ醫學ヲ論ズルノ條下及ビ鎌倉時代ノ醫學ヲ論ズルノ條下ニ略述セルトコロヲ参照スベシ。經絡・俞穴・骨度ハ鍼灸家ノ奉ジテ典則トスルトコロニシテ、身體外表ヲ區劃シテ一定ノ名目ヲ附シ、又皮表ヨリ按ジテ骨ヲ度リ、脈絡ノ運行ヲ察スルモノナリ、故ニ之ヲ輓近ノ解剖學ニ比スレバソノ趣旨ノ異ナルコト固ヨリ論ヲ俟タズ、然レドモソノ身體ノ部位・骨節ノ關係等ヲ說クコトノミヲ言ヘバ、解剖學ノ一部トシテ見ルコトヲ得ベシ。ソノ梗槩ハ既ニ上條鍼科ヲ論ズルトキニ之ヲ略述シタリ。

山脇東洋ガ藏志ハ、之ヲ西洋ノ解剖圖ニ參照シタルモノナレドモ、ソノ文字ヲ讀ムコト能ハザリシガ爲ニ、所說

未だ深遠ナルコトヲ得ザリシガ、杉田玄白ガ解體新書ハ、所謂蘭學ノ創始ニヨリテ、直チニ和蘭ノ解剖書ヲ譯解シ、ソノ說精詳ニシテ、人身内景ノ實測、コレニ依リテ始メテ闡明セラレタリ。

解體新書ハ主ニキユルムス (Kulmus) ノ解剖圖譜ニ依リテ譯說ヲ起シ、カスパリユス (Casperius Bartholinus) ・フランカーツ (Blankart) ・ウエスリングス (Veslings) ・パルフィン (Palfyn) ・ハルシツ (?) 諸家ノ解剖書ニ依リテソノ說ヲ補ヒ、トンシユス (?) ・フランカーツ ・カスパリユス ・コイテル (Coier) ・アンブルシス ・パール (Ambroise Pare) 諸家ノ解剖書ニ依リテソノ圖ヲ補ヒタルモノニシテ、³⁴ソノ解剖學ハガレーヌス ・オイスタヒウス ・ハイステル ・ワルザルヴァ ・パイエル等ノ諸家ノ說ニ基ツキシコト明カナリ、然レドモ西洋解剖書ノ傳譯ハ誠ニ破天荒ノ事業ニシテ、從來諸家建ツルトコロノ人身ノ諸器、命名ノ義、ソノ據ルトコロ、之ヲ實測定ムルトコロノ名稱ニ較ブレバ、大異小同ニシテ、多クハ相當ラズ、且ツ内景ノ名物ニシテ、支那醫書ニ說カザルトコロハ直チニ漢名ヲ以テ譯スベカラザルモノアリ。新譯ノ業ノ困難ナルコト、實ニ今日吾人ガ豫想スルトコロノ外ニアリ、故ニ吾人ハソノ業ノ傳譯ニ止マレルニモ拘ラズ、尙ホ學問界ニ及ボセル功績ノ不偉ナルコトヲ認メザルコトヲ得ズ。即チ我が醫家ハ解體新書ニ依リテ始メテ人身ノ元質ニ固結シテ撮ムベキモノト、流動シテ撮ムベカラザルモノトノ二類アルコトヲ知り、

ソノ固結撮ムベキモノハ苛勢驗 (此翻レ絡) ・世奴 (此翻ニ神經ニ) ・火里私 (此翻レ膜) ・綠兼 (其形如レ膜而纏ニ脈管一也) ・蠻度 (如レ膜而強) ・価題斂 (此翻レ骨) ・加蠟假価 (此翻ニ軟骨ニ) ・私比縷 (此翻レ筋) ・

百私 (此翻ニ筋根ニ) ・機里爾 (在下神經與ニ脉絡一相交之間上) ・私刺古亞題爾 (此翻ニ動脈ニ) ・何兒亞題爾 (此

翻ニ血脉) ・哇的兒發天 (此翻ニ水道ニ) ・苛都 (此翻レ脂) ・墨耳古 (此翻レ髓) ニシテ、ソノ流動撮ムベカラ

ザルモノハ蒲縷度 (此翻レ血) ・哇的爾 (此翻レ水) ・沕乙 (其味鹹) ・私物越都 (此翻レ汗) ・毘私 (此翻レ

尿) ・奇縷 (其狀如ニ乳汁ニ) ・默縷計 (此翻ニ乳汁ニ) ・沙亞度 (此翻レ精) ・世奴和孤都 (此翻ニ神經汁) ・

太羅念 (此翻レ淚) ・窩窩爾私墨爾 (此翻ニ疔瘡ニ) ・私那都 (此翻ニ涕洟ニ) ・私百故世兒 (此翻レ唾) ・

亞兒福禮私古沙步 (即大機里爾汁) ・牙兒 (此翻ニ膽汁) 眇及ビ子宮等ノ津液數種ナリ。

機里爾 (淋巴腺) ノ所在ヲ審ニシ、神經ノ視聽言動ヲ主ドルコトヲ始メテ明カニスルコトヲ得タリ。コレ支那及ビ我が邦ノ醫家ガ從來未ダ說カザリシトコロニシテ、ソノ諸筋ノ集會スル所及ビ脈道ノ循ル所ヲ審ニスルコト等ハ、從來支那醫家ノ說クトコロニ異ナリ、漢人說クトコロノ動脈ハ私刺古亞題爾 (動脈) ニシテ、心ヨリ出ヅルノ血ヲ

受ケテ、一身ニ轉輸シ、漢人說クトコロノ青脈ハ何兒亞題爾 (血脉) ニシテ、動脈ノ血ヲ受ケ、心ニ歸スト說キテ、動脈靜脈ノ區別ヲ明カニシ、古人ガ肝ハ血ヲ製スト言ヘルハ非ニシテ、肝ハ門脈ノ血ヲ受ケテ膽汁ヲ分利スルモノナルコトヲ言ヘリ。セーニユノ說ハ既ニ西玄哲ノ金創跌撲療治之書等ニモ出デ、コレニヨリテ手足九竅ノ運動ガ司ドラルルコトガ明カニセラレ、又コレヨリ前、髓筋 (ネルボ) ノ說アリテ總身ノ動クヲ覺ユルコトヲ論ジタレドモ、

解體新書ニ始メテ之ヲ神經ト譯シ、ソノ知覺・運動ヲ主宰スルモノナルコトヲ詳述シテヨリ、ソノ理始メテ明カナルコトヲ得タリ。

頭腦ヲ以テ藏神ノ府、魂魄ノ穴トナスハ、明ノ方密之ノ物理小識、清ノ初ノ王惠源ノ醫學原始等ニ至リテ支那ニモ、西洋ノ說ヲ傳へ、腦ヲ以テ動覺ノ本所トナシ筋(神經ヲ指シテ言フ)ヲ以テソノ用ヲナスモノナリトセシガ、コレ等諸書ノ所說ハ未ダ我が邦醫家ノ注意スルトコロトナラズ、解體新書ニ依リテ始メテ腦ガ精神ノ府ニシテ、セイニユワツ世奴和孤都(神經汁)腦内ニ成リ、コノ液ハ神經ノ循行スルニ沿ヒ、四肢百骸ニ至リ、コレニ依リテソノ作用ヲナシ得ルモノナリトイフコトヲ知レリ。コレ實ニ千古未明ノ旨ヲ發シ、眞ニ前人ノ未ダ論及セザルトコロヲ開キタルモノナリ。

杉田玄白等ガ、小塚原ノ腑分ニ先ダツコト一年、明和七年河口信任、ソノ師荻野元凱ト共ニ刑者ノ屍ヲ解キ、之ヲ西洋ノ解剖圖ニ對照シ、始メテ西洋ノ解剖圖說ノ正確ナルコトヲ確證シ解屍編一卷ヲ著ハシ、明和九年之ヲ刊行シタリ。即チ解體新書ノ刊行ニ先ダツコト三年、山脇東洋ノ藏志ニ後ルルコト十四年ナリ。固ヨリコノ書ハ一回ノ解屍ニ於テ目睹セシトコロヲ記錄セシモノニシテ、肺管・喉・氣道・胃管・咽・食道・會厭・肺・心・隔膜・肋骨・胃・脾・肝・膽・大小腸・膀胱・腎・脊骨・外腎・睪丸・腦髓・眼珠・膝・脛骨・脛骨・臀肉等ヲ擧ゲ、記載ハ甚ダ簡略ナレドモ、之ニ附スルトコロノ圖繪ハ稍々精緻ニシテ、藏志ニ次ギテ現ハレタル我が邦自著ノ解剖書トシテ、ス斯科ノ歷史上看過スベカラザルモノナリ。

同時、和蘭全軀内外分合圖アリ。長崎ノ譯司本木了意ガ和蘭ノ解剖圖ニ譯字ヲ附セシモノニシテ、明和九年ノ刊行ニ係レリ³⁶。然レドモソノ書ハ廣ク世ニ行ハレザリシヲ以テ、ソノ醫界ノ大勢ニ及ボセル影響ニ就キテハ擧ゲテ言フベキコトナシ。

和蘭流外科

和蘭流外科ハコノ期ニ至リテモ、檜林・西・栗崎・桂川・吉田等諸流ノ前期ヨリ續キテ行ハレタルアリシガ、コノ期ニ至リテ更ニ吉雄流ノ一派アリテ新ニ興レリ。吉雄流外科ハ吉雄耕牛ヲ祖トシ、從來ノ和蘭流外科諸家ガ、耳聞面晤ニ依リテ得タル手伎ヲ施セルニ反シテ、吉雄耕牛ハ彼ノ邦ノ書ヲ讀ミ、ソノ方法ヲ直チニ蘭醫ニ質シ、從テソノ術ハ從來ノ諸家ノ如ク粗笨ナラズ、和蘭流外科ハ是ニイタリテソノ面目ヲ一新セリト言フベシ。

吉雄流外科

吉雄耕牛、名ハ永章、俗稱幸左衛門、後名ヲ幸作(一ニ幸朔)ト改ム。長崎ノ譯司タリ。プレンキンノ外科書ヲ讀ミテ、外科ノ伎ニ精シク、又西醫ニ就テ疑ヲ質シ、大ニ得ルトコロアリ、ソノ名當時ニ高シ。門下ノ籍ニ在ルモノ六百餘人ニ及ブ。前野蘭化ノ長崎ニ赴キテ蘭語ヲ學バントスルヤ、先ヅ耕牛ノ門ニ入レリ。明和ノ初年阿蘭陀貢使ニ陪シテ江戸ニ至ルヤ、杉田玄白亦之ニ從テ外科ノ術ヲ學ブ。蓋シ從來和蘭流外科ヲ以テ家ヲ成スモノ、長崎通詞中ニ多シト雖モ、彼ノ邦ノ書ヲ讀ミ、ソノ方法ヲ直チニ蘭醫ニ質シ、ソノ術ヲ研究セシモノハ耕牛ニ始マルト言フ。前野・杉田諸氏ノ解體新書翻譯ノ偉業ニモ耕牛ノ力、與カリテ功アリシナリ。晩年通詞ノ職ヲ辭シ、薙髮シテ耕牛ト號ス、寛政十二年八月病テ歿ス、年七十七。ソノ子如淵、名ハ永保、通稱權之助、父ノ業ヲ受ケテ、亦時ニ名アリ。耕牛著ハストコロ紅毛祕事記・吉雄流外科ノ他ニ因液發備、二卷アリ。小便ノ検査法ヲ詳述セルモノニシテ、全ク西洋ノ說ニ出ヅ。我が診科ニ小便ノ検査ヲ加ヘシハ、コレヲ以テ嚙矢トス。(吉雄耕牛傳・因液發備序・蘭學事始・解體新書序)

西流外科

西玄哲、名ハ規弘、延享四年、召サレテ幕府醫官トナリ、俸二百苞ヲ賜フ、後奧外科ニ轉ジ、寶曆十年二月、年八十二シテ歿ス。玄哲著ハストコロ金瘡跌撲療治之書アリ、大都アンブロア・パーレノ外科書ニ據リ、身體各部ノ創傷・骨折・脱臼、等ノ手術ノ方法ヲ擧ゲ、幾多ノ圖ヲ挿ミ、穿顱術・缺唇手術等ヲモ示シ、和蘭流外科ノ載籍トシテハ最モ精詳ナルモノナリ。(寛政醫家系圖・醫業家譜)

桂川流外科

桂川國訓、通稱甫三、父ヲ國華ト曰ヒ、祖父ヲ邦教ト曰フ。邦教ハ甫筑ト稱シ、桂川氏ノ祖タリ。元祿年間召サレテ幕府醫官トナリ、延享四年歿ス。國華ソノ業ヲ受ケテ、寛保元年法眼ニ叙セラレ仙鼎方ヲ著ハシ、安永十年歿ス。國訓父祖ノ業ヲ嗣ギ外科ヲ以テ名アリ、明和三年十二月法眼ニ叙セラレ、天明三年、五十六歳ニシテ歿ス。國訓著ストコロ瘍府七卷・外科方數九卷アリ、ソノ瘍府ノ書ハ支那ノ方書百餘部ヨリ、瘡瘍ニ關スル記述ヲ摘録ス、考證穿鑿甚ダ力メタルモノナリ。(桂川家系譜・寛政醫家系圖・蘭學事始)

治療法

支那醫學ノ治療法ハ、既ニ上章ニ序ヲ逐テ記述セルトコロヲ見テ明カナルガ如ク、藥物・鍼灸・傅膏・導引ノ數種ニシテ『疾賸理ニ在レバ熨炳ノ及ブ所、血脈ニ在レバ鍼灸ノ及ブ所、其腸胃ニ在ルモノハ酒醪ノ及ブ所』(史記・扁鵲傳中ニ出ヅ)トナス。而シテソノ藥物ヲ用ヒテ治療スルノ法ニハ汗・吐・下・和ノ四法アリ、汗・吐・下ノ三法ハ支那ニ在リテハ周・漢ノ代ニ盛ニ行ハレ、張仲景善ク之ヲ用ヒシガ、晋・唐以下服餌ノ說漸ク行ハレテ汗・吐・下ノ法ハ漸ク廢類シ、後世溫補ノ說行ハレテ治療ハ殆ト和ノ一法ノミトナレリ、金ノ張子和ソノ廢絶セルヲ起シタレドモ、後之ヲ繼グモノナク、ソノ弊延テ我が邦ニ及ベリ。コノ期ニ後藤良山・香川修庵・山脇東洋・吉益東洞ノ諸家出デテ溫補ノ說ヲ非トシ、大黃・石膏・巴豆・柴胡、等ノ寒藥ヲ用ヒテ、汗・下ノ方法ヲ再興シタレドモ、未ダ吐方ニ及バザリキ。シカルニコノ期ニ奧村良竹アリテ、我が治療ノ術ニ始メテ吐方アルコトヲ得タリ。

吐法

奧村良竹ハ越前・府中ノ人、京都ニ出デテ、後藤良山・並河天民ノ諸家ニ親炙シテ古醫方ノ說ヲ聞キ、既ニシテ張子和ノ儒門事親ヲ讀ミ、慨然トシテ曰ク『古醫ノ術、全ク此ニアリ、思フニ汗・吐・下ノ三法ハ醫家ノ大綱ニシテ、數千載ノ間、張仲景・張子和獨リ善ク之ヲ行フ、其他或ハ汗・下ヲ能クスルモ、吐方ニ至リテハ置テ講セス、沉湎ノ起ラザルハ、コレニ由ルナリ』ト、是ニ於テ、博ク群籍ヲ考ヘ、研精思ヲ竭クシ、辛苦多年ニシテ、克クソノ旨ヲ究ム。福井ノ地甜瓜三種ヲ産シ、ソノ尖小ニシテ碧色ナルモノ味最モ甘美ナリ、乃チソノ蒂ヲ採リテ、用フベキコトヲ知り、又藜蘆ヲ大蟲山ニ得テ、ソノ上品タルコトヲ認メ、コノ兩藥ヲ用ヒテ吐方ヲ施シ、初メハ親カラ諸ヲ躬ニ試ミ、而シテ之ヲソノ妻子ニ試ミ、後之ヲ廣ク人ニ用ヒシニ、人尙ホ或ハ驚キ、且ツ怖レ、或ハ之ヲ排笑セリ。良竹批難攻撃ノ間ニ立チテ毫モノ志ヲ悛メズ、年六十二至リテソノ術漸ク信ゼラル。寶曆二年山脇東洋、良竹ガ吐方ヲ善クスルコトヲ聞キ、ソノ子玄侃及ビ門人永富獨嘯庵ヲシテ往テ之ニ學バシメ、永富獨嘯庵ガソノ法ヲ傳ヘタルニヨリテ、良竹ノ名ハ漸ク天下ニ著ハレ、我が古醫方ニ汗・吐・下ノ三法アリ、治方始メテ備ハルヲ得タリ。

奧村良竹、名ハ直、南山ト號ス。ソノ先ハ加賀ノ人、仇ヲ避ケテ越前ニ來リ、府中ニ住ス。父某氏ヲ娶リ、貞享元年甲子ヲ

以テ良竹ヲ松森村ニ生ム。良竹幼ニシテ穎異沉默群兒ニ類セズ。年十三山崎良伯ニ就テ醫ヲ學ビ、居ルコト四五年、良竹親老テ家貧キヲ以テ慨然憤發スルトコロアリ、去テ攝ノ大阪ニ赴キ豪商某ガ家ヲ主トス、蓋シ期スルトコロアリト言フ。性學ヲ嗜ミ商家ニ在リト雖モ手卷ヲ釋カズ、人爭テ之ヲ排スルモ自若タリ、而モ亦岬岸衆ニ忤フコトヲナサズ、居ルコト八年良伯ノ子某歿ス。良伯齡老孫幼ナリ、乃チ書ヲ寄セ良竹ヲ招テ歸ラシメ、ソノ孫良彈ヲ教育セシム、良竹辭ス、乃チ良竹ノ父ニ請ヒ書ヲ作テ良竹ヲ促シテ歸ラシメ、ソノ業ヲ委ヌ、良竹既ニ醫家ノ大義ニ通ズ。是ニ於テ研鑽益々力メ、名大二藉ク、府中・本多侯三女アリ、俱ニ痘ニ罹リ勢頗ル危シ、良竹藥ヲ進メテ立ニ効アリ。既ニシテ良伯歿シテ良彈年既ニ弱冠良竹乃チ家有スルトコロヲ推シテ悉ク之ニ與ヘ、單身出デテ居ル、府中侯良竹ノ器ヲ重ジ、爲ニ之ヲ祿セントス、良竹辭謝ス。良竹ノ父年老ユ、良竹ニ謂テ曰ク、予聞ク男叟四方ノ志アリト、然レ共、負米棒檝皆ナ親ノ爲ニスト、貴人ノ禮命スルトコロ、豈終ニ辭スベケンヤト、良竹乃チソノ命ヲ拜ス、府中侯女岩倉源公ニ適ク、良竹從テ京ニ入り伊藤東涯・並河天民・後藤良山・松岡恕庵等ト交ル、既ニシテ郷國ニ歸リ、治効益著シク、聲名遠施四方ヨリ來リ學ブ者、診ヲ乞フモノ日ニ頗ル多シ、實曆丁巳ノ春良竹卒然痲ヲ病ミ、常ニ床蓐ニアリ而モ子弟方ヲ講ジ嗶々トシテ已マズ。辛巳八月暴冷ニ傷ミ、九月三日遂ニ逝ク、年七十五。平吹邑先塋ノ傍ニ葬ル、良竹、落合氏ヲ娶リ一女ヲ生ム、縣氏ノ男、苜ヲ養嗣トナス。

良竹未ダ出テ仕ヘザルトキ管テ若狹侯ノ病ヲ治ス。侯喜ビ俸十五口ヲ以テ之ヲ召ス。良竹辭シテ曰ク、臣草莽ニアリト雖モ誓テ他邦ノ粟ヲ食ハズト、府中侯コレヲ聞キ乃チ俸十口ヲ以テ之ニ祿スト言フ。晚年良竹ノ技大ニ行ハレ人々相爭テ招致ス、而モ富室勢貴之ヲ邀フレバ肯テ即チ往カズ、貧民村夫之ヲ請ヘバ一言ニシテ即チ到ル、ソノ意蓋シ世醫ノ勢利ニ趣クモノヲ矯正スルニアリ。良竹著書ヲ好マズ人或ハ勸ムルニ書ヲ著ハスヲ以テス。良竹微笑シテ曰ク、醫家ノ道先達論ジテ具レリ、學テ之ヲ行フノミ、何ゾ名ニ拘ルコトヲ爲サント。又毎ニ曰ク吾上世ノ醫方草野ニ遺在スルモノ多ク往々奇効アリ、余之ヲ得ル毎ニ必ズ筆シテ藏ス、積年得ルトコロ冊ヲ成ス。經驗セシモノニハ圈ヲソノ上ニ加ヘテ之ヲ標ス、庶幾クハ末輩ヲシテ之ヲ資セシメント、ソノ精勤亦以テ見ルベシ。

良竹ノ名ハ一世ニ喧傳シ、四方來リ學ブモノ數百人、越前ノ田中必大・丹羽子牙、加賀ノ荻野元凱、京都ノ山脇玄侃、長門ノ永富鳳介等最モ著ハル、皆ナ當代ノ名家ナリ。(奥村南山行狀記・奥村南山功德碑誌銘・漫遊雜記・吐方考序・吐方編・續近世叢語)

奥村良竹ノ術ハソノ書ノ傳フルモノナキヲ以テ、ソノ方ト法ト共ニ之ヲ概見スベカラズ、而モソノ法ヲ傳ヘテ之ヲ恢弘セルモノニ永富獨嘯庵アリ、荻野元凱アリ。永富獨嘯庵ノ吐方考(實曆十三年刊)ニ據レバ、吐方ノ主旨トスルトコロハ直接ニ病ヲ攻ムルニアリ。腹氣ノ虛實ヲ詳ニシ、疾病ノ新舊ヲ明カニシ、ソノ新症ニシテ治スベキモノハ吐方ヲ施スニ適應シ、病毒胸膈ノ間ニアルモノニシテ、病者未ダ虛脫セザルモノニハ殊ニ之ヲ用フベク、吐血・歎血、等ノ症ヲ存セルモノニハ之ヲ忌ムベシ、而シテ催吐ノ藥劑トシテ主ニ用フルハ瓜蒂・藜蘆・常山・巴豆ナリトス。

永富獨嘯庵、名ハ鳳、字ハ朝陽、始メ昌安ト稱シ、後鳳介ニ改ム、長門ノ人。本姓勝原氏出テテ永富氏ヲ嗣グ。幼ニシテ穎悟、弱冠京師ニ出デ、山脇東洋ニ就テ學ブ、吐方ヲ奥村良竹ニ受ケ、コレヲ傳ヘテ古醫方ニ汗・吐・下ノ三方始メテ備ハル、年二十九、家ヲ離レテ諸州ヲ遍歴シ、後大阪ニ寓シテ醫ヲ以テ行ハレ、京都ノ吉益東洞ト並ビ稱セラル、明和三年三月五日歿ス、年三十五、著ハストコロ、漫遊雜記・吐方考・黴瘡口訣・囊語・葆光秘錄等アリ。

荻野元凱ノ吐法篇(明和元年刊)ハ之ヲ吐方考ニ比スレバ吐法ヲ叙スルコト精詳ニシテ、ソノ說ニ據レバ『疾病ハ人身ノ鬱スルモノニシテ、其由テ處スル所ニ從テ證ヲ異ニスルノミ、百疾ノ多キモ、其鬱ヲナスハ一ナリ、其上ニ處スルモノハ吐シテ之ヲ宣シ、下ニ處スルモノハ下シテ之ヲ通ジ、皮膚ニ處スルモノハ汗シテ之ヲ發ス、治ノ要

タル唯鬱ヲ達スルノミ』ト言ヒ、内經ニ湧泄ト言フモノハ則チ吐法ニシテ『邪ノ高所ニ鬱スルトキハ溫補ハ固ヨリ論ナク、之ヲ下スモ可ナラズ、之ヲ汗スルモ及バズ、則チ湧泄ニアラザレバ何ゾ適セン』ト説キタリ。而シテ湧劑ニ種々アリト雖モ瓜蒂ヲ以テ湧劑ソノ聖ナルモノトシ、之ヲ以テ一切ノ湧證ヲ湧スルニ用フベシ、藜蘆・雄黃、ソノ効瓜蒂ニ及バズト雖モ尙ホ代エ用フベシ、ソノ他、常山ハ殊ニ瘡ヲ湧シ、鹽湯ハ喝ヲ湧シ、枝子ハ虛煩ヲ湧シ、杜衡ハ瘀血ヲ湧スルニ可ナリト言フ。

永富獨嘯庵・荻野元凱ト時ヲ同フシテ、安藝ニ惠美三白アリ、亦古醫方ヲ以テ家ヲ成シ、佛書ノ説ニ『四百四種病、以三宿食一、爲三根本一』トアルニ本ヅキ、又南海寄歸傳ニ載スルトコロ、斷食シテ病ヲ療スルノ法ニ依リ、百病ハ飲食ニ依ルコト最モ多ク、而シテ吐ノ一法ハ病ヲ去ルノ捷徑タルコトヲ説キ、專ラ吐法ヲ講ジ、ソノ名大二世ニ著ハレタリ。ソノ子大笑亦吐方ヲ以テ名アリ。關西ニ吐方ノ大二興リシハ、惠美三白父子ノ力多キニ居ルトイハザルベカラズ。

惠美三白、名ハ貞榮、字ハ子幹、寧固ト號ス、本姓ハ堤氏、世々醫ヲ以テ著ル。三白幼ニシテ父母ヲ失ヒ外家藤岡氏ニ育ハル、穎悟明敏ニシテ父祖ノ業ヲ繼ガンコトヲ欲スレドモ、貧乏資ナキヲ憂フ。時ニ伊豫ノ醫人惠美良玄ナルモノ來テ廣島ニ居リ、老テ子ナシ、三白遂ニ之ガ爲ニ子養セラレ、因テ惠美氏ヲ冒ス。居ルコト數年、良玄病テ死ス、三白既ニ長ジ、遺篋ヲ啓キ偏ク醫書ヲ讀ミ、日夜研究遂ニ獨リ造詣スルトコロアリ。最モ好テ張氏ノ傷寒論ヲ誦シ、所論大二時流ニ異ナリ、コノ時ニ當リテ世醫滔々トシテ李・朱ノ道ヲ信ジ、平補之レ事トシ、沉痾重疾ニ遇フモノヲ陷拔スルノ劑劑ヲ用フルコトヲ知ラズ。三白之ヲ非トシ、專ラ攻撃ヲ用フ。時ニ古方家者門戸未ダ大ナラズ。藝州ノ士人未ダ舊套ノ脱却スベキヲ知ラズ、躁然トシテ争ヒ起テ之ヲ駁ス。世俗又或ハソノ毒ニ堪ヘズ、偶々三白之ヲ殺スト言フニ至ル、之二處シ志ヲ執ルコト益々固ク彌々ソノ説ヲ主張ス。而シテ奇驗日ニ多ク難者漸ク服シ四方ノ人遂ニ翕然トシテ尊信セザルナキニ至リ、遠近來テ治ヲ乞ヒ、冠履相接シ輿馬門ニ充チ名聲漸ク四方ニ震フ。同時吉益東洞同國ノ人ヲ以テ出デテ京師ニアリ、萬病一毒ノ説ヲ唱フ、年齡殆ト相伯仲ス。三白之ト往復論辯シソノ説往々ニシテ相合スルアリ、東洞亦三白ヲ推シテ一俊人トナシ、相共ニ切劘シテ得ルトコロ少カラズ、而シテ三白ノ名遂ニ海内ニ重シ。是ヨリ先キ越前ノ人奥村良竹吐方ヲ創シ、一時ニ各アリト雖モ繼起シテ能ク之ヲ用フルモノ少シ、三白繼テ出デ又喜テ吐方ヲ處シ、ソノ妙用ヲ盡ス、常ニ曰ク『食欲ノ人ヲ害スルコト色慾ヨリ甚シ病多ク宿食ヨリ生ス、之ヲ救フノ法ハ唯吐アルノミ』ト、即チ佛書ヲ讀ミ、淨心誠觀ニ四百四病宿食ヲ根本トスルヲ説キ、南海寄歸傳ニ病ヲ治スルニ斷食ヲナスコトヲ載スルヲ見テ、ソノ思フトコロニ合フヲ悦ビ益々ソノ説ヲ唱フ、蓋シソノ長ズルトコロハ吐方、ソノ好ムトコロモ亦吐方、而シテソノ奉ズルトコロハ古醫方ニシテ治ヲ施スニ滯礙アルナキナリ、三白名聲既ニ著ハレ治驗頗ル饒シ、安藝侯聞テ之ヲ喜ビ數々謁見ヲ賜ヒ、後チ苞二百俵ヲ下シ世襲トナサシム、天明元年十月八日病テ歿ス、年七十五。墓ハ廣島ノ專勝寺ニアリ。室、石橋氏二男三女ヲ生ム。季子名ハ貞秀ノ他ハ、盡ク早死ス、年既ニ老ヒテ貞秀尙幼ナルヲ以テ門人長尾貞璋ヲ養ヒテ嗣トナス。貞璋字ハ君達、大笑ト號シ、三白ヲ襲稱ス。技益精シク名益揚リ班侍醫ニ進ミ三百石ヲ食ミ、門人四方ヨリ來ルモノ六百餘人。江戸及西京ノ醫人西遊スルモノ必ズ之ニ寄學セザルナク、惠美氏ノ業益大ナリ。三白人トナリ溫厚恭謙ニシテ財利ニ淡シ。人或ハ三白ニ勸ムルニ書ヲ著ハシ後世ニ貽スコトヲ以テス、三白曰ク『許氏有言、醫者意也、思慮精則得之、妙理不レ可レ以レ言傳一ト。余常ニ深クソノ言ニ服ス、何ゾ空談ヲ以テ虛名ヲ博スコトヲセン』ト世ニ傳フトコロ、醫談・吐方私録・方函等、蓋シ皆ナ門人ノ輯録スルトコロカ。(墓誌)

刺絡

刺鍼シテ病ヲ療スルノ法ハ、既ニ古代ニアリテモ行ハレシガ、ソノ法ハ固ヨリ後ニ傳ハラズ。支那ニ在リテハ内經ニ『刺三絡脈一者、必刺三其結上一、甚血者、雖レ無レ結、急取レ之、以瀉三其邪一而出三其血一』、『視三其血絡一、刺二

其血^一、無^レ令^下惡血得^レ入^ニ於^中其病上、』・『久痺不^レ去^レ身者、視^ニ其血絡^一、盡出^ニ其血^一、』ノ語アリ。爾後諸家ノ書ニモ鍼ヲ以テ血絡ヲ刺シ、瘀血ヲ取ルコト見エタリ。我が邦上古、唐ノ醫方ヲ範トセシ頃ニハ、刺鍼ノ法モ、彼ヨリ我ニ傳ヘラレシコトアラン。大寶ノ醫疾令ニ『按摩生、學^ニ按摩傷折方及判縛之法^一、』トアルヲ令義解ニ『以^レ鍼判^ニ決折傷之瘀血^一、是爲^レ判也』ト註シタルヲ見テモ、當時我が邦ニモ刺鍼血ヲ取ルノ法ノ存セシコト、及ビソノ法ノ支那ニ本ヅキシコトヲ知ルベシ。然ルニ平安朝以後、刺針ノ術ハ僅カニ瘡瘍ヲ治スルニ用ヒラレシノミニテ、諸病ノ治ニ血ヲ取ルノ術ハ行ハレズ。安土・桃山時代ニ朝鮮國ノ醫書、治腫方、我が邦ニ入り、次デ明ノ季ニ郭右陶ガ著ハセル痧脹玉衡ガ傳ハリテ、兩書共ニ刺鍼血ヲ取ルノ法ヲ記述シタレドモソノ術ハ當時ニ行ハレズ。江戸時代ノ初世鍼術再興ノ業アリシモ、未ダ刺絡ニ及バザリキ。而カモ永富獨嘯庵ノ漫遊雜記ニ『越前賈舶、海運到^ニ赤馬關^一、其舶主某、晝間檢^ニ閱賈物^一、過^レ市、忽然卒倒、直視搖擲、不^レ省^ニ人事^一、行侶驚視、相集、有^レ人、走報^ニ其方舶^一、舶中之人、相逐而至、內一人以^レ鍼刺^レ舌、黑血霏霏而飛、須臾而蘇息、蓋所謂痧病也、越前人、往々傳^ニ其方一、』トアリ、山脇東門ノ東門隨筆ニ『因幡ニ七類ト云フ浦アリ、此地ニ俗ニ豆嚙ト稱スル病アリ、其初發スルヤ忽チ寒熱頭痛、如^レ破、顔色如^レ丹、大渴讞語、狂躁悶亂ニ及テ一ニ日ニシテ死スルナリ、土人其病ト見レバ早速大豆ヲ嚙マセ試ムルニ大豆ノナマクサキヲ覺ヘズ、左スレバ直ニ額ヲ何ニテモ切り裂レバ紫黑血出^レデテ二三日ニ癒ルヨシ』ト記シタル(二神傳ニモ豆嚙ニ瀉血スルコト出ツ)ヲ以テ見レバ、刺鍼瀉血ノ法ガ、素人療法トシテ古ヨリ我が俗間ニ行ハレシコトヲ知ルベシ。

然レドモ刺絡ノ術ガ治病ノ目的ヲ以テ、醫家ノ盛ニ用フルトコロトナリシハ明和・安永ノ頃、山脇東門ガ西洋ノ法ヲ傳ヘ、三稜針ヲ用ヒテ瘀血ヲ取ルコトヲ稱揚セシニ始マル。

山脇東門、名ハ陶、字ハ大鑄、東門ハソノ號ナリ、一ニ方學居士ト號ス、東洋ノ第二子、元文元年八月、京師ノ家ニ生マル。幼名ヲ阿藤ト言フ、後改メテ玄侃ト言フ。延享三年、年十一ニシテ父ニ從ヒ參府シテ將軍ニ謁シ、寶曆十二年父ノ官職ヲ襲ヒ、明和三年六月法眼ニ叙セラル。年十七ノ時父東洋ノ命ヲ承ケ永富獨嘯庵ト共ニ越前・府中ニ赴ムキ奥村良竹ニ就テ吐方ヲ學ビ、京ニ歸リテ大ニソノ術ヲ行ヒ、始メテ古醫方ニ汗・吐・下ノ三法備ハル。明和八年父東洋ノ遺緒ヲ嗣ギ一婦人ノ屍ヲ解視シ、圖譜ヲ作ル。後、安永四年及ビ五年ニ男女各一人ノ屍ヲ解キ、以テ解剖ガ醫學ノ基本タルベキコトヲ唱道セリ、天明二年七月病ヲ以テソノ家ニ歿ス、享年僅カニ四十七、著ハストコロ東門隨筆、一卷アリ。(山脇家系譜)

山脇東門ガ刺絡ノ術ハ、之ヲ長崎ノ通詞ニシテ和蘭流外科ノ大家タリシ吉雄耕牛ヨリ得タルモノニシテ、西洋ノ說二本ヅキシコト明カナリ。東門隨筆ニ記スルトコロニ曰ク『古人卒倒氣絶ノ者ニ鍼刺シ毒血ヲ取り治スルコト多シ、其他大抵瘀血ヨリ出デ、上部ニ逼リ、頭頂肩脊耳目口鼻ノ病、心痛、嘔逆、腕臂胸腹腰膝腿脛ノ痛、結核、癩、瘤、癩、癬、瘰、脚氣、或ハ腹裏拘急、癱瘓、硬強、攣急、久瘧、疫熱、喘嗽、惡瘡、產後諸病等ニ鍼刺シテ、毒血ヲ取ルコト内經以來代々ノ諸名家、必シモ外因ノミニヨラズ、此等ノ病、内毒ヨリシテ一身ノ氣順行セズ、故ニ血モ不流シテ瘀滯積血トナルナリ。回春ニ云フ、青筋ノ症ハ瘀血上攻ノ病ナリ、其他溫針、燒針、等ハ其法傳レドモ、誰モ面ノアタリ施ス人ナケレバ、習得タル人モナシ、三稜針ハ間々行フ人アリテ、其術傳レドモ、其人良醫ナラザルユヘ麁粗ナルコト多シ、偶効アレドモ、人懼テ信セズ、三稜針ノ効ハ筋合ニヨリ、藥ヨリモ神速ナルコト多く、醫タル者ノ知ラネバナラヌモノナレドモ、其術廢絶同然ニナリタルハ、紫黑ノ毒血ニモセヨ、血ノ出ルコトユヘ、人懼ルルコト餘儀ナキコトニテ、醫モ是ヲ懼リ、心中ニハ施シタク思ヘドモ、兎角我ト云モノガ邪魔ニナリテ言出スコトサヘ、遠慮スルユヘ、自カラ行フ人少クナリ果タリ』ト。又刺絡ノ法ニ就キテハ『紅毛人モ、諸病ニ鉞針ヲ以テ血ヲ取ルコトアリ、大抵其療治ハ内經以來、諸名家ノ言ヘル所ニ同ジ、又、別ニ箱ヲランセイタト云フモノアリ、箱ノ中ニ針ヲ仕掛ケ、ハヂキ金アリテ、刺ス前ニハヂキヲ掛ケ置キ、針ノ出口ヲ刺所ヘ當テ置キ、ハヂキ金ヲ押サ

ユレバ、カチリト云フテ針下ルナリ』ト言ヒ、三稜針、柳葉針ランセツト及ビ一種ノ刺絡器ヲ應用スベキコトヲ擧ゲタリ。

同時垣本鍼源アリ、鍼科ヲ以テ名アリシガ、葦葉鍼ト名ヅクル葉形ノ大鍼ヲ作り、以テ血絡ヲ刺シ、瘀血ヲ取りテ以テ諸病ヲ治スルノ法ヲ稱揚シ熙載録ヲ著ハシ、大ニソノ法ヲ唱道セリ。又浪華ノ人入江大六モ『萬病刺スニ宜シ』ト言ヒテ刺血絡正誤ヲ著セシガ、ソノ刺法ハ固ヨリ從來ノ諸家ガ施セシトコロヲ折衷セシニ過ギズ。

山脇東門ノ首唱ニ依リテ世ニ行ハレタル西洋刺絡ノ術ハ、永富獨嘯庵等モ之ヲ用ヒシガ、明和年間荻野元凱ガ刺絡篇ヲ著ハシ、詳カニソノ法ヲ記載セルニ及ビテ普ネク天下ニ行ハレタリ、コノ書ニ依レバ用フルトコロノ鍼ニ鈹針・機針・三稜針ノ三種アリ、別ニ自ラ葦葉狀ノ鍼ヲ製シ、或ハ之ヲ單用シ、或ハ之ヲ鈹針ト錯用シ、傍ラ蜚針（水蛭）・角法（取レ鍼刺ニ破患處^一、取ニ綿花若樟腦^一、着ニ之硝中^一、而放レ火、急合ニ刺上^一）ヲ施スヲ可トスト言ヘリ。

灸法

灸法ハ我が邦神代ニハアラズ。上古唐醫方ト共ニ我が邦ニ入り、爾來鍼術ト并ビ行ハレシコトハ既ニ上章ニ之ヲ掲ゲシガ、ソノ術ハ平安朝時代ヨリ鎌倉時代・室町時代ニ至ルマデ、主ニ癰疽・疔瘡・瘰癧等、瘡瘍ヲ治スルニ用ヒラレ、室町時代ニ至リテ信州ノ隱士良心、朝鮮ニ赴ムキテ、我が和氣・丹波ノ兩家ニ傳フルトコロノ八穴灸法ヲ彼ノ邦ニ傳ヘタルコトアリ。安土・桃山時代ヨリ江戸時代ノ始ニ至リテモ、醫家ガ灸法ヲ用ヒタルニ諸法アレドモ、要スルニ瘡瘍ノ治ヲ施スニ止マリ、之ヲ内科的ノ疾病ニ用フルコトハ素人療法トシテ却テ盛ニ民間ニ行ハルルニ至レリ。延寶元年（西曆一千六百七十三年）我が長崎ニ來タリタル和蘭ノ醫家リーネ（William ten Rhyme）及ビ元祿三年（西曆一千六百九十年）ニ來朝シタル、獨逸ノ醫家ケムフェル（Engelbert Kämpfer）ガ、ソノ著書中ニ灸法ノ事ヲ記述シテヨリ³⁶、コノ法ハ歐洲ニモ知ラレ、西曆一千六百七十四年ニハ既ニブシヨッフ（Bushof）ノ灸法ニ關スル記述アリテ、我が邦ノ灸法ハモグサ（Moxa）ノ和名ト共ニ廣ク歐洲ニ傳ヘラレタリ³⁷。

コノ期ニ至リ、後藤良山出デテ、百病ハ一氣ノ留滯ニ因ルノ説ヲ立テ、彼ノ内傷癰疽ノ病ハ皆ナ恬澀遊惰ノ致ストコロトナシ、灸法ヲ施シテ『開表、行レ經、溫導、徹底』ノ効ヲ得ベシト説キ熊膽・蕃椒・溫泉ト併セテ之ヲ賞用シ、ソノ艾炷ハ鼠糞麥粒ノ大ヲ以テ則トシ、壯數ハ固ヨリ病ノ輕重ニ依リテ異ナレドモ、二三千ヨリ六七千ニ至ルヲ度トナセリ。ソノ方法ハ後藤椿庵、艾灸通説ヲ著ハシテ之ヲ詳説セルモノアリ。コノ時良山門下ノモノ、四方ニアリテ盛ニ灸法ヲ賞用シ、一時後藤流一派ハ之ガタメニ灸家ノ稱ヲ得タルホドニテ、鍼灸科以外ニ本道ノ治法ノ一部トシテ灸治ハ用ヒラレタリ。

香川修庵ハソノ著、一本堂行餘醫言及ビ一本堂藥選ニ、ソノ師後藤良山ノ灸法ヲ擧ゲ、

『凡灸、以^四溫^三養活^三運元氣^一爲^レ能、夫平人之無^レ病也、内外充實、上下健運、溫溫活活、無^レ所^レ不^レ順、是以外邪不^レ能^二入^一侵^一、内鬱不^レ能^二萌^一生^一、蓋以^三元氣之順^一也、苟其元氣之纒微不^レ充也、風寒暑濕、自^レ外中傷、癰疽瘀血、在^レ内生成、但外邪者、卒然而中傷、故卒然而救應汗下和溫、發攻排解、早治的當、無^二復遺策^一、唯内滯者、常常而積、漸漸而累、日復一日、月復一月、竟爲^二滯結^一、絡成^三凝塊^一、社鼠城狐、寵嬖愛妾、内外上下、牽連響應、種種萬疴、變現百出、當^三是之時^一、唯灸當^レ之、自^レ非^二火氣溫養^一、何能解^三通結塞^一、』ト説キ、以テ炷小サク、數多キノ灸ハ、猶ホ冬日ノ堅氷ガ春陽一タビ來タリテ、上下左右ヨリ消解融和スルニ等シク、溫養資アルヲ以テ、之ヲ用フルニ宜シト論ジ、『開^レ鬱通^レ塞、散^レ滯解^レ結、莫^二此爲^一良』ト言ヒテ、灸ノ百病ニ用フベキコトヲ説キ、更ニ進ンデ取穴法・壯數・艾炷大小、等ニ就キ諸家ノ説ヲ引キテ叙述シ、灸法及ビソノ適用ニ關スル研究ハ大ニ備ハレリ。

溫泉

溫泉ニ浴シテ病ヲ療スルコトハ、神代以來我が國史ニ散見スルトコロニシテ、コノ法ノ古ヨリ治病ノ用ニ供セラレタルコトハ疑フベカラズ。然レドモ、コノ時ニ及ブマデ、未ダ醫學上ヨリ精シク研究セラレシコトアラズ、ソノ

之アルハ實ニ後藤良山ニ始マル。良山年五十一ノ時、但馬ノ城崎ニ遊ビ、新湯ニ浴シ、ソノ煖潤活暢ノ效アルヲ認メ、之ヲ疾病ノ治療ニ應用スベキコトヲ唱へ、浴法・服法及ビ主治ニ就キテノ研究ノ端緒ヲ開キシガ、香川修庵遺志ヲ嗣ギ、大ニ溫泉ノ效能ヲ研究シ、ソノ作用ハ氣ヲ助ケ、體ヲ溫メ、瘀血ヲ破ブリ、壅滯ヲ通シ、腠理ヲ開キ、關節ヲ利シ、皮膚・肌肉・經絡・筋骨ヲ宣暢スルニ在リトシ、熱度・色・臭・味、及ビ發瘡ノ有無ヲ以テ、溫泉ノ良惡ヲ鑒別スルノ則トシ、極熱ニシテ瘡ヲ發シ、色清白、味微鹹、異氣惡臭ヲ發セザルモノヲ以テ良好トシ、コノ標準ニ依リテ但馬・城崎ノ新湯ヲ以テ第一トシ、攝州ノ有馬、豆州ノ熱海、紀州ノ本宮、上野ノ草津、相州ノ箱根、豫州ノ道後等ノ諸溫泉之二次グト言ヒ、浴試（浴泉ノ應否ヲ試ム）・浴度（一日二三次ヲ律トシ、三十日ヨリ五十日ニ至ル、或ハ半年、或ハ周歲病已ムヲ以テ徹トス）・浴法（湯槽内ニ没入スルコト霎時、體ヲ溫メ、周身煖透ヲ以テ度トナス）・浴禁（風寒外邪ヲ避ケ、生冷肉食ヲ禁ズ）等ヲ定メ、痔・脫肛・黴瘡・便毒・疥癬・諸瘡・結毒・婦人腰冷・帶下等ニ用フルニ宜シト論ゼリ。

香川修庵ト同時ニ山村通庵アリ、同ジク後藤良山ノ門ニ出デ、最モ力ヲ溫泉ノ攻究ニ用ヒ、諸州ヲ遍歴シテ親シクソノ氣味主能ヲ驗シ、上野・草津溫泉ハソノ効、但馬・城崎ニ劣ラザルコトヲ認メシガ、路程悠遠ニシテ、病客ノ往キ難キヲ憾トシ、自カラ一種ノ人工溫泉ヲ創製セリ。ソノ法潮水五斗・硫黃六百錢・糖一斗ヲ取り、先ヅ潮水二斗ヲ以テ糖ヲ煎ジ、糖ノ赤色ヲ以テ度トナシ、滓ヲ去リ、硫黃ヲ入レ、浴スルコト一日三回、漸次ニ潮水ヲ加フ、コノ如クスルコト冬月ニハ旬餘ニシテ一タビ改メ、夏期ニハ四五日ニシテ上水ヲ傾ケ去リ、更ニ新潮ヲ加へ、硫黃・糖本量ノ半ヲ用フ、潮水ナケレバ則チ鹽五升ヲ以テ水ニ和シタルモノヲ代用スルナリ。

醫學教育

大寶ノ令ニ、醫學教育ノ制度ヲ立テ、大學及ビ國學ヲ置キ、醫學專門ヲ別チ、課目ヲ定ムルコト等、一ニ唐ノ制度ニ依倣セシガ、ソノ制度ハ幾モナクシテ廢類シ、鎌倉・室町時代ヲ經テ安土・桃山時代ニ至テハ、大學及ビ國學ハ既ニ廢セラレ、醫學ノ教育ハ學校ニテ施サルコトナク、醫學ヲ修メントスルモノハ各々ソノ師ニ就キテ、ソノ經驗シ來タレルトコロヲ傳受スルニ過ギズ。江戸時代ニイタリテ、江戸ニ多紀元孝ノ躋壽館ヲ興セルアリ、京都ニ畑黃山ノ醫學院ヲ立ツルアリ、各藩ニテモ鹿兒島ノ造士館内ニ醫學院アリ（安永二年創立）。熊本ニ再春館アリ（寶曆六年創立）。福岡ニ采眞館アリ。萩ノ明倫館内ニ醫學部アリ。會津ノ日新館内ニモ醫學部アリ。學校ヲ設ケテ、秩序ニ醫學ヲ教授スルコト、コノ頃ヨリ始マレリ。☞

躋壽館ハ明和二年五月、多紀元孝ガ江戸・神田・佐久間町ニ創立スルコトコロニシテ、藥園及ビ書庫ヲ始トシテ、諸般ノ設備アリ。教課ハ本草經・素問・靈樞・難經・傷寒論・金匱要略ノ六部ヲ講究シ、更ニ經絡・針灸・診法・藥物・醫案・疑問、ノ六課ヲ設ケ、醫案疑問ハ文辭ニ預カリ、ソノ他ハ皆ナ事ニ就テ之ヲ傳へ、診法ニハ諸生ヲシテ鄙賤ノ治ヲ乞フモノヲ診シ、都講之ヲ教導シテ習熟セシム。元孝歿スルノ後ハソノ子元徳代リテ之ヲ監理シ、天明四年ヨリ百日教育ノ舉ヲ始ム、ソノ法格ハ毎年二月十五日ヨリ、百日ノ間、有志ノ生徒ヲシテ學舎ニ入りテ研學セシメ、又外來ノ生徒モ日々講義ヲ聞クコトヲ得セシム、ソノ教説ハ前例ニ仍リ、六部ノ書ニシテ、元徳ノ子元簡（桂山ト號ス）ハ素問ヲ講ジ、山田圖南・桃井陶庵ハ傷寒論、目黒道琢ハ難經、服部玄廣ハ靈樞、加藤俊又ハ難經、田村元雄・太田長元ハ本草、小坂元祐・岡田道民ハ經絡ヲ講ジ、儒家井上金峨・吉田篁墩・龜田鵬齋等モ亦經書ヲココニ講ゼリ。

醫學院ハ京都ノ御醫畑黃山ガ天明元年ニ創立スルコトコロニシテ、ソノ教課ヲ醫經・經方・兒科・女科・瘍醫・鍼

灸・本草ノ七部トナシ、ソノ醫經ハ素問・靈樞・難經・甲乙經・脉經ノ五部ヲ撰ミ、經方ハ傷寒論・金匱要略・肘後方・褚氏遺書・病源候論・千金方・千金翼方・外臺秘要ノ八部ヲ取り、兒科ハ幼幼新書・陳文仲方・錢仲陽方・活幼心法・嬰童百問。女科ハ婦人大全良法・女科準繩・濟陰綱目・產寶百問・便產須知・保產萬全書・達生論。瘍科ハ瘡瘍經驗全書・外科正宗・外科樞要・外科百効全書・外科精要・外科集驗方・外科大成・瘍科選粹（コレニ龍木論・明日良方・眼科全書・銀海精微・口齒類要・徽瘡秘錄・痧脹玉衡ヲ附ス）。本草ハ證類本草・本草綱目・救荒本草・食物本草・大和本草。鍼灸ハ銅人鍼灸圖經・明堂鍼灸圖經・徐氏鍼灸經・資生經・鍼灸聚英・神應經・經俞選・十四經發揮ヲ以テ、教課書トシ、別ニ經・史・子・集、四部ノ中ヨリ切要ナルモノヲ採テ之ヲ講習セシメ、每歲ソノ篤學・勤行・詩文・診候・藥案ノ五科目ニ就テ試問ヲ行ヒ、甲科ヲ得ルモノハソノ席ヲ進メ、又ハ之ニ成業ノ證ヲ與ヘタリ。

畑黃山、名ハ惟和、字ハ厚生、一字柳安、黃山ハソノ號ナリ。本ト安藤氏、平安ノ人、幼ニシテ讀書ヲ好ミ、群兒ノ共ニ遊ブモノ咸ナソノ指導ヲ聽ク。醫官畑柳景見テ之ヲ奇トシ、配スルニ女ヲ以テシ、ソノ後ヲ嗣ガシム、因テ畑氏ヲ胃ス。延享二年十月法橋ニ叙シ、寶曆七年十二月法眼ニ進ム。明和四年八月太上天皇ノ疾ヲ診シ奉リテ侍醫トナル。安永五年初メテ御脈ヲ診シ、天明七年尙藥奉御トナリ、法印ニ叙シ、醫學院ノ號ヲ賜フ。享和ノ初メ劇疾ヲ患ヘ、進退ニ便ナラズ、特旨短袴ヲ着ケシメ、又杖朝ヲ許サル、恩典ノ渥キコト想フベシ。文化元年病テソノ家ニ歿ス、享年八十四。黃山居恒世俗ノ浮靡ニ趨リ、人ノ講學ヲ厭ヒ、經ヲ蔑シ理ニ乖キ、微倖ニシテ技ヲ售ルモノ比々皆ナ是ナルヲ見テ慷慨已ム能ハズ。ソノ法印ニ叙シ醫學院ノ號ヲ賜フニ及ビテ、慨然トシテ志ヲ起シ、私財ヲ投ジテ學館ヲ城西ニ建テ、醫學院ト稱シ、黃帝ノ遺經、諸方伎ノ書及ビ鍼灸本草等各之ガ師ヲ立テ以テ弟子ヲ誘掖シ、又儒家ヲシテ六經孔子ノ書ヲ講ゼシメ、諸生ヲシテ、先ヅ聖賢ノ書ヲ讀テ以テソノ本ヲ立テ、本立チテ後ニ醫經ヲ學ビ、而シテ終ニ方伎ヲ習ハシム。別ニ學範ヲ著ハシテ醫學ヲ講習スルノ次第ヲ説ク、是ニ於テカ始メテ醫學ノ教育ニ次序アリ。黃山著ハストコロ醫範ノ外ニ斥醫斷アリ、吉益東洞ガ論說ノ粗梗武斷ノ弊ヲ指摘スルモノナリ。辨瘟疫論アリ。明ノ吳有性ガ著ストコロノ瘟疫論ノ奇ヲ立テ、異ヲ造ントスルヲ論駁セルモノナリ。（畑家系譜・墓誌・日本醫譜）

養生所

豐臣秀吉施藥院ノ遺制ヲ再興シタレドモ、ソノ後之ヲ嗣グモノナク、徳川吉宗將軍ノ職ニ就キ、銳意治ヲ圖ルニ及ビテ施藥院ヲ設ケ、貧民ノ疾病ニ罹リテ醫藥ノ資ニ乏シキモノヲ救療セントスルノ志アリ。偶々、江戸・小石川ノ醫士ニ小川笙船ト言フモノアリ。書ヲ上リテ時政十九條ヲ陳疏セシガ、中ニ施藥局ヲ設クベシトノ議アリ。幕府之ヲ採用シ、享保七年、新タニ施藥局ヲ小石川藥園中ニ建設シ、之ヲ養生所ト名ヅケ、町奉行ヲシテ之ヲ支配セシメ、與力二名・同心六名ヲコレニ屬セシメ、取締以下一切ノ事ヲ取扱ハシメ、小川笙船・林良適・岡丈庵・木下道圓・八尾伴庵・堀長慶ノ諸家ヲ擧ゲテ醫務ヲ主宰セシメタリ。ソノ病室ハ始メ四十人詰ナリシガ、翌八年ニ増築シテ百人詰トナシ、十四年ニ百五十人詰トナシ、十八年ニ百十七人詰ト改メ、ソノ醫員ハ大抵小石川附近ニ在セル寄合醫師・小普請醫師ヨリ任ゼラレ、御番醫師又ハ藩醫、町醫ヨリ擧ゲラレタルモアリ、初メハ本道・外科・眼科ヲ併セテ八九名ノ醫員ヲ置キシモ、享保十八年以降ハ減ジテ五名トナシタリ。ソノ經費ハ初メ年額金七百兩ナリシガ後ニハ増シテ八百四十兩トナシ、附屬町屋敷ヲ置キノ借料（年額七百五十兩ヲ得）ヲ以テ經費ヲ支辨セシニ、寶曆以降ハ地料ヲ官庫ヘ收納シ、別ニ經費ヲ支出スルコトトナレリ。昔時施藥院ノ制ハ詳ナラズ、官立ノ療病院ニシテソノ制ノ備ハレルモノハ蓋シコレニ始マレルナリ。

小川笙船、名ハ廣正、雲語ト號ス。ソノ先祖ハ近江ノ人、笙船ニ至リテ江戸・小石川ニ在リテ醫ヲ業トス。享保六年封事ヲ幕府ニ上リテ時勢十九條ヲ陳疏ス。就中施藥局ヲ設クルノ議ハ其採用スルトコロトナリ、明年施藥局ヲ小石川・白山ニ開カル、コレヲ養生所ト稱ス。笙船ソノ子圓治ト共ニソノ肝煎ヲ命ゼラレ、且ツソノ効ヲ賞シ、銀二十枚并ニ宅地一區ヲ賜フ。幕府之ヲ擢デテ醫官トナサントシタレドモ老ヲ以テ辭シ、寶曆十年、年八十九ニシテ歿ス。(小川笙船由緒書)

後期(德川氏季世)紀

寛政ノ初ヨリ慶應ノ末ニ至ルマデ凡ソ八十年ノ間ヲ、德川氏ノ季世トス。當時西洋ニテ蒸汽船ノ發明アリテ、歐洲諸國ハ競フテ、ソノ翼ヲ世界ニ伸バサントシ、寛政・文化ノ交ニハ露人ノ來タリテ我が北陲蝦夷ヲ窺フアリ、英船ノ來タリテ西邊長崎ヲ侵スアリ。嘉永年間ニハ米艦ノ浦賀ニ來タリテ開港ヲ強請セルアリ。幕府ハ已ムコトヲ得ズシテ遂ニ五港ヲ開キタレドモ、國內ニハ攘夷鎖港ノ說盛ニ行ハレテ之ニ反抗シ、幕府ノ勢威ハ漸ク衰へ、慶應年間ニ至リテ幕府ハ遂ニ瓦解シタリ。

政治上ニ於テコノ如キ變化アリシ時ニ方リ、儒學ニハ古賀精里・尾藤二洲・柴野栗山、以下ノ學者ニ富ミ、國學ニハ本居宣長アリ、前期ノ末ヨリ、駿速ノ勢ヲ以テ、進メルコノ期ノ文運ハ紛擾ノタメニ甚シキ影響ヲ受クルニ至ラズ。我が醫學ノ如キハ前期蘭學創始以來、盛ニ西洋ノ學術ヲ講究シ、外國トノ交通頻繁トナルニ及ビテ益々新知識ヲ彼ヨリ輸入シ、而シテ蘭方醫家ハ獨リ治療ノ術ヲ彼ニ學ブニ止マラズ、進ンデ兵法・天文・地理等ノ學マデヲ研究シ、之ニ依リテ遂ニ西洋ノ學術ヲ我が邦ニ移植シ、我が明治ノ文化ノ花ヲ開クニイタラシメタリ。

此期ノ醫學

コノ期ノ醫學ハ前期ノ後ヲ承ケ、支那ノ醫方ニ本ヅキタル漢方醫學ニ併ビテ、新ニ西洋ノ醫學ニ據リテ興リタル和蘭醫方アリ。漢方醫學ニアリテハ、前期ニ興リテ一時天下ヲ風靡シタル古醫方ハ、コノ期ニ至リテ漸次漢・蘭折衷派ニ移リ、所謂後世家ノ一派ハ尙ホ行ハレシガ、就中コノ期ニ盛ニ行ハレシハ折衷派(考證學派)ニシテ、コノ派ノ牛耳ヲ執リシハ江戸ノ多紀氏ナリ。和蘭醫方モ主ニ江戸諸家ノ盡力ニ依リテ大ニ發達シ、從來京都ニ在リシトコロノ醫學ノ中心ハ、コノ期ニイタリテ轉ジテ江戸ニ移ルニイタレリ。

古醫方

古醫方、殊ニ吉益東洞ノ論說ガ雄渾斬新ニシテ一世ノ耳目ヲ聳動セシヨリ、世人ハ始メテ李・朱醫學溫補ノ非ヲ知リタレドモ、ソノ治療ハ見證ノミヲ據トシ、攻撃過甚ニシテ暇借ナキノ弊ナキコト能ハザリキ。吉益南涯氣血水ノ論ヲ立テテソノ說ヲ修正シ、證異ナリテ病同ジク、病異ナリテ症同ジキモノアレバ、見證ノミニ依リテ治ヲナスハ非ナリト論ジタリ、而カモ病名ニ拘泥セズ、病因ヲ論ゼザルニ至リテハ、兩氏ノ說共ニ同一ナリシガ、中神琴溪出デテ攻補不異ノ說ヲナシ、方證相對ノ非ヲ辨ジ、病因ヲ究ムベキコトヲ唱へ、治術ニ對證・對因・對標・對本等ノ別アルコトヲ言ヒシヨリ、古醫方ハココニ又一新生面ヲ開キタリ³⁹⁾。

中神琴溪、名ハ孚、通稱右内、字ハ以隣、琴溪ハソノ號ナリ。近江ノ山田村ノ人、家世世農ヲ業トス。琴溪幼ニシテ穎悟、出デテ、大津ノ醫家中神氏ノ家ヲ嗣グ、居常貧困、米麥ヲ春キ傍ラ蔬菜ヲ鬻キ、以テ纔ニ生計ヲ成ス。年三十餘ニシテ發憤醫ヲ以テ名ヲ揚ゲントシ、偶々古方便覽一冊ヲ得、大ニ之ヲ奇トシ、精讀シテソノ大意ヲ得タリ、是ニ於テ幡然トシテ京都ニ移リ住ス、時ニ寛政三年、年四十九ノ時ナリ。琴溪別ニ師受スルコロナシト雖モ、深ク吉益東洞ニ推服シ、常ニ東洞ノ著方極ヲ取リテ精讀シタリト言フ、ソノ京都ニ移ルヤ、堺町・四條ニト居シ、醫ヲ以テ門戸ヲ張リ、古醫方ヲ唱へ、ソノ術大ニ行ハル、後江戸ニ遊ビ、又諸國ヲ遊歴シ、遂ニ近江ノ田上ニ隱シ、又南山城ノ僻境有王村ニ移リ、樹藝ヲ以テ自ラ樂シミ、從遊スルモノ頗ブル多ク、門下ノ籍ニ名ヲ列スルモノ一時三千餘人ノ多キニ及ブ。後チ郷里山田ニ歸リ、天保四年八月病テ歿ス、年九十一。著ストコロ生堂醫談・生堂傷寒約言・生堂養生論・生堂治驗・生堂雜記アリ、皆ナ門人ノ記述スルトコロニ係ル。(中神家系譜・皇國名醫傳)

中神琴溪ハ固ヨリ古方家ニシテ、治方ハ攻撃ヲ主トシタレドモ、而カモ『元氣ヲ衰ヘシムルモノハ病ナリ、其病ヲ去リテ元氣ヲ稟賦ノ通ニスルモノハ藥ナリ、別ニ元氣ヲ補フト言フ理アルニアラズ、吐スベキ症ハ吐藥ガ補ナリ、下スベキ病ハ下劑ガ即チ補ナリ』ト言ヒ、又『古人ノ有餘ヲ損シ、不足ヲ補フト云ヘルハ、譬バ傷寒身大熱アリテ口舌咽喉、皆乾燥スルハ陽火有餘シテ血液不足スルナリ、於レは大黃芒硝石膏等ヲ以テ、有餘ノ火熱ヲ攻撃シテ損シ、不足ノ血液ヲ補フテ生ゼシムルナリ、又四肢厥逆下利シテ脈モ微ナルハ、陰寒有餘シテ陽火ノ氣不足スルナリ、於レ是附子乾姜等ヲ用ヒテ有餘ノ陰寒ヲ攻撃シテ損シ不足ノ陽氣ヲ補フテ生ゼシムルナリ、然ルトキハ大黃芒硝ハ陽ヲ攻撃シテ陰ヲ補フ、附子乾姜ハ陰ヲ攻撃シテ陽ヲ補フ、是攻補ノ一二歸スルニアラズヤ』ト論ジ、藥ニ攻・補・毒・無毒ノ別アルコトナケレバ、攻撃ノ外ニ、溫補ヲモ用フベキコトヲ切言シ、又『醫事ノ要ハ、理ヲ以テ本トシテ、融通シテ以テ、治療ヲ善クスベキモノニアラズ、只實術ヲ以テ主トシ、深ク思フテ漸ヲ以テコソ至ルベケレト云フコトナリ』。『夫レ古方醫ト稱スル者ハ仲景ヲ君トシ事へ、後世醫ト稱スル者ハ東垣、丹溪ニ臣トシ事フ、是ヲ以テ、權彼ガ陳言ニアリテ我ニアラズ、故ニ陳言ニ拘滯シテ、生涯技拙ク、醫術ノ權政ヲ執行フ事能ハズシテ、臣僕ヲ以テ身ヲ終フルハ口惜キ事ニアラズヤ、是ヲ以テ、吾門ハ然ラズ、自ラ君ノ位ニ居テ、古今和・漢ノ豪傑共ヲ臣トシテ使フナリ、發表ニ長ゼル仲景ヲ發汗ノ所ニ使ヒ、吐方ニ長ゼル張子和ヲ吐劑ノ所ニ使ヒ、下ニ長ゼル吳有可ヲ下劑ノ所ニ使ヒ、出血ニ長ゼル郭右陶ヲ刺絡ノ所ニ使フ、其他產婦・回生・溫泉・藥餌ニ長ゼル輩ハ勿論、東垣ヤ丹溪ガ族迄モ其所アレバ使フナリ』ト説キテ、寒涼ノ劑ヲ用ヒ、溫補ノ劑ヲ用ヒ、角ヲ用ヒ、鉞鍼ヲ用ヒ、薰ヲ用ヒ、灸ヲ用ヒ、灌水ヲ用ヒ、刺絡ヲ用ヒ、規則ヲ離レ臨機應變、適切ト確認シタル方法ヲ應用スベキコトヲ主張セリ。

中神琴溪ハ實ニ識見ト膽略トヲ以テ、當時ノ古方家中ニアリテ一頭地ヲ抽ンデタル人ニシテ、傷寒約言ヲ著シテ『夫吾日本ノ上古ノ醫道ハ傳ル事ナキ故、其如何ント云コトヲ不レ知、中古ヨリ漢土ノ醫道ヲ傳ルト雖モ、多ク東垣、丹溪ノ術ニテ、五行配當相生相尅ノ理ヲ以テ諸病ヲ療ス、是ヲ以テ皆甘溫養脾胃、則疾自去ルト云フヲ主トシ、沈痾痼疾ト雖モ、補中益氣ノ類ヲ投ジ、大黃一味モ遣ヒ得ズ、之ヲ恐ルルコト宛カモ虎ノ如クナリシヲ、後藤、香川、山脇等ノ豪傑勃然トシテ憤起シ、專ラ古醫道ヲ唱フト雖モ、下地ノ後世家ノ醫風中々急ニハ化シ難ク、天下猶未ダ補劑醫許リナリシニ、吉益東洞繼デ起リテ銳氣ヲ震ヒ、志ヲ逞フシテ傷寒論ヲ規則トシ方極・類聚方ヲ撰ンデ教ヲ立、其外ノ醫書ハ皆ナ無用ノ物ナリトス、其教尤モ簡易ニシテ、其門ニ遊ブコト一二月ナルトキハ忽ニ醫者貌シテ、彼繁雜空理ノ醫書ニ迷フテ居ル後世醫者ニ逢フトキハ、直ニ口給ヲ以テ押潰スヤウニ仕立テテ、醫道ヲ一變シ、彼ノ世ニハビコリタル補中益氣醫者ヲ大黃ノ一味モ遣フヤウニ化セシハ、眞ニ東洞翁ノ大功ト謂ベキナリ、

此翁如レ此簡易ニセシハ齊一變シテ魯ニ至ラシムルノ手段ナリ、然ルニ其子弟東洞ノ意ヲ悟ラズ、故ニ既ニ一變シテ魯ニ至リシヲ、又一變シテ道ニ至ラシムルコト能ハズ、翁ガ言モ弊ヲ矯ル爲ナルコトヲ不レ知シテ、其儘ニ金科玉條トシテ、桂ニ膠シ舟ニ刻ミ、陽ニハ仲景ヲ祖述スルヤウニ見ユレドモ、陰ニハ仲景ノ意ニ違ヒ、終ニ東洞ヲシテ醫道弊風ノ第一トナセリ、可レ悲ノ甚キモノナリ』ト痛言スルニ至リテハ、能ク古醫方ノ神髓ヲ穿チ得テ山脇東洋・吉益東洞等ノ前賢ガ言ハント欲セシトコロヲ言ヒ、成サント欲セシトコロヲ成シタルモノト言フベク、古醫方モ是ニ至テ大ニ備ハレリトナスベシ。

中神琴溪ニ嗣ギテ、宇津木昆臺アリ、張仲景ノ書ニ據リ、之ヲ病者ニ徵スルコト四十年、一家ノ說ヲ立テテ曰ク『夫レ人身ノ病必ず外、風寒ニ感ジ、内、七情ニ傷ブレテ生ズ、此時ニ方ツテ必ず風・寒・熱ノ主客アリ、ソノ風・寒・熱ノ主客ニ各表裏内外ノ異ナルアリ、其表裏内外ニ又陰陽虛實ノ別アルニヨリ其病狀愈出デテ愈窮ナシト雖モ、之ヲ總括スル至リテハ風・寒・熱ノタメニ氣・血・水ノ變ヲ致スニ過ギズ』ト。而シテ傷寒論ハ傷寒一病ヲ論ズルノ書ニアラズ、萬病ヲ治スルノ規範、自カラソノ中ニ在リトシ、傷寒論ヲ以テ漢志ニ舉ゲタル風寒熱病方ナリトシ、古訓醫傳ヲ著ハシテ、ソノ旨趣ヲ明カニシタリ。

宇津木昆臺、名ハ益夫、字ハ天敬、俗稱太一郎、昆臺ハソノ號ナリ。尾張國各古屋ノ人、幼ニシテ學ヲ好ミ、松田棗園ヲ師トシ、醫ヲ淺井貞庵・平野龍門ノ二家ニ學ブ。十八歳ノ時笈ヲ負ヒテ京都テ出デ、諸大家ノ門ニ出入シ、益スルトコロ甚ダ多シ、遂ニ留マリテ家シ廣福王府ニ仕ヘ、古醫方ヲ以テ一世ニ鳴リ、嘉永元年五月八日ヲ以テ、平安・車屋町御池ノ視別軒ト言フニ歿セリ、年七十歳。著ストコロ古訓醫傳、二十五卷・日本醫譜、七十卷・解莊、二十四卷・詩文集、十五卷・和歌集、五卷アリ。昆臺嘗テ弟子ニ教ヘテ曰ク、凡ソ醫ヲ學ブモノハ宜ク古文ノ條理アルモノヲ讀ムベシ、コノ如キモノ今ニ存スルハ獨リ傷寒雜病論ノミ、コノ書ハ即チ古ノ所謂風寒熱病方ナルニ古來學者ノ之ヲ知ラザルハ實ニ遺憾ナリト、仍テ傷寒論ヲ改訂シテ風寒熱病方經篇ト言ヒ、金匱ヲ以テソノ經篇トシ、以テ古ニ復セリトシ、又書ヲ著シテ之ヲ辯明セリ。古訓醫傳即チ是ナリ。昆臺博聞彊記、一過讀シテ後細大盡ク記セザルナク、又好シデ書ヲ讀ミ當時世ニ有ルノ書ヲ看盡スヲ志ス、故ニ制度・文物・天地・動植、通ゼザルトコロナシ。昆臺嘗テ自ラ稱シテ五足齋ト言フ、ソノ意謂ラク神・儒・釋・老・醫コノ五ツノモノニ付キ皆ナ各々得ルトコロアリ、自カラ足レリトスルニ足ルト、仍テ五足齋之言ヲ作ル。而シテ當時平安ノ人亦皆ナ昆臺ニ許スニコノ五者ヲ以テシタリト言フ。ソノ佛ニ於ケルガ如キモ該博兼通、頗ルソノ義ニ精ク又雪堂興禪師ニ參禪シテ悟人スルトコロアリ、五山ノ僧徒皆ナ來テ業ヲ受ケ籍ヲ昆臺ノ佛門ニ著ケシモノ前後凡千餘人ナリシト言フ。解莊、一部亦其老莊ノ學ニ深湛ナルヲ知ルニ足ルベシ。(墓誌・日本醫人譜)

宇津木昆臺ハコノ如ク、風・寒・熱ヲ以テ萬病ヲ總括スベキ所以ヲ詳ニシ、ソノ察病治療ニ於テハ八條ノ要目ヲ立テタリ。ソノ八條目トハ(1)宿・(2)因・(3)本・(4)病・(5)診・(6)證・(7)名・(8)治ニシテ、宿トハ人ノ稟賦・貧賤・男女・老少・住地・境遇等ノ關係ヲ言フ。即チ素因ナリ。因トハ病ノ因テ興ル所以ノ始ニシテ、即チ原因ナリ。本トハ宿ト本ト相合シテ病ノ起ル時、必ず一身ノ内ニ主トシテ病毒ノ附着スルトコロアルヲ言ヒ、病トハ一身ノ苦惱スルヲ謂フモノニシテ、即チ症狀ナリ。診トハ病者ノ死生ヲ決シ、虛實ヲ辨別スルノ法ナリ。證トハソノ病狀情ヲ診シ得テ、ソノ明白ヲ證シ疑ナキノ謂ニシテ、主トスルノ病狀、本ト相應ズルモノヲ指シテ證トナスナリ(主證候)。名トハ病名ナリ。治トハ病ヲ治シテ無病ニ復スル所以ノ方術ナリ。而シテコノ八條目ハ醫タルモノ一日モ廢スベカラザル緊要ノ規則ナリトセリ。蓋シ南涯ノ氣血水説ハ東洞ノ一毒説ヲ推廣シ、ソノ目ヲ示シタルモノナレドモ、ソノ說尙ホ茫洋ノ歎ヲ免レザリシガ、昆臺ノ斯說出ヅルニ及ビテ、ソノ說初メテ整頓スルニイタレリ。㊦

折衷派（考證學派）

古方醫學起リテ後世醫家ノ假見謬說ヲ排斥シ、漢・唐以上ノ醫經ニ依リテソノ說ヲ立ツベキコトヲ唱道シ、一世ヲ風靡セシガ、ソノ說ノ粗梗武斷ニ過ギ、攻撃以外ニ治方アルコトヲ知ラズ、ソノ弊害ノ言フニ堪ヘザルモノアルヲ見テ、先ヅ起リテ古今諸派ノ偏取スベカラザルコトヲ痛論セシハ望月鹿門・淺井圖南ノ輩ニシテ、コレニ嗣ゲ起リシハ山田圖南・多紀藍溪等江戸ノ醫家ナリ。當時江戸ノ儒家ニ井上金峨アリテ、創メテ折衷ノ學ヲ唱ヘ、訓詁ヲ漢・唐ニ取捨シ、義理ヲ宋・明ニ撰擇シ、衆說ヲ折衷シ、穩當ヲ採羅シ、以テ先聖ノ遺旨ヲ闡發スルコトヲ務トシ、山本北山・吉田篁墩・太田錦城・龜田鵬齋嗣ゲ超リテ考證學派ヲ立テシヨリ、ソノ學風ハ又延テ我ガ醫學ニ影響シ、遂ニ折衷派（又考證學派）ト名ヅクル一新派ヲ生ズルニイタレリ、而シテコノ派ノ代表者トシテ擧グベキモノハ多紀氏ナリ。

多紀元孝、本姓金保、名醫丹波康賴ノ裔ナリ。ソノ二十九代ノ孫元泰ニ至リ、族ヲ別チ金保氏トナシ、口科ヲ以テ徳川氏ノ醫官トナリ、累世ソノ職ニアリ。元孝ニ至リ、姓ヲ多紀ト改メ、本道ヲ兼ネ、延享四年奧醫師ニ任ジ、法眼ニ叙セラル。明和二年躋壽館ヲ神田・佐久間町ニ創建シ、以テ醫學講習ノ道ヲ廣ム。元孝ノ子元徳ニ至リテ遺志ヲ繼ギ、更ニ之ヲ開拓シ規模大ニ備ハリ、寛政二年旨ニ依テ家塾ヲ轉ジテ國學トナシ、更ニ修飾ヲ加ヘ醫官ノ子弟ニ命ジテ悉ク就キ學バシメ、仍テ元徳ヲ以テ教諭トナシ、子孫ヲシテ世々ソノ學務ヲ總ベシム。元徳ノ子元簡、元簡ノ子元堅、元胤ノ子元佶、元堅ノ子元琰、相尋ギテ、ソノ職ニアリテ江戸ノ醫權ヲ執リ、一家ノ學說ヲ以テ終ニ二代ノ巨匠トナリ、當時天下ノ醫家ニシテ漢醫方ヲ奉ズルモノハ、皆ナ多紀氏ヲ仰ゲ師宗トスルニイタレリ。

多紀元徳、通稱安元、字ハ仲明、藍溪ト號ス。安永五年奧醫師法眼ニ任セラレ、次デ法印ニ叙セラル。永壽院ト號ス。元徳少フシテ氣ヲ負ヒ、先世名家ナルヲ以テソノ業ヲ振興セントスルノ志アリ、ソノ父元孝ノ遺志ヲ嗣ギ、躋壽館ノ規模ヲ擴張シ、ソノ災ニ遇フテ再造スルニ方リ、家産之ガ爲ニ一空スルモ以テ意トナサズ、寛政ノ初白河侯政ヲ執リ、百度維レ新ナルニ際シ、元徳獻替スルトコロアリ、官醫ノ宿弊頓ニ改マル。又請フテ製藥所ヲ設ケ以テ進用ノ藥劑ニ備フ。寛政十一年病ニ依リ仕ヲ致シ、尋テ歿ス。著ストコロ廣惠濟急方・醫家初訓・養生大意・醫學平言アリ。（多紀家系譜・寛政醫家系圖）

元孝ノ醫說ハ之ヲ傳フルノ書ナキヲ以テ、今詳ニスルコト能ハズ。元徳ノ所見ハソノ著、醫學平言ニ叙述スルトコロニ明カナリ。ソノ說ニ『天之賦レ人也、有レ厚有レ薄、故醫之治レ疾、在三於必察レ之、而審ニ其虛實一矣、而世或謂、古方不レ宜ニ于今病一也、運已過ニ于未會之初一、人稟賦咸薄、惟參芪之補而足矣、或謂藥不ニ瞑眩一、厥疾弗レ瘳、萬病一毒、惟毒藥攻レ之而已、各偏ニ執之、門戶一立、其徒曉曉聚訟、莫レ有ニ定論一焉、』ト論ジテ、諸家ガ自ヲ執ルトコロアリテ、門戶ヲ強張シ、互ニ相誹毀スルノ陋ヲ笑ヒ、『今世據ニ十二元會之說一、奉ニ李・朱一者、徒周ニ施于補中歸脾異功ニ陳問一、視ニ承氣瓜蒂一、如ニ蛇蝎一、其弊竟至レ使下邪、盛者投ニ輕緩劑一、爲中荏苒之患上、嗚呼不ニ亦悲一哉、如下藥不ニ瞑眩一、厥疾弗レ瘳上、是喻辭耳、譬猶レ曰下醫非ニ三世一不レ服ニ其藥一也、猶レ曰下良藥苦ニ於口一、而利中於病上也、勃海長而有ニ越人一、長沙守而有ニ仲景一、何必ニ三世一乎、甘艸膠飴甘平物、足ニ以爲ニ大功一、亦何必ニ瞑眩之藥一乎、周官曰、聚ニ毒藥一以供ニ醫事一、其次章曰、以ニ五味五穀五藥一養ニ其病一、又曰、以ニ五毒一攻レ之、可レ見ニ毒與レ藥固爲ニ一ニ矣、疾也者不平之稱也、邪毒客ニ乎人身一、而不平之謂レ實、氣血脫而不平之謂レ虛、斯二者皆疾也、能治ニ人疾一、之謂ニ疾醫一、實者攻而瀉焉、虛者養而補焉、是其方也、』ト言ヒ、又『然偏執之弊、自レ古而然、如ニ巢元方之寒、劉守眞之熱、張子和之攻、薛新甫之補一、亦以ニ偏執一成家者、蓋其所ニ由來一者三焉、五方各殊ニ其宜一、然以ニ一方一立レ言、貴賤貧富、其習不レ一、然概乎論レ之、一也、其所レ師之人、識見固偏、則先入爲レ主

固不_レ可_レ改、二也、人之於_二毒藥_一、有_二耐者_一、有_二不耐者_一、且毒有_二輕重_一、妄試_二乎一人_一、而以爲_レ準、三也、凡所_二偏感_一、雖_二有識之士_一、亦誤_レ事焉、其始得_二習乎補_一、則以爲_レ惟補之足、得_二習於瀉_一、則以爲_レ惟瀉是足、此_レ鐵者、意_二其隣之子_一之乏類哉_一」ト論ジ、以テソノ說ノ偏僻ニ失スルヲ咎メ、進_テ『以_レ余視_レ之、今稱_二古方_一者、徒謂_二乏擊劑家_一、而可也、據_二十二元會之說_一、奉_二宋・元諸家_一者、徒謂_二之緩劑家_一、而可也、夫後世方中有_二擊劑_一、如_二舟車、濬川、三花、神祐等_一皆是、古方中有_二緩劑_一、如_二建中、理中、腎氣輩_一皆是、學者苟能明_二疾醫之義_一、不_レ必_二擊劑_一、則雖_レ執_二古方_一、而出_下於專奉_二宋・元諸家_一、拘_二于溫補_一者上_上、能奉_二宋・元諸家_一、而廢_二十二元會_一、不_レ必_二緩劑_一、則亦出_下於專執_二古方_一、局_二于攻擊_一者上_上也、雖_レ然、建中益氣各自有_レ所_レ主、舟車十棗、辟就不_レ同、則未_レ如下_三審_三乎貴賤之習、強弱之殊與_二原之寒熱、證之虛實_一、取_二歷代諸家之長_一、而舍_二其短_一、玄同古_レ今_一者無_中偏執_上也、學者其可_レ不_レ思_レ諸_一」ト論ジ、歷代良師ノ遺訓ヲ擇ビ採リ、以テ臨病處藥ノ則ヲ立ツベキコトヲ唱道セリ。ソノ後裔ノ諸家ハ皆ナコノ意見ニ基ツキ之ヲ推廣敷衍シタルモノニシテ、元簡出_テ父ノ業ヲ受クルニ及ビ、金峨・錦城等儒家ノ說クトコロ、考_證ノ學ヲ醫學ニ應用シテ、素問識・靈樞識・傷寒論輯義・金匱要略輯義等ヲ著ハシ、博ク歷代諸家ノ著書ヲ取り、衆說ヲ條陳シ、精義ヲ斟酌シ、考訂精詳、引據宏博ニシテ一ニ偏執ノ說ヲ爲サズ。醫經・經方ノ本義ハ此ニイタリテ始メテ闡發セラレ、粗梗武斷ノ弊コレニ依テ始メテ熄ミタリ。

多紀元簡、字ハ廉夫、通稱安長、桂山ハソノ號、別ニ櫟窓ト號ス。父藍溪、名ハ元惠、明和中醫學館ヲ創メテ、後進ヲ訓督シ、法印ノ位ニ陞リ、永壽院ト號ス、享和元年年七十二ニシテ歿ス。元簡、幼ニシテ穎悟、長ジテ純厚、文學ヲ井上金峨ニ受ク、父ノ業ヲ承ケテ甚_ダ醫學ヲ嗜ミ、專心力學、人ソノ精勵ニ驚ク。寛政二年老中松平越中侯召シテ醫事ヲソノ第二試ミ、大ニソノ精博ヲ稱シ、俄カニ擢_テ、侍醫トナシ、法眼ノ位ニ叙セラル。十一年父藍溪致仕ス。元簡ソノ祿秩ヲ襲フテ、侍醫兼醫學督事トナリ、月糧三十口金百匁ヲ賜フコト父ノ時ノ如シ。享和元年醫官ノ銓選ニ際シ己ガ薦シ人舉ゲラレズ、後宮ノ援引ヲ以テ一無能者ノ出タルヲ慨シ、直ニ建言シテソノ非ヲ論ジタルニヨリ、上旨ニ忤ヒ、侍直ヲ罷メ外班ニ黜ケラル、即チ屏居百日、ソノ間醫牘ノ著述アリ。文化七年再_レ召サレテ、後子宮醫班ニ列ス、ソノ年冬十二月二日奄一夕ニシテ歿ス、享年五十六。武州・平塚城官寺先塋ノ次ニ葬ル、原配野田氏子ナシ、繼配山形氏男二人ヲ生ム、曰ク元胤・曰ク元堅、元胤ソノ祿ヲ襲ク。

寛政中幕府躋壽館ヲ收メテ官立トシ、之ヲ醫學館ト名ヅケ、醫官ノ子弟ハ盡ク就テ學バシム。多紀藍溪之ヲ統督シ元簡之ガ助教タリ、ソノ說書講義、敷釋詳悉、復タ餘瀝ナシ、徒弟ヲ導キ怠惰ヲ率ユルニ至リテハ、則チ周旋誨諄々トシテ倦マズ。故ニ人皆ナ之ヲ推重ス。後子父ノ職ヲ承テ醫學ヲ督スルニ及ビテハ聲名籍甚、當今ノ耆宿亦皆ナ弟子ノ禮ヲ執テ之ヲ推重セリト言フ、ソノ盛ナリシコト想フベシ。元簡典雅風流、好_レテ書畫ヲ衷メ、又自ラ山水ヲ寫ス、氣韻高古頗_ル風致アリ。ソノ書齋ヲ聿修ト名ヅク。祖先ノ緒業ヲ續述スルノ志ヲ銘スルナリ。侍直ヲ罷メラルルノ後子櫟窓ト改ム、自ラ事情ニ濶遠ニシ世用ニ拙ナルヲ表スト言フ。元簡著ストコロ素問識・靈樞識・傷寒論輯義・金匱要略輯義・扁食傳彙考・脈學輯要・醫牘・櫟窓類抄・挨穴輯要・觀聚方・梘中鏡・素問解題・救急選方・聿修堂讀書記・麻疹三書・本朝經驗方・疑脚氣辯惑論・日光驛程聞見記・文集、等アリ。而シテソノ素問・靈樞・傷寒・金匱等ノ諸註ハ、衆說ヲ號疏シ、精義ヲ斟酌シ箋釋ヲ加ヘ、訛謬ヲ正シ、以テ完璧ヲ成ス。是ヨリ先キ古方ノ學起リテ依リ、天下皆ナ五行經絡ノ說ヲ非トシ、諸家各々論述スルトコロアリト雖モ、指歸一ナラズ。元簡ノ書出ヅルニ及ビテ海内醫籍ヲ講ズルモノ、率由スルトコロヲ知り、而シテ前世癘梗武斷ノ弊、始メテ熄ムト言フ。(多紀家系譜・寛政醫家系譜・砲庵遺稿・皇國名醫傳)

元簡ノ子元胤(柳汭ト號ス)ニ至リテハ醫籍考、百卷ヲ著ハシテ、支那歷代ノ醫書ヲ列舉シ、ソノ解題及批評ヲ施シ體雅ヲ著ハシテ、身體部位ノ名義ヲ明カニシ、疾雅・藥雅ヲ著ハシテ、疾病及ビ藥物ノ各義ヲ究メ、元堅(菑

庭ト號ス）ハ傷寒論述義・金匱要略述義・素問紹識・雜病廣要・女科廣要・藥治通義・腹診奇侏等ヲ著ハシテ、歷代諸書ノ萃ヲ拔キテ、以テ世醫ニ好標準ヲ授ケ、後ノ經方ヲ説クモノ皆ナ之ヲ祖トセザルハナク、當時漢醫方ヲ以テソノ家ヲ成スモノ、皆ナソノ門ニ出デザルハナキニイタレリ。

多紀元胤、通稱安元、字紹翁、柳汙ト號ス。文化二年初メテ將軍徳川家齊ニ謁シ、八年三月父元簡病ヲ以テ致仕セルニヨリ、元胤ソノ職ヲ承ケテ醫學督事トナリ、醫學館ヲ總理シ、三十八俵ヲ賜フ。文政五年法眼ニ叙セラレ、六年六月病デ歿ス。長子元昕、曉湖ト號ス、早ク歿ス。弟元估、棠邊ト號ス。元胤ノ後ヲ承ケ、累進シテ法印トナリ永春院ト號シ、醫學督事トナル、文久三年、年僅ニ三十九ニシテ歿ス。（多紀家系譜・歷世尙藥略傳）

多紀元堅、通稱安叔、字亦柔、苗庭ト號ス。天保六年内班ニ擧ゲラレ、醫學館教授トナル。翌年法眼ニ叙シ、尋デ法印ニ叙シ、樂春院ト號ス、安政四年二月病歿ス。ソノ子安琢、名ハ元琰、雲從ト號ス。父ノ後ヲ承ケ累進シテ法印トナリ、養春院ト號ス、又醫學督事タリ。（多紀家系譜・歷世尙藥略傳）

之ヲ要スルニ、多紀氏一派ノ學説ハ金峨・北山・篁墩等諸儒ノ所謂考證ノ學ニシテ、ソノ之ヲ醫學ニ應用スルヤ、訓詁箋註太ダ務メ、考訂精詳・引據宏博、以テ亂雜ナル支那醫方ヲ整頓シテ系統的ニ之ヲ組織セルノ功績ハ甚ダ大ナリト雖モ、之ガ爲ニ學説ハ平凡トナリ、又ソノ所謂折衷ハ徒ニ蠹書ノ考證穿鑿ニアリ、實際ニ離レテソノ説ヲ立テシガタメニ、前期古方家ノタメニ將ニ勃興セラレントシタル、我ガ醫道ガ茲ニ至リテ再ビ歩ヲ蒙昧ノ中ニ退ケシハ惜シムベシ。

多紀元徳（藍溪）ガ江戸ニ在リテ、折衷ノ説ヲ唱道セシ時ニ方リテ、京都ニ和田東郭・福井楓亭ノ二人アリ、亦折衷ノ説ヲナシ名聲關西ニ震ヒシガ、寛政ノ初、共ニ擧ゲラレテ朝廷及ビ幕府ノ醫官トナリ、ソノ治術ハ一世ノ推奉スルトコロトナリタリ。

和田東郭、各ハ璞、字ハ韞卿、一字泰純、東郭ハソノ號、一ニ含章齋ト號ス。少ニシテ大阪ニ遊ビ、業ヲ戸田旭山ニ受ケ、後チ京師ニ來タリテ吉益東洞ノ門ニ入り、古方ヲ修ム。既ニシテ退テ別ニ一家ヲ成シ、聲名籍甚、寛政九年御醫トナリ、法橋ニ叙セラレ、十一年法眼ニ進ミ、享和三年病歿ス。（碑陰銘・皇國名醫傳）

和田東郭ノ醫方ヲ説クヤ『聖賢在レ古、用レ心盡レ力、我儕生ニ千歲之下、讀ニ其書、而學ニ其道、各法ニ其所レ善、而闕ニ其所レ疑、則古人孰非ニ吾師、傷寒・金匱、固我道之詩書、然而殘缺不レ完、宋・元方書、雖ニ皆趣不レ同、亦孔註鄭箋、所謂夏取レ時、商取レ輅、周冤韶舞、採擇不レ遺、學ニ醫法、亦如レ此而已矣』ト言ヒテ、治ヲ施スハ必ズシモ古ニ則ラズ、亦今ニ拘ラズ、ソノ著ストコロノ書、傷寒正文解・蕉窓方意解・蕉窓雜話等ヲ見テ、ソノ一切偏破ノ説ヲ用ヒザリシコトヲ推知スベシ。東郭ノ子泰冲（名ハ哲、字ハ哲郎、默所ト號ス、典藥寮醫師ニ補シ、能登介ニ任ゼラル）及ビ門人竹中南峯踵デ興リテ師説ヲ唱道シ、治術ニ善キヲ以テ時ニ名アリ。江戸ノ折衷派（考證學派）トハソノ趣旨ヲ異ニスレドモ、ソノ古今諸家ノ説ヲ折衷シテ穩健ノモノヲ取り、醫説ノ平凡ナルニイタリテハ互ニソノ轍ヲ同ジフセリ。

漢・蘭折衷派

折衷派（又考證派）ガ、古方・後世、兩派ノ共ニ一方ニ偏セルヲ排シ、今古諸家ヲ折衷シテ中庸ノ説ヲ立テシハ

可ナレドモ、ソノ所謂折衷ハ徒ニ蠹書ノ箋註考訂ヲナスニ過ギズシテ、醫道ハ之ガ爲ニ却テソノ歩ヲ晦闇ノ中ニ退ケタリ。然ルニ夫ノ古方家ハコノ間ニアリテ實驗ニ據リテソノ説ヲ立ツベキコトヲ唱道シ、遂ニ漢・蘭ノ醫説ヲ參酌シテ先ヅ産科ノ革新ヲ致シ、刺絡ヲ治方中ニ加ヘ、コノ期ニ及ビテ眼科・外科・兒科等ノ諸科ニモ、コノ見地ヨリシテ革新ヲ加ヘ、古醫方ハ一轉シテ、遂ニ所謂漢・蘭折衷ノ一派ヲ成スニイタレリ。

漢・蘭折衷派ノ祖トスベキハ山脇東洋ナリ。所謂古方家ハ識見甚ダ高キ人ノミ多クシテ、後藤良山・香川修庵ノ諸家ハ素問・靈樞ノ經説スラモ尙ホ疑義ヲ抱キ、吉益東洞ノ萬病一毒論モ出デテ、古來荒唐無稽ノコトハ矯正スベキコト漸ク明瞭トナラントスル時ニ方リ、山脇東洋ハ素問・靈樞ニ載スルトコロノ解剖説ノ實ニ違フコトニ疑ヲ容レ、自カラ屍ヲ解キ視テ藏志ヲ著シ、一時ノ誹毀ヲ願ミズ、『理或可顛倒、物焉可誣、先理後物、則上智、不能無失也、試レ物載ニ言於其上、則庸人有レ所立也』ト言ヒテ、以テ先物實試ノ説ヲ唱道シ、『嚮者、獲ニ蠻人所レ作、骨節剝副之書、當時憤憤不レ辨、今視之、胸脊諸臟、皆如ニ其所レ圖、履レ實者、萬里同レ符、敢不ニ歎服、』ト論ジテ、實驗ニ基ツクモノハ蠻人ノ説ト雖モ尙ホ取ルベキコトヲ示セリ。之ニ依リテ、ソノ子東門ハ西洋ノ説ニ基ツキテ刺絡ヲ施シ、門人永富獨嘯庵ハ和蘭ノ醫方ヲ論ジテ『和蘭之醫、善ニ汗吐下、寶曆壬午春、余西遊到ニ長崎一就ニ譯師古雄氏、得聞ニ彼醫法ニ其治術、峻劇纖巧、難ニ遽用ニ於邦人、然而至ニ汗吐下之機用、則一一與ニ吾古醫道ニ符矣、夫中華聖人之邦、失ニ其道ニ一千年、特於ニ蠻貊ニ得レ之者、不ニ亦異ニ乎、且其國不レ禁レ解ニ人屍、其民亦不レ屑ニ屠腸筋之慘、是以人病死、其病源不レ明、則剝視レ之、以爲ニ後圖者、數ニ千年于今、其書鬱然存焉、有志之士、考證玩索、可ニ以獎ニ助志業ニ矣』ト言ヒ、著書中ニ和蘭ノ藥方ヲ稱揚セルトコロ尠カラズ。次デ荻野元凱出デテ、和蘭ノ醫方ヲ採用シ、刺絡ヲ施シ、死屍ヲ解キ、小石元俊ガ永富獨嘯庵ノ門ヨリ出デテ蘭方ニ轉ジ、橘南谿(宮川春暉)・三谷筌州・小出龍等ガ解剖ニ據リテソノ説ヲ立テ、中神琴溪ガ古方家ヲ以テ治術ニ精シク近江扁鵲ノ名ヲ得テ、蘭方ヲ採用シタル等ニ依リ、漢・蘭折衷ハ益々ソノ勢ヲ増加シタリ。

専門科中ニテハ、産科ヲ以テ蘭説ヲ採用セルノ第一トシ、賀川玄悅ノ産論ニモ既ニ蘭説ニ取ルトコロアリシガ、ソノ門ヨリ出デタル奥劣齋・片倉鶴陵・原南陽及ビ賀川氏ノ後裔ニ至リテハ蘭説ヲ採用スルニ毫モ躊躇セズ。眼科ニモ柚木太淳アリ、山脇東洋ノ藏志ヲ視テ、心ヲ解剖ニ留メ、寛政九年官ニ請テ刑屍ヲ解キ視テ、發明スルトコロアリ。コレニ依リテ眼病ノ病理及ビ治方ヲ論ジ『我皇邦德化日敷、蠻夷年貢、採ニ其藝術、而爲ニ我國寶、蠻説亦不レ可レ棄矣』ト言ヒテ和蘭ノ説ヲ採レリ。尋デ尾州ニ馬島圓如アリ、肥後ニ上田公鼎アリ武州ニ本庄普一アリ。共ニ漢方ノ眼科ヲ本トシ和蘭ノ醫方ニ參酌シテソノ治術ヲ説キタリ。

兒科ニアリテモ、羽佐間宗玄・片倉鶴陵ノ諸家ガ和蘭ノ説ニ依ルトコロアリシハ、ソノ著、老婆心書・保嬰須知等ヲ見テ推測スルニ難カラズ。

外科ニアリテハ文化・文政ノ頃、紀州ニ華岡青洲アリ、吉益南涯ノ門ヨリ出デテ、漢・蘭醫方ヲ折衷シテ、内外合一、活物究理ノ説ヲ立テ、次デ本間棗軒アリ原南陽・華岡青洲ニ學ビテ、『勤テ古籍ヲ讀ミ、博ク衆方ヲ採リ、古方、後世、西洋等ニ出入シ、其論ノ得失ヲ折衷シ、其方ノ能否ヲ取捨シ、實用ヲ專一トシテ、一派ノ巢窟ニ拘泥スベカラス』ト論ジ、益々活物究理ノ説ヲ恢弘シテ、和蘭醫方ヲ採用シ、更ニ内科秘録ヲ著ハシ、ソノ首ニ題シテ『吾所ニ主張、亦活物究理、尙ニ軒岐、而未ニ必盡信ニ其書、惡ニ蠻貊、而未ニ必盡排ニ其術、博採ニ諸五大洲中、日試月驗、一以歸ニ于活人、即是神州之醫道耳』ト言ヒ、張仲景ノ説ヲ以テ本トナシ、西洋ノ方ヲ採テ之ヲ輔佐スベキコトヲ唱道シ、漢・蘭折衷派ハココニイタリテ大成シタリ。(次章外科ノ條下ヲ参照スベシ)

外科

古醫方興リテ、内科ハ張仲景ノ傷寒論ヲ師宗トシタレドモ、外科ニハ之ニ反シテ取テ以テ範トスベキモノナク、僅カニ鬼遺方ノ一部アリト雖モ、據テ以テ外科ノ治則ヲ立ツルニ足ラズ。我が朝所傳ト稱スルモノアリト雖モ、ソノ術ハ草野庸醫ノ爲ストコロニ過ギズ。明和ノ頃杉田玄白外科ノ備ハラザルヲ歎ジ、支那諸家ノ論說ヲ折衷シテ瘍家大成ヲ著ハシ、以テ系統的ニ外科ヲ組織セント企テタレドモ、蘭學創始ノタメニソノ事ヲ果サズ。青木絅制ノ外科撮要(明和四年)・林子伯ノ錦囊外療秘録(明和九年)アリト雖モ、治術ハ單ニ藥方ヲ擧グルノミニテ手術ニ及バズ。文化・文政ノ頃ニ至リテ中川修亭ノ瘍科筌蹄・高階桂園ノ瘍醫活談・鴨池元琳ノ瘍科撮要等アリト雖モ、大要外科精要・外科大全・外科正宗等ニ據リ、外治トシテハ傳膏鍼灸ノ數法ヲ施スニ過ギズ。西洋醫術ノ一派トシテ行ハレタル和蘭流外科アリト雖モ、ソノ治ハ同ジク、傳膏ヲ主トシ、大抵姑息ノ處置ニシテ、手術トテモ僅カニ外傷ノ縫合・膿瘍ノ切開等ニ止マレリ。然ルニコノ期ノ初ニ方リ紀州ニ華岡青洲アリ、吉益南涯ノ門ヨリ出デテ和蘭ノ醫方ヲ折衷シ、善ク之ヲ活用シテ、靈妙敏活ノ手術ヲ施シ、我が邦ノ外科術始メテ觀ルベキモノアルニイタレリ。

華岡青洲、各ハ震、字ハ伯行、通稱隨賢、青洲ハソノ號ナリ。本ト和田氏、高祖某河内國華岡ニ居ル、由テ以テ氏トス。六世ノ祖傳之亟、畠山高政ニ事ヘ、高政亡ビシトキ紀州ニ移リ、那賀郡ニ居リ、祖父雲仙ニ至リテ始メテ醫ヲ業トス。青洲ノ父名ハ尙道、母ハ松本氏、兄弟五人アリ、青洲ハソノ長子タリ、幼ニシテ穎敏、父祖ノ業ヲ嗣ギテ醫術ヲ研精セントシ、京師ニ出デテ桃谷華洲・山田靜齋等ト交ハリ、吉益南涯ニ從ヒテ氣血水醫學ヲ講ジ、大和見水ニ從テ外科ヲ修メ、ソノ他諸家ノ說ヲ參酌シ、刻苦多年、既ニ得ルトコロアリテ、去テ紀州ニ歸リ、内外合一・活物究理ノ說ヲ唱ヘ、古今漢・蘭ニ折衷シテ、從來因循苟且ノ軌轍ノ外ニ跳梁シ、刀鑿鋸斷、奇ヲ出シ、新ヲ求ムルモ、繩尺ノ守ルベキヲ失ハズ。奇疾異病、方書ニ載セザルモノト雖モ、ソノ豪膽英才ヲ以テ手ニ隨テ處置シ、功ヲ奏セザルコトナシ。世人推シテ元和後ノ一人トナシ、病客踵ヲ接シテソノ門ニ集マリ、四方ノ醫生亦多ク來リテ教ヲ乞ヒ、着籍ノモノ千有餘人ニ至ル。文久二年紀州候ニ辟サレテソノ醫員トナリ、後侍醫ニ準ジ前後並ニ特旨ソノ邑ニ居ルコトヲ許サル。天保六年十月病ヲ得テ歿ス、年七十六。青洲一弟アリ、各ハ文献、字ハ子徵、鹿城ト號シ、大阪ニ居ル、亦外科ヲ以テ當時ニ各アリ。著ストコロ鹿城醫話、一卷アリ。(日本醫譜・墓誌)

華岡青洲ハ實ニ漢・蘭折衷派ノ一大宗ト推スベキモノニシテ、我が邦ノ漢方醫家が能ク蘭醫方ヲ運用シテ、當時ノ醫家ノ多數ヲシテ殆ド瞠若タラシメシハ、前ニ産科ノ賀川・奧諸家アリテ、今外科ノ華岡青洲アリ。ソノ主張スルトコロハ内外合一・活物窮理ノ說ニシテ、『方無古今一、内外一理、泥レ古不レ可ニ以通ニ于今一、略レ内不レ可ニ以治ニ於外一、言レ蘭者密ニ於理一、而麤ニ於法一、奉レ漢者精ニ於法一、而泥ニ於跡一、故我術考ニ治於活物一、出ニ法於窮理一』ト言フニ在リ。而シテソノ治術ヲ説クヤ『凡療レ病、其處レ方製レ劑、不ニ必拘ニ局方一、藥餌所レ不レ及、針灸治レ之、針灸所レ不レ及、可ニ以劊ニ割腹背一、可ニ以瀉ニ洗腸胃一、苟可ニ以活レ人者、宜レ無レ不レ爲焉』ト言ヒ、古今漢・蘭ニ折衷シテ之ヲ活用シ、靈妙敏活ノ手術ニヨリテ、外科ノ面目ヲ一新シ、新ニ華岡流外科ノ一派ヲ起スニイタレリ。華岡青洲ノ術ヲ記スルモノニ、瘍科神書・瘍科瑣言・金創要術・金創口授・外科摘要・疔瘡辨名・乳岩辨・膏方便覽等アリト雖モ、門人ノ筆録ニカカリ、且ツ謄寫シテ世ニ傳フルノミ。今コレ等ノ書ニ依リテ華岡流外科ノ内容ヲ推究スルニ、ソノ病症ヲ論ズルヤ、主ニ外科正宗ニ據リテ病類ヲ區別シタレドモ、ソノ症候・治法等ヲ論ズルニ方リテハ所謂活物窮理ノ持論ニ基ツキ、實驗ヲ主トシテ、從來未發ノ論說甚ダ尠カラズ。殊ニソノ刀ヲ揮テ皮肉ヲ割クノ術ニ至リテハ、支那ノ外科ハ固ヨリ言フヲ俟タズ、當時盛ニ行ハレタル和蘭流ノ外科モ、徒ラニ之ヲ耳ニス

ルノミニシテ未ダ手ヲ着クルニ及バザリシモノナリ。試ミニソノ二三手術ニ就キテ略述スレバ

鎖・肛 華岡氏ガ初メテ下シタル名ナリ。治術ハ『陰門ノ傍、或ハ會陰邊ニ小孔アルハ彎消息子ヲ以テ探リ、次第ニ肛門ノ方ヘキリ、指二本入ル位ニシテ、綿ニ白雲ヲノバシ挿ミ入ルベシ』

鎖・陰 是モ亦華岡氏ガ初メテ下シタル名ナリ。治術ハ『先ツ剪刀ヲ以テ尿道ノ下ヨリ膜ヲ截ル、猶奧ニ薄皮アルアリ、初メ指一本ニテ破ブリ、ソレヨリ二本ニテ明クベシ、尿道ト陰門トハ薄皮一重ニテ隔タル故暴卒ニ施術スベカラズ、ソレヨリ尿道ニ導水管ヲ指シ置キ肛門ノ方ヘモ大鯨篋ヲ入レテ目的トナシ兩道ヘ截リ貫ケヌヤウニ術ヲ施スベシ、其跡ハハリカタニ破敵ヲ塗り挿シ置クベシ』

石・淋 『押し出ストキハ前ニ出ル、龜頭ノ邊ニ押し移ルコトアレバ口廣ゲルト隨分出ルモノナリ、妄ニ切出ストキハ縫合シテ後ニ尿道小サクナリテ通路宜シカラズ、故ニ大抵デハ切ラズ、前口マデコヌトキハ陰莖ノ下邊ヨリ横ニ截リ出ス』

乳・癌 『左ノ手ニテ岩根ヲ握リ岩ヲ運動セシメズ、割破シテ瘡口ニ手ヲ入レテ核ノ皮肉ヨリ離シ、細絡ヲ悉ク截離シテ核ヲ出シ、贅肉ヲシテ内ニ殘サシムベシ、誤テ岩核肉中ニ殘ルトキハ治スト雖モ必ズ發ス、術中血絡ヲ斷テ血走レバ傳藥、又ハ燒金ノ術ニテ止ムベシ、核ヲ去テ後、燒酎ニテ溫メ瘡口ノ瘀血ヲ洗ヒ去リ、金瘡油ヲ塗りテ瘡口ヲ縫合ス』

脫・疽 『指ノ關節ノ處ヲコロシメスニテ骨際マテ切廻シ、指頭ヲ握テ折ルトキハ直ニ離ルルナリ、又病指ヲ臺ニ載セ鑿ヲ關節ノ上ニアテ、槌ニテ打テハ截ルルナリ』

痔・漏 『病人ヲ側臥セシメ、右手ニ彎消息子ヲ把リ漏口ヨリ肛門ニ向テ徐々ニ挿入シ、左食指ヘ鹿角菜ヲ塗り肛門ニ挿入シテ露珠ヲ搜ルベシ、淺處ニ出テアラハ指ヲ露球ヘ添ヘ右手ニカヲ入レテ肛門ニ引スクベシ、消息子肛門ヨリ出タラバ美濃紙ヲ幅三四分位ニ切テ絹絲ヲヨリコミ太サ元結ノ如クニシテ、其絲ヲ露珠ヘ結付ケ消息子ヲ元ノ孔ヘ引戻シ絲ヲ貫キ紙ヲ枕ニシテ絲ヲ膝結ニ結ブ、其後漏口ヘメイチヤニ破敵ヲ塗り挿入ス、明日ニ至リ新ニ枕ヲ換ヘ絲ヲ結ヒ直ス、日ヲ經テ絲深ク切コミ瘡口廣クナリタラバ痔漏刀ヲタメテ圓クナシ、漏口ヨリ肛門ニ貫キ一擧ニ之ヲ斷截スベシ』

流・注 古ヘニ風腫・毒腫・風毒腫ト言フモノニシテ、華岡氏流注ノ名ヲ唱ヘシヨリ世人モ多クコノ名ヲ用フ。治法ハ『先ツ膿ノ成ルヤ否ヤヲ精驗シ、而シテ後ニ鐵ヲ刺シ、抜クトキ横ニ截テ鍼口ヲ廣クシ、瘡口ヘ左突メイチヤヲ挿入ス』

兔・唇 『先ツ鋏ヲ以テ其缺タル所ヲ切り、次ニバンドヲ切り、其ヨリ疵ノ正中ヲ縫ヒ、次ニ上ヲ縫ヒ夫ヨリ下ヲ縫ベシ、初メ鋏ヲ入ルトキ左ノ方ノ缺目ヨリ先ニ切り、縫終リテ無名異血竭ヲ鷄子白ニテ煉リ創口ヘ貼シ、カスカイ或ハ卷木綿ヲ施スベシ』

右ハ固ヨリ華岡外科ノ手術ノ主要ナルモノヲ擧グルノミ、ソノ他鎖・口・骨・瘤・便・毒・腐・骨・疽・腸・疝等ノ諸症ニ對シテモ亦刀ハ加ヘラレタリ。

而シテ特ニ擧グベキコトハ華岡氏ガ、コレ等ノ大手術ヲ施スノ前ニ一種ノ麻・醉・劑ヲ發明シタルコトナリ。昔者華陀一種ノ麻醉藥ヲ製シ之ヲ用ヒテ手術セシコトアリ（後漢書ニ出ツ）ト傳フレドモ、ソノ方ト術ト永ク亡ビテ漢土及ビコノ邦ノ外科書ノ遂ニ茲ニ説キ及ブモノナカリシニ、華岡氏出デテ二千年來沈淪シテソノ跡ナカリシ靈術ヲ再興セリ。當時華陀再出ノ稱アリシモ亦以アルナリ。門人等ノ記スルトコロニ據レバ、ソノ劑ハ麻・沸・湯ト稱シ、曼陀羅華八分・草烏頭二分・白芷二分・當歸二分・川芎二分（或加南星炒一分）、右細挫熱湯ニ投ジ、一二沸頻ニ攪拌シ

滓ヲ去リ、溫服スレバ一二時ニシテソノ効（瞑眩）ヲ顯ス。ソノ昏暈ノ間ニ乗ジテ施術シ、術了レバ煎茶ニ鹽ヲ加ヘテ服セシメ、醒後人參調榮湯（當歸・川芎・芍藥等）ヲ授クルナリ。

金創ノ治法ニアリテハ、縫合繃帶ノ法ニ嚴制アリ、先ヅ火酒ニ浸セル綿布ヲ以テ創口及ビソノ周邊ヲ洗拭シ、次デ介者ヲシテ創口ヲ吻合セシメ、淺創ナレバ創口ノ兩側方三四分、深創ナレバ五六分離レテ鍼ヲ貫キ、結び目創口ノ上ニナラヌヤウ少シ側ヘヨセテ結紮ス。縫法初メ創ノ中央ヲ縫ヒ、次ニ中央ノ絲ト創端トノ間ヲ縫ヒ、又絲ト絲トノ間ヲ縫ヒ、絲ト絲トノ間相距ルコト四五分ヲ常式トス、縫ヒ終テ後再ビ火酒綿布ニテ拭ヒ、創ノ大ナルモノハソノ最深キ所、又ハ最下位ノ所ニメイチャ（綿撤絲）ヲ插ミテ瘀液ノ排泄ニ便ニシ、縫合終レバ椰子油ヲ創ノ周縁ニ塗布シ、創口ニハハルサン又ハ金創油ヲ貼傳シ、次ニ三重ノ木綿ヲ鶏蛋白ニ浸シテ創上ニ貼シ、其上ニ三重ノ酢木綿ヲ加ヘ、一大膏ヲ貼シテ之ヲ覆ヒ、更ニ三重ノ木綿（枕木綿）ヲ置キ、卷木綿（繃帶）ヲ以テ之ヲ束ネシム、爾後日々繃帶ヲ交換シ、六七日ニシテ絲緩ミテ搖グヲ見テコレヲ剪截スルノ度トシ、一絲ヅツ間ヲ隔テテ去ルナリ。

止血ノ法ハ從前ノ諸家方施シタル如ク、藥粉ヲ創處ニ散布スルガ如キ、迂遠ノ法ニアラズシテ、血管ノ押壓・血管ノ局處結紮、及ビ烙鐵ヲ用ヒテ、十全止血ノ目的ヲ達セリ。ソノ手術ニ要スルトコロノ器具ハ金創針（少シ反テ織月ノ狀ヲナスモノヲ用フ）・剪刀・毛引（鑷子）・彎消息子・スポイト（水銃）・小手鋏・縫合針・絲（麻絲、又ハ木綿ノ絲ヲ三條撚合セタルヲ用フ）・木綿等ニシテ、ソノ繃帶（卷木綿）ニハ頭鼓（半幅九尺咽ノ疵ニ用ユ）・頭柱木綿（半幅二尺五寸）・腹卷木綿（本幅七尺）・鼓木綿（本幅二丈七尺）・八裂木綿（本幅二丈三尺、頭ノ疵ニ用ユ）・首卷（半幅四尺餘、手足ノ疵ニ用ユ）・腹卷上帶（四割）等、ソノ用法ニ應ジテ長短一定ノ制アリ。

華岡氏ノ術ハ獨リ之ノミニ止マラズ、股關節・膝關節・腕關節ノ脫臼及ビ下顎脫臼ヲ整復シ、又痛風等ニテ關節ノ強直ヲ起シ、若クハ癥痕及ビ筋肉牽縮ニ對シテ放手ト稱スル一法ヲ施シタリ。

之ヲ要スルニコレ等ノ外科術ハカスバル流外科ニ基ヅクト稱スト雖モ、ソノ華岡氏ノ手ニ依リテ大ニ備ハリタルコトハ復タ論ヲ俟タズ、實ニ華岡流外科ノ一術ハ我方邦ノ醫學ヲシテ他邦ニ對シテ大ニ面目アラシムルモノナリ。コノ如ク華岡青洲ノ外科ニ於ケル、神詣獨得ノ妙ヲ以テ剝破抽割ノ術ヲ施シ、名聲天下ニ噪シ、而シテソノ秘訣ヲ受ケテ、益々之ヲ恢弘シ、以テ華岡流外科ノ盛名ヲ一時ニ播揚シタルハ、水戸ノ人本間棗軒ナリ。

本間棗軒、初ノ名ハ資章、後チ救ト改ム。字ハ和卿、通稱ハ玄調、棗軒ハソノ號ナリ。年十七ニシテ原南陽ノ門ニ入り、醫學ヲ學ブ。尋テ江戸ニ出デテ杉田立卿ニ從ヒ、西洋醫術ヲ修メ、傍ラ太田錦城ニ就テ經書ヲ講ズ、居ルコト三四年、西遊長崎ニイタリ、蘭人シーボルトニ親炙シ、又轉ジテ京都ニ入り、高階枳園ヲ師トシ、紀州ニ赴キテ華岡青洲ニ就キ專ラ心ヲ外科ニ用フ。棗軒、青洲ノ門ニ在ルコト數年、ソノ術ノ蘊奧ヲ究メテ江戸ニ來タリ、日本橋・搏正町ニ業ヲ開キ治術ヲ施ス、既ニシテ徵サレテ水戸侯ノ侍醫トナリ、後チ烈公ニ從ヒテ水戸ニ移リ、ソノ醫學教授トナリ、名聲大ニ振フ。天保八年、瘍科秘録ヲ著シテ、華岡流外科ノ秘奧及ビ自家二十年ノ經驗ヲ縷載シ、安政六年更ニ續瘍科秘録ヲ著シ、多ク自家ノ發明創說ニカカルコトヲ載ス。コレニ依リテ棗軒ノ名遂ニ天下ニ顯ハル、元治元年、内科秘録ヲ著シ、内治ノ法ヲ説ク、明治五年、年六十九ニシテ歿ス。（碑銘・瘍科秘録・内科秘録）

本間棗軒ノ主張スルトコロモ亦活物窮理ノ說ニシテ、ソノ師華岡青洲ノ術ヲ推廣シ、瘍科秘録・續瘍科秘録ヲ著ハシテ、以テ華岡流外科ノ真相ヲ世ニ傳ヘタリ。ソノ瘍科秘録、十卷ニハ痔疾ヲ首トシ、瘰癧・微毒・癩・脫疽・翻花瘡・附骨疽・膝風・兔缺・鎖陰・鎖肛・腸癰・落架風・鼻痔・舌疽・乳岩・流注・癰疽・疔瘡・瘰疽・淋・瘦瘤・血痣・失榮・陰萎、等ヲ擧ゲ、續瘍科秘録、五卷ニハ、脫疽・血瘤・舌疽・鬼胎・顴骨疽、等ノ諸篇ヲ載ス。共ニ皆ナ本間氏ガ見テ以テ重要トスルトコロノモノナリ。就中痔漏・乳岩・脫疽・血瘤・兔缺・顴骨疽、等ノ手術

ハ棗軒が最モ工夫ヲ凝シタルトコロニシテ、華岡流外科ハ、コレニ依リテ大ニ備ハレリ。

脱疽ノ手術ハ華岡青洲既ニ之ヲ施シタレドモ、唯指ヲ截リシニ止マリ、ソノ豪邁ヲ以テシテ尙ホ脚腕ヨリ截斷セシトナシ、然ルニ棗軒ハコノ姑息ノ術ニ安ズルコト能ハズ、安政四年（西曆一八五七年）劇症ノ脱疽二人ヲ得テ、一ハ膝頭ヨリ截リ一ハ脛中ヨリ截リタリ、是レ我が邦ニ於テ脱疽ニ一肢ヲ截斷ヲ施シタルノ初ナルベシ、次デ又血瘤ヲ摘出セリ、血瘤（靜脈瘤）ハ古來外科ノ難治トセシトコロニシテ青洲スラ猶ホ憚リテ刀ヲ之ニ加フルコトヲ敢テセザリシモノナリ。ソノ他瘰癧ヲ截開シ、流注ニ刺鍼シ、乳癌ヲ摘出シ、及ビ痔漏ヲ截開スルノ類、華岡氏創唱ノ手術、皆ナ棗軒ヲ俟テ完備シ、殊ニ側截開術ヲ施シテ膀胱結石ヲ摘出セシガ如キ（安政五年、西曆一八五八年）ハ我が邦ノ外科史上、卓越ノ業績ト稱スベキモノナリ。

本間棗軒ノ外術ハ之ヲ華岡青洲ノモノニ比スレバ、更ニ西洋實驗學派ノ論說ニ參酌スルトコロ多ク、ソノ用フルトコロノ器具モカテーテル・彎曲消息子・尖首刀（自家創製）・探宮子（自家創製）・ランセツタ（柳葉針）・鑷子、等西洋形ノモノ多ク、ソノ繃帶ハ大抵蘭法ニ依ル、ソノ縫合ノ法ニハ、創形一字縫法・創形十字縫法・創形口字縫法・創形川字縫法・創形人字縫法、等數種ヲ別チタリ。

眼科^⑤

眼科ノ獨立シテ一科トナリシヨリ既ニ二百餘年、李・朱醫學興リシ時モソノ影響ヲ受クルコト甚ダ少ク、古方醫學興リシ時モソノ感作ヲ蒙ムルコト甚ダ微ナリシガ蘭學興リテヨリ、著シクソノ影響ヲ蒙ムリ、眼科ヲ専門トスルモノニシテ多少ノ識見アルモノハ、早くモ斬新ノ蘭說ヲ採用シ、以テソノ術ヲ新ニセント試ミタリ。就中柚木太淳・衣關順庵・山田大圓ノ諸家ノ如キハソノ主タルモノナリ。

柚木太淳（鶴橋ト號ス）ハ京師ノ人、世々眼科ヲ業トシテ聲名アリ。太淳、ソノ傳來ノ古說ニ服セザルトコロアリ、嘗テ謂ラク『夫眼科之奧旨、論ニ其變ニ、則疫痰疔痧癰癩之諸證疔瘡癬疥之諸瘡、及婦兒之雜病、悉爲ニ其原因ニ、論ニ其常ニ、則臟腑筋脈氣血、皆爲ニ其關係ニ、是故、余明ニ辨諸雜病之理ニ、而以爲ニ吾眼科之術ニ、既又欲レ窮ニ臟腑筋脈氣血之理ニ、故稽ニ諸古今書ニ、而其道多岐、虛談空論、徒爾費レ晷、不レ得レ透ニ徹其理于心ニ、又何以視ニ眼脈之所レ系乎哉、余每下療ニ眼中諸疾ニ而施中針烙刀洗之術上、無レ不レ切ニ募解體之擧ニ云々』ト、寛政八年遂ニ官ニ請フテ一刑屍ヲ得、ソノ十月朔日、之ヲ解キ剖キテ臟腑經絡ヲ審視シ、多年ノ積疑、一時ニ氷釋シテ眼科精義ノ著アリ、又コノ審視ニ由リテ得タルトコロヲ記述シテ解體瑣言ヲ著セリ、書中ニ言ク『我皇邦、德化日敷、蠻夷年貢、採ニ其芸術ニ、而爲ニ我國寶ニ、蠻說亦不レ可レ棄矣』ト、亦以テソノ西洋ノ說ニ採リタルコトノ多キヲ想フニ足ルベシ。

眼科精義ノ書ハ余未ダ之ヲ見ズ。柚木流眼科書ハ門人加門隆德ノ筆録セルモノ（文化元年ノ序文アリ）アリ、初メニ、眼球解剖ノ圖式ヲ擧ゲ、次ニ諸般眼病ノ圖譜・手術ニ用フル器械ノ圖畫等アリ、猶ホ眼病各個ノ證候・治方等ヲモ擧ゲタリ。

衣關順庵（字ハ甫軒、東海ト號ス）ハ奥ノ衣ケ關ノ人、出デテ一ノ關田村候ニ仕へ、君命ヲ奉ジテ江戸ニ來リ、渡邊立軒ノ門ニ入り、張膏甘子ノ眼科（橋本流ト稱ス）ヲ修メ、得ルトコロアリ。謂ラク『内經曰、諸脈者屬ニ於目、目得レ血而能視、又曰、心合脈、脈者皆屬ニ於目、又曰五臟六腑之精氣皆注ニ於目、而爲ニ之精ニ、蓋シ此語ヤ、眼目家ノ三昧ニシテ、其然ル所以ヲ知ラズンバアルベカラズ』ト、乃チ屢試ニ獸眼ヲ解剖シ、終ニ二人ノ眼ニ及ビ、ソノ著、眼目明辨ニハ眼ノ解剖ノ圖ヲ載セ、且ツコレニ就キテノ記載ヲモ附セリ。眼目明辨ハ文化七年、東海ノ子、貫（又順庵ヲ襲稱ス）ガ門人佐藤道軒ト共ニ校刊セシトコロニシテ、第一ニ眼目内景ノ辨ヲ擧ゲ、且ツ附記シテ曰

ク『家大人、治術ニ刻苦スル積年、屢試ニ獸眼ヲ解剖シ、終ニ人眼ニ至リ、此ヲ圖シテ徒弟ノ指南車トス、西洋ノ解剖ニ精究ナルヲ聞テ其書ヲ見ント欲スレドモ未ダ之ヲ得ズ、寤寐以テ憾トセラレキ、貫頃コロ其西人蒲朗加兒都、

フランカールツ

ハ兒歇應、久留無私、等ガ解剖書ヲ得テ見ルニ、眼目ノ圖說モ亦甚タ精妙至レリ盡セリ、此略圖ノ及ブ所ニアラズ、然レドモ暗ニ西說ト吻合スルモノ多シ、故ニ貫其遺心ヲ嗣ギ、尙ホ研究シ、其内景手術治驗方法ヲ次編三編ニ著シ明辨ナラシム』ト、ソノ蘭醫ノ說ニ採ルトコロ多カリシハ之ヲ以テ推知スベシ。

山他大圓（謙齋ト稱ス）眼科提要ノ著アリ、文化十四年中川故ノ序文アリ、曰ク『吾友山田大圓君、性質直而材長ニ於構思、凡諸機妙工、一見レ之、輒必模擬之、未嘗有レ所屈也（中略）自古來相傳之方、至近世諸家所レ秘之術及囁蘭治法、皆無レ不探索ニ焉、故其眼科之伎、大超ニ出於世醫、（中略）於レ是、擧レ證別レ條、皆從ニ囁蘭、以爲ニ準據、論治方、載三方藥、一以レ所自試、爲レ主、傍擇ニ採良善者、勒爲三卷、名曰眼科提要（下略）』ト、コレヲ柚木・衣關ノ兩家ニ比スルニ蘭說ニ採リシコトノ甚ダ多キヲ見ル。

以上三家ノ他、尙ホ眼科醫ニシテ和蘭ノ說ヲ採リシモノハ、必ズ之アリシナラン。（樋口子星ノ眼科選要ノ如キ、ソノ一例トスベシ）而カモソノ所說及ビ著書ノ廣ク世ニ行ハレテ、當時ノ眼科界ニ著大ノ影響ヲ及ボセルモノハ、上記ノ三者ニ止マリシナラント思ハル。

和蘭ノ醫說ノ影響ニ依リテ眼科ニ變化ヲ見ハセシハ先ヅ眼ノ解剖ニ心ヲ留メシコトニテ、眼ヲ解キ視テ、ソノ構造ヲ審ニスルコトノ眼科治術上ニ必須ナルコトヲ說キシハ柚木・衣關二氏ヲ以テ始トス。而シテ兩氏ノ著書、共ニ先ヅ眼ノ解剖ノ圖畫ヲ載セタリ、研究固ヨリ粗鹵ニシテ、錯誤尠カラズト雖モ、ソノ意ヲ解剖ニ注ギ、コレニ依リテ治則ヲ立テント企テシハ、眼科學上ノ大進歩トスルニ足ル。

柚木太淳ハ眼證ヲ別チテ、胞瞼外廓ノ證（兩瞼粘睛・胞肉生瘡・風牽喎斜・風牽出瞼・拳毛倒睫・飛塵入眼・瞼胞痔、等）・風眼ノ證（漏眼膿血・暴風客熱・痛如針刺、等）・努肉ノ證（贅肉・努肉攀睛、等）・膜ノ證（逆須生膜・黃膜下垂・藤膜・垂簾、等）・中痺ノ證（星目・老婆星、等）・翳ノ證（水翳・膜入水輪・月輪・黑翳如珠、等）・内痺ノ證（黃・青・黒・白各色内痺、等）ト爲セリ、即チソノ證ニ名ヅケ、且ツ之ヲ區分スルコトハ概ネ支那眼科ヲ基本トセリ、然レドモソノ證候ヲ記載スルニ方リテハ發明ノ說モアリ、蘭說ニ參酌セルトコロモアリテ我が中古紀ヨリ近世紀ノ初ニ至ルマデノ眼科ノ如クニ粗雜ナラズ。

衣關及ビ山田ノ兩氏ニ至リテハ、眼證ヲ論ズルニ專ラ蘭說ヲ採用セント試ミ、衣關順庵ノ眼目明辨ハ、之ヲ瞼毛病・眼瞼病・淚管病・白膜病・烏睛病・眼珠病・腫仁病・上液病・中液病・下液病・視膜病・創傷病ノ諸部門ニ區劃セリ、我が邦西洋限科譯書ノ嚆矢タル眼科新書ハ、文化十二年ノ刊行ニ係リ、コノ眼目明辨（文化七年刊行）ニ後ルルコト六年ナリ。故ニ我が邦ノ眼科書ニテ眼證ヲ論ズルニ解剖的ノ區分ヲ用ヒシハ實ニ衣關氏ノ著述ニ始マルト言フベシ。山田大圓ノ限科提要ハ文化十四年ノ著述ニ係リ、ソノ病證ノ區別ハ一ニ新譯ノ眼科新書ニ據リテ、同じク解剖的ノ區劃ヲナセリ。

手術及ビ器械ニ就キテハ衣關ノ眼目明辨、二輯・三輯（手術篇）ハ余未ダ之ヲ見ザル（思フニ梓ニ上ボラザリシナラム）ニ依リテ叙述スルコト能ハズ。柚木及ビ山田ノ手術ニ至リテハ、ソノ書ニ依リテ僅カニ一端ヲ察シ得ベキノミ、而シテソノ手術ノ大體ハ支那眼科ニ基ツケルヲ以テ、上條ニ記述セルモノニ大都相同ジトス。但シ彼ハ稍々拙ナリシニ、コレハ少シク巧緻ヲ加ヘタルノミ、只上條ニ述ベザリシモノニシテ、コノ書中ニ見ユル倒睫肉夾ノコトニ就キテハ、此ニ一言スルヲ要ス。

倒睫肉夾トハ倒睫ヲ治スルニ用フルノ器ナリ、竹ヲ一分角ホドニ、二本ヲ相合せ、一端ヲ絹絲ニテ結び置クナリ、

倒睫ノアル眼瞼ヲコノ竹片ニテ挟ミ、他ノ一端ヲ絹絲ニテ繋リ、皮ヲ燒金ニテ一週日ソノ儘ニ放置ス、然ルトキハ自然ニ落ち去ルナリ、若シ然ラザルトキハ鉗ヲ以テ切ルナリ、コノ手術ハ柚木ヲ始メ、當時ニ名アリシ眼科醫家ノ皆ヲ施行セシトコロニシテ、支那ノ眼科ニ夾法トアルモノニ少シク修正ヲ加ヘタルナリ。又今ノ所謂「トラホーム」(胞肉生瘡)ニ柚木ガ燈心草ヲ以テ摩擦スルノ方法ヲ賞用セシコト(柚木ノ眼科秘録ニ曰ク『胞肉生瘡ハ、上瞼ニ初發チヨボチヨボトシタ、白キモノ出デテ、甚ダ痒ク、痛ムモノナリ、此症ハ毒至テ深キモノナリ、上瞼ヲマブタカヘシニテカヘシ、燈心ヲ八九本、紙ニテ卷キ、長サ二寸許ニシテ、此ニテ瞼肉ヲチヨイチヨイト、擦レバ血出ツルナリ』ト)ハ特ニ擧ゲテ言フベキコトナリ。

コノ如ク、漢方醫家ガ和蘭ノ眼科醫方ヲ運用セント企テシコトハ、時勢ノ推移ト共ニ漸次ニソノ歩武ヲ進メ、天保ノ初年眼科錦囊ノ著述アルニ及ビテ漢・蘭折衷ノ眼科ハ大成シタリ。眼科錦囊、正續二篇ハ本庄普一ノ撰述トシテ世ニ行ハルレドモ、コハ本庄普一ガ蘭方醫某ノ稿本ヲ竊ミ、多少ノ修正ヲ加ヘテ刊行セルモノナリト傳フ、眞正ノ著者ノ誰ナリシヤハ深く追究セズ、今ハコノ書ガ漢・蘭折衷ノ眼科書ノ稱首タルコトヲ擧グルニ止ムベシ。

眼科錦囊ハ先ヅ眼科ニ古今正典ナキコトヲ論ジ、次デ本朝眼科ノ襲弊ニ及ビ、『蓋眼科之難レ學難レ明者何也、此因下和、漢古今無中可證據ニ之正典上也、醫籍各門中、雖下往往有中論ニ及于眼目之事者上當時未レ立三顧門一、皆是旁說贅辨、誇レ博示レ多耳、宋分二十三科一之後、纔有三人一、而其書亦隨出焉、而哀學淵、周亮節、玉協、鄧苑之徒、以三五行配當之空談滲ニ入其膏肓一、妄逞三五輪八郭之詭說一、縱設ニ七十二之病證一、浪配ニ偶五行八卦之名目一、巧傳ニ會七十二候之季數一、恣爲ニ其定位一、誣以ニ其生尅一、取ニ證於聖賢之事一、而欲レ實ニ其言一、喋々乎誑ニ惑後人一、牽強杜撰、貽レ害不レ殘矣、(中略)更假ニ名思邈一、或托ニ方神仙一、或爲ニ觀音靈授一、或爲ニ龍樹眞傳一、欲レ令ニ其術奇特一、詭誣百端、銜耀釣レ利、以茶ニ毒蒼生一、禍害一至於斯一、不レ可ニ復救一也、』然目ニ擊其徒之所爲一、可レ笑又可レ惡者甚多矣、其投劑不レ過一二方一、而撰ニ古人方中平担無用之劑一、妄意增ニ減一二味一、僞稱ニ家方一、(中略)如ニ其手術一、頗疎拙而自誇耀如ニ郢斧一、或欲レ掩ニ其陋劣一、託ニ言於世世相傳一、以禁ニ及門之子弟一、而千人一方、萬人同劑、至ニ病者之安危一、全委ニ于天一、公然不レ關ニ係其意一矣、(中略)宜哉天下瞽盲之多也、此皆坐ニ于家習傳下之陋弊ニ而已、噫眼科頽風一至於斯一矣』ト言フ、蓋シ痛言以テ時弊ヲ矯メント欲スルナリ。

眼科錦囊、四卷、大都西洋ノ說ニ採リテ論ヲ立テタリト雖モ、病名ノ如キハ、漢名ヲ擧ゲ或ハ國唱ニ從ヒ、或ハ西洋ノ譯名ヲ用ヒ、又新ニソノ名目ヲ定メ、銓索太ダ周到ナリ。且ツ各病門ノ下、類症ノモノヲ附シ、或ハ病症ノ異同ヲ論註シ、或ハ古人ノ謬誤ヲ訂正スル等、詮議太ダ力メタリ。之ヲ概括スルニコノ書所說ハ漢・洋眼科間ノ橋梁ヲナスモノト謂フベク、先ヅ眼ノ内景ヲ擧ゲ、ソノ内景說ハ全ク蘭說ヲ採リタレバ稍精緻ニシテ從前ノ書ノ臆測架空ノ說ノ比ニアラザルハ論ナシ。次デ鑒視ノ說ヲ擧ゲタリ、ボイヌノ圖說ニ採リテ光學ノ大概ヲ序述シテ、眼目鑒視ノ理ヲ示セルナリ、又近眼・遠視眼ニ就キテ光學上ノ説明ヲナセリ、皆ナ是レ西醫ノ說ニ出ヅルモノヲ採用セルナリ。特ニ著者ノ創見トシテ擧グベキモノハ

藥物略譜 世ノ専門家、去翳除膜收爛治濕ノ貴藥トシテ爐甘石ヲ用フ、コノ物金銀坑中ノ産ナルヲ以テ、漢人見テ以テ金銀ノ苗トナス。豈ソレ然ランヤ。コノ物ハ是レ倭鉛ノ氣、地中ニ結化シテ天然ノ薰陶ヲ經テ煉熟凝成セルモノナリ、予(著者)試ミニ亞鉛華ヲ製シ、試用スルニ、ソノ純質峻切爐甘石ノ及ブトコロニアラズ、所謂人造天工ヲ奪フトハ、ソレ之ヲ言フ乎。

珍珠 ハ眼疾通治ノ藥トシテ貴重セラルト雖モ、ソノ主治スルトコロヲ考フルニ、石灰・牡蠣ノ品類ト同一ノモノナリ。

冰片・麝香 ノ二品ハ芳香・透竄・頑膜ヲ除キ老膜ヲ去ルノ藥ナリ、而レドモ之ヲ上衝眼・焮腫眼、ソノ他熱ニ屬スルノ眼病ニ用フルハ鴻害アリ、世ニ熱眼誤治ノ患者多キハコノ弊ニ坐スルナリ。

寒水石 ハ古今一定ノ說ナシ、時珍ノ決然トシテ石膏ヲ取テ之ニ充タルハ卓見ナリ、而シテ方今眼科用フルト

コロノ物ハ方解石ニシテ眞物ニアラズ。

丹砂・銀朱 天品ト人造トノ別アリト雖モソノ治ハ彷彿タリ、銀朱ノ質タル水銀ヲ以テ主ト爲シ去翳除膜ノ効アリ、明カニ藥性ヲ辨ジ、詳ニ病候ヲ察シテ之ヲ用フルトキハ、則チ輕粉・昇汞ノ劇劑、皆ナ點藥ニ配スルモ害アルコトナク、却テ撥雲清霞ノ奇効ヲ奏ス。

點藥水飛 當今専門ノ家、百般ノ眼疾、必ズ點藥ヲ用フ、ソノ製スルトコロヲ見ルニ、石藥ヲ取テ之ヲ煨煉シ、後水ヲ用ヒテ飛過スルコト十數回、以テ石中含有スルトコロノ火毒ヲ除キ去ルト稱ス。コレ藥物ノ質ヲ明カニセズ、精練ノ理ニ通ゼズ、徒ニ苦心勞志ヲ爲シテ遂ニ無益ノ物ヲ製作スルナリ。

點劑 點藥蜜ニ和スルハ當時眼家ノ常ナリ、而カモ甘味粘稠ノ品ハ收斂ノ力緩解ス、故ニ蜜劑ハ之ヲ粉末劑ニ比スレバ効力半ヲ減ズルナリ。

嗅鼻劑 古人既ニ稱用シテソノ方アリト雖モ、近世眼科ノ門、之ヲ用フルモノハ幾ド稀ナリ、余(著者)ハ之ヲ頭痛熱眼及ビ内外二障ニ用ヒテ効ヲ得タリ。

放血灌水 放血(瀉血)ハ上衝・頭痛・風眼・疫眼・疼痛・羞明、及ビ赤腫煙熟等ノ眼疾ヲ主治ス。輕症ハ百會(顱頂)・眼胞、等ニ、劇症ハ委中(膝膕窩)・尺澤(肘窩)ニ之ヲ刺ス。灌水ノ主治モ大概同症ナリ(按ズルニ、放血・灌水ノ二術ハ當時蘭醫ノ間ニ盛行ハレシ術ナリ。余(著者)ハ之ヲ採リテ眼病ニ用ヒシナリ)

溫泉害目 眼病毒勢劇甚ノ時、治療ヲ遂ゲズシテ溫泉ニ浴スルトキハ、即チ却テ逆攻ヲ致シ、不治ノ盲トナルモノ多シ、誠メザルベカラズ。

コレソノ主要ト認メラルモノヲ擧ゲタルナリ。而シテコノ書ノ著者ガ、眼病ノ地理上蔓佈ニ就キテ論ヲ立テシハ注意スベキコトナリ。ソノ說ニ依レバ『疾病ハ素ト天制ニ出ヅ、故ニ山川ノ形勢、土地ノ美惡・高燥・卑濕・山丘・沃野、食餌ノ厚薄、寒暖ノ異宜アルトキハ、則チ各地ノ疾病モ亦一般ナラズ、夫レ大都通市ノ民ハ、宴安逸樂・足煙花ヲ踏ミ、口膏腴ニ飽グ、故ニ其患フル所ハ留飲・脚氣・勞瘵・不遂・梅毒・淋・痔等居多ナリ。其眼目ノ症モ亦此諸症ニ關スルモノニ七八アリ、南方海ニ濱スルノ各地ハ氣候溫暖、草木萎マズ、山野常ニ薄濕ノ氣ヲ蒸發シ、加之膏腴ノ海族ヲ喫ス、是ヲ以テ食癩・腫瘍・爛眼・內翳、極メテ鮮カラズ、北方ノ諸地ハ冬春ノ時、積雪丈ニ盈チ、朔風凜烈、土人常ニ雪窩裡ニ穴居ス、是ヲ以テ身體ノ蒸發氣ヲ鬱塞ス、且ツ雪光眼ヲ潑シテラ劇動ヲ發シ、上衝頭痛ヲ起シ、終ニ風眼疫眼ニ變ズルモノ甚ダ多シ、故ニ越・羽ノ諸州多ク瞽叟アリ、東方常・總ノ二州ハ大江縱橫天下尤一ノ水國、其地卑濕、是ヲ以テ濕眼、上衝眼、半ニ過グ、或ハ信・甲二州ノ瞼生風粟、四國ノ腫孔病、西肥・崎陽ノ內障疔眼等ノ如キ、殊ニ各州ニ勝レタリ、之ヲ總括スルニ沿岸ノ邑ハ眼疾尤多クシテ山野ノ郷ハ稍少シ、コレ地氣ノ偏頗ト攝生ノ異同トニ因リテナリ、蓋シ天下ノ廣キ、郡縣ノ夥キ、細カニ見審カニ察スレバ、則チ各郷各邑モ亦偏有ノ患ナキコトヲ得ザルナリ』ト。ソノ言、固ヨリ蘊奧ヲ盡サズト雖モ、コノ時世ニアリテ早く既ニ眼ヲ地理の病理學ニ着ケタルノ識見ハ稱スルニ足レリ。

續眼科錦囊ハ天保六年ノ刊行ニシテ、明カニ漢・蘭折衷派眼科ノ進歩ヲ示シ、之ヲ當時ノ蘭方眼科ニ比シテ較著ノ軒輕ナキヲ見ル。書中載スルトコロノ眼科療具圖解ヲ鈔録スルトキハ、則チ著者ガ眼科手術ノ梗槩ヲ推知スルニ足ルベク、又併セテ當時眼科手術ノ狀況ヲ想フノ資タルベシ、スナハチ左ノ如シ。

(イ) 塔頭枕 諸般ノ手術皆ナコノ枕ヲ用フ、籐又ハ木ニテ作ル。

(ロ) 遮風鏡 患眼ノ人、白地ヲ歩行スルノ時之ヲ用フ。薄片又ハ厚紙ニテ造リ、外面ノ圓孔ニ綠硝子ヲ貼ル、僻地硝子ナキハ綠紗ヲ代用ス。

(ハ) 滴水器 水藥ヲ目中ニ點滴スルノ器ナリ、硝子ヲ以テ造ル。

(ニ) 洗眼器 棉布ニ藥ヲ包ミ木柄ニ繫縛シテ以テ眼目ヲ洗蒸スルノ器ナリ。

(ホ) 蒸眼器 コレ沸熱ノ藥湯ヲ碗ニ盛り、軟布ヲ覆ヒ、机上ニ置キテ眼目ヲ薰蒸スルナリ。

(ヘ) 浴眼器 藥水ヲ器中ニ盛り、眼目ヲ冷浴スルノ器ナリ。

(ト) 貯汁袋 チリアラヒ 溫湯ヲ以テ袋中ニ貯へ、手ヲ以テ徐ニ之ヲ握ルトキハ口ヨリ注射シテ胞瞼内ニ入ル。

(チ) 小水銃 象牙又ハ銀ニテ造ル。

(リ) 顯微鏡 ムシメガネ 今ノ所謂單「ルーペ」ナリ、内翳又ハ睫毛内刺ノ症ヲ見ルトキニ用フ。

(ヌ) 溫金 ヌルカネ 甲乙ノ二種ハ古製ニシテ便ナラズ、著者所用ノモノハ銀又ハ黃銅ニテ作り、一端ニ匙頭アリテ眼瞼ヲ轉翻スルニ用フ。

(ル) 點藥匙 メクスリサジ

(ヲ) 點藥管 フキクダ

(ワ) 測瘡子 サゲリ 銀造ト鯨髭製トアリ、前者ハ瞼球癒着等ヲ探ルニ用ヒ後者ハ淚管漏ヲ探ルニ用フ。

(カ) 鑷子 西洋ノ鑷子ヲモ用フベシ、而レドモ著者創製ノ鑷子ハ用フルニ可ナリト言ヘリ。

(ヨ) 藥筒 スヒタマ

(タ) 三稜鍼

(レ) 小鋒鍼

(ソ) 橫截刀 ヒキガタナ 甲ハ古製、乙ハ著者創製。

(ツ) 披鍼 ランセイタ 放血ニ用フ。

(ネ) 竹夾 古製ノモノ。

(ナ) 銅夾 當時蘭方家ノ用ヒシトコロ、螺施スルトキハ自カラ緊閉密合ス、竹夾ニ優レリ。

(ラ) 方鑷子 著者創製ノモノナリ、贅皮ヲ切除セントスルニ方リテ先ヅ之ヲ用ヒテ以テ患部ヲ緊挾シ、鋏ヲ以テ贅皮ヲ截斷スルナリ。

(ム) 彎頭鋏

(ウ) 鍼

(キ) 按定環 銀ヲ以テ造ル手術ニ際シテ眼ヲ按定シテ運動スルコトヲ得ザラシム、二號ノモノハ著者創製ノモノニシテ玳瑁又ハ牛角ヲ用フ。

(ノ) 烙鐵 大小二種アリ。

(オ) 鉤

(ク) 直剪刀

(ヤ) 曲鋏

(マ) 小彎頭鋏

(ケ) 光銳刀

(フ) 偏刃刀

以上、當時蘭方外科所用ノ器ニシテ、近時ノモノト大差ナシ。

内翳眼ノ手術ニハ左ノ器具ヲ用ヒタリ。

カタラクト

- (い) 圓鋒針 鐵製、内翳ヲ墜下スルニ用フ。
- (ろ) 三稜鋒 白膜ヨリ横ニ刺シテ内翳ヲ壓下スルニ用フ。
- (は) 曲頭鋒
- (に) 圓針 各家從來用ヒルトコロノモノ、金銀ヲ以テ造ル、而カモ鋒頭鈍劣ニシテ鐵造ノモノニ及バズ、著者ハ鐵造ノモノヲ用ヒタリ。
- (ほ) 三尖鍼 コノ鍼ヲ用ヒテ角膜正中ヲ刺スモノアリ、而カモ翳ヲ殘スノ害アリ、著者ハ斷ジテ之ヲ用ヒズ。

本庄普一、字ハ土雅、武州本庄ノ人、幼ヨリ學ヲ好ミ、既ニ長ジテ江戸ニ出デ沼津藩醫保土田某ニ就テ内科ヲ修メ、又翠蘭先生(?)ニ就テ和蘭ノ學ヲ修ム後、西ノ方長崎ニ至リ、專ラ眼科ヲ研究シ、ソノ技蘭人ヲ壓シ、名清客ニ聞エ、ソノ術大ニ行ハル、後ソノ郷ニ歸リ、業ヲ開キ、名聲大ニ顯ハルト言フ。(眼科錦囊序文)

眼科錦囊ノ世ニ出デタル後、間モナク(天保十三年)、上田公鼎ノ眼科一家言、一卷梓行セラレタリ、古醫方二本ヅキテ説ヲ立テ、參酌スルニ和蘭ノ説ヲ以テシ、創意假瞳孔術ヲ施シ、白内障手術ノ如キモ決シテ一定ノ式ニ依ルベカラザルコトヲ言ヒ、又世醫ノ眼病ニ點眼藥ノ缺グベカラズトナセルヲ排シ、又眼科ノ醫家ガ漫ニ形狀ヲ論ジテ病根ヲ察セズ、本科ノ治ヲ輕視シテ以テ既ニ益ナシトナスノ害ヲ論ジ、以テ眼病トノ關係ヲ擧グ、亦漢・蘭折衷ノ一大家トシテ擧グベキモノアリ。

上田公鼎、名ハ體、椿年ト號ス。肥後・天草ノ人、古醫方ヲ修メ、既ニ得ルトコロアリ、以爲ラク『建囊以還、世ノ英雄、卓傑ノ材ヲ以テ宋ノ俗醫ノ陋習ヲ排斥シ、能ク漢・魏ノ古ニ復スルモノ、世其人ニ乏シカラズ、只惜ラクハ眼科一道、梗塞未ダ開ケズ、世ノ此伎ヲ業トスルモノヲ見ルニ其術ノ陋、其人ノ卑、牛ヲ醫シ馬ニ鍼シテ以テ其口ヲ糊スルモノト何ゾ擇バンヤ』ト。乃チ憤然トシテ志ヲ立テテ眼科ヲ研究シ、コレヲ漢・蘭ニ折衷シテ一家言ヲ成シ、上田家眼目篇・眼科明鏡・眼科涇渭・眼科一家言等ノ書ヲ著ハシ、以テ眼家ノ陋習ヲ一洗スルヲ期ス。天保十一年備中國ニ來タリ、門人安田玉海ガ家ニ寓シ、翌年六月病テ歿ス、年四十。ソノ子及淵及ビ門人安田玉海ソノ術ヲ傳フ。(上田家系譜・眼科一家言序跋)

弘化年間安房ノ人鈴木章(字ハ子玉、道順ト號ス)亦漢・蘭折衷ヲ以テ一家ヲ成シ、十眼論・外障本因考・撥翳鍼訣等ノ諸書ヲ著ハス、而カモ別ニ斬新ノ説アルニアラザルナリ。

産科 26

明和・安永ノ交賀川玄悅興リテ産科ニ一生面ヲ開キ、玄迪・玄吾、相嗣デ益々ソノ術ヲ推廣シテヨリ、賀川流産科ハソノ門下及ビ著書ノタメニ速カニ傳播セラレタリ。

賀川流産科

賀川流産科ノ名家中ニテ、第一ニ擧グベキハ片倉鶴陵ナリ。鶴陵ハ初メ多紀藍溪ニ學ビ、後京都ニ赴キテ賀川氏ノ門ニ入り、産論ヲ受ケテ江戸ニ歸リ、ソノ教ニ服事スルコト二十餘年、蘭學家嶺春泰ヲシテ牒分的兒（Deventer）ノ産科書、ソノ他和蘭ノ産科書ヲ譯解セシメテ、ソノ説ヲ採リ『吾子玄先生、於ニ産科一技一、終身用意刻苦、是以、其術超ニ邁于古今一、如下其所謂素背面倒首而無ニ轉身一者上、則千古卓見也、雖ニ然至其謂ニ胞衣蓋ニ胎之尻上ニ、其手膊并展依ニ脇旁ニ、而其左右足膝、皆張而旁出、未西骨縮ニ手足甲、則未ニ深考一耳。又産論翼中所レ録懷孕圖、凡三十有二、而其胞衣、皆表裏反復、不レ無レ可疑、又如ニ被囊胎圖一（余所レ稱囊兒是也）則爲下胞在ニ腹中一、其帶垂下而出ニ育間一、帶頭皮膜生而裏胎者上、亦不レ可レ解也』ト論ジテ産論・産論翼ノ圖說ノ誤マレルヲ正シ、産前産後ノ諸症ヲ論ズルニ方リテモ、亦發明ノ説尠カラズ。助産ノ手術トシテ用ヒシトコロハ固ヨリ賀川氏ノ回生術ナレドモ、英國産科書ヨリ鉗子ヲ用フルノ圖ヲ轉載シ『易難諸産圖總十有五、而畫極ニ精妙一最足レ觀矣、蓋其遇ニ難産子難一レ達、則必以レ器出レ之、雖ニ其器製不レ能レ詳、此死中求レ括之一奇器也、因撮ニ出圖式二道一、以錄ニ於比一、智巧之士、倣レ此製造、臨ニ事施レ之、則可レ謂ニ回生之一助一也』ト記シ、以テ箝子ノ應用スベキコトヲ唱道シタリ。

片倉鶴陵、字ハ深甫、元周ト通稱ス、相州・築井縣ノ人ナリ。父名ハ周意、母ハ杉山氏、家世々醫ヲ以テ業トナス。鶴陵年十二、江戸ニ來テ醫ヲ多紀玉池及ビ多紀藍溪ニ學ビ、ソノ子廉夫ト共ニ文ヲ井上金峨ニ學ブ、年二十五居ヲ白銀街ニトシ業ヲ開ク、治ヲ請フモノ頗ブル多ク、家事頗ブル饒ナリ。天明ノ初年災ニカカリ家産盡ス。發憤シテ西京師ニ遊ビ、産科ヲ賀川氏ニ學ビ、ソノ蘊奧ヲ窺フ、東歸ノ後ソノ術ヲ精究シ、以テ後生ヲ誘掖ス、生徒ノ業ヲ受ルモノト病者ヲ治ヲ請フモノト、共ニソノ門ニ滿ツ、産婦ノ分娩シ難キモノ鶴陵ニ因テ活ルモノソノ數ヲ知ラズ、後庭妊婦アルニ當リテ鶴陵ヲ召シテ按腹セシメ、期ニ及ビテ達生ス、乃チ白銀若干ヲ賜ハル。鶴陵年六十二近キトキ發背未ダ潰ヘザルニ、相模ノ門人某ノ疾病ヲ聞キ強テ行ク、家人之ヲ諫ムレドモ可カス。之ヲ治シテ歸ル。會津少將ノ疾ムヤ諸醫手ヲ束ヌ、鶴陵之ヲ治シ、浹旬ニシテ痊ユ、後少將又國ニアリテ疾ミ、來治ヲ乞フ、時正ニ隆冬ニ屬シ、沍寒積雪殆ト堪フベカラズ。鶴陵病既ニ篤キモ然モ猶ホ能ク命ニ應ズ。門人故舊皆ナ之ヲ危マザルハナク、固ク諫レドモ可カズ、怡然トシテ行ク。ソノ會津ニアルヤ寵遇優渥、皆ナ異數ニ出ヅ、人皆ナ之ヲ艶羨セリト言フ、文政五年壬午九月十一日病デソノ家ニ歿ス、享年七十二。三田大聖院ニ葬ル。配鈴木氏子ナシ、妾三男一女ヲ産ム。山崎氏ノ子ヲ養フテ嗣トナシ、長女ヲ以テ之ニ妻ス。名ハ玄脩、字ハ公岱、能ク家學ヲ繼ギ一橋侯ノ侍醫トナル。鶴陵ノ治ヲ施スヤ、今古ニ拘ラズ、補瀉ニ偏セズ、膠柱守株ノ陋ナク、最モ雜病ヲ治スルニ妙ヲ得、回生起死ノ功赫々トシテ世人ノ耳目ニ存シ、名聲籍甚ナリ。鶴陵既ニ傷寒雜病ノ治法ニ於テ大ニ悟得スルトコロアリ、獨リ産科ノ一事猶未ダ詳ナラザルヲ患ヒ、奮テ京都ニ遊ビ、理産ノ術ヲ賀川氏ニ學ビ得ルトコロアリテ東歸シ、難産ヲ治スルモノ數百人、古來醫書未ダ論ゼザルトコロノ囊兒ヲ見テ、始メテ胎兒ノ形狀ヲ知ルコトヲ得。遂ニ産科發蒙ヲ著シテソノ説ヲ公ニシ且ツ賀川氏ノ産論ヲ敷衍シ、世醫ヲシテ理産ノ術據ルトコロアルヲ知ラシム。ソノ我が産科ノ發達ニ於ケル功勞決シテ鮮少ナラザルナリ。鶴陵ノ本石街ノ居ノ隣ニ嶺春泰ト言フアリ、前野蘭化ノ社中ニテ蘭學ヲ以テ名アリ。鶴陵ソノ博學ニシテ方伎ニ精シキヲ稱シ、嶺モ亦鶴陵ヲ信ジテ常ニ推轂ス。遂ニ交情日ニ深クシテ凡ソ奇書珍籍・秘方妙藥ヲ得レバ相與ニ秘惜セズ。鶴陵ノ治術ニ蘭方ヲ交ユルコト多ク、又ソノ産科發蒙ニ蘭説ヲ挿ムモノハ實ニ嶺ヨリ之ヲ得タルナリト言フ。（墓誌・産科發蒙・青囊瑣探）

奥劣齋モ亦産術ヲ賀川子啓ニ及ビ、出藍ノ譽アリ、産論校註・女科隨割・達生園外術秘録・産科内術・産科圖記・女科漫筆等ノ書ヲ著ハシ、賀川氏産後ノ手術ニ定戰（産後寒戰ヲ治スル法）・發啼（人工呼吸法）ノ二術ヲ増補シ、拔坐・過崩・杼倒ノ三術ニ修正ヲ加ヘ、殊ニ賀川氏回生術ノ生ヲ傷ブルコト多キヲ痛ミ、雙全術ヲ發明シテ以テ賀

川氏産術ノ缺陷ヲ補ヒ(雙全術ハ今日ノ足位回轉術ナリ、後章ニ於テ別ニ之ヲ論ズベシ)、又心ヲ婦人生殖器ノ解剖ニ注ギ、助産ノ學ニ於テ發明スルトコロ多ク、賀川氏ノ手術ハコノ人ニ至リテ完成セリト言フモ誣言ニアラズ。

奥劣齋、名ハ基、字ハ子讓、劣齋ハソノ號ナリ。姓源、奥氏父ヲ道榮ト曰フ。京ノ南八幡ニ居ル、後京ニ出デテ醫ヲ山脇東門ニ學ビ、産術ヲ賀川子玄ニ受ケ、理婉ニ善キヲ以テ遂ニ家ヲ興ス。劣齋敏異ニシテ博ク儒典ニ涉リ、遍ク醫籍ヲ閲シ、女科方書ノ如キハ最モ研究シテ精明遺サズ、又本草ニ精シ。是ニ由リテ名聲遠邇ニ播キ、四方相率キテ皆ナ治ヲ請ヒ、來リテ門ニ入ルモノ殆ド千ニ盈ツ、文政甲申ノ歲、朝廷法橋ニ叙ス。己丑ノ歲准三后産後尿閉、衆醫手ヲ束ヌ、劣齋「カテーテル」ヲ用ヒテ効ヲ奏シ、法眼ニ進ム、安永九年五月二十八日ヲ以テ生マレ、天保六年九月四日ヲ以テ病デ歿ス。配駒井氏ニ男ニ女ヲ生ム、嫡名ハ之紀、字ハ士禮家ヲ嗣グ。

劣齋著ストコロ産論校註・女科隨割アリ、校スルトコロ婦人大全良方・保産心法アリ、別ニ達生園産科外術秘録・産科内術・産科圖記・回生鉤胞秘訣、等アリ。併ニ門人ノ筆録ニ係ル。(墓誌・日本醫譜)

賀川氏ノ産科ハソノ門ヨリ出デタル諸家ノ卓越ナル業績ニ依リテ恢弘セラレタルノミナラズ、賀川家ノ裔孫ニモ蘭齋・蘭臺・南龍・蘭臯等ノ名家アリ、能クソノ業ヲ傳ヘ、殊ニ心ヲ手術ノ工夫ニ用ヒ、コレニ依リテ賀川氏ノ産科ハ益々發達シタリ。

賀川蘭齋、名ハ満足、字ハ子清、蘭齋ハソノ號ナリ。有齋ノ第二子ナリ。父ノ術ヲ傳ヘテ探領器ノ發明アリ。ソノ名大ニ彰ハル、寛政十二年正月、御所御産御用ヲ勤メタルニ依リテ官位ヲ賜ハリシガ固辭シテ受ケズ。文化十二年十一月、典藥寮醫員ニ擢テラレ、正七位下ニ叙シ、武藏大掾ニ任ゼラレ、翌年二月、女醫博士ニ補シ、攝津介ニ遷任シ、從六位下ニ叙セラ。後累進シ正六位下ニ至ル。女醫博士ノ官、中古以來闕ケタルコト久シ、是ニ至リテ之ヲ復セルナリ。天保四年十月十九日、病デ歿ス、享年六十又三。配渡邊氏、六男四女ヲ生ム、長子蘭臺家ヲ嗣グ。

賀川蘭臺、名ハ滿崇、字ハ子德、蘭臺ハソノ號ナリ。文政六年三月、年二十八ニシテ、典藥寮醫生ニ補セラレ、正七位下ニ叙シ、上總大掾ニ任ゼラル。同十三年三月、從六位下ニ叙シ、若狹介ニ任ジ嘉永五年三月、典藥寮員ニ補セラレ、尋ギテ女醫博士トナリ、從五位下ニ叙シ筑前守ニ遷任ス、文久四年子ノ年二月一日、病デ歿ス、享年六十九。蘭臺管テ父蘭齋ガ作ルトコロノ探領器ノ分娩後癍痕ヲ殘スノ虞アルヲ以テ、更ニ纏頭絹ヲ發明シテ、コノ器ニ代ヘタリ。

賀川蘭臯、名ハ滿載、字ハ仲見、蘭臯ハソノ號ナリ。蘭臺ノ第二子、年二十二ニシテ、典藥寮ノ醫生ニ補セラレ、武藏大掾ニ任ズ。王政維新ノ際、軍務官診察生ヲ兼ネ、明治三年、少典醫ニ任ジ、正七位ニ叙シ、尋ギテ權少侍醫トナリ、後屢々遷改スト雖モ、恒ニ内禁ニアリ、妃嬪ヲ診治ス。病篤キニ及ビ、從六位ヲ授ケラル、明治二十四年五月十七日歿ス。六十二。

蘭臯發明スルトコロ整横紐アリ。(賀川家系譜)

賀川南龍ハ大阪、賀川氏ノ第二世ナリ、初メ子玄ノ嫡孫ニ有章ト言フモノアリ。故アリ去テ河内ノ四番村ニ住シ、而シテ療館ヲ大阪・本町ニ開ク、之ヲ大阪賀川氏ノ第一世トス。南龍ハソノ義子ナリ、字ハ子元、秀哲ト稱シ南龍ハソノ號ナリ。本姓ハ本多氏備中・倉敷ノ産ナリ、少フシテ父母ヲ喪ヒ、東西ニ周遊シ、竟ニ有章ノ門ニ入ル、有章一見之ヲ奇トシ、ソノ常人ニ非ザルヲ知り、待遇特ニ厚ク家訣ヲ傳フ、幾クモナクシテ有章歿ス、是ニ於テソノ業ヲ嗣ギ賀川氏ヲ冒ス、南龍夙夜晷勉シ、手ニ卷ヲ釋カズ、古今ニ涉獵シテ、家訣ニ反求シ、一合一否、憤悱シテ已マズ、遂ニ豁然トシテ大ニ得ルトコロアリ、施ストコロ皆ナ効アリ、縦横竅ニ中リ、治ヲ乞フ者日ニ進ミ、殆ド有章ノ時ニ踰ユ。天保九年戊戌正月、病ニ罹リ、七月二十二日、遂ニ起タズ、年ヲ得ルコト五十有八。著ストコロ南陽館一家言、アリ、蘭說ニ取ルトコロ甚ダ多シ。太田氏ノ子ヲ養ヒ、妻ハスニ第四女ヲ以テス、名ハ晉、秀益ト稱シ、蕃齋ト號ス。賀川満足ヲ師トシテ名聲アリ。(賀川家系譜・日本

醫譜)

賀川氏産科ノ術ヲ傳フルモノハ、既ニ前ニ擧ゲタル片倉鶴陵ノ産科發蒙ヲ始トシテ、賀川蘭齋ノ産科紀聞・産科議要・産科治術秘訣、賀川南龍ノ助産論・一家言、山邊篤雅ノ産育編、富士谷成臺ノ救偏瓊言、奥劣齋ノ産科外術秘録・産科圖記・産科内術・産論校註、桑原惟親ノ産航、等諸書アリ。諸家各々發明自得スルトコロアリテ、所説觀ルベキモノ尠カラズト雖モ、水原三折ガ奥劣齋ノ門ヨリ出デテ更ニソノ伎ヲ精メ、嘉永二年、産育全書十二卷ヲ撰ビ、劣齋ガ考訂スルトコロノ説ト自家發明ノ論トヲ併セ擧ゲテ、世ニ行フニ及ビ、賀川氏産科ノ真相ハ益々能ク世ニ發表セラレ、我が邦産科ノ書ハコレニ依リテ始メテ完備スルニイタレリ。

水原三折、名ハ義博、字ハ濟卿、三折ハソノ號ナリ、近江國八幡ノ人、本姓最上氏、曾祖父春澤ニ至リテ始メテ醫ヲ業トシ、三折ニ至リテ本姓ヲ避ケテ水原ヲ以テ氏トス。少クシテ家學ヲ受ケ、京都ニ出デテ宇津木昆臺・奥劣齋等ノ諸家ニ親炙シ、又海上隨鷗ニ就テ蘭學ヲ修メ、最モ力ヲ助産ノ術ニ用ヒ、構思二十年ニシテ創メテ探領器ヲ作り、又産育全書十二卷ヲ著ハシテ産科ノ學術ヲ叙述シ我が邦始メテ完備ノ産科書アリ。コレニ依リテソノ名聲遠邇ニ播揚シ、ソノ術大ニ行ハレシガ、元治元年三月病デ歿ス、年八十三。門人船曳卓堂・長谷川誠之等、亦産科ヲ以テ名アリ。(日本醫譜・産育全書序跋・日本女科史)

産育全書ハ内篇・外篇・附録ノ三部ニ分チ、内篇ニハ自家ノ發明ニ係ルトコロノ探領三器(探領器・睡籠器・奪珠器)・横産用器・子癩破膜器・頸斷用器・疏水器・奪珠車・探股器・息胞用器・潤胞器、等ノ應用法ヲ論ジ、兒位ニ從ヒテ一々救護術ヲ詳説シ、外篇ニハ婦人生殖器ノ解剖・生殖及ビ繁殖ノ作用、妊娠中疾病及ビソノ調護、産前産後ノ諸症及ビソノ治法、臨産・小産及ビ墮胎ノ診斷及ビ療法、嬰兒ノ保護等ヲ論ジ、附録ニハ婦人生殖器・胎兒及ビ胞衣ノ解剖圖ヲ擧ゲタリ。著者水原三折ハ海上隨鷗ニ從ヒテ蘭學ヲ修メ、又當時既ニ魯牒蘆技産科書・訶倫産科書・産科簡明等、西洋産科ノ術ヲ記スルモノ世ニ行ハレタレバ、コノ書ガ西洋ノ説ニ依リテソノ説ヲ立テタルコト多キハ推測スルニ難カラズ。蓋シ賀川氏ノ産科ハソノ祖玄悅ノ時ニアリテモ既ニ蘭説ノ採ルベキコトヲ唱ヘシガ、ソノ後六七年ヲ經テ、西洋ノ説ハ益々採用セラレ、ソノ論説ハ愈々實驗ヲ主トシ産育全書ニ至リテ漢・蘭折衷ノ大成ヲ見ルヲ得タルナリ。

賀川氏ノ産術ニ於テ最モ重要トスルトコロハ回生術ニシテ、コノ術ハ創始ノ時代ニアリテハ靈活ヲ以テ稱セラレタリト雖モ、固ヨリ學問ノ進歩ニ從ヒテ改良セラレザルベカラザルモノナリ、是ニ於テカ片倉鶴陵ハ、早く既ニソノ著産科發蒙ニ英國刊行ノ産科書中ニ掲グルトコロノ鉗子ノ圖畫ヲ掲ゲテ、模造シテ之ヲ用フベキコトヲ唱ヘシニ、上總ノ人立野龍貞ト言フモノアリ、ソノ書ヲ讀ミテ自カラ工夫シ、包頭器ト名ヅクル一種ノ器械ヲ創製シ、以テ賀川氏ノ鐵鉤ニ代エタリ。

立野龍貞、折肱齋ト號ス、南總ノ人、本ト農ヲ業トセシガソノ地窮僻ニシテ良醫ニ乏シク、親戚故舊ノ病ニ罹ルモノアルモノ、往々ニ治ヲ誤マリテ夭札ノ患ヲ免ルルコト能ハザルヲ憂ヒ、耒耜ヲ投ジテ古醫道ヲ學ブ、偶々一婦ノ横産、危急ニ瀕スルモノニ遇フテ遂ニ之ヲ救フコト能ハズ、依リテ發憤シテ賀川氏ノ書及ビ片倉鶴陵ノ産科發蒙ヲ精讀シ、自カラ得ルトコロアリ、包頭器ヲ工夫シテ横産ヲ治スルノ術ヲ完備シ、文政二年、産科新論、三冊ヲ著シテ助産ノ術ヲ論ジ、ソノ名遂ニ天下ニ顯ハル、後チ折肱齋醫談ヲ著ハス、歿年詳ナラズ。(續日本醫譜・産科新論序文)

包頭器ハ推送器・受袋器及ビ袋ノ三者ヨリ成リ、推・送・器ハ鯨鬚條ノ中央交叉シテ運轉スベキモノニシテ、ソノ兩

端ニ細眼アリ、コレニ同ジク鯨鬚ノ細條（即チ受袋器）ヲ通ジテ、蹄係ノ如クナシ、絹製ノ袋ヲコレニ附着ス。コノ器ヲ用フルニハ先ヅ推送器ノ兩端ノ細眼内ニ受袋器ヲ通ホシ、之ヲスボメテ陰中ニ入レ、兒ノ額ヨリ漸次ニ推シ送テ兒ノ額ニ懸クルトキハ、更ニコノ推送器ヲ廣ゲ、受袋器ヲ引キ見テ、兒ノ額ニ懸リテ動カザルコトヲ知レバ、コノ器ヲ去リ、絹ノ袋ハ兒ノ前面ヲ包ミ、受袋器ハ兒ノ後面ニ廻ハシテ以テ兒ヲ牽キ出スナリ。コレ我ガ邦ノ鉗子ト稱スベキモノニシテ、創製者自己ハ自識獨得ニ出デタリト稱スト雖モ、思フニコレ産科發蒙ニ載スルトコロノ英國製鉗子ノ圖ニ依倣シテ工夫セラレタルモノナルベシ。

立野龍貞ガ包頭器ヲ創製セル年代ハ詳ナラズト雖モ、ソノ著産科新論（文政二年）ニ該器ニ就キテ記述スルトコロアルヲ以テ考フレバ、片倉氏ノ産科發蒙世ニ行ハレテヨリ未ダ久シカラズ、既ニ立野氏ハコノ器ヲ製シテ試用セシナラン。

包頭器ニ次デ顯ハレシハ探領器ト稱スル器械ニシテ、コノ器ハ水原三折ガ創製セリト傳フルモノニシテ、ソノ著探領圖訣ニ圖説ヲ掲ゲタリ。ソノ器ハ四孔ヲ有スル一圓木（奪珠器、圖ノイ）ト、一長鯨鬚條（探領器、圖ノロ）ト、又鯨鬚製ノ一細長板ニシテ、一端ニ二孔ヲ穿チタルモノ（睡籠器、圖ノハ）トヨリ成ル。之ヲ用フルニハ先ヅ探領器ヲ溫湯ニ蘸シテ屈伸自在ナラシメ、之ヲ陰中ニ遂リテ兒額ニ懸ケ、而シテ之ヲ睡籠器ノ二孔ニ通シ、推進シテ兒額ヲ擊住シテ轉脱セザラシム。ココニ於テ睡籠器ヲ去リ、換工用ユルニ奪珠器ヲ以テシ、以テ兒胎ヲ奪出スルニ便ニスルナリ。賀川家系譜ニ依レバ、賀川蘭齋モ亦既ニ探領器ヲ創製シ、且ツ之ヲ實際ニ應用ツタリト言フ。賀川氏、産科器械用法ニ載スルトコロヲ見ルニ、探領器ハ破水既ニ終リテ未ダ分娩セズ、時日遷延スレバ母子兩斃ノ懼アル時ニ用フ、ソノ法圓紐鯨ヲ湯ニ漬シ、陰腔ヨリ子宮口内子頸ニ傍フテ進メ、扁鯨ノ兩目ニ圓紐鯨ノ兩端ヲ入レ、左テニ圓紐鯨ヲ持シ、右手ニ扁鯨ヲ進メ、胎兒ノ額ニ應ズルヲ認メ、握圓木ト交換シ、ソノ中央ノ二穴ニ圓紐鯨兩端ヲ入レソノ端ヲ廻轉シ、再ビ各々ソノ隣穴ニ押入レ右手ニ握圓木ヲ取り、左手ニ圓紐鯨ヲ持シ以テ兒胎ヲ牽出スルナリ。ソノ器ノ形状、用法共ニ水原ノ探領器ニ異ナルトコロナク、ソノ創製ト言フコトハ頗ル疑ナキコト能ハズ、尠ナクトモソノ器械ハ門人ノ筆録ニモ見エザリシヲ以テ、世ノ産科醫ガ此器ヲ知リシハ水原三折ノ探領器ヲ見タルニ始マレリト言フベシ。而シテ水原ノ探領器ガ立野ノ包頭器ヲ見タル後ノ工夫ニ係ルコトハソノ著産育全書ニ立野ノ包頭器ヲ批評セルヲ見テモ推知セラルベシ。

探領器ノ發明アリテ、回生術ハ粗暴ニ失スルノ弊ヲ免カレタレドモ賀川蘭臺ハソノ分娩後癍痕ヲ殘スノ虞アルヲ缺陷トシ、更ニ纏頭絹ヲ發明シテ探領器ニ代エタリ。コノ器ハ先ヅ鯨柱（圖ノイ）ノ細穴ニ挿入セル絹（圖ノロ）ヲ左右ニ中分シ、ソノ卷初ハ上端ヲ緊軸シ、半途ニ至リテ下端ヲ緊軸シ、左右合シテ一軸ノ如クナシ、腔ノ上下ヨリ挿入シ、右手ニ右軸ヲ延展シ、左右共ニ同ジク子頭ヲ纏ヒ終リテ、兩柱鯨ヲ扁鐵眼（圖ノハ）ニ挿入シ扁鐵ヲ進メテ能ク緊繫シ、左手ニ扁鐵ヲ持シ、右手ニ絹ヲ持シ、徐々ニ兒胎ヲ牽出スルナリ。（コノ器ハ蘭臺ガ天保三年創メテ實際ニ應用セシモノナレドモ、當時ハ深ク秘シテ人ニ示サザリシト言フ）。コノ器ハ立野ノ包頭器ト全然同一ノ工夫ニ成レルモノニシテ、共ニ之ヲ運轉自在ナル一種ノ拵子ト稱スベシ。

嘉永年間若狹ノ人近藤直義モ亦一種ノ包頭器ヲ作り、自著ノ達生圖說中ニ之ヲ掲ゲシガ、ソノ器ハ探領器ニ類シ、ソノ鯨鬚條ヲ二個トシ、絹紐ヲ用ヒテソノ彎曲部ニ於テ交互ノ間ヲ結合シテ、以テ疎網ヲ作り、兒頭ヲコレニ包容スルナリ。

探領器・包頭器・纏頭絹ニ次グベキハ、賀川蘭臯ノ整横紐ナリ、コレ横産ヲ治スルニ用フルモノニシテ、ソノ器ハ兩圓幹（圖ノイ）鯨眼ニ挿入セル油滑絹紐（圖ノロ）ノ下端ヲ左手ニ握リ、胎手ノ傍ヨリ進メ、運輸鐵（圖ノハ）眼へ左ノ圓幹鯨ヲ持シ、右ノ圓幹鯨ト運輸鐵ト一齊ニ握リ、胎兒ノ腰部ヲ廻ハリ終リテ兩圓幹鯨ト運輸鐵トヲ除キ、

絹紐ハ兒腰ニ纏ビテ之ヲ牽クベシ、是ニ於テ一手送進鯨(圖ノニ)ヲ取り、ソノ股ヲ兒ノ腋ニ當テテ推進スレバ、兒位忽チ變ジテ逆産トナル、乃チ逆産ノ法ニ從ヒテ處治スルナリ。

コノ如ク、賀川及ビソノ門下ガ意ヲ助産器械ノ改良ニ用ヒシ間ニ、器械ヲ用ヒズシテ手術スルノ法モ亦諸家ノ盛ニ攻究スルトコロトナリ、奥劣齋ハ雙全術ヲ案出シ、賀川蘭齋モ亦無鉤回生術ヲ創施シタリ。雙全術ト言フハ、横産ニテ手ノ出デタルトキ先ヅ出デタル手ヲ取テ、引キ上ゲ、左手ニ油ヲ塗り、下邊ヨリ兒ノ手ニ沿テ入レ、兒ノ片足ヲ探リテ之ヲ陰門ノ口ニ引キ出シ、次テ他ノ片足ヲ求メテ引出スナリ。コレ一種ノ回轉術ニシテ蘭齋ガ無鉤回生術ト言ヘルモノモ、ソノ術ハ大抵之ト相同ジトス。

賀川ノ産科ハ、ソノ後繼者ガ創始者ノ意ヲ承ケテ、蘭醫ノ說ニ參酌スルコトニ心ヲ用ヒ、適當ナル器械ノ創作ニ力ヲ盡シタルニ依リ、益々完備シ、ソノ術ハ門下及ビ著書ノタメニ早クモ四方ニ傳播シ、京・攝ノ間ニハ賀川氏ノ他ニ奥劣齋・佐々井茂庵(産科やしな草ヲ著ハス)・水原三折アリ、九州ニ桑原惟親(産航ヲ著ハス)アリ、中國ニ緒方順節アリ、北陸ニ近藤直義(達生圖說ヲ著ハス)アリ、金子杏庵(産科摘要ヲ著ハス)アリ、關東ニハ片倉鶴陵・原南陽等ノ名家居リシガ爲ニ産科ヲ以テ家ヲ成スモノ甚ダ多ク、南總ニ立野龍貞(前ニ出ヅ)・大牧周西(産科指南ヲ著ハス)アリ、安房ニ奥澤軒中(産科發明ヲ著ハス)アリ、共ニ助産ノ術ニ精シキヲ以テ名アリ、殊ニ奥澤軒中ハ蘭醫方ニ參酌スルコト最モ多ク、管刀・出頭械・束頭械・圓頭械・整頭械・復納械・除臟械・大小鉤等ノ諸器械ヲ創製シ、以テ割頭・割宮・割割・除臟等ノ諸術ヲ施シ、發明ノ說亦尠カラズ。

蛭田流産科

賀川玄悅ニ後ルルコト三四十年、奥州・白川ニ蛭田玄仙ト言フモノアリ、賀川氏ノ說ヲ聞キテ起テ産科ヲ修メ、既ニ造詣スルトコロアリ、『夫懷孕者、婦人之常也、非ニ疾病ニ也、蓋産婦之難者、則婦人之病也、夫人無レ病、則無レ所レ治焉、有レ病則有レ所レ治焉、故産婦亦無レ難、則無レ所レ治焉、有レ難則有レ所レ治焉、是以醫無ニ治レ常之法ニ、而有ニ治レ病之法ニ、無下治ニ産婦之法上、而有下治ニ産難ニ之法上、亦不レ問ニ其産ニ、唯隨ニ其證ニ耳』ト言ヒテ、妊娠ノ疾病ニアラザルコトヲ論ジ、『妊娠三月ヨリ七月ニ至ルマデ、ソノ胎運動シテ休マズ、概ネ母ノ腹氣ニ順フ、八九月以後ハ次第ニ胎實シ運轉ノ自在ナルコトナシ、只時々母腹蠢動甚シキノミ、ソノ左右上下ヲ換ユルナドノ旋轉ハアラズ、此時ニ當リテハ兒頭已ニ下邊ニ旋リ、ソノ臀ハ上位ニアリ、順ヲ以テ臨ミ來タリ、ソノ頭ハ母ノ横骨ニ比着シ、時ヲ以テ分娩頭ヨリス、是ソノ平常順産ナルモノナリ』ト言ヒ、賀川ガ『兒ノ腹中ニアルヤ背面倒首手ヲ張ル』ト言ヒ、片倉ガ『背面倒首ノ說ハ千古ノ卓見ナレドモ、手足ヲ張ルト云フハ妄ナリ』ト言フハ、共ニ皆ナ臨月ニ近キ腹候ヲ診シ、ソノ見ルトコロヲ主張スルニ由ルト論ジ、又産時ノ位置ヲ論ジテ仰臥ヲ以テ跪坐ニ優レリトシ、孕否診決、調胎息等ヲ論ズルニ方リテモ、亦前人未發ノ蘊奧ヲ發揮セルモノ尠カラズ。

蛭田玄仙、各ハ克明、字ハ至德、陸奥國白川郡渡瀨村ノ人ナリ、家世々農ヲ業トス、玄仙天資穎悟、容貌魁偉、少小ニシテ稼穡ヲ業トセズ、性方術ヲ好ミ、慨然トシテ濟生ニ志アリ、獨學略ボソノ道ニ通ズ、殊ニ産難ハ本ト死病ナラズ、而シテ婦人ノ之ガ爲ニ非命ノ死ヲ致スヲ憂ヒ、深クソノ治術ヲ攻究シ、既ニシテ大ニ得ルトコロアリ。年三十餘ニシテソノ各遠邇ニ播揚シ、奥・羽・常・總ノ産婦、玄仙ノ術ニ依リテ非命ノ斃ヲ免ルルモノ擧ゲテ計ルベカラズ。東州ノ人依リテ尊崇シテ東翁ト稱シ、敢テソノ名ヲ曰ハズ、遂ニ自カラ稱トス。後チ四方ニ周遊シテ遍ク世ノ産難ヲ救ハントス。東山ノ諸邦ヲ經テ江戸ニト居シ、時ニ或ハ東奥ニ赴ムキ、或ハ峽中ニ到リ、助産ノ功績甚ダ多シ、文化十二年西京都ニ赴カントシテ函嶺ニ至リ、病ニ罹リ、輿シテソノ郷ニ還リ、同十四年正月歿ス、年七十三。(蛭田先生傳・産則全書序文)

蛭田ノ産術ヲ傳フルモノ産術訓解・産術圖繪・産術秘法・産術秘法圖繪アリ、ソノ門人沼野村章ノ田子産則全書

アリ、富澤黃良ノ孕家遵生アリ、コレ等諸書ニ載スルトコロニ依リテ見ルニ『吾田子之於レ術也、大不レ同ニ賀氏之術一也、如ニ賀氏之回生鉤胞之術一、産論秘而不レ述、故難レ知其可否一也、雖レ然竊聞、彼多用ニ療器一、憶應ニ田子之棄救出安之術一、田子之術、唯以ニ手指一、而未ニ敢用ニ療器一』ト言ヒテ、手ヲ用ヒテ施術スルノ簡ニシテ且ツ効多キコトヲ唱道シ、手術トシテハ正復（胎兒欹斜傾側セルモノヲ正シテソノ位ニ復セシムル法）・縮早（産ノ期ヲ縮メテソノ生ヲ早ムルノ法）・開通（産前産後小便閉ヲ開通スル法）・保全（順産ニシテ産門ニ滯ルモノニ、ソノ胎ヲ保チテ其生ヲ全フセシムル法）・矯促（胎兒傾側産門ニ滯ルモノヲ矯正シテソノ娩出ヲ促ス法）・出安（胞衣下ラザルヲ出ス法）・送收（腸脫・肛脫・子宮脫ヲ收納スル法）・漏寬（血量ヲ治スル法）・遮絶（崩漏ヲ絶ツノ法）・棄救（難産百計既ニ盡キタル時、ソノ子ヲ棄テテ、ソノ母ヲ救フタメニ施ス法）ノ十法ヲ擧ゲ、出安・棄救ノ二術ノ他ハ總ベテ手ヲ用ヒテ之ヲ施シ、棄救ノ術ハ鉤、又ハ刀ヲ用ヒテ臟ヲ除キ牽キ出セシモノカ、ソノ術ノ詳ナルコトハ固ヨリ之ヲ知ルコト能ハザルナリ。

兒科^⑩

小兒ノ治方ハ前期以來再ビ千金方ノ古ニ復セシガ、而カモ當時ノ兒科專門家ハ動モスレバ偏見ヲ持シ、病因ヲ説キテハ胎毒多シト言ヒ、與フルニ寒涼尅伐ノ藥ヲ以テシ、又小兒ハ嬌嫩ノ體ナルガ故ニ扶養ヲ要スト論ジテ果子藥ヲ用フルコトナドヲ專ラトセシガ、コノ時ニ方リテ舊套ヲ脱シテ能ク應變自在ノ治術ヲ施シタルハ片倉鶴陵ナリ（傳ハ産科ノ條下ニ出ツ）。鶴陵ハ固ヨリ少小方ヲ以テ專門トセシモノニハアラザレドモ、ソノ著保嬰須知ハ斷臍法・浴兒及ビ將護法・初生治要・撮口論・驚風・癩疾・蚘疾・疳疾・喘咳・小兒雜症・痘瘡、等主要ノ疾病ヲ擧ゲ、古今諸家ヲ折衷シ漢・蘭諸説ニ參酌シ、且ツ之ヲ自家ガ數十年間實踐スルトコロニ考へ、治方ニ於テ發明ノ說尠カラズ。文化・文政ノ頃江戸ニ高野高全（名ハ征休、春園ト號ス）アリ、傷寒論・千金方・幼幼新書・小兒直訣ニ依リテ小兒ノ治方ヲ立テ、又幼幼新書四十卷ヲ翻刻シテ劉氏ノ論說ヲ播揚シタリ。

同時羽佐間宗玄（名ハ資承、芝瓢ト號ス）アリ、小方脈ニ精シキヲ以テ名アリ、ソノ著老婆心書ヲ見ルニ、ソノ論說ハ古今ノ諸家ヲ折衷シ、殊ニ和蘭ノ方ヲ採リ用ヒタルコト尠カラズ。

岡了允（名ハ茲、勁齋ト號ス）ハ兒科專門ヲ以テ幕府醫官トナリ、文政三年小兒戒草ヲ著ハシ、次で育嬰窺斑ヲ著ハシ、千金方ニ『小兒始生、其氣尙盛、若遇ニ疾病一、即須レ下レ之、下レ不及時、則必成ニ別症一』トアルヲ引キ、小兒ノ疾病ヲ治スルノ趣旨ハ、コレニ外ナラズト言ヒ、時醫ガ兒ノ虛實寒熱ヲ察セズ、動モスレバ灸炳ヲ施スヲ不可トシ、又臍風撮口ハ原トコレ一症ニシテ大人ノ破傷風ト同種ノモノナリト論ズルガ如キ、ソノ識見ハ稱スベキモノアリ、而カモ病理及治方ヲ説クニ方リテハ則チ千金方・幼幼新書ノ所説以外ニ一步モ出ヅルコト能ハザリシナリ。

右ニ擧グルトコロハ、皆ナ江戸ニ於ケル兒科ノ大家ナルガ、同時京都ニハ山科・太田・西尾ノ諸家アリ、小兒科專門ヲ以テソノ名ヲ京・畿ノ間ニ顯ハセリ。

痘科^⑪

寛政十年、幕府醫學館ニ痘科ヲ創設シ、當時斯科顛門ヲ以テ一家ヲ成セル池田瑞仙ヲ擧ゼテソノ教授トナシ、又擧ゲテ醫官トナス。國學ニ痘科アリ、醫官ニ痘科アルコト、コレヨリ始マル。寛政十年ハ西曆一千七百九十八年ニ

當り、英國ノジエンナーガ種痘ヲ發明セル後十年ナリ。

支那ニアリテハ痘瘡ノ行ハルルコト我が國ヨリモ古ク、而シテ醫書ニテ始メテ之ヲ論ジタルハ肘後方ナレドモ、コノ書ハ後人ノ竄入多クシテ信僞判ズ可カラズ。今日吾人が引據スベキ書ニテハ病源候論ヲ以テ最モ古シトス。ソノ傷寒豌豆瘡候ニ『傷寒熱毒氣盛、多發ニ痘瘡ニ、其瘡色白或赤、發ニ於皮膚ニ、頭作ニ瘰癧ニ、戴ニ白膿ニ者、其毒則輕、有ニ紫黑色作ニ根、隱々在ニ肌肉裏ニ、其毒則重、甚者五内七竅皆有レ瘡、其形如ニ豌豆ニ、故以名焉、』ト記シ、又時氣炮瘡候ニ曰ク『夫表虛裏實、熱毒內盛、則多發ニ痘瘡ニ、重者周匝遍身、其狀如ニ火瘡ニ、若根赤頭白者、則毒輕、若色紫黑、則毒重、其瘡形如ニ豌豆ニ、亦名ニ豌豆瘡ニ』ト記スルニ依リテ之ヲ見レバ、ソノ痘瘡ノ症タルコトヲ信ズルニ足ルベシ。爾來醫書痘瘡ノ事ヲ載スルモノ多シト雖モ、專書アルハ宋ノ代ニ始マリ董汲ノ小兒痘疹論・錢乙ノ藥證眞訣・陳文中ノ小兒痘疹方論、等ヲ以テ主要ノモノトナス。而シテソノ小兒痘疹方論ハ安土・桃山時代ニハ既ニ我が邦ニ行ハレシガ、次デ王好古（癩疹論）・朱彥脩（治痘要法）ノ書入り來リ、幼幼新書・活幼心法、等ノ說モコノ間ニ行ハレタリ。爾他諸家ノ痘疹ヲ論ズルノ書多シト雖モ、就中龔廷賢ノ痘疹辨疑金鏡錄ハ前人未發ノ說尠カラザルヲ以テ世ニ重ンゼラレシガ、之ヲ骨子トシテ撰述セラレタル朱巽ノ痘科鍵ガ享保年間、我が邦ニ翻刻セラルルニ至リ、龔氏ノ說ハ益々我が邦ニ行ハレタリ。是ヨリ先キ承應中明人戴曼公我が邦ニ來タリ、初メ長崎ニ在リ、後チ周防・岩國ニ住ミシガ、斯人嘗テ明ニ在リシトキ龔氏ニ從テ醫ヲ學ビ痘科ニ精シキヲ以テ名アリ。吉川氏ノ臣池田正直從テソノ秘訣ヲ受ク、ソノ子信之、ソノ孫正明相承ケテソノ學ヲ傳へ、曾孫瑞仙ニ至リテ遂ニ痘科ヲ以テ、ソノ名ヲ天下ニ顯ハスニイタレリ。

戴曼公、名ハ笠、杭州・仁和縣ノ人、父某善行アリ、母陳氏、身六産ニテ七子ニ乳ス、未産雙男、曼公ハ即チソノ一ナリ、實ニ萬曆丙申年二月十九日ニ生ル。天資穎悟、幼ニシテ學子業ヲ學ビ、夙ニ鬢序ニ登ル、然レドモ時文ヲ喜バズ。年三十未ダ詩ヲ爲ルコト能ハズ。一日友社、曼公ニ逼テ詩ヲ賦セシム、即チ聲ニ應ジテ云ク、我來ニ溪頭ニ坐、溪月留レ我宿ト祇コノ二句、衆皆ナ嘆稱ス。嗣後凡ソ題到ルアレバ筆ヲ下スコト沛然、藻思傑出、糟粕ヲ洗盡シテ人語ヲ襲ハズ。年五十北虜ノ明朝ヲ陷レ、人心ノ盡ク死セルヲ耻テ儒ヲ棄テテ醫ニ隱レ、妻子ト偕ニ郷ニ居ルコト九歳、遂ニ航シテ我が長崎ニ到ル、時ニ承應二年ナリ。長崎奉行橋氏、曼公ノ醫ニ精シキヲ聞テ留ランコトヲ乞フ。依リテ長崎ニ寓ス。曼公書ヲ善クシ、最モ篆隸ニ工ナリ、海内就テ書ヲ學ブモノ多シ、而シテ深見玄岱獨リソノ蘊奧ヲ窮ムト言フ。

曼公少シテ學子業ヲ學ビ、鬢序ニ登ル、時ニ雲林龔廷賢（萬病回春ヲ著ス）年八十餘、尚ホ强健ニシテ醫ヲナス、曼公之ニ從テ遊ビ盡クソノ術ヲ傳フ、後チ明亂レ我ニ歸シテ崎巖ニ在ルヤ、吉川氏ノ請ニ應ジテ長・防ノ間ニ往來ス。ソノ臣池田嵩山書ヲ曼公ニ學ブ。曼公其爲レ人ヲ審ニシ因テ謂テ曰ク、我ニ痘ヲ治スルノ禁方書アリ、悉ク子ニ授ケント欲ス、子之ヲ學ベ、三年必ズソノ妙ニ至ラント。嵩山拜シテ之ヲ受ク。即チ痘疹治術傳・婦人治痘傳・痘疹百死傳・痘科鍵口訣方論・正面定位圖・面部四位八隅圖・面色順逆圖・三十六面圖・唇舌常候・病唇十八品・病舌三十六品・五死舌圖等ナリ。嵩山就テ秘訣ヲ得、遂ニ痘科ヲ以テ大ニ世ニ著ハル、ソノ四世孫瑞仙ニ至リテ、擢デラレテ幕府醫官トナリ、痘書ヲ躋壽館ニ講シ、ソノ名噴々世ニ傳ハル、而シテ、ソノ原ヲ討ヌレバ、コレ實ニ曼公ノ傳授ニ出テ、曼公ノ書ノ大旨ハ、龔氏痘疹全幼錄ニ淵源スト言フ。

承應二年隱元和尙東來シテ大ニ法威ヲ振フ、曼公乞フテ出家ヲ求メ、和尙ノ坐下ニ歸シテ雜染シ、名ヲ性易ト改メ字ヲ獨立ト言フ。天外一閒人又天外老人ト號ス、而シテ醫ヲ爲スコト舊ノ如シ。曰ク、物ヲ濟フハ是佛心、道本廣大、在ラザルトコロナシ、ソノ治成方ニ規々タラズ、而モ驗ヲ得ルコト多シト言フ、萬治元年、戊戌九月隱元和尙ニ侍シテ江戸ニ朝ス。執政松平信綱、曼公ノ才德ノ時輩ニ超越セルヲ見テ錫ヲ住メシメントス。事阻テ果サズ。二年病起リ長崎ニ還ル、寛文十二年十一月初六日遂ニ寂ス、春秋七十七。之ヲ聖壽山中ニ火キ、弟子慧明ソノ骨ヲ護送シテ宇治・黃檗山ニ葬ムルト言フ。

池田瑞仙、名ハ獨美、字ハ善郷、錦橋ト號ス。周防・岩國ノ人、世々痘科ヲ業トス。曾祖正直（嵩山ト號ス）明人戴曼公ニ

從テ痘科ノ秘訣ヲ受ケ、圖說ヲ作テ家ニ藏シ、子孫傳テ法トナス。瑞仙幼ニシテ孤トナリ、叔父某ノタメニ教育セラレ、長ズルニ及ビテ醫ヲ修メ、和蘭外科ヲ以テ行ハル、而シテ瑞仙志家學ヲ興スニアリ。岩國ノ地、痘瘡稀ニシテ術ヲ試ムルニ足ラザルヲ以テ、移テ安藝ノ宮島ニ居ル。會々宮島痘疫流行甚シ、瑞仙圖說ニ依リテ治ヲナシ、甚ダ効驗アリ、是ニ於テ從前爲ストコロヲ捨テテ専ラ家學ヲ修メ、古今ノ痘書ヲ取テ之ヲ秘訣ニ參シ、精勵多年ソノ學術ト共ニ熟ス後チ大阪ニ移リ次デ京都ニ居リ治痘ノ術ニ精シキヲ以テ名聲天下ニ顯ハル。寛政九年召サレテ江戸ニ來タリ、醫官ニ擧ゲラル。醫官ニ痘科アルコト瑞仙ヨリ始マル。又命ヲ奉ジテ痘書ヲ醫學館ニ講ズ、文化十三年歿ス。瑞仙著ストコロ痘科辨要・痘疹戒草・痘科鍵刪正・治驗錄等アリ。(墓誌・醫業家譜)

池田瑞英、名ハ大淵、字ハ河澄、京水ト號ス、瑞仙ノ子ナリ。性放縱不羈ニシテ人ニ容レラレズ。遂ニ多病ヲ以テ嗣ヲ廢セラル。是ニ於テ諸國ヲ經歷シ、山水ノ間ニ放浪セリ、而カモ痘科ノ一事ニ至リテハ反復丁寧、切磋琢磨ノ功ヲ積ムコト年アリ。遂ニ痘科學要・痘科會通・痘科鍵私衡・治痘論等ノ諸書ヲ著ハシ、大ニソノ家學ヲ發揮シ治痘ニ精シキヲ以テ名アリ。

(墓誌)

池田柔行、名ハ晋、霧溪ト號ス、上毛ノ人、年二十ニシテ江戸ニ出デ池田瑞仙ノ門ニ入りテ、痘科ヲ修メ、ソノ蘊奧ヲ窮ム。瑞仙乃チ之ヲ養フテ嗣トナシ、由テソノ業ヲ繼ギ瑞仙ヲ襲稱ス。柔行既ニ父ノ業ヲ受ケテ幕府醫官ニ擧ゲラレ、又痘科教授タリ。著ストコロ續痘科辨要・治痘要訣・種痘辨義・痘瘡養生訣・古今痘疹類編大成・治痘要方・痘科輯說・治痘口訣等アリ、池田氏ノ治痘術ハ之レニ依リテ益恢弘セラレタリ、安政四年歿ス。(墓誌)

痘瘡ノ原因ニ就キテハ宋以來種々ノ說アリ、或ハ胎毒トシ、或ハ後天ノ食毒トシ、或ハ穢血トシ、或ハ淫溢勝復ト稱シ、我が邦ニアリテモ歷代ノ醫家、多クハ支那ノ舊說ヲ盲信シテ確乎タル定說ナカリシガ、池田氏ニ至リテハ『痘本胎毒、内伏ニ于右腎命門一、外感ニ于天行疫癘之氣ニ而發』『痘者本一種之異毒、而非ニ尋常之胎毒ニ也、其感觸者亦一種之異氣、而非ニ尋常之疫邪ニ也、要レ之、天行之沴氣、與ニ蘊藏之遺毒ニ、相觸激而發也』ト說キ(郭子章、傳集稀痘方論ニコノ說アリ)紛々タル諸說ヲ排シテ獨リ、コノ如キ意見ヲ持セシハ頗ブル識見アリト言フベク、又ソノ古來痘ヲ治セルモノノ弊ヲ擧ゲテ『中古以來、治痘者流、雖多ニ發明一、而學レ之者、不レ免ニ互有ニ偏僻之失一、蓋左三袒文中一則遺ニ災於血熱一、根ニ據仲陽一、則釀ニ害於氣靈一、信ニ魏直一、則不レ辨ニ虛實一、槩以ニ保元一、遂致ニ以レ實助レ之弊一、貴ニ聶氏一、則猶下以ニ杯水禦中一車薪之火上、其病恒在レ不レ及、抑亦宗ニ建中一、則其逢ニ火熱一雖ニ乃奏ニレ功、而值ニ内虛一、則トニ其喪ニ無レ日、故當レ病投レ藥以レ除ニ偏僻之失一、爲ニ醫之一大緊要事一矣』ト論ジ、痘科ニハ小兒・大人・婦人・妊婦ノ四項アリ、而ルニ嬰兒ノ之ヲ患ルコト最多キヲ以テ、小兒科ノ中ニ列スルハ宋醫ノ失ナリト言ヒ、痘證ニ八症(毒壅・血熱・氣虛・血虛・表實・裏虛・裏實・表虛)・四節(見苗・起脹・灌漿・收斂)・三項(順・險・逆)ヲ別チ、又唇舌秘鑑・面部圖說ヲ以テ、ソノ虛實ヲ別チ、生死ヲ決スルコトハ古來諸家之ヲ說カザルニハアラズト雖モ、池田氏ニ至リテソノ說益々完備ヲ致セリ。

同時大阪ニ田幡仲盈アリ痘科秘要ヲ著ハシ、江戸ニ黑澤松益アリ、痘瘡醫筌ヲ著ハシ、伊豫ニ赤松某アリ、痘瘡夜話ヲ著ハシ、莊内醫官ニ今井宗益アリ、折肱餘筆第一卷ヲ著ハシテ痘瘡ノ事ヲ論ズ。ソノ他大方脈ヲ以テ專門トスルモノニシテ、心ヲ痘瘡ノ攻究ニ用ヒシモノ尠カラズ。前期吉益南涯ノ痘瘡紀聞・橘南蹊ノ痘瘡水鏡錄・原南陽ノ叢桂亭醫事小言・種痘門ヲ以テソノ主ナルモノトス。

種痘法

痘疹科ノ事ヲ叙スルニ方リテハ附録トシテ種痘法ニ就キテ一言スルコトヲ要ス。我が邦ニ種痘ノ法ノ入りシハ徳川吉宗將軍ノ時代ニシテ、延享二年四月支那ノ杭州ノ人李仁山ト言フモノ長崎ニ來タリ、明年ノ春專ラ種痘ヲ施セシガ、ソノ說ハ當時ノ通辭平野繁十郎・林仁兵衛之ヲ和解シ、之ヲ李仁山種痘和解ト名ヅケタリ、コノ書ニ據ルニソノ種痘法ハ大概醫宗金鑑・種痘新書等ノ書ニ載スルトコロニ同ジトス。

醫宗金鑑ハ清ノ乾隆七年（我が寛保二年）ニ成リシモノニシテ、全部九十卷、ソノ第六十卷ニ種痘心法要旨ヲ説キタリ。支那ノ醫書中ニテ種痘門ヲ立テテ精シクソノ事ヲ説キタルハコノ書ヲ以テ嚆矢トス。ソノ説ニ曰ク『嘗考種痘之法、有レ謂乙取ニ痘粒之漿ニ而種甲レ之者、有レ謂乙服ニ痘兒之衣ニ而種甲レ之者、有レ謂乙以ニ痘痂屑ニ乾吹ニ入鼻中一^種甲レ之者、謂ニ之早苗ニ、有レ謂乙以ニ痘痂屑ニ濕納ニ入鼻孔ニ種^甲レ之者、謂ニ之水苗ニ、然則四者而較レ之、水苗爲^レ上、早苗次^レ之、痘衣不ニ應驗ニ、痘漿太殘忍、故古法獨用ニ水苗ニ、蓋取ニ其和平穩當ニ也、近世始用ニ旱法ニ、雖ニ捷徑ニ微覺ニ迅烈ニ、若痘衣痘漿之説、則斷不^レ可^レ從』之ニ依リテ見ルニ、種痘ニハ漿苗・衣苗・早苗・水苗ノ四法アリ、コノ四法ハ乾隆以前ヨリ既ニ支那ニハ行ハレシモノナルコトヲ知ルベシ、而シテソノ起原ニ就テハ諸書記スル事區々ニシテ、信偽判ジ難シト雖モ種痘新書ニ張琰ガ『余祖、承^ニ聶久吾先生之教ニ、種^レ痘』ト記シ（聶氏ハ明ノ萬曆年間ノ人）、李仁山ノ説ニ『種痘ノ法ハ神明ノ相傳ナリ、明朝ノ徽州府ノ商人、施氏ナルモノ海上ニ浮テ一ノ山ニ至リ、媽祖天后ノ靈顯ヲ蒙^リ種痘法ヲ授カレリ』ト言フニ依リテ、ソノ明時代ニ始マリ、清ノ代ニ及ビテ盛ニ行ハレタルコト知ルベシ、或ハ曰ク宋・眞宗ノ時、娥眉山ニ神人アリ、出^テテ亟相王旦ノ子トナリ、種痘シテ癒エシヨリ、ソノ法遂ニ世ニ傳ハルト（治痘十全等ノ書ニ出ツ）。或ハ曰ク『種痘ノ法ハ、コレ仙傳ナリ』ト、蓋シソノ術ヲ奇ニシテ信ヲ世ニ取ランガ爲ニ之ヲ神人ノ傳ト稱スルナリ^也。大槻警水ハソノ法ハ土耳其古國ノ原法ニ基ヅクモノナラント説キ（瘍醫新書接痘編）タレドモ、果シテ然ルカ、未ダ詳ニ之ヲ究ムルコトヲ得ズ。

我が邦ニモ昔時ヨリ房州ニ一種ノ種痘法アリト傳フ。多紀桂山ガ醫贖ニ曰ク『聞、斯邦房州濱海一村、有^下自^三數百年前ニ、行^ニ種痘ニ法上、多用^ニ乾苗ニ、乃先^ニ於彼土ニ支那ヲ指ス』而知^レ用^レ此、亦奇矣』ト。事實果シテ如何カ、詳ナラズ。

然レドモ種痘ノ法ガ盛ニ行ハルルニ至リシハ、李仁山ノ來朝ニ後ルルコト數年、寶曆二年ニ醫宗金鑑ガ我が邦ニ入り、安永七年ソノ種痘編ヲ拔萃シ種痘心法ト題シテ刊行セラレタルヨリ以來ノコトナリ。

醫宗金鑑・種痘新書等ニ載スルトコロ、種痘ノ四法ハ左ノ如シ。

（第一）衣苗法又痘衣種法 衣苗法トハ長漿漿足ノ時ニ痘兒ノ服スルトコロノ裏皮ヲ取テ未ダ痘セザル兒ニ着セテ夜間モ脱セシメズ、ソノ痘氣ヲ傳染セシムレバ、九日乃至十二日ニ至リ始メテ發熱アリ、ソノ効アルコト少シ。（痘疹心法要訣・張氏醫通）

（第二）漿苗法 漿苗法トハ痘ノ滿漿ノ時、鍼ヲ以テソノ瘡頭ヲ破ブリ、布又ハ綿ヲ以テ膿漿ヲ浸シ取りテ之ヲ兒ノ鼻孔ニ滴シ入ルルナリ（男ハ左、女ハ右）。七日ニシテ發熱見點ス。（張氏醫通・種痘新書）

（第三）水苗法 水苗法トハ上好ノ痘痂ヲ用ヒ、一歳ナラバ二十餘粒、三四歳ナラバ三十餘粒ヲ取り、磁鐘中ニ入レ柳木ノ杵ヲ以テ痂ヲ末シ、淨水一乃至五滴ヲ下シ和シ調ヘ棗形ノ形ノ如クニ丸シ、新綿少許ヲ攤シテ薄片ト

シタルニ裏ミ^{アカイト}紅線ヲ以テ栓定シ鼻孔中ニ納入シ（男ハ左・女ハ右）止メ置クコト六時、冬ハ温メテ之ヲ用フルナリ。（痘疹心法要訣・痘疹會通）

（第四）早苗法 早苗法トハ痘痂末ヲ碾末シ銀管（長五六寸ニシテ頸ヲ屈テ）ノ管端ニ盛り鼻孔中ニ吹入スルナリ（男ハ左・女ハ右）五日乃至九日ニシテ發熱ス。（痘疹心法要訣・張氏醫通・治痘十全）或ハ痘痂ヲ細末ニシ通關散少許ヲ放チ乳ニ勻ヘ小竹管ヲ以テ鼻孔ニ吹キ入レ、手ヲ以テ鼻孔ヲ掩閉スルコト片刻ニス。種痘新書）

上記諸法ニハ爾後固ヨリ多少ノ變改アリ、而シテソノ趣旨ニ至リテハ皆ナ以上四法ノ範圍ヲ出ヅルコトナシ。

コノ如ク人痘種法ノ我が邦ニ入りシヨリ文化・文政ノ頃ニ及ビテ、コノ法ハ大ニ我が邦ニ行ハレ、種痘家ヲ以テソノ名ヲ成セルモノ尠カラズ、中ニ就キテ著名ナリシハ肥前大村ノ長與俊達・芳陵英伯、筑前・秋月ノ緒方春朔、武州・忍ノ河津隆碩、常州・水戸ノ本間玄調、上總・佐貫ノ井上宗端、木下川ノ庄屋次郎兵衛（引痘要略解ニ依ル）、江戸ノ桑田玄眞・桑田立齋等ナリ。

緒方春朔（號濟菴）ハ筑前・秋月ノ人ニシテ、長崎ニ學ビ吉雄氏ノ門人タリ、嘗テ醫宗金鑑ノ種痘心法ヲ讀ミ、仁山ガ施術ヲ聞キテヨリ頻ニ心ヲ潛メ研究スルトコロアリ。寛政元年秋月藩痘瘡流行ニ際シ、始メテ鼻乾苗法ヲ施シソノ効著シカリシガ、寛政六年江戸ニ祇役セシトキ、又連ニ名ヲ聞キテ施術ヲ受クルモノアリ、ソノ術遂ニ世ニ聞エシカバ諸藩侯ハソノ侍醫ヲシテ就テ學バシメタリ、春朔ノ著ストコロ、種痘必順辨ハ寛政七年ニ刊行セラレシガ、蓋シ是レ本邦第一ノ種痘書ナリ。

精神病科^七

癲狂ノ病名ハ既ニ大寶令ニ出デ、ソノ戸令ニ『惡疾癲狂、ニ支癢、兩目盲、如レ此之類、皆爲^ニ篤疾^一、』ノ文アリ。天長十年撰ノ令義解ニ癲狂ヲ註釋シテ『謂^レ癲者、發時仆^レ地吐^ニ涎沫^一、無^レ所^レ覺也、狂者、或妄觸如^レ走、或自高賢、稱^ニ聖神^一者也』ト言フ。ソノ說ハ支那ノ醫書ニ基ヅクモノニシテ支那ノ古醫書靈樞ニハ癲狂篇アリ、癲ハ今日吾人ガ謂フトコロノ癲癇 (Epilepsie) ヲ指シ、狂ハ即チ精神病ヲ言ヘルナリ、次デ病源候論ニハ狂病 (風狂) 及ビ五癲 (陽癲・陰癲・風癲・濕癲・馬癲) ノ目ヲ擧ゲ、同ジク精神病ト癲癇トヲ區別シ、而カモ兩症ヲ以テ近似ノモノナリトシ、癲病 (癲癇) ヲリシテ狂 (精神病) ヲ發スルトヲモ説キタリ。

我が邦ノ醫書ニアリテハ丹波康賴ノ醫心方ニ病源候論・千金方等ノ說ヲ引テ、精神病ヲ中風ニ列シ、ソノ證候及ビ治方ニ就テ論述セル以來、鎌倉・室町兩時代ヲ經テ江戸時代中世ニ至ルマデ醫家ノ著述中、ソノ說ノ精神病ニ及バザルハナシト雖モ、大都病源候論・千金方等ノ所說ヲ祖述スルニ過ギザリシガ、香川修庵ガソノ著一本堂行餘醫言ニ『癇』ノ一篇ヲ掲ゲ、精神病ヲ論述セルニ至リテソノ說大ニ備ハレリ。

ソノ說ニ依レバ、癇ハ驚・癲・狂ノ總名ニシテ、癲ハ『卒然、運倒昏迷、不^レ省^ニ人事^一、直視吐^レ沫、發^レ聲叫啼、手足躁擾、口目嚙引或手足屈強、咬牙瞪目、云々、少時之間、癡退氣復。如^ニ夢忽覺^一』ノ證ヲ見ハス (癲癇)。驚ハ『每事驚恐畏怖』ヲ以テ主證トシ、別ニ驚悸・驚怖等ノ稱アリ。狂ハ即チ精神病ニシテ、ソノ證ニ鬱憂性ノモノト、發揚性ノモノトヲ區別シ、妊娠時ノ精神病ト產褥時ノ精神病トヲ擧ゲ、又定期性ノ精神病 (有^ニ忽然發^一狂、二三日、至三四五日)、乃止、如^レ常、一月及半年、復狂如^レ前者^上) ヲ報ジ、彼ノ俗ニ狐憑ト稱スルモノモ皆ナ狂證 (精神病) ニシテ野狐ノ祟ルトコロニアラズ、小兒ニ狂證ナシト言フモ非ナリト論ゼリ。而シテ香川氏ハ又精神病ニ續發シ、若クハ前驅シテ癡愚・體軟・不寐・不食等ヲ起スコトアルヲ説キ、コレモ亦一ノ精神病ニ外ナラズト言ヘリ。

香川修庵ニ次デ田村玄仙アリ、文化五年療治茶談ヲ著ハシテ、精神病ヲ叙述シ香川氏ガ癲症ト名ヅクルハ非ナリ宜シク之ヲ心疾ト改ムベシト言ヒ、一種ノ毒氣アリテ心臓ヲ侵スニヨリ、コノ如キ症ヲ呈スルモノトナセリ、而シテソノ毒氣ニ就キテハ『人ニヨリ病ニヨリテ、ソノ毒氣ハ違フナリ、假令ハ瘀血ガアレバ瘀血ノ毒氣アリ、痰ガアレバ痰ノ毒氣アリ、水氣ガアレバ水氣ノ毒氣アリ、脚氣ガアレバ脚氣ノ毒氣アリ、胎毒アレバ胎毒ノ毒氣アリ、種物ニヨリ品ニヨリテ病因ハ變リアレドモ、心ノ臟へ攻メ入りテ夢中ニナルニ及ビテハ皆カワル事ナシ』ト論ジ、諸般ノ毒氣ニヨリテ、心臓ヲ侵スニヨリ、此ニ精神病ヲ起スモノナリト説キタリ。

而シテ、精神病ニ就キテ更ニ詳細ノ說ヲ公ニセルモノヲ土田獻・喜多村鼎ノ兩人トナス。土田獻 (字ハ翼卿) ハ奥州ノ人、江戸ニ出デテ醫ヲ業トシ、心ヲ精神病ノ研究ニ用フルコト十又五年、前後治ヲ施スコト一千餘人ノ多キニ及ビ、ソノ實驗ニ基ヅキ、一書ヲ著シテ癲癇狂經驗篇 (文政二年刊行) ト曰フ。實ニコレ我が邦ニ於ケル精神病ニ關スル專書ノ嚆矢タリ。

癲癇狂經驗篇ニ從ヘバ、癲癇ハ胎病ニシテ、癲狂ハ伏熱ニ由ル。癲狂ハ古昔ハ有ルコト少ニシテ近世ニ及ビテ之

ヲ患フルモノ更ニ多ク、又連染（感染）スルコトアリト言ヒ、精神病ニ鬱憂性ノモノト發揚性ノモノトヲ區別シ、發熱失血等ニ續キテ精神病ヲ起スコトアルヲ説キ、又月經性及ビ産褥性ノ精神病ヲ實驗シ、又『癲狂、語不了了者、發言蹇澁、狀如中風』者、或數年後、變如レ癡者、皆難レ治、『癲狂、數年後、恍惚狀如レ癡者、非ニ藥物所レ及』ト言フハ麻痺狂ヲ指スガ如ク、ソノ豫後ノ不良ナルヲ言フハ今日吾人ノ經驗ニ符合セリ。

喜多村鼎（通稱良宅、薩藩侍醫）ハソノ著吐法篇ニ於テ精神病ニ就キテ叙述シ、ソノ原因トナルベキモノハ、（1）遺傳・（2）小兒期ニ於ケル劇度ノ驚愕・（3）大人ニアリテ憂愁・驚怖及ビ妊娠・身體損傷等ニシテソノ證ニハ、正證アリ、易證アリ、難證アリ、傷寒ニ似タルモノアリ、勞疾ニ似タルモノアリ、狐憑ニ似タルモノアリト論ゼリ。土田・喜多村ノ兩氏ニ次ギテ本間棗軒アリ。ソノ著內科秘錄（元治元年刊）ニ精神病ノ事ヲ叙述セルヲ見ルニ、癲狂病ニハ從來諸家ノ説クトコロノ外ニ中毒性（大麻）ノモノアリ、又心氣病（毘剝毘埵兒）ハ之ヲ一個ノ疾病トナシテ癲狂ヨリ區別セザルベカラザルコトヲ言ヒ、ソノ各個ノ證候ヲ論ズルヤ稍々精詳ナリトス。

黴毒科

室町時代ノ末ニ、黴毒ノ一症我が邦ニ傳ハリテヨリ、諸家ノコノ病ニ就キテ著述スルモノ漸ク多ク、前期ニ至リテ香川修庵・山脇東門等諸家ノコノ病ニ就キテ記述セルアリ。專書トシテハ和田東郭ノ黴瘡一家傳・橘尙賢ノ黴瘡證治秘鑑（安永元年）・片倉鶴陵ノ黴厲新書（天明六年）・永富獨嘯庵ノ黴瘡口訣（天明八年）等アリシガ、コノ期ニ至リテハ太田晋庵ノ黴瘡備考方（寛政九年）・和氣惟享ノ黴瘡約言（享和二年）・黴瘡秘錄標記（文化五年）・末延守秋ノ黴瘡奇效方（享和三年）・村上圖基ノ黴瘡秘錄別記（文化五年）・加古角洲ノ黴瘡治方論（文化五年）・石橋忠庵ノ黴毒要方（文化七年）・佐藤有信ノ黴瘡私考（天保五年）・小石元俊ノ黴毒握機訣等アリ。諸家ノコノ症ノ病理及ビ治方ヲ攻究セルモノ尠カラズ、遂ニ黴毒ノ治方ヲ以テ専門トスルノ醫家アルニイタリ、大阪ノ船越敬祐（名ハ晋、字ハ君明、錦海ト號ス）ノ如キハ、ソノ著名ナルモノノ一人ニシテ、黴瘡茶談・黴瘡軍談・黴毒方選等ノ書ヲ著ハシ、當時ノ他ノ諸家ト同ジク主ニ水銀薰劑ヲ用ヒテ黴毒ヲ治スルコトヲ稱揚シタリ。

按摩科

按摩ノ術ハ古代支那ヨリ我が邦ニ入り、大寶令ニハ按摩ノ一科アリシガ、ソノ後何時トナクコノ科ハ廢セラレ、按摩ノ術ハ遂ニ醫家ノ重要視セザルトコロトナレリ。然ルニ江戸時代ノ初世、勢州ノ人林正且アリ、世ヲ擧テ按矯ヲ以テ醫中ノ賤伎トナシ、從テソノ術ノ廢タレタルヲ慨嘆シ、素問・靈樞ノ書ヲ探リテ『按ニ摩一身ニ、爲ニ導引行氣ニ』ノ術ヲ究メ、慶安元年導引體要ヲ著ハスニ至リテ、コノ術漸ク興リ、近江ノ人喜多村利且ソノ術ヲ傳ヘテ時ニ名アリ。次デ肥州ノ人大久保道古、古今導引集（寶永四年）ヲ著ハシ、同時宮脇仲策（養陽子ト號ス）導引口訣鈔ヲ著ハシ、竹中通庵、古今養性錄ヲ著ハシテ、ソノ中ニ導引ノ一篇ヲ掲ゲ、共ニ古今諸家ノ説ニ依リテ益々之ヲ攻究スルニ至リテ、ソノ術ハ愈々大成セリ。然レドモ當時諸家が唱道セルトコロハ巢氏ノ導引・華陀ノ五禽・道家ノ坐功・婆羅門（天竺）ノ按摩ト稱スルモノニシテ、行氣胎息・却老護身ヲ以テソノ趣旨トスルモノニシテ、皆ナ自行ノ術ナリ。

香川修庵ニ至リテ、始メテ按摩ヲ治病ノ一術トシテ用フベキコトヲ唱へ、ソノ著一本堂行餘醫言ニ於テ『或按レ腹

抑レ癥、或屈ニ伸手足十指一、或摩ニ動肩背、腰股、關節一、使ニ氣散、體和、腹裏安穩一、此按摩之所ニ有ニ小益ニ也』ト唱道シタリ。次デ賀川玄悅・賀川玄廸アリテ相嗣デ、按摩ヲ産科ニ賞用シ、ソノ術ハ益々恢弘セラレ、遂ニ産婆ノ實際ニコノ術ヲ行フモノアルニ及ベリ。

小兒科ニアリテモ推拏法ト稱スルモノアリテ、古ヨリ支那ニ行ハレ、我ガ邦ニアリテモ、元祿年間ノ小兒回春ニソノ説ハ載セラレタレドモ、ソノ術ハ盛行ハルルニイタラザリキ。

コノ期ノ初メ寛政年間ニ至リ、伏見ニ藤林良伯アリ、按摩ノ一術ガ古ノ意ニ違フヲ歎ジ、之ヲ治病ノ一術トシテ用フルニハ先ヅ經絡ヲ正シ、臟腑ヲ明カニスルノ要アリ、ソノ術式ノ方式的ナラザルベカラザルコトヲ説キ按摩手引ヲ著ハシテ、ソノ方法ヲ詳述シタリ。按摩手引ニハ頭部按摩法・背部按摩法・四肢按摩法・腹部按摩法（按摩）・小兒按摩法・産婦按摩法等ノ諸章ヲ別チ、圖ヲ掲ゲテ、詳ニ手伎ヲ叙シ、按摩ノ方法ハコノ書ニ至リテ始メテ備ハレルヲ見ル。

次デ大阪ニ太田晋齋アリ、按摩ノ術ニ精シキヲ以テ名アリ。文政十年按摩圖解ヲ著シテ按摩ノ事ヲ説キシガ、ソノ書ニ依レバ按摩ハ『專バラ一元氣ノ溜滯ヲ活潑ニシ、臟腑ヲ安住シ、腸胃ヲ調和シ、血脉ヲ融通シ、骨節ヲ和利シ、筋絡ヲ舒暢シ、肌膚ヲ潤澤シ、飲食ヲ進メ、二便ヲ利シ、氣力ヲ盛ニスル』等ノ生理的作用アリト説キ、之ヲ諸般ノ疾病、殊ニ癩（神經病・精神病）及ビ疝ニ適用スベキコトヲ唱道セリ。

鍼科

コノ期鍼科ニ於テ最モソノ名ヲ顯ハセルモノヲ石坂宗哲トナス。宗哲名ハ永教、竿齋ト號ス、甲府ノ人、鍼灸科ヲ以テ専門トシ、後侍醫法眼ニ任ゼラル。ソノ學内經ヲ主トシ、傍ヲ和蘭ノ説ヲ採リ『孔穴ヲ以テ十二經ニ附スルガ如キハ兒戲ニ近シト雖モ、經絡ノ説ハ尙ホ講ゼザルベカラズ』ト言ヒテ、骨經・内景備覽ヲ著ハシ、人身解剖ヲ論ジ針灸説約・針灸知要等ノ書ヲ著ハシテ刺針方法ヲ説ク。ソノ説固トヨリ内經二本ヅキタレドモ、ソノ的確法トスベキモノヲ擇ミ、迂回無用ノモノヲ去リ、間々附スルニ獨得ノ見ヲ以テセリ。ソノ刺法ハ之ヲ五種ニ別チ、一ハ半刺ニシテ淺ク内レテ疾ク針ヲ抜キ以テ皮氣ヲ取ル、二ハ豹文刺ニシテ左右前後ニ之ヲ鍼シ、經絡ノ血ヲ取ル、三八關刺ニシテ左右ニ筋上ニ刺ス、筋痺ヲ取ル、四ハ合谷刺ニシテ、左右鷄足二分肉ノ間ニ針シ、肌痺ヲ取ル、五ハ輸刺ニシテ直チニ入レ直チニ出シ、深ク内レテ骨ニ至リ、骨痺ヲ取ルト言フ。ソノ説識見アリ、ソノ術的當ニシテ、鍼科ノ面目ハコノ人ニヨリテ一新セラレタリ。

次デ加賀ノ人坂井豊作、小森氏ニ傳フルトコロノ針術ヲ攻究シ、專ラ横刺ノ法ヲ施シ、鍼術秘要（元治元年）ヲ著ハシテソノ術ヲ唱道セリ、而カモノノ術ハ概シテ上章江戸時代・初世ノ醫學ノ條下ニ記述セシトコロニ異ナルモノアルヲ見ズ。

診科

診科ノコトニ就キテハ、上章既ニ之ヲ叙述セシガ、コノ期ニ至リテハ北尾春甫ノ察病精義論・篠山齡臺ノ醫療察病考（文化十一年）・平野重誠ノ病位辨義・撰者不詳ノ診法秉穗・細井順ノ四診備要・中島秉義ノ何筆談、等ノ專書モ出デテ、諸家ノ望・問・聞・切ノ四診及ビ各病ヲ診知スルノ法ニ就キテ、攻究スルコト益々精シキヲ致セシガ、

中ニ就キテ最モ重ンゼラレシハ舌診・腹診及ビ切診（脉學）ノ三法ニシテ、コレニ關スル著述ノコノ期ニ現ハレタルモノハ甚ダ尠カラズ。

舌診

傷寒ノ學盛ニ行ハレテ、診法ハ脈症ト腹候トヲ主トシ、諸家ノ研究ハ皆ナコノ範圍内ニアリシガ、寛政年間土田恕庵舌胎圖說ヲ著ハシ、次デ能條保庵出デテ腹舌圖解ヲ著ハシ、傷寒ノ候、舌胎ヲ以テ第一トナスコトヲ説キテヨリ、舌診ノ法モ備ハレリ。蓋シ張仲景ノ傷寒論中ニハ唯白胎舌ヲ言フノミニシテ他色ニ及バザリシガ、敖氏ノ金鏡錄ニハ舌候ヲ十又二トナシ、杜氏ハ之ヲ増シテ三十又六トナシ、張璐玉ノ傷寒舌鑑ニ至リテ遂ニ廣メテ一百三十又七トナシタリ。金鏡錄・傷寒舌鑑ノ二書ハ舌胎ヲ論ズルコト詳ナリト雖モ、ソノ色ヲ五藏ノ應ニ取リ、説ヲ陰陽五行ニ立テ、牽強附會ノ辯尠カラズ。土田恕庵ハコノ二書ニ基ヅキ攻究スルコト多年、遂ニ『陰陽表裏之別、虛實寒熱之徵、必現于舌』、非レ若_三脈法之難_三診察_二也』ト論ジ。舌胎ヲ別チテ白・黃・黑・紅ノ四種トナシ、更ニ之ヲ小別シテ三十五種トナス。白胎ハ邪氣ノ裏ニ傳ハルニヨリ、津液乾燥シテ舌ニ胎ヲ生ズルモノニシテ、ソノ胎ニ厚薄及ビ舌中・舌尖・舌根ノ異ナルハ邪ノ淺深輕重ノ分ニ由ル。黃胎ハ裏證ニシテ、胃中ノ火盛ナルニ由ル。黑胎ハ邪熱ノ裏ニ傳ハルニ由ルモノニシテ、邪毒胃ニ在リ、上ニ薰騰シテ黑胎ヲ生ズルナリ。紅胎ハ邪熱内ニ蓄フルノ候ナリト説キ、唯舌胎ノ色澤、厚薄及ビ部位ヲ觀察スルノミナラズ、舌ノ運動及ビソノ震戰ノ狀態ニ注意シ、コレニ依リテ病證ヲ診斷スルノ標準ヲ立テントシ、ソノ『有_二一種舌紅潤無_レ胎、唯舌頭如_レ點_三燕脂_一、此必陰證之候也』ト言フガ如キハ、實ニ古人ノ未ダ言ハザリシトコロナリ。

能條保庵ノ腹舌圖解ハ腹候ト舌胎トヲ相對照シ、以テ病ノ新舊體用ト、治ノ先後緩急トヲ知ルヲ趣旨トセシガ、ソノ舌胎ニ就キテ論ズルコロハ『黃胎黑胎ハ必ズ熱ニ屬シテ下スベキ症多シ、白胎モ熱ニ屬スルモノ多シ、淡薄ニシテ赤色薄キモノハ寒ニ屬スルモノ多シ、猥ニ下スベカラズ』ト言フニ在リテ、大都、舌胎圖說ノ所説ニ同ジトス。

痘科ノ書ニモ唇舌秘訣、等アリ、コレ亦舌及ビ唇ノ色澤ヲ觀察シテ、以テソノ病證ヲ診定スルノ法ヲ論ズルモノナリ。

切診（脉學）

寛政七年、多紀桂山、脈學輯要・脈學彙粹ヲ著ハシテ診脈法・各脉形象、及ビ婦人・小兒ノ脈・怪脈等ノ諸項ニ就キテ、記述シ、ソノ子元胤次デ脈法ヲ著ハシテ亦脈學ヲ論ゼリト雖モ、古今諸家ノ所論ヲ羅列セルマデニテ、別ニ發明ノ説ヲ加ヘタルニアラズ。平野重誠、診脈辨義（文化十二年）ヲ著ハシ、ソノ師桂山ノ説ヲ奉ジ、叔和以降支離散漫ニシテ殆ド統紀ナキ脈學ヲ整頓セントシ傷寒論中ニ脈ヲ言フモノヲ、前後相照準シテ終篇ヲ檢格シ、浮・沈・緩・緊・遲・數・洪・細・滑・瀦・虛・實ノ十二脈ニ過ギズト論ジ、次デ大西葆光アリ、桂山ノ脈學輯要ニ據リ傷寒・金匱ノ經文ニ考ヘ、仲景ノ脈法ヲ輯メ脈原、三卷（文久元年）ヲ著ハシタレドモ、ソノ説クトコロハ瀕湖脈學ノ二十七種脈ヲ擧ゲ、ソノ名義ヲ校訂シ、ソノ因ト證トヲ撰ミタルニ過ギズ。（第三八九頁參照）

中莖暘谷（名ハ鎌又脱齋ト號ス）ノ切脈一葦（天保二年）ニ至リテ、ソノ論的實ニシテ古來脈學ノ弊ヲ辯ズルコト甚ダ切ナリ、蓋シ切脈ノ法ハ既ニ古代素問・靈樞・傷寒論等ニ始マリ、後世王叔和ノ脈訣出デテ脈學始メテ備ハレリト雖モ、ソノ脈學ハ後世諸家ノ空論鑿說ノタメニ實ヲ離レ、ソノ極遂ニ人ヲシテ切脈ノ一診ヲ以テ病證ヲ占スルノ法ヲ唱フルニ至ラシメ、病證ヲ問ハズシテ唯脈狀ヲ以テ、病證ヲ占シ、之ヲ例セバ遲脈ハ嘔吐ナリ、微脈ハ淋瀝・白帶ナリトスルガ如ク、各個ノ病證ニ各個ノ脈狀ヲ配當シタリ、即チ脉狀ヲ以テ病毒ノ見證トスルモノニシテ、爲ニ脉ノ形狀ヲ多般ニ區別スルノ必要モアリシナラン、從テ『脈理精微、其體難_レ辨、弦緊浮芤、展轉相類、在_レ心易_レ了、指下難_レ明』ノ説出デテ、ソノ弊遂ニ脈狀ハ明メ難キ業ナリトナシ、後藤・吉益等ノ諸家ハソノ鑿說ヲ惡ミテ殆ド切脈ヲ度外視セントスルニ至レリ。固ヨリ後世諸家ノ説ノ如ク、脉狀ヲ以テ病毒ノ見證トナシ、切脈ニヨリ

テ病證ヲ診知スルコト能ハザルハ勿論ナレドモ、而カモ切脈ハ古人ノ説ノ如ク胃氣（元氣）ノ盛衰ヲ診スルノ法ナリトナシ、脈學ノ講ゼザルベカラザルコトヲ説クモノアリ。中莖暘谷ノ切脈一葦ハ則チコノ派ノ代表者トシテ見ルベキモノニシテ『脈ノ變態多シト雖モ、其狀十餘種ニ過ギズ、唯之ヲ形容スル所ノ文字多キノミ、王叔和ノ徒之ヲ辨ゼズ、形容スル所ノ文字ヲ以テ脈狀ノ名ト定メテ、一字一字ニ註解ヲ加ヘテ二三十ノ脈狀トナス、是レ脈學ノ塗炭ニ墜ル所以ナリ』ト喝破シ、ソノ脈狀ヲ論ズルヤ『脈狀ノ變化多シト雖モ、皆陰陽二脈ノ變態ナリ、大浮數動滑ノ類ハ、皆陽證ノ脈ニシテ沈瀋弱遲微ノ類ハ、皆陰證ノ脈ナリ、結促代及ビ七死ノ脈ノ如キハ、陰陽二脈ノ變態ニ非ルニ似タリト雖モ、病毒ニ痞塞セラレテ、此脈ヲ見ス者ハ陽脈ナリ、精氣虛脫シテ、此脈ヲ見ス者ハ、陰脈ナリ、然レバ則チ此脈モ亦陰陽二脈ノ變態ナリ』ト言ヒ、浮・滑・數・弦・實・沈・瀋・遲・微・細・虛・結・代・散ノ諸脈ヲ區分シテ足レリトシ、尙ホ之ヲ他ノ色・聲・形ノ三診ニ對照參校シテ以テ病證ヲ決斷スベシト説ク。殊ニ古來脈位ヲ論ジテ寸・關・尺ニ重キヲ置キタルヲ排斥シ、『脈ハ血氣ノ盛衰ヲ診スル所ニシテ病ノ所在ヲ診スル所ニアラズ、故ニ部位ヲ論ゼズ、動脈ノ見ル所ヲ以テ診脈ノ處トナスベシ』ト言フガ如キハ頗ブル識見アリト評スベシ。

本庄普一ノ脈論ハ天保十四年ノ著述ニ係リ、ソノ說蘭説ニ取ルトコロアリ、自辰表（時計）ヲ用ヒテ脈搏ノ數ヲ測リ、西洋内景ノ理義ニ參シ、三部九候ノ妄ヲ辨ジ、『察脈ノ大要ハ先ヅ元氣ノ虛實ヲ測ルニアリ』トナシ『脈ニ體ト用トノ別アルコト』ヲ知ルヲ要スト説キ。ソノ脈ノ統體トスルハ浮・沈・遲・數ノ四脈ニシテ、結・代・微・伏ハ體中ノ變目ニ屬シ、弦・緊・急・長・短・洪・散・大・小・滑・瀋ハ脈狀ヲ意解スルモノニシテ、體ニ參シテ以テ脈ノ用ヲナスベシト論ズ、大都、切脈一葦ノ所論ニ異ナラズ。

腹診

腹診ハ所謂古醫方ノ興レルニ際シテ、諸家ノ力ヲ用フルコト最モ多ク、遂ニ腹診ヲ以テ一家ヲ成スモノアルニ至リ、ソノ學ハ愈々整頓セリ。コノ期ノ初稻葉文禮、腹證奇覽ヲ著ハシテ腹診ノ法ヲ唱道シ、次デ濱松ノ人和久田叔虎、文禮ノ術ヲ傳ヘ腹證奇覽翼ヲ著ハシ、神戸子祥亦稻葉氏ニ學ビテ診腹圖説（寛政九年）ヲ著ハシタレドモ、共ニ瀨丘長珪ノ診極圖説ヲ祖述セシマデニテ、別ニ發明ノ說アルニアラズ。爾他諸家ノ著述尠カラズト雖モ（奥田鳳作ノ腹診考・津田玄仙ノ療治茶談中腹診篇ノ如キ、其選ナリ）多紀菫庭ノ診病奇核・診腹要訣二書ヲ著ハシ、我が邦先輩諸家（北山壽安・竹田陽山・森中虛・粟屋宗柳・堀井對時・香川修庵・烏巢道人・味岡三伯、久野玄悅・橘玄悅・白竹子・山脇東洋・萩原春庵・淺井南溟・高村良務・畑黃山・福井楓亭・和田東郭・萩野台洲・饗庭某・津田玄仙・太田隆元・原南陽・高階枳園・有持常安・和久田寅・和田春長・柘叔順・今泉玄祐等三十二家）ノ發明スルトコロノ粹ヲ擧ゲ、以テ腹診ノ一法ヲ叙説スルニ至リテ、腹診ノ一法ハ始メテ完全ノ成書ヲ得タリ。

藥物科

藥物學ハ前期ノ業緒ヲ承ケケ、所謂古方藥品ヲ研究スルヲ以テ主トナシ、コレニ關スル著述モ乏シカラザルガ、ソノ中ニテ特ニ擧ゲテ言フベキハ内藤蕉園ノ古方藥品考（天保十二年刊）ナリ。コノ書ハ傷寒論・金匱要略ニ出ヅルトコロノ藥品二百二十餘種ヲ取り、草・木・穀・漿・水・金・石・血・氣ノ類ニ從テ之ヲ次第シ、ソノ藥性ヲ辨ジ、功用ヲ明カニスルヲ主トシ、挿ムニ主要藥品ノ圖ヲ以テシ、記述稍々整頓セルヲ覺フ。

多紀桂山ノ藥性提要（文化四年刊）・山本高明ノ訂補藥性提要（天保七年刊）ハ單ニ主要藥品ノ性味ヲ擧ゲタルニ過ギズ。多紀柳汧ノ藥雅ニ至リテハ諸書ヲ折衷シテ、ソノ性味功用ヲ論ズルコト稍々詳ナリ、而カモ諸家ノ説ヲ考

證參校シテソノ論旨ヲ折衷シ、以テ藥物ノ作用及ビ應用ヲ精細ニ論述セルハ、多紀元堅ノ藥治通義（天保十年刊）ナリ。

藥治通義十二卷、ソノ前半ハ藥治（藥物の療法）ノ方法ヲ論ジ、之ヲ單純ノ藥物學ト見ルコト能ハズト雖モ、後半ハ諸劑概略・方劑藥性氣味・製藥・服藥法等ノ諸項ニ就キテ古今諸家ヲ折衷シ、固リ創見アルコトナシト雖モ、ソノ記述系統的ニシテ漢方ノ藥物學ハコノ書ニ至リテ始メテ大成セリト言フベシ。ソノ說ニ依レバ

藥劑ニハ内ヨリ外ニ達スルモノアリ、湯・醴・丸・散・丹ノ類是ナリ。外ヨリ内ニ通ズルモノアリ、膏・熨・蒸・浴・粉ノ類是ナリ。湯ハ煮テ精液ヲ取り、藥ノ性味、泥然融出シ、ソノ力最峻、表裏上下達セザルトコロナク、卒病痼疾適セザルトコロナシ、故ニ補瀉溫涼、皆ナ湯ヲ以テ便トナス。散ハ直チニ膈胃ニ至リ、猶ホ外達ノ勢アリ、故ニ藥ノ緊慢ヲ問ハズシテ壅閉ヲ疎セントスルニ宜シ、ソノ力湯ニ劣ルトコロアリト雖モ、丸ニ比スレバ捷タリ。丸ハ漸ヲ以テ鎔化シ、ソノ力最緩ナリ、故ニ大毒ニシテ湯散ニ入レ難キモノヲ丸トナシテ用フ。我が邦制劑ノママ湯泡ヲ用ヒテ煮煎ニ代ユルモノアリ、俗ニ振出藥ト呼ブ、又滋補ノ劑ハ多ク蜜膏ヲ用ヒテ蜜丸ニ代ユルモノアリ、俗ニ鍊藥ト呼ブ、コノ二法功效尠カラズ、而シテ支那ニアリテハ明以來諸家ノ之ヲ知ルモノナキナリ。湯液ハ邪氣ヲ蕩滌スルノ効アレドモソノ病既ニ久シキニ及ブモノハ醴醴（藥酒）ヲ用ヒテ閉滯ヲ宣通セザルベカラズ。病ノ既ニ定所アリテ皮膚筋肉ノ間ニ在ルモノニハ膏ヲ貼シテソノ氣ヲ閉塞シ、藥性ヲシテ毛空ヨリシテソノ腠理ニ入り、經絡ヲ通貫シテ、或ハ提ケテ之ヲ出シ、或ハ攻テ之ヲ散ズルナリ。熨トハ蒸藥ヲ以テ之ヲ熨スルノ法ニシテ灸ニ代エ用フベキモノナリ。薰蒸・漬浴ハ共ニ形表ヲ宣通シ、邪氣ヲ散發スルノ方ナリ。

七方十二劑ノ說ハ紙上迂拘ノ談ニシテ内經ノ意ニアラズ、引經報使ノ論ノ如キハ牽強附會ノ談ニシテ固ヨリ取ルニ足ラズ。

古人ノ藥ヲ論ズルヤ、特ニ氣味ヲ言フノミナリシガ、後世ニ至リテソノ形（金・木・水・火・土。眞假）・色（青・赤・黃・白・黑。深・淺）・性（寒・濕・溫・涼・平。急・緩）・味（辛・酸・鹹・苦・甘。厚・薄）・體（虛・實・輕・重・平。枯・澁）ヲ詮索シ、以テ生成本源ヲ論ズルニイタレリ、ソノ說ニ依レバ『凡藥之用、或取ニ其氣一、或取ニ其味一、或取ニ其色一、或取ニ其形一、或取ニ其質一、或取ニ其性情一、或取ニ其所生之時一、或取ニ其所成之地一、各以ニ其所ニ偏勝一、而即資レ之療レ疾、故能補レ偏救レ弊、調ニ和藏府一、深求ニ其理一、可ニ自得レ之、』ト言フナリ、之ヲ上章既ニ記述スルトコロニ參校スレバ、漢醫方ノ藥物學ノ梗槩ハ知ラルベシ。

本草科 45

江戸時代ノ初世ニ我が邦本草ノ學興リテヨリ、稻生若水・阿部友之進・松岡恕庵等ノ諸大家アリ、本草ヲ以テ一家ヲ成シ、草木蟲魚金石ヲ觀察シテソノ形質ヲ辨ジ、寒熱溫涼甘苦剛柔ノ氣性ヲ別チ、ソノ主治ヲ詳ニスルヲ以テ專務トナセリ。故ニ本草學ハ博物學ノ一種ニ屬シ、醫學ト大關係ナキモノ多キニ居レドモ、而カモ藥物ハ醫家ノ日常應用スルトコロニシテ、ソノ形質氣性ヲ識ラザル時ハ處療乖運ヲ免レザルガ故ニ、本草ノ一科ハ夫ノ醫經經方ト共ニ醫家ノ修メザルベカラザルモノトセラレ、幕府ノ醫學館ヲ創設スルヤ當時本草家ヲ以テ名アリシ田村藍水ヲ擧ゲテソノ教授ニ任ジタリ。

既ニ上章ニ於テ叙述セル如ク、我が邦本草ノ基ヲ開キシハ貝原益軒ナレドモ、稻生若水嗣デ出デテ斯科ヲ首唱シ、博學強記ニシテ鑑別ニ長ジ、古今ヲ總括シテ庶物類纂一千卷ヲ著ハスニ及ビテ、ソノ業漸ク緒ニ就キ、松岡恕庵ソ

ノ學ヲ受ケテ用藥須知・本草一家言等ヲ撰ビ、大ニ之ヲ闡發シタリ、次デコノ期ニ小野蘭山アリ松岡恕庵ノ門ヨリ出デ、心ヲ斯科ノ攻究ニ潛メ、群籍ニ參シ、親驗ニ徴シ、歷涉數十年ノ久シキニ及ビテ終ニ本草綱目啓蒙四十八卷ヲ著ハセリ、コノ書載スルトコロスベテ一千八百八十二種、凡ソ歷代諸書載スルトコロノ異名、我が邦呼ブトコロノ稱、諸州ノ方言、羽毛鱗介根莖花葉ノ形色、地産ノ異同ヨリ市肆ノ眞偽ニ至ルマデ盡ク之ヲ各葉ノ條下ニ臚列シ、疑ハシキハ之ヲ決シ、謬レルハ之ヲ匡シ、旁引曲暢、漏スコトナシ、我が邦本草ノ學、コノ書ニ至リテ始メテ大成シタリ。

小野蘭山、名ハ職博、字ハ以文、蘭山、又朽匏子ト號ス。俗稱喜内後子號ヲ以テ行ハレ、終ニ蘭山ヲ通稱トス。本ト佐伯氏ソノ系ハ中務卿有明親王ニ出ヅ。十八世ノ孫職茂從四位下ニ叙シ、主殿大允兼伊勢守ニ任ゼラル。伊藤氏ヲ娶テ二子ヲ産ム、長名ハ職秀、職ヲ襲グ、季ハ則チ蘭山ナリ。享保十四年八月廿一日京師・櫻樹坊ノ家ニ生マル。少ヨリ讀書ヲ好ミ記性人ニ過グ、延享元年、年十六本草ヲ松岡恕庵ニ受ク學ブコト未ダ二年ナラザルニ恕庵病デ歿ス。爾來獨學苦修業大ニ進ム。年二十五意ヲ仕途ニ絶チ居ヲ河原町・川ノ北ニトシ、惟ヲ下シ、業ヲ講シ、採藥ノ外足戸ヲ出デズ。戌ニシテ寢ネ、丑ニシテ起キ、隨讀隨抄、數十年猶ホ一日ノゴトシ、業既ニ成リ盛名四名ニ馳セ、本草ヲ治ムルモノ遠近靡至、爭テ業ヲ門下ニ受ク。寛政十一年幕府ノ辟ニ應ジテ江戸ニ來ル。是ヨリ先キ上命アリ、蘭山ヲ徵ス。京都奉行之ヲ蘭山ニ傳フ。期ニ及ビテ蘭山之ヲ忘レ門生トトモニ遠ク出デテ藥ヲ採ル。奉行ソノ不敬ヲ怒テ徵命ヲ寢ム。一年バカリニシテ更ニ命アリ、遂ニ江戸ニ來リ命ヲ奉ジテ本草ヲ醫學館ニ講ジ、醫官ノ子弟ヲ教授ス、月俸三十口、歲銀二十枚ヲ賜ヒ、尋テ醫官ニ列セラル。又命ヲ奉ジテ屢々藥ヲ諸國ニ採ル。庚申（寛政十二年）ノ春ヨリ丙寅（文化三年）ノ夏ニ至ルマデ山東八國及ビ甲・駿・濃・信・勢・紀等ノ諸國ヲ跋涉シ率ネ五旬、或ハ十旬ニシテ歸ル。歸レバ即チソノ採ルトコロノ品目ヲ疏シテ編シテ一書ヲ成シテ上進ス。蘭山ノ初メ閩巷ニ寄隱スルヤ訪搜ノ及ブトコロ未ダ廣カラズ。是ニ至テ意ヲ縱ニシテ究搜スルコトヲ得、年既ニ老ヒタリト雖モ猶ホ巖岫ノ間ヲ徒步シ、欣然勞ヲ忘ル。ソノ苦思力學壯時ニ異ナラズ、時ノ人稱シテ地仙トナスト言フ。本草綱目啓蒙四十八卷ハ蘭山ノ孫職孝、門人岡村春益ト蘭山ヨリ聞クトコロヲ筆記シ、ソノ手訂ヲ經タルモノニシテ、蘭山平生ノ心力全ク斯書ニ存スト言フ。多紀桂山大ニ之ヲ稱シテ曰ク『我が邦本草ノ學、コノ書ニ至リテ大成セリト謂ハンカ洵ニ醫家必用ノ偉寶ナリ、則チ老師國手必ズ檢査ヲコノ書ニ籍ラザル得ズ、何ゾ啓蒙ト言ハンヤ、格物多識ハ夫子嘗テ之ヲ稱ス、先賢曰ク一物知ラズ君子之ヲ耻ヅト、則チ學士大夫必ズコノ書ヲ架藏セザルヲ得ズ、何ゾ本草ト言ハンヤ』ト。百年後ノ今日ニ方リテモ、本草ヲ論ズルモノ必ズ徵ヲコノ書ニ取ル。コノ書ノ價值言ハズシテ可ナリ。

文化七年正月二十三日醫學館新年初度ノ講筵ヲ開ク。コノ日寒劇シク蘭山感冒ス、同二十五日自宅ノ新年初會ニ甘草ノ條ヲ講ズ。翌日病勢劇甚二十七日朝瀆焉トシテ逝ク、年八十二、淺草・誓願寺迎接院ニ葬ル。釋氏諡シテ救法院殿玄道意居士ト曰フ。蘭山終身娶ラズ、十八歳ノ時婢一男子ヲ生ム。ソノ子出デテ安部氏ニ養ハレ、ソノ家ヲ嗣グ。各ハ有義、民部ト稱シ、後子越後掾ニ任ズ。有義ノ子職孝、字ハ士德、薰畝ト號ス。蘭山移テ江戸ニ居ルニ及ビテ來テ侍養シ、遂ニ原姓ニ復シテ家學ヲ承ク。

蘭山著ストコロノ書本草綱目啓蒙ノ外ニ、飲膳摘要・十品考・藥各考・毫筵小牘・廣參說・本草藥說・本草會識・本草紀聞・本草綱目辨誤・格物徵・松軒愚筆・衆芳軒雜錄等アリ。多クハ皆ナ門人ノ筆述ニ係ル。（墓誌・蘭山小傳・墓表・柳汧文集）

養生科

養生ノ一科ハ中古ヨリ之アリ。ソノ趣旨トスルトコロハ『飲食ヨリ起居ニ至ルマデ、且タ誠心ニシテ以テ慎マズ

ンバアルベカラズ』ト言フ。曰ク、四時ノ調攝ニ注意シ、行立（久行傷レ筋、勞ニ於肝^一、久立傷レ骨、捐ニ於腎^二）坐臥（久坐傷レ内、久臥傷レ氣）、起居、飲食、衣服、視聽、談笑ヲ慎ミ、氣ヲ治メ、心ヲ養フヲ主要トシ、沐浴・櫛髮及ビ二便ノ排泄ヲ猥ニセズ、修養ノ法トシテハ按摩（按摩者、開レ關利レ氣之道、自レ外而達レ内者也、故醫家、行レ之、以佐^三宣通^一、而攝生者、貴レ之以洩^三壅滯^二）、導引、調息等ヲ施スベシト説ク。諸家ノ之ニ關スル著述尠カラズ、貝原益軒ノ養生訓・願生輯要、竹中通庵ノ古今養生錄等ヲ以テ、ソノ最モ備ハレルモノトナスモ、大抵内經・千金方以下ノ諸家ヲ折衷セルノミニシテ、ソノ説、身神修養ノ範圍ヲ出ヅルコトナシ。

唯ココニ擧ゲテ言フベキハ、居所ノ衛生ニシテ、家屋ヲ造リ墻壁ヲ築クニ方位ヲ撰ミ、土地ノ卑濕・住室ノ明暗等ヲ檢スベキコトヲ説キ、之ヲ家相ト唱へ、別ニ一科ヲ成シテ、盛ニコレヲ研究スルモノモアリキ。

今日ノ所謂公衆衛生ニ就キテハ、立論施設共ニ之ヲ缺ギタレドモ、疫病ヲ豫防スルニ讀經・祈禱等ヲ以テシ、疫ニ神アリトシテ之ヲ攘フコトヲナセシハ、古代ヨリコノ期ニ至ルマデ、常ニソノ轍ヲ同フシタリ。疫病ノ一二ノモノニアリテハ、ソノ傳染スベキコトヲ知りテ隔離ヲ施シ（癩病・痘瘡）タレドモ、消毒ノ法ハ未ダ備ハラズ。天保年間平野重誠ガ玉ノ卯槌ヲ著ハシテ、個人ノ身體ヲ強壯ニシテ以テ傳染病ノ侵入ヲ防グベキコトヲ唱へ、又凶年後ノ養生ヲ説キタルハ識見アリト言フベシ。

易醫論

コノ期ノ醫學ハ漢方ト蘭方トノ二大派ニ別ツベキコト、上章論述スルトコロニ依リテ明カナルガ、コノ二大流派ノ間ニ介立シテ漢・蘭折衷派アリ、又別ニ和方家ト稱スルモノアリテ一派ヲナセシガ、江戸時代ノ初世ノ頃ニ興リタル易醫論ガ猶ホ、コノ期ニモソノ命脈ヲ保チシハ、寧ロ奇異ノ顯象トセザルヲ得ズ。

コノ期易醫論ノ代表者トシテ先ヅ擧グベキハ金古景山ノ病根精義辯ナリ。コノ書ノ説クトコロニ依レバ『易ト傷寒論トハ一理ニシテ兩立スルモノニシテ、聖人河洛ニ則トリ、一陰一陽ノ道ヲ以テ萬病ヲ治スルノ教ヲ立ツモノハ傷寒論ナリ』ト言ヒ、『人身亦一箇ノ小天地ナリ、水・火・木・土ノ四象アリ、三才ノ六位備ハル、故ニ彼ヲ以テ是ヲ曉シ、是ヲ以テ彼ヲ曉スベク、先ヅ河圖ノ數ニ則トリ、五臟ノ位スル所、其働キヲナスコトヲ知り、洛書ニ效テ其變化且ツ五臟ノ卦象ヲ詳ニシ、而シテ後、六十四變ノ變易ヲ以テ病因ヲ曉トリ、三百八十四爻交易ノ爻辭ヲ以テ其證ヲ知ルベキナリ』ト論ズ。ソノ趣旨トスルトコロハ既ニ上章江戸時代・初世ノ醫學ヲ論ズルノ條下ニ記述セル易醫論ト毫モ異ナルコトナク、而カモ牽強傳會ハ之ニ過ギタリ。

ソノ他新井白峨ノ傳ナリト稱スル古易察病傳ヲ始トシ、易占家ノ著述ニ係レルモノモ亦尠カラズ（平澤隨貞ノ醫道便易・源君龍ノ神方占等）。ソノ學術上ノ價值ハ事新シク論ズルマデモナキコトナリ。

和方家（古醫道） 46

前期ニ起リタル和方家ハ、國學ノ勃興ニ伴ナヒテ益々ソノ勢力ヲ加へ、コノ期ニハ太田見龍・松川鶴磨・森川宗圓・武藤直記・佐藤方定・花野井有年・權田直助等ノ諸家アリテ、我が邦固有ノ醫方ヲ唱道シ、自カラ之ヲ古醫道ト名ヅケタリ。

太田見龍、名ハ長丸、武州・樋貴川ノ人、幼ニシテ敦厚、至性アリ。初メ沙門義周二從テ學ビ、後チ江戸ニ出デテ益田大記ニ從テ悉クソノ精要ヲ究メテ郷ニ歸リ、聲名籍々治ヲ乞フモノ相踵グ。見龍以爲ラク、吾ガ邦上古神醫湯藥ノ方悉ク備ハリシニ漢土ノ術、我ニ流傳シテヨリ斯學殆ト絶ツ。我レ將ニ墮緒ヲ千載ニ尋ネントスト、是ニ於テ古醫方ヲ藏スルモノアルコトヲ聞カバ、輒チ千里ヲ遠シトセズシテ蒐索數年、會々上毛・石倉氏藏スルトコロ錄事法眼ノ秘方ヲ得、之ニ依リテ治則ヲ立ツ。後チ江戸ニ移リ、和方ヲ以テソノ術大ニ行ハル。文化四年、年八十三ニシテ神道奇靈傳三卷ヲ著ハシ、之ヲ世ニ公ニス。次テ病家全要・治方要集等ヲ著ハシ、大ニ皇國醫方ヲ唱道ス、文化九年二月年八十八ニシテ歿ス。(墓碑銘)

森川宗圓、名ハ士義、字ハ環、賤窟ト號ス。本姓ハ島本氏、古河候ノ醫官ナリ、故ヲ以テ仕ヲ致シテ江戸ニ來タリ、本材木町ニ僑居シテ和方家ヲ以テ家ヲ成ス。著ハストコロ醫言靈・少彦名命三十六法和藥傳秘書アリ、年四十二ニシテ歿ス。ソノ子脇田厚齋(名ハ信親)備中・松山ノ侍醫トナリ、亦和方家ヲ以テ著ハル。(醫言靈序文)

松川鶴鷹、理三ト號ス、仙臺ノ人、世醫ヲ業トス、京都ニ出デテ寓ス。和歌ヲ善クシ、國典ニ通ズ。大同類聚方ニ據リテ、神遺ノ方ヲ探リ日本古代醫方二卷ヲ著ハス、天保二年五月、年四十一ニシテ歿ス。(墓誌)

武藤直記、名ハ吉得、字ハ純甫、豐洲ト號ス。年二十二ニシテ吉益氏ノ書ヲ讀ミ、古醫道ニ志シ、村井椿壽ニ從テ學ビ、ソノ教ヲ東都ニ講ズルコト年アリ。既ニシテ我ガ邦古醫道ノ講セザルベカラザルコトヲ唱へ、家ニ藏スルトコロノ白杵ノ神社ニ傳ヘシ大同類聚方ヲ校訂シ、之ヲ梓行ス。ソノ他方義解・藥品解・病名解等ノ著述アリ。(大同類聚方序文)

佐藤方定、鶴城ト號シ、又大烏舎ト言フ、後チ名ヲ祠符滿ト改ム。奥州・信夫郡ノ人、江戸ニ出デテ醫ヲ業トシ、和方家ヲ以テ聞エ、水戸侯ニ仕フ。著ストコロ奇魂・八藥新論・幸魂・術魂・神方經驗・神傳脈論・產靈草・醫語拾遺・神傳脈論・神傳腹證論等アリ。(古醫道沿革考・日本醫譜)

花野井有年、駿府ノ人、江戸ニ出デテ漢醫方ヲ小篠某ニ學ビ、次テ大阪ニ赴ムキテ蘭學ヲ橋本宗吉ニ學ビ、郷ニ歸リテ醫ヲ業トス。既ニシテ漢・蘭ノ醫方ヲ捨テ、一意皇國醫方ヲ講ジ、醫方正傳・經驗大同類聚方等ヲ著ハシ、和方家ヲ以テソノ名ヲ著ハス、慶應元年十一月歿ス。年六十七。(花野井有年傳・醫方正傳)

權田直助、名越舎ト號ス、心ヲ和家ノ攻究ニ用フルコト深ク、古醫道治則・古醫道沿革考・古醫方藥能略・古醫道或問・醫一言・古醫道脈傳・古醫道治則略註・神遺方經驗鈔・古醫方經驗略等ノ諸書ヲ著ハシ、ソノ所謂古醫道ヲ大成セントセリ。ソノ門下ノ著書ニ醫則・醫療八衢・古醫方藥品考・神教血縛秘傳鈔・上代藥方類書・大同神遺藥名錄、等アリ。(古醫道沿革考)以上諸家ノ他、尙ホ和方家ヲ以テ名ヲ成セルモノ尠カラズ。中島廣足(疫瘡新論・藥品解・病名解ヲ著ハス)・衣川長秋・岩田廣彦(神方經驗・醫則・校正大同類聚方等ヲ著ハス)・關政方(神遺方傍註・神遺方註解ヲ著ハス)等、ソノ選ナリ。

所謂古醫道トハ、皇國ノ醫道ヲ古ニ復スルノ義ニシテ、前期三宅意安ガ藥ト灸トノ古方ヲ撰テ書ヲ著シ、村井琴山ガ和方一萬方ヲ著セシ頃ハ、ソノ説ハ固ヨリソノ方ニモ漢方交ハリタレドモ、コノ期ニ至リテハ專ラ和方ヲ以テ家ヲ成スモノアリ、殊ニ太田長丸ハ雜病ノ治ニ精シキヲ以テ聞エ、森川宗圓ハ疫病ヲ治スルニ妙ヲ得タリト稱セラレタリ。蓋シ和方ト稱スル一派ハソノ趣旨モト古方・後世・蘭方ヲ除キ、專ラ皇國ノ方ニ依リテ、治則ヲ立テントスルニアレドモ、而カモソノ根據トスルトコロハ大同類聚方ニアラザレバ、則チ神遺方ニ外ナラズ。故ニコレ等ノ僞書ニ依リテ説ヲ立テタル和方ノ價值ハ固ヨリ論ズルニ及バズ。佐藤方定ノ奇魂(一名、尙古醫典)ニ至リテハ、コレ等和家人ノ説クトコロニ異ナリ大同類聚方・金蘭方・神遺方等ノ諸書ハ僞書トシテコレヲ排斥シ、專ラコレヲ國史、ソノ他ノ古文書ニ徵シ、我ガ邦古來醫風ノ變化・醫藥ノ名義・醫道濫觴・氣候・病源・養生・診候ヲ論ジテコレヲ支那及ビ西洋ノ所説ニ比較シ、又藥方・禁厭・刺法・灸・灌水法・浴溫泉法・按摩術・開胎術等スベテ上古ヨリ今ニ傳ハレル治方ヲ列擧シテ、以テ我ガ邦神代ヨリ固有ノ醫道ノ存セルコトヲ歴史的二證明セリ。花野井有年ノ醫方正傳モ所説大都奇魂ニ於ケルニ異ナラズ、コレヲ要スルニ『禽獸すら、其病を除き、其災を防ぐ術は、辨へ

たるに、人として、己が患をえ去らず、醫として戎薬ならでは、病をえ断えざるは、禽獸にも劣れりとや云はむ、總て草木の萌枯、人畜の生死も、同じく産靈の幸に因て、其國其人を生ず、徳あれば其病を治る物なき事やある』ト言ヒテ『皇國ノ人ハ皇國ノ法ゾ適セル』ト言フマデニテ、ソノ病理ヲ論ジ、治方ヲ説クニ新機軸ヲ出セシニハアラズ。故ニ所謂古醫道ノ論説ハ洵ニ平凡ノモノニシテ、而カモソノ術ノ尙ホ一部分ニ行ハレタルハ、當時政治社會ノ流潮ニ伴ナヒテ、所謂攘夷思想ノ醫學ニマデ及ボセル結果トシテ見ルベキノミ。

西洋醫學ノ發達

西洋醫方ハ室町幕府ノ後期ニ方リ始メテ我が邦ニ輸入セラレタリト雖モ、我が邦ノ醫家ガ直接ニ彼邦ノ書ヲ讀ミテソノ學術ヲ攻究スルコトヲ得タルハ、前期ニ前野・杉田・桂川ノ諸家ガ蘭學創始ノ偉業ヲ成セシ以來ナリ。當時和蘭トノ交通ハ漸ク親密ヲ加へ、彼ノ邦ノ製作ニナレル器械ニ自鳴鐘、顯微鏡・千里鏡・ウエルガラス（天氣驗器）・テルモメートル（寒暖驗器）・ドンドルガラス（震雷驗器）・ホクトメートル（水液輕重清濁驗器）・エレキテル（雷機）等、精巧人日ヲ奪フモノアリシガ、ソノ奇巧ヲ慕ヒ、ソノ製作ニ倣ヒテ擬製セルモノ尠カラズ、名ヲ釣リリヲ貪ボルノ徒、ソノ機ニ乗ジ、奇品奇藥、瑣細ノ品ニ至ルマデ人ノ見ルコト稀ナルモノハ、皆ナ阿蘭ノ名ヲ冠ラシメザルハナク、或ハ世ニヲランダズキト稱スル人アリテ舶載畫圖ヲソノ文房ニ并列シテ徒ニ美觀ニ供シタリ。コノ如キ時代ノ風潮ニ際シ、前野・杉田ノ諸家ガ起テ蘭學ヲ興シ、蘭語ヲ解スルノ學ヲ唱道セシハ、早天ニ沛然タル雨ヲ得タル趣アリ、識見アルノ士ハ爭フテソノ門ニ從遊シ、讀書譯文ノ法ヲ習ヒ、以テ先哲草創ノ業ヲ播揚セシカバ、所謂蘭學ハ解體新書刊行後未ダ十年ナラズシテ既ニソノ緒ニ就キタリ。而シテソノ後繼者トシテ第一ニ擧グベキハ宇田川槐園・大槻磐水ノ諸家ナリ。殊ニ大槻磐水ハソノ師前野・杉田兩子ノ緒ヲ紹グヲ以テ畢生ノ業トシ、蘭學階梯（天明八年）ヲ著ハシテ蘭語ヲ修ムルノ法ヲ説キ、世人ニ示スニ斯學ノ方針ヲ以テセリ。是ニ於テ蘭學始メテ成書アリ。コノ頃舶載ノ書ニヨンストンス禽獸蟲魚譜、バルヘキン・ヘイステルノ外科書、ドドネウスノ本草書、「フルートコンスト」（産科書）、コウペル・キュルムス・ブランカールツ等ノ解剖書、「レメレキ・ドログレキ」（諸藥物ノ主治功能ヲ集メタル書）、「アポテーキ」（藥局方法、修製及ビ主治ヲ集メタル書）、ボイス・ブカン・ヘーステル・ゴルテルノ内療書等數十部アリ、諸家爭フテ翻譯ノ業ヲ起シ、月ヲ累ネ、年ヲ積ミ、ソノ稿ヲ脱スルモノ甚ダ多ク、蘭學ハ之ニ依リテソノ緒ニ就キ、西洋醫學ハ之ニヨリテ益々發達シタリ。

宇田川玄隨、名ハ晋、字ハ明卿、津山侯ノ侍醫ナリ。父名ハ蛟、字ハ子潜、祖名ハ道紀、字ハ彦倫、曾祖玄僊、高祖玄中、世世醫ヲ業トシテ武州・淵江ニアリ、寶曆間彦倫起テ津山侯ニ仕フ、一男アリ則チ玄隨ナリ。尙幼ナルガ故ニ弟子潜ヲ以テ嗣子トナス。子潜又玄隨ヲ以テ嗣トナス。彦倫、子潜皆ナ東都ノ官邸ニ居ル。玄隨ハ實ニ東都ノ人タリ。齡十三未ダ書ヲ讀マズ、母氏ソノ時ニ及バザランコトヲ恐ル。子潜曰ク、男子書ヲ讀マバ自ラ奮興スベシ、強ユルニ啣唔ヲ以テスルハ乃翁ノ心ニアラズ、ト。幾クモナクシテ玄隨講テ孝經ノ句讀ヲ受ケ、精思日進十五既ニ詩文ヲ以テ穎ヲ社友ノ間ニ露ハス。二十五甫メテ和蘭ノ學ニ從フ。玄隨家三世儒醫ヲ以テ君ニ仕フ。既ニ儒學醫方ニ精シク、又和蘭ノ學ニ精シ、業ヲ務ムルコト益々篤ク書ヲ著スコト益々多シ、名聲益々起リ、爵祿漸ク加ハル。晚年茅場町ニ僦居ス。宅中槐樹アリテ蔭ヲ成ス、故ニ門人相稱スルニ槐園先生ヲ以テセリト言フ。桂川甫周、玄隨ノ才ヲ愛シ嗟歎シテ曰ク、遠西ノ學今ニシテ傳フルニ足ルト。又蘭人某所撰ノ内科書ヲ取テ之ヲ玄隨ニ授ケテ曰ク、之ヲ譯シテ公行セバ則チ東方未會有ノ業ナリト。玄隨コノ言ヲ聽テ大ニ然リトナシ、鑽研習讀殆ド十年ヲ經テ遂ニ西説内科選要ヲ成ス、是レヲ和蘭内科書ノ嚆矢トス。蓋シ當時我が邦ニ於テ和蘭ノ醫

術ヲ唱ヘシモノハ大率外科者流ニ過ギズ。玄隨、内科選要ヲ著シテ、コレヲ首唱スルニ至リテ、世人始メテ和蘭内科ノ術アルコトヲ知レリ。爾後四方俊秀ノ士、ソノ緒ヲ嗣テ之ヲ講明シ遂ニ海内ヲ風靡スルニ及ブ、ソノ功績磨滅スベカラザルナリ。初メ内科選要ノ成ルヤ大槻玄澤之ヲ見テ曰ク、西洋ノ内科ヲ以テ諸ヲ天下ニ公ニスルコトハ、實ニ古今未ダ聞カザルトコロナリ、故ニ明詳精覈以テ人望ニ副フニアラザレバ不可ナリ。今コノ書ヲ見ルニ殊ニ要略タリ、乃チ見ルトコロハ聞クトコロニ稱ハズトテ世人慨シテソノ他ヲ棄ルノ憂ナキコトヲ得ンヤト。然レドモ玄隨ハ曰ク、余ガコノ書ヲ譯行スルノ意ハ一ニ内醫者流ノタメニ業ヲ創メ後人ヲ啓迪セントスルニアリ、是ヲ以テ特ニ草萊ヲ闢クノミ、爰ゾソノ砥平ヲ圖ル暇ニアランヤト、玄隨晩年ニ至リテコノ書ニ重訂ヲ加ヘ平直ヲ旨トシテ務メテ治療ノ準則ヲ揭示セントシ、既ニ稿ヲ起セシモノ書全ク稿ヲ脱セズシテ嗑焉トシテ篋ヲ易フ。ソノ嗣子玄眞遺緒ヲ嗣ギ校訂補註ヲ加ヘテ、増補重訂内科選要ヲ世ニ公ニセリ。之ニ因リテ玄隨ノ遺旨世ニ明カニシテ、流芳餘香永ク不朽ニ傳ハルコトヲ得タリ。寛政九年十二月十八日病歿、享年四十三。配松本氏二男ヲ生ム、皆ナク。既ニ没スルノ後門人故舊相謀テ安岡氏ノ子女眞ヲ以テ後トナス。淺草・誓願寺先塋ノ側ニ葬ル。玄隨著ストコロ内科選要ノ外、遠西名物考・東西病考・遠西草木略・西洋醫言・蘭畝俶載・蘭譯辨髦・西文矩・槐塹文府・槐園文集等アリ。(墓誌・蘭學事始)

大槻玄澤、名ハ茂質、字ハ子煥、菅テ磐井川上ニ家セシガ故ニ磐水ヲ以テ號トナス。ソノ先ハ高望王ニ出ヅ。子孫世々下總國ニ居ル。葛西三郎名ハ清重ト言フモノニ至リテ陸奥國ニ徙リ、支裔泰常、磐井郡ニ住ス。是ヲ大槻氏ノ祖トナス。七世ノ孫茂畜、玄梁ト稱シ、醫ヲ業トシテ一關侯ニ仕フ、玄澤ハソノ子ナリ。幼ニシテ異稟アリ。年甫メテ十三、藩醫建部清菴ニ師事シテ醫方ヲ攻ム、時ニ杉田鶴齋、和蘭ノ醫書ヲ翻譯スルノ業ヲ江戸ニ唱フルヲ聞キ、清菴自ラ笈ヲ負テ杉田ノ門ニ入ラントス。而シテ軀體老羸、山川跋涉ノ艱ニ堪ズ。子亮策及ビ玄澤ヲシテ江戸ニ出デ、鶴齋ニ學バシム。鶴齋深ク玄澤ノ人トナリヲ愛シ、優遇甚ダイタル、且ツ鶴齋醫治ニ專ニシテ善誘ノ方ヲ盡スニ違アラザルガ故ニ前野蘭化ニ就テ教ヲ受ケシム。蘭化ソノ篤志ニ感ジソノ奧妙ヲ開示ス。後子崎陽ニ遊ビ譯司本木某ノ家ニ寄宿シテ益益蘭學ヲ究ム。學成リテ江戸ニ歸ルニ及ビテ、菅テ編セシトコロノ蘭學階梯二卷ヲ上梓ス。蓋シ蘭學興リテヨリ未ダ二十年ナラズ、未ダ成書ノ世ニ流傳スルモノアラズ、玄澤ノ蘭學階梯出デテヨリ蟹行ノ文駄舌ノ言、學者稍々誦シテ之ヲ解スルコトヲ得、志アルモノ靡然トシ起レリ。天明六年、宗國仙臺侯擢デテ侍醫トナス。文化八年幕府命ジテ蘭書ニ翻譯セシム、尋テ朝請ヲ奉ジテ銀二十錠ヲ賜フ。嗣後歲毎ニ以テ常トナス。仙臺候命ジテ班ヲ番頭ノ次席ニ進メ、官祿ヲ増メ三百石トナス。文政五年幕府玄澤ノ蘭書ヲ譯スルノ勞ヲ獎シテ月俸五口ヲ賜フ、文政十年春初宿疾寒疝大ニ動キ又傷食ヲ加フ、遂ニ三月晦日ヲ以テソノ家ニ歿ス、享年七十一。城南東禪寺ニ葬ムル。長男茂楨ソノ業ヲ嗣グ、次子清崇、字ハ士廣、磐溪ト號ス、儒ヲ以テ別ニ家ヲ成ス。

玄澤素トソノ師ノ業緒ヲ紹グヲ以テ終身ノ志トナス。故ニ解體新書ヲ重訂シ、瘍醫新書ヲ續譯ス。ソノ編極メテ博クソノ旨極メテ密ナリ。蓋シ鶴齋ノ解體新書ヲ譯スルヤ、世人ヲシテ、醫道ノ眞面目ヲ知ラシメントスルニ急ニシテ遽カニ割削ニ附セシナリ。故ニ鶴齋モ爾後校修ヲ加ヘテ改刻セントノ念アリ、奈何セン老衰日ニ迫リテ遂ニソノ志ヲ果サズ。乃チ玄澤ニ命ジテ代テ校訂ノ任ニ當ラシム。玄澤是ニ於テカ更ニ原書ヲ取り、反復翫味審ニ正文ヲ稽ヘ、細ニ註證ヲ搜リ、且ツ群書ヲ考索シ、又屢々解剖シテコレヲ實景ニ徴シ、歲十稔ヲ經、稿ヲ易ルコト三たびニシテ遂ニ重訂解體新書十四卷ヲ大成セリ。玄澤ノ心力尤モ斯一書ニ盡クト言フ。

玄澤著書富贍、等身不啻、ソノ書目ヲ擧グレバ蘭學階梯、二卷・重訂解體新書、十四卷・瘍醫新書、三十卷・官能眞言、一卷・蘭畹摘芳、四十卷・六物新志、三卷・薦錄、三卷・蘭學佩觿、一卷・蘭說辨惑、二卷・磐水遺稿、一卷・環海異聞、十五卷・北邊探事、五卷・婆心秘稿、三卷・金城秘鑑、二卷・蘭說辨正、一卷・麻疹啓迪、四卷・痘麻病因集說、一卷・磐水漫草、二卷・夢遊金華山記、二卷・芝蘭堂雜抄、五卷・解悶雜記、一卷ソノ他若干部アリ。(墓誌・追遠會誌・蘭學階梯・蘭學事始)

大槻玄澤既ニ蘭學階梯・重訂解體新書等ノ書ヲ著ハシテ、前野・杉田諸家が創始セル蘭學ヲ恢弘シ、ソノ學術俱

ニ大ニ行ハレ、門下出藍ノ才アルモノ尠カラズ。宇田川榛齋・山村昌永・海上隨鷗（稻村三伯）・橋本宗吉・小石元俊・佐々木仲澤ノ如キハソノ選ニシテ、コレ等諸家ノ盡力ニ依リテ、蘭學ハコノ期ニ於テ大ニ發達シタリ。

大槻玄幹、名ハ茂楨、字ハ子節、磐里ト號ス。玄澤ノ長子ナリ。年十八ニシテ長崎ニ遊ビ中野柳圃ニ從ヒテ和蘭ノ語格句法ヲ受ケ、世始メテ和蘭ノ文法ヲ説クコトヲ得タリ。文化三年蕃書和解ノ命ヲ蒙ムリテ父子共ニ天文臺ニ奉仕セリ。文化十三年多年攻究ノ力ヲ以テ蘭學凡ヲ著ハシ、和蘭ノ詞品語法ヲ説キテ蘭學楷悌ノ缺陷ヲ補フ、コレヲ和蘭文法書ノ始トス。玄幹著ハストコロ、文法書ノ外ニ要術知新・外科收功・僂僕新編、等アリ。天保八年、五十三歳ニシテ歿ス。（追遠會誌）

宇田川玄眞、名ハ璘、字ハ玄眞、榛齋ト號ス。伊勢ノ人、本姓安岡氏、父ハ四郎衛門、母ハ杉井氏、明和六年十二月生ル、幼ニシテ穎悟夙ニ濟世ニ志アリ。長ズルニ及ビテ江戸ニ遊ビ、津山藩醫宇田川玄隨ノ門ニ入り、専ラ漢籍ヲ講ズ。後チ大槻玄澤ニ就テ蘭書ヲ學ブ。又管テ嶺春泰ノ家ニ寓シ、次デ桂川甫周ノ家ニ移リ諸家ニ就テ蘭書ヲ講ズルコト數年、ソノ蘊奧ヲ窮メ最モ翻譯ニ長ゼリ。杉田玄白、玄眞ヲ養フテ子トナシ、女ヲ以テ配ス。後チ故アリテ去ラル、コレヨリ困阨太甚シ。玄白ノ子伯元及ビ稻村三伯等憐ミテ之ヲ庇護シ、傭テ蘭書ヲ譯セシム。寛政九年宇田川玄隨歿シテ嗣ナシ、親故集リ議シテ玄眞ヲシテソノ後ヲ承ケシム、因テ宇田川氏ヲ冒ス。

玄眞常ニ門生ニ語テ曰ク、疾病ハ變ナリ無病ハ常ナリ、泰西ノ醫ハ先ヅ内景ヲ明ラメ形器官能ノ常ヲ知り、コレヨリ推シテソノ變ヲ窮ム、故ニ常ニ本ニツキ變ヲ察シテ百病ノ原因ヲ知り、病原明カニシテ治法コレヨリ出ヅ。然レバ内景ハ療術ノ規矩方藥ノ準繩ニシテ法ヲ建ルモ論ヲ設ルモ、コレヨリ起ラズト言フコトナシト。乃チ泰西名醫著ストコロノ人身内景ノ書數部ヲ譯定シ、集成シテ全部三十卷トシ遠西醫範ト名ヅク。ソノ中ヨリ全身諸器ノ名及ビ官能ノ綱領ヲ述ベテ、別ニ卷ヲナシテ醫範提綱ト名ヅケ、銅鐫ノ内景圖ヲ附シテ之ヲ梓行ス。世奉ジテ醫海ノ津筏トナシ、爭フテ之ヲ購讀シ、因リテ後人ヲ開導シタルノ効少カラズ。ソノ圖譜ノ如キハ實ニ本邦内景銅版圖ノ嚆矢ナリト言フ。

玄眞、又心ヲ藥物ノ學ニ潜メ和蘭藥鏡ノ著アリ。次テ遠西醫方名物考四十五卷ノ撰アリ。泰西藥品方劑製煉諸術ノ名物始メテ詳明トナリ、臨床施治ノ際便誦ヲ得ルコト甚ダ多ク、一篇出ル毎ニ海内爭ヒ購フテ傳誦セリト言フ。

文化十年幕府命ジテ洋書ヲ司天臺ニ翻譯セシム。次デ朝請ヲ奉ジテ銀二十錠ヲ賜フ。歳ゴトニ以テ例トナス。文政五年又俸米五口ヲ賜フ。津山侯亦爵ヲ進メテ之ヲ優待ス。天保三年仕ヲ致シテ老ヲ深川ニ養フ、配林氏子ナシ。大垣藩醫員江澤養樹ノ男榕菴ヲ養テ嗣トナス、榕菴篤學能クソノ職ヲ襲グ。天保五年甲午十二月四日玄眞病テ家ニ歿ス。享年六十六、浮屠追號シテ弘道院普濟潤生ト曰フ。之ヲ淺草・誓願寺先塋ノ次ニ葬ル。（墓誌・蘭學事始）

山村才助、名ハ昌永、字ハ子明、土浦藩士ナリ。新井白石ノ采覽異言ヲ視テ海外四大洲アルヲ知り、尙ソノ詳ナルコトヲ探ラント欲シ、寛政ノ初大槻玄澤ノ門ニ來リ、講習ノ次遂ニ彼地理書數種ヲ譯述シテ增譯采覽異言十三卷ヲ編シ、文化元年ソノ書ヲ幕府ニ進覽ス。是時魯西亞國使來リテ通信ヲ乞フ。故ニ國家大ニ外憂ノ慮アリ、特ニ内命ヲ下シテ彼國誌ヲ翻譯セシム、ソノ業半途ニシテ病歿ス。（追遠會誌）

稻村三伯（傳ハ後ニ出ヅ）
小石元俊（傳ハ後ニ出ヅ）

橋本宗吉、名ハ鄭、字ハ伯敏、伯軒ト號ス。大阪ノ人、大槻磬水ニ就テ蘭學ヲ修メ、大阪ニ歸リテ醫ヲ業トシ、又蘭學ヲ教授ス。天保七年歿ス、年七十四、宗吉譯述スルトコロ、内外三法方典・西洋醫事集成實函・解剖書等アリ。（橋本宗吉傳）

佐々木仲澤、名ハ知芳、字ハ仲蘭、仙臺ノ人、文化ノ末江戸ニ出デテ大槻磬水ノ門ニ入り、講習數年學術大ニ進ム。後チ一關侯ノ醫員トナル。桂川甫賢ソノ篤志ニ感ジテ、ソノ所藏セル和蘭外科奮ヲ與フ。蓋シ宇田川玄隨ノ譯述セル内科撰要ノ副本ナリ。仲澤即翻譯ノ業ヲ起シ、又刺絡術ノ治療ニ要ナルヲ以テ瘍醫新書中ノ刺絡篇ヲ增譯訂正シテ、文政五年八刺精要ト題シテ刊行ス。是歲仙臺宗藩大ニ醫學ヲ起シ、和蘭醫術ノソノ人ナキヲ以テ、桂川甫賢ニ謀ル。甫賢、仲澤ヲ薦ム、遂ニ仙臺ニ歸リテ醫學教諭トナル、コレ同藩蘭醫術ヲ授スルノ始ナリ。天保中歿ス。（追遠會誌）

蘭學興リテヨリ十年、ソノ學ハ江戸諸家ノ唱道スルノミニ止マリ、未ダ廣ク四方ニ傳播セザリシガ、天明ノ末ニ小石元俊アリ解體新書ヲ見テ、ソノ著實ナルニ感ジ、江戸ニ來タリテ大槻玄澤ノ門ニ入り、傍ラ前野・杉田ノ諸家ニ隨ヒテ、益々ソノ學ノ蘊奧ヲ究メ京師ニ歸リテ盛ニ和蘭解剖ノ學ヲ唱フルニ及ビテ京・攝ノ間ニ始メテ蘭醫方アリ。次テ京師ニ海上隨鷗アリ、大阪ニ橋本宗吉アリ、二人共ニ大槻玄澤ノ門ヨリ出デテ大ニ蘭學ヲ唱道セシガ、隨鷗ノ門ニ小森桃塙・藤林普山ノ兩氏アリ。蘭學ハコレニ依リテ始メテ京・攝ノ間ニ盛ニ行ハレタリ。

小石元俊、名ハ道、宇ハ有素、大愚又碧霞ト號ス。元竣ハソノ通稱ナリ。本姓ハ林野氏、曾祖總右衛門、祖作兵衛并ニ小濱侯(若狹)ニ事ヘテ國老タリ、三千石ヲ食ム、父市之進ニ至リ城代タリ散官ニ居ヲ屑トセズ、之ヲ去テ他方ニ赴キ、姓名ヲ小石李伯ト變ジ、最後大阪ニ居リ、茶香和歌連歌ヲ以テ生ヲ營ミ傍ラ醫術ヲナス。母柴原氏、名ハ佐與、元俊寛保三年九月十六日ヲ以テ山城ノ桂村ニ生レ、幼名ヲ右吉ト言フ。年八歳父ニ從ヒ大阪ニ遷リ、千秋橋傍ニ居ル。初メ淡輪元潜ヲ師トシ、ソノ愛重屬望スルトコロタリ。名ヲ元俊ト改メシモソノ撰ビタルトコロナリト言フ。會々永富獨嘯庵ノ大阪ニ來テ門戸ヲ張ルアリ。元潜ノ勸ニ依リテ之ニ親炙スルトヲ得テ藝術益々進ミ、小田享叔・龜井道戴ト名ヲ齊クシ、師弟四人權然相待テ討論虛日ナカリシト言フ。年二十一、元俊父ヲ失ヒ、哀毀禮ニ過ギ、孝名四方ニ播ク、既ニシテ賢母ノ稱贊ニヨリテ多年懷抱セシ四方ノ志ヲ果スノ機會ヲ得、遂ニ先ヅ西方ヨリ始メ周防・長門・筑前・肥前等ニ遊ビ、兵法醫術ヲ講論セリ。後チ六年ニシテ攝ニ歸リ、河内ノ高僧慈雲律師ニ從ヒテ禪ヲ習ヒ、又皆川淇園ヲ師トシ、經術文章ヲ學ブ。而シテ醫術ノ徒弟從遊スルモノ頗ル多ク、聲名太揚ル。年四十一、西洞院ニ移リ、越二年、江戸ニ遊ビ踰年ニシテ西歸シ、尋テ大阪ニ移リ、又京師ニ復リ京・攝ノ間ニヨリ始メテ蘭醫說アリ。コノ時ニ當リ元俊ノ名四方ニ喧シ。能登・肥前等ヨリ招請治ヲ求ムルアリ、或ハ祿ヲ以テ之ヲ召スアリ。年五十二病アリテ、但馬・城崎ノ溫泉ニ浴ス、後二年病客ヲ門人某ニ委ネ退テ勘解由小路ニ居リ、又二年油小路・二條北ニソノ翌年、釜坐・夷川北ニ移ル。ソノ年十一月病アリ、右身不遂症ヲ發シ、又城崎ニ浴シ、症爲ニ愈フ。年六十六、文化五年四月前症又起リ、ソノ年十二月二十五日ヲ以テ歿ス。(行狀・墓誌)

小石元瑞、名ハ龍、號ハ櫻園、元竣ノ子ナリ。幼ニシテ父ニ隨テ大阪ニ寓シ、九歳篠崎三島ニ就テ儒籍ヲ修メ、好學ノ譽アリ、十六歳父元俊某侯ノ聘ニ應ジテ江戸ニ赴クニ當リ隨行シ、杉田・宇田川・大槻等ノ諸家ニ就テ、和蘭醫方ヲ講習ス。諸家ソノ父ノ故ヲ以テ優遇甚ダイタレリ。蓋シテ盡シテ講授ス。元瑞亦孜孜怠ラズ、未ダ期年ナラズシテ業既ニ成ル、乃チ西歸シテ箕裘ノ業ヲ嗣ギ、名望頗ル高ク術業大ニ行ハル。然レドモ元瑞之ヲ以テ足レリトセズ、居常諸家ト尺牘往來疑義ヲ質スコト率ネ虚月ナシ、是ヲ以テソノ學益々發明スルトコロ多ク、從テソノ業日ニ大ニ行ハル。年五十家事ヲ兒、紹ニ付シ、別ニ家ヲ構ヘテ著書自ラ娛ム。ソノ居ニ題シテ「用拙居」ト言ヒ自ラ拙翁ト號ス。年六十四ノ冬中風ニ罹リ荏苒治セズ。ソノ翌嘉永乙酉二月十日ヲ以テ歿ス、享年六十又六。洛北・紫野大德寺中、狐蓬菴先塋ノ側ニ葬ル、ソノ子紹、中藏、遺業ヲ嗣ギテ家聲ヲ墜サズ。

元瑞ノ醫學ハ之ヲ江戸ナル杉田・宇田川・大槻ノ諸家ヨリ得タルナリ。而レドモソノ父元俊ノ薰陶モ亦恐ラクハ鮮少ナラザレバ、ソノ醫說蘭方ヲ主トスト雖モ、旁ラ素・難以下漢方ノ群籍ニ及ビ、ソノ治方彼是ヲ折衷シテ敢テ一方ニ偏スルトコロナカリキ。ソノ著書ニハ窮理堂方符・窮理堂講義・博采錄・藥性摘要・蘭藥分量考・東西醫說折義・梅毒秘說・櫻園隨筆及ビ詩文集等アリ。(小石家系譜)

海上隨鷗、各ハ箭、三伯ト稱ス。本姓ヲ稻村ト言ヒ因州侯ノ醫員ナリ。蘭學階梯ヲ見テ、感奮志ヲ立テ、江戸來リテ大槻磐水ノ門ニ入り、四方俊秀ノ士ト研鑽怠ラズ、能ク蘭學ノ蘊奧ヲ窮ム。蘭學辭書ノ依ルベキナクソノ辭ノ明カナラザルモノ多キヲ憾トシ、和蘭人ハルマノ辭書ヲ譯解セントシ、當時同學ノ諸家ニ就キテソノ業ヲ起シ、漸ク遂ニ一部八萬餘辭ヲ完翻シ、寛政八年始メテ活版トナシ、三十餘部ヲ社友ニ配與ス。世呼ビテ「江戸ハルマ」ト言フ。蓋シ蘭人ドーフ長崎ニ在リテ諸譯官ト官命ヲ奉ジテ同辭書ノ對譯アリシヲ以テコノ稱アリ。然レドモドーフ・ハルマハ官府ノ秘書タルヲ以テ隨鷗ノコノ

書實ニ彼我對譯辭書ノ始メニシテ世ノ蘭學ニ志シテソノ意ヲ果サザルモノ皆ナコノ書ニ因リテ始メテソノ業ヲ成就スルコトヲ得タリト言フ。既ニシテ隨鷗故アリテ仕ヲ致シ（或ハ言フ、隨鷗ノ兄某藩ノ勘定方ニシテ贖札發行ノ事ニ干與ス。隨鷗ソノ罪ニ連坐セルナリト、姑ラク記シテ後考ヲ待ツ）總州・海上郡ニ浪遊シ、名ヲ海上隨鷗ト更メ、後チ京師ニ來リテ大ニ蘭學ヲ唱道シ、ソノ名一時ニ振ヒ、從遊スルモノ數百人、小森桃塢・藤林普山等ノ諸名士皆ナソノ門ヨリ出ヅ。京・畿ノ間ニ蘭學ノ盛ニ行ハルルニ至リシハ實ニ隨鷗ヨリ始マル。初メ宇田川榛齋ノ年猶壯ナルヤ、放蕩不羈ニシテ素行修ラズ、既ニシテ窮困自活スルコト能ハズ。隨鷗之ヲ憐ミ、杉田伯元ト謀リ、蘭書ヲ備譯シ以テ口ヲ糊セシム。隨鷗ノ「ハルマ和解」ノ著ハ榛齋ノ功多キニ依ル。榛齋コレヨリ悔悟行ヲ改メ、後チ隨鷗ノ斡旋ニ因リ槐園ノ嗣ヲ承ケテ遂ニ名醫トナル。世皆ナ隨鷗ノ人ヲ識リ材ヲナスヲ稱スト言フ、文化八年正月十六日病デ歿ス。（追遠會誌・小傳）

小森桃塢、名ハ義啓、字ハ玄良、桃塢ハソノ號ナリ。本ト大橋氏、父名ハ正成、通稱、政右衛門、美濃ノ外淵ノ人ナリ。美濃ニ良醫アリ、小森義晴ト曰フ。和氣氏、ソノ系ハ清麻呂ニ出ヅ。清麻呂八世ノ孫時雨、醫博士典藥頭タリ、ソノ九世ノ孫義陰、小森右京ト稱シ近江ニ住シテ醫ヲ業トス。後チ吉綱ノ時ニ至リテ家ヲ美濃ニ徙シ、義晴ニイタルマデ數世、醫ヲ以テ名アリ。義晴安永ノ始メ居ヲ山城・伏見ニ移ス。曾テ桃塢ヲ目シテ神童トナシ、請フテ子トナシ、後配スルニ己ノ女ヲ以テス。桃塢幼ヨリ西洋ノ醫學ニ志シ、十四歳ノ冬、鄉國ニ還リテ大垣ノ江馬春齡ニ從學シ、益々西洋醫學ノ精緻ト和漢醫方ノ蕪雜ナルト曰フ同フシテ語ル可カラザルヲ悟リ、憤悱ソノ業ヲ修ム。十八歳京師ニ出デテ海上隨鷗ノ門ニ入り、志ヲ勵シ、精ヲ致シ遂ニソノ奧秘ヲ窮ム。文化十一年三月居ヲ京師ニトシ、聲價日ニ昇リ、生徒雲ノゴトク集マル。治ヲ乞フモノ常ニ門ニ填ツ。桃塢術内外ヲ究メ、診治精微稱シテ當時ノ名醫トス。

文政庚辰ノ年、桃塢從六位下ニ叙シ肥後介ニ任ゼラル。尋テ縫殿大允ニ任ゼラル、年ヲ經テ正六位下繼殿助ニ進ム。ソノ名益揚ガリ、ソノ業愈盛ナリ。屢皇族及ビ公槐ノ疾ヲ治シテ効アリ、或人御醫ニ薦メントス。天保壬寅ノ春、皇女欽宮違和、桃塢ヲ召シテ診セシム。ソノ御醫ニアラズシテ召サレテ宮中ニ入ルコト、蓋シ特典ナリト言フ。癸卯ノ年從五位下ニ叙シ、信濃守ヲ兼ス。コノ年夏五月十三日病デ卒ス。ソノ生天明二年ヲ距ル、享年六十又二、禪林寺ニ葬ムル。配小森氏一男ヲ生ミ、先ヅ歿ス。繼配葭島氏子ナシ。男名ハ義眞出羽介ニ任ゼラル、先ヅ歿ス。勢人津守義實ヲ養フテ嗣トナシ、音博士岩垣某ノ女ヲ養フテ之ニ配ス。一男三女ヲ生ム、亦先ヅ歿ス。由テ孫義比ヲ以テ嗣トナス、義比後伊勢介ニ任ゼラル。桃塢人トナリ溫恭寡慾物ニ接スル寛和、喜デ人ヲ調恤ス。生平心治術ニ顯ニシ矻々怠ラズ、凡ソ一歳中ソノ業ヲ休ムハ唯元旦、生辰及ビ土神祭日ノ三次ノミ。

桃塢管テブカンノ著ヲ譯シテ蘭方樞機五卷ヲ成シ、以テ治療ノ樞機トナシ、門弟子ニ授ク。ソノ他著ストコロノ書、病因精義・泰西方鑑・病診要訣・神遺方等アリ。（墓誌・大森家系譜）

藤林泰助、名ハ元紀、字ハ君諧、又淳道ト稱ス。山城ノ普賢寺ノ人、由テ普出ト號ス。寛政八年、京都ニ出デテ醫術ヲ學ブ。時ニ海上隨鷗著ストコロノ「江戸ハルマ」始メテ出ヅ。泰助之ヲ購フテ郷ニ歸リ、熟讀玩味、得ルトコロアリ、專ラ翻譯ヲ勉ム。文化六年業ヲ京師ニ開キ、教ヲ隨鷗ニ受ケ、請フテ所著ノ譯鍵ヲ訂正シ、之ヲ活版ニ附シ世ニ行フ。別ニ和蘭語法解三卷ヲ著ハス、蘭書ヲ讀ムモノ以テ標準トナス。文政五年醫官錦小路修理大夫ノ門ニ入り、後チ有栖川宮近習ニ擢デラル、天保七年正月、年五十六ニシテ歿ス。（墓誌）

文化・文政ノ頃ニ及ビテハ江戸ニハ杉田玄白ノ嗣ニ杉田立卿アリ眼科新書ヲ著ハシテ始メテ西洋眼科ヲ説キ、桂川甫周ノ門ニ吉田長淑アリ、始メテ和蘭内科ヲ以テ家ヲ成シ、青地林宗アリ氣海觀瀾ヲ著ハシテ物理解學ヲ説キ、蘭醫方ハ蘭學ト共ニ益々備ハリシガ、文政六年獨逸人シーボルト、和蘭醫官トナリテ長崎ニ來タルニ遇ヒ、高良齋・土生玄碩・戸塚靜海・伊東玄朴・高野長英・小關三英・竹内玄同・伊藤圭介・青木周弼等諸家コレニ親炙シ、親シク西洋ノ治術ヲ學習スルニ及ビ、從來書籍ノ上ニノミ見テ、未ダ施スコトヲ知ラザリシトコロノ外科・眼科、及ビ産科等ノ手術多クハ皆ナ實施セラルルニ至リ、蘭學創始以來、コノ時ニ至ルマデ徒ラニ文籍上ノ研究ニ過ギザリシ

トコロノ西洋醫學ハ一轉シテ心期手應ノ活物トナルニイタレリ。

シーボルト、名ハフイリツプ・フランツ、獨逸國ウユルツブルグノ人、一千八百二十年（文政三年）ウユルツブルグ大學ノ業ヲ卒ヘド、クトルノ學位ヲ受ケシガ、ソノ志ストコロ萬有學ニ在リシヲ以テ、一千八百二十二年（文政五年）職ヲ和蘭東印度會社ニ奉ジ、ソノ年ノ九月和蘭ヲ發シテバタヴィアニ向ヒ、一千八百二十六年ストウルトル總督ニ從ヒテ我が邦ニ來タリ、出島醫官トシテ、前任者ノ業ヲ受ケ、醫術ヲ以テ人ニ施シ、殊ニ外科・眼科ニ精シト稱ス。然シテ當時ノ制、蘭館ニ邦人ヲ延クコトヲ得ザルヲ以テ、シーボルトハ常ニ譯司檜林ノ家ニ於テ講筵ヲ開キ、後又校舎ヲ鳴瀧ニ設ケ、醫學及ビ植物學ヲ講ズ。ソノ名益々都鄙ニ噪シク、從遊ノ士甚ダ多シ。シーボルト醫術ヲ以テ人ニ施シ、又ソノ學ヲ我が醫家ニ傳フルノ間ニ我が邦ノ動物・植物及ビ人種學上ノ研究ニ心ヲ潛メ、大ニ得ルトコロアリ。國ニ歸リテ日本ノ動物・日本花卉・日本・日本圖書録等ノ諸書ヲ著ハシ、日本研究家トシテソノ名歐洲ニ嘖々タリシガ、一千八百六十六年（慶應二年）病デミンヘン府ニ歿ス、年七十。（シーボルト傳・傳記字典・シーボルト）

シーボルトノ來朝ニ依リテ我が邦始メテ西洋ノ臨床實驗アリ、ソノ門人高良齋ハ大阪ニアリ、土生玄碩ハ江戸ニアリテ共ニ西洋眼科ヲ以テ一家ヲ成シ、戸塚靜海ハ江戸ニアリテ外科ヲ以テ一家ヲ成シ、伊東玄朴・竹内玄同ハ内科ヲ以テソノ業ヲ江戸ニ開キ、共ニ大ニ行ハレテ、西洋醫學ハ漸ク實際ニ用ヒラルニイタリタリ。

同時江戸ニ坪井信道アリ、宇田川榛齋ノ門ヨリ出デ、蘭學ヲ以テソノ名一世ニ高ク、門下ニ箕作阮甫・杉田成卿・緒方洪庵・青木周弼・黒川良庵・廣瀨元恭等ノ諸家アリ、共ニ力ヲ醫治及ビ著述ニ致シ、蘭學ハ、コレ等諸家ノ力ニ賴テ益々恢弘セラレタリ。

坪井誠軒、名ハ道、字ハ信道、誠軒ト號ス、美濃・池田ノ人。父ヲ信之ト曰フ。四子アリ、誠軒ハ季子ナリ。幼ニシテ孤伯兄コレニ舉ヲ勸ム。初メ尾張、秦滄浪ニ就キ、又江戸、倉成龍渚ニ就テ學ブ。後チ又江戸ニ來タリ、導引ヲ以テ口ヲ糊シ、宇田川榛齋ノ一門ニ入り、西洋醫方ヲ受ク、榛齋ソノ篤學ヲ賞シ、之ヲ塾中ニ置キ、資スルニ衣食ヲ以テス。是ニ於テ力ヲ學業ニ專ニスルコトヲ得、幾モナクシテ儕輩ヲ凌駕スルニ至ル。乃チ業ヲ深川ニ開キ、業ヲ受ケ、治ヲ乞フモノ群集ス。萩侯ソノ名ヲ聞キ、聘シテ侍醫トナシ、累ニ俸ヲ加ヘテ三百石ニ至ル、業ヲ受クルモノ前後數百人、同時江戸ニ伊東玄朴・戸塚靜海アリ、誠軒ヲ併セテ三大蘭方家ノ稱アリ、嘉永元年十一月歿ス、年五十四、淺草誓願寺ニ葬ムル。配青地氏、三男三女ヲ生ム。長信友嗣グ、醫ヲ緒方洪庵ニ學ビ、萩藩外班醫員ニ列ス、慶應三年、肺病ニ罹リテ山口ニ歿ス、年僅ニ三十六、次鼈也天、次信敬、谷氏ヲ胃ス。越中ノ人佐藤良益ヲ養フテ二女ニ配ス、忠益後ニ爲春ト稱シ、鹿兒島醫員トナル。誠軒著ハストコロ精練發蒙、二卷・醫則、若干卷・診候大概、一卷・遠西二十四方・歇氏神經熱論、各若干卷・萬病治準、三十卷等アリ。（墓誌）

箕作阮甫、名ハ虔儒、字ハ庠西、紫川又逢谷ト號ス。ソノ先ハ近江・佐々木氏ニ出ヅ。遠祖某湖東箕作邑ニ居ル、因テ氏トス。後チ移リテ美作ニ居リ。父文庵ニ至リテ始メテ醫ヲ以テ津山候ニ仕フ。阮甫性穎敏日ニ讀書ヲ務ム、長ズルニ及ビテ京師ニ遊ビ、醫書ヲ研究シ、文政壬午擢デラレテ侍醫トナル。後チ藩公ニ從ヒ江戸ニ祇役ス。コノ時ニ當テ宇田川榛齋盛ニ西洋醫學ヲ講ズ。阮甫往テソノ說ヲ聽キ大ニ之ヲ奇トシ、幡然轍ヲ改メ、專ラ洋學ヲ攻ム。數年ナラズシテ業大ニ進ム。天保己亥幕府命ジテ天臺譯員ニ補シ、銀十錠ヲ賜フ。後チ俸五口ヲ加賜ス。安政乙卯、徳川溫恭院召シテ調ヲ賜フ、世之ヲ榮トス。ソノ明年洋書調所教授職ニ舉ゲラレ、俸三十口金二十兩ヲ給セラル、文久壬戌擢デテ幕籍ニ列セラル、班儒者ノ次ニアリ。西洋學者ノ士籍ニ列スルモノ是ヲ嚆矢トナス。是ヨリ先キ阮甫嗣ナシ、門人佐々木省吾ヲ養テ子トナス、早く歿ス。

菊池氏ノ子秋坪ヲ以テ之ニ繼グ、阮甫幕籍ニ入ルニ及ビテ省吾ノ遺孤貞一郎嫡孫ヲ以テソノ後ヲ承クト言フ。癸亥六月十七日病血テ湯島ノ宅ニ終ル。ソノ生寬政己未九月六日ヲ距ル得年六十五、白山淨土寺ニ葬ル。大村氏ヲ娶リ三女ヲ生ム。長ハ安藝ノ吳黃石ニ適キ、次ハ秋坪ニ配シ、季ハ省吾ニ配ス。(墓誌・近世偉人傳)

杉田成卿、名ハ信、梅里ト號ス。立卿ノ子、幼ニシテ警敏學ヲ好ミ、儒學ヲ萩原綠野ニ受ケ、蘭書ヲ名倉・三次堀等ノ諸氏ニ學ブ。二十歳ノ時坪井信道ノ門ニ入りテ醫學ヲ修ム。コノ際和蘭ノ文典始メテ來リ同學ノ師友皆ナソノ文法ヲ講ズルヲ以テ務トナス。成卿深ク之ヲ窮メ、夙ニ篤學秀才ノ聞エアリシト言フ。天保十一年天文臺ノ譯員ニ補セラル。弘化元年和蘭國王特ニ使ヲ遣ハシテ國書ヲ幕府ニ呈シテ、歐洲各邦ノ大ニ東洋ニ志アルコトヲ告グ。成卿命ヲ奉ジテ宇田川榕庵・品川梅次郎等ト共ニ之ヲ翻譯ス。翌二年十一月父立卿歿ス。成卿ソノ祿ヲ襲ギテ藩侯ノ侍醫ニ任ゼラル。安政元年五月譯員ノ職ヲ辭シ、別業ヲ鐵砲州ニ置キ自ラ風葉散人ト號シ、專ラ砲術書ノ譯述ニ從事ス。同二年江戸大震、家屋書器悉ク烏有二歸ス。因リテ門人木村軍太郎ノ羽澤村ノ宅ニ寓シ、次テ居ヲソノ地ニトシ、因テ別號ヲ翎澤迂叟ト稱ス。安政三年二月幕府蕃書調所ヲ建ツ。成卿、箕作阮甫ト共ニ學ゲラレテ教授職トナリ俸二十口金二十兩ヲ給セラル。二月十九日遂ニ羽澤ノ家ニ歿ス、享年僅ニ四十四又三。(梅里遺稿・梅里餘稿)

黒川良安、名ハ弼、靜淵ト號ス。文政十一年、年甫メテ十三、父ニ隨ヒ長崎ニ赴キ、譯官吉雄權之助ニ就テ蘭語ヲ修メ、又蘭館醫員シーボルトニ親炙シテ醫術ヲ學ブ。高島秋帆等ト莫逆ノ友タリ。業成ルノ後チ諸國ヲ周遊シテ江戸ニ來リ、坪井信道ノ塾ニ入ル。既ニシテ去リテ松代藩士佐久間象山ノ家ニ寓シ、象山ニ授ルニ蘭書ヲ以テシ、又漢學ヲ象山ニ受ク、天保十一年加州藩ニ仕フ。弘化三年七月侍醫ニ擢デラレ、次テ壯猶館創立ノ學アリ。藩士ニ蘭學及ビ洋式兵法ヲ援ルノ所タリ。良安與リテカヲ盡シ既ニシテ成立ス。安政元年學ラレテ壯猶館翻譯方兼務トナル。四年中納言ニ扈從シテ江戸藩邸ニ在勤ス。會々蕃書調所教授手傳ノ命ヲ拜シ、杉田成卿・箕作阮甫・川本幸民等ト同僚タリ。幾モナクシテソノ職ヲ辭ス。明治三年藩ノ醫學館ヲ創設スルニ方リテ計畫主任ヲ命ゼラレ、且ツソノ教授ニ學ラル。廢藩置縣ノ際(庚午十一月)文學教授ノ命ヲ拜シ、職俸五十石ヲ受ク、翌辛未八月願ニ依リテ辭職ス。爾來世塵ヲ絶チ、風月ヲ友トセルコト約二十年、明治二十三年九月中風ヲ病ミテ歿ス、ソノ生文化十四年二月ヲ距ル、享年七十又四。(黒川良安傳)

緒方洪庵(傳ハ別ニ出ツ)

青木周弼 名ハ邦彦、月橋ト號ス。周防ノ人、察病龜鑑ヲ譯述セリ、萬延元年歿ス。(小傳)

廣瀨元恭(傳ハ別ニ出ツ)

徳川幕府モ亦時勢ニ迫ラレテ、文化八年翻譯局ヲ天文臺中ニ置キ、大槻玄澤ヲ舉ゲテ蘭書ノ翻譯ニ從事セシメ、安政三年ニ至リ、翻譯局ヲ蕃書調所ト改稱シ、翻譯ノ外蘭書ヲ教授スル所トシ、杉田成卿・箕作阮甫・川本幸民等ヲ舉ゲテ教授職トナシ、大ニ西洋學ノ發達ニ盡力シタリ。

蘭醫方ハ、コノ如ク蘭學ノ進歩セルニ伴ナヒ、著甚ノ發達ヲ致シ弘化・嘉永ノ頃ニ及ビテハ、理學・化學・植物學・解剖學・生理學・病理學等ノ基礎學科ヨリ、内科・外科・眼科・産科・小兒科等ノ臨床學科ニ至ルマデ、一トシテ備ハラザルモノナキニ至リ、蘭醫方ヲ以テ一家ヲ成セルモノモ甚ダ多く、ソノ學ト術ト共ニ益々隆盛ヲ窮メシカバ漢醫方ヲ修ムルノ徒之ヲ嫉ミ、夷狄ノ道ナリトシテ之ヲ詬罵シ、カヲ窮メテ之ヲ排斥シ、嘉永二年遂ニ幕府ハ醫官ニ令シテ和蘭醫術ヲ修ムルヲ禁ジ、又醫書ノ出版ハ皆ナ醫學館ノ許可ヲ得セシムルコトトナシ、以テ蘭醫ヲ壓迫セントシタリ。而カモ特ニ外科ニ限リテハ和蘭ノ醫方ヲ修ムルコトヲ許シタレバ、醫官ノ内ニモ蘭醫方ヲ修ムルモノハ猶ホ絶ヘズ、民間ニアリテハ固ヨリ識見アルモノノコノ學ヲ攻究スルモノ日ニ多キヲ加ヘ、安政四年ニハ伊東玄朴・竹内玄同・戸塚靜海等蘭醫方ヲ以テ門戸ヲ江戸市内ニ張ルモノ八十餘名ノ多キニ及ビ、コレ等ノ諸家相謀リテ一社ヲ結び、種痘術ヲ施スヲ名トシテ、同業相會シ、學術ヲ講習スルノ所トナシタリ。

當時醫學館ニハ多紀菫庭(樂眞院)督事ヲ以テ頗ブル勢威アリ、蘭醫方ノ日ニ月ニ隆盛ナルヲ嫉ミ、醫書刊行ヲ

許可スルノ權ヲ得タルヲ機トシ、コレヲ濫用シテ蘭醫方ヲ排斥セントシ、林洞海ガ窠篤兒ノ藥性論ヲ翻譯シテ、允可ヲ醫學館ニ乞フモ詮議二年ノ久キヲ經テ遂ニ刊行スルコトヲ許サズ。嘉永六年米國使節彼理、浦賀ニ來タリテ交通ヲ求ムルニ及ビテ、外事起リ、陸戰海防ノ事ヲ説クモノ多ク、大槻俊齋ココニ見ルトコロアリテ銃創治療ノ要項ヲ翻譯セシニ、江川英龍之ヲ見テ目下ノ急務ナルヲ稱シ、爲ニ若年寄遠藤但馬守ニ説キ、醫學館ノ手ヲ經ズシテ、上木セシム、時ニ安政元年ナリ。是ニ於テ醫學館モ漸ク蘭醫方ヲ抑壓スルノ力ヲ失ヒ、幾モナク窠篤兒藥性論モ刊行セラルルニ至リ、幕府遂ニ嘉永二年ノ禁令ヲ解キ、醫官ニ令シテ和蘭醫方ヲ講習セシメタリ。同五年、將軍徳川家齊ノ病篤キニ際シテ、俄カニ伊東玄朴・戸塚靜海ヲ擢デテ醫トナシ、次デ竹内玄同・伊東貫齋・坪井信良・林洞海等ヲ擧ゲテ侍醫ニ任ジ、以テ公ニ和蘭醫方ヲ採用スルニ至リ、次デ又醫官松本良順ニ命ジテ長崎ニ赴ムキ、蘭醫ポムベ (Pompe van Meerdervoort) ニ就キテ、西洋ノ醫學ヲ講習セシムルニ至リテ、西洋醫方ハ遂ニ漢醫方ヲ壓倒スルコトヲ得タリ。

以下、項ヲ分チ、各個ノ學科ニ就テ、ソノ發展ノ狀況ヲ略述セントス。

物理學

我が邦ニ物理ノ學アルハ青地林宗ノ氣海觀瀾ヲ以テ嚆矢トナス。林宗ハ江戸ノ人、蘭學ヲ馬場佐十郎ニ學ビ、最モ心ヲ究理ノ學ニ用ヒ格物綜凡ヲ著ハシ、次デソノ要ヲ擇採シテ氣海觀瀾ヲ公ニス、時ニ文政十年ナリ、而カモノ書ハ僅カニ理學ノ一端ヲ開キタルニ止マリ、且ツソノ語ノ耳目ニ新ニシテ當時學者、ソノ意義ノ通ジ難キニ苦ムコト鮮ナカラズ。川本幸民出デテ氣海觀瀾廣義ヲ著ハシ、以テ氣海觀瀾ノ餘義ヲ擴メ、且ツソノ遺ヲ補フニイタリテ理科ノ書始メテ備ハレリ。

青地林宗、名ハ盈、字ハ子遠、芳潛ト號ス。江戸ノ人、父快庵、松山候ノ侍醫タリ。林宗少ニシテ家學ヲ受ケ、漢醫方ヲ修メ京・阪ニ遊學ス。文化ノ初、江戸ニ歸リ、譯官馬場佐十郎ニ就テ蘭書ヲ學ビ、宇田川榛齋・杉田立卿ト友トシ善シ、遂ニ蘭方ヲ以テ一家ヲ成ス。最モ力ヲ究理ニ用ヒ、格物綜凡ヲ著ハシ、後チソノ要ヲ擇採シテ氣海觀瀾ヲ著ハス、コレヲ我が邦理學ヲ説クノ始トナス。文政五年命ヲ奉ジテ杉田立卿ト共ニ天文臺ニアリテ蘭書ヲ譯シ、天保三年水戸侯ノ聘ニ應ジテソノ醫員トナリ、蘭學都講ヲ兼ヌ。四年二月疾ヲ以テ歿ス、年五十九。林宗著ハストコロ格物綜凡・氣海觀瀾ノ他ニ輿地誌、六十五卷・輿地誌略、若干卷アリ。(墓誌)

川本幸民、名ハ裕、裕軒ト號ス、攝津・三田ノ人、父名ハ周安、世々九鬼侯ノ醫員タリ、幸民年十八、播州ニ遊ビ醫ヲ宇野某ニ學ビ、專ラ和・漢方書ヲ修ム。既ニシテ江戸ニ出テ足立長雋ノ塾ニ寓シ、始メテ蘭學ヲ修ム。長雋ソノオヲ奇トシ爲ニ介シテ坪井誠軒ニ就カシム、後、去リテ京阪ノ間ニ遊ビ諸大家ヲ歴訪シマス、學術ヲ究ム。天保五年擢デラレテ本藩ノ醫官トナリ、侯ニ從テ再ビ江戸ニ來ル。乃チ居ヲ芝・露月街ニトシテ醫業ヲ開ク、薩州侯ソノ名ヲ聞キ聘シテ醫校ヲ督セシム。安政三年洋書調所教授ニ擧ゲラレ、文久二年遂ニ幕籍ニ列シ、箕作玩甫ト列ヲ同フス。丁卯戊辰ノ際ニ及ビテ仕ヲ辭シ三田ニ歸リ、著述自ラ娛ム。明治三年又東京ニ來リ、翌四年六月朔日、病ヲ以テソノ家ニ歿ス。墓ハ淺草・曹源寺ニアリ。幸民著ストコロ、氣海觀瀾廣義ノ他ニ、奇器述・理學原始・地球理説・舍密讀本・舍密眞言・化學初教・化學通・依百乙人身窮理・藥治溯源・硝石考・暴風説・瀛船説等アリ。(小傳)

同時京師ニ廣瀨元恭アリ、坪井誠軒ニ從テ蘭學ヲ修メ、カヲ理學ニ專ニスルコト數年、理學提要八卷ヲ著ハシ、以テ物理ノ學ガ醫學ノ基礎タルコトヲ辯ゼリ。是ニ於テ物理ノ學ハ益々勃興スルニイタレリ。

廣瀬元恭、字ハ禮卿、藤園又天目山人ト號ス。後チ元恭ヲ以テ行ハル。甲斐國藤田邑ノ人ナリ。父名ハ沖、恭平ト稱ス。元恭ハソノ第二子ナリ、家世々醫ヲ業トス。年十五ニ及ビテ、江戸ニ出テ坪弁誠軒ノ門ニ入り蘭醫方ヲ修ム、誠軒命シテソノ塾ヲ幹セシム。居ルコト十餘歳ニシテ去テ京畿ニ遊ブ、コノ時ニ當リ、江戸ニ坪井・宇田川ノ兩家アリ、大阪ニ緒方氏アリ、并ニ蘭學ヲ唱ヘテ名聲東西ニ噪シ。而シテ京師ハ寥々トシテ聞ユルモノナシ。元恭慨然トシテ曰ク、京師ハ天下ノ仰グ所、而シテ今尙コノ如シ、吾、之ヲ唱フルニアラズンバ則チ將タ誰ヲカ俟タント。遂ニ留テ業ヲ開ク。是ニ於テ諸生病客門ニ集マルモノ日ニ多ク、ソノ間兵制砲術ヲ講ジ、門下ソノ業ニ通ズルモノ前後輩出ス。後チ津侯ノ聘ニ應ジ醫員トナリ、京ニ居テ二十四口ヲ食ム。毎ニ兵書ヲ譯シテ遙ニ之ヲ候ニ獻ズ。慶應ノ初年、侯幕府ノ命ヲ奉ジテ京師ヲ護リ、砲壘ヲ八幡・山崎ニ築ク。元恭勝安房ト共ニ命ヲ奉ジテ營築ノ事ヲ幹ス。幕府金ビ時服ヲ賜テ之ヲ賞ス。明治維新ノ際ニ及ビ、官軍病院ヲ京師ニ設ケ、元恭ヲ擧ゲテ之ガ長タラシム。未ダ幾ナラズシテ病ヲ得テ職ヲ辭シ、頗ル攝養ニ務メシモ、在苒トシテ癒エズ、明治三年十月十七日終ニ歿ス。元恭著ストコロ理學提要ノ外ニ知生論等十數部アリ、享年五十。(墓誌)

化學

青地林宗ノ氣海觀瀾アリテヨリ十年、宇田川榕菴、舍密開宗ヲ著ハシテ、天保八年コレヲ世ニ行フ。舍密ハ即チ *Chemie* ノ音譯ニシテ、今日謂フトコロノ化學ナリ。ソノ說ニ曰ク『醫學ハ究理ノ門ニ屬ス、故ニ西洋醫ヲ理科ニ取ル、凡ソ醫ヲ爲スモノ必ズ先ヅ辨物ノ學ニ進テ、以テ内景、藥物ヲ研討シ、而シテ後、究理舍密ノ奧旨ニ通ジ、始メテ治病ニ從事スベシ』ト、コレヲ斯學ノ著書ノ嚆矢トス。蓋シ蘭學興リテヨリ四五十年、譯述セララルトコロノ書頗ブル多シト雖モ、大率方藥治療ノ書ノミニシテ、ソノ本原ヲ說クモノ鮮ナカリシガ、氣海觀瀾・舍密開宗等ノ書行ハレテヨリ、醫家亦心ヲ理學及ビ化學ニ留メ兩間寓有ノ理ヲ講明シ、人性ノ本原ヲ覈知シ、體外諸物ノ關涉ヲ辨別スルコトヲ以テ醫學ノ基礎トナスベキコトヲ知ルニ至リ。同時川本幸民ノ舍密讀本・舍密眞言・化學通アリ。廣瀬元恭モ亦京師ニ在リテ力ヲ化學ノ發展ニイタシ『諸ヲ大匠ノ堂ヲ構フルニ譬フレバ、究理ノ學ハ先ヅ其構成造立ノ理ヲ明ニスルナリ、解體ノ學ハ節稅柱礎ノ位置スル所ヲ辨スルナリ、生理ノ學ハ堂房門塾ノ用ヲ識ルナリ、病理ノ學ハ常居起臥ノ安否ヲ察ルナリ、藥性ノ學ハソノ安否ニ就テ、之ガ排置ヲナシ起臥ヲシテ安穩ナラシムルナリ、舍密ノ學ハ衆材ノ構成スル所、各材皆其用ニ當ルヲ分チト知ルナリ、而シテ猶以テ未ダ足ラズトナス、故ニ博ク古名匠ノ構造スル所ヲ觀ルニ其巧拙ヲ察シ、而シテ諸ヲ今日ニ施スモノ所謂經驗學是ナリ』ト説キ、化學ヲ以テ醫科七目ノ一トナシ、常ニ之ヲ以テソノ生徒ニ授ケタリ。

解剖學 3247

解剖ノ學ハ山脇東洋ノ藏志ニ興リ、藏志ニ次ギテ河口信任ノ解屍編及ビ福井ノ人半井・山室二氏ノ解剖圖アリ。山脇東洋ノ子東門父ノ遺志ヲ嗣ギ、明和八年一婦人ノ屍ヲ解剖シ、安永四年再ビ二屍ヲ解キ視テ圖譜ヲ著ハシタレドモ、コレ等ノ圖說ハ固ヨリ一部ノ解剖紀事ニ過ギザリキ。安永三年解體新書ノ發行セララルニ及ビテ、我ガ醫家ハ既ニ前ニ述ベシガ如ク、始メテ西洋ノ解剖學ヲ窺フコトヲ得シカバ、コレヨリ以後ノ解剖書ハ西洋ノ說ニ取ルトコロアリテ、漸次改進ノ途ニ就キタリ。

宮川春暉(自カラ橋南蹊ト稱ス)ハ天明三年屍ヲ解キノ藏ヲ觀テ、ソノ著傷寒外傳(上卷及中卷)ニ解剖ノ說

ヲ擧ゲシガ、ソノ説クトコロハ、肝・心・脾・腎・胃・腸・膽・膀胱・心包絡・目・耳・鼻及ビ經絡・三焦・榮衛・血室・精ニシテ、形態ノコトヨリ生理ノコトニ論及シ漢・蘭ノ所説ヲ折衷シタルトコロ多シ、而カモ、ソノ研究ノ法ノ疎鹵ナルガ爲ニ記述ノ誤謬尠カラザリキ。

柚木太淳ノ解體瑣言ハ寛政九年、一刑屍ヲ解キ視タルトコロヲ認述セルモノニシテ、ソノ藏府血脈ノ事ヲ記セルハ甚ダ疎雜ナレドモ蘭説ニ取ルトコロアリテ、解剖次第・豫備器具等ヲ論ズルコトハ詳細ナリ。ソノ解剖ノ擧ニ際シテ豫メ備フベキ器具トシテ列擧セルハ、竹筵(後漢ノ醫官ガ剝割ノ故事ニ倣フ)・大刀(肉吏用フル所ノ庖丁ナリ、諸藏ヲ斷ツノ用トナス)・中刀(用法大刀ニ同ジ)・小刀(脂膜ヲ剪リ筋脈ヲ擡クルノ類盡ク之ヲ用フ)・剪刀(膜ヲ剪ルノ用トナス)・刺刀(尋常頭髮ヲ剃ルニ用フルモノ)・陶器(膽汁ヲ注グノ用ニ供ス)・水銃(藏ヲ洗フノ用トナス)・天眼鏡(諸物ヲ照スノ用ニ供ス)・顯微鏡(細微ノ地ヲ照スノ用ニ供ス)・鑿(諸骨ヲ斷ツノ用トナス)・鋸(頭ヲ斷ツノ用トナス)・木鎚(鑿ヲ槌ツノ用トナス)・量(水ヲ胃中ニ注グノ用トナス)・漏斗(水ヲ注グノ用トナス)・水瓶(水一斗ヲ貯フベキモノ)・鯨骨(筋脈ヲ透スノ用トナス)・竹管(藏ヲ吹クノ用トナス)・尺(俗ニ所謂カネサシ)・麻繩・竹竿(藏府ヲ掛ルノ用トナス)・簾鈎(藏府ヲ掛ルノ用トナス)・小片木(麻繩ヲ以テ之ヲ繫ク上ニ系肝及膀胱ノ五字ヲ書シテ以テ臍ヲ解ク時ノ用トナス)・木板(藏府ヲ分置スルノ用トナス)・筆硯(書者ノ用トナス)・紙・秤・布巾(首ヲ覆フノ用トナス)・酒觥(祭典ノ用トス)・香(祭典ノ用トス)ニシテ、解剖ノ次第ハ主者先ツ場中ニ入り報ヲ俟ツ、公吏人ヲシテ刑罷ルコトヲ報ゼシム。主者刑場ニ至ル。公吏首骸ヲ授ク。創者之ヲ持シテ布幕ノ外邊ニ送ル。侍者之ヲ受ケテ大牀ノ上ニ置ク。主者場中初立ノ處ニ復ヘル。書者右側ニ立ツ。畫者左側ニ立ツ。刀者前ニ踞ス。侍者布巾ヲ以テ首ヲ置ケル小牀ヲ覆フ。主者卓ニ就キ香ヲ焚キ水ヲ酌メ祭文ヲ讀ム。主者復位。諸人同拜。執事者次第ヲ讀ム。具監侍者ニ命ジテ、具ヲ置ク。劍匠刀ヲ刀者ニ授ク。

(第一) 首ヲ稱ル。(第二) 屍ヲ稱ル。(第三) 兩乳手足ヲ度ル。(第四) 氣食二道ヲ視ル。(第五) 乳頭ヲ斷ツ。(第六) 外腎ヲ斷ツ。(第七) 陰囊ヲ斷ツ。(第八) 溺精口ヲ視ル。(第九) 肛門ヲ視ル。(第十) 要所ニ釘ス。(第十一) 臆中ノ皮愚ヲ剝グ。(第十二) 膈膜ノ上邊ヲ視ル。(第十三) 諾臟ヲ見ル。(第十四) 腹皮ヲ剝グ。(第十五) 膜ノ下邊ヲ視ル。(第十六) 藏府ヲ掛ケ。(第十七) 腦皮ヲ剝グ。(第十八) 蓋ヲ視ル。(第十九) 鼻ヲ斷ツ。(第二十) 耳ヲ斷ツ。(第二十一) 面皮ヲ剝グ。(第二十二) 下顎ヲ出ス。(第二十三) 舌ヲ剪ル。(第二十四) 齧ヲ穿ツ。(第二十五) 頭ヲ鋸ス。(第二十六) 眼ヲ抽ツ。(第二十七) 再ビ藏府ヲ視ル。(第二十八) 肺ヲ斷ツ。(第二十九) 心ヲ斷ツ。(第三十) 肝ヲ斷ツ。(第三十一) 膽ヲ斷ツ。(第三十二) 脾ヲ斷ツ。(第三十三) 腎ヲ斷ツ。(第三十四) 膀胱ヲ斷ツ。(第三十五) 諸腸ヲ視ル。(第三十六) 胃ヲ斷ツ。(第三十七) 二大脈ヲ見ル。(第三十八) 諸骨ヲ檢ス。(第三十九) 左手ヲ斷ツ。(第四十) 右手ヲ斷ツ。(第四十一) 左足ヲ斷ツ。(第四十二) 右足ヲ斷ツ。

解體畢ル。諸人同拜。主者退ク。執事者侍者ニ命ジテ諸具ヲ撤セシム。之ヲ輓近ノ解體式ニ照スニソノ精粗固ヨリ日ヲ同フシテ語ルベカラズト雖モ、學術蒙昧ノ世ニアリテ既ニ目ヲ此ニ着ク、著者ノ識見稱揚スベキモノアリ。

按ズルニ解體新書載スルトコロノ解剖用具ハ盤・大小刀・布里母(大披針)・管・硬稷刷・針・絲・剪刀・水

銃・私奔牛私(海綿)・槌・鑿ノ十二種ナリシガ、桂川甫賢ガヘイステルノ書ヲ譯シ、剖散撮要ト題セシ中ニ、

解剖器械ノ一篇アリ、順ヲ逐ヒ應ニ用ユベキノ器械ヲ三次ニ別チ、第一次ハ大卓・机案・直刀・剃刀・剪刀・

鉗・鑷・鉤・消息子・猪毫刷・曲直諸鍼・鈕鍼。第二次ハ鋸・屠刀・鑿子・槌・掀骨篋・大小管・橐篇。第三次ハ顯微鏡・最大小銃(備レ一、取レ一、供レ注レ蠟)・一鐵管(備レ注ニ輸汞於脈管一)・私奔私スボンヌ・砥・革・錐・銅線・鉄・氣機ニシテ、解剖ソノ彰明ヲ得ルモノハ全クコレ諸器ノ能ニ由ルトナシタリ。思フニ柚木ノ解剖體瑣言ニ記スルトコロハ、コレ等蘭書ノ說ニ據リ、實際ノ用ニ臨ミテ取捨セルモノナルベク、コレニ依リテ當時解剖技術ノ程度ヲ察スベシ(脈管注射法ノ如キモ剖散撮要ニ出デタレドモ、當時我が邦ノ解剖家ハ尙ホ之ヲ用ヒザリシナラム)。

コノ時ニ方リテ大ニ力ヲ解剖學ノ發達ニ致セシ學者ニ大槻玄澤・小石元俊・星野良悅・宇田川榛齋ノ諸家アリ。是ヨリ先キ、杉田玄白ノ解剖新書ヲ著ハスヤ、當時參考書少ナク、質問人ニ乏シク、稽證ニ便ナラズ、研究ニ由ナク、從テソノ譯未ダ暢ビザルモノアリ。大槻玄澤師命ヲ奉ジテ、校訂ノ任ニ當リ、更ニキユルムスノ原書ヲ取り、篤ク正文ヲ考へ、細ニ註證ヲ搜リ、群書ヲ考索シ、百氏ヲ旁羅シ、又頻次親カラ解剖シテ以テ之ヲ實景ニ徵シ、年ヲ經ルコト十歳、稿ヲ易ユルコト三回、寛政十年ニ至リテ遂ニ重訂解剖新書十三卷ヲ成セリ。殊ニソノ名義編ノ如キハ翻譯名義ノ由テ本ヅクトコロヲ明カニシ、傳譯ノ功勞頗ル多トスベキモノアリ。固ヨリ解剖新書及ビ重訂解剖新書ニ於テ新定セラレタル解剖學上ノ術語ハ多般ニシテ、一々之ヲ列舉スルニ堪ヘズト雖モ、試ミニソノ著シキモノヲ列舉スレバ

神經 (按此物、漢人未レノ說者、故無下正名可ニ以充一者上、雖レ然、彼所謂神者靈、若精、若元氣等、皆謂ニ此物之用一也、唯不レ知ニ其形質如何一耳、因今譯曰ニ神經一、)

腱 (漢人指爲レ筋者是腱也、說文腱筋之本也、廣韻筋頭、義與ニ荊斯ベリス一相吻合、因譯以ニ腱字一、)

滷 (物乙者、血中所ニ混有一、鹹液之一通語也、漢人所レ未レ說者、故權譯曰レ滷)

口蓋 (口蓋骨表面、所レ覆レ肉之部也、漢無ニ正稱一、)

虹彩 (レーゲン・ボーグ、即虹蜺也、因尾ニ彩字一、譯レ焉)

朧 (パンクレアス、漢人所レ未レ說者、故今新製ニ一字一、譯曰レ朧、朧徒孫切、月肉也、朧聚也、結也、即濾胞屯聚、而爲レ肉之會意也)

圍護 (プロスタアタ、按是遮防圍護之義也、故譯曰レ爾)

腔 (ハギナ者室也、今新製レ字、譯曰レ爾、室邊從レ肉、音爲レ叱、即會意也、非ニ字書尺粟切、肉生也之腔一也)

等ノ如ク、傳譯スルトコロ、務メテ名義ノ原稱ニ妥當ナランコトヲ欲シ、私カニ語ヲ造リ新ニ字ヲ製セルモノモ尠カラザリシハ苦心ノ跡ヲ見ルベシ。

宇田川榛齋ノ遠西醫範ハブランカツ・バルヘイン・インスロウ (Winslow) 等諸家ノ解剖書ヲ譯輯セルモノニシテ、ソノ說甚ダ詳細ニシテ底蘊ヲ究盡セシモ、三十卷ノ大部ナルガ故ニ廣ク行ハルルニ至ラズ。後キ、ソノ中ヨリ全身諸物ノ名稱及ビ官能ノ綱領ヲ鈔シ、之ヲ醫範提綱ト題シ、内景銅版圖ヲ附シテ、文化二年之ヲ梓行スルニ及ビ、ソノ書ハ西洋醫方ヲ學ブノ規範トシテ、廣ク世ニ行ハレタリ。

解剖新書・重訂解剖新書ニ載スルトコロノ新定名稱ニシテ、更ニ遠西醫範ニ於テ改訂セラレタルモノ尠カラズ、ソノ著シキモノヲ舉グレバ

痔 新製字、音萃（臍）

鞞帶（蠻度・繫帶）

靈液（神經液）

腺 新製字、音泉

蟲樣垂（蟲腸）

結腸（縮腸）

網膜（腸網）

コノ如ク、解剖學上ノ術語ハ重訂解體新書及醫範提綱ニ至リテ既ニ大ニ備ハリ、ソノ說モ精詳ナルヲ得タルガ、是ヨリ先キ京師ニ小石元俊アリ、初メ永富獨嘯庵ニ學ビテ漢醫方ヲ修メシガ解體新書ヲ見テ蘭醫方ノ精密ナルニ服シ、江戸ニ出デテ大槻玄澤等ニ親炙シ、蘭醫方ヲ修メテ京師ニ歸リ、自カラ屍ヲ解キ視テ圖說ヲ著ハシ、大ニ西洋解剖ノ說ヲ唱ヘタリ（傳ハ前ニ出ツ）。同時安藝ノ廣島ニ星野良悅アリ、コノ解剖ノ草昧ノ世ニ方リ骨形・骨度ヲ詳ニスルコトノ治病ニ必要ナルコトヲ信ジ、當時人屍ヲ得ルコトノ甚ダ難キヲ以テ、木ヲ以テ骨格ヲ模製セントシ、刑餘ノ屍ヲ得テ、自カラ之ヲ解キ、ソノ皮肉ヲ抉摘シテ骨格ヲ取り、以テ機關連接ノ狀ヲ詳ニシ、工人原田某ヲシテ之ヲ模造セシム。偶々杉田玄白ノ解體新書ヲ得テ、ソノ圖ヲ取テ之ヲ眞骨ニ比スルニ、符契ヲ合スガ如キヲ見テ大ニ之ヲ奇トシ、寛政五年自ラ創製スルトコロノ木骨ヲ携ヘテ江戸ニ來タリ、之ヲ蘭學ノ諸家ニ示ス。大槻玄澤ガ重訂解體新書ニ『山陽、星野良悅、嘗有レ所ニ憤排一、欲レ精ニ覈人身骨骸一、一日請ニ刑餘屍一、自解剖以觀ニ其内景一、又剔ニ去其皮肉一、得ニ其全骨一、乃使ニ一工人以レ木模造一、當時人偶有下以ニ原刻解體新書ニ贈レ之者上、乃試取ニ其圖一、而照ニ之眞骨一、如レ合ニ符契一、大奇レ之、自齋ニ其模骨一、東遊質ニ之吾社一、實寛政戊午之秋也、余觀レ之其巧奪ニ天工一、乃爲取下所ニ重訂ニ乏骨骸諸篇上讀レ之、良悅隨而檢ニ木骨一、幹肢、關節、開闔、大小、長短、隆起、凹陷、曲直、尖圓、至ニ其細溝小孔等之微一、一一吻合、彼如ニ校レ此而模一、此如ニ照レ彼而錄一、於是良悅大感ニ西說之微一、又服ニ譯說之不レ差、余亦嘆ニ良悅之造意卓ニ絕尋常一、嗚呼逸矣和蘭、何翅萬里、而其格レ物踐レ實、彼此不ニ相欺一如此、是豈獨骨骸云也哉、彼子之究理、的實明徵、雖ニ其餘ニ可ニ推知一也』ト記セルヲ見テ、江戸ノ諸家ガソノ木骨ノ精巧ナルニ驚キ、且ツ之ニ依リテ得タルコトノ尠カラザリシヲ察スベシ。而シテ當時蘭學者ガコレニ依リテ確當ナル一證左ヲ獲テ、以テ實驗學ノ精緻ナルコト明カニシテ、徒ニ之ヲ譏ル者ノ口ヲ箝セシムルコトヲ得シハ、斯學ノ發達上ニ卓越ノ功績アリトセザルヲ得ザルナリ、又大槻玄澤ガ『爾後有下攝州一醫生携ニ眞骨一具一來問レ余者上、校ニ之夫模骨一、殆不レ可レ辨、余於レ是又大感ニ工人之極ニ巧也』ト記セルニ依リテ見レバ、コノ時ニ於テ、世上未ダ一眞骨ダモナク、星野ノ木骨ハ蓋シ我ガ邦ニ於ケル第一ノ骨格標本ナリシナラン⁴⁸。

星野寧、字ハ子康、通稱良悅、柳子ト號ス、廣島ノ人。父知近ノ後ヲ嗣ギテ醫ヲ業トシ、聲名大ニ揚リ、病客常ニソノ門ニ相踵グ、偶々一人ノ下顎脫臼ニテ治ヲ乞フ者アルニ遇ヒ、以爲ラクコノ若キノ證、人身骨節ヲ詳ニスルニアラズンバ則治ヲ施スコト能ハズト。發憤シテ屍ヲ解キ之ヲ實驗セントシ、遂ニ官ニ請テ刑餘ノ二屍ヲ得、親シク之ヲ解テ、骨肉ノ際會經脈ノ連屬ヲ詳ニスルコトヲ得、忽然トシテ大ニ悟ルトコロアリ。曰ク病ヲ療スルニハソノ狀ヲ究メザルベカラズ、之ヲ明カニスルハ骨形骨度ヲ詳ニスルニアリト、而シテ當時人屍ヲ獲ルノ甚難キヲ以テ木ヲ以テ骨骸ヲ模製スルノ意アリ。工人原田孝次ヲ督シテソノ事ニ從フコト多年、遂ニ創メテ一ノ木骨ヲ製セリ。時ニ偶々杉田玄白譯スルトコロ解體新書ヲ贈ルモノアリ、試ニソノ圖ヲ取テ之ヲ眞骨ニ照スニ符契ヲ合スガ如シ、仍テ大ニ之ヲ奇トシ、自ラ木骨ヲ携ヘテ江戸ニ出テ蘭學ノ大家ニ就テ訂正ヲ乞ハント欲シ、遂ニ子柔克及ビ中井厚澤・富川良元ノ兩人ヲ從ヘテ東下セリ、時ニ寛政戊午（五年）ノ秋ナリ、杉田・大槻・桂川等諸大家之ヲ觀テ劇賞措カズ、人皆ナ相謂テ巧妙眞ニ逼ルトナセリ、遂ニ醫學館ニ徵サレ、一時非常ノ推獎ヲ得、且勸ムルニ之ヲ幕下ニ獻スベキヲ以テセラル。良悅大ニ喜ビ、乃チソノ木骨ヲ携ヘテ廣島ニ歸リ再ビ、孝次ヲ督シテ更ニ一個ノ木骨ヲ模造セシメ、藩ノ有司ノ允可ヲ得テ、之ヲ幕府醫學館ニ獻ゼリ、時ニ寛政十二年十一月ナリ。幕府ソノ功ヲ賞シテ金三十兩ヲ賜ヒ、ソノ翌享和元年十二月十九日、コノ後毎歲首拜謁ヲ許サル、未ダ幾モアラズ、同二年三月朔日、病ヲ以テソノ家ニ歿ス、享年四十又九。（星野家系譜・木骨附說・重訂解體新書・骨經・醫學館秘要錄・西遊日記）

星野良悅二後ルルコト十數年、大阪ノ各務文獻、亦木ヲ以テ骨ヲ模造セリ、各務文獻、整骨術ニ精シキヲ以テソノ名大ニ顯ハル(傳ハ別ニ出ツ)。嘗テ慨然トシテ曰ク『世ノ此術ヲ業トスルモノ往々支那ノ舊法ヲ墨守シ、妄說空辯ノタメニ誑惑セラル、焉ゾ能ク骨節ノ理ヲ發明センヤ』ト。乃チ自ラ刑屍ニ就テ之ヲ剖視スルコト數回、以テソノ運動作用ノ理ヲ推究セリ、是ニ於テ、或ハ器械ヲ製シテ以テ治方ニ便シ、或ハ繃帶ヲ裁シテ以テ搖動ヲ護ル、ソノ材器布纏ノ法、率ネ皆ナ創意ニ出デ、古來治シ難シト稱スルモノ治セズト言フコトナキニイタレリ。然レドモコノ術ヲ授ケ、コノ術ヲ受ルニハ皆ナ眞骨ニ就テ之ヲ按撫スルニアラザレバ、制チ得テ知ルベカラザルモノアリ、文獻乃チ良匠ニ命ジテ木ヲ以テ全骨ヲ作ラシメ、之ヲ坐側ニ置キ諸生ノ業ヲ問フモノヲシテ手撫目察、以テソノ機關ヲ曉ラシメ、別ニ整骨新書ヲ著ハシテ、ソノ上中二卷ニ骨骸ノ起原・名數・形質・主用・機關ニ就キテ記述シタリ。同時阿波ノ醫ニ、加古良玄(藍洲ト號ス)アリ、亦整骨科ヲ以テ名アリ、意ヲ解剖ニ留メ、實際ニ目睹セルトロニ依リテ解體鍼要(文政二年刊)ヲ著ハシタレドモ、ソノ書ハ圖畫ヲ主トシ、解説ハ甚ダ簡約ニシテ要ヲ得ザルモノ多シ。

文化十年野呂天然(天真又無量居士ト號ス)、生象止觀十二卷・生象約言一卷ヲ著ハシテ、解剖學ヲ説キ『紅夷所謂洽納吐弭者、欲レ審ニ人身常機一、而剖ニ人屍及鳥獸蟲魚一、觀ニ其死象一、以想ニ生象一術之謂、而非徒以ニ屍體剖割屠兒之業一爲レ主之謂也、韓非子所謂人希見ニ生象一也、而得ニ死象之骨一、案ニ其圖一、以想ニ其生一也者、是也、故當レ謂ニ之生象一也』ト言ヒテ、解剖ノ二字ニ代ユルニ生象ノ二字ヲ以テシ、外貌・形器・胚胎形器・氣液・區分ノ諸篇ニ別チテ内景ヲ叙シタリ。次デ文化四年小森桃塙・藤林普山、京師ニアリテ刑屍ヲ解視シ、文政四年小森桃塙ノ門人池田冬藏等亦一屍ヲ解キ、審視スルコロニ依リテ解體圖譜ヲ著ハシ、頭(腦・脊髓・鼻・耳・口・目)・胸(肺・氣管・心・血脈・胃管・橫膈膜)・腹(胃・腸・腸間膜・脾・肝・膽・腎・膀胱・陰囊・精囊)・凝形(骨・繫帶・筋根・白脈・動靜脈・水脈・泌胞・膜・脂膜・毛髮・爪甲)・流象(血・乳糜・神經液・精液・消化液)ノ數編ニ別チテ、之ヲ七字ノ賦ニ作り、命名及ビ解説ハ皆ナ當時ノ蘭說ニ據リタリ。ソノ他解剖圖說アリト雖モ、皆ナ解體新書・重訂解體新書・醫範提綱等ニ基ツキシガ、安政年間ニ至リ、京都ノ新宮涼庭布斂吉(Plenk)ノ解剖書ヲ翻譯シ解體則八卷ヲ著ハシ、骨・靱帶・筋・內臟・血脈・神經・腺・水脈ノ八篇ヲ別チ、系統的ニ人身解剖ノ事ヲ論述スルニ至リテ、西洋解剖ノ學ハ大ニ備ハルヲ得タリ。

コノ如ク、コノ期ニ方リテ盛ニ西洋ノ解剖學ノ傳譯セラルルニ際シ近江ノ人三谷樸(字ハ公器、笹洲ト號ス)京都ニ寓シ、醫ヲ以テ名アリ。享和壬戌ノ冬、官ニ請テ刑囚ノ屍ヲ解キ、大ニ悟ルトコロアリ、乃チ覃思研精、蘭說ノ粹ヲ取り、目睹ノ眞ニ徵シ、諸ヲ醫經ニ折衷シテ、臟腑眞寫解體發蒙五卷ヲ著シ、一器毎ニソノ今訓・俗名・蠻名ヲ掲ゲ、ソノ字義ヲ論ジ、次ニソノ位置・形狀・機用等ヲ説キ、最後ニ著者ノ意見ヲ附シ、ソノ所說大都西說ニ採リタリト雖モ、名稱機用ノ如キハ之ヲ醫經(素問・靈樞)ニ參照シテ詮釋訓詁甚ダ力メタリ、而シテ本書ニ挿ムトコロノ諸臟腑ノ圖ハ、著者ガ享保壬戌ノ解視ニ臨テ目睹セシトコロニ據リ、ソノ形狀・色彩ヲ寫シ、且ツソノ大小・長短・輕重ヲ量リタルモノニシテ、別ニ橘氏(南溪)解剖・小石氏(元俊)解剖ニ於テ量リタル大小輕重ヲ附録シ、以テ參考ノ資トナセルナリ。之ヲ要スルニ、本書所說ハ漢・洋兩間ノ橋梁ヲナスモノトシテ解剖學史上重視スベキ書籍ト謂フベシ。

次デ、小出君德(名ハ龍、薇山ト號ス、備後ノ人、大阪ニ住ス)アリ。天保元年以來、官ニ請テ屍ヲ解クコト、男女凡十有餘人、深ク藏象ノ理ヲ辨ズルコトヲ得、遂ニ導竅私録三卷(天保七年刊)ヲ著ハシ、五臟六腑ノ位置・形狀ヲ詳ニシ、傍ラ經絡・津液・脂肪ノコトニ及ブ。ソノ論ズルトコロ、及ビ載スルトコロノ圖畫ハ解體發蒙ニ見

ルトコロノモノ多シ。而シ小出氏ノ創見ニ係ルモノ又少カラズ。議論亦往々精覈ニシテ解體新書ヲ馭スルトコロモアリ。要スルニ、コノ書ハ解體發蒙ニ併ビテ、我が邦解剖學發達史上、趣味最多キモノトスベシ。

石坂宗哲ノ内景備覽(天保十一年刊)ニ至リテハ『上古醫、必皆證諸實驗、毫無臆測之語、所謂其死解剖而視之語、愈可ニ以徵也、於戲古經之不講久矣、夫木朽而龜生、於是乎、啞蘭之學、過以內景、肆其說、意者、彼唯出レ新術レ奇、以驚ニ愚人之視聽ニ耳、夫我既曰ニ宗脈、而彼譯曰ニ神經、我既曰ニ榮衛ニ彼譯曰ニ動靜ニ脈、其實我既盡レ之、而彼第異ニ其名、以ニ寢加ニ詳審、要是支分節解、不レ過ニ葛藤之談』ト言ヒ、蘭醫家ノ内景說ハ既ニ漢醫家ノ說ケルトコロナリトシ、而カモ之ヲ蘭說ニ比較シテ齟齬セル箇所ヲ修正改竄シ、宗脈ヲ以テ神經ニ當テ、說ヲナシテ曰ク

『腦髓精神ヲ出ダス、是ヲ宗氣ト曰フ、純白ノ水液ニシテ腦髓ヨリ出デテ一身ニ周ネシ、宗氣ニ二般ノ能アリ、寒溫ヲ覺ヘ喜怒哀樂ノ情ヲ起シ、臭味ヲ知り、事物ヲ辨ズル等、己ニ具ヘテ己ノ自由ヲナスモノヲ神ト云ヒ、肺心肝脾腎膽皮肉筋等、各其効績アリテ己ニ具ヘテ己覺ヘズ、生成老死ニ至ルモノヲ精ト云フ、コノ精・神ノ二ツノモノハ宗氣ノ一ヨリ分レテ、精ニ魄ト云ヒ神ニ魂ト云フ、魄ハ陰ナリ、魂ハ陽ナリ、陰・陽・魂・魄・精・神ノ六ノ名ハ宗氣ノ一ヨリ分レ、ソノ六ノモノヲ合セテ一トナセルモノヲ心ト云フ。宗脈ハ宗氣ノ頭腦脊髓ヨリ生シ、一身内外ニ周ク流ルル道路ナリ、宗脈ノ腦ヨリ出ルモノ十脈アリ、項ヨリ尾骶ニ至ル迄、椎每一脈アリ、即チ項椎ニ起ルモノ七脈、脊椎ニ起ルモノ十二脈、腰椎ニ起ルモノ五脈、窮骨ニ起ルモノ六脈ナリ』ト言ヒ、蘭說ニ基ツキテ内經ノ說ヲ解釋シ、又ソノ臟腑ノ事ヲ言フヤ『肺ハ其形ニツノ大葉ニシテ、臍ヲ覆ヒ、前面ハ左二葉、右三葉、或ハ四葉アルモノアリ、其後面ハ唯二葉ナリ、呼吸ノ喉管ヲ此臟ノ中ニ納ム、始ハ一管ニシテ兩股トナリ、兩肺ニ入り枝ヲ生シ、其大小ノ枝ニ薄膜ノ囊附着シ、氣ヲ吸フトキハ此囊悉ク膨脹ス、宗脈及榮衛ノ血道モ同シク此囊ニ絡リ、大氣此囊ニ入充テ榮ノ血之ヲ受ク所、勢ヒ自然ニ活潑シテ、臍臟ニ下リ、衝脈ヘ出デ、一身ヘ輸リ出シ、又衛ヨリ輸リカヘスナリ。臍ハ本ト心ニ作ル、然レドモ精神和合ノ名ナル心ト誤ルノ恐アルニ依リテ臍ノ字ヲ用フ、兩肺ノ間ニアリテ榮衛ヲ出入シテ止ム時ナシ、其形未開ト紅蓮ヲ倒ニセルニ似テ、其尖ハ左乳ノ處ニ當ル、其質皆肉筋ニテ左右二室ニ別レ右ノ方ハ衛ヲ納レテ肺ニ輸リ、左ノ方ハ肺ヨリ下リ來レル榮ヲ受テ一身ヘ出ス、此臟縮張アリ動テ止マズ、且四系アリ、右ノ一ハ衛ノ血ヲ右室ニ納レ、其二ハ受ケタル衛ノ血ヲ肺ヘ輸リ、左ノ一ハ肺ヨリ下ス血ヲ受ケ、其二ハ榮ノ血ヲ大動脈ヘ輸リ出スナリ、古人臍ハ五臟ニ系スト心得タルハ大ナル謬ナリ、カカル空語アルニ依リテ、世ノ解剖家ニ蔑視セララルモ理ナリ。榮衛ノ二者中ニテ榮ハ脈中ヲ行キ降ル、其行クヤ脈々トシテ動テ止マズ、榮ノ末細毛髮ノ如クナル所ノ血ヲ受テ昇ルモノヲ衛ト云フ、衛ハ脈外ヲ行ク上焦ハ胃中ナリ。中焦ハ小腸中ナリ。下焦ハ腎ナリ』ト説クガ如キ、漢醫家ノ未ダ言ヒ及バザルトコロナレドモ固ヨリ、コレヲ當時ノ蘭說ニ比較スベキニアラズ。

概シテ之ヲ言フニ解體新書行ハレテヨリ六七十年、天保・弘化ノ頃ニ及ビテハ解剖ハ醫家ノ先務ニシテソノ病因ヲ論ズルモ亦斯ニ於テシ、ソノ治方ヲ擬スルモ亦斯ニ於テスベキコト、既ニ醫家ノ認ムルトコロトナリ、機ヲ求メテ刑屍ヲ解キ視ルモノ尠カラズシテ、解剖圖說ノ公ニセラレタルモノニ乏シカラズ。大阪ニアリテハ天保十三年緒方洪庵ヲ主トシテ解剖ノ社ヲ結び、葭島ニ解剖場ヲ設ケ、村田藏六等解剖ニ精シキヲ以テ名アルモノヲ出ダシ、江戸ニハ蘭學社中ノ諸子、屢々小塚原ニ刑屍ヲ解キ視タルコトアリ、而カモノノ舉ハ五臟六腑ヲ解剖スルニアリ。各器各臟ノ系統ハ明カナラズ、ソノ結構ノ如キハ固ヨリ顧慮セザルトコロニシテ解體發蒙・導欬私錄等ノ書ニ於テ僅カニ獨立研究ノ門ニ入りシノミニテ、遂ニソノ歩武ヲ進ムルコトヲナサザリシハ、畢竟學問ノ方則ノ未ダ明カナラザリシガタメナラン。然レドモ解剖ノ學興リテヨリ、四方俊英ノ士相尋テ斯科ニ從事シタレドモ、コノ時ニ至ルマデ、尙ホ未ダ世ヲ舉ゲテソノ眞理ヲ辨ズルニ至ラズ、動モスレバ殘暴無益ノ舉ナリトシテ之ヲ非毀セリ、故ニ諸家

ノ解屍ハ、ソノ虚ヲ實ニシ、ソノ假ヲ眞ニシ、以テ一見是非眞偽ノ辯ナカラシムルノ功績ハアリシナラン。

生理學

支那醫方ノ解剖學ガ、實驗ニ基ヅカザリシコトハ、上章既ニ叙述セシガ如クニシテ、從テ解剖學ヲ基礎トシテ興ルベキ生理學ノ粗笨ナリシコトハ論ヲ俟タズ、且ツソノ解剖ノ説ト生理ノ説トハ混合錯雜シテ、相區別セラレザリシナリ。而シテソノ解剖及ビ生理ノ説ハ一ニ素問・靈樞二書ヲ宗トシ、二千年ノ久シキ、ソノ間幾種ノ著述アルモ要スルトコロ、コノ二書以外ニ一步ヲモ出ヅルコト能ハズ。江戸時代ノ中頃ニ至リテ蘭學ノ漸ク開クルニ及ビテ支那醫方ニモ幾多ノ識者アリ、宮川春暉ノ傷寒外傳・三谷笙洲ノ解體發蒙等ニ至リテハ多少ノ改竄ヲ舊來ノ生理説ニ加ヘタレドモ、未ダ生理ノ一科ヲ立テテ之ヲ攻究スルニ至ラズ、蘭學モソノ端ヲ人身内景ノ學ニ發シ、爾後五六十年ヲ經テ内外疾病ノ治法、藥品方劑ノ製練主能マデートシテ備ハラザルハナキニ至リシモ、理論ヲ主トセル學科ノ興リシハ、大ニ他ノ諸科ニ後レ、理學ハ前ニモ言ヘル如ク、青地林宗ノ氣海觀瀾（文政十年）ニ依リテ始メテ我が邦ニ傳ヘラレ、生理學ハ之ニ踵キテ高野長英ノ醫原樞要（天保三年）ニ依リテ、始メテ我が醫界ニ紹介セラレタリ。

醫原樞要ハ^{デラハイエ}坪刺華以越（？）・^{ブリュメンバッハ}蒲略綿拔弗（Blumenbach）・^{ローゼ}羅設（Roose）等、諸家ノ生理書ヲ譯輯セルモノニシ

テ『人體ノ形質、諸器ノ主用ヲ詳ニシ、活器運動營爲シテ生命存活スル所以ヲ明ニスル』ヲ以テ^{ヒシヨロギ}人身究理（Physiologie）ノ要義トシ、人身存活スル所以ハ内ニハ活動ノ器ヲ具ヘ、外ニハ運用ヲ資ルノ物アリテ、互ニ相激スルニ由ルヲ以テ、人身究理ノ學ニアリテハ初メニ人身ノ形體・性質・諸器ノ運用ヲ講ジ、次ニ體外ノ諸物ヲ論ズルヲ則トスト説キ『人身資ニ基於二體一、發ニ用於二力一、何謂ニ二體一、曰凝體、曰流體、何謂ニ二力一、曰活力、曰神力』ヲ詳説シタリ。

高野長英、名ハ讓、瑞臯ト號ス、陸奥・水澤ノ人。年十七ニシテ江戸ニ來タリテ吉田長淑ノ門ニ入り、居ルコト五年長淑歿ス。乃チ去リテ長崎ニ遊ビ、シーボルトニ親炙シ、切碇四年、業大ニ進ム。天保元年再ビ江戸ニ來タリ業ヲ開キ醫原樞要ヲ譯述シ、ソノ名一時ニ噪シ。長英蒙邁ニシテ大志アリ、刀圭ヲ以テ自カラ任トスルヲ欲セズ。和蘭史略・奇器集成等ノ書ヲ著シテ軍國ノ事ヲ議ス。時ニ英國人來タリテ互市ヲ乞フノ事アリ。攘夷ノ議盛ニ起ル。長英議固ク外交ヲ主トシ、夢物語ヲ著ハシテ攘夷ノ非計ヲ論ズ。コレニ依リテ幕府ノ忌諱ニ觸レ、獄ニ下ル。幾モナク獄舍火ヲ失スルニ乗ジ、獄ヲ脱シテ伊豫ニ走り、又江戸ニ來リ、名ヲ澤三伯ト改メテ専ラ力ヲ譯述ニ用ヒシモ、後チ遂ニ現ハレテ、捕縛セラレントシテ自刃シテ歿ス。時ニ嘉永三年五月ナリ、年四十七。（行狀・高野長英傳）

醫原樞要ニ次ギテ廣瀨元恭ノ人身窮理アリ。コノ書ハ^{リセラン}佛國巴里ノ利攝蘭度（Richerand）ノ人身究理書ヲ翻譯セルモノニシテ、議論明確、究理詳覈ニシテ醫原樞要ニ依リテソノ端ヲ發カレタル生理學ハ、斯書ニ至リテ始メテ系統的ノモノトナレリ。即チ斯書記述スルトコロニ依レバ、人身保護緊要諸機能ヲ別チテ、器官能ト意識官能トノ二類トナシ、ソノ形器官能ニハ飲食消化・養液吸收・血液循環・肺臟呼吸・諸物分泌・諸器榮養ノ六目ヲ立テ、意識官能ニハ感覺・運動・言語ノ三目ヲ立テ、別ニ播種官能（播種・受胎・分娩・小兒吸乳）及ビ人身自ニ初生ニ至ニ三腐ニ順序（生長・成立・稟賦・異質・人身種屬・減耗・死沒・腐敗）ヲ叙述セリ。

利攝蘭度 (Anthelme-Balthaser Baron Richerand. 1779-1840.) ハ巴里ノ人ニシテ、當時高名ナル外科醫ニシテ、所謂活力論ヲ主張セル學者ノ一人ナリ。ソノ著生理學階梯ハ殊ニソノ記述ノ趣味津津タルノ故ヲ以テ大ニ當時ニ行ハレ、佛國ニテ十三版以上ニ及ビ、伯耳義・和蘭・英國・獨逸・西班牙・露西亞等、各國語ニ翻譯セラレ、當時ノ學界ニ生理學ノ普及ヲ致シタル効績甚大ナルモノナリ。

リセラランド
利攝蘭度ノ人身窮理ニ於テハ生活ノ理ヲ解釋シテ『夫レ人ノ生活スル所以ハ即チ機生ナリ、ソノ機生ナルモノハ

衆機相聚テ以テ政ヲ爲ス、ソノ衆機ノ政ニ由テ氣水循環シテ、間斷ナク、其體死シテ息モノ、之ヲ總ベ名テ生ト謂フ、今假ニ火ノ燃ルニ喩フ、酸素彼ノ燃體ニ抱含シテ、燃體ノ溫素等逆出シテ炎炎自ラ燃ユ、是故ニ生ト云ヒ、燃ト云フモ、皆是諸氣流行ノ化成スル者ニシテ、又ソノ作用ノ發見スル所ナリ、夫レ物ノ燃ル理ヲ説クハ、舍密家ノ所謂親和力是ガ本トナリ、又日月星辰運行ノ如キハ天學家ノ所謂引力之ガ本ト爲ル、人身ニ於テハ覺力(知覺力)・動力(收縮力)之ガ本ト爲ル、然ラバ機生體中、萬機流行ノ本タル者(生力)此ノ二力ニ出デザルハ無シ』ト言ヒ、覺動二力ノ潜顯ニ依リテ之ヲ説明ス。コレ所謂活力論(Vitalismus)ニシテ佛國ノ人ポルドウノ創唱セルトコロニ係リ、ヒポクラテースノ説ニ修正ヲ加ヘテ『身體ノ各部ハ其ノ組織ニ特殊ナル方法ニ依リテ感覺シ、又運動ス、コノ各部ニ於ケル作用ノ調和ニ依リテ生活ハ存スルナリ』ト説ケルナリ。ブルームンバツハ獨逸ニ於ケルコロノ派ノ有力ナル代表者ナレバ、ソノ説ヲ傳譯セル高野長英ノ醫原樞要モ、同ジクコロノ活力論ヲ我が邦ニ傳ヘタルモノナリ。之ヨリ先キ、我が邦ニハ既ニベールハーヴ(Boerhaave)ノ書、又ハソノ説ヲ傳ヘタル書、入りテソノ精氣論(Animismus)モ紹介セラレシガ、ソノ説ノ未ダ廣ク行ハルルニ至ラザル前ニ活力論ノ傳ヘラルルアリ、ソノ説ノ當時ノ蘭學社會ニ尊重セラレシコトハ長柄爲質ガ人身究理ニ序シテ『西洋窮理之學、近代以ニ越列機多兒一專説ニ天地間萬有之理一矣、是西洋學者之流風也、其於ニ醫學一亦然、而利攝蘭度氏之所見、獨不レ然、蓋人身內景之妙機、非ニ獨越列機之所ニ能盡一也、於レ是、更唱ニ覺動二力之潜顯一、以説レ之、實前人所ニ未發一也、其論卓絶、其旨深遠、苟志ニ西學一、則如レ此書者、豈可レ不レ譯耶』ト曰ヘルニテ、之ヲ想見スベシ。

虞瀨元恭既ニ利攝蘭度ノ生理書ヲ翻譯シテ幾モアラズ、又、依百乙(Adolph Ypey)ノ生理書ヲ翻譯シ、之ヲ知生論ト題シ、安政三年之ヲ梓行セリ。イペイノ書ハ十八世紀ノ大生理家タル法兒列爾(Haller)ヲ祖述シ、先ヅ人身結構ノ諸元素ヲ論ジ、次デ生活官能(血液循環・肺藏呼吸等生活成立ニ於テ最要ノ官能)・動物官能(精神作用)・自然官能(飲食消化・乳糜製造)・播種官能(殖生作用)ヲ順次ニ叙述シタリ。

ハルトル (Albrecht von Haller 1708-1777) ハ十八世紀ニ於ケル大生理學者ニシテ、前期諸家ノ妄説ヲ排シ、系統的ニ生理學ヲ組成シ、刺戟論(Die Lehre von der Irritabilität)ヲ興シテ生活ヲ説明シタル人ナリ。ソノ説ニ依レバ『各個機生體ニニ様ノ運動アリ、ソノ一ハ純粹理學的ニシテ強力ニ關シ、ソノ二ハ特ニ筋肉ニアリテ刺戟ニ遇フテ收縮スルノ性アリ、之ヲ刺戟性(Irritabilität)ト名ヅク、別ニ神經ニ感覺性(Sensibilität)アリ、身體ニ觸接シ、又ハ之ヲ刺戟スルトコロノ感覺ヲ意識ニ表出ス、コロノ刺戟性ト感覺性トハ機生體生活ノ原基顯象ナリ』ト言フナリ。

コレ等ノ諸書ニ嗣ギテ藤林普山ノ生理眞源・新宮涼庭ノ生理則アリ、人身窮理ヲ約シテ生理學ト名ヅケタリ。次
デ緒方洪庵ノ人身窮理小解・英國合信氏(ホブソン) (Hobson) ガ著ハセル漢譯全體新論ノ翻譯セラルルアリシモ、慶應二年島
村鼎甫ガ生理發蒙十四卷ヲ著ハシ、李邈(リバック)ノ書ヲ譯シ、之ヲ世ニ行フニ及ビ、生理ノ學ハ始メテ普ネク世醫ノ知ルト
コロトナルニイタレリ。

病理學

病理ヲ説明スルコトハ固ヨリ古ヨリ之アリ、然レドモ諸病ノ本然ヲ覈知シ、病因病證ヲ究識シテ、以テソノ標本、
治不治ヲ辨明スルノ學ヲ以テ一科ト成セルハ蘭學興リテ六七十年、弘化四年緒方洪庵ガ病學通論ヲ著ハシ、羅旬語
ニ所謂把篤魯莪(パトロギー) (Pathologie) ヲ説キタルヲ以テ始トス。

病學通論トハ「アルゲマイネ・パトロギー」(Allgemeine Pathologie) ヲ譯シタルモノニシテ、従前ノ蘭學者ハ
之ヲ原病學ト稱セシガ緒方氏ニ至リテ之ヲ病學ト改メタルナリ。蓋シ是ヨリ先キ、宇田川榛齋病學ノ書ノ未ダ缺ゲ
テ備ハラザルヲ慨シ、門人青木周弼・緒方洪庵ヲシテ扶歇蘭度(ヒュヘラランド) (Hufeland) ・昆斯貌律窟(コンスブリック) (Construch) 公刺地(コ
nradt) 等ノ病學書ヲ翻譯セシメ、參考折衷シテ一書ヲ編セントシ業未ダ成ラズシテ歿ス。緒方洪庵ソノ遺志ヲ繼ギ、
更ニ華爾篤滿病學善(ハルトマン) (Hartmann) ・利攝蘭度(リセラランド) ・貌律面拔苦(プリユメンバツク) ・羅設(ローセ) ノ人身究理書・私布歛傑兒治法總説(スプレングエル) (Sprengel) 等
ノ數書ニ參酌シテ榛齋ノ遺稿ヲ訂正シ、弘化四年ニ至リテソノ書成リ、嘉永二年之ヲ梓行シタリ。ソノ生活ノ理ヲ
説クヤ『人身ノ運營ハ覺動兩機ニ係ラザルモノナシ』ト言ヒテ、當時行ハレタル活力論ヲ奉ジ、從テ其疾病ヲ説ク
ヤ『生力ノ刺衝ヲ受ケテ發動スルモノ之ヲ抗抵ト言フ、故ニ凡百ノ生活運營悉皆抗抵ニ非ザルハナク、運營常ヲ變
ゼルモノハ則チ抗抵常ヲ變ゼシモノナリ、即チ疾病ハ其原ヲ生力ト刺衝物ノ變常ニ得ルモノニシテ、其形ヲ抗抵ノ
定則ニ資ルモノナリ』ト曰ヒ、凡百ノ疾病ヲ統轄シテ之ヲ區別スルニハ生力病・凝體病・流體病トナスガ如ク、ソ
ノ本體ニ隨テ別ツコトアリ(眞別) 又ハ部位・單複・經過・病性・由來等ニ依リテ分ツ(假別) コトアリ。ソノ部
位ニ依リテハ汎發ト局發トヲ別チ、内病ト外病トヲ別チ、ソノ他自患病・交感病・半身病・定處病・遊移病・内陷
病等ヲ別ツ。單複ニ依リテハ單病・複病・合併病ニ別チ。經過ニ依リテハ急病・慢病ヲ別チ。進退ニ依リテハ、稽
留病・往來病・間歇病ヲ別チ。時期ニハ初期・進期・極期・退期ヲ別チ。歸終ニハ治癒・轉移・變形・再發・死ヲ
區別シ。病性ニ依リテハ重病・輕病・善性病・惡性病・頑性病等ヲ別チ。由來ニ依リテハ遺傳病・先天病・後天病・
根病・屬病・流行病・傳染病・散在病・英埵密(エンデミ) (Endemie) ・越必埵密(エペデミ) (Epidemie) ヲ區別シタリ。

ソノ他杉田錦腸ノ原病新書・藤林普山ノ病理眞源・長柄爲質ノ昆斯貌律窟病理書・小關三英ノ西醫原病略・石川
元翠ノ扶歇蘭度病理論・林文節ノ病機察要等ノ諸書アレドモ、ソノ記述スルトコロハ大都フーヘラランド・コンスブ
リユツクノ數書ヲ譯述セルニ過キズ。

診斷學

西洋醫方ノ診斷學ヲ説ケルハ吉雄永章ノ因液發備（文化十二年刊）ニ始マリ、次デ、江馬蘭齋ノ五液診法アレドモ、コレ等ノ書ハ主ニ小便ノ清濁・分量・臭・味・色・沈澱等ヲ検査スルノ方法等、診斷法ノ一部ヲ叙述セルニ過ギズ。故ニ診斷學ノ著述ハ坪井誠軒ノ診候大概（文政九年）ヲ以テ嚆矢トスベシ。コノ書ニハ男女ヲ別チ、年齢ヲ詳ニシ、視形・診脈・候胸腹・診舌・驗_ニ冷熱_一・候_ニ神識_一・問_ニ飲食_一・問_ニ寤寐_一・檢溺・檢尿・問_ニ曾患_一・問_ニ平_一日之動止_一、等ノ諸項ヲ説キ、的里沒迷的兒ヲ以テ體溫ヲ測ルベキコトヲ曰ヒ、又小便ノ理學的性狀ヲ檢スベキコトマデヲ示シタレドモ、未ダ胸部ノ理學的診斷ニハ言ヒ及ボサズ、小便ソノ他分泌物ノ化學的診法ヲモ擧ゲズ、且ツコノ書ハ鈔寫シテ門人間ニ傳ヘラレシマデナレバ、廣ク行ハルルニハイタラザリキ、高野長英ノ察病論・野呂天然ノ方鏡獨見等モ、ソノ内容ハ大抵斯書ト同様ナリ。

青木周弼ノ察病龜鑑三卷ハ扶歇蘭度（Hufeland）ノ書ヲ譯セルモノニシテ、安政四年ノ刊行ニ係ル。同年大洲ノ

人山本致美亦扶歇蘭度ノ書ヲ譯シ、之ヲ扶氏診斷ト題シ、翌年ニ至リテ之ヲ梓行ス。兩書共ニ同一ノ原書ニ依リ、

診察ヲ別チテ患者素質ノ診斷ト疾病ノ診察トシ、患者素質ノ診察ニハ、各異體質・遺傳・男女・年齢・稟賦・異

變質・局部脆薄・常習及産業・常習病及常習病毒分利・風土ヲ詳查シ、疾病ノ診察ニハ脉象・心悸・診脉法・呼吸・血液・消化機・分泌及排泄（汗・尿・津唾）・精神及神經・骨格・坐臥等ヲ檢覈スベキコトヲ説キタリ。コノ書ニアリテハ顯微鏡的検査ノ一法ヲ缺グノミニテ、ソノ他今日吾人が用フルトコロノ法ハ、固ヨリ單一粗笨ナガラモ悉ク之ヲ備ヘタリ。而レドモ胸部理學的診斷法ニ就キテハ『胸鳴ニ二般アリ、胸ヲ叩打シテ聞ク所ノモノト、直ニ耳ヲ胸ニ接シ、又ハ聽音器（又聽胸器ト譯ス）ヲ用ヒテ吸氣ノ時間ク所ノモノト是ナリ』ト言ヒテ、僅カニ肺ノ打診及ビ聽診ニ就キテ數言ヲ費スニ過ギズ。蓋シアウエンブルツゲルガ打診法ヲ發明セシハ一千七百六十一年（寶曆十一年）ナレドモ、佛國ノコルビサー（一千八百二十一年ニ歿ス）ガ再ビ之ヲ唱道セシマデハ世人ノ忘却スルトコロトナリ、レンネツクガ初メテ聽診法ヲ唱道セシハ一千八百十九年（文政二年）ニシテフリーヘランドノ著述（一千八百三十六年）ヲ距ルコト遠カラズ。ソノ未ダ我が邦醫家ノタメニ用ヒラルルニ至ラザリシバ宜ナリ。然レドモ聽胸器ハ、是ヨリ先キ嘉永元年和蘭ノ醫、門尼幾（Mohnike）之ヲ我が長崎ニ齎ラシ、譯司品川梅村之ヲ模造シ、杉田成卿ソノ模造品ヲ得テ之ヲ用ヒ、且ツ聽胸器用法略説（嘉永三年）ヲ著ハシ、之ニ依リテ心臟及ビ肺臟ノ音ヲ聽キ、以テ診斷ヲ確ムベキコトヲ詳説シタルコトアリ。故ニコノ法ハ少ナクトモ當時醫家ノ一小部ノ間ニハ行ハレタルコトヲ知ルベシ。

クルーゼンステルンノ遠征ニ從ヒテ我が邦ニ來タリタル醫家ラングズドルフ（Langsdorff）ノ紀行ヲ見ルニ、ラングズドルフ自家スラ未ダ知ラズ、又之ヲ知ルコトヲ得ザリシトコロノ心臟ノ聽診ヲ、日本醫家ハ既ニ施シ居ルヲ目撃シタリト記シタリ。コレ正ニ一千八百五年（文化二年）ノ事ナリ。余ハ未ダ事實ノ如何ヲ詳ニセズ。

脈學ハ支那醫方ノ診科ニアリテ、古來重要ノ位置ヲ占メシコトハ、上段既ニ之ヲ記述セシガ、扶歇蘭度ノ説ニモ

『夫レ診家ニ四個ノ要問アリ、一ハ則チ生力ノ景況（過不及）、二ハ則チ疾病（熱ノ有無）、三ハ則チ病性（虛實）、四ハ則チ劇易（安危）奈何、是ナリ。凡ソ初テ病者ヲ診スルトキ、此四個ノ要領ヲ辨明セント欲セハ脈ニ據ルニ如

クハナシ』ト言ヒテ、脈象ノ鑑察ニ重キヲ置キシガ、廣瀨元恭ノ西醫脈鑑三卷（安政四年刊）ハホルテユ・コンスブリユツク・毘斯骨夫・ホルメル・モルル等諸家ノ脈論ヲ譯輯シテ、西洋醫家ノ脈學甚ダ詳ナルヲ得タリ。次デ江馬聖欽ノ脉論・江馬春齡ノ診脈圖說・廣瀨周伯ノ脉原論等アレドモ、別ニ西醫脈鑑ノ所說以外ニ新シキヲ加フルモノナシ。

内科

西洋ノ醫方我が邦ニ入りテヨリ二百年、獨リ外科ノ方術ノミ行ハレテ、内科ノ學ハ尙ホ未ダ傳ハラズ。蘭學創始ノ後二十年、寛政五年ニ至リテ宇田川槐園ノ西說内科選要世ニ顯ハル、コレヲ西洋内科ノ權輿トス。コノ書ハ王函湏斯・埵・我爾德兒（Johannes de Gorier）ノ内科書（一千七百四十四年刊行）ヲ翻譯セルモノニシテ、發無定處ノ病ヲ始トシ、諸器臟系統ノ疾病ヲ說キテ、皮表ノ病ニ終ル、ソノ病ヲ說クヤ、先ヅソノ大較ヲ舉ゲ、次デ病原・區別・診候ヲ說キ、終ニ治法ヲ論ズ。所說甚ダ簡略ナリト雖モ、我が邦ニ西洋内科ノ說アルハ實ニコノ書ニ始マリ。試ミニコノ書ニ舉ゲタル疾病ノ名目ヲ一覽スルニ

（甲）發無定處

（1）熱（歇貌立私 Febris）

稽留熱

間歇熱、一名往來熱

番替熱

（2）翁篤達安篤竭意度（葛結乞西亞 Cachexia）漢人ノ所謂、脾胃虛損、面色萎黃、四肢怠惰、飲食減少、精神昏倦、情意不了等ノ證是ナリ。

（3）壤液（格爾心叔）

（4）矢苟兒陪苦（蘇格爾貌都斯 Scorbutus）醫宗金鑑ニ載スル青腿牙疳、廁子是類ナリ。

（5）聖京偏（加怛栗 Catarrh）

（6）伊偃多（遏爾的栗執私 Arteritis）

（7）諸氣（拂刺都私 Flatus）

（8）黃疸

（9）膽汁敗黑（默朗格里亞 Melancholia 又名喜剝昆埵兒 Hypochondrie）

（10）煩悶（安吉齋怛私 Anxietas）

(11) 痲 (叭刺利失私 Paralysis)

(12) 水腫

(乙) 病屬頭腦

(13) 昏睡 (卒剝兒 Sopor)

(14) 不寐 (遏厄栗布尼亞 Agrypnie)

(15) 卒厥 (設印哥百 Syncope)

(16) 頭旋眩冒 (歇而執護 Vertigo)

(17) 精神錯亂 (埵里留謨 Delirium)

(18) 曷郎布蘇對布的外金僱

曷郎布的列金僱 (的靛奴斯 Tetanus)

蘇對布的列金僱 (昆弗爾叔 Convulsio)

子宮衝逆

發兒連埵病

舞踏病

(19) 頭痛

設撥刺魯細亞 (Cephalalgia)

設撥刺亞 (Cephalaea) 雲林ノ所謂頭風

歇密葛刺泥亞 (Hemicrania) 漢醫ノ所謂偏頭痛

(丙) 病屬頸項

(20) 喉風 (安及那 Angina)

(丁) 病屬胸膈

(21) 咳嗽

(22) 吐血

(23) 胸脇痛 (布樓栗執期 Pleuritis)

(24) 肺痛 (百里布匿鳥謨尼亞 Peripneumonia)

(25) 喘急 (亞斯塔末 Asthma)

(戊) 病屬腹

(26) 嘔血

(27) 惡心乾嘔 (梗設亞 Nausea)

(28) 嘔吐

(29) 不食 (菴貌力吉砂 Anorexie)

(30) 善饑異嗜 (遏百底篤私亞里奴私 Bimbia)

(31) 暖氣、吞酸、嘈噓 (鎖達 Sod)

(32) 心腹痛 (加爾若兒如亞 Cardialgia)

(33) 發渴

(34) 食不消化 (第須百必紗 Dyspepsia)

亞百必紗 (Apepsia)

(35) 疝 (各栗葛扒叔 Colica)

(36) 口中轉尿 (荷爾弗兒斯 Volvolus)

(37) 大便秘結

(38) 乳糜利 (粟印底野 Lienterie)

(39) 霍亂 (格列刺 Cholera)

(40) 泄瀉

(41) 肝崩 (拂兒吉須斯八窠屈私 Flux spaticus)

(42) 赤利 (亞紘所拂兒吉須格碌焉都私)

(43) 痛痢 (弟生底利 Dysenteria)

(44) 重墜努責 (的匿斯謨私 Tenesmus)

(45) 諸蟲症

圖長蟲 漢人ノ所謂蛔蟲
穀道蟲 漢人ノ所謂蟯蟲
組滕蟲 漢人ノ所謂白蟲

(46) 鼓脹

(四) 病屬尿道

(47) 結石腎痛

(48) 尿血

(49) 尿崩

(50) 尿閉

(51) 淋瀝

(52) 小便不利

(53) 小便失禁

(庚) 病發皮表

(54) 痘瘡

(55) 麻疹

コノ如ク病門ヲ別ツコト五十五、病ノ屬スル所ヲ以テ、次序ヲナスト雖モ、コハ固ト撮要ノ書ナルガ故ニ、僅カニ主要ノ疾病ヲ擧グルニ止マリ、之ヲ以テ内科ノ全書トナスコト能ハズ。而カモ之ヲ支那醫方ニ比スルニ、ソノ名ヲ命ズルノ義據ルトコロ同ジカラズ、窮理ノ原見ルトコロ互ニ異ナルモノアリ。殊ニソノ病因ヲ論ズルニ、一二内景ニ依ルガ如キハ、支那醫方ニ絶ヘテ見ザルトコロニシテ、ソノ新知識ヲ當時ノ醫家ニ傳達シタルノ功ハ鮮少ナラズ。後チ槐園ノ子榛齋、父ノ遺志ヲ嗣ギテ、校訂補註ヲ施シ増補重訂内科撰要ト題シテ世ニ行フニ及ビ、コノ書ノ内容ハ漸ク整頓シタリ。

同時江戸ニ吉田長淑アリ、桂川月池ノ門ニ學ビテ蘭學ニ通ゼシガ西說内科撰要ヲ見テ、西洋内科ノ術ノ精巧ナルヲ喜ビ、之ヲ實施セントシ、乃チ原書ニ徴シテ鑽研數年、遂ニ和蘭内科ヲ立テ業ヲ中橋・上槇坊ニ開ク。ソノ標榜新異ナルヲ以テ物議紛起ス。長淑顧ミズ、内科解環・熱病論ヲ著ハシテ益々ソノ方ヲ主張シ、名聲大ニ振ヘリ。而カモ當時ノ和蘭内科ガ甚ダ不備ノモノナリシコトハ平野重誠ガ一夕醫話ニ『和蘭内科醫トイフハ、其初宇田川某ガ

桂川家ヨリ乞ヒ得タル豫伴尼春・泥・馱累低流トイフ者ノ著ハセシ内科書ヲ翻譯シ、先師櫟窓先生(多紀桂山)ノ

序ヲ乞フテ内科撰要ト題名シテ刊行セシハ、寛政四年ノコトナリシガ、ソレヨリ七八年許ヲ經テ、予ガ相識ニ吉田某トイフ醫士、此書ヲ看テ謂ヘラク、世ニ和蘭外科ハアレド、和蘭内科醫ヲ以テ家ヲ成セルモノハナシ、サレバ予コノ魁トナリテ、今ヨリ和蘭内科醫ト自稱センモノゾト計較シテ、此書ノ藥物ヲ探索セシガ、此方ニ無キ物多カリ

シカバ、其代用スベキ物ヲ其カ是カト充當シテ、試用セシカト、左右ニ缺乏ガチニテ、失籌モ亦多カリシカド新奇

ヲ好ム人情ナレバ、漸ニ蔓延シテ、甲モ乙モ唱和シ、和蘭内科醫ト稱スルモノ、歲月ヲ逐テ多クナリ行キシナリ、其頃專ニ用ル藥物ヲ視レバ、大麥・無花果・乾葡萄・接骨木葉・牛蒡根・蛇滅門草・蒔蘿子・香橙皮・水楊梅根・

西瓜子・龍芽葉、或ハ當末林特^{タマリント}ノ代用ナリトテ、青梅肉ノ汁ヲ煎熬シテコレヲ用ヒ、下劑ニハ硝石ナドヲ用ルマデ

ニアリシカド、其病狀ヲ説クトコロハ、世人ノイマダ聞ザルコト多く、藥物ハ價至テ廉ニシテ、醫人トイヘドモ、

俄二見テ何物ナルヲ知難ケレバ、遂ニコレヲ以テ世ノ耳目ヲ駭シ、俗人ヲ詒キ、己ガ拙陋ヲ覆フニ便ヨシト思ヒケレバ、愈競テ之ニ趨クモノ多クナリケルナリ』トアルニテ、ソノ一斑ヲ推知スルニ難カラズ。

我爾埜兒ゴルトエルニ嗣ギテ行ハレシハ獨逸ノ醫家昆斯貌律窟コンスブリユク(Consbruch)ノ書ナリ。コノ書ハ青地林宗・高良齋・小關三

英ノ數氏之ヲ譯述シ、小關三英ノ譯述ニ係ルモノハ泰西內科集成ト題シテ活版ニ附セラレタリ。コンスブリユツクニ嗣ギテ行ハレシハ維納ノ醫家斯篤兒苦ストルグ(Anton v. Suerck)ノ書ニシテ、足立長雋之ヲ翻譯シ醫方研幾ト題シ、天保二年之ヲ世ニシタリ、而カモコノ書ニ於テハ疾病ノ症狀ト應症ノ藥劑ヲ舉グルノミ、ソノ病因等ニハ深く論及セザリキ。

寛政ノ初年内科選要ノ翻譯アリテヨリ四十年、西洋內科ノ真相モ既ニ世醫ノ認ムルトコロトナリ、内科醫タルモルベキモノヲ修メ、コノ數科ノ學成リテ而シテ後、始メテ刀圭ヲ執ルノ順序ナルコトヲ明カニスルニイタレリ。コノ間上記ノ譯書ニ併ビテ廣川獬ノ蘭療方(享和三年)アリ、主要疾病ノ治方ヲ舉ゲ、村上正徳ノ粘敗療談(文政九年)アリ、ソノ說ニ『病ヲ爲スノ起原ハ、先ヅ食物ノ可否之ガ宗元タリト雖モ、然レドモ膽汁、脾液ノ十二指腸ニ交々注入スルコトノ適宜ヲ得ザレバ、胃腸ニシテ粘凝、或ハ腐敗ノ性ニ變シ、其過ト不及トニ由リテ病原ヲナスモノナリ』ト論ジ、ソノ胃・腸ニ粘凝敗滯スル瘀物ヲ疎滌清解スルコトヲ以テ治療ノ先務トナシタリ。小森桃塙ノ病因精義(文政九年)ハ『治療ノ標的ハ病因ニアリ』トナシ『治療ヲナスガ爲ニハ病因ヲ明ニスルノ要アリ』トシテ、精シクコレヲ攻究シ、卒中・痲病・癩瘰・頭痛・眩暈・卒厥・不寐・斃・健忘・鬱愁・癲狂・眼病(焮腫眼・膿眼・眼星・眼釘・曇暗眼・昏暗眼・内障・瞳子散大及縮小・流淚眼・內眥膿瘍・淚管瘻等)・耳病(騷鳴・耳痛・利聽・難聽・聾)・鼻病(失臭・噴嚏・濁涕・衄・鼻耳・鼻中潰瘍)・口舌唇齒病(失味・重舌・蝦蟇腫・唇裂・齒痛)・喉風・咽喉惡性焮腫・耳下泌胞腫・飲食難通(膈噎)・喘急・咳嗽・胸脇痛・肺焮腫・肺瘍・癆瘵・膈膜焮腫・胸膿病・胸水病(支飲)・吐血・心悸動・不食・飲食難化・痿黃病・饑嗜・發渴・嘈囉・惡心嘔吐・嘔血・呃逆・胃痛・胃焮腫・腹痛・腸焮腫・霍亂・下利・殮泄・乳糜利・痢病・肝崩・下血・便秘・吐糞病・蛔蟲・肝焮腫・肝硬結腫・肝閉塞・黃疸・脾病・脾硬結腫・腎痛・石淋・腎焮腫及潰瘍・膀胱焮腫及潰瘍・尿血・尿崩・白濁・遺尿等ノ疾病ヲ列舉シ、ソノ病因ニ就キテ論述シタリ。コノ書篇末ニ附スルニ治方ヲ以テシタレドモ唯ソノ概略ヲ示スニ止マリ藥方ハ別ニ泰西方鑑五卷ヲ著シテ之ヲ補ヘリ。桃塙別ニ蘭方樞機ノ著アリ、大都病因精義ニ異ナラズ。

昆斯貌律窟コンスブリユクニ次ギテ行ハレシハ澳國プラーグノ教授昆斯骨夫ビスコッフ(Bischoff ジンヨッフ)ノ書ニシテ伊東玄朴之ヲ翻譯シテ、醫療正始(天保六年刊)ト題シテ刊行シタリ。コノ書ハ二十四卷ヨリ成リ、各個ノ疾病ヲ論ズルニ、(1)名議・(2)證候・(3)經過・(4)原由・(5)轉歸・(6)豫後・(7)區別・(8)治法ノ次序ヲ以テ、精細ニ之ヲ叙述シ、附スルニ實驗例ヲ以テシ、之ヲ從前ノ譯書ニ比スレバ所說大ニ精緻ナルヲ得タリ。

次デ扶氏經驗遺訓(安政四年)アリ、コノ書ハ緒方洪菴ガ獨逸・伯林ノ教頭扶歇蘭度ノ著述(Enchiridion medicum. 1836.)ノ實際編(Praxis)ヲ翻譯セルモノニシテ、全部二十六卷、病門ヲ別ツコト之ヲ從來ノ譯書ニ比スレバ、更ニ精詳ニシテソノ病因ヲ論ジ、證候及ビ治方ヲ説クコトモ甚ダ明晰ナリ。我が邦西洋內科ハ實ニ斯書ニ依リテ始メテ大成セリト言フベシ。

フーフエラント (Christoph Wilhelm Hufeland) ハ初メ獨逸・エーナ大學ニ教授タリシガ、後チ普漏西國王ノ侍醫トナリ、一千八百十年伯林ニ新設セラレタル大學ノ教授ニ擧ゲラレ、ソノ「シヤリテー」ノ長トナリ、名聲四方ニ播揚シ、當時獨逸國第一流ノ大家タリ。ソノ著述等身トモ言フベキ内ニ經驗遺訓 (Enchiridion medicum oder Anleitung zur medicinischen Praxis, Vernächtniss einer 50-jährigen Erfahrung) ハ一千八百三十六年、ソノ將ニ病歿セントスルニ臨ミテ編述刊行セラレシモノニシテ、出版後間モナク賣盡シ、ソノ年ニ第二版ヲ出ダシ、爾來一千八百五十七年、尙ホ第十版ヲ刊行スルニ至レリ、以テソノ世ニ行ハレタルコトヲ推知スベシ。

青木周弼ガ自著察病龜鑑ニ題スル辭ニ曰ク『遠西・李漏生國ノ侍醫扶歇蘭度ハ一生ノ精神ヲ學ト濟生ニ盡シ、古今ノ偏見謬論ヲ看破シ、一二造化ノ自然ニ原キ、前賢未發ノ妙理ヲ究ム、豈ニ曠古ノ英傑ニ非ズヤ、年八十ノ頃エンシリヂヨン・メジキユムヲ撰ス、實ニ彼紀元一千八百三十六年ナリ。後チ二年ニシテ和蘭人哈傑滿之ヲソノ邦語ニ譯スル者、昔年皇國ニ船來ス。ソノ書初メ察病ノ要領ヲ提示シ、次ニ内科諸病施治ノ準則及ビ刺絡・阿片・吐藥ノ三大方、醫家ノ警戒等ヲ懇諭シ、末ニ藥劑方書ヲ附ス。ソノ三大方及ビ醫家ノ警戒ハ杉田氏既ニ譯シテ世ニ行フ。又内科施治ノ準則及ビ方書ハ頃日緒方氏之ヲ譯行ス。余昔年暇日卷首ノ察病法一篇ヲ譯シ、分テ三卷トナシ、察病龜鑑ト名ヅク』ト、亦以テフーフエラントノ著述ガ、當時我ガ邦ノ醫學ノ開發ニ與カリテ、大ニ力アリシコトヲ知ルベシ。

次テ英醫合信ガ漢譯ノ内科新說ノ我ガ邦ニ翻譯セララルアリ、兒玉順藏ガ公刺地 (Conradi) ノ内科書ヲ翻譯スルアリ (公氏醫家玉海、萬延元年)。坪井信良ガ俟斯達篤 (Canstatt) ノ内科書ヲ翻譯スルアリ (俟斯達篤内科書)。坪

井芳洲ガ列鼈爾篤 (Lebert) ノ内科書ヲ翻譯スルアリ (醫療新書、慶應二年)。江馬榴園ガ奎速篤 (Tissot チソー) ノ内科書ヲ翻譯スルアリ (奎速篤内科書)。ソノ他壽微典 (Swieten) 斐仙 (?)・蒲昌 (?) 等ノ内科書モ傳ハリテ、西洋内科ノ學ハ甚ダ精詳ナルヲ得タリ。

西洋内科ニ關スル載籍ノ世ニ行ハルルモノコノ如ク多數ナリシ間ニ、實際ノ方面ニアリテモ、吉田長淑ガ始メテ蘭方内科ヲ以テ業ヲ江戸ニ開キシ以來、内科専門ヲ以テ家ヲ成セルモノ尠カラズ。而カモソノ治術ハ徒ニ之ヲ書籍ノ上ニ得タルモノナリシガ、文政六年獨逸ノ醫家シーボルトガ我ガ長崎ニ來タリ、譯官檜林ノ家ニ於テ臨床講義ヲナシ、又鳴瀧ニ校舎ヲ開クニ及ビテ、我ガ醫家ハ始メテ實地ニ就テ診察治病ノ術ヲ傳へ、ソノ門ヨリ出デタル伊東玄朴・竹内玄同等ハ遂ニ内科ヲ以テ名聲ヲ當時ニ播揚シタリ。

伊東玄朴、名ハ淵、字ハ伯壽、冲齋ト號ス、肥前ノ人。年十六ニシテ醫ニ志シ、年二十三ノ時、佐賀ニ出デ蘭方醫家島本龍昌ノ門ニ入り、蘭書ヲ修ム。幾モナク長崎ニ出デ、譯司猪股某 (傳治右衛門) 及ビ獨逸人シーボルトニ就キ蘭語及ビ蘭醫方ヲ學ブコト數年、文政九年江戸ニ出デ淺草ニト居シテ蘭書ヲ教授ス。幾モナク郷ニ歸リシモ、後チ再ビ江戸ニ來タリ、下谷・長者町ニ醫業ヲ開ク。天保四年和泉橋通・徒士町ニ轉住シ醫療正始ヲ著ハシテ梓行ス。コレニ依リテソノ名益々顯ハレ、天保十二年鍋島侯ノ醫官トナリ、安政五年七月擢デラレテ奧醫師トナリ、法印ニ叙シ、長春院ノ號ヲ賜フ。是ヨリ先キ、玄朴府下ノ蘭醫方ヲ奉ズルモノ八十餘名ト謀リ、種痘所ヲ建テ、同學相集マリテ學術ヲ攻究スルノ所トセシガ、文久元年ニ至リ、幕府ソノ資ヲ助ケ、大ニ規模ヲ改メ、更ニ教授職ヲ置キ、學生ヲ誘掖スルノ所トナシ、西洋醫學所ト改稱シ玄朴

ハソノ取締ヲ命ゼラル。後チソノ官ヲ辭シ、家ヲ養嗣子玄伯（後チ方成ト改ム）ニ譲リ、横濱ニ退隱シ、明治四年、七十二ニシテ歿ス。（伊東玄朴傳）

竹内玄同、名ハ幹、西坡ト號ス、字ヲ以テ行ハル。賀州・大聖寺ノ人、幼名騏驎太、叔父玄秀ノ家ヲ嗣グ、玄秀世々越前・丸岡侯ノ醫官タリ、壯年京師ニ遊ビ藤林普山ニ從テ蘭學ヲ攻メ、後チ長崎ニ至リシーボルトニ從ヒテ醫ヲ修メ、伊東玄朴・戸塚靜海等ト友トシ善シ、學成リテ郷ニ歸ルニ及ビテ、侯擢デテ侍醫トナス。幾モナクシテ居ヲ江戸ニ移シ芝・露月町ニ僑居ス。後チ木挽町ニ移ル、天保十三年蘭書翻譯手傳ヲ命ゼラレ、後チ又居ヲ麴町・三軒屋移ス。安政五年七月將軍家定病アリ、乃チ玄同及ビ伊東玄朴・戸塚靜海ノ諸家ヲ舉テ侍醫トナシ、醫藥ヲ進メシム。實ニコレ幕府ノ西洋内科術ヲ採用セルノ始ナリ。後チ進ミテ法印ニ叙シ、渭川院ト號ス。西洋醫學所長ヲ兼ヌ、文久三年三月將軍家茂ニ從テ京師ニ入ル。既ニシテ公病篤シ、玄同夙夜侍奉、蓐側ヲ離レズ、時ニ適々眼ヲ病メルモ自治ニ暇アラズ遂ニ明ヲ失フ。慶應二年一月家茂遂ニ薨ス。是ニ於テ仕ヲ致シ、自ラ風香ト號シ、專ラ懷ヲ風月ニ寄セテ、復タ世事ヲ問ハズ、明治十三年壽ヲ以テソノ家ニ歿ス、享年七十七又六。（竹内玄同傳・墓誌）

西洋内科ハコノ如クニシテ、大ニ發達シ、ソノ術亦大ニ世ニ行ハルルニ至リシカバ、當初多紀桂山ガ漢方醫家ノ泰斗トシテ宇田川槐園ノ内科選要ニ序シテ『論理弔詭、遽見レ之、有ニ疎然骨驚者一、有ニ茫乎不レ得ニ涯際一者上、然究ニ其歸趣一、如ニ利氏脬豆之喩一與、所謂大氣舉之相符、則亦與ニ軒・岐諸家之之旨一、將レ無レ同邪、抑且斷乎、別闡ニ發人身精微之理於五臟六腑經絡營衛之外一、設ニ處療之法於汗吐下和溫之所一不レ及者邪、要レ之、學者宜ニ於異同離合之間、質驗參審以悟ニ軒・岐不傳之奇秘一矣、若夫篤癡積痼、醫經所不レ載、醫流所不レ識、可ニ籍而得一レ起、則生生之具、靡レ有ニ缺遺一、』ト言ヒシ穩當ノ意見モ、漸次ニ其ノ方針ヲ變化シテ、益々之ヲ嫉惡スルノ傾向ヲ生ジ、一方ニアリテハ『彼ガ說ハ、スベテ織密ニ似タリト雖モ、畢竟其建ル所ノ教トイフモノ、已ニ天地ノ大道ニ違背シ、全ク偏智ヲ以テ推シ窮メントスルノミ、又彼ガ說ノ我邦ニ在テ之ヲ學バントスレバ、大ニ人情ニ戻リ、風土ニ應ゼズシテ天下ノ巨害トモナルベシ』ト論ジ、當時江戸醫學督事タリシ多紀（樂眞院）・辻元（爲春院）等ハ時ノ執政ニ強請シテ、遂ニ嘉永二年『近來蘭學醫師追々相増世上にても信用いたし候もの多有之哉に相聞候、右者風土も違候事に付、御醫師中者蘭方相用候義御制禁被仰出候旨得其意堅く可被相守候。但し外科眼科等外治相用候分は蘭方參用致候ても不苦候』ノ、禁令ヲ發セシメ、又一方ニアリテハ『發泡、瀉血、水銃、蟻鍼等ノ事件ニ至テモ、惣テ西洋ニ始マルモノト思フハ古昔ニ明ナラザルガ故ナリ』ト言ヒテ、コレ等ノ治術ハ古ヨリ漢土及ビ我ガ邦ニ存セリトシ、以テ西洋内科ノ貴ブベキニアラザル事ヲ唱フル者アリ。（平野重誠ノ一夕醫話・今村了庵ノ醫事啓源等）コレ等ノ所說ハ、當時政治社會ニ勢力アリシ攘夷ノ論ト共ニ、ソノ勢力ヲ加ヘ『醫術ヲ假テ、邪教ヲ弘メントスル詐僞ノ術ハ實ニ怖ルベシ』トマデ論ズルニ至リシガ、外交ノ問題益々切迫シ、世界ノ大勢漸ク明カトナルニ及ビテ、コレ等ノ俗論ハ永クソノ勢力ヲ保ツコト能ハズ。安政五年ニハ幕府自カラ前日ノ禁令ヲ廢シ、松本良順ヲ長崎ニ遣シテ蘭醫ボムペニ就テ西洋醫學ヲ傳習セシメ、文久二年ニハ伊東玄朴・林研海ノ二人ヲ和蘭ニ留學セシムルニ及ビテ、西洋醫學ハ遂ニ公然世ニ行ハルルヲ得ルニイタレリ。

外科

和蘭流外科ハ既ニ古昔ヨリ久シク世ニ行ハレタレドモ、寶曆・明和ノ頃ニ至ルマデハ僅カニ長崎ノ譯司ガ出島ノ蘭醫ニ就キテ、耳聞面晤ニ得タル方術ノミニ止マリシガ、吉雄耕牛出ヅルニ及ビテ始メテ蘭書ヲ讀ミ且ツ蘭醫ニ親炙シ、ソノ術ニ於テ大ニ得ルトコロアリ、或ハ刺絡ノ術ヲ施シ、或ハ腫瘍ヲ截除スル等ノ手術ヲ施セシ事アルモ、

著述ノ行ハルルモノナキガ故ニ、ソノ術ハ未ダ廣ク世ニ傳ハラズ。杉田玄白、吉雄耕牛ヨリハイステル (Lorenz Heister) ノ外科書ヲ得テ之ヲ譯シタレドモ、ソノ業ハ僅カニ金創篇ノ翻譯ヲ卒ヘタルノミ、大槻玄澤ソノ遺志ヲ嗣ギ、遂ニ瘍醫新書五十卷(寛政四年)ヲ成スニ至リテ西洋外科ノ攻究ハ始メテソノ緒ニ就キタリ。ハイステルハ獨逸ニ於ケル科學的の外科ノ創始者ニシテ、ソノ外科書ハ初學入門ノ規則ヨリ百般ノ治術・療法及ビ繃帶諸式・使用ノ器械等、凡ソ外科ニ關スルモノハ悉ク網羅シテ遺スコトナク、歐洲ニアリテモ、各國ノ語ニ譯セラレ、一時大ニ世ニ行ハレタリ、大槻玄澤ノ瘍醫新書ハハイステルノ書ヲ全譯セシモノニシテ、誘導編・手術編・創痕編・繃帶編・刺絡編・骨傷脫臼編等ヨリ成リ、ソノ刺絡編ハ八刺精要ト題シ、門人佐々木仲澤増譯シテ、文政八年之ヲ刊行シ、刺絡ノ方法・器械及ビソノ適應・禁忌ヲ詳述シタリ。繃帶編ハソノ子大槻玄幹又ソノ要ヲ撮テ更ニ圖式ヲ加ヘテ外科收功ト題シテ、之ヲ刊行セリ。治術篇中臀肛手術ニ係ル部ハ、大槻玄幹増修シテ要術知新三卷トナシ、文政六年之ヲ刊行シ、灌腸・胞消息子用法・痔漏手術・痔核手術ヲ詳述シ、灌腸器・胞消息子カテーター・痔漏鏡(肛門鏡)・痔漏刀・消息子、等ノ圖ヲ示シ、ソノ用法ヲ説キタリ。(コレ等ノ圖式ヲ一覽スルトキハ、華岡流外科ノ痔漏手術及ビ之ニ用ユル器械ガ、コレ等ノ書ニ本ヅキシコトヲ知ルニ足ル)。又是ヨリ先キ、桂川甫周ノ海上備要方外傷篇(文化十二年ソノ孫桂川甫賢之ヲ校刊ス)アリ、外傷ノ處置ヲ記述シタリ。然レドモコレ等ノ書ハ、スベテ外科ノ一部ヲ論ズルノミ、ソノ全書ト稱スベキモノハ、實ニ杉田錦腸ノ瘍科新選(天保元年刊)ヲ以テ嚆矢トスベシ。

瘍科新選ハ奥國布斂吉ブレンキ(Joseph Jacob Plenck)ノ外科書ヲ翻譯セルモノニシテ、腫瘍・潰瘍ヨリ創傷・脫垂・骨病・不具諸編ニ至ルマデ、凡ソ外科ノ術ニ係ルモノヲ叙述スルニ、左ノ如キ次序ヲ以テシタリ。

(1) 腫瘍

焮衝腫

膿腫(聚膿腫・胸膿腫)

壞疽(乾壞疽・濕壞疽・疔瘡)

硬腫(固結腫・癌腫・瘰癧・嚔囊腫・結核腫)

水腫(蓄水腫・鹹液腫・水脈腫・體水腫・頭水腫・脊髓水腫・胸水腫・腹水腫・關節水腫)

血腫(血斑・眞動脈腫・假動脈距・靜脈腫・痔脈腫)

囊腫(蜜腫・糊腫・脂腫・骨脂腫・水囊腫・脂肪腫・豆腫・筋核)

肉腫(肉腫・母斑・角腫・齒齦息肉・鼻痔・子宮及膻息肉)

土腫(土腫・痛風腫・舌石)

氣腫(體氣・體氣腫・頭氣腫・頸氣腫・鼓脹)

唾液腫(痰包)

膽液腫(膽囊腫)

尿腫(膀胱腫)

滯腫(乳房滯腫・四支滯腫)

(2)

潰瘍

單瘍

窠瘍

管瘍

睡瘍

水綿瘍（贅疣症・廣潤症・突肉症・嶮惡症）

脂肉瘍

壞血瘍

黴毒瘍

癌毒瘍（固結樣症・神經樣症・小綿症）

腐骨瘍

經久瘍

死壤瘍

饒膿瘍

蟲瘍

痂瘍

頭瘍（頭癬・禿瘡）

鼻瘍（癌樣・梅毒・腐骨）

耳竅瘍

唾管瘍

顎管瘍

咽喉瘍

鷺口瘍

頸瘍

胸管瘍

乳房瘍（乳瘍・乳癌）

痔漏（內外貫透症・外部開孔症・內部開孔症）

會陰管瘍

（3）

脫垂

脫肛

脫腔

子宮脫

（4）

創傷

切創

突創

綻創（銃創・不貫創）

毒傷（狂犬咬傷・毒蛇咬傷）

神經創

腱創

血脈創（動血脈創・靜血脈創）

水脈創

關節創

骨創

頭創（淺創・深創・貫創・斜創・切除創）

面創

頸創

胸創

腹創

暗傷

ソノ記述甚ダ簡略ニシテ、只診断及ビ治法ノ要旨ヲ舉グルニ過ギズト雖モ、和蘭外科ニ全書アルハ斯書ニ始マルガ故ニ、我が醫家ハ之ニヨリテ始メテ西洋外科ノ真相ヲ明カニスルコトヲ得タリ。

次デ文政六年シーボルトノ來朝スルニ遇ヒ、戸塚靜海等之ニ就キテ西洋外科ノ術ヲ受ケ、從來僅カニ書冊ノ上ニ臆斷セシトコロノモノヲ實際ニ習得シ、外科専門ヲ以テ業ヲ江戸ニ開キ、名聲甚ダ籍甚タリ。同時佐藤泰然アリ、長崎ニ赴キテ蘭醫ニーマンニ就キ、外科術ヲ學ブコト四年、天保十一年江戸ニ來タリテ業ヲ開キ、後チ去テ佐倉ニ赴ムキ、自カラ病院ヲ建テ、學舎ヲ起シ、大ニソノ術ヲ行フ。西洋外科ハ此ニ至リテ始メテ膏藥ノ境界ヲ離レ、當時華岡青洲ヲ祖トセル漢・蘭折衷派ノ外科ニ對シテ、儼然トシテ西洋外科ノ一派ヲナシ、截除・截斷・血管結紮等、靈活ナル手術モ施サルルニイタレリ。

戸塚靜海、名ハ維泰、字ハ漢德、晩ニ春山ト號ス、遠州・掛川ノ人ナリ。父培翁醫ヲ以テ藩侯ニ仕フ、三子アリ。靜海ハソノ季ナリ、年十八藩醫十束井齋ニ從テ蘭書ヲ講ズ、旁ラ漢學ヲ松崎慊堂ニ受ク。二十二歳ニシテ宇田川榛齋ノ門ニ入り、精苦人ニ超ユ。偶々シーボルト長崎ニ來リ醫術ヲ施シ、且ツ校舍ヲ鳴瀧ニ開キテ醫學及ビ植物學教授ヲ開キ、名聲四方ニ震フ、榛齋素ト靜海ヲ器トシ、因テ勸メテ遊學セシム。シーボルト亦喜テ以テ人ヲ得タリトナス、時ニ文政七年某月ナリ。靜海既ニシーボルトニ親炙シ、學業日ニ進ミ同門ノ士、高良齋・伊東玄朴・高野長英等ト名ヲ齊フス。居ルコト數年（文政十二年）會々シーボルトノ獄ニ坐シ、高・高野諸士三十餘人ト共ニ囚ニ就ク、數月始メテ赦サル。而シテシーボルトハ即チ既ニソノ國ニ追放セラル。是ニ於テ四方來リ學ブモノ皆ナ靜海ヲ推シテ宗トナス。靜海長崎ニ留マルコト八年、再ビ江戸ニ來リ茅場街ニ居リ、聲望益々盛ナリ。靜海初メ太田侯ニ仕フ。年四十四ノ時、薩摩侯請テ以テ藩醫トナス。侯夙ニ賢明ノ稱アリ、深ク靜海ノ用フベキヲ知り、眷注太ダ厚シ、靜海亦其知遇ニ感ジ、事ニ隨テ啓沃スルコトコロ多シ、既ニシテ侯卒ス。安政五年大將軍溫恭公疾篤シ、幕府乃チ靜海及ビ伊東玄朴・竹内玄同等ヲ舉テ内班醫師トナシ、法印ニ叙ス。西洋醫家ノ侍醫ニ舉ラルルコト、實ニ此ニ始マル。

是ヨリ先キ、蘭醫所在ニ崛起スト雖モ、而モソノ講論スルコトハ概ネ載籍上ノ事ニ係カル。靜海ニ至リテ始メテ西洋名醫ニ親炙シ、最モ外科ニ長ジ、ソノ手術實用ヲ究ム。靜海ノ世ニアルヤ、坪井信道・伊東玄朴ト巍然鼎立シ、世ニ稱シテ近世洋方ノ三大家トナスト言フ、明治九年一月病テ家ニ歿ス、年七十八、義子文海業ヲ受ク。（墓誌）

佐藤泰然、名ハ信圭、紅園ト號ス、ソノ先ハ源廷尉ノ功臣嗣信ニ出ヅ、世々莊内・増川邑ノ豪族タリ。父名ハ信隆、江戸ニ來リ、田邊氏ヲ娶テ二子ヲ城南稻毛邑ニ生ム。泰然ハソノ長子ナリ、既ニ長ジテ足立長雋ニ從テ蘭醫方ヲ學ブ、偶々高野長英長崎ヨリ歸ル、長英ハ吉田長淑ノ弟子ニシテ長雋トハ同門ノ友タリ、西學ニ精シキヲ以テ世ニ鳴ル。泰然乃チ往テ業ヲ受ケ、且ソノ友松本良甫ト胥ヒ謀リ一切ソノ家事ヲ經紀ス、然レドモ長英疎放ニシテ酒ヲ嗜ミ、人ヲ教フルヲ屑トセズ、泰然ソノ志ノ遂ニ果シ難キヲ知り身ヲ挺テ西長崎ニ遊ビ、譯官末永某ノ家ニ寓シ、蘭人ニーマンニ就テ業ヲ問フ、居ルコト四歲ニシテ學成リ、天保庚子ノ歲江戸ニ還テ、本姓ニ復シ、業ヲ兩國・藥研堀ニ開キ、幾モナク名聲大ニ起ル。既ニシテ謂ラク、術ヲ售ルニハ伊東玄朴アリ、學ヲ講ズルニハ坪井信道・箕作阮甫等アリ、江戸ハ遂ニ取ルベカラズト。乃チ去テ佐倉ニ赴キ自ラ病院ヲ立テテ名ヲ順天堂ト曰フ。遠近來リテ治ヲ請フモノ相繼ギ、院内復タ虛室ナシ、是ヲ我が邦私立病院ノ始トナス。又學舎ヲ建テテ大ニ諸生ヲ教導シ、名聲日ニ噪シ。城主堀田侯禮ヲ厚シテ之ヲ聘ス、由テ出デテ侯ニ仕ヘ、献替スル

トコロ多シ。後子業ヲソノ嗣尙中ニ譲リ、退隱シテ横濱・本辨天街ニ家シ、優遊自適、餘生ヲ樂ム。明治四年東京ニ遷リ翌五年四月十日病ヲ以テソノ家ニ歿ス、享年、六十又九。五男アリ、長男ヲ總ト曰ヒ、次ヲ順ト曰ヒ、季ヲ董ト曰フ。ソノ二天ス、長子總ヲシテ出デテ山村氏ヲ嗣ガシメ、順ヲシテ松本氏ヲ嗣ガシメ、董ヲシテ林氏ヲ嗣ガシム。而シテ特ニ門人山口舜海ヲ養テ後トナス、舜海後名ヲ尙中ト改ム。泰然雅量アリ、衆ヲ容レ客ヲ愛ス、故ニソノ門下名ヲ成スモノ尠カラズ。林洞海・三宅良齋・山口舜海・岡南洋等ソノ選ナリ。(小傳)

コノ如ク天保年間西洋外科ノソノ面目ヲ一新セルヨリ、外科ニ關スル著述モ尠カラズ。箕作阮甫ノ外科必讀(十三卷)・宮本阮甫ノ瘍科新選・鹽田良珉ノ和蘭外科全書・關口自安ノ外科要方・般曳卓堂ノ窒篤滿外科書(Timmann)・大槻俊齋及緒方郁藏ノ設劉私外科書等アレドモ、ソノ多クハ抄寫ノ儘ニテ世ニ傳ヘラレ、廣ク世ニ行ハルルニ至ラズ。安政五年三宅良齋、英醫合信ガ西醫略論(成豐七年上海刊行)ヲ取テ、コレニ訓點ヲ加ヘ、翻譯シテ世ニ行ヒ(安政五年)シヨリ西洋外科ノ知識ハ益々普及シ、次デ佐藤尙中(泰然ノ子)ガスストロマイエル篤魯謎兒(Stromeyer)ノ外科書ヲ翻譯シ、外科醫法ト題シテ、世ニ行フニ至リテ外科ノ學ハ大ニ備ハレリ。

三宅良齋、名ハ溫、字ハ子厚、肥前ノ人、初メ、榎林榮建ニ從テ蘭學ヲ修メ、後東遊シテ江戸ニ至リ、佐藤泰然ニ就テ學ビ、佐倉候ニ仕ヘテ醫官トナル、慶應四年歿。(傳記)

佐藤尙中、名ハ舜海、笠翁ト號ス、本姓山口氏、其師佐藤泰然ニ養ハレテ嗣トナル、ヨリテ佐藤氏ヲ冒ス。尙中年十六江戸ニ出デテ佐藤泰然ノ門ニ入り、蘭醫方ヲ修ム、安政年間父泰然ニ從ヒテ佐倉ニ移リ侍醫階ニ擧ゲラル、後子長崎ニ赴キ蘭醫ポムベニ就テ醫方ヲ修ム、明治三年大學東校ニ出仕シ、大博士トナリ大典醫ヲ兼ヌ、尙中父翁ノ志ヲ繼テ一大病院ヲ東京ニ建ツ、順天堂コレナリ、明治十五年歿ス、年五十六。(傳記)

眼科

蘭學創始ニ依リテ、眼科ノ學術ニ著明ノ變化ヲ致セシコトハ既ニ之ヲ述ベタレドモ、眞ニ西洋眼科ノ真相ヲ、我が邦ノ醫界ニ紹介シタルハ澳國布斂吉ブレシキノ眼科書ニシテ杉田錦腸ガ文化十二年ニ眼科新書ト題シテ梓行セシモノハ、ソノ書ヲ翻譯セシモノナリ。杉田紫石ノ序文ニ『家翁(杉田玄白)毎歎曰、人之喪レ明、尤爲ニ大患一、豈可レ無ニ良術一乎、蓋蘭人之格物究理、其專門必當レ有下能盡ニ其精微ニ者上如幸獲レ之、而譯行以博供ニ濟生一、則吾願足矣、一日余過ニ大槻磐水一、而見ニ蘭書一帙一、即此編也、余乃袖而歸、以供ニ家翁之覽一、家翁一覽、鶴躍大喜、遽就講レ之、以藏ニ家塾一、向宇榛齋(宇田川)譯レ之、然多事鞅掌、不レ遑ニ脫稿一、後任ニ家弟(立卿、名ハ豫、錦腸ト號ス)譯ニ訂之、云々』トアルヲ見テ、當時眼科ノ術ガ、最モ不振ノ状態ニアリシコトヲ推想スベク、而シテ實驗醫學ノ勃興ニ際シテ、先ヅ改革セラレザルモノハ眼科ナリシコトモ想像セラルベシ。コレ未ダ西洋外科ノ全書アラザルニ、早ク既ニ眼科全書ノ世ニ現ハレタル所以カ。ソノ内容ノ梗槩ヲ擧グレバ、卷一ハ眉病・睫毛病・眼瞼病ノ諸篇、卷二ハ淚管病・白膜病ノ諸篇、卷三ハ角膜病・眼球病・蒲桃膜病ノ諸篇、卷四ハ水樣液病・水晶液病・硝子液病ノ諸篇、卷五ハ網膜病篇ニシテ別ニ附録卷一アリ、眼科藥方ヲ輯録セリ。原書ハ澳國ブレンキブレンキノ著ヲ和蘭人プロイスノソノ邦語ニ譯セシモノニシテ、鏤版ハ彼ノ邦一千七百八十七年(我が天明三年)ニアリ。コノ譯書刊行ヨリ三十年前ノ書ナリ。病門ハ前述ノ如ク十二篇ニシテ、外部ヨリ内部ニ至リ病ノ屬スルトコロヲ以テ次序ヲ爲シ、眉睫ニ始

マリテ網膜ニ終ル。病症凡ソ一百十八症ヲ舉ゲ、ソノ卷首ニ眼球解剖圖說ヲ載セタリ、ソノ說ハ西洋ノ書ニ採リ、ソノ圖ハ譯者自カラ解視シテソノ眞ヲ寫セシナリト言フ。

眼科新書ノ翻譯ハ、所謂我ヨリ古ヲ爲スノ業タリ、眼目諸症ノ譯語ハ始メテ、コノ時ニ選定セラレタリ、百般ノ病證、漢ニ名アルハ之ヲ用ヒ、漢ノ名ヲ以テ對譯スベカラザルモノハ新ニ譯字ヲ選ビ、若クハ既ニ漢人ノ譯ヲ經ルモノハ之ヲ襲用シ、或ハ漢人ノ譯例ニ依リテ新ニ之ヲ製スル等、創業ノ辛苦ヲ想フベシ、請フ眼科新書ニ舉ゲタル眼證一百十八症ノ稱呼ヲ左ニ序列シテ、以テ當時ノ眼科ガ認識セル疾病ノ種類ヲ示シ、併セテ我ガ眼科譯語ノ淵源ヲ示サム。

眉病

眉睫落毛 眉睫生虱 眉創

睫毛病

睫毛內刺 重睫

眼瞼病

眼瞼閉着 瞼著眼球 眼瞼焮腫 眼瞼蓄水腫 眼瞼空氣腫 眼瞼青斑 眼瞼糊瘤 眼瞼肉瘤 眼瞼固結腫 眼瞼瘡 眼瞼疫毒腫 眼瞼麥粒腫 眼瞼雹腫 眼瞼水泡 眼瞼稗腫 眼瞼桑椹腫 眼瞼疣 眼瞼溢刺 上瞼下垂 眼 眼瞼外反 眼瞼內反 眼瞼疥癬 瞼緣赤爛 瞼緣睡硬 眼瞼創 眼瞼癢 眼瞼破裂 眼瞼瞬動 眼瞼牽急 眼瞼瘙痒

淚管病

眼目乾燥 淚出不止 眼眇 淚囊蓄水腫 大眇腫蕩 淚管癢 大眇瘍肉 淚阜毀損 眼眇爛蝕 大眇污穢 帶

血淚出

白膜病

焮腫眼 疼痛眼 白膜脈腫 白膜血斑 白膜膿疱 白膜水疱 白膜痞瘤 白膜顆肉 白膜疫毒腫 白膜潰瘍 砂塵入眼

角膜病

角膜曇暗 角膜污點 角膜翳翳 角膜葡萄腫 角膜膿瘍 角膜潰瘍 角膜癢 角膜創 角膜皺縮 角膜膿疱 角膜水疱 角膜肉粒

眼球病

眼球減耗 牛眼 眼球突出 眼球癌 眼球緊急 眼球瞞動 剛膜創 眼球脫失 眼目過多

蒲桃膜病

瞳孔潤大 瞳孔收小 瞳孔縮閉 蒲桃膜附着 蒲桃膜突出 蒲桃膜創 瞳孔變形 瞳孔異常 瞳孔不足 瞳孔

不動

水樣液病

水腫眼 膿眼 血眼 乳眼 水樣液渾濁 水樣液漏泄

水晶液病

內翳眼 水晶液突出

硝子液病

綠眼 硝子液烱解 硝子液突出

網膜病

羞明眼 黑障眼 強過眼 乏弱眼 晝盲眼 晚盲眼 近視眼 遠視眼 半形眼 黑點眼 垂羅眠 隔霧眼 不

眞眼 異色眼 火屑眼 斜視眼 斜動眼 兩形眼

眼科新書既ニ行ハレテ、西洋眼科ノ術ハ、我が邦醫家ノ知ルトコロトナリシガ、コノ時獨逸人シーボルト（傳ハ前二出ツ）ノ長崎ニ來タリ、ソノ眼科ヲ善クスルヲ以テ、門人ニ高良齋・土生玄碩等ノ諸家アリ、高良齋ハ大阪ニアリ、土生玄碩ハ江戸ニ在リ、共ニ西洋眼科ヲ以テ一家ヲ成シ、殊ニ土生玄碩ハ手術ニ就キテ改革スルトコロ甚ダ多ク、斯科舊來ノ面目ヲ一新シ、我が邦始メテ實驗的眼科アリ。

土生氏ノ學說ヲ傳フルモノ師談錄・癩察錄等ノ書アリ、コレ等ノ書中ニ記載セルトコロニ徵スルニ『唐・宋諸家、五輪八廓、五臟配當ノ說ハ、妄ト謂フベシ、然レドモ其中亦確言廢スベカラザルモノアリ、若シ夫レ和蘭ノ手術・製煉、萬國其右ニ出ルモノナシ、然レドモ風土宜ヲ異ニス、遽ニ施用シ難シ、況ヤ言語侏儻、文字橫行、譯者若シ一タビ誤レバ、即チ千萬人ヲ誤ル、慎重セザルベケンヤ、獨得ノ方術ニ至リテハ、即チ超然一幟ヲ建テ漢・蘭諸說ヲ屑トセザルモノアリ』ト論ジ、ソノ治術ニ於ケル、專心殫思、漢・蘭ヲ折衷シ、之ヲ實地ニ試ミ、之ヲ眞境ニ驗シ、造詣スルトコロアリ。ソノ手術ニハ剝洗・破鍼・鉤針・鉞胞・捻出・小鋒針・燒針・緊鉞・刺絡等ノ諸法アリ、然レドモ、玄碩常ニ門生ヲ戒メテ曰ク『治術ハ之ヲ活用スベシ、機ニ臨ミ變ニ應ジ畫一ナルベカラズ』ト。ソノ識見想フベシ。

玄碩江戸ニ來ルヤ初メテ贄ヲ執ルモノヲ高野敬仲トナス。敬仲ハ岑少翁ノ門人ナリ、一日少翁ニ語テ曰ク『一奇談アリ、土生玄碩眼病ヲ療スルニ眞珠ヲ用ヒズ』ト。少翁之ヲ聽テ大ニ嘆ジテ曰ク『特見アルモノハ人ノ取捨ニ從ハズ』ト。蓋シ當時ノ眼科ニアリテ眞珠ノ無効ヲ論ズルガ如キハ、眞ニ破天荒ノ事ニシテ、時人ヲシテ喫驚セシメシヤ論ナシ。本庄普一ノ眼科錦囊ニ『珍珠、今世眼科之徒、專爲ニ眼疾通治之貴藥、而無下レ配ニ于點藥二者上、至ニ其太迂者、則以爲ニ内服、以治ニ内障、患家亦信ニ庸醫之言、頻請レ用レ之、故姦工賊醫設ニ計于貝珠、欺ニ瞞患家、而釣レ利、網レ貨、甚爲レ可レ惡』ト言ヒ、ソノ弊風ヲ論ジテ遂ニ珍珠ノ主治スルトコロハ石灰牡蠣ノ品類ト相似タルモノナルコトヲ辨ゼリ、コレ土生氏ガコノ物ノ無用ヲ説キテヨリ二十年後ノ言ナリ。

土生玄碩ハソノ說ヲ西人ニ聽キテ、苒若ヲ用ヒテ瞳孔ヲ散大スルノ法ヲ實行セリ。瞳孔ヲ散大スルトコトノ白内障手術ニ至大ノ便宜ヲ與ルコトハ言フニ及バズ。而シテ、土生以前ノ我が眼家ハ夢ニダモコノ事ニ想ヒ及ボサザリシナリ。土生玄碩ハ又眼科ノ手術ニ就キテ幾多ノ改良ヲ施セシガ、中ニ就キテ特ニ擧グベキハ膿眼摘出ノ法ト穿瞳術トナリ。初メ玄碩郷ニ在ルノ日、馬醫ノ三稜鍼ヲ以テ馬ノ角膜ヲ刺シ、鉤ヲ創口ヨリ入レテ病的內容ヲ鉤出スルノ法ヲ施スヲ觀テ、悟ルトコロアリ。膿眼摘出ノ術ヲ案出シ、之ヲ實際ニ試ミテ偉効ヲ得タリ。後チ又穿瞳ノ術ヲ發明ス。ソノ法眼針ヲ取り、角膜縁ヲ距ル一米粒徑ノ結膜ニ、斜ニ瞳孔ノ後部ニ刺シ、針尖ヲ瞳孔ノ中央ニ透視スルニ至リ、直ニ水晶體ヲ針尖ニカケ、押壓シテ下方ニ脱セシムルモノニシテ即チ假瞳孔術ナリ。後チシーボルトニ江戸ニ親炙スルヤ、玄碩金銀兩鍼ヲ出シテ之ヲ贈リ、且ツソノ術式ヲ示ス。シーボルトソノ蘭法ニ暗合セルヲ奇トシ、爲ニ詳ニ蘭醫セセルデンノ手術ヲ説キ、玄碩ノ術ハ之ニ依リテ益々發達セリ。

土生玄碩、名ハ義壽、幼名久馬、桑翁ト號ス。安藝國吉田ノ人、本姓渡邊氏、十數世ノ祖小太郎義隆、足利義教ニ仕フ。義教死スルノ後、亂ヲ避テ朝鮮ニ赴キ眼科ヲ修ムルコト七年、歸朝ノ後安藝ノ土生ニ居ル、因テ氏ヲ土生ト改ム。數世ノ孫義賢、毛利元就ノ侍醫トナリ。義賢ノ子義道、毛利輝元ニ從テ萩ニ移ル。義道ノ子義次江戸ニ召サレ、侍醫法眼ニ任ゼラル。其子義里同ジク法眼タリ。義次ノ弟義孝移テ吉田ニ居リ、世々眼科ヲ業トス、義辰ハ即チ玄碩ノ父ナリ。

玄碩幼ニシテ漢籍ヲ藩儒某ニ受ク。十七歳、京師ニ遊ビ醫ヲ和田泰純ニ學ビ、五年ヲ經テ郷ニ還リ、箕裘ノ業ヲ嗣グ。當時眼科ノ徒、單ニ家習ヲ奉ジ、師授ヲ信ジ、傲然トシテ傳下ノ舊習ニ矜リ、囂然トシテ門派ノ高低ヲ爭ヒ、ソノ治術ニ至テハ疎拙觀ルニ堪ヘザルモノアリ。玄碩コノ間ニ起テ深思苦慮、治法ヲ精究シ、手術ヲ工夫シ、ソノ名聲大ニ揚ル、文化五年四月廣島侯ノ女南部大膳大夫ニ嫁シ、江戸ノ邸ニアリ、眼ヲ病ム。衆醫ヲシテ之ヲ治セシム。病増々劇シク諸醫手ヲ束ネテ爲

ストコロヲ知ラズ。侯深ク之ヲ憂ヒ、遙ニ玄碩ヲ召シテ治ヲ托ス。未ダ幾モアラズシテ全癒ス、恩賚太ダ厚シ。四方傳ヘ聞キテ治ヲ乞フモノ門ニ盈ツ、乃チ居ヲ芝・田町ニトシ、ソノ業益々盛ナリ。既ニシテ盲者頼テ以テ明ヲ得ルモノ數十名、一時目シテ神醫トナス。文化七年二月幕府擢デテ侍醫トナシ、俸百苞ヲ賜フ、十三年十二月法眼ニ叙セラル。文政五年將軍愼徳公痘瘡ヲ病ミ眼證ヲ發ス。玄碩公ノ眼病ヲ治シテ殊効アリ。十二年蘭醫シーボルト幕府ニ覲ス。玄碩ソノ眼科ニ精シキヲ聞キ、幕府ニ請テ教ヲソノ門ニ受ク、夙夜勵精大ニ得ルトコロアリ。一日シーボルト語テ曰ク、此ニ一藥アリコノ藥品ヲ點眼シテ瞳孔ヲ散大スルトキハ、刀ヲ用ヒテ白内障及ビソノ他眼内ノ手術ヲナスニ大ニ便ナリト。玄碩ソノ藥方ヲ得ントス。シーボルト深ク秘シテ敢テ傳ヘズ。玄碩百方請求シテ後チ之ヲ許ス。而シテ、藥名蘭語解スベカラズ、因テ問フニ藥品ノ我が邦ニアルヤ否ヤヲ以テス。シーボルト曰ク、有リ。便チ一小冊子ヲ齎シテ曰ク、宮、宮、蓋シ宮ハ尾州ノ一驛名ナリ。シーボルト、長崎ヨリ江戸ニ到ル、路、尾州・宮驛ヲ經、路傍コノ物ヲ見シモノカ。玄碩大ニ喜ビ、即チ贈ルニ將軍賜フトコロノ葵章服ヲ以テス。後チ人ヲシテ山野ヲ搜採セシム。果シテ搜リ得テ歸ル、即チ萇若ナリ。法ノ如ク之ヲ製シ試用シテ數々奇効ヲ奏セリ。ソノ年十一月シーボルトノ獄長崎ニ起ル。官急ニ玄碩ヲ召シ、ソノ國禁ヲ犯シテ葵章服ヲ外人ニ贈リタルヲ詰リ、官祿褫キ獄ニ下ス、時二十二月十六日ナリ。是ヨリ先キ玄碩ノ子女昌侍醫ニ擢デラレ、西丸ニ勤仕シ、父子東西兩城ニ侍醫タリシガ、玄碩ノ官ヲ褫カルルニ際シ玄昌亦官ヲ罷メラル、天保八年將軍愼徳公痘瘡後ノ眼病再發シ、復タ玄昌ヲ召シテ之ヲ治メシム、ソノ年七月二十七日玄昌更ニ侍醫ニ擢デラレ法眼ニ叙シ、祿二百石ヲ賜フ、未ダ一月ナラズシテ公ノ眼病全ク癒ユ、宴ヲ賜フ。時二公玄昌ヲ見テ曰ク、玄碩ノ近狀如何ト、玄昌具ニ告ルニ實ヲ以テス。公左右ヲ顧テ曰ク、玄碩惡意アルニアラズ、宜シク寛典ニ處スベシト、侍臣某亦大ニ辯護スルトコロアリ。玄碩竟ニ獄ヲ出ルコトヲ得、居ヲ深川・木場ニトシ、大ニ門戸ヲ張り、一時隆盛ヲ窮ム、嘉永七年八月十七日病テソノ家ニ歿ス、享年八十七、築地本願寺中眞龍心寺ニ葬ムル。碑面、「桑翁土生君之墓」ノ七字ヲ刻スルノミ。(土生家系譜・師談錄)

高良齋名ハ淡、字ハ子清、阿波ノ徳島藩ノ人、本姓ハ山崎氏、世ソノ藩ノ中老タリ。祖政統、父ハソノ第三子、名ハ好直助任ニ居ル。良齋ソノ側出ノ子ナリ、寛政十一年己未五月十九日ヲ以テソノ地ニ生ル。高氏世播磨ノ明石侯ニ事ヘテ侍醫タリ。錦國ト言フモノニ至リ季子タルヲ以テ出デテ徳島ニ移リ、眼科ヲ以テ業ヲ開キ一暗盛ニ行ハル。良齋年甫メテ十三、經史ヲ讀ミテ略大義ニ通ジ、乾純水ヲ師トシテ本草ヲ講ジ、錦國ニ侍シテ眼科ノ疑義ヲ質ス。年十九自奮テ曰ク、家學精シト雖モ西洋ノ新説ヲモ推求セザルベカラズト、文化十四年十月鎮西ニ赴キ長崎ニ至ル。時ニシーボルト會々新ニ來リテ出島ニ在リ、洋醫ノ學ヲ蘭館ニ講ズ、學問淵博、技ヲ執ル精巧最モ瘍科・眼科ニ長ズ。良齋之ニ從テ學ビ、勤苦八年ソノ業大ニ進ミ同門高野・小關・幡崎・戸塚・竹内・伊東諸子ト名ヲ齊クス。文政九年八月シーボルト東觀幕府ニ謁シタルトキ良齋、二宮敬作ト之ニ從フ。文政十一年十一月シーボルトノ冤獄起ル、明年正月十五日ニ至リ連坐獄ニ下ル者二十三人良齋亦ソノ中ニ在リ、後許サレテ獄ヲ出ヅルヤ薩侯招クニ重祿ヲ以テス。辭シテ赴カズ。天保二年遂ニ徳島ニ歸ル。和蘭學ト精鍊ノ術拔トヲ以テ徒ヲ率キ、藩中漸ク洋籍ヲ讀ミ西藥ヲ用ル事ヲ知ルモノアリ。然レドモ漸習尙深クシテ志ヲ伸ブル能ハズ。父錦國ニ請ヒソノ後配ノ子定國ヲシテ徳島ノ業ヲ繼ガシメ、自ラ家ヲ挈ヘテ大阪ニ移リ北久太郎町ニ居ル、時ニ天保七年。天下大ニ飢エ尋テ大鹽氏ノ亂ヲ以テシ貧困極甚シ、人ノ惠性ニ依リテ纔ニ饑ヲ禦クニ至ル、而レドモソノ術漸ク行ハレ、ソノ名益彰ハレ從遊スルモノ亦多シ。天保十一年明石侯ノ眼疾ヲ治シ功アリ、後屢々召サレテ諸公子ノ疾ヲ治シソノ醫員ニ擧ゲラル。弘化三年九月病歿ス、年四十八。(行狀)

コノ如ク杉田錦腸ノ眼科新書ニ依リテ始メテ我が邦ニ傳ヘラレタル西洋眼科ハ、シーボルト及ビソノ門下、殊ニ土生玄碩ノ力ニ賴リテ、實際的ノモノトセラレシガ、文久ノ初年蘭醫ボードイン (Baudin) 長崎精得館ノ教師トナリテ我が邦ニ來タルニ及ビ、斜照法・直像法・倒像法・プルキンジ・サンソン氏像ニテ角膜・水晶體前後面ヲ檢スル法・「ルーペ」ニテ睫毛亂生ヲ檢スル法、等ヲ紹介シ、照眼鏡(ヘルムホルツ檢眼鏡)・亞篤魯必涅・硝酸銀・加刺波兒

越幾斯、等ノ應用ヲ説キ、又斜視眼手術・眼瞼成形術、等前人未施ノ術ヲモ施シ、西洋ノ眼科ハ之ニ依リテ大ニ發達シタリ。

ポードイン、和蘭陸軍一等軍醫、文久ノ初、我が政府ノ聘ニ應ジ、長崎ニ來タリ、精得館ノ教師タリ。慶應元年國ニ歸リ、四年再ビ來朝ス。官乃チ聘シテ大阪醫學校ノ教師トナス。殊ニ眼科ヲ善クスルヲ以テ名アリ、手術精妙、往々人ヲ驚カス。我が邦眼科ヲ開發スルモノハ實ニポードインノ力ニ賴ル。ポードインノ我が邦ニアル前後殆ト十一年、政府ソノ功ヲ賞シテ、勳四等ニ叙ス。一千八百五年ハーグ府ニ歿ス。(抱度英傳・近世名醫傳)

産科 26

西洋産科ノ事ヲ記セルハ詞倫産科書ヲ以テ最初トスベシ。コレハ青地林宗ガ雪際亞、詞倫ノ書ヲ翻譯セシモノナリト言ヒ傳フ。ソノ詞倫ト言フハ何人ナルカ詳ナラズ、或ハドレスデンノ産科教授カール・グスターフ・カールスナラント説ク者アレドモ、該書中ニハ一千七百五年乃至三十年ノ實驗記事アリ。カールス(一千七百八十九年生)以前ノ人ノ著述タルヤ明カナリ。ソノ書記スルトコロヲ見ルニ、先ヅ生殖器ノ内景・診法・妊孕ノ徵候・妊娠中ノ疾病・自然産ヲ略述シ、難産ヲ救フノ方法トシテハ回轉法ヲ舉ルノミニシテ、鉗子ノ應用ニハ論及セズ(パルフィンガ箱子ヲ發明セシ時代ヲ距ルコト遠カラザルヲ以テ、未ダコノ術ノ廣ク行ハレザリシタメカ)。矢田部卿雲ノ撒氏産論(弘化二年)ハサロモン(Salomon)ノ産科書(一千八百二十六年)ヲ翻譯セルモノニシテ、コノ書ニハ先ヅ妊娠・分娩・産褥ノ解剖・生理・病理ヲ論ジ次デ手術ヲ詳論シ、鉗子ノ圖ヲモ載セテソノ應用ヲ記述セリ。ソノ他箕作阮甫ノ産科簡明・宮本阮甫ノ産科須知等アレドモ、ソノ書ハ抄寫ノ儘ニテ傳ハリ、廣ク世ニ行ハルルニ至ラザリキ。

船曳卓堂ノ婦人病論(嘉永三年)六卷中、第三卷ヨリ第六卷ニ至ルマデ、産科ニ關スル疾病ヲ舉グ、而カモコノ書ハ疾病ノ症候・治方ヲ論ズルノミニテ、手術ヲ舉グルコトナシ。

安政六年江戸ノ三宅良齋、英醫合信ノ婦嬰新説(成豐八年・上海刊行)ヲ取テ、之ヲ翻譯シ、同年安藤桂州、京都ニアリテ亦之ヲ翻譯シタリ。コノ書ハ支那ノ醫人ヲシテ産孕ノ理ヲ講明セシメント欲シテ、著述セルモノナレバ、ソノ説極メテ簡約ニシテ、各種器械ノ如キハ故ラニ省キテ之ヲ載セズ、故ニ産科書トシテノ價値ハ甚ダ尠シトス。當時産科ニハ賀川ノ一派アリ。ソノ術漢・蘭ヲ折衷シテ、大ニ觀ルベキモノアリシガ、コノ間ニアリテ西洋産科ヲ以テ別ニ一家ヲ成セシモノ、江戸ニ足立長雋アリ。

足立長雋、冬ハ世茂、無涯ト號ス。江戸ノ人、本姓ハ井上、幼ニシテ穎敏、醫ヲ好ム。初メ薩摩藩醫足立梅庵ニ就テ軒・岐ノ方ヲ受ク。梅庵ソノオヲ愛シ、養テ嗣トナス。後チ多紀桂山ニ從テ學ブ、又蘭學ヲ吉田長淑ニ受ケ、得ルトコロアリ。篠山侯ソノ名ヲ聞テ聘シテ侍醫トナス。長雋夙ニソノ師吉田長淑ガ内科ヲ以テ名ヲ揚ルヲ見テ、刷ニ機軸ヲ出スノ志アリ、適々和蘭産科書ヲ得テ之ヲ講究シ、遂ニ西洋産科ヲ以テ一家ヲ成ス、天保七年歿ス。(洋方醫傳)

足立長雋ノ産術ハソノ書ノ傳ハレルモノナキヲ以テ、今之ヲ詳ニスルコト能ハズ。而カモソノ和蘭産科書ヲ讀ミテ、ソノ術ヲ模倣セシニ過ギズトスルモ誤ナカルベシ。文政ノ初年シーボルトノ長崎ニ來タルニ及ビ、外科・眼科等他ノ諸科ト同ジク産科モ、實際ニソノ術ヲ傳ヘラレタリ。ソノ高足弟子高良齋ガ女科精選五卷ノ著述アレドモ刊行セラレズ、唯シーボルトノ女阿伊禰ガ父翁ノ産術ヲ傳ヘ、岡山ニアリテ産醫ヲ以テ業トナシタルコトアルヲ傳フ

ルノミニテ、ソノ門下ニ産科ヲ以テ家ヲ成セルモノモナケレバ、ソノ術ノ如何ハ固ヨリ之ヲ詳ニスルコト能ハズト雖モ、我が産科ガシーボルトニ依リテ實際的ノモノトナリ、殊ニソノ手術ニ於テ鉗子ノ應用法ヲ示サレタルコトハ事實ナリ。

婦人科

西洋婦人科ノ書ニテ、最初ニ刊行セラレタルハ、船曳卓堂ノ婦人病論(嘉永三年)ナリ。コノ書ハ布斂吉(Plenk)ノ婦人科書ヲ翻譯セルモノニシテ、全部六卷、第三卷以下ハ産科ノ事ヲ説キ、婦人科の疾病ヲ論ゼルハ僅カニソノ首ノ二卷ニ過ギズ。ソノ簡略想フベシ。是ヨリ先キ新宮涼庭ノ婦人科則アリ、高良齋ノ妇科精選アリ、又山崎玄東ノ妇科良方アリシモ、共ニ梓行セラレズ。

合信ノ婦嬰新説ニハ、婦人科病症トシテ、月經病證(無經・經停・月經妄行・經痛・經不得出・經水太多・經水雜血)及ビ白帶證ヲ舉グルニ過ギズ。

之ヲ要スルニ、當時婦人科ハ内科ノ一部ニ屬シ、ソノ治方ハ内科醫家ノ講究スルトコロニシテ、産科ノ如ク、嚴然一科ヲ成セシニアラザルコト明カナリ。

小兒科

西洋小兒科ノ我が邦ニ入りタルハ宇田川榛齋ガローゼン・ハン・ローゼンステイン(Rosen van Rosenstein)ノ小兒科書ヲ翻譯セシニ始マル。コノ書ハ一千七百六十五年始メテ刊行セラレシガ、醫學ノ一分科トシテ小兒科ニ、ソノ根據ヲ與ヘントシ、幾モナク諸國語ニ翻譯セラレ、獨逸語ノミニテモ第六版ヲ重ヌルニ至レリ。宇田川氏ノ譯書ハ小兒諸病鑿法治法全書ト題シ、全部三十卷、乳母篇ヲ第一卷トシ、第二卷以下ニハ燕乳妨害・大便閉・脫肛・濕瀾・弛腫・胃寒・腹痛・生齒患・驚口瘡・搐搦・下痢・痘瘡・麻疹・種麻疹・火斑瘡・嘔吐・咳嗽哮喘・黃疸・間歇熱・蟲・佝僂病・頭水・異種咽喉病・疥癬・頭蟲瘡・黴毒等ノ諸病ヲ論ジ、又小兒初生病ノ外科的療法ヲモ説キタリ。

宇田川榛齋ノ譯書二次デ顯ハレシモノヲ堀内素堂ノ幼幼精義トス。コノ書ハ扶歌蘭度^{フヘランド}ノ書(一千七百九十八年)ヲ取テ之ヲ翻譯セシモノニシテ、天保十四年ノ刊行ニ係ル、實ニ西洋小兒科譯書刊行ノ嚆矢ナリ。

堀内素堂名ハ忠寛、宇ハ君栗、一字忠龍、後チ忠亮ト改ム、素堂ハソノ號ナリ、米澤ノ人、考名ハ忠明、妣志賀氏、世々醫ヲ以テ上杉侯ニ仕フ。十一歳ニシテ父ヲ喪ヒ、獨リ母氏ト居リ、辛苦ヲ嘗メテ志操倍々潔ク、篤學讀書、常ニ江戸ニ遊バント欲スルノ志アリ。家貧ナルヲ以テ果サズ。既ニシテ命ヲ奉ジテ江戸ニ祇役ス。乃チ父祖ノ墳ニ謁シテ誓テ曰ク、本藩泰西ノ學ヲナスモノアラズ、某之ヲ創開セント欲ス、業若シ成ラザレバ敢テ再ビ謁セズト。發憤西上シ官暇ヲ以テ古賀穀堂ニ從ヒ、古文ヲ學ビ、又杉田立卿・青地林宗ニ就テ泰西醫術ヲ修メ、業既ニ成ル。藩侯擢^シテ世子ノ侍醫トナシ、後チ大夫人侍醫ニ轉ジ、尋テ俸祿ヲ増ス、是ヨリ聲譽益々起リ治ヲ求ムルモノ、履戸外ニ盈ツ、嘉永六年ノ夏瘡ヲ患ヒ、骸骨ヲ乞フ、允サレズ、命シテ歸養セシム、乃チ輿シテソノ家ニ歸ル、再ビ請テ允可ヲ得、七年正月病再ビ作り、三月十八日遂ニソノ家ニ

歿ス。享年五十又四、城北館山寺ニ葬ル。配高橋氏、二男二女ヲ生ム。長忠他家ヲ嗣グ。(墓誌・素堂先生小傳・祭素堂先生文)

幼幼精義二輯、第一輯ハ小兒疾病ノ原・用藥ノ範・初生夭殤ノ本・保嬰調治ノ法ヲ論ジ、附スルニ頑痼病治驗實記ヲ以テシ、第二輯ハ牛痘接種利害・痘苗良否ヲ論ジ、繼グニ天然痘症候及ビ治方ノ論ヲ以テス。ソノ小兒病理ヲ説クヤ『小兒病、由_三刺衝感觸過度失_二其平_一者、居_レ多、大凡_三三分小兒諸病_一、屬_二此二機亢進症_一者、殆居_二其_二、況_レ於_二其瘵性諸病_一乎、實啞科治道大綱不_レ可_レ不_レ察也』ト言ヒ、要スルニ『小兒ハ覺機穎敏ニシテ、血液能ク頭上ニ迫マリ、粘液多ク胃腸ニ生スルニ依リテ諸般ノ疾病ヲ生スルモノナリ』ト説キ、ソノ治法トシテハ、吐劑・下劑・鎮痙麻酔藥(纈草・加私多僂謨・麝香・雜芙蘭・龍腦・琥珀鹽・阿芙蓉・菲阿斯・亞鉛華)・利導抵抗劑(瀉下唧筒・瀉血・芥子・琶布・發泡・蜚針等)ヲ適宜應用スベキノミナラズ、外施治法トシテ、吸蒸氣法・藥枕子・濕蒸・膏・油・洗浴・薰等ノ諸法ヲ用ヒ、刺衝ヲ解キ、鬱蓄ヲ疎スルヲ以テ主務トスベキコトヲ唱道セリ。蓋シ小兒科ハ當時歐洲ニアリテモ未ダ獨立ノ一科ヲ成スニ至ラズ、扶歇蘭度_{フヘランド}ノ言ニモ『世之醫、欲_下以_二啞科_一爲_上名者、必也覃心精意、不_下別開_二一隻眼_一、以看_中得原病之理_上、則不_レ能也、今或有_下欲_レ講_二啞科之業_一者_上、然啞科別無_二學校之設_一、又養病院專爲_二大人諸症_一設_レ之。而不_レ關_二於小兒_一、無_三復能講習討論、以究_二其病性_一、是以世醫多於_二小兒疾病_一、無_レ有_二定見_一、輒至_レ有_下私意妄作束_レ手委_中之於命_上也可_レ觀啞科一途未_レ至_下精_二究淵源_一如_中大方諸家_上者、職之由、嗚呼、世之爲_二啞科_一者不_三亦難_一乎、若夫小兒之病、與_二大人_一有_レ別之論、雖_レ未_三必易_二遽知_一、然冀能、辨_二症候_一、精_二診察_一、知_二病性_一、據_二實徵_一、不_レ失_二定準_一、量_二其年行_一、以撰_二簡易の方_一無_三徒走_二新奇_一更_二要_二此道開關_一者、所_レ望_二於吾同盟_一也』トアルニテ、ソノ景況ハ推知セラルベシ。

新宮涼民・新宮涼閣共譯ノ小兒全書_{ブレンキ}ハ布斂吉_{ブレンキ}ノ小兒病論(一千八百七年・維納刊行)ヲ翻譯セシモノニシテ、小兒疾病、各個ノ症候及ビ治方ヲ擧ゲタレドモ、コノ譯書ハ全部僅カニ六卷ニシテ、所說ノ精緻ナルコトハ宇田川榛齋ノ譯書ニ劣リ、論議ノ的實ナルコトハ幼幼精義ニ及バズ、ソノ他新宮涼庭ノ小兒則・中條冬川ノ啞科撰要等アレドモ、共ニ刊行セラルルニイタラズ。

整骨科

整骨(又正骨)トハ跌撲傷損スルトコロノ骨節ヲ整フルヲ言フ。支那ニ在リテハ宋ノ代初メテ正骨科アリ、明ノ代ニ及ビテ又接骨科ヲ立ツ。而シテ聖濟總錄・證治準繩・醫宗金鑑等ノ諸書ニソノ法ヲ載スルモノアリト雖モ、纔ニ數法ニ止マリテソノ術甚ダ備ハラズ。我が邦ニアリテモ從來之ヲ專門トスルモノナカリシガ、寛政ノ頃長崎ニ吉原元棟(字ハ隆仙、杏蔭齋ト號ス)アリ、元ト武士ニシテ死活ノ拳法ニ達シ、後チ方伎ニ隱レ按矯ヲ業トシ、終ニソノ曾テ學ブトコロノ拳法ヲ擴充シテ、以テ正骨ノ法ヲ工夫シ、合縫接折ノ功ヲ得、正骨要訣ヲ著ハシテソノ術ヲ唱フ。濱田ノ醫官ニ宮彦可(名ハ獻、濱田侯ノ醫官、長崎ニ赴ムキテ醫ヲ吉雄耕牛ニ學ブ)元棟ニ親炙シテソノ術ヲ傳ヘ、覃思研精二十餘年、ソノ術ヲ增益シテ母法十五・子法三十六トナシ、又新ニ揉法一百五十ヲ立テ、文化四年正骨範ヲ著ハシテ大ニソノ術ヲ唱道ス、此ニ於テカ、整骨科アリテ、外科ノ派トシテ起レリ。

正骨範記スルトコロニ據ルニ、正骨ハ『打撲損傷者先用_レ手、尋_二揣傷處_一、用_レ藥熨數次、整_二頓其筋骨_一、以_二敷藥_一擦_レ之、後用_二杉籬裏帛法_一骨細碎者、別有_二正副夾縛定之法_一』ヲ以テ、ソノ術ノ大綱トシ

敷藥法 蜜或ハ糯米糊、或ハ火酒、或ハ醞醋等ヲ用ヒ、散藥ヲ和シテ泥トナシ、刷子ニテ之ヲ痛處ニ掃フ、ソノ乾クヲ俟チテ更ニ塗ル、如レ此スルコト三四層ヲ度トス。

藥熨法 木綿布ニ藥ヲ裏ミ、麻絲ヲ以テ括定シ、砂鍋中ノ火酒ニ入レ、文火爐上ニ煖メ、括ルトコロノ絲ヲ以テ竹筒中ニ通シ、患處ヲ熨ス。

燙熨法 藥泥ヲ以テ厚紙上ニ攤シ、重ニ紙ヲ以テソノ上ヲ覆ヒ、患處ニ敷キ、鐵鏝子ヲ以テ通紅ナラシメ、ソノ紙上ヲ烙熨ス。

腰柱法 腰柱ハ杉木四根ヲ以テ製シ、扁擔形ノ如クシ、側面ニ孔ヲ鑽リ、布ヲ以テ之ヲ聯貫スルナリ。腰節骨傷ラレ、膂肉破裂シ、筋斜偃僂ナルモノニ對シ、先ヅ布ヲ以テ患處ヲ纏圍スルコト一二層、コノ柱ヲ將テ脊骨ノ兩傍ニ排列シ、再ビ布ヲ以テ柱上ヲ纏ヒ覆フコト數層、端正ナラシムルヲ要トス。

杉籬法 杉木ヲ以テ片トナシ、布ヲ以テ之ヲ卷定シ、布ヲ以テ之ヲ聯編シ、籬ノ如クニナシ、手足斷骨碎・筋斜・筋斷ノモノニ對シ、先ヅ布ヲ以テ之ヲ纏ヒ、コノ籬ヲ以テ之ヲ環抱シ、再ビ布ヲ以テ籬上ヲ纏卷シ、動搖セザラシムルヲ要トス。

裏帘法 裏帘ハ白布ヲ以テ之ヲ作り患處ヲ層纏ス、故ニ裏帘ト名ヅク。

手法トシテハ、各部脫臼ニ對シテ

探珠 (下顎脫臼) 熊顧 (上膊脫臼) 車轉 (上膊脫臼) 圓旋 (肘骨脫臼)

躍魚 (手脫臼) 游魚 (指節脫臼・趾骨傷) 鸞翔 (軀幹ニ施ス) 靡風 (射幹ニ施ス)

鶴跨 (偃僂ニ施ス) 騎龍 (股脫臼) 燕尾 (股脫臼) 尺護 (脛脫臼)

弄玉 (足關節脫臼) 螺旋 (跟骨) 鶴尾 (跗骨傷)

右ノ如キ諸法ヲ區別シ、主ニ脫臼ヲ整復スルヲ趣旨トスレドモ、ソノ鶴跨法ハ偃僂ニ對シテ施シ、又ソノ腰柱法ノ如キハ、矯正器 (腰柱) ヲ用ヒテ脊柱ノ歪斜 (偃僂) ヲ矯正スルヲ目的トスルモノニシテ、今日ノ所謂矯正外科 (Orthopaedic) ノ爲ストコロニ外ナラズトス。

裏帘法ト言フハ、即チ繃帶ニシテ、杉籬法ト言フハ固定副木ニ外ナラズ。又筋攣・筋縮・筋飜ニ對シテハ摻ルニ蚯蚓膏ヲ以テシ、而シテ後チ頻ニ揉法ヲ用ヒ、滿腫硬堅ナルモノハ振挺法ヲ用フ、振挺法トハ木棒ヲ用ヒテ輕々患處ノ上下左右ヲ振撃シテ、ソノ疼痛ヲ去リ、腫硬ヲ消スノ法ナリ。若シ折傷打撲、ソノ痛ミ近ヅクベカラザルモノハ、先ヅ草烏散 (草烏二分、當歸・白芷各二分半、右末、每服伍分、熱酒調下、麻倒不_レ知_レ痛)・九鳥散 (蔓陀羅華) ノ類ノ麻酔藥ヲ用ヒ、麻倒シテ痛ヲ知ラザルニ乘ジテ手術スルヲ例トセリ。

同時大阪ニ各務文獻アリ、初メ産科ヲ修メ、後チ整骨術ニ志シ、自カラ發憤シテ和蘭ノ說ヲ究メ眞骨ニ就テソノ運動作用ノ理ヲ推窮シ、材器布纏ノ法ヲ工夫スルモノ甚ダ多ク、遂ニ整骨ヲ以テ一家ヲ成シ、文化七年整骨新書ヲ著シテ、ソノ發明ノ論說治術ヲ世ニ公ニシ依テ整骨科ヲシテ我が醫方中ノ一要部タルニイタラシメタリ。

各務文獻、宇ハ子徵、通稱相二、大阪ノ人、慨然トシテ醫ニ志シ、初メ産科ヲ修メ、後チ整骨科ニ志シ、研鑽數年、既ニ得ルトコロアリ。而シテソノ整骨術ニ於ケル必ズ先ヅソノ物ヲ明カニシテ、後チソノ治術ヲ盡サンコトヲ欲シ、刑屍ヲ得テ自カラ之ヲ剖視シ、又コノ術ヲ授クルニハ皆ナ眞骨ニ就テ之ヲ按撫スルニアラザレバ、則チ得ヲ知ルベカラザルモノアリ。而カモ眞骨ハ之ヲ求ムルコト難キヲ以テ、工匠ニ命ジテ木ヲ以テ全骨ヲ造ラシテ、諸生ヲシテ手撫目察、以テソノ機關ヲ曉ラシム。著ハストコロ整骨新書三卷アリ。文政十二年十月、年六十五ニシテ歿ス。(各務家系譜)

各務氏ノ説ニ依レバ『骨骸ヲ損傷スルニ大略二別アリ、一ハ折傷ナリ、一ハ脱臼ナリ、折傷ヲ治スルヲ續骨トシ、脱臼ヲ治スルヲ復骨トス、コノ二者ノ外、屈伸意ニ從ハザルアリ、弛緩シテ常ヲ失フアリ、此等ノ治術ヲ合セテ整骨トス』ト言ヒ『整骨ハ骨骸治術ノ總稱ニシテ、其術ヲ學バント欲スルモノハ、先ヅ其物ヲ知ランコトヲ要ス、其物既ニ明ナレハ其用ヲ知ランコトヲ要ス』ト論ジ、ソノ著整骨新書第一卷ニハ西洋ノ説二本ヅキテ、骨ノ起原ヨリソノ名ト形質トヲ擧ゲ、第二卷ニハ骨骸ノ主用機關、分異ヲ擧ゲ、次デ整骨ノ術ニ及ビ、附スルニ比較的精蜜ナル解剖圖譜(各骨眞形圖)ヲ以テセリ。ソノ要旨ヲ擧グレバ

整骨術ハ之ヲ別チテ整骨ト理筋トノ二トナス、ソノ整骨ニハ接法・復法・屈伸法・縮法ノ四法アリ。

接法 骨骸ノ斷碎折傷スルモノヲ接續スルヲ謂フ、手指ニテ患處ヲ按シ、既ニ接着スルノ後ハ膏藥ヲ貼シ麁皮ニテ挾持シ縛帶シテ動搖スルコト勿ラシムベシ

復法 機關ノ脱臼齟齬ヲ故ニ復スルヲ言フ、各個脱臼ニ對スル各別ノ手法アリ

屈伸法 諸骨ノ機關、或ハ屈曲シテ伸舒セズ、或ハ強直シテ撓折セザルモノヲシテ、ソノ屈伸運動常ニ復セシムルノ法ヲ謂フナリ、外用スルニ熨療法ヲ以テシ、又應便ノ手術ヲ施シテ漸ヲ以テソノ屈曲ヲ伸ベ強直ヲ折テ、而シテ又之ニ加フルニ帶ヲ縛シ、木ヲ挾ムノ法ヲ用ヒテ、ソノ全効ヲ收ムルニイタルナリ

縮法 打撲・捫挫等ニ因テ骨節機會ノ淺差シ、筋根(腱)・蠻度(靱帶)ノ弛緩スルヲ收縮スルノ法ナリ

小兒ノ稟質ニ依リテ、骨筋機關ノ變態ヲナスモノ多キ中ニ、塾骨術ニ依テ、治スベキモノノ尤モ著明ナルハ勾指(指ノ勾曲シテ伸ビザルモノ)・勾臂(臂ノ折テ伸ビザルモノ)・八字脚(其脚蹠八字形ヲナスモノ)・反跗(腑ノ反戾スルモノ)等ナリ(矯正外科術)。

理筋ノ法ハ又別テ二様トス。(其一)凡ソ損傷ノ害、骨ニ及バズシテ筋蠻度ノ類ヲ損ズルモノハ大率滯血凝淤ニシテ決シテ轉戾ニアラズ、先ヅ適應ノ手術ヲ施シ、而シテ後撫摩術ヲ施シ膏ヲ貼ス。(其二)コノ如ク損傷骨ニアラズシテ、唯皮肉ノミ損スルモノハ皆ナ血脉ニ與カラザルコトナシ、ソノ損傷ノ狀態ヨリ赤色腫痛スルモノニハ、鍼刺(瀉血)ヲ用テソノ惡血ヲ去リ、又膏熨(熨法)ヲ用テソノ凝淤ヲ循スベシ。

整骨術ニ用フベキ器械ハ麁皮(溫湯ニテ浸シ、之ヲ拭ヒ去テ用フ)・竹片・隻頭挺・平圓鐵・膝蓋正・有眼挺・熨鍘・割準子・適椅子・離合枕・輔復床、等ニシテ是レ皆ナ各務氏ガ發明スルトコロニ係ル。

縛帶ニハ有製十五法ト縛法三十五法ト擧ゲ、藥方ニハ麻醉散(曼陀羅華)・火酒浸(火酒・樟腦・硝石)等二十六方ヲ用ヒタリ。

是ニ由テ之ヲ觀ルニ、整骨科ハ脱臼・骨傷ノ治ニ兼テ筋骨ノ疾病(尙僂・彎脚・馬足・筋短縮)ヲモ治スルヲ趣旨トシ、今日所謂矯正外科術ヲモ施シタルヤ明カナリ。而シテコノ術ノ種子ガ西洋ノ書ニ據リテ、我が邦ニ傳ヘラレ、諸家ノ研究ニ依リ大ニ發達セシコトハ、我が外科史上ニ特筆スベキ事項トスベシ。

藥物科

我が邦ニ西洋藥物科アルハ桂川甫周ノ和蘭藥選ニ始マレドモ、斯書ハ梓行セラレズ。宇田川榛齋ノ和蘭藥鏡・遠西醫方名物考出デテ、西洋醫方ニ用フル藥品方劑・製煉・諸術ノ名物・性能・主療ノ説、始メテ明カナルヲ得タリ。

和蘭藥鏡ハ布斂吉・依百乙・福鳥的・遏爾涅滿・紐宛佳斯ノ藥物學、度度乃期・勃朗加盧都等ノ本草書、協乙斯的兒・

然正切ノ作用ヲ知り、次テ疾病ノ各異ナルニ從テ運爲ノ差等アル(醫治効用)ヲ示ス。『此名目ハ輒近高尙ノ學術ニ由テ起ル所ニシテ、之ヲ用ヒザレハ藥性ヲ説クコト甚ダ難シトス』ト言ヒ、又方藥ノ名稱ノ如キモ古昔ハソノ性効ニ取リ、又ハソノ形狀等ニ由リテ名ヅケタレドモ、コノ書ニアリテハスベテ化學的ノ名稱ヲ用ヒタル等、世ノ耳目ヲ新ニセルモノ尠カラズ。

植物學

和關本草ノ學ハ蘭學創始ノ頃ヨリ、既ニ我が邦ニ傳ハリ大槻馨水ノ蘭畹摘芳・橋本宗吉ノ三法方典(本草部)等ノ譯書甚ダ乏シカラズ、西洋人ノ來朝シテ親カラ我が邦ノ本草ヲ研究セシモノニモ、元祿年間ニケムフエルアリ、安永年間ニトウムベリーアリ。

ケムフエル(Kämpfer)ハ名ヲエンゲルベルトEngelbertト言フ、獨逸ノ人ナリ。一千六百五十一年九月十六日レムゴーニ生マル。稱々長ジテダムチツヒ・クラカウ・ケーニヒスベルヒノ諸大學ニ入りテ醫ヲ學ビ、殊ニ當時猶ホ未ダ盛ナラザリシトコロノ萬有學ニ意ヲ用ヒタリ。一千六百八十年ウプサラ府ニ赴キ、次テ瑞典政府ガ露西亞及ビ白耳義ニ派遣セル通商委員ノ醫官トナリ、モスカウ・カザン・アストラカンヲ經テ白耳義ニ入り、通商委員歸國ノ後ニモ、ケムフエルハ獨リコノ地ニ留マリ、萬有學上及ビ人種學上幾多ノ研究ヲナシタリ。尋デ和蘭・東印度會社ノ醫員トナリテ瓜哇ニ來リ、翌年和蘭貢使ニ隨從シテ日本ニ來レリ。即チ我が元祿三年庚午ノ歲ニシテ、ケムフエル齡三十九歲ノ時ナリ、ケムフエル、長崎ニ在ルコト二年、ソノ間ニタビ貢使ニ從ヒテ江戸ニ赴キ、日本ノ事物ニ就キテ觀察スルコト甚ダ多ク、一千六百九十四年和蘭ニ歸リ、ソノ研究成績ヲ著録セシモ、未ダ之ヲ梓行スルニ及バズシテ、病ミテ歿ス。(傳記辭典)

トウムベリー(Karl Peter Thunberg)ハ瑞典ノ人一千七百四十三年十一月十一日、ヨンキヨーピンニ生マル、ウプサラ大學ニ醫ヲ修メ、一千七百七十年ソノ業ヲ卒ヘ、巴里ニ至リテ解剖學及ビ外科學ヲ修メ、次デ和蘭ニ赴キ、東印度會社ノ醫員トナリテ瓜哇ニ來リシハ一千七百七十五年ナリ、翌年即チ我が安永五年丙申ノ歲(解體新書・刻成後三年)和蘭貢使ニ從ツテ長崎ニ來タリ、居ルコト二年、日本ノ植物ニ關シテ研究スルコト多シ、一千七百七十七年セイロンヲ經テ、和蘭ニ歸レリ。トウムベリー和蘭ニ歸ルノ後、ソノ師ニシテ當時有名ナリシ植物大家リンネノ後ヲ承ケ、醫學及ビ植物學ノ教授ニ舉ゲラレタリ。(傳記辭典)

ケムフエル・トウムベリー兩氏ガ研究ノ端ヲ開キタル、日本植物ノ研究ハ文政六年ニ來朝シタルシーボルトノタメニ、更ニ大ニ研究セラレ、ソノ門人伊藤圭介ガ泰西本草名疏(文政十一年)ヲ著ハスニ及ビテ、林娜斯^{リンネウス}ノ二十四綱目ハ、始メテ我が邦醫家ノ知ルトコロトナレリ。

伊藤圭介、初メ舜民ト稍ス、錦窠ハソノ號ナリ。初メ水谷豐文ニ從テ本草ノ學ヲ修メ後チ京師ニ出デテ蘭學ヲ藤林普山ニ受ケ、又長崎ニ赴キテ吉雄如淵及ビシーボルトニ親炙シ、大ニ得ルトコロアリ、文久元年蕃書調所物産局ノ教員ニ擢デラレ、明治三年大學出仕トナリ、明治十年東京大學理學部員外教授ニ舉ゲラレ、二十一年理學博士ノ學位ヲ享ク、明治三十四年學術上ノ功績ニ依リ特ニ男爵ヲ授ケラレ、帝國大學名譽教授ニ任ゼラル、コノ年九十九ニシテ歿ス。(伊藤錦窠傳)

然レドモ、コノ時ニ至ルマデ我が邦未ダ西洋植物學ノ全書アラズ、ソノ之アルハ宇田川榕菴ノ植學啓源(天保四

年)ニ始マレリ。

宇田川榕菴名ハ榕、江戸ノ人、本姓江澤、父名ハ養樹、大垣ノ醫官ナリ。宇田川榛齋老テ子ナキヲ以テ養樹ニ乞フテ榕菴ヲ養フテ嗣トス。榕菴長ズルニ及ビテ蘭學ヲ馬場穀里ニ受ケ、頗ブル聲譽アリ、文政九年幕府ノ命ヲ奉ジテ蘭書ヲ翻譯ス。著ハストコロ舍密開宗・植學啓源、皆ナ從來嘗テ有ラザリシトコロノ學科ヲ紹介セルモノニシテ、人皆ナソノ功績ヲ仰グト言フ。弘化三年歿ス、年四十九。(墓誌)

宇田川榕菴ニ嗣ギテ飯沼慾齋アリ、小野蘭山ノ門ヨリ出デテ、和蘭ノ學ヲ修メ、安政二年草木圖說ヲ著ハシテ、リンネウス林娜斯ノ分類法ニ依リテ我が邦ノ植物ヲ網羅シ、コレヨリシテ西洋植物學ハ、漸ク我が邦醫家ノ研究スルトコロトナルニイタレリ。

飯沼慾齋、名ハ長順、慾齋ハソノ號ナリ。幼名ヲ本平後チ專吾ト改ム。伊勢國龜山ノ豪民西村新右衛門ノ二男ナリ。生レテ穎悟、平常ノ遊戲自ラ衆兒ト異ナルトコロアリ。十二歳ノ時遂ニ意ヲ決シテ單身家ヲ出テソノ叔父美濃・大垣、飯沼長意ニ投ジ、具ニ志ノアルトコロヲ告ゲ厚ク身ヲ託ス。長意大ニ之ヲ奇トシ乃チ之ヲ同姓飯沼長顯ニ議シ、遂ニソノ家ニ依食セシム、是ニ於テカ慾齋ソノ己ノ意ヲ得タルヲ喜ビ孜々精勵比年ニシテ學業大ニ進ム。十四五歳ノ頃會々本草家小野蘭山幕命ヲ奉ジテ普ク藥ヲ各地方ニ採リ濃州ニ來ル、慾齋欣喜雀躍、直チニ蘭山ノ門ニ入り本草學ヲ修メ、山川隨處常ニ蘭山ニ從フテ跋涉採藥シ、ソノ學頻ニ進ム。蘭山亦ソノ慧敏ヲ愛シテ誘掖甚ダ力ム、齡十八九ニシテ笈ヲ負テ京都ニ遊ビ、官醫福井丹波守ノ門ニ入りテ醫方ヲ學ビ、日夜勵精業成リテ大垣ニ歸ル。次テ長顯ノ嫡女ト婚ヲ結ビソノ箕裘ノ業ヲ嗣ギ、名ヲ龍夫ト改ム、是ニ於テ醫名遠近ニ藉キ治ヲ乞フモノ絡繹門ニ滿ツ、時ニ慾齋ノ友吉安三榮、蘭醫江馬蘭齋ニ就テ蘭醫方ヲ修メ、ソノ治術ノ廻ニ漢方ニ優ルコトヲ説ク、慾齋亦夙ニ此ニ悟ルトコロアリ、江戸ニ出テ津山藩醫官宇田川榛齋ニ就テ蘭學ヲ修ム、時二十八歳ナリキ、慾齋既ニ志ヲ立テ斯學ニ從ヒ刻苦勉勵晝夜卷ヲ舍テズ、又傍ラ榛齋ノ高弟子藤井方亭ニ就テ學ブ。未ダ期年ナラズシテソノ學大ニ進ミ、再ビ郷ニ還リテ蘭學ヲ唱へ、更ニ醫叢ヲ始ム。聲名益々四方ニ馳ス。慾齋年五十二シテ業ヲ義弟健介ニ譲リ、自ラ退隱シテ別業ヲ城西・長松村ニ築キ、移リテ此ニ住シ、復タ西說植學ヲ講ジ、皇朝草木圖說三十卷ヲ著ス、時ニ七十餘歳ナリ。慶應元年閏五月歿ス、享年八十又四。(墓誌小傳)

軍陣醫學

行軍ノ際、藥書ナカルベカラザルハ固ヨリ論ヲ俟タズ、故ニ從來我が邦兵家ノ書ニ醫藥ノ事ヲ記スルモノアリ。甲陽雜兵物語(徳川氏初世、館林侯著ハストコロト傳フ)ノ如キハソノ著シキモノナリ。而カモ軍陣醫書トシテ、著述梓行セラレタルモノハ實ニ原南陽ノ砦草ヲ以テ嚆矢トス。砦草ハ陣處ノ衛生・飲食・野陣・毒煙・飲水ニ就キテノ注意ヲ始メ、救急ノ諸法、及ビ頻發ノ疾病ノ應急手當等ヲ論述シ、極メテ單簡ナル小冊子ナレドモ軍陣ノ醫學ニ初メテ着手セシ功ハ尠カラズトスベシ。

原南陽、名ハ昌克、字ハ子柔、通稱玄瓊、南陽ハソノ號ナリ。父名ハ昌術、字ハ仲熙、醫ヲ以テ水戸侯ニ仕フ、南陽年壯ニシテ京師ニ遊ビ醫方ヲ山脇東洋ノ子東門ニ受ケ、又産術ヲ賀川氏ノ門ニ修メテ造詣スルトコロアリ。既ニニシテ江戸ニ來リ小石川ニ僑居シ、抱負甚ダ重ケレドモ、業未ダ行ハレズ、窮乏ノ餘、按摩針治ヲ以テ生業トス、而カモ南陽性酒ヲ嗜ムコト

甚シク、日ニ例シテ酒家ヲ問フ。獻酬ノ交ヨリシテ水戸候ノ小吏ト相知リ、コレニヨリ屢々水戸候ノ邸内ニ出入ス、侯嘗テ暑ニ中タリ暴ニ病ム。官醫市醫當時ノ大家ヲ舉テ之ヲ診療セシムルモ遂ニソノ効ヲ得ズ。病症日ニマシ危シ、侍臣某南陽ヲ薦メテ曰ク、コノ醫今落魄シテ按摩ヲ業トスルモ素ト三世ノ醫ナリ。且ツ平生語ルトコロヲ聞クニ頗ル識見アリト。乃チ使ヲ馳テ南陽ヲ延ク、南陽候ノ病ヲ視テ曰ク、コレ乾霍亂ノ證ナリ、然レドモ今案ヲ具シテ處方ヲ明言スルコト能ハズ、ソノ處方ノ如キハ恢復後ニ及ビテ之ヲ語ラント、懷ニセル藥品ヲ出ダシ、自ラ調合シテ之ヲ上ツリ、且ツ曰ク、凡ソ半時ノ後、吐瀉アルベシ、吐瀉一タビ發スレバ諸症平癒セン。コノ如キ場所ニ居ルハ窮屈ナリ、御臺所ノ隅ニテモ可ナリ、一升ノ酒ヲ熱服シテ待ツベシト、既ニ半時ヲ過ギ、南陽ノ言ノ如ク吐瀉アリ、候ノ病忽チニシテ癒ユ、諸醫歎賞措カズ。質スニソノ藥方ヲ以テス、南陽答ヘテ曰ク、コレ金匱ノ走馬湯ナリ、新奇ノ處方ニアラズ。卿等、豈之ヲ知ラザルカト、是ニ於テ侯大ニ南陽ヲ德トシ、且ツソノ伎倆ノ卓越ナルヲ稱シ拔擢シテ侍醫トナシ新地五百石ヲ賜フ、時人皆ナ之ヲ榮トスト言フ。

南陽藩侯二世ニ歷仕シ、ソノ侍醫ノ職ニ在ルコト三十餘年、文政三年八月十六日病デ歿ス、享年六十又八。初メ南陽ソノ先昌俊、甲斐ノ名將タルヲ以テ己レソノ後ヲ承ケ方伎ニ食スルヲ耻ヅ。ソノ子昌綏祿ヲ襲フニ及ビ、侯命ジテ改メテ諸士ノ班ニ就カシメ以テソノ志ヲ成ス。昌綏進テ軍師ト爲ルト言フ、南陽著述スルトコロ砦草ノ外醫事小言・經穴彙解・叢桂偶記・瘕狗傷考・傷寒夜話・痘瘡策・脚氣編叢記・藥語・西遊雜記・解毒奇功方・寄寄方記等アリ。(南陽小傳・日本醫譜)

砦草ニ嗣ギテ平野元良ノ軍陣備要救急摘要(嘉永六年)アリ、コノ書ハ原南陽ノ砦草ニ基ツキ、ソノ說ノ足ラザルトコロヲ加ヘ、術ノ備ハラザルトコロヲ補ヒタルモノニシテ、火傷・銃創・金創ノ處置、陣地及ビ陣營ノ衛生、陣中流行病ノ處置、凍死・溺死・中暑・打撲等ノ救急處置等ヲ記述シ、ソノ治方ハ蘭方ニ參酌スルトコロアリ、記載モ之ヲ砦草ニ比スレバ大ニ備ハレリ。同年田原ノ醫宣生茅山續砦草ヲ著ハシテ砦草ノ記事ノ遺ヲ補フ。ソノ說亦多クハ蘭說ヲ取レリ。

コノ時代ニアリテハ、外交ノ危機日ニ切迫シテ、益々軍陣醫學ヲ講究スルノ必要アリ。當時漢方醫ガ蘭方醫ヲ嫉惡セシタメニ蘭醫書ノ翻譯出版ハスベテ官ノ允可スルトコロトナラザリシガ、獨リ大槻俊齋ガ銃創瑣言(嘉永七年)

ハ時局ニ緊切ノ書ナリトシテ、特ニ梓行ヲ許サレタリ。コノ書ハ設劉私ノ外科書及ビ摸斯篤醫事韻府中ノ創傷篇ニ就テ、ソノ銃創部ヲ摘録シタルモノニシテ、簡單ノ小冊子ニ過ギズト雖モ、西洋醫方ノ銃創治則ハ之ニ依リテ明カナルコトヲ得タリ。次デ佐藤尙中ノ欺篤魯默兒砲痕論・島村鼎甫ノ創痕新說アリ。銃砲創痕等ノ治則ハ詳ナリシモ、普ネク軍隊ノ衛生等ニ就キテ論述セシモノハ未ダ之アラズ、ソノ之アルハ久我克明ノ三兵養生論(慶應三年)ニ始マル。コノ書ハ和蘭百兒悉列(Persille)ノ書ヲ翻譯セルモノニシテ、海陸兵士攝生規則・三兵異職務論(歩兵・騎兵・砲兵・土工兵及船兵・軍隊醫士及看護卒・參勤及書記役)・水夫健康論・害健康諸件及豫防之規則・兵士之居所及衛戍所總論(舍營・陣所・露營・軍中病院)等ノ諸項ヲ叙述シタリ。ペルシルレハ陸軍軍醫ニシテウトレヒト大學ニ内科及ビ軍陣衛生ヲ講ジタル人ニシテ、コノ三兵養生論ノ原書ハ蓋シペルシルレガ同國陸軍大臣ノ允可ヲ經テ、軍隊及ビ衛戍病院ニ配付シタル軍隊衛生書ナラン、故ニソノ説クトコロハ通俗的ノモノナリト雖モ、而モソノ所論ハ當時ノ我が邦ノ狀況ニアリテハ、固ヨリ精緻ノモノト認メラレシナリ。

慶應四年近藤誠一郎、和蘭列私ノ書ヲ譯シ士官心得外療一斑ヲ著ハスニ至リテ、海軍衛生ノコトモ亦世人ノ注目スルトコロトナレリ(但シ是ヨリ先キ、桂川甫周ノ海上備要方アリタレドモ、ソノ説クトコロハ創傷ノ救急處置ニ過ギザリキ)

衛生科

我が邦古ヨリ養生ノ一科アリ、近時最モ廣ク行ハレシハ貝原益軒ノ養生訓ニシテ爾他ノ諸書ハ多クハ、皆ナコノ書ニ據リテ編述セラレシモノナルガ、支那先賢ノ語ヲ録シ、又ハ漢方醫書ニ依リテ己ガ身ニ覺エタル養生法ヲ以テ説ケルニ過ギザリキ。然ルニ西洋ノ學行ハレテヨリ八十年ヲ經テ松本良順・山内豊城共著、養生法（元治元年）出デ佳所家屋・衣服衾蓐・飲食浴湯・睡眠・房事・運動操作、等ノ各篇ヲ別チテ、衛生ノ方則ヲ叙述シ、家屋ノ換氣・飲食ノ分拆・榮養成分等ヲ論ズル等、西洋究理ノ學ニ出デテ從來諸家ノ未ダ知ラザリシトコロナリ、ソノ説固ヨリ粗略ニシテ備ラズ、又所謂公衆衛生法ニハ論及スルコトナシト雖モ、而カモ西洋衛生學ノ要旨ハコノ書ニ依リテ我が邦ニ紹介セラレタリ（是レヨリ先キ京都ノ人小森宗二、攝生要方ヲ著ハシ、鳥取ノ人中條文仲、攝生新書ヲ著ハシタレドモ共ニ刊行セラレズ）、次デ杉田玄端ノ健全學（慶應三年刊）六卷アリ、從來普通ノ稱呼タル養生法ニ代ユルニ健全學（Hygiene）ノ語ヲ以テシ、西洋衛生學ノ書ハ始メテ備ハルニイタレリ。

治療法

治療法ニ就テハ、既ニ前期醫學ヲ論ズルノ條下ニ記述スルトコロアリシガ、次下ニソノ記事ヲ嗣ギテ各個治療法ノ發達ヲ叙シ、又當時行ハレタル爾他ノ治療ノ方則ニ就キテ略説スベシ。

刺絡

刺絡ノ術ハ山脇東門ガ西洋ノ術ヲ傳ヘ、永富獨嘯庵・荻野元凱等ノソノ術ヲ主張セルニ依リテ世ニ行ハレシガ、殊ニ荻野元凱ハ刺絡篇ノ一書ヲ著ハシ、一處鬱ヲ達スレバ、百骸皆利スノ説ニ本ヅキ、虛實ニ拘ラズ、達鬱ヲ主トシテ之ヲ施用シ、嗣デ中神琴溪起リテ『亂世ニハ兵刃ニ觸レ、屢出血スルヲ以テ疾患尠ナク、昇平ノ世ニハ出血ナキニ依リ、雜病多シ』ト言ヒ、諸病ノ寒熱ヲ言ハズシテ刺絡ヲ施シタルヨリ（生生堂醫談・生生堂養生論）人皆ナコノ法ノ治病ニ大益アルコトヲ知レリ。然レドモソノ法ハ固ヨリ直チニ西洋ノ書ニ就テ直チニ攻究セルモノニアラザルヲ以テ、未ダ備ハラザルトコロアリシガ、寛政四年、大槻磬水ガヘイステル外科書中ノ刺絡篇ヲ譯述セルニ依リ、刺絡ノ法ハ始メテ詳ナルコトヲ得タリ。

次デ文化年間ニ至リテ、吉田長淑、和蘭内科ヲ以テ一家ヲ成シ、泰西熱病論ヲ著ハシテ熱病（及ビ痘瘡）ノ治方ニモ刺絡瀉血ヲ用フベキコトヲ唱道セシヨリ、刺絡ハ益々内外兩科ノ醫家ノ應用スルトコロトナリ。佐々木仲澤・土生玄碩・三輪東朔・縣道策・伊藤大助等諸家ノ刺絡術ヲ以テ、名ヲ成セルモノ尠カラズ。佐々木仲澤ハ大槻磬水ノ瘍醫新書刺絡篇ヲ讀ミテ、始メテ和蘭ノ斯術ニ精シキヲ知り、磬水ニ從フテソノ書ヲ講ジ、磬水ガ譯スルトコロノハイステルノ書ヲ校正シ、更ニ削墨兒ノ書ヲ節譯シテ之ヲ補ヒ増譯八刺精要（文政八年刊）ヲ著ハシ、土生玄碩ハ始メ馬醫ノ刺絡ヲ施スヲ見テ斯術ニ注意シ、大槻磬水ノ書ヲ見テ、コレニ依リテソノ術ヲ工夫シ、三輪東朔ハ荻野元凱ノ門ヨリ出デテ刺絡ノ術ヲ以テ名アリ。伊藤大助ハ山脇・中神・荻野・吉田諸家ノ説ヲ聞キテ斯術ニ志シ、三輪東朔ニ從テソノ術ヲ攻メ、刺絡聞見録ヲ著ハシテ主ニ東朔ノ論説及ビ實驗ヲ録ス。ソノ説ニ依レバ『神氣ノ運動、其機ヲ失スレバ轉輸ノ功ヲ失シテ瘀濁トナル、瘀濁トナレバ若クハ腐敗シ、若クハ凝結ス、其腐敗スルモノノ大ナルハ癰疔トナリ、小ナルモノハ瘡癤トナル、又凝結ノ大ナルモノハ腹ニ在リテ堅塊トナリ、四肢ニ在レバ疼痛、拘攣、鶴膝風ノ類トナル、疾病ノ變甚多クシテ、千態萬狀ナリト雖モ、其根本ヲ研究スレバ一瘀濁ノ血ヨリ外ナシ、

故ニ其瘀濁ノ惡血ヲ去ルトキハ、澁滯ノ直血、運動活潑シテ其用ヲナス』ト言ヒ、癆瘵・血積・經痛、等ノ諸症ヨリ癩癩・破傷風・驚風等ノ神經症ニ至ルマデ之ヲ施サザルハナシ。

爾來西洋ノ醫方漸ク盛ニ行ハルルニ及ビ、刺絡ノ一術ハ治方ノ要部ヲ占ムルニ及ビ諸家ノ書、殊ニ杉田成卿ガ扶歇蘭度^{フヘラント}ノ濟生三方ヲ譯述シ、刺絡ヲ以テ治術ノ三基本品ノ第一位ニ置キ、刺絡ハ生力ヲ減衰スルノ作用アリ、故ニ生力ノ血中ニ發生スルコト度ニ過グルニ由リテ起ルトコロノ疾病（即チ炎症性疾病）ニ適用スベク、又刺絡ハ纖維ヲ弛緩スルノ作用アルガ故ニ痙攣及ビ攣縮ヲ緩解シ、血量ヲ減ズルニ由リテ多血ヲ治シ、誘導ノ効力アルガ故ニ局處充血及ビ障礙ニ對シテ用フルニ宜シト唱道シ、大ニ刺絡ノ術ヲ稱揚セシヨリソノ術ハ諸家ノ盛ニ用フルトコロトナリ、文久二年ニ司馬凌海ガ著述スルトコロノ七新藥ニ朋百^{ホムベ}ノ說ヲ擧ゲ、『三十年前は、世界一凡ノ疾病、悉く其

性を血管系機運の亢盛に託す、是故に百病皆消炎の療法を先にし、亞細亞霍亂の如きも、亦刺絡吐下等の法方を行へり、今や運改り星轉す、病性悉く復々在昔の神經性兼腸胃性に歸す、此病は脊髓系刺戟の甚劇に起る者たり、規尼の克く大功を奏するは、蓋し又理の當然思ふて能く得べき者なり、予此邦の諸君を視るに、動もすれば此病に放血を行ひ吐瀉を施し、普歇蘭度^{フヘラント}氏の遺方と稱して、以て患者を萬一に救わんと欲す何そ其偏固なる、抑病性に從て治方を議するは、既に普氏の論ぜる所なり、今其書を讀て其意に達せず、其方を學て其時を察せず、却て普氏をして冤を千載に抱かしむ』ト記スルヲ見レバ、刺絡ノ術ガ、當時ノ治療界ニ盛ニ用ヒラレシコトヲ知ルニ足ルベシ。

角法

鍼刺シテ施スヲ濕角法ト曰ヒ、直チニ皮上ニ施スヲ乾角法ト曰フ。我が邦ノ古醫書醫心方ニ葛氏方ヲ引テ、足腫ヲ治スルノ方「若在^ニ餘處^一、亦破レ之、而角嗽去^ニ惡血^一、」ヲ擧ゲ、其註ニ『^チトルカメヲ名云^ニ角嗽^一、』ト記セリ（醫心方卷八第二十八葉）。而シテ室町時代ノ醫書福田方ニモ亦コノ治方ヲ引用シ『若シ餘處ニアラバ、亦之ヲ破テ、而カモ角ツヨク惡血ヲ嗽ヒ去レヨ』ト記シタリ。後世ノ支那ノ醫書ニテハ肘後方・外臺秘要方等ニモ角法ヲ記シ、證類本草ニハ癰疽ニ對シテ『以^ニ青竹筒^一角レ之』ノ法ヲ擧ゲ、又外臺秘要方ニ古今錄驗ヲ引テ、金創後ノ破傷風ニ『瓠瓠燒^ニ麻燭^一、薰レ之』ノ方ヲ載ス。ソノ他コレニ類スルノ記事尠カラズ。皆ナ角法ナレドモ、ソノ法ノ傳ハラザルヤ久シ。近時ニ及ビテ再ビソノ法ノ專ラ行ハルルニ至リシハ、全ク西洋ノ說ニ本ツキシモノニシテ、享和三年撰述ノ蘭療方ニ『^吸血匏^謂格布瓦羅斯^一、一名格邊、以^ニ硝子^一製造、吸^ニ出瘀血^一用レ之、法先以^ニ三角鍼若鉞鍼^一、砭レ之、次取^ニ硫黃紙^一、寸裂、入^ニ吸血匏內^一、點^レ火候^ニ烟氣滿^一、急覆^ニ砭處^一、瘀血當^ニ吸出^一、』『^細口^吸血^匏、謂^ニケレインモンジニコツベン^一、此器細長口而無^レ底、或鼻、域指、諸於^ニ小肉處^一、用レ之、法如^ニ吸血匏^一、』トアルヲ見テモ、コノ法ノコノ頃新ニ西洋ヨリ傳ハリタルコトヲ知ルベシ。

蜚鍼

水蛭ヲ用ヒテ瀉血スルコトハ甚ダ簡便ノ法ニシテ、西洋ヨリソノ法傳ハリテ盛ニ行ハルルニ至レリ。然レドモ水蛭ヲ瘡瘍ノ治ニ用フルコトハ、既ニ醫心方ニ出テ、ソノ瘰癧ノ條ニ『蛭^口宿^尤佳』、丁瘡ノ條ニ『取^ニ水蛭^一、令^レ「^口宿^ニ去惡血^一、』ト記シ、丹波雅忠ノ醫略抄ニ隋ノ宋俠撰經心錄ヲ引テ『以^ニ水蛭^一、食^ニ去惡血^一、』ノ法ヲ收メタルヲ見レバ、コノ法ガ平安朝時代ニ行ハレタルコトハ復タ疑フベカラズ。嗣デ鎌倉時代ヨリ室町時代ニ及ビテ、水蛭ヲ用フルコトノ盛ニ行ハレシハ東鑑ニ、『文永三年四月將軍家（惟康親王）御蚊觸之間、可^レ有^ニ水蛭^一「^口宿^一」之由、

施藥院忠茂朝臣申行レ之』(蚊觸ハカブレノ借字ニテ瘡疹ノ義ナリ)トアリ、又小右記(蛭喰ト書ス)・明月記・山槐記・簾中抄・新札等、諸書ニ蛭飼ノコトヲ載セタルヲ見テ之ヲ知ルベシ。而シテ尺素往來(第一四三頁參照)ニ『雜熱、小瘡、對治之様、不レ如ニ於蛭飼』トアルヲ見レバ、瘡瘍以外ノ病ニ水蛭ヲ用ヒタルコトモ明カナリ。蛭「口宿」ハ蛭飼・蛭喰トモ書キ、共ニヒルカヒト讀ム、之ヲ蜚鍼ト稱スルハ外科精要ニ始マリ本草綱目ニモソノ法出デタレバ、江戸時代初世ニ至リテモ水蛭ハ尙ホ用ヒラレシナラン、(閑田次筆ニ載セタル舊キ江戸繪圖ニ蛭飼ノ女トイフモノ見ユ)。然ルニ江戸時代中期以後ニアリテハソノ法行ハレズ。安齋隨筆ニ『蛭飼ノ事ハ明月記・山槐記ソノ他ノ古記ニママ見エタリ、蛭飼ハ今田舎ナドニテハスルコトモアリ』ト記スルヲ見テモ、少ナクトモソノ術ノ都下ニ絶エタルコトヲ知ルベシ。然ルニ西洋醫方ノ傳ハリテヨリコノ術再ビ興リタレバ、世人ハ之ヲ西洋ニ糶マルモノト思ヒタルホドニテ、ソノ法モ亦全ク西洋ノ方ニ據レルナリ。(明和ノ頃、荻野元凱ガ水蛭ヲ用ヒシコトハ、ソノ著刺絡篇ニ見エタリ、コレソノ刺絡ノ術ト共ニ西洋ノ方ヲ傳ヘタルモノナリ)

伊澤蘭軒曰ク『蛭に腫物を啞せて、惡血を除く療治あり、西土にては隋の宋侠が經心録に初めて出でたり、唐の陳藏器が拾遺本草に至て詳なり(證類本草引く處、拾遺本草云、水蛭本功外、人患ニ赤白遊癩及癰腫毒ニ、取三十餘枚ニ、令レ啗ニ病處ニ、云々、先去ニ人皮鹹ニ、以ニ竹筒ニ盛レ蛭綴レ之、須臾咬血、滿自脫)南宋の景定の頃は頗ぶる用ひしこと、陳自明が外科精要に載せて、蜚鍼と稱せり、其後見ること無し。皇國にてはヒルカヒと云ひて、安貞中に用ひしこと、書に載する初なり、續て康曆の頃まで用ひしこと諸書に見えたり。今に至りても(文化文政年間)山野僻地の賤民は用ふることを聞けども、都城の人は知るものなければ、用ふるものは絶て無きなり』(手稿本、蘭軒遺稿卷下)

發泡打膿法

刺戟性ノ藥品ヲ外敷シテ毒ヲ呼ブノ法ハ、支那ニテモ昔時之ヲ用ヒタルコトアリ(兪辨ガ醫說ニ『石龍芮、俗名ニ猫跡草ニ、葉毛而尖、取レ葉揉ニ臀上ニ、成レ泡、謂ニ之天灸』ト記スルガ如キハソノ一例ナリ)然レドモ、之ヲ誘導法トシテ方式的ニ實際ニ應用セシハ、全ク西洋ノ說ニ本ヅキタルモノニシテ、天明ノ初年杉田玄白ガソノ方法ヲ和蘭ノ書中ニ得テ、首唱之ヲ行ヒタルヲ以テ、蓋シソノ始トスベシ。當時江戸・蘭方社中ニテハ之ヲ風答涅鹿(Fontanel)ト言ヒテ原名ヲ稱ヘシガ、大槻玄澤ノ瘍醫新書ニ至リテ芫青發泡方法トシテ之ヲ擧ゲ、ソノ施術ノ正法ヲ審ニシ、ソノ法ハ漸ク諸家ノ用フルトコロトナレリ。

然ルニ江戸・蘭學社中トハ關係ナク、紀藩醫員ニ武部子藝アリ。長崎ニ赴ムキ吉雄如淵ニ從ヒテ、蘭方ノ醫術ヲ修メ、蘭醫レツツケガ吉雄ニ傳ヘタル發泡打膿ノ法ヲ攻究シ、文化十四年發泡打膿考ヲ著ハシテソノ方法ヲ説キ、自家ノ實驗成績ヲ報告スルニ及ビテ、コノ術ハ更ニ詳ナルコトヲ得タリ。ソノ書ニ依レバ『發泡打膿ノ法ハ畜ニ其部ニ泡ヲ發シテ體中ノ鹹渣ヲ引キ、毒ヲ呼ブノミナラズ、スベテ藥力ニ依リテ其部分ニ運動ノ機轉ヲ施與シ、諸管ノ閉塞ヲ開發スルモノナリ、故ニ或ハ之ヲ健運術ト稱セリ』而シテ『其術ハ從來常用スル所ノ艾灸(艾灸ハ膿ヲ釀スヲ良トス、ヨコネガヘシ、ウイヌキ等ノ灸術ハ全ク打膿術ナリ、武郎加兒都ハ艾灸ヲ打膿術ノ一トセリ)・齒痛藥(俗間大麥・大蒜・毛茛・石龍芮、等ノ藥ヲ採テ搗キ攪キ、手ノ合谷ニ附貼シ、小キ蛤貝ヲ以テ其上ヲ覆ヒ、發泡シテ齒痛ヲ療ス、是レ發泡術ナリ)・截瘡法(齒痛ヲ治スル發泡ト同法ナリ、又ハ蕃椒ヲ用フ、皆ナ發泡術ナリ)・疥癬摩藥(巴豆ノ類ヲ以テ疥毒ヲ外方ニ呼出ス)・腰痛藥(俗間芥子末ヲ水ニ調シ、紙ニ擬シテ腰ニ貼シ、疝痛ヲ治ス、即チ發泡術ノ一種ナリ)等ニ類似シ、別ニ殊異ノ方法ニアラズ、ソノ發泡法ニハ芫青、或ハ葛上亭長(マメハ

ンメウ)或ハ大蓼葉・毛茛・巴豆等ヲ用ヒ、又ハ昇汞ヲバシリコムニ和シテ貼シ、打膿術ハ燒鐵・串線・腐蝕ノ三法ヲ用フ。ソノ主治ハ主ニ神經中ノ毒ヲ抜クニアリテ通風・肺蕩及ビ咳嗽・驚風・齒通・喘息・頭痛・喉痺・麻痺不遂等ノ諸症ニ用フベシ』ト唱道セリ。

吐法

前期ニ興リタル吐法ハ、コノ期ノ初二、殊ニ中神琴溪ノタメニ善ク運用セラレ、ソノ術ハ益々備ハレリ。次デ加古角洲出デテ吐方撮要(文化五年)ヲ著ハシ、自家ノ實驗ニ基ツキテ永富獨嘯庵ノ吐方考ヲ批評シ、喜多村良宅ハ中神琴溪ニ就テ吐方ヲ修メ吐法論(文化十三年)ヲ著ハシ、從來諸家ノ論說ヲ擧ゲテ、之ヲ是非シ、吐スベキノ證ト吐スベカラザルノ證トヲ分チ、吐方トシテ用フベキハ瓜蒂散・二聖散・獨聖散ノ三方ニシテ、ソノ瓜蒂散ハ病ノ寒熱ヲ帶ブルモノヲ吐スルニ用ヒ、二聖散ハ膠痰凝滯スルモノヲ治スルニ用ヒ、獨聖散ハ諸ノ滯食ヲ吐スルニ用ヒ、能クコノ三方ヲ應用スルトキハ廣ク萬病ヲ治スベシト説キ、各病ニ就テ一々吐法ノ適應ヲ論ズルコト太ダ詳ナリ。薩藩ノ醫田宮尙施モソノ著施治擧要中ニ吐法ノ事ヲ論ジ、多紀元堅モソノ著藥治通義中ニ吐法ノ一章ヲ擧ゲ、自家ノ實驗ニ基ツキテ諸家方法ノ得失ヲ批評シタリ。

コノ如ク、漢醫方ノ吐法盛ニ行ハルルニ際シ、西洋醫方ノ吐法モ亦傳ハリテ、吐劑ハ諸般ノ疾病ニ應用セラレタリ、殊ニ扶歇蘭度^{フーヘランド}ノ濟生三方ニハ吐劑ヲ以テ、治術ノ三基本品ノ一トナシ『嘔吐ハ自然ガ體内疾病狀態ノ發生ヲ標示スル所ノ普通ノ現象ニシテ、又コレニ依リテ疾病ヲ其初期、并ニ經過中ニ遏止スルノ自然機能ニ外ナラズ』ト説キ『吐劑ハ自然ノ治藥ナリ』トナシテ、之ヲ諸般ノ疾病ニ適用シ、吐劑トシテハ殊ニ吐根ヲ賞用シタリ。

ソノ説ニ依レバ吐劑ノ作用ハ、一ハ胃ヲ空虚ニシ、一ハ神經ヲ刺衝シ及ビ之ヲ變調セシムルニ在リトシ、(1)諸熱病初起、常ニ食機ヲ損シ、頻嘔・惡心・嘔吐及ビ痙攣劇シキモノ、(2)熱病及ビ他ノ諸病ニシテ呼吸困重・不整短促ナルモノ、(3)咳嗽吐痰・胸中粘液ヲ蓄フルモノ、(4)神經攣急・顔面筋惕等、ソノ症未ダ久シキヲ經ザルモノ、(5)泄瀉・食機缺乏症ヲ兼ネ且ツ胃中敗物ノ徵ヲ標スルモノ、(6)鵝口瘡初發、(7)精神障礙妄想等ニ適用スベシト言フ。

吐法ハ獨リ大人ノ疾病混之ヲ用フベキノミナラズシテ、小兒ノ疾病ニモ亦之ヲ賞用スベシトナシ、『近世、有下始發ニ小兒良法』、號爲^ニ神劑、而的切之功、信而不^レ可疑者^上、吐法是也、自^三亞爾母氏^{アルム}弘試^ニ之於小兒、全得^ニ起死回春之功^一者、極多矣』ト説キ(幼幼精義、卷一)、又精神症ノ治法トシテハ、吐法ハ冷水灌漑ニ次ギテ主要ノ地位ヲ占ムト言フ(濟生三方、卷三)ガ如キハ、中神琴溪・喜多村良宅等ガ説クトコロト符契ヲ合スガ如シ。

灌腸

支那ノ醫書ニテハ傷寒論ニ猪膽ニ醋少許ヲ和シテ以テ穀道中ニ灌グノ法アリ。千金方ニ猪羊膽・椒湯・鹽酒・蜜水等ヲ筒ニテ腸内ニ灌ギ入ルルノ法アリ。聖濟總錄ニ土瓜根ヲ竹筒ニテ腸内ニ注射スルノ法アリ。醫學正傳ニ小竹筒ヲ以テ香油ヲ肛門内ニ灌グノ法アリ。ソノ他諸書ニ灌導ノ法ヲ載スルモノ尠カラズ、故ニ灌腸ノ法ハ支那醫家ノ古昔ヨリ行ヒタル治法ノ一ナルコトハ明カナレドモ、我ガ醫家ガ方式的ニ灌腸ノ法ヲ用フルニ至リシハ、西洋醫方行ハレテヨリ以來ノコトナリ。

西洋内科書ノ第一ナル内科選要ニハ吉利詞^{ケレイステル}參兒(Kyster)ノ方ヲ擧ゲ、註ニ『水銃ニテ藥液ヲ腸中ニ激シ入ルル

ノ術名ナリ、即チ導術ナリ』ト記シ、精大麥・荅麻^{タマリンド}林度・旃那ニ水ヲ和シテ煮テ之ニ蜜ヲ加ヘタル液ヲ水銃ニテ腸内ニ灌注スルノ法ヲ擧ゲ、享和三年選述ノ蘭療方ニハケレイステールヲ蜜導方ト譯シ、椿實油・蜂蜜・醋ノ合劑ヲ

水銃ニテ穀道ニ射入スルノ法ヲ擧ゲシガ、爾來コノ法ハ漸次ニ盛ニ行ハレ、安政六年刊ノ内服同功ニハ、『灌腸ノ効ハ、第一ハ排泄物ヲ外導シ、第二ハ下利過度ヲ鎮止シ、第三ハ疼痛ヲ緩和シ、第四ハ小便閉（石淋・膀胱焮衝）ヲ利導シ、第五ハ難産（死胎・胞衣不下）努力ヲ催起シ、第六ハ嘔下困難・不食（咽喉焮衝・嘔噎・大患人等）ヲ滋食シ、第七ハ人事不省・麻痺・不遂及ビ小兒等藥汁ヲ服スルコト能ハザル者ニ施ス等ナリ』ト記シ、灌腸ハ便秘ニ對シテノミナラズ、所謂滋養灌腸、誘導灌腸等トシテモ用ヒラルルニイタレリ。

坐藥

内科選要ニ『水銃劑ヲ施ス事ニ於テ、次序有テ頗ブル其煩多ヲ厭ヒ、其術ニ於テ簡便ニシテ從ヒ易キヲ以テ一個ノ坐藥ヲ用フルナリ』ト言ヒ、坐藥ノ方ヲ擧ゲタリ。坐藥ノ方ハ金匱要略ニ出デ、『蛇床子仁、右末トナシ、白粉少許ヲ以テ和シ、棗ノ大サノ如ク、綿ニ裏テ之ヲ陰中ニ内レ、陰中ヲ溫ムルノ坐藥トナス』又三因方ニ坐導ノ方（藥品ヲ絹袋ニ盛り、大ハ指ノ如ク、長サ三寸餘トナシ、陰中ニ入ル）アリ、我が邦ニテモ中條流ノ産科ニサシ藥ノ方アリ。コレ今日所謂腔坐藥ノ方ナリ。此ニ謂フトコロノ坐藥即チ灌腸ニ代エ用フルトコロノ直腸坐藥ニハ傷寒論ニ蜜導ノ方（蜜七合一味、銅器ノ中ニ入レ、微火ニテ煎ス。稍々凝テ飴ノ狀ニ似タル時、手ニテ捻テ挺トナシ、指ノ大サノ如クス。長二寸許、穀遺ノ内ニ入ル）アリ。聖濟總錄ニ糯米導・皂莢梅肉導・烏梅導・蜜膽導等ノ諸方アリ、コノ法ハ室町時代ノ醫書ニモ記載セラレ、當時既ニ我が邦ニモ行ハレタルガ如シ、而カモソノ法ノ盛ニ行ハルルニ至リシハ、コノ頃ニ及ビテ西洋ノ方ヲ傳ヘタル以來ナリ。

導尿

葛底帝兒（Katheter）ニテ尿ヲ導クノ法モ亦西洋ヨリ傳ハリ、天明・寛政ノ頃ニハ尿閉及ビ淋疾ノ治ニコノ器械ヲ用ヒ（享和三年撰述蘭療方ニ『吸氣管、謂之葛底帝兒』、此器至細長管、製造如ニ水銃一焉、大凡淋疾、及尿閉皆用レ之、法以ニ管尾一入ニ尿口一、取ニ管内筋頭一、交推入引出、當ニ氣通尿快利一也、以ニ白金或鼈甲一製レ之』ト記セリ）文政二年刊行ノ瘍科精選圖解ニハカテーテルヲ測膀胱尿管ト譯シ、尿道結石ノ有無ヲ測驗シ、又尿閉ヲ疏通スルノ器ナリト註シ、人ノ老少大小ニ應ジテ大小一ナラズ、男子用ト婦人用トアリトテ、鐵製及ビ銀製ノカテーテル十餘個ノ圖ヲ掲ゲタリ。天保ノ頃ニ及ビテハ産科ニテモ、妊娠小便不利ニ之ヲ賞用シ、天保四年撰述坐婆必研ニハ、産前後澁閉ノ治ヲ説クニ方リ『近來世に専ら用ふる所のカテーテルといふものを用ひて通利を取るがよし』ト記シ、銀ニテ造レルモノ最モ良シトシテ、ソノ圖ヲ擧ゲタリ。

導尿ノ法ハ古クヨリ支那ノ醫書ニ載スルトコロニシテ千金方・救急方・衛生寶鑑・赤水玄珠・外臺秘要方・景岳全書等ノ諸書ニ通陰（猪ノ尿胞一個ヲ取り、小竅ヲ穿チ、細翎筒ヲ通シ、黃蠟ニテ尿胞ノ口ヲ封シ、翎口ヨリ氣ヲ吹テ滿シメ繫キ定メ了リ、再ビ手ヲ以テ捻シ定メ、黃蠟ノ堵塞ヲ去リ、翎筒ヲ莖口ニ放開シ、ソノ氣ヲ透テ裏ニ入シムレハ自然ニ小便下ル）・吹陰（青葱葉尖ヲ用ヒ、鹽末ヲ盛り尿道孔ヲ開キ葉小頭ヲ中ニ入レテ之ヲ吹ク）・通塞（鵝翎筒ヲ用ヒテ尿道口ニ挿ミ入レ、仍ホ水銀一二錢ヲ徐々ニ灌入シ段々輕々ニ之ヲ導ケバ路通シテ尿出ツ）ノ諸法アリ。而カモソノ法ハ後ニ傳ハラザリキ。

皮下注射法

皮下ニ藥物ヲ注射スルノ法ハ、英國ノ醫アレキササンデル・ウッド氏ガ一千八百五十五年（我が安政二年）ニ創始セシモノナレドモ、ソノ法ハ當時直チニ我が邦ニハ傳ハラザリシト見エ、安政六年刊行ノ内服同功ニハ外用ノ方法

ヲ網羅シ、夫ノ賢埒エンデルマチス兒末質斯（莞青ニテ表皮ヲ剝離シ、而シテ藥末ヲソノ上ニ摻シテ吸收セシムルノ法）マデモ擧ゲタルニモ拘ラズ、未ダ皮下注射法ノ事ニ及バザリキ。

灌水法⁸

水治療法ハ既ニ太古ニモ行ハレタルガ、冷水灌漑法・冷水浴等ノ盛ニ行ハレシバ平安朝ノ頃ナリ。大鏡、三條天皇眼病ノ條ニ『もとより御風重くおはしますと、醫師どもの、大小寒の水を、御ぐしにいさせ玉へと申しければ、こほり塞がりたる水を、多くかけさせ玉ひける、云々』トアリ。竹取物語・伊勢物語ニ氣絶セシモノニ冷水ヲ灑ギテ愈シタル例アリ。續古事談・榮花物語等ニ瘡瘍ニ水ヲ注射シテ療シタル例アリ。當時ノ醫書醫心方・醫略抄ニモ千金方ヲ引テ癰疽ニ冷水ヲ射シテ治スルノ法ヲ擧ゲタリ。平家物語ニ平清盛ガ熱邪ニ侵サレシキ身體ヲ水ニ漬シタル記事アリ（百練鈔ニ『入道太政大臣薨、中略、日來有三所惱、身熱如レ火也』トアリ、ソノ病性ハ詳ナラザレドモ、急性熱性病ナリシコトハ明カナリ）。

支那ニアリテハ、漬水ノ法ハ素問ニ出デ、灌水ノ法ハ傷寒論ニ見ユ、千金方・外臺秘要方ニモ、冷水洗浴ノ法アリ。醫學綱目ニ冷水搭胸ノ法アリ。儒門事親ニ痘瘡灌水及ビ惡寒實熱灌水法アリ。醫說ニ冷疾ニ冷水ヲ灌ギテ治シタル例アリ。單一ナル水治療法ノ支那醫家ノタメニ用ヒラレタルヤ甚ダ古シト言フベシ。

我が邦ニ在リテモ、水治ノ法ハ、コノ如ク古代ニハ盛ニ行ハレシモ、後世ソノ傳ヲ失ヒ、醫家多クハ之ヲ度外視セシガ、江戸時代中期ニ及ビ香川修庵・宮川春暉（傷寒外傳）・鳥海玄連（頭寒ニ冷水灌漑法ヲ用ヒシコト時還讀我書ニ出ヅ）・加藤玄順（醫療手引草）等ノ諸家アリテ灌水ノ法ヲ稱揚シ、冷水灌漑（及ビ瀑布泉）ノ頭痛・肩塞・狂病及ビ傷寒狂躁等ヲ治スルノ良法ナルコトヲ説キテヨリ、コノ法ハ再ビ醫家ノ注意スルトコロトナリ、コノ期ニ及ビテハ、中神琴溪・古宇田知常（灌水篇ヲ著ハス）・橘尙賢（灌水論・灌水伊呂波歌・瀑布効能記等ヲ著ハス）・平野元良（水療俗辯・既濟私言ヲ著ハス）等ノ諸家アリテ、大ニ灌水ノ治療作用ヲ攻究シ、ソノ傷寒ノ大熱・狂躁ノ症・感冒・瘧・頭痛・逆上・癩症・麻痺・癩癩・狂病、等ニ應用スベキコトヲ唱道セリ。

灌水ノ法ノミナラズ、熱病ニ對シテ、新汲水ニ衣物ヲ浸シ熨スルノ法（濕布纏絡法）モ、亦既ニ行ハレタリ（銷閑雜記）。

狂病ニ對シテ灌水ヲ施スコトハ支那ニアリテハ肘後方等ノ諸書ニ見エタリ。我が邦ニアリテハ、近世香川修庵ノ一本堂藥選ニ瀑布泉ノ狂病及ビ頭痛・肩塞ヲ治スルニ効アルヲ説キ、加藤玄順ノ醫療手引草等ニ發狂ノ症ニハ瀧ニウタセテ効ヲ取ルコトヲ説キタルヨリ、瀑布泉ハ殊ニ狂病ヲ治スルガ爲ニ應用セラレ、京都・岩屋山ノ懸泉・清水寺音羽ノ瀧・岩倉山ノ瀧ノ如ク、治病ノ目的ニ構造セラレタルモノアルニイタレリ。次テ中神琴溪・橘尙賢等、諸家ノコノ法ヲ稱揚セルニヨリテ、狂病者ヲシテ瀑布泉ニ浴セシムルコトハ廣ク行ハルルニイタレリ。

按ズルニ、西洋ニアリテプリースニツツガ初メテ水治法ヲ施用セシハ一千八百十六年或十七年ニシテ我が邦文化十三年或十四年ニ當ル、英醫カリীগ始メテ腸窒扶斯ニ水治療法ヲ行フコトヲ唱道セシハ一千七百八十七年ニシテ我が邦天明七年ニ當ル、故ニコレ等ノ法ガ我が邦ニ行ハレシハ之ヲ西洋ニ比スレバ頗ブル古シトス。而カモ天

保五年（西歷一千八百三十四年）刊行ノ病家須知後篇ニ『西蕃フラングには、近世に至りて、水療の法を大に稱譽して、專ばらに用ふるよし、彼邦の醫書に載せたり』トアルヲ見レバ、プリースニツツノ水治法ハ、コノ頃我が邦ニ傳ハリシモノナランカ。

浴法

支那ニテハ洗浴發汗ノ法ハ古ヨリ有リ。素問ニ『其有レ邪者、漬形以爲レ汗』トアリ。病源候論、傷寒ノ條ニ『頭

痛、惡感、腰背強重、此邪氣在_レ表、洗_レ浴發_レ汗、即愈』トアリ。爾後、千金方ニ傷寒ヲ治スル沐浴ノ方アリ。聖惠方ニ傳屍骨蒸ヲ治スル沐浴ノ方アリ。ソノ他諸家ノ浴法ヲ用フルモノ尠カラズ。我が邦ニアリテモ、浴法ハ古クヨリ行ハレ、榮花物語玉村菊卷、『大將殿日頃御心地なやましくおぼさる、御風などにやとて御ゆ_ミでせさせ給ふ』トアリ、他ノ書中ニモゆ_ミでノ語屢々出ツ、コレ浴法ナリ。爾後漬浴ヲ治病ノ目的ニ用フルコトハ甚ダ衰ヘタリト雖モ、近世ニ至リ大和本草ニ『傷食・食滯・泄瀉・腹痛等ノ症ニ溫浴ヲ用フルトキハ氣廻ハリテ早く愈ユ、藥ヲ用フルニ勝レリ』等ノ説モアリテ、浴法ハ再ビ興リ、殊ニ藥_レ浴法ハ溫泉ト併ビテ盛行ハルルニイタレリ。

藥_レ物_レヲ_レ浴_ニ混_ジテ_レ用_{フル}ノ法ハ千金方ニ莽草浴湯アリ(小兒卒カニ寒熱スルヲ治ス)、柳枝浴湯アリ、聖濟總錄ニ柳絮湯アリ、外臺秘要方ニ桃柳等三物浴湯アリ、本草ニ生薑浴法アリ(欬嗽ヲ治ス)、嬰孺方ニ五參浴湯アリ、本草崇原ニ楊柳枝及根白皮浴湯法アリ(疾熱・淋疾ヲ主治ス)、幼幼集成ニ消食浴湯アリ、博愛心鑑ニ水楊湯アリ(痘瘡頂陷ヲ治ス)(洒湯ヲ痘瘡ニ施スコトハ、我が邦ニテ古ヨリ用フル法ナリ、コレハ酒ヲ溫湯ニ混ジテ痘疹ヲ浸スルモノニテ、藥浴ノ變法ト見ルベシ)

脚湯(坐浴)モ亦古クヨリ行ハレシコトハ本草衍義ニ『熱湯助_ニ陽氣_ニ、行_ニ經絡_ニ、患_ニ風冷氣痺_ニ之人、多以_レ湯溼_レ脚至_ニ膝上_ニ、厚覆使_ニ汗出_ニ周身_ニ、然亦別有_レ藥、亦終假_ニ陽氣_ニ、而行爾、四時暴泄利、四肢冷、臍腹痛、深ニ坐湯中、侵至_ニ腹上_ニ、頻頻作_レ之』トアリ。續詞花集ニモ『大齋院御足なやませ給ふを、杉の湯にてゆでさせ給ふべきよし申ければゆでさせ給へど、_☒るしも見えさりけり』トアルニテ知ラルベシ。

湯蒸(蒸氣浴)ノ法モ醫學綱目・本草衍義等ノ諸書義出デ、我が藝州ノ宮島ニハ昔時ヨリ石風呂ト名ヅクル湯蒸ノ法アリテ行ハレタリ。

熱_レ砂_レ浴_レモ古ヨリ薩摩國指宿郡總湯ノ濱ニアリ。薩藩醫官、田宮尙施ガ施治要ニ記スルトコロニ依レバ『病客皆赤體、或ハ絺綌單衣ニシテ熱砂ノ中ニ坐臥シ傍人大飯匙ヲ以テ頻ニ砂ヲ埋メ頭面ノミヲ土中ニ出シ置ケハ暫アリテ一身溫煖ニ蒸盪セラレ汗出スルコト絜々トシテ通體和暢シ疾痛頓ニ愈ユ湯泉ニ比スレバ柔淳ニシテ甚佳ナリ一切冷疾・筋攣急痛・痿躄・疝癩・婦人血枯・不月・帶下・絕孕諸症ニ大効アリ』ト言フ。

溫泉

溫泉ノ功能ニ就テハ、既ニ上段ニ記述スルガ如ク(第四二三頁參照)香川修庵ノ攻究ニ依リテ、醫家ノ注目ヲ引クニ至リシガ、コレニ次ギテ原雙桂ノ溫泉小言アリ、柘植彰常ノ溫泉論(文化六年)アリ。溫泉論ハ溫泉ノ生成スル所以ヲ説キ、臭氣・泉方并ニ臭味・色・淡鹹・剛柔等ヲ辨シタレドモ、理學及ビ化學ニ基ヅキテソノ説ヲ立テシニアラザルヲ以テ、ソノ氣ノ成ル所以ヲ論ジ、成分ヲ説キタル點ニハ取ルベキモノナシ、而カモ之ヲ治療上ニ應用スルニ方リ、一種ノ子宮鏡狀ノ筒ヲ製シ、之ヲ腔内ニ挿ミテ入浴セシメ、以テ子宮ノ疾患ニ對スル溫泉ノ効力ヲ増加スルコトヲ圖リシガ如キハ、特ニ擧ゲテ一言スルノ價值アリ。又人工溫泉ヲ造リテ、溫泉ノ普及ヲ企テシガ如キモ、ソノ功勞少ナシトセズ。

宇津木昆臺方溫泉辨ハ柘植彰常ノ溫泉論ニ據リテ、ソノ説ヲ立テタルモノニシテ、概シテ自家ノ創見ニ係ルモノナシ。

電氣療法

越_レ列_レ篤_レ的_レ兒_レ(電氣機)ハ明和以前、既ニ早く我が邦ニ傳ハリ、寶曆七年平賀源内之ヲ模製セルコトアリ、森島中

良(桂川甫周ノ弟)ノ紅毛雜誌(天明七年刊)ニハ家藏ノ品ヲ寫セルモノナリトテ、越_レ禮_レ幾_レ的_レ爾_レノ圖アリ、ソノ圖

ヲ見ルニ玻璃ヲ用ヒテ造レル摩擦電機ナリ、而カモ當時ハ固ヨリ之ヲ治療上ニ應用セルニハアラズ、佛國ノ醫家ツッシエン (Duchene) ガ感傳電氣ノ治療作用ヲ説キシハ、一千八百四十七年(我が弘化四年)ニシテ西洋ニテモ、コノ頃ヨリシテ之ヲ専ラ治病ニ試用スルニイタリタレバ、(安政六年)一千八百五十九年刊行ノ内服同功ニ越曆エレキテル的兒療法ヲ擧ゲ、之ヲ痲質斯病・痲痺不遂・聾・啞・痙攣病・神經病・經閉、ソノ他頑固經久ノ諸病等ニ効アルコトヲ説キ、自家用フルトコロノ電機ノ圖ヲ示シテ『世未ダ試用多カラズ、人或ハ創見ヲ怪シムモノアラン、廣ク高明ノ君子ニ試験ヲ冀ハントス』ト言ヘルハ、當時ノ實際ヲ示セルモノナルベシ。〔是ヨリ先キ電氣通標ニモ電氣治療法ヲ擧ゲタレドモ、タダ感傳電氣ニ止マリシガ内服同功ニ至リテハ、平流電氣(ガルバニ)ヲ擧ゲタリ〕

看護法

醫者三分、看病七分ノ諺モアリテ、看護ノ治病ニ必要ナルコトハ古ヨリ世人ノ唱ヘシトコロナルガ、ソノ看護法ニ就キテ稍組織的ニ記述セルハ平野元良ノ病家須知(天保三年刊)ニ始マル。ソノ説ニ依レバ『看病トイフコトハ病者ノ飲啖、坐臥ノ介抱ト、藥ヲ服シムルコトノミライフニハアラデ、是ニ三等アリ、其第一ハ病ノ萌ヲ塞クコトナリ、第二ハ既ニ病アルモノハ其病ノ由テ來タル所ヲ考ヘ、速ニ適當ノ治ヲ施スコトヲ勉ムルナリ、第三ハ病勢既ニ進ミテ坐臥二人ノカヲ頼ルモノニアリテハ、藥ノ力ヲ恃ムベキハ勿論ナレドモ、ソノ腸胃ノ状態・氣候ノ關係・平素ノ習慣・衣服・臥蓐・病室・大便ノ色相・臭氣ノ區別・通利ノ状態・小便ノ色・多少・溷濁等ニ注意シ、又患者ノ寤寐ヲ察シ、勉メテ精神上ノ安慰ヲナスコトニ注意スベシ』ト言フ、ソノ記述ハ通俗的ナリト雖モ、ソノ説ニハ首肯スベキモノ多シ。

種痘法

英國ノ醫エドワード・ジェンナーガ發明セル種牛痘法ノ支那ニ傳ハリシハ、嘉慶十年(我が文化二年、西曆一千八百五年ニ當ル)ノ四月ニシテ、ジェンナーノ發明(西曆一千七百九十六年、我が寛政八年、支那ノ嘉慶元年ニ當ル)ヨリ十年ノ後ナリ。コノ時支那ニアリシ英國人哆啞吹種痘法ノ概要ヲ説ケルヲバ、同國人嘶啞吹漢文ニ繙譯シ、同年ノ六月ニ刊行セリ、之ヲ種痘奇法トス。支那ニテジェンナー種痘法ノ事ヲ記述セルハコノ書ヲ以テ嚆矢トス。南海ノ邱熹(號、浩川)トイフモノ熱心ニソノ術ヲ講シ、先ヅ之ヲ自體ニ試ミ、次デ之ヲ家人戚友ニ試ミテ皆ナ驗アリシカバ、廣クコノ法ヲ施スコト十餘年ニ及ビ萬擧萬全ノ良法ナルコトヲ論定シテ引痘略ヲ著セリ。引痘略ハ嘉慶二十二年ノ冬ニ成リテ道光十一年ニ上梓セルモノナリ、書中ニ引痘説、首在レ留養苗漿、次在レ認識瘋疾一、引泄法、度苗法、出痘時宜辨、出痘後須知ノ七章ヲ別チテ、種痘法ノ何物タル事ト、ソノ利益ト、術式ノ大概トヲ示シタリ。

ジェンナーガ種痘法ヲ發明セシト言フコトノ我が邦ニ傳ハリシハ支那ヨリニシテ、ソノ媒介タリシハ前ニ擧ゲタル哆啞吹・嘶啞吹ノ種痘奇法及ビ邱熹ノ引痘略ナリ。種痘奇法ノ我が邦ニ來レルハ何年ト言フコトヲ詳ニセズ、然レドモ世ノ人ガ斯書アルヲ知リシハ、尾張ノ人伊藤圭介ガ之ニ訓點ヲ加ヘ校刻シテ公ニセシ時(天保十二年辛丑ノ冬)ニシテ、引痘略(我が天保二年ノ出版)ガ我が邦ニ入りシハ天保ノ末年ナルベシ、南紀ノ人小山肆成之ヲ取リテ校刻シ、弘化四年引痘新法全書ト題シテ世ニ行ヒ、又ソノ漢文ノ讀ミ難ク靴ヲ隔テテ痒ヲ搔クガ如キノ憾アルヲ慮カリ、假字ヲ挿ミ引痘新法全書附録ト題シ、兒女子ニモ解セラルベキ書トナシ、嘉永二年ノ冬コレヲ出版セシヨリ、ジェンナー種牛痘ノ法ハ漸ク我が邦人ノ知ルトコロトナレリ。

種痘奇書・引痘略等ノ書既ニ入り來リ、又和蘭ノ醫書モ傳ハリ、牛種痘法ノコト漸ク我が邦人ノ知ルトコロトナリテ之ヲ切望スルモノアリ、文政ノ初年ニ和蘭ノ醫某牛痘苗ヲ携ヘテ我が長崎ニ來リテ種接ヲ試ミシニ、當時ノ俗

之ヲ妖怪ノ術トシテ浮言百出、遂ニソノ目的ヲ達セザリシト言フ。天保十年蘭人リシユール牛痘漿ヲ齎シ來リテ種接ヲ試ミタレドモ應驗アラズ。或ハ曰ク天保ノ末年林洞海・大石良榮二人相謀リ長崎町年寄高島四郎太夫ニ托シ痘苗ヲ和蘭ニ求メシコトアリ。林氏等ハ痘苗ヲ得テ之ヲ長崎ノ兒女十二人ニ接種セシニ、不幸ニシテ皆ナ感染セザリキ、天保十二年（或ハ十三年）江戸ノ大槻俊齋痘苗ヲ高島四郎太夫ヨリ獲テ之ヲ淺草・藏前伊勢屋ノ兒（名ヲ幾次郎ト曰フ）ニ施シテ驗アリシト言フ。是ヲ江戸ニテ牛痘ヲ種エタルノ嚆矢トス、然レドモコノ苗ハ遂ニ永續スルコトヲ得ザリキ。

是ヨリ先キ弘化四年七月、鍋島閑叟侯西洋種痘法ノコトヲ聞キ、ソノ醫員榎林宗建ニ内命ヲ傳へ、牛痘苗ヲ和蘭ニ求メシメラル。榎林ハ累世通詞ノ家ニシテ蘭館醫員トシテ出入自由ナリシヲ以テ、當時在館ノ甲必丹レフキソンニ面シテソノ事ヲ托セシニ、幸ニソノ年ノ九月蘭船歸國使ニ托シ本國ニソノ旨ヲ通ズルコトヲ得タリ。翌嘉永元年十月（或ハ曰ク七月）入港ノ蘭船ニテモーニツケノ牛痘苗ヲ齎セシハ即チコレガ爲ナリ。然ルニコノ時モーニツケ齎ストコロノ痘苗ハ遂ニ發痘セズ、翌嘉永二年七月入港ノ蘭船ニテ牛痘痴モーニツケノ許ニ達セリ、由リテ之ヲ三名ノ兒ニ種接セシニ、二兒ハ感ゼザリシモ、一兒ハ感受シテ善良ノ痘ヲ發セリ。

佐賀侯（鍋島閑叟）ハ牛痘ノ善感セルヲ聞キ大ニ喜ビ、侍醫佐野壽仙・大石良英・林梅馥・島田南嶺等ヲ召シ、榎林ヲシテ先ヅ良英・南嶺二氏ノ兒ニ種接セシムルニ皆ナ好結果ヲ得タリ、由テ直ニ公子淳一郎（直大侯）・貞姫（慈貞院夫人）ニ種接セシメラレシニ、又共ニ能ク萌生セリ。候大ニ歎賞シ、賜賚甚ダ厚シ、既ニシテ榎林ハ長崎ニ歸リ、善良ノ痘種ヲ撰ミ、之ヲ江戸ノ戸塚靜海、京都ノ日野鼎哉ニ送り、又牛痘小考ヲ著シテ種痘ノ法則ヲ述ブ時ニ嘉永二年十月某日ナリ。是ヨリシテ牛痘ノ苗天下ニ遍ネク、ソノ述亦廣ク世ニ行ハルルニイタレリ。

榎林宗建、名ハ高房、和山ト號ス、ソノ祖鎮山和蘭通事ヲ以テ外科ヲ善クシ、榎林流外科ノ一派ヲ立テテヨリ五世相傳ヘテ宗建ニ至ル、宗建父ノ後ヲ承ケテ佐賀侯ニ仕へ、文政六年獨醫シーボルトノ來ルヤ之ヲソノ家ニ延テ醫方ヲ傳ヘンコトヲ謀リ、奉行本多佐渡守及ビ町年寄高島四郎太夫ノ斡旋庇護ニ依リテ兄榮建及ビ門下ノ士ト共ニシーボルトニ親炙スルコトヲ得タリ、後チ佐賀侯ノ命ヲ奉ジテ痘苗ヲ和蘭ニ求メ、遂ニ能ク歷驗アルニ至リ、種痘ノ祖トシテ仰ガルルニ至レリ、嘉永五年十月病ヲ歿ス。（榎林家譜）

モーニツケ牛痘ヲ齎セシヨリ前、松前ノ人中川五郎治種痘ノ術ヲ露西亞ヨリ傳へ、文政七年・天保六年・天保十三年ノ惡痘流行ノ際ニ、奮テソノ術ヲ施シテ、爲ニ慘毒ヲ免レタルモノ多カリシト言フ。

中川五郎治ハ松前ニテ夷人ヲ役使スル部落ノ役人（毒人ト名ツク）ナリシガ、文化五年卯ノ歲エトロフ島ニテ露西亞國ニ擄ハレ、彼ノ國ヲホーツカ・イルコツカ等ニ在ルノ間、彼ノ國官醫ノ種痘術ヲ施スヲ見テ、之ヲ我が邦ニ傳ヘント欲シ、ソノ助手トナリテ種痘法ヲ傳習シ、且ツ牛痘種法ノ書二冊ヲ得テ後チ我が邦ニ歸レリ。ソノ後松前侯ニ仕へ名ヲ儀貞郎ト改メ、七十餘歳ニシテ歿セリト言フ。（小傳）

又肥前・大村藩ノ侍醫ニ長與俊達アリ。嘗テ英國ノ書ヲ讀テ牛痘ノ法ヲ載スルヲ見テ大ニ喜ビソノ苗ヲ得ント欲シ、牛二頭ヲ買ヒ嬰兒ノ痘ヲ種エ、ソノ膿ヲ取テ之ヲ試ミ、紀州・熊野ニ小山肆成アリ、人痘ノ膿ヲ牛ニ種エ、ソノ漿ヲ取テ種痘ノ法ヲ行ヒ、狹貫ノ醫官ニ井上宗端アリ、牛體ニ生ズル痘ヲ採リ人體ニ移接シテ、天然痘ヲ豫防セリト言フ。

種痘ノ術、既ニ傳ハリシヨリ、蘭方醫家ハ盛ニ之ヲ試ミ、嘉永年間京都ノ江馬榴園・榎林宗建・赤澤寬輔・小石中藏等ハ有信堂ヲ興シ、大阪ノ緒方洪庵・日野葛民等モ除痘館ヲ立テ、次デ江戸ニモ種痘所ノ設立アリ。牛痘接種

ノ法ハ速カニ天下ニ普及スルニイタレリ。

醫學教育 51

前期江戸ニ多紀元孝アリテ躋壽館ヲ創立シ、京都ニ畑黄山アリテ醫學院ヲ設立シ、ソノ他地方諸藩ニモ醫學校ノ設アリ、民間ニモ醫學ノ講習ニ次序ヲ立ツルノ議ヲナスモノアリ（津田玄仙ガ勸學治體ヲ著ハシテ、醫學ノ次序ヲ論ゼルガ如キノ一例ナリ）。醫學教育ハ漸クソノ緒ニ就キシガ、コノ期ニ至リテハ江戸ノ醫學館ハ政府ノ所管トナリテ大ニ擴張セラレ、諸藩ノ醫學ハソノ數ヲ増シ、西洋醫學ヲ講習スルノ所ニハ、京都ニ新宮涼庭及ビ廣瀨元恭ノ私塾アリ、大阪ニ緒方洪庵ノ私塾アリ、共ニ一定ノ次序ヲ立テテ醫學ヲ教授セシガ、後ニハ政府自カラ西洋醫學所ヲ江戸ニ興シ、次デ又精得館ヲ長崎ニ建テテ、カヲ醫學ノ教育ニ盡スニイタレリ。

醫學館

寛政二年十月、幕府醫學館ヲ創立シ、多紀元徳ヲシテ之ヲ司ラシメ、官醫及ビ子弟ヲ教育シ、併セテ之ヲ考試セシム。是ヨリ先キ多紀元孝創立スルトコロノ躋壽館、火災ニ罹リ元孝私財ヲ捐テテ再ビ校舍ヲ作り、ソノ子元徳業ヲ嗣ギテ教育ニ従事ス。幕府コレヲ美トシ、是ニ至リテ命ジテコレヲ官學トシ、ソノ規模ヲ擴張ス。文化三年校舍焼亡スルニ遇ヒテ下谷・新橋通ニ新築シ、天保十四年ニ至リテ更ニ寄宿寮ヲ建テ、コノ時ヨリ陪臣醫師及ビ町醫師ニモ聽講セシメ、之ヲ別會ト名ヅク。ソノ教科ハ躋壽館ノ例ニ依リ、四書・五經・素問・靈樞・難經・傷寒論・金匱要略ヨリ外科（外科正宗）・眼科（審視瑤函）・鍼科（鍼灸資生經・十四經發揮）・兒科（少小嬰孺方）・本草科（本草綱目）ニ至ル、但シ口齒科ノミハ之ヲ置カズ。

講師ニハ辻元松庵・田中俊哲・吉田長禎・江馬春齡・清川玄道・坂上玄丈・伊澤長庵・井岡友仙・澁江道純・喜多村安正・岡了允・森養竹・小島尙質・千賀道榮・田村元雄、等諸家アリ。京師ヨリ、池田瑞仙（痘科）・小野蘭山（本草）・福井立助（本道）ノ諸家ヲ聘シ、各専門ノ學ヲ講ゼシメ、又儒家田澤宗伯・栗本瑞見・海保章之進、等アリテ經書ヲ講ズルコト、舊例ニ仍ル。

醫學館督事ハ累世多紀氏ヲ以テ之ニ任ジ、コノ期ニアリテハ多紀元徳・多紀元簡（桂山）・多紀元胤（柳沂）・多紀元堅（菑庭）・多紀元估（棠邊）・多紀元琰（雲從）・多紀安洲、等相嗣ギテソノ業ヲ承ク。醫學館教諭ハ五名ニシテ、助教ハ初メ三名ナリシヲ後増シテ五名トス。共ニ公選ニシテ醫學館ヨリ私ニ任用セシメズ。

醫學館ニハ藥品會アリ、圖書館アリ、臨床實驗ノ制アリ、安政年間ニ至リ大小試験ノ法ヲ立テ、小試ハ春秋二回、大試ハ五年ニ一回ト定メテ之ヲ施行シタリ。

諸藩學校

諸藩ノ學校ハ皆ナ藩地ニアリ、多クハ藩臣ノ士分以上ノタメニシタルモノニシテ、ソノ中ニ醫學ヲ併セ教ヘタルモノアリ。ソノ著シキモノヲ擧グレバ

秋田藩明德館（寛政元年創立、初メ明道館ト曰フ）内ニ醫學部アリ、之ヲ養壽局ト言ヒ、本科・外科・眼科・啞科・産科・針科・金瘡科ノ諸科ヲ別チテ教授シ、考試ヲ經テ符驗（卒業證書）ヲ附與シタリ、コノ藩ニアリテ醫官タルベキモノハ十四經・大成論・格致餘論・原病式・運氣論・遡源集・本草序例ヲ修メタルヲ得タルモノニ限ルノ制ナリシヲ以テ、醫學所ノ教科モ之ニ準ジタリ、又コノ藩ニアリテハ享和元年ニ令ヲ下シテ、新ニ醫學ヲナサントスルモノハ醫學館ニテ試験ヲ施シタル後、之ヲ許可スルコトトナシタリ。

徳島藩寺島學問所（寛政三年創立）ハ初メハ漢學ノミヲ教授セシガ、後ニ至リテ醫學・洋學等ヲ加ヘタリ、ソノ醫師學問所ハ寛政七年ノ創立ニ係リ、安政四年ニ至リ本校醫生ヲシテ傍ラ蘭書ヲ講ゼシメ、ソノ翌年校内別ニ洋方醫學教授ノ一局ヲ設ケ、主トシテ洋方ヲ講ゼシム。

金澤藩明倫堂（寛政四年創立）ニハ醫學ノ科目アリ、壯猶館（安政元年創立）ニモ西洋醫學ノ科目アリ。
和歌山藩醫學館（寛政四年創立）ハ藩内市郷醫士ノ子弟及ビソノ門生ヲ教フル所ニシテ、ソノ學科ハ診候・經愈・本草・運氣・外傷・内傷・婦人・小兒・瘡瘍・醫案ノ十科ニシテ、ソノ講習ニ產物會・挨穴會・醫案會アリ。

米澤藩好生堂（寛政四年創立）ハ初メ醫生ヲシテ本草學ヲ講ゼシムル所ナリシガ、文政十二年ニ至リテ之ヲ興讓館ニ移シ醫生ヲ教授スルノ所トナシ、蘭學ヲモ教ヘタリ。

佐倉藩成徳書院（寛政四年創立）ニ醫學所アリ。天保年中佐藤泰然ヲ聘シ、蘭法ヲ採用シ漢・蘭兩醫方併ビ行ハレタリ。

福井藩濟生館（文政二年創立）ハ藩侍醫ノ共立スル所ニ成リ、藩主ヨリソノ費ヲ補助セリ。安政二年ニ至リテ除痘館ヲ之ニ併セリ。コノ藩ノ制、子弟十三歳ヨリ濟生館ニ入りテ醫學ヲ修メシメ小學・四書・五經ヨリ傷寒論・金匱要略ノ素讀ヲ卒ヘタルモノヲ萌生ト名ヅケ、之ヲ初納トシ、次デ素問・靈樞・難經・千金方・外臺秘要方・瘟疫論・外科正宗及ビ内科選要・熱病論・病因精義・醫療正始等ヲ修メ得タルモノヲ進業生ト名ヅケ、ソレヨリ臨床實驗ニ入り、考試優等ナルモノヲ成業生トス。

津藩有造館（文政三年創立）中ニモ醫學部アリ。

水戸藩弘道館（天保九年創立）中ニ醫學部アリ、ソノ中ニ本草・蘭學・調藥・製藥ノ四局アリ、療病所・養牛場・藥園等ヲ之ニ附シタリ。

山口藩醫學校（天保十一年創立）ハ藩醫賀屋恭安・能美洞庵ノ設立スル所ニ本ヅク、安政年間ニ至リ、之ヲ明倫館ノ所轄トシ、藩醫ヲシテ漢・蘭ニ方ヲ兼修セシメ、且ツ總テ醫業ニ關スル件ヲ管轄セシム。ソノ學科ハ本道・産科・小兒科・鍼治科・口中科・眼科・外科ノ諸科トセシガ、元治元年ニ至リテ解剖・生理・原病・治法・藥性・本草・舍密ノ諸科トナセリ。

盛岡藩明義堂（天保十三年創立）ニ醫學所アリ。

高知藩醫學校（天保十四年創立）ハソノ初メ天保三年教授館ニ醫科ヲ設ケタル二本ヅク。

福山藩誠之館（安政元年創立）ニ醫學科アリ、始メ漢方ナリシモ、漸ク蘭方ヲ用ヒ、後ニハ洋學所ヲ館中ニ設ケタリ。

ソノ他、既ニ上段ニ學ゲタル學校ハコノ期ニ至リテ益々擴張セラレ、醫學教育ノ制度ハ稍々ソノ緒ニ就キタリ。

順正書院

西洋醫學ニハ江戸ニ大槻・宇田川・坪井ノ諸大家アリテ、各私塾ヲ開キシモ、醫學ニ順序階級ヲ立テテ子弟ヲ教導セルハ、京都ノ新宮涼庭ヲ以テ第一トスベシ。

新宮涼庭、名ハ碩、鬼國山人又驅豎齋ト號ス、丹後・由良ノ人。年二十一、宇町川玄隨ノ内科撰要ヲ讀テソノ論理ノ明晰ナルニ感ジ、始メテ和蘭醫學ニ志シ、乃チ西長崎ニ赴ムキ吉雄如淵ニ從ヒ、蘭醫方ヲ修メ、蘭館ニ出入シテ蘭醫苛爾結ヘイルケニ親炙シ、既ニ大ニ得ルトコロアリ。文政元年、年三十二ニシテ長崎ヲ去リ、京都ニ來リテ業ヲ開キ、ソノ術大ニ行ハル。當時ノ

名醫高階枳園・川越衡山等ト會シテ漢醫方ノ迂僻ヲ論難シ、大ニ西洋醫方ノ恢弘ニ勉ム、後チ私財一萬金ヲ抛チテ順正書院ヲ東山南禪寺畔ニ建テ、醫書及ビ儒書ヲ藏シ、又毎月三次儒師ヲ醫院ニ迎ヘ、經濟文章等ヲ講ゼシメ、涼庭自カラ翻譯書、或ハ傷寒論ヲ講ジ、宮本阮甫ヲシテ蘭書ヲ講ゼシム。安政元年正月歿ス、年六十八。涼庭著ハストコロ泰西疫論・解體則・窮理外科則・婦人科書・人身分離則・外藥則・療治瑣言・西遊日記・詩文鈔等アリ。(鬼國先生言行錄)

ソノ說ニ『西洋之爲ニ醫方一、雖ニ傳レ我日尙淺一、而在レ彼則百年以來、學術大開各國設ニ醫學校一、研究煉磨』ト言ヒ、『支那國者、堯・舜以來、經ニ三千年一、云々、醫和、扁鵲而後、仲景等踵出、其術愈精、然而古之方書多不レ傳、醫學校之設甚稀』ト言ヒ、學校教育ノ醫學ノ開展ニ與カリテ大關係アルコトヲ論ジ、私財一萬金ヲ投ジテ順正書院ヲ建テ、和・漢・蘭ノ醫書ヲ藏シテ、生徒ヲシテ就テ之ヲ閱讀セシメ、又毎月三次、儒家ヲ書院ニ迎ヘテ經書ヲ講ゼシメ、自カラ翻譯書ヲ講ズルノ他ニ、宮本阮甫ヲシテ蘭書ヲ講ゼシメタリ、而シテソノ西洋醫方ヲ講習スルヤ、生象學・生理學・病理學・外科學・內科學・博物學・化學・藥性學ノ八科ヲ別チ、教科書トシテハ自家撰述ノ解體則・生理則等ヲ用ヒ、參考書トシテハ羅設人身究理・貌律面拔苦人身究理・勇斯兒生理書・布斂吉解剖書・昆良實病理書・護爾篤兒內科書・斯篤兒苦內科書・公私貌律屈內科袖珍・蒲爾華歇萬病治準・扶歇蘭度經驗遺訓・護爾篤兒外科書・布斂吉外科書・平私的兒外科書・依百乙藥性論・布斂吉化學書・布斂吉婦人科書・布斂吉小兒科書、等ヲ指定シタリ。

同時廣瀨元恭(傳ハ前ニ出ツ)アリ、七科ノ軌範ヲ設ケテ以テ生徒ヲ教導セリ。ソノ七科ハ一ニ曰ク究理、二ニ曰ク解體、三ニ曰ク生理、四ニ曰ク病理、五ニ曰ク藥性、六ニ曰ク舍密、七ニ曰ク古賢經驗、諸生ヲシテ次序ヲ追フテ、必ズコノ七科ヲ講習セシメタリ。

西洋醫學所

安政四年八月、伊東玄朴・戸塚靜海・竹内玄同・箕作院甫・大槻俊齋・三宅良齋・林洞海・坪井信良、等當時蘭醫方ヲ以テ門戸ヲ都下ニ張ルモノ八十餘名、協力シテ種痘所ヲ神田・お玉ヶ池ニ設立シ、種痘司・診察・鑑定等ノ分擔ヲ定メ、四日目毎ニ諸醫相會セシガ、五年種痘所火災ニ罹リ、同六年下谷・和泉橋通ニ移ル。萬延元年十月之ヲ官ニ納メ、大槻俊齋ヲ擧ゲテソノ長トナシ、翌文久元年十月之ヲ西洋醫學所ト改稱シ、教授・解剖・種痘、三科ヲ分チ、西洋醫方ヲ講習スルノ所トナシ、二年伊東玄朴・林洞海ソノ取締ヲ命ゼラレ、次デ竹内玄同・林洞海ニ代リテ取締トナル。コノ歲大槻俊齋病歿スルニ遇ヒ、緒方洪庵、大阪ヨリ徵サレテ江戸ニ來タリ、西洋醫學所頭取トナリ、科ヲ設ケ、則ヲ立テ、醫學教育ノ業、漸クソノ緒ニ就キタリ。

緒方洪庵、名ハ章、字ハ公裁、備中・足守ノ人。年十五父ニ從ヒ大阪藩邸ニ祇役シ、中天游ニ親炙シテ西洋醫方ヲ學ビ、年二十二江戸ニ出テ坪井誠軒ノ門ニ入り、又宇田川榛齋ニ就テ蘭學ヲ修ムルコト凡六年、更ニ長崎ニ至リテ蘭醫ニ親炙シ、醫方ヲ修ムルコト三年、大阪ニ歸リテ業ヲ開ク。是ヨリ名聲籍甚、生徒雲ノ如ク集マリ、治ヲ乞フモノ門ニ滿ツ。木下侯召シ見テ俸八口ヲ給シテ醫トナス、時二年五十三。幕府屢々徵命ヲ下シタレドモ辭シテ應ゼズ、再四徵急、辭スルコトヲ得ズ。文久二年遂ニ江戸ニ來タリ侍醫法眼ニ擧ゲラレ、西洋醫學所頭取トナル、居ルコト未ダ久シカラズ、遽ニ病デ歿ス、實ニ文久三年六月ナリ。洪庵ノ大阪ニアルヤ適々塾ヲ開キ、大ニ後進ヲ誘掖ス、門徒一千餘人、家ヲ成スモノ甚ダ多シ、著ハストコロ病理通論・扶氏經驗遺訓・虎狼痢治準等アリ。(墓誌)

文久三年二月西洋ノ二字ヲ去リテ單ニ醫學所ト稱シ、ソノ事業益々進歩スルニ至リシガ、頭取緒方洪庵ノ歿後、松本良順代リテ頭取トナリ伊東貫齋ソノ取締トナリ、醫學七科ヲ定メ、毎週講義ノ後ニ試験ヲ行ヒ、以テ生徒ノ階級ヲ進退セシメ大ニソノ規模ヲ革新シタリ、コレ實ニ今ノ東京醫科大學ノ濫觴ナリ。

精得館

安政四年幕府醫官松本良甫ノ子良順ヲシテ長崎ニ赴ムキ、蘭醫朋百ポムベニ就キテ西洋醫術ヲ傳習セシム、長崎奉行岡部駿州大ニソノ問ニ斡旋シ、小島ニ病院ヲ建テ、西洋ノ法ニ倣ヒ之ヲ養生所ト稱シ朋百ポムベヲシテ、コノ院ニ就テ日々講筵ヲ開キ、又病者ヲ診療セシメ、以テ醫學ノ生徒ヲ誘掖セシム。當時江戸ニ種痘所アリ、同ジク西洋ノ醫方ヲ講習スルノ所タリシト雖モ、西洋ノ教師ヲ聘シ科ヲ設ケ則ヲ立テテ、醫學ヲ講習スルニ至リシハ、長崎ノ養生所ヲ以テ嚆矢トス。

ポムベ・ファン・メールデルフオールト (Pompe van Meerdervort) 和蘭ノ貴族ニシテ、ソノ海軍醫官タリ。安政三年八月長崎ニ來タル。松本良順幕府ノ内命ヲ奉ジテ醫學ヲ傳習シ、萬延元年養生所ヲ設クルニ及ビテポムベポムベヲ聘セラレテソノ教師トナリ、學科課程ヲ定メ醫學ヲ教授ス。伊東方成・佐藤尙中・司馬凌海・八木稱平・太田雄寧・佐々木東洋・原桂仙、等ノ諸家皆ナソノ門ニ出ヅ。ポムベポムベ著ハストコロ重學・化學・解剖科・繃帶則・原生學・原病學・內科則・藥性論・外科誌・外科手術等アリ、皆ナ我が邦醫生ノタメニ西洋醫方ヲ講說セルモノナリ。(噫臍錄)

是ヨリ先キ、文政年間シーボルトアリ、親シク西洋醫方ヲ我が邦醫家ニ傳ヘタレドモ、固ヨリ科ヲ設ケ則ヲ立ツルニ及バズ、ポムベポムベノ長崎養生所ニ教師タルニ及ビテ『夫學レ醫之所レ要、莫レ切ニ於豫備照考ニ學一、而日本醫流、於ニ斯ニ學一、率皆瞶々、是無ニ異故一、以下其國所ニ以教ニ導後進一之具、尙有レ未レ盡、而不上レ能レ通ニ我土醫籍一也、予既來レ此、因欲丙爲下其不レ解ニ算數點竄測量等一、及讀ニ西籍一、徒費ニ心力一、不レ能ニ全領ニ其旨一者上、著乙一小冊子甲庶ニ其不レ失ニ入學ニ門、向道之方一、』ト言ヒ、數學・理學・化學等ノ豫備學科ヨリ講說シ、又別ニ簡易ノ書ヲ編シテ、醫學ノ次序ヲ指示シ、西洋醫方ノ講習ニ始メテ規律アリ。文久元年養生所ノ稱ヲ改メテ精得館トシ、同二年ポムベポムベ歸國シ、蘭醫ボードイン (Baudin) 之ニ代ハリ、次テ松本良順ノ東歸スルニ方リテ八木稱平・戸塚文海、相嗣デソノ後任トナリ、慶應元年マンスフェルト (Mansfeld) 來タリテボードインニ代ハリ、竹内正信・池田謙齋・長與專齋相踵テ頭取トナリ、又華刺答麻聘ハラタママニ應ジテ來朝シテ化學教師トナリ、精得館ノ傍ニ化學局ヲ建テ、專ラ化學ヲ教授シタリ。

醫史學

支那ニアリテハ李濂ノ醫史十卷アリ。醫史ヲ以テ名ヅクト雖モ、ソノ實ハ名醫列傳ナリ。欽定古今圖書集成第五百二十四卷ヨリ五百三十七卷ニ至ルマテ十四卷ニハ醫術名流列傳ヲ收ムト雖モ、亦コレ傳記辭典ノ類ノミ。我が邦ニアリテハ寛文年間黒川道祐ノ本朝醫考アリ、醫家ノ傳記ヲ叙スルノ外ニ、略ボ我が醫學ノ沿革ヲ示シ、以テ醫史

學ノ端緒ヲ開キタレドモ脱漏固ヨリ多キニ居ル。弘化年間賀島有信、皇朝醫史三卷ヲ著ハシテ本朝醫考ノ誤脱ヲ校補シ、次デ淺田惟常、皇國名醫傳前後二篇ヲ著述梓行スルアリ。ソノ他山科元幹ノ本朝醫蹟（報恩鈔五十餘卷中ノ一部）十卷ヲ著ハシテ、國史以下家乘小説等ヨリ、醫道ニ關スル事項ヲ輯メタルアリ。畑惟龍ノ皇國醫林傳・安藝道恕ノ歷世尙藥略傳アリ、醫家ノ列傳ハ備ハルニ至リシモ・而カモ醫學ノ歴史ヲ攻究スルコトハ、却テ一步ヲ闡晦ノ中ニ退ケリ。

黒川道祐ニ嗣ギテ、醫史學者トシテ擧グベギハ、江戸ノ醫官奈須恒徳（玄盅又柳村ト號ス）ナリ。コノ人ハ名醫奈須玄竹ノ裔孫ニシテ多紀桂山ト時ヲ同フシ、桂山ガ考證ノ學ヲ唱フルヲ見テソノ雜駁ナルヲ嘲ケリ、別ニ一家ノ見ヲ立テテ、専ラ史學的ニ我ガ邦古醫方ヲ攻究シ、本朝醫談・本朝醫談二篇・豹斑錄・瘳俊隨筆・武官醫編、等ノ書ヲ著ハシ、我ガ醫史學上前入未發ノ說ヲ立テシモノ尠カラズ、次デ吉田憲徳（安藝ノ人）アリ、國史醫言鈔ヲ著ハシ、國史ノ醫事ニ關スルモノヲ鈔出シ、又佛經ニ依リテ印度ノ醫學ヲ攻究セントセシモ、ソノ業未ダ半ナラズシテ歿セリ。

宇津木昆臺ノ日本醫譜七卷ハ醫家ノ傳記ノミニ止ラズ、溫泉・藥方、ソノ他醫事ニ關スルモノハ細大漏サズ、醫史ノ資料トシテハ尊重スベキモノナレドモ、今ノ世ニハソノ未成稿本ヲ傳フルノミ。

所謂和方醫家ノ著述、奇魂・備急八藥新論・醫方正傳・志都乃石室等ハ、ソノ著者ノ意ハ各々所謂和方ヲ祖述スルニアレドモ、今日ヨリ見レバ、我ガ邦古醫方殊ニ神代醫方ノ醫史學的研究ノ成績ヲ記述セルモノニ外ナラズ、故ニ以上諸書ノ著者タル佐藤方定・花野井有年・平田篤胤等ハ一方ヨリ見レバ、神代醫史ノ研究家ナリト言フコトヲ得ベシ。

醫史學ノ一部分タル圖書學ニアリテハ中川修亭ノ本邦醫家古籍考・衣關順庵ノ本朝醫籍目錄等アリ。多紀元胤ノ醫籍考八十卷ハ支那ノ醫籍ノ解題ヲ主トセシモノニシテ、叙事精詳ヲ極メタルモノナリ。

疫病 52

虎列刺 我ガ邦第一次虎列刺流行ハ文政五年ナリ。諸書記録スルトコロヲ見ルニ

『初冬得ニ大阪齋藤方策書一曰今茲（文政五年）八月山陰・山陽二道、厲氣流行、至ニ九月ニ益盛、覃及ニ畿内一、或關戸傳染、甚至レ滅レ門、其症與ニ尋常疫厲ニ迥別、其初起、忽然腹痛如レ剣、已而嘔吐、下痢齊起、湯藥不レ下レ咽、絶脈、轉筋、四肢厥冷、眼匝陷凹、直視天吊、惡候百出、重者ニ時許而斃、輕者亦不レ出ニ三日一、醫家見解不レ到、疑怯亂内、妄投錯施、更加ニ失活一、其死者雖レ以ニ大阪繁庶一、通ニ一月ニ計レ之率不レ下ニ數千人一、』（佐々木仲澤、壬午天行病說序）

『文政壬午秋、天行吐利、大流行、人民流行者數多也、此疾初起ニ於對馬一、而渡ニ於長門一、至ニ於我藝州一、漸傳染而及ニ於浪華一、』（安藝醫家原田玄庵、迨孫疫痢考）

『頃日聞ク、浪華ノ地一種ノ流行病アリ、ソノ初起朝鮮ヨリ對州ニ渡リ、終ニ長・防ニ到リ、漸ク京・畿ノ邊ヲ侵ス』（桂川甫賢・酷烈辨）

『壬午之疫、其初自ニ朝鮮一傳ニ于吾西州一、歷ニ山陰ニ迨ニ浪華一、無レ論ニ老少强弱一、關戸傳染、勢加ニ破竹一、死者、日三四百人』（小畑良卓、瘟疫論發揮）

『壬午癸未間、西州天行病、水瀉二三行而目陷鼻尖』（荻・賀屋恭庵、好生緒言）

『文政壬午ノ秋末冬初、浪華ニ三日古呂利ト稱スル病流行セリ、初ハ鎮西ヨリ起テ申國ニ至リ、浪華ニ及ボシ、

京師ニモ、偶々病者アリ、其症初起、卒ニ惡寒シ續テ吐瀉甚シク、或ハ胸膈へ迫テ急ナルハ日ヲ出ズ、緩ナルハ三日許ニシテ斃ル故カクハ名ケシト也、浪華ニテハ、甚多ク沿門闔戸死亡スル者アリト聞ケリ、導水瑣言ニイヘル、三日坊ノ類ナルベシト云ヘリ、何レ霍亂ノ一種ニテモアルベキ、百々漢陰ハ、増損理中丸ノ症ナリト言送レリ、ゲニモ然ルベシ』(多紀苗庭、時還讀我書) (三日坊ハ脚氣ナリ、虎列刺ニアラズ、後段脚氣ノ條下ヲ見ルベシ。)

當年ノ虎列刺病ハ我が西陲ヨリ起リテ、山陽道ヨリ浪華ニ進ミ、コノ地ニ於テ猖獗ヲ窮メ、日ニ三四百人ノ病者ヲ生ジ、京師ニモ波及シ、伊勢路マデハ達セシガ、關東ニハ遂ニ及バザリシナリ。

淺田惟常ノ古呂利考ニ天正間記ヲ引テ『元祿十二年ノ昔、江戸ニテ古呂利ト云フ病ハヤリ、今月流行ス、早ク南天ノ實ト梅干ヲ煎ジテ吞メバ、其病ヲ受ケズ、左モ無レバ、ソロリト煩ヒテ、古呂利ト死ストテ、江戸中南天ノ實ト梅干ヲ煎ジテ飲ミシト云フ』ト記シ、卒倒ノ義ヲ俗語ニ「コロリ」ト言ヒテ、古ヨリ早ク病ニ稱シ來リシコトヲ論ジタレドモ、ソノ病症ガ果シテ虎列刺ナリシカ否カハ記載備ハラザルガ故ニ之ヲ判斷スルコトヲ得ズ。

又、閑窓瑣談ニ『正徳六年の夏熱を煩ふ病人多く一ヶ月の中に江戸町々にて死するもの八萬餘人に及び棺をこしらへる家にも間に合はず、酒の空樽を求めて亡體を寺院へ葬むる、墓地埋む所なければ宗體にかゝらず、火葬せんとすれば、棺桶の數限りもなく積重ねて、十日二十日の中には火をかける事ならず、其到來の順に茶毘すれば、日數をはるかに經ざれば爲す事能はず、此に於て貧しき者の亡體は如何ともすべきやうなく、町所の人々も世話届き兼て、公廳へ訴へ申せしかば、夫々の御慈悲を給はり、寺院に仰せられて葬り難き亡體は回向の後に、菰に包み、舟に乗せて盡く品川の沖へ流し水葬になさせられしと云ふ』トアルヲ引テ、之モ暴瀉ナラント言フモノアリ。然レドモ、之ヲ傳染病史ニ徵スルニ、虎列刺病ガソノ本國タル印度ヲ出デテ、世界ニ蔓延セシハ西曆一千八百十七年(我が文化十四年)ニシテ、之レヨリ先キ印度國內ニテハ一千七百六十八年(寶曆五年)ヲ第一回トシ、次デ一千七百八十年(安永九年)・一千七百八十三年(天明三年)・一千七百八十七年(天明七年)ノ數回、虎列刺流行アリシト雖モ、未ダソノ國外ニ出デタル報告ヲ得ズ、寶曆以前ニ我が邦ニ傳ハラザリシコトハ固ヨリ疑ナカルベシ。然ルニ文政五年二月、蘭人來タリテ一昨年(一千八百二十一年)瓜哇・バタビアノ地ニ虎列刺病ノ流行アリ、客歲殊ニ甚シカリシコトヲ告ゲ、ソノ病狀ヲ記述セル書ヲ示セシヨリ、我が邦醫家始メテ虎列刺ノ病アルコトヲ知り、次デソノ歲ノ夏ニ至リテ虎列刺病始メテ我が關西地方ニ起リ、可列刺莫爾蒲斯かれつとコレラモルプス

(Cholera-morbus)ヲ膽液病ト譯シ、桂川甫賢ハ酷烈辨ヲ著ハシ、宇田川榕菴ハ膽液病說ヲ著ハシ、佐々木仲澤ハ壬午天行病說ヲ著ハシ共ニ西洋ノ說ニ依リテソノ病理治法ヲ論述シ、大阪ノ齋藤方策ハ壬午天行病醫按ヲ著ハシ西田耕悅ハ雜氣病按ヲ著ハシ、共ニ自家ノ實驗ヲ叙述シタリ。

コノ如ク、當年ノ虎列刺ガ、始メテ我が西陲ニ現ハレシハ、ソノ種子ヲ瓜哇邊ヨリ傳ヘタルコトヲ示スモノニシテ、ソノ症狀ハ『初發、身體倦怠、四肢沈重、暴瀉三四行、瀉物ハ米泔汁ノ如ク、脉搏沈伏、四肢厥冷、轉筋、煩渴、目窠陷入、劇者ハ半日ニシテ死シ、緩者ハ三四日ニシテ死ス。』(星野良悅著、天行疫利考ニ據ル)。ソノ症ノ劇

甚ナルヲ以テ之ヲ虎狼痢ト言ヒ、京・阪ニアリテハ三日コロリト言ヒ、對馬ニテハ見急ケンキウ、藝州ニテハ一ニ之ヲ橫病ト名ヅケ、西洋醫家ハ之ヲ羅甸コレラニ所謂可列刺(Cholera)トシ、譯シテ膽液病ト曰ヒ、膽液ノ變壞ニ依リテ發スルト

コロノ天行疫病トナシ、漢方醫家ハ之ヲ萬病回春ノ濕霍亂(虎狼病)若クハ痧病、或ハ禁口痢ニ比シ、ソノ治ハ傷寒霍亂ノ治方ニ脚氣ノ治方ヲ交ヘテ施シタリト言フ。(迨孫疫利考ニ據ル)。

時還讀我書ニ『天保庚寅(元年)四五月ノ間南伊勢ニ霍亂行ハレ、其症甚急劇ニシテ大吐、大瀉、遽ニ委頓ニ

就ク、醫常套ヲ守リ、參附ヲ用フルニ百ニ一生ナク、生姜瀉心湯、或ハ和方ノ三味湯ナド輕緩ノ藥ニテ反テ治癒ス、其時適おかげ參ト稱シ、諸國ヨリ參宮ノ人多カリシ中ニモ、此病ニ罹リ斃ルルモノ亦多ク甚ダ傷マシキ様ナリシト、是モ亦暴瀉ナリト覺ユ』ト記スレドモ、ソノ症が果シテ虎列刺病ナリシカ、又獨リ伊勢ニノミ行ハレテ他ノ諸國ニハ流行セザリシカ否カ、詳ナラズ。

第二次ノ虎列刺流行ハ安政五年ニシテ、文政五年ノ第一次流行ヲ距ルコト三十六年ナリ。當年ハ支那地方ニアリテ該病盛ニ流行シタレバ、ソノ種子ハ彼ヨリ我ニ傳ハリシモノト察セラル。ソノ初メ長崎ニ起リシハ五月ニシテ出島ニ吐瀉患者アリ、米國汽船「ミシシッピ」號ニモ多數ノ同様患者アリ、在留ノ蘭醫ポムペ・ファン・メーデルルフオールトソノ虎列刺病ナル事ヲ斷定シ、治方及ビ豫防法ヲ記述シテ長崎奉行所ニ提出シ、奉行所ハ之ヲ公布シテ、府内ノ醫家ヲシテソノ治則ヲ知ラシメタリ、然ルニ六月下旬ニハコノ病ハ早クモ東海道ニ傳ハリ、七月上旬ニハ江戸ニモコノ病起リ、赤坂邊ヨリ始マリテ靈岸島邊ニ多ク、八月ニ及ビテハソノ病ハ殆ド全國ニ普及シ、殊ニ江戸ニアリテハソノ勢最モ猖獗ニシテ

七月二十七日ヨリ九月二十三日マデ五十五日間江戸中ノ諸寺院ヨリ各ソノ取扱ヒタル死亡者ヲ書上ゲタルモノヲ見ルニ(各寺ヨリ書上ゲシモノヲ各地区ニヨリ合計シテ茲ニ示ス)

淺草	一五一四八	下谷	一二八四九	小石川	一九〇七	本郷丸山	一〇三一
牛込	二〇四一	水道町	七五四	青山	一八九七	市ヶ谷	二一一七
原町	一〇三七	雜司谷	五八四	赤坂	二八九〇	麻布	六六六七
目白	九四五	四谷	二二五五	澁谷	一〇九〇	飯倉	九六九
三田	三三四八	金杉	一九〇〇	高輪	六八三	二本榎	一一一二
西久保	一一一二	切通	九九一	目黒	一四六〇	白金	一三七四
品川	二六七九	向島	一四八二	押上	二〇七六	深川	八四五九
本所	六一〇九	西本願寺	一五〇〇	東本願寺	一一八二〇	増上寺	一九八七
眞法寺	六七二	(其他寺院一〇以下ノモノハ略ス)					
又無籍ノモノヲ取扱ヒタルモノ		西念寺	四一二五				
又焼物場ニ取扱ヒタルモノ							
千住	六三〇七八	目黒	一二〇三六	砂村	九七五	靈岸寺	二九〇五八
淨心寺	一〇〇七二	白金	一一〇六八	相谷	二六五一二	狼谷	九七〇
落合	六三五〇						

以上ノ數ヲ合計スル時ハ實ニ二十八萬餘人ノ大數トナル。之二十人以下ノ各寺院ノ數ヲ加フレバ三十萬以上トナルベシ。コノ數ハ固ヨリ單ニ虎列刺死亡ヲ示スニアラズト雖モ該病流行ノタメニ死亡數ノ甚ダ大トナレルヲ示スニ足ルベシ、虎列刺死亡數ハ不詳ナレドモ街之夢ニハ『死亡者十二萬五百七十八人トノ事ナリ』ト記シ、頃痢流行記ニハ『八月朔日ヨリ九月晦日マデノ死人ノ員數一萬二千四百九十二人コノ外ニ人別無ノモノ一萬八千七百三十七人』ト記シ、文久二年官版ノ疫毒豫防說(洋書調所編輯)ニ安政五年ノコレヲ病ノコトヲ叙シタル段ニ『江戸ノミニテ男女併セテ二萬八千四百二十一人ノ死亡者アリ』ト記シタリ。

當時民間ニテハ、之ヲ以テ妖怪變化ノ所爲ナリトシ、或ハ水毒ナリト言ヒテ水道ノ水ヲ吞マズ、或ハ魚毒ナリト言ヒテ新鮮ノ魚モ喰ハズ、祈禱禁厭以テ病ヲ攘ハントセシ様ハ武江年表・頃痢流行記・疫癘雜話・街乃夢・掃寄草

紙・安政雜記等ニ掲グルトコロヲ見テ之ヲ推知スベシ。

今回流行ノ虎列刺ノ症狀ハ之ヲ文政五年ノ流行時ニ於ケルモノニ比スルニ、大抵相同ジク、腹痛・嘔血ナキヲ異ナレリトスルノミト言フ。(治瘟編、卷上)

梅谷慊堂ノ印度霍亂說ニ當年流行ノ虎列刺ノ症狀ヲ記スルコト詳ナリ、曰ク

『其爲_レ症卒然吐瀉、如_レ傾、或有_二一二日違和而後吐瀉頓發者_一、吐_レ之先吐_二其最後所_レ食物_一、爾後吐_二水液粘液及胆液_一、其色或黃、或綠、味則若苦、若辛酸、如_二其量及度數_一則多寡各不_レ同、又或有_二乾嘔者_一、當_二此時_一也、暴瀉頻發、其液無_レ含_二些少胆汁_一、唯稀粘之水液、恰如_二米煎汁_一、而上面浮_二白色雲翳_一、如_二其量_一則每瀉一升、或_二二三升、至_二三五度_一而後、量漸減少、不_レ過_二半時若_二一二時_一、而五七行、或十餘行、或有_二二三行_一者上、其脉則忽沈弱微細、而殆如_二欲_レ絕者_一、或有_下異_二左右_一者上、或有_二結代者_一、生力亦頓沈衰虛憊、手足及顏面唇舌厥冷、冷徹如_レ水、冷汗淋漓其色蒼白、而皮膚失_二張力_一、十指生_二皮皺_一、下肢痙攣轉筋、或有_下及_二腹若全身_一者上、或有_下先轉筋痙攣若麻痺而後發_二吐瀉_一者上、而其腹痛多是不_レ甚、小便閉止、或淋漓、或筋惕肉瞤、加_レ之、吃逆、乾嘔、或聲音嗶弱、呼吸不利、苦悶煩躁、顏色憔悴、眼上陷凹、半眼上竄、或手足變_二黯紫色_一、或屍臭撲_レ鼻、或人事不省等、遂以至_レ斃、如_二其經過_一則有_下一日或_二數日_一者上、若夫就_二治癒_一者、則其症之稍輕易而、且當_二其病初_一、得_二應症治術之宜_一而療_レ之者也』

是ヨリ先キ、文政五年コノ症ハ一タビ我が邦ニ流行セシコトアリシモ、當時ハ世人ソノ病性ノ新奇ナルニ驚クノミニシテ、的實ノ治則ヲ立テ之ヲ療セシモノ甚ダ尠カリシガ、今回ノ流行ニアリテハポムペ・フアン・メールデルフオールトガ口授ノ記アリ、獨逸ノ大醫雲堙兒利屈 (Wunderlich) ノ虎列刺病論 (一千八百四十九年) ニ據リ、硫

酸規尼涅及ビ阿芙蓉ヲ與ヘテ、溫浴ヲ施スノ法ヲ稱掲シ、世醫皆ナコノ法ヲ用ヒシガタメニ大阪ノ如キハ規尼涅始ド盡クルニ至リシト言フ。ソノ他、緒方洪庵ノ虎狼痢治準アリ。謨斯篤_{モスト}・公刺地_{コンラチ}・侃斯達篤_{カンスダツト}、等諸家ノ所說ヲ譯輯

シ、曩ニ譯述スルトコロノ扶氏經驗遺訓ノ記述ヲ補ヒシガ、新宮涼民・大村達吉・新宮涼閣共著ノコレヲ病論ハ詳カニ謨斯篤_{モスト}ノ說ヲ譯出シ、西國コレヲハ尋常霍亂ニシテ、亞細亞コレヲ (東國吐瀉病) ト稱スルモノハ、即チコノ

頃我が邦ニ流行スル三日コロリ病ナリト言ヒ、ソノ病性、解屍所見・徵候治法等ヲ論述シ、世人之ニ依リテ始メテ適從スルトコロヲ知レリ。

蘭方醫家ハフーヘランドノ書ニ、コウデベストアルヲ譯シテ冷徹疫ト稱シ、又ハ、ソノ原名ヲ用ヒテ亞細亞霍亂・印度霍亂・東國吐瀉病・コレヲ病ナドト稱セシガ、英國合信ノ内科新說ニハ之ヲ霍亂ト譯シ、絞腸痧又抽筋證ノ稱ヲ用ヒタリ。漢方醫家ハ、或ハ以テ痧病トシ、或ハ以テ中暈トシ、或ハ以テ霍亂ノ一種トシ、或ハ張氏ノ醫通ニ所謂番痧ニ外ナラズトシ、田宮尙施ノ暴病管見(安政五年)・長松文忠ノ天行病論(安政五年)・淺田惟常ノ治瘟編(安政六年)・清川棗軒ノ瘟瀉一言(安政六年)・高島恒庵ノ瀉疫新論(安政六年)・尾臺良作ノ霍亂治略(元治元年)等、ソノ所說互ニ一致セズ、治方モ甚ダ區々ナリキ。

安政五年流行ノ虎列刺ハソノ翌六年モ亦全ク消滅セズ。(淺田惟常ノ治瘟總論ニ『去歲(安政五年)之疫、卑濕之地多蒙_二其害_一、而高阜之邑未_レ聞_レ之、經紀小戶多患_レ之、而富貴之家絕少、強壯多嬰_二其毒_一、而老少不_二感受_一、丈夫特多而婦人甚希、今歲(安政六年)之疫則悉反_レ之、不_二特通邑大都_一、詢_二之於海陬山僻_一、靡_レ不_二皆然_一』)再翌七年ニモ虎列刺病ハ少シツツ流行セシガ、文久元年ニハ絶エテ該病ノ流行ヲ見ザルニイタレリ。

第三次ノ虎列刺流行ハ文久二年ニシテ、コノ年ノ夏麻疹大ニ行ハレテ後、虎列刺病之二次ギテ盛ニ行ハレタリ。

武江年表ニ『七月の半よりは暴瀉の病にまさりし急症やむ者多くこれあり、こは老少をいはず即時兆^{キザ}し吐瀉甚しく片時の間に取詰て救薬すべからず、死後惣身赤くなるもの多し、その中には麻疹の後食養生懈りて再感せるもありしとか、又霍亂の類もありしと聞けり』ト記シ、疫毒豫防説(文久二年十月)ニ『今茲文久二年壬戌の夏麻疹大に行はれて後再びコレラ病盛に行はれ、今般は田野都會の差別なく、又高燥卑濕の地を選ばず、之を患る者多く、又之が爲に全家悉く死亡し嗣を絶し産を失ふ者擧げて算ふべからず』ト載スルヲ見テ、ソノ流行ノ猖獗ナリシコトヲ察スベシ。依リテ幕府ハ洋書調所ノ教授杉田玄端・箕作阮甫・坪井信良・子安鐵五郎ヲシテ西洋諸書ノ中ヨリ凡ソコノ病ニ關係スル要件ヲ撮譯セシメ、フロインコンフスノ疫毒豫防説・シカツトカムルノコレラ病豫防心法・コレラ病流行ノ歴由、コレラ病ヲ治スルノ藥方・檢疫説及ビ檢疫院ノ説ヲ輯メテ、之ヲ疫毒豫防説ト題シテ刊行シタリ。ソノ檢疫ト云フハ原名キユアラランタイネ(Quarantine)ヲ譯セルモノニシテ、和蘭ニ行ハルル檢疫規則ノ全文ヲモ鈔出シタリ、而カモ防疫ノ法ニハコノ如キモノアリト言ヒシマデニテ、固ヨリ之ヲ當時ニ實施セシニハアラザルベシ。

文久三年七月暴瀉病少シク行ハル、而カモ死亡ノモノハ去年ノ半ヨリ少シト武江年表ニ見ユ、大流行ニ至ラズシテ止ミシモノナラン。

麻疹 徳川氏ノ初世ノ頃ニハ元和二年ノ冬、慶安二年ノ春夏、元祿三年ノ冬、寶永五年及ビ六年ニ麻疹ノ流行アリシコト武江年表・本朝年鑑等ニ見ユ、(香月牛山ノ國字醫叢ニ曰ク『元祿庚午ノ歲、麻疹流行シテ、男女老少此病ニ染マズト云フコトナシ、麻疹ノ餘熱ニシテ眼病ヲ患フルモノ多シ』ト。)

享保十五年秋ヨリ冬ニ至ルマデ麻疹流行ス。(上月專庵ガ麻疹精要ノ序ニ『庚戌(享保十五年)之秋、瘟疫頻行、深秋之交、麻疹復流行、沿門闔境、傳染甚多焉、時醫好^ニ清涼^一者、得^ニ十全^三其七八^一、偏^ニ溫補^一者、固不^レ得^ニ其治^一也』)

寶歷三年麻疹大流行(麻疹略説・武江年表)、麻疹精要方ニ記スルトコロヲ見ルニ『寶歷癸酉歲、夏秋之際、東都大流行矣、其證初大發熱、嘔欬咽痛、或泄瀉、或衄血、則發疹其形初如^ニ蚊刺^一、漸成^ニ紅斑^一、周身如^ニ錦文^一、成^ニ微紅駁色^一、而沒矣、其沒時、或自屑、而散落矣、其初效爲^レ佳、嘔爲^レ佳、瀉爲^レ佳、微衄爲^レ佳、若誤用^ニ止泄止欬等劑^一、則邪氣閉塞而其害不^レ淺也』トアリ、當年流行ノ麻疹ノ一斑ヲ窺フニ足ルベシ。

安永五年、春ヨリ秋マデ麻疹流行ス。村井琴山ノ麻疹略説ニ曰ク『安永五年麻疹大流行ノ時ニ當テ東洞先師ノ遺教、大ニ海内ニ布ク、此時ニ方リテ、余ハ麻疹ヲ治スルニ專ラ仲景ノ方法ヲ取テ東洞ノ治術ニ從フ』ト。麻疹必要ニ曰ク『此年は諸國死人多く、又危急の證多し』ト。

享和三年夏麻疹流行(武江年表・泰平年表・癸亥隨筆・成績錄・時還讀我書・醫事叢談)。麻疹必用ニ據レバ『此年の麻疹は死亡危急の輩は先年よりすくなけれども、麻疹後餘毒甚敷、或は頭痛又は癩癰等を發し、或は目に入り手足かなはず、或は腰の廻りに惡瘡を發し、又生涯片輪者と成りたる人々其數を知らず』。橘黃年譜に據レバ『此歲ノ麻疹ハ重症多ク死人夥シ、幸ニ免カレシ者モ、眼病・腫瘍・虛勞・痢疾・腸癰・脚氣・水氣、等ニ變シ死セシモノ多シ』ト言フ。又、多紀苗庭ノ時還讀我書ニ據レバ『享和癸亥ノ三月初旬、荻野台州ヨリ先君子ヘ書ヲ贈リテイヘラク朝鮮地方ニテ麻疹大ニ行ハレ藥物ヲ對州ヘ乞來ルノヨシ前月末傳聞セリ、此事虛誕ノ様ニモキコヘズ、往年ノ流行ノ時モ朝鮮地方ヨリ對馬ニ至リ長門ニ傳ヘ、夫ヨリ東西一般ニナリシト承ル』トアリ、麻疹ノ流行ハ大抵西國ヨリシテ東方ニ及ビシモノカ。村井琴山ノ麻疹略説ニ『今茲、享和三年、天下大流行、關東、鎮西、南裔、北國、春秋ノ際、大抵一時ニ流行ス、況ヤ京・攝ヲヤ』ト言フハ、ソノ流行ノ盛ニシテ諸國一樣ナリシコトヲ言フモノニテ、各地ノ流行ニハ固ヨリ前後アリシモノナラン。

文政七年、春ヨリ夏ニ至ルマデ麻疹流行ス（泰平年表・武江年表）。コノ歳ノ麻疹ハ時還讀我書ニ『文政六年癸未霜月ノ頃ヨリ西國ニ麻疹流行ノ風聞アリシニ、都下モ臘月ノ末ニハ芝邊ニテ患者アリ、甲申正月初旬ヨリ漸々流行シテ、二月ニ至テ滿城皆是ヲ病ミ、三月迄ニテ止ミケリ。大抵ハ輕症ニシテ藥セズシテ愈者亦少ナカラズ、故ニ余ガ處療セシ者三百人ニハ滿タズ、一人モ疑難措手ノ證ニ遇ハズ、享和癸亥ノ疫ニハ逆證モ多カリシト聞シモ、當年ハ事替リ東西トモニ不治ノ證ヲ見ズ』。山下玄門ノ醫事叢談ニ『文政度ノ流行ハ、諸國トモ輕疹ニシテ、家製葛根湯、升麻葛根湯、敗毒散ニテ埒アキ、市中農家ニテハ更ニ醫ヲ待タズシテ快復セリ』トアルヲ見テソノ輕症ナリシコトヲ知ル。

天保七年麻疹流行（武江年表・橘黃年譜）。コノ歳ノ麻疹ハ時還讀我書ニ依レバ『曩年ニ比スレハ更ニ輕シ、往々藥治ヲ須ザル者アリ、差後ニ至テ麩片ノ如ナル物モ少シ、然レドモ先年ニ患ヘシモノハ、必ス是ヲ免ルル時ハ斷然タル麻疹ナリ、但シ其行ハルル一時ニ來ラス、漸次ニ繁衍シ夏ヨリ冬ニ至リ、丁酉ノ正月迄ニモ患者間々是アリ、凡テ疫邪ハ行ハルル毎ニ其異ナル事カクノ如シ』トアルニテ、ソノ輕症ナリシコトヲ知ル。

文久二年麻疹大流行。武江年表ニ『夏の半より麻疹世に行れ七月の半に至りては彌蔓延し良賤男女この病痾に罹らざる家なし、此病夙齡の輩に多く（天保七年の麻疹にかゝらざる輩なり）強年の人には稀なり、凡男は輕く女は重し、それが中に妊娠にして命を全ふせるもの甚少し、産後もこれに亞ぐ、後に聞ば、二月の頃西洋の船崎陽に泊してこの病を傳へ、次第に京・大阪に弘り、三四月の頃より行れける由、江戸に肇りしは小石川某寺の所化何某二人、中國より江戸に來りし旅中に煩ひて、四月の頃病中寺内へ入闔山の所化に傳染しけるが、夫より五月の末に至り少しく行れ、六月の末よりは次第に熾にして、衆庶枕を并べて臥したり。文政・天保の度にかはり、こたびは殊に劇して、良醫も猥に藥餌を施す事あたはず、或は吐し咳嗽を生じ、手足厥冷に及ぶ、烏犀角は内攻を防ぐの藥なれど、用ふる事度に過れば逆上して正氣を失ふに至るとぞ、固より熱氣甚しく狂を發して水を飲んとして駢出し河溝へ身を投じ、又は井の中へ入て死るもありし、醫師は巧拙をいはずして東西に奔走し、藥舖は藥種を擇ばずして售ふに違なく、高價を貪れるも多かるべし、しかるに醫生も藥舖も又續て同病に罹れるも尠からず、製藥店招牌をかかげて售ふもあれど症分によりては應驗等しからざるもあるべし、七月より別て盛にして命を失ふ者、幾千人なりや量るべからず、三味の寺院去る午年暴瀉病流行の時に倍して、公驗を以て日を約し、茶毘の烟とはなしぬ、故に寺院は葬式を行ふにいとまなく、日本橋上には一日棺の渡る事、二百に暨る日もありしとぞ』ト記スルヲ見テ、ソノ症ノ劇烈ナリシヲ知ルベシ。而シテ橘黃年譜ニ『其證往年ニ比スレバ、邪熱特ニ甚ク、其始メ滿身壯熱、面紅赤腮、腫眼胞起、唇舌乾燥、咽喉痛ミ或ハ物有テ刺戟スルカ如ク、或ハ半夏南星ヲ噬カ如ク、簽刺如何トモス可ラス、身體酸疼、煩燥シ、二三日ヲ經テ通身朱ヲ塗ルガ如ク、斑々粒ヲ成シ、或ハ蚊蚤ニ咬ルルカ如キ紅色アリ、嘔嚏頻出、或鼻清涕ヲ流シ漸ク咳嗽ヲ見ル、其最劇者ハ隨テ没シ、或紅雲片ヲナシテ形ヲ見ズ、或ハ皮膚ノ間ニ隱々トシテ發スル事能ハズ、或ハ肌膚枯燥シテ胸腹ノ間ニ磊々疥ノ如キ狀ヲ見シ、口舌焦爛衄血ヲナシ、嘔血・喘息・譫語・煩悶、種々危篤ノ證ヲ現ス、往年ノ疹ハ發二三日ニシテ疹白色ニ變シ、四五日ヲ過テ痂ヲナス、其形白瘡ノ剝落スルガ如シ、今年ノ疹ハ隨テ出テ隨テ没シ、其存スル亦一日ニ過ギス、而シテ痂ヲナシテ剝落スルモノ更ニナク、偶解熱ノ後皮膚ヲ檢スレバ傷寒ノ如ク、皮膏一面枯剝スルヲ見ルノミ』又麻疹年譜ニ『始ハ風邪ノ如ク惡寒シテ後發熱シ、咳嗽頻出シ、續テ咽喉刺痛身體疼痛シテ麻疹ヲ發シ、大煩渴ス、時ニ衄血シ、又下痢ス、總身白麩屑ノ如キ物ヲ生ジテ落花セリ』トアルヲ見レバ、ソノ發疹ノ状態、全身疼痛（關節痛及ビ筋痛？）等諸症ハ麻疹ヨリモ寧ロデングア熱（Dengue Fieber）ニ近キガ如シ（コレ固ヨリ臆想ヲ以テ論ズルニ過ギザルナリ）。

痘瘡 天然痘ノ小流行ハ頻回ナリシト雖モ、劇甚ノ流行ヲ見シハ元和五年（續皇年代略記）・天和二年（續皇年代略記）・寶永七年（續皇年代略記）・享保八年（續皇年代略記）・天明八年（保嬰須知）・嘉永四年（橘黃年譜）等ナ

リキ、而カモ痘瘡ノ流行ニ關スル記録ハ、珠ニ疎鹵ニシテ考證ニ資スベキモノナシ。

百・斯・杜　安政三年刊行ノ濟生一方ニ曰ク『偶會レ有新奇難レ辨之疾發現一、則茫洋不レ能レ諦ニ其原因一、焉得レ奏ニ其治功一哉、云々、近聞、極北蝦夷之地、罹ニ痘、百、二病之害一、夷類大減ニ戸數一、是全因レ不レ得ニ其治術一也』ト。

濟生一方ハ仙臺・蘭學局總裁小野寺將順ガ、蝦夷ニ痘(疱瘡)・百(百斯杜 Post)二病ノ流行スルコトヲ聽キ、西

洋ノ書ヨリ百斯杜ノ本性・診斷・治法及ビ豫防法ヲ鈔譯叙述セルモノナリ。當時蝦夷ノ地ニ痘瘡ノ流行アリシハ事

實ナレドモ、コレニ併セテ百斯杜ノ存セシヤ否ヤハ未ダ詳ナラズ。

鍋・冠　武江年表ニ『享保十五年十一月、鍋かぶり病はやる、鼻より上黒くなる』トアリ。工藤平助ノ救瘟袖歴ニ

『元文・寛保ノ頃ナベカブリトイヘル風有テ死亡甚シカリキ、予八歳ノ時此病ニ罹レリ、快復ノ比ノ事ノミウスウス覺エタリ、眉ヨリ上腦後髮際ニ至ル迄、黒色ニナリテ鍋ヲ冠リタル如シ、色深モノハ多クハ救難シ、予モ稍々正黒ニ近カリシヨシ、既ニ解スルノ後其色ウスク殘テ其黒所ニ小疹出デ少シ水泡有テカシケタリト覺エタリ、其後似タルモノモナシ』ト。爾後ノ記録ニハコノ種ノ疫病ヲ見ズ。

三・日・麻・疹　安永八年ノ冬ヨリ九年ノ春ニ至ルマデ疫病流行セシガ、時人ハ之ヲお世話風ト名ヅケタリ、コレ當時『大きにお世話、お茶でも上がれ』ト言ヘル俗謠ノ流行セシガタメナリト言フ(瀧澤馬琴ノ兎園小説ニ依ル)。ソノ病症ハ保嬰須知ニ『安永己亥年秋末、至三庚子春一、有二種疫疾一、其證大抵、初起、頭痛發熱惡寒、嗣發ニ疹子一、而或痒或否、或目赤、或咽痛、或齒齦腫痛、或頭面脹起、而六七日若十餘日、而乃痊、其脈浮數弦、滿城能免者幾希、俗呼稱三三日麻疹一、概與ニ消毒葛根湯、化斑湯之類一、則疹沒而諸證隨安、雖ニ是毒氣所レ致、其邪甚輕淺、顧其不レ藥、亦必自愈也』トアルヲ見テ、ソノ風疹(Rubella)ナリシコトヲ知ルベシ。

天保六年十二月ヨリ七年三月ニ至ルマデ、再ビ風疹流行アリ。時還讀我書ニ『天俣乙未臘月中旬ヨリ都下風疹大ニ行ハル其初寒熱甚ダシク夫ヨリ周身赤疹ヲ發シ、恰モ麻疹ノ如ク、不食咽痛殆ト麻疹ニ似タリ、輕ハ一二日重ハ四五日ニシテ快復セリ、俗呼テ三日麻疹ト云フ、又ハシカ風ト稱セリ、翌年正月中最盛ニテ貴賤トモ患サルナク三月中頃迄發スル者アリ、五十年前モカカルコトアリテ其時モ三日ハシカ又オセハ風ナド呼ベリト老人ノ話也、是歳ノ疫ニハ大抵輕ハ蔡氏直武湯ヲ用ヒ熱稍々甚シキハ柴葛解肌湯ニテ大略ハ愈タリ最モ劇キニ石膏ヲ用ヒタリ桂麻ニテ邪氣纏綿セシモノ間々はヲ見タリ。』

風・邪　平安朝ノ時代、既ニ咳・疫又咳・逆・疫アリ。鎌倉・室町時代ニハ咳・病アリシガ、コハ固ヨリ咳嗽ヲ主徵トスル疾病ヲ指スモノニシテ、ソノ流行性感胃ナルカ、肺炎、ソノ他ノ症ナルカハ之ヲ詳ニスルコト能ハズ。江戸時代ニ至リテハ寶永四年十二月ニ咳・嗽・病アリ(折焚柴の記、卷上)、爾後延享元年及ビ延享四年ニ諸國風邪流行アリ(武江年表)、次デ明和六年十月江戸ニ風邪流行アリ(武江年表・泰平年表)。コレ等、風邪ト稱スルモノノ中ニハ流行性感胃(Influenza)ナラント思ハルモノナキニアラズ、故ニ左ニソノ流行年紀ヲ列記スレバ

安永五年二月江戸ニ風邪流行セシガ俗ニ之ヲお駒風ト名ヅケタリ、コハ城木屋お駒ト言フ淫婦ノ事ヲ旨トシテ作リ設タル淨璃瑠ノ痛ク行ハレタレバナリト言フ(瀧澤馬琴、兎園小説)。天明元年ト四年トニモ風邪ノ流行アリシガ、コノ時ハ俗ニ之ヲ谷風ト名ヅケタリ。片倉鶴陵ノ保嬰須知ニ『天明甲辰春、都下人民、患ニ頭痛壯熱一、脈洪大數急、而嘔吐不レ止者尤多矣、其證候頗劇、始有ニ入レ裏之勢一、然余治レ之、先與ニ葛根加半夏湯一、繼以ニ小柴胡湯等一、而

取レ效者凡七八人、如^二其嘔^一、或^二三日、或^二四五日而止、歷三十餘日^一、而諸症漸平、時適獲^二竹茹湯^一一方於本事方中、即取而用レ之、則一服而嘔止、四五日而諸患脫然』トアルニテソノ證ハ推測セラルベシ。寛政七年三月、將軍小金原ニ狩セル後、感冒行レタリ、依リテ時人之ヲ御猪狩風ト言ヒシトゾ（時還讀我書）。享和元年ノ冬ヨリ二年ノ春ニ至ルマデ疫邪流行ス、コレハ和蘭人ヨリ傳ヘタリト言ヒ、又ハ去年漂流セシアンホンナドヨリ染ミタルナリトモ言フ、コノ時ニハ薩摩風・お七風ナドノ俗稱アリ。コノ時ノ症ハ枳園隨筆ニ『憎寒・發熱・頭疼・體痛・咳嗽・口乾・飲食絶少、云々、闔門合戸一家ノ中一人免ルルコトヲ得ルモノ絶テナシ』トアリ。文化五年ニモ感冒流行アリ（曲亭雜記）。文化八年ニモ再ビ享和二年ニ流行セル疫邪ノ流行アリ、之ヲ前回ニ比スレバ稍輕ク、ソノ行ルルヤ勢緩ナリキト言フ（枳園隨筆）。文政四年江戸ノ感冒流行ハ劇烈ニシテ、俗人ハ之ヲタンボウ風ト名ツケタリ。時還讀我書ニ『文政辛巳ノ二月中旬ヨリ都下感冒流行シテ闔家コトクク枕ニ就クニ至レリ。西國ニテハ去冬ヨリ行ハレテ邪氣盛ニシテ久シク治セサル者アリト、關東ハ其證初起ハ稍劇ク加進スヘキ勢ナレドモ桂葛柴胡ノ類ニテ遂ニ瘵タリ、三月初旬迄ニテ止タリ熱ママ留連スルモノアリ。動スレハ吐衄血ヲナスモノ多シ、蓋シ近年感冒ノ流行病者ノ夥シキ事は歲ノ如キハ曾テ見及ザル程ノ事ナリキ』トアリ。コノ風邪感冒ハ獨リ江戸ノミナラズ、京・攝ヨリ東ハ安房・上總、西南ハ甲斐・伊豆、北ハ信濃・越後マデモ流行シタリト言フ。次デ七年・十年ニモ江戸ニ感冒ノ流行アリシガソノ症ハ輕カリキ（時還讀我書）。天保二年感冒流行、翌三年、琉球風大に行ハル。時還讀我書ニ『天保壬辰十月中旬ヨリ霜月上旬迄、都下感冒大ニ行ハレ免ルル者殆少也其證ハ輕易ニシテ葛根柴桂諸湯ニテ瘥ヘヌ、是ヲ東西ニ訪ニ、西國ハ九月下旬ヨリ始リ奥羽ハ霜月下旬ニ行レタリト、綿五六千餘里ノ地、僅ニ三ヶ月ニ滿タスシテ衆人同病ニ罹ラザルハナシ、邪モ亦靈ナルカナ』。次デ天保七年・嘉永三年・安政元年・安政四年・萬延元年・文久元年・慶應三年ニモ感冒ノ流行アリ。

以上ノ記述ニ依リテ之ヲ見ルニ、ソノ症狀ヨリ推シテ流行性感冒トナス事ヲ得ベキハ、享和元年乃至二年ノ風邪ニシテ（コノ年ニハ支那ニモ該症流行シタリト言フ、又文久元年ノ疫邪ハ竹内玄同之ヲ律斯聖京僞ト診定シ、^{モスト}謨斯篤治療書中ノ該病ニ關スル一篇ヲ鈔譯セシコトアリ、^{リスシンキング}律斯聖京僞ハ一名「ギリープ」(Grippe)ト言フ、即チ流行性感冒ナリ)ソノ他ノ流行ハ記録ノ備ハラザルガ故ニ之ヲ判定スルニ苦シムトコロアリト雖モ、假ニ之ヲ流行性感冒ナリトシテ、之ヲ西洋ノ「インフルエンツア」流行年紀ニ比較スレバ

風邪流行年紀	相當西曆	歐米流行年紀	風邪流行年紀	相當西曆	歐米流行年紀
寶永四年	一七〇七	一七〇九	延享元年	一七四四	一七四二—四三
延享四年	一七四七	……	文政十年	一八二七	一八二六
明和六年	一七六九	……	天保二年	一八三一	一八三一
安永五年	一七七六	一七七五—七六	天保三年	一八三二	一八三二
天明元年	一七八一	一七八〇	天保七年	一八三六	一八三六—三七
天明四年	一七八四	一七八一—八二	嘉永三年	一八五〇	一八五〇
			伯刺西亞		世界各地
寬政七年	一七九五	一七九八	北米	安政元年	一八五四
享和元年	一八〇一—二	一八〇〇—一	獨佛兩國	安政四年	一八五七
					一八五七—五八
					世界各地

文化五年	一八〇八	一八〇七	北米	萬延元年	一八六〇	一八六〇	世界各地
		一八〇七—八	英國				
文化八年	一八一—	一八一—	伯刺西亞	文久元年	一八六一	一八六〇—六一	世界各地
文政四年	一八二—	……	……	慶應三年	一八六七	一八六六—六七	歐洲
文政七年	一八二四	一八二四—二五	北米				

所謂風邪(又ハ風疾)ハ海外ニ於ケルインフルエンツア流行ト、略ボソノ時ヲ同フシテ流行セシモノナルコトヲ知ル。

脚氣 脚氣ノ起原ニ就テハ諸家ノ説アリテ、我ガ邦古代ヨリコノ病アリシコトヲ主張スト雖モ、我ガ邦古代ニコノ病アリシコトハ確證ナク、鎌倉時代ニ及ビテ始メテコノ病アリ、江戸時代初世、元祿・享保ノ頃ニ至リテ再ビ發生シタルモノナラム。

支那ニアリテ、晋以前ノ更籍及ビ醫書ニ種(毛詩)・重腿(左傳)・皆蠱(史記)・流腫(通鑑)・痿厥(素問)・厥(素問)・濕痺(千金方引クトコロ)・緩風(千金方引クトコロ)・脚弱(名醫別錄ニ引クトコロ)等ノ脚病アリ、諸家多クハ之ヲ以テ後人ノ所謂脚氣ナリトスレドモ、コハ固ヨリ臆想ノ見解ニシテ、症狀ノ據ルベキモノアリテ判斷セルニハアラズ。

脚氣ノ名ハ晋・唐ノ代ヨリ始マル。景岳全書ニハ『脚氣之説、古所レ無也、自晋・蘇敬ニ始有ニ此名、』ト言ヒ、李東垣ガ醫學發明ニモ同様ノ説ヲ載ス、而カモ蘇敬果シテ晋人ナルヤ、否ヤ疑ナキ能ハズ。今日ニ存スル支那ノ醫書ニテハ肘後方ニ脚氣ノ記述アリ。コノ書ハ晋ノ葛洪ノ撰述ナリト傳フレドモ、今ノ世ニ流布スルモノハ梁代(西歷五百二年乃至五百五十六年)ノ人陶弘景ガ撰次セルモノニシテ、後人ノ攪入多ク、信用スルニ足ラズ、故ニ確實ナル記録トシテ先ツ擧グベキハ、隋ノ巢元方ノ病源候論トス、ソノ説ニ『凡此病之初、甚微、飲食嬉戲、氣力如レ故、當レ熟ニ察之、其狀自レ膝至レ脚、有三不仁、或若レ痺、或淫々如ニ蟲所レ緣、或脚指及膝脛、洒々爾、或脚屈弱不能レ行、或微腫、或酷冷、或痛疼、或緩縱不能レ隨、或變急、或至レ困能飲食者、或有不能者、或見ニ飲食ニ而嘔吐、惡レ聞ニ食臭、或有レ物如レ指、發ニ於踰腸、逕上衝レ心、氣上者、或舉體轉筋、或壯熱頭痛、或胸心衝悸、寢處不能レ見レ明、或腹内苦痛而兼レ下者、或言語錯亂、有ニ善忘誤者、或眼濁精神昏憤者、此皆病證』トアルヲ見レバ、コノ書ニ所謂脚氣ハ下脚知覺異常・知覺鈍麻・運動麻痺・腓腸筋痙攣・心悸・浮腫、等ヲ備フル病症ニシテ、今日吾人ガ所謂脚氣ト同一ノ症タルヤ殆ト疑ヲ容ルルトコロナカルベシ。次デ唐ノ孫思邈ノ千金方ニハ脚氣ヲ以テ風毒トシ、且ツ『夫脚氣之病、先起ニ嶺南ニ稍來ニ江東、』ト言ヒテ、コノ病ノ漸次ニ南方ヨリ北進シタルコトヲ説ク。後チ天寶中(西歷七百四十二年乃至七百五十五年)王燾、外臺秘要方ヲ著ハシ、脚氣論ノ一篇ヲ設ケテ之ヲ詳説スルニ及ビテソノ論大ニ備ハレリ、而ルニ宋以後ニ及ビテハ脚氣ハ消滅セシニヤ、宋以後ノ醫書ニ載スルトコロノ脚氣ハ概ネ脚痺・脚痛ノ類ニ過ギズシテ、殆ト今ノ所謂脚氣ニアラズ(コノ事ハ多紀蒞庭、ソノ他諸家既ニ之ヲ言ヘリ)。

我ガ邦ニテハ日本書紀・續日本紀等ニ脚病ノ名アリ。宇津保物語・源氏物語等ニかく病トアルハ當時ノ稱呼ナルベシ、脚氣ノ名ハ日本後紀、大同三年藤原緒嗣ノ上奏文中ニ『臣生平未レ幾、眼精稍暗、復患ニ脚氣、發動無レ期、此病歲積』アルヲ以テ始トス。枕草紙・和名鈔等ニ之ヲ阿之乃氣ト訓ス。當時ノ醫書醫心方ニハソノ第八卷手足ノ病ノ條ニ、病源候論・蘇敬論・徐思恭論・千金方・唐臨論・小品方・極要方・經心方等ノ諸書ヲ引テ脚氣ノ説候及ビ治方ヲ一論ズルコト甚ダ詳ニシテ、ソノ治方トシテ杉・松・柳・梓等ノ樹皮、若クハ葉ヲ煎ジテ脚ヲ浸漬スルノ

法ヲ載セタリ（杉湯・柳湯等ニテ脚病ヲ浸將セルコトハ當時ノ記錄ニ散見ス）而カモ醫心方ハ隋・唐醫書ノ粹ヲ抜キタルノミナレバ、コノ病ガ果シテ當時我ガ邦ニ存セルカ否カヲ、コノ書ノ記述ニ依リテ證スルコト能ハズ。枕草紙等ノ諸書ニ散見スル脚氣ハ固ヨリ症候ノ記述ナケレバ、僅カニソノ脚病ヲ指スコトヲ知ルベキノミ。

鎌倉時代梶原性全ノ萬安方ニハ脚氣ニ數種アルコトヲ言ヒ、風毒脚氣・脚氣腫滿・脚氣衝心・乾濕脚氣、等ノ症ニ併セテ瘴毒脚氣ノ一症ヲ論ジ、『性全謂本朝霧露雲雨嵐氣濕地、即與彼江南、嶺表不異歟、亦今往々脚膝屈弱、脛足腫痛、小腹不仁、頭痛寒熱、大小便不通、寒熱往來之疾狀、全相似』ト言ヒテ、支那ノ嶺南ニ流行セリト言ヘル脚氣ニ似タル症ノ我ガ邦ニモ往々存在セル事ヲ記ス。而カモ同人ノ著 頓醫抄 脚氣ノ門ニ掲グルトコロハ所謂脚痺・脚痛ノ類ニシテ今日ノ所謂脚氣ニアラズ。東鑑・山槐記・明月記・玉海等、當時ノ諸書ニモ脚氣若クハ脚病ノ名ヲ載スレドモ、ソノ證狀ハ固ヨリ明カナラズ、且ツ當時ノ人ガ脚痛若クハ他ノ病ニテ腫ヲ發セルモノヲ指シテ直ニ脚氣ト稱セシコトハ喫茶養生記（建保三年）ニ『近頃人、萬病稱脚氣一尤愚也、可レ笑哉』・『諸病號脚氣一、而不レ知レ所レ治、云々今脚痛非脚氣一』ト記セルニテモ推察セラルベシ。固ヨリ當時ノ醫家梶原性全ガソノ所講脚氣、又ハ脚病ノ内ニ眞ノ脚氣ニ似タル症狀ヲ有セルモノヲ存在セルコトヲ言ヒタルニ依レバ、コノ症ノ鎌倉時代ニ存在セリト言フコトヲ否認スルコト能ハズ、而カモ恐クハ當時未ダ脚氣ノ著甚ナル流行ヲ見ルニハ至ラザリシナラシ。室町時代ヨリ安土・桃山時代ヲ經テ江戸時代初世ニ至ルマデ、諸家ノ説クトコロノ脚氣ハ是レ所謂脚痺・脚痛ノ類ニシテ病源候論等ニ載スルトコロノ脚氣ニアラズ。

然ルニ元祿・享保ノ頃ニ至リテ、脚氣ハ始メテ江戸ニ顯ハレシモノカ、香月牛山ノ牛山活套、中濕ノ條ニ『今時仕官ノ人、或商人モ東武ニ至リテ鬱氣シ、足膝痿軟ニシテ面目虛浮シ、飲食進マザル者ヲ俗ニ江戸煩ト言フ。是皆水土ニ服セザルノ類也、故郷ニ歸ルトテ箱根山ヲ越ユレバ、多クハ其症治セズシテ自ラ平服ス、牛寓嚮ニ官ニアル時江戸ニテ西國ノ諸侯ノ屋敷ヲ見聞スルニ、何ノ所ニモ此病アラズト云フ者ナシ、多ハ不換金、正氣散ヲ用テ宜、虛鬱ヲ挾ム者ハ必ズ死ス濕ヲ治シテ愈ザル者ハ必速ニ故郷ニ皈ラシムベシ、箱根ヲ越レハ自ラ愈ル也、一奇事ノ病ナリ』トアリ。同書ニハ別ニ脚氣ノ一門アリテ、專ラ脚痺ノコトヲ叙シ、右ノ所謂一奇事ノ病ハ之ヲ中濕（瘴氣・濕氣ニ感ジテ起ル病ヲ言フ）ノ部ニ擧ゲタリ。香月牛山ハ當時ノ大醫ナリ、而カモ之ヲ見テ一奇病トナス、脚氣ガ當時未ダ普ネク世人ニ知ラレザリシヤ論ナシ、而シテ我ガ醫家ガ前記ノ症ヲ認メテ之ヲ脚氣トセシハ山脇東洋ガ外臺秘要方ヲ刊行セシヨリ以來ナルコトハ、山脇東門ノ東門隨筆ニ『脚氣病ハ唐・王燾ガ外臺秘要方ニ精シク見エタリ、二十五年已前迄ハ此書モ甚稀ニテ醫人モ心附カズ、故ニ脚氣病ヲ知りタル者ナシ、予ガ父（山脇東洋）此書ヲ翻刻シ脚氣トイフコトヲ説キ初メシヨリ世上ニ脚氣アル事ヲ知レリ、故ニ世俗ハ新病ノ出來タルト心得タル者多シ、醫人モ其理療ニ疎カリシガ、年ヲ經タル故今時ハ少シハ療法モ覺タレドモハカハカシクモ無シ、但此病俗間ニ言フ、膝脚氣濕脚氣、杯イフトハ大ニ相違シタリ』ト記シタルニテ之ヲ證スベク、之ニ依リテ斯病ハ寶歷年間ヨリ始メテ之アリト説クモノアルニ至ル（香川景與等）。次デ諸家ノ期病ニ就テ著述スルモノ多ク、秋山玄瑞ノ脚氣辨惑論（寶歷十一年）・源養徳ノ脚氣類方（寶歷十三年）・松井材庵ノ脚氣方論（明和三年）・内田士顯ノ水腫脚氣辨（寛政四年）・多紀桂山ノ疑脚氣辨惑論・飯野退藏ノ脚氣發明（文化元年）・西田耕悅ノ脚氣提要（文化四年）・岡本昌庵ノ脚氣分類篇（文化十四年）・丸山元璋ノ脚氣辨正（文化八年）・橘宗仙院ノ脚氣説・三浦道齋ノ脚氣新論・磐瀨元策ノ一貫堂脚氣方論・黒田樂善侯ノ脚氣豫防説・辻元松庵ノ脚氣集要論・上瀧良山ノ脚氣考・今村了庵ノ脚氣鈞要（元治元年）等、脚氣ノ病症ニ就キテ叙述セルモノ尠カラズ、而カモソノ説ハ大抵、千金方・外臺秘要方等ヲ祖述スルニ止マリ、別ニ發明ノ説アルニアラズ。

而シテ脚氣ガ脚痺・脚痛及ビ水腫等ノ諸病ト混淆セラレタルコトハ、既ニ鎌倉時代ニアリテモ然リシガ、寶歷以來脚氣ノ本性ノ明瞭トナリシ後モ、尙ホ脚氣ハ他病殊ニ水腫ト混同セラレタリ。内田士顯ノ水腫脚氣辨(寛政四年)ニ『近年好事ノ醫、腫氣病人ヲ見テ脚氣ナリト云ヒ、或ハ心下ヘ支ヘ痛ムモノアレバ脚氣衝心ナリト云フテ、俗人ヲ惑ハシ、己ガ術ヲ賣ラントス、珍奇ヲ喜ブハ世人ノ常ナレハ、遂ニ四方ニ傳稱スルホドニ、今ハ婦女輩マデモ、腫氣トハ云ハズシテ、脚氣ト云フヤウニナリ來リタリ』ト記シ、又村瀨栲亭ガ和田東郭(韞卿)著 導水瑣言ニ序シテ(文化二年)『士徇ニ役于江戸、患ニ兩脚淨腫、筋攣肉痺、衆皆以爲ニ脚氣、治レ之、無レ驗、來ニ于京師、請レ治、韞卿曰、此疝瘕也、云々、所ニ以知レ非ニ脚氣者、切ニ其脈ニ沈緊、心下痞硬、脇下逆滿、臍左有レ塊、而胸腹無レ動、氣息如レ常、故曰ニ疝瘕。一婦浮腫、脚弱筋攣氣急、至レ夜氣自ニ左脇ニ貫衝ニ胸膈ニ煩悶不レ能レ寐、衆醫以爲ニ脚氣、治レ之、無レ驗、乃按ニ其腹、心下拘急、胸下痞而有レ動、然心中不レ悸身無レ所ニ麻痺、即爲ニ大柴胡加龍骨牡蠣吳茱萸甘草湯ニ與レ之、一劑而知、十劑而愈』ト叙スルヲ見テ、當時所謂脚氣ノ中ニハ腎病・心臟病等ニ因スル水腫ヲ混淆セルコトヲ知ルベシ。然レドモ香月牛山ガ所謂一奇病(江戸煩ヒ)及ビ京都ノ三日坊(後ニ出ヅ)等眞正ノ脚氣ト認ムベキ症ノ當時、江戸・京都等ノ都府ニ流行セシコトハ固ヨリ疑ヲ容レザルトコロナリ。

コノ如ク脚氣病ガ元祿・享保ノ頃ヨリ寶歷ノ頃マデハ、專ラ江戸ニ流行セシコトハ、コノ病ニ江戸煩ヒノ稱アリ、又寶歷十三年刊行ノ脚氣類方ニ『脚氣之行也、自レ關以東殊甚矣、蓋感ニ風土之氣、受ニ六氣之沴者、宛肖ニ江嶺之人乎』ト言ヘルニテモ明カナルベシ。然ルニ明和・安永・天明ノ頃ニ至リテハ江戸ニモ斯病ノ流行熾ミ享和・文化ノ頃ニ至リテ該病再ビ流行シタリト言フ。多紀菫庭ノ時還讀我書(天保年間)ニ『脚氣ハ六七十年前(明和・安永)ハ至テ少ク、偶々患フル者アリト聞ケバ、篤志ノ生徒ナド執匙ノ醫ヘ紹介ヲ乞テ、往診セシ程ノ事ナリシト、老醫ノ話也、然ルニ三四十年(享和・文化)ハ上王公ヨリ下小民ニ至ル迄、夏秋ノ際ニハ殊ニ夥ク、衝心スルモノ亦少カラズ、風會ノ移遷スルユヘナラン』トアルガ如キ、以テ證トスベシ。

又コノ時マデ、脚氣ハ專ラ江戸ニノミ行ハレシカバ、他ノ地方ニハ脚氣ト知ルモノナク、寛政ノ末京師ニソノ病顯ハレシ時ハ人之ヲ三日坊ト名ヅケタリ。和田東郭ノ導水瑣言ニ『京師六七年前ヨリ急劇ノ病流行シ人ヲ損フコト少ナカラズ、其症心腹脹痛シ、或ハ脚中隱痛、裂カゴトク、腹攣急シ、呼吸短息、其狀全ク結胸トモ云フベシ、大抵形狀右ノ如クナル故、時醫多ク大陷胸湯ヲ用ユ、予亦別手段ナケレバ大陷胸ヲ用ルモノ凡五六人、服藥ノ後暫時ハ病勢ユルムヤウ見ユレドモ、ヤガテ前ノ如ク盛シナリ、其後ハ大陷胸ノ類ヲ用ユレドモ、即時ニ吐出シ、次第ニ胸中ニ上沖シ、昏悶百苦シテ、ミナ死ス、其迅速ナルコト或三日、或六日ニ過ギス、京師ノ俗コレヲ以テ三日坊ト名ヅク、予屢其病ヲ診スルニ、其症結胸ニ似タレドモ、其脉結胸ノ脉ニアラズ、皆淨虛或淨弱、或沈微沈細ニシテカナシ、因テ思フ、此症實ニ非ズシテ虚ナリ、下劑ノ宜シキ處ニアラズ、全ク脚氣ノ一種ニテ、水毒急ニ胸中ニ上沖スル者ナリ』ト記ス、即チ是ナリ。而シテ天保ノ末ヨリ弘化ノ始ニ及ビテハ、斯症ハ尙ホ江戸及ビ京師ニ止マリシガ(上瀧良山・脚氣考)嘉永・安政、以降ハ江戸ハ勿論五畿七道ニマデ蔓延スルニ至リ、脚氣ハ遂ニ普ク世人ノ知ルトコロトナレリ。

腸壑扶斯 支那ノ醫書熱病ヲ論ズルコト甚ダ錯雜ナレドモ、概括シテ言ヘバ、後漢ノ張仲景、傷寒論ヲ著ハシテ後チ天下傷寒ヲ治スルヲ知り、明ノ吳又可、瘟疫論ヲ著ハシテ、而シテ後チ天下瘟疫ヲ治スルヲ知り、後ノ治ヲ施スモノコノ二家ノ外ニ出ヅルコト能ハズ。ソノ傷寒ト稱スルモノハ風寒ノタメニ傷ブラルモノニシテ傳染セズ、瘟疫ハ天地ノ厲病ニ屬シテ傳染スルモノナリ。而カモ張仲景ノ所謂傷寒中ニハ瘟疫ヲ以テ傷寒ニ混同シテ之ヲ論ジタレバ、仲景ノ所謂傷寒ハ熱病ノ總稱ニ外ナラズ。我ガ邦古ヨリ醫俗トモニ疫邪ト稱セシモノハ傷寒瘟疫ニシテ(第

二六頁参照)、ソノ多數ノモノハ、今日吾人ガ所謂腸窒扶斯(Typhus abdominalis)ナリシコト疑ヲ容レズ。左二疫邪流行ノ年紀ヲ列スベシ。

延寶二三年濕疫流行。醫方口訣集頭書ニ曰ク『延寶二三年、雨水不時、畿内五穀少登、因レ此民多ニ飢餓、而雜食、且濕疫流行、死者不レ可ニ勝計、有識之醫、多用ニ八解散、救レ人且多云、其症始得ニ不惡寒而發熱、未レ及二期、或耳聾目暗、或發渴譫語、或發班而泄、或齒燥舌黑而能食、其脈始末ニ多得ニ淨緩』

元祿四年疫病流行。牛山方考ニ曰ク『元祿四年五六月ノ間久霖シテ士民悉ク暑濕ノ氣ニ感シテ頭痛如レ裂、爲ニ一方ヲ製ス、胃芩湯ニ柴胡黃芩ヲ加ヘテ本トシ、熱甚シク大便秘セバ黃蓮石姜ヲ加フ、大便スルニハ白扁豆升麻ヲ加フ、腹痛ニハ木香砂仁ヲ加フ、咽渴ニハ葛根ヲ加フ、頭痛ニハ姜活川芎ヲ加フ、眼中黃ムニハ菌陳ヲ加フ、用レ之應レ手有レ效』。同六年ニモ疫流行アリ、牛山方考ニ曰ク『元祿六年六月七月ノ間大ニ旱シ金流レ石爍ル、八月ノ初ヨリ俄ニ收斂清肅ノ令行レ、暴風霖雨、白露忽霜ニ變ス、國中ノ諸人一般ノ時疫ニ感シ、其病狀發熱惡寒頭痛如レ裂、咳嗽シ身體重ク頭冷テ如レ水、或ハ泄痢ヲ兼ネ、或ハ瘡ノ如シ、治レ之ニ黃蓮香需飲ニ蒼朮ヲ加テ百發百中ス』牛山方考ハ香月牛山ノ著ニシテ牛山ハ、當時豊前・申津ニ住セリ、元祿四年及ビ六年ノ疫ハ豊前以外ニ存セシカ否カ詳ナラズ。

元祿十七年春疫病流行。

正徳六年夏疫病流行。閑窓瑣談ニ曰ク『正徳六年の夏、熱を煩ふ病人多く、一箇月の中に武江町々にて死するもの八萬餘人に及び、棺をこしらへる家にも間に合はず云々』

享保十七年夏疫病流行(武江年表・成形圖設)。同十八年・十九年・二十年、延享元年・同四年、明和七年、安永元年・同二年・同五年(京畿)、天明三年(陸奥)・同四年(武江年表・續皇年代略記・泰平年表)

文化十三年疫病流行。時還讀我書ニ曰ク『文化十三年夏秋ノ際、都下大ニ疫アリ、其證初起速ニ少陽ヲ犯シテ熱勢熾盛ニ日ナラズシテ精神昏憤スルニ至ル、大抵大小柴胡黃連解毒ノ類ノ擬スベキ者多く正陽陽明ヲナス者ハ少カリ、老醫ノ話ヲ聞クニ先年ハ陰證躁擾スル證多カリシト、先教諭(多紀桂山)ノ傷寒ヲ治セラレシヲ視ルニ亦多ク參附ヲ用ヒ玉ヒシ也。蓋是歲ヨリ以後ノ疫ノ大略此程ノ證ニシテ陰證ハ至テ稀也、風氣ノ變遷シテ然ラシムル者歟』天保七年濕疫流行。橘黃年譜ニ『天保七丙申ノ春夏ノ際、濕疫大ニ行ハレ老壯ヲ問ハズ沿門闔戸疾サルモノナシ、外熱内寒ノナス處、皆饑荒陰雨ノ爲ナリ、其證發熱惡風汗出頭重痛四肢痠疼轉側シガタク或煩躁大便溏泄是溫邪ノ濕ヲ挾ム候也、桂麻宜シキ處ニアラズ、三因沃雪湯ニテ效ヲ得タリ。』

天保八年春ヨリ秋ニ至ルマデ疫病流行。時還讀我書ニ曰ク『丙申ノ歳年穀不登、飢饉相踵デイタル、丁酉ノ春月ヨリ疫邪盛ニ行ハレ秋末ニ至リテ稍ヤ止ム、其證前年ヨリ行ハルルモノト大約相同シテ少陽病殊ニ多シ、ナレドモ貧賤ノ人ハ多ハ下利ナト虚候ヲ兼ルモノ少カラズ參附ノ證、儘マ是アリシナリ、都テ攻下ノ對スベキハ至テ少シ、且富貴ノ人ニハ稀ナリ畢竟窮氓ノ連月粗食セシヨリ脾氣ヲ竭乏セシモノニ多カリシナリ』橘黃年譜ニ曰ク『春三月ヨリ佐久間町貧院ニ熱病行ハレ、四方ニ傳播ス、其ノ人壞證多ク、胃實ニ屬スルモノ絶少ナリ、世醫以テ穀食不足ノ徵トス』枳園隨筆ニ曰ク『天保八年ノ春ヨリ九年ニ至ルマデ京師ニ赤疹瘟病流行ス』

嘉永四年夏ヨリ秋ニ至ルマデ疫病流行。安政元年傷寒流行。文久元年六月七月傷寒流行。(武江年表)

小兒暴瀉。正徳年間、小兒暴痢ノ病鎮西ニ起リ、漸次流傳シテ尾州ノ地ニ及ビ大人モ偶々感ズルモノアリ。爾後筑前・筑後ニハ年々コノ症行ハレ(今時醫談・小兒暴痢新考)、時人之ヲ暴瀉ト名ヅケ(南溟問答・北窓瑣談)、或

ハ之ヲ痧利ト稱シ(時還讀我書)、尾州及ビ對馬ニアリテハ之ヲ早手(颶風)ト呼ビ、又之ヲ急症ト稱ス。コレヲ早手ト言フハソノ症ノ急劇ニシテ、海上ノ颶風ノ暴ニ發シテ暴ニ止ムガ如キガ故ニ名ヅクト言フ(橘黃年譜・幼幼家則)。

(近時世人ガ之ヲ疫痢ト稱スルハ古人ガ用ヒシ名ニアラズ、古來醫家ガ疫痢ト言フハ牛山方考ニ『疫痢トテ一郷スベテ痢ヲ患フルコトアリ、和俗是ヲ腹疫病トイフ』トアルモノニテ流行性ノ痢病ニ外ナラズ。)

延享ノ頃、加藤玄順、治病經驗ヲ著ハシ、文化年間大鶴活庵、治病軌範ヲ著ハシ、下痢ノ症ヲ論ジタレドモ小兒暴瀉ノ症ヲ詳論セズ。日黑道琢ノ驪家醫言・山口安齋ノ病家示訓錄義ニ該症ニ就テ叙述スルトコロアレドモ詳ナラズ。龜井南溟ノ南溟問答・鷹取遜庵ノ小兒暴痢新考・林蘭齋ノ颯說ニ至リテ、攻究更ニ一步ヲ進メ、ソノ說稍詳細ナルヲ得タリ。而シテ小兒暴瀉ノ症狀ニ就テ時還讀我書ニ筑前ノ醫青木春澤ガ記錄セルモノヲ載スルヲ見ルニ、『暴痢ハ多ク六月頃ヨリ八九月頃迄アリ、中元後稍涼氣ヲ催ス時節最多シ、其症候ハ初起發熱(惡寒ハ初起ノミ)頭痛四肢怠惰面色少シ熱色ヲ帶、脈浮數或洪數、微シク腹痛シ、腹痛セズシテ圍ニ登リ、滑便一二行、卒然トシテ熱勢前ニ倍シ、肌熱手ヲ灼クカ如ク、周身汗シ劇ケレバ浴スル如シ、面色朱ノ如ク、發搐譫語煩渴ス、茲ニシテ多クハ清穀臭穢鼻ヲ撲モノヲ遺失スルコト一二行、或ハ三四行、稍煩渴ヲ加ヘ、藥汁或ハ米飲ヲ與フルニ、小磁器及蛤殼ヲ以テ口邊ニ著クレハ撮口ス、頻ニ進テ頻ニ嗜ム勢アリ、是煩渴ノ爲ニ飲ムモノニシテ動モスレバ吐出スルアリ、此時神氣恍惚昏睡スルニ至ル、又ハ虬候一二症ヲ現シ、食物ヲ吐逆スルモアリ、脈モ依然タレドモ自カラ根帶ヲ失シ肌熱モ甚ケレドモ自汗ノ爲ニ手ヲ以テ暫時肌ニ着クレハ、掌中冷氣ヲ覺ヘ、續テ清穀臭穢ヲ下利スルモアリ、或腹中惡物盡キ虛軟ニナリテ下痢止ムモアリ、兩ナガラ惡候ニテ脈モ倫次ヲ失テ速ニ斃ルルナリ、初起ヨリ僅ニ一週時ヲ過ギズ、茲ニ至ルモノ多シ、又此症大抵四五歳乃至八九歳ノ兒ニ最多シ、偶然十三四歳ニ至テ患フル者アリ、十歳以外ハ救フベキモノ多シ、且府治一二里ノ間ニ多シ』ト言ヒ、橘黃年譜ニ村瀨白石ノ說ヲ載スルトコロヲ見ルニ『乳哺ノミノ者ハ此症ヲ發セズ、嬰兒二三歳ヨリ八九歳マデ尤多、大人ニ稀ナリ、此症ノ發スルヤ俄ニ大熱ヲ發シ、或ハ惡寒手足冷、或ハ發驚搐搦シ天吊直視咬牙噤急ヲ發シ、或ハ腹痛嘔吐呵缺困悶シ、或ハ泄瀉シ、或ハ洞瀉シ、下痢惡臭ナク、其發スル時發驚吐瀉一齊ニ來ルモノ俗ニ三拍手揃フト云フテ不治ノ症トス』トアリ、痧病(虎列刺)ニアラズ、霍亂(急性腸加答兒)ニアラズ。時氣ト食物トノニヨリテ發スル一種ノ風土病ト認メタルコトヲ知ルベシ。

痢病 平安朝時代、既ニ赤痢流行ノ紀事アリ。爾來コノ病ハ絶エズ都鄙ニ流行シ、古昔ハ主ニ滯下・赤痢・白痢等ノ區別及ビ稱呼ヲ用ヒシガ、近世ニ及ビテハ概シテ之ヲ痢病ト稱シ、ソノ一郷一國ニ傳染波及スルトキハ之ヲ疫痢ト稱シ(牛山方考)、又ハソノ重症ニシテ『裏急後重甚シク、下ル所ノモノハ皆膿血ニテ色シホカラノ如ク腥キモノ』ヲ指シテ疫痢ト呼ビタリ(内科秘錄)。

流行黃疸 支那ノ醫書ニテハ千金方ニ『黃疸ノ一證ニシテ外感ニ屬スルモノアルコト』ヲ論ズレドモ、明カニ天行ノ黃疸ヲ認メテ之ヲ瘟黃ト稱呼シタルハ明醫雜著ニ始マル。我ガ邦ニアリテモ本間棗軒ノ内科秘錄ニ『年々一兩人ツツハ之ヲ患フルモノアレドモ、世醫皆輕疫ノ發黃トノミ心得テ、一種ノ瘟黃病ナルコトヲ明辨セズ、嘉永甲寅ノ春、瘟黃大ニ行ハレ、府下并ニ近村傍邑ニ及ベリ云々、初メハ人々何病ナルコトヲ知ラザレドモ、後ニハ天行病ニ定マリタルユエ、市井ノ者モ之ヲ黃疸風ト稱セリ』ト記スルヲ見レバ、少ナクトモ江戸時代ノ中期以後ニハ流行黃疸ノ存セシコト明カナリ。

醫人道義學

支那ノ醫書ニハ千金方以下累代諸家ノ著述ニ醫人道義(Die ärztliche Ethik)ノ一章ヲ掲ゲ、我ガ邦ノ醫書ニテモ

醫心方・萬安方等諸家ノ著述ニ、醫人道義ノ一章ヲ存セザルハ稀ナリ。而カモ醫人道義ノ一事ヲ研究シ、專書トシテ之ヲ公行セルハ、元祿年間竹中通庵ノ醫病兩鑑・醫病問答ヲ以テ嚆矢トス。

竹中通庵、名ハ敬、字ハ子昌、美陽ノ人、醫ヲ半井通仙院瑞堅ノ門ニ學ビ、出藍ノ譽アリ、瑞堅ソノ才ヲ奇トシ、通仙院ノ一字ヲ割キ與ヘテ通庵ト稱セシム、之ヨリシテソノ名益々顯ハル。著ハストコロ内經要語・古今養性論アリ、ソノ養性論ノ如キハ、醫家ノ書ヲ引用スルコト五百五十四家、姓名ヲ舉グルコト一百數十人、時人咸ナソノ該博ニ驚クト言フ。(日本醫譜・古今養性錄)

醫病トハ『好ニ捷方』、走ニ簡略』、聾ニ諸賢之言』、盲ニ眞聖之道』、羨ニ富貴』、欲ニ利名』ヲ指シ、醫病兩鑑・醫病問答ノ兩書ハ、コノ病患ノ原因・證狀及ビ療法ヲ講究シ、稍系統的ニ醫人道義ノ事ヲ叙述シタリ。

加藤謙齋ノ病家示訓(正徳三年刊行)ハ主ニ病家ノタメニ醫ヲ撰ブノ要項ヲ示シタルモノナレドモ、固ヨリ醫戒ノ一種タリ。今大路親俊次デ醫戒ヲ著ハシタレドモ、所説ハ甚ダ精シカラズ。

香月牛山ノ習醫先入(享保十八年)三卷ハ、自家ノ多年ノ經驗ニ徴シテ、醫人ノ道義ヲ説キタルモノニシテ、之ヲ醫病兩鑑ニ比スレバ、所説細目ニ涉リタルトコロアリ。醫家ノソノ道ニ對スル義務ノミナラズ、ソノ同僚・社會及ビ公衛ニ對スル關係ヲモ論述シ、今ヨリ視ルモ尙ホ首肯スベキモノ多シ。

次デ多紀藍溪ノ醫家初訓一卷、緒方惟勝ノ杏林内省録六卷(天保七年刊)アリ。杏林内省録ハ官醫・市醫・里醫ノ三門ニ別チ、諸書ヲ引用シ、且ツ例證ヲモ舉ゲタレドモ、ソノ説クトコロハ醫家ノソノ術ヲ行フニ就キテノ注意要件ヲ示スニ過ギズ。

嘉永四年杉田成卿町ガ、フーヘランドノ醫戒(Die Verhältnisse des Arztes)ヲ翻譯シテ世ニ行フニ及ビ、始メテ西洋ノ倫理學ノ基礎ノ上ニ立テル醫戒アリ。

醫書目録

コノ期ニ撰述セラレタル醫書ハ甚ダ多數ニシテ、悉ク之ヲ網羅セムコトハ頗ブル難事ニ屬ス。シカレドモ、著述ノ多少及ビ種類ハソノ學科ノ發展ヲトスルノ尺度トスベキモノナルガ故ニ、ココニ主要ナルモノヲ取り、之ヲ支那及ビ和醫方ト西洋醫方トニ大別シ、更ニ科目ニ從ヒ、類別シテ左ニ掲グ。固ヨリ精確完全ナル醫書目録ニアラザルナリ。

(甲) 支那醫方

(一) (上) 本道

(書名)	(撰者)	(卷數)	(年代)
醫方明鑑	曲直瀨玄朔	四	——
常山方	曲直瀨玄朔	十二	——
惠徳方	曲直瀨玄朔	三	——
延壽院切紙	曲直瀨玄朔	一	——
醫學指南編	曲直瀨玄朔	三	——
師語錄	曲直瀨玄朔	二	——
素問註鈔	秦宗巴	十	——

醫學的要方	秦宗巴	十五	——
參伍的方	秦宗巴	一	——
燈下集	岡本玄治	一	寬文十一年
玄治配劑口解	岡本玄治	一	——
玄治方考	岡本玄治	一	寬文十二年
增補濟民記	岡本玄治	一	——
通俗醫海腰舟	岡本玄治	——	——
傷寒衆方規矩	岡本玄治	一	寬永十三年
群方類稿	野間玄琢	六十三	——
醫學類篇	野間玄琢	一	——
醫方口訣集	長澤道壽	一	——
醫方捷徑	山脇玄心	二	——
原病式集解	山脇玄心	——	——
增補醫方口訣集	中山三柳	三	延寶九年
病家要覽	中山三柳	一	——
切要方義	中山三柳	一	——
方書適要	服部甫實	一	延寶年間
萬病專用集	——	一	延寶九年
日記中棟方	古林見宜	二	——
正溫方	古林見宜	五	——
速効方	古林見宜	一	萬治三年
正入回世	古林見宜	三	——
綱目撮要方	古林見宜	二	——
醫學入門假名鈔	古林見宜	——	——
醫統粹	古林見宜	——	——
假名雲林神藪	古林見宜	二	——
味岡切紙	味岡三伯	一	——
味岡流藥性修法	味岡三伯	一	——
淺井周伯切紙之辨	淺井周伯	一	——
運氣論診解	岡本一抱	三	寶永元年
原病式首書	岡本一抱	一	——
醫學講談發端辨	岡本一抱	三	元祿十三年
衆方規矩指南	岡本一抱	一	——
病因指南	岡本一抱	五	——
和語醫療指南	岡本一抱	四	正德四年
本朝古今醫統	岡本一抱	——	——
萬病治法指南大全	岡本一抱	——	——
方意辨義	岡本一抱	二	元祿十六年

醫學切要指南	岡本一抱	一	正德四年
萬病回春指南	岡本一抱	一	貞享五年
局方發揮諺解	岡本一抱	一	——
醫學正傳或問諺解	岡本一抱	一	——
醫經滄澗集和語鈔	岡本一抱	十	享保十三年
醫方大成論諺解	岡本一抱	五	享保六年
薛氏醫案和解	岡本一抱	——	——
名醫類案	岡本一抱	五	寶永五年
內經病機撮要辨證	森島玄勝	六	寶永三年
醫療歌配劑	古林見桃	二	明和九年
杏林筆談	古林見桃	一	——
醫教正意	草刈三越	四	延寶七年
醫方問餘	名古屋玄醫	十	延寶七年
用方規矩	名古屋玄醫	一	——
醫方規矩	名古屋玄醫	一	——
醫方摘要	名古屋玄醫	一	——
丹水子	名古屋玄醫	一	貞享五年
古今類方	名古屋玄醫	三	——
金匱註解	名古屋玄醫	二十三	元祿十年
怪癖一得	名古屋玄醫	一	元祿四年
纂言方考	名古屋玄醫	三	——
續方考	名古屋玄醫	三	——
素問假名抄	名古屋玄醫	一	——
內經綱紀	芳村恂益	二	——
二火辨妄	芳村恂益	二	——
北山醫話	芳村恂益	二	正德年間
方書適要	小川宗本	五	天和二年
龍金方	今大路親俊	一	——
掌珠方	今大路親俊	一	——
廣求經驗秘方	向井元升	——	——
括秘錄	千田玄智	——	——
內丹要訣	國玄貞	——	——
袖珍醫便	——	五	元祿三年
醫學辨害	字治田雲庵	十二	天和三年
病名彙解	桂州子	七	貞享年間
袖珍醫便	蘆桂州	五	元祿三年
古方詩活	古林正貞	一	元祿三年
醫教指南索難要旨	外山道機	十四	元祿四年

毒見秘傳抄	藤原家久	一	元祿五年
參考衆方規矩	下津春抱	二	元祿七年
醫學至要鈔	――	二	元祿十二年
內經素問要語集註	竹中散	九	寶永三年
奇疾便覽	下津壽泉	四	正德三年
袖珍仙方	奈良宗哲	一	正德五年
醫學鉤玄	香月牛山	三	正德四年
老人必用養草	香月牛山	六	正德六年
遊豐司命錄	香月牛山	三	――
牛山活套	香月牛山	三	天明二年
牛山方考	香月牛山	三	天明二年
卷懷食鏡	香月牛山	一	明和三年
運氣指南後編	西川正休	一	享保元年
醫學須知	堀元厚	一	享保四年
袖珍醫方大成	――	一	享保五年
濟生寶	寺島良菴	一	享保七年
病機撮要	武田養淳	一	享保八年
醫療羅合	藤井見隆	一	享保十一年
增補袖珍醫便	蘆桂洲	五	享保十四年
病因考	後藤良山	二	寶歷七年
熊膽蕃椒灸說	後藤良山	一	――
良山手簡	後藤良山	一	――
傷風約言	後藤椿庵	一	享保十七年
醫事大要	後藤椿庵	一	――
治方漫錄	後藤椿庵	一	――
師說筆記	後藤椿庵	二	――
纂言方考評議	野村玄敬	五	享保十七年
醫方大成	平住專安	一	享保二十一年
衆方規矩	北山道長	三	元文二年
北山醫案	北山道修	三	延享二年
方考評義	――	一	――
方考繩愆	北山道長	一	――
時習錄	北山道修	三	延享二年
醫學溫古辨	山口實齋	一	天文四年
腫病辨	林一烏	一	元文五年
醫方紀原	甲賀通元	三	元文五年
癆療發揮	加藤通故	二	寬延四年
醫學知津	宮田全澤	二	延享元年

建殊錄	吉益東洞	一	寶歷元年
類聚方	吉益東洞	一	明和元年
醫事或問	吉益東洞	二	明和六年
方極	吉益東洞	一	享和三年
方極丸散方	吉益東洞	一	——
方機	吉益東洞	一	文化八年
補正輯光傷寒論	吉益東洞	二	天保九年
東洞配劑記	吉益東洞	一	——
古方便覽	吉益東洞	一	——
一本堂行餘醫言	香川修庵	十六	——
醫事說約	香川修庵	一	——
寧固醫談	惠美三白	一	——
醫經論說	惠美三白	一	——
淺井周伯切紙之辨	淺井周伯	一	——
飲病論	石崎元素	一	寶歷四年
醫斷	鶴元逸	一	寶歷九年
斥醫斷	畑柳安	一	寶歷十二年
辨斥醫斷	田中愿仲	一	寶歷十一年
吐方考	永富獨嘯庵	一	寶歷十三年
萬病皆醫論	源通魏	一	寶歷十四年
吐方編	荻野元凱	一	文化四年
經驗方選	荻野元凱	一	——
溫疫餘論	荻野元凱	一	——
藥方全書	林貞亮	一	明和二年
辨醫斷	堀江道元	一	明和三年
溫知病因	野々村喬	四	明和年間
醫學天則	平田用和	一	明和六年
師說筆說	加藤信成	二	——
古方節義	內島保定	三	明和八年
隨證錄	桃井安貞	一	安永八年
妙藥錦囊秘錄	藤井見隆	一	明和九年
難病方彙	藤井見隆	一	——
傷寒論劉氏傳	劉田良	四	明和九年
奇疾便覽	下津壽泉	五	安永三年
傷寒名數解	中西惟忠	五	安永三年
方極刪定	村井琴山	一	安永四年
刪定十二律方	村井琴山	一	——
醫道二千年眼目篇	村井琴山	十四	文化四年

萬病一毒之論	村井琴山	一	——
傷寒方	中澤養亭	一	安永六年
篋中方	市川匡	一	安永六年
藥方撰	定榮堂主人	一	安永六年
醫療手引草	加藤謙齋	三	安永六年
醫療手引草別錄	加藤謙齋	四	安永六年
方的	加藤謙齋	一	——
老醫方解	加藤謙齋	一	——
本邦老醫經驗傳	加藤謙齋	一	——
醫書方的	加藤謙齋	一	文化九年
傷寒手引草	加藤謙齋	一	安永六年
金匱通玄類證	加藤謙齋	一	安永六年
治痢經驗	加藤謙齋	一	——
醫療藥方規矩	加藤謙齋	一	——
仲景方詁	橫井玄同	一	安永八年
傷寒考	山田正珍	一	安永八年
金匱要略國字解	古野了作	六	安永九年
上池秘錄	西川國華	一	天明元年
張仲景用藥分量考	平井貞賴	二	天明七年
傷寒各證方訣	篤山道人	一	天明七年
傷寒譯通	鈴木定寬	二	天明七年
食品國歌	大津賀仲安	二	天明七年
疝癥積聚編	大橋尙因	一	天明七年
廣惠濟急方	多紀元憲	三	寬政二年
傷寒論辨正	中西惟忠	七	寬政二年
傷寒論特解	齋靜齋	七	寬政二年
傷寒論分注	橘南蹊	一	寬政三年
傷寒邇言	橘南蹊	一	寬政三年
傷寒外傳	橘南蹊	三	寬政七年
雜病紀聞	橘南蹊	三	寬政七年
長沙證彙	田中榮信	一	文化二年
傷寒論逢原	由中榮信	一	寬政三年
傷寒國字辨	淺野徽	十一	——
傷寒論集成	山田正珍	十一	寬政三年
傷寒津氏微	津田賞	二	寬政四年
傷寒啓微	片倉鶴陵	三	寬政四年
靜儉堂治驗	片倉鶴陵	三	寬政五年
外傷論	蝦惟義	二	文政五年
			寬政七年

傷寒雜病論通解	蝦惟義	十六	——
溫病論	蝦惟義	二	寬政十二年
風痺論	蝦惟義	一	——
傷風約言	後藤椿菴	一	寬政七年
傷寒論俗解	新井保之	三	寬政九年
生々堂醫譚	中神琴溪	一	寬政八年
生々堂治驗	中神琴溪	二	文化元年
生々堂傷寒約言	中神琴溪	一	文化三年
復古試明錄	稻葉宗軒	一	文化元年
醫經解惑論	內藤希哲	六	文化元年
溫疫反案	松尾其德	二	文化二年
提耳談	當莊菴	五	文化四年
吐方撮要	賀古角州	一	文化五年
醫學捷徑	林謙孝	一	文化六年
斷毒論	橋本伯壽	二	文化七年
傷寒論章句	吉益南涯	一	文化八年
觀證辨疑	吉益南涯	一	——
險證百問	吉益南涯	一	——
方庸	吉益南涯	一	——
方機	吉益南涯	一	——
南涯三治例	吉益南涯	一	——
續醫斷	賀古恭安	一	文化八年
傷寒論古義	大久保常安	一	文化九年
醫聖方格	能條方庵	一	文化九年
經驗禁方錄	能條方庵	一	文化十年
蕉窓方意解	和田東郭	二	文化十年
虛勞勞瘵名義辨	小石元俊	一	寬政十年
二神傳	天羽友仙	三	寬政十年
傷寒圖說	原元麟	一	寬政十年
本道醫療近路	馬田光昇	一	享和元年
救急選方	多紀桂山	一	享和元年
疑脚氣辨惑論	多紀桂山	一	——
金匱玉函要略輯義	多紀桂山	六	文化八年
黃帝內經靈樞講義	多紀桂山	五	——
觀聚方	多紀桂山	十	文化二年
傷寒論輯義	多紀桂山	七	文化五年
素問識	多紀桂山	三	天保年間
靈樞識	多紀桂山	二	——

觀聚方要補	多紀桂山	十	安政四年
醫方挈領	多紀桂山	四	——
傷寒論經傳晰義	兒島冲夫	十	——
古醫方晰義	兒島冲夫	五	享和二年
古醫方活套	兒島冲夫	三	——
奇方類選	兒島冲夫	十	——
上池秘錄(續編)	西川元璋	一	享和三年
梅花無盡藏纂紛	邑環中	一	享和三年
蔓難錄	拓植彰常	五	享和三年
傷寒論正文解	和田東郭	八	天保八年
蕉窓雜話	和田東郭	五	文政九年
治痢主方	和田東郭	一	——
百疾一貫	和田東郭	二	——
導水瑣言	和田東郭	一	文化四年
蕉窓方意解	和田東郭	二	文化五年
續藥分量考	岡田靜宅	一	文化十年
刀圭秘錄	德固文	二	文化十年
方極附言	岩淵任令	一	文化十一年
醫法貫通	下井莊司	一	文化十一年
傷寒論脈證式	川越正淑	八	文化十三年
救瘟袖曆	工藤平助	一	文化十三年
藥方分量考	岡田子成	二	文化十三年
吐法論	喜多村良宅	一	文化十四年
治痢軌範	大鶴定香	一	文化十四年
歸默齋方譜	森如松	一	文化十四年
的治療方	小野子德	一	文政二年
證治指南	中村明遠	十	——
類方紀聞	——	一	文政二年
癩癩狂經驗編	土田翼卿	一	文政二年
成蹟錄	中川修亭	二	文政二年
傷寒發微	中川修亭	一	文政九年
素註傷風論	木幡某	一	文政二年
腸寒雜病論類編	小島瑞	十三	文政二年
小閨苑痢病論	中西元瑞	一	文政三年
叢桂亭醫事小言	原南陽	七	文政三年
解毒奇効方	原南陽	一	天保九年
治飲卑功	樋山資承	一	文政四年
治痢便蒙	木幡貞隆	一	文政四年

迨孫疫痢考	原田玄菴	一	文政五年
張氏方函	藤田大信	一	文政五年
靜儉堂經驗	片倉鶴陵	三	文政五年
難病治驗方	竹下支恭	二	文政五年
療治茶談	田村玄仙	十	文政六年
古法樞要	關屋南嶺	六	文政六年
傷寒論實義	早川宗安	五	文政八年
續建殊錄	武貞徳夫	一	文政八年
辨醫斷	堀江道元	二	文政八年
服用藥帖	長尾龍	一	文政九年
傷寒精義外傳	和田元庸	二	文政九年
求古採衆方	渡邊明	二	文政九年
傷寒正解	中莖謙	二	文政九年
金匱要略章句	淺野陵章	一	文政十年
辨癩癩狂	——	一	——
丸散手引草	白弘光	一	文政十二年
疾醫譚	向田迪	一	文政十二年
三家醫話	福井楓亭	一	——
名數解續編	中村元恒	三	——
求古館醫譜	高階枳園	一	——
傷寒臆拔書六經辨	鈴木倉部	一	——
奇正方	賀古公山	一	天保元年
傷寒新志	鈴木雪里	二	——
聖劑發蘊	小島有卿	一	天保三年
內科囊記	青地宗重	一	天保三年
古方漫筆	原南洋	一	天保三年
救急方	乙里宗益	一	天保四年
方叢	——	一	——
醫方選粹	杉本忠溫	一	——
折肱餘筆全書	今井信之	一	天保七年
醫聖堂雜誌	篠島道忠	一	天保八年
好生緒言	賀屋恭安	二	天保十年
醫按辨	竹內好俗	一	天保十一年
困學醫言	石上汶	一	天保年間
換杏新話	小川子明	一	天保十五年
簡齋漫錄	伊澤蘭軒	九	——
蘭軒遺稿	伊澤蘭軒	二	——
蕉尾雜記	伊澤蘭軒	一	——

讀外臺秘要方	伊澤蘭軒	一	——
千金方標記	伊澤蘭軒	一	——
諸書棟考	伊澤蘭軒	一	——
醫方干支	伊澤蘭軒	一	——
諸書鈔錄	伊澤蘭軒	一	——
疾雅	多紀元胤	三十	——
名醫公案	多紀元胤	五十	——
醫療衆方規矩大成	——	三	天保七年
虬病發蘊	糟谷駿	一	天保七年
傷寒和語示蒙	宮崎貞順	二	天保八年
瘟疫論發揮	小畑良卓	二	天保八年
熱病指南	小畑良卓	一	天保八年
傷寒夜話	原南陽	五	弘化三年
饗英館療治雜話	目黑遺琢	三	弘化四年
傷寒五種傳正文	伊東國珍	四	天保九年
經驗良方	西脇秀挺	一	天保十年
經驗日新錄	奧田知春	二	天保十年
斷醫譚	——	一	——
救民必用方	沼勇藏	一	天保十一年
傷寒論古訓傳	及川達叔	五	天保十二年
灌水編	古宇田知常	一	——
古方大意	國林文庵	二	——
傷寒脈證類辨	稻葉元熙	一	——
傷寒論述義	丹波元堅	——	天保十五年
證治通義	多紀元堅	二十	——
名醫彙論	多紀元堅	八十	——
傷寒廣要	多紀元堅	十二	——
雜病廣要	多紀元堅	三十	安政三年
金匱要略述義	多紀元堅	二	安政元年
傷寒論述義補	多紀元堅	一	——
丸散便覽	華岡青洲	一	——
痢疾瑣言	華岡青洲	一	——
知足齋遺方	小島蕉園	一	——
懸氏吐法	——	一	——
治水家言	大陵	一	——
方極直解	武藤吉得	一	——
丸散解	吉益羸	一	——
醫方歌括	——	一	——

傷寒辨術	淺田惟常	一	弘化二年
傷寒吐則	淺田惟常	一	嘉永六年
吐方考補遺	小林鉸鼎	一	——
家方口解	當壯菴	四	——
古訓醫傳	宇津木昆臺	二十五	——
斥醫斷評說	木幡貞隆	一	——
傷寒論方法瑣辨	岡田省吾	三	嘉永二年
柏軒方意解	伊澤道任	一	慶應元年
溫疫論私評	秋吉南豐	二	嘉永二年
傷寒論文字攷	伊藤子德	二	嘉永三年
虬志	喜多村直寬	三	嘉永二年
傷寒六經析義	喜多村直寬	一	嘉永四年
傷寒雜病類方	喜多村直寬	一	嘉永五年
服藥要抄	喜多村直寬	一	嘉永七年
傷寒論剖記	山下玄門	一	——
醫事叢談	桑原隆朝	四	嘉永四年
韞匱奇方	坂上玄丈	六	——
金匱翼	——	二	——
今時醫談熱癩略鈔	——	一	——
暴病管見	田宮尙施	一	安政五年
傷寒論陰陽辨	田宮尙施	一	元治元年
施治肇要	田宮尙施	九	——
告傷寒溫疫家說	長尾全菴	一	安政五年
天行病論	長松文忠	一	安政五年
痧病類記	奧廣孝	二	安政五年
三毒備考	原田玄菴	一	——
傷寒論集解	目黒道琢	一	——
醫方一家言	平田玄忠	一	——
吉田虫之書	——	一	——
單方彙義	和爾子讓	一	萬延元年
保命緒言	鈴木玄龍	一	文久年間
霍亂治略	尾臺榕堂	一	元治元年
療難百則	川瀨子重	一	——
療難指示	尾臺榕堂	一	——
治大風秘方	吉田某	一	——
癩瘡秘方	牛山丹跡子	一	——
內科秘錄	本間棗軒	十四	元治元年
自準亭日診雜識	本間棗軒	三	——

金匱要略正義

一 (下) 雜著

專齋夜話	江村專齋	二	—
飛鳥川	中山三柳	三	—
諸證類部	吉田元瑞	一	貞享五年
秘察符法	馬場信武	一	元祿十六年
病家示訓	加藤謙齋	一	正德三年
桑韓醫談	北尾春甫	二	正德三年
醫學千門考證	石井彰信	二	享保元年
醫案啓蒙	堀元厚	一	享保四年
醫門丘垤集	堀元厚	二	寶歷二年
螢雪餘話	香月牛山	五	享保十二年
習醫先入	香月牛山	三	享保十八年
國字醫叢	香月牛山	五	元文二年
醫學蒙求	伊東好禮	一	寬保二年
對麗筆語	管道伯	一	延享五年
靈泉記	堀正修	一	寬延二年
養壽院醫則	山脇東洋	一	寬延四年
醫家名數	草野益翁	四	寶歷二年
醫官玄稿	望月三英	五	寶歷三年
見宜醫案	松下見林	一	寶歷九年
結牒錄	松岡玄達	一	寶歷年間
癍囊錄	山本貞惇	一	文政八年
徂徠先生醫言	中村玄春	一	文政七年
東洞遺稿	吉益東洞	三	明和四年
古書醫言	吉益東洞	四	寬政十二年
醫事古言	吉益東洞	一	文化十年
病家三不法	杉田玄白	一	文久二年
形影夜話	杉田玄白	二	—
民間備荒錄	建部清庵	二	文久七年
韞匱錄	加藤俊丈	一	明和八年
醫案類語	皆川淇園	五	安永年間
侗谷醫言	平井惟和	一	安永年間
方伎則說	稻葉良仙	一	—
醫學平言	多紀藍溪	一	安永七年
醫家初訓	多紀藍溪	一	天保四年
登壽醫原	奧村隆白	二	安永九年

田中樂美

一

—

江村專齋

二

—

中山三柳

三

慶安五年

吉田元瑞

一

貞享五年

馬場信武

一

元祿十六年

加藤謙齋

一

正德三年

北尾春甫

二

正德三年

石井彰信

二

享保元年

堀元厚

一

享保四年

堀元厚

二

寶歷二年

香月牛山

五

享保十二年

香月牛山

三

享保十八年

香月牛山

五

元文二年

伊東好禮

一

寬保二年

管道伯

一

延享五年

堀正修

一

寬延二年

山脇東洋

一

寬延四年

草野益翁

四

寶歷二年

望月三英

五

寶歷三年

松下見林

一

寶歷九年

松岡玄達

一

寶歷年間

松岡玄達

一

文政八年

山本貞惇

一

文政七年

中村玄春

一

明和四年

吉益東洞

三

寬政十二年

吉益東洞

四

文化十年

吉益東洞

一

文久二年

杉田玄白

一

—

杉田玄白

二

文久七年

建部清庵

二

明和八年

加藤俊丈

一

安永年間

皆川淇園

五

安永年間

平井惟和

一

安永年間

稻葉良仙

一

—

多紀藍溪

一

安永七年

多紀藍溪

一

天保四年

奧村隆白

二

安永九年

醫事問答	岐山藤文	一	天明三年
屈氏家言	杉浦德俊	一	天明三年
溫故堂醫譚	田中愿伸	一	天明六年
醫學早合點	源春泉	二	天明七年
方鏡	南部宗壽	一	寬政年間
論藪	五島文敏	一	寬政七年
醫學院學範	畑惟和	五	寬政十年
松蔭醫談	長岡宗宅	一	寬政十一年
金雞醫談	畑道雲	一	寬政十一年
黃鐘錄	山崎克	二	享和元年
青囊瑣探	片倉鶴陵	二	享和二年
藤氏醫談	近藤明隆	二	享和三年
醫法新話	南木龍江	二	享和三年
敗鼓錄	山田正珍	一	——
桑韓筆語	山田正珍	一	——
新論	山田正珍	一	——
行餘爲文	竹田公欽	三	——
三英隨筆	望月三英	一	——
轉翁醫譚	服部元甫	一	——
東門隨筆	山脇東門	一	——
原珍館七則解	村井琴山	一	——
醫林蒙求	樋口季成	三	文化元年
天鑑堂醫策	野山千秋	二	文化元年
和蘭醫話	萬町琴坂	二	文化二年
芳翁醫談	福島芳翁	一	——
救弊醫話	赤澤容齋	四	文化二年
北窻瑣談	橘南蹊	七	文化二年
耄筵小牘	小野蘭山	一	文化五年
漫遊雜記	永富獨嘯庵	二	文化六年
新撰醫言	上田悅安	二	文化六年
處陰雜志	飯野退藏	一	文化六年
蘭學逕	藤林淳道	一	文化七年
賜民藥方	阿部正興	一	文化八年
耆宿茗話	多紀桂山	一	——
醫臚	多紀桂山	四	——
櫟窻抄錄	多紀桂山	一	——
病名纂	多紀桂山	二	——
櫟窻類抄	多紀桂山	一	——

櫟蔭文集	多紀桂山	二	――
聿修館漫抄	多紀桂山	一	――
醫林撮要	多紀元胤	一	――
柳汧文集	多紀元胤	一	――
柳汧日錄	多紀元胤	一	――
屏巷隨鈔	多紀元胤	二	――
香泉日鈔	多紀元胤	一	――
心跡雙清堂隨鈔	多紀元胤	四	――
伊香山日鈔	多紀元胤	一	――
柳汧日鈔	多紀元胤	三	――
醫事談	田中信藏	一	――
瘳俊餘筆	奇須玄盅	一	――
續醫家奇賞	奈須玄盅	五	――
玄盅漫筆	奈須玄盅	一	――
欣以隨筆	奈須玄盅	一	――
良山先生手簡	栗山俊齋	一	安永七年
醫弊說	水戶景山	一	――
師談錄	土生玄碩	一	――
洛醫彙講	山本仲直	一	文政元年
醫言靈	森川宗圓	一	文政五年
醫門闢觀	關口子道	一	文政八年
醫範	吉益南涯	一	文政八年
神視錄	鵜澤貞眠	一	文政九年
三世醫譚	和田元庸	二	文政九年
爲己執記	羽佐間芝瓢	一	文政九年
醫源	石坂宗哲	一	文政九年
竿齋先生問答	石坂宗哲	一	――
橘黃錄	喜多村子溫	一	――
務細醫話	喜多村子溫	一	――
槐園漫錄	喜多村子溫	一	――
多疾彙箋	喜多村直寬	三	文政十一年
醫方淵源考	喜多村直寬	一	――
經方或問	喜多村直寬	一	――
孫真大醫習業講義	喜多村直寬	一	――
三餘醫草	喜多村直寬	一	――
孫真人大醫習業講義	喜多村直寬	一	――
服藥要抄	喜多村直寬	一	嘉永七年
醫噓	喜多村直寬	二	――

嘗鼎一臠	喜多村直寬	一	――
掌記	多紀元侖	一	――
躋壽館學規	多紀元侖	十	――
人事源	服部大方	一	――
養生隨筆	河合元碩	二	文政十年
醫經千文	蘆東山	三	文政十一年
醫談	石井光致	一	文政十三年
憲治烏梟	岡敬安	三	天保二年
醫轍	中川量	二	天保二年
醫俗斷	岡田勇仙	一	天保三年
蕉園漫筆	小島蕉園	一	天保四年
なるべし	屑木菴成	一	天保四年
一意二途論	山内士則	二	天保五年
醫海蠡測	鈴木素行	一	天保五年
杏林內省錄	緒方惟勝	二	天保年間
賣藥餘言	谷元圭	六	天保七年
辛巳初冬漫錄	小川汶庵	三	――
崎館箋臆	小川汶庵	一	――
櫟蔭先生遺說	多紀元堅	一	――
時還讀我書	多紀元堅	一	――
養拙庵漫錄鈔	高柳草庵	一	――
懸囊醫按	高取謙牧	一	嘉永元年
執匙危言	――	一	嘉永元年
癌疫隨筆	最里公濟	一	――
方輿輓	有持常元	二	――
醫戒	杉田成卿	十五	――
東郭先生遺稿	神吉東郭	一	嘉永四年
松齋醫話	天野藏人	二	嘉永五年
醫醫談	大矢貞吉	一	嘉永五年
遼豚漫錄	權藤鈴川	一	嘉永六年
病間漫筆	權藤鈴川	一	――
訥々野稿	權藤鈴川	一	――
醫家奇賞	田澤仲舒	十一	――
昆臺問答策	宇津木昆臺	一	――
三國醫話	劉君風	一	――
橘黃閑記	曾占春	一	――
榛堂雜識	曾槃	二	――
蘭軒醫談	森立之	一	安政年間

遊相醫話	森立之	一	文久四年
桂川醫話	森立之	一	一
枳園叢攷	森立之	三	一
左傳醫事拔鈔	一	一	一
日新錄	小島淇	一	一
醫風私議	江村徹	一	一
鎖間雜話	清川梧陰	二	萬延元年
梧陰雜記	清川梧陰	一	一
菖軒棟記	清川菖軒	一	一
梧陰雜鈔	清川梧陰	二十一	一
切瑳雜識	清川菖軒	一	一
藹墩雜鈔	清川藹墩	三	一
警醫記事	淺田惟常	一	一
牛渚偶談	淺田惟常	一	一
杏林雜話	淺田惟常	一	一
醫事啓源	今村了菴	一	文久二年
井觀醫言	尾臺士超	一	一
醫餘	尾臺士超	三	文久三年
溪南文稿	高橋英濟	一	一
單霄襍話	高橋英濟	一	一
一夕醫話	平野元良	三	慶應二年
二 外科			
金瘡一卷大事秘傳	一	一	一
洛下慶祐外科秘密書	一	一	明曆二年
三國流眞傳外科書	一	一	一
諸膏集要	一	一	寬文三年
外科提要	一	一	一
大要和南外科集	一	一	一
外科啓玄	一	一	一
外科心得	一	三	一
外科良方	一	三	一
外科單方	一	三	一
外科捷徑俗書	古林見宜	五	寬文七年
外科良方	大村壽庵	六	寬文十年
外科秘要	山脇道圓	五	寬文十年
金瘡一卷大事秘傳	大村安成	五	貞享元年
外科俗詮	一	一	一
外科衆方規矩	林道伯	一	一
	神保玄洲	一	貞享二年

瘍科瑣言
金瘡秘話
金創口授
青囊秘錄
瘍科方筌
乳岩治方
畑中痔疾方
解毒奇効方
獠犬療法
狂犬毒治方書
瘍科筌蹄
瘍醫活談
救急摘方
救急摘方續篇
救急撮要方
活物窮理經驗
鹿城醫談
瘍科撮要

三 黴毒科*

華岡隨賢	二	——
華岡隨賢	一	——
華岡隨賢	一	——
華岡隨賢	一	——
華岡隨賢	一	——
華岡隨賢	一	——
——	一	——
原昌克	一	天保九年
佐井立策	一	——
竹中良圃	一	——
中川修亭	二	——
高階桂園	二	——
平野元良	一	安政三年
平野元良	一	安政三年
平野元良	一	安政四年
藤浪萬德	一	——
華岡良平	一	——
鴨池元琳	三	——
橘尙賢	一	明和八年
片倉鶴陵	二	天明六年
永富獨嘯庵	一	天明八年
太田晋庵	三	寛政九年
小石元俊	一	——
和氣惟享	二	享和二年
末延守秋	一	享和三年
村上圖基	一	文化五年
和氣惟享	二	文化五年
和田泰純	一	——
石橋忠菴	一	文化七年
杉田立卿	五	文政四年
大槻磐水	一	——
吉雄耕牛	一	——
和田泰純	一	——
小石元瑞	一	天保三年
佐藤有信	一	天保五年
船越敬祐	三	天保九年
樋山資承	——	——

徽瘡辨惑論

邊兢

一

——

驅梅要方

高良齋

三

天保九年

徽家捷徑

宮本阮甫

——

——

徽瘡茶談

船越敬祐

一

天保十四年

徽瘡秘錄

船越敬助

一

——

疔瘡秘錄

——

一

——

四 女科(産科及婦人科)

中條流産科全書

戸田旭山

一

寛文八年

中條流孕婦精要

——

一

——

中條流産前産後書

——

二

——

濃州乘付流産方

——

——

——

瀬尾流産方

——

——

——

板坂流産前産後秘傳集

板坂大膳助

一

元和二年

半井家産前産後秘書

——

二

——

蝨斯草

稻生正治

一

元祿三年

婦人壽草

香月牛山

一

元祿五年

婦人胎前産後傳

嘉田玄隆

一

寛保元年

婦人療治手箱ノ底

幡玄春

一

延享二年

産事箋

荻友山

一

寶曆十三年

無難産安生論

中岡一得

一

寶曆年間

子女子産論

賀川玄悦

二

明和二年

腹診手術

賀川玄悦

一

——

産科辯論

賀川玄悦

一

——

産前産後腹診手術法

賀川玄悦

一

——

産科治術秘訣

賀川蘭齋

一

——

救偏産言

富士谷成基

一

文化七年

産航

桑原惟親

二

文化十年

産科秘法

蛭田克明

——

文化年間

産術秘法圖譜

蛭田克明

——

——

産科新編

富澤黄良

三

文化十三年

蛭田先生産術訓解

——

一

——

蛭田先生産術圖繪

——

一

——

産科秘要

賀川蘭齋・賀川蘭臺

三

文化年間

達生園産科外術秘録

奥劣齋

一

——

産科内術

奥劣齋

一

——

産術口授

奥劣齋

一

——

劣齋先生産科圖記

奥劣齋

一

——

産科手術秘録

奥劣齋

一

——

回生鉤胞秘訣	奥劣齋	一	文政年間
産論校註	奥劣齋	一	一
女科隨割	奥劣齋	一	一
女科漫筆	奥劣齋	一	一
劣齋漫筆	奥劣齋	一	一
婦人大全良方保座心得	奥劣齋	一	一
安産いはたをび	加藤壽徳	一	明和五年
産育編	山邊文伯	一	明和年間
産前産後竊密集	一	一	一
産論翼	賀川子啓	二	安永四年
産科達生編	濟河拙園	一	安永三年
産科手引草	山田玄々齋	一	安永七年
産科やしな草	佐々井玄敬	一	一
老醫方解婦人門	加藤謙齋	一	一
錦囊婦人醫療秘録	加藤謙齋	二	一
産道口訣	賀川有齋	一	安永年間
有齋先生産道秘書	賀川有齋	一	天明年間
保産道志類邊	兒嶋恭尙	二	天明九年
産科發蒙	片倉元周	四	寛政五年
産術奥義秘書	片倉元周	一	一
母子草	兒島尙善	三	寛政八年
産術秘要	賀川有齋	四	文化年間
有齋産術記	賀川有齋	一	一
産科記聞	賀川蘭齋	五	文化年間
産科議要	賀川蘭齋	三	一
産科捷徑策	板本宗文	一	文政八年
産科辨妄	板本宗文	一	文政九年
産科新論	立野龍貞	三	文政四年
産科指南	大牧周西	二	文政六年
産科瑣言	華岡青洲	一	文政年間
安産みちしるべ	純孝	一	文政十一年
保産機要	加藤壽徳	一	一
産前産後切紙	加藤壽徳	一	一
産科俗訓	住守(失名)	一	一
産伎外書	北總毘天親	一	一
産科撮要	金子杏菴	一	天保二年
産則全書	沼野元昌	一	天保二年
坐婆必研	平野元良	二	天保四年

眼科秘傳書	——	——
清眼流眼科秘傳	——	——
眼目明鑑	——	——
眞島流目藥秘書	——	元祿二年
眼目大全	——	正德二年
麻島流眼目秘傳書	——	享保二年
玉泉流書傳集	——	享保十四年
銀海試要	——	享保十八年
眼科精義	——	安政九年
柚木流眼科	加門隆德	——
大和流家里流眞島大和坊秘書	——	——
東城流眼科	東城維鱗	天明三年
馬島妙眼院眼藥	豐島朗月	天明八年
眼科東雲秘錄	——	——
濟明圖鑑	黑木千之	享和元年
五禽齋方矩	田經德	——
埜客方數	源殷輅	——
三井眼科書	三井元孺	——
清眼流眼科秘傳	——	——
奧山家傳秘書	——	——
眼療秘方口傳	馬島 司馬太郎	文化六年
眼目明辨	衣關順庵	文化七年
眼科秘卷	中村宗安	——
神教流眼目八ヶ條皆傳秘書	古澤元恭	文化十三年
眼科提要	山田大圓	文化十四年
兒玉流目療法	——	——
眼療辨方	馬島圓魏	文化年間
癩祭錄	土生玄碩	——
上科一家言	行德周丈	——
內障治不治辨	——	——
銀海波抄	時岡玄岱	文政三年
日下玉眼一流	朝倉信明	文政三年
穗積流外科	——	——
眼科醫療手引草	藤井見隆	文政六年
眼科選要	樋口子星	文政九年
眼科錦囊	本庄普一	文政十二年
續眼科錦囊	本庄普一	天保八年
眼科專要	——	天保五年

增損清眼錄	馬島圓如	一	天保十年
金篋大成	馬島圓如	一	——
眼科集要折衷大全	馬島圓如	一	——
谷川眼科書	谷川鴻	一	天保年間
眼科一家言	上田公鼎	一	天保年間
撥翳鍼訣	鈴木道順	二	嘉永元年
古今精選眼科方筌	中目樗山	二	嘉永三年
六 小兒科			
小兒療治集	——	一	寬文元年
秘傳小兒方	武田某	一	寬文五年
醫方問餘小兒	名古屋玄醫	一	延寶七年
小兒方鑑	蘆洋	五	貞享三年
幼科秘傳	山科長安	一	貞享年間
保嬰三方	波多野三柳	三	元祿七年
古今幼科摘要	下津壽泉	一	寶永六年
小兒方彙	下津壽泉	一	寶永六年
幼科全書	山田正方	一	寶永年間
小兒活法	松下元眞	一	正德三年
小兒必用記	香月牛山	六	正德四年
孿生抄	遊佐好生	一	享保三年
慈幼密旨	村上良元	三	享保四年
嬰童或問	村上良元	一	——
小兒秘傳書	塙八右衛	一	——
頭書幼科折衷	江村宗純	二	享保十一年
幼科秘錄	豐島清齋	一	明和元年
小兒方	柴田元養	一	明和七年
啞科方書	——	一	安永六年
養嬰瑣言	和田東郭	一	文化年間
老婆心書	羽佐間宗玄	二	文化十三年
小兒戒草	岡了允	一	文政三年
育婆窺斑	岡了允	一	——
啞科筌蹄	中川修亭	一	——
子育巾着	天野松齋	一	天保十二年
子育草	小池貞景	一	弘化四年
保嬰須知	片倉鶴陵	一	嘉永元年
小兒養育金礎	石田鼎貫	一	嘉永四年
活幼心法附說	柴田芸庵	一	嘉永五年
愛育茶譚	桑田和	一	——

七 診科

百腹圖說	曲直瀨道三傳(?)	二	—
五十腹圖說	曲直瀨道三傳(?)	一	—
脈書秘傳	—	一	—
脈論口訣	—	一	—
病因指南	岡本一抱	四	元祿年間
瘟疫考觀舌錄	岡本昌庵	一	—
脈要訓蒙	名古屋玄醫	一	延寶七年
脈要源委	名古屋玄醫	二	延寶七年
察病精論	北尾春甫	三	—
望問則	膝宜保	一	寶歷年間
腹診圖說	後藤良山	一	—
山脇腹診	山脇東洋	一	—
腹診論	荻野元凱	三	—
腹診論並圖	吉益東洞	一	—
東洞腹診傳	吉益東洞	一	—
香川腹診	香川修庵	一	—
診極圖說	瀨丘長圭	二	—
淺井秘書	淺井南溟	一	—
淺井南溟先生秘書	淺井南溟	一	—
淺井腹診口說	淺井南溟	一	—
腹證圖彙	稻葉文禮	一	天明年間
腹證奇覽	稻葉文禮	一	文化六年
腹證奇覽後篇	稻葉文禮	二	享和元年
腹證奇覽翼初篇	和久田叔寅	二	文化六年
腹證奇覽翼二編	和久田叔寅	二	天保四年
舌胎圖說	土田敬之	一	寬政五年
脈學輯要	多紀桂山	二	寬政七年
脈學彙粹	多紀桂山	一	—
脈案提要	畑惟龍	一	寬政七年
腹診錄	畑惟和	一	—
小山田先生診法	正亭伯位	一	—
三部九候傳書	伊藤良助	一	享和三年
診脉精要	兒島冲夫	一	—
腹診精微	兒島冲夫	二	享和年間
腹診集說	—	一	—
脈學和解	福井楓亭	一	—
腹診說	山田圖南	一	—

診法秘奧辨	和氣惟享	一	——
內證診法	和氣正路	一	——
三角腹診	——	一	——
益田腹診	——	一	——
古今腹診論	加藤知義	三	文化三年
腹候論	華龍	一	——
何筆談	中島秉義	二	文化七年
國字腹舌圖解	能條保菴	一	文化十一年
醫療察病考	篠山齡臺	六	文化十一年
脈學精要	蝦惟義	一	文化十一年
脈法	多紀元胤	二	——
持脈輕重法	村弁烜案	一	——
瘟疫診舌	——	一	——
諸家診脈部位	——	一	——
診脈識小	——	一	——
起老園腹診述法	——	一	——
四診備要	細井順	二	文政元年
行藏居腹法	——	一	——
切脈一葦	中莖謙	一	天保二年
舌診要訣	華岡青洲	一	——
疾醫腹證傳	——	一	——
腹診圖考	奧田鳳作	二	天保十四年
腹診秘訣	草軒	一	——
脈診私言	淺田惟常	一	弘化二年
病根精義辨	金古景山	一	弘化三年
診腹要訣	多紀元堅	一	——
診病奇佞	多紀元堅	一	——
腹診錄	和田東郭	二	嘉永三年
腹診秘錄	和田東郭	——	——
含章齋腹診錄	和田東郭	——	——
含章齋腹診論	和田東郭	一	——
診法秉穗	——	一	——
張氏三診法	青木圭治	一	安政二年
脈論	津田淳三	一	——
脈源	大西葆光	三	安政五年
病位辯義	平野元良	三	——
診脈辯義	平野元良	二	——
脈說	石坂宗哲	一	——

八 痘疹科

痘疹百死形狀傳	戴曼公	一	——
大極傳授	戴曼公	一	——
大極傳授異本	戴曼公	一	——
痘瘡唇舌秘訣	戴曼公	二	——
痘瘡論	戴曼公	一	——
痘瘡唇舌圖訣	戴曼公	一	——
唇舌口訣	戴曼公	一	——
痘疹口訣	戴曼公	一	——
治術集	戴曼公	一	——
小兒必用記痘疹	香月牛山	二	正德四年
痘修辨義	堀元厚	一	享保十五年
痘疹要藥方	村上純	一	享保年間
李仁山種痘和解	村上純	一	天明元年
痘疹活人書	中里忠菴	一	寬延三年
醫方問餘痘疹	名古屋玄醫	一	延寶七年
痘疹結要	平岡宗安	一	元文三年
稀痘神方	林魁	一	安永四年
痘瘡水鏡錄	橘南蹊	一	天明元年
痘瘡養育	渡充	一	寬政七年
痘瘡心得草	朱蘭	一	寬政九年
痘瘡醫筌	黑澤松益	一	享和二年
痘瘡問答	村井琴山	一	享和三年
痘疹致要	蘆勝秀	一	文化六年
斷毒論	橋本伯壽	二	文化七年
國字斷毒論	橋本伯壽	二	文化八年
痘瘡夜話	赤松某	一	文化十四年
種痘必順辨	緒方春朔	一	安政五年
種痘證治錄	緒方春朔	一	——
種痘緊轄	緒方春朔	一	——
痘瘡論	原南陽	一	——
痘瘡策	原南陽	一	文政三年
痘疹論	蝦惟義	一	——
國字痘疹戒草	池田瑞仙	三	文化三年
戴曼公痘瘡百死證傳	池田瑞仙	一	——
治痘方函	池田瑞仙	一	——
治痘方	池田瑞仙	一	——
痘瘡唇舌鑑	池田瑞仙	一	——

痘科辨要	池田瑞仙	十	文政四年
痘瘡看病禁戒十六條	池田瑞仙	一	——
痘科鍵刪正補註	池田瑞仙	六	文政十二年
戴曼公治術傳	池田瑞仙	一	——
痘瘡養生訣	池田晋	一	文政八年
續痘科辨要	池田晋	三	文政十年
治痘要訣	池田晋	一	嘉永四年
種痘辨義	池田晋	一	安政五年
古今痘疹類篇大成	池田晋	五十	——
精選痘疹良方	池田晋	一	——
痘疹辨疑金鏡錄纂註	池田晋	五	——
秘法痘疹唇舌試考	池田晋	一	——
痘瘡唇舌圖	池田晋	一	——
治痘要方	池田晋	一	——
痘科輯說	池田晋	一	——
痘疹唇舌秘訣	池田晋	一	——
疱瘡食物考	池田晋	一	天保十一年
痘瘡瘡唇舌圖	池田晋	一	——
治痘口訣	池田晋	二	——
治痘論	池田晋	一	天保十四年
痘鑑	池田瑞英	一	——
痘科舉要	池田瑞英	二	文政七年
痘科方意解	池田瑞英	二	——
護痘要法	池田瑞英	一	——
痘科鍵私衡	池田瑞英	五	文政十年
池田家痘瘡治術口授	池田瑞英	一	——
秘傳痘科唇舌前傳	池田瑞英	一	——
痘疹通	上月專安點	一	——
痘瘡紀聞	齋藤九和	一	——
痘瘡救逆方	三浦恭輔	一	——
疱瘡輕口話	十返舎一九	一	——
痘瘡秘要	——	一	——
痘疹圖象	——	一	——
痘疹年代記	葛飾蘆庵	一	文政七年
痘疹必用	葛飾蘆庵	一	文政七年
治痘極意	進藤坦	一	文政六年
痘科辨要補校	進藤坦	一	文政六年
痘瘡矩	片倉鶴陵	二	——

痘癒紀聞	吉益南涯	一	――
護痘錦囊	石塚汶上	二	――
護痘錦囊須知	石塚汶上	――	文政七年
痘短	石塚汶上	二	――
護痘須知	石塚汶上	一	――
長沙痘書初編	岸田憲	一	――
活幼心法附記	柴田芸庵	一	天保八年
內科秘錄痘疹	本間玄調	一	嘉永五年
麻疹氣候錄	藤拙叟	一	文久元年
麻疹一哈	大倉勝雲	一	安永三年
麻疹療治指南	長澤壽庵	一	安永七年
麻疹良方	吉田元隆	一	寛政八年
麻疹考	屋代弘賢	一	寛政八年
麻疹備考	久世松庵	一	――
麻疹探囊方	片山子成	一	寛政九年
麻疹方訣	長島養三	一	寛政十年
麻疹便覽	藩師寺正長	一	寛政十一年
麻疹撮要	土田恕庵	一	寛政十二年
麻疹方彙	石田立齋	一	寛政十二年
麻疹辨證	岡村養拙	一	享和三年
麻疹例草	佐々木茂庵	一	享和三年
麻疹抄方	多紀桂山	一	享和三年
麻疹纂類	多紀桂山	一	享和三年
麻疹輯要方	多紀桂山	一	享和三年
麻疹三書	多紀桂山	二	――
掌中麻疹方	石塚上尹	一	文政七年
麻疹提綱	竹田公欽	一	文政七年
麻疹精要國字解	佐々井茂庵	一	文政七年
麻疹要方	池田晋	一	――
麻疹略說	村井琴山	一	享和三年
百遍舍麻疹卑說	塙主齡	二	――
麻疹養生記	――	一	――
麻疹摘要	――	一	――
豆麻原由考	――	一	――
麻疹心得	――	一	――
九 鍼灸科			
療治之大概	杉山和一	一	――
三要集	杉山和一	一	――

節要集	杉山和一	一	—
鍼灸樞要	山本玄通	十	寬文十年
啓廸庵日用灸法	岡本玄治	一	—
鍼法一軸	福田道折	一	延寶七年
大明塚周鍼法鈔	—	二	—
蹴道秘訣集	—	二	—
銅人輸穴圖	岡本一抱	一	元祿六年
鍼治樞要	矢野白成	一	元祿九年
醫學至要鈔	—	一	元祿十二年
阿是要穴	岡本一抱	五	元祿十六年
鍼灸要用記	高松敬節	三	寶永七年
經穴密語集	岡本一抱	一	正德五年
灸炳要覽	堀元厚	一	享保九年
經穴古今省略	堀元厚	一	—
隧輸通攷	堀元厚	六	—
必用灸穴秘訣	名古屋玄醫	一	—
鍼法要集	原長起	一	—
鍼科發揮	柳川靖泉	一	—
輸穴辨解	村上宗占	二	寬保二年
骨度正誤圖說	村上宗占	一	延享二年
經絡發明	菊池玄藏	一	寶曆三年
穴名備考	竹田景淳	一	寶曆六年
難經古義	膝萬卿	二	寶曆年間
香川灸點	香川修庵	一	—
鍼學發蒙訓	養陽子	一	—
灸炳鹽土傳	三宅意安	二	—
腧穴折衷	安井元越	二	明和元年
鍼灸則	管沼周主	一	明和四年
鍼灸手引草	—	一	安永二年
非十四經辨	廣瀨白鱗	二	安永七年
挨穴集說	山崎宗運	一	天明八年
愈穴便覽	鈴木文彊	一	寬政二年
經驗要穴	高田玄達	一	寬政三年
愈穴捷徑	小坂元祐	一	寬政五年
腧穴圖鑑	鈴木文疆	一	寬政年間
鍼灸便覽	鈴木文疆	一	寬政十一年
挨穴資蒙	井岡冽	二	—
經穴指掌	高田玄達	二	文化年間

俞穴捷徑	小坂元祐	一	文化七年
經穴示蒙	西村玄周	一	文化八年
鍼灸說約	石阪宗哲	一	文化九年
十四經全圖	小坂元祐	一	文化年間
名家灸選	和氣推享	一	文化十年
鍼灸廣狹神俱集	雲棲子	一	文政二年
骨度正穴考圖	岡田子成	二	文政五年
針灸知要	石阪宗哲	一	文政年間
鍼灸知要一言	石阪宗哲	一	文政九年
針治十二ヶ條提要	石阪宗哲	一	文政九年
灸古義	石阪宗哲	一	——
穴名搜捷	藍川愼	二	——
刺鍼家鑑	吉田意休	一	嘉永六年
鍼灸指掌	今村了菴	一	元治元年
鍼術秘要	中村謙作	三	慶應元年
鍼刺秘錄	高英章	一	——
上池正傳鍼刺秘錄	高英章	一	——
黃帝八十一難經輯釋備考	清川藹墩	三	——
揆穴集說	多紀桂山	一	——
校訂引經訣	木村修道	二	——
四花膏盲圖說	春鶴堂主人	一	——
揆穴秘書	洛橋	一	——
灸治要穴記	——	二	——
鍼灸藥方雙決	——	一	——
灸法要穴	——	一	——
揆穴圖說	——	一	——
長生灸治論傳記卷	——	一	——
揆穴寸法	小原春造	二	——
銅人經略圖	——	一	——
鍼灸秘錄	——	一	——
經愈玉淵鈔	——	一	——
銅人圖	——	一	——
一〇 按摩科			
導引體要	林正且	一	慶安元年
導引體要附錄	喜多村利且	二	正德三年
古今養性錄導引編	竹中敬	一	元祿五年
古今導引集	宮脇仲策	一	寶永四年
導引口訣鈔	宮脇仲策	二	寶永年間

按摩獨稽古	一愚子	一	寬政五年
導引秘傳指南鈔	一愚子	一	寬政五年
按腹傳	內海辰之進	一	寬政十一年
獨按摩	——	一	——
按摩手引	藤林良伯	一	寬政十二年
按腹圖解	太田晋齋	一	文政十年
一一 口中科			
口中之療治金安流	——	一	萬治三年
口中藥方	——	一	——
口中咽喉書	——	一	——
口中療治大成	——	一	元祿八年
武當流口中秘書	——	一	——
今井口科書	——	一	——
口科集要	中川某	一	——
口科秘傳	津田長安	一	——
一二 藥物科			
煮藥指南	久保田仙菴	六	寬永年間
藥性記辨	——	三	元祿十二年
一本堂藥選	香川修德	三	享保年間
非藥選	戶田旭山	三	元文三年
用藥須知	松岡玄達	八	寶曆九年
藥徵	吉益東洞	三	明和八年
妙藥手引草	衢富芳	一	天明三年
藥徵續編	村井琴山	三	寬政年間
類聚方議	村井琴山	六	——
藥性提要	多紀桂山	一	文化年間
藥名便覽	——	一	——
藥治通義	多紀元堅	四	天保年間
訂補藥性提要	多紀元堅	一	天保年間
古今方彙圖字解	加藤謙齋	一	文化五年
藥種名寄集前編	——	一	嘉永三年
藥雅	多紀元胤	一	安政三年
妙藥妙術集	吉田威德	一	安政三年
氣血水藥徵	吉益南涯	一	——
藥徵百問	吉益南涯	一	——
藥徵考	吉益南涯	一	——
藥徵本功	吉益南涯	一	——
藥方口訣	華岡青洲	一	——

藥籠修治摘要

神岡亭藥方小言

四子藥性論

一三 養生科

延壽養生論

勅撰養生錄

修養編

壽養叢書

養生月覽

歌養生

養生主論

古今養性錄

通仙延壽心法

本朝食鑑

貝原養生訓

願生輯要

福壽太平記

酒說養生論

養生俗解集

長命養生訓

養生囊

民家養生訓

延壽類要

秘傳衛生論

養生談

養生錄

養生隨筆

養生辨

養生一言草

養生訣

知幾約言

玉の卯槌

衛生攬要

一四 醫史

歷代名醫傳略

寬永醫家系圖

本朝醫考

見宜翁醫案

——

——

——

曲直瀨玄朔

山脇道作

野間三竹

久保元叔

曲直瀨玄朔

中山仙菴

名古屋玄醫

竹中敬

——

平野必大

貝原篤信

竹田定直

大且種尙

守部正穰

松尾道益

香月牛山

小川顯道

小川顯道

竹田公豐

井子承

谷了閑

和氣惟享

河合元碩

水野義尙

八隅景山

平野元良

平野元良

平野元良

松本元泰

吉田意安

——

黒川道祐

松下見林

一

一

一

一

四

一

四

一

一

一

十五

一

十二

四

五

一

七

三

四

二

二

二

二

一

三

三

三

二

一

二

二

六

二

八

三

一

——

——

——

萬治三年

正保五年

寬文二年

寬文九年

寬文十三年

延寶六年

天和三年

元祿五年

元祿八年

元祿十年

正德三年

——

享保十四年

享保十四年

享保十六年

——

安永二年

——

寬政五年

寬政七年

享和元年

文化十四年

文政十年

天保十二年

天保二年

天保六年

安政元年

——

——

慶長二年

寬永年間

寬文三年

天和元年

醫仙圖讚	疋田慮安	一	貞享三年
明醫小史	望月三英	一	享保九年
扁倉傳割解	淺井南溟	二	明和七年
寬政醫家系圖	——	——	寬政年間
鳳鷄紀事	新見正路	一	——
豹斑錄	奈須恒德	一	享和元年
本朝醫談	奈須恒德	一	文政十二年
本朝醫談二篇	奈須恒德	一	文政十三年
扁鵲傳正解	中莖謙	二	文政六年
海內醫林傳	山木善美	一	文政十一年
扁鵲傳解	石阪宗哲	一	天保三年
日本醫譜	宇津木昆臺	七十	天保年間
皇國醫林傳	畑惟龍	一	——
醫家藩翰譜	——	三	——
醫業家譜	——	六	——
醫官進退	——	六	——
張仲景考	平由篤胤	一	——
直醫歷名	——	一	——
皇朝醫史	賀島近信	三	——
本朝醫蹟	山科元幹	十	——
扁鵲倉公傳彙考	多紀桂山	一	嘉永三年
國史醫言鈔	吉田憲德	四	嘉永五年
皇國醫系	萬年純	一	文久元年
歷世尙藥略傳	安藝道恕	一	慶應三年
本邦醫家古籍考	中川修亭	一	文化十二年
醫籍考	多紀柳泚	六十	——
聿修堂醫書目錄	多紀柳泚	二	——
本朝醫書目錄	衣關順庵	一	——
皇朝醫書目錄	——	一	——
(乙) 和醫方			
採用國傳方	森共之	二	元祿十年
灸炳鹽土傳	三宅意安	二	寶曆八年
延壽和方彙函	三宅意安	二	寶曆年間
和藥傳秘書	森川宗圓	一	天明三年
醫言靈	森川宗圓	一	文政五年
神國醫道復古之引	衣關內膳	一	文政三年
神方奇靈傳	太田長丸	三	——
神方奇靈傳藥名本草	太田長丸	五	——

病家全要	太田長丸	一	一
治方要集	太田長丸	一	一
日本古代醫方	松川鶴麿	二	一
奇魂	佐藤方定	二	天保二年
備急八藥新論	佐藤方定	三	天保十四年
標註本朝食鑑	佐藤方定	十一	一
幸魂	佐藤方定	五	一
術魂	佐藤方定	二	一
神方經驗	佐藤方定	一	一
醫語拾遺	佐藤方定	一	一
產靈草	佐藤方定	一	一
神傳派論	佐藤方定	一	一
神傳腹證論	佐藤方定	一	一
醫方正傳	花野井有年	二	嘉永五年
經驗大同類聚方	花野井有年	一	一
疫瘡新論	中島廣足	一	一
藥品解	中島廣足	一	一
病名解	中島廣足	一	一
神方經驗	岩田廣彥	一	一
神遺方講義	一	一	一
神遺方傍註	關政方	一	一
古醫遺治則	權田直助	一	一
醫一言	權田直助	一	一
醫道百首	權田直助	一	一
古醫方藥能略	權田直助	一	一
古醫道或問	權田直助	二	一
神遺方經驗鈔	權田直助	十	一
(丙) 西洋醫方			
一 解剖科*			
臟腑經絡詳解	岡本一抱	六	元祿三年
內景圖說	服部範忠	一	享保七年
醫學三臟辨	井原道闊	一	一
臟志	山脇尙德	二	寶曆九年
非臟志	佐野安貞	一	寶曆十年
臟覽	半井・山室二氏	一	一
解屍編	河口信任	一	明和九年
解剖圖	宮崎或	一	寬政八年
解屍運刀法	宮川春暉	一	一

解體瑣言	柚木太淳	六	寬政十一年
解體發蒙	三谷公器	五	文化十年
體雅	丹波元胤	一	——
解體鍼要	加古良玄	一	文政二年
骨譜	堀内素堂	一	文政七年
生象修要	芳正久	三	文政十年
骨經及人身惣名	石阪宗哲	一	文政十一年
導窺私錄	小出薇山	三	天保七年
導窺私錄補	小出薇山	二	天保七年
內景備覽	石阪宗哲	二	天保十一年
臟腑和名攷	森立之	一	安政六年
醫經撥亂	穗積惟正	二	——
臟腑變化傍通訣	——	一	——
肺字考	神林弼	一	——
醫則發揮	河津省菴	二	——
三焦辨	——	一	——
骨度要覽	小幡玄二	一	——
解屍圖說	加古巖	一	——
解體新書	杉田玄白	四	安永三年
身幹正的	大槻磬水	一	——
木骨附說	星野良悅	一	寬政年間
剖散撮要	桂川甫賢	一	——
解剖圖	賀川晋	一	——
婦人內景之略圖	各務文獻	一	寬政十二年
解剖圖	小石元俊	一	寬政年間
醫範提綱	宇田川榛齋	三	文化二年
生象約言	野呂天然	一	文化十年
生象止觀	野呂天然	十二	文化十二年
重訂解體新書	大槻磬水	十三	文化九年
西說內景略圖	岡澤高晴	一	文政十三年
解剖圖譜	小石元瑞	二	——
解剖刀法	小森愚堂	一	——
把兒翁湮解剖圖譜	齋藤方策	一	——
解臟圖譜	池田冬藏	一	嘉永二年
解體則	新宮涼庭	八	安政五年
骨骼各論	緒方洪哉	一	慶應四年
人事原	服部星溪	二	文政十年

二 生理科*

人事原外篇

服部星溪

—

—

醫學淵源

池田冬藏

三

—

醫則發揮

河津省庵

二

天保十年

醫源樞要

高野長英

五

天保三年

人身究理

廣瀨元恭

四

—

知生論

廣瀨元恭

二

安政三年

布連吉人身窮理

杉田錦腸

十

—

生理眞源

藤林普山

一

—

生理則

新宮涼庭

一

—

元理發蒙

小森愚堂

—

—

人身究理小解

緒方洪庵

二

—

生理發蒙

島村鼎甫

十四

慶應二年

三 病理科

病學通論

緒方洪庵

三

弘化四年

扶歇蘭度病理論

石川元翠

—

—

病理論

坪井誠軒

十五

—

公斯貌律屈病理書

長柄春龍

—

—

四 診斷科

病理眞源

藤林普山

—

—

因液發備

吉雄耕牛

二

文化十二年

五液診法

江馬蘭齋

二

文政五年

芳鏡獨見

野呂天然

一

文化十三年

診候大概

坪井誠軒

一

文政七年

察病龜鑑

青木周弼

三

安政四年

扶氏診斷

山本致美

一

安政四年

西醫脈鑑

廣瀨元恭

三

安政四年

察病法

中條文仲

一

—

診脈圖說

江馬元弘

一

—

察病則

新宮涼庭

一

—

脈論

津田淳三

一

安政五年

脈論

江馬聖欽

二

—

五 內科

蘭方書

吉雄耕牛

一

—

西說內科撰要

宇田川槐園

十五

寬政五年

增補重訂內科撰要

宇田川榛齋

十八

文政五年

泰西熱病論

吉田長淑

七

—

內外解環

吉田長淑

十五

—

泰西熱病集譯

江馬蘭齋

—

—

蘭療方	廣川獬	一	享和三年
公私貌爾觚內科書	青池芳澁	十八	——
西洋醫事集成寶函治病部 疥書	橋本宗吉	十五	——
壬午天行病說	小石元瑞	一	——
酷烈辨	佐々木仲澤	一	文政五年
蘭方樞機	桂川甫賢	一	文政五年
西洋內科集成	小森玄良	五	——
泰西疫論二篇(腐敗疫熱)	小關篤齋	三	文政七年
泰西疫論(神經疫部)	新宮涼庭	二	文政七年
驅豎齋方府	新宮涼庭	二	弘化四年
灌腸則	新宮涼庭	——	——
內科則	新宮涼庭	——	——
痢論	新宮涼庭	——	——
療治瑣言	新宮涼庭	四	——
粘敗療談	村上養潤	二	文政九年
粘敗療談續編	村上養潤	一	——
病因精義	小森桃塙	十	文政十年
內病論	坪井誠軒	十	——
萬病治準	坪井誠軒	十五	——
醫方研幾	足立長雋	三	天保二年
醫方研幾方劑篇	足立長雋	二	天保三年
西醫原病略	小關篤齋	一	天保三年
醫療正始	伊東玄朴	二十四	天保六年
泰西名醫彙講	箕作阮甫	三	天保七年
公斯貌律屈內科書	高良齋	——	——
蒲朗葛膠質內科書	——	——	——
西醫今日方	藤林普山	六	弘化四年
和蘭內外要方	吉雄南阜	十二	——
袖珍內外方叢	青木周弼	三	——
濟生備考	杉田成卿	二	嘉永三年
濟生三方	杉田成卿	三	文久元年
袖珍內外方叢	緒方洪庵	三	——
公刺實治療書	緒方郁藏	——	——
虎狼痢治準	締方洪庵	一	安政四年
コレラ病論	新宮涼民	二	安政五年
番沙新說(一名虎狼痢治要)	大村寬	一	安政七年
療治口訣補遺	江馬藤渠	二	——
	大村達吉		

療治口訣	江馬藤渠	三	—
室速篤内科書	江馬榴園	七	—
内外方府	江馬榴園	三	—
泰西熱病論改譯	小森愚堂	—	—
急々病治則	中條文仲	—	—
袖珍内外方叢	岡海藏	三	—
新疫論	關延陵	—	—
醫療正義	石川元翠	六	—
錦囊醫療規矩	滕元良	—	—
療法私說	坂本皆山	—	—
模斯治療書	—	—	—
帝田内科書	—	六	—
侃斯達篤内科書	坪井信良	—	—
公氏醫宗玉海	兒玉順藏	三	萬延元年
醫療新書	坪井芳洲	二	慶應二年
内外新法	緒方郁藏	三	慶應二年

六 外科

萬外集要	—	—	元和五年
南蠻外科	石井分右衛門	二	—
捷徑外療集	—	—	元和七年
南蠻流藥方秘傳	板橋玄古	一	寛永十年
南蠻流外科書	南蠻忠庵	三	—
金創仕掛	栗崎道喜	—	—
紅毛外科	—	—	—
栗崎流金創秘訣	栗崎正羽	一	享保六年
栗崎流金創口傳書	—	—	—
金創師語錄	栗崎正弘	一	享保六年
外科集成	栗崎正弘	四十七	—
金瘡跌撲療治	西玄哲	一	享保二十年
阿蘭陀外科正傳	河口良菴	二	元文元年
阿蘭陀外療集	河口良菴	四	延享三年
カスパル傳方	河口良菴	一	延享三年
アルマンス傳方	河口良菴	一	延享三年
三明一致集	吉田自休	三	—
カスパル傳	—	—	—
村山氏外科傳書	—	—	—
紅毛秘事記	吉雄耕牛	一	—
阿蘭陀瘍科之書	吉雄耕牛	一	—

紅毛流膏藥方	吉雄耕牛	一	——
紅毛外科草正效能	——	一	——
檜林經驗錄	檜林岨山	一	——
阿蘭陀流油集解	——	一	——
外科撮要	青木絅嗣	二	明和五年
外科訓蒙圖彙	伊良子光顯	二	明和六年
ステイビン傳外科書	——	一	——
栗崎外科	井上道英	一	明和八年
瘍科秘訣	——	一	——
南蠻流瘍醫書	——	一	——
外科はさみ	大槻磬水	一	寬政九年
和蘭瘍科大成	杉田立卿	一	文化五年
海上備要方	桂川甫周	二	文化六年
和蘭外療秘法	大垣柳仙	一	文化七年
外科收功	大槻玄幹	三	文化十一年
繕生室醫話	桂川甫筑	三	——
瘍科精選圖解	越村德基	二	文政二年
瘍醫新書刺絡篇	大槻磬水	三	文政五年
栗崎一流外科秘書	穎川道庸	一	文政五年
和蘭外科要方	關口胤	二	天保元年
外科新編	杉田立卿	四十四	——
瘍科新選	杉田立卿	五	天保三年
瘍醫方範	杉田伯元	十	天保三年
手術纂要	杉田立卿	一	天保三年
石川流膏藥方	——	一	——
瘍科手術大成	杉田成卿	一	——
外科必讀	箕作阮甫	十	——
瘍科新選	宮木阮甫	——	——
窮理外科則	新宮涼庭	——	——
銃創瑣言	大槻俊齋	二十	——
亞的兒吸入法試驗說	坪井信良	一	嘉永七年
外科醫法	佐藤尙中	一	文久三年
斯篤魯默兒疱疹論	佐藤尙中	二十四	慶應元年
創痍新說	島村鼎甫	二	慶應元年
祇布斯繃帶書	柏原學而	一	慶應二年
士官必携外療一斑	近藤誠一郎	一	慶應三年
切斷要法	田代基德	一	慶應四年

七 整骨科

整骨要訣	吉原元棟	一	—
正骨範	二宮彦可	二	文化五年
整骨新書	各務文獻	三	文化七年
整骨圖	—	一	—
整骨法略圖	—	一	—
接骨備要	佐藤泰然	一	—
正骨便要	大町宗司	一	—

八 眼科

泰西眼科全書	宇田川榛齋	—	—
眼科新書	杉田立卿	五	文化十二年
眼科新書附錄	松田就	一	文化十二年
恨科必讀	高良齋	二	—
銀海發揮	秋吉雲庵	—	—
銀海燃犀錄	箕作院甫	—	—
白內翳方術論	—	一	—
眼科提要	林文節	—	—
重訂眼科必讀	江馬春齡	二	—
眼科新說	越智高崧	三	文久元年
眼醫秘笈	越智高崧	一	—
炎施便爾篤眼科書	越智高崧	一	—
設劉私眼科書	織田貫齋	五	—
刺手私眼科書	—	一	—
模私篤眼科書	佐藤泰然	一	—
眼科真筌	江馬天江	二	文久元年
眼科要略	中川明甫	九	文久三年
窮理眼科則	—	二	—
眼科摘要	倉次元意	九	慶應二年

九 小兒科

泰西小兒科全書	宇田川榛齋	十五	—
小兒則	新宮涼庭	一	—
幼幼精義	堀内素堂	—	—
小兒全書	新宮涼民	六	—
啞科撰要	中條文仲	一	—

一〇 女科(婦人科及產科)

訶倫產科書	青地林宗	三	—
產科簡明	箕作院甫	—	—
女科精選	高良齋	五	—

侃斯達篤內科書種痘編

散花新書

牛痘解蔽

補憾錄

補憾錄二編

引痘喻俗草

引痘心得歌

散花養生訓

種痘辨義

引痘辯疑

半痘辯非

內科秘錄種痘編

蘭客種痘談

一二 藥物學

和蘭藥選

和藥局方

和蘭局方藥譜

和蘭藥鏡

遠西醫方名物考

泰西方草數

西洋醫事集成寶函藥方部

西洋醫事集成寶函製藥部

三法方典

依百乙藥性論

內科選要藥品考

和蘭藥性辨

泰西方鑑

泰西藥名早引

藥性摘要

蘭藥分量考

回生類方

和蘭藥劑譜

蘭藥鏡原

製煉發蒙

遠西二十四方

藥能識

藥品應手錄

藥性論

坪井信良

難波抱節

西村春雄

三宅春齡

三宅春齡

三宅春齡

三宅春齡

池內蓬輔

池田霧溪

遠山子謙

池田直溫

本間玄調

杉亨二

桂川月池

中川淳菴

中川淳菴

宇田川榛齋

宇田川榛齋

橋本宗吉

橋本宗吉

橋本宗吉

橋本宗吉

青地林宗

——

藤林普山

小森桃塢

小森愚堂

小石元瑞

小石元瑞

小石元瑞

野呂天然

吉雄南阜

吉田長淑

坪井誠軒

坪井誠軒

高良齋

高良齋

西脇秀挺

十三

三

一

二

二

一

一

一

一

一

一

一

一

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

——

增補和蘭藥鏡	字田川榕菴	十八	文政十三年
用藥撮要	山崎玄東	三	—
和蘭藥名鍵	松岡文龍	—	—
藥性解	江馬松齋	五	—
和藥醫方纂要	江馬松齋	五	—
和蘭局方	江馬榴園	二	—
藥性提要	江馬榴園	—	—
模氏藥論	江馬榴園	三	慶應三年
内外日用方府製劑編	江馬天江	—	—
處劑則	新宮涼庭	—	—
配合則	新宮涼庭	—	—
和蘭用藥便覽	日高涼臺	三	—
竄篤兒藥性論	林洞海	十八	安政三年
遠西醫方要略	柳田凌雲	二	萬延元年
和蘭藥撰	度會厥印	二	—
七新藥	司馬凌海	二	文久二年
穆氏藥論	江馬榴園	三	慶應三年

(備考) コノ目錄ニ載スルトコロノモノハ主ニ著者所藏ノ目錄ニ據リ、刊行又ハ抄寫、世ニ行ハレタルモノニ係ル。同一ノ内容ニシテ標題ノミヲ異ニスルモノハ、多クハ一方ニ收メテ他ハ之ヲ省ケリ。

書名ノ配列ハ概ネ著述、若クハ刊行年代ニ從ヒシモ、便宜ニ依リテ一處ニ集メ記セルモノアリ。

*符ヲ附スルモノニハ支那・西洋醫方ヲ混淆シタリ。

西洋醫方ノ書(譯書)ニハ抄寫ノ儘ニテ傳ハレルモノ多ク、ソノ著述ノ時代及ビ冊數ヲ詳ニセザルモノ多シ、コレ等ハ皆ナ——線ヲ附シタリ。

參考書籍

- ① 醫學指南編
- ② 皇國名醫傳 長澤道壽傳
- ③ 習醫規格跋文 松下見林
- ④ 醫學授幼鈔
- ⑤ 藏府經絡詳解
- ⑥ 醫教正意
- ⑦ 丹水子
- ⑧ 醫籍考
- ⑨ 外科單方
- ⑩ 醫方問餘外科
- ⑪ 我邦ニ於ケル外科史稿 醫學士關場不二彦著(前ニ出ヅ)

日本外科学史 ドクトル富士川游著（前二出ツ）
日本洋學沿革考 大槻修二著（前二出ツ）

⑫ 徳川時代和蘭通商始末 山縣昌藏著 史學會雜誌第十八號

⑬ カスパル流外科ノカスパルト云フ名ニ就キ 醫學士關場不二彦著 中外醫事新報第四百五十一號

Nachod, Die Beziehungen der niederländischen ostasiatischen Kompagnie zu Japan im 17. Jahrhundert. 1887.
（前二出ツ）

⑭ 阿蘭陀外科指南

⑮ 日本眼科史 醫學士小川劍三郎著 明治三十七年刊

日本眼科略史 ドクトル富士川游著（前二出ツ）

⑯ 日本兒科史 河内全節著（前二出ツ）

⑰ 日本鍼醫史科 河内全節著

⑱ 針灸拔萃大成

⑲ 本朝醫談 奈須柳村著（前二出ツ）

⑳ 傷風約言 後藤省著

救弊醫話 赤澤容齋著

師說筆記 後藤良山著

良山手簡 後藤良山著

一本堂藥選附錄 香川修庵著

㉑ (21) 良山手簡（前二出ツ）

㉒ (22) 一本堂行餘醫言 香川修庵著 救弊醫話（前二出ツ）

㉓ (23) 醫斷 鶴元逸著

醫道二千年眼目篇 村井琴山著

東洞遺稿 吉益東洞著

㉔ (24) 救弊醫話（前二出ツ）

㉕ (25) 醫官玄稿 望月三英著

㉖ (26) 日本產科史 ドクトル佐伯理一郎著（前二出ツ）

M. Ogata, Beitrag zur Geschichte der Geburtshülfe in Japan. 1891. （前二出ツ）

M. Miyake, Ueber die japanische Geburtshülfe. Mittheilungen d. deut. Gesell. f. Natur- u. Völkerkunde Ostasiens. 8. Hef. 1875.

㉗ (27) 制度沿革考 文學博士小中村清矩著

江戸會誌

㉘ (28) 鈴木素行、醫海蠡測卷一ニ云ク『賀川玄悅産論曰、古來論胎孕之狀、以爲娠十月子頭向上、及將生、則轉身而下、頃余又閱紅夷所傳内景圖、亦畫胎孕之形、一同其說、乃知傳謬誣眞、非特漢土也、云々。玄悅此說、蓋以按腹得之、非徒逗議論者比也、而不知漢土・紅夷已有倒首之說、反謂傳謬誣眞、何言之無稽也、宋沈括・夢溪筆談云、凡草木百穀之實皆倒生、首系于幹、其上抵于穎處、反是根、人與鳥獸生胎、亦首皆在下（朝鮮、李退溪・啓蒙傳疑、亦載此說）云々』

㉙ (29) 律 群書類從卷七十五

法曹至要鈔 同前

- 金玉掌中鈔 中原章任撰
- 30(30) 欽定四庫全書撰要子部
- 31(31) 古今腹診論
- 32(32) Osawa, Zur Geschichte der Anatomie in Japan. 1896. (前ニ出ヅ)
- 33(33) 重訂解體新書附錄上
醫海蠡測卷二 鈴木素行著
醫事啓源 今村了庵著
- 34(34) 解體新書ノ原本ノ著者及同書引用書目中ニ載スル所ノ著者ノ略傳 醫藥博士大澤岳太郎著 中外醫事新報、
第三百二十一號以下
- 35(35) 和蘭全軀分合圖 醫學士關場不二彦隨筆 北海醫報
- 36(36) 日本ノ醫事ニ干涉セル西洋醫學ノ事蹟ヲ記ス ドクトル富士川游著 醫談、第五十六號及五十七號
- 37(37) Ritter v. Reichen, Ein Beitrag zur Geschichte der Moxa. Rehlfs Deut. Archiv. II. Bd.
- 38(38) 日本教育史料
- 39(39) 生生堂醫談 中神琴溪著
生生堂雜記 中神琴溪著
- 40(40) 醫學警悟 宇津木昆臺著
- 41(41) 痘科學要 池田瑞英著
痘志 醫學博士吳秀三・ドクトル富士川游共著 明治二十九年刊
- 42(42) 種痘辨義 池田霧溪著
- 43(43) Kure, Geschichte der Psychiatrie in Japan. (前ニ出ヅ)
- 44(44) Fujikawa, Die Massage in Japan. (前ニ出ヅ)
- 45(45) 本邦博物學沿革 伊藤圭介著
日本博物學年表 理學士白井光太郎著
- 46(46) 古醫道沿革 權田直助著 (前ニ出ヅ)
- 47(47) 日本醫籍考解剖科 醫學博士吳秀三・ドクトル富士川游共著 明治二十九年刊
- 48(48) 木骨考 醫學博士吳秀三・ドクトル富士川游共著 明治二十七年刊
- 49(49) 施治學要 田宮尙施著
醫事啓原 今村了庵著 藥治通義 多紀元堅著
- 50(50) 水志 岡田昌春著
水治法考 河内全節著
治療新論 ドクトル緒方正清著 明治二十年刊
- 51(51) 近世醫事沿革 長與專齋著
躋壽館遺事 岡田昌春著 中外醫事新報、明治二十九年刊
幕府醫學館秘要錄
日本教育史料 (前ニ出ヅ)
- 52(52) 疫邪流行年譜 河内全節著
麻疹年譜 河内全節著
虎列刺病検査報告 醫學博士中濱東一郎著 衛生試驗彙報、第六號所載

-
- ① <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00000869>
 - ② DOI: 10.11501/777780
 - ③ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00002935>
 - ④ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00000870>
 - ⑤ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00000298>
 - ⑥ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00000936>
 - ⑦ <https://dcollections.lib.keio.ac.jp/en/koisho/f-ta-27-1>
 - ⑧ DOI: 10.11501/1048822
 - ⑨ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00002254>
 - ⑩ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00001167>
 - ⑪ N/A
 - ⑫ <https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=pst.000066479857&view=1up&seq=462&skin=2021>
 - ⑬ DOI: 10.11501/1498850
 - ⑭ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00001374>
 - ⑮ DOI: 10.11501/836391
 - ⑯ DOI: 10.11501/835491
 - ⑰ DOI: 10.11501/1739247
 - ⑱ https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko31/bunko31_e1531/index.html
 - ⑲ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00000738>
 - ⑳ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00003273>
 - ㉑ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00000578>
 - ㉒ <https://dcollections.lib.keio.ac.jp/en/koisho/f-i-87-1>
 - ㉓ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00000463>
 - ㉔ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb000001955>
 - ㉕ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00000921>
 - ㉖ DOI: 10.11501/836142
 - ㉗ DOI: 10.11501/991341
 - ㉘ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00000842>
 - ㉙ DOI: 10.11501/1879458
 - ㉚ <https://ealuoft.blogspot.com/2010/01/siku-quanshu-skqs-avaiable-now-through.html>
 - ㉛ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb000002501>
 - ㉜ https://archive.org/stream/anatomischeranze15anat/anatomischeranze15anat_djvu.txt
 - ㉝ <https://dcollections.lib.keio.ac.jp/en/koisho/f-ka-14-12>

-
- 34 DOI: 10.11501/1739214
- 35 DOI: 10.11501/1494163
- 36 DOI: 10.11501/1498851
- 37 <https://opac.ku.de/s/uei/de/2/10/BV009627542>
- 38 DOI: 10.11501/1749770
- 39 <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00000290>
- 40 <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00000446>
- 41 <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb000004312>
- 42 <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb000003030>
- 43 <https://archive.org/details/JahrbcherFrPsychiatrieUndNeurolo190323NachrKrafftEbingGeschPsyInJapan>
- 44 <https://archive.org/details/ZentralblattFrDieGrenzgebieteDerMedizinUndChirurgie.V.1.1898/>
- 45 https://doi.org/10.15281/jplantres1887.13.148_202
- 46 <https://dcollections.lib.keio.ac.jp/ja/koisho/f-i-88>
- 47 DOI: 10.11501/833365
- 48 <https://www.shibunkaku.co.jp/publishing/list/9784784215867/>
- 49 http://dbrec.nijl.ac.jp/KTG_B_100243367
- 50 <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb000003624>
- 51 DOI: 10.11501/826051
- 52 DOI: 10.11501/1739661

第九章 明治時代の醫學

慶應三年十月、征夷大將軍徳川慶喜政權ヲ奉還セシカバ、文治元年源頼朝ガ鎌倉ニ霸府ヲ開キシヨリ凡ソ七百年ニシテ、大政始メテ帝室ニ歸シタリ。コレヨリシテ政府ノ施設ハ『知識ヲ世界ニ求メ、大ニ皇基ヲ振起スベシ』トノ聖旨ニ基ツキ、諸般ノ制度皆ナソノ範ヲ西洋ニ採ルニ至リ、從テ西洋ノ文物ハ先ヲ爭フテ輸入セラレ、三千年來支那ノ文化・印度ノ文化ヲ採リテ融和シタル、我が邦固有ノ文化ハ更ニ西洋ノ文化ヲモ吸收シ、コノ期ニハ世界ノアラユル文化ヲ綜合シテ、我が國文化ノ最モ光輝アル時代ヲ作ルニイタレリ。

西洋醫學ノ輸入^①

王政維新ノ始ハ四方騷擾シテ干戈未ダ戢ラザリシガ、政府ハ殊ニ心ヲ學問ニ用ヒ、明治元年六月舊幕府ノ醫學所ヲ收メテ、鎮將府ノ所轄トナシ、別ニ和泉橋通・舊藤堂邸ニ醫學所附屬病院ヲ建テ之ヲ大病院ト稱シ、薩藩ノ徵士前田杏齋ヲシテ之ニ主事タラシメ奥・羽ノ戰役ニ從ヒテ偉功ヲ奏シタル英醫ウイリスヲ聘シテ治療及ビ教育ノ事ヲ任ジ、翌二年五月醫學所ヲ大病院ニ合ハセテ、之ヲ醫學校兼病院ト改稱セリ。

ウイリス William Wills、ハ英國ノ人エヂンバラ大學ヲ卒ヘテ學士ノ稱號ヲ享ケ、文久元年英國公使館ノ醫員トナリテ我が邦ニ來タル、時二年二十五。居ルコト數年、慶應四年戊辰正月、伏見・鳥羽ノ戰爭起リ、薩・長ノ兵會・桑ノ兵ト戰ヒテ創傷ヲ蒙ムルモノ多カリシガ、當時我が邦ノ醫家尙ホ外科ノ實際ニ習熟セズ、英國公使 パークスソノ事ヲ聞キ、ウイリスヲ薦メテ薩藩ノ兵士ヲ治療セシム。ウイリス乃チ京都相國寺・薩藩病院ニ來タリテ兵士ノ創傷ヲ療シテ、功勞甚ダ多シ。尋テ東北ノ戰爭起リ、士卒ノ創傷ニ惱ムモノ多キヲ以テ政府ハ之ヲ救ハムニハ西洋醫家ノ必要ヲ感じ、洋醫某ヲ聘セントセシニ、某ハ月俸千弗ト死後ノ恩給ヲ請求セシヲ以テソノ議已ミシニ、ウイリスハソノ事ヲ聞キ自家學術ノ研究ノ爲メナレバ、俸給ヲ要求セズ、進ンデソノ任ニ當ラントシ、英國公使 パークスソノ間ニ斡旋シ、我が政府ハ喜ンデソノ請ヲ容レ、ウイリスヲシテ官軍ニ從フテ、傷者ノ治療ニ從事セシム。ウイリス乃チ命ヲ奉ジテ越後・高田ヨリ會津・白河ニ至ルマデ數ヶ處ノ戰爭ニ參ジ、上下肢ヲ切斷スルコト十六回ノ多キニ及ビ、コノ時過酸化滿俺水ヲ創傷ニ用ヒ、鐵ノ「スプリント」ヲ骨傷ニ用フル等、大ニ外科術ノ新面目ヲ開キタリ。東北ノ戰爭平ギタル後、ウイリスハ東京大病院ノ長ニ舉ゲラレ、ココニ戰後ノ士卒ヲ療シ、傍ラ市井ノ病者ヲモ治療シ、又講筵ヲ開キテ生徒ヲ薰陶シ、嘔囉仿謨麻醉法・支肢切斷術等ヲ創施シ、我が邦外科ノ實際ノ發達ヲ促ガセシコト大ダ尠カラズ、石黒忠愍・池田謙齋・佐々木東洋、等皆ナソノ門ニ出デテソノ名最モ顯ハル。明治二年大病院ヲ大學ニ隸シ、醫學ノ則ヲ獨逸ニ取ルニ方リ、ウイリスハ大病院ヲ去リ、鹿兒島藩大參事西郷隆盛ノ推薦ニ依リテ鹿兒島ニ聘セラレ、醫學校兼病院ヲソノ地ニ興シ、大ニ醫生ノ教育ニ力ヲ竭セリ。高木兼寛・河村豊洲・三田村肇・加賀美光賢等ノ諸家皆ナソノ門下ノ選ナリ。ウイリス、鹿兒島ニ在ルコト十餘年、一千八百八十一年英國ニ歸リ、後バムコック英國公使館醫員タリシガ、明治二十七年二月病デ歿ス。(小傳)

是ヨリ先キ、徳川幕府ハ勝安房・松本良順、等ノ建議ヲ容レ、海軍病院ヲ東京ニ置キ、兼テ醫學教育ノ所トナサムトノ事ニ決シ、ボードインニ托シテソノ建設方法ヲ調査セシム。是ニ於テボードインハ精得館教授ノ任ヲマンヌフエルドニ譲リ、和蘭ニ歸リ、再ビ我が邦ニ來航スレバ、幕府ハ既ニ瓦解シ、東北ノ戰亂正ニ闌ナルノ時ナリシヲ

以テ上海ニ赴ムキ、戰亂靖定ノ後チ再ビ我が邦ニ來タリ、前政府ノ約束ニ本ヅキ、病院建設及ビ醫學教育ノ履行ヲ迫リシヲ以テ、政府ハ岩佐玄圭（純）・相良弘庵（知安）ガ、嘗テボードインニ學ビシコトアルヲ以テ、兩人ヲ徵シテボードインノ事ヲ處理セシメ、次デ兩人ヲ大學權判事ニ任ジ醫道政正御用掛トナシタリ。是ニ於テ東京大病院ヲ昌平坂大學ニ隸シテ大學東校ト改稱シ、數學・格致學（天文・地理）・化學・動物學・植物學・礦物學ヲ豫科トシ、解剖學・生理學・藥物學・病體解剖・毒物學・病理學・治療學（内科・外科・産科・婦嬰科・眼科・口中科・鍼科・電氣科・梅毒科・軍務醫事・斷訟醫事・古今經驗及攝生法）ヲ本科トシ、フルベツキノ説ニ本ヅキテ、學則ノ範ヲ獨逸ニ採ル事ニ決シ、教師ヲ獨逸國ニ聘スルノ議整ヒ、佐藤尙中ヲ擧ゲテウイリスニ代ラシメ、次デ外國教師トシテボードイン（和蘭）・マツセ（佛國）・シモン（噠馬）ヲ聘シ、一時ヲ糊塗セシガ、明治四年八月ミユルレル・ホフマンノ兩人、我が邦ノ聘ニ應ジテ、獨逸國ヨリ來タリテ教頭トナリ、石黒忠憲・長谷川泰舎長トナリテ學生ヲ監督シ、相良・岩佐ヲ補佐シテ學則改正ノ事ニ任ジ、醫學教育ノ事始メテ緒ニ就キタリ。

長崎ノ精得館ハ徳川幕府ノ瓦解ト共ニ組織ヲ一新シ、時ノ長崎判事井上馨ノ斡旋ニ依リ、頭取長與專齋ハ、教師マンスフエルドト共ニ學則ヲ改メ、生徒ヲ本科豫科ニ別チ、ゲールツヲ聘シテ豫科教師トナシ、之ヲ長崎醫學學校ト稱セシガ、明治三年ニイタリテ之ヲ大學ノ管轄ニ歸シタリ。

明治元年大阪ニ假病院ヲ興シ、ボードイン (Baudin) ヲ長崎ヨリ延キテソノ醫員タラシメ、次デ醫學學校ヲ建テ、岩佐純ヲシテソノ長ニ任ジ、エルメレンスヲ和蘭ヨリ聘シテソノ教師タラシメ、又舎密局ヲ大阪ニ新設シ、ハラタト (K. W. Grutama) ヲ教頭トシ、松本銈・三崎嘯輔等ヲ助教トナシタリ。

コノ如ク、兵馬倥傯ノ際ニモ拘ラズ、我が醫學ハ前期以來ノ緒業ヲ承ケ、西洋醫學ノ輸入ニ力ヲ致シ、明治三年ニハ學生ヲ獨逸國ニ派遣シテ醫學ヲ研究セシムルコトトナリ、同四五年ノ頃ニハ醫科大學ノ基礎モ漸ク整ヒ、西洋醫學ノ行ハルルコトハ甚ダ盛ナリキ。

支那醫方及ビ和方ヲ奉ズルノ一派ハ、コノ間ニアリテ尙ホ西洋醫學ニ拮抗シ、大學ニモ皇・漢醫道御用掛ノ職アリ、今村了庵・尾臺良作・權田直助等之ニ任ゼラレシガ、石黒忠憲等ノ抗議ニ依リ、コレヲ大學東校ニ移シ、次デ別ニ皇・漢醫道ヲ別ツコトハ己ミタリ。

明治四年、大學東校ハ文部省ノ所管トナリ、大學ノ二字ヲ除キテ單ニ東校ト稱シ、同五年新定學區ノ制ニ原ヅキ第一大學區醫學學校ト改稱シ、七年更ニ東京醫學學校トナシ、十年四月東京開成學校ト併セテ東京大學トナシ、東京大學醫學部ト稱シ、明治十九年ニ至リテ帝國大學ヲ設置シ、東京大學醫學部ヲ以テソノ醫科大學トセラレ、以テ今日ニ及ブ。ソノ教師ハ始メハ諸科皆ナ獨逸ヨリ聘セル學士ヲ以テ之ニ任ゼラレシガ、明治十二年始メテソノ卒業生ヲ出ダセシ以來、漸次ソノ優等ナルモノヲ撰ミテ教授ニ任ジ、明治三十五年以降一切ノ教授ハ悉ク内國人ヲ以テ補充スルニイタレリ。

コノ如クニシテ、西洋醫學ノ傳譯ニ孜々タリシ我が醫學ハ明治十二年頃ヨリ漸次獨立研究ヲナスノ地位ニ進ミ、歐洲殊ニ獨逸國ニ學ブモノ年毎ニソノ多キヲ加ヘ、ソノ攻究ノ成績ハ西洋及ビ本邦ニテ發表セラレ、今ヤ我が邦ノ醫學ハ國際ノ列ニ入り歐・米醫學ト比肩シ得ルニ及ベリ。而カモ各科、悉ク緒ニ就ケルニアラズ、且ツ余輩ノ謫劣ヲ以テ、詳カニ之ヲ説カントスルモ、俗諺所謂燈臺下暗ノ譏ヲ免レズ、故ニ今ハ唯醫學各科ノ發展ニ就テソノ大體ヲ叙述スルニ止ム。ソノ歴史的事實ノ梗槩ハ、附録スルトコロノ年表ニ就テ之ヲ見ルベシ。

解剖學

明治ノ初年、江戸ノ醫學所ニハ桐原眞節解剖學教授タリシガ、明治四年ミユルレルノ來朝シテ大學東校ニ教鞭ヲ執リシ時、大學東校少句讀師田口和美解剖所ヲ管理シ、專ラ解剖學ノ研究ニ從事シ、明治六年デーニツツ來朝シテ解剖學專門教授タリシヨリ、解剖學教室ハ稍々整備シ、コノ時ヨリ早く既ニ學術的研究ヲ始メタリ。

デーリッツ (Friedrich Dönitz) ハ伯林ノ人、一千八百六十四年伯林大學ノ業ヲ卒ヘ、解剖學上ノ業績アリ。解剖學「デモンストラチオンスクルズ」ニ從事セシガ一千八百七十三年 (明治六年) 來朝シテ大學東校ノ教師トナリ、專ラ解剖學ヲ教授シ、一千八百七十五年マデソノ職ニアリ、我が邦ニ組織學、及ビ胎生學ノ入りシハデーニツツ氏以來ナリ。(小傳)

明治九年ギールケ (Guirke) 來朝シテデーニツツニ代ハリ、次デ明治十三年ヂツセ (Disse) 來朝シテ解剖學教授トナリシガ、同十四年田口和美、東京大學教授ニ任ゼラレ、爾來斯科ハ外國教師ヲ要セズ、明治十八年、小金井良精、獨逸ヨリ歸朝シテ解剖學教授ニ舉ゲラレ、次デ明治三十年獨逸ヨリ歸朝シタル大澤岳太郎ノ教授ニ任ゼラルルアリ。三氏各ソノ部門ヲ別チテ教授及ビ研究ノ事ニ任ゼリ。明治三十年新設セラレタル、京都醫科大學ニハ鈴木文太郎ヲ舉ゲテ解剖學教授ニ任ジ、次デ新設セラレタル福岡醫科大學ニモ東京醫科大學教授大澤岳太郎ノ一時教授ヲ兼攝スルアリ、我が大學ハ解剖學教室ノ完備セルモノ三個ヲ有スルニイタレリ。

明治二十年以前府縣ニ設ケラレタル醫學校ニ解剖學專門ノ學士ヲ有セシハ僅々二三ニ過ギザリシガ、爾後設立セラレタル文部省管轄及ビ府縣立管轄ノ醫學專門學校ニハ解剖學專攻ノ教師ヲ備ヘザルモノナク、解剖學上ノ著述ニモ田口和美ノ解剖攬要・今田東ノ實用解剖學・奈良坂源一郎ノ解剖全書等ヲ始メトシテ、大小著述ノ内國及ビ外國ノ專門雜誌ヲ以テ報告セラレタルモノ尠カラズ、明治二十六年ニハ既ニ解剖學會興リテ、專門學者互ニソノ業績ヲ批評スルニイタレリ。

生理學

初メ大學東校ニハ島村鼎甫・ボードイン・ミユルレル・ベルツ等ノ諸家アリテ、生理學ヲ講ゼシト雖モ、固ヨリ斯學專門ノ學者ニアラズ。斯學專門ノ學者ニシテ教授タリシハチーゲルヲ以テ始トス。チーゲルハ明治九年ニ來朝シ、明治十六年マデソノ任ニアリ。斯人ニヨリ我が邦ニ始メテ生理學實驗及ビ研究アリ。チーゲル來朝シテ幾モナクコノ教室ヨリ生理學上ノ業績ヲ歐洲ニ報告スルニイタレリ。チーゲル歸國ノ後ハ、多年ソノ助手タリ又獨逸國ニ學ビタル大澤謙ニ教授ニ舉ゲラレ、爾來復タ外國教師ヲ要セザルニイタレリ。

明治八年東京醫學校ニ通學生教場ヲ開キ、邦語ヲ以テ醫學ヲ教授スルノ舉始マリシ後、永松東海舉ゲラレテソノ教授トナリ、ソノ著述スルトコロノ生理學ハ一時大二世ニ行ハレタリ。爾後ヘルマン・ランドア等諸家ノ生理學ノ翻譯セラルルアリ。

醫化學

醫化學ハ明治二十三年東京醫科大學ニ始メテソノ講座ヲ置キ、新ニ獨逸國ヨリ歸朝シタル隈川宗雄ヲ擧ゲテ教授ニ任ジ、明治三十年新設セラレタル京都醫科大學ニハ、嘗テ久シク獨逸國ニ學ビタル荒木寅三郎ヲ擧ゲテ、ソノ醫化學教授ニ任ジタリ。

藥物學

東京大學醫學部ニハランガルド・エイキマン等化學ノ教師、藥劑學ノ教師ヲ兼ネシガ、明治十八年エイキマン歸國セシ後ハ高橋順太郎藥物學教授ニ擧ゲラレ、次デ猪子吉人ソノ助教授ニ任ゼラレ、殊ニ力ヲ和・漢醫藥ノ研究ニ致シ、業績既ニ甚ダ多カリシガ、不幸ソノ業緒ニ就カズシテ歿ス。後チ森島庫太・林春雄等コノ教室ヨリ出デ、更ニ獨逸國ニ學ビ、斯學ニ貢獻スルトコロ尠カラズ。森島ハ明治三十年京都醫科大學ノ藥物學教授ニ擧ゲラレタリ。藥物學教科書ニシテ廣ク行ハレシモノニハ、初メニ櫻村清徳ノ新纂藥物學アリ、次デ鈴木太孝之助ノ詳約藥物學アリ、ソノ他フリーゼマン・ブツハイム、等諸家ノ著述ヲ翻譯セルモノ相踵デ世ニ行ハレタリ。

病理學

コノ期ノ初メ大阪醫學校ニハエルメレンスアリ。ソノ原病學通論（明治七年刊）ハ當時ニ行ハレ、東京大學醫學部ニテハ、三宅秀病理學ノ教授トシテ通學生（後別課醫學生ト稱ス）ニ病理學ヲ授ケ、病理總論及ビ病體剖觀示要ヲ著ハシテ之レヲ公行スルアリ。同時田代基徳ノ病體解剖社ヲ創立シ、病瑠解剖ノ必要ヲ唱道スルアリ。病理學及ビ病理解剖學ニ關スル醫家ノ知識ハ之レニ依リテ大ニ進歩セリ。

東京醫科大學ニテハ明治十八年ノ頃、解剖學教師タリシヂツセ病理學ノ教師トナリテソノ本科生ニ教授セシガ、明治二十一年三浦守治、獨逸國ヨリ歸リテ教授ニ任ゼラルルニ及ビテ始メテ病理學ノ講座ハ獨立ノモノトナリ、次テ明治二十八年山極勝三郎ノ病理學教授ニ擧ゲラルルニ及ビテ病理學教室ハ大ニ備ハレリ。而シテコノ教室ヨリ出デタル佐多愛彦・桂田富士郎ハ後チ共ニ獨逸國ニ學ビ、佐多ハ大阪醫學校ニ教鞭ヲ執リ、桂田ハ岡山醫學專門學校ニ教授トナレリ。

京都醫科大學ニハ明治三十四年、新ニ病理學講座ヲ置キ獨逸國ヨリ歸レル藤浪鑑ヲ擧ゲテ病理學教授トナシ、斯科ノ教導及ビ研究ノ任ニ當ラシメタリ。

内科

明治ノ初年、大學東校ニ外國教師トシテ、内科ヲ講ゼシハ獨逸人ホフマンヲ以テ嚆矢トス。

ホフマン (Theodor Eduard Hoffmann) ハ獨逸國ノ人、プレスラウ及ビ伯林「フリドリヒ・ウイルヘルム・インスチツ

ト」ニ學ビ、殊ニトウラペニ親炙シテ内科ヲ修メ、後チソノ助手タリ。一千八百七十一年ミュレルト共ニ我が邦ニ來タリ、大學東校ノ教師タリ。本邦ニアリテ著ハストコロ日本脚氣論・日本醫家等數部アリ、我が邦ニアリテ穿胸術及ビ肋骨切除術ヲ施セシハ、實ニホフマンヨリ始マルト言フ。(近世名醫傳)

ホフマンニ次ギテ來朝シ、之ニ代ハリテ内科教師タリシハウエルニヒナリ。

ウエルニヒ (Albrecht Ludwig Wernich) ハ獨逸國ノ人、ケーニヒスベルグ大學ニ學ビ、卒業ノ後、伯林ニ來タリ、ソノ大學産科婦人科ノ講師ニ擧ゲラレシガ、一千八百七十四年聘ニ應ジテ我が邦ニ來タリ、内科及ビ婦人科ヲ講ゼリ。ソノ我が邦ニアリテ著ハストコロニ脚氣説等アリ、一千八百七十七年國ニ歸リテ再ビ伯林大學ノ内科講師トナレリ。(醫家辭典)

明治十年ウエルニヒソノ職ヲ辭シテ國ニ歸ルヤ、之ニ代ハリテ來朝シテ、東京大學ニ内科教師タリシハ、ベルツナリ。

ベルツ (Erwin Baelz) ハ一千八百四十五年獨逸ストットガルトニ生マル。一千八百七十二年ライプチツヒニテ「ドクトル」トナリ、内科教授ウンデルリヒノ助手トナル。居ルコト三年、一千八百七十五年(明治十年)聘セラレテ我が邦ニ來タリ、始メ生理學ヲ教授セシガ、幾モナクウエルニヒノ後ヲ承ケテ内科兼婦人科教授トナリ、ソノ後婦人科教授ヲ罷メタレドモ、尙内科教授タルコト、明治三十三年ニ及ベリ。(十九世紀名醫辭典)

ベルツノ來朝ニ後ルルコト二年、同ジクライプチツヒ大學内科助手タリシシヨイベモ亦聘ニ應ジテ來タリ、京都療病院ノ教師トナリ、東西相應ジテ生徒ノ教導ト學術ノ研究トニ力ヲ致シ、我が邦特有ノ疾病ガ、コノ兩人ノ研究ニ依リテ闡發セラレタルトコロ尠カラズ。

シヨイベ (Heinrich Botho Scheube) 一千八百五十三年獨逸ツアイツニ生マル。一千八百七十六年ライプチツヒ大學ニテ「ドクトル」トナリ、内科教授ウンデルリヒノ助手トナル。居ルコト一年、我が京都療病院ノ聘ニ應ジテ來朝シ、一千八百八十一年マデソノ職ニ在リ。一千八百八十三年ソノ國ニ歸リテライプチツヒ大學内科講師ニ擧ゲラレシガ、八十五年ソノ職ヲ辭シテグライツ區醫トナル。(十九世紀名醫辭典)

明治十七年佐々木政吉ノ獨逸國ヨリ歸朝スルヤ、東京大學醫學部教授ニ擢デラレテ内科學ヲ擔任シ、次デ明治二十年獨逸國ヨリ歸朝セル青山胤通ノ新ニ東京大學内科教授ニ擧ゲラルルアリテ、内科學ハ三個ノ講座ヲ有スルニ至リ、獨立研究ノ地歩ニ進ミタリ。明治二十八年佐々木政吉教授ノ職ヲ辭シテ民間ニ下ルニ際シ、獨・佛兩國ニテ殊ニ神經病學ヲ專攻セル三浦謹之助醫科大學教授ニ擧ゲラレ、次デ明治三十三年ベルツノソノ職ヲ罷ムルヤ、入澤達吉擢デラレテ内科教授トナリ、我が醫科大學ハココニ至リテ復タ一人ノ外國教師ヲ有セザルニイタレリ。

外科

外科ハ維新ノ始、英國醫家ウイリスアリテ、東北ノ戰爭ニソノ手腕ヲ揮ヒ、亂平グノ後、醫學所及ビ大學東校ニ教師トナリ、講授ニ、施術ニ、啓蒙ノ功多カリシガ、明治四年獨逸人ミュレルノホフマント共ニ我が大學東校ニ

來タルヤ、ミユルレルハ病院ニアリテ外科病者ノ診察ヲ擔任シ、始メテ彼ノエスマルヒ驅血法・氣管切開術・義布ス繃帶等ヲ施用スル等、我が邦外科ノ面目ヲ一新セシメタルコト尠カラズ。

ミユルレル (Miller) 獨逸國陸軍一等軍醫正タリ、明治四年四月、我が政府ノ聘ニ應ジテ東京ニ來タリ、大學東校學頭ノ職ニ就キ、新ニ學科課程ヲ制定シ、自カラ教鞭ヲ取りテ解剖・生理ノ諸科ヨリソノ専門タル外科ニ至ルマデヲ講述シ、大ニ力ヲ醫學教育ノ整備ニ盡シ後、侍醫局ニ兼勤シ宮中ノ醫務ニ參畫スルトコロアリシガ、期滿チテ國ニ歸リ、伯林癩兵病院長ニ任ゼラレ、一千八百九十三年 (明治二十六年) 病ンデ歿ス。(小傳)

ミユルレルニ次ギテシュルツ (Schulz) アリ、シュルツニ次ギテスクリーバ (Scriba) アリ。スクリーバハ明治十四年、我が邦ニ來リテヨリ明治三十四年マデ大學外科教師ノ職ニアリ、ベルツト共ニ我が邦醫學ノ開發ニ最モ功績アリ。

同時東京府病院ニ英國醫家マンニング (Manning) アリ、明治八年ヨリ明治十三年マデ、我が邦ニ居リ外科ノ進捗ニ力ヲ盡スコト尠カラズ。

明治八年東京大學醫學部ニアリテハ、獨逸國ヨリ歸朝セル橋本綱常ヲ舉ゲ、足立寛・桐原眞節ト共ニソノ通學生ニ外科ヲ講述セシメ、次デ獨逸國ヨリ歸朝セル佐藤進及ビミユルレル・シュルツ等ニ親炙セル宇野朗ヲ舉ゲ、專ラ外科ノ教授ニ任ゼシメタリ。

明治二十年、佐藤三吉ノ獨逸國ヨリ歸ルヤ、東京醫科大學教授ニ舉ゲラレ、スクリーバト共ニ外科學ノ講座ヲ擔任セシガ、明治三十年宇野朗ノソノ職ヲ辭スルニ方リ、獨逸國ニ學ビタル近藤次繁擢デラレテ外科教授トナリ、スクリーバ辭職ノ後ハ佐藤 (第二講座擔任)・近藤 (第一講座擔任) ノ二人、外科教授タリ。

京都醫科大學ニハ、ソノ創立ノ始メヨリ外科學講座ヲ置キ、猪子止戈之助・伊藤隼三ソノ教授ニ舉ゲラレ、福岡醫科大學ニモ創立ノ始ヨリ外科學講座アリテ大森治豊ソノ主任タリ。

眼科^④

維新ノ始、蘭醫ボードイン再ビ來朝シテ大阪醫學校教師トナリ、ソノ眼科ニ精シキヲ以テ從遊ノ士、ソノ術ヲ傳ヘテ眼科ニ名アルモノ多シ。次デ四年ミユルレル來朝シテ大學東校ノ教頭トナルヤ、外科ニ兼テ眼科ヲ講ジ、爾來シュルツ・スクリーバ等外科ノ教師ハ皆ナ眼科ノ教授ヲ兼ネ、須田哲造・井上達也等、ソノ助手トナリ、眼科ヲ以テ名ヲ成セルモノナリ。

明治十六年ニ至リ、梅錦之亟ノ獨逸國ヨリ歸ルニ及ビ、眼科専門ノ教授トナリ、翌年眼科教室ヲ設クルニ至リシガ、同十八年ソノ病歿スルニ遇ヒ、外科教師スクリーバ再ビ眼科教授ヲ兼ネタリ。明治二十二年河本重次郎、獨逸國ヨリ歸リテ眼科教授ニ任ゼラレ、眼科學教室ノ整備ヲ圖リ、漸ク今日ノ盛況ヲ呈スルニイタレリ。

明治十七年ニハ、既ニ眼科専門會ノ設立アリテ眼科ヲ研究シ、井上達也ノ如キハ獨・佛兩文ノ年報ヲ刊行シ、ソノ實驗ヲ外國ノ學者ニ披露スルニ及ビシガ、二十六年大西克知、岡山ニアリテ同志ト共ニ眼科雜誌ヲ刊行シ、次デ三十年日本眼科學會成立シ、會議ヲ開キ、雜誌ヲ刊行スルニ及ビテ、眼科ノ面目ハ漸ク一變シタリ。

婦人科及産科^⑤

明治ノ初年、杉田玄端ノ産科寶函（明治六年）ヲ著述セルニ次ギテ、高橋正純ノ日講記聞産科論（エルメレンス講述）・小林義直ノ産科摘要等アリ。西洋産科ノ書ノ翻譯セラレタルモノ尠カラズ。ボードインノ再ビ來朝スルヤ、途次、英國ノスペンセル・ウエルスニ學ビ、ソノ卵巢截除器ヲ齎ラシ、大阪醫學校ニソノ講筵ヲ開キタリト言ヘドモ、婦人科専門家ノ外國ヨリ來タリシハウエルニヒヲ以テ嚆矢トス（傳ハ内科ノ條下ニ出ヅ）。ウエルニヒハ伯林大學婦人科・産科ノ講師タリシ人ニシテ、明治七年ホフマンノ後任トシテ我が邦ニ來タルヤ、内科ニ兼ネテ婦人科・産科ノ講筵ヲ擔當シタリ。次デベルツ來朝シテ（明治九年）ウエルニヒニ代ハリ、内科ニ兼ネテ婦人科・産科ノ講筵ヲ擔當セシガ、コノ間、櫻井郁二郎ノ通學生ニ婦人科・産科ヲ教授スルアリ、山崎元脩ノ婦人病論ヲ著ハセルアリ（明治十二年）、米國トーマスノ書モ譯述セラレテ婦人科・産科ノ學術ハ漸ク進歩セシガ、明治十六年清水郁太郎、獨逸國ヨリ歸リテ、婦人科・産科ノ教授ニ任ゼラルルヤ、別ニ婦人科教室ヲ設ケ、産室ヲ備ヘ、學說ノ外ニ臨床講義ヲモ開キ、斯科ノ面目一新シタリ。幾モナク清水病歿シ、ベルツ又兼テソノ講座ヲ擔當シ、明治二十一年濱田玄達ノ獨逸國ヨリ歸リテ、ソノ講座ヲ擔當シ、婦人科・産科教室ハ始メテ整備スルニイタレリ。

小兒科^⑥

明治九年長谷川泰、スタインネルノ小兒科學ヲ譯述シ、次デ明治十七年瀨川昌耆、小兒病各論ヲ著ハシ、小兒科ノ學術ハ漸ク進歩セシガ、明治二十一年東京醫科大學ニ小兒科ヲ置キ、獨逸國ニ小兒科ヲ修メテ歸朝セル弘田長ヲ擧ゲテソノ教授ニ任ジタルヨリ、ソノ學益々盛トナリ、我が邦小兒ノ疾病ニ就キテ研究シタルモノ尠カラズ。次デ各高等中學校醫學部ニ小兒科アリ。明治二十八年福岡縣病院ニ小兒科ヲ置キテヨリ、府縣病院ニシテ小兒科ヲ内科ヨリ分離セルモノ尠カラズ。コノ年十二月小兒科研究會成リ、兒科雜誌ノ刊行アルニイタレリ。

耳鼻咽喉科

明治九年柏原學而、米醫グロツスノ耳科書ヲ譯シ、之ヲ耳科約説ト題シテ世ニ行ヒシニ次ギテ吉田顯三ノ耳科約説（明治十七年刊）アリ、長町耕平ノ耳科約説（明治十九年）アリ、飯高芳康ノ耳科攬要（明治二十二年）アリト雖モ、西洋諸家ノ所説ヲ傳譯セルニ過ギズ。明治二十五年金杉英五郎、獨逸ヨリ歸リ、耳鼻咽喉科ヲ唱道シ、耳科學及鼻科學ヲ著ハス。我が邦ニ斯ノ専門科アルコトココニ始マル。次デ賀古鶴所ノ耳科新書アリ、金杉英五郎等ガ耳鼻咽喉科會ヲ興シテ専門雜誌ヲ刊行スルアリ。明治三十三年岡田和一郎、獨逸國ヨリ歸リテ、東京醫科大學教授ニ擧ゲラルルニ及ビテ、我が醫科大學ニ始メテ耳鼻咽喉科アリ、耳鼻咽喉科ハコレヨリ益々發達シタリ。

皮膚病科及黴毒科

皮膚病科ニテハ明治七年高橋正純ガエルメレンスニ代ハリ、大阪醫學校ニ皮膚病學ヲ講ジ、ソノ日講紀聞、皮膚

病論（明治七年刊）ヲ刊行スルアリ。明治八年ニハ米國醫士嘉約翰ノ皮膚新論ノ翻譯セラルルアリ、次デローレツ等ノ日講記聞アリ。黴毒科ニテウイリスノ梅毒新論（明治五年）・櫻井郁二郎ノ治梅毒新說（明治十年）アリ。東京醫學校ニテハミユルレル・シュルツ・スクリーバ等外科教師、外科學ノ一部分トシテ該科ノ講筵ヲ開キ、明治八年通學生教場ヲ開カルルヤ、花岡眞節、次デ宇野朗、皮膚病黴毒科ノ講義ヲ擔當シタリ。而カモ皮膚病黴毒學ヲ專門トシテ攻究スルニ至リシハ、明治二十一年村田謙太郎ガ官命ヲ奉ジテ獨逸國ニ留學セルニ始マル。明治二十三年村田謙太郎ノ獨逸ヨリ歸ルヤ醫科大學ニ皮膚病黴毒科ヲ開始シ、村田謙太郎ヲ舉ゲテソノ講師トナス。ココニ於テ我が大學始メテ斯科專門ノ教授アリ。幾モナク村田謙太郎病ミテ歿スルニ遇ヒ、外科教授宇野朗代ハリテ該科主任ヲ兼ネシガ、明治三十一年土肥慶藏ノ久シク獨・澳兩國ニ學ビテ歸朝シ、東京醫科大學教授ニ舉ゲラレ、皮膚病教室ノ主任ヲ命ゼラルルニ及ビ、勉メテ教室ノ整備ヲ圖リ、専ラ學生ノ教導ト學術ノ研究トニ力ヲ致シ、明治三十四年皮膚科學會ヲ興シ、皮膚科及泌尿器科雜誌ヲ刊行シ、海外ノ專門學者ト相通信スルニ及ベリ。

衛生學

衛生學ノ創始ハ、西洋ニアリテモ近時ノコトニシテ、ソノ始祖タルベツテンコーフェルガミュンヘン大學ニ衛生學講座ヲ設ケタルハ、一千八百六十六年（我が慶應二年）ナリ、爾他ノ獨逸大學ニ於テハコノ時尚ホ未ダ衛生學講座ハ設ケラレズ、ソノ伯林ニ衛生學教授ヲ備フルニ至リシハ、一千八百八十五年（我が明治十八年）ナリ。我が邦ニアリテハ、コノ期ノ始メニ柴田承桂ノ衛生概論（明治十二年）アリ。次デ渡邊定等ノ衛生攬要アリ、東京大學ニテハ生理學教授チーゲル衛生學ノ教授ヲ兼ネ、ソノ講本タル衛生汎論（大井玄洞譯）ハ明治十三年版ニ上ボリ、大ニ當時ニ行ハレ、別課醫學生ノ衛生學教授ハ、助教片山國嘉・古川榮等之ヲ擔任シ、衛生學ノ知識ハ漸ク普及シタリ、而カモ我が大學ニ衛生學教授アリテ專門ニ斯學ノ研究及ビ發達ニ力ヲ致スコトハ、明治十七年緒方正規ガベツテンコーフェルノ學ヲ傳ヘテ獨逸國ヨリ歸朝シ、衛生學教室主任トナリシコノ時ニ始マル。

次デ陸軍ニ森林太郎・小池正直等アリ、衛生局ニ中濱東一郎アリ、共ニ獨逸國ニ赴キテ衛生學ヲ專攻シ、斯學ノ挽推ニ力ヲ盡セリ。

明治三十年、森林太郎・小池正直ガ衛生新論二卷ヲ著ハスニ及ビテ、始メテ我が邦學士ノ手ニ成レル衛生學書アリ、爾後諸家ノ著述尠カラズ。

明治三十年、京都大學ノ創立セラルルヤ、ソノ醫科大學ハ先ヅ衛生學講座ヲ設ケ多年東京醫科大學衛生學教室ニアリ、後チ獨逸國ニ赴ムキテ斯學ヲ專攻シタル坪井次郎ヲ舉ゲテ、ソノ教授ヲ擔任セシメタリ。

黴菌學

輒近黴菌學ハコッホヲ以テ始祖トシ、特殊ノ染色及ビ培養法ニ依リテ脾脫疽菌ヲ發見シ（一千八百七十六年）タルニソノ端ヲ發シ、次デ創傷感染原因論（一千八百七十八年）ヲ著ハシ、又幾モナク結核菌ヲ發見シ（一千八百八十二年）タルニ依リテ黴菌學ノ價值ハ認メラルルニ至リタリ。我が邦ニアリテハ明治十七年古川榮ガコッホノ創傷感染原因論ヲ譯述スルアリ、緒方正規ガ伯林ニ於テコッホニ親炙シ黴菌學ヲ修メテ歸朝セルアリ、我が邦ココニ始メテ黴菌學アリ。

次デ明治二十五年ニ至リ、多年コッホノ門下ニ在リテ斯學ヲ專攻シタル北里柴三郎ノ歸朝スルアリ、大日本私立

衛生會ハ傳染病研究所ヲ芝・愛宕下ニ建テテ北里ヲソノ長トナシ、生徒ヲ集メテ黴菌學研究ノ方法ヲ講習セシムルコトトナシ、又黴菌學雜誌ヲ刊行シテヨリ欺學ハ勃然トシテ興リ、後チ政府之ヲ收メテ國立ノ傳染病研究所トナシ、血清藥院ヲ置キ、共ニ北里ヲシテ主幹タラシメシヨリ、醫科大學ト相拮抗シテ斯學ノ進歩ニ貢獻スルトコロ尠カラズ。民間ニアリテハ遠山椿吉ノ東京顯微鏡院ヲ興シテ主ニ黴菌學ノ講習ヲ勉ムルアリ、黴菌學ハ漸ク發達スルニイタレリ。

精神病科

明治九年神戸文哉、英國醫家貌德斯禮ノ書ヲ譯シテ精神病約説ト題シテ世ニ行ヒ、明治十四年三宅秀ノ病理各論中ニモ精神病ヲ説キタレドモ、固ヨリ精神病ノ大要ヲ説キタルニ止マレリ。明治十九年ニ至リ始メテ東京醫科大學ニ精神病學教室ヲ設ケラレ、獨逸國ヨリ歸朝セル榊俣教授ニ任ゼラレテソノ主任トナリ、又コレヨリ先キニ興レル東京府巢鴨病院(長谷川泰・中井常次郎等相嗣ギテソノ長タリ)ノ長ヲ兼ね病理解剖説ヲ陳ベテ研究ノ方法ヲ示シ、不羈束系統ヲ採リテ治療ノ方式ヲ釐革シ、精神病學ハコレニ依リテ我が邦ニ興レリ、明治三十年榊俣病歿スルヤ助教授吳秀三代リテソノ講座ヲ擔任シ精神病學集要ヲ著ハシテ、斯學ノ開發ニ貢獻スルトコロアリ。翌年吳ガ官命ヲ奉ジテ獨・澳兩國ニ赴ムクニ方リ、片山國嘉精神病學教授ヲ兼ねシガ、三十四年吳秀三歸朝シ、直ニ擧ゲラレテ精神病學教授トナリ、東京府巢鴨病院長ヲ兼ね精神病學教室ヲ整備シ、病院ノ制度ヲ革新シ、榊ニ依リテ興サレタル我が邦ノ精神病學ハ、斯人ニ依リテ大ニ恢弘セラレタリ。

法醫學

檢屍ノ法ハ古ヨリ之ヲ講究スルモノアリシト雖モ、斷訟醫學若クハ裁判醫學ト稱スル學科ノ與リシハ、明治十年以後ニシテ、東京大學醫學部ノ教師チーゲルノ國政醫論(谷口謙譯)ニ斷訟醫學アリ、次デ、東京大學醫學部ノ解剖學及ビ病理解剖學教師タリシデーニツツガ警視醫學校ニ聘セラレテ斷訟醫學ヲ講ジ、ソノ講本、斷訟醫學(明治十五年)ノ翻譯シテ梓行セラルルアリ、次デ片山國嘉・江口襄・榊俣共著ノ裁判醫學提綱アリ、丹波敬三ノ裁判化學アリ、ソノ他諸家ノ著述モ尠カラズ。斯學ノ進歩亦著シカリシガ、明治二十一年片山國嘉獨逸國ヨリ歸リテ大學教授ニ擧ゲラルルヤ、首唱シテ裁判醫學ノ名稱ヲ法醫學ト改メ、法醫學教室ヲ創設シ、檢屍法ノ改良ヲ圖リ、次デ國家醫學科ヲ醫科大學ニ設置シ、以テ國家醫學ノ普及ヲ圖ル等、ソノ意ヲ斯科ノ關係ニ用ヒ、遂ニ今日ノ盛況ニ達セリ。

軍陣醫學(軍隊衛生・軍陣外科)

軍隊衛生ノ一科ノ學問トナリシハ、西洋ニテハ十八世紀以降ニシテ、英國ニテハ一千八百六十年エヂンバラ大學ニ始メテ軍陣外科ノ講座ヲ設ケ、次デ一千八百五十四年ネットレーニ軍醫學校ヲ設ケ、獨逸國ニテハ一千七百九十五年伯林ニ軍醫學校ノ創立アリ。澳大利ニテハ一千七百八十四年始メテ軍醫學校ヲ立テタリ。而カモ軍隊衛生ノ發達ニ多大ノ影響ヲ及ボセシハ、一千八百六十三年(我が文久三年)ゲンフ萬國赤十字條約ニシテ、各國ニ於ケル軍隊

衛生ノ改良ハ之レヨリ始マレリ。

我が邦ニアリテハ維新ノ戰役ニ軍事病院ノ設アリ、英國醫ウイリスノ軍隊醫官トシテ從軍スルアリシモ固ヨリ軍隊衛生ノ法ハ備ハラズ。明治二年政府ハ始メテ蘭醫ボードインヲ聘シテ軍醫ノ教育ヲ託シ、次デブーケマ・ホフマンノ兩氏代リテ、軍醫ノ教育ニ任ゼシモ軍醫特科ニアラザリキ。明治四年兵部省ニ軍醫寮ヲ置キ松本順・林紀・石川良信・石黒忠憲等ヲ擧ゲテソノ事ニ從ハシメシヨリ、我が邦始メテ軍隊衛生制度アリ。明治十年西南戰役ニ際シテハ軍醫監、林紀軍團軍醫部長トシテ戰地ニ赴キ、軍團病院及ビ大小繃帶所ヲ設ケ、別ニ大阪ニ臨時病院ヲ設ケ、石黒忠憲・佐藤進等ヲシテ之ヲ監理セシメ、我が軍陣醫事始メテ法則アリ。

明治十九年、當時ノ陸軍省醫務局長橋本綱常ハ軍醫學舍設置ノ議ヲ建テ、ソノ議納レラレテ陸軍省内ノ一宇ヲ校舎ニ充テ、六月始業ノ式ヲ擧グ、コレ陸軍々醫學校ノ濫觴ナリ。森林太郎・小池正直・菊地常三郎・谷口謙・西郷吉義等ヲ擧ゲテソノ教官トシ、内科・外科・病理・眼科・衛生學・黴菌學等ノ諸科ヲ講究セシム。明治二十五年ニハ陸軍軍醫學校業府ヲ刊行スルニ至リ、別ニ軍醫學會アリテ互ニ業績ヲ批評討議シ、機關タル軍醫學會雜誌ハ定時刊行セラレテ、我が軍隊醫學ハ益々發達シタリ、而シテソノ創業ヨリコノ時ニ至ルマデ、終始一貫、主トシテ規畫ノ任ニ當リシハ石黒忠憲ニシテ、ソノ功績ハ没却スベカラズ。明治二十七八年戰役及ビ北清事件ニ於テ我が軍隊衛生制度ノ完備、歐・米先進諸國ヲ凌駕スルコトハ、世人ノ認ムルトコロトナレリ。

海軍ニテモ明治六年、英國醫家アンデルソンヲ聘シテ生徒ヲ教育セシメ、次デ吉田顯三・高木兼寛・實吉安純・戸塚環海・鈴木重道等英國ニ學ビテ歸朝セルモノヲ擧ゲテ教官トナシ、後ニ至リテ海軍軍醫學校ヲ創立シ、以テ海軍衛生ヲ講究セシメ、明治十八年食料ノ改正ト共ニ衛生ノ方法モ善ク實施セラレタリ。

齒科

口科ノ専門ハ古ヨリ既ニ之アリシガ、西洋齒科ノ我が國ニ入りシハ、コノ期ノ始メニシテ明治八年小幡英之助、横濱ニ居留セル米國齒科醫イリオットニ學ビ、齒科専門ヲ以テ東京ニ業ヲ開キタルヲ以テ斯科ノ嚆矢トスベシ。之ニ次ギテ高山紀齋・渡邊良齋・伊澤道盛ノ諸家アリ。斯科ニ關スル著述ニハ高山紀齋ノ保齒新論（明治十四年）ヲ始トシ、明治十八年河田鱗也・大月龜太郎ガ米國カールトソンノ齒科書ヲ翻譯シ、齒科全書ト題シテ梓行セルアリ、高山紀齋ノ齒科藥物摘要（明治十九年）・伊澤信平ノ齒科問答（明治二十年）小林義直ノ齒科提要（明治二十二年）・渡邊良齋ノ齒科學（明治二十三年）等相踵テ行ハレタリ。而シテ斯科ノ發達ヲ助長セシハ、高山紀齋ガ設立セル高山齒科醫學院ニシテ、齒科ノ學校教育ハ之ニヨリテソノ端緒ヲ得タリ。コレヨリ後チ伊澤信平ノ齒科攻究彙報アリ、富安晋ノ齒學研鑽アリ、血脇守之助ノ齒科學報アリ、日本齒科醫會及ビ齒科醫學會ノ設立アリ、東京醫科大學ニ齒科外來診察所ヲ設クルアリ、齒科ハ漸ク隆盛ノ域ニ達セリ。

參考書籍

① 近世醫事沿革 長與專齋著

松香私志 長與專齋著

一夕談 石黒忠憲著 中外醫事新報明治二十七年刊行

噬臍錄 松本順著 中外醫事新報明治二十九年刊行

文部省第一年報

衛生局年報

帝國大學一覽

東京醫事新誌

醫事新聞

中外醫事新報

齒科學報

醫談

- ② マルピギー祭典席上演説 醫學博士田口和美著 中外醫事新報第二二九號以下
Osawa, Zur Geschichte der Anatomie in Japan, 1896. (前ニ出ヅ)
- ③ 本邦ニ於ケル生理學發達ノ梗槩 醫學博士大澤謙二著 醫談第二十八號
- ④ 日本眼科小史 醫學士小川劍三郎著 (前ニ出ヅ)
- ⑤ 日本女科史 ドクトル佐伯理一郎著 (前ニ出ヅ)
- ⑥ 日本兒科史 河内全節著 (前ニ出ヅ)

-
- ① DOI: 10.11501/826051
 - ② DOI: 10.11501/1739104
 - ③ DOI: 10.11501/1498804
 - ④ DOI: 10.11501/836391
 - ⑤ DOI: 10.11501/836142
 - ⑥ DOI: 10.11501/835491

第十章 疾病史

疾病ノ歴史ヲ攻究スルコトハ、醫史學ノ要旨トスルトコロニシテ、之ヲ歷史的病理學(Die historische Pathologie)ト名ヅク。然レドモコノ書ノ如キ、簡約ヲ旨トスル小冊子中ニ、歷史的病理學ノ系統的記述ヲ爲サムコトハ、到底不可能ノ事ニ屬スルヲ以テ、以下、當サニ主要ノ疾病ニ就キ、極メテ簡短ニ、ソノ醫史學的攻究ノ次第ヲ略記スルニ止メムトス。

第一 傳染病

沿門鬪境、衆人病ムコト一般ナル、猶ホ徭役ノ役ノゴトクナルヲ疫病(疫病)ト名ヅク。ソノ字義ハ希臘語ノエ・ピデミー(Epidemie)ニ符合シ、コレヲ直譯スレバ國民病(獨逸語ノ Volkskrankheit)ナリ。而シテ、コノ疫病ヲ起スモノハ四時不正ノ氣、即チ虛邪・賊風ニシテ、ソノ人身體内ニ入ルハ鼻・口及ビ毛竅等ヨリスト説ク。コレ支那醫學ニアリテ、上古ヨリ近世ニ至ルマデ行ハレタル説ニシテ、コノ意義ヨリ云ヘバ、疫病ハ今日謂フトコロノ傳染病ニ外ナラズ(第二十三頁參照)。

獨リ虛邪・賊風ノ體内ニ入ルニ依リテノミナラズ、病者ニ觸接シテソノ病ヲ傳染スルノ事實ハ、古代ノ醫家モ之ヲ認め、我が邦ニアリテハ令義解ニ、癩病ノ傍人ニ傳染スルコトヲ説キ、又痘瘡病者ヲ山中ニ別居セシメタル例アリ。然レドモ疾病ノ傳染ニ就キテ、學問的攻究ヲ企テシハ近世ノ事ニシテ香月牛山ガ國字醫叢(元文二年刊行)ニ『痘瘡ハ後漢ヨリ始マリ、楊梅瘡ハ近世廣東ヨリ傳染ス、如是ノ類、古ト今ト異ナリ、又古ニ無クシテ今新ニ生ズル病多シ、又病ニ依リテ傳染スル類多シ、凡ソ時行溫疫ノ病ノ如キ、此レ時ノ邪氣人ヲ傷ブルヲ以テ、男女老少ヲ問ハズ、推シナベ病ヲ受ケテ傳染ス、又勞咳、骨蒸ノ病、コレヲ傳屍病ト云テ血脈ノ人ニ傳注シ、又ハ傍人ニモ傳染シテ門ヲ滅スルニ至ルアリ』ト言ヒ、又ソノ傳染ノ法ヲ説キテ『傳染スル病、多クハ熱勢アリテ臭氣アルノ病ナリ、鬱熱蒸氣ノ病ノ如キハ其病者ニ病臭アリ、其氣他人ノ鼻ニ入り、其氣ニ觸胃セラレテ傳染ス、ココヲ以テ溫熱疫癘風瘡ノ類ノ大熱臭氣ノ病必ズ傳染ス、勞咳蒸熱ノ病モ亦其臭氣ヨリ傳染ス、又痘疹・楊梅瘡・疥癬・溫瘡ノ類ノ病熱臭氣アリ、瘡汁アル病ハ觸胃スレバ必ズ傳染ス』ト言フガ如キハ、當時醫家ノ信奉シタル學說ニシテ、香川修庵ノ如キハ『痢疾、有ニ傳染者』、蓋由下同厠共禱、則其臭穢之氣、外觸而襲レ之、自ニ鼻口ニ入、染ニ于胃腸ニ、内外感注上、遂同患耳、不ニ唯此疾、如ニ勞瘵痘瘡、亦然、皆其熱臭惡穢之氣、内外侵染而感注焉、何疑之有』(一本堂行餘醫言、卷二十二)ト説キ、熱臭惡穢之氣ノ内外侵染ニ依リテ疾病ヲ傳染スルモノトセリ。

然ルニ文化年間ニ至リ、橋本伯壽出デテ疾病ノ傳染ニ就キテ攻究シ、說ヲナシテ日ク『疾雖ニ萬狀ニ其本ニ二也、日内因、日外因、所謂外因者、傷寒・痘・麻・「疔」之類、是也、内因者、「疔」之類、疥之類、癩・狂・癩・勞極之屬、是也、云々外因中、若ニ傷寒ニ、無形之邪、時行ニ于冥々之中、不レ可レ視、不レ可レ察、若ニ痘・麻・「疔」之類、有形之毒、可レ視、可レ察、是以雖ニ常人ニ、易レ避矣、何者觸レ之則疾、不レ觸則不レ疾焉』(斷毒論、卷上)ト論ジ、『疾病ノ傳染ニ無形ノ邪ニ由ルモノト、有形ノ毒ニ由ルモノトノ二類アリ、而シテ其陰陽沴氣ノ毒タル先ヅ其土ニアリテ而シテ人ニ體シ、以テ四方ニ傳流スルモノ』トナス。之ヲ從來ノ說ニ比スレバ、傳染病ノ本性ヲ窮ムルコト明カ

ナリト言フベシ。

以下、傳染病ノ各種ニ就キテ簡短ニソノ醫史學の要件ヲ叙述セムトス。

腸窒扶斯^①

支那ニアリテ唐以上ノ醫書ニ傷寒ト言フハ、中風・傷寒・濕溫・熱病・溫病ヲ包括セル熱病ノ總稱ナリ。故ニ傷寒ト稱スル病症ヲ以テ直チニ之ヲ今日ノ腸窒扶斯ニ一致セルモノトナスコト能ハズ。而カモ古ノ所謂、傷寒ノ中ニ流行性ノ熱病、即チ瘟疫ヲモ混淆シタルコトハ素問ニ『熱病者傷寒之類也』ト言ヒ、小品方ニ『傷寒、雅士之辭、天行瘟疫、是田舍間號耳』ト言フニテモ推知セラルベシ(第二六頁、第六二六頁參照)。又張仲景ガ謂フトコロノ傷寒ノ中ニハ溫病ヲ存シ^②、ソノ溫病ト言フハ後世、吳又可ガ言フトコロノ瘟疫ニシテ、傍人ニ傳染スル熱性病ナレバ、之ヲ今日ノ腸窒扶斯ト同一ノ症ナリトシテ可ナリ。又傷寒ト稱スル病症ノ中ニ陰證傷寒ト名ヅクルハ確カニ傳染性ノ症ニシテ、ソノ他時氣・時行・時疫・疫癘・內傷外感・勞役感冒・傷寒瘟疫等ト名ヅケラルルモノモ、同じク急性傳染性ノ熱病ナレバ、コレ等ノ病症ハスベテ之ヲ腸窒扶斯ト看做スモ誤ナカルベシ。

發疹窒扶期

發疹窒扶斯(斑窒扶斯)ハ、西洋ニ在リテモ上古ニ存在セシヤ否ヤハ詳ナラズ。ソノ歐州ニ顯ハレシハソノ十六世紀ノ頃ナリト言ヒ、始メテコロノ病ニ就キテ學問上ノ記述ヲナセシハ、フラカストロ(紀元一千五百五十年)ナリト言フ^③。支那ノ古醫書、金匱方論ニ陽毒ト名ヅケ、外臺秘要方ニ斑爛隱疹ト名ヅクルモノハ、發疹窒扶斯ナルベシト言ヒ^④、或ハ醫學入門等ニ載セタル熱毒斑疹ヲ以テ發疹窒扶斯ニ擬スル說アリト雖モ、共ニ信ズベカラズ。

我が邦ニアリテハ、神武天皇五十八年紀ノ疫ヲ初メトシ、戰役又ハ飢饉ニ際シテ、疫邪ノ流行セシコト史籍ニ見ユ。ソノ中ニハ或ハ今日ノ發疹窒扶斯ヲ包含セシヤモ知ルベカラズト雖モ、醫學ノ知識ヲ以テ本病ヲ我が邦ニ見タルハ明治十四年ベルツ・ブツケマノ兩人ニ始マル。爾後各地方ニ小流行アリシト雖モ、果シテ眞ノ發疹窒扶斯ナリシカ否ヤハ疑問ノ裡ニ在リ。

虎列刺

虎列刺ノ我が邦ニ現ハレシハ、文政五年ヲ以テ始トス。俗人ハ三日古呂利(大阪)・古呂利(江戸)ナドト名ヅケテソノ症ノ急劇ナルヲ畏怖セシガ、當時蘭方醫家ハ之ヲ西洋醫家ノ所謂可列刺トナシ、直譯シテ膽液病トナシ、漢方醫家ハ之ヲ萬病回春ノ濕霍亂(虎狼病)・瘟疫論ノ瓜瓢瘟・醫林改錯ノ瘟毒痢・張氏醫道ノ番痧ニ外ナラズトシ、暴瀉・瀉疫等ノ稱呼ヲ用ヒタリ。(第六〇五頁以下參照)

赤痢^⑤

西洋ニアリテハ赤痢ノ症及ビ之レニ類似スル症ノ太古ヨリ存セシコトハ、赤痢(Dysenterie)ノ名ガヒポクラテスニ出デタルコトニテモ知ラルベシ。支那ニテモ素問・靈樞・難經等ノ書ニ赤痢、若クハ之ニ類似ノ病ニ關スル記事アリ。靈樞ニ『春傷ニ於風ニ、夏生ニ後泄腸澼』ト記シ、素問ニ『腸澼下ニ白淋』・『腸澼下ニ膿血』・『腸澼便血云々』ノ語アリ。難經ニハ『大瘕泄者、裏急後重、屢至レ圍而不レ能レ使』・『大腸泄食已窘迫、大便色白、腸鳴切痛、小腸泄者、溲而便膿血、少腹痛』ト説ク。ソノ腸澼ト言ヒ大瘕泄ト言フモノハ、蓋シ赤痢ノ症ナリ。下リテ隋・唐ノ世ニ及ビテハ之ヲ滯下ト言ヒ、又或ハ之ヲ便膿血(傷寒論)・下痢(金匱方論)ト言ヒ、之ヲ泄瀉(下痢)ト混澆シタリ。而シテ之ヲ痢疾、又ハ痢病ト稱スルハ、後世ノコトナリ。

我が邦ニアリテモ、赤痢ハ上古ヨリ存在セリト思ハル(第二十三頁參照)。而シテ平安朝時代ニハ既ニ赤痢ノ稱呼アリ。和名類聚鈔ニハ痢ト瘳トヲ併擧シ、痢ヲクソヒリノヤマヒト訓ジ、瘳ヲチクソト訓ジ、釋名ヲ引テ『痢赤白日

レ癩赤痢知久會白痢奈女言ニ滯而難レ出也』ト註シタリ。ソノ知久會チククンハ血尿ザクンノ義ニシテ便ニ血ヲ交ユルモノヲ言ヒ、奈女ナメハ滑ノ義ニシテ白痢ヲ指ス。當時ノ醫書、醫心方ニハ病源候論ヲ引テ痢ニ四種アルコトヲ言ヒ、冷利(白利)・熱利(赤痢)・甘利(赤白痢)・蠱利(純血利)ヲ區別シ、又葛氏方ヲ引テ『挾レ熱者、多下ニ赤膿或雜血ニ』ト言ヒ、脾胃虛弱ニ因リ、風邪ノ傷フトコロトナリテ熱ヲ挾ミ、熱血ニ乗ジテ腸ニ入り利ト雜ハリテ下リテ赤痢トナルコトヲ論ジ、ソノ流行症ナルコトヲモ言フ。國史ニハ貞觀三年(三代實錄)・延喜十五年(日本紀略)ニ赤痢流行ノ記事アリ。依リテ攷フルニ、コノ頃ハ癩・滯下、又ハ赤痢ノ稱呼専用ヒラレシナリ。下リテ室町時代以後ニ至リテハ、單ニ之ヲ痢ト稱へ、遂ニ滯下ノ古名ハ廢シ、コレヨリ後ハ痢疾・痢病ノ稱呼用ヒラレタリ。病名彙解(貞享年間刊行)ニ『痢病、俗ニシブリハラナリ』トアリ。シブルハ澁ノ義ニシテ裏急後重ノ證候ヲ主トセルヨリ斯ク言フモノナレバ獨リ赤痢ノミニ限ルニハアラス、近世ノ俗コレヨリビヤウト名ヅク、即チ痢病ナリ、又アカハラト言フハ垢痢アカハラノ義ナリ、赤腹ニハアラス。

赤痢ノ異名甚ダ多シ、上段ニ記シタル滯下・腸澀・腸腹泄ノ他、天行痢(范汪方) 休息痢・休息氣痢・休良下(病源候論)・久痢(千金方)・熱痢・水穀痢・赤白痢・血痢・膿血痢・冷痢・魚腦痢(病源候論)・熱毒痢(千金方)・氣痢(仁齋直指)・疫毒痢(赤水玄珠)・瘴痢(本草綱目楮葉條下)・風痢(三因方)・疫痢・禁痢(秘方集驗)等ノ稱呼アリ、或ハソノ原因ニ依リ或ハソノ證候ニ依リテ命名セルモノナリ。

コノ如ク赤痢ノ症ハ、上古ヨリ既ニ存在シ、古代醫家ノソノ症狀ヲ觀察セルコト稍詳ナレドモ、ソノ病ノ本性ヲ論ズルコトハ明カナラズ。近世金・元ノ醫家ハ赤痢ヲ熱トシ、白痢ヲ冷トスルノ說ヲ主張シ、マタ明ノ醫家ハ五色ヲ以テ五藏ニ配シ、以テ五藏ノ色ヲ下スノ說ヲ唱道シタレドモ、ソノ原因ヲ論ズルハ、一二濕熱凝滯ノ說ヲ採リ、『濕熱ニテ、腹ノ内皮ガ爛レ、或ハ臟腑ノ上皮ガ爛ル』ニ基ヅクモノトシ(醫療手引草、上編乾卷)、之ヲ治スルニハ『下スベキモノヲ疎滌シテ惡物ヲ去ル』ノ方針ヲ採リ、病ノ初メニ澁劑(收斂劑)ヲ用ヒテ瀉ヲ止ムルハ、却テソノ經過ヲ不良ナラシムルモノトナセリ。近世ニ至リ赤痢ノ本性ハ比較的明瞭トナリ、寶曆ノ頃、香川修菴ハ赤痢ノ病變ヲ論ジ『腸中鬱滯、則蒸而生レ熱、蒸熱久、則嬌府易ニ糜爛一、而鬱熱爛ニ腸中裏面外皮一、猶ニ熱湯傷ニ爛口裏軟皮ニ』究竟、痢疾、即是腸中之癰癤耳』ト言ヒ、ソノ病性ヲ論ジテ『此疾有二傳染者一、蓋由下同レ厠共レ褥、則其臭穢之氣、外觸而襲レ之、目ニ鼻口一入、染ニ于胃腸一、内外感注上、遂同患耳』ト言ヒ、ソノ傳染ノ狀ヲ癆瘵(肺結核)・痘瘡ニ比シタリ。

實布埜里亞

支那ノ古醫書、病源候論ニ載セタル馬喉痺ハ、後人ノ所謂馬脾風ナラン(第一〇一頁參照)。小兒脹急喘ト稱セルモノモ亦馬脾風ナリシニ似タリ。馬脾風ハ暴喘ノ俗稱ニシテ一ニ風喉ト曰フ、ソノ馬ヲ以テ名ヅクルモノハ、ソノ症ノ暴急ナルヲ指セシモノナラン。醫書ニ馬脾風ノ一部門ヲ掲ゲシハ、明ノ樓英ノ醫學綱目ニシテ、ソノ說ニ依レバ『小兒肺脹、喘滿、胸高、氣急、兩脇動、陷下成坑、鼻竅脹、悶亂嗽渴、聲嘎不レ鳴、痰涎閉塞、俗曰ニ馬脾風』トアリテ、ソノ馬脾風ト名ヅクルモノハ格魯布、又ハ實布埜里ナルコトヲ知ル⁵⁾。依リテ考フルニ、實布埜里ノ症ハ支那ニアリテハ、古代ヨリ既ニ醫家ノ注目スルトコロトナリシヤ明カナリ。

我が邦ニアリテハ、平安朝時代ノ醫心方ニ、病源候論ヲ引テ馬喉痺ノ一症ヲ擧ゲタリ。後世、醫學綱目・全幼心鑑・衛生寶鑑・醫學入門・幼幼集成・醫宗金鑑・幼科發揮等ノ諸書、馬脾風ノ一門ヲ立テテ、ソノ症ヲ論ジタレド

モ、江戸時代初世及び中世ノ頃ノ醫書ニハ馬脾風ヲ説カズ、寛政ノ頃ヨツリ以後ノ醫書(蔓難錄・保嬰須知、等)ニ始メテ馬脾風ノ事ヲ論ゼルヲ見レバ、コノ症ハ寛政以前ニハ多ク流行セザリシモノカ^④。

有持桂里ガ方輿輓(文化年間刊)ニ『往年咽喉ノ病、天下一般ニ流行セシコトアリ、其症熱毒酷烈ニシテ、一二日ノ間ニ、唼白ク膨脹、或ハ紫黒赤穢色トナル、治ヲ急ニセザレバ、二三日ニ命ヲ殞ス、醫コレヲ急喉痺ト稱シ、又ハ喉癰ト呼び、或ハ纏喉風、或ハ天行猛疽トシ、稱呼一ナラズ』ト記セルハ、ソノ症状ヨリ推シテ考フルニ、實布埜里亞ニ外ナラズ、ソノ急喉痺ハ病源候論ニ謂フトコロノ馬喉痺トソノ義ヲ同フシ、醫學綱目・醫學正傳等ニ載セタル天行喉痺トソノ症ヲ同フスルモノナラン。纏喉風ノ稱ハ儒門事親・得効方ニ出デ、宋ノ劉昉ノ幼幼新書ニモ纏喉風ノ一門ヲ掲ゲタリ。猛疽ノ名ハ古ク靈樞ニ出ヅ。又唐迎川ノ吳醫彙講ニ爛喉丹痧ノ症アリ、ソノ説ニ『近來爛喉丹痧一症患者甚多、而死者亦復不尠』トアリ、爛喉丹痧輯要ニ『雍正癸丑年間以來、有二爛喉痧一症、發二冬春之際、不レ分ニ老幼、遍相傳染』ト記シタリ。コノ爛喉丹痧ト稱スル症ヲ以テ、今日ノ實布埜里亞ニ相當スルモノナリトスルノ説アリ^{⑥⑦}。

馬脾風ヲ格魯布トシ、纏喉風又爛喉丹痧ヲ實布的里トスベシトノ説アレドモ、固ヨリ兩症互ニ判然區劃セラレタルニアラズ、又馬脾風・纏喉風ノ類ガ一種ノ疫邪ニシテ傳染スル病ナルコトヲ知リシハ、近世ノコトニシテ(劉松峯ノ疫説ニ出ヅ)、中古以前ニアリテハ、コノ症ハ急喉痺・喘病・猛疽等ノ名稱ノ下ニ、他ノ咽喉諸症ト混淆セラレタリ。而カモ咽喉ニ義膜ヲ生ジ、急速ニ呼吸困難ヲ起シ、ソノ症險惡ナル病ノ殊ニ小兒ニ多ク發スルコトハ素問・靈樞以來、既ニ醫家ノ知悉スルトコロタリシヤ明カナリ。

回歸熱

回歸熱ハ西洋ニアリテハ、十八世紀ノ末ニ發見セラレタル疾病ナレドモ、我が邦ニテハ、明治二十八年近藤常次郎等ガ、戰地ヨリ歸リシ軍夫ニ於テコノ病ヲ見タルヲ始トス。ソレヨリ内地各地方ニ稍大ナル流行ヲ呈シタリ。

百斯杜

ペストハ西洋ニハ古クヨリ行ハレ、我が邦ニテモソノ名ハ維新以前ノ翻譯書ニ見エタレドモ(第六一六頁參照)正シクソノ症ノ我が邦ニ顯ハレシハ、明治三十一年ノ頃ニシテ廣島・神戸、次デ大阪・横濱ニ現ハレ、後ニハ東京ニモ行ハレタリ。

痘瘡

欽明天皇十三年ノ疫病、敏達天皇十四年ノ疫病ハ痘瘡ナルベシト言フ説モアレドモ(第二十四頁參照)、我が邦ニテ痘瘡流行ノ史ニ見エタルハ、天平年間ヲ以テ始トス(第四〇頁參照)。當時ハ之ヲ豌豆瘡・豌豆病・赤斑瘡・痘瘡

(以上天平九年ノ官符ニ見ユ)ト稱シ、俗ニ之ヲ裳瘡(續日本紀)或ハ喪瘡(本朝世紀)ト唱ヘタリ、ソノ裳瘡ト言フハ該病ノ一村流行スル裳ノ地ヲ曳クガ如クナルヨリ、喪瘡ト言フハ痘ヲ病ムモノヲ山ニ居ラシメ、病家ハ戸ヲ閉ヂテ出デズ、父母ノ喪ニ居ルガ如クナルニ依リテ斯ク名ヅケタルナリ。ソノ後ノ記録ニハ痘瘡(續日本紀)・赤疱瘡(日本紀略)・疱痘(本朝世紀)ノ稱呼ヲ擧ゲタレドモ、平安朝時代ニ主ニ用ヒラレタル稱呼ハ、疱瘡(又ハ胞瘡)ニテ、モガサノ名モ俗間ニハ廣ク行ハレタリ(榮花物語・續古事談等ノ書ニ見ユ)(第一〇八頁參照)。鎌倉時代ノ醫書、萬安方ニハ豌豆瘡ノ稱呼ヲ用ヒ、コレニワラハヤミノ訓ヲ附シ、又マメガサノ稱呼ヲ擧ゲ、吾妻鏡・百練鈔等ニハ主ニ胞瘡ノ稱呼ヲ用ヒタリ(第一三二頁參照)。室町時代ニ及ビテハ更ニイモガサノ稱呼行ハレシガ、コノ名ハ既ニ榮花物語等ニモ見エ、忌ノ義ナリ、痘家專ラ忌ムコト多キヲ以テ名ヅクト言ヒ、或ハイモハ、芋ト和語相同

ジ、是レ必ズ三因方ニ俗ニ呼ンデ芋トナスノ語アルニ本ヅクモノナラント曰ヒ、或ハイモハ居喪ノ義ナルベシト曰フモノアリ（續痘科辨要）。近世ニ至リテハ醫書ニハ主ニ痘瘡ノ名ヲ用ヒ、俗間ニハハウソウ（疱瘡）ノ稱呼專ラ行ハル。

支那ニテモ痘瘡ニハ種々ノ稱呼アリ、虜瘡（肘後方）・豆瘡（三因方）・豌豆瘡（病源候論・千金方）・天行豆瘡（三因方）・天行豌豆瘡（全幼心鑑）・痘瘡（聖惠方・簡易方）・痘疹（陳氏痘疹方論）・痘疥（證治要訣）・痘風（丹溪心法）・芋（三因方）・天行斑瘡（三因方）・聖瘡（小兒直指方論）・天瘡（痘疹世醫心法）・天花（痘疹心印）等コレナリ。

痘瘡ハ支那ニアリテハソノ初メ虜ヨリ傳ヘタリト言ヒ、我が邦ニテモ聖武天皇ノ御代ニ始メテコノ病海外ヨリ傳ハリ來タレリト言フ（第四〇頁參照）。而シテソノ我が邦ニ傳ハレル頃ハ時人之ヲ異病ト稱シ、病者ヲ山中ノ別居ニ離隔セシメ、或ハ之ヲ以テ歲疫ノ爲ストコロトナシ、專ラ神佛ニ祈禱シテソノ病ヲ攘フコトヲ勉メタリ。

古代醫家ノ痘瘡ノ本性ヲ知ルコト詳ナラズ。巢元方ノ病源候論ニハ傷寒豌豆瘡ノ外ニ時氣胞瘡・疫癘胞瘡ノ門ヲ立テテ、痘瘡ニ類似セル皮疹ヲソノ原因ニ從ヒ區別シ、痘瘡（豌豆瘡）ハ之ヲ傷寒ニ歸シ、千金方ニモ豌豆瘡ヲ傷寒部中ニ入レ、痘瘡ヲ以テ傷寒ニ基ヅクモノトナシタリ。宋以後ニ至リテハ諸家ノ說區々ニシテ、或ハ先天ノ穢毒、即チ胎毒（胎中ニ在リテ穢毒ヲ受ク）ニ基ヅクモノトシ、或ハ先天慾火（淫火精血）ヲ以テ痘瘡ノ原トシ、或ハ之ヲ先天及ビ後天ノ食毒ニ歸スルノ說アリ。之ヲ要スルニ『痘瘡ハ胎中ノ毒氣ナリ、郷鄰ニ痘瘡盛發スルハ天地ノ淫氣ナリ、天地ノ淫氣胎中ノ毒氣ハ相觸レテ痘瘡ヲ成ス』ト言フハ專ラ行ハレタル說ナリ。我が邦ニアリテハ江戸時代ノ季世ニ至リテ、初メテ池田錦橋・池田霧溪等痘科ヲ以テ専門トスルモノ起リ、專ラ痘瘡ニ就キテ攻究セシガ（第四七六頁參照）、ソノ說ニ依レバ『痘本胎毒、内伏ニ于右腎命門、外感ニ于天行疫癘之氣ニ而發』『痘者本一種之異毒、而非尋常之胎毒、也、其感觸者、亦一種之異氣、而非尋常之疫邪也、要レ之天行之淫氣、與三蘊藏之遺毒、相觸激而發也』（續痘科辨要）ト言ヒ、之ヲ唐・宋・元・明諸家ノ說ニ比スレバ識見稍高シトス。然レドモ、宋以後ニアリテハ傷寒・胎寒・胎毒・淫火・食毒ノ諸說ノ他ニ尙ホ時氣傳染ヲ以テ痘瘡ヲ説クモノアリ、我が邦ニアリテモ堀元厚ハ享保ノ頃既ニ痘瘡ヲ以テ一種ノ天行病トセシガ、文化ノ初年橋本伯壽ハ更ニソノ說ヲ進メ『痘者古昔無レ有焉、其初異域之淫氣、合ニ湊於人身、以成ニ一種之異病、舟車之所レ通、人跡之所レ屆、傳染周流殘ニ害天下古今之生民者也』、『古此毒之行、從ニ異域、流ニ入于中原、衆庶畢染、云々、可レ見、非ニ本來地氣之所爲』。固戎狄一種之有形惡毒也』（斷毒論）ト言ヒ、痘瘡ヲ以テ醇然タル傳染性流行病トナシ、又ソノ傳染ノ方法ニ就キテハ『痘瘡の傳染に三あり、第一は痘瘡病者に近よりて熱氣鼻に入る時は假令其臭は知らずとも必ず毒氣にかぶるるなり、第二は痘瘡病者の玩物すべて病中寢所にありし物を手に觸れても傳染す、第三は痘瘡家の食物にて傳染す』（國字斷毒論、文化八年刊）ト言ヒ、之ヲ觸接傳染性ノモノトナシタリ。

假痘

鎌倉時代ニハナイモ又ハハナモト言ヘル病ノ流行アリ。邊ノイモノ義ニシテ痘ニ近キ意ナリ。證治準繩ニ『水疱俗日ニ水痘』ト言フモノ、即チコレナリ。別ニ風痘・石痘等ノ稱アリ。

麻疹

麻疹ノ名ハ古クヨリ見ユ、保赤全書ニ『古謂、麻即疹也、疹出如レ麻成レ染』ト言ヒ、三因方ニ『細粟如レ麻者、俗呼爲レ麻、即膚疹也』ト言ヘルニ徴シテ之ヲ知ルベシ。然レドモ之ヲ麻疹ト連稱セルハ、明ノ龔信ガ古今醫鑑ヲ始めトスベキカ。濟世全書・張氏醫通等ニハ之ヲ麻疹ニ作レリ。ソノ他支那ノ醫書ニ見ユルトコロノ異稱ハ糠瘡（景岳

全書）・麩瘡(證治準繩)・赤瘡子(聖惠方)・膏瘡・赤瘡・疹子(景岳全書)・麻子(全幼心鑑)、等枚擧ニ暇アラズ。麻疹ノ治方ノ書ニ見エタルハ、支那ニアリテハ宋以來ナレドモ、唐以上ニアリテモ傷寒論ニ載セタル癩疹・金匱ニ載セタル陽毒・病源候論ニ出デタル傷寒發斑・溫病發斑・天行發斑、等ニハ麻疹ヲ混淆セシガ如シ。

我が邦ニアリテハ、欽明天皇十三年紀ノ疫、敏達天皇十四年紀ノ疫、共ニ或ハ麻疹ナリシナラントノ説アレドモソノ正否ヲ攷フベカラズ。奈良朝ノ時、天平九年ノ疫ハ官符ニ赤斑瘡ト稱スレドモ、ソノ實ハ痘瘡ナリ(第四十一頁参照)。而カモ支那ニテモソノ初メ痘瘡ト麻疹トハ互ニ混淆シタレバ、天平七年痘瘡流行ニ次ギテ、天平九年ニハ麻疹ノ痘瘡ト共ニ流行セシヤモ知ラズ。平安朝時代、長徳四年ニ赤斑瘡ノ流行セシコト日本紀略ニ見エ、榮花物語同年ノ條ニ『今年、例のものがさにはあらで、いと赤き瘡のこまかなるいで来て、云々』ト記シ、同書中他ノ條下ニアカモガサノ稱呼ヲ擧ゲタリ。コレ痘瘡ヲモガサト言ヘルガ故ニ、痘瘡ニ似テ赤シト言フ義ニシテ、扶桑略記ニ赤痘瘡ト書ケルモ、亦ソノ義ハ同一ナリ(第一〇九頁参照)。サレバ麻疹ノ正シク露顯セシハ長徳四年ナリトスルモ、コノ頃ハ尙ホ痘瘡ト麻疹トノ互ニ相混雜セルコトハ、ソノ稱呼ニ依リテモ推察セラルベシ。

ハシカノ稱呼ハ鎌倉時代ニ始マル。梶原性全ノ萬安方ニ痘疹ノ一部門ヲ立テ、ソノ瘡ニモカサ、疹ニハシカノ訓ヲ附シ、頓醫抄ニハ麩瘡ニハシカカサノ訓ヲ附シタリ。ハシカハ芒ナリ、喉ニ芒ノ立チタルガ如ク、イライラトシテ苛酷ナル感アルニ依リテ言フ。下リテ室町時代ニハイナスリノ稱アリ(第一七〇頁参照)。近世ニ至リテハ麻疹ノ稱專ラ行ハレタリ。

風疹

平安朝時代ニ風癩疹(カサホロシ)ト言フハ、近世謂フ所ノ三日麻疹ミツカハシカ、又ハ麻疹風ハシカカゼニシテ、風疹即チ假性麻疹ナラン。鎌倉・室町ノ時代ニ頻次流行セル三日病モ、恐クハ風疹ナリシナラント察セラル。

猩紅熱

猩紅熱ハ明治時代ニ至リテ我が邦ニ小流行ヲナシタリ。古昔ノ醫書ニ見ユル風癩疹・風疹・丹疹等ヲ以テ猩紅熱ニ當ツル説^⑦アレドモ從フベカラズ。蓋シ麻疹・猩紅熱及ビ風疹ノ三症ガ明瞭ニ區別セラレタルハ、西洋ニアリテモ十七世紀ノ後半期ナルニ、コレヨリ以前ノ支那及ビ日本ノ醫家ガ、能クコノ三種ノ類同疾病ヲ區別セリトハ信ズベカラザルナリ。

第二 心臟病

上古支那ノ醫家ハ心臟ニ精神ヲ舍トスモノトシ(素問ニ『心者、五藏六府之大主也、精神之所レ含也。其臟堅固、邪弗レ能レ容也、容レ之則心傷、心傷則神去、神去則死矣』・『心臟レ脉、脉舍ニ神心』云々ノ語アリ)、從テ心臟ノ疾病ハ精神的ノ症状ヲ呈スルモノトシ『心病、其色赤、心痛短氣、手掌煩熱、或啼笑罵詈、悲思愁慮、面赤身熱、其脉實大而數、此爲レ可レ治』・『心病、煩悶小氣、大熱、熱上盪心、嘔吐咳逆、狂語、汗出如レ珠、身體厥冷、云々、爲ニ大逆』、十死不治(脉經)ト論ゼリ。

宋以後ニアリテモ、心臟ノ解剖學及ビ生理學ニ關スル知識ノ進歩セザリシニ依リ、ソノ病理學上ノ知識モ、上古内經ノ説ニ異ナルコトナク、僅カニ心臟ノ疾病ヲ區別シテ、虛實ノ二證トナセルマデナリ。

聖惠方、説クトコロニ依レバ心實ノ證ハ『夫心實則生レ熱、熱則陽氣盛、陽盛則衛氣不レ行、榮氣不レ通、遂令レ熱毒稽留^一、心神煩亂、面赤身熱、口舌生レ瘡、咽燥頭疼、喜笑恐悸、手心熱滿、汗出衄血、其脉洪實相搏者、是其候也』ニシテ心虚ノ證ハ『夫心虚則生レ寒、寒則陰氣盛、陰盛則血脉虚少、而多恐畏、情緒不レ樂、心腹暴痛、時唾^二清涎^一、心膈脹滿、好忘多驚、夢寐飛揚、精神離散、其脉浮而虚者、是其候也』ナリト言フ。コレ我が邦ニアリテモ近時ニ至ルマデ、支那醫方ヲ奉ズルモノノ間ニ専ラ行ハレタル説ナリ。

心臟瓣膜病

傷寒論ニ『心動悸、脈結代者、炙甘草湯主レ之』トアルハ心臟瓣膜病ヲ指シテ言フモノナラン。而カモ、コハ固ヨリ證候ヲ擧グルモノニシテ病名ニアラズ。怔忡・動悸ト名ヅクルモノノ内ニモ、亦心臟瓣膜病ヲ混淆セシコトハ、曲直瀨道三ノ啓迪集ニ醫學正傳ヲ引テ『夫怔忡者、心中惕惕然動搖而不レ得ニ安靜^一、無^レ時而作。驚悸者、驀然而跳躍、驚動而有^二欲^レ厥之狀^一、有^レ時而作○ニ證之因亦有^下清痰積飲留^ニ結於心包胃口^ニ而爲^レ之者^上。不^レ可^下固執以爲^二心虚^一而治^上、醫宜^下以^二脉證^一參究^上』ト論ズルヲ見テ之ヲ知ルベシ。

近時ニ至リ、本間玄調ハ明カニ心臟瓣膜病ヲ認識シ、傷寒論ノ説ニ依リテ、コレニ心動悸ノ名ヲ附シタリ^⑤。

胸絞症

心痛ニ厥眞ノ二痛アリ、厥ハ逆ナリ、五藏ノ氣逆厥シテ胸膈ニ衝テ心痛セシムルモノヲ厥心痛ト曰フ。痛ムコト雖鍼ヲ以テソノ心ヲ刺スガ如シ。眞心痛ハ手足清^{ヒエ}テ節ニ至リ心痛スルコト甚シ、且ニ發シテタニ死シ、タニ發シテ朝ニ死スト言フ。コレ内經以來ノ説ナリ^⑥。蓋シ心臟筋肉炎等ニ發スル胸絞發作、マタハ所謂胸絞症 (Angina pectoris) ヲ指スモノナラン。

我が邦古ヨリ早打肩^{ハヤウチカタ}ト名ヅクル疾病アリ^⑦。元錄年間、森共之ガ著ハシタル辨症救急ニ『速打肩、本邦尤多、但高貴家無^レ有、負^レ量勞力、腦怒鬱結不^レ散、令^ニ氣促迫^一、則一時氣逆血止、瘀血與^ニ結氣^一併、上攻刺^ニ於心肺^一、卒倒氣絶、至^レ不^レ救者多、惟急針^ニ膏盲^一、出血泄^レ氣、即活者間有^レ之也、此症會不^レ灸^ニ膏盲^一、覺^ニ氣寒肩背重^一者、卒致^ニ此患^一、以^レ此爲^レ候、按速急也、打、打破也、膏盲乃近^レ肩處、故世俗以^ニ速打肩^一名^レ之哉』ト記シ、又南谿醫話ニ『北國ニハハイト云ヒ、伊勢路ニハ早打肩ト云ヒ、或ハ早痲痺ト云フ、云々、唐土ノ痲病ノ類ニヤ』ト言ヒ、又之ヲ青筋(萬病回春ニ出ヅ)ニ擬スルノ説アルヲ見レバ、コノ症ハ心臟ノ疾患ニシテ、胸絞症ニ近キモノナラン。一説ニ痲痺卒痛ヲ以テ早打肩ニ擬スベシト言フ^⑧。而カモ痲痺卒痛トハ何如ノ症ナルヤ、ソノ出處ヲ詳ニセズ。病名彙解ニハ『痲痺俗ニウチカタト云ヘリ項肩ノ強急スルナリ、或人ノ曰ク、拳ヲ以テ肩ヲ打ツトキハ快キ故ニ打肩ト言ヘリ、又其病肩ノ内ニ發スル故ニ内肩ト言ヘリ、世俗ニ肩ノミアルヤウニ思フハ誤マレリ、痲疾ノ發スル定マル所ナシ、多クハ是レ脇腹ノ中ナリ』ト記シタレドモ、所謂痲痺ハ積聚癥瘕ニ近似スル疾患ニシテ、腹内臓器ノ強急ヲ起スヲ徵トス。之ヲ上記ノ諸書ニ記スル早打肩ノ徵候ニ比スルニ太ダ差異アリ、故ニ痲痺ヲ以テ直チニ早打肩ニ相當スルモノトナスコトヲ得ズ^⑨。(胃加答兒ノ條下ヲ参照スベシ)

第三 呼吸器病

百日咳

百日咳ノ症ハ古ヨリ之アリ、上古ニハ哮又ハ喘ノ範圍中ニ入レラレテ特別ノ名ナク、又ハ喘哮・咳逆・久咳・久嗽・奶ナドノ稱呼アリ。室町時代ニ小兒咳逆ノ流行セシト言フハ、蓋シ百日咳ナリ（第一七一頁参照）。支那ニテハ明ノ代ニ及ビテ初メテ頓嗽ノ名アリ、保赤全書ニ『咳甚氣喘、連聾不_レ住、名爲_二頓嗽_一、』ト言ヒ、兒科方要（吳元溟著）ニ『頓嗽者、小兒咳、即_レ噎頓、連聾不_レ已、嗽則_レ臉紅、吐則_レ止』ト言フモノ即チ是ニシテ、ソノ病症ハ今日ノ百日咳ニ相當ス。ソノ他頓噎・頓咳等ノ名アルモノモ、皆ナ百日咳ニ外ナラズ^⑬。

百日咳ハ我が邦ノ俗稱ニシテ咳嗽百日ニ及ブノ謂ナリ。原南陽ノ醫事小言ニ『小兒咳嗽ニ百日咳トモ、又連聾咳トモ云ヒ、ケイケイシヤブキ又クツメキトモ云ヒ、百日バカリノ内、煩フコト流行スル寸ハ一面ニ病ム、咳ノ甚キトキハ乳モ食物ヲモ吐スル、風寒ニ胃スレバ夜ノ間ニ別テ強ク咳スル、連綿ト治セザル内ニ黃瘦シテ大病ニナルモノアリ』ト曰ヒ、津田玄仙ノ療治茶談ニハ『關東方言クチメンシヤブキ』ト記ス。而カモソノ廣ク行ハレシハ百日咳ノ稱呼ニシテ、今ハ醫家モ亦コノ稱ヲ用フルニイタレリ。

喘息

喘息ノ名ハ本ト素問・靈樞ニ出デ、古今ノ通名ナリ。金匱方論ニ『上氣、喘而_レ噪者、屬_二肺脹_一、』・『欬而上氣、喉中水鷄聲』・『欬而上氣、此爲_二肺脹_一、其人喘、目如_二脫狀_一、脉浮大』トアルヲ見レバ、ソノ上氣及ビ肺脹ト言ヘルモノモ、喘息ノ症ヲ指スモノナラント思ハル^⑭。病源候論ニ呻嗽ト言ヒ、千金方ニ欬嗽上氣ト言ヒ、續本事方ニ哮嗽ト言ヒ、仁齋直指ニ哮吼ト言ヒ、證治要訣ニ哮喘ト言フ。ソノ他_レ喘・久喘・氣促喘・痰哮・咆哮・喘孔・喘氣病等ト稱スルモノモ、皆ナ喘息ノ症ナリ。蓋シ喘ハ氣息ヲ以テ言ヒ、哮ハ聲響ヲ以テ名ツクルモノニシテ、喘促シテ喉中水鷄ノ聲ノ如キヲ發スルヲ哮ト曰ヒ、氣促ヲ連屬シ以テ呼吸スルコト能ハザルヲ喘ト曰フ。後世ノ學者或ハ強テ喘ト哮トヲ區別セントスレドモ、喘ハ呼吸疾促ヲ總稱スルモノニシテ古稱ナリ、哮ハ喘息ノ宿疾滯患ヲ成シ時ヲ以テ發スルモノヲ言ヒ、後世ノ俗稱タリ、喘ト哮ト固ヨリ別證ニアラザルナリ^⑮。

肺結核

素問・靈樞ノ兩書ニ勞傷虛不足ノ論アレドモ、肺結核ト認ムベキ症ヲ擧ゲズ。張仲景ノ金匱方論ニ始メテ虛勞ノ症ヲ揭グルモ後ノ所謂肺勞ニ的當セズ^⑯。病源候論ニ至リテ五勞ノ目アリ、ソノ五勞ト言フハ『一日志勞。二日思勞。三日心勞。四日憂勞。五日瘦勞』ニシテ、別ニ五臟ノ勞アリ、ソノ肺勞ノ證ハ『短氣而面腫、鼻不_レ聞_二香臭_一、』ナリト言フ。千金方ニ載スルトコロモ大概之ニ異ナラズ。コレ或ハ肺結核ノ症ナラン。

肺結核ハ支那醫方ノ書ニハ、虛勞（金匱方論）・肺勞（病源候論）・骨蒸（病源候論）・傳屍（蘇遊論）・伏連（廣濟方）風勞（千金方）・損勞（古今醫鑑）・急勞（聖惠方）・熱勞（古今醫統）・血風勞（和劑局方）・勞嗽（儒門事親）・勞瘵（丹溪心法附餘・三因方）・瘵疾（證治要訣）・傳屍勞（證治準繩）等ト稱シ、名稱多端ニシテ、殆ンド底止スルトコロヲ知ラズ。コレ支那醫方ガニ證候ニ依リテ說ヲ立ツルガ故ニ異證多端ト雖モソノ實ハ唯一病ニシテ別疾ニアラザルコトヲ明カニセザルガタメノミ。

當時醫家ノ說ニ依レバ『五臟勞者、其源從_二藏府_一起也、鼓_二生死之浮沈_一、動_二百病之虛實_一、厥_二陰陽_一、逆_二腠理_一、皆因_二勞瘵_一而生、故曰_二五臟勞_一也』（刪繁論）ト言ヒ、肺結核ノ症モ肺臟ノ虛勞ニ源ヅクモノトナセルナリ。又

ソノ骨蒸ト言フハソノ骨中ノ熱蒸スガ如キヲ以テ名ヅク、初メ風寒微邪ニ感ジ、又ハ瘧後・天行時疫後・痢後、或ハ諸病差テ後、餘熱未ダ悉ク徹シ盡サザルノ時、調攝謹マザルニヨリテ元氣ノ虛衰ヲ致シ、ソノ元氣ノ虛衰ニ乗ジテ熱ノ骨中ニ透ホルニ依リテ、ソノ症ヲ發ストナスナリ⁽¹⁴⁾⁽¹⁵⁾

外臺秘要方ニ引クトコロ、蘇遊論ノ傳屍ノ說ヲ見ルニ『大都、男女傳屍之候、心胸滿悶、背膊煩疼、兩目精明、四肢無力、雖レ知レ欲レ臥、睡常不レ着、脊膂急痛、膝脛酸疼、多臥少起、狀如ニ佯病ニ、每レ至ニ且起ニ、即精神尙好、欲レ似レ無レ病、從ニ日午ニ以後、即四體微熱、面好顔色、喜見ニ人過ニ、常懷ニ忿怒ニ、纔不レ稱レ意、即欲ニ嘔吐ニ行立脚弱、夜臥盜汗、夢與レ鬼交通、或見ニ先亡ニ、或多ニ驚悸ニ、有レ時氣急、有レ時效嗽、雖レ思ニ想飲食ニ、而不レ能ニ多浪ニ、死在ニ須臾ニ、而精神尙好、或兩肋虛脹、或時徹利、鼻乾口乾、常多ニ粘唾ニ、有レ時唇赤、有レ時欲レ睡、漸就ニ沈羸ニ、猶如ニ水涸ニ、不レ覺ニ其死ニ矣、』傳屍之疾、本起ニ於無端ニ、莫レ問ニ老少男女ニ皆有ニ斯疾ニ、大都此疾相剋而生、先内傳ニ毒氣ニ、周ニ遍五藏ニ、漸就ニ羸瘦ニ、以至ニ於死ニ、死訖復易ニ家親一人ニ、故曰ニ傳屍ニ、亦名ニ傳注ニ、以ニ其初得ニ半臥半起ニ、號爲ニ殮蝶ニ、氣急欬者、名曰ニ肺痿ニ、骨髓中熱、稱爲ニ骨蒸ニ内傳ニ五藏ニ、名ニ之伏連ニ、不ニ解療ニ者、乃至レ滅門』ト言フ。ソノ症ノ今日言フトコロノ肺結核ト同一ノモノナルヤ疑ヒヲ容レズ。而シテソノ病原ヲ論ズルヤ、虛勞ノ他ニ尸注ノ設ヲナシ、鬼邪ノ氣(尸)ノ身體ニ流注シテソノ人ヲシテ病マシメ、ソノ人死スルノ後チ復タ傍人ニ易エテ乃チ門ヲ滅スニイタルモノアリト論ゼリ⁽¹⁶⁾。

金・元以後ニアリテハ、専ラ陰虛火動腎陰水虧ヲ以テ論ヲ立テ、例之ハ『勞瘵、男子二十前後、色慾過度、損傷精血ニ、必生ニ陰虛火動之病ニ、睡中盜汗、午後發熱、哈哈欬倦、倦怠無力、飲食少レ進、甚則痰涎帶レ血、咯唾出レ血、或欬血、吐血、衄血、身熱、脉沈數、肌肉消瘦、此名ニ勞瘵ニ、』(明醫雜著)ト言ヒ、或ハ『今也、嗜慾無レ節、起居不レ時、七情六慾之火、時動ニ乎中ニ、飲食勞倦之過、屢傷ニ乎體ニ、漸而至ニ于眞水枯竭陰火上炎ニ、而發ニ蒸蒸之燥熱ニ、或寒熱進退似レ瘧非レ瘧、古方名曰ニ蒸病ニ』(醫學正傳)ト論ジ、或ハ『瘵瘵之證、非レ止ニ一端ニ、其始也、未レ有レ不下因ニ氣體虛弱ニ、勞ニ傷心腎ニ而得レ之、又有下外感ニ風寒暑濕之氣ニ、先爲ニ瘧疾ニ、以致ニ欬嗽ニ、寒邪入レ裏、失ニ於調治ニ又不レ能ニ保養ニ、過ニ於房勞ニ、傷ニ於飲食ニ、久而成中瘵瘵之候上』(袖珍方)ト説キ、或ハ『其侍奉親密之人、或同氣連枝之屬、薰陶日久、受ニ其惡氣ニ、多遭ニ傳染ニ、名曰ニ傳屍ニ、又曰ニ喪屍ニ、又曰ニ飛屍ニ、曰ニ遁屍ニ、曰ニ殮蝶ニ、曰ニ屍注ニ、曰ニ鬼注ニ、蓋表下其傳注、酷虐而神妙、莫中能以測上之名也、雖レ然未レ有レ不下由ニ氣體虛弱、勞ニ傷心腎ニ而得レ之者中、初起ニ於一人ニ、不レ謹而後傳ニ注數千百人ニ、甚而至ニ於滅族滅門ニ者、誠有レ之矣、然此病、最爲レ可レ惡、其熱毒鬱積之久、則生ニ異物惡蟲ニ、食ニ人臟腑精華ニ、變生ニ諸般奇狀ニ、誠可ニ驚駭ニ、』(醫學正傳)ト言ヒ、十藥神書(葛可久著)ノ如キハ傳屍勞各期ノ蟲狀ヲ畫キ、以テソノ惡蟲ノ臟腑精華ヲ食フノ說ヲ主張スルニイタレリ。

之ヲ要スルニ、肺結核ハ支那ニアリテハ隋・唐ノ代ヨリ現ハレシガ、當時ノ諸家ハ之ヲ虛勞トシ、金・元以下ニ至リテハ『此病ハ七情六慾ノ火中ニ動キ、飲食勞倦ノ過度屢々身體ヲ傷ブリ、漸クニシテ眞水枯竭シ、陰火上炎スルニヨリテ成ル』ト説キ、又『瘵瘵ノ病ノ中ニ傳尸ノ一證アリ、尸ハ三尸蟲トテ人ノ腹中ニテ臟腑ヲクラフ蟲ナリ、瘵瘵ノ一人ワヅラヒ、ソレヨリ身近キ親類ニヒタモノウツリテ一家ヲツクシテ死スルノ症ナリ』(病名彙解ニ依ル)ト説キタリ。我が邦ニアリテモコノ病ハ古代ヨリ存在シ、醫心方以下ノ諸書概ネ上記、支那醫家ノ論說ヲ師宗トシテ、ソノ病理ヲ紹述敷衍シタリ。

江戸時代ノ中世、香川修庵出デテソノ著、行餘醫言中ニ瘵瘵ノ一部門ヲ掲ゲ、唐前後時代ノ論說ガ煩雜ニシテ約束ナク元・明諸家ノ說ガ陰虛火動・腎陰水虧ノ範圍ヲ出デザルヲ嘲ケリ。瘵瘵ノ異名多端ニシテ殆ンド枚擧スベカラザルハソノ異證百般ナリト雖モ、尙ホ同一ノ症タルコトヲ明カニセザルニ依ルトシテ、肺癰ヲモ瘵瘵ノ中ニ算シ、又數脈ヲ以テ勞脈ト定メタルガ如キ、ソノ識見稱スベキモノアリト雖モ、ソノ發生ヲ説クヤ、僅カニ『勞者、以ニ斯

疾由レ勞而成ニ而言也、療者具ニ斯疾之狀候ニ之名也、勞瘦也、專因ニ心勞房勞ニ、ト言フニ過ギズ。橘南蹊ノ雜病紀聞（文化二年）ニ至リテハ、勞瘵ヲ區別シテ、（1）傳尸勞、（2）遺毒勞、（3）傳染勞、（4）瘴勞、（5）風勞、（6）鬱勞、（7）腎虛勞ノ七種トナシ、ソノ發病ノ因由ヲ説キテ『傳尸勞ト云フハ、父母ノ内何レニテモ勞瘵ヲ發スベキ精血アル人ヨリ出生シタル兒ハ、兄弟幾人アリトモ皆遂ニハ此病ヲ發スルナリ。遺毒勞ト云フハ父母ニ黴毒ナド有テ出生シ來タル小兒胎毒多ク、其毒腹中ニ殘リナガラ生長シテ十七八才ニ及ベバ、此父母ヨリ遺シ送ル毒ニ、陽氣滯リツカヘテ遂ニ勞咳トナルナリ。傳染勞ト云フハ傳尸勞ナドニテ根深キ穢惡ノ氣ニ、日夜觸レ近ヅキ、常ニ其氣ヲ口鼻ヨリ吸込ミ、或ハ衣服衾褥ヲ共ニシテ肌膚ニモ染ウツリ、或ハ廁ヲ共ニシテ其臭氣ヲ聞キ、或ハ夫婦ノ間ナド交接シテ其氣ヲ感じ、或ハ其土地其家屋ナドニ其氣殘ルモアルモノナリ。瘴勞ト云フハ産後ノ勞咳ヲ云フ、故ニ直チニ産勞トモ云フナリ。風勞ト云フハ風邪ニ感ズレバ其理産勞ト同ジコトニテ、聊カノ外邪モ遂ニ勞咳トナル、麻疹・瘧・時疫等ノ後ニ勞咳トナルハ、皆風邪ト同理ナリ。鬱勞ト云フハ心ヲ勞シ神ヲ鬱セシムルニヨリテ勞咳ヲ引キ出スヲ言フ。腎虛勞ハ多クハ男子四十才前後ニ至リテ淫慾ニ耽ルニヨリテ生ズルモノナリ』ト言ヒ、以テ肺結核ニ遺傳ト傳染トアルコトヲ説キ、又身體ノ衰弱・産褥・風邪・交接過度等ハ該病ヲ發スルノ因ヲナスコトヲ言ヒ、ソノ症狀ヲ論ズルコトモ稍々精緻ナリ。

本間玄調ノ如キハ、更ニ一步武ヲ進メ、『此病、一種ノ傳染毒ニシテ、黴瘡、疥癬、瘟疫、痢疾等ノ傳染スルニ異ナラズ、唯緩急ノ別アルノミ、或ハ血脈ヲ引テ傳染シ、或ハ親近スルニテ傳染スルノ二途アリ、或ハ宮室、器什、衣服等ヘモ其毒浸淫シテ人ニ傳染スルコトアリ』（内科秘録）ト説キタリ。

ソノ他諸家ノ論説アリト雖モ、歸スルところハ上述ノ趣旨ニ外ナラズ。更ニ概括シテ言ヘバ『勞瘵ハ勞ノ總名ニシテ、熱ノ多クアルヲ骨蒸ト云ヒ、又勞熱ト云フ。咳ノ多ク出ヅルヲ勞咳ト云ヒ、又勞熱ト云フ。音ノ啞シテ肺ノ萎ミタルヤウニ見ユルヲ肺萎ト云ヒ、傍人ニ注易シテ遂ニ一門ヲ滅スルニ至ルヲ傳屍ト云フ、又羸瘦ノ甚シキモノ故、瘦病ト名ヅク』（内科秘録）ト論ズルナリ。

肋膜炎

肋痛ノ病ハ内經以下ノ醫書ニ出デ、暴怒傷觸悲哀氣結・飲食過度・冷熱失調・顛仆傷形ニ因リ、又ハ痰積流注、血ト相搏ツニ由リテ痛ヲ作スト説ク。之ヲ今日言フトコロノ肋膜炎トナス説アリ。然レドモ近世明ノ邵達ノ訂補明醫指掌ニ『兩脇走注痛而有レ聲者痰飲也、左脇下有レ塊、作痛不レ移者、死血也、右脇下有レ塊、作痛飽悶者、食積也、咳嗽氣急發熱者、痰結痛也、久而不レ治、則成ニ肺癰勞傷、身熱脇痛者、脉必虛也』ト言ヒ、又清ノ沉金鰲ノ沉氏尊生書ニ諸家ノ所説ヲ參伍折衷シテ、胸脇肋痛ヲ論ジ、ソノ原因ヲ五端ニ別チ『一曰氣鬱、由ニ大怒氣逆、或謀慮不決、皆令ニ肝火動甚、以致ニ胸脇肋痛、一曰死血、由ニ惡血停ニ留于肝、居中於脇下上、以致ニ胸脇肋痛、按レ之則痛益甚、一曰痰飲、由ニ痰飲流ニ注于厥陰之經、以致ニ胸脇肋痛、痛則咳嗽氣急、一曰食積、由ニ食停ニ脇下、有ニ一條扛起、以致ニ胸脇肋痛、一曰風寒、由ニ外感風寒之邪、留ニ着脇下、以致ニ胸脇肋痛、此五者皆足レ致レ痛、而惟怒氣瘀血居レ多也、至ニ胸脇肋地分、本近一處、故其爲レ病、亦不ニ必細ニ分何部、只以ニ脇痛ニ概レ之』ト言ヘルニ徴スレバ、肋痛ハ單ニ肋膜炎ノミヲ指スニアラズ（ソノ痰結痛ト言ヘルハ、或ハ肺炎ナルベシ）ト雖モ、ソノ肋膜炎ト認メラルルモ確カニ之アリ。乃チ肋膜炎ノ症ノ古代ヨリ存在セシコトヲ知ルベシ。

胸水

支那ニテハ古ヨリ飲證ノ名目アリ、脉經ニ『夫飲有レ四、何謂也、師曰、有ニ淡飲、一云ニ留飲、有ニ懸飲、有ニ溢飲、有ニ支飲、問曰、四飲何以爲レ異、師曰其人素盛、今瘦、水走ニ腸間、瀝々有レ聲、謂ニ之淡飲、飲後水

流在三脇下一、咳唾引痛、謂之懸飲^一、飲水流行、歸于四肢^一、當三汗出^一、而不三汗出^一、身體痿重、謂之溢飲^一、欬逆倚息、短氣不得臥、其形如腫、謂之支飲^一、トアリ。金匱方論ニ『久欬、其脉虛者、必苦胃、其人本有三支飲在三胸中^一故也』トアリ。依テ攷フルニ、飲トハ停留ノ水氣ヲ指シテ言フモノニシテ、ソノ支飲及ビ懸飲ト稱スルモノハ胸水 (Hydrothorax) ノ症ヲ指スモノナラン。古書ニ痰陰トアルハ恐クハ淡飲ナリ、而シテ正字通ニ『古有三淡飲之疾^一、胸膈動、而有聲、俗作三痰飲^一、』トアルニ徴シテ淡飲ノ胃内停水ニ外ナラザルコトヲ知ルベシ^③。或ハ飲證ヲ以テ胸水ニ當ツル説アリ^⑤ト雖モ、ソノ飲證ト總稱スルモノノ内ニハ肋膜腔以外ノ停水ヲモ混淆スルコトハ、諸書ニ記スルコロヲ見テ之ヲ知ルベシ。

第四 消化器病

食道狹窄

内經ニ膈 (又ハ隔又ハ鬲ニ作ル) ノ症アリ。病源候論ニ噎ノ症アリ、ソノ噎ト言フハ飲食ノ咽喉ニ窒塞スルヲ言ヒ、膈ト言フハ飲食ノ胸内ニ窒塞スルヲ言フ、隋・唐ノ代ニハ五噎五膈ヲ別チテ膈ト噎トヲ二證トナシタレドモ、後世ノ醫書ハ多クハ噎膈ト連稱シテ之ヲ同一ノ症トナセリ、ソノ症候ヲ案ズルニ食道狹窄ニシテ、ソノ五十歳以上ノ老人ニ發シ、兩親ヨリ遺傳スルコトアリト言フニ徴スレバ、ソノ症ハ食道癌腫ニ由ルモノヲ多シトスベシ。

食道瘰癧

外科百効全書ニ梅核氣ノ症ヲ擧ゲ『積熱ニ依リテ痰ヲ生シ、結ンデ核ノ如ク、喉中ニアリテ之ヲ吞ムトキハ下ダリ、吞マザルトキハ喉ニアリ』ト言ヒ、萬病回春ニ『梅核氣ハ吐ケドモ出デズ、嚥メドモ下ラズ』ト記セルハ、食道瘰癧ノ症ナラン。

胃加答兒

飲食不攝ニアリテ腸胃ノ障碍ヲ致スコトハ、太古ノ人モ既ニ之ヲ知り、靈樞ニモ『飲食自倍、腸胃乃傷』等ノ語アリ。病源候論ニ至リテハ宿食不消・食傷飽ノ諸症ヲ擧ゲ、後世證治要訣以下ノ書ニハ傷食ノ一門アリ。コレ皆ナ急性胃加答兒ノ症ヲ指スモノナリ。

留飲ノ名ハ金匱方論ニ出デ、病源候論・千金方等、隋・唐ノ醫書皆ナコレヲ掲ゲ、後世又之ヲ停飲・水飲等ト稱ス。ソノ症ハ概ネ慢性胃加答兒ナリ。留飲ノ一種ニ淡飲ト言フモノアリ。病源候論ニ『淡飲者、由三氣脉閉塞津液不通、水飲氣停、在三胸府^一、結而成レ淡、又其人素盛、今瘦水走三腹間^一、漉々有聲、謂之淡飲^一、其爲レ病也、胸脇脹滿、水穀不消、結在三腹内兩肋^一、水入三腸胃^一、動作有聲、身體重、多唾、短氣、好眠、胸背痛、甚則上氣、欬逆、倚息、短氣、不得臥、其形如腫』ト言フニ依リテ見レバ、胃擴張ニ因スル慢性胃加答兒症ナラン。

食癖 (又癖病) ト稱スルモノアリ。醫心方ニ病源候論ヲ引テ『癖者、脾胃爲三水穀之海^一、食不消、偏三僻一邊^一、故名爲レ癖』ト言ヒ、又絃癖ノ一症ヲ癖病中ニ掲ゲ『絃癖之疾、亦不レ專ニ於一^一、絃病者、肝之所レ生、癖病者、脾之所レ成、絃生ニ於左^一、絃成ニ於右^一、』ト記スルヲ見レバ、癖病 (疝癖ヲ含ム) ハ主ニ慢性胃加答兒ノ症ヲ指スニ似タリ。ソノ他胃加答兒ノ證候タルベキ惡心・噁酢・嘔吐・干嘔・噦等ハ病源候論以下ノ諸書、皆ナ之ヲ各一個ノ病症トシテ擧ゲタリ。

醫心方ニハ惡心ニココロタシノ訓ヲ附シ、噁酢 (吞酸・吐酸・吐酢トモ書ス) ニココロヤケ、嘔吐 (歐吐トモ書ス)

ニムカツク又ヘトツク、干嘔（乾嘔トモ書ス）ニオクビ、噦ニセクリノ訓ヲ附シタリ。

鼓脹及ビ腹水

鼓脹ノ名ハ素問ニ出デ一ニ氣脹ト稱ス。千金方ニハ蟲脹ノ稱ヲ掲グ。脹滿ノ名モ亦素問ニ出ヅ。唐以後ノ稱呼ハ煩雜ニシテ列擧スルニ堪ヘズ。要スルニ脹滿ト言ヘバ腹滿ノ總稱ニシテ、鼓脹ト言フハ脹滿ノ狀、大鼓ノ如クニ成レルナリ、故ニ鼓脹ト脹滿トハ同一症ニシテ、ソノ内ニ水脹（Ascites）ト氣脹（Tympanites）トノ別アルノミ^⑤。

原南陽ノ醫事小言ニ『我邦ノ俗ニ龜腹ト云フハ腹大滿、箕ノ如ク、腹面筋絡浮キ出デテ龜背ノ如シ』ト曰ヒテ、

龜腹ヲ鼓脹ニ充テタレドモ、香川修庵ノ行餘醫言ニハ『有ニ腸覃一證一、俗間所レ謂龜腹是也、多是不產婦人、在ニ四
十内外一、有レ之、以下其大腹如ニ龜鼈之甲一、有ニ筋絡一、如中鼈背上、故俗間謂ニ之龜腹一』ト言フ。腸覃ノ名ハ靈樞
ニ出デ『寒氣客ニ于腸外一、與ニ衛氣ニ相搏、氣不レ得レ營、固有レ所レ繫、癖而内着、惡氣乃起、瘕肉乃生、其始生也、
大如ニ鶏卵一、稍以益大、至ニ其成一、如ニ懷子之狀一、久者離レ歲、按レ之則堅、推レ之則移、月事以レ時下』（靈樞、水
脹篇）ノ症ニシテ、大較腹水ノ症ニ似タリ。

醫心方ニハ積聚・疝痞ニ併セテ癥瘕ノ一門ヲ立テ、コレニカメハラノ訓ヲ附シタリ、ソノ癥瘕ト言フハ積聚ノ類
ニシテ腹裏塊物手ヲ以テ徵スベキヲ癥ト言ヒ、ソノ形假ニシテ移動スベキモノヲ瘕ト言フ、故ニソノ症ハ單ニ今日
謂フ所ノ腹水ヲ指スモノニハアラス（醫心方ニハソノ水病證中ニ大腹水腫ヲ舉ゲタリ）ト雖モ、ソノ中ニハ必ズ腹
水ヲ混淆セシナラム。

胃擴張

張仲景ノ金匱方論ニ胃反ノ證アリ、ソノ說ニ『脾傷、則不レ磨、暮食朝吐、宿穀不レ化、名曰ニ胃反一』ト言フ。千
金方ニハ之ヲ反胃ト名ヅケ、ソノ後之ヲ飜胃ト曰フ。我ガ醫心方ニハ胃反吐食ノ名目ヲ設ケ、病源候論ヲ引テ『胃
反、營衛俱虛、其血氣不足、停水積飲、在ニ胃管一則藏冷、而脾不レ磨、脾不レ磨、則宿穀不レ化、其氣逆、而成ニ胃反
一也、則朝食暮吐、暮食朝吐、心下牢大如レ杯、往往寒熱、甚者食已、即吐也』ト論ジ、ソノ他葛氏方等ヲ引テ『胃
反、大吐逆、胸痛、羸瘦、云々』、『胃反、不レ受レ食、食畢輒吐出』、『胃反而渴』等ノ證候ヲ舉ゲタリ、依リテ攷フ
ルニ胃反ト稱スルモノハ胃擴張ノ症ナラン。

腸加答兒

素問ニ泄ト言ヒ、或ハ洩ト言フモノハ、後世宋以後ニ謂フトコロノ泄瀉ニシテ、大便漏通ノ義ナリ。之ヲ下利、
或ハ滯下ト名ヅクル症、即チ痢疾（今ノ赤痢）トハ區別スベクシテ、ソノ證ハ全ク腸加答兒ニ外ナラス。

霍亂（特發性虎列刺）

霍亂ノ症ハ古代ヨリ存在シ、病源候論・千金方以下ノ醫書ニ其證候ヲ叙スルコト稍詳ナリ。醫心方ニハ病源候論・
葛氏方・千金方等諸書ノ說ヲ引用シ、『霍亂、言ニ其病揮霍之間便致ニ繚亂一也』、『凡所ニ以得ニ霍亂者、多起ニ於飲
食一、或飽ニ食生冷物一、雜以ニ肥鮮酒膾一、當レ風、履レ濕、薄衣露坐、或夜臥失レ覆之所レ致也』ト説キ、和名類聚鈔
ニハ、コレニシリヨリクチヨリコクヤマヒノ訓ヲ附シタリ。

腹膜炎

本問玄調ノ內科秘錄ニ『急鼓脹ハ急發ノ鼓脹ニテ、往々有レ之ト雖モ、世醫誤テ食傷ノ腹滿トシ、或ハ徒ニ寒疝ト
爲シテ其病因ヲ明辨セズ』ト言ヒ、『此病諸證、寒疝ニ似タレドモ、寒疝ハ死スルコト無シ、此證ハ輕重共ニ必死ノ
モノナレバ、其因自カラ殊ナリ』ト論ゼルハ、腹膜炎ノ症ヲ指スモノナリ。之ヲ古書ニ探ルニ素問ニ衝疝（骨空論

曰、此生^レ病、從^二小腹^一、上衝^レ心、而痛、不^レ得^二前後^一、爲^二衝疝^一ト言フモノ或ハコノ證ナランカ。又素問ニ『心痛暴脹』ノ語アリ。聖濟總錄ニ『心腹卒脹痛』ノ語アリ、コレ皆ナ腹膜炎ノ症ヲ指スニ似タリト雖モ明確ナラズ^⑤。

關格ト名ヅクル一症アリ。病源候論ニハ單ニ大小便不通ノ發證ヲ舉グルニ過ギザレドモ、肘後方（醫方類聚引クトコロ）ニハ『風寒、冷氣入^レ腹、忽痛堅急如^二吹狀^一、大小便不^レ通、或小腹有^レ氣結、如升大脹起、名爲^二關格病^一』ト記シ、卒暴ノ病ニシテ大小便不通ヲ以テ主徵トナスコトヲ言ヒ、沉氏尊生書ニハ『關格、卽內經三焦約病也、約者不行之謂、謂三焦之氣、不^レ得^二通行^一也、惟三焦之氣不^レ行、故上而吐逆、曰^レ格、下而不^レ得^二大小便^一、曰^レ關』ト記シソノ主徵ノ吐逆ト大小便不通トナルコトヲ言フ。コレニ依リテ攷フルニ、關格ト名ヅクル病症ハ腹膜炎ナラシ、彼ノ腸管閉塞症ノ如キ症ヲコノ内ニ混淆セシコトヲ疑フモ亦當サニ然ルベキコトナリ。

十二指腸蟲病

我が邦ノ俗ニフクビヤウト言フ病アリ。岡本一抱ノ病因指南（元祿八年）ニハ之ヲ黃腫臍病ニ擬シ、『黃腫臍病ハ和俗ノ所謂不久比也。宇ナリ、黃疸ト同ジキガ如クニシテ異ナリ、黃疸ハ面目周身俱ニ黃色ナルノミ腫ルルコトナシ、臍病ハ腫レテ身面青黃色ナル中ニ白色ヲ帶ビテ目中ハ常ノ如シ』ト言ヒ、香月牛山ノ牛山活套ニハ『黃臍病ト云フアリ、黃疸ノ種類ニシテ脾胃ノ敦阜ニシテ濕熱積實ノ病ナリ、和俗フク病ト云ヒ又坂下ト云フ、平胃散ニ鐵粉ヲ加ヘテ細末トシテ用ヒ其効神ノ如シ、此症ヲ治スルニ本邦ニ傳來スル所ノ粉藥アリ、皆鐵粉ヲ加味スルナリ』ト論ゼリ。依リテ考フルニソノ症ハ高度ノ貧血ナルニ似タリ、而カモ源養德ノ脚氣類方（寶曆十三年）ニ『近世、有^下名^二浮苦病^一者上、方言也、其症肢體黃腫、胸腹爲^レ脹、治^レ之、以^二水荳鐵粉之劑^一、服者多^レ愈、蓋田夫野人、多^レ罹^二此疾^一、或云、黃臍也、又有^下名^二母多足^一者上、一名坂下、皆方言也、足脛爲^レ腫、起居如^レ常、甚者難^二步履^一、今時屢見^二兩足粗大、與^レ疾老者^一、卽古所謂壅疾是也』ト記載セルヲ見レバフクビヤウト言ヘル病ハ田夫野人ニ多ク、又原南陽ノ叢桂亭醫事小言（享和三年）ニ『黃臍ハ今民間ニ多ク、中人以上ニ稀ナル病ニシテ、糞土ノ氣ニ感ジテ病ムト云フ、浮苦病又ハ阿遠ノ病ト呼ビ又ゼイフクトモ呼ブ、方言多シ、爪甲反テ薄ク、或ハ摧ケテ長ゼズ、或ハ片片ニヘゲテ枯衰スルモノ、其先崩ナリ、虛里ノ動強ク、人迎ニ響キ、喘悸シテ起步執作スレバ、益甚シク眩暈ス、此證先ヅ起步セント欲スレバ、未ダ起步セザルニ喘息ス、故ニ坂ヲ登ラントスルニ、坂ヲ望ムト立所ニ喘ス、坂下ト呼ブハ此ニテ名ヅクルナランカ、又坂ヲ登ルコトナラヌト云フノ名カ、久シキヲ經レバ面色青黃微腫ス』ト叙述シテフクビヤウト言ヘル病ハ糞土ノ氣ニ感ジテ病ムノ說アリト言ヒ、又民間ニ多シト言ヒテ單一ノ貧血症ナリトハ思ハレズ。今日ノ俗稱尙ホ坂下又ハアオノ病ト名ヅクルトコロノ病ヲ見ルニ、多クハ十二指腸蟲ニ因スル貧血症ナルニ據リテ推考スレバ、所謂フクビヤウハ高度ノ貧血症ニシテ、ソノ多數ハ十二指腸蟲病ナラン。

腸内寄生蟲

素問ニ、長蟲・短蟲ヲ舉ゲ、靈樞ニ『腸中有^レ蟲』・『腸中有^二蟲瘕及蛟蛭^一』ノ說ヲ載セ、傷寒論ニ至リテ始メテ『吐蛭・蚘厥』ヲ說キ、病源候論ニ九蟲ノ稱アリ。九蟲トハ伏蟲・蛭蟲・白蟲・肉蟲・肺蟲・胃蟲・弱蟲・赤蟲・蟻蟲ヲ曰フ（第一〇三頁參照）。然レドモソノ主要ナルモノハ蛭蟲・白蟲・蟻蟲ノ三蟲ナリ（名醫別錄ニ始メテ三蟲ノ稱アリ）。

蛭蟲ハ今日吾人が謂フトコロノ蛔蟲ナリ、蛭ノ字、或ハ蛭ニ作り、或ハ蛔ニ作ル。蛭ハ靈樞ニ出デ、蛔ハ關尹子

ニ出ヅ、ソノ他食蟲（仁齊直指）・蛟蝮（東垣試効方）・石虻（醫書大全）等ノ名アリ、近世柘植彰常ノ蔓難錄（享和元年）・喜多村直ノ虻志（文政三年）・糟谷駿ノ虻病發蘊（天保四年）等、蛔蟲ノ專書アリ、蛔蟲ノ症ヲ論ズルコト甚詳ナリ。

白・蟲・ハソノ寸節ヲナシテ白キヲ以テ寸白蟲ト稱ス（寸白ノ名ハ始メテ名醫別錄ニ見ユ）。今日吾人ガ繚蟲ト名ヅクルモノ即チ是ナリ。我ガ邦ニアリテモ平安朝時代既ニ寸白病アリ、又コレニ關スル記載アリ（第一〇三頁參照）。
蟻・蟲・ハ病源候論ニ『形甚小、如_二今之蝸蟲狀_一、亦因_三府藏虛弱_一、而致_二發動_一、甚者、則能成_三痔瘻疥癬癩癰疽瘡_一、』ト記スルヲ見レバ、今日吾人ガ謂フトコロノ蟻蟲ニハ的當セズ、但シ之ヲソノ中ニ混淆セルモノナルヤ否ヤハ明カナラズ。

第五 泌尿器病

腎臟病⁶⁾

古代支那ノ醫家ハ腎臟ヲ以テ元氣ノ繫ルトコロトナシ、病源候論ニハ腎病ノ證ヲ虛・實ノ二ニ別チ、ソノ腎實（腎氣盛）ハ『腹脹飧泄、體重喘咳、汗出憎風、面目黑、小便黃』ヲ以テ徵トシ、腎虛（腎氣不足）ハ『腰背冷、胸內痛、耳鳴苦聾』ヲ以テ徵トナセリ、而シテ左右ノ腎臟ヲ別チテソノ左ヲ腎臟トシ、右ヲ命門トシ、腎及ビ命門ノ實證ト虛證トヲ區別シ、唐以來諸家ノソノ證候ヲ論ズルコト太ダ複雑ナリ。而レドモ諸家論說ノ要旨ヲ攷フルニ、腎及命門ノ實症トスベキモノハ尠ナク、虛症トスベキモノハ甚ダ多ク、ソノ腎實證ハ腎實熱、命門實證ハ強陽不倒（強中病 Satyriasis）・水竅澀痛ニシテ、腎虛證ニ屬スルモノハ、腎虛腰痛・脚氣（脚弱脚痺ノ類）・骨乏無力（腎ハ骨ヲ主ドルガ故ナリ）・骨蒸潮熱（肺勞）・傳尸勞（肺勞）・五心煩熱・夢遺泄精（遺精 Pollutionen 精液漏 Spermatorrhoe）・小便短澀・熱赤頻數・溺有餘瀝・溺血・血淋（血淋ハ澀痛シ、溺血ハ痛マズ）・傷精白濁（房勞過度ニ依リテ、精傷流出ヲ致スナリ）・五淋（氣淋・血淋・石淋・膏淋・勞淋）・精塞・水竅不通（房慾不竟・或思慾不遂或ハ懼泄忍精等ニ屬ス）・齒浮眞牙搖動及下齦軟・或齒衄・消渴（糖尿病）・下消（腎消トモ言フ）・善恐（腎ハ志ヲ藏スルガ故ナリ）・陰竅漏氣・疝（腎虛寒ニ屬ス）・奔豚（一ニ賁豚ト曰フ、五積ノ一ニシテ腎積ナリ、思慮痺ヲ傷ブリ腎ニ傳ヘテ腎積ヲナス、ソノ形豚ノ走ルガ如ク、小腹ニ發シテ一處ニ居ラザル症ナリ、奔豚氣ハ歇斯の里ニ近シ）ノ十八證、命門虛證ニ屬スルハ陰萎（Impotencia）。精寒精薄・腎泄（五更及黎明泄瀉スルモノ是ナリ、腎瀉又五更瀉ト曰フ）・畏寒足冷ノ四證ナリ。

コノ如ク支那醫方ノ腎臟病ナリトスル範圍ハ、甚ダ廣汎ニシテソノ中ニハ肺勞・遺精・陰萎・疝痛・腰痛・脚痛等ノ諸症ヲモ混淆シタリ、コレ支那醫方ノ解剖學及ビ生理學ガ腎臟ヲ見ルコト今日吾人ガ知ルトコロニ異ナリ、腎ヲ以テ『志ヲ藏シ、骨ヲ養フノ藏ナリ』トナセシガ爲ニシテ、從テソノ病證モ小便分泌ノ障礙ニ關スルモノノミニアラザリシナリ。

膀胱病

病源候論ニ膀胱病候ヲ論ジテ『膀胱、象_レ水、腎之府也、五穀五味之津液、悉歸_ニ於膀胱_一、氣化分入_ニ血脈_一、以成_ニ骨髓_一也、而津液之餘者、入_レ胞則爲_ニ小便_一、其氣盛爲_ニ有餘_一、則病熱胞瀆、小便不_レ通、小腹偏腫痛、是爲_ニ膀胱氣之實_一也、膀胱氣不足、則寒氣容_レ之、胞滑、小便數而多也、面色黑、是膀胱氣之虛也』ト説ク。即チ支那醫家ノ説ニ依レバ、膀胱ハ泌尿器ニシテソノ氣盛ナレバ小便通ゼズ、ソノ氣不足ナレバ利尿頻數トナルヲ以テ徵トスト言フナリ。

古來支那醫方ノ書ニ、尿ノ疾病トシテ擧ゲタルハ、濁症・淋證・遺溺・小便多・小便閉等ナリ。

濁證トハ尿ノ溷濁スルモノヲ言フ、小便白クシテ濁レルヲ白濁ト言フ。病源候論ニ詳カニソノ證ヲ論ゼルヲ見レバ、膀胱加答兒ヲ指スニ似タリ。後世ノ書ニハ赤濁ノ一證ヲ擧ゲ、赤濁トハソノ溷濁ノ赤色ヲ呈スルモノヲ言フ。而シテ濟生方ニ『思慮不レ節、嗜慾過レ度、遂使三水火不レ交、精元受レ守、由レ是爲三赤濁、白濁之患ニ焉、赤濁者、心虛有レ熱也、多因三思慮一、而得レ之、白濁者、腎虛有レ寒也、過三於嗜慾一、而得レ之』ト言フニ徴シテ明カナルガ如ク、小便色ノ白キヲ虛寒ニ屬シ、赤キヲ實熱トナシ、兩者ヲ區別シタレドモ、固ヨリ確實ノ論ニアラズ、故ニ後ニハ赤白併列シテ、之ヲ赤白濁ト稱シタリ。

淋證ハ後世淋疾ト稱スルモノニシテ、素問ニハ癰(宣明五氣篇曰『膀胱不レ利爲レ癰』)ト稱シ、靈樞ニハ閉癰ト稱ス。後世ノ書醫學綱目ニ『癰者久病、爲三溺癰一、淋瀝點滴而出、一日數十次、或百次、名三淋病一是也』ト言フ、小便澁痛通ジ難キ病ヲ指スナリ。張仲景ニ至リテ始メテ淋ノ名ヲ用ヒ(今行ハルルトコロノ素問(六元正紀大論)ニ『小便黃赤、甚則淋』ト記載セルハ、後ニ王冰ガ添エシトコロナラン)『淋之爲レ病、小便如三粟狀一、小腹弦急、痛引三臍中一』ト説ク(金匱方論)。降りテ隋・唐ノ代ニ及ビテハ病源候論ニ石淋・勞淋・血淋・氣淋・膏淋ヲ區別シ、集驗方ニハ五淋ノ目ヲ立テ、石淋・氣淋・膏淋・勞淋・熱淋ヲ列擧シ、コレヨリ五淋ノ名專ラ行ハル。宋以後ニアリテハ更ニ沙石淋・濕淋・暑淋・白淋・虛淋・冷淋・急淋等ノ諸證ヲ擧ゲ、所論複雑ナレドモ要スルニ淋證ハ主ニ膀胱炎等ニシテ、小便淋瀝タル症ヲ指シテ言フニ外ナラズ。

遺溺ノ證ハ既ニ素問ニ出ヅ、ソノ宣明五氣篇ニ『膀胱不レ約、爲三遺溺一』ト記述スルモノ即チコレナリ。病源候論ニハ尿牀ノ候ヲ擧ゲ『夫人有下於三眠睡一不レ覺三尿出三者上、是其稟質、陰氣偏盛、陽氣偏屈者、則膀胱腎氣俱冷、不レ能レ溫三制於水一、則小便多、或不レ禁而遺尿』ト説キ、千金方・外臺秘要方以下ノ書、多クハ皆ナコノ説ヲ引キタリ。後世直指小兒方ニハ『出而不レ禁、謂三之遺尿一、睡裏自出、謂三之尿牀一』ト言ヒテ遺尿ト尿牀トヲ別チ、景岳全書ニハ遺溺ニ自遺(睡中遺失)ト不禁(頻數不レ能レ禁)ト遺失不覺トノ三證ヲ別チ、輕重ノ度ニ依リテ之ヲ名ヅクト説キタリ。ソノ遺失不覺ト言フモノハ香川修庵ガ『又有三痲證遺尿一、方下其卒倒鼾睡、不レ省三人事一之時上、必失尿、此亦夢中不レ覺三尿出也』ト説ケルモノニシテ、神經疾患ニ見ルトコロノ失禁症ヲ言フナリ。

小便多ノ證ニハ小便利多・小便數・小便不禁・午前數尿・小便餘瀝、等ヲ區別シタリ。

小便閉ハ古ハ癰閉・溺閉又ハ小便不通ト稱ス。(醫學綱目ニ曰ク『閉者、暴病、爲三溺閉一、點滴不レ出、俗名三小便不通一』ト)小便閉ハ後世ノ名稱ニシテ、香川修庵ハコレニ胞閉ノ名稱ヲ附シタリ。

別ニ轉胞ノ一證アリ金匱方論ニ載スルトコロヲ見レバ、轉胞ハ專ラ婦人ノ小便閉ヲ指セドモ、病源候論ニ記スルトコロヲ見レバ『胞轉者、由三是胞屈辟一、小便不レ通、名爲三胞轉一、其病狀、臍下急痛、小便不レ通、是也』ト言ヒ、轉胞(病源候論ニハ胞轉ト名ヅク)ハ獨リ婦人ニ限ルニアラズ。近世朱震享ノ格致餘論ニ胎婦轉胞病ノ論ヲ擧ゲ、始メテ之ヲ妊婦ノ病トナシテヨリ、諸家多ク之ニ從ヒ、遂ニ轉胞ヲ以テ妊娠ノ尿閉ヲ指シテ言フニイタレリ。

第六 神經系病

支那醫方ノ所説ニ依レバ、精神作用ハ五藏ニアリ『神ハ心ニ藏ル、魂ハ肝ニ藏ル、精ハ腎ニ藏ル、魄ハ肺ニ藏ル、志ハ脾ニ藏ル』ト論ジ、腦ノ頭蓋内ニアルコトヲ知レドモ、之ヲ髓トナシテ貴重ナル藏府トナサズ、從テソノ機能ヲ論ズルトハ吾人が今日知ルトコロニ同ジカラズ。而シテ我が邦ノ醫家ガ腦ヲ以テ精神ノ府トナシ、神經汁コレ

ヨリ出デ、神經ノ循行スルトコロニ沿ヒ四肢百骸ニ至リテソノ運營ヲナスモノナリト言ヒテ、腦及ビ神經ノ機能ヲ詳ニセシハ、寶曆年間西洋醫書ノ翻譯セラレテヨリ以來ノコトナリ。故ニ古昔ノ醫家ガ、神經系病ノ因由及ビ病理ヲ論ズルヤ、今日吾人ガ言フトコロニ同ジカラザルハ勿論ノコトナレドモ、而カモソノ證候ノ觀察ニ至リテハ、既ニ古代ヨリシテ比較的精細ナルモノアリシナリ。

腦出血

近世醫俗謂フ所ノ中風ノ證ハ既ニ素問・靈樞ニ見エ『其有三虛一、而偏中ニ於邪風一、則爲三擊仆偏枯一矣』(靈樞、九宮八風篇)ノ說アリ。ソノ擊仆トハ卒然トシテ仆倒スルコト、猶ホ擊ツトコロアリテ倒ルルガ如キヲ言ヒ、偏枯トハ身體偏廢シテ吾ガ用ヲナスコト能ハザルヲ言フモノニシテ、ソノ腦出血ノ證ヲ指スコトハ想像スルニ難カラズ。病源候論ニ至リテハ證候ノ記述、更ニ精緻ニシテ半身不隨・口喎・口噤不開・舌強・言語不正・失音・聲嘶・聲噎・驚悸・身體不仁・四肢不屈伸・身體如蟲行等ヲ擧ゲタリ。

ソノ原因ヲ論ズルヤ隋・唐以上ノ諸家ハ外襲ノ風邪ニ依ルモノトセシガ、降りテ金・元ノ代ニ及ビテ劉完素出デテ新說ヲ立テ『凡人風病、多因三熱甚一、而風燥者、爲三其兼化一、以レ熱爲三其主一也、云々、所ニ以中風癱瘓一者、由ニ乎將息夫一宜、而心火暴甚、腎水虛衰、不レ能レ制レ之、則陰虛陽實、而熱氣佛鬱、心神昏冒、筋骨不レ用、而卒倒無レ所レ知也、多因三喜怒思悲恐之五志有レ一所下過極上、而卒中者、由三五志過極一、皆爲三熱甚一故也』(原病式)ト言ヒテ、火ヲ主トシ、李東垣次デ興リテ『陽之氣、以三天地之疾風一、名レ之、此中風者、非ニ外來風邪一、乃本氣自病也、凡人年逾三四旬一、氣衰之際、或憂喜忿怒傷ニ其氣一者、多有ニ此疾一、』『中ニ血脈一、則口眼歪、中レ府則肢節廢、中レ藏則生命危』(醫學發明)ト說キテ氣ヲ主トシ、朱丹溪ニ至リテハ『濕土生レ痰、痰生レ熱、熱生レ風』、『半身不レ遂、大率多レ痰、在レ左屬ニ死血與ニ無レ血、在レ右、屬レ痰、屬ニ氣虛一、』(丹溪心法附餘)ト論ジテ濕痰ヲ以テソノ因由トナシタリ。ソノ後許叔微ハ『喜怒哀愁、氣逆シテ此疾ヲ得ルモノ』(本事方)トナシ氣中ノ證ヲ擧ゲ、王肯堂ニ至リテハ中氣ノ證ヲ中風ニ併列シ、『七情ノ内傷ニ因リ氣逆シテ病ヲナスモノ』ヲ中氣ト名ツケタリ(證治準繩)(第一九一頁參照)。

我が邦ニアリテハ、平安朝時代ノ醫書ニ風病ノ目アリ、當時ノ物語類ニモカゼノヤマヒ又ハカゼト名ヅクル病ノ紀事アリ。今日俗ニ謂フトコロノ中風ガ當時存在セシコトハ明カニシテ(第九十八頁、第一三四頁參照)醫心方ニハ病源候論等ノ諸書ヲ引キテソノ說ヲ立テ、外襲ノ風邪ニ依リテコノ病ヲ發スト論ジタリ。

室町時代ヨリ安土・桃山時代ニ至リ金・元ノ醫學、我が邦ニ入ルニ及ビテ劉守真以下ノ諸家ノ論說從テ行ハレタリ。爾來諸家ノ說アレドモ徒ニ名ヲ立テ因ヲ說クノ紛冗ナルノミニシテ、別ニ發明ノ說アルニアラズ。江戸時代・中世古方醫學勃興スルニ方リテ、コノ病ニ關スル諸家ノ著述ニモ見ルベキモノアリシガ、ソノ中先ツ擧グベキハ香川修庵ノ痲說ナリ。香川修庵ハ古今諸家ノ論說ヲ折衷シテ『痲、即今醫俗所レ謂中風之總稱也、或偏廢、或全廢、或多忘癡心、雖使不三卒死一者、終是廢人、故總謂三之痲一、夫痲之爲レ病、多必先爲三卒倒一、其卒發之狀也、忽然僵仆委レ地昏憤不レ省ニ人事一、如三沈醉人一、或牙關緊急、或痰涎壅塞、咽喉作三喘響一、如三拽レ鋸聲一、或口眼喎斜、手足癱瘓、或半身不レ遂、或頻頻大缺、或睡息必鼾、或遺尿失禁』ト言ヒテ、古名ノ痲ヲ中風ニ當テ、ソノ症狀ヲ叙シテハ『卒倒醒後、多成ニ癩證一、不レ爲三卒倒一、而直成レ癩者、比々亦有レ之、癩、即醫家所レ謂偏枯是也、夫癩之爲レ證、手足及身、或左、或右、或軟弱、或痛刺、一偏廢、而不レ能レ遂ニ吾用一是也、言ニ其兼證一、或眉目蠕動、口眼喎僻、或頭面顫掉、或手指肘膈酸痛拘攣、癱瘓不仁、或足指膝脰酸痛拘攣、癱瘓不仁、或手足躡曳不レ覺ニ痛痒一、或肌肉潤惕、皮膚頑厚、或緩弱沈重、四肢不レ收、或勁直急縮、不レ得ニ屈伸一、或全軀煩痛、遍身頑朴麻癢、或筋脉攣縮、

四肢曲拳、或體中一處不仁酸痛、或皮膚習習、瘙痒如蟲行^一、頑冷如鐵石^一、或舌強語言蹇澁、或目爛垂淚、唇緩流涎、或好睡、或屢缺、或頻笑、或悲啼、或怒罵、或發狂妄言、或神志懵懂如醉如癡、情意恍惚、目乏精彩^一、或多忘不^レ記^一今昔之事^一、諸證大槩如^レ此^一』ト言ヒ、ソノ因由ヲ論ジテハ、『飽食塞^レ胃、暑寒犯^レ體、元氣爲^レ之鬱遏、不^レ得^二施展^一、癥疝瘀血、乘^レ虛衝逆、閉^二絕氣道^一、遂乃致^二半身不^レ用等諸證^一、癥疝瘀血在^レ左、則左身不^レ遂、在^レ右、則右體不^レ隨、男子左右共病、而患^レ左爲^レ多、婦人左右共病、而患^レ右爲^レ多』ト曰ヒ、古ノ所謂中風ハ即チ傷風ニシテ痲痛(腦出血)ハ癥疝瘀血ニ因リ、外襲ノ風邪ニ由ルニアラザルヲ以テ中風ト言フハ不可ナリトシ、而シテソノ半身不隨ノ症ヲ呈スルモノハ、獨リ痲症(腦出血)ノミニ限ラズシテ微毒ニ依リテモ、亦之ヲ起スコトアルヲ説キタリ。コレヨリ以後、諸家ノ説ハ多ク實試ニ出^レデ、議論更ニ精緻ナルヲ得タリ。

癩癩

内經ニ癩狂篇アリ、中ニ癩疾・癩病又ハ胎病ノ名目ヲ舉ゲ、又癩・癩眩・癩瘕等ノ名目ヲ舉グ。次^レデ病源候論ニハ五種ノ癩病ヲ別チ、ソノ風癩ノ證候ヲ説キテ『人在^レ胎、其母卒大驚、精氣并居、令^二子發^レ癩、其發則仆^レ地吐涎沫^一、無^レ所^レ覺』ト言ヒ、別ニ癩ノ名目ヲ立テ『癩小兒病也、十歲以上爲^レ癩、十歲以下爲^レ癩』ト言フ。内經・病源候論ニ書ニ記述スルトコロヲ案ズルニ、ソノ癩病ト言フモノハ疑ヒモナク癩癩(Epileptic)ニシテ、癩病ト言フモノハ後世驚風(腦膜炎 Meningitis 等)ト稱スルモノヲ指スニ似タリ、而シテコノ頃ハ大人ノ癩癩ト小兒ノ驚風トヲ以テ同一ノ疾病ナリト解釋セシナリ。(岡本一抱ノ病因指南ニ『癩癩ハ和二謂ユル久津知、狂ハ俗ニ云フ幾知加比又毛乃久留比ナリ。内經、癩狂篇ニ於テ、癩癩ト狂症トノ二病ヲ問答シ玉フコト明ナリ、後世誤リテ癩ヲ以テ狂症トナシ、癩ヲ以テ久津知トス、通評虛實論、奇病論等ヲ以テ之ヲ考フルニ、癩ト癩トハ一症ニシテ久津知ノ病タルコト明ケシ、癩ヲ狂トシ癩ヲ久津知トスルハ後人ノ謬説ナリ』ト論ゼリ。)

然ルニ、後世宋以後ニ及ビテ癩ト狂ト癩トヲ別チテ三症トナシ、醫學正傳ニハ『大抵狂者、爲^二痰火實盛^一、癩爲^二心血不足^一、多爲^レ求^二望高遠^一、不^レ得^レ志者有^レ之、癩病獨主^レ痰、因^二火動之所^レ作也、治法癩宜^レ吐、狂宜^レ下、癩安^レ神養^レ血、兼降^二痰火^一』ト説キ、玉機微義ニハ『古方以^二癩癩^一、或併言、或言^二風癩^一、或言^二癩狂^一、所^レ指不^レ一、蓋癩病歸^二于五藏^一、癩病屬^二之於心^一』ト論ジ、以テ癩症ト癩及ビ狂トヲ區別シ、癩症ヲ以テ癩癩トシ、癩ヲ以テ靜ナル狂症トシ、狂ヲ以テ躁シキ狂症トナシタリ。

我が邦ニアリテハ平安朝時代、醫心方ニ中風癩病ト中風狂病トノ二症ヲ舉ゲテ、癩癩ト狂症トヲ區別シ、萬安方ニモ『風狂、陽病也、モノクルハシ、如^二邪鬼崇^一』ト『風癩、陰病也、クツチ、小兒曰^レ癩』トノ二門ヲ別チ、癩(癩癩)ト狂(狂症)トヲ分チ論ジタリ。(但シ當時癩狂ノ名稱ガ癩癩ヲ包含セルコトハ精神病ノ條下ニ舉グルガ如シ)降りテ安土・桃山時代以後ニ至リテ、金・元醫學ノ輸入セラルルニ際シ、癩・癩・狂ノ三症ヲ別ツノ説行ハレ『癩者心血不足也、又曰、癩者、喜笑不^レ常、癩倒錯亂之謂也』・『狂者、痰火實盛也、又曰狂者狂亂、而無^二正定^一也』・『癩病者、卒時暈倒、身軟咬牙、吐^二涎沫^一、不^レ省^二人事^一、隨後醒』(奈須玄竹ノ醫方聚要ニ據ル)ト論ジ、癩症(病名彙解ニ『癩症俗ニ云フクツチカキナリ』ト記ス)ヲ以テ癩癩トナシタリ。

江戸時代・中世以後ノ諸書ニハ大抵癩癩ノ稱呼ヲ用ヒ、癩狂ト併列シタリ(醫療手引草)。香川修庵ニ至リテ癩ハ

驚・癲・狂ノ總名ナリトノ説ヲナシ、『凡癩之爲レ癲、爲レ狂、爲レ驚、雖三外見ニ異狀、而其實、則同一癩疾、或有ニ癲狂兼發者、或有ニ驚狂兼發者、或有ニ癲狂兼發者、』ト説キ、癲癩ヲ以テ精神病トソノ本ヲ一ニシソノ證ヲ異ニスルモノナリトシ、兩症ハ互ニ相併發スルモノアルコトヲ主張セリ。コノ頃ヨリシテ癩症ハ神經病ノ總稱トナリ、癲(靜ナル精神病)モ狂(躁ガシキ精神病)モ癩(癲癩)モ共ニ之ヲ癩症ト稱スルニイタレリ。

瘧病(強直)

瘧病ハ我が邦ノ俗ソリケノ病ト言フ(牛山活套)。平安朝時代醫心方ニハ瘧ニスクムノ訓ヲ附シ、鎌倉時代萬安方ニハソリノ病ト訓ズ(萬安方ニハ瘧ニ代フルニ角弓反張ノ稱ヲ以テセリ)。支那ニアリテハ上古ヨリコノ病アリ。靈樞ニ『熱而、瘧者死、腰折瘦癯、齒噤齧也』・『風瘧身反折』・『瘧強拘瘿』ノ語アリ、病源候論ニ詳カニ瘧病ヲ説キ『風瘧者、口噤不開、背強而直、如發癩之狀、其重者、耳中策々痛、卒然身體瘧直者者、死也』・『身強直反張如レ弓、不三時醒一者謂之瘧、』ト言フニ依リテ見レバ、瘧病ト稱スルモノハ強直(Tetanus)ヲ指シテ言フモノニシテ病源候論ニハ産後發瘧ト金瘡瘧トヲ擧ゲタリ。ソノ金瘡瘧ハ後世、破傷風(萬病回春)ト稱スルモノニシテ、後世ノ書ニハ別ニ妊娠瘧(證治準繩)・去血過多瘧(丹臺玉案)等ノ證ヲ擧ゲタリ、即チ妊娠子癇(Eclampsie)・破傷風等ノ症ヲ指シテ言フモノタルコト明カナリ。

歇私的里

張仲景ノ金匱方論ニ『婦人臟躁、喜悲傷欲泣、象如三神靈所レ作、數欠伸』トアリ、コレ今日吾人ガ歇私的里ト名ヅクル病症ナルベシ。後世ノ諸家、臟躁ヲ以テ『子宮血虛、受レ風化レ熱者』(金匱要略編注)トナシ、或ハ『臟、子臟、即子宮也、仲景氏揭婦人二字、可ニ以見一矣、其躁、躁擾紊亂之義』(鎌田碩庵、藏躁説)ト論ズ。スナハチ子宮ノ躁擾ニ依リテ精神ノ變常ヲ致スモノナリトスルコト、歇私的里病ヲ以テ子宮ニ占居スルモノトシテ、之ヲ歇私的里(Hysteric)ハ子宮ノ義ナリ)ト名ヅクルト同一轍ナリ。

金匱方論ニ奔豚(又賁豚トモ曰フ)ノ病アリ、ソノ説ニ『奔豚病、從三少腹一起、上衝咽喉、發作欲死、復還止、皆從三驚恐得レ之』ト言ヒ、五積ノ一(腎積)トス。コレ恐クハ子宮瘧變ニ擬スベシ。而シテ病源候論ニ『賁豚氣者、腎之積氣也、起ニ於驚恐憂思ニ所レ生也、若驚恐則傷レ神、心藏レ神也、憂思則傷レ志、腎藏レ志也、神志傷、動氣積ニ於腎、而氣上下遊走、如三豚之賁、故云賁豚、其氣乘レ心、若ニ心中踊々所レ驚、如ニ人所レ恐、五臟不レ定、食飲輒嘔、氣滿三胸中、狂癡不レ定、妄言妄見、此、驚恐賁豚之狀也、若氣滿三支心、心下煩亂、不レ欲レ聞ニ人聲、休作有レ時、乍差乍劇、云々、此憂思賁豚之病也』ト言フニ依リテ攷フレバ、奔豚氣ハ奔豚ニ關係シ、而カモ奔豚トソノ證ヲ異ニシテ、精神ノ違常ヲ呈スルモノニシテ、コレ亦歇私的里ノ證ヲ指スモノナラム。

毘剝毘埵里

金匱方論ニ心氣不足ノ語アリ、後世ノ諸家コレニヨリテ心風(宋・魏泰、東軒筆錄、卷七)・心恙(壽世保元・名醫類案)・心疾(孫光憲、北夢瑣言、卷十)等ノ名目ヲ立ツ。コレ一ニ氣疾・氣病ト稱スルモノニシテ、鬱症・肝氣、若クハ肝症ト名ヅクルモノモ大概同一ノ症ニ屬シ、今日吾人ガ毘剝毘埵里ト名ヅクル症ニ相當セリ。

精神病

癲狂ノ名目ハ和名類聚鈔ニ之ヲ擧ゲ、モノクルヒノ訓ヲコレニ附シ、又令義解ヲ引テ『癲發時、臥レ地、吐三涎沫、無レ所レ覺、狂或自欲レ走、或自高、稱三聖賢也』ト註釋シ、又傳教大師ノ作ト傳フル大秦牛祭祭文ニハ癲狂ニクツチノ訓ヲ附シタリ、クツチハ砂石集ニ『或里ニ癲狂ノ病アル男アリケリ、此病ハ火ノ邊、水ノ邊、人多カル中ニシテ發ル、心ウキ病ナリ、俗ニクツチト云ヘリ』トアルニ徴シテ、癲癩タルコトヲ知ル。故ニコノ時代ニアリテハ

癲狂ノ稱呼ノ中ニ癲癇(Epilepsie)ノ病證ヲ混同セシコトハ明カナリ。蓋シ是レ支那ノ內經ノ說ニ依リシモノナリ。醫心方ニハ中風狂病ノ名目ヲ立テ、少臥・不飢・自稱高賢・狂言鬼語・罵詈不レ休・撻打人・欲走等ノ精神障礙ヲ列擧シ、別ニ中風癲病(癲癇 Epilepsie)・中風言語錯亂ノ二目ヲ立テタリ。故ニ癲癇ト狂病トハ之ヲ近似ノ疾病ト做シタレドモ、尙ホ各別ノモノトシテ之ヲ論ゼルナリ。精神病ノ歴史ニ就キテハ、前章江戸時代・季世ノ醫學、精神病科ヲ叙スルノ條下ニ於テ稍細カニ記述シタリ(第四七九頁參照)。

第七 新陳代謝病

糖尿病

金匱方論ニ『男子消渴、小便反多、以三飲一斗、小便一斗、腎氣丸主之』トアルヲ始トシ、病源候論・千金方・外臺秘要方等ノ諸書皆ナ消渴ノ一症ヲ擧ゲ、後世ノ醫書亦多クハ之ニ從フ。而シテココニ謂フトコロノ消渴ハ煩渴ト小便多トヲ主徵トスル病症ニシテ崩尿・糖尿等、多尿(Polyurie)ヲ徵トスルトコロノ症ヲ總ベテ稱セシモノナラシ。古今錄驗(外臺秘要方、引クトコロ)ニ至リテ消渴ノ三類ヲ別チ『消渴病、有レ三、一、渴而飲レ水多、小便數、無レ脂、似三麩片、甜者、皆是消渴病也、二、喫レ食多、不三甚渴、小便少似レ有レ油、而數者、此是消中病也、三、渴飲レ水不レ能レ多、但腿腫脚先瘦小、陰萎弱、數小便者、此腎消病也』ト説ク。ソノ第一類消渴ト稱スルモノハ煩渴・多尿・尿味甜ヲ以テ主徵トスルモノニシテ、今日吾人ガ糖尿病(Diabetes mellitus)ト稱スル病症ニ外ナラズ。(病源候論ニ『夫消渴者、渴不レ止、小便多、是也、云々、其病變多發ニ癰疽、此坐_下熱氣留_ニ於經絡ニ不レ引、血氣壅滯上、故成_ニ癰膿、』ト言ヒ、千金方ニ『消渴之後、即作_ニ癰疽、』ト言フニ徵シテ、益々消渴ノ糖尿病ナルベキコトヲ認ムベシ)

我が邦ニアリテハ醫心方ニ小品方・錄驗方・病源候論等ヲ引テ消渴ヲ論ジ、內消(不レ渴而小便多)ニ併ビ列シ、鎌倉時代ノ萬安方ニハ聖惠方ヲ引テ三瘡ヲ説キ、消渴ハ之ヲ內消飲水ト稱シ、外臺秘要方近効論ノ所説ヲ引證シタレドモ、故ラニ『每發小便至甜、醫者多不レ知_ニ其疾、』所以古方論、亦關而不レ言、云々』ノ一章ヲ省略シ、尿ノ甜味ヲ呈スルコトヲ言ハズ。コノ頃ヨリシテ消渴ハ淋病ヲ指シ、(萬安方婦人淋病ノ條ニ言ク『日本呼レ淋、曰_ニ消渴一、即世俗之誤也、消渴則內消飲水之名也』)、室町時代ニ及ビテハ淋病ヲ消渴トシ、眞ノ消渴ハ之ヲ飲水病トナシタリ(第一五六頁參照)。思フニ消渴ノ一症ニ腎消アリ、ソノ症ハ小便溷濁・淋閉澀痛ナルガ故ニ、世俗シヤウカチヲ以テ淋病ニ當テタルモノナラン²²⁾。

近世江戸時代ノ初世ニ至リテ劉完素・張從正等ノ學說、我が邦ニ入り消渴・消中・腎消ノ三證ヲ別チテ之ヲ三消トスルノ説行ハレタレドモ、空論鑿説多ク、而カモ未ダ尿ノ甜味ニ論及セルモノアラズ。香川修庵出デテ『瘡、即消也、即古今醫家所_レ稱消渴也、此邦俗呼爲_ニ燥病_{一者}、是已』ト論ジ『小便數多、溺多_ニ於所_レ飲、無_ニ鹹味黃色_一、而溺色清白、味甘作_ニ甜氣_一、云々、究竟、以_ニ渴不レ止、只管欲_レ飲、小便多出、善饑多食_一、爲_ニ此證之當面_一、云々、此證有_ニ間瘳_{一者}、亦多發_ニ癰疽_一、』ト論ジ²³⁾、次デ多紀元堅消渴ノ説ヲ著ハシテ、古今諸家ノ方説ヲ採集シ、消渴ノ原由・症候及ビ治方ヲ論ジ、殊ニ上消(消渴)ニ注意シタレドモ、ソノ説ハ多く載籍上ノ研究ニ止マリシガ、本問玄調ノ內科秘錄(元治元年)ニ至リテ實驗ニ依リテ説ヲ立テ『初發ハ何ノ滯モナク、渴シテ湯茶ヲ嗜ムノミ、疾

病トモ氣ノツカヌモノナリ、日ヲ積ミ、月ヲ累ヌルニ及ヒテ愈々渴シ、小便モ數ニシテ且多ク快利スルコト壘ヲ傾クルガ如シ、又善ク饑テ食ヲ貧ボリ云々、小便ハ稠厚ニシテ或ハ赤濁、或ハ白濁、或ハ膏ノ如ク、脂ノ如キモノ尿管ニ粘着シ、桶底ニハ澱泥ノ如クニ溜ル者ナリ、臭氣深ク甜味ノアル者ト見ヘテ、犬ノ好テ舐ル者ナリ、平人ノ小便ヲハ絶テ舐ルコトナシ、常ノ小便ト殊ナルコト是ニテ知ベシ、何ホド滋味ヲ食スルモ、湯茶ヲ飲ムモ直ニ滲出シテ、身體ヲ榮養スルコト能ハズ、漸々ニ羸瘦シ、津液涸竭シテ口舌モ乾キ、大便モ秘結シ、皮膚モ枯腊シ、面色萎黃、或ハ黎黑ニ變ジ、或ハ陰痿、或ハ脚弱、或ハ白内障眼ヲ患ヒ、或ハ癰疽ヲ發スルモノ往々コレ有リ、病既ニ年久シク疲勞極ルニ及デハ、多クハ腹脹滿シテ死ス、或ハ小便反テ不利ニナリ水氣ニ變ジテ死スル者アリ』ト論ジ、ソノ論詳細ナルヲ得タリ。

第八 花柳病

黴毒

黴毒ハ室町時代ノ末ニ始メテ我ガ邦ニ傳ハリシ疾病ニシテ、當時ノ人ハ之ヲ唐瘡(トウカサ)ト唱ヘ、又ハ楊梅瘡・綿花瘡メンケサウ、或ハ天疱瘡ト呼ビタリ(第一七二頁參照)。ソレ之ヲ唐瘡ト言フハ該病ノ根原地タル地名ヲ以テ、之ニ冠セルモノニシテ支那ニアリテ、又之ヲ廣東瘡(景岳全書)・廣瘡(證治準繩)ト名ヅクルト、同一ノ趣旨ナリ。之ヲ楊梅瘡ト呼ブハ皮疹ノ形象ヲ以テ名ヅク。之ヲ綿花瘡ト稱スルモ亦ソノ形ノ似タルニ依リテナリ(景岳全書ニ曰ク『毒甚而大者、泛瀾可畏、形如綿花、故名綿花瘡』)。而シテ之ヲ黴瘡ト言フハ『此瘡青黑蒼白、如物中ニ久雨、而生黴之色』(先醒齋筆記)ヲ以テナリ。

我ガ邦ノ俗間及ビ醫家、又コノ病ヲ濕・濕氣・濕瘡・濕毒ト唱フルモノアリ。コレ當初該症ヲ以テ濕熱ニ因ルモノト信ゼシガタメナリ。一説ニ言フ『或謂、二百年前、此疾漸播四海内、患者猶稀、故世人以爲穢惡疾均一癩、大嫌惡之、是以醫人阿諛、謂濕者、爲俗士諱之耳、本非有據而言之、其後準繩等書舶上來、其說遂痼云』(香川修庵、一本堂行餘醫言)

黴毒ノ我ガ邦ニ傳ハリテヨリ五十年、元龜二年ニ曲直瀬道三ガ著ハシタル啓迪集ニハ便毒ト楊梅瘡トノ證治ヲ論ジタレドモ、便毒ハ『男女大慾、不遂其志、故敗精搏血、留聚中途、結爲便毒』ト説キ、楊梅瘡ハ『近年以來極多、至令未息』・『素無天疱楊梅綿花等瘡、近來盛行、閱諸方、皆無治法』ト記スルノミニシテ、ソノ因由ニ論及セズ。元祿年間岡本一抱ノ病因指南ニ至リテ『便毒、下疳、楊梅瘡ノ三症、其所因同シクシテ、只毒氣ノ輕重淺深アルノミ』ト斷言シ、ソノ便毒ノ因由ヲ論ジテ『便毒ノ生ズル、或ハ左、或ハ右、腿ノ合縫ニ生ズ、足ノ厥陰、足ノ陽明ノ流ニ繫ル、此レ皆濕熱ノ壅滯ニ因レリ、云々、留溢ノ精鬱シテ濕熱トナリ、厥陰陽明ノ二經ニ發シテ便毒トナル、又或ハ慾心甚シキノ人、晝ノ思フ所、夢寢ノ間ニ發シテ動カズト雖モ、精氣直チニ泄レズシテ滯リ、或ハ交會ノ數合ヲ欲シテ強テ精液ヲ留メ、或ハ遊女夜發ノ陰戸中ニ瘀留ノ精濕ヲ貯ヘ、男子之ニ交ハリテ其濕熱穢濁ノ氣ヲ受ケテ致スモノアリ』ト言ヒ、『又大抵便毒ハ下疳ノ始メ、下疳ハ楊梅瘡ノ始トス』トナシ、黴毒ハ下疳・便毒ト同ジク、皆ナ濕熱ニ生ズルモノナリト説キタリ。而シテコノ説ハ爾後久時ノ間行ハレ、香月牛山ノ牛山活套ニモ『楊梅ハモト下疳瘡ヲ傳染シタル人、之ヲ耻ヂテ治スルコト遲滯シテ一變シテ便毒トナリ、便毒一變シテ楊梅瘡トナル、京都・大阪等ノ都會ノ所ニ多キ煩ナリ、鄙野ノ地ニハアルコト少ナシ、京ニテハ濕氣ト云フ、

何レモ娼妓ニ交媾シテ傳染スルノ病ナリ』ト言ヒ、又『下疳ハ多クハ嬖亂ナル人、娼妓ノ類ニ交接シテ其臭穢ノ氣ニ撲テ生ズルモノナリ』ト言ヒ、下疳・便毒・黴瘡ノ三症ハ同一ニシテ共ニ不潔ノ交接ニ基因スト論ジタリ。

香川修庵モ『下疳者、黴之發ニ陰莖ニ者也、便毒者、黴之發ニ腹腿合縫之間ニ者也、黴瘡者、黴之發ニ全身ニ者也』ト言ヒテ、ソノ一證ニシテ別疾ニアラザルヲ論ジ、而シテソノ原因ニ就キテハ『原ニ其所ニレ因、皆本ニ於人身軀殼中瘀血ニ也、既有ニ一滴瘀血ニ、則正血漸々傳染、猶濁水混ニ清流ニ也、始但滯ニ竄軀中ニ、隨ニ血墜ニ而上下、以後竟流ニ留于體中陰濕之地ニ、成レ瘡疔蝕矣』ト言ヒ、花柳中ニ在リテ淫戲スルニ囚リテコノ病ヲ得ルハ、吾ガ瘀血ヲ以テ彼ノ瘀氣ニ襯スルニ本ヅクトナシ、從テ其體中固有スル所ノ瘀血ニヨリ、外傳ナクトモ黴瘡ヲ自發スルヲ得ベク、又縱令娼婦ニ接スルモ瘀血ナキモノハ之ニ感ズルコトナシト説キ、當時マデ專ラ行ハレタル、濕熱ノ説ヲ非難シタリ。

ソノ黴毒ノ證ヲ論ズルヤ、之ヲ黴瘡ト結毒トノ二様トナシ、黴瘡ハ所謂楊梅毒ニシテ、全身ニ發スル頑瘡ヲ指シ、結毒ハ毒氣留滯シテ自カラ痼結トナルヲ言フモノニシテ、即チ頭痛(骨膜炎)・頭生ニ磊塊ニ痛(護謨腫)・瞳子痛(虹彩炎)・青盲(綠内障)・網膜炎)・鼻崩)・鼻漏)・咽疳(咽喉炎)・咽嗆)・鼻音(懸雍爛蝕)・口糜)・顎漏)・齩爛)・舌疔)・唇發)・聾)・筋骨痛(骨膜炎)・發漏(潰瘍)・癩(腦梅毒)・咳嗽)・勞瘵)・泄瀉)・痔漏)・水脹)・陰萎等ノ諸證ヲ呈スルナリ。

爾後、和田東郭・橋尚賢・片倉鶴陵・永富獨嘯庵・小石元俊・原南陽等諸家ノ黴毒ニ關スル著述アリ(第四八二頁參照)ト雖モ、ソノ論説ハ大都上述諸家ヲ祖述セルニ過ギズシテ、ココニ特ニ擧ゲテ言フベキモノアラズ。

文化年間ニ至リ、橋本伯壽出デテ『黴亦猶ニ痘麻ニ、古昔無レ有焉、其初異域之沴氣、合ニ湊於人身ニ、以成ニ一種之異病ニ、遂傳ニ來于本邦ニ、原非ニ我地之毒氣ニ、故斷無ニ自發者ニ、放蕩無賴邪淫之徒、幽傳冥染矣』ト説キ、香川修庵ガ瘀血ニ因ルトスルノ説ヲ排シ『是毒、從來因ニ沴氣有形一種之傳染ニ、故避則必免、不レ避則冒』ト言ヒテ、ソノ因ヲ一種有形ノ毒ニ歸シ、不潔ノ交接ニ依リテソノ毒ヲ人ヨリ人ニ傳フルモノトナセリ。又黴瘡ト下疳及ビ便毒トハソノ毒氣ニ差異アリトシ、從來ノ諸家ガ三證同一ナリトセシヲ駁シテ、三證ヲ殊別ノモノナリト論ジタリ。

膿淋(淋疾)

病源候論ニ五淋ノ名目ヲ立テ、石淋・勞淋・血淋・氣淋・膏淋ノ五證ヲ別チ、後世ノ諸家多クハ之ニ從フ。ソノ石淋ハ一ニ砂淋又ハ砂石淋ト稱シ、小便ニ砂石ヲ混ズルノ症ナリ(尿石 Urolithiasis)。勞淋ハ房勞等ニ依リテ發シ痛墜チテ尻ニ及ブモノナリ。血淋トハ小便ニ血ヲ混ジテ澁痛スルモノナリ。氣淋トハ裏氣凝滯)・小便淋瀝)・身冷ユルモノナリ。膏淋トハ小便ノ狀膏ニ似タルヲ言フナリ。ソノ他熱淋)・寒淋)・久淋)・白淋等ノ名稱アレドモ、皆ナレソノ外證ニ依リテ名ヲ別ツノミ。『小便澁、莖中痛、溺出些少、或點滴瀝瀝、或溺不レ得ニ卒出ニ、或溺留ニ莖内及少腹膀胱裏ニ、欲レ去不レ去、欲レ止不レ止或小便莖中疼痛、或小便不レ通、日夜數十度、多至三百行ニ、』(一本堂行餘醫言、卷十七)ヲ以テ淋ノ本態トスベキガ故ニ、コノ證ノ今日吾人ガ淋疾(Gonorrhoe)ト稱スルモノニ相同ジカラザルコト明カナリ。

『淋如ニ膿血ニ』(范汪方)・『五淋澁痛)・小便膿血』(玉機微義)等ノ記事アリテ、淋病膿ノ如シト言フト雖モ、コレ竟ニ眞ノ膿ニアラズ。近時黴毒ノ症アリテヨリ始メテ眞ニ膿淋ト名ヅクベキモノアリ。香川修庵曰ク『膿淋、世總稱ニ淋疾ニ、非也、審視下當時患ニ膿淋)者上皆是下疳瘡也』又曰ク『今時所レ患膿淋、本非ニ眞淋疾ニ、即是陰莖竅内下疳瘡也、蓋陰莖竅内、尿道及精道、或奧、或中、或口、生ニ疔瘡)疼痛、或其腫速ニ外面ニ、小便出時、其熱其鹹、掠ニ觸瘡上ニ、痛不レ可レ忍、瘡瘡膿潰、膿隨レ尿而出、以ニ其莖中痛、小便淋瀝、全是眞淋之形狀ニ、故世總謂ニ之淋疾ニ、而不レ知ニ實是竅内下疳瘡之膿ニ矣』(一本堂行餘醫言)ト。蓋シ膿淋ト稱スルモノハ所謂五淋ノ外ニシテ、膿漏性尿道炎、即チ今日吾人ガ淋疾(Gonorrhoe)ニ外ナラズ。香川修庵ハ之ヲ以テ尿道ノ下疳トナシ、膿淋後ニ種々

ノ結毒壞證（第三期微毒症候）ヲ發スルコトアルヲ擧ゲテ益々ソノ說ヲ主張セリ。

膿淋ヲ以テ尿道下疳ナリトスルノ說ハ固ヨリ奇矯ニ失スルモノアリト雖モ、コレニ依リテ膿淋ヲ所謂五淋ヨリ區劃シ、コレヲ花柳病ニ屬セシメタルハ實ニ香川修庵ガ首唱ノ功ニ歸スベシ。橘尙賢ノ微瘡證治秘鑑ニ至リテハ、ソノ說更ニ穩當ニシテ『膿淋者、似レ淋非レ淋也、若夫眞淋疾者、小便頻數、晝夜數十度、或數百度、乃尿道澀痛、仲景所謂淋之爲レ病、小便如三粟狀、小腹弦急、引三臍中、是也、今夫、膿淋者不レ然、小便通利、而不三頻數、但膿汁常漏下、宛如三婦人白帶下、是瘀濁血液、鬱三結精道ニ而使レ然、甚則生三陰瘡、或陰頭下際、穿三小竅、漏三下膿水、此飲酒荒淫、或妓女傳染之所レ致也、若連綿不レ愈、則致三陰頭腫痛、或疳蝕腐爛、後必發三便毒或筋攣骨痛、或微瘡或頭髮脫落等一也』ト論ジタリ。

第九 皮膚病

皮膚・毛髮及ビ汗ノ疾病ハ醫心方ニ於テ一部門ヲ立テテ記述セラレ、ソノ毛髮ノ疾病ニハ白髮（血氣虛則腎氣弱、腎氣弱則骨髓枯竭、故髮變レ白也）・鬢髮黃（血氣不足、不レ能レ榮三潤於外、故令三鬢髮黃一也）・鬢髮禿落（血氣衰弱、不レ能三榮潤一、故鬢髮禿落也）・頭白禿（頭上生瘡、有ニ白痂、甚癢）・頭赤禿（無ニ白痂、有レ汁、皮赤而癢）・鬼舐頭（或如三錢大一、或如三指大一、髮不レ生、亦不レ癢）³⁶・眉脫（血氣損傷、不レ能三榮養一也）・毛髮妄生（異毛惡髮妄生等）アリ。皮膚ノ疾病ニハ

面皰（查皰）和名爾支美^{ニキミ} 面上有ニ風熱氣一、生レ皰、或米大、亦如三穀大一、白色

面奸黧 和名於毛加須^{オモカス} 面皮上、或如三烏麻一、或如三雀卵上之色一、後世ソバカス（雀子斑）ト名ヅク

鼻皴 和名安加波奈^{アカハナ} 此由ニ飲酒一熱勢衝レ面、而遇ニ風冷之氣一、相搏所レ生也、故令三鼻面間生レ皴、赤皰

逆々然者、是也

飼面 和名以呂古於毛天^{イロコオモテ} 面皮上有レ滓如ニ米粒一者也

癰瘍 和名奈末都波太^{ナマツハタ} 人頸邊及胸前腋下、自然剝點相連 色微白而圓、亦有ニ烏色者一、無ニ痛痒一、

(Pityriasis versicolor)

白癩 知名之良波太^{シラハタ} 身體皮肉色變白、與ニ肉色一不レ同、亦不ニ痛癢一、 (Vitiligo)

赤癩 面及身體皮肉變赤、與ニ肉色一不レ同、或如三手大一、或如三錢大一、亦不ニ癢痛一、

黑子（黑志） 面及身體、生ニ黑點一、

疣目 手足邊、忽生、如レ豆、或如三結筋一或五箇、或十個、相連、肌裏麤ニ強於肉一、

胡臭 腋下臭、如三葱豉之氣一者、亦言三狐狸之氣者一、故謂ニ之狐臭一、²⁷

丹毒瘡 人身體色、忽然變赤、如三丹塗之狀一、

癬瘡^{セニカサ} 皮肉上隱癩、如三錢文一、漸々增長、或圓、或斜、癢痛、有匡郭裏生レ蟲、搔レ之有汁 (Herpes)

(parasiticus)

疥瘡^{ハダケ} 有^二大狀^一、有^二馬疥^一、有^二水疥^一、有^二干疥^一、有^二濕疥^一、多生^二手足乃至遍體^一、云々、並皆有^レ蟲、人

往々、以^二針頭^一、挑得^レ、狀如^二水内癩蟲^一、(Scabies) ²⁵

惡瘡 創瘡痛癢腫而多汁、身體壯熱

熱瘡 初作^二癩漿^一、黃汁出、風多則癢、熱多則痛、血氣乘^レ之則多^二膿血^一、

沸爛瘡^{アセモ} 其狀如^二湯之沸^一、輕者匝々如^二粟粒^一、重者熱汗浸漬、成^レ創、世呼爲^二沸子^一、(Sudamia)

浸淫瘡 初生甚小、先癢後痛、而成^レ創汁出浸淫肌肉、浸淫漸潤乃至遍體 ²⁶

王爛瘡 初起作^二癩漿^一、漸々王大、汁流浸漬

漆瘡 漆者^レ毒、人有^二稟性^一畏^レ漆

等ノ諸症アリ。汗ノ疾病ニハ

虛汗 大虛、汗出如^二水漿^一、

風汗 熱者、皮膚緻密不^二汗出^一。風者、皮膚疎薄汗出不^レ止

盜汗 因^二睡眠^一、而身體流汗也

等ノ諸證アリ。主ニ病源候論ニ依リテソノ說ヲ立テ、近世ニ至ルマデ、諸家猶ホ之ヲ信奉シタリ。

第十 爾他疾病

恙蟲病⁸⁸

越後地方ニ恙蟲ト名ヅクル疾病アリ。多紀元堅ノ時還讀我書ニ『越後新潟ノ邊ニ一種ノ病アリ、土人海ニ近キ河畔ニテ、草茅ヲ刈ルトキ、身中忽ニ蟲ニ螫ルルコトアリ、其蟲至テ細ク毛髮ノ如シ、螫ルル時ハ塞熱ヲ發シ、恰モ傷寒ノ如シ、土俗之ヲ呼テツツガト云フ』ト言フモノ是ナリ。而シテ多紀元堅ハソノ本態ヲ論ジテ、軒村世緝ノ說ヲ引キ『此レ沙虱ノ類ナラン、其螫所ヲ瀉シテ愈ユト聞ケリ』ト言ヒ、橋本伯壽ハ『本邦筑摩水邊、有^二射工^一、俗名曰^二都都瓦^一、土人云、早歲多・水歲無、蓋此蟲、爲^二洪水^一、流失也』(斷毒論)ト言フ。沙虱ノ記載ハ支那ノ古書ニ見ユ、病源候論ニモ稍々詳細ナル記述アリ、山内水間ニ存スル一種小蟲ノ刺傷ニ遇フテ、發熱・皮疹等ヲ呈スルヲ說キタリ。射工ハ博物志等諸書記述スルトコロニ依リテ之ヲ攷フルニ、沙虱ニ酷似スル一種小蟲ナルニ似タリ。秋田地方ニモケダニ(毛蟹躰虱)ト稱スル病アリ、今ヨリ凡九十年前ニ大友玄圭ト言ヘルモノ始メテソノ沙虱ナルコトヲ知り²⁹、天保六年米澤藩内ニモ亦該病アルヲ認タリト言フ。

狂犬傷⁸⁹

獠犬ニ嚙マレタル後、一定ノ時日ヲ經テ、全身症狀ヲ發呈スルコトハ、古代ヨリ醫家ノ認識セルトコロニシテ病源候論ニ『凡獠狗、嚙^レ人、七日輒一發、過^二三七日^一不^レ發則無^レ苦也、要過^二百日^一方大免耳、云々、若創差後、十數年後、食^二落葵^一便發』・『凡被^二狗嚙創^一、忌^レ食^二落葵及狗肉^一、雖^レ瘡、經^二一二年^一、但食^レ此者、必重發、其獠狗嚙創、重發、則令^二人狂亂^一如^二獠狗之狀^一』ト言ヒ、後ノ諸家、多クハ之レニ從フ。我が醫心方ニハ病源候論ヲ引テ

獠犬嚙レ人ノ證治ヲ論ジ、凡犬嚙レ人ト區別シタリ。

後世、聖濟總錄・外科正宗等ノ支那醫書ニハ、風犬（獠犬）及ビ風犬咬傷ヲ詳論セルヲ以テ、ソノ論治ハ我が邦ノ醫書ニ抄録セラレタレドモ、果シテ風犬病ガ我が邦ノ古代ニ存セシカ否カハ明カナラズ。尠ナクトモ、醫家ガ狂犬病ノ流行ニ注目セシハ江戸時代ノ中世以來ノコトナルベシ。野呂元丈ガ狂犬咬傷治方（元文元年）ニ『それ狂犬の人を咬ふこと、我邦古來未だこれを聞かず、近年異邦より此病わたりて、西國に始まり中國上方へ移り、近頃東國にもあり』ト言ヒ、佐井立策ガ獠犬咬傷考（寛延年間）ニ『吾輩都下（京都）ニアルトキ、此獠犬ノ禍ニ遭フモノヲ見、又東武ニテモ此害アルコトヲ聞ケリ』ト叙シ、又鈴木俊民ガ狂犬咬傷治方再刊（寶曆六年）跋文ニ『此書は元文丙辰年東都醫官野呂元丈先生著述せり、其頃東國に狂犬流行して、これに咬傷るもの多くは死す、余大阪に僑居すること十餘年、今猶ほ上方狂犬絶へずして死するもの尠からず』ト言ヒ、埜允明ガ瘦狗傷考ノ序（安永三年）ニ『予幼時、一日人來云、某地有ニ瘦狗一、明日人又來云、某里有ニ瘦狗一、可レ戒也、一日二日而一、以至三萬邑里一、州縣無ニ處不レ有焉、乃觸者不レ尠、然不ニ常有一、則希及者亦希、故治又不レ得ニ其治一、乃之死者、何限、爾來殆五十年矣』ト叙スルニ依リテ見レバ、狂犬病ハ享保ノ頃、江戸・大阪・京都ヲ始トシテ各地方ニ流行セシヨリ、醫家ノコレニ關スル觀察、始メテ行ハレタルコトヲ知ル。

野呂元丈ノ狂犬咬傷治方（元文元年）ハ狂犬病ニ關スル專書ノ嚆矢ナレドモ、ソノ論ズルトコロハ隋・唐・元・明方書中ヨリ狂犬咬傷ノ論治ヲ摘録セルニ過ギズ。佐井立策ノ獠犬咬傷考ニモ亦別ニ發明ノ說アラズ。原南陽ノ瘦狗傷考（天明三年）ハ狂犬病ノ證候及治方ヲ論ズルコト詳ニシテ實驗ニ得タル說アリ、ソノ證候ヲ論ズルヤ『傷口報レ痊、五六十日、若百餘日、其人惡風口渴、辜丸內吊、二溲閉結、行步動作、呼吸乃迫者、將レ發レ瘰、宜ニ急理一レ之、二三日、若四五日、已發レ瘰、口禁咬牙、角弓反張、口吐ニ涎沫一、舌縮聲枯、眼昏無レ神、水飲不レ下者、死』ト言ヒ、ソノ治法トシテハ藥方・灸法・刺法等ヲ詳叙シタリ。次デ多紀元徳ノ廣惠濟急方（寛政二年）・原田玄菴ノ三毒備考（文政年間）・竹中良圃ノ狂犬毒治方・藤井景倫ノ風狗咬傷論等ニハ、狂犬病ノ論治ニ關スル記事アリ、ソノ說漸ク精詳ナルヲ得タリ。

狂犬咬傷ノ治法トシテハ、創口ヨリ血ヲ絞り出ダシ、或ハ刺鍼シテ血ヲ出ダシ、又ソノ創面ニ放尿シテ之ヲ洗ヒ次テ其創上ニ灸ヲ施ス。内藥ニハ馬錢・蝦蟇、等ノ藥品ヲ用ヒ、外藥ニハ犬糞・牛溲・紫蘇葉・獠犬腦（野呂元丈ノ狂犬咬傷治方ニ曰ク『咬つかれし犬を殺し、腦を取り、瘡に塗れば、かさねて起らず』）等ヲ用ヒタリ。

鼠毒³¹

支那ニ在リテハ隋・唐以下ノ醫書ニ鼠咬ノ治方ヲ擧グルモノアレドモ、未ダ詳ニ之ヲ論ゼルモノハアラズ。我が邦平安朝時代ノ醫心方ニモ醫門方ヲ引テ『療人被人咬一、諸處皆腫、經三日月一、不レ差、其咬處有ニ赤脈者上、』ノ方ヲ載セタルニ過ギズ。丹波雅忠ノ醫略抄ハ固ヨリ救急ノ治方ノミヲ集メタルモノニシテ、ソノ中單ニ鼠咬ノ治方ヲ掲グルノミ。下リテ天正年間、鷹取秀次ガ外療新明集・外科細壘ニハ鼠^鼠名目ヲ立テ、江戸時代中世以後ノ

諸家ノ書ニ至リテ初メテ鼠毒ニ就キテ論ズルモノアリ。而シテコノ方面ニ於テ第一ニ擧グベキハ、原南陽ノ鼠咬論（安永三年）ニシテ『毒鼠咬傷、動殺レ人、而古來無ニ定論一、雖ニ相レ鼠有ニ牙、以ニ其微物一、不ニ以爲レ念、方策纒載ニ鼠咬生瘡、麝香或猫毛及頭屎傳レ之類一、不下以ニ死生一論上、』ト言ヒテ、古來支那及ビ本邦ノ醫家ガ鼠家ノタメニ全身症狀ヲ發呈スルコトアルヲ説カザリシコトヲ指摘シ、ソノ症狀ヲ論ジテ『其初見レ咬之時、以ニ牙處微無ニ痛楚一、安然不レ省、毒氣伏隱、經レ久而變、作ニ水腫狀一而斃、故人或不レ知レ爲ニ鼠毒一也、又其發也、形狀不レ一、或作ニ寒熱一、或作ニ潮熱一、或咳嗽盜汗如ニ癩瘵一、或肉脹如レ瘤、或如レ癩、或紫黑斑點、出沒無ニ定所一、或骨節緊痛、侵ニ風雨霜雪一、或食ニ油膩膏粱一、則發』ト言ヒ、鼠咬ノ全身證候ヲ呈スルコト、猶ホ瘦狗ト一般ナリトシ、常鼠ノ咬ハ必ズシモ崇ヲナサズト論ゼリ。次デ多紀元徳ノ廣惠濟急方ニハ『鼠に數品あり、其中に毒最も、甚しきあ

リ、人若し此鼠に咬まれたる時は、傷處速かに愈えて、當分無事なるに似たれども數日を經て、俄に大熱を發し、赤疹多く出で、傷寒の如く煩渴、甚しき體中に紫黒の斑紋を現はし、狂躁極て死するものあり、云々、是れ鼠毒内攻又は皮肉の間に在りて患をなすものなり』ト論ジ、爾後橋南蹊ノ雜病紀聞・津田玄仙ノ療治茶談・原田玄菴ノ三毒備考・華岡青州ノ治驗說・天羽友仙ノ二仙傳・平野元良ノ病家須知・本間玄調ノ瘍科秘錄等ノ諸書ニハ皆ナ鼠毒ノ證治ヲ論ジ、ソノ潜伏期ノ長短・發熱ノ狀態・紫斑・浮腫・精神狀態、ソノ他ノ證候及ビ治方等ニ就キテ觀察セルトコロヲ叙述セリ。

鎌鼬²⁷

關東ノ俗ニ鎌鼬^{カマイタチ}ト名ヅクル病アリ。橋本伯壽ノ斷毒論ニ『本邦關東一奇疾、行路無^レ故、蹶僵、不^ニ自爲^レ一^レ意、起而行、數十百歩、而始見^ニ鮮血流漓霑^レ履、好肉橫裂露^レ骨、其所^ニ毀傷^一、多在^ニ膝蓋^一、俗名曰^ニ迦摩乙^{カマイタチ}多^一的^一、此毒關西之所^レ罕、諸方書亦所^レ不見、地氣之使^レ然者、豈不^ニ亦奇^一乎』ト言フモノ、即チ是ナリ。

第十一 疾病ノ類別³³

上條記述スルトコロノ疾病ノ歴史ハソノ梗概ヲ舉グルノミ。爾他幾種ノ疾病ニ就キテハ平安朝以下各時代ニ於テ、疾病ノ名目ヲ論ズルノ條下ニ多少叙述セシトコロアリ。固ヨリ疾病ノ總體ニ涉リテコレヲ細叙スルコトハ、コノ短篇ノ能クスルトコロニアラザルヲ以テ、コノ章ハコレヲ以テ終結スルニ際シ、疾病ノ類別(Nosologie)ニ就キテ尙ホ一言ヲ費サントス。

疾病ノ類別ハ病源候論ニ於テ始メテ試ミラレ、爾來諸家多クハ之ニ從ヒ我ガ邦ノ醫心方モ亦コレニ從ヒ、中風ヲ以テ、百病ノ首ニ置キ、頭病・耳病・目病・鼻病・口唇病・齒病・咽喉病・胸腹病・節骨病・髓病・皮病・陰部病・肛内病・蟲病・手足病・呼吸病・食飲病・積聚・疝・水腫・黃疸・霍亂・下利・小便病・大便病・虛勞・傳屍病・瘡・傷實・瘡瘍・中毒・外傷等ヲ順次序列シタリ(第九十八頁以下参照)。固ヨリ部位ニ依リテ之ヲ列序セルニアラズ、病因ニヨリテ之ヲ次第セルニアラズ。諸般ノ證候ヲ輯メテ、略ホソノ同ジキモノヲ類別セシマデナリ。室町時代、五體身分集ニ至リテ始メテ身體ノ部位ニ依リテ疾病ヲ類別シ、頭病・毛髮病・面病・目病・耳病・鼻病・舌病・頤頸病・肩臂脇肘病・胸臆病・腹病・乳病・身體病・尻尾病・閉閨病・開陰病・從股至足病ノ諸門ヲ立テタリ。爾後諸家ノ疾病ヲ類別スルヤ、或ハ千金方・和劑局方等ニ依リ、別ニソノ面目ヲ新ニセルモノアルヲ認メズ。徳川氏ノ中世、古醫方勃興ノ際ニ方リテモ、醫家ノ科學的ニ疾病類別ヲ企テシモノナク、多紀元堅ノ雜病廣要(嘉永年間)ニ至リテ始メテ内因・外因・氣血類・藏府類・身體類ノ五大部門ヲ立テテ、疾病ヲ類別シ、

(甲) 外因ニハ(1) 中風・中暑・中濕・中寒(2) 瘧(3) 瘧・歷節(4) 脚氣

(乙) 内因ニハ(1) 虛勞(2) 骨蒸(3) 水飲・痰涎(4) 水氣(5) 脹滿(6) 積聚(7) 寒疝・奔豚氣(8)

黃疸・黃胖(9) 消渴・強中(10) 痼冷積熱・惡寒發熱(11) 汗證

(丙) 氣血類ニハ(1) 吐血・嗽血・唾血(2) 衄血・小便血・大便血等

(丁) 藏府類ニハ(1) 癲狂(2) 驚悸・健忘・不眠・嗜眠・(3) 霍亂・關格(4) 脾胃病・傷食・傷酒(5)

嘔吐・胃反(6) 噦・惡心・噫醋・嘈雜・痞滿(7) 膈膈(8) 蛻蟲・胃脘癰(9) 泄瀉(10) 欬嗽(1

1) 喘痞・肺癰(12) 滯下(13) 大便不通・大小便失禁・大小便不通・交腸(14) 腸癰・痔・脫肛

(15) 遺精・赤白濁・小便多(16) 小便不通・淋病

(戊) 身體類ニハ(1)痺・痿・厥(2)頭痛・眩暈(3)胸痺心痛・腹痛(4)脇痛・腰痛・身體痛・肩背痛・
臂痛・四肢諸痛(5)癘

ヲ列擧シタリ。當時西洋ノ醫方ハ既ニ我ガ邦ニ行ハレ、西洋内科書ノ翻譯セラルルモノアリシト雖モ、ソノ疾病類
別ハ證候ヲ主トシ身體ノ部位ニ依リシマデ(第五三四頁参照)ニシテ、固ヨリ、支那醫家ノ所説ト大差ナカリシナ
リ。

參考書籍

- ① 流行六病正名 淺田栗園著 溫知醫談、第二十六號所載
天行彙說 岡田昌春著
釋疫一斑抄 岡田昌春著
- ② Victor Fossel, Geschichte der epidemischen Krankheiten.
- ③ 滯下略說 岡田昌春著 溫知醫談、第十號
- ④ 馬脾風概論 河内全節著 溫知醫談、第三號
- ⑤ 内科祕錄 本間玄調著
- ⑥ 爛喉丹痧考 河内全節著 溫知醫談、第二十四號所載
- ⑦ 漢洋病名對照錄 落合泰藏著
- ⑧ 麻疹考 屋代弘賢著
疫瘡新論 中島廣足著
- ⑨ 溫病論 蝦惟義著
- ⑩ 叢桂亭醫事小言 原南陽著
- ⑪ 病因指南 岡本一抱著
- ⑫ 速打肩病名 森養竹著 溫知醫談、第二十四號所載
- ⑬ 嘔嗽名義考 河内全節著 中外醫事新報、第三百七十一號所載
嘔嗽考 淺田栗園著 溫知醫談、第二十三號
- ⑭ 病源候論(前二出ヅ)
- ⑮ 外台祕要方
- ⑯ 喘哮字辨 香川修庵著
- ⑰ 肩痛 醫學博士瀨川昌耆著 中外醫事新報
- ⑱ 雜病廣要 多紀元堅著
ヒステリーノ臟躁ト譯スベシ 醫學博士吳秀三著 中外醫事新報、第二八九號所載
ヒステリーノ譯語 醫學士高橋金一郎著 中外醫事新報、第二九八號所載
- ⑳ 一夕話 淺田栗園著
- ㉑ Kure, Geschichte der Psychiatrie in Japan. (前二出ヅ)
- ㉒ 病名彙解 桂洲子著
- ㉓ 一本堂行餘醫言 香川修庵著
- ㉔ 斷毒論 橋本伯壽著

- 25(25) 醫賸 多紀元簡著
- 26(26) 浸淫瘡考 森養竹著 繼興醫報
- 27(27) 日本小內科學 醫學士竹中成憲著
- 28(28) 恙蟲病ノ調査報告 醫學博士北里柴三郎著 明治三十七年官報所載
- 29(29) 日本洪水熱病原研究報告 醫學士田中敬助著
- 30(30) 狂犬病ニ就テ 佐藤英太郎著 日本醫事週報(明治三十七年四月六日刊行) 所載
- 31(31) 鼠毒病考 河內全節・富士川游共著 中外醫事新報
- 32(32) 禿頭病ノ歴史 醫學士大野豐太著 皮膚科及泌尿器科雜誌、第二卷所載
- 33(33) 病名纂 多紀元簡著
- 疾雅 多紀元胤著
- 多疾彙箋 喜多村直寬著

日本醫學史 終

-
- ① DOI: 10.11501/833143
- ② https://books.google.com/books/about/Handbuch_der_geschichte_der_medicin_bd_D.html?id=3UVJAAAAAYAAJ&hl=en
- ③ DOI: 10.11501/833141
- ④ DOI: 10.11501/833141
- ⑤ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00000695>
- ⑥ DOI: 10.11501/833142
- ⑦ DOI: 10.11501/1911185
- ⑧ <https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11F0/WJJS07U/2321315100/2321315100100010/mp00813700>
- ⑨ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00001465>
- ⑩ <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100243433>
- ⑪ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00000707>
- ⑫ DOI: 10.11501/833142
- ⑬ DOI: 10.11501/1739255
- ⑭ <https://ctext.org/wiki.pl?if=gb&res=355651>
- ⑮ <https://ctext.org/wiki.pl?if=gb&res=458414>
- ⑯ https://archive.wul.waseda.ac.jp/koshou/ya09/ya09_00511/ya09_00511_0010/ya09_00511_0010.html

-
- ¹⁷ DOI: 10.11501/1739265
- ¹⁸ <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100245384>
- ¹⁹ DOI: 10.11501/1739851
- ²⁰ <https://ndlonline.ndl.go.jp/#/detail/R300000001-1027114263-00>
- ²¹ <https://archive.org/details/JahrbercherFrsyChiatreUmdlNeurolo190323NachrKrafftEbingGeschPsyInJapan>
- ²² https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ya09/ya09_00581/index.html
- ²³ <https://dcollections.lib.keio.ac.jp/ya/koisho/f-i-87-1>
- ²⁴ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb000004068>
- ²⁵ <https://dcollections.lib.keio.ac.jp/ya/koisho/f-i-64-1>
- ²⁶ DOI: 10.11501/1473191 ただし他巻の可能性あり
- ²⁷ DOI: 10.11501/834989
- ²⁸ DOI: 10.11501/2946718
- ²⁹ https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/10263131/www.akihaku.jp/publication/report/38/aktpmrep38_045-054.pdf
- ³⁰ <https://ndlonline.ndl.go.jp/#/detail/R300000001-1000000018183-00>
- ³¹ DOI: 10.11501/1739389
- ³² DOI: 10.14924/dermatol.2.1 ただし他号の可能性あり
- ³³ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb000004891>

日本醫學史奥書

- 一、我が邦醫學ノ歴史ヲ修ムルコトハ、余ガ如キ菲才ニテハ、假令身ヲ終ハルマデ從事スルトモ、到底之ヲ能クスベキニアラザルニ、僅カニ十餘年間ノ攻究ニ依リテ、コノ書ヲ世ニ公ニスルハ、恥ヲ知ラザルノ所爲ナリトモ評セラルベシ。シカレドモ、卑見ヲ以テスレバ、今ヤ明治ノ聖代ニ際シ、百般ノ學藝蔚然トシテ崛起スルニ際シ、醫史學ノ攻究ハ當サニ興ルベクシテ、而シテ未ダ興ラズ、マコトニ我が學問界ノ缺典トスベキコトナレバ、余ガコノ小著述ノ如キモコノ場合ニアリテハ、或ハ後人ノタメニ草萊ヲ辟クダケノ效ハ有ルベシ、ソノ砥平ヲ求ムルガ如キハ固ヨリ別ニソノ人アルコトナレバ、拙作ナリトテ敢テ秘スベキコトニアラズト信ジ、余ハ厚顔ニモ之ヲ活版ニ附シタリ。
- 二、コノ書ノ草稿ハ、モト三千餘頁アリシガ、之ヲ刊行スルニ方リテハ費用ナドノ都合アリテ、之ヲ約一千頁ニ減ジタリ。三千頁ニテモ紙數十分ナリトハ思ハレザルニ、マシテ之ヲソノ三分一ニ縮メタルコトナレバ、叙述ノ精詳ナルヲ得ザルハ當然ノコトニシテ、コハ獨リ余ガ不文ノ罪ノミニハアラザルベシ。
- 三、引用シタル諸家ノ論說ハ悉クソノ出典ヲ明記シタリ、コレ本書ノ目的タル、我が邦醫學ノ歴史ノ一斑ヲ示スノミニ止マラズ、又我が醫史學上ノ攻究題目ヲ掲ゲ、以テ醫史學攻究ノ材料ヲ供求セントスルニアレバ、ソノ出處ヲ明示スルヲ必要トスルニ由ル。徒ラニ博識ヲ衒ハントシテ、無用ノ書名ヲ列記セルニハアラス。
- 四、コノ書中ニ挿ミタル名家ノ肖像ハ、多年ノ間余ガ辛苦シテ蒐集シタルモノニシテ、多クハ皆ナ各其家ニ傳ハレル像ヲ寫シタルモノニ係ル、但シ安藝守定ノ像ハ佐伯氏ノ著書ニ依リ、馬島明眼院ノ像ハ小川氏ノ著書ニ載スルトコロヲ複寫シタリ。
- 五、余ガ我が邦ノ醫史ヲ修ムルノ志ヲ立テテ、ソノ業ニ從ヒシヨリ十又三年、ソノ間最モ辛苦セルハ所謂根本史料ノ蒐集ニシテ、コレガタメニハ殆ド寢食ヲ忘レタルコトアリキ。幸ニ林洞海・伊藤圭介・淺田宗伯・岡田昌春・栗本鋤雲・吉益周助・山本章夫・坪井信良・石黒忠愼・三宅秀・長與專齋・田口和美・杉享二・大槻如電・河内全節・太田正隆・土肥慶藏・吳秀三・齋藤仙也・竹岡友仙・佐伯理一郎・井上通泰・岡崎桂一郎・穴戸俊治・本間貞佐・山脇忠孚、唐澤光徳・小石第二郎・江馬春熙・三宅幹造等、諸先輩及ビ同僚諸子（既ニ故人トナラレシ方アリ、コノ書ノ成ルヲ報ズルヲ得ザルハ恨事ナリ）ヲ始トシ、各地諸氏ノ直接又ハ間接ノ幫助ニ依リ、資料ノ多數ヲ手ニスルコトヲ得タルハ、誠ニ感謝ニ堪ヘザルトコロナリ。殊ニ同郷ノ畏友醫學博士吳秀三君ハ、余ニ先ダチテ我が邦ノ醫史學ヲ研究シ、已ニ得ルトコロアリテ一部ノ稿ヲ脱セシガ、任ニ東京醫科大學教授ニ就クニ及ビテ、復タ力ヲ醫史學ニ專ニスルコトヲ得ザルヲ以テ、君ガ嘗テ辛苦シテ蒐集セラレタル史料ヲ舉ゲテ、悉ク之ヲ余ニ交附シ以テ大ニ余ガコノ業ヲ助ケラレタリ、特ニ記録シテ同君ノ厚誼ヲ謝ス。
- 六、石黒況齋先生ハ明治醫學建設者ノ一人ニシテ、常ニ醫史攻究ノ切要ヲ唱道シ、カヲコノ方面ニ盡サレシコト尠カラズ。三宅博士ハ我が東京大學醫學部教授トシテ醫史ノ講座ヲ擔當セラレ、斯科ニ造詣深キ學者ナリ。河内柳溪先生ハ本邦醫史攻究ノ先輩ニシテ、ソノ著述ハ已ニ等身ノ多キニ及ベリ。森博士ガソノ不偉ノ才ト宏博ノ識トヲ以テ、名聲噴々タルコトハ言フマデモナキコトナルガ、博士ハ又醫史學ニ精シク、早ク既ニ日本醫學史ノ撰著ニ手ヲ着ケラレタルコトアリ。吳・土肥兩博士モ亦余ニ前ダチテ日本醫學史ノ編修ニ意ヲ注ギ、ソノ敏慧ナル才識ヲ斯業ニ用ヒラレタリ。シカルニ諸家ノ撰著ハ來ダ世ニ公ニ

セラレザルガ爲ニ、幸カ不幸カ、杜撰ナル余ガコノ著述ハ、諸家ニ前ダチテ世ニ行ハルルニ至レリ。事實コノ如ク成ルニモ拘ラズ、諸家が拙著ニ賜ハリタル序文ハ褒賞ソノ實ニ過ギ、之ヲ讀ミテ靦顏汗背ニ堪ヘザルモノアリ、今強テ之ヲ拙著ノ前ニ列スルハ、先輩諸士ノ厚誼ヲ謝セムガタメノミ。羊頭ヲ懸クルモノナリト嘲笑スル人アラバ、ソハ余ガ意衷ヲ察セザルノ人ナリ。

七、コノ書既ニ成ル、而シテ未ダ之ヲ梓ニ上ボスノ資金ヲ得ズ。裳華房主人芳野兵作氏、義侠ヲ以テ名アリ、偶々余ガコノ業アルコトヲ聞キ、自カラ進ムデ出版ノ勞ヲトランコトヲ約シ、斡旋太ダ力メタリ。蓋シ芳野氏ノ意ハコノ書ヲ以テ今日ノ學問社會ニ有要ノ一書トナシ、收益ノ有無ヲ打算セズシテ、以テ書肆ノ社會ニ對スル責任ヲ盡サントスルニアリ、余ガコノ書ガ果シテコノ如キ價値アルコトハ、余自カラモ之ヲ認メズト雖モ、コノ書ノ今日世ニ行ハルルニ至レルハ、實ニ芳野氏ノ力ニ賴ル、感荷焉ンゾ堪ヘム。

明治三十七年十月上浣

駒込西片町ノ僑居ニ於テ

富士川 游 謹記

日本醫學史發刊ニ就テ

輒近印刷ノ術著シク進ミ、圖書ノ新刊セラルルモノ、汗牛充棟モ啻ナラズ、然レトモ其多クハ簡易卑近ナル教科書、若クハ小説雜著ノ類ニ止リ、専門學者ガ精研深究ノ餘ニ成レル雄篇大作ニ至リテハ、寥々トシテ晨星ノ如シ、蓋シ小説雜著ノ類ハ、時好ニ投ジ、俗尙ニ徇ヒテ、輒スク售賣スルノ便アレドモ、専門ノ書ハ、販路極メテ狭ク、得失或ハ相償ハザルノ虞アルヲ以テ、出版界ノ傾嚮自ラ此ノ如キヲ致セルナリ、是レ豈文化開發ノ上ニ於テ、憾ムベキニ非ラズヤ、不肖 平素深ク此ニ慨スル所アリ、偶ドクトル富士川子長先生ニ日本醫學史ノ大著アリ、久シク筐底ニ藏セラルルヲ聞キ、心私ニ以爲ラク、我國ニ於テ進歩ノ最モ觀ルベキモノ醫學ニ若クハ莫シ、而シテ未タ其發達變遷ノ跡ヲ討ネテ、一部ノ史ヲ成セル者アラズ、若シ先生ノ大著ヲ獲テ、コレヲ公刊セバ、庶クハ社會文化ノ上ニ裨補スル所アリテ、少シク平昔ノ志願ヲ償フコトヲ得ント、乃チ請フニ醫學史刊行ノ事ヲ以テス、先生惠然快諾、十餘年拮据ノ原稿ヲ舉ケテ付與セラレ、且ツ淨寫、校正ノ事ニ至ルマデ、親シク監督ノ勞ヲ執ラレタリ、不肖 本書發刊ノ光譽ヲ荷フコトヲ得タルモノ、一ニ皆先生ノ賜ナリ。

尙本書ノ印刷ハ、一切秀英舍員青木弘君ノ擔當ニ係リ、圖書ノ挿入、植字ノ疎密等、幾多ノ困難アリシニモ拘ラズ、僅々年ヲ充ザルノ間ニ竣功スルヲ得タルハ、全ク同舍員諸氏ノ勤勉ト厚意トニ賴レリ、茲ニ附記シテ謝意ヲ表スト云爾。

明治三十七年十月神嘗祭ノ日

日本橋大傳馬鹽町ニ於テ

裳華房主 芳野兵作 謹識

日本醫事年表

此表ハ我邦醫學ニ關スル歷史的事實ヲ網羅シ、其年月ヲ對照知悉スルノ便ニ供スルヲ以テ趣旨トシ、太古時代ヨリ始マリ明治三十六年ニ訖ル。

支那及び西洋ノ事實ヲ併擧スルハ、其著明ナルモノヲ擧ゲテ彼我ノ狀況對照セントスルニ在リ。故ニ便宜之ヲ擧ゲ、必ズシモ定例ヲ設ケズ。

人名ヲ記スルニ、或ハ其通稱ヲ用ヒ、或ハ號ヲ用ヒ、或ハ字ヲ用フル等、其例一定セズ、要スルニ讀者ノ理解ニ便ナランコトヲ欲スルナリ。

醫家ノ出處進退及び著書ハソノ著明ノモノノミヲ擧ゲタリ、コハ別ニ拙著日本醫人譜ニ載セタレバナリ。

太古時代

太古時代

天地初發ノ時高天原ニ神アリ、天之御中主神ト言フ、次ニ高皇產靈神、次ニ神皇產靈神アリ、以下伊邪那岐伊邪那美兩神ニ至ルマデ、之ヲ神世七代ト名ヅク、此頃ハ既ニ木造ノ宮殿アリ、布綿又ハ絹絶ノ衣服アリ、刀劍アリ、弓矢アリ、飲食ノ具アリ、烹炙ノ法アリ、文化ノ程度ハ人類創始ヲ距ルコト既ニ遠シ、故ニ人ノ疾病ヲ知り、治方ヲ講ゼシヤ疑ナシ。史ヲ案ズルニ伊邪那美命火神軻遇窈智ヲ生マントスル時、悶熱懊惱因リテ吐ヲ爲シ遂ニ焦レテ死ス（日本書紀）ト言フ、コレ疾病ノ史籍ニ見エタル始ナリ。其後大穴牟遲神ノ火傷シ玉ヒシ時、神皇產靈神コレニ治療ヲ施シ玉ヒタルコトアリ（古事記）、之ニ依リテ當時既ニ一定ノ醫方アリシコトヲ知ルニ足ル。然レドモ國史上ニ明カニ其事跡ノ記載セラレタルハ大穴牟遲神・少彥名神ノ二柱ノ神ニ始マル。大穴牟遲神ハ一ノ名ヲ大國主神トオホクニヌシ言フ、又國作大己貴命・葦原醜男神・八千弋神・顯國玉神ノ名アリ、素盞鳴尊ノ六世ノ孫ナリ。少名昆古那神ハ高皇產靈神ノ御子ナリ。兩神力ヲ戮セ心ヲ一ニシテ天下ヲ經營シ、復タ蒼生及び畜產ノタメニ其療病ノ方ヲ定メ、又鳥獸・昆蟲ノ災異ヲ攘ハンガタメニ其禁厭ノ法ヲ定メ給ヘリ。（日本書紀）

【支那】醫方ハ伏羲、神農、軒轅ニ始マル。太昊伏羲始テ八卦ヲ畫シ、六氣六腑五臟五行陰陽四時水火升降皆象アリ、百病ノ理以テ類推スベシ、神農以降皆之ニ因ル。炎帝神農百草ヲ嘗メ味テ藥ヲ宜キ疾ヲ療シ天傷ノ命ヲ救フ、是ニ於テ醫道立チ、本草ノ學興ル。黃帝軒轅岐伯ニ咨テ内經ヲ作り、俞附岐伯雷公ニ命ジテ明堂ヲ察シ息脈ヲ窮メシム。

【西洋】西洋ノ醫學ノ事跡ハ埃及ニ於ケルモノヲ以テ最モ古シトス。紀元前千五百年ノ頃既ニ醫學上ノ著述アリ。此項印度ニモ醫學既ニ興リテ藥方手術觀ルベキモノアリシト言フ。然レドモ今ノ醫學ハ希臘ニ起レリトスベシ。希臘ノ醫學ハ其源ヲ古埃及ノ醫學ニ發シタレドモ、其學者ノ才能ノタメニ忽チ隆盛ノ域ニ進メラレ、此ニ始テ一ノ科學ヲナスニ至レリ。希臘醫學ノ神代史中最モ名アルモノヲ「アスクレピオス」トナス、「アポロ」ノ子ニシテ「メンフィス」ヨリ出テテ希臘ニ移ル、埃及ノ醫術ヲ輸入セルハ此神ナリト言ヒ傳フ。其子ニ「ヒギエーア」アリ、健康保護ノ女神ナリ。

神武天皇元年辛酉紀元

宇麻志麻治命、奉レ齋ニ殿内天璽瑞寶一、奉下爲ニ帝后ニ崇ニ鎮御魂ニ祈中禱壽祚上、所謂御鎮魂祭自レ此而始矣、云々。
天神教導、若有ニ痛處ニ者、令ニ茲十寶一、謂ニ二三四五六七八九十一、而布留部^{フルヘ}、由良由良止布留部^{ユラユラトフルヘ}、如レ此爲レ之者、死人返生矣、云々」ト舊事紀ニ見ユ。コレ祝詞モテ病ヲ厭フモノニシテ、事ナキニ壽祚ヲ祈ルハ後世所謂養生法ノ一端ナリ。亦以テ當時病ヲ療スルニ禁厭ト藥方ト并ビ用ヒラレタルコトヲ推知スベシ。

【支那】東周惠王、十七年ニ當ル。

【西洋】紀元前六百六十年ニ當ル。

神武天皇十七年丁丑一七

【支那】東周襄王八年、齊桓公病アリ、扁鵲之ヲ見テ日ク、病骨髓ニアリ、司命ト雖モ之ヲ如何トモスルコトナシ、幾モナク桓公殂ス、扁鵲姓ハ秦、名ハ越人、渤海鄭人ナリ、少キ時長桑君ヲ師トシ、良醫ノ聞アリ、素問靈樞ノ旨ヲ得テ始テ章句ヲ別チ、又問難ヲ設ケ以テ疑義ヲ釋シ、八十一難經ト名ヅク、後ノ脈ヲ言フモノ皆之ニ據ル。

【西洋】紀元前六百四十四年ニ當ル。

神武天皇五十八年戊午五八

日本書紀ニ日ク『天皇獨ニ與皇子手研耳命一、帥レ軍而進、至ニ熊野荒坂津一、云々。時神吐ニ毒氣一、人物咸瘁^{オエヌ}。瘁ハ「オエ」ト訓ズ、疫ト同義ナリ、コレ疫病ノ史書ニ見エタル始ナルベシ。』

孝安天皇十五年癸卯二八三

【西洋】紀元前三百七十八年、「ヒポクラテス」歿ス、「ヒポクラテス」ハ伊太利ノ人、紀元前四百六十年「コー」島ニ生マル。「アスクレピラス」十八世ノ孫ナリ。始メ「アーデン」ニ在リ、後四方ヲ漫遊シテ觀察實驗スル所多ク、著述五十餘種ニ及ブ、稱シテ醫聖トナス。

【支那】東周安王、二十四年ニ當ル。

孝安天皇七十三年辛丑三四一

【西洋】紀元前三百二十年。「アレキサンドリア」學校興ル、此學校ニハ醫學ノ他、數學・器械學・建築學等ノ專科アリ。其醫學ハ解剖ト實驗トヲ重ジ、解剖科ニハ大陳列場ノ設アリ、醫學ノ分レテ内外科藥科トナリシハ此時ニ初マルト言フ。

【支那】東周慎靚王、元年ニ當ル。

孝靈天皇十一年辛巳三八一

【西洋】紀元前二百八十年「ヘロヒルス」歿ス、「ヘロヒルス」ハ「アレキサンドリア」學校ノ首座教授ニシテ「エラシストラトス」ト共ニ人屍ヲ解キ内景ヲ視ル、之ヲ人體解剖學ノ鼻祖トス。

【支那】東周赧王、三十五年ニ當ル。

此天皇ノ朝、秦ノ徐福仙藥ヲ求メテ我國ニ來タリ斯土ニ留マル、其帶ブル所ノモノニ百工技藝アリ、醫人モ亦其中ニ在リシト言フ。

孝元天皇三十五年辛酉四八一

【支那】漢高后八年、齊ノ人淳于意同郡ノ陽慶ニ就テ禁方ヲ受ケ、後良醫ノ聞アリ、太倉公コレナリ。

【西洋】紀元前百八十年ニ當ル。

奈良朝以前時代

崇神天皇六年己丑五六九

天照大神ヲ大和笠縫邑ニ祭り、神器ヲ遷シ、神宮皇居始メテ分カル。

古事記ニ『此天皇之御世、疫病多起、人民死、爲レ盡、爾天皇愁歎而、云々、於ニ御諸山ニ、拜ニ祭意富美和之大神前一、云々、因レ此、役氣悉息、國家安平也』ト。此ヨリ後疫アル毎ニ神ヲ祭ルノ例多シ、大祓、道饗祭等ノ類卽是ナリ。

【支那】漢武帝 征和元年ニ當ル。

【西洋】紀元前九十七年ニ當ル。

成務天皇二十六年丙申八一六

【西洋】紀元百五十六年、「アスクレピヤデス」歿ス「アスクレピヤデス」ハ希臘ノ醫學ヲ羅馬ニ移シ、羅馬醫聖ノ稱アリ。

【支那】後漢桓帝、永壽二年ニ當ル。

神功皇后攝政十年庚寅八七〇

【西洋】紀元二百十年、「ガーレン」歿ス、「ガーレン」ハ「アレキサンドリア」學校ヨリ出デテ羅馬王ノ侍醫トナリ、羅馬ニ在リテ醫學及ビ解剖學ヲ講ジ、數百種ノ著書アリ、當時醫學ノ泰斗タリ。

【支那】後漢獻帝、建安十五年ニ當ル。

神功皇后攝政十七年丁酉八七七

【支那】後漢獻帝、建安二十二年、是歲大疫ス、張機其橫夭ノ救ナキヲ傷ミ、博ク衆方ヲ採リテ傷寒卒病論ヲ撰ス、其文辭簡潔奧雅、古今傷寒ヲ治スルモノ其外ニ出ルコト能ハズ、實ニ方書ノ祖タリ、張機字ハ仲景、南陽ノ人、後京師ニ在リテ名醫タリ、後人尊奉シテ醫聖トナス。

【西洋】紀元二百十七年ニ當ル。

應神天皇十六年乙巳九四五

百濟ノ人王仁來朝シテ論語、千字文ヲ獻ジ、始メテ文字アリ、且ツ從來ノ神教ノ外、新ニ儒教ヲ加ヘタリ。

允恭天皇元年壬子一〇七二

『皇子謝日、我之不天、久離^{カカリ}ニ篤疾^ニ、不^レ能^ニ步行^ニ、且我已欲^レ除^レ病、獨非^ニ奏言^ニ、而密破^レ身治^レ病、云々』(日本書紀)、思フニ鍼ニテ血ヲ取リシモノナラン。

允恭天皇三年申寅一〇七四

春正月辛酉朔、使ヲ遣シテ良醫ヲ新羅ニ求メ玉フ、秋八月新羅王、金武ヲ調貢大使トナシ、御調八十一艘ヲ貢進シ、兼テ方ヲ獻ゼシム、未ダ幾ナラズシテ病癒ユ、天皇之ヲ歡ビ、厚ク賞シテ國ニ歸ヘシ玉フ。

按ズルニ、神代ニ大穴牟遲、少名毘古那ノ二柱ノ神、療病祓攘ノ方ヲ始メ、或ハ溫泉ニ浴シテ病ヲ療スルノ法ヲ興シ玉ヒシニ、此時ニ至リテ始メテ韓方ノ醫術起レリ。史籍ニ徵スルニ、崇神天皇以後、外交ノ道漸ク開ケテ、三韓任那等比年入貢シ、文學技藝醫藥方術等、漸次傳來セシコト疑ナシ、然レドモ公ニ其醫方ヲ採用セルハ此時ヲ以テ始トス。

【支那】東晋安帝、義熙十年ニ當ル。

【西洋】紀元四百十四年ニ當ル。

允恭天皇三十二年癸未一一〇三

【支那】宋文帝、元嘉二十年、太醫令秦承祖奏シテ醫學ヲ置キ、以テ醫生ヲ教授ス、晋以上未ダ醫學ノ設アラズ、此時ニ至リテ醫學ノ制度興ル。

【西洋】紀元四百四十三年ニ當ル、此頃ハ上古ノ末期ニシテ醫學沉淪ノ時代ニ屬ス。

雄略天皇三年己亥一一一九

天皇詔シテ良醫ヲ百濟ニ徵シ玉フ、百濟貢スルニ高麗ノ醫德來ヲ以テス、德來徵ニ應ジテ至リ難波ニ居ル、子孫、世々醫ヲ以テ業トナシ、難波ノ藥師ト稱ス。

夏四月、栲幡皇女湯人廬城部連武彥ト姦シ妊メリト讒スルモノアリ、皇女五十鈴川上ニ經死ス、天皇人ヲ遣シテ其屍ヲ求メシメ、割テ視玉フニ、腹中物アリ、水ノ如シ、水中ニ石アリ、斯ニ由テ其罪ヲ雪ムルコトヲ得タリ、コレ解視ノ史書ニ見エタル始ナリ。

【支那】宋孝武帝、大明三年ニ當ル。

【西洋】紀元四百五十九年ニ當ル。

武烈天皇二年庚辰一一六〇

【支那】齊廢帝、永元二年、陶弘景、晋ノ葛洪（號稚川）ノ肘後卒救方ヲ得、ソノ闕漏ヲ補テ、肘後百一方ト名ヅク、但シ今ノ世ニ傳フルモノハ後人ノ僞撰ナラント言フ。

【西洋】紀元五百年ニ當ル。

欽明天皇十三年壬申一一二二

疫瘡流行シ死スルモノ多シ、是ヨリ先、百濟佛像佛具經論ヲ獻ズ、物部尾輿・中臣鎌子奏シテ曰ク、蕃神ヲ拜シ玉ハバ國神ノ怒ヲ致サント、天皇即チ之ヲ蘇我稻目ニ賜フ、稻目大ニ喜ビ向原ノ家ヲ淨メテ寺トナス、此ヨリ後、疫氣起リ民夭死ス、時ノ人之ヲ稻目ガ佛ヲ奉ズルニ因リテ國神ノ怒ヲ致セシモノナリトス、或ハ麻疹ノ流行ナリシカ。

我邦ニ佛法ノ入りシハ此時ニシテ、此宗教ハ漸次興隆シ、推古天皇ノ三十一年ニハ寺四十六所、僧八百十六人、尼五百六十九人ノ多キニ達シ、從來ノ神教、儒教ニ加フルニ佛・教ヲ以テシ、世ニ三教アリ。

【支那】梁光元帝、承聖元年ニ當ル。

【西洋】紀元五百五十二年ニ當ル、此頃醫學ノ盛ナリシハ、東羅馬ニシテ「アエチオス」、「アレキサンドロス」、「パウロス」等ノ名醫アリ。

欽明天皇十四年癸酉一二二二

夏六月、天皇詔シテ使ヲ百濟ニ遣シ、醫博士曆博士易博士等ヲシテ遞番ニ來朝セシメ、且ツ種々ノ藥物ヲ附送セシム、翌年春正月、百濟國、詔ヲ奉ジテ醫博士王有陵陀、採藥師潘量豐・丁有陀ヲ貢ス。

按ズルニ允恭天皇ノ朝、良醫ヲ彼ニ徵シテヨリ二百年、此時ニ至リテ、藥方ノミナラズ、醫博士採藥師等ヲ彼邦ニ求メテ其術ヲ擴張ス、韓醫方益々熾ナリ。

【支那】梁光元帝、承聖二年ニ當ル。

【西洋】紀元五百五十三年ニ當ル。

欽明天皇二十三年壬午一二二二

秋八月、吳人知聰、藥書明堂圖等百六十卷ヲ持シテ來朝ス、外國醫書ノ我邦ニ入ルハ此時ニ始マルト言フ。

【支那】陳文帝、天嘉三年ニ當ル。

【西洋】紀元五百六十二年ニ當ル。

敏達天皇十四年乙巳一二四二

日本書紀ニ曰ク、『發レ瘡死者充ニ盈於國、其患レ瘡者言、身如ニ被レ燒被レ打被レ摧、啼泣而死、云々』(二月)、按ズルニ痘瘡流行ナラム、或ハ日フ、麻疹ノ流行ナラムト。

六月、蘇我馬子病ニ罹ル、遂ニ奏シテ佛ニ祈禱ス、僧侶ノ醫ヲ兼ヌルコト、既ニ端ヲ此ニ發ス。

【支那】陳后主、至德三年ニ當ル。

【西洋】紀元五百八十五年ニ當ル。

推古天皇十年壬戌一二六二

冬十月、百濟ノ僧勸勒來朝シ、曆書天文遁甲方術等ノ書ヲ獻ズ、此時諸生三四人ヲ選テ就テ學バシム、山背臣并立醫術ヲ受ク。

欽明天皇ノ朝ニ始メテ我ニ入リシ佛教ハ漸ク旺盛ニ赴ムキ、殊ニ此天皇ノ時ニハ厩戸皇子(聖德太子)ノ篤ク之ヲ尊信シ玉ヒシヨリ益々其盛力ヲ加ヘタリ、又此時憲法ヲ定メ、國史ヲ撰シ留學生ヲ支那ニ遣ハシ專ラ其風ヲ模スルニ至レリ。

【支那】隨文帝、仁壽二年ニ當ル。

【西洋】紀元六百二年ニ當ル。

推古天皇十六年戊辰一二六八

九月、藥師惠日・倭漢直福因等ヲ唐ニ遣シテ醫ヲ學バシム。

按ズルニ、韓（新羅、高麗、百濟）醫方傳ハリテヨリ三百年、此時ニ至リテ古方及ビ韓方ノ醫術共ニ衰ヘテ唐方ノ醫術興ル。

【支那】隨煬帝、大業四年ニ當ル。

【西洋】紀元六百八年ニ當ル、是ヨリ前、四年「アレキサンドロス」歿ス、「アレキサンドロス」ハ羅馬ニアリテ藥劑十二書ヲ著シ醫名噴々タリシ人ナリ。

推古天皇十八年庚午一二七〇

【支那】隨煬帝大業六年、巢元方等、勅ヲ奉ジテ病源候論五十卷ヲ撰ス、此書凡六十七門、一千七百二十論、該集セザルモノナシ、後ノ諸書此書ニ本ヅクモノ多シ。

【西洋】紀元六百十年ニ當ル。

推古天皇十九年辛未一二七一

夏五月五日、天皇百官ヲ率テ菟田野ニ藥獵シ玉フ、藥獵トハ藥草ヲ採リ、併セテ田獵ヲナスヲ言フ、五月五日ヲ期シテ之ヲナス、支那ノ習俗ニ倣ヘルナリ。

推古天皇二十年壬申一二七二

『是歲、自三百濟國、有化來者、其面身皆斑白、若有白癩者乎、惡其異於人、欲棄海中島、然其人曰、若惡三臣之斑皮者、白斑牛馬不可畜於國中』（日本書紀）、白癩ノ稱既ニ此時ニ見ユ、シカモ今日ノ癩病ニアラザリシコトハ此文ニテモ察セラルルナリ。

推古天皇三十一年癸未一二八三

留學生僧惠齊・惠光及醫惠日・福因等唐ヨリ歸ル、共ニ奏シテ日ク、唐國ニ留學セルモノ業既ニ習熟セリ、宜シク召還スベシ、且ツ唐國ハ法式備リ定リテ珍シキ國ナリ、交通スベシト。按ズルニ我國人ノ外邦ニ留學シテ醫術ヲ修

ムルコトハ此朝ニ始マル。

【支那】唐高祖、武徳六年ニ當ル。

【西洋】紀元六百二十三年ニ當ル。

舒明天皇元年己丑一二八九

【支那】唐太宗貞觀三年、醫藥博士及ビ學生ヲ置キ、諸州ニ醫學ヲ置ク。

【西洋】紀元六百二十九年ニ當ル。

舒明天皇二年庚寅一二九〇

秋八月、大仁犬上御田耜ヲ唐ニ遣ス、由テ復々惠日ヲシテ隨行シテ醫術ヲ研究セシム、是ニ至リテ唐方ノ醫術漸ク熾ナラントス。

【支那】唐太宗、貞觀四年ニ當ル。

【西洋】紀元六百三十年ニ當ル。

皇極天皇元年壬寅一二三〇二

一書ニ言フ『紀幾男麻呂、新羅ニ入り、鍼術ヲ學ビ得テ歸リ、鍼博士ニ學ゲラル、コレヲ鍼術ノ祖トス』、其出處正確ナラズ。

皇極天皇四年乙巳一二三〇五

『夏四月、戊戌朔、高麗學問僧等言、同學鞭作得志、以レ虎爲レ友、學ニ取其術一、或使三枯山變爲三青山一、或使三黃地變爲三白水一、種々奇術不レ可ニ殫究一、又虎授ニ其針二日、慎矣、慎矣、勿レ令三人知一、以レ之治レ病、無レ不レ愈、果如レ所レ言、治無レ不レ差、云々』(日本書紀)、コハ高麗ノコトヲ言フモノナレドモ、コレニヨリテ此類ノ術ガ、古ヨリ既ニ行ハレシコトヲ知ルベク、又彼邦ヨリシテ我邦ニ入りシコトモ推知スベシ。

孝德天皇大化元年乙巳一二三〇五

善那使主、始テ牛酪ヲ製シテ進ム、天皇之ヲ嘉ミシ、和藥使主ノ姓ヲ賜ヒ、名ヲ福常ト改ム、善那使主ハ吳人知聰ノ子ナリ。

此年始メテ年號ヲ立テテ大化ト言ヒ、次テ隋唐ノ制ニ依リテ大政ヲ一新シ、學事モ亦漸ク緒ニ就キタリ。

【支那】唐太宗、貞觀十九年ニ當ル。

【西洋】紀元六百四十五年ニ當ル。

孝徳天皇白雉三年壬子一三一二

【支那】唐高宗永徽三年、孫思邈歿ス、思邈千金方三十卷・千金翼方三十卷・脈經一卷・養生真錄一卷等ノ著アリ、歿スル
歳百餘歳ト言フ。

【西洋】紀元六百五十二年ニ當ル。

齊明天皇三年丁巳一三二七

内大臣中臣鎌子病ム、天皇之ヲ憂ヒ、百濟禪尼法明ヲシテ維摩偈句ヲ誦セシム、未ダ終ラザルニ病即チ癒ユ、鎌子感伏、更ニ轉讀セシメ、翌年精舎ヲ山階ニ建テ齋會ヲ設ク、コレヲ維摩會ノ始メトス、次テ持統天皇ノ朝ニ仁王會アリ、聖武天皇ノ朝ニ大般若會アリ、淳和天皇ノ朝ニ最勝會アリ、疾疫災危アレバ即チ僧侶ニ命ジテ此等ノ諸經ヲ聽讀セシメタリ。

【支那】唐高宗、顯慶二年、右監門蘇敬、陶弘景ガ撰スル所ノ本草舛誤多キヲ以テ刪除ヲ加ヘンコトヲ奏請ス、四年正月撰成ル、詔シテ秘府ニ藏ス、唐新修本草是ナリ。

【西洋】紀元六百五十七年ニ當ル。

天智天皇六年丁卯一三二七

帝都ヲ近江ノ志賀ニ遷ス、天皇鎌足ト議シテ新ニ令ヲ制シ玉フ、コレヲ近江朝廷ノ令トイフ、始メテ學校ヲ設ケ、學職ヲ置キテ諸生ヲ教育ス。

天智天皇十年辛未一三三一

正月、炆日比子・贊波羅金須・鬼室集信ニ大山下ヲ授ケ、徳頂上・吉大尙ニ小山上ヲ授ク、此等ノ人ハ皆韓人ニシテ藥物ノ學ニ通ゼルモノナリ。

天武天皇四年丙子一三三六

春正月丙午朔、大學生諸學生陰陽寮、外藥寮、云々等藥ヲ捧グ、毎歲正月元旦屠蘇ヲ飲ムノ風習ハ實ニ此ニ始マルト言フ。又此時外藥寮ノ目アリ、置廢何レノ朝ニアルヤヲ知ラズ。朝廷令シテ牛馬犬猿鶏ノ肉ヲ食フ莫カラシム。

【支那】唐高宗、儀鳳元年ニ當ル。

【西洋】紀元六百七十六年ニ當ル。

天武天皇十一年癸未一三四三

百濟國僧法藏優婆塞益田金鍾ヲ美濃ニ遣シテ、白朮ヲ殖セシム。

天武天皇朱鳥元年丙戌一三四六

侍醫桑原村主訶都ニ直廣肆ヲ授ケ、因リテ連ノ姓ヲ賜フ。
侍醫百濟人億仁ノ死ニ臨ミ、勤大一ヲ授ク。

持統天皇四年庚寅一三五〇

【西洋】紀元六百九十年、「パウロス」歿ス、東羅馬ノ名醫ニシテ殊ニ外科産科ニ名アリ。

【支那】唐中宗、嗣聖七年ニ當ル。

持統天皇八年甲午一三五四

醫博士務大參德自珍ニ銀二十兩ヲ賜フ。

持統天皇十年丙申一三五六

醴泉近江都賀ニ涌ク、諸病者益須寺ニ停宿シテ療シテ癒ルモノ多シ、此レ庶人ノ温泉ノ水ニテ病ヲ治シ試ミタル嚙矢ナラン。

【支那】唐中宗 嗣聖十三年ニ當ル。

【西洋】紀元六百九十六年ニ當ル。

文武天皇三年己亥一三五九

五月丁丑、役小角、伊豆島ニ流ガサル、初メ小角葛木山ニ住シ咒術ヲ以テ稱セラル、外從五位下韓國連廣足之ヲ師トス後妖妄ヲ以テ人ヲ惑ハスヲ以テ之ヲ遠處ニ配ス。
九月癸丑、僧法蓮ニ豊前國野四十町ヲ施シ、以テ其醫術ヲ褒ス。

文武天皇大寶元年辛丑一三六一

唐制ニ依リ、律令ヲ定メ、之ヲ天下ニ頒チ、每事令ニ依テ行ハシム、所謂大寶律令コレナリ。其醫疾令ハ亂世ニ散佚シテ傳ハラズ、類聚三代格・政事要略等ニ引用セル所ヲ見テ其大概ヲ知ルベキノミ。其要領ヲ抄録スレバ
醫針生、各分レ經受レ業、醫生習ニ甲乙脈經、本草一、兼習ニ小品集驗等方一、針生習ニ素問黃帝針經明堂脈訣一、兼

習^三流注偃側等圖赤烏神針等經^一
醫生既讀^三諸經^一、乃分^レ業教習、率^{二十}、以^{三十二人}一學^三體療^一、三人學^三創腫^一、三人學^三少小^一、二人學^三耳目口齒^一、各專^三其業^一
醫針生、博士二月一試、典藥頭助一年一試、宮內卿輔年終惣試、其考試法式、一準^三大學生例^一、學^三體療^一者、限^二七年^一成、學^三少小及創腫^一者、各五年成、學^三耳目口齒^一者、四年成、針生七年成、有^下私自學習解^三醫療^一者上、投^{三名典藥}一、試驗堪者、聽准^三醫針生例^一考試
凡國醫師教^三授醫方^一、及生徒課業年限、並准^三典藥寮教習法^一、

是ニ由テ之ヲ觀ルニ、醫生ノ講讀スベキ課程ヲ定メ、考試ノ法則ヲ制シ、修業ノ年月ヲ限り、私ニ學習セルモノヲ試驗シテ採用スル等、諸般ノ制度略ボ此時ニ備レリ、又内科（體療）外科（創腫）兒科（少小）耳目口齒科等、專門ノ科目ヲ別ツコト、既ニ此時ニ始マレリ。

大學及國學ヲ置キ、又宮内省ニ典藥寮ヲ置キ、中務省ニ內藥司ヲ置ク。

職員令ニ據ルニ典藥寮、內藥司ノ職員ハ左ノ如シ。

中務省内藥司正一人（正六位上）掌供奉藥香和合御藥事○佑一人（從七位下）○令史一人（大初位上）侍醫四人（正六位下）掌供奉診候醫藥事○藥生十人掌搗篩諸藥○使部十人○直丁一人○宮内省典藥寮頭一人（從五位下）掌諸藥物療疾病及藥園事○助一人（從六位上）○允一人（從七位下）○大屬一人（從八位下）○少屬一人（大初位上）○醫師十人（從七位下）掌療諸疾病及診候○醫博士一人（正七位下）掌諸藥及脉經教授醫生等○醫生四十人○針師五人（正八位下）掌療諸疾病及補瀉○針博士一人（從七位下）掌教針生等○針生二十人掌學針○按摩師二人（從八位下）掌療諸折傷○按摩博士一人（正八位下）掌教按摩生等○按摩生十人掌學按摩療折傷○咒禁師二人（正八位上）掌咒禁○咒禁博士一人（從七位下）掌教咒禁生○咒禁生六人掌學咒禁○藥園師二人（正八位上）掌知藥性色目種採藥園諸草及教藥園生○藥園生六人掌學識諸藥○使部二十人○直丁二人○藥戶○乳戶

按ズルニ、欽明天皇ノ時醫ヲ三韓ニ徵シテヨリ、醫ヲ善クスルノ士ハ概ネ歸化ノ人ナリ、後唐方ノ醫術興リ、殊ニ此年唐令ニ擬シテ律令ノ制定アリ、大學及ビ國學ノ建設アリ、加フルニ遣唐留學生ノ往來アリテ醫術益開ケ、名醫哲匠輩出スルニ至レリ。

【支那】唐中宗 嗣聖十八年ニ當ル。

【西洋】紀元七百一年ニ當ル、當時歐洲ノ醫學社會ハ夜陰猶深ク、四方暗冥ニシテ學問ノ權ハ覺束ナクモ、少數僧侶ノ手ニ歸シ、一時其勢ヲ擅ニシタル古希臘、古羅馬ノ文化ハ既ニ亡ビテ、今ヤ亞刺比亞興リテ其後ヲ承ケントスルノ時ナリ。

奈良朝時代

元明天皇和銅三年庚戌一三七〇

都ヲ大和國平城ニ遷シ、左右内京ヲ建テ、坊條ノ制ヲ定ム、コレヨリ桓武天皇ノ延暦三年ニ都ヲ山城ニ移シ玉ヒシマデ前後八代七十餘年間ヲ奈良ノ朝ト稱ス。

和銅五年壬子一三七二

太安麻呂勅ヲ奉ジ、神代ヨリノ故實ヲ記録シ古事記ヲ撰ス、我邦上古ノ傳説ヲ叙シタルハ之ヲ以テ最モ古シトス。

和銅六年癸丑一三七三

【支那】唐玄宗、開元元年、醫藥博士ヲ改メテ醫學博士トシ、諸州ニ助教ヲ置ク。

【西洋】紀元七百十三年ニ當ル。

元正天皇養老元年丁巳一三七七

四月、詔シテ曰ク『置レ職任レ能、所ニ以教ニ導愚民、設レ法制レ立、由ニ其禁ニ斷奸非、僧尼依ニ佛道、持ニ神呪ニ救ニ病徒、施ニ湯藥ニ而療ニ痼痼、於レ令聽レ之、方今僧尼輒向ニ病人、令ニ家詐ニ禱幻恠之情、戾執ニ巫術、逆占ニ吉凶、恐ニ脅耄穉、致レ有レ求、道俗無レ別、終生ニ奸亂、云々、如有ニ重病應レ救、請ニ淨行者、經ニ告僧綱、三綱連署、期日令レ赴、不レ得ニ因レ茲逗留延レ日、實由ニ主司不レ加ニ嚴斷、致レ有ニ此弊、自今以後、不レ得ニ更然一、布ニ告村里、勤加ニ禁止』僧尼ノ病者ニ對シテ徒ニ巫術ヲ行フヲ禁ズルナリ。

【支那】唐玄宗、開元五年ニ當ル。

【西洋】紀元七百十七年ニ當ル。

養老四年庚申一三八〇

舍人親王等勅ヲ奉ジテ、故老ノ口碑ニ傳ハレル神代以來ノ舊辭ヲ蒐メテ、日本書紀ヲ撰ビテ上ツル、之ヲ我國史撰修ノ始トス、爾後續日本紀・日本後記・續日本後記・文德實錄・三代實錄ノ撰修アリ、之ヲ併セテ六國史ト稱ス。

養老五年辛酉一三八一

正月詔シテ曰ク『文人武士國家所_レ重、醫卜方術古今斯崇、宜_丙擢_下於_二百寮之內_一、優_二遊學業_一、堪_レ爲_二師範_一者上、特加_三賞賜_一、勸_乙勵後生_甲』ト、乃チ吉田宜・吳肅胡明・秦朝元・太羊甲許母等_二純絲布鍬等ノ物ヲ賜フ。僧法蓮ノ醫術_二精シキヲ賞シテ、其_三三等以上ノ親_二宇佐君ノ姓ヲ賜フ。

【支那】唐玄宗、開元九年ニ當ル。

【西洋】紀元七百二十一年ニ當ル。

養老六年壬戌一三八二

十月甲戌、始テ女醫博士ヲ置ク。

【支那】唐玄宗、開元十年ニ當ル、翌開元十一年諸州ニ醫學博士ヲ置ク、又諸州ニ詔シテ本草及ビ百一集驗方ヲ寫シテ經史ト同ジク貯ヘシム。

【西洋】紀元七百二十二年ニ當ル。

聖武天皇神龜五年戊辰一三八八

太政官議奏シテ、諸國ノ史生、博士、醫師ノ員並ニ考選叙ノ限ヲ改定ス、史生大國ハ四人、上國ハ三人、中下國ハ三人、六考ヲ以テ成選シ、選滿ツレバ替ル、博士醫師ハ國毎ニ補ス、選滿チテ替ルコト史生ニ同ジ。

【支那】唐玄宗、開元十六年ニ當ル。

【西洋】紀元七百二十八年ニ當ル。

天平二年庚午一三九〇

三月、陰陽醫術及曆數、諸道ニ命ジテ各子弟ヲ率テ教授セシム、其時服食料ハ一ニ大學生ニ準ズ。

夏四月、始テ皇后職ニ施藥院ヲ置ク。

按ズルニ諸書此時ヲ以テ施藥院ノ創始トナス、是ヨリ先キ、聖德太子四天王寺ヲ建テ給ヒシトキ、既ニ敬田院・悲田院・療病院・施藥院等ノ目アリ、又養老七年興福寺内ニ施藥・悲田ノ二院アリ、故ニ施藥院ハ固ヨリ此時ニ創マルニアラズ。

【支那】唐玄宗、開元十八年ニ當ル。

【西洋】紀元七百三十年ニ當ル。

天平四年壬申一三九二

冬十月、物部韓國廣足典藥頭トナル、廣足ハ役小角ノ弟子ナリ、聖武天皇召シテ侍醫トナシ是ニ至リテ典藥頭トナル、按ズルニ典藥頭ノ任命ハ此時ニ始マル。

天平七年乙亥一三九五

夏ヨリ冬ニ至ルマデ豌豆瘡ヲ患ヒ天死スルモノ多シ、國史ニ痘瘡流行ヲ記載スルハ此時ヲ以テ始トナス、其流行ノ
狀ヲ案ズルニ此疫ハ始メ筑紫ニ發シ東方ニ蔓延シテ、遂ニ天下ニ普ネク、一兒患ニ罹レバ一村ニ流行スルコト寰ノ
地ヲ曳クガ如キヲ以テ、寰疫ノ名アリ。

天平九年丁丑一三九七

太宰府ヨリ疫瘡ヲ發シ死者算ナシ、亦痘瘡ノ流行ナリ。
六月二十六日、疫病ヲ治療スルノ方ヲ諸國官府ニ下ス。

孝謙天皇天平勝寶四年壬辰一四一二

【支那】唐玄宗、天寶十一年、王燾、外臺秘要四十卷ヲ撰ス。

【西洋】紀元七百五十二年ニ當ル。

天平勝寶六年甲午一四一四

正月、釋鑿眞來朝ス、眞ハ唐ノ江陽縣ノ人、醫術ニ精シク、又藥石ノ鑑別ニ妙ナリ、由テ朝廷特ニ眞ニ命ジテ醫術並ニ藥物鑑別法ヲ諸生ニ教ヘシム、後皇太后ノ不豫ニ及テ藥ヲ進メテ驗アリ、大僧正ノ位ヲ授ケラル、天平寶字七年、年七十七ニシテ歿ス。

天平勝寶八年丙申一四一七

僧法榮治病ニ精シキヲ以テ名アリ、太上天皇（聖武）擢デテ醫藥ニ侍セシム天皇崩ズルニ及ビ、遂ニ陵傍ニ廬シ以テ眞福ヲ修ム。

天平寶字元年丁酉一四一七

十一月、詔シテ日ク『頃年、請博士醫師、多非ニ其才一、託請得レ選、非ニ惟損レ政、亦無レ益レ民、自今以後、不レ得ニ更然一、其須レ講醫生者、太素・甲乙脈經・本章・針生者素問・針經・明堂脈訣、云々』
萬葉集ノ撰者橘諸兄薨ズ、萬葉集ハ勅撰歌集ノ嚆矢ニシテ、雄略天皇ノ朝ヨリ淳仁天皇ノ朝ニ至ルマデ、凡ソ三百年間ノ和歌ヲ蒐録シタルモノナリ。

淳仁天皇天平寶字八年甲辰一四二四

此年勅願ニヨリテ造ラレシ百萬塔中ニ入レンガ爲ニ無垢淨光經等ノ陀羅尼文ヲ板刻セリ之ヲ印刷ノ始トス。

稱徳天皇天平神護元年乙巳一四二五

【西洋】紀元七百六十五年、「バグダッド」ニ始メテ藥舗起ル。

【支那】唐代宗、永泰元年ニ當ル。

天平神護二年丙午一四二六

神龜五年ノ格ニ醫師ハ國毎ニ一人ヲ補ストアルヲ改メ、醫師兼任ノ新例ヲ置ク。

光仁天皇寶龜十年己未一四三九

太政官奏シテ、諸國史生博士醫師ノ員數ヲ増シ、史生大國ニハ五人、上國ニハ四人、中國ニハ三人、下國ニハ二人四歳ヲ以テ限トナス、其博士醫師國ヲ兼ヌルモノハ學生ハ齋糧ニ勞シテ病人ハ救療ニ困シマニヨリ、國毎ニ各一人ヲ置ク、以後恒式トナス。

【支那】唐代宗、太曆十四ニ當ル。

【西洋】紀元七百七十九年ニ當ル。

平安朝時代

桓武天皇延曆三年甲子一四四四

都ヲ山城ニ移ス。コレヨリ凡ソ四百年間、文治年間ニ源賴朝ガ幕府ヲ鎌倉ニ開キシ時ニ至ルマデヲ、平安朝時代ト曰フ。

【支那】唐德宗、興元元年ニ當ル。

【西洋】紀元七百八十四年、亞刺毘亞醫學ノ第一期ニシテ、盛ニ古希臘及ビ古羅馬ノ醫書ヲ翻譯シ、「バグダツド」ニ病院ヲ興シ（七百五十四年）藥舗ヲ開キ（七百六十五年）、其醫學校ハ一時六千ヲ容ルル程ナリシト言フ。

延曆五年丙寅一四四六

七月、羽栗翼内藥正ニ擢デラレ侍醫ヲ兼ヌ、翼ハ和氣廣世ト共ニ當時ノ良醫ト稱セラル、父古磨靈龜二年阿部仲磨ニ從ヒ唐ニ入り女ヲ娶テ翼ヲ生ム、天平二年翼年十六ノ時父ニ從テ歸朝シ、出家僧トナル、朝廷其才ヲ惜ミ還俗セシムト言フ。

延曆六年丁卯一四四七

五月、典藥寮建言ス『蘇敬ガ註スル所ノ新修本草ハ陶隱居ガ集註本草ニ此スルニ一百餘條ヲ増セリ、亦今藥草ヲ採用スルコト既ニ敬ガ説ニ合ヘリ、請フ之ヲ用ヒン』ト、朝廷之ヲ許ス。

延曆十八年己卯一四五九

二月、和氣廣世大學別當トナリ、諸儒ヲ大學ニ會シテ陰陽書及ビ自著ノ藥經太素ヲ講ズ、廣世ハ清麻呂ノ子ニシテ所謂典藥和氣氏ノ祖ナリ。

按ズルニ、和氣廣世ノ藥經太素二卷、亂世ノ散佚ヲ免カレ鈔本ノ儘世ニ傳ハル、徳川氏ノ季世塙氏之ヲ校定シテ續群書類從ニ收メタリ、我邦古醫書ノ今ニ傳ハルモノコレヨリ古キハナカルベシ。

延曆二十四年乙酉一四六五

菅原清唐ヨリ歸リ、大學頭ト爲ル、清ハ儒ニシテ醫ニ精シ、當時醫學ノ振興ニ與リテ大ニ力アリト言フ。

平城天皇大同三年戊子一四六八

是ヨリ先キ、安倍眞直・出雲廣貞等ニ詔シテ大同類聚方ヲ撰バシメ玉フ、此ニ至リテ書成リテ上進ス。

大同類聚方ハ、命ヲ國造縣主稻置別首、又ハ諸國大小神社、又ハ民間ノ名族古家等ニ下シテ、各其傳來スル所ノ藥方ヲ獻ゼシメ、廣貞等ヲシテ、之ヲ撰定類聚セシメ以テ一百卷ヲ成セルモノナリ、今ノ世ニ流布スル畑本・出雲本・豊後本・爾他數種ノ大同類聚方ハ、後人ノ假托ニ出デ、諸家ノ說ニ依レバ足利氏時代ノ僞撰ナラント言フ。按ズルニ、推古天皇ノ世、唐方ノ醫術行ハレテヨリ、我邦ノ古方及ビ韓ノ醫方共ニ衰ヘシニ、平城天皇古傳ノ失スルヲ憂ヒ玉ヒテ、大同類聚方ノ撰アリ、古ノ遺方復タ世ニ顯ハル。

五月、詔シテ醫式ヲ制シ、醫官ノ服務紀律ヲ定ム。

按ズルニ、醫式ハ逸シテ傳ラズ、豹斑錄等ニ引ク所ノモノハ、後人ノ僞作ナラント言フ。

【支那】唐憲宗、元和三年ニ當ル。

【西洋】紀元八百八年ニ當ル、八百年「カール」大帝西羅馬皇帝ノ位ニ即キ、同十四年病デ歿ス、當時歐洲ノ醫學社會ハ夜陰猶深ク、學問ノ權ハ覺束ナクモ、少數僧侶醫學者ノ手ニアリシ時代ナリ。

嵯峨天皇弘仁二年辛卯一四七一

小野諸野典藥助トナル、其孫藏根醫名アリ、太素經集註三十卷ヲ著ス。

弘仁三年壬辰一四七二

侍醫出雲廣貞ニ宿禰ノ姓ヲ賜フ、廣貞嘗テ詔ヲ奉ジテ大同類聚方ヲ撰シ、唐制ニ依リテ藥升大小ノ量ヲ定ム、又難經開委ノ著アリ。

弘仁十一年庚子一四八〇

十二月、詔シテ針生五人ヲ置キ、新修本草・明堂經・劉涓子鬼遺方等ヲ讀マシム。

按ズルニ、嵯峨天皇漢土ノ風ヲ好ミ玉ヒ、禮樂文物皆唐ノ制ニ倣フ、醫術ノ如キモスベテ唐制ヲ採用シ、唐醫方再・比・熾ナリ。

淳和天皇天長二年乙巳一四八五

施藥院司ヲ置ク。

天長三年丙午一四八六

左大臣藤原冬嗣薨ズ、冬嗣嘗テ食封千戸ヲ折割シテ施藥院ヲ置キ、藤原氏一族ノ貧窶ナルモノヲ收養セリ。

天長四年丁未一四八七

物部廣泉醫博士兼典藥允トナリ次テ侍醫ニ遷ル、廣泉醫術ニ精シク、當時獨歩ノ稱アリ、攝養要訣二十卷ヲ著ス。

仁明天皇承和二年乙卯一四九五

十月、丹波國人大村直福吉及び其族四人ニ紀宿禰ノ姓ヲ賜フ、福吉療瘡ノ術ニ精シク、當時諸醫能ク及ブモノナシ
天皇寵愛居宅ヲ賜フニ至ル、後遂ニ其口訣ニ依リテ治瘡記ヲ撰セシム、コレヲ本邦外科書ノ始トス。

僧空海寂、空海ハ支那ニ學ビテ眞言密宗ヲ我邦ニ開キシガ、同時ニ彼邦醫方ヲモ我邦ニ傳ヘタリ。佛教ハ推古天皇ノ時三論宗アリシヨリ、華嚴・法相・律ノ諸宗アリテ世ニ行ハレシガ、僧最澄天台宗ヲ開キ、空海眞言宗ヲ弘ムルニ及ビテ、スベテ六宗トナリ、殊ニ天台・眞言ノ二宗ハ大ニ勢力アリテ、我邦ノ佛教ハコレヨリ一新シタリ。

文德天皇仁壽三年癸酉一五一三

菅原梶成卒ス、梶成醫ヲ能クシ、最モ瘡療ニ長ズ、承和五年遣唐使ニ從テ唐ニ入り、十年歸朝シ、擢デラレテ鍼博士侍醫トナル。

齊衡二年乙亥一五一五

竹田千繼ガ枸杞ヲ服シテ老ヲ駐ムルノ狀ヲ奏スルモノアリ、文德天皇召シ見テ感服シ玉ヒ擢デテ典藥允トナシ、即チ藥園ニ勅シテ枸杞ヲ種エシメ、千繼ヲシテ其事ヲ掌ラシメ玉フ。

清和天皇貞觀二年庚辰一五二〇

大神庸主卒ス、針藥ノ術殆ド其奥ヲ究メ、物部廣泉ト共ニ當時ノ名醫ト稱セラレ。
物部廣泉卒ス、醫術ニ精シク、官醫博士、内藥正ニ至ル。

貞觀三年辛巳一五二一

八月、赤痢流行、十才以下ノ男女、此病ニ染ムモノ甚ダ多シ、赤痢ノ名始メテ史上ニ現ハル。

貞觀五年癸未一五二三

天下咳逆病ヲ患フ。同十四年京師咳逆病復タ流行ス、當時渤海客來タル、時人日フ、コレ異土毒氣ノ然ラシムル所ナリト。

貞觀六年甲申一五二四

二月、詔シテ法印・法眼・法橋ノ三位階ヲ制定ス。
按ズルニ、法印法眼法橋ノ三僧位ハ此時ニ始マレドモ、醫師ノ此ノ僧位ヲ拜スルコトハ、何レノ代ニ起ルヤ詳ナラズ。

貞觀八年丙戌一五二六

紀夏井事ニ坐シテ土佐國ニ流サル、夏井醫藥ノ道ニ通ジ、其配處ニ在ルヤ自ラ山澤ニ往キ採藥合煉以テ民ニ施ス、嘗テ一人アリ中風髮ヲ被ムリテ狂言ス、夏井一匙散藥ヲ與ヘテ之ヲ服セシメ、其人立ニ癒ユト言フ。

貞觀十年戊子一五二八

是ヨリ先キ、菅原岑嗣・物部廣泉・當麻鴨繼・大神庸主等、詔ヲ奉ジテ金蘭方五十卷ヲ撰ス、此ニ至リテ書成リテ上進ス。

貞觀十二年庚寅一五三〇

菅原岑嗣卒ス、岑嗣ハ本姓出雲、廣貞ノ子、官醫博士典藥頭ニ至リ、嘗テ諸名醫ト共ニ勅ヲ奉ジテ金蘭方ヲ撰ブ、卒スル時七十八。
出雲廣貞歿ス、廣貞官内藥正ニ至ル。

宇多天皇寬平八年内辰一五五六

内藥司ヲ典藥寮ニ併ス、是ヨリ前、内藥司典藥寮ノ醫職、諸士雜任セシモ、此ニ至リテ内藥司ヲ罷メ之ヲ典藥寮ニ併セテ、其頭ハ醫ヲ以テ之ニ任ズ。

【支那】唐光宗、乾寧三年ニ當ル。

【西洋】紀元八百九十六年ニ當ル。

醍醐天皇延喜五年乙丑一五六五

延喜式成ル、其式部上ニ曰ク。

『凡雜色之輩、願レ習ニ醫療ニ、下ニ典藥寮ニ、令レ學ニ醫術ニ、其學生准ニ大學生例ニ、聽レ補ニ醫生ニ、』
『凡醫生、皆讀ニ蘇敬新修本草ニ、』

【西洋】 紀元九百五年、此頃ハ亞刺比亜醫學ノ全盛期ニシテ、「ラーツエス」「ジユデウス」等ノ名家アリ。

【支那】 唐哀帝、天祐二年ニ當ル。

延喜十八年戊寅一五七八

九月、深根輔仁掌中要方ヲ撰ス、輔仁ハ明醫ヲ以テ聞エ、嘗テ養生鈔七卷ヲ著ハシ、又勅ヲ奉ジテ本草和名ニ卷ヲ撰ブ。

村上天皇天曆元年丁未一六〇七

詔シテ醫道學生等ヲ課試セシム。

唐人長秀歸化シテ鎮西ニ居リ、醫術ニ精シキヲ以テ徵サレテ、梵釋寺ニ住シ、僧務ヲ督シ、併セテ醫事ニ與カル、一日桂宮ニ詣デ庭樹ヲ觀テ日ク、此レ眞ノ桂心、藥劑ニ供スベシト、時人始メテ本邦桂ノ用フベキヲ知ルト言フ。

天德三年己未一六一九

今年人民頸腫、世ニ福來病ト稱ス、次テ長元二年ニモ、亦コノ病流行セリ。

康保二年乙丑一六二五

和氣時雨歿ス、時雨ハ廣世數世ノ孫ニシテ、醫術ニ精シキヲ以テ名アリ、官醫博士、鍼博士、典藥頭ニ至ル。

圓融天皇天延二年甲戌一六三四

典藥頭清原滋秀詔ヲ奉ジテ、内野ノ官庫ニ赴ムキ、藥材ヲ鑑査ス、滋秀醫名アリ、三條中納言肥胖ニ苦シミ滋秀ニ詢ル、滋秀處スルニ夏月水飯、冬月湯飯ノ方ヲ以テセリト言フ。

天元三年庚辰一六四〇

【支那】 宋太宗、太平興國五年、醫官院ニ詔シテ經驗方ヲ獻ゼシメ、輯メテ太平聖惠方百卷ヲ成ス。

【西洋】 紀元九百八十年ニ當ル。

永觀二年甲申一六四四

丹波康賴、嘗テ醫心方ヲ撰ス、此書隋唐方書百餘家ヲ摺摭シ、本草藥性明堂孔穴養生服石食餌等、具戴セザルハナシ、此年三十卷撰成リテ進獻ス。本邦方書ノ府庫ト稱セラル、詔シテ之ヲ以テ諸生ヲ課試ス。

【西洋】紀元九百八十四年。「サレルノ」ノ學校興リ、僧侶ノ關係ヲ離レタル醫學ノ講習所成ル、是レ實ニ後・來・ノ大・學・ノ濫觴ナリ、「サレルノ」ノ學校ハ紀元前二百年ノ項、羅馬人之ヲ創設セシトノ説アレドモ、其始メテ記録ニ上ボリシハ、紀元九百八十四年ニシテ、「モント・カツシノ」、「モント・ペリエル」ノ學校ト共ニ歐洲中古紀ノ醫學ニ大影響ヲ及ボセシモノナリ。

【支那】宋太宗、雍熙元年ニ當ル。

一條天皇長徳元年乙未一六五五

丹波康頼歿ス、康頼ハ丹波矢田ノ人、其先ハ後漢靈帝ニ出ヅ、康頼ニ至リ醫ニ精シキヲ以テ丹波宿禰ノ姓ヲ賜ヒ、官鍼博士丹波介ニ至ル、歿スル時年八十四。

長徳四年戊戌一六五八

夏ヨリ冬ニ至リ疫瘡遍ク發ス、世ニ之ヲアカモガサ（赤斑瘡）ト謂フ、又之ヲ稻目瘡ト號シ、又赤疱瘡ト號ス、麻疹流行ノ書ニ見エタル始ナリ。

寛弘六年己酉一六六九

具平親王薨ズ。親王心ヲ醫事ニ留メ弘決外典鈔ノ著アリ。

三條天皇長和三年甲寅一六七四

宋人惠清歸化シテ鎮西ニ居リ醫ヲ能クス、此年藤原清賢ノ命ヲ奉ジテ宋ニ赴ムキ治眼方ヲ求ムト言フ。

後一條天皇長元元年戊辰一六八八

丹波雅忠典藥頭ニ試ラル。又雅忠ハ康平中施藥院使ニ擧ラル、醫師ノ此官ニ任ゼラルルハ、コレヲ以テ始トナス。

後冷泉天皇永承二年丁亥一七〇七

惟宗俊通侍醫ニ任ゼラル、次デ醫博士トナル、醫博士ノ官ハ和氣・丹波ノ二氏遞ニ之ニ任ゼラルルヲ例トシ、俊通ノ特ニ之ニ任ゼラレシハ異數ナリ。

天喜五年丁酉一七七一

【支那】 宋仁宗、嘉祐二年、校正醫書局ヲ編修院ニ置キ、掌禹錫・林億等ニ命ジテ醫書ヲ校勘セシム。

【西洋】 紀元一千〇五十七年ニ當ル。

白河天皇承曆四年庚申一七四〇

高麗王ノ妃篤疾ニ罹リ良醫ヲ我邦ニ求ム。時人丹波雅忠ヲ以テ選ニ擬ス、朝廷其書辭體ヲ失フヲ以テ請ヲ却ケ、太宰府ヲシテ報牒セシム、内ニ扁鵲何入ニ鷄林之雲一ノ語アリ、コレヨリ世雅忠ヲ稱シテ日本扁鵲トナス。

永保元年辛酉一七四一

丹波雅忠、晋唐方書ニ就テ、救急ノ方ヲ摘録シテ醫略抄ヲ著ハス。

堀河天皇寛治二年戊辰一七四八

丹波雅忠歿ス、年六十八、雅忠ハ康頼ノ曾孫、醫ヲ以テ名アリ、醫略抄・醫心方略等ノ著アリ。

崇徳天皇保延六年庚申一八〇〇

【西洋】紀元千四百四十年、「ローゲル」王、醫師試験法ヲ定ム。

【支那】南宋高宗、紹興十年ニ當ル。

近衛天皇久安六年庚午一八一〇

【西洋】紀元千五百五十年「モントペリエル」ノ大學興ル。

【支那】南宋高宗、紹興二十年、女眞帝國ヲ稱シテ金ト曰フ。

二条天皇永萬元年乙酉一八二五

僧石屋傳屍病ヲ治スルニ妙ナルヲ以テ名アリ、二條帝密ニ召シテ灸セシメ玉フテ効アリシト言フ。

六條天皇仁安二年丁亥一八二七

鳥羽上皇瘍ヲ病ミ玉フ、諸醫方ヲ上リテ効ナシ、和氣定成之ヲ治シテ直チニ癒ユ、後又勅ヲ奉ジテ合藥方ヲ撰ス、和氣氏累世良工アリト雖モ、中世藤原氏ニ抑制セラレテ衰微振ハズ、定成ニ至リテ醫名再ビ隆起スト言フ。

仁安三年戊子一八二八

丹波兼康侍醫トナル、兼康特ニ口舌ノ治療ニ巧ナルヲ以テ世ニ鳴ル。

高倉天皇承安元年辛卯一八三一

前年七月堅根ト稱スル病流行ス。此年十月羊病ト稱スル病流行シ貴賤上下之ヲ煩フ、翌年ノ九月二禁ト稱スル病流行ス。

安元二年丙申一八三六

後白河天皇瘡ヲ患ヒ玉フ、和氣貞說之ヲ治シテ効アリ、貞說醫ニ精シキヲ以テ聞エ、嘗テ宇佐祠官某疾アリ、時醫之ヲ癩トナス、惡疾ハ祭祀ヲ奉ズルヲ禁ズルノ制ナルヲ以テ、京師ニ赴ムキ朝廷ノ醫官ヲシテ已レガ疾ヲ鑑定セシム、和氣貞說立ニ之ヲ診シテ其疾ノ白癩ニシテ癩疾ニアラザルコトヲ辨ズ、考徵精確、衆能ク難ズルモノナカリシト言フ。

治承三年己亥一八三九

六月、錢病ト稱スル病流行ス、翌年八月ヘナモ流行ス、即チ水痘ナリ。

安徳天皇養和元年辛丑一八四一

詔シテ當時ノ名醫五人ヲ選テ方書ヲ撰バシメ玉フ、其選ニ入りシハ和氣定成（合藥方）・和氣定良（療治方）・丹波頼基（藥種功能抄）・丹波知康（灸穴取對法）・丹波憲基（病源抄）ナリ。

壽永三年甲辰一八四四

三月、釋蓮基長生療養方ヲ撰ブ。

【支那】淳熙十一年、當時金ノ代（白河天皇永久三年ヨリ、四條天皇文曆元年ニ至ル）ニシテ、醫家ニハ張元素・劉完素（河間）・張從正（子和）・成無已等ノ名家アリ。

【西洋】紀元千八百八十四年、十二世紀ニ當リ、「サレルノ」ノ學派全盛ノ時代ナリ。

鎌倉時代

後鳥羽天皇文治二年丙午一八四六

源頼朝天下物追捕使トナリ幕府ヲ鎌倉ニ開ク、コレヨリ北條氏滅亡ニ至ルマデ、凡ソ百五十年ノ間ヲ鎌倉時代ト曰フ。

土御門天皇建仁元年辛酉一八六一

【支那】南宋寧宗、嘉泰元年、劉繼先褚氏遺書ヲ刊行ス。

【西洋】紀元一千二百〇一年ニ當ル。

順徳天皇建保三年乙亥一八七五

源實朝病アリ、僧榮西其宿醒ニシテ病ニアラザルヲ察シ、清茶一盞ヲ進メ、且ツ爲ニ喫茶養生記ヲ撰ビテ獻ズ、榮西ハ備中ノ人、宋ニ赴ムキテ台教ヲ學ビ、建久二年歸朝シ、建仁寺ヲ京都ニ創立シ、建保三年鎌倉ニ來タリ七月病デ歿ス。

承久三年辛巳一八八一

七月十三日、鳥羽上皇隱岐國ニ遷幸シ玉フ、施藥院長成等供奉ス、長成ハ和氣氏ニシテ權侍醫施藥院使タリ、此年
剃髮シテ叔信ト稱ス。

四條天皇天福元年癸巳一八九三

京師ニ咳嗽流行ス、世人之ヲ夷病ト稱ス。

嘉禎二年丙申一八九六

正月、押領使ト稱スル病流行ス。

嘉禎三年丁酉一八九七

【支那】南宋理宗、嘉熙元年、陳自明婦人大全良方二十四卷ヲ著ハス、女科ノ書唐ノ魯殷ノ產寶アリ、次テ李師聖ノ產育寶慶集アリト雖モ簡略ニ過グ、自明ノ婦人良方ニ至リテ女科證治詳悉遺ス所ナシ、後ノ諸家皆之ヲ宗トス。
王好古醫壘元戎ヲ著ハス。

後嵯峨天皇寬元二年甲辰一九〇四

三日病及ビ内竹房ト稱スル病、大ニ流行ス。

後深草天皇建長三年辛亥一九一一

【支那】南宋理宗、淳祐十一年、李杲歿ス、杲字ハ明之、東垣ト號ス、其醫說ハ脾・胃ヲ以テ主トナシ、補益ノ劑ヲ用フ、著ス所、脾胃論、蘭室秘藏等アリ。

【西洋】紀元千二百五十一年ニ當ル。

龜山天皇弘長三年癸亥一九二三

【支那】南宋理宗、景定四年、陳自明、外科精要ヲ著ハス。

文永四年丁卯一九二七

【支那】南宋度宗、咸淳四年、許國禎、御藥院方ヲ著ハス。

御宇多天皇弘安四年辛巳一九四一

【支那】元世祖、至元十八年、羅天益、衛生寶鑑ヲ著ハス。

弘安七年甲申一九四四

正月、惟宗具俊、本草色葉抄八卷ヲ撰ス、具俊又醫談抄ノ著アリ。

伏見天皇正應元年戊子一九四八

丹波行長、衛生秘要鈔ヲ著ス。

永仁元年癸巳一九五三

十二月、惟宗時俊、醫家千字文ヲ著ス。

後二條天皇嘉元元年癸卯一九六三

僧忍性寂ス、忍性律學ヲ關キテ名アリ、寛元ノ初奈良ニ癩人院ヲ立テ、後子鎌倉梅ヶ谷ニ療病院ヲ建テ病者ヲ救療シタリ。

花園天皇延慶元年戊申一九六八

【支那】元武宗、至大元年、王與無冤錄ヲ著ハス。

【西洋】紀元一千三百〇八年ニ當ル。

正和四年乙卯一九七五

九月、梶原性全萬安方六十二卷ヲ撰ス、性全管テ病源候論ノ目ニ依リ、諸家ノ說ヲ抄録シテ頓醫鈔五十卷ヲ著シ、茲ニ至リテ唐宋醫方ヲ輯録シテ萬安方ヲ撰ブ。

室町時代

後醍醐天皇元弘三年癸酉一九九三

北條氏亡ブ、後四年ニシテ延元ノ亂トナリ、足利尊氏幕府ヲ京都室町ニ開キシヨリ、十五代二百三十五年ニシテ足利氏遂ニ滅亡ス、此時代ヲ室町時代ト稱ス。

【支那】元順宗、元統二年ニ當ル。

【西洋】紀元一千三百三十三年、火藥及ビ油繪ノ發明アリ。

延元二年丁丑一九九七

【支那】元順宗、至元三年、危亦林、世醫得効方ヲ著ス。

【西洋】紀元一千三百三十七年ニ當ル。

後村上天皇正平二年丁亥二〇〇七

【支那】元順宗、至正七年、朱震亨、格致餘論ヲ著ハス。

【西洋】紀元一千三百四十七年ニ當ル。

正平十三年戊戌二〇一八

安藝守定足利氏ノ尙藥ニ擧ゲラル、守定女科ヲ以テ名アリ、コレヨリ後チ宮中ノ産ヲ治スルモノハ皆安藝氏ニ屬ス。

【支那】元順宗、至正十八年、朱震亨歿ス、震亨、字ハ彦修、劉守眞ノ學ヲ傳ヘテ醫ノ聖ナルモノト稱セラル、後ノ學者之ヲ尊テ丹溪翁ト曰フ、著ス所、格致餘論・局方發揮等アリ。

【西洋】紀元一千三百五十八年ニ當ル。

正平二十二年丁未二〇二七

【支那】元亡ブ、元ノ代醫家ノ名アルモノニ李杲（東垣）・朱震亨（丹溪）・危亦林（世醫得効方ノ著者）・王好古（醫壘元戎・湯液本草等ノ著者）・羅天益（衛生寶鑑ノ著者）等アリ、其著述ハ皆我邦ニ傳ハリテ我ガ醫學ニ多大ノ感作ヲ及ボセリ。

長慶天皇正平二十四年己酉二〇二九

竹田昌慶、明ニ航シテ醫ヲ修ム、明主太祖ノ后産難厄ニ頻ス、昌慶ヲ延テ治セシム、藥未ダ劑ヲ終ヘズシテ太子既ニ免ス、明主大ニ喜ビ、昌慶ヲ安國公ニ封ズ。

元人陳宗敬（陳外郎ト言フ）投化シテ筑前博多ニ居ル、博學醫方ニ通ズ、所謂外郎透頂香ハ其遺方ナリ。

天授四年戊午二〇三八

竹田昌慶、醫家秘書及ビ銅人形等ヲ得テ、明ヨリ歸ル。

【支那】明太祖、洪武十一年、周定王古今方劑ヲ彙輯シテ、普濟方四百二十六卷ヲ撰ス。

【西洋】紀元一千三百七十八年ニ當ル。

天授五年己未二〇三九

馬島清跟大僧都歿ス、馬島流眼科ヲ興シ、眼病ノ治療ニ名ヲ得タル人ナリ、我邦ニ眼科専門アルハ此ノ頃ニ始マルナラン。

後小松天皇應永十五年戊子二〇六八

六月、諸國三日病流行。

稱光天皇應永廿七年庚子二〇八〇

秋九月、足利義持病ム、醫士高天妖狐ヲシテ咒咀セシメタリトテ、讃岐ニ流サル。

應永卅二年乙巳二〇八五

【支那】明仁宗、洪熙元年、陳會、神應經ヲ著ハス。

【西洋】紀元一千四百二十五年。

正長元年戊申二〇八八

四月、天下疫病流行ス、世俗ニ之ヲ三日病ト言フ。

後花園天皇永享三年辛亥二〇九一

將軍足利義教病ム、僧允能之ヲ治シテ効アリ、允能ハ坂士佛ノ孫ナリ、嘗テ家傳七十二方ヲ輯録シテ、琉璃壺ヲ著ス。

永享十二年庚申二一〇〇

【西洋】紀元一千四百四十年、「グーテンベルグ」活版及ビ印刷術ヲ發明ス。

寶徳元年己巳二一〇九

八月、天皇腹痛ヲ病ミ玉フ、坂淨秀藥ヲ上リテ効アリ、由テ盛方院ノ號ヲ賜フ、淨秀又鴻寶秘要鈔ノ著アリ。

寶徳三年辛未二一一一

中川子公樺心方ヲ撰ス、後天文年間ニ至リ、僧潤甫之ヲ補修シテ、新增補遺樺心方十三卷ヲ著ス。

享徳元年壬申二一一二

僧月湖、明ニ入り錢塘ニ寓シ、此年全九集ヲ著ス、後又濟陰方ヲ著ス、月湖明鑑寺ト稱シ、又又潤徳齋ト號ス、何レノ人ナルヤヲ知ラズ。

康正二年丙子二一一六

竹田昌慶、延壽類要ヲ著ス、昭慶ノ子、博學多能、長祿應仁ノ間屢々足利氏ノ病ヲ治シテ効アリ、法印ニ進ム。

寛正三年壬午二一一二

大内義弘、伊豫ニ在リテ病ム、將軍之ヲ憂ヒ廣ク良醫ヲ撰ブ、板坂宗徳選ニ當テ往ク。

後土御門天皇應仁二年戊子二一二八

足利義政病アリ、竹田昭慶之治シテ効アリ、法印ニ叙セラル。

文明五年癸巳二二三三

僧良心畠山義統ノ命ヲ承ケテ朝鮮ニ赴キ、和丹ニ氏會テ用フル所ノ癰疽八穴灸法及ビ神應經ヲ彼ニ傳ヘテ歸ル。五月、細川勝元歿ス、勝元管領タリ、政務ノ餘暇、醫術ヲ嗜ミ、歷代方書ヲ閱シ、其萃ヲ拔テ靈蘭集ヲ著ス。

明應元年壬子二二五二

【西洋】紀元一千四百九十二年、「コロムブス」亞米利加ヲ發見ス。

御柏原天皇文龜二年壬戌二一六二

【支那】明孝宗、弘治十五年、王綸、明醫雜著ヲ著ハス。

永正八年辛未二一七一

正月、口瘡流行ス。

永正九年壬申二一七二

浸淫瘡ニ似タル瘡流行ス、時人之ヲ唐瘡、又ハ琉球瘡ト言フ、黴毒始メテ現ハレタルナリ。

永正十年癸酉二一七三

此年麻疹・世間ニ流行ス、コレヨリ以前ノ文書ニハ麻子瘡・赤斑瘡・赤疱瘡・赤モカサ・稻目瘡ノ稱呼ヲ用ヒシガ、コノ時ヨリ麻疹ノ稱アリ。
妙法寺記ニ『タウモト云ヘル大ナル瘡流行セルコト』ヲ記ス、黴毒ヲ指スナラン。

永正十二年乙亥二一七五

【支那】明武宗、正徳十年、虞搏、醫學正傳ヲ著ス。

永正十七年庚辰二一八〇

丹波親康、口齒科ヲ以テ家ヲ成ス、其子光康ニ至リテ氏ヲ親康ト改ム、兼康氏ト併ビテ口中科ノ兩家ト稱セラル。

大永二年壬午二一八二

此年少年イナスリヲ病ム、イナスリハ稻摩ノ義ニシテ麻疹ナリ。

【西洋】紀元一千五百二十二年、「ブリツソー」歿ス、巴里ノ名醫、「ヒポクラテス」ノ刺絡法ヲ再興シタリ。

大永五年乙酉二一八五

竹田定祐、傷寒初心抄ヲ著ハス。

後奈良天皇享祿元年戊子二一八八

和泉ノ人阿佐井宗瑞、醫書大全ヲ刻シテ世ニ行フ、醫書板刻スルコト此ニ始マル。

按ズルニ、是ヨリ先キ、唐土ノ書醫方大成ノ藥方ヲ除キ其論說ノミヲ鈔出シ之ヲ大成論ト題シ專ラ世ニ行ハレシガ、此頃ヨリ醫書大全行ハレ、天文年間吉田意安醫書大全ノ論ヲ抄シ、大成論ト題シテ世ニ行フ、實ハ大全ノ論ニシテ、大成ノ論ニハアラズ。

曲直瀬道三、關東ニ赴ムキ足利學校ニ入り文伯ヲ師トシ、又支山人導道ニ從テ教ヲ受ク。

竹田秀慶（月海ト號ス）歿ス、月海雜錄ノ著アリ。

享祿三年庚寅二一九〇

【西洋】紀元一千五百三十年、「コペルニクス」太陽系ノ說ヲ唱フ。

享祿四年辛卯二一九一

丹波親康、口中秘傳ヲ著ハス。

天文三年甲午二一九四

久志本常光、管蠡備急方、管蠡草灸診抄ヲ著ハス。

【西洋】紀元一千五百三十四年「パラツェルス」歿ス、古醫學ヲ駁シ、化學說ニテ新學ヲ興シ、以テ斯學ノ革新ノ偉業ヲナシタル人ナリ。

天文六年丁酉二一九七

田代三喜歿ス、三喜ハ武州川越ノ人、嘗テ明ニ入り醫ヲ學ブコト十二年、歸リテ鎌倉ニ居ル、後古河ニ赴キ、李杲朱震亨ノ術ヲ創唱ス、世ニ古河ノ三喜ト稱ス、實ニ我邦李朱醫學派ノ開祖タリ。

天文八年己亥二一九九

吉田宗桂明ニ赴ク、明人宗桂ノ診治神察アルヲ以テ意庵ト呼ブ、蓋シ醫ハ意ナリノ義ニ取ル、十二年歸朝シ、十三年再ビ明ニ入り、留マルコト七年、明主世宗ノ病ヲ治ス、歸ルニ及ビテ世宗贈ルニ顔輝扁鵲圖・聖濟總錄・藥笥等ヲ以テス。

天文十年辛丑二二〇一

【支那】明世宗、嘉靖二十年、是ヨリ先キ日本ノ名醫金持重弘來タリテ、四明嘉賓館ニ寓シ、伎岐黃ノ妙訣ヲ得テ尤モ針灸ノ術ニ精シ、此年日本ニ歸ル、尙藥俞璉序ヲ作テ之ヲ贈ル。

天文十二年癸卯二二〇三

葡萄牙ノ商船我九州ノ地ニ漂着ス。

【西洋】紀元一千五百四十三年、「ウエザル」解剖學教科書ヲ著ハシ、解剖學ヲ一新シタリ、彼邦十六世紀ハ學術革命ノ時代ナリシガ、我醫學ニアリテハ、解剖學ハ諸科ノ先驅ヲナシタリ。

「ウエザル」ノ他ニ「フロツピオ」（一千五百六十二年歿）・「オイスタヒー」（一千五百七十四年歿ス）等諸家アリ。

天文十四年乙巳二二〇五

曲直瀨道三京師ニアリテ大ニ李朱醫方ヲ唱道ス、道三名ハ正盛、字ハ一溪、雖知苦齋ト號ス、京都ノ人、幼ニシテ浮屠ニ從ヒ落髮シテ相國寺ニ寓ス、長ジテ足利學校ニ遊ビ、博ク群書ニ通ズ、時ニ田代三喜ノ李朱ノ醫方ヲ唱ヘテ四方ニ周遊スルアリ、道三從テ學ビ、悉ク秘訣ヲ受ク、此ニ至リテ京師ニ還リ、治ヲ施シ書ヲ著シ、且ツ大ニ後進ヲ勸勵ス、後人稱シテ醫學中興ノ祖トナス。

按ズルニ後白河天皇ノ保元平治ヨリ、足利ノ末期ニ至ルマデ、戰亂相繼ギ學藝地ニ墜ツ、醫術ノ如キモ多クハ緇流ノ手ニ歸シ、且ツ晋唐ノ醫方既ニ久シク廢タレテ、世醫皆宋ノ醫方ヲ修ム、是ニ至リテ金元ノ醫學興ル。

【西洋】紀元一千五百四十五年ニ當ル、即チ十六世紀ノ始メニシテ學術革命ノ時代ナリ、解剖學ニハ「ウエザル」（一五一四年生）アリ、内科ニハ「ブリッソー」（一四七六年生）・「バラツエルズ」（一四九〇年生）アリ、外科ニハ、「アムプロア、パーレ」（一五一七年生）アリ、共ニ斯學中興ノ祖ト稱セラル、左レバ醫學歴史ノ近世紀トスベキハ、西洋ニテモ我邦ニテモ、同ジク此頃ニ始マルモノト知ルベシ。

【支那】明世宗、嘉靖二十四年ニ當ル、是ヨリ先キ嘉靖九年劉純（字宗厚）、玉機微義ヲ著ス。

天文十五年丙午二二〇六

南條宗鑑、撰聚婦人方ヲ著ハス、宗鑑ハ伯耆ノ人、一鷗軒ト稱ス、治療精妙ノ名アリ。

天文十六年丁未二二〇七

四月、半井利親歿ス、利親嘗テ明ニ入り、國帝ノ病ヲ治シテ奇驗アリ、歸朝シテ典樂頭トナル。

天文十八年己酉二二〇九

「エスイット」ノ名僧「フランソア・サビール」來朝ス。

弘治二年丙辰二二一六

豊後國主大友宗麟府内ニ救濟院ヲ建テ癩病者及ビ貧病者ヲ收容シ、葡萄牙人「ルイ・アルメイダ」醫ヲ能クスルヲ以テ治療主任タラシム、之ヲ西洋醫術傳來ノ始トス。

正親町天皇永祿六年癸亥二二二三

久志本常顯、家傳退譽聚驗方ヲ著ハス。

永祿九年丙寅二二二六

曲直瀬道三、出雲ニ赴ムキ毛利元就ノ病ヲ治シ、雲陣夜話一卷ヲ著ハス。

吉田意休、明ニ赴ムキ（永祿初年）刺鍼ノ術ヲ學ビテ歸リ、其術世ニ行ハル、其子意安父ノ業ヲ傳ヘテ亦名アリ、

吉田流ノ鍼術コレナリ、同時入江頼明アリ亦一派ノ鍼術ヲ興シタリ。

安土桃山時代

正親町天皇永祿十一年戊辰二二二八

織田信長足利義昭ヲ奉ジテ京都ニ入り近畿ヲ征服シ、次デ豊臣秀吉織田氏ニ代リテ政治ノ權ヲ握リ、遂ニ天下ヲ統一セシヨリ元和元年大阪落城、豊臣氏滅亡ニ至ル間ハ僅ニ五十年ニ過ギズ、而カモ此期ハ戰國時代ヨリ統一時代ニ移リシ時ニシテ、文運復活時代ノ初期ヲナス。

織田信長江州安土ニ在リ、葡萄牙ノ教師ヲ引見ス、尋デ南蠻寺ヲ京都ニ建テ其教ヲ弘メシム、其請ヲ容レテ江州伊吹山ニ藥園ヲ開キ、西洋ヨリ藥物ヲ移植セシム、歐洲ノ植物ヲ移植スルコトモ亦此ニ始マル、今ニ存スル艾草ハ此時移植セルモノナリト言フ、ソノ教師「グレゴリア」「ルイス」醫ヲ善クスルヲ以テ貧民ノ病ヲ救療ス、邦人ノコレニ就テ西洋ノ醫術ヲ傳フルモノ尠カラズ。

元龜二年辛未二二三二

長崎ヲ五市場トナシ、平戸大村ノ商戸ヲ移ス。

天正元年癸酉二二三三

武田信玄卒ス、是ヨリ先キ六年板坂法印（卜庵）信玄ノ脈ヲ診シ、其後ニ必ズ膈病アルベキコトヲ告グ、信玄卜庵ヲ信ジ、攝養ヲ加フモ驗ナク遂ニ死ス、甲斐徳本亦卜庵ニ就テ學ブト言フ。

天正二年甲戌二二三四

曲直瀬道三撰スル所ノ啓迪集成ル、冬十一月禁闕ニ詣リ、此書ヲ天覽ニ供ス、天皇之ヲ嘉賞シ玉ヒ、僧策彦ニ命ジテ此書ノ序ヲ作ラセ玉フ、又詔シテ此書ヲ天下ニ頒布セシム。

按ズルニ、當時ノ醫家、頓醫抄・福田方ヲ讀ムニ止マリテ、局方ノ說專ラ行ハレ、劉張李朱ノ學術ヲ窺フモノ稀ナリ、道三之ヲ憂ヒ、局方發揮・醫學正傳・丹溪纂要等六十餘部ノ方書ヨリ、秘訣ヲ拾集シテ啓迪集八卷ヲ撰ス、人稱シテ之ヲ本邦李朱醫學ノ寶典トナス。

天正三年乙亥二二三五

【支那】明神宗、萬曆三年、李挺、醫學入門ヲ著ハス。

天正五年丁丑二二三三七

【支那】明神宗、萬曆五年、郭子章、稀痘方論ヲ著ハス。

天正九年辛巳二二二四一

播磨ノ人鷹取秀次、外科ヲ以テ名アリ、此年外科新明集三卷ヲ著ス、後又外科細塹ヲ著シテ梓行ス、鷹取流外科ト稱スルモノ此ニ始マル。

按ズルニ、干戈相嗣ギ、治創ノ術急務ニシテ、士林ニ在リテ其術ヲ修ムルモノアリ、之ヲ金創醫ト名ヅク、吉益流、中條流等ノ金創醫コレナリ、鷹取流外科及ビ新ニ興レル南蠻流外科ト併ビ行ハル。

天正十三年乙酉二二四五

吉益半笑齋、換骨秘録ヲ著ス、半笑齋ハ吉益流金創醫ノ名家ナリ。

【支那】明神宗、萬曆十三年、管樞保赤全書ヲ著ハス。

天正十四年丙戌二二四六

十一月、曾谷壽仙法印ニ叙セラル、壽仙外科ニ精シキヲ以テ名アリ、外科傳語ヲ著シテ以テ奏ス、天皇之ヲ嘉賞シ御筆籤ニ題シ玉フ。

十二月、曲直瀬玄朔法印ニ叙セラル、玄朔ハ東井又延壽院ト號ス、正盛ノ子、父ノ名ヲ襲ヒ道三ト稱シ、家業ヲ承ケ、喜テ生從ヲ教導ス、其門ニ出ヅルモノ數千人、未流別支終ニ海内ニ遍ク、道三流ト稱ス。

【支那】明神宗、萬曆十四年、馬蒔、內經註證發微ヲ著ス。

【西洋】紀元千五百八十六年ニ當ル。

後陽成天皇天正十七年己丑二二四九

豐臣秀吉天主教ヲ禁ズ、時ニ在留教師三百餘人、寺院二百五十餘、信徒三十萬。命ジテ南蠻寺ヲ破却シ、教僧ヲ捕ヘテ悉ク本國ニ遂フ、其徒告須蒙ハ名ヲ市橋庄助ト變シ、外科醫トナリ、壽門ハ名ヲ島田清庵ト改メ、内科醫トナリ共ニ堺ニ至リテ門戸ヲ張ル、後皆誅戮セラル。

天正十八年庚寅二二五〇

【支那】明神宗、萬曆十八年、李時珍著、本草綱目刻成ル。

【西洋】紀元千五百九十年、「アムプロア・パレー」歿ス。

天正十九年辛卯二二五一

豐臣秀吉奏シテ施藥院ヲ禁闕ノ南門ニ建テ、丹波全宗ヲ擧テ施藥院使トナス。施藥院ノ名アリテ其實缺ルコト久シ。是ニ至リテ之ヲ復ス。

文祿元年壬辰二二五二

曲直瀨玄朔・坂淨慶等、豊臣秀吉征韓ノ役ニ供奉ス。

二月、曲直瀨玄鑑典藥助ニ任ゼラル、後陽成天皇其累代ノ舊勳ヲ賞シテ、橘姓今大路氏ヲ賜フ、玄鑑ハ玄朔ノ子、是ヨリ曲直瀨ヲ改メテ今大路ト稱ス。

文祿三年甲午二二五四

【支那】明神宗、萬曆二十二年、吳崑、素問註二十四卷ヲ著ス。

文祿四年乙未二二五五

曲直瀨道三歿ス、年八十九。

南蠻人ノ長崎ニ居ルモノ尙ホ耶蘇教ヲ唱フ、秀吉其民ヲ惑ハスヲ怒リ其教ヲ奉ズル者ヲ殺ス、而シテ長崎市人ノ懇請ニヨリ僅ニ通商ヲ許セリ。是歲和蘭人始メテ東洋ニ來タル。

慶長元年丙申二二五六

栗崎道喜、呂宋ヨリ歸リ來リテ南蠻流外科ヲ唱フ、道喜ハ南肥ノ栗崎ノ人、七歲ノ時仇ヲ避テ長崎ニ來リ、居ルコト二年、蕃船ニ乗ジテ呂宋ニ入り（天正二年）、外科ノ術ヲ修ム、此ニ至リテ歸朝シ、業ヲ長崎ニ開キ、良工ノ名アリ、所謂栗崎流外科ノ祖ナリ、慶長四年歿。

慶長二年丁酉二二五七

五月和蘭人始メテ、平戸島ニ來リテ互市ヲ約セリ。

慶長四年己亥二二五九

十二月、施藥院全宗歿ス、年七十四、其先ハ丹波氏雅忠十七世ノ孫、曲直瀨道三ニ就テ醫ヲ學ビ、施藥院使ニ任ゼラル。

【西洋】紀元一千五百九十九年、英人東印度商社ヲ建ツ。

慶長七年壬寅二二六二

【西洋】紀元一千六百二年、蘭人東印度商社ヲ建テ、通商交易ノ利ヲ開ク。

【支那】明神宗、萬曆三十年ニ當ル。

慶長九年甲辰二二六四

【支那】明神宗、萬曆三十二年、王肯堂、證治準繩紀百二十卷ヲ著ス。

【西洋】紀元千六百四年ニ當ル。

慶長十一年丙午二二六六

林道春長崎ヨリ李時珍ノ本草綱目ヲ携ヘ歸リテ幕府ニ獻ズ。此書コレヨリ邦内ニ廣マルト言フ。

慶長十二年丁未二二六七

秦宗巴馬註素問ヲ講ズ、コレヨリ前本邦未ダ斯書ヲ講ズルモノアラズ、講筵ニ侍スルモノ數百人ニ及プト言フ、此年十二月宗巴歿ス、年五十八。

慶長十五庚戌二二七〇

四月吉田宗恂歿ス、年五十三。

後水尾天皇慶長十七年壬子

三月耶蘇教ノ禁令ヲ全國ニ下ス。

慶長十八年癸丑二二七三

金保玄泰（安齋）出デテ徳川秀忠ニ仕フ、玄泰ハ本ト兼康氏、家康ノ諱ヲ避ケテ金保ト改ム、口科ヲ専門トシテ時ニ名アリ。

壽徳庵玄由歿ス、玄由ノ子爲春、糟尾法眼（久牧）ノ家ヲ嗣ギ、婦人科ヲ以テ名ヲ顯ハス。

慶長十九年甲寅二二七四

外科杏庵、其業未熟ニシテ、妄言衆ヲ惑ハシ堅ク全治ヲ言フ、時ニ三好丹後守癰疽ニ悩ム、杏庵之ヲ誤治シテ丹後守死ス、此年九月二十九日遂ニ杏庵ヲ大阪ニ刑ス。

十一月、曾谷慶祐（慶法院法印）歿ス。

此項南蠻流外科ニ慶友（葡萄牙人）・澤野忠庵（葡萄牙人）・半田順庵・杉本忠惠・吉田安齋・栗崎道喜等ノ諸名家アリ。

江戸時代

後水尾天皇元和元年乙卯二二七五

一月。仙臺使臣支倉右衛門（常長）西班牙國王ニ謁シ、十月羅馬ノ都府ニ至ル。

【支那】明神宗、萬曆四十三年、陳實功、外科正宗ヲ著ハス。

【西洋】紀元千六百十五年ニ當ル。

元和二年丙辰二二七六

十二月、御菌意齋歿ス、意齋ハ京都ノ人、始メテ金銀ヲ以テ鍼ヲ製シ、小鎚ヲ以テ膚内ニ打入ス、鎚形圓ニシテ匾鍼ヲ下スコト數所ニ過ギズト雖モ、病ヲ治スルニ奇驗アリ、所謂意齋流打鍼コレナリ。

按ズルニ、是ヨリ先、花園天皇ノ朝、多田爲貞ト言フモノアリ、天皇愛翫ノ牡丹花病ミテ將ニ枯死セントスルヲ診シ、之ニ鍼シテ蠹ヲ刺シ、枯株再ビ春ニ回ル、天皇之ヲ賞シテ御菌ノ姓ヲ賜フト言フ、意齋ハ其數世ノ孫ナリ、

鍼術ニ善キヲ以テ聞ユ、官鍼博士ニ至リ、其徒天下ニ普ク、遂ニ意齋流ノ一派ヲ爲スニ至レリ。

西吉兵衛、南蠻大通詞ニ擧ゲラルル、其子玄庸、父ノ業ヲ受ケ葡萄牙通詞トナリ、後外科ヲ修メ遂ニ西流外科ノ一派ヲナス。

【西洋】紀元千六百十六年。「ウイリアム・ハーヴェー」血液循環ヲ發明ス。

【支那】明神宗、萬曆四十四年ニ當ル。

元和八年壬戌二二八二

片山宗哲（與安法印）歿ス、年五十一。

寛永二年乙丑二二八五

笠原養泉幕府醫官トナル、養泉ノ曾祖父ヲ重次ト曰フ、和泉堺ノ人、穗積流眼科ヲ以テ一家ヲ成ス、其子宗師、重吉相嗣テ眼科ヲ以テ名アリ。

寛永六年己巳二二八九

西國耶蘇教徒、尙多キヲ以テ之ヲ搜索シテ殺サシム、其改悟セシモノニハ耶蘇ノ像ヲ踏マシム、之ヲ踏繪ト曰フ。

明正天皇寛永七年庚午二二九〇

永田徳本歿ス、年百十八、徳本丹溪ノ方ヲ修メ、獨詣スル所直チニ奏張ニ薄マリ、峻劑ヲ驅使シテ顧ミズ、治驗甚ダ多ク、當時獨歩ノ稱アリ。

長崎ノ外船ニ令シテ横文ノ書籍ヲ持チ來ルコトヲ禁ズ、其多クハ耶蘇教書ニ傳ルヲ以テナリ、之ヲ禁書ト言フ。

寛永八年辛未二二九一

今大路玄朔歿ス、名ハ正紹、父ノ稱ヲ襲ヒテ道三ト曰ヒ、學舎ヲ開キ、其技術ト著述トヲ以テ一世ヲ風靡シ、遂ニ李朱醫學ヲ一世ニ普及セリ。

寛永十一年甲戌二二九四

長崎ニ出島ヲ築キ、外國人ノ住地トナス。

寛永十二年乙亥二二九五

九月、藤木成定歿ス、成定鍼術ヲ善クシ、官針博士正五位上ニ進ミ、駿河守ニ任ゼラル、世ニ駿河流ノ針術ト言ヘリ。

長崎ヲ外國入港ノ場ト定メ、他港ニ來泊スルコトヲ禁ズ。

寛永十三年丙子二二九六

朝鮮ノ聘使來ル、岡本玄治命ヲ奉ジテ之ニ接シ、醫事ヲ談ジ、又其病ヲ治ス、彼邦人大ニ之ヲ稱譽スト言フ。東福太后不豫、野間玄琢藥ヲ上リテ効アリ、特ニ東下ヲ免ジテ専ラ太后ニ奉侍セシム、玄琢元和三年法眼ニ叙セラレ、尋デ法印ニ進ム、當時醫官、概ネ京師ニ家シ隔年東下ス、ココニ至リテ此命アリ。

寛永十五年戊寅二二九八

幕府新ニ江戸ノ南北、品川・牛込ノ兩所ニ藥園ヲ置ク。

寛永十八年辛巳二三〇一

吉田機庵（宗活）歿ス、機庵施藥院宗伯・秦宗巴ニ學ビ幼科ヲ以テ名アリ。

寛永十九年壬午二三〇二

【支那】明毅宗、崇禎十五年、吳有可、瘟疫論ヲ著ハシ、瘟疫ハ四時不正ノ氣發シテ成ルモノニシテ、其病傷寒ト相似テ異なるナルコトヲ論ズ。

【西洋】紀元一千六百四十二年ニ當ル。

後光明天皇正保二年乙酉二三〇五

四月、岡本玄治歿ス、年五十九。

十一月、野間玄琢歿ス、年五十六、岡本玄治ト共ニ當時名醫ト稱セラル。

慶安元年戊子二三〇八

是ヨリ先キ、後水尾天皇、侍醫山脇道作ニ命ジテ古人養生ノ要語ヲ纂メシメ玉フ、此年正月書成ル、題シテ勅撰養壽錄ト言フ。

蘭人「カスバル」江戸ニ至ル、「カスバル」外科ヲ善クス、江戸滞在中、其術ヲ傳フルモノアリ「カスバル」流ノ外科此ニ興ル、或ハ日ク、寛永二十年南部山田ニ漂着セル蘭船中ニ外科醫「カスバル」ト言ヘルモノアリ、召サレテ江戸ニ至ル、其術ヲ傳フルモノアリテ「カスバル」流外科興ルト。

按ズルニ、フランソア・ワレンチイン」ノ「出島日誌」ニ、西曆一千六百四十九年慶安二年十一月和蘭公使「ブロンクホルスト」江戸ニ參觀スルニ際シ、醫官「カスパル・シヤムベルゲン」ヲ伴ナヘリ、是レ和蘭貢使ノ醫官ヲ伴ナヘル始ナリトアリ（「ナツフォド」ノ書ニ引ク所ニ據ル）「カスパル」ト傳フルハ「カスパル・シヤムベルゲン」ノコトナルベシ。

【支那】明永明王、永曆二年ノ噓嘉言傷、寒尙論ヲ著ハス。

慶安三年庚寅二三一〇

奈須玄竹、堀田加賀守ノ病ヲ治シテ藥禮トシテ金千兩ヲ贈ラル、過分ノ儀ナルヲ以テ官ニ申告シテ處分ヲ乞フ、幕府之ヲ受納スベシト命ジ更ニ金二千兩ヲ賜フ、前代未聞ノ藥禮ナリト喧傳ス。

承應二年癸巳二三一一

明ノ杭州ノ人戴曼公、長崎ニ來タリテ醫ヲ業トス、後長州ニ來タリ吉川氏ニ客タリ、周防ノ人池田正直就テ學ビ治痘禁方書ヲ受ケ、遂ニ痘科ヲ以テ一家ヲ成ス、戴曼公嘗テ龔廷賢ニ親炙セシコトアリ、其治痘禁方書ハ大旨龔氏ノ痘疹全幼錄ニ淵源スト言フ。

後西天皇明曆元年乙未二三一五

此年ニ饗庭東菴、林市之進等出デテ素問靈樞難經等ノ講明シ、又金劉完素唱フル所ノ五運六氣ノ說ヲ奉ズ、東菴ノ門ニ味岡三伯アリ、三伯ノ門ニ井原道閑・淺井周伯・小川朔庵・岡本一抱アリ、一抱好デ諸書ノ諺解ヲ作り世ニ行フ、是ニ於テ五運六氣ノ說藏府經絡配當ノ論起ル。

十一月、板坂卜齋歿ス、卜齋名ハ如春、醫ヲ以テ名アリ、淺草寺ノ北ニ居リ好シデ書ヲ蓄ヘ淺草文庫ト稱ス。

明曆二年丙申二三一六

長崎ノ醫、西玄甫幕府ノ命ヲ受テ葡萄牙ノ天文書ヲ解譯シ、向井元升國字ヲ以テ之ヲ記シテ、乾坤辨說ト名ヅク、西洋ノ書ヲ邦文ニ譯スルコト蓋シ此ニ始マル。

明曆三年丁酉二三一七

古林見宜歿ス、見宜名ハ正溫、播磨ノ人、醫ヲ曲直瀨正純ニ學テ丹溪ノ術ノ奥旨ヲ窮ム、幕府特ニ命ジテ書院ヲ江戸神田橋門外ニ開キ、醫經ヲ其中ニ講ジ、都下ノ醫生ヲシテ之ヲ聽カシム、又見宜嘗テ同門ノ土堀正意ト共ニ學舎ヲ嵯峨ニ建ツ、四方ノ生徒一時雲集スト言フ。

萬治元年戊戌二三二八

【支那】明永明王、永曆十二年、喻嘉言、醫門法律ヲ著ハス。

萬治二年己亥二三二九

【支那】明永明王、永曆十三年、費啓泰、救偏瑣言ヲ著ハス。

萬治三年庚子二三三〇

四月、五雲子歿ス、五雲子氏ハ王、名ハ寧、支那ノ福建大原ノ人、慶安中我邦ニ投化シ東都ニ住シ、大原ト稱シ名醫ノ聞アリ。

寛文元年辛丑二三三二一

杉本忠恵法眼ニ叙セラル、忠恵術ヲ蕃醫ニ受ケ、名當時ニ重シ、幕府ノ西洋外科術ヲ採用スルコト此ニ始マル。

【西洋】紀元千六百六十一年、「マルピキー」血球ヲ發見ス。

【支那】清世祖、順治十八年ニ當ル。

靈元天皇寛文三年癸卯二三三三二

黒川道祐、本朝醫考三卷ヲ著シ、本朝醫家ノ出處術業及ビ叙位産藥ノ事ヲ記ス、書成ルニ及ビテ各家ノ子孫、其祖先ノ事蹟ヲ顯ハシタルヲ咎メ、上書シテ遂ニ其板ヲ絶タシムト言フ。

施藥院（三雲）宗伯歿ス、年八十八。

寛文十二年壬子二三三三三

十一月、戴曼公歿ス、年八十。

延寶元年癸丑二三三三四

西玄甫擧ラレテ醫官トナリ、法眼ニ叙セラル、玄甫蘭語ヲ善クシ、和蘭大通詞トナリ、外科ヲ好ミ、歸化ノ醫澤野忠庵ヲ師トシ、其術大ニ熟ス、西流ノ外科ノ祖ナリ。

長崎ノ人蘆草碩、京都ヨリ歸リテ業ヲ開ク、草碩本草ニ精シク、藥性集要ヲ著シテ大ニ斯學ヲ發揮ス、同邑ノ人福山徳潤其學ヲ承ケテ大阪ニ往キ、盛ニ其學ヲ唱フ、門人稻生若水最モ著ハル。

和蘭醫「ウイリアム・テン・リーネ」來朝ス。

延寶二年甲寅二三三三五

濕疫流行、翌年ニ互ル。

延寶三年乙卯二三三三六

潁川入徳歿ス、入徳本名ハ陳明德、明ノ杭州ノ人、慶安中我長崎ニ來リ、名ヲ潁川入徳ト改メ、醫ヲ業トス、其著

ニ心醫録アリ。

延寶四年丙辰二二三三六

野間三竹（壽昌院法印）歿ス、修養篇等數部ノ著書アリ。

延寶五年丁巳二二三三七

向井元升歿ス、長崎ノ人、年五十二ニシテ京師ニ出デ、醫ヲ以テ行ハル、當時ノ醫家、僧侶ノ風ヲナスヲ惡ミ、髮ヲ束ネ、又自カラ羽徳衣ト稱スルモノヲ製シテ禮服トナス。

池田蒿山（正直）歿ス、年八十一。

延寶六年戊午二三三八

半井卜養（宗珠）歿ス、狂歌ヲ以テ名アリ、卜養狂歌集アリ。
奈須玄竹、醫方聚要ヲ著ハシ之ヲ刊行ス。

延寶七年己未二三三九

將軍綱吉ノ生母本庄氏眞言宗ニ歸依シ、護國寺ニ藥園ヲ立ツ、依リテ藥園ヲ白山ニ移ス。
名古屋玄醫、醫方問餘ヲ著ハシ、古醫方ヲ唱フ。

天和元年辛酉二三四一

幕府令シテ鍼術ノ振興ヲ圖ラシム、是ニ於テ杉山和一命ヲ奉ジテ鍼術再興ノ事ニ任ズ、和一鍼術ヲ以テ名アリ、宅ニ就テ館ヲ設ケ、鍼治講習所トナシ、諸生ヲ率テ講習ス、門人三島安一二至リテ講堂ヲ江戸近郊及ビ諸國ニ建ツルコト凡四十五所、其術遂ニ天下ニ遍シ、杉山流ノ鍼科之ナリ。

天和三年癸亥二三四三

幕府北藥園ヲ廢シ、南藥園ヲ小石川白山ニ移ス。

貞享元年甲子二三四四

九月、西玄甫歿ス、和蘭流外科ノ大家、乾坤辨説・諸國土産書等ノ著アリ。

貞享三年丙寅二三四六

二月、奧醫師瀨尾昌琢ヲシテ參府ノ蘭人ニ就テ、彼國外科ノ治療方ヲ尋問セシム。

東山天皇元祿元年戊辰二三四八

蘭醫「ホッフマン」(或ハ日ク「リートベロフ」)來朝ス、大通詞檜林榮休(鎮山下號ス)就テ學ビ外科術ニ精シ、其子榮理、亦外科ヲ以テ名アリ、檜林流ノ外科ヲ興ス。

九月、半井驢庵以下奧醫師十人ヲ召シ、醫官ノ學業出精スベキコトヲ令ス。

【西洋】紀元千六百八十八年、英國ノ大醫「シデンハム」歿ス、「シデンハム」ハ實地醫學ノ革命者ナリ。

【支那】清聖祖、康熙二十七年ニ當ル。

元祿二年己巳二三四九

眼目明鑑刊行セラル、コレヲ本邦眼科専門書ノ體裁ヲナセルモノノ始トスベシ。

元祿三年庚午二三二五〇

獨醫人「ケンフエル」和蘭貢使ニ從ヒ我邦ニ來ル、居ルコト三年ニシテ大ニ我邦植物ヲ研究シ、日本植物圖譜ヲ著ス、我邦鍼灸術ヲ初メテ歐羅巴ニ紹介セルハ此人ナリ。

元祿四年辛未二三二五一

六月、長崎ノ人、吉田自庵・栗崎道有・村上自伯、江戸ニ徵サレテ幕府醫官トナル、三人共ニ南變流及ビ和蘭流外科ヲ以テ著ハル。

十一月、本朝醫考ノ著者黒川道祐歿ス。

五月六月、疫邪（濕溫ノ症）流行。

元祿五年壬申二三二五二

香月牛山、婦人壽草ヲ著ハス。

杉山和一、關東總錄檢校ニ擧ゲラル。

元祿六年癸酉二三二五三

水戸侯、其侍醫穗積甫菴ニ命ジテ、山野得易キノ藥方ヲ選バシメ、救民妙藥集ト題シテ世ニ行ハシム。

六月七月、疫邪（伏暑ノ症）流行。

元祿七年甲戌二三二五四

吉田自休歿ス、自休ハ自庵ノ父ナリ、歸化ノ人澤野忠庵ニ就テ醫ヲ修メ、後阿媽港（今ノ澳門ノ地）ニ赴キテ外科ヲ學ビ、南蠻・和蘭・明、三國ノ外科ヲ選ミテ一家ヲ成スト稱シ、三國流傳書三十卷ヲ著ハス。

五月、杉山流鍼術ノ祖杉山和一歿ス、年八十五。

【支那】清聖祖、康熙三十三年、汪訥庵、本草備要ヲ著ハス。

元祿八年乙亥二三二五五

平野必大、本朝食鑑ヲ著ハシテ、食用品物ノ能毒ヲ記述ス。

【支那】清聖祖、康熙三十四年、張路玉醫通ヲ著ハス。

元祿九年丙子二三五六

名古屋玄醫歿ス、玄醫ハ平安ノ人、丹水ト號ス、年壯ナルニ及テ始テ醫ヲ學ビ、喻氏ノ書ヲ得テ之ヲ讀ミ、發憤古
ニ泝リ直ニ仲景ヲ以テ師トシ大ニ李朱ノ說ヲ排ス、漢法醫家ニ古方後世ノ目アル玄醫ヨリ始マルト言フ、門人芳村
恂益、學問淵博、京ノ北山ニ退居シ、終身著述ヲ以テ事トナス。

元祿十四年辛巳二三六一

三月十四日、吉良上野介淺野長矩ノタメニ傷ケラル、栗崎道有命ヲ奉ジテ之ヲ治療ス。

元祿十六年癸未二三六三

松下見林歿ス、見林西岸ト號ス、醫ヲ古林見宜ニ學ビ傍ラ國學歴史ニ通ズ、著ハス所、運氣論疏抄・習醫規格・異稱日本傳等アリ。

寶永六年己丑二三六九

後藤良山、但馬ノ城崎ニ浴シ、溫泉ノ治ニ用フベキヲ説キ、浴法服法ヲ稱揚ス、門人香川修徳ソノ志ヲ嗣ゲ大ニ溫泉ノ効ヲ研究ス、溫泉ハ古人ノ療病ニ供用セシモノナレドモ、其醫學上ノ検査ヲ施セシハ、實ニ後藤良山ニ始マル。貝原益軒、大和本草ヲ著ハス、我邦本章ノ研究漸ク興ル。

中御門天皇寶永七年庚寅二三七〇

新井白石、西洋紀聞ヲ著ハシテ西洋ノ事情ヲ叙シ、又采覽異言ヲ著ハシテ萬國地理ノコトヲ説ク、此舉實ニ洋學ヲ唱フルノ起源ナリ。

正徳元年辛卯二三七一

三月、和蘭流檜林外科ノ祖檜林鎮山歿ス、嬌子榮理家ヲ嗣グ、二男榮久、名ハ豊重、端山下號ス、別ニ外科ヲ以テ家ヲ成ス。

正徳三年癸巳二三七三

寺島良安、和漢三才圖會ヲ著ス、此書八十卷、和漢ノ事物ヲ綜羅ス、學者之ヲ得テ寶典トナス、良安又濟生寶ノ著アリ。

正徳四年甲午二三七四

八月、貝原益軒年八十五ニテ歿ス、益軒儒ニシテ醫ニ精シク、著ス所、養生訓・大和本草等アリ。

正徳五年乙未二三七五

七月、稻生若水歿ス、若水本草ノ學ニ精シク古今ヲ摺撫シテ庶物類纂一千卷ヲ著ス、又嘗テ本草綱目ヲ校正シ、誤說ヲ補修シテ世ニ頒ツ、同時江戸ニ阿部友之進アリ、亦本草ヲ以テ著ハル。

按ズルニ、藥物ヲ採リ、且ツ其氣性ヲ辨ズルコト、上古ヨリ之アリ中古ノ醫家亦藥物氣性ニ於テ撰著アリ、然レドモ之ヲ専門ノ科トナスニ至レルハ、實ニ稻生阿部ノ二氏ニ始マル、故ニ後ノ本草ヲ說クモノ率ネコノ二氏ヲ祖トス。

貝原益軒著、大和本草刻成ル、載スル所ハ國産ニ係ルモノヲ主トシ、發明ノ說尠カラズ、學者之ヲ稱ス。

享保元年丙申二三七六

林玄伯歿ス、玄伯ハ林市之進ノ子、正徳四年幕府醫官ニ舉ゲラル。
夏、熱病流行、一ヶ月ノ中ニ江戸ニテ死スルモノ八萬餘人ニ及ベリト言フ。

享保三年戊戌二三七八

並河天民歿ス、天民ハ伊藤仁齋ノ高足弟子、儒ニシテ醫名アリ、其門下ニモ亦儒ニシテ醫ヲ兼ヌルモノ多ク、松原慶介・清水敬長等最モ顯ル、是ヨリシテ儒醫ノ目アリ。
幕府命シテ西醫ヲ徵ス、杭州陸文齋蘇州吳載南朱來章題松汀州周岐來等徵ニ應ジテ來ル。

享保四年己亥二三七九

正月、馬島瑞安歿ス、瑞安ハ尾州ノ人、馬島大智坊尊帆ノ孫ナリ、馬島流眼科ヲ以テ一家ヲ成ス。

享保六年辛丑二三八一

江戸小石川ノ醫小川笙船書ヲ上リテ時政十九條ヲ陳疏ス、中ニ施藥局ヲ設ルノ議アリ、幕府之ヲ採用シ、翌年新ニ施藥院ヲ小石川藥園中ニ建設シ、之ヲ養生所ト名ケ、町奉行ヲシテ之ヲ支配セシム、按ズルニ、古ノ施藥院ノ制ハ詳ナラズ、官立ノ療病院ハ蓋シ此ニ始マル。

養生所ハ町奉行ノ支配ニシテ常ニ與力二名同心六名ヲ所屬トシ、取締以下一切ノ事ヲ取扱ハシム、醫員ハ大抵小石川近邊ノ寄合醫師小普請醫師ヨリ出役シ、間々御番醫師又ハ藩醫・町醫ヨリ出ルコトアリ、内科・外科・眼科ヲ合ハセテ八九名トス、而シテ最初ニコレニ擧ゲラレタルハ小川笙船・林良適・岡丈庵・木下道圓・八尾仲庵・堀長慶ノ諸氏ナリ。

【西洋】紀元千七百二十一年、「パルフィン」産科鉗子ヲ發明ス。

【支那】清聖祖、康熙六十年ニ當ル。

享保十三年戊申二三三八

今大路親顯等幕府ノ命ヲ奉ジ、日光久能神庫ノ秘本及ビ官私ノ書十餘部ニ據リ、和劑局方ヲ校訂シ増廣太平和劑局方ト題シテ刊行ス。

享保十四年己酉二三八九

是ヨリ先キ、幕府醫官林良適・丹羽貞機ニ命ジテ山野得易キノ藥方ヲ選ビ、以テ僻郷醫藥ニ乏シキモノヲ救濟セシム、此年書成ル、乃チ普救類方ト題シ、梓ニ上シテ天下ニ頒ツ。

享保十五年庚戌二三九〇

鍋かぶり病流行。

享保十七年壬子二三九二

天下飢饉、疫病行ハル。

享保十八年癸丑二三九三

九月、後藤艮山歿ス、艮山宋明醫流甘補ノ空論ニ疑フ所アリ、反復試用殆ド二十年、始メテ大ニ開悟シ、乃チ衆説ヲ掃ヒ、一家言ヲ立ツ、日ク『百年泰平遊惰ノ人腹裏悉ク癥疝ヲ結ブ内傷諸疾是ニ因リテ釀成ス、云々、蓋シ百病ハ一氣ノ留滯ニ生ズルヲ以テ特ニ順氣ヲ以テ治療ノ綱要トナス』ト、其説的實明白前人未ダ發セザル所、世奉ジテ古方家ノ泰斗トナス、時醫皆雜髮僧衣ヲ著ケ僧官ヲ拜ス、艮山深ク之ヲ非トシ首トシ髮ヲ植ツ、是ヨリ先キ向井元升、始テ髮ヲ束ネ服ヲ改ム、然レドモ世未ダ之ニ從フモノアラズ、此ニ至リテ世醫其風ヲ慕ヒ正俗ニ向フ。風邪大流行。

享保十九年甲寅二三九四

【西洋】紀元千七百三十四年、「スタール」歿ス、「スタール」ハ初メ「ハルレ」ニアリ後チ伯林ニ移リ、「アニミスムス」ノ説ヲ立ツ。

【支那】清世宗、雍正十二年ニ當ル。

櫻町天皇元文元年丙辰二三九六

河合尙久、無冤錄述ヲ著ハシテ刊行ス、コレヲ我邦法醫學書ノ始トス。

按ズルニ、檢屍ノ事ヲ論ズルモノ支那ニ平冤錄・洗冤錄・無冤錄等アリ、此等ノ書ハ我邦ニ行ハレシガ、此書刊行アリテヨリ無冤錄ノ説ハ廣ク行ハルルニ至レリ。

元文二年丁巳二三九七

村上等詮（春臺院法印）歿ス、著ハス所、慈幼密旨二卷アリ。

元文三年戊午二三九八

安藝ノ人吉益東洞、年三十七、京都ニ來タリテ古醫方ヲ唱フ。
後藤椿庵歿ス、椿庵名ハ省、字ハ仲介、艮山ノ子、傷寒約言・艾灸通説等ヲ著ハシテ、家學ヲ振興ス。

元文四年己未二三九九

將軍吉宗蘭書ヲ見テ、其圖畫ノ精巧ナルニ驚キ、儒官青木文藏・醫官野呂元丈ノ兩人ニ命ジ、長崎ニ赴キ彼邦ノ書ヲ學バシム。

元文五年庚申二四〇〇

香月牛山歿ス、年八十五、貝原益軒ヲ師トシ、著述等身、當時醫家ノ泰斗タリ。

寛保元年辛酉二四〇一

【支那】清高宗、乾隆六年、張琰、種痘新書ヲ著ハシ、種痘ノ術ヲ唱フ。

寛保二年壬戌二四〇二

【西洋】紀元千七百四十二年、「ホフマン」歿ス、「スタール」「ペールハーヴ」ト與ニ十八世紀臨床醫學界ノ三傑タリ。

【支那】清高宗、乾隆七年ニ當ル。

寛保三年癸亥二四〇三

鍋かぶり病流行ス。

延享元年甲子二四〇四

山脇東洋、外臺秘要方ヲ校刊ス。

李仁山長崎ニ來タリテ種痘法ヲ行フ、長崎ノ醫柳隆元・堀江道元就テ其術ヲ傳フ。

夏ヨリ冬ニ至ルマデ風邪流行。

延享二年乙丑二四〇五

幕府醫官岡本玄治ノ家ニ傳ル所ノ萬安方六十二卷ヲ謄寫セシメ、且ツ醫官望月三英ニ命ジテ序文ヲ作ラシム、本邦唯一ノ書ナルヲ以テナリ。

延享三年丙寅二四〇六

是ヨリ先キ、山脇東洋、外臺秘要方ノ翻譯ニ着手シ此年十月刻成ル、特ニ許可ヲ得テ之ヲ漢土ニ送ル。
七月、松岡恕庵歿ス、本草學大家、用藥須知等ノ著アリ。

延享四年丁卯二四〇七

桂川甫筑歿ス、甫筑初メ平戸侯ノ醫嵐山甫安ニ就キ醫ヲ修メ、後蘭醫「ダンネル」「アルマンス」ニ親炙シ、外科ノ術ヲ學ブ、元祿九年辟サレテ幕府醫官ニ列ス。

桃園天皇寬延二年己巳二四〇九

山村通菴歿ス、通菴ハ後藤良山ノ門ニ出ヅ、大ニ溫泉ノ効ヲ研究シ、人工溫泉ノ法ヲ始ム。
加茂眞淵、大ニ國學ヲ唱フ。

【支那】清高宗、乾隆十四年、勅纂醫宗金鑑成ル。

【西洋】紀元千七百四十九年ニ當ル。

寶曆元年辛未二四一一

吉益東洞、年五十、類聚方・方極・藥徵ヲ著ハス。

寶曆二年壬申二四一二

幕府醫官望月三英、醫官玄稿ヲ著シ、古經方ヲ表章シ古方ヲ説ク、然レドモ其説ク所、京師醫家ノ古方ト同ジカラズ、之ヲ折衷派ト言フ。

山脇東洋、其子玄侃・門人永富獨嘯庵ヲシテ越前ニ赴ムキ、奥村良竹ニ就テ吐方ヲ學バシム、之ニヨリ良竹ノ名大ニ顯ハレ、玄侃・獨嘯庵其術ヲ傳ヘテ京ニ歸リシヨリ、古醫方ニ汗・吐・下ノ三法備ハルヲ得タリ。

寶曆三年癸酉二四一三

二月、醫師ノ輩ニ命ジテ專ラ其家業ノ本科ヲ研精セシメ、雜科ヲ兼習スルコト勿ラシム。

寶曆四年甲戌二四一四

閏二月七日、山脇東洋京都ニアリテ始テ罪囚ノ屍ヲ解キ觀テ圖志ヲ作り、名ケテ藏志ト曰フ、是ヨリ先キ、山脇東洋素問靈樞載スル所内景説ノ信ズルニ足ラザルヲ看破シ、獺ヲ解テ其藏府ヲ實視シ、此ニ至リテ終ニ人體ヲ解視スルコトヲ得、視ル所ヲ記述シテ二千年來ノ誣妄ヲ辨ズ、藏志即チ此ナリ、東洋ノ此舉以來世醫初メテ先物實試ノ重ズベキコトヲ知り、醫説漸ク一變シテ次第ニ實驗ヲ重ズルニ至リ、古方家ハ終ニ所謂漢蘭折衷家ニ移行スルニ至レリ。

寶曆五年乙亥二四一五

二月、香川修徳歿ス、修徳始メ伊藤仁齋ヲ師トシ、後藤良山ノ門ニ入り醫ヲ修メ、儒醫一本ノ説ヲ唱フ、識見絶群、能ク古經ノ蘊奧ヲ窮ム、藥選及ビ行餘醫言等ヲ著シテ師説ヲ敷衍シ、温泉及ビ灸炳ニ於テ最モ詳ヲ致ス。

寶曆七年丁丑二四一七

田村藍水、物産會ヲ江戸湯島ニ開ク、之ヲ物産會（一二藥品會ト曰フ）ノ始トス、藍水ハ江戸ノ人本草ノ學ニ精シ

ク最モ力ヲ物産採集ニ盡ス。

芳村恂益歿ス、名古屋玄醫ノ門人、著ハス所、二火辨妄、醫學正名等アリ。

【西洋】紀元千七百五十七年、「ハルレル」生理書ヲ著シテ公刊ス、實驗生理學、中興ノ祖タリ。

【支那】清高宗、乾隆二十二年、徐大椿、醫學源流論ヲ著ハス、張宗良、喉科指掌ヲ著ハス。

寶曆八年戊寅二四一八

三宅意安、古ノ遺方ヲ蒐集シ和方彙函ト題シテ世ニ行フ。

山脇東洋、再ビ刑屍ヲ解キ觀ル。

田村元雄、再ビ物産會ヲ神田ニ開ク。

寶曆九年己卯二四一九

藤井見隆歿ス、見隆著ハス所、醫療羅合・眼目精要等アリ。
平賀源内、物産會ヲ江戸湯島ニ開ク。

寶曆十年庚辰二四二〇

識岐ノ人佐野原泉、非藏志ヲ著シテ、山脇東洋ノ藏志ヲ駁ス。

養生所ノ創始者小川笙船歿ス、年八十九。

西玄哲歿ス、西流外科ヲ以テ名ヲ著ハス。

寶曆十一年辛巳二四二一

七月、野呂元丈歿ス、年七十六、元丈幕府醫官タリ、嘗テ命ヲ奉ジテ始テ和蘭學ヲ修メ、和蘭本草和解ヲ著ス、是ヲ洋說本草學ノ嚆矢トス。

奥村良竹歿ス、初メ古醫方興リテヨリ五六十年、汗・下ノ二方備リテ吐方未ダ備ラズ、良竹始テ瓜蒂ヲ使用シ、吐方ノ妙ヲ得テ時ニ名アリ、門人荻野台洲、亦師傳ヲ得テ此方ニ精シ、吐方篇ノ著アリ。

戸田旭山、物産會ヲ大阪ニ開ク。

【西洋】紀元千七百六十一年、「アウエンブルツゲル」打診法ヲ創ム。

【支那】清高宗、乾隆二十六年ニ當ル。

寶曆十二年壬午二四二二

八月、山脇東洋歿ス、東洋初メ後藤良山ニ就テ學ビ、香月牛山・稻生宜義・香川修徳等ト相共ニ研究シ、唐後諸家ヲ廢シ專ラ仲景ヲ主トス、且ツ先物實試ヲ重ジ、刑人ヲ解剖シテ藏府ヲ觀ルガ如キハ前人ノ未ダ爲サザル所、東洋實ニ之ヲ創ム、後ノ所謂漢・蘭折衷派此人ニ淵源ス。

後櫻町天皇寶曆十三年癸未二四二三

是ヨリ先キ、(享保四年)對州侯朝鮮人參六株ヲ獻ズ、幕府之ヲ野州日光ニ植シム、爾來四十五年繁殖シテ五百萬株トナル、因テ製藥署ヲ設ケ、田村藍水ヲシテ其炮製ヲ掌ラシム。疫邪(濕溫ノ症)流行。

明和元年甲申二四二四

【支那】清高宗、乾隆二十九年、徐大椿蘭臺軌範ヲ著ハス。

明和二年乙酉二四二五

幕府醫官多紀元孝、國家醫學ノ設未ダ備ハザルヲ憂ヒ、上疎シテ自カラ之ヲ建立セント乞フ、幕府之ヲ允シ、地ヲ神田佐久間町ニ貸ス、廣サ千五百十八歩、元孝私資ヲ捐テ校舎ヲ設ケ、名ヅケテ躋壽館ト曰フ、館内ニ書庫アリ、藥園アリ、學舎（學生ノ寄宿スル所）アリ、教導ノ方ハ本草經・素問・靈樞・難經・傷寒論・金匱ノ六部ヲ毎日輪講セシメ、都講コレヲ折衷シ、其他ノ諸書ヲモ輪講シ、更ニ經絡・針灸・診法・藥物・醫案・疑問六條ノ會ヲ設ケ、各各都講之ヲ教導ス、醫案疑問ハ文辭ニ預カリ、其餘ハ皆事ニ就テ之ヲ行フ、診法ハ鄙賤ノ治ヲ乞フモノヲ都講先ヅ診シテ其後諸生ニ診セシメ、習熟セシム、職員ニハ總理アリ、都講アリ教授アリ藥園監アリ書記アリ、學生ハ三等二分チ、治學兼備ヲ上等トシ治足り學不足ヲ中等トシ、學足り治不足ヲ下等トス。

明和三年丙戌二四二六

賀川玄悅、産論ヲ著シテ助産ノコトヲ論ズ、其說師承スル所ナク又古人ニ本ヅカズ、其子胞ニアリテ頭下ニ嚮フト言フニ至リテハ前人未ダ發セザル所ナリ、稱シテ我邦産科ノ祖禰トス。

按ズルニ、是ヨリ先キ中條・板坂・乘附・瀬尾・田中、等諸流ノ産科アリト雖モ、其救護ノ術ハ方藥符咒等兒戲ニ類スル者ノミ、賀川氏ノ産論出ルニ及ビテ、世人皆始メテ産科ノ救護ノ術アルヲ知り、産科ノ術一時ニ豹變シ、粲然トシテ大ニ觀ル可キモノアルニ至レリ。

多紀元孝歿ス、元孝通稱安元、玉池ト號ス、時年七十二ニシテ歿ス。

中川淳庵・宇田川玄隨・田村元長等藥品會ヲ江戸ニ開ク。

明和四年丁亥二四二七

攝津ノ人管沼周桂鍼灸ノ復古ヲ唱フ、鍼灸則ヲ著ス、恒ニ用フル所ノ經穴僅ニ七十、禁鍼穴禁灸穴ノ類一切取ラズ且ツ用フル所ノ鍼ハ鐵ヲ以テ之ヲ作ル等、大ニ他ノ鍼家ニ異レリ。

原雙桂歿ス、雙桂溫泉小言ノ著アリ。

明和五年戊子二四二八

六月、躋壽館助成町屋敷ヲ賜フ。

明和六年己丑二四二九

中津ノ人前野良澤、青木文藏ニ就テ蘭語ヲ學ブ、藩侯其志ヲ嘉賞シ、醫ヲ廢シテ專ラカラス學ニ致サシム、翌年良澤長崎ニ赴キ吉雄・西等ノ譯官ニ就テ蘭語ヲ修ム。

望月三英歿ス、年七十三、三英名ハ君彦、鹿門ト號ス、江戸ノ醫官、折衷派ヲ以テ一家ヲ成ス。

明和七年庚寅二四三〇

平賀源内始テ電機ヲ製ス、源内ハ讃岐ノ人、物産學ヲ田村藍水ニ修メテ出藍ノ稱アリ、砂糖製造人參培養等ニ勞思シ、又石綿ヲ以テ火浣布ヲ製ス、此ニ至リテ電機ヲ製ス、其工夫ノ奇巧大ニ世ニ稱揚セラルト言フ。

河口信任、其師荻野台洲ト共ニ屍ヲ解キ觀テ解屍編ヲ著ス、一屍ノ剖觀記事ニ過ギズト雖モ、其圖繪ハ稍々精緻ニシテ觀ル可キモノアリ。

後桃園天皇明和八年辛卯二四三一

三月四日、江戸小塚原ニ罪囚解剖ノ擧アリ、杉田玄白・前野良澤等往テ之ヲ觀、且ツ携フル所ノ蘭書内景圖譜ニ照ラスニ、實ニ符節ヲ合スガ如シ、因テ共ニ謀リテ其圖說ヲ翻譯セントシ、翌日ヨリ其業ニ着手ス。

按ズルニ、罪囚解剖ノ事コレヨリ以前數々之アリ、名ケテ腑分ケト言フ、幕府醫官等就テ之ヲ觀タリト言フ、然レドモ豪傑ノ士起テ二千年來ノ虚妄ヲ摘キ迷雲ヲ披クモノアラズ、杉田前野兩氏等蘭書ヲ得之ヲ解屍ノ實際ニ參照シ大ニ發明スル所アリテヨリ終ニ志ヲ起シテ蘭書翻譯ノ業ニ就ク、乃チ西洋實驗醫學派ノ我邦ニ入ルコト、此日ヲ以テ紀元トスベシ。

三月五日、永富獨嘯庵歿ス、年三十五、長門ノ人、弱冠京師ニ出デテ山脇東洋ノ門ニ入り、俊傑ヲ以テ稱セラル、後大阪ニ住シ、吉益東洞ト共ニ京・攝ノ間ニ并ビ稱セラル、古醫方ノ泰斗タリ。

四月、後藤梨春歿ス、梨春名ハ光生、梧桐庵ト號ス、江戸ノ人、物産學ヲ唱フ。

十二月、山脇東洋ノ子、東門、一婦人ノ屍ヲ解キ觀テ圖說ヲ著ス。

【西洋】紀元千七百七十一年、「モルガニ」歿ス。

【支那】清高宗、乾隆三十六年ニ當ル。

安永元年壬辰二四三二

江戸大火、躰壽館類燒ス、多紀元徳（元孝ノ子）私財ヲ捐テ之ヲ再築ス。

長崎譯司本木了意、和蘭全軀内外分合圖ヲ著ハス。

安永二年癸巳二四三三

九月、吉益東洞歿ス、當時古醫道ヲ以テ任ズルモノ尠カラズト雖モ尙宋元以來ノ弊ヲ受ケ因循姑息ノ術多シ、東洞大ニ之ヲ慨キ斷然其弊ヲ一掃セントシ、一家言ヲナシテ日ク萬病一毒藥亦毒ヲ以テ毒ヲ攻ム毒去テ體佳ナリト、遂ニ醫斷・醫事或問・藥微等ヲ著シテ其說ヲ述ブ、天下ノ醫靡然トシテ之ニ嚮ヒ有志ノ士爭ヒテ其門ニ入ル、其高足タルモノ京都ニ中西深齋アリ、江戸ニ岑少翁アリ、肥後ニ村井琴山アリ、皆能ク師說ヲ紹述ス、之ヲ東洞家又一毒家ト稱ス。

幕府令シテ藩醫・市醫等ヲシテ躋壽館ニ寄附銀ヲ出サシム。

安永三年甲午二四三四

解體新書刻成ル、之ヲ蘭醫書翻譯ノ嚆矢トス。

内景圖說翻譯ノ舉、前野良澤ヲ盟主トシ、杉田玄白及ビ桂川甫周・中川淳菴・石川玄常・嶺春泰・鳥山松圓・桐山正哲等會員トナリ毎月數回相會シテ字義ヲ考定シ、玄白即夜稿ヲ起シ、年ヲ閱スルコト四年、稿ヲ易ユルコト十一回ニシテ成ル、之ヲ解體新書トス。

此書一タビ出デテ、世人始メテ蘭書ノ解譯スベキコトヲ知り、且ツ其論說ノ精緻ナルニ驚キ、天下ノ俊髦爭ヒ起テ其學ヲ講習ス、就中奥州ニ建部清菴アリ、京都ニ小石元俊アリ、共ニ解體新書ヲ見テ發憤シ、大ニ蘭醫方ノ採用スベキヲ説ク、コレヨリ後チ宇田川槐園・宇田川榛齋・大槻磐水・杉田伯元・稻村三伯等ノ諸家相踵テ興リ、人身内景ノ學ヨリ内科疾病ノ治法藥劑ノ主能製煉格物窮理ノ學ニ至ルマデ、一トシテ備ハラザルナキニ至レリ。風邪流行、時人之ヲお駒風ト言フ、麻疹モ亦流行ス。

安永四年乙未二四三五

賀川玄廸產論翼ヲ著ハシテ、父玄悅ノ產論ヲ敷衍ス。

安永五年丙申二四三六

「ツンベリー」來朝ス、「ツンベリー」ハ博物大家「リンネ」ノ高足弟子ナリ、桂川甫周・中川淳庵ノ諸子、就テ學ブ、「ツンベリー」國ニ歸リテ、日本紀行・日本植物圖譜等ヲ著ハス。

安永六年丁酉二四三七

九月、産科ノ泰斗賀川玄悦歿ス、玄悦ニ後ルルコト三十四年、奥州白河ニ蛭田玄仙ト言フモノアリ、孕育ノ疾病ニアラザルコトヲ論ジテ其理ヲ究メ發明スル所アリ、其門人奥羽及ビ房總ノ間ニ多ク、名聲大ニ噪シ、著ス所、田子産則全書・孕家遵生等世ニ行ハル。

【支那】清高宗、乾隆四十二年ニ當ル。

【西洋】紀元千七百七十七年ニ當ル。

安永八年己亥二四三九

賀川玄廸歿ス、年四十一。

三日麻疹（又お世話風）流行ス。

光格天皇天明元年辛丑二四四一

瀬丘長珪歿ス、長珪ハ江戸ノ人、腹診ヲ以テ一家ヲ成ス、診極圖說ノ著アリ。

按ズルニ、天正慶長ノ間竹田定加、始メテ腹診ノ法ヲ唱ヘシヨリ、御蘭意齋・北山道長・堀井直茂・淺井惟寅等ノ諸家相嗣テ之ヲ唱道シ、香川修徳・吉益東洞ノ如キモ皆腹診ヲ以テ主トス、然レドモ此法ニ精シキハ長珪ニ及ブモノナシ、後チ稻葉克腹、腹證奇覽ヲ著シ、和久田虎、同翼ヲ著シ、腹診ノ書大ニ備ハル、皆長珪ヲ以テ祖トナスト言フ。

惠美三白歿ス、廣島ノ人、吐方ヲ善クス、百病停食ニ生スルノ說ヲ唱ヘ餌食淡泊ヲ主トシ喜テ吐方ヲ用ユ、聲名籍甚、其子貞璋、大笑ト號ス、亦吐方ヲ以テ名アリ。

天明二年壬寅二四四二

是ヨリ先キ、畑惟和（醫學院法印）醫校ヲ洛西ニ築ク、此年十一月成ル、講堂アリ、學塾アリ、書齋文庫アリ、規模略備ハル、是ニ於テ惟和自ラ醫經ヲ講ジ、夜ハ則チ諸生ニ命ジテ方書ヲ會談セシム、且ツ傍ラ儒學及ビ諸科ノ師ヲ延テ遞月ニ各其道ヲ講ゼシム。

山脇東門歿ス、年五十一、吐方ヲ弘メ、又刺絡ノ法ヲ創施シタリ、同時垣本鍼源・入江大六アリ、共ニ刺絡ニ精シキヲ以テ名アリ。

天明三年癸卯二四四三

桂川甫周法眼ニ叙セラル、甫周外科ニ精シ、後擢デラレテ醫學館教授トナリ、外科ヲ講ズ、曾祖甫筑外科ヲ以テ幕府ニ仕ヘテヨリ甫周二至ルマデ數世相襲テ法眼タリ、桂川甫周、前野良澤・杉田玄白等ト蘭學ヲ創始シテ、其名遂ニ海外ニ傳ハルニ至ル。

桂川國訓歿ス、國訓ハ甫筑ノ孫ニシテ甫周ノ父、著ハス所、瘍府等アリ。

大槻玄澤、蘭字ノ音韻及ビ接續ノ概略ヲ記シテ、學者ノ便ヲ圖ラントシ蘭學階梯ヲ著ス、此年九月稿成ル、蘭學興

リテ既二十餘年未ダ成書アラズ、此書出ルニ及ビテ世人始メテ蘭語ヲ修ムルノ法ヲ知ルヲ得タリ。

【西洋】紀元千七百八十三年、「ペールハーヴ」歿ス。

【支那】清高宗、乾隆四十八年ニ當ル。

天明四年甲辰二四四四

躋壽館百日教育ノ法ヲ創ム、其資格ハ二月十五日ヨリ後百日ノ間生徒ヲシテ學塾ニ入テ勤學セシム、又外來ノ生徒モ日々講義ヲ聽クコトヲ得セシム、講例ハ舊式ニ從ヒ、六部書ヲ定トシ、講師ハ多紀桂山(素問)、山田正珍・桃井陶庵(傷寒論)、目黒道琢(內經難經)、服部玄黃(靈樞)、田村元雄・太田澄元(本草)、加藤俊又(難經)、小坂元祐・岡田道民(經絡)等ニシテ、又儒家井上金峨・吉田篁墩・太田錦城等アリテ經ヲ講ズ、大抵百日中一部ノ書ヲ卒業セリ、此一百日中施藥アリテ諸生ヲシテ診治ノ法ヲ習ハシム、醫案會アリ、疑問會アリ、藥品會アリ、諸生ノ數四百人ニ及ベリト言フ。

風邪流行ス、世人ノヲ谷風ト名ヅク、當時力士谷風アリ、怪力ヲ以テ名アリシガ風邪流行ニ際シテ先ヅ之ニカカリシガ故ニ之ヲ谷風ト言ヒシトゾ。

天明七年丁未二四四七

小石元俊、大槻・杉田・桂川等ノ諸家ニ就テ蘭學ヲ修メ、京都ニ歸リテ蘭學ヲ唱道シ内景ノ說ニ就テ山脇東洋ノ徒ト論辨シ、遂ニ刑屍ヲ解テ其說ヲ破ル、是ヨリシテ關西ノ醫家漸ク蘭學ノ信ズベキヲ悟ルト言フ。

山田正珍歿ス、正珍ハ江戸ノ人、圖南ト號ス、同時京都ニ中西深齋アリ、共ニ傷寒ノ學ヲ以テ其名高シ。

寛政元年己酉二四四九

司馬江漢長崎ニ遊學シ、江戸ニ歸リテ洋法ノ油繪及ビ銅刻ノ術ヲ傳フ。

寛政二年庚戌二四五〇

十一月、京都ノ人、福井楓亭召サレテ江戸ニ來リ醫官ニ舉ラル、次テ命ヲ奉ジテ靈樞ヲ醫學館ニ講ズ。

多紀元徳法印ニ叙セラル、元徳ハ元孝ノ子、藍溪ト號ス、父ノ志ヲ嗣ギ、躋壽館ヲ開擴シ規模大ニ備ハル、安永中侍醫ニ擢デラレ、此ニ至リテ法印ニ叙セラル、時ニ白河樂翁侯政ヲ執リ百度維新、元徳獻替スル所アリ、官醫ノ弊頓ニ改マルト言フ。

助成地三ヶ所を躋壽館ニ賜フ、躋壽館ノ費用トシテハ毎年藩醫市醫ヨリ寄附銀アリ(一人ニツキ銀一匁)助成地アリト雖モ多カラズ、多紀氏私財ヲ以テ之ヲ補ヒ家産蕩盡スルニ至ル、是ニ於テ再ビ助成地ヲ賜フ。

寛政三年辛亥二四五

幕府命ヲ下シ、躋壽館ヲ改メテ國學トシ、更ニ修飾ヲ加ヘテ官醫習業ノ場トナス、名テ醫學館ト曰フ、更ニ屋舎ヲ増築シ、廣サ二千四十歩、廩米三十四石二斗、金百三十三兩二分、藥種料金二百兩ヲ下賜シテ一歳ノ經費トナス、其規模ハ概ネ舊章ニ仍リ、聊カ増損ヲ加フルノミ。

幕府醫官多紀元徳ニ命ジテ、仁和寺宮藏本醫心方ヲ謄寫セシム。

幕府學制ヲ改メ昌平校ヲ建ツ。

寛政四年壬子二四五二

幕府製藥所ヲ設ケ、田村元長等ニ命ジテ之ヲ監セシム。

吉益南涯、其父東洞ノ萬病一毒ノ説茫乎トシテ形狀ノ據ルベキナキヲ以テ、更ニ氣血水三物アリ、毒之ニ乗ジテ始テ證ヲナス、ノ説ヲ唱フ、門人中川修亭・賀屋恭安等之ヲ紹述シ、海内靡然トシテ之ニ嚮フ、稱シテ氣血水家ト曰フ。大槻玄澤、瘍醫新書ヲ著ハス。

【支那】清高宗、乾隆五十七年、唐士烈、吳醫彙講ヲ著ハス。

寛政五年癸丑二四五三

宇田川玄隨「ゴルトル」ノ内科書ヲ翻譯シ内科選要ト題シテ世ニ行フ、之ヲ西洋内科書ノ始トス。

廣島ノ醫星野良悅自カラ造ル所ノ木骨ヲ携ヘ來タリテ江戸ノ蘭學社中諸士ニ示ス、諸士其精巧ニ驚キ歎賞措カズ、良悅、遂ニ幕府醫學館ニ徵サル、後十數年大阪ノ醫、各務文献マタ木骨ヲ製ス、工巧星野氏木骨ニ譲ラズト言フ。

寛政六年甲寅二四五四

荻野台洲、皇子ノ病ヲ治シテ功アリ、典藥大允ニ任ゼラル、此官闕ルコト久シ、台洲群ニ擢デテ此官ニ任ゼラル、人之ヲ榮トス。

【西洋】紀元千七百九十四年、「ウオルフ」歿ス、「ウオルフ」ハ彼得堡ノ解剖學教授ニシテ、胎生學ノ祖禰タリ。

【支那】清高宗、乾隆五十九年ニ當ル。

寛政七年乙卯二四五五

三月初旬、將軍小金原ニ狩シタル後チ感冒流行ス、其患者ノ衣袂ニ猪鹿ナドノ獸毛アリト言ヒ、傳ヘテ之ヲ御猪狩

風・
ト名ツク。

黒・炮・瘡ト稱スル病、江戸ニ流行ス。

緒方春朔、種痘必順辨ヲ著ハス、コレヲ本邦第一ノ支那種痘書トス。

寛政八年丙辰二四五六

幕府池田瑞仙ヲ京都ヨリ徵シテ醫官ニ擧グ、瑞仙、錦橋ト號ス、痘科ヲ以テ大ニ時ニ名アリ、曾祖正直、明人戴曼公ニ親炙シテ治痘ノ術ヲ受ク、瑞仙其秘訣ヲ受テ研鑽多年、術大ニ熟ス、治痘ノ方實ニ瑞仙ニ至リテ大ニ備ハルト言フ、後又命ヲ奉ジテ醫學館ニ痘書ヲ講ズ、蓋シ醫官ニ痘科アルコト此ニ始マル。

稻村三伯、和蘭日本對譯字書ヲ撰ビ波留麻和解ト名ク、此年其活版三十部ヲ印行ス、之ヲ對譯字書ノ始トス。

【西洋】紀元千七百九十六年、英國「ジェンナー」種痘法ヲ創始ス。

【支那】清仁宗、嘉慶元年ニ當ル。

寛政九年丁巳二四五七

荻野台洲徵ニ應ジテ江戸ニ來リ、瘟疫論ヲ醫學館ニ講ズ。

十月、京都ノ人柚木太淳、刑屍ヲ官ニ請テ剖觀シ、解體瑣言ヲ著ハス。

十二月、字田川玄隨歿ス、年四十三。

寛政十年戊午二四五八

重訂解體新書成ル、是ヨリ先キ、杉田玄白ノ解體新書ヲ著スヤ、固ヨリ創始ノ業ニシテ誤謬少カラズ、玄白乃チ校修ヲ加ヘントスルノ念切ナルモ老衰事ニ堪ヘズ、由テ門人大槻玄澤ヲシテ代テ其任ニ當ラシム、玄澤師命ヲ奉ジ訂正ノ業ニ從フコト十年、稿ヲ易ルコト三回ニシテ成ル、此書即チ是ナリ。

寛政十一年己未二四五九

多紀元徳歿ス、其子元簡（桂山）代リテ醫學館ヲ督ス。

小野蘭山ヲ京都ヨリ徵シ、醫學館ニ本草ヲ講ゼシム。

此頃京都ニ三日坊ト稱スル病流行ス、脚氣ノ重症ナリ。

伊良子光顯歿ス、外科ヲ以テ名アリ。

寛政十二年庚申二〇六〇

十一月、廣島ノ人星野悅自ラ創製スル所ノ木骨ヲ幕府醫學館ニ獻ズ、是ヨリ先キ良悅刑屍ヲ解視シテ骨肉ノ際會經脈ノ連屬ヲ詳ニシ大ニ悟ル所アリ、骨形骨度ヲ詳ニスルハ療病ノ要ナルコトヲ知り、當時人屍ヲ得ルノ難キヲ以テ木ヲ以テ骨格ヲ模造セントシ、工人ヲ督シテ其事ニ從フコト多年、遂ニ創メテ一ノ木骨ヲ製シ、工妙眞ニ逼ル、寛政五年ノ秋之ヲ携テ江戸ニ來リ、杉田・大槻・桂川諸家ニ示ス、諸家之ヲ見テ劇賞シ、遂ニ勸メテ幕府ニ獻ゼシム、幕府其功ヲ賞シテ金三十兩ヲ賜フト言フ。

吉雄永章歿ス、長崎ノ人、耕牛ト號ス、和蘭ノ外科醫「バブル」ニ從ヒ外科ヲ修メ其術ニ精シ、前野・杉田諸家ノ蘭學ヲ興セシハ、此人ノ助力多ニ居ル、其子如淵、名ハ永保、通稱權之助、父ノ業ヲ受ケテ亦時ニ名アリ。

享和元年辛酉二四六一

柘植彰常、蔓難錄ヲ著ハス、蝨・蟲・病ニ專書アルコト此ニ始マル。

本居宣長歿ス、啞科ヲ武川幸順ニ學ビ、其業行ハル、傍ラ國學ヲ以テ自カラ任ジ、其名聲海内ニ溢ル。

【西洋】紀元一千八百一年、「レタミール」陸鏡ヲ應用ス、「ヤング」亂視ヲ記述ス。

享和二年壬戌二四六二

小野蘭山、本草綱目啓蒙四十八卷ヲ著ス、其載スル所スベテ一千八百八十二種、異名方言形色產地ノ異同ヨリ市肆ノ眞偽良否ニ至ルマデ、旁引曲暢、漏スコトナシ、我邦本草ノ學此書ニ至リテ大備ス、蘭山ハ京都ノ人、初メ松岡玄達ニ就テ學ビ、二十五歳ニシテ意ヲ仕途ニ絶チ、帷ヲ下シテ斯學ヲ講ジ、其名都下ニ噪シ、寛政十一年徵サレテ江戸ニ至リ本草ヲ醫學館ニ講ズ。

近江ノ人三谷樸、刑屍ヲ剖觀シ、解體發蒙ヲ著ス。

桂川甫周、幕府ノ命ヲ奉ジ顯微鏡用法ヲ述ブ。

風邪流行ス、時人コレヲお七風ト稱ス。

【西洋】紀元一千八百二年「ゲイ・ルサツク」瓦斯擴散ノ規則ヲ公ニス、解剖學者「ビシヤー」歿ス。

享和三年癸亥二四六三

十月、前野良澤歿ス、良澤名ハ熹、蘭化ト號ス、家世々醫ヲ以テ中津侯ニ仕フ、年四十七、始テ蘭學ニ志シ、門下ノ士杉田玄白・桂川甫周・宇田川槐園・大槻玄澤等ト共ニ蘭學ヲ創唱ス、歿スル時年八十一、實ニ我實驗派ノ開祖タリ。

文化元年甲子二四六四

幕府蘇州ノ胡振ヲ長崎ニ徴シ、醫官小川文菴・千賀道隆・吉田長達ヲシテ就テ學バシム。

橋本宗吉、大阪ニアリテ蘭學ヲ唱フ、中國海南ノ士、其風ヲ聞テ興ルモノ甚ダ多シ。
薩侯會榮等ニ命ジテ、成形圖說ヲ撰バシム。

【西洋】紀元一千八百四年、生理化學ノ主ナル創始者「グメリン」歿ス。

文化二年乙丑二四六五

宇田川玄眞、醫範提綱ヲ著シテ解剖學ノ階梯トシ、銅版ノ圖ヲ附シテ世ニ行フ、銅版ノ内景圖譜此ニ始マル。

【支那】清仁宗、嘉慶十年、牛痘、阿片ヲ傳フ。

【西洋】紀元一千八百五年、「セルチュルネル」莫兒比涅ヲ發見ス。

文化三年丙寅二四六六

福井榕亭、典藥大允トナリ、次テ醫博士ニ任ゼラル、此官闕ルコト久シ、榕亭今此官ニ補セラル、人以テ榮トナス。
荻野台洲歿ス、金澤ノ人、刺絡ヲ善クス、中年吳氏ノ書ヲ得テ大ニ喜ビ、治法多クハ之ニ據ル、京醫ノ達原飲ヲ用フル台洲ヨリ始マル。

三月、醫學館燒亡、下谷新橋通ニ新築ス、當時醫學館ノ制ハ官醫或成學ノ外寄合小普請ノ者並ニ奧醫寄合小普請ノ子弟四十以上ノ者ヲ教育スルニアリ、四十歳以上ハ自分勝手ニテ勤日ハ格別其餘ハ諸醫ノ會ト稱シテ、一年ニ三度學館ニ集合スルマデナリ。

文化四年丁卯二四六七

七月、原田無關歿ス、夢分齋流鍼術ノ名家ナリ、始メ夢分齋其鍼術ヲ江戸ノ人、奥田意伯ニ授ケ、意伯之ヲ尾張ノ人辻某ニ授ク、辻某之ヲ同藩ノ人角田某ニ授ク、角田ノ子某之ヲ無關ニ授ク、乃チ夢分齋ヨリ六傳シテ無關ニ至ル、後其門人加藤多門師說ヲ記述シテ、夢分正流古今腹診論ヲ梓シテ世ニ行フ。

太田長丸、神道奇靈傳ヲ著ハシテ和方ヲ唱フ。

【西洋】紀元一千八百七年「ブレンク」歿ス、其著書ノ我邦語ニ譯セラレタルモノ多シ。

文化五年戊辰二四六八

杉本仲溫幕府醫官トナリ、多紀元簡ノ後ヲ承テ醫學館ノ事ヲ督ス。

十二月、小石元俊歿ス、元俊初メ永富鳳介ニ學ビ、後江戸ニ出デテ杉田・前野・大槻諸士ニ親炙シ、蘭學ヲ修メ、京都ニ還リテ大ニ蘭學ヲ唱道ス、其子元瑞、亦蘭學ニ名アリ父ノ業ヲ恢弘ス、關西ニ蘭學ノ興レルハ元俊父子ノ功與リテ力アリ。

石見ノ人二宮獻、正骨範ヲ著ハス、二年ヲ經テ大阪ノ人各務文獻、整骨新書ヲ著ハス。

按ズルニ、整骨ノ科ハ從來專修スルモノ少ク、此時ニ至リテ二人ノ名家著ル、爾來此科ヲ以テ専門トナスモノ多ク、其術亦大ニ備ハルニ至レリ。

八九月ノ交、風邪大ニ流行ス。

【西洋】紀元一千八百八年、「コルピサー」打診法ヲ再興ス。

【支那】清仁宗、嘉慶十三年ニ當ル。

文化六年己巳二四六九

六月、桂川甫周歿ス、年五十六。

【西洋】紀元一千八百九年、「ドウエル」始メテ卵巢截開術ヲ施行ス。

文化七年庚午二四七〇

十二月、多紀元簡歿ス、元簡桂山ト號ス、博學精通ヲ以テ稱セラル、著ス所、素問靈樞金匱傷寒等ノ注疏、衆說ヲ斟酌シ精義ヲ條疏シ、其徒亦之ヲ紹述シ、遂ニ考證派ヲ成ス。

稻村三伯歿ス、三伯ハ因州侯ノ醫員ナリ、江戸ニ出デテ蘭學ヲ修メ、後侯家ヲ辭シテ名ヲ海上隨鷗ト改メ、京師ニ在リテ大ニ蘭學ヲ唱道ス、門人小森玄良・藤林泰輔、共ニ蘭學ヲ以テ名アリ。

【西洋】紀元一千八百十年、「ハーネマン」「ホメオパシー」ヲ起ス。

文化八年辛未二四七一

五月、幕府天文臺中ニ翻譯局ヲ置キ、外國ノ文書ヲ譯述セシム、大槻磐水譯局ニ出仕シテ命ヲ奉ジテ蘭書ヲ翻譯ス、幕府ノ西書ヲ譯スルコト是ヲ嚆矢トス。

四月上旬ヨリ江戸風邪流行ス、京都ニモ傷風大ニ行ハル、時人風鬼ヲ造リ、コレヲ街外ニ送ルト言フ。

文化九年壬申二四七二

此年ノ冬、小森玄良・藤林泰輔、其師海上隨鷗ノ遺志ヲ嗣テ、刑屍ヲ剖觀ス。

文化十年癸酉二四七三

宇田川玄眞、翻譯局ノ譯員トナル。

文化十二年乙亥二四七五

杉田玄白、蘭學事始ヲ著シテ昔年ノ辛苦ヲ述ブ、時二年八十三。

杉田立卿、眼科新書ヲ譯述シテ世ニ行フ、之ヲ西洋眼科譯書ノ始トス。

【西洋】紀元一千八百十五年、所謂「メスメリスム」ノ創始者「メスマル」歿ス。

文化十三年丙子二四七六

賀川滿定女醫博士ニ補セラル、女醫博士ノ官闕ルコト久シ、是ニ至テ之ヲ復ス、滿定蘭齋ト號ス、玄悅ノ嫡孫、嘗テ探領器ヲ發明ス。

鈴木素行歿ス、著ハス所、醫海蠡測等アリ。

四月ヨリ八月マデ江戸疫癘流行ス。

【西洋】紀元一千八百十六年、「レンネツク」聽診法ヲ創ム。

【支那】清仁宗、嘉慶二十一年ニ當ル。

仁孝天皇文化十四年丁丑二四七七

四月、杉田玄白歿ス、年八十五、玄白、名ハ翼、鵠齋又九幸ト號ス、若狹藩ノ醫官ナリ、前野良澤ト共ニ始テ蘭書ヲ解讀シ、又解體新書ヲ著シ世ニ行フ、由テ海内定メテ此學アルヲ知レリ。

蛭田克明歿ス、年七十三。

文政元年戊寅二四七八

峯少翁歿ス、少翁ハ長門ノ人、江戸ニ家シ、吉益氏ノ學ヲ唱ヘ、門戸ノ盛ニ時比ナシ、肥後ノ村井琴山ト相並ビテ東海翁西州老ノ稱アリ。

三輪東朔歿ス、東朔字ハ望卿、常陸ノ人、江戸ニアリテ刺絡ノ說ヲ唱フ。

文政二年己卯二四七九

立野龍貞、産科新論ヲ著ハス、中ニ自家發明ノ包頭器ヲ載ス、コレ我邦ノ鉗子ト稱スベキモノナリ、コレヨリ後、水原三折ノ探領器・賀川蘭臺ノ纏頭絹・賀川蘭臯ノ整横紐・近藤直義ノ包頭器アリ。

文政三年庚辰二四八〇

六月、惠美大笑歿ス、三白ノ子、亦吐方ヲ以テ盛名アリ。
春夏ノ際、霖雨已マズ、六月ヨリ疫病流行。

文政四年辛巳二四八一

江戸及び諸國風邪流行、時人たんぼう風ト名ヅク、コレ當時、コレタンホウサンヤクト言ヘル小謠ノ流行セシ故ナリ。

文政五年壬午二四八二

暴瀉病大ニ流行ス、桂川甫賢等其證候ヲ考ヘテ「コレラ」トナシ、甫賢乃チ「コレラ」考ヲ著シ、宇田川榕菴「コレラモルブス」説ヲ譯シテ世ニ公ニス。

文政六年癸未二四八三

八月、獨逸人「シーボルト」和蘭醫官トナリテ長崎ニ來ル、醫術及ビ植學ニ長ゼリ、親炙シテ其學術ヲ傳フルモノ多シ、高良齋・戸塚靜海・伊東玄朴・高野長英・竹内玄同・伊藤圭介等其選ナリ。「シーボルト」又眼科ニ精シ、高良齋・土生玄碩、其術ヲ傳ヘテ江戸ト大阪トニアリ、東西共ニ名ヲ齊フシ、門戸ノ盛一時比ナシト言フ。

按ズルニ、古昔目醫ノ稱アリ、馬島・佐々木・須磨・徳積・八幡・青木等諸家アリト雖モ、其學ト術ト共ニ精シカラズ、高・土生ニ氏西・洋ノ眼科ヲ興スニ及ビテ眼科専門ノ學始テ世ニ粲然タリ、同時關東二本庄普一アリ、漢蘭ノ眼科折衷シテ一家ヲ成シ、眼科錦囊ヲ著シテ其名大ニ顯ハル。解體發蒙ノ著者三谷筈洲歿ス。

文政七年甲申二四八四

夏六七月ノ交、麻疹ニ續キテ風邪行ハル、時人之ヲ薩摩風ト稱ス。

文政八年乙酉二四八五

佐々木仲澤、其師大槻磐水譯、瘍醫新書・刺絡篇ヲ補譯シテ刺絡ノ方法ヲ詳説ス。三輪順藏、賀川氏ノ産論ヲ蘭語ニ譯シ之ヲ「シーボルト」に示ス、「シーボルト」之ヲ「バタバア」會報告書中ニ揚グ。

文政九年丙戌二四八六

三月、和蘭來貢ス、醫官「シーボルト」隨從シテ江戸ニ至ル、幕府醫官土生玄碩「シーボルト」ノ眼科ニ精シキヲ聞キ就テ教ヲ乞フ、「シーボルト」教フルニ開瞳藥甚若ヲ以テス、玄碩大ニ喜ビ、將軍所賜葵章服ヲ贈テ之ヲ謝ス、十一年「シーボルト」ノ獄長崎ニ起リ、玄碩國禁ヲ犯スノ故ヲ以テ官ヲ褫カル。

青地林宗、氣海觀瀾ヲ著ス、コレ理學ヲ説ク書ノ嚆矢トス。

大槻玄澤、重訂スル所ノ解體新書刻成ル、銅版内景圖ヲ附シテ世ニ行フ。

坪井誠軒、診候大概ヲ著ハシテ洋方診斷ノ法ヲ説ク。

文政十年丁亥二四八七

三月、大槻玄澤歿ス時年七十一、玄澤磐水ト號ス、仙臺ノ人杉田玄白ニ就テ蘭醫方ヲ學ビ、又贅ヲ前野良澤ニ執リ、斯學ノ精ヲ究ム、玄澤著述等身、斯學ノ闡發ニ與リテ大ニ力アリ。

【西洋】紀元一千八百二十七年、「プライト」氏、始メテ「プライト」病ヲ記述ス。

文政十一年戊子二四八八

宇田川榛齋、和蘭藥鏡ヲ著ハス。

文政十二年己丑二四八九

栗本昌藏法印ニ叙セラレ、昌藏殊ニ本草學ニ精シ、是ヨリ先キ、寛政中幕府ニ丸製藥局ヲ初ムルヤ、昌藏命ヲ奉ジテ之ヲ宰ス。

四月、大阪ノ人各務文獻、刑屍ヲ剖キ觀テ圖志ヲ著ス、文獻整骨科ヲ以テ名アリ、整骨新書ノ著アリ、其骨ヲ説クヤ皆實驗ニ依ル、此年十月文獻歿ス、年六十五。

伊澤蘭軒歿ス、著ハス所、蘭軒漫筆・遺稿等アリ。

正月、「シーボルト」ノ獄起リ、土生玄碩等獄ニ下ル、「シーボルト」ヲ逐ヒ、再ビ來朝スルコト勿ラシム。

六月、大風ノ後、赤病ト名ヅクル病流行ス、其症ハ身體赤クナリ、二三日ニシテ狂ヒ死ス。

天保元年庚寅二四九〇

備後ノ人小出龍、官ニ請テ刑屍ヲ解クコト十餘回、導窺私録ヲ著ハス。

岡了允歿ス、年四十、著ハス所、育嬰窺斑・小兒戒草等アリ。

天保二年辛卯二四九一

足立長雋「ストルク」ノ内科書ヲ譯シ醫方研成ト題シテ世ニ行フ。

【西洋】紀元一千八百三十一年、「リコール」梅毒病ト淋病トヲ區別ス。

天保三年壬辰二四九二

杉田立卿、譯スル所ノ瘍科新選成ル、西洋外科ノ全書ヲ以テ公行スルコト、此ニ始マル。

高野長英、醫原樞要ヲ著ハス、是ヲ生理書ノ始トス。

秋九月ヨリ十一月ニ至ル、風邪流行、時人之ヲ琉球風ト名ヅク、其症惡寒・發熱・頭痛・咳嗽・或吐・或下・或腰痛・或譫語、輕キハ三日ニシテ起ツ、此疫西國ニ始マリ東國ニ及ブ、浪華ノ人ハ九月ニ病ミ、東武ハ則チ十一月ニ始メテ病ム。

四五月ノ交、南伊勢ニ急劇ノ霍亂大ニ行ハル。

天保四年癸巳二四九三

宇田川榕菴、植物啓源ヲ著ス、是ヨリ先キ榕菴ノ門人伊藤圭介、泰西本草名疏ヲ著シテ、李氏二十四綱ヲ説ク、而シテ未ダ植物全體ニ及バズ、此書ヲ以テ植學ヲ説ク書ノ初トス。

天保五年甲午二四九四

十二月、宇田川榛齋歿ス、槐園ノ養子、杉田・大槻・前野諸士ニ就テ蘭學ヲ講ジ、和蘭藥鏡・遠西醫方名物考等ヲ著ス、西洋藥學コレニ因リテ始テ備ハル。

天保六年乙未二四九五

華岡青洲歿ス時年七十六、青洲通稱隨賢、紀伊ノ人、内外合一活物窮理ノ説ヲ唱へ、最モ外科手術ニ秀ツ、門人其説ヲ記述シテ瘍科神書・瘍科瑣言等ノ書ヲ成ス。

按ズルニ、上古ノ外科ハ邈タリ、中古鷹取・吉益等諸流ノ外科アリ、尋テ南蠻流・和蘭流ノ外科ノ起レルアリト雖モ、其術ハ概ネ傳膏灸炳ヲ用フルニ過ギズ、華岡氏ニ至リテ麻醉藥ヲ用ヒ、脫疽ヲ切り、癭瘤ヲ去ル等、手術ノ靈活驚ク可キモノアリ、稱シテ華陀ノ再出トシ、其名世ニ嘖々タリ。

九月、奥劣齋歿ス、劣齋名ハ道逸、其父道榮、賀川玄悅ニ學ビテヨリ産科ヲ以テ名アリ、劣齋ニ至リテ其名益々高ク、賀川氏ノ術ハ、此人ノ爲ニ益々完全ノモノトナレリ、著ス所、女科隨割・女科漫筆等アリ。伊東玄朴「ビシヨツプ」ノ内科書ヲ譯シ、醫療正始ヲ著シテ世ニ行フ。

風疹流行、俗ニ之ヲ三日麻疹、又ハはしか風ト曰フ。

天保七年丙申二四九六

足立長雋歿ス、長雋名ハ世茂、無涯ト號ス、西洋産科ヲ以テ始メテ一家ヲ成セリ。

春夏ノ際、濕疫大ニ行ハル。

【西洋】紀元一千八百三十六年、「フーヘラント」歿ス、其著書ノ我邦語ニ譯セラレタルモノ多シ。

「ワルレース」沃度加里ヲ製造ス。

天保八年丁酉二四九七

本間棗軒、瘍科秘録ヲ著ハシ、世人始メテ華岡流外科ノ秘奧ヲ窺フコトヲ得タリ。
宇田川榕菴、舎密開宗ヲ著ハス、之ヲ化學書ノ始トス。

春ヨリ秋ニ至ルマデ江戸ニ疫邪行ハレ、京都ニモ赤疹・瘰癧病行ハル。

天保九年戊戌二四九八

江馬蘭齋歿ス、年九十二。

天保十年己亥二四九九

新宮涼庭、順正書院ヲ京都ニ建ツ、涼庭鬼國山人ト號ス、丹後ノ人、長崎ニ遊ビテ醫ヲ修メ、業ヲ京都ニ開キテ大ニ行ハル。

多紀元堅、藥治通義ヲ著ハス。

箕作阮甫、翻譯局ノ譯員トナル。

蘭人「リシユール」牛痘漿ヲ齎シ來タリ、種接ヲ試ミタレドモ應驗アラズ。

【西洋】紀元一千八百三十九年、「シユワシ」細胞ノ動物體ノ基礎タルコトヲ證明ス。

【支那】清宣宗、道光十九年、林則徐阿片ヲ燒キ、英人廣東ヲ侵ス。

天保十一年庚子二五〇〇

【西洋】紀元一千八百四十年、「リストン」始メテ依的兒麻醉ヲ行フ。

天保十二年辛丑二五〇一

【西洋】紀元一千八百四十一年、「アンドリー」矯正的外科ヲ創始ス。

天保十三年壬寅二五〇二

皇女病ミ玉フ、小森玄良命ヲ奉ジテ診治シテ効アリ、尋テ從五位下ニ叙シ、信濃守ニ任ゼラル、洋方醫ヲ以テ宮廷ニ出入スルコト、玄良ヲ以テ始トス。

緒方洪庵等大阪ニ解剖ノ社ヲ結び、葭島ニ解剖場ヲ設ケ數々解屍ス。

六月、翻譯書ノ出版ハ町奉行ノ許可ヲ得セシム。

【西洋】紀元一千八百四十二年、「ロキタンスキイ」ノ病理解剖書刊行セラル。

天保十四年癸卯二五〇三

佐藤泰然、病院ヲ佐倉ニ興シ順天堂ト曰フ、別ニ學舎ヲ建テテ諸生ヲ教フ、泰然最モ外科ニ精シ、蓋シ是ヨリ前、西洋流ノ外科ニ栗崎・西・檜林・吉雄等ノ諸流アリ、華岡氏嗣テ起キテ、名聲嘖々タリ、而モ親シク歐西ノ書籍ニ就テ外科ノ眞理ヲ探リ、其術ヲ實地ニ施セルモノニアラズ、其之アルハ泰然ニ始マル、同時戸塚靜海アリ、江戸ニアリテ外科ニ精シキヲ以テ名アリ。

醫學館ニ寄宿寮ヲ設ケ、官費ノ學生十五人ヲ入ル、又是ヨリ先キ寛政三年醫學館ヲ官學トセシ時陪臣醫師町醫師ノ入學ヲ禁ゼラレシガ、此時ニ至リテ再ビ陪臣醫師町醫師ニモ聽講ヲ許サレ、是ヲ別會ト稱シ、一六二七ノ日ヲ以テス、其講師ハ辻元崧庵・江馬春齡・清川玄道・坂上玄丈・伊澤長庵・井關友仙・澁江道純・森養竹・今村亮・稻葉文貞・堀川舟庵等各々其専門ノ學ヲ講ズ。

一月、幕府市令ヲ出シ、醫ヲ善クスルモノノ姓名ヲ查覈シ、町奉行所ニ布告セシム。
堀内素堂、幼幼精義ヲ著ス、コレヨリ先キ宇田川榛齋「ローセンスタイン」ノ書ヲ譯シテ小兒諸病鑿法治法全書ト題セシモノアリト雖モ、梓行セラレズ、故ニ此書ヲ以テ西洋小兒科譯書刊行ノ嚆矢トス。

弘化二年乙巳二五〇五

七月、幕府令シテ翻譯書ノ出版ハ、天文臺ノ許可ヲ受ケシム。

杉田成卿、翻譯局ノ譯員トナル。

【西洋】紀元一千八百四十五年、「ウイルヒヨウ」白血病ヲ發見ス。

弘化四年丁未二五〇七

緒方洪庵、病理通論ヲ譯述ス、是ヲ病理ヲ説クノ始トス。

【西洋】紀元一千八百四十七年、「シンプソン」始メテ嚙囉仿謨麻醉法ヲ行フ、外科醫「ヂーフエンバッハ」歿ス、「ヂユツシユン」感傳電氣ヲ治療上ニ賞用ス、「ウイルヒヨウ」病理解剖「アルヒーフ」ヲ發シ始ム。

孝明天皇嘉永元年戊申二五〇八

五月、宇津木昆臺歿ス、年七十、著ハス所、古訓醫傳・日本醫譜等アリ。

蘭醫「モーニツケ」聽胸器ヲ齎ラシ來タル、譯司品川梅村之ヲ模造スト言フ。

十一月、坪井信道歿ス、名ハ信、誠軒ト號ス、美濃ノ人、江戸ニ出デテ宇田川榛齋ノ門ニ入り、蘭學ヲ以テ其名天下ニ噪シ、門人箕作阮甫・杉田成卿・緒方洪庵等各一家ヲ成シ、蘭學益々恢弘ス。

【西洋】紀元一千八百四十八年、「ワースレイ」人工鼓膜ヲ用フ。

嘉永二年己酉二五〇九

幕府醫官ニ令シテ和蘭醫術ヲ修ムルヲ禁ズ、又醫書ノ出版ハ皆醫學館ノ許可ヲ得セシム。

按ズルニ、文化文政以來、蘭醫中英雋ノ士踵ヲ接シテ起リ、其學術益々隆盛ヲ窮ム、是ニ於テ漢醫方ヲ修ムルノ徒之ヲ嫉ミ、カヲ極メテ之ヲ排斥シ、幕府亦之ヲ採用セズ、遂ニ此令アリ。

六月、和蘭ノ船、牛痘苗ヲ齎ス、「モーニツケ」之ヲ三名ノ小兒ニ植テ感ズルヲ得タリ、檜林宗建、「モーニツケ」ニ親炙シテ聞キ得タル所ヲ錄シテ、牛痘小考ヲ著ス、コレヲ牛痘種法ノ始トス。

按ズルニ、是ヨリ先キ、天保十年和蘭人「リシユール」牛痘苗ヲ齎シタレドモ善感セズ、嘉永元年「モーニツケ」痘漿ヲ携ヘ來リタルモ亦善感セズ、譯官檜林宗建「モーニツケ」ニ勸メテ漿ニ代ルニ痂ヲ以テセシム、翌二年六月和蘭ヨリ痘痂ト漿ト到ル、「モーニツケ」之ヲ三名ノ兒ニ種テ善感スルモノ一名、此年十月、宗建牛痘小考ヲ著シ、人痘苗ヲ選テ、江戸ノ戸塚靜海、大阪ノ緒方洪庵、京都ノ日野鼎哉ニ送ル、由テ速ニ邦内ニ傳播スルコトヲ得タリ。

船曳卓堂、譯スル所ノ婦人病論成ル、翌年之ヲ刊行ス、之ヲ西洋婦人科刊行ノ始トス。
水原三折、産育全書ヲ著ハス。

嘉永三年庚戌二五二〇

三月十五日幕府令シテ曰ク『近來蘭學醫師相増世上ニテモ信用致候者多ク有之儀有之候右者風土モ違ヒ候事ニ付御醫師中ハ蘭方相用候儀御制禁被仰出候間得其意堅ク相守可申候但シ外科眼科等外治之儀者參用不苦候』

幕府令シテ曰ク『近來西洋學盛ニ相成世上新奇ヲ好ミ蘭學好之輩深ク其學術研究爲サルモノ迄蘭書ヲ取扱俗ヲ驚ス積リモ有之由相聞畢竟元來蘭書和解之儀者恣ニ相成候ニ付右様之儀有之如何之事ニ付元來蘭語之儀者翻譯ニ依リ其事柄ヲ解シ得ル事右様如何之翻譯致シ若一途ニ其說ヲノミ信シ候ナル心得違之者有之候得者向後如何ナル弊ヲ生シ間敷トモ難申其上醫書ニテモ同様之儀ニ候依之以來持渡リシ蘭書不殘書銘長崎奉行所へ書出サセ奉行所ヨリ免許之分者世上ニ流布致シ不苦候旨申渡候間向後右書上殘ニテ蘭書ヲ取扱候カ又ハ私ニ翻譯致候者有之ニ於テハ其書ヲ取上ケ當人急度可及吟味候ニ付テ者萬石以上之面々海岸守衛心得之爲メ蘭書翻譯爲致候向モ有之哉ニ付右之書銘相認一應老中へ届出翻譯出來之上者一部天文方役所へ可差出候』

林洞海、其舊譯藥性論ノ出版ヲ醫學館ニ乞ヒタレドモ許サレズ。

高野長英、自刃シテ死ス、年四十七。

杉田成卿、聽胸器用法略記ヲ著ハシ、聽診ノコトヲ説ク。
風邪流行。

嘉永四年辛亥二五一

川本幸民、氣海觀瀾廣義ヲ著ハシ、大ニ西洋窮理ノ説ヲ唱フ。

【支那】清文宗、咸豐元年、全體新論上梓、次デ博物新編・西醫略論・婦嬰新説・内科新説等ノ刊行アリ、西洋ノ醫法漸ク行ハル。

【西洋】紀元千八百五十一年、「ヘルムホルツ」檢眼鏡ヲ創作ス、「カール・ブラウン」「コルポイリントル」ヲ用フ。

嘉永五年壬子二五一一

「モーニツケ」歸國ス。

七月、江戸暑疫流行。

嘉永六年癸丑二五一二

六月、米使「ペルリ」浦賀ニ來リテ通信ヲ乞フ。

平野元良、軍陣備要救急摘要ヲ著ハシテ、軍陣衛生ヲ説ク。

【西洋】紀元一千八百五十三年、「ブラワツツ」皮下注射法ヲ創ム、「コーン」黴菌ノ植物性ノモノナルコトヲ證明ス。

安政元年甲寅二五一四

幕府命ヲ半井氏ニ下シ、其家ニ藏スル所ノ醫心方全帙ヲ醫學館ニ致サシメ、醫官多紀元堅等ニ命ジテ之ヲ校正シ次テ模刻シテ世ニ行ハシム、此書ハ正親町天皇秘府所藏ノモノヲ出シテ半井氏ノ祖驢菴ニ賜フ所、其全帙ヲ存スルモノ海内唯ダ此一部ノミ、學者皆之ヲ珍重ス。

大槻俊齋、銃創瑣言ヲ著ス、江川太郎左衛門其急務ナルヲ以テ官ノ許可ヲ得テ之ヲ刊行セシム。

風邪大流行、此年正月米國船横濱沖へ來タリシヲ以テ之ヲ「アメリカ」風ト曰フ。

安政二年乙卯二五一五

翻譯局ヲ天文臺ヨリ移シテ九段坂下ニ置キ蘭書ヲ講ゼシム。

安政三年丙辰二五二六

二月、翻譯局ヲ蕃書調所ト改稱シ、翻譯ノ外蘭書ヲ教授スルノ所トナシ、四月、杉田成卿・箕作阮甫・川本幸民等ヲ擧テ教授職トナス。

林洞海「ワートル」薬性論ヲ刻シテ世ニ公ニス、是ヨリ先キ（嘉永三年）洞海、此書ノ出版ヲ醫學館ニ請テ允サレズ、去年大槻俊齋ノ銃創瑣言ノ剽刷ノ許可ヲ得ルニ及ビテ始テ允可ヲ得、蘭醫コレヨリシテ漸ク頭角ヲ出スヲ得タリト言フ。
飯沼欲齋、草木圖說ヲ著ス、此書三十卷、「リンネ」ノ新法ニ依リテ植物ヲ網羅ス、ソノ精緻的實、前古比ナシト稱ス。
八月、蘭醫「ポムペ」來朝ス。
廣瀨元恭、人身窮理書ヲ刊行ス。

安政四年丁巳二五二一七

五月、伊東玄朴・竹内玄同・戸塚靜海・林洞海・坪井信良、等當時西洋醫術ヲ以テ門戸ヲ張ルモノ八十餘名、相謀リテ一社ヲ江戸神田お玉ヶ池ニ建テ種痘館ト稱シ、種痘術ヲ施シ、傍ラ同業ノ士相會シテ學術ヲ講習スルノ所トナス。

幕府醫官松本良順命ヲ奉ジテ長崎ニ赴キ、蘭醫「ポムペ」ニ就キ醫學ヲ講習ス。

緒方洪庵、扶氏經驗遺訓ヲ著シテ大ニ醫術ノ功ヲ進ム、又始テ學科ノ等級ヲ別テ諸生ヲ教育ス。

青本周弼、察病龜鑑ヲ著ハシテ之ヲ刊行ス、診斷書始メテ備ハル。

二月、多紀元堅歿ス、元簡ノ子、博學ヲ以テ稱セラシ、累進法印ニ至リ、樂眞院ト稱ス。

辻元崧庵歿ス、法印ニ叙セラレ爲春院ト稱ス、多紀元堅ト共ニ幕府醫學館ノ樞務ニ當ル。

廣瀨元恭、西醫脈鑑ヲ著ハシ、西洋醫學ノ脉論ヲ示ス。

【西洋】紀元一千八百五十七年、第一回萬國眼科會議。

安政五年戊午二五二一八

七月二日、將軍家定病篤ク衆醫治効ナシ、由リテ俄ニ伊東玄朴・戸塚靜海ヲ擢デテ侍醫トナシ、次テ竹内玄同・伊東貫齋・坪井信良・林洞海ヲ舉テ侍醫トナス、幕府ノ西洋内科ヲ採用スルコト此ニ始マル。

幕府嘉永二年ノ令ヲ廢シ衆醫官ニ令シテ和蘭醫方ヲ兼習セシム、是ヨリ先キ、伊東玄朴等ガ建設セル種痘館ヲ官ニ納メ、大槻俊齋・林洞海ヲ長トナシ、坪井信良・石川櫻所・池田多仲等ヲ教員トナシ、教授解剖種痘ノ三科ヲ置ク。

六月、長崎ニ暴瀉病發シ、中國ヲ經テ浪華・京師ニ及ビ、七月下旬ニ及ビテ江戸ニ傳播シ、十月ニ至ルマデ大ニ流行ス。

三宅良齋、英醫合信著西醫略論ヲ翻譯シテ世ニ行フ。

桂川南周、「ドウフ」對譯字書ヲ刊行ス。

【西洋】紀元一千八百五十八年、「ウイルヒヨウ」細胞病理學ヲ唱道ス。

【支那】清文宗、咸豐八年ニ當ル。

安政六年己未二五二一

正月、横濱・箱館・長崎ノ三港ヲ開ク。

五月、種痘館ヲ下谷ニ新築シ、醫學ヲ講ズ。

三宅良齋、合信著婦嬰新説ヲ翻譯ス。

「シーボルト」再ビ來朝ス。

【西洋】紀元一千八百五十九年、「キルヒホッフ」、「ブンセン」ノ兩氏焰色分析法ヲ創ム。

萬延元年庚申二五二〇

十月、幕府種痘館ヲ種痘所ト改稱シ、大槻俊齋ヲ頭取トナス。

勝（海舟）麟太郎、大元丸ヲ運用シテ米國桑港ニ至ル、醫官牧山修卿隨フ。

松本良順、長崎ニ病院ヲ建テ、和蘭ノ法ニ倣ヒ養生所ト名ヅク。

文久元年辛酉二五二一

十月、種痘所ヲ西洋醫學所ト改稱シ、教授職ヲ置キ、學生ヲ教授スルノ所トナス。

松本良順、醫校ヲ長崎ニ建ツ、之ヲ精得館ト稱シ、醫學ヲ講習スルノ所トナス。

蕃書調所ニ物産局ヲ置キ、伊藤圭介ヲ舉ゲテ物産局教員トナス。

【西洋】紀元一千八百六十一年、「ブローカ」失語症ヲ記述ス、内科醫「コンラーヂ」歿ス。

文久二年壬戌二五二二

西洋醫學所ニ舍密局ヲ置ク。

大槻俊齋歿ス、六月緒方洪庵大阪ヨリ召サレテ醫學所頭取兼侍醫トナル。

和蘭醫官「ボードイン」來ル、長崎精得館ノ教師タリ。

箕作阮甫、幕籍ニ列セル斑儒者ノ次ニアリ、西洋學者ノ士籍ニ列スルモノ是ヲ嚆矢トナス。麻疹流行後暴瀉病大ニ流行ス。

司馬凌海、七新藥ヲ著ハシ、沃度・硝酸銀・吐酒石・規尼涅・珊篤寧・莫兒比涅・肝油ノ効用ヲ説ク。伊東玄伯、林研海等和蘭ニ赴ムキ醫ヲ學ブ、コレヲ我醫人ノ西洋ニ留學スルノ始トス。

文久三年癸亥二五二二

洋書調所ヲ開成所ト改メ、西洋醫學所モ亦名ヲ改メテ單ニ醫學所ト稱セシム。

多紀棠邊（柳沢ノ第二子）歿ス、年僅ニ三十九。

六月、緒方洪庵歿ス、松本良順代リテ醫學所頭取トナリ、大ニ醫學ノ制ヲ改ム。

【西洋】紀元一千八百六十三年、「ウイルヒョウ」病的腫瘍論刊行セラル。

元治元年甲子二五二四

松本良順・山内豊城、養生法ヲ著ハシテ、西洋衛生ノ方ヲ説ク。

本間棗軒、内科秘録ヲ著ハス。

慶應元年乙丑二五二五

【西洋】紀元一千八百六十五年、「リスター」石炭酸ヲ創傷療法ニ用フ。

慶應二年丙寅二五二六

島村鼎甫、生理發蒙十三卷ヲ著ハス。

【西洋】紀元一千八百六十六年、獨逸大學ニ初メテ衛生學講座ヲ置キ、「ベツテンコーフェル」衛生學教授トナル。

慶應三年丁卯二五二七

三月、神戸港ヲ開ク、十月、徳川將軍慶喜、政權ヲ朝廷ニ奉還シテ大阪城ニ入ル。

久我克明、三兵養生論ヲ著ハス。

風邪熱病大ニ行ハル。

【西洋】紀元千八百六十七年、第一回萬國醫學會巴里ニ開カル、「ジヨセフ・リステル」防腐法ヲ報告ス、「ヨンハイム」炎

症論ヲ唱道ス、内科醫「トルメウ」歿ス。

【支那】清穆宗、同治六年ニ當ル。

明治時代

明治天皇明治元年戊辰二五二八

幕府ノ醫學所ヲ收メテ鎮將府ノ所轄トナス、次デ下谷舊藤堂邸ニ大病院ヲ興シ、醫學所ヲ之ニ屬シ、英醫「ウイリス」ヲ其教師トナシ、治療及ビ教育ノ事ニ任ズ。

長崎精得館ノ組織ヲ一新シ、長崎醫學校ト改稱シ、長與專齋ヲ舉ゲテ其校長トナシ、「マンスフェルド」ヲ教頭トナシ、學生ノ資格ヲ正シ、學科ノ順序ヲ定メ、又「ゲールツ」ヲ聘シテ豫科ノ教師トナシ、講習ノ次序ヲ整フ。

大阪内久寶寺町ニ醫學所及ビ病院ヲ設ケ、「ボードイン」ヲ教師トナシ、岩佐純ヲシテ之ヲ管理セシム、次デ緒方惟準ヲ院長トシ、明治三年之ヲ大阪府ニ引渡シ、相良元貞・永松東海・横井信之・松村矩明等ヲ其講師ニ任ズ。緒方郁藏少博士ニ擢デラレ、大阪醫學所ニ勤仕ス。

伊東玄伯（後方成ト改ム）・林研海（後紀ト改ム）・緒方惟準等和蘭ヨリ歸ル、玄伯、惟準ハ共ニ直チニ中典醫ニ補セラレ、研海ハ徳川氏ニ隨テ静岡ニ移ル。

桑田立齋歿ス、種痘ノ普及ニ力ヲ盡シ、又菅テ沃陳浴・硫黃浴等ヲ創始ス。

【支那】清穆宗、同治七年ニ當ル。

【西洋】紀元一千八百六十八年、「グレーフェ」白内障ノ線狀摘出法ヲ創ム、「ウンデルリヒ」熱ニ就キテ記述ス。

明治二年己巳二五二九

二月、東京ノ醫學所ヲ大病院ニ合シ、醫學校兼病院ト改稱ス。

五月、昌平坂醫學校ヲ大學校トシ、醫學校ヲ之ニ隸シ、十二月大學校ヲ大學ト改メ、醫學校ノ地其東ニアルヲ以テ、大學東校ト稱ス。

岩佐玄圭（純）・相良弘庵（知安）、醫道改正御用掛ヲ命ゼラレ、大學東校ノ事ヲ管ス。

佐藤尙中、大博士ニ舉ゲラレ、大學東校ノ教授トナル。

大阪ニ舍密局ヲ開キ「ハラタマ」ヲ教頭トシ、松本銈・三崎嘯輔ヲ助教トシ、理化ニ學ヲ教育ス。

【西洋】紀元一千八百六十九年、「ジーンモン」腎摘出術ヲ行フ。

明治三年庚午二五三〇

「ウイリス」大學東校ヲ去ル、「ボードイン」ヲ聘シテ假ニ大學東校教授タラシム。

池田謙齋等十三人ニ獨逸留學ヲ命ズ、後之ヲ罷ム。

大阪舍密局ヲ大阪理學所ト改メ、尋テ又大阪開成學校ト改ム、其教師「ハラタマ」ヲ罷メ獨逸國人「リツテル」ヲ聘シテ之ニ代フ。

長崎醫學校ヲ大學ノ管轄トナス。

痘瘡及ビ風疹流行ス、俗人此疹ヲ名ヅケテ、南京痘瘡ト曰フ。

廣瀬元恭歿ス、年五十。

【西洋】紀元一千八百七十年、「フォン・グレーフェ」歿ス、「フリツチュ」「ヒツチツヒ」腦運動中樞ヲ發見ス。

明治四年辛未二五三一

兵部省ニ始メテ軍醫寮ヲ置キ、松本順ヲ舉テ軍務醫事ヲ整理セシメ、林紀・石川良信・石黒忠憲等ヲ徵シテ其制規ヲ畫定セシム、次テ順ヲ軍醫頭ニ、紀ヲ軍醫助ニ、良信ヲ軍醫權助ニ、忠憲ヲ軍醫正ニ補ス、此ニ於テ我陸軍始メテ醫事制度アリ。

再ビ大阪病院ヲ文部省直轄トシ、和蘭人「エルメレンス」ヲ聘シテ「ボードイン」ニ代ラシム。

八月、大學東校ヲ改メテ單ニ東校ト曰フ、獨逸國ヨリ聘シタル「ミユルレル」、「ホフマン」兩氏來朝ス、乃チ之ヲ東校ノ教頭トナス。

十一月、文部少丞長與專齋、岩倉大使ニ從フテ歐米ニ赴ムキ、彼邦ノ醫事制度ヲ調査ス。

坂井直常、長與專齋ニ代ハリテ、長崎醫學校長トナル。

伊東玄朴歿ス、年七十二。

川本幸民歿ス

【西洋】紀元一千八百七十一年、「ダルウイン」進化論ヲ唱フ、獨逸外科學會創立セラル。

明治五年壬申二五三二

八月、東校ヲ第一大學區醫學校ト改稱ス。

製藥學教授「ニユウエルト」・理化學教授「コツヒウス」・博物學教授「ヒルゲンドルフ」等、獨逸國ヨリ來タル、醫學豫備科ノ教育漸ク備ハル。

京都府療病院ヲ洛東粟田口ニ建テ獨逸人「ヨンケル」「レーマン」ヲ聘シテ教師トシ醫學ヲ教授ス。

十月、文部省學制改革、大阪病院及ビ醫學校ヲ廢ス、大阪府之ニ繼ギテ府立病院ヲ開始シ、高橋正純ヲ院長トナシ「エルメレンス」ヲ聘シテ其教師トナス。

佐藤泰然歿ス、年六十九。

【西洋】紀元一千八百七十二年、「アツベ」油浸裝置ヲ發明シ、顯微鏡ニ大改良ヲ致ス。

明治六年癸酉二五三三

三月、文部省中ニ醫務局ヲ置キ、新ニ歸朝セル長與專齋ヲ舉ゲテ其局長トナシ、醫制ヲ調査セシム、コレ實ニ我が衛生事業ノ發端ナリ、此年十二月醫制成ル、スベテ七十六條、一條ヨリ十一條マデハ全國衛生事務ノ要領、地方衛生及ビ其吏員ノ配當、十二條ヨリ二十六條マデハ醫學教育、二十七條ヨリ五十三條マデハ醫術開業試驗並ニ其免許、五十四條ヨリ七十六條マデハ藥舖開業試驗并ニ其免許、藥物ノ取締ヲ舉ゲタリ。

六月、第一大學區醫學校ニ製藥學教場ヲ開キ、藥學教育ノ基ヲ開ク。

七月、解剖學教師「デーニッツ」來朝ス。

陸軍省、病馬厩ニ獸醫學校ヲ建ツ、我邦始メテ西洋獸醫學科アリ。

英醫「アンデルソン」來朝、海軍軍醫生徒ノ教師トナル。

東京府病院ヲ芝愛宕下ニ建テ岩佐純ヲ其長トシ、佐々木東洋ヲ其補トス、次テ長谷川泰、岩佐純ニ代リテ院務ヲ營理シ教場ヲ開キテ醫生ヲ教育ス、後「マンニング」(外科)・「ブツケマー」(内科)ヲ聘シテ其教師トス。

坪井信良、和蘭ノ醫學新說奇聞ヲ譯出シテ和蘭醫事雜誌ト題シ、毎月一回刊行ス、コレヨリ先キ、文久年間、箕作阮甫、泰西名醫彙講ヲ著ハシ和蘭ノ醫事新說ヲ譯出シタレドモ、未ダ醫事雜誌ノ體ヲ備ヘズ、信良ノ此舉アリテ我邦始メテ醫事新聞アリ。

【支那】清穆宗、同治十二年、嘉約翰内科闡微ヲ譯述ス。

【西洋】紀元一千八百七十三年ニ當ル。

明治七年甲戌二五三四

三月、令シテ醫制ヲ先ヅ東京・京都・大阪ノ三府ニ於テ施行セシム。

三月、東京ニ司藥場ヲ設立シ、獨逸人「マルチン」ヲシテ其事ヲ監理セシム。

文部省教育令ヲ發布シ大中小ノ學制ヲ釐革ス、五月、第一大學區醫學校ヲ東京醫學校ト改稱シ、相良知安ノ校長ヲ罷メ、文部省四等出仕長與專齋ヲ其長トナス。

六月、東京ニ牛痘種繼所ヲ創立ス。

長谷川泰、坂井直常二代ハリテ長崎醫學校長タリ、此年臺灣征討ノ舉アリ、醫學校ハ廢セラレ。此年、天然痘大ニ流行ス。

【西洋】紀元一千八百七十四年、「コルベ」「サリチール」ヲ創製ス。

明治八年乙亥二五三五

二月、醫制ノ内醫師學術試驗規則ヲ施行スベキ旨ヲ三府ニ令ス、是ニ於テ新ニ醫術ヲ開業セントスルモノハ理學・化學・解剖學・生理學・病理學・藥劑學・内外科等七科ノ試問ニ及第セザルベカラズ、又産科・眼科・口腔科等ノ一科ヲ以テ開業セントスルモノハ各々其局部解剖・生理・病理ノ試問ニ及第セザルベカラザル事トナレリ。

東京大學醫學部外科教授「シユルツ」創メテ「リステル」ノ防腐療法ヲ行フ。

「マンニング」來朝、東京府病院教師トナル。

長崎病院ヲ再興シ、和蘭人「レウイン」ヲ聘シテ教師トナシ、吉田健康ヲ院長トナス。

京都司藥場ヲ設ケ「ゲールツ」ヲシテ監督セシム。

大阪司藥場ヲ設ケ、蘭人「ベ・エ・ドハルス」ニ委シテ試藥ノ事ヲ監督セシム。

五月、東京醫學校ニ通學生教場ヲ開キ、邦語ヲ以テ普通醫學ヲ教授ス、其教官ハ樫村清徳（内科）・橋本綱常（外科）・桐原眞節（内外科兼皮膚科・梅毒科）・三宅秀（病理）・足立寛（外科）・永松東海（生理）・田口和美（解剖組織）・井上達也（眼科）等ナリ。

六月、衛生事務ヲ文部省ヨリ分離シテ之ヲ内務省ニ隸シ、翌月内務省中ニ衛生局ヲ置キ、庶務、製表、種痘、賣藥ノ四科ヲ置キ、尋テ醫務、保健、統計ノ課ヲ設置ス。

松本順・佐藤尙中・戸塚文海・林紀・石黒忠憲・杉田玄端・島村鼎・長與專齋・緒方惟準・佐々木東洋・三宅秀・松山棟庵・足立寛・田代基徳等五十餘名卒先シテ、醫學會社ヲ起ス、之ヲ醫學會ノ始トス。

小幡英之助、齒科ヲ以テ東京ニ開業ス、コレヲ西洋齒科醫ノ始トス。
各町村ニ醫務取締ヲ設ク、後チ之ヲ衛生委員ト改稱ス。

十二月、醫制ノ内藥・舖開業試驗ヲ施スベキ旨ヲ三府ニ命ズ。

【支那】清徳宗、光緒元年、孔繼良、西藥略釋ヲ譯述シテ刊行ス。

【西洋】紀元一千八百七十五年、獨逸醫事週報創刊。

明治九年丙子二五三六

各府縣ニ令シテ地方ノ狀況ニ從ヒ、醫術開業試驗ヲ實施セシム。

京都司藥場ヲ廢シ更ニ横濱・長崎ノ兩港ニ設置シ、京都司藥場試藥監督「ゲールツ」ヲ横濱司藥場ニ轉ジ、「エーキマン」ヲ長崎司藥場試藥監督ニ任ズ。

四月、各府縣ニ令シテ娼妓ノ檢黴法ヲ實施セシム。

衛生局雜誌第一號ヲ刊行ス。

「マンスフェルト」、「ヨンケル」ニ代ハリテ、京都療病院教師トナル。

十一月、東京醫學校内ニ製藥學通學生教場ヲ設ク。

十二月、東京醫學校ヲ本郷舊加賀邸ニ移ス。

米國ニ獨立百年萬國博覽會ヲ設ケ、同時ニ萬國醫學會ノ擧アリ、長與專齋・三宅秀・石黒忠惠等之ニ赴ムク。
此年、天然痘又流行ス延テ翌年ニ及ブ。

戸塚靜海歿ス、年七十八。

明治十年丁丑二五三七

内務省布令シテ一定ノ履歴ヲ有スルモノニ限り、試験ヲ用ヒズ、醫術開業免狀ヲ授與ス。

二月、毒藥、劇藥取扱規則ヲ定ム。

和蘭人、「ベ・セ・フルツヘ」ヲ東京司藥場監督ニ任ズ。

二月、東京醫事新誌第一號發刊、太田雄寧ソノ主幹タリ。

四月、東京醫學校ヲ東京開成學校ニ併セテ東京大學ト改稱シ、其醫學校ヲ東京大學醫學部トナシ校長ヲ綜理ト改ム。池田謙齋、東京大學醫學部綜理トナル。

大阪府立病院教師「エルメレンス」去リ、「マンスフェルト」之二代ハル。獨逸人「シヨイベ」來リテ、京都療病院教師トナル。

東京ニ醫學私塾濟生學舎興ル。

七月、清國廈門ニ虎列刺流行ノ報アルニヨリ、内務卿ハ直ニ神奈川・兵庫・長崎ノ三縣ニ令シテ入港ノ船舶ヲ検査セシメ、又豫防法ヲ各地方ニ告示ス、間モナク長崎・横濱ニ病毒傳ハリ忽チ神戸・大阪・京都ニ傳ハリ、大流行ヲ呈シ、延キテ十一年及ビ十二年ニ至ル。

西郷隆盛反シテ西南戰役起ルニ際シ、戰地ニ軍團病院及ビ大小繃帶所ヲ設ケ、林・池田ノ兩軍醫監之ヲ統率シ又別ニ大阪ニ陸軍臨時病院ヲ開キ、一等軍醫正石黒忠恵及ビ軍醫監佐藤進ヲシテ之ヲ監理セシム、我軍陣醫事ニ整然法則アルハ此役ニ始マル。

佐藤進、大阪陸軍臨時病院ニアリテ人血絲狀蟲ヲ發見シ、次テ「ベルツ」モ亦東京大學醫學部ニ於テ之ヲ發見セリ。

石黒忠恵、腱線ヲ發明ス。

石黒忠恵、米國外科醫「グロス」ノ書ヲ譯シ、外科通術ト題シテ、外科方術ノ方式ヲ説ク。

明治十一年戊寅二五三八

内務卿命ジテ東京ニ脚氣病院ヲ設立シ、脚氣病ノ原因治法ヲ講究セシム、池田謙齋・石黒忠恵・三宅秀等命ヲ承ケテ設立ノ方法ヲ調査シ、七月十日神田表神保町ニ脚氣病院ヲ開キ治療ヲ二部ニ別チ、洋方ニテハ佐々木東洋・小林恒ヲ擧ゲ、漢方ニテハ遠田澄庵・今村了菴ヲ擧ゲテ治療委員トナシ、各自患者ノ治療ヲ分擔セシメ以テ其治方ノ成績ヲ比較ス、時人漢洋ノ脚氣相樸ト評ス、蓋シ此擧ハ漢醫方維持ノ餘波トシテ起レルモノナリ。

東京大學醫學部ニテハ、神田和泉町ニ附屬病院ヲ設立ス。

「ハンス・ギールケ」來朝シ、東京大學醫學部ニ解剖學組織學ヲ教授ス、我邦ニ比較解剖學ヲ傳ヘタルハ此人ニ始マル。

田代基徳、病體解剖社ヲ建テ、松本・林・橋本・石黒、等ノ諸家ヲ延テ、病體解剖ノコトニ從フ。醫事新聞ヲ刊行ス、田代基徳ソノ主幹タリ。

醫師ニシテ藥舗ヲ兼ネ、又ハ藥舗ニシテ醫師ヲ兼ヌルコトヲ禁ズ。

「ベルツ」肺「ヂストマ」ニ由リテ起レル一新病ヲ發見シ、之ヲ寄生蟲喀血ト名ヅク。

明治十二年己卯二五三九

内務省ニ中央衛生會ヲ設置シ、各府縣ニ地方衛生會ヲ設置ス。

森有禮、中央衛生會會長ヲ命ゼラル、次テ佐野常民之レニ代ハル。

二月、醫術開業試驗規則ヲ改正シ、試験期ヲ春夏秋冬トシ試験場ヲ各府縣下ニ置き、試験委員ハ朝野有名ノ醫士ヲ選デ之ニ任ジ、又問題ハ衛生局ヨリ下付シテ其對策ヲ徵シ、内務卿自カラ許否ヲ沙汰スルヲ法トス。

三月、脚氣病院ヲ本郷向ヶ岡彌生町ニ移ス。

地方廳ニ衛生課ヲ置ク。

三月、石黒忠愼、長與專齋ニ代リテ、大學醫學部綜理心得トナル。

皇子御降誕御名嘉仁ト命ゼラレ明宮ト稱シ奉ル、醫員ハ侍醫ノ外漢方醫淺田宗伯・今村了菴・岡了允ニ祇候ヲ命ゼラル、漢醫方維持ノ論益々盛ナリ。

漢方醫家淺田宗伯・岡田昌春・河内全節・清川玄道・山田業廣・森立之等溫知社ヲ組織シ、溫知醫談ヲ刊行ス。

十月、東京大學醫學部ニ於テ醫學本科卒業生十八名、製藥學本科卒業生十九名ニ學位記ヲ授與ス、コレヲ學位授與ノ嚆矢トス。

此年陸軍省ヨリハ坂井直常ヲ獨逸國ニ、海軍省ヨリハ實吉安純ヲ英國ニ、大學醫學部ヨリハ清水郁太郎・梅錦之亟・進藤二郎ヲ獨逸國ニ派遣シテ各専門學科ヲ研究セシム、コレヨリ後各科専門諸士ノ官命ヲ奉ジ、又ハ自費ニテ西洋ニ留學スルモノ多シ。

虎列刺病大ニ流行ス、病者十六萬餘人、死亡十萬餘人、依リテ虎列刺豫防假規則及ビ檢疫停船規則ヲ制定ス。

三宅秀、病體剖觀示要ヲ著ハシテ、病理解剖ヲ説ク。

太田用成等「ハルツホールン」ノ書ヲ譯シ、七科約説ト題シ世ニ行フ。

三瀨謙三、訴訟醫學ヲ著ハス、法醫學ノ著述ニシテ全備セルモノハ、此書ヲ以テ始トスベシ。

林紀（研海）、陸軍軍醫總監ニ任ゼラル。

博物學教師「ジユートライン」來朝ス。

司馬盈之歿ス、佐渡ノ人、凌海ト號ス、「ボムペ」ニ就テ醫ヲ學ビ、其名著ハレ、大學少博士ニ舉ゲラル、後家塾ヲ東京ニ開キ、又獨和對譯字書ヲ著ハス、獨逸語ヲ我邦ニ行ヒシハ斯人ノ功多キニ居ル。

松本銈歿ス、順ノ子、年十七「ボードイン」ト共ニ和蘭ニ赴ムキ、理化學ヲ修メ、十九才維新ノ變ニ際シテ歸朝シ、大阪舍密局助教タリシガ、二十一歳ノ時更ニ獨逸國ニ赴ムキ、「ホフマン」ニ從テ化學ヲ修メ造詣スル所アリシガ遂ニ彼地ニ歿ス、年二十九。

明治十三年庚辰二五四〇

東京大學醫學部通學生ヲ別課醫學生ト改稱ス。

内務省ニ日本藥局方編纂委員ヲ設ケ、永松東海・高木兼寛・柴田承桂・「ランガルド」・「ゲールツ」・「エーキマン」ノ諸家ヲ其委員ニ舉ゲ。

一月、藥品取扱規則ヲ定メ、藥品ヲ注意藥・毒藥・劇藥ノ三類ニ別チ、取扱ノ規則ヲ示ス。

傳染病豫防規則ヲ公布シ、傳染病豫防心得書ヲ附シ、清潔法・攝生法・隔離法・消毒法ノ四項ヲ分チテ其方法ヲ示ス。

桐原眞節・樫村清徳・櫻井郁二郎・宇野朗等弘醫會ヲ興ス。

「ゲールツ」、日本溫泉考ヲ著ハス、桑田知明譯シテ之ヲ梓行ス、是ヨリシテ我邦溫泉ノ學術的調査漸ク興ル。

中外醫事新報・東京醫事新聞・弘醫月報・衛生叢談・養生雜誌・東京藥舖雜誌（以上東京）・宮城縣病院雜誌・福岡縣福陵醫事會説（以上地方）等發行セララル。

三瀨謙三・谷口謙、「チーゲル」ノ國政醫論ヲ譯シテ世ニ行フ。

樫村清徳、新纂藥物學ヲ著ハス。

田口和美、組織攬要ヲ著ハス。
永松東海、生理學ヲ著ハス。

佐藤進、「ビルロート」ノ書ヲ譯シ、外科通論ト題シテ世ニ行フ、次テ又外科各論ヲ著ハス。
湯目補隆、泰西醫學沿革史ヲ著ハス、我邦ニ始メテ西洋醫史ノ書アリ。

横濱十全醫院教師「ジモンズ」任滿ツ、東京府病院教師「ブツケマ」之ニ代ハル。

「ギールケ」歸國ス。

「マンニング」歸國ス。

「アンデルソン」歸國ス、「アンデルソン」ハ英國ノ醫、我海軍病院ニ聘セラレ、軍醫生徒ヲ教授シ、其巧黝ナカラズ又本邦脚氣ニ就テノ著述アリ。

竹内玄同歿ス、年七十六。

【支那】清徳宗、光緒六年、西説眼科提要梓行セララル。

【西洋】紀元千八百八十年、「ヘブラ」歿ス。

明治十四年辛巳年二五四一

細川潤次郎、日本藥局方編纂總裁ニ、松本順・林紀・戸塚文海・池田謙齋・長與專齋・三宅秀、等同編纂委員ニ擧ゲラル。

一月、高木兼寛・松山棟菴等成醫會ヲ興ス。

漢方醫家、東京神田ニ皇漢醫學講究所ヲ立ツ、爾來各地ニ此種ノ講習會盛ニ起リ、更ニ漢法醫術ノ開業免許ヲ政府ニ請願スルニ至レリ。

明治生命保險會社起ル、之ヲ我邦生命保險事業ノ嚆矢トス。此ニ始メテ保險醫學アリ。

「ベルツ」、川上清哉ト共ニ新潟縣ノ恙蟲病ヲ調査シ之ヲ洪水熱 Febris Fluvialis トナシ報告ス。

京都療病院教師「シヨイベ」期滿チテ國ニ歸ル。

外科教授「シユルツ」歸國、「スクリーバ」來朝之ニ代ハル。

化學教授「ランガルト」・博物學教授「ジユートライン」歸國ス。

獨逸醫「シユルツ」勳四等ニ叙シ旭日小綬章ヲ賜フ。

佐藤尙中、濟衆錄ヲ著ハス。

柴田承桂、「フーゼマン」ノ藥物學ヲ譯シテ世ニ行フ。

一月ヨリ一種ノ發疹性熱病、東京府下ニ行ハル、俗間之ヲ麻疹・風ト唱フ、風疹ナリ。

二月、島村鼎歿ス。

七月、太田雄寧歿ス、明治五年米國ニ赴キ化學ヲ修メ、明治七年愛媛縣醫學校長トナリ、後辭シテ東京ニ歸リ東京醫事新誌ヲ創ム。

發疹チフス流行、内務省衛生局ハ「ブツケマ」(横濱)・「ベルツ」(東京)等ノ實驗說ヲ譯シテ公ニス。

猩紅熱流行ス。

明治十五年壬午二五四二

文部省醫學學校藥學校ノ通則ヲ立テ甲乙二種ニ分チ、其甲種ハ、尋常ノ學科ヲ教ヘテ醫師藥劑師ノ大成ヲ圖リ、乙種ハ簡易ノ科ヲ教ヘテ其速成ヲ圖ルモノトシ、甲種醫學學校ノ學科ハ少ナクトモ理學・化學・動物學・植物學・解剖學・組織學・生理學・病理學・藥物學・内科・外科・眼科・産科・内科臨床講義・外科臨床講義・衛生學・裁判醫學ノ諸科トス。

東京大學醫學部ハ其醫院ノ名稱ヲ第一醫院ト改メ、附屬病院ヲ第二醫院ト改ム。

海軍醫務局内學舎ヲ設ケ、軍醫大監高木兼寛ヲ舎長トナシ軍醫生徒ヲ教授ス。

醫師タルモノ其事務ニ關シテ犯罪、又ハ不正ノ行爲アルトキハ醫業ヲ停止シ、又ハ禁止スルノ制ヲ定メラル。

樫村清徳等、東京小川町ニ東亞醫學校ヲ興ス。

此年六月、脚氣病院ヲ廢止シ、脚氣審査事務ヲ東京大學醫學部ニ屬セシメ、同部ニ脚氣病室ヲ置ク。

林紀歿ス、紀ハ洞海ノ子、文久二年和蘭ニ赴ムキ、醫學ヲ修メ明治維新ノ際歸朝シ、後陸軍ニ出仕シ累遷シテ軍醫總監、本部長ニ至ル、此年有栖川宮殿下ニ隨從シテ露國ニ至ル、途次佛國巴里ニ歿ス。

松本順、再ビ陸軍軍醫本部長トナル。

石黒忠憲、「エスマルヒ」ノ軍陣外科手術ヲ譯述ス。

片山國嘉、裁判醫學提綱ヲ著ハス。

「ボードイン」ハ勳四等ニ、「ジモンズ」ハ勳五等ニ叙セラル。

佐藤尙中歿ス。

石井信義歿ス。

石川良信歿ス、大槻俊齋・伊東玄林ニ學ビ、幕府醫官トナリ、法印ニ叙セラル、後陸軍省ニ奉仕シ累遷シテ陸軍軍醫監ニ至ル、歿スル時年五十。

虎列刺病大ニ流行ス。

【支那】清、光緒八年、高繼良、西説内科全書ヲ譯述ス。

【西洋】紀元一千八百八十二年、「コッホ」結核菌ヲ發見ス、翌年又虎列刺菌ヲ發見ス。

明治十六年癸未二五四三

東京大學醫學部生理學教師「チーゲル」其職ヲ罷メテ歸國ス、大澤謙二之二代ハル。

清水郁太郎・梅錦之亟、獨逸國ヨリ歸ル、共ニ大學醫學部勤務ヲ命ゼラレ、清水ハ産科婦人科ノ教授ヲ擔任シ、梅ハ眼科ノ教授ヲ擔當ス。

東京大學卒業ノモノニ得業士ノ學位ヲ授ケ、學士ノ學位ハ更ニ高等ノ試問ヲ施シタル上ニテ授與スルコトニ改ム。

十月、醫師免許規則ヲ公布シ、又醫術試驗規則ヲ改メ、試験ヲ前後ノ二期ニ別チ、科目ニ眼科産科臨床實驗ヲ加へ、専門ハ齒科ニ限ルコトトナセリ。

長與專齋・石黒忠憲・三宅秀・佐野常民・田代基徳・高木兼寛等相謀リテ大日本私立衛生會ヲ興ス、長谷川泰等國政醫學研究會ヲ興シ、國家醫學ニ關スル事項ヲ攻究ス。

大學醫學部ニ醫史科ヲ置キ、三宅秀ヲシテ西洋醫史ヲ編シ、今村了庵ヲシテ和漢醫道ノ沿革ヲ講ゼシム。

岡山醫學校ノ中濱東一郎等肺臟ヂストマ及ビ肝臟ヂストマヲ發見ス。

海軍醫務局長戸塚文海其職ヲ罷メ、高木兼寛之二代ハル。

太田正隆、和漢醫林新誌ヲ刊行ス。

三宅秀、病理各論及ビ治療通論ヲ著ハス。

足立寛、「ヒューテル」ノ外科通論ヲ譯述ス。

丹波敬三、裁判化學ヲ著ハス。

落合泰藏、漢洋病名對照錄ヲ著ハス。

伊勢錠五郎、「ベルツ」ノ内科病論ヲ譯シテ世ニ行フ。

東京・大阪・横濱ノ三司藥場ヲ衛生局試験所ト改稱ス。

明治十七年甲申二五四四

一月、内務管衛生局ニ於テ醫籍ヲ編製シ、從前府縣廳ニ於テ下附セル醫術開業許可ノ證ヲ所持スルモノニ内務省ヨリ免狀ヲ授與ス。

一月、佐藤進、東京大學醫學部ノ講師ニ舉ゲラル。

四月、井上眼科年報（獨逸文）ヲ發行ス。

大學醫學部第一醫院ニ眼科及ビ婦人科ヲ分設シ新ニ産科室ヲ設ク、從來産科ノ實地ハ模型ヲ用ヒテ演習スルニ止マリシガ、此ニ至リテ妊婦ノ入院ヲ許可シ學生ヲシテ其實驗ヲナサシム。

衛生局雜誌ノ發行ヲ止ム。

梅錦之亟・須田哲造・井上達也・安藤正胤・桐淵光齋等眼科専門會ヲ興ス、コレヲ我邦ニ於ケル眼科専門學者集合ノ嚆矢トス。

大學醫學部ニ集談會ヲ興シ、陸海軍ニモ軍醫會ヲ興ス。

戸塚文海、高木兼寛、等有志共立東京病院ヲ興シ、貧病者ヲ施療ス。

宇野朗・原田豊、東京大學教授ニ任ゼラル。

陸軍軍醫監橋本綱常・一等待醫岩佐純・大學教授樫村清徳、獨逸ニ赴ムク。

去歲陸軍軍醫講習生規則ヲ設ケ募集シタル講習生、コノ年五月ニ至リテ其業ヲ卒フ。

土方久元、細川潤次郎二代ハリテ、中央衛生會長トナル。
大日本通俗衛生會創立。

緒方正規歸朝、東京大學醫學部御用掛トナリ、衛生學ノ教授ヲ擔任ス。
長井長義歸朝、後東京大學醫學部藥學教授ニ任ゼラル。
佐々木政吉歸朝、東京大學醫學部内科教授ヲ命ゼラル。

明治十八年乙酉二五四五

東京大學醫學部別課醫學、并ニ製藥學生徒ヲ募集スルコトヲ廢ス。

三宅秀・佐藤進・原田豊・佐々木政吉・緒方正規・田澤敬興・丹羽藤吉郎・伊勢錠五郎・西郷吉義、等ニ脚氣病審査委員ヲ命ゼラル。

東京大學醫學部ニテハ、病理・解剖・局ヲ分置シ、「ヂツセ」其教師トナル。
種痘規則制定。

瀨川昌耆、小兒病各論ヲ公ニス。

石黒忠恵・池田謙齋・長與專齋・佐々木東洋、等諸家乙酉會ヲ興シ、主ニ醫制ノコトヲ議ス。
軍醫監石黒忠恵、衛生局次長ニ兼任セララル。

大學醫學部ノ教授學生等東京醫學會ヲ組織ス。

芳川顯正、土方久元二代ハリテ、中央衛生會長トナル。

軍醫監橋本綱常總監ニ進ミ、陸軍軍醫本部長ニ補セララル。

高木兼寛海軍軍醫監トナリ、軍醫本部長ニ補セララル。

實吉安純英國ヨリ歸リ、海軍軍醫中監ニ擧ゲラル。

高橋順太郎歸朝、東京大學ニ勤仕シ、「エーキマン」二代ハリテ藥物學ヲ教授ス。

小金井良精歸朝、東京大學ニ解剖學ヲ教授ス。

田口和美、「ヂツセ」黴毒ノ原因タルベキ黴菌ヲ發見セリトテ報告ス。

緒方正規、脚氣病菌發見說ヲ公ニス。

「ベルツ」、狐憑病說ヲ官報ニ公ニス。

石黒忠憲、脚氣談ヲ著ハス。

福岡病院ノ大森治豊・池田陽一、國帝切開術ヲ行フ。

二月、東京大學醫學部教授清水郁太郎歿ス、年僅ニ二十九。

府下催眠術ヲ施スモノアリ、頗ブル物議ニ上ル。

麻疹流行。

明治十九年丙戌二五四六

宮内省官制ヲ公布シ、侍醫局ヲ設ケ、局中ニ長官・侍醫・醫員・藥劑師ヲ置ク、池田謙齋侍醫局長官ニ、伊東方成・岩佐純・竹内正信・岡玄卿・原田豊・高階經徳・田澤敬興・高階經本、侍醫ニ任ゼラル。

陸軍軍醫本部ヲ醫務局ト改ム、又陸軍軍醫學舎ノ概則ヲ定メ講習生ノ外軍醫官ヲモ召集シテ講習セシム。

海軍軍醫本部ヲ海軍衛生部ト改メ、海軍醫學校ノ官制ヲ公布ス。

三月一日、帝國大學令公布セラレ、即チ東京大學ヲ帝國大學ト改メ、大學院及ビ法・醫・工・文・理ノ五分科トス、醫科大學教授三宅秀、醫科大學長ヲ兼ね、同大澤謙二教頭ヲ兼ヌ、田口和美・宇野朗・佐々木政吉・緒方正規・小金井良精・高橋順太郎、等醫科大學教授ニ任ゼラル。

宇野朗、醫科大學第一醫院長心得兼第二醫院長ヲ命ゼラル。

萬國赤十字條約ニ加盟ス。

六月二十五日、日本藥局方成ル。

警視廳ニ警察醫長・副醫長・警察醫ヲ置ク。

傳染病豫防心得ヲ改正ス。

一等軍醫森林太郎、日本兵食論ヲ著ハシテ兵食改良意見ヲ説ク、此頃ヨリシテ我邦人食料ノ生理學的及ビ衛生學的觀察、漸ク始マル。

松尾耕三、近世名醫傳ヲ著ハス。

榊俣歸朝、直チニ東京醫科大學教授ニ任ゼラレ、精神病學講座ヲ擔任ス。

三月、坪井爲春歿ス。

明治二十年丁亥二五四七

帝國醫科大學ニ藥學科ヲ置ク。

醫科大學第一醫院ニ脚氣病室ヲ開ク。

三宅秀、脚氣病審査委員長ニ任ゼラレ、三浦守治・青山胤通、同委員ヲ命ゼラル。

勅令ヲ以テ府縣立醫學校費用ハ、明治二十一年以降地方稅ヲ以テ之ヲ支辨スルコトヲ得ザル旨ヲ令ス。

皇后陛下ノ懿旨ヲ以テ東京慈惠醫院ヲ設立セラル、海軍軍醫總監高木兼寛同院長ヲ命ゼラル。

七月一日、此日ヨリ日本藥局方ヲ實施ス。

東京府所轄ノ癲狂院患者ヲ醫科大學精神病學科ノ臨床講義用ニ充ツ。

陸軍軍醫監石黒忠惠、澳國維也納ニ開カルル第六回萬國衛生會議ニ參列ヲ命ゼラル。

醫科大學紀要（獨逸文）第一回第一號刊行。

東京醫學會雜誌・國政醫學會雜誌刊行セラル。

醫科大學長三宅秀、獨逸國ヨリ歸ル。

三月、三浦守治獨逸國ヨリ歸ル、東京醫科大學教授ニ任ジ、病理學講座擔任ヲ命ゼラル。

青山胤通獨逸國ヨリ歸ル、東京醫科大學教授ニ舉ゲラレ、内科學講座ヲ擔任ス。

佐藤三吉獨逸國ヨリ歸ル、東京醫科大學教授ニ任ジ、外科學講座擔任ヲ命ゼラル。

下山順一郎・丹波敬三、醫科大學教授ニ任ゼラレ、藥學科講座ヲ擔任ス。

「マンスフェルド」・「キヨーグレル」・「ヂツセ」勳四等ニ叙シ、旭日中綬章ヲ賜ハル。

明治二十一年戊子二五四八

全國ニ五箇ノ高等中學校醫學部ヲ設ケ、其科目中ニ英語ヲ加フ。
府縣立醫學校ハ前年ノ勅令ニ依リ、此歲以降地方稅ヲ以テ維持スルコトヲ得ザルニヨリ、大阪・京都・愛知ノ三醫學校ヲ除キ、其他ハ皆廢校セリ。

陸軍醫學校ヲ設ケ、在職醫官ヲ召集シ、軍陣衛生事項ノ實驗ヲ攻究セシメ、并ニ醫官候補生ヲ教育スル處トス、軍醫監石黒忠恵其校長ニ、軍醫正足立寛・同永松東海・一等軍醫森林太郎・同中島一可・同西郷吉義、等教官ニ補セラル。

東京醫科大學ニ小兒科ヲ置キ、新ニ獨逸國ヨリ歸レル弘田長ヲ講師ニ任ジ其主任トス。
濱田玄達、東京醫科大學教授ニ任ジ、産科婦人科講座擔任ヲ命ゼラル。

片山國嘉獨逸國ヨリ歸ル、東京醫科大學教授ニ任ゼラレ、法醫學講座擔任ヲ命ゼラル。

東京醫學校創立、翌年東京醫學院ト改ム。

大阪慈惠病院創立。

内務省衛生局所管、下谷牛痘種繼所ノ事業ヲ大日本私立衛生會ニ附シ、弘田長ヲシテ其主管タラシム。
京都醫學會雜誌第一號刊行。

池田謙齋・橋本綱常・三宅秀・高木兼寛・大澤謙二、醫學博士ノ學位ヲ享ク、醫學博士ノ學位アルコト此ニ始マル、次テ田口和美・佐藤進・緒方正規・佐々木政吉・小金井良精、又醫學博士ノ學位ヲ享ク。

明治二十二年己丑二五四九

帝國大學ニ國家醫學講習科ヲ設ケ、醫制・法醫學・衛生學・毒物學・精神病學・病體解剖式等、所謂國家醫學ヲ教授ス。

法律第十號ヲ以テ藥品營業及藥品取扱規則ヲ公布シ、醫師ハ其自カラ診察スル患者ニ限り自宅ニ於テ藥劑ヲ調合シ、之ヲ患者ニ授與スルヲ允ス。

河本重次郎獨逸國ヨリ歸ル、東京醫科大學教授ニ任ゼラレ、眼科學講座ヲ擔任ス。

吳秀三、「エステルレン」ノ醫學統計論ヲ譯シテ世ニ行フ、我邦始メテ醫學統計ノ書アリ。

弘田長、醫科大學教授ニ任ゼラル。

醫科大學教授田口和美、獨逸國ヨリ歸ル。

北里柴三郎、緒方正規ノ脚氣バチルレン説ヲ駁ス。

神奈川縣三浦郡長阪村附近ニ一種ノ病流行ス、或ハ出血性發疹室扶斯ナリトシ、或ハ生蠟中毒トシ、議論紛々タリ。岡山醫學會雜誌・玄洋醫會月報杏林之葉・裁判醫學會雜誌・金澤醫學會雜誌・北海道醫事講談會月報等刊行セラル。今田束歿ス、實用解剖學ノ著アリ。

【支那】清徳宗、光緒十五年、割症全書刊行。

明治二十三年庚寅二五五〇

第一回日本醫學會開會セラル。

日本公衆醫事會興ル。

高山齒科醫學院ヲ開ク、コレヨリシテ齒科教育漸ク備ハル。

隈川宗雄、醫科大學教授ニ任ゼラレ、醫化學講座ヲ擔當ス。

村田謙太郎、醫科大學教授ニ任ジ皮膚病・黴毒學講座擔任ヲ命ゼラル。

石黒忠憲、陸軍軍醫總監ニ任ゼラレ、陸軍省醫務局長ニ補セラル。

松本順・橋本綱常・長與專齋、貴族院議員ニ任ゼラル。

大澤謙二、醫科大學長ニ任ゼラル。

長與專齋、内務省衛生局長兼中央衛生會長ニ任ゼラル、次テ白根專一中央衛生會長ニ任ゼラル。

陸軍一等軍醫小池正直伯林ニ開カルル第十回萬國醫學會へ參列仰付ラル。

春雨雜誌（漢醫方）・内科新報・實地醫報、等ノ諸雜誌刊行セラル、後皆廢刊ス。

流行性感胃流行。

虎列刺病流行。

【西洋】一千八百九十年、「コッホ」「ツベルクリン」發見ヲ報告ス。

明治二十四年辛卯二五五一

「コッホ」氏結核治療液研究ノタメ國費ヲ以テ三名ノ醫士ヲ獨逸ニ派遣スルコトトナリ、獨逸在留ノ宇野朗ニ在留ヲ命ジ、醫科大學教授佐々木政吉・同助教授山極勝三郎ニ獨逸出張ヲ命ゼラル。

「コッホ」氏結核治療液ハ明治二十二年法律第十號第二十七條第二項ニ據ルベキモノトセラル。
内務省令ヲ以テ「コッホ」藥液使用ノ制限ヲ定メ中央衛生會ノ諮問ヲ經テ許可スルコトトナス。
改正日本藥局方成ル。

三島通良、文部省學校衛生事項取調ヲ囑托セラル、學校衛生取調此ニ始マル。

醫科大學醫學課目中、裁判醫學ヲ法醫學ト改ム。

濃尾地方大震災アリ、醫科大學、陸軍軍醫學會等ヨリ救護員ヲ派遣ス。

漢方醫家帝國醫會ヲ興シ、和漢醫學ノ傳統ヲ永遠ニ保續セムガタメ運動ス。

荒川邦藏、内務省衛生局長ニ任ゼラル。

江口襄、警察醫長ニ任ゼラル、幾モナク山根正次、之ニ代ハル。

三宅秀、貴族院議員ニ任ゼラル。

醫藥分業ノ論行ハル。

東京慈惠醫院醫學校創立。

村田謙太郎、醫科大學教授ニ任ゼラル。

後藤新平、英國倫敦府二開カルル萬國衛生會議ニ參列ヲ命ゼラル。

實吉安純・樫村清徳・宇野朗・大森治豊・濱田玄達・片山國嘉・谷口謙・高橋順太郎・北里柴三郎・三浦守治・中濱東一郎・榊俣・佐藤三吉・隈川宗雄・弘田長・青山胤通・河本重次郎・大谷周庵・森林太郎・村田謙太郎、醫學博士ノ學位ヲ享ク。

明治二十五年壬辰二五五二

漢方醫家、和漢醫師繼續請願ヲ第四議會ニ提出ス。

大日本私立衛生會ハ傳染病研究所ヲ創立シ、新ニ獨逸國ヨリ歸朝セル北里柴三郎ヲシテ主任タラシム。

金杉英五郎獨逸ニアリテ耳鼻咽喉科ヲ修メ、此年歸朝ス、之ヲ斯科專門醫ノ嚆矢トス。

九州醫學會第一回ヲ熊本ニ開ク。

私立癩進醫會ノ有志醫家先哲會ヲ始ム、是レ明和八年三月四日前野・杉田・桂川諸家が解屍ノ實際ニ徴シテ和蘭解剖書ノ翻譯ニ着手シタルニ因ミ此日ヲ期シテ先哲諸士ノ偉業ヲ景仰セントスルナリ。

緒方正規、九州赤痢調査ノタメニ出張シ、其原因ヲ「バチルルス」ニ歸ス、是ヨリ先キ北里柴三郎ハ「アメーバ」原因説ヲナシ、兩氏ノ説相衝突ス。

荒川邦藏、衛生局長トナル、次テ後藤新平之二代ハル。

長與專齋、中央衛生會長ニ任ゼラル。

實吉安純、海軍軍醫總監トナル。

「ベルツ」、帝國大學名譽教師ニ舉ゲラル。

「ヘボン」歸國ス、三十年前横濱ニ來タリ、醫學ニ宗教ニ盡力少カラズ、就中其字書ハ大二世ニ行ハレタリ。

大澤謙二、貴族院議員ニ任ゼラル。

北里柴三郎、伯林大學名譽教授ニ舉ゲラル。

醫科大學教授、村田謙太郎歿ス。

菊池常三郎、猪子吉人、醫學博士ノ學位ヲ享ク。

陸軍軍醫學校業府發行（獨逸文）。

中央醫事週報・國家醫學・彌生會醫務月報、東北醫學會會報刊行セラル。

【支那】清德宗、光緒十八年、尹端模、病理撮要・兒科撮要ヲ譯述ス。

明治二十六年癸巳二五五三

九月勅令第九十三號ヲ以テ帝國大學令ヲ改正シ講座ノ制ヲ立テ、其種類ト數トヲ定メ、大澤謙二ハ生理學講座擔任、田口和美ハ解剖學第一講座擔任、宇野朗ハ外科學第一講座擔任及ビ皮膚病學黴毒學講座兼任、佐々木政吉ハ內科學第一講座擔任、緒方正規ハ衛生學講座擔任、小金井良精ハ解剖學第二講座擔任、高橋順太郎ハ藥物學講座擔任、榊俣ハ精神病學講座擔任、三浦守治ハ病理學病理解剖學第一講座擔任、下山順一郎ハ藥學第一講座擔任、丹波敬三ハ藥學第二講座擔任、青山胤通ハ內科學第二講座擔任、佐藤三吉ハ外科學第二講座擔任、濱田玄達ハ產科學婦人科學講座擔任、片山國嘉ハ法醫學講座擔任、河本重次郎ハ眼科學講座擔任、弘田長ハ小兒科學講座擔任、隈川宗雄ハ醫化學講座擔任ヲ命ゼラル。

小金井良精、醫科大學長ニ補セラル、宇野朗、醫科大學附屬醫院長ニ補セラル。

大日本醫學會興ル、衛生醫事ニ關スル國家重要ノ問題ヲ審議スルヲ趣旨トス。

第二回日本醫學會ヲ開ク。

長崎狂大病流行。

田口和美・小金井良精等、解剖學會ヲ起ス。

齒科醫會成ル。

東京市内ノ少壯醫家、十日醫會ヲ興ス。

十月、長井長義、醫科大學教授ニ任ゼラレ、藥學第三講座擔任ヲ命ゼラル。

十二月、前野蘭化、正四位ヲ贈ラル。

齒科攻究彙報・醫界時報・濟生學舍醫事新報刊行。

眼科雜誌刊行、コレヲ眼科雜誌ノ始トス。

醫談刊行、我邦ニ醫家道義ニ關スル雜誌ノ刊行アルコトコレニ始マル。

陸軍軍醫學校業府國文之部第一刊行セラル。

耳鼻咽喉科雜誌刊行、コレヲ斯科專門雜誌ノ始トス。

猪子吉人（醫科大學助教授）伯林ニアリテ歿ス。

明治二十七年甲午二五五四

高等中學校ヲ高等學校ト改メ、各高等學校ニ醫學部ヲ置ク、ソノ科目ハ解剖學組織學ニ講座・生理學一講座・衛生學法醫學一講座・病理學一講座・內科學藥物學ニ講座・外科學ニ講座・眼科學一講座・產科婦人科學一講座・藥學

三講座トシ、別ニ必修科トシテ醫用動物學・醫用植物學・醫用物理學・醫用化學ヲ置キ隨意科トシテ外國語ヲ置ク。

五月、醫科大學教授青山胤通・內務技師北里柴三郎、香港ニ流行スル「ペスト」調査ノタメニ派遣セラル。

醫科大學助教授坪井次郎、匈牙利「ブタベスト」ニ開カルル第八回萬國衛生會議へ參列仰付ラル。

山極勝三郎、伊國羅馬府二開カルル第十一回萬國醫學會へ參列仰付ラル。

高田善一、衛生局長ニ任ゼラル。

「マルピギー」二百年祭施行セラル。

山極勝三郎、帝國醫科大學講師ニ任ゼラレ、病理解剖學第二講座擔任ヲ命ゼラル。

顯微鏡第一號刊行。

淺田宗伯（栗園ト號ス）歿ス。

芳賀榮次郎、醫學博士ノ學位ヲ享ク。

【西洋】紀元一千八百九十四年、「ベーリング」實布の里血清ヲ創製ス。「ピールロート」歿ス。「ビルシユ」歿ス。

「ブラウンセクアー」歿ス。

明治二十八年乙未二五五五

醫科大學教授佐々木政吉其職ヲ辭ス、青山胤通內科學第一講座擔任ヲ命ゼラレ、三浦謹之助醫科大學教授ニ任ジ、內科學第二講座擔任ヲ命ゼラル。

醫科大學教授宇野朗・助手岡田和一郎・林暁、戰地ニ於ケル外科學研究ノタメ派遣セラル。

醫師免許規則改正法律案否決。

北里柴三郎、虎列刺血清療法ヲ報告ス。

陸軍軍醫總監石黒忠恵ハ二十七八年戰役ノ功ニヨリ、特ニ男爵ヲ授ケ華族ニ列セラル、醫家ノ華族ニ列セラルルコト此ニ始マル。

後藤新平、衛生局長ニ任ゼラル。

足立寛、陸軍軍醫總監ニ任ゼラル。

大澤謙二、東京學士會院會員ニ推選セラル。

山極勝三郎、醫科大學教授ニ任ゼラル。

佐藤進、陸軍軍醫總監ニ任ゼラル。

清國請和使節、李鴻章負傷、軍醫總監石黒忠恵・同佐藤進、聖旨ヲ奉ジテ之ヲ治療ス。

井上達也歿ス。

林洞海（幕府侍醫法眼）歿ス。

小兒科雜誌第一號刊行。

細菌學雜誌第一號刊行、細菌學專門雜誌ノ嚆矢トス。

齒科醫學叢談刊行。

大阪慈惠病院ニ附屬醫學校ヲ設ク。

三浦謹之助・山極勝三郎・坪井次郎、醫學博士ノ學位ヲ享ク。

虎列刺流行、患者總數五萬六千餘、死亡三萬九千餘。

廣島ニ回歸熱患者現ハル、我邦ニ此病アルコトコレヲ始トス。

【西洋】紀元一千八百九十五年、「レントゲン」光線發明。

明治二十九年丙申二五五六

醫科大學教授緒方正規・同山極勝三郎、「ペスト」病研究ノタメ臺灣へ出張ヲ命ゼラル。

血清藥院ヲ東京ニ置キ、又痘菌製造所ヲ東京・大阪ニ置キ、共ニ内務大臣ノ管理ニ屬ス。

廣島・愛媛・大阪・岡山・兵庫・香川等、其他諸縣ニ再歸熱發生ス。

文部省ニ學校衛生顧問及ビ主事ヲ置ク。

五月十四日、「ジエンナー」種痘發明一百年紀念會ヲ上野公園ニ開ク。

「シーボルト」一百年誕生節紀念會ヲ開ク。

日本眼科學會創立セラル。

青山胤通・賀古鶴所・小池正直・森林太郎・中濱東一郎等、公衆醫事會ヲ興ス。

小兒科研究會興ル。

陸軍一等軍醫村田豐作、「キユバ」島へ戰地視察ノタメ派遣仰付ラル。

醫科大學教授濱田玄達、醫科大學長ニ任ゼラル。

日進醫學第一號刊行、後廢刊ス。

明治三十年丁酉二五五七

勅令ヲ以テ臨時檢疫局官制ヲ定メ、檢疫豫防上必要アルトキ、内務省ニ臨時檢疫局ヲ置クノ制ヲ定ム。
法律第三十六號ヲ以テ、傳染病豫防法ヲ定ム。

内務省令ヲ以テ、傳染病豫防法施行細則ヲ定ム。

陸軍武官官等ヲ改メ、軍醫總監ヲ進メテ中將相當トナス、陸軍軍醫監石黒忠恵、新制ニ依リ陸軍軍醫總監ニ任ゼラル。

陸軍省ニテハ、醫務局長石黒忠恵ヲ委員長トシテ、陸軍藥局方調査ニ着手セシム。

陸軍省醫務局長石黒忠恵、病ヲ以テ休職仰付ラル、石坂惟寛之二代ハリテ醫務局長ニ任ゼラル。

海軍軍醫學校條例ヲ定メラル。

内務省醫術開業試験所所屬トシテ、施療病院ヲ建テ、之ヲ永樂病院ト稱ス。

長谷川泰、學校衛生顧問會議長ヲ命ゼラル。

内務技師高木友枝・醫科大學教授緒方正規・海軍軍醫少監鈴木重道・陸軍一等軍醫芳賀榮次郎等、露國「モスコウ」ニ開カルル第十二回萬國醫學會へ參列ヲ命ゼラル。

小池正直、澳國維也納ニ開カルル萬國赤十字會委員トシテ派遣セラル、芳賀榮次郎モ亦日本赤十字社委員トシテ參列ス。

十月、獨逸國伯林ニ萬國癩病會議アリ、土肥慶藏・高木友枝等、之ニ參列セリ。

東京醫科大學教授片山國嘉、精神病學講座兼擔ヲ命ゼラル。

東京醫科大學教授宇野朗辭職ス。

青山胤通、東京醫科大學附屬醫院長ニ任ゼラル。

日本眼科學會雜誌第一號刊行。

私立獎進醫會主トナリテ、麻醉法發明五十年祝典ヲ行フ。

志賀潔、赤痢菌ヲ發見ス。

森林太郎・小池正直、衛生新書ヲ著ハス。

荒木寅三郎、醫學博士ノ學位ヲ享ク。
東京醫科大學教授榊俶歿ス。

明治三十一年戊戌二五五八

學位令ヲ改正シ、博士會規則ヲ定メラル。

文部省令ヲ以テ學校傳染病豫防及ビ消毒方法ヲ定ム。

文部省令ヲ以テ學校醫職務規程ヲ定ム。

國家醫學會、講習科ヲ設ケ法醫學・精神病學・毒物學・衛生學・學校衛生學・工業衛生學・傳染病學・保險醫學・醫事衛生制度等ノ諸科ヲ講授ス。

內務省衛生局長後藤新平、臺灣總督府民政局長ニ任ジ、長谷川泰之二代ハリテ、衛生局長ニ任ゼラル。

東京醫科大學長濱田玄達ソノ職ヲ罷メ、緒方正規之二代ハル。

小金井良精、學校衛生顧問會議議長ヲ命ゼラル。

池田謙齋、特ニ男爵ヲ授ケラル。

岡玄卿、池田謙齋二代ハリテ醫局長トナル。

內務書記官有松英義・內務省參事官窪田靜太郎・臨時檢疫局事務官宮入慶之助・陸軍一等軍醫平井政適・海軍大軍醫矢部辰三郎・醫科大學助教吳秀三、西班牙國「マドリット」ニ開カルル、萬國衛生會議ニ參列ヲ命ゼラル。

天谷千松、英國「ケムブリッジ」ニ開カルル第四回萬國生理學會委員トシテ參列ヲ命ゼラル。

檜林宗建正五位ヲ贈ラル、其種痘ノ始祖タルヲ以テナリ。

土肥慶藏、獨逸ヨリ歸ル、東京醫科大學教授ニ任ジ、皮膚病學黷毒學講座擔任ヲ命ゼラル。

近藤次繁、東京醫科大學教授ニ任ジ、外科學第一講座擔任ヲ命ゼラル。

河村豊洲、海軍軍醫總監ニ任ゼラル。

大澤岳太郎、醫學博士ノ學位ヲ享ク。

胃腸病研究會興ル、長與稱吉其會主タリ。

堀内利國（陸軍軍醫總監）歿ス。

伊東方成（宮中顧問官侍醫）歿ス。

田代基徳歿ス、豊前中津ノ人、緒方洪菴ニ學ビ後江戸醫學所ニ入り、明治四年陸軍軍醫トナリ、累遷シテ一等軍醫正ニ至ル。

明治三十二年己亥二五五九

傳染病研究所ヲ東京ニ置キ、内務大臣ノ管理ニ屬シ、其所長ヲ勅任トス。

京都醫科大學ニ解剖學一講座・生理學一講座・醫化學一講座・衛生學一講座・內科學二講座・外科學二講座ヲ置ク。緒子止戈之助、京都醫科大學教授ニ任ジ、外科學第一講座擔任ヲ命ゼラル。

坪井次郎、京都醫科大學教授ニ任ジ、衛生學講座擔任ヲ命ゼラル。

坪井次郎、京都醫科大學長ニ補セラル、猪子止戈之助ヲ京都醫科大學附屬醫院長ニ補セラル。

醫師會法案衆議院ニ提出セラレ可決セシモ、貴族院ニテ否決ス。

勅令第三百四十五號ヲ以テ產婆規則ヲ公布セラル。

臺灣總督府醫學校ヲ興ス。

清國牛莊ニ「ペスト」流行シ、我邦ニ檢疫醫員ヲ聘ス、村田昇清等、十餘名之ニ赴ムク。

十月、神戸ニ「ペスト」病流行ス、中央衛生會ハ緒方正規・中濱東一郎・北里柴三郎ヲ派遣シテ、其「ペスト」ナルヤ否ヤヲ調査セシム、此調査ニ於テ北里ハ自家前日ノ所見ヲ棄テ「イエルサン」菌ヲ以テ「ペスト」ノ原因ヲナスモノト認ム。

法律第十九號ヲ以テ、海港檢疫法ヲ公布ス。

鈴木文太郎、京都醫科大學教授ニ任ジ、解剖學第一講座擔任ヲ命ゼラル。

荒木寅三郎、京都醫科大學教授ニ任ジ、醫化學講座擔任ヲ命ゼラル。

天谷千松、京都醫科大學教授ニ任ジ、生理學講座擔任ヲ命ゼラル。

十一月、東京醫科大學ニ耳鼻咽喉科學一講座ヲ置ク、新ニ獨逸國ヨリ歸レル助教岡田和一郎ヲ舉ゲテ其主任トナス。

入澤達吉・土肥慶藏・大西克知・近藤次繁・岡田國太郎・保利眞直・井上善次郎・岡玄卿、醫學博士ノ學位ヲ享ク。
明治醫學會創立。

白耳義「ブリユツセル」ニ黴毒花柳病豫防ニ關スル萬國會議開カル、陸軍一等軍醫鶴田禎次郎、海軍軍醫少監矢部辰三郎・内務技師高木友枝、委員トシテ參列ヲ命ゼラル。

第一回關西產科婦人科會ヲ大阪ニ開ク。

第一回日本外科學會ヲ東京ニ開ク。

產科婦人科學雜誌・齒學研鑽・臺灣醫事雜誌刊行。

胃腸病研究會會報刊行、胃腸病専門ノ雜誌アルコト此ニ始マル。

明治三十三年庚子二五六〇

内務省ニ日本藥局方調査會ヲ設ケ、日本藥局方改正ニ關スル事項ヲ調査セシム。

前年神戸ニ發セル「ペスト」ハ舊臘消滅シタルモ、大阪ニ於ケル、「ペスト」ハ本年ニ至リテモ尙ホ猖獗ヲ極ム、十日大阪市ニ臨時「ペスト」豫防事務局ヲ置ク。

五月、横濱ニ「ペスト」患者現ハル。

六月、臨時檢疫局ヲ置キ、傳染病豫防ニ關スル事務ヲ掌理セシム、幾モナク廢止セラル。

法律第三十八號ヲ以テ、精神病監護法ヲ公布ス。

東京齒科醫學院創立。

陸軍一等軍醫田中苗太郎、英杜戰爭軍事衛生視察ノタメ、南亞弗利加へ出張ヲ命ゼラル。

鈴木孝之助、海軍軍醫總監ニ任ゼラル。

海軍軍醫總監實吉安純、特ニ男爵ヲ授ケラル。

大澤岳太郎、東京醫科大學教授ニ任ジ、解剖第三講座擔任ヲ命ゼラル。

東京醫科大學教授濱田玄達ソノ職ヲ罷ム、助教授木下正中之二代ハリテ、産科婦人科講座擔任ヲ命ゼラル。

東京醫科大學教授小金井良精・警察醫長山根正次・内務技師野田忠廣・海軍軍醫總監實吉安純、佛國巴里ニ開カルル萬國衛生會議ニ參列ヲ命ゼラル。

伊藤隼三、京都醫科大學教授ニ任ジ、外科學第二講座擔任ヲ命ゼラル。
明治二十七八年戰役陸軍衛生紀事摘要成ル。

田中苗太郎・伊藤隼三・岡田和一郎・吳秀三・木村孝藏・瀨川昌耆、醫學博士ノ學位ヲ享ク。
豊住秀堅（海軍軍醫總監）歿ス。

明治三十四年辛丑二五六一

全國五個所ノ高等學校醫學部ヲソノ所在地名ヲ冠セル醫學專門學校ト改稱ス。

長尾精一ハ千葉醫學專門學校長ニ、菅之芳ハ岡山醫學專門學校長ニ、山形仲藝ハ仙臺醫學專門學校長ニ、田代正ハ長崎醫學專門學校長ニ、高安右人ハ金澤醫學專門學校長ニ任ゼラル。

勅令ヲ以テ日本赤十字社條例ヲ公布ス。

一月二十九日、東京醫科大學第二醫院（神田和泉町）燒失ス。

土肥慶藏・岡村龍彦、皮膚病學會ヲ興シ、専門雜誌ヲ刊行ス。

兵庫縣學校醫會ヲ開ク、學校醫ノ會合ハコレヲ始トス。

東京醫科大學生理學第一講座ヲ二講座トナシ、内科學三講座ヲ四講座トナス。

緒方正規、東京醫科大學長ヲ罷メ、青山胤通之二代ハル。

入澤達吉、東京醫科大學教授ニ任ゼラレ、内科學第四講座擔任ス。

佐藤三吉、東京醫科大學附屬醫院長トナル。

吳秀三、獨逸國ヨリ歸朝シ、東京醫科大學教授ニ任ゼラレ、精神病學講座擔任ヲ命ゼラル。

日清戰役海軍衛生史（英文）成ル。

大阪醫學會創立。

天谷千松・三宅秀・藤浪鑑・三輪德寛・桐淵鏡次・岡村龍彦・金杉英五郎・上坂熊勝・淺川範彦・笠原光興・鈴木文太郎、醫學博士ノ學位ヲ享ク。

關場不二彦、北海醫報ヲ刊行ス。

一月、理學博士伊藤圭介歿ス、年九十九。

十二月、「ペスト」菌取扱規則定ム。

明治三十五年壬寅二五六二

四月、第一回日本聯合醫學會ヲ開ク、田口和美其會頭タリ。

十二月、東京本所押上紡績會社ニ「ペスト」病者ヲ生ズ、之ヲ輦轂ノ下ニ於ケル「ペスト」病流行ノ始メトス。吳秀三・三浦謹之助、主幹トナリテ日本神經學會ヲ創立ス。

片山國嘉・岡田和一郎、等同仁會ヲ興シ、我實驗的醫術ヲ清國ニ傳フルコトヲ圖ル。

六月、東京府下二下痢症流行ス、緒方正規ハ之ヲ「フイックレル、プリオール」菌類似ノ菌ニ依ルモノトシ、北里柴三郎ハ「コッホ」虎列刺菌ニ依ルモノトナシ、兩氏ノ間ニ爭論アリ。

香港政廳、我醫師ヲ聘シ「ペスト」防疫事務ニ當ラシム。

小金井良精、東京學士會院會員ニ推選セラル。

長谷川泰、衛生局長ノ任ヲ罷メ、森田茂吉之二代ハル。

日本赤十字社、創立二十五年祝典ヲ舉グ。

六月、米國華盛頓府ニ萬國軍醫會議アリ、我陸軍ヨリ一等軍醫田村化三郎、海軍ヨリ軍醫大監木村壯介參列ス。

石黒忠憲、中央衛生會長ニ任ゼラル

甲野棗、東京醫科大學教授ニ任ゼラレ、次テ休職ヲ命ゼラル。

四月、第一回日本婦人科學會ヲ開ク。

臺灣醫學會創立、次テ臺灣醫學會雜誌ヲ刊行ス。

緒方正清、中央婦人科雜誌ヲ刊行ス。

池田陽一・鈴木孝之助・北川乙治郎・三島通良・桂田富士郎・木下正中・中西龜太郎・榊順次郎・村上安藏・内田守一・長與稱吉、醫學博士ノ學位ヲ受ク。

國家醫學會ニテ監獄醫學講習科ヲ開ク。

千葉醫學專門學校長、長尾精一歿ス。

治療新報第一號刊行。

日本保險醫協會會報第一號刊行、我邦始メテ保險醫學ニ關スル雜誌アリ。

明治三十六年癸卯二五六三

一月勅令ヲ以テ警視廳ニ臨時防疫職員ヲ置キ、「ペスト」豫防ニ關スル事務ヲ掌理セシム。

三月、專門學校令發布セラル。

六月、痘苗及ビ血清、其他細菌學的豫防治療品製造取締規則ヲ定ム。

四月、日本內科學會第一回集會ヲ開ク。

岡本梁松・平井毓太郎・松浦有志太郎、京都醫科大學教授ニ任ゼラレ、岡本ハ法醫學講座、平井ハ小兒科學講座、松浦ハ皮膚病黴毒學講座ヲ擔當ス。

九月、窪田靜太郎衛生局長トナル。

岡田和一郎、東京醫科大學教授ニ任ゼラル。

西班牙馬德里ニ第十四回萬國醫學會開カル、我ガ東京醫科大學教授隈川宗雄・傳染病研究所部長柴山五郎作コレニ參列ス。

三月、京都醫學會發會式ヲ京都醫科大學解剖學教室内ニ舉グ。

淺山郁次郎・松下禎二・柏村貞一・高安右人・朝倉文三・吾妻勝剛・遠山椿吉、醫學博士ノ學位ヲ享ク。

帝國聯合醫會ヲ京都ニ開ク。

東京府山田某女、東京醫科大學婦人科主任、木下正中ニ對シテ、醫術過誤ノ訴ヲ起ス、コレヨリシテ醫家ニ關スル法律ノ問題漸次ニ起レリ。

八月、私立濟生學舍廢止。

七月、京都醫科大學長坪井次郎歿ス、荒木寅三郎之二代ハリテ、京都醫科大學長ニ補セラル。

醫學中央雜誌刊行、尼子四郎其主幹タリ、我邦ニ斯種ノ雜誌アルハ、コレニ始マル。

日本醫事雜誌索引出版セラル。

十月、大阪府立醫學校ヲ大阪府立高等醫學校ト改稱シ、專門學校令ニ依ル。

十一月、神奈川県ニ臨時防疫職員ヲ置キ、「ペスト」豫防ニ關スル事務ヲ掌理セシム。

日本醫事年表終